

チートな剣とダンジョンへ行こう

雪夜小路

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メルとシユウは今日もダンジョンに挑む。

※

この作品は「小説家になろう」でも投稿しています。

目次

本編

第01話 「武器屋の片隅」	1
第02話 「初心者の森」	7
第03話 「骨踊るウラキラ洞穴」	16
第04話 「シルマ神殿にて犬と戯る」	26
第05話 「成長止まぬゼバルダ大木 前半」	40
第06話 「成長止まぬゼバルダ大木 後半」	60
第07話 「フランデナ草原の夜明け」	93
第08話 「ナギム廃坑を越えて一人」	111
第09話 「主をなくしたディオダディ古城」	131
第10話 「アラクタル迷宮とその周辺 前編」	155
第11話 「アラクタル迷宮とその周辺 後編」	184
最終話 「神々の天蓋」	207

蛇足

蛇足01話 「魔王軍 vs 人間一匹」	222
蛇足02話 「ビッグメエル、ティーターイム！」	242
蛇足03話 「見よ！ 東方は青く澄んでいる！」	268
蛇足04話 「海の水着は全て夢」	288
蛇足05話 「神は見ているか？」	320
蛇足06話 「復讐するは彼にあり」	351
蛇足6・33話 「我が輩アルボルさん。今、うぬの後ろにおるぞ」	392
蛇足6・67話 「仮面 の 名前」	407
蛇足07話 「クリスマスプレゼントだよ！」	421

蛇足08話「彼らが静止した日」	454
蛇足09話「バカがチートでやってくる！」	478
蛇足10話「お手紙くばるよ」	534
蛇足11話「試練　くどうあがいても鉄拳く」	549
蛇足12話「ダンジョン・アローン」	569
蛇足13話「どうせみんないなくなる……か？」	590
蛇足14話「遙か久遠の貴方」	623
蛇足15話「幻想、見果てたり（前編）」	713
蛇足16話「幻想、見果てたり（後編）」	793
蛇足17話「楽園開放」	853
蛇足15・5話「幻想、見果てたり（中編）」	904
蛇足18話『メル、友達いないってよ』	958
蛇足19話「えん☆たる」	978
蛇足20話「丘陵の彼方に」	103
蛇足21話「冥王計画メルハイマー」	144
蛇足22話「言葉に力を」	187
蛇足22・5話「言葉に力を　Ⅱ」	198
蛇足22・8話「言葉に力を　Ⅲ」	207
蛇足23話「邪神様@帰れない」	219
蛇足24話「森羅万像」	350
蛇足25話「選ばれない未来　前編」	434
蛇足26話「選ばれない未来　後編」	534
蛇足27話「本の中の英雄」	637
蛇足27・5話「MAJIYARUKI・ZERO」	755
蛇足28話「魔法少女に花束を」	1867

本編

第01話「武器屋の片隅」

私は冒険者である。

魔法の才はない。家事の才も、商いの才もない。

剣を使うから剣の才があるのかというと、残念ながら剣の才もない。

それでも冒険者として、今日も一人でダンジョンに行っていた。

仲間はいない。友達はあるが、最近は話をしていない。

両親は「そろそろ孫の顔を見たいなあ」と言外に結婚しろというが、そもそも彼氏なんていない。

強いて言うなら、剣が恋人だった。

そう。「だった」だ。

数年来の恋人が先ほど折れてしまった。

鍛えてもらうお金もない。

新しい彼氏を買うお金もない。

折れて不能になった恋人を下取りしてもらえる可能性に賭けて武器屋を訪れた。

「おう！ メルじゃねえか。ついに新しい剣を買う気になったのか！

ああ、すまんすまん。そんな金はないよな！」

武器屋の親父がそう言ってゲラゲラ笑う。

気にしない。もう言われ慣れている。

この武器屋には何度も来ている——と言っても見るだけだ。

いつか一攫千金を手に入れたときのために、新しい恋人候補にしばしば目を通していた。

「これを下取りしてもらえないか？」

折れた恋人を親父に見せる。

ああん？ と怪訝な声を出した親父は元恋人を手取る。

「なんだ折っちゃったのか」

「折れたんだ」

「折れるまで使うのが悪い。そもそも刃も研いでないだろ。剣が可哀想だ」

「それで、下取りはしてもらえるのか」

親父は顔を歪める。

「馬鹿言うな……といたいところだが、この剣はうちで買ったやつだったな」

「そうだ」

数年前、まだ駆け出しだったころに初めて買った剣だ。

この店も開店したばかりで、安売りセールをしていたためなんとか買うことができた。

当時はまだ親父の顔も柔和だったのに、今ではすっかり不機嫌な面が貼り付いてしまっている。

「ふん……廃剣置き場にまだ使えそうなやつがある。好きなやつを持っていきな」

「いいのか？」

「どうせ溶かすもんだ。一本くらいなら問題ない。その代わりにこいつは置いてけよ」

親父は折れた恋人を指で叩く。

「感謝する」

素直に頭を下げた。

折れてしまった恋人などに未練はない。

親父は使えそうなやつがあると話していた。

しかし、私の目にそんな剣は見えない。

柄がないもの。

錆びだらけのもの。

もうすでに折れているもの。

刃が大きく欠けているもの、

どうやったのか刀身全体にひびだらけのもの。

廃剣置き場なだけあって、どれも実用性がない。

「おい親父。どれも使えなさそうだぞ」

そのため振り返って親父に声をかける。

「馬鹿言え！ お前の目が節穴なだけだ。その眠そうな目をこすって探せ！ 嫌なら折れた剣を持って帰るんだな！」

そう言われては仕方ないので、一本ずつ剣を調べていく。

ある一本を握ったときだ。

『へいへえい、おねえさんよお。ちよいとそこのおねえさん。俺の声が聞こえるかね』

なにやらふざけた声をかけられた。

振り返って見るものの人の姿はない。

空耳だったかもしれない。

『おねえさん。そっちじゃない。こっちだよ。今、あんたさんが握ってるやつだよ』

握る剣を凝視する。

その剣は一言でまとめるとぼろぼろだった。

刀身は錆びだらけで、ひびも無数に入っている。

刃も欠けているし、刀身は曲がってすらいる。

『おおっと！ おねえさん、聞こえてるね。そうだよ、俺だよ。あんたさんの今握ってる、固くて、太くて、長いやつさ』

たしかに男の声が聞こえている。

声は耳ではなく頭に響いているようだ。

「おい親父……剣が喋ったぞ。どういうことだ？」

「なに馬鹿なこと言ってるんだ。冗談はお前の財布の中だけにしとけ」

「財布の中も冗談じゃない」

『まあ、そう言いなさんなよ。おねえさん、話は聞いてたよ。ここから一本、ただで持っていけるんだろ。俺にしなよ、役に立つぜえ？、超立つぜえ、びんびんだぜえ。今夜は寝かき——』

そつと剣を元の位置に返して、手を離れた。

声は聞こえなくなった。

どうやら疲れているらしい。

そろそろ真剣に結婚を考える時期に来ているのかもしれない。気を取り直して他の剣を調べていく。

他の剣を調べ終わったが、どれも似たり寄ったりだ。触りたくなかったが、もう一度だけ例の剣に触れる。

『おねえ様。頼むから——』

やっぱり喋った。

そして、剣から手を離すと声が途切れた。

どうやら触れている間だけ声が聞こえるようだ。

もう一度だけ触れてみる。

『話を聞いてください。お願いします。溶けて消えたくないのです』

剣の口調もどんだん丁寧かつ切実なものに変わっていく。

「ほんとにお前が話しかけているのか」

親父に聞こえないよう小声で剣に問う。

『そうです。そうなんです。見た目は剣、だけど心は弱いチエリーボーイなのですよ』

その後、剣は独りで話を始めた。

なんでもチキューのニホンとかいう国に住んでいたが、階段からこけて命を落としたらしい。間抜けな奴だ。

死後に神様に会って、チート(?) 転生させてやると言われたらしいが、目が覚めたら人間じゃなく剣であった。

いろいろ紆余曲折あってこの武器屋の廃剣置き場に流れ着いたのだとか。

剣は涙ながらに語った。実際に涙は見えないが声がかすれていた。

とてもじゃないが信じられない。

しかし、剣から声が聞こえるのはたしかだ。

私はまだ正常のはずだ。

「お前の話によくわからん。それよりもお前の見た目を考えるに使い物になるとは到底思えん」

喋る剣の見た目はひどい。

元恋人と比べても折れてない部分にしか利点がない。

これでは使い物にならないだろう。

『いや待て早まるんじゃないよ、おねえさん。たしかに見た目はひどいけど、俺はこれでもチート持ちなんだぜ。神棚に供えてもらってもバチは当たらんよ』

「先ほどから言っているチートとはなんだ？」

『おおっと、すまない。俺の元いた国の話さ。チートつてのはね。元はずるとか騙しつて意味なんだけど、今じゃ意味も広義に扱われてるからね。とても不思議で強大な力があるってことになるかな。わかるかな？ わかんねえか。おねえさん頭わるそうだもんね。まあ、簡単に言えば血を吸えば吸うほど、見た目も回復して強くなる……はず』

「……はず？」

『イカれたロックな神様からの伝聞だよ。なにぶん俺はまだ未経験の童○君でしてね。おねえさんが優しくエスコートしてくれると、うれしいな』

てへっ、と剣は甘えたような声を出す。気持ち悪い。

やっぱり元の位置に戻そう。

他の剣にすべきだ。

『待って。待って待って。待ってください！ 俺の見た目が良くなるだけじゃないんです。なんと！ なんとですわね！ いろいろな効果も付いていきます。たしかに今は毒付与しかありません……しかし！ これからきつとじわじわ増えていきます。それはおねえさんのがんばりしだい！ しかも！ しかもですよ！ 今日は何とそれだけじゃないんです！ 強くなるのは俺だけじゃない。俺の強化とともに持ち主になる貴方も——頭の硬そうなおねえさんも強くなる！ 振れども振れども一向に強くなれない無為でただれた日々とも今日でお別れ。明日から俺とおねえさんの破竹の快進撃が始まりますよ！ とうとう期待！』

本気で折ってやりたいが、踏みとどまる。

どうせもう冒険者生活も行き詰まっていたところだ。

このおしゃべりな剣に賭けてみるのも悪くない。

「明日からでは駄目だ。さっそく今日から試させてもらおう」

『お、おお……使ってくれるんですか、俺の一物を』

「駄目だったら粉々に砕いてから溶かすからな。覚悟しておけよ」

『……………や、やさしくしてね』

笑みが浮かぶ。

どうやら久しぶりに会話を楽しんでいたらしい。

「私はメルだ」

『俺はシュウっていいいます。シュウ君ってハスキーな声で呼んでくれると悶えます』

剣は、勝手に名乗り始めた。

こうしておしゃべりな剣とのダンジョン攻略が幕を開ける。

第02話 「初心者森」

エルメルの町から徒歩十分。

眼前に広がる鬱蒼とした緑——なけなしの森にやってきた。通称「初心者森」だ。

モンスターはスライムとゴブリンで九割以上を占めている。森も整備され迷うことなどほぼない。

繁茂している草も毒はなく、薬草として扱われるものばかり。初めての人間でも死ぬ確率が極めて低い。

自慢じゃないが私はここを極めていっていると自慢している。数年間ここで稼ぎをしてきた。

通常の道はおろか、獣道までほぼ把握している。小銭を稼いでいるゴブリンを背後から襲い金にしてきた。

スライムも狩りまくって粘液を集めて売り払っていた。『知ってますか、メル姐さん。それ弱い者イジメって言うんですよ』

手に持った剣は相変わらずよく喋る。

エルメルの町の近辺には他にもダンジョンが二つほどあるが、私には今のところ関係ないものだ。

『まあ、俺のチートな一物で姐さんをはあはあ言わせて、前の彼氏のことなんか思い出せないようにしてやるよ』

「それよりもお前は自分の身を案じておけ。使えないようなら今夜中にでも折るからな」

『弱い者イジメ、よくない……』

シユウと名乗る剣は小声で抗議してきた。

探索を開始して約一時間。私はいまだにモンスターは一体も狩ることができていない。

『メル姐さん。えっと、その、なんて言うのかな……』
最初は黙っていたシユウが口を開いた。

口を開くと言ってもそんな口は見当たらないのだが。とりあえず、いったい何が言いたいのかわからない。

「要領が掴めん。もつとはつきりと見え」

『姐さん剣士に向いてないよ。はつきり言って才能がない。なんで剣士になったの、馬鹿なの?』

「はつきり言いすぎだ。」

才能がないことはわかっているが、ここまではつきり言われるとショックだ。

しかも、こんなぼろぼろな剣に言われるなんて。

正直、折ってやりたい。

『ゴブリンには攻撃が当たらない。スライムにすら避けられる。剣は振り回せばいいってもんじゃないだよ。振られるほうの気持ち——考えたことある?』

ない。

そもそも振られる方の気持ちとはなんだ。

悪いところだけじゃなく、良いところはないのか。

『姐さんは足が速いよね。ゴブリンが三体以上出てきたときの逃げ足には、いやまつたくほればれするよ。韋駄天のメルと呼ばれても不思議じゃないほどさ』

ゴブリンが三体以上出てきたときは手に負えない。逃げるに限る。

それが悪いというのか。

『いやまさか。悪いなんて言っていないでしょ。危機管理能力に長けるんだよ。できることとできないことをきつちり判断できてる。だから、今まで生き残ってきたんでしょ——例え、一人だけでも。まあ、できることが圧倒的に少ないとも言うね』

シユウはケラケラ笑う。

この剣は嫌な鋭さがある。なにより口が良くない。

私のやり方にまで口を出す気じゃないだろうな。

『出さないよ。悪くないんじゃないかな。剣士には向いてなくても冒険者には向いてるかもね。そんなことより、もつと探索しよう。スライムでもゴブリンでも、一体でいる姐さんみたいなのぼっちな奴を後ろからこっそり近づいて別れの言葉も言わず串刺しにしてやってよ』

なんだろうか。

いつもやっていることを声に出して言われると、まるで悪いことをしているみたいだ。

さらに一時間が経っただろうか。

木陰に耳の長い小男を見つけた。

ゴブリンだ。見渡してみるが、近くに仲間はいないようだ。

どうやら小銭を勘定しているようで、こちらには気づいていない。

『姐さんチャンスだよ。外さないでね。絶対だよ。絶対に外しちや駄目だよ』

ええい、うるさい。

いちいち言われなくてもわかってる。

ゆつくりと足音をさせないように、気配もできるだけ消してゴブリンの背後に近寄る。

もう一歩というところになって、ゴブリンはようやく私の気配を感じたのか慌てて振り返る。

しかし、すでにもう遅い。

剣は——シユウはすでに突き出されている。

手に伝わる鈍い手応えが仕留めたことを教えてくれる。

不思議なことに返り血がまったくいいほど出てこない。

うはあつとシユウが声をあげた。

『ヒヤッハー……さいつこう！ 最高だよ！ 濃縮還元百パーセントなんて目じゃない！ ゴブリンブラッドのストレート！』

なにやら興奮している。

言っていることはよくわからないが、ゴブリンの血を吸っているようだ。

あまりにもうるさいため、ゴブリンの体から引き抜こうとするが、すごい剣幕で止められた。

すぐにゴブリンの体はしぼみ、しわしわになる。

そしてシユウを引き抜くと同時に消えてなくなった。

『ああ、おいしかった！ いやあ、やつぱり人間。きつちり食事を取らないと駄目だね！』

「……お前は人間じゃないだろう」

それよりもだ。

シユウの刀身にはまったく血が残っていない。

それどころかひびびや錆び、刀身の欠損が目に見えて減っている。

「これは、どういうことだ」

『うん？ ああ、言ったでしょ。俺はチート持ちなんだよ。血を吸えば吸うほど回復するし、強くなる。ほら、姐さんもなんか強くなった気がするでしょ？』

そう言われると、手に持つ重みも軽くなった……気がする。

『狩れば狩るほど俺だけじゃなくて、足が速いだけで剣の才能は微塵もない憐れなメル姐さんも強くなるよ。さあさあ、次いつてみよう！』

日が暮れる頃にはゴブリンをさらに三体、スライムを四体ほど狩った。

シユウの刀身はすでに新品の剣と遜色がないほどまでになっていた。

『俺の姿もようやく人並みになれたよ。メル姐さんありがとね』

人じゃないだろ、と突っ込む気力はとうに失せていた。

それになにより、礼を言われるのは——悪くない。

斬れば斬るほど、血を吸えば吸うほど強くなるというのも理解した。

私の剣は正面からでもゴブリンにかするようになり、攻撃も前より見えるようになった……気がする。

さらにシユウははつきりとわかるほど軽くなり、切れ味も以前の恋人を凌駕している。

それどころかゴブリンの一体はかすただけで、動きが鈍くなった。

シユウは毒状態になったと話していた。

こいつとなら初心者の森を卒業することができるとは思えないだろうか。

おしやべりな剣と出会ってから五日が経った。

私はいつもどおり初心者森に來ていた。

今日の目的はいつもと違う。

ゴブリンやスライムを狩るためではない。

この森のボスモンスターであるギラツクマを狩るためだ。

こいつを楽に狩ることができれば初心者は卒業と言われている。

六日前の私なら出会った瞬間、脇目もふらずに逃げていた。

しかし、今なら倒せる。そんな気がしている。

たったの五日で、すでにシユウは私の手になじんでいた。

こいつの話していた、「斬れば斬るほど強くなる」と言うのは確からしい。

二日目にはゴブリンの動きがなんとなく見えるようになり、三体に囲まれても突破できるようになっていた。

逃げ回りながらちよこちよこ斬りつけていけば、相手の動きが悪くなるのだ。

狩りの効率が一気に上がり、それに伴いシユウも強くなっていった。

三日目にはゴブリンの動きが完全に把握できるようになった。

五体に囲まれたこともあったが、一対一の形にもっていけば簡単に狩ることができる。

シユウの切れ味も格段に上がり、三回斬りつけることもなくゴブリンは動かなくなった。

楽しくなってドロップアイテムを集めることよりもモンスターを狩ることがメインになってきていた。

四日目。昨日だ。

すでにゴブリンは敵でなくなった。

スライムなどはシユウがかするだけで、消えてしまう。

『姐さん。もうゴブリンやスライムを倒しても俺は強くなれないよ』
帰る頃になって、シユウがそう話した。

モンスターによって手に入るポイントとやらが決まっているよう
だ。

ゴブリンやスライムでは次の段階に上がるのは厳しいらしい。

そして、五日目の今日。

私は初心者森を卒業することにした。

朝からギラックマを探してみるもの見つからない。

会いたくないときには会うのに、会いたいときにはなかなか会うことができない。

そもそも、めったに遭遇しないのが初心者森と言われるゆえんだ。

昼になっても会うことができない。

ゴブリンは二桁に届くほど倒したはずだ。

シユウも欠伸をしてつまらなそうにしている。

ゴブリンやスライムでは満足できないらしい。

『慣れって怖いよね。五日前にはあんなにおいしかったゴブリンジューズが、今じゃ砂っぽさしか感じられないもん。メル姐さんもそうじゃない?』

何が言いたい?

『ゴミクス同然に背中を向けて逃げ戸惑ってたゴブリンが今じゃ敵と感ぜない。数年間も苦勞してた敵がたったの五日でゴミ同然になる。それってどうなの?』

「たしかに——」

そこまで言ったところで、道の先に四足で歩く大きな影が映る。

もじゃもじゃの毛。いかつい目つき。硬く鋭い爪。

来た——ギラックマだ。

見た目は明らかに獰猛なのだが、実際はとても臆病だ。

よほどのことがない限りあちらから襲ってくることはない。

それ故の初心者森だ。

「話はあとだ」

『そだね。それじゃあいこうか、メル姐さん。初心者卒業試験始めだよ』

シユウを構え、ギラックマに疾走する。

あちらも私を敵と見なしたらしい。

四足をやめて立ち上がる。

背丈は人間を大きく超えるものになった。

さらに大きく叫び威嚇してくる。

その様子に思わずひるみ足が鈍る。

勝てるのか、私一人でこいつに。

『メル姐さん。まだ初心者なんだから初心を忘れちゃ笑いもんだよ。正面から無理に斬り合うことはないさ。お得意のヒットアンドアウェイでいこう』

こんなときでもシユウはおしやべりはやめない。

黙っている。気が散れば、命にかかわる。

『奴は臆病なんですよ。だから自分を大きく見せて、声を出して相手を怖がらせる。あいつだつてメル姐さんが怖いんだよ』

ギラツクマは私よりも体格がでかい。

私をおそれることなどあり得るだろうか。

『ギラツクマって普通はパーティーを組んで倒すんですよ。目を血走らせて、たった一人で襲いかかってくる馬鹿女がいれば怖いってもんじゃないよ。まあ、メル姐さんの場合はパーティーを組んでくれる人がいないだけなんだけどね』

……こいつは私にケンカを売っているのか。

ギラツクマの左爪を避ける。

攻撃はしつかり見えている。体も思ったより動く。

こいつなりに私の緊張をほぐしてくれたのかもしれない。

私はこんな状況だというのに笑っているかもしれない。

「もし、こいつに勝ったら——」

『いけない姐さん、それは死亡フラグだ』

死亡……なんと言った？

『まあ、姐さんがこいつに勝てたなら、俺にはご褒美としてその豊満な胸で俺の一物をぱふぱふしてもらえるとハッピーだね』

こいつには緊張感が足りないな。

あとでスライムの粘液に突っ込んでかき回してやろう。

——あとで、か。

どうやら私は無意識にこのクマに勝てると思っっているらしい。

何度か斬りつけたところで、ギラツクマの動きが鈍った。

これはもう見慣れた。

毒が入ったのだ。

『姐さん。たしかに毒で有利だけど、有利だからこそ気を引き締めてね。引き締めすぎてちよつと痛いくらいが気持ちいいんだよ、うへへ』

何を言ってるんだこいつは……。

だが、シユウの言うとおりだ。

まだ、倒した訳ではない。

毒は効いているが、依然として爪の一撃が脅威であることに変わりはない。

その後、数度斬りつけたところでギラツクマは倒れた。

慎重に近づき、ギラツクマの胸当たりにシユウを突き刺した。

ギラツクマは徐々にしぼみ、やがて光とともに消えていく。

『うひゃあ。さすがにボスというだけあつておいしいねえ。マイルドだぜえ』

シユウはなにやら堪能している。

「勝った……」

実感がわかない。

たしかにギラツクマは光と消えたが、夢だったんじゃないかと思つてしまう。

緊張がほどけペタリと座り込んでしまう。

目の前にはギラツクマのドロップアイテムが落ちている。

これはボスに勝った証だ。確かな証だ。

初心者森のボスに勝ててしまった。

しかも一人で、だ。

『メル姐さん——』

いや、一人でじゃない。

そうだ。こいつと、シユウと一緒にだ。

ともに戦った仲間だ。

「シユウ、お前と——」

『もうちよつとだけ足広げてくれない。あと少して桃源郷にたどり着けるんだ』

シユウは座り込んだ私の股ぐらを覗き込んでいるらしい。

……なんだろうな。

勝利の甘美な思いが霧散してしまった。

シユウを自分の足近くから離す。

ああああ、と本気で残念がっているようだ。

「お前は、他になにか言うことがないのか」

冷たい声が出てしまった気がする。

『うーん。じゃあ……プロ初心者のメル姐さん——』

ああ？

間違いない。やっぱりこいつは私にケンカを売っている。

『初心者卒業おめでとう』

あまりにもまつすぐな言葉。

意表をつかれ理解に時間がかかった。

そして、顔を背けた。

「その、えつと……あ、ありがとう」

おずおずとお礼を述べる。

『いやあ、いつもツンツンしてる人のデレはいいねえ。ギャップがグツとくるよお。ほら、顔見せて。ねえ、今どんな顔してんの。ほーら、メルちゃんの照れ顔、おじさんに見せてごらん。ほらほら』

柄を握ったまま、刀身を地面に叩きつけた。

それを十数回。

怒りと照れ隠し、それに感謝が少々といったところだ。

初め悲鳴を上げていたシユウは、やがて何も言わなくなった。

ついに、私は初心者の森——なけなしの森を数年かけて制覇した。

第03話 「骨踊るウラキラ洞穴」

私が入ったとたんギルドは静寂に包まれる。

それも一瞬ですぐに喧噪を取り戻す。

気にしない。いつものことだ。

まっすぐ受付に向かう。

『ギラツクマの素敵な爪』だ。ウラキラ洞穴の入場許可をくれ」

ギラツクマが落としたアイテムを受付に差し出す。

これを差し出すことでギルドから初級ダンジョン——ウラキラ洞穴への入場許可がギルドから下りる。

許可証は三人以上のパーティーであれば、リーダーが持っているだけで大丈夫なので一応許可証がなくても洞穴に入れることは入れる。

しかし、私の場合はパーティーを組んでくれる人間がいない。

そのため、どうしても自分の力でギラツクマを倒して爪を手に入れる必要があった。

「確認しました。こちらがウラキラ洞穴の入場許可証になります」

「ありがとう」

事務的に渡された。四角の金属カードを腰の袋に入れる。

ギルドから出ようとしたところで声をかけられた。

名前は思い出せないが、顔は覚えている。

やたらと私に突つかかってくる一人だ。

「ようメル。やあっーと初心者森を制覇したのか。何年かかってんだ」

周囲から笑いが起きる。

「なんだ、あの刃の潰れた剣は捨てちまったのか。お前にはお似合いだったのによ。その新しい剣のおかげでギラツクマを倒せたのか」

「そうだ」

それはその通りなので否定しない。

「おいおい、その剣はどこで手に入れたんだよ。また仲間を見殺しにして奪ったのか」

握りこんだ拳は、爪が食い込んでいるが痛みは不思議と感しない。

これ以上、ここにいと剣に手が伸びる。

男の脇を通り、出口の扉を押す。

「洞穴に一人で行っても死ぬだけだ。お前とパーティーを組もうって奴はここにいなえ。だが、しかしだ——おめえの頭を床にくつつけて尻を振って頼むんなら、組むことを考えてやってもいいぜ！」

後ろから声がかかる。

さらにここ一番の大きな歓声が起こる。

声の圧力から逃げるようにギルドの外に出た。

家に戻り、すぐ自室にこもる。

なんとなく、なにも考えはなくシユウを握る。

『やあメル姐さん。明日は話題の洞穴に向かうのかな』

「そうだ」

『楽しみだね。どんなモンスターが出るのかな。おいしければいいんだけど』

「……聞かないのか」

『聞いて欲しいの？　じゃあ聞くよ。ギラックマを倒したんだから、ご褒美があってもいいと思うんだけど、ばふばふはまだかな。ずっと待ってるんだけど』

……ふざけてる。どこまでもふざけている。

こいつはわかって言っている。

『昔、何があったのかは知らないけどさ。これからの姐さんには関係ないでしょ。過去は過去。もう初心者じゃないんだから、明日のことを考えなきや』

シユウは何も聞かない。

確かに話したところで何も変わらない。

彼の言うとおり、明日のことを考えるべきだ。

「明日は洞穴に向かう」

『いいね。おいしい食事が最近じゃ唯一の楽しみなんだ。この体じゃシコシコできないしさ。目の前に特上のおかずがあるってのに……まったく、生殺しだよ』

「問題がある。私はパーティーが組めない」

『スルーされちゃった。で、それがなにか問題なの？』

大問題だ。

なけなしの森なら敵もまだ弱いから問題なかった。

「ウラキラ洞穴は暗い。灯りを持つ必要がある」

『ああ、なるほどね。片手に松明、片手に剣だときつそうだね』

「それだけじゃない。灯りに誘われて暗闇からモンスターが寄ってくるとも聞いている」

『ああ、前だけじゃなくて後ろからも襲われるのかあ。ぼっちはつらいねえ』

こいつは私をけなしたのか。慰めたいのかどっちなんだ。

いい加減、我慢ができなくなってきた。

「当然、モンスターも強くなっている。最低でも三人以上で潜るところだ」

シユウも問題だと思ったのか黙っている。

『それってさ。別に問題ないんじゃないかな。どちらかと言うと、俺にご褒美がないほうが問題だよ』

「お前は、私の話を、聞いていたか？」

怒気が多分に含まれた声を察してシユウは慌てて弁明する。

『お、落ち着いてよメル姐さん。深呼吸だ。すぐにヒスる女はうとまれるよ』

ヒスるとはなんだ。

怒るという意味だろうか。それなら怒らせる方が悪い。

『要するにさ。灯りを持つから問題なんですよ』

「ん。そうなるな」

視界を確保するために灯りが必要で、その灯りがさらに敵をおびき寄せる。

さらに灯りを持つことで片手がふさがる。

その通りだ。

『じゃあ、持たなきゃ良いじゃない！』

シユウは得意げに叫んだ。

翌日。

朝食を食べたあと私はすぐにウラキラ洞穴に向かった。あまり人に会いたくない。朝一番ならそこまで人に会うこともない。

私は非常食と薬草、シユウだけを持ってウラキラ洞穴に入る。入り口の監視員が不審な顔で私を見てきた。

それもそうだ。

パーティーを組んでおらず、さらに松明もない。

魔法使いかといえば、持っているのは杖ではなく剣。

いぶかしむのも当然と言える。

『そろそろやるよ、姐さん。準備はいい。ゴムはいらないよね?』

洞穴に入り光が見えなくなっただくらいでシユウが声を出す。

ゴムが何かはわからないが、いつもの戯れ言だろう。無視しよう。

私は領き許諾する。

視界が暗かったが、突如、色彩豊かなもの変わった。

緑、青、一部に赤や白が混ざっている。

色の変化が壁や床をしっかりと私に認識させる。

『見えてる?』

「ああ、見えている。昨日も試したが、このさあもなんちゃらというの
はすごいな」

『サーモグラフィーね。これがあれば暗くても問題ないはずだよ。今日
のところは近場を漁ってこの視界に慣れるのがいいよ。色がきつ
かったら調整するから言っただけ。できればねだるように言っしてくれ
ると興奮する』

「……はいはい」

昨日の夜。

シユウの提案でさあもなんちゃらとやらを試すことになった。
確かに暗い中でも景色を見ることができていた。

今日は実際に試すことにしたので、どうやら成功のようだ。

「しかし、これは……ひきよ」

『チートですから』

「でも——」

『メル姐さん。運も実力のうち。メル姐さんが俺というチートを引き当てたのも実力だよ。姐さんはさらなる高みにいくための力が欲しい。俺はおいしい血が欲しい。ついでに、肉体が魅力的な女性の側にいたい。今のところ、互いの欲望は成就されてる。問題はない——でしよ?』

たしかに強くなれるのは嬉しい。

最高峰のダンジョン——神々の天蓋を攻略してその先を見る、という忘れかけていた私の夢も思い出すことができた。

だが、あまりにも——。

あまりにも急速すぎる。

洞穴内は以前の冒険者があちらこちらに目印を立てているため特に迷うことがない。

ボスも一番奥にいるため、うっかり遭遇することはない。

『私にはやっぱり剣の才能がないし、仲間もいない』

問題は時間だが、お腹の減り具合以外で確認できない。

まあ、非常食も持ってきているため、遅くなっても特に問題はない。ないないづくしのダンジョン攻略だ。

……おいこら、勝手に変なものを混ぜるな。

洞穴のモンスターは集団で襲つてくると聞いていたが、そんなことはなかった。

シユウは、モンスターが視覚ではなく灯りの熱を感知しているからだと推測した。

そのため灯りを持たない私たちには臭いや音、人肌の熱を感知するほどのモンスターしか襲つてこないのではないかとということらしい。実際にスケルトンやアンデッドは、私が近づいてもふらふらと歩いている。

群れなら怖いが、数体程度をばらばらに相手するなら余裕だ。

耐久性はゴブリンやスライムとは比べものにならないほど高い。

しかし、動きは緩慢なため簡単に避けられる。

それに距離を取るのも楽だし、距離を取るとこちらの位置が把握できていないのか襲ってこない。

気をつけるのはコウモリくらいだが、正面は私が、後ろはシユウが見張っているため、群れで襲われない限り問題にはならない。

数体程度なら襲って来ても、逃げ回りながら斬ることで対応できている。

『スケルトンつてさ。血がないからまずいんじゃないやねって思ってたけど、意外といけるね。やっぱりカルシウムが豊富なのかな』

相変わらず何を言っているのよくわからないが、スケルトンやアンデッドも吸収できるらしい。

奥に進むうちに斬りつける回数も徐々に少なく済むようになってきていた。

さらに麻痺付加と毒付加確率上昇を入手したらしい。

「その効果の追加というのは、どうやってわかるんだ」

『ああ、これね。頭の中で意識するとポイントと一覧が出てきて、いろいろと選択できるんだ。サーモグラフィもそれで入手した』

……いろいろと選べるのか？

『うん、そうだよ。今のところ効果追加よりも姐さんの能力プラスを最優先で取ってる。ちなみに今の姐さんは毒と麻痺の耐性が付いてるから。それ以外はまだリストに出てないね。今は能力プラスがなくなっただから効果追加を選んだんだ』

「そう、だったのか」

いつもふざけているエロクソ野郎だと思っただが、こいつなりに私のことをちゃんと考えてくれてるらしい。

今まで少し怒りすぎていたのかもしれない。

『どうしたの黙っちゃって。あつ、もしかして俺に惚れちゃった。俺の魅力に気づいちゃった。それなら、柄の裏筋をなめなめして欲しいな。きつと気持ちいいと思うんだ』

これがなければなあ……。

それに柄の裏筋つてどこなんだ。

目の前には大きな看板。

そこにはこう書かれている。

『注意！』

この先、ボスモンスター！

準備を万全にして挑むこと！

死んだら貴方も仲間入り！』

まさか一日目でたどり着くとは……。

確かにかなり進んでいるとは思っていた。

それに敵が多く配置されてきているとも感じていた。

しかし、こちらがそれ以上に強くなってしまうていた。

特に毒付与の確率上昇が大きい。

二回斬れば一回は相手が毒になる。

さらに麻痺も付くことが有り、モンスターは動けずして毒による死

を待つことになる。

「どうしようか？」

割と真剣に困っている。だから声に出した。

コンデイションは悪くない。むしろ好調だ。

いくらか攻撃を食らったが、怪我はなく痛みもない。

ここ数日で私自身も耐久力が増した気がする。

しかし、ボスモンスターともなればそこの雑魚とは一線を画する

だろう。

現状で入ってもいいものだろうか。

あくまで参考のために相棒（仮）に話を振った。

『姐さんの体調はいいと思う。それと、さつき教えてくれたボスの情

報は正しいんでしょ？』

「……ああ」

町でこのボスモンスターの話は聞いている。

ボスはスケルトンクイーン。

スケルトンを大きくした存在らしい。

さらにボスの周囲には多くのスケルトンがいて、集団で襲ってくる

らしい。

数による攻撃。

私の戦闘スタイルでは苦手なタイプだ。

『ここでのポイント入手も難しくなってきたから、これ以上の強化はほとんどできないね。あと数十体で能力プラスが選択できそうだからそれを取るくらいかな』

「わかった。それが入手できたらボスに挑む」

脇道に逸れてスケルトンやアンデッドを狩りまくった。

シユウによると能力プラスは使用されたようだが実感はまるでない。

本当に使ったのだろうか。

『姐さんは才能がないからわかんないかもね。もしかして不感症じゃないの？ あっ、そんなピリピリしないですよ——まあ、どうしても心配ならさ』

シユウの提案を受けて、近くに落ちていた松明を拾っておく。

おそらくこれは、ここで命を落とした冒険者のものだろう。

ボスフロアの空気は冷たく淀んでいる。

広い部屋には無数の骨が地面に散らばる。

『犬が大喜びしそうなところだね、ワンワン。ボスはどこだろう。死んじゃったのかな……って、スケルトンだからもう死んでるか。H A H A H A』

シユウの気持ち悪い笑い声が頭に響く。つつい舌をうつ。

最近舌打ちの回数も如実に増え、キレのある音が出るようになっていた。

しかし、シユウの言うとおり、部屋を見渡してみるもののボスの姿はない。

注意して部屋の中心へと歩む。

中心にたどり着くと、かたかたと音が聞こえた。

骨のこすれる音だ。それが徐々に大きくなっていく。

部屋中に散らばっていた骨が徐々に目前へと集まってゆき高く高

く積もる。

そうして、一体のやたら大きいスケルトンができあがった。

『おお、すごいや。ほんとにボスって感じだね。でも、せっかくクイーンなのに骨だけだなんてがっかりだ。肉付きの重要性を再認識するよ』

「黙っている、空気が台無しだ」

相手がスケルトンなのに骨抜きになっちゃうね。

そんなシュウの声を私は聞かなかったことにした。

スケルトンクイーンの背丈は私の倍近い。

空っぽな眼孔にはなにやら鈍い光。

近づいてくる動きを見るに、他のスケルトンと同じく速くはないよ
うだ。

クイーンが片手を上げる。

呻き声とともに地面から大量のスケルトン湧き、私を囲む。

『姐さん。予想通り囲まれたよ』

わかっている。ここまではシュウの予想通り。

重要なのはここからだ。

大量に出現したスケルトンは私を無視して部屋の入り口に歩き始
める、

どうやら作戦は成功らしい。

囲まれる可能性があったことは予想していた。

そのためここに入ってすぐ一つだけ細工をした。

入り口近くの壁際に火をともした松明を挿しておいたのだ。

スケルトンはおそらく目が見えない。

きつと、より大きな熱量を持った松明へと向かう。

シュウの作戦は的中した。

クイーンとの間には数体のスケルトンがいるだけ、彼らを斬り倒し
クイーンと一対一のサシにもちこむ。

これなら私に有利な戦いができる。

そして、クイーンとのタイマンが始ま……らなかつた。

クイーンの周囲をぐるりと旋回し、後ろに回り込む。

当然、こちらを振り返ると考えていた。

だが、クイーンは私を無視して入り口へと歩いて行く。

おや？

『クイーンさんもお目々がよろしくもないみたいだね。もしくは見えて
いるけど、熱量の大きなものから優先して攻撃するのかな』

返事はしない。音で反応されてはたまらない。

とりあえず後ろから全力の一太刀をお見舞いする。

さあ、ここからが本番……にならなかった。

斬りつけたクイーンは動きを止め地面に崩れた。

「これって、もしかして？」

これには私も声を出さざるを得ない。

『うん。麻痺してるよ。耐性がないんだね。ボスなのに……いや、も
しかすると——』

シユウは何か言いたそうだったが、珍しく途中で口をつぐんだ。

あとは一方的だ。

相手からの攻撃はない。

数回斬りつけたところで今度は毒が入り、骨がカタカタと震え始め
た。

『これじゃあ、どっちがボスなんだかわかんないね』

さらに数回斬りつけたところでクイーンは悲鳴を上げて消え去っ
た。

悲鳴もあげたくなるだろう。同情してしまう。

クイーンのいた場所にドロップアイテムが残る。

手に取ると、出口の扉がボタンと開いた。

『くううく、メル姐さん！ 本当につらく苦しい戦いだったねえ！』

クイーンを吸い取って満足しているシユウの声に、反応する気力な
ど残っていなかった。

こうしてウラキラ洞穴の攻略はたった一日で終了してしまった。

第04話 「シルマ神殿にて犬と戯る」

ギルドは凍り付いた。

もちろん実際に凍ったわけではない。

耳ざとく私の声を聞いたものが、話を広げあまりの内容に固まってるだけだ。

それはそうだろう。

もしも私があちら側にいれば、同じように固まる。

ウラキラ洞穴を一日で制覇した。

ベテランのパーティーなら別におかしくはない。

しよせんは初級ダンジョン。

しかしだ。

昨日、初心者森をようやく制覇した初心者新卒がソロで制覇した。

しかも、たったの一日で。

信じられるはずがない。

ところが、現に私はドロップアイテムある「麗しきスケルトンクイーンの鎖骨」を提出し、その代わりにシルマ神殿の入場許可を受け取った。

ギルドによる公認だ。噂は事実へと裏打ちされる。

いろいろと突っ込まれると面倒だ。

いつものようにさっさと立ち去ろう。

「おい。メル！　どんな汚い手を使いやがった？」

昨日も私に突っかかって来た奴だ。

汚い手と言われると返す言葉もない。

無視して通り過ぎようとしたが、肩を掴まれた。

「ちよつと待てよ。昨日ようやく初心者森を制覇したおめえが、今日はウラキラ洞穴を制覇？　そんなことありえねえだろうが！　言えよ。誰を殺したんだ？」

最後の言葉に我慢できず、男の腕を掴んだ。

捻ってやろうとは思った。

——だが、まさか腕が逆に曲がるとは想像してなかった。鈍い音が響き、再びギルドの中は静寂に包まれた。

ついで男の汚い叫び声があがった。

本当に自分がやったのかと驚き手を見つめる。

それもすぐに落ち着き。転げ回る男を見て薄い笑みが出る。

——いい気味だ。

すぐに男の仲間が駆け寄ってくる。

ギルド内で剣を抜くのは御法度だ。

ただ、ある程度の殴り合いは大目に見られている。

これは乱闘になるな、と覚悟を決めた。

数日前の私ならともかく、今ならなんとかなる。そんな気がした。

乱闘にはならなかった。

男の仲間は私に怒りではなく、恐怖の目を向けた。

ギルドを見渡すが、誰もが私を彼と同じ目で見つめている。

目を逸らすものさえいた。

もしも私があちら側にいれば——目を逸らすかもしれない。

その視線を背中に浴びて、何も言うことなくギルドの扉を押した。

家に戻り、昨日と同様、やっぱり自室にこもる。

シユウはなんと言うだろうか。

剣の柄をそつと握る。

笑い声が頭の中に響いた。

『いやあく、さすが姐さんだね！ 腕を折るとは思わなかったよ！』

「私は……私は、折る気など毛頭なかった」

そう。私には奴の腕を折る気など微塵もなかったのだ。

「あんなに力が出るとは思ってたんだ！」

『そうかもね。メル姐さんの能力は以前とは比べものにならないほど向上してるからね。デコピンすれば大抵の人間は意識が人工衛星とランデブーするレベルだよ』

なんだかよくわからないが、私は想像以上に強くなっているらしい。

たしかに足の速さや剣を振り抜く力が上がっているとは感じていた。

まさか、あれほどとは考えていない。
それだ。

「私はあるなことをするつもりはなかったんだ！」

『へえ、本当に？　じゃあ、男が床を転がり回ったとき。なんの感情も抱かなかった？』

「それは——」

言葉に詰まる。

『あのむさくさくして汗臭い、目も当てられないおっさんが気色悪い声を出して床に転げ回ったとき姐さんはごめんなさいとでも心の中で思ったの？』

思って、ない。

そんなことを思わなかったはずだ。

むしろ私は——、

『「いい気味だ」って感情を抱いたんじゃないかなあ、違う？』

その通りだ。

まさにその通りに思ったはずだ。

今までさんざん私を馬鹿にしてきたあいつの転がる姿を見て、気分がよくなった。

それでも……

「それでも私はあそこまで——」

『姐さん。どうして言い訳をするんだい。俺は姐さんを責めてなんか
ないよ。むしろ、ちようどよかったと考えてる』

ちようどいい……？

こいつはいったい何を言っている。

今まででもよくわからないことを口走っていたが、今の台詞はこれまでの比ではないくらいに理解できない。

『いいじゃないか腕の一本や二本。人体には二百近くの骨がある。それが一本折れただけ。たいして重要でもない腕の骨。まして治らない訳でもない』

違う。違うんだ。

そういうことを言っているんじゃない。

『わかっている。そういうことじゃないって言いたいんでしょ。自分ではそうしたいとは思ってもいなかったのに、想像よりも遙かにひどいことになっちゃって姐さんはそれを悔いてる。自責の念ってやつだね』

口に出されると、なにか別のものになった気がしないでもないが、きつとそうなのだろう。

『力を付けすぎたね。思い出せるかな。ギルドの人たちが向けた目を。尊敬でも、怒りでも、哀しみでもない。純粋な恐怖の目。自分には理解できないものを見ようとする目』

目を閉じてもありありと浮かび上がる。

今までのあざけりとはまったく異質の感情が私に向いていた。

『姐さんには二つの道がある。一つはこのまま止まることなく突き進む修羅の道。もう一つは来た道を引き返して、無能な人間として生きる道。停滞はないよ。それは死だからね』

修羅の道はわかる。このまま上を目指し夢を追う道だ。

もう一つの道は――、

「引き返すなら、お前はもうどうなる?」

『簡単だよ。誰か他の冒険者にでもあげてくれればいい。捨てるのは勘弁してください。あと、誰かにあげるなら、なるべく年上でむちむちの女性がいいな。わっふるわっふる』

相変わらずふざけた調子でシユウは語る。

「本当にいいのか?」

『そりゃあ、いやだよ。メル姐さんは俺を拾ってくれた恩人だしね。一緒にあちこち回るのも楽しそうだ。それになにより体つきが最高だ、そそられちゃう。……でも、責任を感じてるんだ。俺の欲望につきあわせて、急激に強くしちやっただからね。強大な力は見えないところにも作用するからさ。いつかはこうなるって思ってた。それが早い内でもよかった。今回はあのむさくさい男の骨一本で済んだけど、次はどうなるかわからないからね』

さきほど話していたちようどいいとはそういうことか。

「突き進むと……また私はあの目に晒されるのか」

『いや、そうとは限らないよ。ある程度までは恐怖だろうね。でも、その限度を超えてさらに突き進むと目すら向けられなくなる。大勢にいて、ただ一人。誰の目にも止まらない。止まれない。そう。孤高――』

言い換えると、ぼっちだね。あれ……今と変わらないぞ。

「一晩考えたい」

これは逃げではない。

明日の朝には答を出す。

シユウはただ『お休み』と言い残した。

朝になって私はシユウを握る。

『おはよう、姐さん。答は出たかな?』

「ああ、行くぞ」

『どこに行くの、ラブホ?』

「ラブほ? シルマ神殿だ」

『孤高なぼっちになるの?』

どうやらシユウは私がぼっちの道を選んだと思っているようだ。

それは違う。

「引き返せば私は無能なぼっちだ。だが、突き進むならばぼっちではない――お前は私と一緒に来るんだろう。二人ぼっちだ」

『メル姐さん……それはセンスがない。ナンセンスだ』

おい。なんでこういうときだけ真面目になるんだ、貴様は。

『だけどもあ、俺は姐さんの剣だからね。死ぬまでお供させて頂きやすよ姐御。ついでに初めても俺にください』

剣の腹をベッドの角にぶつけてやった。

エルメルの町。

町の周辺に現時点で存在する三つのダンジョン。

なけなしの森、ウラキラ洞穴。

そして最後の一つ——シルマ神殿。

遙か昔は宗教的な施設として機能していたらしい。

やがて宗派が衰退し、神殿だけが取り残された。

そこにはモンスターが住み着き、ダンジョンとなってしまった。

ウラキラ洞穴と同じく光の射さない暗い廊下。

いまだに発見され続けている無数の隠し通路。

侵入者を止めるためのトラップ。

当然、モンスターも強く厄介なものとなる。

鎧を着込んだリビンゲデッド。

魔法を使うかつての教徒の幻影。

群れをなす人食い犬。

危険度はウラキラ洞穴の比ではない。

初級者だけのパーティーで太刀打ちできる水準を超える。

そんなシルマ神殿を灯りも持たず、たった一人で突き進む冒険者。

——私だ。

灯りの問題はウラキラ洞穴と同様にさあもなんちゃらで解決している。

トラップについては、シユウが事前に気づき注意をしてくる。

どうやらどこにどんなトラップがあるのかは見ればわかるものらしい。

隠し通路も手跡や足跡から判断し、罠の少ない道を進む。

そうなると残る問題はモンスターだ。

リビンゲデッドは硬いが、動きが遅く数も少ないためさほど問題ではない。

警戒していた魔法は、シユウの魔法散乱とやらでほぼ無効化した。

麻痺の付与確率上昇も得たことで、この二匹は問題なくなつた。

唯一にして最大の問題は犬だ。

やつらは複数で囲ってから襲いかかる。

視界だけではなく、音や臭いでも追ってくる。

私が得意とするヒットアンドアウェイも奴らは足が速いためやり

づらい。

さらに牙には毒があるときた。

シルマ神殿における死亡理由のトップが犬である理由がよくわかる。

私も四苦八苦した。

何度か挟み撃ちをされ、腕と足を噛まれた。

幸い、私は毒に耐性があるらしく、体調は変化なし。

噛まれた傷もすでに治った。シユウの吸収効果で私も回復するらしい。

回復とはいっても正面から斬り合えるほどではない。

なんとか撃退したものの、血の臭いと遠吠えからさらに仲間が寄ってくる。

隠し通路や罠を利用し、なんとか乗り越えてきていた。

中級者向けともなるとやはりソロでは厳しい。

——そう思っていた時期が私にもありました。

『メル姐さん。新しいスキルを選択したから』

流れはシユウのこの発言から変わった。

私がどんなものか説明を求めたが、奴はすぐにわかると口にするだけであった。

その後、またもや犬に囲まれた。

一匹や二匹ではない。数十匹の犬が私を囲む。

どうする。

どうすればいい。

逃げるにも全方位を囲まれ、退路は断たれている。

『うーん、獣姦ものはちよつと好みじゃないんだよね。……いや、でも俺がケダモノになれるならありかもしれない。悩みどころだ』

シユウは余裕そうだ。

どうしてこいつはこの状況で落ち着いていられる。

おいっ、なにか策はないのか?!

『あるよ。そうカリカリしなさんな』

あるのか？

『どこでもいいから一方向に向かって斬りかかってみてよ』

後ろから襲われたらどうする。

『細かいこと気にしていると太るよ。個人的に、姐さんはもうちよつと肉がついてもいいと思うんだよね』

いろいろ言いたいこと、やってやりたいことはある。

ひとまず現状を打破すべきだ。

シユウの言うとおり、私は犬たちの一点に向かって斬りかかった。異常にはすぐ気づいた。

斬りかかった周囲の犬がばたばたと倒れていく。

『姐さん。うしろの奴も斬っちゃって』

考える暇もなく振り向かされる。

すぐ後ろには犬が倒れている。

襲いかかってくる犬はわずか二匹だけだった。

その二匹も片方を斬ると、もう片方は斬らずして倒れてしまった。

『さあ、倒れてる奴を片付けようか』

待て待て待て待て。

これはどういうことだ。

私が斬ったのはせいぜい五匹程度だ。

周囲には先ほどまで私を包囲していた犬つころどもが倒れ込みみぴくぴくしている。

『さっき取ったスキルは「伝染」ってやつなんだ』

「伝染——」

病気が移るやつのことか。

『そうそう。メル姐さん伝染って言葉知ってたんだ！ 驚きだよお。

……あつ、やめて。俺、体硬いから、そっちには曲がらない！』

片足で剣の端を踏み、もう片方の足で剣の中ほどにゆっくり体重を載せていく。

『とにかく、ある一体に毒やら麻痺やらのバッドステータスがついたとき、その周囲にいるモンスターにも同じ症状を付与するんだ。周囲の詳しい範囲がわからなかったけど、思ったよりも広いみたいだね』

私が斬りかかった反対方向にいる犬も倒れている。距離にして十歩以上はあるだろう。

『さすがチートだね!』

もう何も言わない。

私がすることは、倒れている犬どもにシユウを突き刺していくだけの簡単なお仕事だけだ。

そこからは敵なしだ。

モンスターが数体出てきても、一体を斬りつければ他の敵も片付く。

さらに恐怖付与とやらも得たらしく、斬りつけたモンスターが私に背を向け逃げ出すこともあった。

『とうとうモンスターからも避けられるようになったね。真のぼっち冒険者メルの誕生である。なお、剣の才能はない模様』

うるさいな。本当にうるさい。

お前が黙るスキルはないのか。

……ないらしい。

とりあえずサクサク進める。

一太刀入れると毒、麻痺、恐怖のどれかはつく。周囲にも伝染する。あとはトラップと遠距離からの魔法に気をつけてさえいればいい。

そうして目の前には大きな扉。

特に注意書きはされていないが、雰囲気でわかる。

『ボス部屋だろうね』

私も頷く。

またしても一日足らずでボスに来てしまった。

ウラキラ洞穴よりは苦労しただろう。

それにしても早い。早すぎる。

「早すぎないだろうか」

『早くたって仕方ないだろ! 初めてだったし、気持ちよすぎて我慢できグフツ』

壁に叩き付けてやると静かになった。

なんだ。こうすれば黙るのか。
今度からこうしよう。

『ボスはミノタウロスだっけ』

「ああ。上半身が牛で下半身が人間。斧を持って襲いかかってくると聞く」

その強さは噂に聞いている。

斧の一撃で体が真つ二つになった。

体当たりで壁がめり込んだ。

力が強いという話が多い。

前衛で数人がかく乱して、後ろから魔法で攻撃が定石らしい。

さすがは中級者向けのダンジョンのボスといった話だ。

『メル姐さんは魔法が使えないし、ソロだから定石通りに戦えない。
逃げ足を重視して防御もさほど高くない。でもさ——』

当たらなければどうということはない。

その言葉に押され、ボス部屋の扉をくぐった。

ボス部屋の床はなにやら円形に大きな魔方陣が刻まれている。

魔方陣の外縁にフードを被った人が数人。

中心に向けて手を伸ばし、ぶつぶつと呪文らしきものを呟く。

その中心には男が一人。

呪文は力強く放たれた一言を最後に終わる。

外縁に立っていた人たちは消えていなくなる。

一方で、中心に立っていた男が叫び始めた。

男の服は破れ体が肥大化していく。

上半身からは毛が生え始め、顔も人の形ではなくなる。

叫び声が止まると、人外の瞳がこちらを捉えた。

男だった存在は床に置いてあつた斧を手に取る。

その斧の大きさをたるや。

人の胴よりも遙かに大きい。

あれの一撃は受けるわけにはいかない。

「でかいな……」

『ああ、なんだよあの大きさは……あれじゃマグナムどころか榴弾だ。俺も男として自信を失っちゃまうよ』

「お前は何を言ってるんだ」

『何って、ナニだけど』

「えっ?」

『えっ?』

……真面目に会話をしようとした私が馬鹿だった。

ミノタウロスは足音を大きく響かせ私に近寄ってくる。

あちらの初手は横からのなぎ払い。

防ぐことは難しいと考え、伏せることでその一撃を躲す。

そこまで速くはない。これなら大丈夫だ。

『上から来るよ』

その言葉を聞いて、上を見ると振り上げた斧が落ちてきた。身を転がしてその一撃を避ける。

斧が床に突き刺さったのか、抜くのにかかる時間がかかっている。

これを好機として近寄り、太刀を入れる。

三度目の斬撃でミノタウロスが状態を変化させた。

動きが鈍くなる。毒が入った。

その後も応酬の中で何度か切り刻む。

ミノタウロスはしばしば膝をつくが、すぐに起き上がる。

『状態異常は効くみたいだけど、快復がめっちゃ速いね。まあ、有効は有効だから動きが鈍っている間に斬りつけていけばいいかな』

シユウの言うとおおり、動きが止まっている間にミノタウロスを切り刻んでいく。

一人でも十分に戦えている。十分どころか私の方がはるかに有利な状況だ。

ときどき斧を振り回してくるので、それに注意しつつ斬っていくとミノタウロスは一際大きな叫び声をあげた。

断末魔だろう。

剣線を下げ、ほつと息を吐く。

『横に飛んでっ！ 速くっ！』

シユウは珍しく焦った声を出す。

その声に驚きながらも、足を右へと動かす。

次の瞬間、体のすぐ横を風が駆け抜けていった。

左手にだらりと下げていたシユウに何かがかすり、そのまま手から離れた。

ミノタウロスが突進をしてきたと気づいたのは、シユウが床に転がる音を聞いたあとだ。

後ろから壁にぶつかる音と瓦礫が崩れる音が聞こえてくる。

すぐさま振り向くと、ミノタウロスも私へと振り向いた。

目と目が合う。

ミノタウロスの目はまだ死んでいない。

体はぼろぼろだが、まだ戦う意志を宿している。

一方の私は目立った怪我はないが、戦う意志が消えていた。

勝ったと思っていた。

視界が暗くなる。

ああそうだ。

今の私はシユウを持っていない。

さあもなんちゃらの効果がなくなつたのだ。

色鮮やかだった視界は黒に染まる。

それでも巨体が私に近づいてきているのはわかつた。

シユウの位置もなぜかわかる。

だが、それは手が届く距離ではない。

なによりもミノタウロスのすぐ側だ。

近づくことなどできない。

巨体はすでに私の前にある。

ミノタウロスの荒い息が吹きかかってくる。

私は動かないし、動けない。

逃げろと頭の中で命令しているものの、足が地面にくっついていて
ようだ。

「ああ、あつ……」

ミノタウロスは斧を振りかぶる。

鈍い光がそうしていることを伝える。

「ひっ！」

私の悲鳴に意味はない。

斧は殺意を持って振り下ろされた。

音と衝撃が私を包んだ。

私のすぐ隣。

斧の磨かれた刀身が、私の姿を映している。

それも一瞬で斧に映る私は光とともに消えていった。

ミノタウロスも光とともに消えていく。

そこには小さな光が残る。

理解が追いつかない。

私はもう死んでいるのだろうか。

床にへたり込み、茫然としていた。

どれくらい経ったかわからないが、ようやく自分が助かったことを自覚した。

体をゆっくりと起こす。

ドロップアイテムの小さな光を無視してシユウを拾う。

『体当たりで弾かれたときに毒が入ってなかったら——死んでたのは、姐さんだったよ』

「すまない」

『謝って欲しいんじゃない。チートでナイスガイな俺がいるとはいえ、姐さんはソロ——ぼっちなんだ。相手が確実に死ぬまでは油断しちゃ駄目だよ』

「すまない……」

『でも、無事で良かったよ。一人でここに残されるのは寂しいからね。とりあえず結果オーライさ。ダンジョンクリアおめでとう』

「……………すまない」

私はシユウを固く握って、刀身に額を付ける。

刀身は冷たく、しかしどこか温かい。

シユウも困ったように小さく笑うだけで、それ以上は何も言わな

かった。

エルメルの町、周辺ダンジョンの三つ目——シルマ神殿の制覇は、私にとって苦いものとなった。

第05話 「成長止まぬゼバルダ大木 前半」

大声で歌う馬鹿を黙らせた。

『メル姐さん。もつと楽しんでいこう！　へい、GUNG—HO！』
家を出てから三週間。

こいつはずっとこんなだ。

エルメルの町付近に現時点であるダンジョンを全て制覇した私は、北にある上級ダンジョン——ゼバルダの大木に向けて出発した。

乗り合い馬車なら一週間足らずだが、私を知っている冒険者と一週間近くも一緒にいるなんて堪えられそうになかったので徒歩で行くことにした。

私は馬にも乗ることができないし、そもそも馬を買う金がない。

『さっすがメル姐さん。ぼっちの鑑だ！　そこにしびれ、いたいたいっ！　木に叩き付けないでっ！　やめてください折れてしまいます』

最初は料理やら寝場所などいろいろ戸惑っていたが、さすがに三週間も経てば慣れてきた。

そして、ようやく目標らしき風景が目映る。

一言で言えば木だ。

とても大きい木。馬鹿でかい木。本当に木か？

『あのー木、何の木？』

「ゼバルダの大木だ。忘れたのか」

珍しくシユウがまともに尋ねてきたので返答する。

前に説明したことをこいつが忘れるのは珍しい。

シユウは「気になる気になる」と連呼している。よくわからない奴だ。

さらに半日すると、木は見えなくなった。

近寄りすぎて、それが木だとわからない。それくらい大きい。

根の付近にいるが、根の一本一本がそこらの木よりもはるかに太くたくましい。

『太くてたくましいだなんて……もう、姐さんつてば。ほんと破廉恥

なんだからあ』

無視だ。無視無視。

巨大なゼバルダ大木。

これでもまだ成長過程にあるというのだから驚かされる。

ちなみに今いるのはゼバルダの町。

ダンジョンの側にできた町の典型例だ。

長居するつもりなどない。

さっさと情報収集に行く。

ギルドでお金を払って、ダンジョンの情報を得てきた。

さらに追加料金を出して、モンスターとボス情報も得た。他言は厳禁だそうだ。

『話す相手がいない私には、まるで関係ないのない警告といえる。いやみか?』

ダンジョンの入り口は初級者向け、中級者向け、上級者向けの三つ。

高度が上がるほどダンジョンのランクは高くなる。

初級者の入り口から上っていけばやがて中級にたどり着き、中級者の入り口を上っていけば上級にたどり着く仕組みらしい。

もちろん、それぞれの段階でボスが待ち受けている。

本来は初級者向けから始める必要がある。

しかし、すでに中級ダンジョンであるシルマ神殿をクリアしている私は上級者入り口から始めることができる。

さっそく上級者向けの入り口へ進もうとしたが、シユウに強く止められた。

今日は休み、ダンジョン攻略は明日からにするべきとも言おう。

さらに、まず中級者向けで様子を掴んでおくべきと勧める。

旅の疲れもあるし、モンスターの傾向も見ておいたほうがいい。そういう理由だ。

シユウにしては至極まっとうな提案である。

シルラ神殿での反省もあったため、今回は奴の建言に従うことにした。

明くる日。

私は中級者向けの入り口からダンジョンに潜った。
もちろん一人でだ。

入り口の監視員に「本当に一人で入るのか」と三度も確認された。

『いやはやあく。メル姐さんの口からぼっち宣言が聞けるとはね!』
抑えきれない笑い声が頭に響く。

監視員があまりにもしつこいため、しまいには私が叫んでしまっ
た。

『一緒に潜る仲間がいないのだ。察してくれ!』だってお! ちよ、
やめ、蹴らんとして』

中級のダンジョンはずっとこんな調子で進んでいる。

要するにさほど問題はない。

トラップはなく。視界も良好。

道は複雑そうだが、地図を買っているため迷う心配はない——と
思っていたが地図の見方がわからなかった。

今ではシユウが地図を覚えて道を教えてくれている。

『ねえねえ姐さん、ねえ姐さん。地図の読み方もわからないってどう
いうことなの。メル姐さんは剣士じゃなくても、かろうじて冒険者の
端くれにひっかかると思ってたんだけど違ったの?』

そういったものは苦手だ。

おのおのが得意分野を担当すべきだろう。

『メル姐さんの……得意、分野?』

シユウはなにやら真剣に悩んでいる。

私にだって得意分野はあるぞ。

例えば………ほら、いろいろとあるだろう。

仕方ないな。お前に言わせてやる。

言ってみろ。

待てども待てどもシユウは黙して語らず。

時間ばかりがいたずらに過ぎていった。

さて、中級でのモンスターについてだが――。

ヤモリや蜂、ムカデと虫を大きくしたものが主となっている。出てくる数は多いが、まったく問題にならない。ほぼ一振りで倒せるし、状態異常の伝染でサクサク倒れていく。相手の攻撃は毒や麻痺をこちらに与えるものらしいが、私には耐性がある。

そもそもモンスターの攻撃にほとんど当たらない。

中距離以上になると攻撃手段が乏しいため、魔法を使う敵がないというのありがたい。

注意すべきは蜘蛛の糸だ。

見えづらい上に、動きを大幅に制限される。

その上、ひっかかるとそれを探知した蜘蛛が寄ってくる。

数自体はそれほど多くないのが救いだ。

そもそも蜘蛛は上級にしか出てこなかったが、最近になって中級にも出没するようになったらしい。困ったものである。

『同じ中級でもシルラ神殿のほうがきついね。ポイントもあつちのほうがいいよ』

その意見には賛成だ。

遠距離からの魔法や犬の群れによる攻撃と比べると、こちらのモンスターへの攻撃は単調すぎる。

本来は状態異常がきついのだろうが、耐性がある私にはさして問題にならない。

『中距離以上の敵に対する攻撃手段は今後の課題だね。上に逃げられると状態異常の伝染でしか対処できないのがきつい』

その通りだが、剣士としてソロで挑む以上しかたないだろう。

それかチートとやらでどうにかならないのか。

『一応ね。チートの選択一覧に魔法はあるんだよ』

なに、魔法を使えるようになるのか。

どうして選択しない？

『ポイントがめっちゃ高くちや高いんだ。今までメル姐さんの能力プラスに注ぎ込んだポイントを、全部ひっくるめてようやく一つ選択できるってとこだね。元のメル姐さんがいかに弱いかがよくわかるで

しよ』

……それを言われると反論できないな。

『ついでだから、もう一つ言っておくよ。力や耐久力、それに動体視力が上がってるけど技量はそこまで上がってないからね』

どういうことだ。

私は強くなっているだろう。

現に敵の攻撃はほとんどくらっていかないし、相手も一撃で倒せるようになってきた。

『はあく、最初にも言ったけどさ。メル姐さんには才能がない。驚くほどない。今も目と力に頼って闇雲に振ってるだけ。モンスターが一撃で倒せるのは俺の吸収力が格段に上昇してるからってのが最大の理由。レベルを上げて物理で殴れば、の良い例だよ』

確かにお前の力が大きいことは認める。

それでも私だって出会った頃よりは良くなっているだろう。

『確かにね。最初よりは千倍マシだよ。元がゼロコンマゼロゼロゼロいくつだったから、ようやく平凡に並べたってところかな。でも、ほぼ同じ力を持った剣士と戦ったら確実に負けるよ。瞬殺だよ。まあ、今のメル姐さんと同じ力を持った人間なんてほとんどいないだろうがね』

以前から不思議だったが、どうして才能の有無がお前にわかる。

お前は元の世界では剣士をしていたのか？

『まさか！ 俺はただの派遣労働者。しかも違法な日雇い派遣。職種もお掃除を専門にしてたね。汚れを処理して世の人が安心して暮らせる環境を作るのが俺のお仕事でしたよ』

言い方を変えるとただの小間使いだろう。

そんな奴に私の技量云々を言われたくない。

……それにしても今日はえらくまともだな。

いつも以上に気持ちが悪いぞ。

『メル姐さん、気づいてないでしょ。後ろをずっとつけてるやつがいるよ。それにすら気づかないから、姐さんには才能がないって言ってるの。おわかり？』

ちょうど曲がり角を過ぎたところで、シユウがそう言った。
足を止める。

「なに？」

『ダンジョンに入ってからほぼずつとだよ。すぐ来るだろうから、ここで静かに待っててごらん。いちおう俺を構えておいてね』

シユウの言葉を全面的に信じる訳ではない。

しかし、気になることはたしかだ。

足を止めシユウを構え、息をひそめて立ち尽くす。

わずかな物音が聞こえ、

「うわっ、うわわわわっ！」

愉快的な叫び声とともに人影が虚空から現れた。

私だつて驚きだ。ほんとにいるとは思わなかった。

しかも、姿がいきなり出てきた。

「ごっ、ごめんささい。悪気はないんです。だから命だけは！」

『あっ！この耳つてもしかして、エルフってやつ!?!』

シユウの声が弾んでいる。

奴の言うとおりの少女の耳は長く、尖っている。

顔も色白で線が細い。

ハーフか純血かはわからないが、エルフの血が混ざっていることに
違いはない。

見た目では十代半ばだが、エルフとなるとそれも当てにならない。

彼らは我々よりもはるかに長生きだ。

そんなエルフの少女は目に涙を溜めて謝る。

たしかにシユウ——剣先は追跡者の喉もとに添えられている。

「どうして私を追っていた。盗賊か？」

できるだけ声を低くして問いかける。

冒険者を後ろから刺して、お金を奪う人間もこの世には存在する。

自分で問いかけておいてなんだが、この少女は盗賊ではないだろ
う。

少女の手に持つ武器は杖。

体格もやせぎすで、ローブを頭から被っている。

おそらく魔法使い。

「ち、違います違います。私は魔法使いのアイラといいます。盗賊なんじゃありません」

『メル姐さんもさ。せっせと汗水流して小銭を稼いでたゴブリンを後ろから串刺しにして自分のものにしてたじゃん。あれは盗賊って言わないの？ それにさ。「盗賊か」って尋ねて、「はい盗賊です」っていう奴がいるの？ ばっかだなあ』

「うるさいぞ。黙っていろ」

「ひいつ。ごめんなさい」

そうか、シユウの声は聞こえていないのか。

ええい、話が進展しない。

しばらく奴は無視しよう。

「盗賊じゃないならお前は どうして私のあとを追っていた。ずっと後ろをついてきていただろう」

「姿は消していたと思っていたんですが……。さすがソロで潜るかたは違いますね！」

少女の瞳がなにやらきらきらと私を見上げてくる。

いや、姿は私にもまったく見えなかった。

シユウはどうやって気づいたんだ。

『遠回しに「貴方はプロのぼっちですわね！」って嘲笑してるぜ、このアマ。シメ上げて身ぐるみ剥いじやおうよ』

いつちいちうるさいな。

お前は女の裸が見たいだけだろう。

『なぜばれたし』

「……それで、どうして後ろをついてきていた？」

「す、すみません。実はつい先日パーティーから閉め出されてギルドでも他のパーティーに入れてもらえなくて」

「魔法使いなら引く手は多いだろう」

魔法は遠距離から攻撃でき、威力も高いものが多い。

パーティーに一人は欲しい存在だ。

しかし、魔法使いの絶対数は少ない。

そのための需要がないということはありません。

『剣をまともに振れない無能な剣士とは違うのだ』

仲間に入れてもらえないとは考えづらい。

……あとで覚えていろよ。

「いやあく、その、いろいろと事情がありました」

事情、か。

私にもいろいろと事情があった。

自身を鑑みて、彼女の事情については聞かないことにした。

「けつきよく、どうして私の後を？」

「入ってきたパーティーをこっさり追いかけて、ピンチになったところを私の魔法で助ければ仲間に入れてもらえると考えまして。そうしたら、ちよどうぞソロで挑もうとする間抜けな剣士が来たではありませんか。そこでピンチになるところを待っていたのですが……」

「想像以上に強かった、と？」

「はい。お強いですね。強すぎますよ。私は悪くありません」

アイラと名乗る少女は開き直り始めた。

『この子、胸はなさそうだけどユーモアがありそうだよ』

ユーモアなんていらない。

「どうしたものかな？」

ことさらに声に出す。

口やかましい相棒（暫定）の意見を聞いてやらんこともない。

「いっしょに行きましょう！ こう見えて私……すごいんですよ」

アイラは自分に言われたと勘違いしたのか、必死にアピールしてくる。

どうしてウインクするんだ。

『ほう。では、まず邪魔なローブを脱いで——』

「それでは魔法をみせてもらおうか。なにができる？」

シュウの声を遮って、アイラに尋ねる。

「基本である火・水・土・風の四元素。複合である雷・氷。高度である光だっ使用することができます。ちなみにさつき使っていたのは光と風の混合魔法で私のオリジナル——アイラオリジナルです。姿と音、

さらに臭いさえ消すんです。強くしすぎると肉体も消えちゃいますけどね」

アイラはふふんと鼻を鳴らす。

最後のは自慢じゃないだろ。

『よくわからないけど、なんだかすごそうだね』

すごいなんてもんじゃない。

基本の四元素が全て使えるだけで、どのパーティーからも誘われる。

それに複合や高度まで使えるなら中級者なんてレベルではない。

その話が本当なら多少の問題があってもパーティーに誘われる。

つまり、アイラの話は嘘か、それを上回るほどの問題がある。

『あるいは本当にただの盗賊か、だね』

当然ながら信じられん。

「とりあえず一つ見せてもらおうか」

「ええ、一発すごいのをやって差し上げましょう」

『えっ！一発やらせてくれるの！しかもすごいのを!?!』

空耳だ。

ここには私とアイラしかない。

背後を振り返る。

奥に見える壁の上に蜘蛛がいた。

焦がれるほどの熱い視線を私たちに送ってきている。

「あの奥の壁。あそこだ。蜘蛛がいるだろう。あれを仕留めて見せろ。そうだな、氷の魔法を使ってくれ」

「いいでしょう。詠唱中はよろしくお願いしますよ」

頷いておく。

よろしくというのは守れということ。

魔法使いは詠唱中無防備になる。

前衛に立ち敵の注意を逸らすのが剣士の役割だ。

私の剣が喉もとから外れると、アイラは杖を構える。

〈現世にある熱は常に移ろい変わりゆく――〉

彼女の口からゆつくりとした言葉が紡がれていく。

『おお、なんか本格的だね』

シユウの声が楽しげだ。

私も魔法を間近で見るのは久しぶり。

実を言うと少々楽しみである。

〈全て大気に存在する水は今にもその形態を異にする――〉

↑――然して、熱の具象である火は……

一分が過ぎただろうか。

アイラはまだ詠唱を続けている。

『詠唱って、こんなに長いものなの?』

かぶりを振る。

以前に見たときはここまで長くなかった。

複合魔術は時間がかかるのかもしれない。

……さらに二分。

↑――万物悉く氷結せよ!――

ようやく唱え終わったらしい。

途中からシユウを蹴って時間を潰していた。

青白い、指先程度の微かな光がアイラの杖の先から出てくる。

『えっ!・ええええ!・あれだけ唱えて出てくるのそれっぽっち!?

俺のジュニアだってもうちよつとたくさんどぴゅどぴゅって出せる

よ!』

前半部分には私も共感せざるを得ない。

あんなにも時間をかけて、出てくるのが小さな光ひとつでは話にな

らない。

「見てください」

『白くて細い女の子らしい指だね』

はいはい、そうだね。

それ、遠回しに私の指が女らしくないと言っていないか。

『いやだなあ、曲解しすぎだよ』

それと見るのは指じゃなくて光な。

いい加減にしておけよ。

淡く今にも光は蜘蛛の方へほわわんと飛んでいき。

蜘蛛を外して壁にぶつかつた。

パリンツ！

小さな光は大きな音をたてて割れた。

「凍っちゃえー！」

アイラの叫びを合図に漂着点である壁の一部が白くなり、その白はすさまじい速さで壁を塗りつぶしていく。

壁にくつついていた蜘蛛も白に潰され、粉々になって消えていく。

「おおっ！」

『いやああ！ らめえええ！ 白くて濃いのが視界を覆ってくうううう！』

私は歓喜の声をあげる。シュウのは知らん。

アイラは目を細めて、どやあつと私を見てくる。

たしかにすごい、が、奥から白い景色が床と壁を伝ってこちらに迫ってくる。

『姐さん。逃げ……』

アイラを置いて、迫り来る白に背を向ける。

そのまま元来た道を颯爽と駆け抜けた。

私は今、風になつていいるのではないだろうか。

振り返ると曲がり角を超えてまで白銀は迫ってきたが、ようやく勢いを止めた。

アイラの姿はない。

彼女は、私が逃げる直前に後ろを振り向いて悲鳴を上げていた。

『それが私の聞いた——彼女の、最期の声だった』

殺してやるな。

引き返すぞ。

『メル姐さんは才能がまったくないって言ったけど、一つあったのを忘れてた。その逃げ足は冗談抜きで素晴らしいよ』

シュウの声は今日聞いた中で一番マジメなものだった。

氷の彫刻。

アイラの現状だ。

上から下まで真っ白に凍り付き、呼吸も止まっていた。

シユウの言うとおりに処置していくと、なんとか息を取り戻した。

『復活ッ！ アイラ復活ッ！』

シユウが叫んでいたが、私だつて叫びたい。

知り合つてすぐに死なれては寝覚めが悪いからな。

「し、死ぬふあと、思ひますた……」

アイラは横になったまま眩く。

シユウの話じゃお前。

仮死状態とかいうやつだつたらしいぞ。

人間なら死んでたとも話していた。

『この子がなんでパーティーに誘われないか、よくわかつたね』

あまりにも長すぎる詠唱。

自分自身を巻き込むほどの馬鹿威力。

魔法の欠点が浮き彫りになっている。

そりゃいやならいだらう。

せめて――、

「詠唱を短縮することはできないのか」

「できません——できませんが、それは邪道です！ 魔法の本質は元来導

き出される結果ではなく、その過程である詠唱にあるのです。詠唱が

正確ならば詠唱に準ずる結果が出るのは至極当然の道理。詠唱の短

縮は確かに戦闘で有利ですが、それは魔法への——ひいては魔法を作

り上げてきた故人たち。さらには世界への冒瀆です！ 実践派の奴

らはそれをまるでわかつていない。むやみやたらに速さばかりを売

りにして——」

アイラは上体をむくりと起こし、数分に及び口を動かし続けた。

私が切り上げなければ、さらに続いていたに違いない。

『ピンチになったパーティーを助けて、とか話してたけど詠唱が長

すぎて助ける前に死んじゃうよね。魔法を放てたとしてもこの子が

トドメさしちゃうよ。まあ、どっちにしろこの子じゃパーティーは組め

ないね。ただの置物になっちゃう』

結論は出た。

「残念だが今回は縁がなかったということ——」

アイラに背を向けて歩き始める。

時間を無駄に消費してしまった。

今日中に中級をクリアして、上級の様子も見ておきたい。

さっさと進もう。

「待って！…待ってください！」

後ろからカサカサカサと蠢く音。

モンスターかと思いい、慌ててシユウを向ける。

そのシユウもやすやすとかいくぐり、ローブから伸ばされた手が私の胸に回る。

「見しゅてないで！…この上級をクリアして、アイテムを持って帰らにやいとお家に入れてもらえないんでしゅう！」

アイラは泣き顔を私のお腹にこすりつけてくる。

『すごい動きだったね……。この子、姐さんよりもよっぽど才能があるよ。それにしても、くそつ！うらやましい。俺もメル姐さんの腹筋にほつぺたすりすりしたい！』

ああもう、うっとうしい。

きつとそのうち奇特な奴らがパーティーに入れてくれるはず。

それにだ。

「どうしても上を目指すなら詠唱短縮をすればいい。できないわけはないんだろう」

「だめです！…それは私のポリスィーに反します！」

ぽりしいってなんだ？

シユウが二人に増えた気分だ。

しかも、こっちは肉体的に干渉してくるからもつとタチが悪い。

「私このままじゃ上級どころか中級で死んじやいます。お家に帰りたいですう」

アイラはさめぎめと涙を流し始めた。

早く事情を聞いてくださいよと、ちらちら涙目で訴えてきている。

『あざとい。実にあざとい。だが、それがいい』

事情、聞かないといけないのか……。置いていきたくないんだが。とりあえず、このまま胴に巻き付かれているとやつかいだ。

「いったいなにがあったんだー」

『すっごいぼうよみだねー』

言われなくてもわかっている。

どうしてこんな茶番を演じなければならぬ。

「よくぞ聞いてくれましたー！」

アイラは語り出した。

語るに語った。

あまりにも長いため途中からシユウを踏んで遊んでいた。

『要するにさ。書庫に引きこもって本ばかり読んでる碌でなしの甲斐性なしだから、親御さんに追い出されたってことだよね』

そういうことらしい。

「三十年ぼっち引きこもってたからって追い出すことないでしょうに」

三十年ものの引きこもり……。

さすがエルフと言うべきか。

ちなみに御年百五十二歳らしい。桁が一つ違う。

『三十年あれば俺の世界でも魔法を使える人が出てくるからね。むこうでは魔法少女に憧れるのに、こっちは魔法少女が呆れられるんだ。……少女って歳でもないか。こっちでもそのへんは同じなんだねえ。なんだかなあ』

シユウもしみじみと回想にふけている。

さて、どうしたものか。

意見を求めてシユウを見る。

『こういうときだけ意見をねだるのって、卑怯だと思うわ。これだから女って……』

気色悪いこと言っていないで、さっさとチートやらでなんとかしろ。

卑怯はお前の得意分野だろう。

『チートな手段があるっちゃあるよ』

ほうらみろ。やっぱりあるじゃないか。

早く言え。

『いやね、チートの選択一覧にき。スキル一部共有とパーティー専用スキルがあるんだ。ずっと前からあつたつちやあつただけだ、姐さんロンリーウルフ——失礼、ただの涙ぐましいぼっちだったからね。俺もそのあたりをきちんとして察して話をしなかつたんだよ。その中に問題を解決しうるスキルがある』

なんで言い直した。

しかも言い直した方がよっぽど失礼なんだが。

まあ、いい。

そうか。なんとかなりそうか。

それなら——、

「一緒に行つてみるか?」

アイラは目をぱちぱちさせている。

聞こえてなかつただろうか。

「ついて来るかと聞いたんだ」

アイラは口をぱくぱくさせ、目を輝かせる。

「はい! 一生ついていきます!」

やめろ。上級まででいい。

それと腹に頬をこすりつけるな。

『さすが姐さん。あつという間に雌豚一匹を飼い慣らしちやつたね!

それにしても逃げ足が取り柄のぼっちと魔法オタなヒツキーの組み合わせとは、ぷぷっ』

こうして、私は数年ぶりにパーティーを組むことに……ならなかつた。

パーティーは組めなかつた。

私がパーティーリングを持っていなかったためだ。

パーティーの結成にはギルドから提供される指輪が必要となる。

この私がかまかパーティーを組むなど、ここ数年想定すらしていなかったためリングをどこに置いたか全く記憶にない。

机の引き出しの中だろうか。

いや、引き出しには思い出の品しか入れていないな。

『机の引き出しってさ。……空っぽだった、よね』
馬鹿言え。

そんなわけないだろうが。

くそ……おかしいな。はつきり思い出せないぞ。

まあいい。まあいいさ。

仮に百歩譲って机の引き出しが空だとしてもだ。

それでも目を瞑れば楽しい思い出がありありと浮かんでくる。

……………あれ？

なぜだ。おかしいぞ。どうして真つ暗なんだ！

知らず知らず頬を生暖かいものがこぼれていく。

私には、思い出が。楽しい思い出が――、

『もういい！ もういいんだ！ もういいんだよ、メル姐さん。つらい過去を無理に振り返ろうとする必要なんてない。大切なのは未来。もつと先を見ていこう。ほら、ゆっくりでいいから目を開けて。そこに、姐さんと一緒に行きたいっていう頭のネジがイカれちゃったファンキーな奴がいるよ。可哀想な人って目でどうしようもないほど馬鹿な姐さんを見るけどね』

踏みつけてやった。

なぜだか喜んでいる。本気で気持ち悪い。

リングはギルドでお金を払えば再発行してもらえるらしい。

このまま進めばボスで共闘ができない。

片方が扉の前に取り残されてしまう。

しようがないので引き返すことにした。

ギルドでパーティーリングを発行してもらい、中級者向け入り口の前に再度やって来た。

ここでもギルドに入ると嘲りに包まれたため、すぐ離れることにした。

私は慣れているため問題なかったが、アイラは私に謝り続けた。

嘲りの対象が私ではなくアイラだったからだ。

「大丈夫だ、嘲りなど問題ない。すぐに声すらかけられなくなるから

な」

アイラは首を傾げていた。

「どうやらまだわかっていないらしい。

嘲りは恐怖に変わり、ついには存在を許容できなくなる。

私もシルマ神殿をクリアした後にギルドを訪れると、誰も目を向けてこなかった。

「それどころか、私が外に出るまで終始、みな無言だ。

彼女もきつとすぐに思い知ることになるだろう。

リングを指に嵌め、アイラの嵌めているリングと合わせる。

リングは小さく煌めき、パーティー登録がされた。

『なんか地味だね。ああつ、姐さん。このスキル一覧すごいよお！

さすが神様からの贈り物！パーティー用のスキルが大量に選択できるようになってるう！』

「なんですか、今の声……」

えっ、と口から漏らしてアイラを見ると、彼女は不安そうな顔で私を見る。

「聞こえて、いるのか？」

『もしかしてアイラちゃんにも俺の声が聞こえちゃってるう？ 興奮

してきたね。俺だよ、俺、俺。わかるでしょ。姐さんが手に持つてる

たくましい一物。それが俺だよ。ワイルドだろお』

シユウを足で黙らせる。

さてどこから説明したものか。

そもそも説明してもよいのだろうか。

「すごいです！ 剣の中に人の意志を収めるなんて。それに神の存在

！ やはりこの世界には創造主がいたんですね！ 世界の真理にた

どり着けそうです！」

これまでの経緯を束ねて簡単に説明したところ、アイラは思ったよりもすんなり受け入れた。

テンションが異常に高い。暴走している。

「二人でぶつぶつしゃべったり。いきなり泣き出したり。剣を壁に叩

き付けたり踏んだりして。やることなすこと気持ち悪くて危ない人だと思ってたんですけど、こういう事情があったんですかあー！」

おい待てよ、引きこもり。それは初耳だぞ。

私はそんな風に見られていたのか。

『いやあ、アイラさんは話が早くて助かるなあ。どつかの逃げ足馬鹿も見習って欲しいくらいだよお。ほうら触ってごらん、コスってごらん……おっと、やさしくねえ。僕ちゃんも真理にたどり着いちやうぞお』

この馬鹿も暴走している。

先ほどから私をそっちのけでシュウとアイラは会話をしている。

「さっさとダンジョンに潜るぞ馬鹿ども」

ここは中級者向け入り口の前。

先ほどから冒険者たちの視線が痛い。ひりひりする。

普段は目を向けられないから、肌が視線に弱いのだ。

改めてチートとやらの力を思い知った。

私ほどではないが、チートの効果がアイラにも一部共有されているらしい。

毒や麻痺の耐性といったものが彼女にもついたそうだ。

魔法使い用の効果も供与された。

一つは、

『高速詠唱であるっー！』

私にはまったく関係ない効果だが、アイラの詠唱が爆発的に加速した。

もはや何を言っているのか聞き取れない。

もう一つが、

『なるほど詠唱一時中断とはこういうものか』

詠唱を途中で止め、続きから詠めば発動できるようになった。

なんだかすごいことらしい。

アイラは理論的にあり得ないんですと興奮し、詠唱理論の基礎の基礎とやらから話を始めた。

無論、私は理解する気などないため右から左に聞き流す。

そして、極めつけがパーティー用のスキル——同士討ち無効。アイラの攻撃魔法が私に効かなくなった。

どんな強い攻撃魔法をぶっぱなされても私には効果がない。

本人にも効かないおまけつきらしい。

「フヒヒヒヒッ！ 我が世の春が、キター！ 時代が私に追いついたあ！」

ハア……。

ため息が抑えられない。

うるさくてキモイのがまた一人増えてしまった。

重要なのはパーティーを組んだ結果どうなったかだ。

中級ダンジョン道中は元から問題がない。

——ボス戦。

そう、ボス戦でパーティーの効果は顕著だった。

ボスはギルドで聞いていたとおり、大きなヤモリ。

私一人でもさほど問題はなかっただろう。時間をかければ倒せた。

今、ボスのヤモリは光に消えドロップアイテムが残る。

一撃……。

一撃だった。

部屋に入っつてすぐにアイラは呪文を唱え始め、ボスが上から落ちてくる前には呪文を完成させていた。

↑——有象無象よ！ 一片も余すことなく灰燼に帰せ！↓

ボスの出現とともにそう告げた。

前に見た景色と同様に杖の先端から小さな赤い光が出てきた。

「燃え上がれ！」

光はボスのヤモリにびとりとくつつくと、急激に赤く膨らんだ。

熱球のはずだが同士討ち無効のためか熱さはない。

見た目が暑苦しい。それくらいだ。

赤い光が収まると、ヤモリの胴体が球形に抉られていた。

まさに跡形もない。

残った頭と尻尾も光とともに消えていき、ドロップアイテムだけが

ぽつりと転がっている。

『俺も燃え尽きたいな。ねえ、メル姐さん。今夜は一緒にハツスルしようよ！』

「私の魔法で全てを破壊し尽くして、とつととお家に帰るのデス！」
ボスとはいったいなんだったのか。

こうして私たちは上級へ歩を進めることと相成った。

第06話 「成長止まぬゼバルダ大木 後半」

蜘蛛、蜘蛛、蜘蛛。

見渡す限りに蠢く大量の蜘蛛。

牙を鳴らし、毛深い足を忙しく動かす蜘蛛。

勢いよく糸を吐き、動きを鈍らせてくる蜘蛛。

そんな蜘蛛たちがアイラの魔法で一掃された。

「フハハ。見てください。蜘蛛どもがゴミのようですよ！」

『溜まってたものが出尽くしてスッキリ！ もう空っぽで何も出ないよお。アイラたん、また今度もよろしくね』

一人と一振りの叫びが響き渡る。

頭痛に効く薬をあつで煎じてもらおう。

ゼバルダの大木。

中級ダンジョンのなんだかヤモリなボスを一撃で屠った私たち。

その勢いは止まることを知らず、一気に上級へと踏み込んだ。

されど今日はもういい時間だ。軽く見るだけ。

本格的な攻略は明日から。

今までも軽く見るだけのつもりでボスまで行ってしまったことが二回あった。

しかし、今回は本当に見るだけにとどめる。

——はずだった。

まあ、なんとなくそうなるんじゃないかとは思っていた。

意味はなくても必要もない言い訳になるが、ソロなら見るだけになったはずだ。

ダンジョンの傾向は下の中級とさして変わらない。

敵の種類が変わっただけだ。

中級で要注意だった蜘蛛が上級ではメインとなり、その数が圧倒的に増えた。

数、耐久力、糸による拘束とかなり面倒だ。

私は耐性があるため気にならないが、糸と牙に毒と麻痺も兼ね備え

ている。

攻撃も糸が絡んだところを見計らってしてくる上に、一体ではまず襲いかかってこない。

緻密に私たちを取り囲み、自分たちの狩り場に誘い込んでから仕掛けてくる。

蜘蛛は私が思っているよりも賢い生き物だったようだ。

『まじめな話。メル姐さんよりも蜘蛛の方がずっと賢い、ヒィ、ヒャアー!』

蜘蛛の糸で刀身をぐるぐる巻いてやると、シユウは金切り声をあげて喜んでくれた。

そんなに喜んでくれると私も嬉しい。

もつとしてやろう。

話を戻そう。

蜘蛛たちはその賢さが仇となった。

私たちを取り囲んだところで、アイラの一時停止していた魔法が炸裂した。

先のボス戦で見せてもらった炎の魔法が私たちを中心にして放たれた。

『二千エックス年。世界は魔法の炎に包まれた！ 蜘蛛の糸は溶け、糸を吐き出した蜘蛛どもは蒸発し、あらゆる生命体は殲滅されたかに見えた。しかし、ぼっちとヒツキーは死滅していなかった!』

そんな私たちに力を与えたチートが全部悪い。

『——などと供述しており、彼女たちの責任能力を疑問視する声も上がっています。なお、厚○労○省はこのような現状を重く見て。ヒツキーに対しては、先日から行われている家庭からの追放を中心とした——ブートアウト型の支援をより強化していくと本日の会見で発表しました。一方、ぼっちに対しては未だ対応が検討すらなされておらず。本人の自発的な意志が欠けていると言うにとどめています。この問題について専門家の意見を伺うため、本日はぼっちの第一人者であり自称冒険者のメルさんにお越し頂いています。さっそくですが、メルさん。この問題をいつたいいのようにお考えでしょうか?』

——クソ喰らえだ。

蜘蛛たちはもはや糸一本さえ残っていない。

シユウとアイラは喜び、はしゃいでいる。

さすがエルフというべきか魔力容量が人間とは比べものにならないほど大きいらしい。

人間なら一日に一発が限度な魔法も惜しむことなく撃っている。

しかも一晩寝れば回復するというすぐれものだ。

スキルも増えた。

恐怖と盲目、それにサイレントの耐性が加わったらしい。

サイレント耐性——私にはあまり関係ないが、魔法使いのアイラがいるのなら詠唱を封じられるサイレントへの耐性がつくことは重要だろう。

まあ、耐性がついたところでこのダンジョンでサイレントを使う敵はいないのだが。

さらに盲目付与、恐怖付与確率上昇も得たそうだ。

得たスキルはそのくらいだ。

特殊なスキルはポイントが足りないらしい。

敵の種類も中級と変わらないし、魔法の支援により私が斬る回数も減った。

ポイントの入手が少なくても仕方ない。

ちなみにパーティーメンバーが撃退した分のポイントも加算されるようだ。

それでも直接斬った方がポイントの上昇量はずっと大きいとシユウは話す。

なにより味が堪能できないと文句を言っている。

さて、恒例のパターンになってしまったが目の前にはボス部屋だ。ボス情報もギルドで購入済み。

体調も問題ない。

対策もチートと魔法があればなんとでもなる。

「さあさあ、行きましょう！ サクッと倒してお家に帰りませう！」

アイラは私の返事も待たず、ボス部屋に入ってしまった。

「よし行くぞ」

ちよつと待つてみたが、シユウから返事がない。

そういえば上級に入ってからシユウはあまり話をしていない。

どうかしたのか。もしかして蜘蛛が嫌いなのか。

蜘蛛の糸で普通にわめいていたよな。

『このダンジョンだけどき。ちよつと簡単すぎない？』

おや、こいつのほうがダンジョンの難易に疑問に持つとは珍しい。

それよりも蜘蛛が嫌いなことは否定しないんだな。覚えておこう。

ダンジョンが簡単？

いいことじゃないか。

それだけ私たちが強くなったということだ。

私一人ならもつときつかった。

パーティーを組めばこんなものだろう。

『本当にそれだけかなあ』

それはチートとやらがあるからだろう。

チートでアイラも魔法の欠点が消え去っている。

『それは……そうなんだけどね』

煮え切らないな。

思うところがあるなら言ってみろ。

『このダンジョンは中級がいいところだよ。敵の強さも、入手できる

ポイントも中級。ちなみにさつきクリアした中級ダンジョンのポイ

ントに至つては初級並だ』

確かに敵も中級とさほど変わらない。

それでもギルドはここを上級と定めている。

だから、このダンジョンは上級だ。

『それは形式的な話だよ。ギルドの格付けは間違つてると思うね。も

しくは——』

「メルさあーん！ まだですか。早く来てくださいよ」

扉の奥からアイラの声が響いてくる。

これ以上、待たせる訳にもいかない。

話の続きはまた後にしよう。

『……うん。そうだね。じゃあ、メル姐さん。張り切って行ってみよう！』

じゃっかん後ろ髪を引かれつつもボス部屋をくぐった。

部屋中に張られた蜘蛛の巣と蜘蛛が一匹。

道中の蜘蛛よりも一際大きなものだ。

だが、ボスはこの蜘蛛ではない。

蜘蛛の腹に一刀の鎌が突き刺さっている。

鎌が引き抜かれると蜘蛛は淡い光を残して消え去った。

蜘蛛の姿が消えたことで鎌の持ち主があらわとなる。

逆三角形の頭に大きな真つ黒な目が一對。

体を支える六本の足。そのうちの前脚の二本は鎌状になっている。

その鋭さは蜘蛛を貫いていたことからもどれほどのものかわかる

だろう。

さらにその背には長細く曲線状の翅を携える。

全身は燃えるような赤を帯びている。

——クモキリカマキリ。

こいつがこのゼバルダ大木の上級におけるボスとなる。

「焼き払いますー！」

アイラが叫ぶ。

焼き払う対象はボスではなく、蜘蛛の糸。

初めにいた蜘蛛はボスの鎌で死ぬが、糸は残り続ける。

ボスのクモキリカマキリは蜘蛛の糸がくつつかない。

そのうえ、前脚に備わった鎌は蜘蛛の糸をやすやすと切断する。

ゆえにここの蜘蛛の天敵となる。

一方で私たちは当然、糸にくつつき動きを制限される。

私一人では非常に不利な戦いになることと予想していた。

しかしだ。

パーティーを組んだことで、今回は定石通りの戦法が使える。

まずは蜘蛛の糸を焼き払う。

戦場を広げると同時に、動きの制限を取り払う。

詠唱中のアイラへの攻撃を逸らすためカマキリにシユウを構え近寄る。

蜘蛛の糸を腕と足に絡ませながらも、振り下ろされるカマキリの鎌をシユウで防ぐ。

『ちよっ！ マジ痛いからっ！ なんで正面から受けるの！ 受け流すとか……ごめん。そんな技量なかったね』

シユウの叫び声が頭に響き、しまいには謝られた。

こちらはシユウ一本だが、相手は左右に二本。

なんとかやれてはいるが防戦一方だ。

ええい、チートで増えることはできないのか。

『ほう。増えて欲しい、と。そういうプレイがお望みですか？』

やっばりいい。

これ以上うるさくなられたらたまらん。

「——燃えちやえー！」

アイラの詠唱が終わり、部屋中に熱球がまかれた。

蜘蛛の巣が溶けて消える。

カマキリは炎に耐性があるようで、炎の中でも平然としている。

「次の詠唱いきますよー！」

『一番良いのを頼むー！』

アイラは今度こそカマキリへの攻撃魔法を唱えていく。

弱点と言われているのは氷。

以前に見せてもらったことのある氷魔法だ。

次こそは彼女自身ではなく、ボスを凍り漬けにしてやって欲しい。

『姐さん、跳ぶみたいよ』

クモキリカマキリ。

その背につく翅は飾りではない。

飛び回ることではできないが、飛び跳ね着地点を調整することができると聞く。

そして、クモキリカマキリ最大の弱点は着地だ。

体が大きいことと足を四本しか使わないことから着地に大きな隙

が生じる。

さらにだ――、

『今っ！』

飛び跳ねる瞬間もわずかに隙がある。

シユウの合図を聞いて剣を薙ぐ。

大きな手応えはないが、確かに当たった。

『だいぶ遅いけど、姐さんにしては及第点だよ』

どんなに遅かろうが、結果的に当たればよかろうなのだ。

カマキリは私とアイラのほぼ中間地点に着地した。

魔法使いのアイラを狙って跳んだのだろうか、足を斬られたことで跳躍が足りなくなったのだろう。

さらに足に傷を負ったため、着地も乱れ体勢が大きく崩れている。

『早く後ろから斬るか刺すかしてっ！ 姐さんの体が……遺伝子が覚えてるでしょ！』

わざわざ言われなくてもわかっている。

この距離は、初心者森で私が慣れ親しんだものだ。

相手の背後を狙って、確実に当ててみせる。

後ろから、まず一刺し。

カマキリに状態異常が入り、動きが鈍る。

シユウを引き抜いてさらに一太刀。

すぐに快復してしまうが、快復するころにはまた次の状態異常が入る。

カマキリは飛び跳ねて逃げようとしているものの、足の負傷と状態異常でうまく力がいらないため、ただの屈伸運動になっている。

シユウを振るい、カマキリの足を斬り落とす。

「――凍れ！」

詠唱が終わり、アイラの魔法が発動する。

小さな光がカマキリの足下に漂着した。

前回見たときと同様に着地点から氷結が広がっていく。

カマキリは動けず逃げることなどできない。

私は逃げなくても影響がない。チートのおかげだ。

目の前のカマキリだけが白く硬く凍り付く。
そんな氷像にシユウを突き立てる。

『うくん。シャーベットとは洒落込んでるねえ』

シユウのしみじみとした声。

どうやらご満悦のようだ。

そういえばこいつが直接ボスを食べるのは久しぶりだな。

カマキリは砕け散り、ドロップアイテムの小さな光が二つほど残る。

「やりました。やりましたよっ！ メルさんっ！」

走り寄ってきたアイラが私にしがみつく。

『ねえ、俺はー。俺も間に挟んでよ！ 一緒に勝利の快感を分かち合おうよっ！』

アイラはすぐに私から離れ、ドロップアイテムに手を伸ばす。

現金なものだ。わかりやすくていい。

「これでお家に帰って世界の真理を探求できますー！」

どうやら帰っても、またひきこもるつもりらしい。

それも彼女の自由。私が口を出すことではない。

私も余った方のドロップアイテムに手を伸ばす。

クモキリカマキリの円らな複眼——ギルドから聞いていた通りのものだ。

よし。これで一つ目。

あと二つ上級ダンジョンを制覇すれば、超上級ダンジョンの入場許可が手に入る。

次は西に広がるフランデナ草原が順当だろう。

『メル姐さん。それは間違ってると思うよ』

なに。どういうことだ。

次はフランデナ草原に行くつもりだぞ。

それが一番手っ取り早い。

『ぶっぶく。違うね。手っ取り早さを優先するなら、次はフランデナ草原じゃないよ。さてさて、メル姐さん。さっきの話——ダンジョンが簡単すぎるって話の続きだけどさ。鳥頭のメル姐さんはまだ覚え

てるかな?』

うん……?」

「……………あつ、ああ、そんな話もしたな。覚えているとも。」

「そんなすぐに忘れる訳がないだろう。」

「だが、とりあえずだ。ここを出てからにしないか。」

「お前はボスを食べて満足かもしれないが、私はお腹が空いている。食べてからでも遅くないだろう。」

「それからゆっくり話し合おう。」

『遅くないっちゃ、遅くないんだけど二度手間だからね。ここで話して見せたほうがいい。ほら、アイラたんも一緒にお話ししよう。とつて食べたりしないからこつちにおいで』

「見るとアイラは私たちの話などまったく聞いていない。」

「うへへ。昼まで寝て、ご飯を食べて、本を読んで、また食べて——あれ?」

「陽気な彼女は手に持ったアイテムをジッと見つめると言葉を切つた。」

「穴があくほどアイテムを凝視している。」

「うん? どうかしたのか?」

「メルさんのドロップアイテムが『しゃきしゃきしたゼバルダの葉っぱ』ですか?」

「何を言っているんだ。」

「パーティーなんだからドロップアイテムは同じ……だよな?」

「数年以上もパーティーを組んでないからはっきりと言い切る自信がない。」

「とにかく私のドロップは「クモキリカマキリの円らな複眼」だ。」

「アイラは信じられないらしく、私の手元を覗き込んできた。」

「えっ?…なんで?…どうして?」

「なにか問題があるのか。」

「これで家に帰れるじゃないか。」

「いやいやいや、おかしいです。ゼバルダのクリアアイテムは『しゃき

しやきしたゼバルダの葉っぱ』と昔から決まっています」
そんなの知らないぞ。

昔というのは何十年前の話だ。

なんと六十年前でした。

私の両親もまだ生まれていない。

どうやら親御さんに指定されたアイテムがそのおいしそうな葉っぱらしい。

『お家に帰ることのできない可哀想なアイラたん。優しいおじちゃん
が道を示してあげよう。上を見てごらん』

シユウの言葉を受けてアイラは上を見つめる。

私もつられて見上げる。

もちろんそこに空はない。

あるのは木目の走る天井。

そして、先の戦闘で燃え尽きていない蜘蛛の巣。

……いや、違う。

色がよく似ているが、あれは蜘蛛の巣ではない。

——繭だ。

ややくすんだ白っぽい繭が天井にくつついている。

『やっぱりここは実質的に中級だよ』

「そんな、うそ——」

信じられないとアイラが手で口元を覆い隠す。

『うわっ……メル姐さんの才能、なさすぎ……？　つてのは置いといて。悲しきかな、中級に成り下がっちゃったんだね』

アイラはいきなり詠唱を始める。

杖から生じた赤き光は繭にたどり着き、繭を抉り……取らなかつた。

繭は依然としてそこに有り続ける。

ただし、もぞもぞと動き始めた。

ゆっくりと繭が破られ一匹の——蝶が出てくる。

『メル姐さん。明確には区別できないけどさ。繭やら触角。それに羽の感じから見るにあれは蝶じゃなくて蛾だよ。たしかに姐さんのお

花畑なおつむには蝶々の方が似合ってるけどね』
うつるさいなあ。

どつちも鱗粉まき散らして飛ぶんだから同じだろう。
それに区別できないなら蝶で良いだろう。

蝶だ。蝶なんだ。

『ハハッ、そうだね。蝶なんだろうね、パタパタ』
殴りたい。

真剣に殴る・蹴るなどの暴行を加えたい。

今この状況じゃなかったら全力で床に叩き付けていた。

蝶は少しずつ少しずつもったいぶるように羽を広げていく。

やがて虹色の羽が完全に広がると天井を離れた。

頼りなく出口のそばに飛んで行き、壁へと消えて失せる。

蝶の消えた壁はよくわからない紋様が浮かび上がり、すぐさま扉に
変わる。

「ゼバルダが、成長してる……」

アイラが茫然と呟く。

『さあ、問題児の諸君。ゼバルダ大木——上級ダンジョンを、始めよう
か!』

前人未踏の上級ダンジョン。

その制覇がアイラに課された使命だった。

なに、私は違うのかって？

ここは実質的に中級だとしても、形式的——公式的には上級ダン
ジョン。

ギルドに「クモキリカマキリの円らな複眼」を提出すれば許可証が
一つもらえる。

私は超上級ダンジョンの入場許可が得られればそれでいい。

非公式な上級ダンジョンまで攻略する必要はない。

明日にはフランデナ草原に向けて出発しよう。

『そんなんだからメル姐さんは——』

いつまでたってもぼっちなんだよ……。

シユウの声には普段の呆れも、侮蔑も、おちやらけもない。ただ、寂しげだった。

形式的な上級をクリアした私たちはいったん町に戻った。

ギルドに「クモキリカマキリの円らな複眼」を提出し、超上級の許可その一を手に入れた。

そこから一悶着だ。

明日にはフランデナ草原に出発すると話すと、アイラは私に泣き付いた。

菌ごたえの良きそうなゼバルダの葉っぱを手に入れないと彼女は家に帰れない。

ボスであるヤモリやカマキリを倒せたのはチートがあつてこそだ。ないなら上級どころか中級も厳しいだろう。

それでも私には関係ない。

私は私の道を突き進むのみ。

がんばれアイラ。応援してるぞ。

ほら、しつかり。アイラならできるよ。

——そう思っていたが、シユウはアイラの味方をした。

シユウは私が上級ダンジョンに行くメリツトを説いた。

上級のポイントを得れば、移動速度を上げるスキルが選択できる。

ここ、ゼバルダの町からフランデナ草原まで徒歩で約一ヶ月。

具体的な数字はまだはつきりと言えないが、間違いなく移動日数が大幅に削減される。

上級ダンジョンの攻略に二日や三日かけたとしても、結果的にフランデナ草原への到着が早くなる。

それだけではない。

新たに誕生した上級ダンジョンの情報をギルドに報告する。

私では信憑性が低いがこちらには力強い味方がいる。

アイラだ。

引きこもりな魔法オタクでもアイラはエルフ。しかも純血だ。彼女の口添えもあれば真偽はすぐにわかる。

さらに真の上級をクリアして、ダンジョンやボスの情報をギルドに流せば私の求める超上級ダンジョンへの入場許可証をもう一つもらえる可能性もある。

冒険者に強い影響を持つギルドにコネを作っておくのも大切だ。こう話す。

文句の付け所がない。

移動時間の短縮だけでも、私にとって十分すぎるメリット。

そのうえ上級許可証がもらえる可能性もあるという。

よし――、

「明日は朝から潜るぞ」

この決定にアイラは号泣して頬ずりしてきた。

『キマシタワー！ でも、なんでだろう。まったくときめかない。初めて感覚だ』

やめろ。ほんとに汚い。

顔中べとべとだ。

明朝。まだ日が昇ったばかりのころ。

さっそくギルドに向かった。

話をすると、ギルドの支配人自ら出てきて話をするようになった。アイラとシユウが話をつける。

私は何を言っているのかわからないので、ひたすらシユウの代弁に徹する。

話し合いはうまくまとまった……ようだ。

上級ダンジョンで得た情報を全てギルドに提供することを条件として、お金と馬、さらに欲して止まない超上級の許可証も発行してもらえることになった。

もちろんボスを倒してドロップアイテムを持ち帰ることが必要だ。そうして支配人に揉み手をされて私たちはダンジョンに入った。

入り口はまだ作られていないため、上級者向けの入り口から昨日と同じ道をたどる。

ボスのカマキリは昨日と同じパーティーで挑んだためか、まだ復活

していない。

面倒だったからちようどいい。

出口の横にできた扉を押す。

緩やかな登り道。敵はいない。

しばらく登るといよいよ開けた場にたどり着いた。

赤、黄、緑、青、紫と色とりどりの羽をした蝶が飛んでいる。

羽を広げた大きさもせいぜい私の体の幅と同じ。

通常の蝶よりは確かに大きいのが、中級までのモンスターよりはずつと小さい。

見た目から判断する限りではとても強いと思えない。

空中には蝶から出た鱗粉が舞っている。

光が散乱し、きらきらと幻想的だ。

『幻想的！ 幻想的って、くふふっ！ もく、緊張してるからってさ。メルねーさん、無理に乙女みたいなこと言って笑わそうとしなくてもいいんだよ』

なんか文句あんのか。

本気で言ったぞコラ。

中級で黙っていたシウも、上級についてからしゃべるようになってた。

やっぱりこいつ蜘蛛が苦手だな。

この町を出る前に蜘蛛の巣を回収しておこう。

モンスターは蝶だけかと思っただが、どうやら違うらしい。

カマキリと遭遇した。

曲がり角を過ぎたところで見つけた。

あまりにも唐突に出くわしたので驚いた。

カマキリも両足の鎌を上げて私たちに驚きのポーズを見せる。

大きさは中級のボスよりは小さい。私よりも少し大きいくらいだ。

前人未踏のダンジョンであるなら、このカマキリは人間に会うことが初めてとなる。

どうやらモンスターも人間に驚くものらしい。

挨拶代わりにそのまま斬りつけた。

一方的に倒すことができた。

『なんかメル姐さんのほうがモンスターに近いんですけど。あつ、このカマキリなかなかおいしい』

今のところトラップはない。

カマキリはそこそこ硬いが、状態異常が通るのでなんとでもなる。蝶は大量に飛んでいるが、本当にひらひら飛んでいるだけ。

たまにぶつかってくるが、アイラにすらダメージがない。

この蝶はモンスターではないのだろうか。

アイラが魔法を使ってようやく宙に浮く鱗粉の効果がわかった。

この鱗粉は魔法を散乱する。

シユウで魔法を弾いたときと同じだ。

アイラの炎魔法は散乱してあつという間に消えていった。

風魔法だけは散乱しないが、耐性をもっているのか蝶はひらひらと風に流されるだけだ。

ただし、風魔法は鱗粉を吹き飛ばせる。

鱗粉がない状態なら魔法も効果を発揮した。

氷が弱点のようだが、そもそも宙に飛んでいる敵に氷魔法は効果が薄い。

弱点と合わせて、トントンといったところだ。

やっぱり炎が安定だ。

光魔法は効果がないものの、光に蝶が寄ってくる。

『やっぱり蝶じゃなくて蛾じゃないかな。光に保留走性があるみたいだし。いや、蝶にも走光性はあるのか』

なにかよくわからないことを言っている。

ほつとこう。静かに話すのはいいことだ。

それにしても恐ろしく簡単だ。

中級よりも簡単になっている。

注意するのはカマキリだけ。しかも弱い。

本当にここは上級なのか。

「ここも中級なんじゃないか。」

『いや、さっきのカマキリにしても、そこらかしこを飛んでる蝶にしてもポイントは中級にいた蜘蛛の比じゃないよ。蝶一匹だけで蜘蛛二十体ぶんのポイントは手に入ってる』

「そ、そんなにポイントが多いのか。」

「これ一匹が。」

シユウでつついてみようとするがひらりと避けられた。

『ここが上級な理由はなんとなくわかるよ。うん、ギルドから情報を集めてくれて頼まれてるからね。試してみようか。メル姐さん、アイラたん。いったんパーティーを解除してみて。ごめんねアイラたん。ちよつとだけだから、先っぽだけだから』

「よくわからないが情報収集なら仕方ない。」

私のリングとアイラのリングを合わせて、パーティーを解消した。

アイラはケロリとしている。問題はないようだ。

そのまま歩いていると後ろからいきなり肩を掴まれ揺さぶられた。

アイラが必死の形相で口を動かし、喉を指さす。

「お、おう、どうした。」

伝えたいことがあるなら、はつきり声に出して言ってくれ。

「いったい何をやつとるんだこいつは。」

『サイレントだよ。喋れないんだ。鱗粉に状態異常を発生させる効果があるみたいだね』

「そうなのか。」

サイレントはこうなるのか。

「たしかに魔法使いにはきつい状態異常だな。」

「詠唱ができない。」

「アイラの様子が変わる。」

「顔が引きつり泣き出しそうになり、足を後退させる。」

「口を大きく開き、声なき悲鳴を上げると振り向いて駆けだした。」

『姐さんが怖かったから逃げたんじゃないよ。恐怖の状態異常なんだ。あつ——』

「わかってるよとつっこもうとしたが、背を向けて走るアイラがふら

つき始めた。

ああ、あれは私もよく知っている。

『毒だね。それにたぶん盲目も入ってるよ。顔をあちこちに向けて戸惑ってるでしょ。人間にかかると見ててつらいものがあるね』

そうだな。

耐性があることのありがたさを実感した。

『わかってくれればいいんだよ』

アイラはついに倒れた。

体がびくんびくんと痙攣を起こしている。

『ありやりやあく、麻痺もかあ。うひやあ、状態異常が五つ。恐ろしいね』

なるほど。

ようやくここが上級な理由がわかった。

空中全体に舞う鱗粉が状態異常を発生させる。

風魔法を使って防げるものの、効果が切れると魔法使いはサイレントで使い物にならない。

『口を布で覆えばいいかもしれないけど、盲目は目に来るから防げない。さらにあのカマキリは物理耐性がついてる。俺の吸収でダメージが通ってるけどほとんど斬れてない。普通の剣なら効果がめっちゃくちや薄いよ。うす〇たの0.02ミリ並だ』

物理でも攻めづらい上に魔法も拡散される。

さらに状態異常が次々と発生。

これが上級か。

たしかにこれと比べれば、火魔法でどうにかなる蜘蛛が可愛く見える。

『それと、前からそうなんじゃないかと思ってたけど、やっと確信を得たよ。俺には耐性無視がついてる』

なんだそれは？

『お馬鹿なメル姐さん。ここのカマキリはこの状態異常豊かな鱗粉の中でも普通に動き回ってるよね』

そうだな。

状態異常に耐性があるんだろう。

あれ？

でも——、

『そう。俺で斬りつけたら状態異常を起こしたでしょ。おそらく俺は相手の耐性を無視して攻撃ができる。物理に耐性があっても吸収でダメージが通るし。状態異常に耐性があっても、ボスだろうが関係なく付与する。快復はするみたいだけどね』

ふうん。

さすがチートだな。

『おつ、だいぶ慣れてきてるね。……ところでメル姐さん』
なんだ？

私でもここが上級な理由はわかったし、お前の耐性無視も理解したぞ。

『いや、そうじゃなくてさ』

まだなにかあるのか。

『アイラたんをパーティーに入れてあげて——死んじやう』
アイラはすでに痙攣が止まっているものの、ぐったりとして動かない。

目も半開きになって、わずかに開かれた口から唾液が垂れる。

毒で光に消えていく直前のモンスターがちようどこんなだ。

彼女はなんとか一命を取り留めた。

状態異常はなくなったものの、体力をかなり奪われたのか虫の息だ。

シユウによれば、やっぱり人間なら死んでいたらしい。

さすがエルフ。頑丈だ。

『お、めえ、……ら、ひ……、でえ。に、んげ……、んじや………ねえで、す』

なにやら恨みのこもった目をどこか遠くへ向けている。

そして、よくわからない言葉を残し——目蓋を閉じた。

もう大丈夫だ、休んでいろ。

お前の意志は私たちが引き継ぐ。

『クソオオオ！ よくも俺のアイラたんをオオ！ 許さん！ 絶対に許さんぞ、虫けらども！ 俺のチートで皆殺しにしてくれる！』
私もシユウと同じ気持ちだ。
アイラの仇を取るべく、シユウを固く握った。

皆殺しにはできなかつた。

シユウを振れども振れども蝶に当たらなかつた。
かすりさえしない。

振るとひらりと避けられ目の前で羽をあおいでくる。

『虫にさえ馬鹿にされるメル姐さんはいったい何なんだろう……。あ、ぼっちか』

なぜだ。なぜ剣が当たらない。

『技量が恐ろしいほどにないからだよ。虫以下つてことさ』

縦に振る。横に避けられる。

横に振る。縦に避けられる。

斜めに振ってみる。やっぱり斜めに避けられる。

いつそもう突いてみる。頭に留まられる。

「なに遊んでるんですか？」

アイラが目覚めた。

まだ顔色は悪い。

よかつた生きていたか。さすが純血のエルフだな。

それと遊んでなどいない。剣が当たらないのだ。

アイラは座つたまま杖を突き出す。

杖は彼女の前を飛んでいた蝶に見事命中し、蝶は地に落ちる。

威力はないため、消えはしなかつた。

私がトドメをさす。

すごいな！

どうやったんだ？

一発で命中していた。

なにかコツがあるに違いない。

「こうやって」

杖を引く、

「こうです」

引いた腕を軽く伸ばす。

それだけでまた蝶が一匹、地に落ちた。

トドメは私がいただく。

『ハイエナ姐さん誕生の瞬間である』

そこ、うるさいよ。

だからね。

その当てるのをどうやるのか聞いているんだ。

アイラは首をひねる。

「だから、こうやってこうですよ」

また一匹。

トドメは私。

理屈派なんだろ。

お得意の屁理屈で説明してくれ。

『理論』派です！ 理屈じゃありませんし、もちろん屁理屈でもありません！」

『姐さん。アイラさんの言うとおりだよ。理屈じゃないんだ。姐さんに才能がなくて、アイラさんにあるってだけの単純で非情な話なんだ』

それでは……それでは私に、この蝶は倒せないと言うのか。

アイラの仇を取ることができないのか。

「なに言ってる——」

『いや、そんなことないさ！ 俺と一緒に剣の才能を鍛えよう！ 剣士は無理でも、伊達冒険者を名乗れるくらいにはなろう！』

冒険者だよ、私。

あと、なんかそれ駄目そうなんだけど。

『大丈夫、オーライオーライ。さて二つのコースがあるよ。罵りコースと励ましコース。どっちにする』

どっちのほうがいいんだ？

どっちもいやなんだが。

『罵りコースのほうが確実に力がつくね』

じゃあ、そつちで頼む。

『わかったよ。じゃあいくね。ちんたらするなア！ このウジ虫め！』

さつさと——』

やっぱりもう一つのほうにしてくれ。

『やれやれ。どちらにするか悩んでいる時間が一番もつたいないね』

そもそも特訓を今やる必要があるのか？

蝶に剣が当たらないだけだ。

『ほつといたらできるようになるんですか？ ならないでしょ』

それは……そうだがな。

『じゃあ、いつやるか？ 今でしょ！』

なんかこいつノリノリだな。

いらいらしてきたぞ。

『さて、まず敵を知ること』

お……おお、まともだ。

お前もそんな風にまともなことが言えるんだな！

それと敵を知るのは普段からやっているつもりだ。

『姐さんと俺じゃもの見方が違う。一体の敵を別の見方で捉えるんだ』

私はあの蝶をただふわふわ飛んでいる蝶だとは思えない。

なぜ攻撃が躲されるのかもわからない。

お前はあの蝶をどうやって捉えている？

『よし。じゃあ、正確に見ていこう。必ずその動きは、見切れるようになつてくる』

動きは最初から見えているぞ。

『よく見て。今の動きじゃなくて、このあとどう動くかを予測して。頭の中で見えていないといけないんです。こういうのはけつきよく』

わかった。

だが、うまく予測ができない。

どうすればいい？

『相手の動きをどう読んでいくか。それは物事の根幹にある仕組みを

どれだけ理解するかということ。……これは姐さんにいっても仕方ないや。とりあえず、振ってみようぜ！ 悩んでばかりで、振らないやつが多すぎる！ 過去の戦績なんて関係ない！ 自分の限界に挑戦して、それを乗り越えるんだ！』

なぜだろう。

よくわからないが当たるんじゃないかという気がしてきた。

自分でもできるんじゃないかと思えてきた！

蝶の動きを読み、動きを予測してシユウを振る。

——避けられた。

『失敗するのはいいことなんだよ！ 失敗するのはいいことだ！ 人間、失敗しなかったら進歩がない。できることばかりやってたって意味ないでしょ！ 先に言ったことを意識してさ。どんどんやってみよう！』

そ、そうだな。

一回失敗したくらいで諦めちゃだめだな。

何度も失敗してコツをつかんでいくものだよな！

『そうだよ！ もう頭には知識がある。あとは訓練と引っぱり出す練習。それに速さの問題！ 血も筋肉もポイントになるくらい、徹底的に振ろうぜ！』

ああ！

私はできる！

やってみせるぞ！

言われたとおりに相手をよく見て、予測してから振ってみる。

これを何十と繰り返し返した。

かすった。

ついにかすった！

見たか！ かすったぞ！

『ちゃんと見てたよ！ 「やってやった！」って達成感があるでしょ！ その達成感の積み重ね！ 達成感をひたすら積み重ねていくと言うことが戦績を上げる唯一の道なんだ！ でも、俺たちの目標はかすることじゃなくて、仕留めること！ さあ、もっともっと振ってみよ

う！』
かするのが楽しくなつて、言われたとおり振っていく。
十回に一度くらいはかするようになった。

しかし——その先は一向に進歩しなかった。
剣がまともに当たることなど一度もなかった。

『ごめん。やっぱり俺じゃ才能のないメル姐さんに剣を教えることは無理だ。そもそもさつき言った台詞も、勉強の宣伝に使われてた謳い文句を変えたただだからなあ』

おい、ちよつと待て！

その言葉に感動した私の純情な思いを返せ！

第一なんでその言葉で剣がまともに振れるようになると思ったんだ？

どうして私の才能が伸びると思ったんだ？

おかしいだろう？

ねえ、私は間違つてるかな？

間違つてる?!

『お、落ち着いて。姐さんは正しい。俺が間違つてた。おそらくどころか間違ひなく天才ではない姐さんも、努力の天才であつてほしかったんだ』

なに、いい話みたいにまとめてるんだ。

今から中級に降りて蜘蛛の中に置いて帰るぞ。

どうせ口だけでやれつこないとか思つてるんじゃないだろうな。

そうだというのなら私の本気を貴様に見せてやる！

『ご、ごめんよ。ごめんなさい。俺が本当に徹頭徹尾、完膚無きまでに間違つてた。姐さんのありもしない才能を伸ばそうつてのが、そもそもおかしな話だった。基礎のステータスが怖いってことを俺は今日、何度も思い知らされた。でも、気づいたよ。俺はチートなんだ。こんなもん、使えば誰だつてできるようになる！ 世の中で常識だつて思われてることを常に破壊してかかる！ それこそがチート！ メル姐さんの才能が目も当てられないくらいにささやかなほどしかない

なら、相手の能力をメル姐さんよりも低く、より惨めにしてやればよかつたんだ!』

私の才能がないことはもうよくわかつた。

わかりたくないほどわかつたよ!

それで、具体的にどうするんだ。

なにかいいスキルがあるのか。

そこまで言うってことは、あるんだろうな!

『ある。あります!　すごい特殊スキルがあるんです!　ちよつと前に出ただけで、ポイントがすごい高かつたんだ。今なら状態異常付与と伝染を全部選択解除すれば取れる!　ちよつと待ってね。……はい、選択したよ!　さあ、メル姐さん。あの虫けらどもの中に足を踏み入れて思う存分に斬りまくってくれ!』

いや、でも状態異常付与と伝染もつけてないならきついぞ。

そもそも相手にかすらないなら意味がないだろう。

『大丈夫だ、問題ない。新しいスキルの効果。そして、チートの意味。メル姐さんに絶対わからせますから!　ほんとに、呆れるほどにわかるほどわからせますから!』

蝶は体当たりくらいしかしてこないから、こちらが負傷することはまずない。

それにシユウがこれだけチートだと推してるんだから大丈夫だろう。

こいつは私をけなして精神を攻撃することは日常茶飯事だが、身体に危険が迫ることだけは決してしない。

それさえしなければあとは何をしてもいいと思ってるんじゃないかな。

よくわからない信頼を胸に秘め、蝶の群れへと足を入れる。

すぐにわかつた。

シユウの言うとおりに呆れるほどよくわかつた。

具体的な効果はわからないが、チートだとわかつた。

近づくと蝶が地面に落ちていった。

地面で羽をばたばた動かしてもがいている。

『落ちた奴はサクサクつと刺し殺しちゃって』

とてつもないチートだとよく理解した。

しかし、これは――

「いったいどうなっているんだ？」

地面に落ちた蝶を次々にシユウで消しつつ尋ねた。

『一定範囲にいるモンスター能力を半減。さらに特殊能力を強制解除。この蝶の場合は特殊能力「飛行」を持つてるからそれを解除して。つまり、飛べない。飛べない蝶はただのポイントだよ。こことても重要』

それにしてもだ。

これはあんまりではないかね。

強すぎるだろう。

『それでもないよ。効果はチートだけど、範囲が狭い。せいぜい五歩つとこだ。それでも近接戦なら、これで敵なしじゃないかな。まあ、パーティーには効力がないから、完全にソロ――失敬、ぼっち仕様だよ。とりあえず状態異常付与は取り直したいから、サクサク片付けちゃおう』

だから、なんでわざわざ悪く言い換えるの。

それに失敬って。そもそもお前が私に敬ったこと、一度でもあったか。

『ない』

即答かつ断言しやがった。

そうだと思ってたよ。

コンチキシヨウ！

周囲にいた蝶を全て片付けた。

カマキリものこのこ近づいてきたので、斬り刻んでやった。

状態異常付与と伝染は無事に取り戻すことができた。

さらにお釣りもきたらしい。

アイラの元に戻る。

見てくれ蝶を全て倒した。

仇をとつてきたぞ。

「すごいですね！ 蝶がバタバタ落ちていってましたよ！ いったいどんな技なんですか?！」

『メル姐さんの体臭で相手の力を削いでるんだ!』

なにいい加減なこと言ってるんだ。

そんなわけないだろうが。

「あは、あはは……そう、だったんですか」

私が臭うわけ……あれ?

アイラは無理に笑おうとしているのか顔が引きつっていた。

すぐに彼女はシユウの冗談だと気づいたのか。

ごまかすような渋い笑い顔になった。

『おおっと、自身が発する臭いにも無頓着で無自覚なメル姐さん。これには思わずアイラも苦笑い』

えっ、どういうこと。

もしかして、ほんとに臭うの?

「わ、私はメルさんのちよっぴり鼻の奥にツンとくるフレーバーな香りが嫌いじゃありませんよ!」

それ臭うって言ってるよね!

否定してくれてないよね!

『——と、ここでネタばらし。メル姐さんにはつらいお知らせ。さっきのスキル。蝶を次々に地へと誘った近距離用デバフの超優秀スキル。その名はなんと——激臭!』

……はは、冗談だろ?

シユウは沈黙を貫く。

アイラも目を伏せ、顔を背ける。

ふらふらと飛んできた蝶は落ちていく。

遠くには私たちの様子を観察しているカマキリが一匹。

私はただ立ち尽くす。

よ、よし!

こうしよう!

怒らないから正直に言ってみろ。

絶対に怒らない！ 約束する！

それで、さっきのスキルはなんだって？

名称と意味、効果を偽ることなく話さない。

これはお願いじゃないぞ、命令。

『……まずはメル姐さんを落ち着かせることが第一だと考えました。しかし、どうやら真剣な命令みたいですので、俺も嘘偽りなく真摯に伝えていきたいと思います。どうぞお気を強くお持ちになり、くれぐれもご自愛下さい』

喉がごくりと鳴った。

アイラもはらはらとこちらを伺う。

蝶が地面でぱたぱたとのたうち回る。

カマキリはどこかに消えて姿が見えない。

まつげには宙を舞う鱗粉が薄く積もっていく。

シユウの見えない口が深く深く息を吸い始めた。

『スキル名は「激臭」。「非常に刺激的なおい」を意味します。効果は、スキル一覧に書かれてる説明文をそのまま読み上げると——「使い手の甚だしい臭気によって一定距離に存在するモンスターの能力を半減。さらに特殊能力を解除させる。嗅覚を持たないモンスターでも有効に作用する優れもの。これで今日から貴方も激くさポンプン丸！」——だそうです』

目の前が、真っ暗になった。

それからあとのこと私はよく覚えていない。

ダンジョンをおぼつかない足取りで彷徨っていたと思う。

そして、目についたモンスターを片っ端から殺していった。

「なんだかすごいですね。さっきから魔法をまったく使ってません」

『メル姐さんは不快……間違えた。深い哀しみを背負ったんだ。ともかく姐さん一人で十分だから、アイラたんはギルドに提出する簡易な地図をまとめておいて』

そんなやりとりも聞いた気がする。

そうしてついに残す道も一本となり、奥には大きな木の扉。

扉の前には無数の蝶が飛んでいる。

ひらりひらりと目障りだ。

すべて消し去ってくれ！

『くさっ！この人におうよっ！』

臭の叫びとともに蝶がばたばた落ちていく。

私は落ちてきた蝶に無心でトドメを刺す。

敵の姿が視界から完全になくなり、ようやく私は正気に戻ることができた。

なにやら言いようもない哀しみに取り付かれていた気がする。

「フッフ。ついにたどり着きましたね！　このボスの命を生け贄にイ！　私は自由を手に入れルウ！」

引きこもりも絶好調だ。

さて、上級のボスとはいったいなんだろうか。

上級だから今までにない強さが予想される。

いったい、どんな姿なのか想像もつかない。

『えっ？　ボスが何かはなんとなくわかるでしょ』

何を言っている。

このダンジョンが前人未踏である以上、誰もここのボスを知らない。

チート以外に対処のしようがないだろう。

『いやいや確かに前人未踏だけどき。他でもない俺たちならボスを予想できるよ』

「……ああ、なるほど。私にもボスの正体が予想できました。たしかにそうですね」

どうやらアイラもわかったらしい。

私にもわかるように話して欲しい。理論派なんだろう。

『じゃあ、それで正解と考えて対策を考えようか』

「そうですね。おそらく合ってると思います。まずは——」
完全に私は置いてけぼりだ。

こいつらは私をなんだと思ってるんだ。

その後、シユウからボス予想を聞いて納得した。

確かにそうだ。私も見た記憶がない。
それなら、このボスは――。

ボス部屋中央。

ボスモンスターは私に踏まれて力なくもがいている。

一切の容赦なくシユウを突き刺す。

『先っぽだけなんて意地悪しないでえ！ もっとおお、もっと奥まで入れてえ！』

気持ち悪い声をあげているが、仕方ない。

私はシユウをさらに奥へと刺し込む。

『き、きたああー！ 奥きたああ！ 硬いのが、ザクザクってあ
たつてるうう！』

ボスは予想したもので当たっていた。

私に踏まれている、虹色の羽をした蝶は聞き取れない悲鳴を上げている。

ボスよりもシユウの声の方がうるさい。

上級ダンジョンには、色とりどりの羽をもった蝶がいた。

しかし、私たちを上級に導いた蝶。

虹色の羽をした蝶だけはどこにもいなかった。

そして案の定、ボス部屋には虹色の蝶が待ち構えていた。

『かき回してえ！ じゅぼじゅぼしてええ！ めちやくちやにし
てえええ！』

鱗粉が満たすボス部屋。

その高空を虹色蝶は飛び回っていた。

攻撃手段は至って単純。

高空から鱗粉を落としてくるだけだ。

この鱗粉は空に浮いているものと違い、付着したものを溶かす。
アイラのローブも少し溶けて、シユウが興奮していた。

『もっとガンガン突いてっ！ 頭まっしろになっちゃう！ なにも考
えられなくなってるうう！』

ボスは高空にいるため私の剣もスキルも届かない。

アイラを脇に抱えて走り回り、鱗粉を避ける。
その間に彼女は詠唱する。

まず、風魔法を使って魔法を散乱させる鱗粉を吹き飛ばした。
そのあとすぐ、光魔法で私のすぐ後ろに光源を生成。

ボスもこの雑魚と同じ特徴があった。

光に寄ってくるのだ。正確には違うらしいがよくわからない。

とにかく、ボスは高空から曲線軌道を描きつつ私の方に飛んできた。

あとは単純だ。

ボスにも私の憤まんやるかたないチートスキルが効果を発揮し、地に落ちた。

すぐには近づかず、アイラの氷魔法で鱗粉を飛ばす羽を氷漬けにする。

そして現在に至る。

『なんかぎぢやう！　すごいのがぎぢやうよおおお！』

こいつは本当にうるさいな。

アイラですらひいている。

彼女の目はまるでこの世の最底辺を見つめているようだ。

私まで同じ目で見るのはやめてくれないか。

もう抜こう。斬ればいい。

『え……あ、ああ、なんでえ。　どうして抜いちやうの？　もうちよつとだったのに。　どうしてえ？』

うるさいからだよ馬鹿野郎！

なんでそんな気持ち悪い叫び声あげるんだ！

普通にしろよ！

『気持ち悪い?!　たしかに俺の叫びは未熟だよ！　でも、さっきの叫びは俺の世界じゃ、みさ○ら語っていう一つの言語として確立してるんだ！　文化の否定をしないでくれ！　まあ、たしかに調子に乗りすぎたよ。もうやらないからさ。ボスにトドメをさしちやつてくれる。あと少しだよ』

急に素に戻られるとそれはそれで気持ち悪い。

とりあえず、シユウの言うとおりにトドメを刺そう。

柄を両手で握り、最後の一撃をボスの頭に突き立てた。

『あひいいい！ そんなっ！ 一気になんてえええ！ 壊れちゃう、壊れちゃうからあ！ ら、らめええ！ イッ！ イッグウウウウ！ あああアアー！』

ボスは光に消えた。

ついでにこの馬鹿もチートだけ残して消えて欲しい。

なにがもうやらないだよ！

一瞬で破りやがった！

『ふう、おいしかった。上級のボスともなると格別だね』

さきほどまでの騒ぎが嘘のように落ち着いている。

もうついていけない。

『賢者状態ってやつだよ』

よくわからん……。

残ったドロップアイテムを拾う。

「きたー！ ついにきましたー！ フヒヤヒヤ！ 今度こそ——あれ？」

アイラがドロップアイテムを見つめて、首を傾げる。

前に見たパターンだ。

おいやめるよ。まだ上があるんじゃないだろうな。

私もドロップアイテムを見ている。

——コリコリしたゼバルダの青き果実。

聞いてたやつとは違うな。

『アイラさんが昨日話してたとおりでよ。ゼバルダが成長してるんだ。だからアイテムも葉っぱじゃなくて実になった。まだまだ未熟なようだけどね』

よし、なにはともあれ上級クリアだ。

町に戻ってギルドへ行こう。

「メルさん！」

出口へと歩いていくと、後ろからアイラに声をかけられた。

振り向くとアイラは右手を私に伸ばしている。

なんだこの手は？

お前にやるものなどなにもないぞ。

『メル姐さん……。握手を求められてるんだよ。一緒に戦い抜いた仲間として、互いを信頼し合った証を確かめようとしてるんだ。……うん、ごめんね』

そういうことか。

あと、なんで最後に謝った。

いや言わなくていい。

わかりたくないけどわかったから。

アイラの右手を握り返す。

細く小さな、柔らかい手。魔法使いの手だ。

「ほんとにメルさんがいなくなったら、私クリアどころか死んじやってました。本当にありがとうございます」

『あれ……。俺は？』

アイラの日頭に溜まっていた涙がこぼれ落ちる。

私もお前の魔法に助けられた。

カマキリも、蝶も。お前の魔法がなければ、苦しいものになっていただろう。

『いや。ねえ、俺は？ 俺も褒め称えてよ。一緒に戦った仲間じゃないか！』

アイラの手は小さく細いが、それでもしつかりとした温かさを感じる。

彼女の顔も熱を帯びてほんのり紅くなっている。

いかなんな私まで熱を帯びてきたぞ。

この温もりが仲間というものなのか？

『ねえ、メル姐さん。机の引き出しが空っぽで、目を閉じても楽しい思い出ひとつさえ浮かばないメル姐さん』

なんなんだよ。お前は。

いいところなんだから黙ってる。

空気を読むスキルもつけろよ。

『まあ、そう言わずに聞いてよ。メル姐さんはすぐまたぼっちに戻るだろうけどさ。いま感じてる思いを忘れないでね。目の前にいるア

イラさんの声や顔。握った手の温かさ。一緒に戦い抜いた記憶。そして、勝ち得たこの瞬間をよくよく心に焼き付けておいて。いつかふと目を閉じたとき、楽しかった思い出として思い返せるようにして……。それが——チートな俺の、小さな願いだよ』

……くそう、不意打ちだ。

私もちよつぴり涙ぐむ。

本当にこの駄剣は卑怯極まりない。

いきなりまじめなことを言う奴があるか。

しばらくの間。アイラと手を固く握り合った。

そして、お互いが何も言うことなく手を離し、出口へと歩き出す。

両手に確かな温もりを感じつつ、ゼバルダ大木の攻略は終了した。

第07話 「フランデナ草原の夜明け」

六日。

たったの六日だ。

ゼバルダからフランデナ草原の移動に要した日数である。

一般に徒歩で一ヶ月かかると言われていることを考えれば、大幅な短縮と言える。

乗り合い馬車の八日よりもなお二日早い。

さらに馬を使わずこの日数だ。

スキル——歩幅拡張により一歩で約五歩ぶんの距離が移動できるようになった。

最初は流れる景色の速さに戸惑っていたものの、今では歩くどころか走っても問題ない。

やはりチート力はすさまじい。

ちなみにギルドから頂戴した馬は、出発一日目にして逃げられた。

町を出てから五分も経っていなかったはずだ。

まだ、後ろにはゼバルダの町が大きく見えていた。

背中から振り落とされ、馬はそのまま町と反対側に消え去った。

にんまりとした笑顔を私に見せてくれていたのに、気性は荒かったのだ。

ど素人の私では振り落とされても仕方ないだろう。

むしろ三分近くも乗れたことに誇りを持つべきではないだろうか。

『なんて慎ましい埃なんだ……。いやあく、でもその後でさ。同じ馬が向こうから人を乗せてやってきたときは、ほんと笑ったよね！ 腹筋がどうにかなっちゃうんじゃないかと思ったよ！』

お前の腹筋ってどこなんだよ。

あと、「ほこり」が私の言うものと違うような……ん？

おいおい待って待て。

そんな愉快的な話。私の記憶にないぞ。

その話は本当に本当なのか。

本当ならどうして教えてくれなかった。

なに？

どうせまた逃げられる？

それなら別の人にちゃんと乗ってもらった方がお互い幸せ？

……そうかもしれない。

認めざるを得なかった。

フランデナ草原はフィールド型ダンジョンと位置づけられている。ウラキラ洞穴、ゼバルダ大木のようなラビリンス型ダンジョンとは違う。

私が入ったことがあるフィールド型は初心者森だけだ。

フィールド型はダンジョンの内側と外側を分ける明確な境界が存在しない。

そのためモンスターもごくごく稀にダンジョンの外側へ出てくる。

町がモンスターに襲撃されたという話を耳にしたこともある。

そして、フィールド型のなによりも最大の特徴はボス部屋がないことだ。

ボスの居やすい領域は存在するが、必ずそこにいるわけではない。いきなり遭遇することもあり得るし、いつまでたっても会えないことだってある。

さらにボスが一体だけとは限らない。

私も初心者の森でボスであるギラックマに挟まれたときは死ぬかと思った。

『ギラックマの方がメル姐さんに驚いて逃げだしそう』

なんで知ってるんだよ。その通りだよ。

驚いて悲鳴を上げたら、ギラックマも驚いて逃げていったよ。

……さて、ここフランデナ草原はふざけているほど広い。ぐるりと回るだけでも二ヶ月はかかると言われている。

『この途方もない広さを目にするとき。才能の大小なんて取るに足らない問題だと気づかされるね』

なんか引つかかる言い方だな。

だが、たしかに広い。

私もこの広さの前にするといちいち戯れ言を気にするのがばかばかしく思える。

そんな広大なフランデナ草原のボスマンスターはカルマレオ。あまりにも有名だ。私でも知っていた。

ギルドから情報を購入したことでより詳しく知ることができた。カルマレオには雄と雌がいて、雄のみが上級のボスとして扱われている。

雄は雌よりもはるかに強いものの、個体数が恐ろしく少ない。

現在、ギルドで確認されている雄はなんと一体だけ。

しかも五年以上討伐された記録がない。

滅多に出会えないし、出会っても強すぎて勝てない。

強さだけなら超上級のボスと比べても遜色がないと言われている。

雑魚は中級、よくても上級なのにボスだけが突出している。

名実共にフランデナ草原の支配者となる。

この一体を倒さないと他の個体も再出現しないのではないかいう、まことしやかな噂もある。

そんな強すぎるカルマレオに挑む人間は後を絶たない。

ドロップアイテムである「あつと驚くカルマレオの鬣」に、天井知らずの値段がつけられているためだ。

このアイテムをギルドに提出すれば上級達成と認められる。

超上級ダンジョンの入場許可証に加えてささやかな謝礼ももらえると聞いた。

しかしながら、ギルドに提出するよりも売り払って武器・防具やアイテムを整えたほうがずっと効率がいいため、ギルドに提出した人間は過去に居ない。

上級達成の証がこのボスの討伐ではあまりにも厳しくなる。

そこでギルドはボス討伐の他に二つの上級達成の証を認めている。

一つが、数多くの病気を治癒するとされる「なんだか治り草」の提出。

もう一つが、ギルドの運営する上級モンスター討伐隊に一年間の従事。

この二つだ。

治り草は草原のどこかにあるが、フィールド全域にたった数本しか生えないらしい。

そんなものをいちいち探してはもられない。

もう一つの条件は時間がかかりすぎて話にならない。

すなわち、私の目標はカルマレオの雄を討伐することになる。

——のだが、

『会えないねえ。もう絶滅してんじゃないの？』

フランデナ草原に来て、すでに三日目。

いまだカルマレオの雄に会えていない。

ギルドで購入した情報を頼りに、その周辺を走り回るが見つからない。

体が大きいためすぐに見つかると思っていたが、なかなかうまくいかないものだ。

雌には何度か遭遇したものの、戦闘にならなかった。

カルマレオはこちらから攻撃をしない限り、人間を襲わない。

王者の余裕というやつだろう。

そもそも人間なんて食べなくても、そこらかしこに良質な餌が転がっている。

『他のダンジョンに行った方が早いんじゃないかな。南の方にも上級ダンジョンがあるんでしょ』

走り回るのも飽きてきた。

シユウの提案が現実味を帯び始めたそんなときだ。

進行方向になにやらモンスターの群れがいた。

あれはたしかマフィアンハイエナとかいう奴だ。

輪になって中心へと歩を進めている。

よく見るとその中心に小さなモンスターが見える。

狩りをしているようだ。

ちようどいい——。

『群れて獲物を追い詰める二流のハイエナどもに、超一流のハイエナがどういものか教えてくれよう』

やかましいわ。

とにかく、ちよūdいいい気分転換にはなる。
狩りつくしてくれる。

『ハイエナ姐さん。素敵です』

あまり褒めるな。照れるだろう。

ハイエナどもはあつという間に消え去った。

狩ることは考えていても狩られることは考えてなかったらしい。

フランデナ草原の雑魚モンスターは私の敵にならない。

ゼバルダ大木上級で蝶を根こそぎ倒してポイントを荒稼ぎした私は、上級の域を突破してしまったようだ。

あとはハイエナどもに狩られるはずだったモンスターだけ。

草をかき分け中心に向かう。

そこにいたのは小さな子犬だった。

驚いた顔をして円らかな瞳で私を見上げている。

『あらかわいい。食べちゃいたいわ、じゅるり』

食べたくはないが、かわいいという部分には大賛成だ。

いったいなんなんだ、この守ってあげたくなるかわいさは！

ぎやうううと小さく唸っているが、余計にかわいさを増している。

ああ、いけない。いけない。

これを狩るなどんでもない。

未来へと守り継がねばならないかわいさだ。

この子犬を持って帰ってもいいだろうか。

『メル姐さん。母性本能をくすぐられてるところ悪いんだけどさ』

ほんとに悪い。

静かにしている。

今は誰にも邪魔をされたくない。

お前のぱっぱらばーな声で私の安らかな心が台無しになる。

見えない口を閉じて呼吸も止めていてくれ。

ほら見てみる。

この子犬ときたら、きらきらした瞳で私をみている。

きゃわいいじゃないかあ。

『うわキモ……主に顔がキモイ、次いで声がキモイ、おまけに動きもキモイ。それで姐さん。こいつき、犬じゃないよ。どちらかという猫かな。しかも、下についてるから雄だね』

なに、そうなのか。

なんだなんだ。子犬じゃなくて子猫ちゃんだったかあ。

まあ、犬だろうが猫だろうがどちらでもいい。

性別だって関係ない。

このかわいさは絶対的なものだ。

そういえば、このモンスターは初めて見るな。

なんてモンスターだろう。

『なに言ってるんのさ、キモ姐さん。三日間、血眼で探してきたじゃない。フランデナ草原のボスモンスターにして、その全域を統べる獣王——カルマレオだよ』

……………えっ？

いや。いやいやいや、お前こそなにを言ってるんだ。

カルマレオは猫じゃなくてライオンなんだろ。

大きさも人間よりずっとずっと大きいと聞いている。

『ライオンは哺乳綱ネコ目ネコ科ヒョウ属に分類されるから猫の親戚だよ。それに雄と雌がいるつてことは子供だつてできるでしょ。こいつはまだ幼獣だね。それにさ！俺だつて体さえあれば、今ごろメル姐さんのお腹に新しい生命……やめて！埋めないで！』

そうなのか。

こいつはカルマレオの子供なのか。

『やったね、姐さん。フランデナ草原クリアだ。サクッと刺しちゃつてよ』

シユウの言葉が理解できない。

このかわいさの象徴に下劣なシユウを突き立てる。

そんなこと……。

『まさかだけど。かわいいから刺せないなんて言わないよね。こいつはただのモンスターだよ。割り切ろう』

シユウを子猫に向ける。

子猫は体をびくりと震わせ、瞳を潤ませながら私を見てくる。

鳴き声も小さく弱々しいものに変化している。

シユウが震え始めた。

違う。震えているのは私の手。

追い詰めているはずの私が追い詰められている。

お、おいシユウ。

なにか良い方法はないのか。

卑怯でチートな方法はお前の得意分野だろう。

『やれやれだよ。こいつを殺さないで済む理由が欲しいってことだね』

そうだ。

そうなるな。

私にこの子は殺せない。

貴様を向けるだけで、心が押しつぶされそうになる。

『ほんつと甘ちゃんだねえ。血糖値が心配だよ。まあいいか。カルマレオのドロップアイテムは「あつと驚くカルマレオの鬘」って聞いている。つまり、カルマレオにはそれはそれはご立派な鬘があるんだろうさ。でも見てわかるように、こいつはまだ鬘が生えてない』

そうだな。

さらっさらの表面だ。

そこが素晴らしい。

さ、触つても大丈夫だろうか。

『……鬘が生えてないなら、こいつを現時点で倒しても別のドロップアイテムになるかもしれない。それはそれで何が出るのか興味はあるけどね。だけど、ギルドからの上級認定はあくまでご立派な鬘。それなら、鬘を落とさない可能性のあるこいつを殺す必要性は薄くなる』

おお。そのとおりだ。

生え揃つてもいない鬘を落とすなんて考えられない。

この子が鬘を落とすわけがない。

残念なことに雄は見当たらない。
子猫は何度も私を振り返りながら、群れへと歩いて行く。
群れの中の一頭にすりすりとしゃれ合う。母親なのだろう。
母親も子猫をペロペロなめている。
その後も子猫は私をちらちら振り返りながら立ち去った。
私は姿が見えなくなるまでぼんやりと見送った。
もつと一緒にいたかった。
アイラとの別れの比ではない。
今日は枕を濡らさずには寝られないだろう。

翌日。

ギルドは前日以上に盛り上がっていた。
端でこつそり様子を伺うに、どうやら町の近くでカルマレオの雄が
発見されたらしい。

さらに、ちようと遠くの町から討伐隊もやってきていた。
過去に何度かカルマレオに挑んだことのある有名なパーティーら
しい。

彼らが今日はカルマレオの討伐に向かうとあつて騒ぎになつてい
たようだ。

『メル姐さん。あの討伐隊は見た感じなかなかの手練れだ。チャンス
だよ』

たしかにあの集団は強そうな雰囲気がある。

よくわからないが剣や鎧もピカピカして高そうだ。

私も仲間に入れてもらうべきだろうか。

『なに馬鹿を言ってるのさ。メル姐さんは鬣のギルド提出が目的だけ
ど、彼らは鬣の売却が目的なんだよ。ぼっちの姐さんとは相容れない
存在だ』

……わからないな。

それではいったい何がチャンスなんだ。

あと、無理にぼっちつけなくていいから。

『彼らは狩りのプロだよ。獲物に対する嗅覚がメル姐さんの比じやな

い。すぐにカルマレオを見つけてくれるはず。つまりね。俺たちは彼らの後ろをただ追いかけて行くだけでカルマレオにたどり着けるのさ』

おお。なるほど。

でも、追いかけるということは私たちは後ろだろう。

奴らが先にカルマレオを倒してしまっただろうするんだ。

『その可能性は極めて低い。何度も挑んでるってことは退き際も知ってるはずだよ。それに、手練れならまずボスの変化を知るために軽い戦闘を数回おこなって様子を見るんじゃないかな。そのあとで本格的に仕掛けると考えられる。俺たちは彼らの前哨戦のあとを叩けばいい。彼らが本物の実力者なら今日中にクリアだ』

やはりこいつは卑怯者だ。

性根が腐りきっている。

もうどうしようもないな。

それでも、討伐は早い者勝ち。

戦闘中に横入りしてトドメだけ頂く訳でもない。

別に問題はなからう。

よし。その作戦でいこう！

『良い返事だ、メル特務！ それではオペレーション「ロンリーハイエナ」を現時刻より開始する！』

こうして本日は討伐隊の追跡をすることになった。

シユウの言うとおりに討伐隊を追いかけていく。

尾行はなかなか本格的だ。

まず、「なんちゃってステルス」とか言うスキルで姿を消した。

実際には姿が消えている訳ではなく。

可視光線をねじ曲げて、外部から見えづらくしているだけらしい。問題点として私からも彼らが見えづらくしているだけらしい。

また、凝視せずになるべくぼやかして見るようにとも教えられた。視線が感じ取られてしまうらしい。

それは私にもわかる。視線で肌がひりひりするからな。

そのためステルスの問題点がこちらからの視線を強くしないという点で、よい方向に働いているとシユウは話す。さらだ。

常に彼らの風下側に位置するよう回り込んでいる。ここまでする必要があるのかと疑問を呈したら怒られた。

『精鋭部隊員なら臭いだけで敵を察知するんだよ！』
どうやらそんなものらしい。

シユウの国の精鋭部隊は恐ろしい人物がいるようだ。無駄に本格的な甲斐もあって、順調に追跡できている。そして、昼過ぎ。

ついに念願のカルマレオを見つけた。

体長は聞いていたとおりだ。

大人が十人ほど手を伸ばしたくらいの大きさ。

やや黒ずんだ黄色の体。

首を覆う暑苦しいほどの鬣。

その眼光は今まで見てきた敵の中でも一番の鋭さを持つ。

あの子猫も成長するところなるのか……。

こんなかわいくない獣に成長してしまうのか。

時の流れの残酷さを思い知った。

だが、ありがたい。

これなら容赦なく殺れる。

カルマレオと討伐パーティーの戦闘が始まった。

『強いね。ボスも彼らも』

ボスはその大きな体躯に見合わぬほどの速さでパーティーを翻弄する。

パーティーもうまく役割を分担させており、攻撃を加えている。それでもボスにはダメージが通っていない。

『物理耐性に加えて魔法耐性もあるみたいだ。俺たちには関係ないけどね』

そうだな。

今のところカルマレオの動きもくつきり見えている。

これに加えて状態異常と能力半減が入るなら十分戦えるだろう。

おつ。

リーダーをしていた剣士の一撃がカルマレオに入った。

一瞬、姿勢が崩れたもののすぐにカルマレオは立ち上がる。

『すごい治癒能力だね。あつという間に傷がふさがったよ。まあ、特殊能力だろうから無効化されるけどね』

その通りだ。

あの治癒能力は恐ろしいが、スキルで無効化されるなら考慮に入れる必要はない。

……おや、負ける要素が見つからないぞ。

パーティーが退いていく。

どうやら本当に様子見だったらしい。

カルマレオもそれがわかっていのか特に追いかけることもしない。

パーティーはついに視界から消え去った。

さて――、

『じゃあ、いこうかハイエナ姐さん。孤高の獣王とやらに、真のぼつちがどういうものか見せつけてやろうぜ』

いちいちうるさいが、許してやろう。

私もようやく探索やら追跡といった小難しいことから解放されて気分が良い。

カルマレオへと疾走し、躍り出る。

どうやらあの子猫の親で間違いない。

目を見開き、口も開いて驚いている。

その顔が昨日見た子猫のものとそっくりだ。

果たして、いきなり飛び出たことに驚いたのか。

それとも人間がたった一人で挑むことに驚いているのか。

ふふ、あるいは私の強さに気づいて驚いているかもしれないな。

『あのさあ、メル姐さん。言わないでおこうと思ってたんだけど、いかげん調子に乗ってきてウザイからも言うね。昨日の子猫やこの

ボスは確かに驚いたような顔をしてるけど、実際には驚いている訳じゃないんだ。フレーメン反応っていう生理現象なんだよ』

うん、どういうことだ。

驚いているわけじゃないのか。

『うん。姐さんが飯をたらほど食べたらゲップをして、俺が朝にテントを張るのと同じ生理現象。感情とはほとんど関係ない』

よくわからないが、そんなものだったのか。

それで、そのふれえめん反応っていうのはどういいうときに起こるんだ？

『臭いだよ。異性の尿やくっさい刺激臭を嗅いだときに生じるんだ。ちなみにゼバルダでもらった馬が笑った表情をしたのもこの反応。要するにメル姐さんが臭かったからなんだ。おっと、安心して。馬に逃げられたのは臭かったからじゃなくて、乗馬の才能がなかっただけだから。それと怒りは俺じゃなくて目の前にいるボスにぶつけてね』

カルマレオはまだ驚いた表情で私を見ている。

ふっ……ふふふっ。

そうか。そうなのか。そうだったのか。

貴様も私が臭いと言うんだな。

この私が臭うと！ フレーバーだと！

よろしい。ならば抹殺だ。

この屈辱を受けた私にただの抹殺ではもはや足りない。

お前の体に全状態異常を叩き込んで、有無を言わせず鬪り殺しにしてやる。

征くぞ！ シュウ！

『レンジャーー！』

こうしてカルマレオとの戦いが始まった。

幕引きはいつもあつけない。

苦戦にすらならなかった。

近距離戦を挑んだ時点で、このカルマレオに勝ち目はなかったのだ。

逃げればなんとかなったのかもしれないが、王者のプライドがそれを許さないのだろう。

すでに獣王は消滅寸前。

立ち上がることもできず、私を力なく見つめている。

『さあ、メル姐さん。トドメをよろしくお願ひしますよ』

シユウの言うとおり、あとは突き立てるだけ。

獣王に一歩近づき、シユウを振り上げたまさにその瞬間――、

私と獣王の間に小さな影が割り込んできた。

驚いてシユウを止める。

その影は昨日の子猫だった。

小さく唸り私を威嚇してくる。

なんというかわいさ。

どいてもらおうと手で払おうとしたが、その前にカルマレオによって払われた。

子猫は大きく宙を飛んで離れた場所に転がる。

私に殺されないようカルマレオが最後の力を振り絞ったのだろうか。

そんなことをしなくても私は子猫を殺す気はない。

『違うよ。その考えは完全に間違ってる。正解の欠片もない』

どうということだ。

今のは息子を守る行為だろう。

『それは違う。メル姐さんは例えチートな俺を使ったといっても、正面からカルマレオと戦って勝った――勝者だ。一方のカルマレオはあえなく敗れた敗北者。自然の掟に従うと勝者は敗者に絶対の生殺与奪権を持つ。この間に余計な不純物が存在してはならない。この掟に逆らうのは人間とハイエナだけ。姐さんは逆らっても大丈夫だよ』

それはもちろん私が人間って意味で言ってるんだよね。

『えっ……ああ、うん。で、話を戻すと。そこに転がるこわっぱはその絶対的な自然の掟を破った。だから、カルマレオは自然の王者として愚かな真似をした馬鹿をなぎ払った。それは自然に生きるものす

ることではないからね。ましてや自分の息子——王の血を引くものならなおさらだ。だからさ。さっきの行動は息子をかばったんじゃないかと息子を叱りつけたものなんだよ。わかってくれたかな、ハイエナ姐さん』

シユウが私の誤解を説明している間にも子猫はゆつくりと立ち上がり、私の方へふらつきながら向かってきている。

その驚いた顔はなんとかやめられないか。

いろいろ台無しなんだが……。

『生理現象だから無理だろうね。で、トドメは?』

子猫は再び私とカルマレオの間に立ちはだかる。

目蓋を重そうにしつつも私を睨んでいる。

カルマレオは前脚を上げたが、力尽きたのかそのまま下ろしてしまった。

早く殺せと、これ以上の雪辱を与えてくれるなどその目が語りかけている。

「……なあ。シユウ——」

『俺は失敗するって言ったよね。メル姐さんは勝つことができても、トドメは刺せないんじゃないかって思ってた。だから、俺はどんな結果になってもなにもいう気はないよ。それにさっきも言ったとおり姐さんには殺さないっていう権利もあるんだからね』

そうか。

私が悪かった。

私は甘い。甘すぎた。

お前の言うとおりで甘ちやんだ。

『そうだね。甘すぎて反吐が出るよ。でも、その甘ったるさ——嫌いじゃない』

けつきよく私にはトドメが刺せなかった。

距離を開けてカルマレオが治癒するのを見届けて、背を向けて立ち去った。

後ろからカルマレオが吠えていたが、私には何をいつているのかわからない。

トドメを刺さなかった私を蔑んでいるのかもしれない。間違いない、礼を言っていることはないだろう。別になにを言われたってかまわない。私はもう勝者として選んだのだから。

町の宿に帰ってさっさと眠る。

明日は朝に町を出て南の上級ダンジョンに向かう。

無駄な時間を過ごしてしまった。

夢を見ることもなくぐっすり眠っていると、なにやらドンドンと物音が聞こえた。

無視しようかと思ったが、さらに大きなものになる。

ええい！ うるさいぞシユウ！

「夜分に済みません！ たいへんなんです。目を覚ましてください！」

どうやらシユウではなかったらしい。

よく考えたらシユウに物音はたてられない。

窓を見るにまだ暗い。

今は何時頃だろうか。

とりあえず、シユウを手にして扉を開ける。

宿の主人と、誰だ……？

「私はこのギルド事務員です。ここに上級の冒険者がいると聞いて伺いました。さっそくなんです、モンスターの大群がこの町に向かっています。手を貸して頂きたい。すでに他の冒険者の方にも門に向かつてもらっています」

寝ぼけていたため事情を把握するのに時間がかかった。

『さっきから地響きがすごいよ。よくこの中で熟睡できるもんだ。新しい才能の発見だね』

シユウの声でようやく気づいた。

なんだか景色が揺れている気がしたが、寝ぼけているためではなかったらしい。

「それで、パーティーの方はどちらにおいででしょうか？」

ギルド職員はまじめな顔で聞いてくる。

『ぼつちでごめんね。職員さん』

突っ込む気力もまだ出てこない。

ソロだ、と小さくぼやいて門に向かう。

どうやら時刻は夜明け前。

東の空にわずかな赤みが射している。

冷えた空気が心地よい。

門には多くの冒険者が集結していた。

昨日、追跡したパーティーの姿もある。

これだけ冒険者がいるのになんと静かなものか。

地響きもいつの間にか止んで音がしない。

静かすぎて不気味だ。静寂が耳に痛い。

こういうときこそ何かしゃべれよ。

門から外を伺うと、多くの影が映っていた。

数十では足りない。数百はいるだろう。

大小様々なモンスターが扇状の列を作っている。

その先頭。私たちに一番近いところに見覚えのある影が二つ。

鬣のある大きな影。それに寄り添うかわいらしい影。

——カルマレオだ。

『お礼参りかと思っただけど、ちよつと雰囲気が違うね』

カルマレオも私を目ざとく見つけ、低い声で吠える。

『どうやら姐さんをご指名みたいだよ』

ええええつ。

今までも嫌なことは多々あったが、これほど嫌なことは初めてだ。

ここでも出て行けば衆目に晒される。

視線で焼き消えてしまうのではないだろうか。

子猫ちゃんも小さく吠えて私を呼び始める。

ふむ、これは行かざるを得ないな。

冒険者の列から一人はみ出す。

まあ、はみ出すのは私の得意技でもある。

カルマレオへと一步。また一步と近づぐ。

シユウが言ったように戦う気はないらしい。

子猫が私に近づいてくる。

もつと近くにおいでえ。

ほんとに来てくれた！

口になにやら光を啜えている。

アイテムだろうか。

『やるつてさ。勘違いしちゃいけないよ、キモ姐さん。これはお礼じゃない。貸し借りの精算だ』

シユウはよくわからないことを言っている。

私は手を差し出してその光を受け取る。

そのまま頭を撫でようとしたが、避けられた。

……とりあえずアイテムを顔に近づけて確認してみる。

——なんだか治り草。

『ビュウー！ 気が利いてるじゃないか！』

たしかに嬉しいがそれ以上にうれしいことがある。

子猫が私の足に頭を、額を、鼻をこすりつけてきた。

お、おとおお。ついに、ついに触ってくれた。

それでも顔はやっぱり驚きの表情なんだね……。

子猫はカルマレオの元に戻り、親子ともに吠える。

それに合わせて周囲のモンスターも声をあげる。

その声は合唱となって私を包む。

合唱が終わるとカルマレオと子猫は背を向けて駆け抜けていく。

子猫はもう振り向かない。王に振り向くことなどないのだ。

彼らは扇の中心を貫き、さらに扇は形を留めて王たちに従う。

昇り始めた日が彼らを白く照らす。

夜明けとともにフランデナ草原の攻略は終わりを迎えた

第08話 「ナギム廃坑を越えて一人」

ガンムルグの町。

フランデナ草原の南に位置するその町は、職人の町として有名である。

東に位置するガンムルグ山により鉱物・水・木と多大な恩恵を受けている。

手先の器用なドワーフが多く暮らし、様々な武器・防具・装飾品を製作している。

町から東に向かい、ガンムルグ山を越えると私の故郷であるエルメルの町にたどり着く。

山道は急峻なうえ標高もある。山越えは至難を極める。

昔は坑道が掘られており、そこをたどれば越えることもできていた。

しかし、坑道がダンジョンとなり廃坑となってしまった。

この廃坑は上級ダンジョン——ナギム廃坑と呼ばれている。

ナギム廃坑の誕生と同時に、エルメルの町へと続く比較的安全な道は閉ざされた。

当初の計画としてはゼバルダ大木、フランデナ草原、ナギム廃坑を回って家に帰る予定であった。

ところがだ。

ゼバルダ大木で上級ダンジョン制覇の証を二つ手に入れてしまった。

さらにフランデナ草原でも無事にダンジョン制覇の証を手に入れた。

三つの上級をクリアしたことになり、超上級ダンジョンへの入場が可能だ。

そうなるも廃坑を通る必要もない。

このまま南に進み超上級ダンジョンへ行こう。

——そう考えていたが、シユウは帰った方がいいと言い始めた。

たまには両親に顔を見せてやれと口やかましい。

帰れ帰れ、あまりにもうるさい。

そのため仕方なく。

本当に仕方なくいったん帰省することにした。

『そうだよね。俺がうるさいからだよね。そう言えばさ。宿で出されたイモのスープ。メル姐さんのお母さん——つまり、俺のお義母さんが作ってたスープに良く似てた気がするんだけど。まさか、ママの味が恋しくなったなんてことはないよね。ふるさとは遠くにあつて思うもの、だよ』

……お前。

ほんとにちよつと鋭すぎないか。

斬れば斬るほど鋭くなるなんて聞いてないぞ。

あと私の母は、お前のお義母さんでは断じてない。

ガンムルグの町は今日で四日目。

場所はガルム武具店。

新しい靴を受け取りに来ている。

靴が傷んできていたため、到着一日目でこの店に製作の依頼を出した。

せつかくのガンムルグの町。

何か作つてもらつてもいいだろう。

そう思つて目についた近くの店に入った。

モンスターのドロップアイテムを売つてお金も貯まっている。

あとで聞いた話になるのだが……。

このガルム武具店はガンムルグの町でも一、二を争う武具店だったらしい。

口元を厚く覆う髭が特徴的なドワーフ——ガルムが店主をしている。

ガルムは貴族の装飾品から一流冒険者の武具までなんでも作る。

製作依頼料は当然べらぼうに高い。

そのうえ、気に入らない仕事は受けないというこだわりもあるようだ。

どうしてそんな人物が私の依頼を受けたか。

答は簡単にして単純。

シユウだ。

まるで私の話を聞いていなかったガルムは、シユウをチラ見すると視線を縫い付けられたように動かなくなった。

その後、シユウを渡してやるとぽつりぽつりと口を開いた。

シユウが喋ってもガルムに驚きは皆無。

持ち主の技量のなさ、今まで攻略してきたダンジョンをシユウが語り始め。

どんだん話は逸れていきガルムの溺愛する一人息子やら、女性の胸のサイズについてと談義していた。

この一見気難しそうなドワーフは人間の女が大好きなド変態だった。

特に背が低く胸の小さな女の子に心が惹かれると話す。

実際に幼児体型の人間女性を娶っているらしい。

図体のでかい女は好みじゃないそうだ。

わるうございましたね、大きくて。

とにもかくにもだ。

随分と楽しそうであった。

無愛想だった顔も、話が終わる頃にはもじやもじやした髭の間から口が見えるくらいの笑顔を見せていた。

シユウとは女性の好みこそ違えど、とても気があったらしい。

つまり、私とは気が合わないということになる。

私の靴は良い時を過ごせたお礼に、おまけとして格安で作ってもらえることとなった。

理由はなんであれ作ってもらえれば良いのだ。

早速、受け取った靴を履いてみるとサイズはぴったし。

足と靴が一体化しているような素晴らしい履き心地だ。

履いているうちに慣れてくるとガルムは話すが、さらに良くなるとは恐ろしい。

靴の側面に変な模様が刻まれている。

これはガラム印というもので、ガラムが手ずから作ったものには必ず印されているそうさ。

ガラムに「また来いよ」と声をかけられて店をあとにした。

念のため言っておく。

声をかけられたのはシユウであって私ではない。

あの変態ドワーフは私がシユウのおまけだと考えている節がある。

ナギム廃坑入り口に到着した。

昨日、一昨日と近くの中級ダンジョンで暇を潰していた。

ダンジョンの傾向は似ていると聞く。

こちらもどうにかなるだろう。

「あの。すみません」

小さな声が聞こえた。

ちらりと振り返る。

そこには黒髪で彫りの深い少女が立っていた。美少女だ。

こう言うとまるで私が少女じゃないようだが、私だって立派な少女である。

乙女と言い換えてもらっても構わない。

『果たしてそうだろうか?』

なにその問題提起。

はつきり否定されるよりも傷つくんだけど。

別に少女でいいでしょ。

文句言わない。

「あのう」

少女がおずおずと声を出す。

おい。誰か知らんが声をかけられてるぞ。

私は正面をむき直す。

あれ?

誰も居ない。

……えっ、ひよつとして私に声をかけているのか。

「はい。貴方です」

ギルドと宿の人間以外が私に声をかけてきたのはいつ以来だろう。たしか……………。

まったく思い出せない。

これは感動ものだ。

今日のことはしかと日記に書き記しておこう。

『日記なんてつけてないし、そもそも持ってないでしょ。記憶を捏造しちやダメ』

馬鹿がつ。

今日からつけるんだよ。

まあ、声をかけられたと言ってもせいぜい道を尋ねられるくらいだろうがな。

それで何の用だ。

あいにくこの辺りの地理には詳しくないぞ。

「いえ、道を聞きたかった訳ではありません。昨日、中級ダンジョンをソロでクリアされてましたよね。ナギム廃坑に挑まれるなら、僕とパーティーを組んでももらえませんか」

『おいおい、オイオイオイオイ。どういうことだ！ 何が起こっている！ 俺はこんな真っ昼間から夢でも見てるってのか?!』

落ち着けシユウ。

なにやら夢ではないようですぞ。

「あの、大丈夫ですか？」

少女が心配そうな顔で見上げてくる。

大丈夫なわけがあるか！

大問題だよ！

おいシユウ。シユウ君。

私はどうするべきだ。

いったいどうすればいい。

シユウよ…………私を導いてくれ！

『いや。よく考えたら、別におかしなことじゃないよね。メル姐さんが中級をソロでクリアしてたことを知ってたからさ。実力者だって

認めてるんだよ。それに彼の武器を見てみて。ガルムの武器だ』

シユウの言葉を受け、視線を少女の武器に移す。

少女の右手には華奢な腕に似合わないほど大きく無骨なクロスボウが垂れている。

腕よりもクロスボウの方が長いし大きい。

その台座には私の靴と同じガルム印が刻まれている。

私の印よりもふるめかしく擦れているようだ。

相当に使い込まれているように思える。

『この子。相当な実力者じゃないかな。……ああ、そうか。もしかして——』

なるほど。そういうことか。

私を実力者として認めているというだけの話か。

シユウのこともある。

あまりパーティーは組みたくない。

そもそもパーティーを組む理由がない。

上級なら一人でも問題なく進めているからな。

お前、いやすまん、えーと……。

「ユリイです。僕も中級をソロでクリアしたんですが、上級はさすがにソロでは厳しくて誰か組んでももらえないかと」

ユリイか。私はメルだ。

別に私でなくても他にいくらでもいるだろう。

ギルドでも募集していたのを目にした記憶がある。

「いえ……。実は問題がありました。パーティーは組みづらいのです。まあ、問題持ちか。

今度はいったいなんなんだ。

私には問題のある人間しか集まってこないのか。

で、その問題は？

「パーティーを組むと当たらなくなるんです」

言っている意味がよくわからない。

もうちよつとわかりやすく言えないか。

『パーティーを組むと矢が当たらなくなるって言ってるんだと思う

よ。いるんだよね。一人だとやたら強いのにさ。チームを組むと異様に動きが悪くなるやつ』

ソロでは矢が当たるのに、パーティーを組むと矢が当たらなくなるのか？

「そうなんです」

それで、どうして私なら組んでも大丈夫だと思ったのかな？

理由によっては怒るぞ。

「昨日、中級でメルさんの強さをとくと拝見しました。予測ですが上級どころか超上級の力を持たれているのではないですか。それなら僕がいても、さほど邪魔にならないんじゃないかと思っただんです」

そういうえば、ダンジョンで何人かに出会った気がする。
見られていたのか。

『こっちの力をちゃんと測ってるね。それに解決法も考えてる。えらいえらい』

よくわからんが、お前のチートでどうにかなりそうか。

『直接は無理かな。同士討ち無効で後ろから撃たれるのは防げる。でも、パーティーを組んでうまく動けないってのは心の問題が大きいからね。チートでどうにかできるもんじゃないよ』

そんなものか。

じゃあ、パーティーを組む理由もないな。

『そう早まらないで。チートじゃ直接どうこうはできないよ。でも、間接的ならどうにかできるかも。この子もわかってるみたいだね』

もつとわかりやすく言え。

お前や引きこもりエルフは小難しい言葉を並べるから困る。

『パーティー内で自分の役割を果たせるか・果たせているかってのが本人のプレッシャーになるんだ。ユリイも言ってるように姐さんは上級のレベルじゃない。一人で十分すぎる。それならユリイに要求される役割は少なくなる。心の負担が小さくなるわけだよ。たいして役割を果たさなくても一応パーティーだからね。これで上級をクリアできるならユリイも自信がついて、今後は多少まともに動けるかもしれない』

つまりどういうことだ？

『ええ、これでもわかんないの。頭ん中、腐ってんじゃない。まとめるとね。姐さんにはパーティーを組むメリットがほとんどない。ただし、デメリットも俺の存在を知られること以外にはない。一方のユリイは上級もクリアできる上に、今後の活動に関わる問題へ何らかの対処ができるかもしれないってメリットがある。デメリットはぶつぶつ喋るほんのり臭う馬鹿女とダンジョンに潜らなきゃならんってこと』

おっと足が滑った！

『謂われのない暴力が俺を襲うっ！ ま、最終的に決めるのはメル姐さんだからね。それと、この子なら俺の存在を知られても問題ないと思うよ』

おや。

そう言えば今日はえらくまともだな。

気持ち悪い発言も極めて少ない。

もしかして病気か？

移すなよ、ばつちい。

『俺はばい菌じゃないし、バイでもないよ！ 基本的に胸の大きな女性にしか興味ないですし……ねえ』

まあた、なんかよくわからんことを言い始めたよ。

なにが「ねえ」なんだか。

シユウが問題ないと言う。

それなら大丈夫なのだろう。

私はユリイとパーティーを組むことにした。

『メル姐さんがまともにパーティーを組む。俺うれしいよお。涙がとどまるところを知らない……。閉じた世界が広がるね』

一言多いぞ。

それに涙どころか目すらないだろ。

私の頭を怒声が駆ける。

『馬鹿野郎！ もっと仲間の配置を考えろ。その位置から狙えるのか

！』

「すみません兄貴！」

シユウとユリイはノリノリだ。

パーティーを組んだ後、シユウはもちろん喋った。

ユリイはシユウに少しばかり驚きはしたもののあっさり納得してしまった。

「真に良い武器は語りかけてくるものです。父もよくそう話してくれていました」

いや、そんなことないだろ。

お前の父親の頭が心配だ。

「僕も今みたいになよなよしたままじゃなくて、父やシユウさんのような一角の男になりたいです」

……何か言い出したぞ。

別に女のままでもいいじゃないか。

たしかに女の冒険者はなめられないために男らしく振る舞うものもいる。

それでも実力には関係ない。

それと、シユウのどこが一角の男なのか教えてくれ。

『バツカ姐さん。俺はどっからどう見ても男らしいでしょ。見てよこの硬くいきり立った一物。黒光りするツヤのあるボデー。危うげに尖った先端。男の中の男じゃないか』

うん。

ただの剣だ。

どこからどう見ても剣。

剣以外の何ものでもないな。

『なんて愚かなメル姐さん……。ユリイ。君は見所がある！ よしまかせろ。俺が貴様を立派な男にしてやる！ 俺のことは兄貴と呼ぶんだ！』

「わかりました、シユウの兄貴！」

なんで私が間違ってるみたいなの流れになっているのか。

とにかく、こうしてよくわからない兄妹関係ができあがった。私は完全に置いてけぼりである。

もう慣れてきたし、関わりあいたくもないので好きにやらせておこう。

なんだかんだ言っつてシユウの指導はまともだ。

むしろ、まともすぎて怖い。

パーティーの基本から始まり、位置取り、心構えなど説いている。聞くところによると、元の世界でおんらいんげえむとやらから学んでいたらしい。

清掃員と聞いていたが、こいつもこいつで幾多の戦いをぐぐり抜けて来たのだろう。

ナギム廃坑の敵は変わったものが多い。

土魔法を唱えるツブテコウモリ。

いきなり足下から現れるドーモグラ。

岩に擬態して襲ってくるナントゴレム。

広いとは言えない道幅に次々と押し寄せるモンスター。

ソロならそこそこ面倒なダンジョンだ。

今のところ苦戦はない。

パーティー用のスキルに加えて、射手専用スキルも選択しているらしい。

射手専用スキルその一「敵感知」。

スキル共有により私にも効果が発揮された。

とても……。いや、とてつもなく優秀なスキルだ。

モンスターがどこにいるのかわかる。

視界に変な円が出てきて、その横に数字が出ている。

モンスターとその距離らしい。

近づけば弱点と耐性属性も教えてくれる嬉しい機能付き。

なんと望遠もできるそうだ。

後ろから近づいてきても矢印が出てきて教えてくれる。

さらに自分を標的にしているモンスターなら遠くでも反応する。

かゆいところに手が届くスキルと言える。

『今度から右手に小さめのクロスボウを取り付けた方がいいかもしれないね。使わなくてもこのスキルが選択できるならそれだけで価値があるよ』

善処しよう。

これは便利だ。

射手専用スキルその二「方向転換」。

一度だけ矢がモンスターに向かって軌道を変える。

動き続ける敵以外ならこれではほぼ必中だ。

『これなら才能のないメル姐さんでも当てられる。クロスボウ装備しよう』

前向きに検討しておこう。

確かにこれなら私でも使えそうである。

ユリイは敵に矢が当たらない問題を解決するため、このスキルは外している。

チートではなく自身の実力で敵に矢を当てられるようにならないければ、根本的な解決にならない。

射手専用スキルその三「必殺」。

その名の通りのスキルだった。

『説明しよう！ 矢に当たれば敵は死ぬ！ メル姐さん。エルメルの町に着いたら、即刻クロスボウを買いに行こう。「方向転換」と「必殺」の組み合わせはやばい。これこそチートだよ！』

うむ。

もはや迷うことはない。

なんとも恐ろしいスキルだろうか。

ボスに効果はないらしいが、それでも雑魚が一撃で屠れるなら十二分だ。

——とは言ってもユリイの矢は当たらないからあまり効果を発揮していない。

遭遇即消滅は図体の馬鹿でかいゴーレムくらいだ。

それでも敵感知のおかげで遠距離からの魔法と下や横から飛び出してくるモグラは対処できている。

そんなユリイは、シユウの珍しくまともな指導の甲斐もあってだろうか——。

矢が徐々に当たるようになっていた。

ダンジョンに入った頃は敵の近くを通り過ぎるだけだった矢。

それが今では二発に一発は敵を貫いている。

『メル姐さんと違ってさ。ユリイには元から才能があるんだ。あとはちよつと背中を押してあげるだけだよ』

ちよつぱり良い話の中でも私を貶すことを忘れない。

なんとというクソ野郎。

これが男の中の男と言うのだから笑わせる。

ちなみに私にもスキルが増えた。

催眠耐性。

どんな敵が催眠を使うのかわからないが、有るに越したことはないだろう。

さらに鈍化付与も手に入れた。

ときどき斬りつけた相手の動きが鈍くなる。

こちらにも有るに越したことはない。

特殊スキルは手に入らなかった。

さて——。

恒例になってしまったが、目の前にはボス部屋の扉。

木ではなく岩でできているため重そうだ。

「ボスですね。もしボスを倒したら……、僕はこのクロスボウに恥じない立派な男になれるんでしょうか」

『阿呆がッ！ なに甘ったれたこと言ってるんだ！ になれるか、じゃねえだろ！ なって見せろよ！ ここのボスを、そのクロスボウでぶっ殺して立派な男だって証明して見せろ！』

「すつ、すみませんでした」

『男が簡単に頭を下げるな！ 謝るな！ 行動で示せっ！』

「はいっ！」

盛り上がっているな。

そっとおこう。

ユリイはクロスボウをとても大切にしている。

先に父がどうのこうのと言っていた。

彼女のクロスボウは父親の形見なのかも知れない。

ガルムのクロスボウを持つほどだ。

さぞかし高名な射手だったのだろう。

ユリイは立派にパーティの役割を果たしている。

ボス戦もその調子で頼む。

お前の矢を当てにしているぞ。

「は、はいっ！ ありがとうございます、姐御。やってみせます！」

姐御はやめてほしい。

本人もやる気だから大目に見るか。

ボス部屋にはやや大きめのゴーレムが九体。

それぞれ色違いで、形も微妙に違う。

横一直線に並びおのおのが変なポーズを取っている。

私たちを確認すると中心にいた赤いゴーレムが何か叫ぶ。

周囲のゴーレムもそれに倣って声をあげ、中心のゴーレムへと集まっていく。

なにやら複雑に組み合わさり変形し、大きな巨人が誕生した。

大きさは今まで出会ったモンスターと桁違いだ。

足一本、腕一本がそれぞれ一体のゴーレム並みだ。

顔はリーダーの色だが顔が皆同じだったため区別がつかない。

両手には馬鹿でかい棍棒。

よく見ると一番端に立っていたゴーレムが形を変えたただけだ。

このゴーレムの寄せ集めがナギム廃坑のボスモンスターである。

名は超岩石体ゴレムオンというらしい。

特徴はその硬さ。

ゴーレムからできていることもあり、物理的な攻撃は関節と目以外

に効果がない。

魔法も水と氷属性しか効果がないと聞いている。

ただ残念なことに体があまりにも大きく重いため動きが極めて遅い。

遅いと言うよりも基本的に動かない。

動くのは棍棒を持っている腕だけだ。

それでもゴーレム一体分の重量を持った棍棒が振り下ろされ、振り回される。

脅威の破壊力と言えるだろう。

定石通りの攻略法ではまず部位をそれぞれ破壊していく。

火魔法で一気に熱し、水で冷やすことにより防御力を弱められるそうだ。

だが、私たちは魔法が使えないため定石通りの戦法は使えない。

——ではどうするか。

答は単純。

近づくだけだ。

私の名前を呼んではいけない例のあのスキルにより特殊効果は強制解除される。

ボスだろが関係ない。問答無用だ。

ゴーレムオンの特殊効果は「合体」。

私が近づくところのボスはいったいどうなるか——。
おわかり頂けるだろうか？

『これはむづかしい……』

「すごいです。姐御！」

ボス部屋に転がる色彩豊かな八つの岩。

そして、赤いゴーレムが一体ほつり。

ゴーレムオンの合体は強制解除され、それぞれのゴーレムに分離された。

しかも合体する際に変形したゴーレムは元に戻らなかった。

中心以外のゴーレムはただのパーツとなってしまう、動くことすらできない。

さらにパーツにはボス属性も失われている。

ユリイの「必殺」を帯びた矢で一撃死。ただの的だ。

広いボス部屋に私たちと赤いゴーレムだけが取り残された。

こいつにだけはボス属性がついているらしく、一撃で死ななかつた。

赤いゴーレムは上を向き、叫びを上げる。

悲しみ咽び、まるで泣いているようだ。

『うん……。お前はいま泣いていい』

赤ゴーレムは涙を拭うように腕で顔を擦ると私たちに襲いかかってきた。

仲間の仇を討つためだろう。泣かせる話だ。

赤ゴーレムのパンチをシユウで受ける。

一体だけでもそこそこに強い。

『ユリイ！ メル姐さんがこいつを引き付ける。お前はこいつの目を狙い撃て！』

シユウが叫ぶ。

正面から攻撃を受けたにも関わらず、珍しく文句を言わない。

「で、でも。僕の矢じゃ当てられるか……」

『自分の腕を信じろ！ そして、俺を。メル姐さんを。そのクロスボウを。なによりも今まで戦い抜いてきたお前自身を信じるんだ！』

そうだ。

こんな私でも戦えているんだ。

「ユリイなら当てられる！」

「あ、兄貴……。姐御……。僕、やってみせます」

赤ゴーレムのパンチを受けつつも、隙を見て斬りかかる。

状態異常が入り、一瞬だけ動きが止まる。

その瞬間――。

ボスの右目に一本の矢が突き刺さった。

「やった。やりました！ 当たりまし――」

『まだだ！ 相手が消滅するまで油断するな！』

赤ゴーレムはのけぞったものの、まだ消えていない。

片目に映る暗い瞳は戦意を宿している。

『もう一発だ、ユリイ！ 見せてみる。お前の力を！』

赤ゴーレムの攻撃はさらに苛烈を増した。

ユリイへとその巨体を向けた。

私はその進路に立ちふさがって、動きを抑える。

体当たりをシユウで受けるが、体重差はいかんともしがたく足裏が地面を擦る。

それでもなんとか押しとどめた。

「撃ちますー！」

ユリイの合図とともに後ろから小さな風切り音。

それが私の耳横を通り、赤ゴーレムの左目に突き刺さる。

赤ゴーレムは今度こそ断末魔を上げた。

ボスの体は徐々に光へと消えていく。

それでも最期まで倒れることはなかった。

両目に矢が突き刺さったまま静かに、静かに消えていった。

ボスの消滅により道は開かれた。

「姐御、兄貴！ 本当にお世話になりました！」

ユリイがそう切り出す。

ああ、そうか。

ボスを倒したからここでお別れか。

帰り道は一人で大丈夫か。

「まださほどリポップしていないでしょうから急げば問題ありません」

気をつけて帰れよ。

『絶対に気を抜くなよ。冒険者にとって最大の敵はモンスターではなく、自らの油断と慢心だ。決して大丈夫だなんて思っではいけない』

「はい！ 家に帰るまで決して油断しません！」

良い返事だ。

ユリイならソロでも帰れるだろう。

『お父さんよろしく伝えといて。また会いに行くってさ』

「わかりました！ 伝えておきます！」

……………えっ？ あれっ？

ユリイの父親は死んでるんじや。

そのクロスボウは亡き父の形見じゃなかったのか。

『なに言ってるの、ダメ姐さん。ごめんね。ユリイ。うちのは図体ばっかり大きくて』

「いえ。気にしていません」

彼女は困ったようにはにかむ。

えっ、わからない。

本当にどういうことだ。

また会いに行くって、何の話をしている。

もしかして宿屋の親父のことか。

『ここまで馬鹿だと憐憫の情さえ芽生えるよ。なんで俺が話したこともない宿屋の親父に会いに行くのさ』

「姐御。僕の父は姐御の靴を。そして、僕のクロスボウを作ってくれた人物。ガラム武具店の店主——ガラムです」

えっ……。えっ！ ええっ!?

そんな馬鹿な。

ユリイはドワーフじゃないぞ、あつ！

『思い出した？ ガラムは人間の女性と結婚してるんだ。ユリイはお母さんの血を濃く受け継いでるみたいね』

いや……。

いやいやいや。

それでもおかしいだろ。

ガラムは息子が一人しかいないって。

『メル姐さん。さすがにそれは失礼だ。ユリイは正真正銘の男だよ』

「姐御……。僕、男の子です」

そ、そんな馬鹿な！

シユウ。お前はいつから気づいていた?!

『姐さんこそ、いったいいつからユリイを女だと錯覚していたのさ。最初からか……。確かに見た目が女の子っぽいからね。それでも俺

は割と初めからユリイを男って気づいてたよ。股間のセンサーが反応しなかったからさ。あと「ボク」じゃなくて「僕」だし。それに、ダンジョンに入る前にはガラムの息子だともわかってた。だからマジメに指導したんだ。ユリイも気づいてたよね』

「はい。姐御が父の作っていた靴を履いていましたから。父の話に出ていた最近出会ったおもしろい人物だと気づきました。それが姐御ではなく兄貴のほうだとはパーティーを組むまでわかりませんでした。僕、まだまだ未熟です」

たしかにシユウはユリイに対して一度も卑猥な言葉をかけていなかった気がする。

もしかしてユリイが男だから言っていなかったのか。

女になら言うってのもどうなんだ。

変態だからいいのか。

それにしてもだ。

男と言われても、なお男には見えない。

本当に男なのか。

「触って、みますか？」

ユリイが体の前でもじもじと指をからませている。

……いや。

すまなかった。

私が悪かったです。

本当に今回は私が悪かった。

弁解の余地すら与えられないほどだ。

「いえ。姐御は悪くありません。僕が男らしくないのがいけないんです」

『ユリイ。君はまったく悪くない。悪いのは全てこの逃げ足だけが取り柄の馬鹿女だ』

今回は反論のしようもない。

できることがあれば言ってくれ。

できる限りのことはしよう。

『じゃあ、俺を男に——』

テメエは黙ってる。

「では姐御。頼みがあります」

なんなりと言ってくれ。

「いつかまた、僕とパーティーを組んでください」

おや、そんなことでいいののか。

それは私の方から頼みたいほどだ。

「はい。今度は間違えようもないほど、男らしくなってきましたー！」

『ユリイ……。なんて良い子なんだ。姐さんと組ませるのがもったいないくらいだよ』

わかった。

約束しよう。

いつか、またパーティーを組もう。

「ありがとうございます。それではまた会う日まで——」

ユリイは手を差し出す。

私もその手を握りかえす。

ついでパーティーリングを合わせてパーティーを解消する。

『また世界を縮めてしまったア〜』

いちいちうるさい奴だな。

ユリイはボス部屋の入り口に歩き出し、私は反対側の出口に向かう。

その後もダンジョンを歩き続けた。

ゴーレムと正面から戦うことで初めてパーティーを解消したんだ

と実感する。

一緒に戦ってくれる仲間がいるというのはいいものだな。

そんなことを思ったはずだ。

二日かけてダンジョンを抜けると、鮮やかな緑が広がっていた。

明るい光に思わず目を眩ませる。

『よう、ジョニー。俺たちも凱旋と洒落込もうぜ』

ジョニーって誰だよ。

まあいいか。

あとは山道をわずかに下り、東へと道なりに進めばエルメルの町。

久しぶりの帰省だ。

私にとって安らぎの場所。

母の料理が静かに香り、父の燻らせた煙草の煙が天井を漂う。

二人はなんと声をかけてくれるだろうか。

私の帰りを喜んでくれるだろうか。

ああ、そうなんだ。

私は早く家に帰りたいんだ。

『遠きみやこに帰らばや、だね』

気がつくとも足早になっていた。

身で切る風もいつもより軽く感じる。

こうして私の上級ダンジョン巡りは締め括られた。

第09話 「主をなくしたデイオダデイ古城」

一ヶ月半ぶりにエルメルの町に帰ってきた。
五十日足らずだというのにずいぶんと久しぶりに思える。
家の前にただよう懐かしい臭い。

ジャガイモのスープだな。
私の好物だ。

ノックするか迷ったままの丸めた手でドアを押して敷居をまたぐ。

「ただいま……」

声を出すとテーブルに座る人物がこちらを見返してくる。

「まあ……まあまあ、メルちゃん！ おかえりなさい」

「おお！ よく帰って来た！ おかえり。メル」

母と父が顔をほころばせ出迎えてくれる。

「お帰りなさいメルさん！ ほら、いつまでもそんなところに立って
ないで座って座って！」

金髪のエルフも満面の笑みで迎えてくれる。

おい待てよ。

なんでお前がいる。

テーブルには父と母の他にもう一人。

ゼバルダで別れた引きこもり系魔法使い——アイラがいた。

彼女は我が物顔でスープをすすっている。

『わあ、アイラただよ。おにいたんと再会のちゅっちゅしようよう』
久々の帰省は波乱の幕開けとなった。

部屋には私とアイラ、おまけにシユウが集う。

椅子に私。ベッドにアイラ。床にシユウがそれぞれ位置する。

「どうしてここにいいのか。それを一から説明しなければなりません
ね」

引きこもってばかりいたから、また追い出されたんだろ。

「それだけではありません」

なんともはや。

それだけではない、と。

お前はいつたい何をやらかしたんだ。

「何もしなかったんです」

……もう、帰ってもらっていいか。

「そう言わないで聞いてください。あれは、メルさんを見送って五分後のことです——」

彼女はことの顛末を本当に一から話し始めた。

もちろん私は長話が嫌いなので華麗に聞き流す。

あとでシユウがまとめてくれたものを聞こう。

『つまり、里の長老をしてるお爺ちゃんに超上級ダンジョンをクリアしてくるよう頼まれたんだね』

そういうことらしい。

どうしてこのエルフは一言で終わることを長々と話すのだ。

百年も生きていると時間に対する感覚が緩くなっているのだろうか。

うん……？

長老がお爺ちゃん？

『メル姐さん。ちゃんと話を聞こうよ。前にも話してたじゃない。アイラたんはエルフの里の跡継ぎ。穀潰しのぼんぼんだよ』

そんな話は聞いた記憶がないぞ。

『ゼバルダ大木で、家を追い出された経緯を話してたときに言ってたよ。メル姐さんは俺を踏んでた気がする』

じゃあ、お前を踏んでたんだらう。

話を聞ける訳がない。

「なんという理屈。とにかくですな。南にある超上級ダンジョン——デイオダデイ古城のボスを倒してきてくれと頼まれました。長老のお願いは、里では至上命令です。私一人では絶対無理なので、こうやってメルさんのご自宅に伺い帰ってくるのを待っていたんです」

アイラがエルメルの町に来たのはちようど二日前らしい。

私が帰らなかつたらどうするつもりだったんだらう。

まあいい。

ディオダデイ城には私も行く予定だった。

アイラならついてこられても問題ない。

チートを使えば、たいへん優秀な魔法使いだ。

しかし疑問がある。

果たしてアイラは超上級の入場許可を持っているのか。

私は上級を三つクリアして、入場許可証を手に入れている。

彼女はゼバルダ大木で、私と一緒に二つまで手に入れていることは
確実だ。

だが、あと一つはどうなんだ。

「問題ありません。超上級の入場許可証はすでに手に入れています。
エルフの里の近くにも上級ダンジョン——セルメイ大聖林がありま
すからね」

なんとそうだったのか。

エルフの里は人間の立ち入り禁制だからな。

ダンジョンがあるなんて初めて知った。

『ねえ、アイラたん。上級ダンジョンはあるんだろうけどさ。クリア
してないでしょ』

シユウの言葉にアイラが苦笑する。

どういうことだ。

お前らはどうにも私の上を飛び越えて会話をする。

もう少し私にも理解できるように話をしてくれ。

『チートなしのアイラたんが上級ダンジョンをクリアできるとは思え
ない。それくらいは頭の残念なメル姐さんでも思うでしょ』

そうだな。

私もそう思った。

でも、パーティーを組めばなんとかなるんじゃないか。

『そうね。なんとかなるって言えるなら、わざわざクリアする意味も
ない。エルフの里は人間の立ち入りが御法度。つてことはギルド職
員もエルフでしょ。そして、長老の言葉は絶対。それならさ——』
「エルフの里に不正はありません」

十分すぎるほどよくわかった。

なんにせよ。超上級に入れるなら何も問題ない。

次の日。

アイラは南に向けて旅立った。

専用の馬車で移動しているらしい。

良いご身分だ。

『俺はぼっちとヒツキーの神髓を味わったよ。出発地点に二人とも居て、目的地も同じ。それなのに現地集まってどういうことなの……。一緒に行けばいいじゃん。馬車に乗せてくれるって言ってくれてたんだからさ』

私は走った方が速いし早いと主張したものの、アイラが動くのを嫌がった。

そのためお互いが自身の利益を追求し現地集合で落ち着いた。

『自身の利益を追求』とかカツコよく言っちゃってるけどさ。協調性がないってだけでしょ』

うるさいなあ。

誰も不幸になってないんだからいいだろ。

それに私はやりたいことがあったからちようどいい。

現在、私はエルメルの町付近にある中級ダンジョン——シルマ神殿にいる。

一ヶ月前前に挑戦したときは、苦くもクリアした。

ボスのミノタウロスにはとてもじゃないが勝ったとは言えない。

そのため、戻ってきたときは今度こそ真っ向から叩きつぶすと決めていた。

あのとときには私の能力プラスもシュウの吸収力も比べものにならないほど上がっている。

耐性も毒・麻痺・恐怖・盲目・サイレント・催眠と六つに増えているし。

付与も毒・麻痺・恐怖・鈍化と四つになった。

盲目・サイレント・催眠は耐性にしかないが、鈍化は付与にしかないらしい。

モンスターからの鈍化攻撃は蜘蛛の巣など、直接しかけるもののため耐性が存在しないのではないかとシユウは話していた。

耐性と付与に加えて特殊スキルを三つ選択している。そう言えば、魔法の散乱と状態異常の伝染はここで選択したんだっただな。

もう一つの特特殊スキルは名前こそ気に入らないが、効果は恐ろしいほどに強力だ。

右手にはクロスボウも装備して射手用のスキルも選択している。

ちなみに憧れていた魔法も選択してみたものの、詠唱が覚えられないことと私の魔力容量が小さすぎることを理由に選択解除されてしまった。

シルマ神殿を歩いているが、なぜだか攻撃されない。教徒の幻影が魔法をときどき撃ってくるくらいだ。

リビングデッドは出会い頭に逃げていくし、苦戦した犬どもはそもそも近づいてこない。

『やっぱり臭いが原因なのかなあ』

……なぜだろうか。

心理的ダメージが前回よりも大きいぞ。

そんなこんなで、あっさりとボスマでたどり着いた。

前回と同じ演出。

その後、半人半牛の怪物が巨大な斧を手に襲いかかってくる。

横薙ぎに振るわれた斧も前回より遙かに遅く見える。

能力プラスによる動体視力上昇と相手の能力半減により、もはや当たるほうが難しい。

間合いを詰めて一太刀。

状態異常が入ったのかミノタウロスが片膝をつく。

容赦なく、さらに斬撃を加える。

『おめえのターンねえからあー！』

シユウの言うとおりの一方的だ。

前回は倒す直前に油断したが、今回は一切の油断はしない。

万全を期し、容赦なく、全身全霊を持って対峙する。
そして、ミノタウロスは渾身の一突きにより光に消えた。

『びゃあ、あ、あうまひい、いいい。勝利の味だあ、あ』

ミノタウロスは格下のボス。

実際はさほどおいしくないだろう。

それでもシユウは「おいしい」と言ってくれた。

あと今のさ。どうやって発音してるの。

同じ声が出せるような気がまるでしないんだけど。

『プロのみが出せる熟練の声ってやつだよ。トーシローじや無理無駄無謀』

さよですか。

前回は拾うのが躊躇われたドロップアイテムも今日は堂々と手に取る。

——ミノタウロスの健康的なハラミ。

『バンバンバンバン、ヴァン○ンカン！ ウエイ！』

今夜は、焼き肉だ！

翌々日になって私もエルメルの街を発った。

途中でアイラに合流し、一緒に歌を口ずさみつつレマンの町に到着。

さらに馬車を町に置いて徒歩で二日かけてデイオダデイ古城入りした。

超上級ダンジョン——デイオダデイ古城。

冒険者からは「帰れずの迷宮城」と呼ばれている。

ダンジョンとしては数百年近くの歴史がある由緒正しいものだ。

名前こそラビリンス型ダンジョンではあるものの、実のところはフィールド型ダンジョンである。

ぶ厚い雲に覆われたその地域は鬱蒼とした森が広がる。

この森もダンジョンに含まれており、内外の明確な境界が存在しない。

モンスターやボスが外に出てきているのも確認されている。

つい一週間ほど前にもレマンの町から家畜が消えたらしい。暗き森の中にぼつりと建てられた城。

それがディオダディ城。

かつては名の有る領主が住んでいたようだが打ち捨てられ、人外のもの住み着いてしまった。

『やっぱりどこの世界にも吸血鬼っているんだね！ わっふるわっふる！』

そう、吸血鬼。

あるいはヴァンパイア。

夜の王と称される存在がディオダディ古城のボスに指定されている。

吸血鬼の見た目が妙齡の麗しき女性と知り、馬鹿が興奮し始めた。

ディオダディ古城はダンジョン指定されているが、正確にはダンジョンではない。

ボス認定されている吸血鬼も実際のところボスではない。

そもそも吸血鬼がモンスターですらない。

人間やエルフ、ドワーフと同じで一つの種族らしい。

人に多大な悪影響を与えるため、モンスター扱いされてしまったそうだ。

あまりの強さも相まって半モンスター化してしまった。

そのせいなのかはわからないが吸血鬼を倒すとアイテムを落とす。なんにせよだ。

アイテムを持って帰れば超上級のクリアの証がもらえる。

超上級クリアの証を二つ集めると極限ダンジョン——神々の天蓋へ入ることができる。

さっさと倒してしまおう。

出てくるモンスターは吸血鬼の眷属とかいうものだ。

吸血鬼が血を吸った獣は吸血鬼自らの手足として使えるらしい。

さらにその手足になった眷属が他の眷属を作り出していき、どんどん増えていく。

アイラがそう話していた。

コウモリ、鳥、犬、猫といった動物に始まり。
スケルトンやアンデッドといった不死属も出てきている。
一体一体の動きも吸血鬼の力を得てただの雑魚ではない。
これらのモンスターが群れとなって波状攻撃を仕掛けてくる。
前衛が私たちの足を止め、後衛が魔法を撃つ。やっかいだ。
アイラの魔法は効果が薄い。
光魔法は有効だが、それ以外で仕留めると敵が消えずに復活すると
いうおまけ付きだ。

シユウの攻撃は相変わらず効果がある。
伝染により状態異常が移るため、魔法に気をつけておけばいい。
右腕に取り付けたクロスボウも数が多くてはあまり意味をなさな
い。

シユウもクロスボウは使わないほうがいいと言う。
せっかくの「方向転換」と「必殺」の組み合わせも、使わなければ
持ち腐れだ。

やっかいなのはモンスターにとどまらない。
罠も今までのダンジョンとは桁違いに多い。

さらに道も複雑になっている。

城内に入ってから部屋に閉じ込められ、モンスターに囲まれるこ
ともあった。

トラップはシユウが事前に気づいて回避できている。

『ねえ、メル姐さん。気づい……てるわけないか。アイラさんは気づ
いた?』

『何ごです?』

城内をうろつき、上に上にと進んでいるとシユウがおもむろに話を
始めた。

『このダンジョン。ちよつと変わってないかな』

「私はゼバルダくらいしか潜ったことがありませんからね。あそこと
比べると敵や罠の配置が嫌らしいです」

それは私も感じた。

今までのどのダンジョンよりも進みづらい。

『イヤらしい！ うーむ、甘美な響きだ。もっかい。アイラたん。もう一回だけ言ってもらって良いかなあ』

「やあん、シユウさんったらあ。イヤらしいですう〜」

『ブヒいいいいイイイイ！』

いい加減にしろよ。

シユウを本気で蹴りつけてから、アイラの頭を叩く。

こいつらはもうちよつとまともな会話ができないのか。

それで何が変わってるんだ？

『……話はアイラたんが起きてからかな。ひとまず支えてあげて』

うん？

斜め後ろに立っていたアイラをなにげなく向くと、ふらつと倒れかかってきた。

慌てて受け止める。

なんだっ！

モンスターの攻撃か！

『いや、メル姐さんのツツコミで気を失ったんだ。脳震盪だろうね。もつと優しく、花を愛でるように注意深く小突かないと死んじやうよ。人間なら死んでたかも』

なんと……。

かなり弱く叩いたつもりだったが、そんなに強くなっていたのか。

いやはや。エルフが丈夫でよかった。

とりあえず、起きるまで待つか。

アイラが眠っている間、モンスターどもがここぞとばかりに襲いかかってきた。

片腕でアイラを抱えているため戦いづらい。

狭い通路だったため敵の攻撃も狭まり助かっている。

近距離は特殊スキルがあるため問題ないが、遠距離からの魔法がやっかいだ。

どうにかならないのか！

『なるよ！ 新しい特殊スキルを選択したから。どんどん敵に突っ込

んじやって』

おお！

ついに特殊スキルが来たか！

シユウの言葉を信じて敵の一団に突き進む。

具体的な効果はやっぱりわからない。

しかし、スキルが発動していることはわかった。

前衛を蹴散らして、後衛のアンデッドに近寄る。

私が近づいたのにもかかわらず、なにやらぶつぶつと詠唱を続けている。

これまでも詠唱中の敵に近寄ったことはあったが、その場合の敵は詠唱を止めて逃げるか戦うかをしていた。

目の前のアンデッドは私が近づいてもなお詠唱を続けている。

『詠唱が終わる前に斬っちゃって』

シユウの言葉で我に返り、トドメを刺していく。

やられる瞬間まで、アンデッドは詠唱を止めなかった。

さて、これは一体どういうスキルなんだ。

『相手の詠唱時間を四倍に延長。加えて詠唱中断を禁止。さらに発動魔法の効果を弱化。つまり、魔法を使う敵に対してめちやくちや有利になれる』

相変わらず素晴らしい効果だな。

これで魔法への脅威が減ったわけだ。

それで、スキル名は？

『……詠唱妨害』

嘘、だな。

シユウは物事をズバツと言う。

そのクソ野郎がわずかにためらった。

スキル名は「詠唱妨害」ではないはずだ。

それで、本当のスキル名は？

『メル姐さん。大切なのは名前じゃない。効果だよ。だから——』

もう一度しか聞かないぞ。

スキル名はなんだ？

『……音痴ステージⅡだそうです』

ほう、そうか。

私は音痴ですか。

ステージツツというのはどういう意味だ？

『音痴の度合いだろうね。俺の認識だと、ステージⅠはちよつと下手で楽しさのあるもの。本人も音痴だと気づいてる。ステージⅡは本人に自覚なし。ド下手。ノイズィー。やかましい』

そうかそうか。

私の歌はうるさいですか。

ごめんね。道中で一緒に歌ったりして。

『お、落ち着いてメル姐さん。ステージⅡはまだいいよ。上にはステージⅢってのがあるんだ。歌うと周囲の人間が倒れるレベル。ウエポン——えつと、兵器って呼ばれるやつだね』

それさ。

ひよつとして励ましてるの？

『いやね。俺はメル姐さんの歌好きだよ。ほら、道中でアイラたんとも一緒に歌ったじゃない。きつとアイラたんも楽しかったはずだよ』

私の歌が好き？

うるさい歌が好きなのか。

『どんな歌だつて大声で歌えばうるさくなるよ。それに歌は魂でしょ。うまい下手なんて後付けの飾りです。神様にはそれがわからないのですよ。うまいだけで楽しさのない歌にいったい何の価値がありますでしょう』

歌はうまい下手ではない、か。

魂ねえ。

『……そう。そうだよ。それに俺を転生させたロックな神様も歌ってたけどさ。あいつの歌もなかなかだったよ！』

神も歌うのか。

やつぱりうまいものなのか。

『いやいや。なんだか叫んでるだけで、なあんにも伝わってこないだよね！ 本人はノリノリみたいなんだけどさ。メル姐さんよりも』

ひどい。近くにいるのが苦痛なレベル!』

神でも下手なのか。

それなら私の歌はいいほうかもしれないな。

『姐さんの歌は一緒にいて楽しいよ! 姐さんがステージⅡなら、あの音痴な神様の歌はステージⅢなんじゃないかなあ! それとも神の歌だから人間には理解できなかったのかなあ!』

シユウはやたら大きな声で喋っている。

まるで誰かに聞かせているようだ。

『メル姐さんのは楽しい歌だと思うけど、これを音痴としちゃってもいいのかなあ! そうしたら神様はいったい何になっちゃうんだろ! 熱いハートを叩きつけるのが歌だと思っただけだなあ! つと………お、おおお! すげえ! でつすよねえ!』

叫びだしたと思ったら、今度は感嘆の声をあげ始めた。

お前。

ほんとにちよつと大丈夫か。

さつき強く蹴りすぎたのが今ごろになって頭にきちゃったのか。

『メル姐さん。さつきのスキルは間違いだつたみたいだ』

………どういうことだ。

『いやあく、不幸な手違いがあつたんだよ。神様が名前と効果を間違えてたつぽい。修正されたスキル名は「歌は魂のシャウト!」。シャウトするのは叫びね。それで、効果はさつき説明した「相手の詠唱延長・詠唱中断禁止・魔法効果の弱化」に加えて、「魔法効果倍増と魂発散」がついちやった。メル姐さんの歌を聴つけえええ!』

どこから突つ込むべきだ。

……あまりいろいろと言わない方がいいか。

取り消されてもいやだし。

とりあえず魂発散つてなんだ。

想像できないんだが。

『吸収力増加とのけぞり付与だつてさ。攻撃した周囲の敵ものけぞるらしいよ。ゾクゾク美イ!』

よくわからないけど、強くなつたらしい。

ロツク（？）な神様ありがとう！

アイラを片腕に抱えて進む。

意匠をこらした大きな扉。ボス部屋だろうな。

水を飲んで休憩していると、ようやくアイラは目を覚ました。

「なんだか頭が痛いです」

『すぐよくなるさ。それまでいい子にしてお話でもしよう』

すでにボス部屋の前なんだが、このダンジョンはいったい何が変なんだ？

『進みづらかったのはメル姐さんも感じたよね』

ああ。

アイラも言ったように嫌な位置に罠や敵が配置してあったな。

『そうだね。でも、殺気はなかったよ。生きてここに誘導するよう仕掛けてあった。それになんだか俺たちの反応を見て遊んでるようだったね。あと、ずっと見られてた。コウモリかなにかを使ってるかな。ここに来てからは視線がなくなったね』

誘導されていたのか。

どうしてそんなことをする。

それにここに来て視線を感じないというのはどういうことだ。

『二つ目の問いに対する答は、この扉の先に見ていた張本人がいるから。一つ目の問いは、なんだろうね……一緒に遊んで欲しかったのかな。まあ、本人に聞いてみればいいんじゃない』

「そうですね。それじゃあボス戦の作戦会議といきましょう」

そうだな。

なんにせよ、ボスを倒せばそれでいいのだ。

小難しいことはあとで考えよう。

作戦がまとまったところで扉を押す。

ボス部屋は奥に長細いようだ。

赤絨毯が扉から奥へと伸びている。

絨毯を挟むように燭台が列をなし、手前から徐々に火が灯っていき

部屋を照らす。

部屋の奥には大きな椅子があった。

そして椅子にかける人影が一つ。

顔は薄暗くてよく見えない。

「ようこそ、妾の城へ。ここまでたどり着いた客人は数年ぶりじゃ。歓迎しよう」

若々しい女性の声だ。

どうやってるのかは知らないが、シユウと同じように頭に直接響いてくる。

その人影に右腕を向ける。

『もうちよい右。もう少し上だね。もうちよい……はい、ストップ。発射』

シユウの声で腕の位置を調整し、クロスボウから矢を射出。

ディオダデイ古城に着いてから、このクロスボウを使うのは初めてだ。

方向転換で矢は当たってくれるが、できるだけスキルを使わずに当たりたいのでシユウが位置を調整してくれている。

放たれた矢は、きれいな弧を描いて椅子に座った人影の眉間へと突き刺さる。

スコン、といい音がした。

【ふふ、吸血鬼たる妾がこのような矢で……ほえっ！ あれえっ！】

矢が刺さってもおしゃべりを続けていたが、驚愕の声とともに吸血鬼は光に消えていった。

眉間に刺さった矢が床に落ちる。

絨毯が敷かれているため音はしない。

椅子の上にはドロップアイテムの光だけがきらりと残った。

勝った……。

「倒しちゃいましたね」

『まさに一進一退の攻防だったねえ』

吸血鬼は正確にはボスじゃない。

ボス属性は備わっていないという推測は見事的中した。

その結果、「必殺」により一撃死。

吸血鬼戦は私たちの無血勝利で終わった。

さて。思い出して頂きたい。

冒険者がこのダンジョンをなんと呼ぶか。

——帰れずの迷宮城だ。

どうしてここがこの名で呼ばれているか。

モンスターや罠が多いからではない。

ボスが単に強いからでもない。

吸血鬼の復活速度が尋常でないことに起因している。

倒された吸血鬼が何度でも復活し、冒険者が日の当たるところに出るまで追ってくる。

さらにこの城のトラップは帰り道がよりつらくなるように仕掛けられているらしい。
そう。

このデイオダデイ古城はボスを倒してからが本番なのだ。

ドロップアイテムを拾ってボス部屋を出ようとすると、後ろから物音が聞こえた。

「ふっ、ふふ。妾が一撃で倒されたのは、いったい何十年ぶりじゃったかな」

振り返るとすでにそこには人影が現れていた。

燭台の火も全て灯り、はつきりとその姿が露わになっている。

背は高くない。

アイラよりもなお低い。

見た目だけなら十歳くらいに思える。

髪は踵につくほど伸びており、真っ白だ。

口元から見せる異様に尖った歯だけが容姿から浮き、似つかない。
【うぬらの血で妾の髪を赤く染めさせてもらおうか】

吸血鬼は堂々とこちらへ歩み寄る。

『はあ、ロリガキ……しかもペチャパイ。確かに妙齢で麗しくはある。でも、まったくもってそそれれん。メル姐さん。もう撃っちゃって

よ』

なんだかシユウは落ち込んでいる。

吸血鬼が復活することは知っていたので、すでにクロスボウに矢を用意している。

矢は腕から放たれ、小気味よい風切り音を立て吸血鬼に向かう。

【遅いわっ！】

吸血鬼は長い髪をたなびかせ矢を優雅に避ける、が――、

【なっ！ があっ！ ば、馬鹿な！】

スキル「方向転換」で反転するように曲がった矢を背中に食らった。そして、またもや光に消えていく。

ドロップアイテムは出てこない。

一度しか落とさないようだ

せこいな……。

ボス部屋から出て、シユウの指示で罨を回避しながら進む。

城の入り口まで戻った。

広いフロントの正面扉の前。

小さな少女が大きな扉の前に鎮座している。

【なんじゃ。なんなんじゃうぬらは。妾を一撃で倒し、罨にもまるでかからん。そんなもの、ここ百年はおらんかったぞ！】

なんだか顔をほころばせ楽しそうに話している。

とりあえずクロスボウを向けて発射。

【ふん！】

吸血鬼は矢をつかみへし折った。

自身の体を確認し消えていかないことをぺたぺた触って確認している。

確認が終わるとなにやら得意げな顔で私たちを見てくる。

ちよっとかわいい。

【どうだっ！ 見たかっ！ これが――】

「消えてくださいー！」

アイラが詠唱一時停止で保留していた光魔法を発動させる。

目の前に現れた一点の光源。
そこから吸血鬼へと光が照射される。

【うわ、まぶしっ】
私と同じ感想を残して、吸血鬼は扉とともに蒸発した。
よかった。

扉を開ける手間が省けた。

帰り道の森。

開けたところで大量のモンスターに囲まれた。

【や、やるのう！ こ、ここ、こんなにあつさりと三度もやられたのは
数百年ぶりじゃ！】

吸血鬼の声に焦りが現れ始めた。
しつこいなあ。

【うぬらに敬意を表し、妾の最強闇魔法で消し去ってくれよう！】
モンスターの外から声をかけているらしく、吸血鬼の姿は見えない。
い。

へしいんええんにあるううわあれらあがおおうよお——>

なんだかとてもゆっくり詠唱している。

『さつき手に入れたスキルで詠唱時間が四倍だからね。詠唱は四分の
一倍速で詠まれるんじゃないかな』

詠唱の声に焦りがありと出ている。

詠唱中断禁止で無理矢理詠唱をさせられているようだ。

なかなかひどいスキルだな。

ひとまず私たちを囲んだモンスターをアイラの魔法とシユウで処
理する。

へこおんげええんたああるやあみのすうみくわあに——>

雑魚を全て片付ける。

私たちから離れたところに白髪の少女が立っていた。

顔を引きつらせて私たちを見ている。

それでも詠唱を続けている。

否。続けさせられている。

いま楽にしてやるからな。

近づくのも面倒だったためクロスボウを撃った。

『エ、エエイ、イメン、ツツ！』

矢は一度だけ曲がり、吸血鬼の左胸をストツと射貫く。

少女は光へと消える最期の瞬間まで詠唱を続けていた。

ちょうど森を抜けたときだ。

あとは歩いて帰るだけ。

そんなことを思っていた。

【待てい……待つのじゃ。何なんじゃ。いったい何なんじゃ！ うぬらは！ このような屈辱。千年はなかつたぞ！】

声が聞こえた。

しかも、お怒りのようだ。

声は頭に響いてくるので確かとは言えないが、なんとなく背後だと思っただ。

案の定、後ろから白髪の少女がこちらをじりと見ていた。

顔が最初よりも痩せている気がする。

なんだかお疲れですね。

クロスボウを撃とうと思ったが、矢がないことに気付いた。

「消え去れ！」

アイラが光魔法を発動させるが、吸血鬼のほうが速い。

背中に生えた翼で空を駆る。

光源を大きく回り込むよう旋回し、光の照射を回避する。

【フハハ！ 最後に立っていたものこそが勝、うえ!? ぐあげつえぎよぶえおじよう、あ——】

空から近づいて来たところで特殊能力解除が発動。

背中に生えた翼がなくなり、あえなく墜落。

勢いのまま地面をみじめに五回転。

私の横をごろごろと通り抜けて転がっていく。

なにが起こったのかわかっていないのか、頭をふらふらさせている。

ちなみに吸血鬼は私の目の前。

倒れたままのうつぶせで背中に手を回している。

先ほどまで生きていた黒っぽい翼を確認しているのだろう。

そのままシユウで吸血鬼の手ごと背中を突き刺す。

地面に串刺しだ。

『No、ロリータ。Yes、タツチ』

【ぐぎゃああ！ 痛いイ！ いたひいよおおオオ！ なんでエエ翼がアア！ 変身ができないのおじやああ！】

吸血鬼は泣き叫び、必死にもがいている。

片手を封じられ、もう片方の手でシユウを抜こうと必死だ。

串刺しにされても口が動くあたり、さすが吸血鬼と言ったところだろう。

見ている痛々しいので抜いてやりたいのはやまやまだが、残念ながらそれはできない。

『まあ、落ち着けよ。ロリババア。俺のぶつといるのが刺さってるからって、泣きわめくんじやない。いい年だろ』

【なんじゃ！ なんなんじゃ、この声は！】

『俺、俺。お前のペチャパイを貫通してる卑猥な一物だよ。見えるかな？ それが俺』

吸血少女が顔を上げて私に確認を求めてくる。

私はうなずき、いつの間にか隣に立っていたアイラも頷く。

【け、剣が喋ったああー！】

なんだろうな。

シユウに対して今までで一番常識的な反応を示したのが吸血鬼ってどうなんだ。

普通はこれくらい驚くものじゃないのか。

エルフはちよつと不安がってたのに、すぐ順応しておしゃべりを楽しむし。

ドワーフは驚かず猥談に花を咲かせるし。

ハーフなドワーフはちよつと驚いたものの、尊敬し始める。

どいつもこいつも驚きが足りないと思っていた。

これだよ。

これなんだよ。私の欲しかった反応は。

こいつが吸血鬼じゃなかったら、握手を求めているだろう。

シユウをいったん抜いて、吸血少女を仰向けにする。

その後、アイラの土魔法で吸血少女の手足と胴体を止める。

シユウも肌にかする程度で刺して、会話ができるようにした。

私が近くにいれば、能力半減と特殊能力解除で逃げられることはない。

さらに土魔法で硬く固めてからこのまま立ち去ることにした。

【妾は何度でもよみがえる。ぬしらをどこまでも追い続け、八つ裂きにしてやるからな！】

シユウを抜いたところでようやく意識が落ち着いたのか恨み言を口に始めた。

『ほんとによみがえるかなあ〜』

【ど、どういうことじゃ？】

吸血少女はなにやらシユウをやたら怖がっている。

千年以上も生きてきてお喋りをする武器を見たことがないらしい。

まあ、それもそうか。

少女にとってシユウは未知の存在だ。

怖がるのも無理はない。

『お嬢ちゃんがよみがえるのはたぶん特殊能力だよ。わかってくれると思うけど、俺は特殊能力を解除する。今んところ、矢と魔法で特殊能力解除の範囲外で死んでたからよかったけど、この距離で死んだらよみがえられるかなあ？ 試してみよっか』

「そういえばそうですね。消滅すれば別のドロップアイテムが手に入るかもしれませんが、レマンの町も襲われることはなくなるでしょう。良いことづくしです」

シユウの提案にアイラは乗り気だ。

別のアイテムが手に入るならそれも悪くないな。

【い、いやじゃ。きえ、消えたくない。妾は……まだ消えとうない】

吸血少女は涙目になっている。

どうやらシユウの言葉を信じているらしい。

実際に背中の翼は消され、変身とやらもできなかつたそうだし。

一撃死、方向転換、詠唱延長、詠唱中断禁止、一時停止からの光魔法、そしてお喋りな剣。

どれも今まで目にしたことがないだろう。

消滅するという推論もあながち外れていないと考えられる。

吸血少女が自身が消えると信じるのも無理はない。

そして、実際に消滅するんじゃないだろうか。

「大丈夫です。たとえばあなたがここで消滅しても、第二・第三の吸血鬼が現れますよ」

【それ妾じゃないよね！ 今ここにいる妾はどこに行くのじゃ?!】

アイラは大きさに首を振る。

「わかりません。ですから、一緒に実験しましょう！ 大丈夫。私は長生きですからね。消滅しても、来世があれば会えるかもしれませんよ」

吸血鬼が泣き叫び始めた。

必死にもがくものの、もはや逃れることあたわず。

【鬼いいいいい！ 悪魔あああ！ 化け物おお！ この人でなしっ！】

罵詈雑言を口走り始めた。

いよいよ消滅の時間が近づいて来たな。

『おいおい、がきんちよ。人でなしとかなに言ってるのさ。よく見てみ。ここにいるのは聡明な言葉を発する剣、ヒツキー魔法オタエルフ、愚かな甘ちゃんぼっち。どこに人がいるって言うんだ？』

【う、うぬう……】

いやいや待てよ。

待て待てよ。待ちなさいよ。

ねえ、人間はちゃんとここにいますよ。

愚かな甘ちゃんぼっちは遺憾なことに人間でしょ。

おいコラ吸血少女。

お前もなに「うぬう」とか認めちゃってるの。

ちゃんとその長生きした頭で判断しようよ。

私、うっかりお前を消しちゃうよ。

「では、せめて痛みがないように一瞬の死で見送りましょう。シユウさん、高速詠唱の解除をお願いします」

〈天にある光は、すべて大地を照らし、平等に降り注ぐ——〉

アイラが詠唱を始める。

高速詠唱を外して、わざわざゆっくりと唱えている。

まるで別れの言葉だな。

「いやじゃ……。いやじゃいやじゃ！ 死にとうない！ 消えとうない！」

〈神々の作り出した糸は重なり合い、やがて一本の柱と化す——〉

吸血少女の目尻から次々に涙が溢れては頬を伝って落ちていく。

「妾が何をしたって言うのじゃ！ 普通に生きて、普通に暮らし、普通に遊びたかっただけなのに！ それを認めず、あんな城においやったのはうぬらではないか！」

〈地に生きるものたちよ。忘れるなかれ。柱にこめられし神々の想いを——〉

アイラは淡々と詠唱をしていく。

吸血鬼はただごめんなさいごめんなさいと何かに謝り続けている。

何分か経ってようやく詠唱が完成したらしい。

杖の先から出た光が空へと向かう。

すぐに光は小さく見えなくなった。

最初の変化は雲だ。

厚く覆っていた雲が渦巻き、その中心から空が見えた。

しかし、空は青くない。

真っ白だ。

天の全てが光に包まれている。

「光になれ——」

雲の合間から見える光がよりいっそう強まった。

「なあ、そこな人間……。来世があるなら、妾と一緒に、遊んでくれるか？」

すでに生を諦めたのか。

静かに問いを投げかけてきた。

——私の答は「いいえ」だ。

吸血鬼に同情してしまうなんてな。

やっぱり私は馬鹿で甘ちやんなんだろう。

地に刺さっていたシユウを抜く。

「シユウウウツツ！」

『超！ エキサイティン！』

吸血少女から逃げるように駆ける。

能力解除さえなければ、吸血少女は復活できる。

能力の有効半径から逃れるように駆け抜けた。

背中に膨大な光が当たり、私の影が進路方向の光を切り裂いている。

振り返り地上にできた光の柱をみつめる。

そこにはただ光があるだけで他のものは確認できない。

私は間に合ったのだろうか……。

十日後。

私はエルメルの町に戻ってきた。

デイオダデイ古城の主が城に帰ることはなかった。

冒険者からの呼称の通り、主が帰らずの迷宮城となってしまうた。

主を失ったデイオダデイ城は長きダンジョンの歴史に幕を下ろす

こととなった。

アイラもお使いを済ませて、満足そうにエルフの里に帰っていった。

早く引きこもりに戻りたかったのだろう。

次は東の超上級ダンジョンに行くことになる。

『メル姐さん。そろそろいいんじゃない』

おっと……本当だ。

もういい時間だな。

もういいか！

外に向かって声を張る。

暇そうだからと近所のガキどもの相手をさせられている。

俗に言う「かくれんぼ」というやつだ。

まーだだよ。

もういいよ。

と次々に声があがる。

その中に一つだけ異質な声がある。

【まーだだぞー！】

直に頭へ響いてくる声。

人間の寿命は吸血鬼と比べればはるかに短い。

吸血鬼の来世など何百年後になるかわからない。

私は愚かだ。吸血鬼の来世を待てるほどできた人間じゃない。

——だから、今世でできるだけ遊んでやることにした。

シユウは私が吸血少女を助けると予測していた。

私が走り出す前には特殊能力解除のスキルを外していたらしい。

まったくもって食えない奴だ。

吸血鬼の居候が増えたことをもってディオダデイ古城の攻略は終了となった。

第10話 「アラクタル迷宮とその周辺」 前編

迷宮都市アラクト。

みんな大好き冒険者ギルド発祥の地として有名だ。

都市ができたのは二千年くらい前だったじゃないだろうか。

『約千二百年前ってアイラたんが言ってたよ』

……二はあってるんだから二千でも千二百でもどっちでも似たようなもんだろ。

そんな他愛ないことをぐだぐだ言いつつ長い歴史を持つ都へと私は足を踏み入れた。

エルメルの町から東に二十日と数日。

チートを使ってこの日数だ。馬車なら一ヶ月はかかるだろう。

村越え、川越え、丘越えてとうとう来てしまった冒険者の聖地。

都市というだけあって大きさも今までに訪れた町の比ではない。

明日から三年に一度の闘技大会が開かれるとあって人の数もすさまじい。

こんな大量の人ごみにいたら立ちくらみしそうだ。実際に少し酔ってきた。

裕福なお坊ちゃんやお嬢様を対象にした教育施設もあるらしく、同じような服を着た子供が目につく。

奴隷の売られている通りもある。

『学園に奴隷に闘技大会！ うーん、イベントが目白押しだね。まあ、メル姐さんには関係ないだろうけど』

その通り。

私にはまるで関係がない。

学園には接点があるでない。

奴隷を買うほどのお金もない。

そもそも奴隷は必要としていない。

必要ないものはあっても邪魔なだけだ。

闘技大会はそもそもエントリーすらしない。

視線を自ら浴びに行くなんてまっぴらだ。

人々が闘技大会に集まっている間が絶好のチャンス。がら空きのダンジョンに潜ってさっさとクリアしてしまおう。

ファナ——そう名付けられた吸血少女は家に置いてきた。

置いてきたというよりも、「近所の子供たちと遊ぶのが忙しい」と言っただけでこなかった。

『吸血鬼ですら友達ができるっていうのになあ。まったく、世知辛い世の中だぜえ』

町に連れて帰ったのはいいものの、まともな生活ができるか心配だった。

そんな心配は杞憂に終わった。

パーティーリングを嵌めることで、モンスター専用スキルが選択できたらしい。

「種族弱点無効化」により日光浴を楽しみ。

「遠隔操作」によって私から離れてもスキルを継続するため、彼女は白昼堂々と町を闊歩している。

ご飯も普通に食えることができていた。

生活における力加減も上手だ。

困ったことに私を「あるじ」と呼び始めた。

呼び方や話し方は敬っているようだが、なんだろうか……。

むしろ馬鹿にされている気がする。

『おっ、鋭い。メル姐さんが顔を逸らしているときに、クセエって鼻つまんでたよ』

そんな情報は知りたくなかったよ。

あのガキヤ、帰ったらしばいてやる。

念のために言っておくが、ファナと私は仲が悪い訳ではない。

近すぎず遠すぎずという心地よい位置を保っている。

ただ次に帰ったとき、どうなるかはわからない。

私には慇懃無礼な一方で、ファナはシユウを神の使いと崇めている。

朝と夜には、涙を流しながら感謝の言葉を述べる姿も見るこ

きる。

膝をつき顔を伏せて、両手を胸の前に捧げての完全な隷従姿勢。未知との遭遇は吸血鬼に畏怖を生じさせ、恐怖を通り越して信仰に押し上げてしまった。

確かにシユウは神の使いで間違いないのだろうが釈然としない。話を戻そう。

生活が心配だったファナだが、至って普通の生活を送っている。家事を手伝い両親からも可愛がられているし。

子供の遊び相手や長生きして得た知識を人に振る舞うことでご近所からの信頼も勝ち得た。

さらに様々なクエストやはぐれモンスター掃討に参加するなどギルド、ひいては町での地位を築き始めている。

私よりもエルメルの町に溶け込んでしまった。

いったい私は二十年近くも何をやっていたんだらうか。

そう。あれはファナと一緒に町のギルドへ行ったときだ。

観衆がファナを見てぱああと顔を明るくし、遅れて入った私を見て顔を沈ませた。

その中には、うっかり私が腕を折ってしまったむさ苦しい男がいた。

目が合ったので「あのときは済まなかったな」という含みをもたせた笑みを見せると、男は椅子から転げ落ちて奇声を発しながら謝ってきた。

居たたまれなくなりファナだけ残して、ギルドをそつと退出。

その後、背中にぶつかってきた楽しい喧噪の圧力をいまだに忘れることができない。

『……メル姐さん。その話はもうやめよう。ほら、今日は旅の疲れもあるからね。おいしいご飯を食べて、軽くお酒でも飲んで。胸やらふとももに俺を挟んで、暖かいベッドで一緒に休もうよ』

そうだな。

なんだか落ち込んできた。

ダンジョンは明日からにしよう……。

それと、お前の寝場所は床に決定したからな。

とりあえず宿を取る。

どこもかしこも一杯一杯だった。

五件目にしてようやく部屋を確保できた。

冒険者ギルドとの連携経営をしているところだ。

超上級冒険者特権を使つてのゴリ押しだが、有るものは使うべきだろう。

最上階の二部屋ぶち抜いた広々とした部屋。

金銭的には余裕があるため問題ないが、広すぎて落ち着かない。

宿の前にある酒場で夕飯を取ることにした。

カウンター席に座り、駆け回る女給に食事と酒を注文。

周囲が盛り上がりつついる中、一人黙々と出てきた料理を食す。

食事を済ませ酒をちびちび飲んでいると隣の席に男が座る。

がたいの良い男は酒とつまみを注文すると、一人ぶつぶつと話し始める。

気持ち悪い奴に座られたなあと思いつつ周囲を見るも、他に空いている席はない。

「——なんだが……。聞いてるか？」

男が首をぐるりと私へ回し問いかける。

くすんだ赤毛と顔のそばかすが印象的な男だった。

……あれ？

もしかして独り言じゃなくて私に話していたのか。

どうやらずっと私と喋っているつもりだったようだ。

でか男はエイクと名乗った。

この町で冒険者をしているらしい。

馬鹿でかい図体に似合わずかなりのおしゃべりだ。

私が適当に相づちを打っているだけで、ぺちやくちや喋ってくれる。

『大丈夫。こいつはメル姐さんに害をもたらさない』

初めはエイクに警戒していたシユウも、今では無害認定を下してい

る。

それもそうだろう。

「いやあ、ビスは本当にかわゆい奴でなあ。家に帰ると『おにいちゃん』って駆け寄ってくるんだよお。その笑顔といたらもう！ 日の光に陰りを覚えるほどまばゆいものでなあ！ 今は学園の初等部に通っているんだが、他の奴らと同じ制服を着てるはずなのに……なぜだろう。ビスだけ輝いている。わかるか？ ビスは天使なんだよ！ 明日の闘技大会もおめかしして応援にきてくれるって言ってるんだ。おめかしなんてしなくても十分かわいいのに、あれ以上かわいくなったらもう駄目だろ〜！」

お前がもう駄目駄目だよ。

ビスというのはエイクの妹だそうだ。

彼はずっと妹の素晴らしさについて口を動かしている。

最初は闘技大会の話題だったはずだが、酒が入ると妹語りになった。

ひたすら彼が妹をどう見て、どう思っ、どう扱っているのかをべらべら喋っている。

つまるところだ。

このエイクという男は筋金入りのシスコンだった。

ロリコンの次はシスコンですか。嫌になっってくるな。

てきとーに相づちを打っていたのがよくなかった。

エイクが酒を次々に注文して、話はさらに盛り上がりを見せる。

彼が盛り上がれば盛り上がるほど、私は盛り下がっていく。

シユウもうんざりして、さきほどから閉口している。

こういうときは喋ってもいいんだよ。

——そして、シスコンは潰れた。

カウンターに突っ伏していびきをかいている。

無精髭の似合うマスターがやってきて同情された。

こんなシスコンでも冒険者としてはたいへんに優秀だそうだ。

超上級パーティーの一流剣士で、闘技大会での剣士部門と総合部門の優勝候補にも上がっている。

ただ、酒が入ると本性が目覚め暴走を始めて勝手に自爆する。ごらんのありさまだよ。

明日の闘技大会は大丈夫なのだろうかと心配したが、朝には完全復活するとマスターは話していた。

もう夜も遅い。これ以上は明日に差し支える

宿に帰ろうとして勘定を払おうとするとマスターに止められた。

話を聞いてくれた人間にはエイクが払うという暗黙の了解があるらしい。

妄想ダダ漏れの話を経々と聞いてくれたぶんの報酬ということだ。

そういう大切なことは先に言えよ、このシスコン。

それならもつと高い酒を注文したのに。

翌日早朝。

私はギルドに赴いた。

人は少ない。冒険者も職員も闘技大会のほうに回されているのだろう。

ありがたいことだ。

窓口からダンジョンの情報を購入してダンジョンへ向かった。

アラクタル迷宮。

迷宮都市アラクトの地下にある大迷宮だ。

正確にはアラクタル迷宮の上に都市アラクトが築かれた。

名前の通りラビリンズ型ダンジョン。

下へ下へと潜る構造となっている。

全百階層。

一から十階層が初級。

十一から三十階層が中級。

三十一から六十階層が上級。

六十一から百階層が超上級だ。

各クラスの最深部にボスがいるのは当然だが、五階層ごとに中ボスもいる。

ダンジョンは五階層ごとに挑戦者の達成状況を記憶する。

五の倍数の階層で脱出できる。
すなわち、中ボスやボスの扉の前で抜けられるらしい。
途中で抜けても五の倍数に一を加えた階層から始めることができる。

超上級をクリアしたパーティーはギルドに殿堂入りされるらしい。
最後に超上級が制覇されたのは百年以上も昔のことだ。

そのときのパーティーは伝説の扱いとなっている。

……ソロでクリアするとどうなるんだろう。

このダンジョンの面倒なところ。

それは、初めての人間は一階層から挑まなければならないことにある。

ゼバルダ大木のように各階層用の入り口は存在しない。

どんなに強くても初級から。

ただし例外が二つ。

一つ目。

四人以上のパーティーを組む。

三人が経験者で一人が未経験者なら途中から挑める。

しかし、この時期にダンジョンへ潜ってくれる物好きな超上級者などいない。

そんな強者は闘技大会に出張ってるだろう。

もう一つの手段は奴隷。

奴隷は物扱いされるようで、四人以上でパーティーを組まなくても連れて行くことができる。

連れて行くと言うだけあって、持ち主のダンジョン経験に依存する。

超上級者の奴隷を買っても、私が超上級から挑めることはない。

もし途中から挑めるとしても奴隷を買えるほどのお金は持っていない。

仮に買えるほどのお金があったとしてもやっぱり買わないだろう。

『そうだよ。買っちゃおうと一緒に潜ってくれる仲間がいなくて認めちゃうことになるもんね』

そんなことないよ。

私にだって潜ってくれる仲間がいる。

……ここにいないというだけだ。

見えない鼻で笑われた。

ほんと、いちいち癩に障る奴だな。

面倒なのはそれだけではない。

内部の構造が不定期に変わるのだ。

そのため、マップが販売されていない。

どんな種類の罠があるのか。

各階層でどんな敵やボスが出てくるか。

できる限りの情報をギルドで購入してきた。

なんとか今日中に上級はクリアしたい。

逆に良いところは安全性がそこそこ高いところだろう。

初級と中級では即死しないかぎり、ダンジョンから排出される。

武器と防具はダンジョンに飲み込まれるが、生きて帰れるならまだ

チャンスがあると言える。

さらにだ。

冒険者から飲み込んだ武具やアクセサリーがアイテムとして設置される。

このアイテムはダンジョンを通したことで特殊な効果が加わり、元のものより強くなるらしい。

いわゆる魔装具と呼ばれ、非常に高価なものとして取引される。

安全性が高いとは言っても、今の私が初級や中級で倒れるとは考えづらい。

状態異常には耐性があるし、モンスターは一刀のもとに両断。

落ちている魔装具もチートほど良い物ではないだろう。

かさばるし、よほどいいものでない限り放置の方向だ。

とりあえず、初心に戻り一から攻略していく。

まず、初級。

ゆっくり進んでいたがまるで問題ない。

ときどき行き止まりにぶつかりながらも下へ下へと順調に進んでいった。

罾の数も初級のためか少ない。

中ボスとボスも近づいて一振りで終了した。

次に中級。

初級に同じ、としか言いようがない。

同じような構造で飽きてきた。

罾が多少多くなっているようだが、注意していけば問題ない。

魔装具も見つけたが、鎧はあまりにも重いので置いてきた。

雑魚モンスターはもちろんのこと、中ボスやボスも一撃だ。

『このダンジョンつまんないね』

シユウもなんだか退屈そうだ。

初級や中級なんだから仕方がないだろう。

『難易度のことじゃないよ。このダンジョンはさ。ほんとにただのダンジョンなんだ』

何となく言わんとしていることはわかる。

このダンジョンはなんだろうな。

おもしろくない。

『そうなんだよね。特徴がない。今までのダンジョンはそれぞれ個性があつた。ダンジョン固有の地形に、敵や罾。侵入者への対策が意図して組まれてた。ダンジョンの意志とでもしようか。でも、このダンジョンにはそれが無い。ただ機械的に罾やら敵が置かれているだけ。まるで……』

シユウはそこまで言うと考え込むように黙り込んだ。

つまらないダンジョンではあるものの、クリアすれば超上級だ。

さっさとクリアしてしまおう。

ようやく上級。

このフロアから危険になってくる……と思っていたがそうでもない。

敵は二回斬れば倒れる。三回斬る必要のある敵は存在しない。

罾に引つかかることもあつたが、耐性がついているためか問題な

い。

ワープの罫にもかかったが、目の前に階段があつたのでかえつて助かった。

途中でちよつと早めの昼ご飯を食べて、どんどん潜っていく。

問題は上級を十階層潜つたところの四十階層で生じた。

中ボス部屋の前で冒険者らしきパーティーと遭遇。初めての遭遇者だ。

男が三人と女の子一人。

このまま中ボスに挑むか、入り口に帰るかを相談しているのだろうか。

迷っているなら先に中ボスに挑んでもいいだろうか。

男たち三人はギロリと私を睨み付け、女の子はおびえた目で私を見てくる。

女の子はダンジョンに潜るとは思えないほどの軽装備だ。

ダンジョンよりもこじやれた喫茶店行くべきだろう。

なんだろうか。うさんくさいパーティーだな。

まあ、彼らが何者だろうがかまわない。

私には関係『あるよ。メル姐さんにも関係ある』。

……あのさ。

前から言いたかつたんだけど、思考に割り込んでくるのはやめてくれないか。

『俺とメル姐さんは心まで繋がってるんだね。早く体もコネクトしたいな、主に下半身！』

足が勝手に動く。

靴がシューに当たり、グアギイと小気味よい音が響く。

『アウチっ』

冗談はこれくらいにしておこう。

それで奴らと私に何の関係あるんだ。

覚えてないんだが、どこかで会ったことがあったか。

昨日の酒場にいたかな。

『男は知らない。みんな似たような顔だね。モブその一からその三と

でもしよつか。でも、女の子は知ってる。たぶん姐さんも知ってるはずだよ』

言われて女の子のほうを見てみるもののまるで記憶にない。

小柄で赤みがかかった巻き髪がチャーミングな女の子だ。

顔も特に印象がない。ちよつぴりそばかすが目立っている。

ううん……？

たしかにどこかで会ったような気がしなくてもない。

『会ったことはないね。でも、名前はさんざん聞いたよ』

会ったことはないのか。

それでも名前は知ってる？

『シスコンが話してたじゃん。妹さん——ビスだよ。話してた特徴と

そこそこ一致するね』

ああ、そうか。

赤髪にそばかす。

目のあたりもそつくり。

たしかにエイクの妹と言われれば納得だ。

でも、天使は大きだな。

……さて、これどういうことだ。

さすがの私でもきな臭い事情を感じ取れる。

シスコンのエイクは闘技大会に参加して、妹が応援に来ると話して

いた。

そのめかし込んだ妹がどうしてここにいる。

『本人に事情を聞けばいいんじゃない』

そうだな。

おい、シユウ。何か案をだせ。

『そうだね——』

怪しい四人組に近づき、男達を無視して女の子に「久しぶりだな、ビス」と話しかける。

「た、たすけ……」

目を潤ませて、女の子はかすれた声を出す。

どうやらビスで間違いないようだ。

周りの男達も剣を抜き始める。

上級ダンジョンにいるから、彼らは上級者であることは間違いないだろう。

悲しきかな、上級者ではもはや私をどうにかすることはできない。

チートスキルは人間にも効力がある。

私に害意を向けてきた人間に対してはモンスターと同様に効果を発揮する。

以前、道すがら盗賊団に襲われたとき、スキルが発動したから間違いない。

能力プラスだけで十分に対応できるのにスキルまで発動する。

能力半減が人間に対して発動するとどうなるか――。

答は倒れる。

あまりの臭いで倒れるわけではない。

シユウは、人間の力は一般人と冒険者で大きく違うわけではないと言う。

もちろん闘えば冒険者の方がずっと強いが、それは技量や経験の違いに大きく起因する。

人間に能力半減がかかると、感じる負荷は倍以上になるらしい。

まともに闘うことはおろか歩き回ることすらできない。

その結果として男三人が地べたを這いずる。

とりあえずほつとこう。どうにでもできる。

おびえるビスをなだめて話を聞くものの、町を歩いてる途中で誘拐されたとしか話さない。

どうやら男たちに直接聞かなければいけないようだ。

全員に話を聞いてみるものの誰も答えようとしなない。やれやれだ。

ビスを細心の注意を払って気絶させる。

ここから先は精神上よろしくないだろうからな。

男たちから剣を奪う。

ついでに口の悪い一人からパーティーリングも取り上げる。

そいつの首根っこをつかんで、中ボスの部屋に投入。

扉は独りでに閉まり、しばらくすると開いた。

『中に誰もいませんよ』

中ボス部屋には誰も残っていない。

男の装備もダンジョンに飲み込まれてしまった。

残った男二人の顔面は蒼白だ。

事情を話した方は解放してやると言うのと、彼らの口は先を競うように動き始めた。

彼らのリーダーであるシーマとかいう奴を闘技大会の剣士部門で勝たせるためらしい。

妹を誘拐してエイクに敗退させるつもりのようなのだ。

午前中の予選はシーマと当たらないため勝ち抜かせ。

午後に行われる本選の一回戦で敗退する旨の手紙を送ったと話す。

他に仲間はいないらしい。

シユウも嘘を言っているように見えないと話す。

よし。

じゃあ、問題ない。

どちらもよく喋ってくれたからな。

二人仲良く中ボスの部屋に解放してやった。

男たちの悲鳴とは裏腹に、扉は慈悲なく閉まる。

『さよなら。名もなきモブ達』

先ほどより時間はかかったものの扉が開いた。

もちろん中には誰もいない。

『じゃあ、中ボスをさっさと倒してさ。いったん地上に帰ろっか』
そうだな。

気絶しているビスの指に男から奪ったパーティーリングを嵌めて
パーティー登録をする。

ビスを腕に担いだまま、中ボスの部屋に入る。

中ボスは大きな蟹だった。

いや。実を言うと私は蟹を見たことがない。

シユウが蟹だと言うから蟹で間違いないんだろう。

硬そうな殻に、左右で大きさの違う爪。はさみというらしい。

体のわりに小さなまん丸の目が二つ。
長細い足で器用に横歩きしている。

一体だけなので入り口にビスを置いて蟹に向かって特攻する。
近づいたところではさみを突き出してくるものの遅すぎる。

軽く避けて腕を斬りつける。

本来であれば物理攻撃は効きづらいのだろうが、シユウなら問題ない。

何度か斬りつけるとご自慢のはさみは地面を転がった。

もう片方のはさみも斬って落とす。

攻撃手段をなくして横歩きするだけの蟹を何度か斬りつけてやると消滅した。

ビスを拾って彼女のパーティリングを取って捨てる。

入り口と反対側に出現した二つある扉の右側に入る。

左の扉は先に進むものだ。

扉の先はだだっ広いダンジョンの入り口広場だった。

無数の扉が設置されていたのはこのためだったのか。

『ほへえ〜。よくできてるね』

シユウは感心している。

同感だ。どういう仕組みなんだろうか。

闘技場へ走っていると背中におぶったビスが目を覚ました。

男たちはもういなくなつて、今は闘技場に向かってしていると話すとき喜んでいた。

子供はこれくらい無邪気なほうがいい。

勘のいいガキは嫌いだ。

いるんだよ。

「お姉ちゃん冒険者なの」って話しかけて来て、私の周りに誰もいないことを見てなんか察して気まずそうに黙って立ち去るガキ。

なんなのあれは。

言いたいことがあるならはつきり言えよ。

いつちよまえに察しやがってよお。

『メル姐さん。落ち着いて。ほら闘技場も見えてきたからさ』

いかんいかん。少し興奮してしまった。

闘技場ではまさに剣士部門本選の第一回戦が行われていた。今日は第一回戦だけで、二回戦から準決勝までが明日行われる。決勝戦は三日目となかなかの長期戦だ。観客席から見下ろすと、ちょうど赤髪のシスコンが剣を握っていた。

おや、まともに戦っているぞ。

『いや。あんまり力を出してないね。うまく負けようとしてるよ』
そうなのか。

まったくそんなふうに見えない。

このまま勝つてしまってもおかしくないぞ。

「おにいちゃん！」

背中からビスが叫ぶ。

不思議なものだ。

その声は決して大きなものとは言えない。

周囲の観客の声援に比べれば霞むくらいに小さいだろう。

それでもシスコンはたしかにこちらを見た。

私もあちらからビスがしっかり見えるように肩車してやる。

背は高い方だから、あちらからもしっかり見えるだろう。

「あたしはもう大丈夫だから！ やっつけてえ！」

シスコンは静かに頷いた。

本当に聞こえたのだろうか。

『読唇術かな。唇を見てた気がする。どっちにしろ伝わると思うね。今のビスの顔を見れば一目瞭然だよ』

私には見えないが、いい顔をしているんだろう。

そこからは怒濤の反撃だった。

シユウは『今の受け流しすごいなあ』とあちらこちらで感心している。

私は才能がないため地味な戦いだっただとしか言えない。

何合か斬り結んだあと、片方が崩れる。

見下ろすように立っていたのは赤毛の剣士だ。
観客達も拍手喝采してたたえる。

そんな中、私は観客席から飛び降りてビスを肩から下ろす。
「兄のところに行つてやれ」

そう言つて、ビスの小さな背中を押しやる。

彼女は私にコクリと頷くとシスコンにとてとて走っていく。

このあとどうなるかなんてわかりきっている。

わかりきっているものなど見る必要もないだろう。

闘技場の出口にこつそり向かう。

観衆の目がビスに向いている今がチャンスだ。

そもそもここは血を幾度となく拭つてきたものたちの立つ舞台。

私のようなチートに頼り切りの甘ちゃんも立つていいところではない。

例外が許されるのはせいぜい家族くらいのものだ。

出口通路を歩いていると怒濤の歓声が背中を押す。

兄妹の抱擁シーンでもやっているのだろう。

私にはもう一つやらなければいけないことがある。

誘拐犯のリーダーであるシーマの始末だ。

近くを歩いていた大会関係者に話しかける。

どうやらシーマは本選どころか予選で負けたようだ。

『誘拐するならさあ。せめて予選くらい勝ち抜けよ……』

さすがのシユウも呆れ声。

ステルスで姿を消して、医務室に向かう。

シーマは気を失いベッドに寝かされていた。

シユウで彼の腕を小さく斬つて、各種状態異常をプレゼント。

用事も終わったのでさっさと闘技場を後にする。

さらば闘技場。もう来ることもないだろうな。

アラクトル迷宮に戻り、さくつと上級をクリア。

これで迷宮都市アラクトの一日目は終わ——らなかつた。

ダンジョンから持ち帰った魔装具を売り払い、財布が肥えて満足していた。

三つほど売っただけで、三ヶ月は豪遊できる金額になってしまった。

魔装具だけならいくつか見つけたが、軽めで高そうなものをシユウに選ばせたらこれだ。

もうこの都を本拠地にしてもいいんじゃないだろうか。

帰ってもつらいだけだしさ。

一つだけ売らずに残した小さめのブレスレットをつける。

シユウによると、能力プラスの効果がついているそうだ。

これなら軽くてさほど邪魔にもならず、強化の恩恵を受けられる。

キラキラとまん丸に光る模様が気に入っていた。

宿への帰り道。

シユウが見たい見たいとうるさいので奴隷市場を通ることにした。今日はいろいろと役にたったからな。これくらいの要望は聞いてやってもいい。

他の町にも奴隷市場はあるが、ここまでの規模ではない。

筋肉ムキムキのマツチヨマンや筋骨流麗の女性ファイター、鱗が素敵なりザードマンといった亜人まで様々な奴隷が展示されている。

『あの子いいね。顔がいいし、なにより胸が大きい！ うひゃあ、すごい！ ブラッシユアップされた肉体。いやあ。実際に見ると熱気が違うねえ！』

熱気の部分には同意せざるをえない。

ほぼ全裸になった人たちが並べられ、肌の熱を感じる。

鼻の下を伸ばすもの。

じっくり値定めしているもの。

商人と値段交渉をしているもの。

——と様々な人がいる。

そんな中を歩いていると、だ。

「ウサー！ ウササ、ウサキユウサ！ キュー、ウサキキュー！」

いやね。

実際には違うんだろうけど、文字にするとこんな声が聞こえた。横を見ると、縦に長い耳をした亜人がいた。兎人だな。性別は見た感じ雌だろう。胸とかあるし。

『すっごい耳が長いね。しかも折りたためるんだ。一昔前の携帯みたい。それよりき。雌兎って響きはなんだかエロスを感じるんだけど、どうだろう?』

なに言ってるんだか。

それよりもこの兎人だ。

すごい剣幕で詰め寄ってくる。

繋がれた鎖を引きちぎってしまいそうな勢いがある。

「なあに、やってんだ!」

豚人だ。

違う。そんな種族なかった。

いや、あるのかもしれないが知らない。

彼は豚人ではなくただの太った人間……のはずだ。

おそらく店主と思われるまん丸の人間が鞭で兎人を打つ。

「ウサアツ!」

たぶん叫び声を上げて兎人が倒れる。

「ウササ。ウササキユ、ウサウサ?」

『日本語でok』

兎人はまた話を始める。

最後のは語尾の調子から疑問だとわかった。

疑問系がわかったところで何の解決にもならない。

——で、こいつは何を言ってるんだ?

「すみませんね、お客さん。あつしも言葉がわかんないですよ。最近、入ったばかりのやつでして、まだ躰がなつてないんです。どうか平にご容赦を」

どうやら店主にも言葉はわからないようだ。

おい、チート。出番だぞ。

『はいはい。ちよつと待ってね。オツケーよん。なんか話してみ

て』

もういいのか。

特に変化はないように思えるが。

「貴方はそのブレスレットをどこで手に入れましたか？ 私にその情報をお教えてくださいい！」

おっ、おっ！

すごいな。兎人の言っていることがわかる。

口の動きと聞こえる音は全然違う。

『しかも直訳だね、これ。なんだか気持ち悪いぞ』

確かに違和感を覚えるものの、意志が伝わるなら別に構わない。良しとしよう。

この兎人はブレスレットを知っているようだ。

元の持ち主と縁があるものかもしれない。

まあ、縁があるといってダンジョンで手に入れた以上は私のものだな。がな。

「貴方が嵌めているブレスレット。私たちはそれを『月光の腕輪』と呼んでいます。私たちの一族——玲兎に代々受け継がれていたものです！」

片耳がピンと伸び、もう片方の耳が半分に折れる。

ふうん、そうなのか。

そんな貴重品がどうして上級ダンジョンに落ちていたんだ。

「玲兎は戦に敗れ、多大な賠償金を要求されました。賠償金を払うため、一攫千金を目論み一族の勇敢なる男達がダンジョンに潜ったのです。その腕輪は彼らがお守りに装備していたのです。しかし、誰一人として村に戻ってきません。私は賠償金を賄うため売られてしまいました」

両耳がパタンと折りたたまれる。

耳が気になって話に集中できないだが。

なんだかちよつぴり悲しい話だった気がする。

そうかそうか。お前も大変だな。

がんばれよ。じゃあな。

「お待ちください！ その腕輪を私に譲って頂けませんか？ それがあればきつと一族を再建できます！ 私は貴方になんでもしますから！」

『なんでもだつて！ 今なんでもするって言つたよね！ なんでもだよ！ なんでも！ ほっほーい！』
うるせえな。黙つてろよ。

第一だ。

私は奴隷を必要としていない。

それに、なんでもするというのが奴隷のお前に一体何ができるというんだ。

「うさあ……私を買って頂ければ、貴方の身の回りの世話ができます」
ちよつと元気がなくなつたのか両耳が力なくしおれる。

『身の回りの世話よりも下の世話——』

「ダンジョンに潜れるか？」

なにやら買ってもらえそうな雰囲気を察したのか、両耳がピインと天を衝く。

いかななあ。耳が可愛くて仕方がない。

「私は玲兔の女です。戦う覚悟はできています」

唇を固く結び、耳をもふりと前傾させる。

やる気は耳からしかと伝わった。

「おい、豚……じゃなかった。店主、この耳はいくらだ？」

魔装具三つの売却で得たお金は、夜を待たずしてなくなった。

兎人の女はデイク・クツクル・クニ・クルスというらしい。
長いし、「く」が多いのでクーとした。

本人は不満そうだが納得してもらうほかない。

ひとまず軽めの鎧と、武器に使う鞭を買い与える。

ついでに月のブレスレットとやらも与えた。

能力プラスがついているので、少しは強くなるだろう。

ギルドでパーティーリングを買うことも忘れない。

クーは喋るシユウにすぐさま対応してみた。

顔や声に驚きはないものの、耳がびくびく震えている。たいへん素直な反応を見せてくれたので、私としては大満足である。

宿に戻る前に、超上級へ潜ってみることにした。もう遅いので五階層だけだ。

一人でも大丈夫そうだから、二人なら余裕だろう。結論から言おう。

余裕なんてもものじゃなかった。

パーティ用スキルに加えて奴隷用スキルが選択できるようになった。

シユウは奴隷用スキルについて詳しく説明しなかった。

モンスター用と同じく遠隔操作があり離れても問題ない。それに力の底上げができる。

——と話す。

それだけではない。

鞭使い専用スキルが選択できたらしい。

一つ目は「エスエム」とかいうものだ。

鞭で打ったモンスターを催眠状態にする。

催眠状態になったモンスターは仲間を襲う。

『神様はよくわかってるなあ』

なにやら感心している。

何がよくわかってるのかは、わからない方がよさそうだ。

二つ目は「ソニックブーム」。

鞭の先端から生じる空気の圧縮波を全方位に飛ばす。

名前から効果までまったくもって意味不明だ。

要するに、離れた敵にも攻撃できるということらしい。

それだけ教えてくれればいいのに……。

『俺の世界でもソニックブームは隙が少ない伝統の技だよ』

シユウの世界にもソニックブームとやらの使い手がいるそうだ。

しかも、その人物は宙返りしながらの蹴りも恐ろしく強い。彼の完成された戦術により幾人も挑戦者が敗れてきたと話す。なにせよ、効果が強ければそれでいい。

敵が見えるくらいの位置で鞭を打つとソニックブームで攻撃が当たり、さらに催眠状態になる。

超上級のモンスターとはまともな戦闘にならない。

催眠状態のモンスターに襲われている敵を斬りつけるだけの簡単な作業だ。

そいつが消えれば、催眠状態の敵も抵抗なしで切り捨てることができる。

クーは私の前を歩く。

奴隷は主人の前を歩き、危険を担う役割があるらしい。そんな話は初耳だ。

罨は怖い、シユウの目で大抵の罨は事前に発見できている。

たまに踏んでも状態異常なので効果はない。

大量のモンスター召喚というのもあった。

クーが鞭を一発打てばモンスター同士で大乱闘が始まり、あっという間に片付いてしまった。

中ボスも問題なく倒して行けている。

むしろ中ボスのフロアはありがたい。

基本的にまっすぐな通路と中ボスだけだ。

そんなこんなで五階層だけの予定だったが、十階層も進んでしまった。

一人でも大丈夫そうだが、二人なら盤石な攻略ができるな。

魔装具もいくつか見つけることができた。

残り三十階層を残して一日目の攻略を終了とした。

余談だが超上級で得た魔装具を二つ売却するとクーの買値の倍額が返ってきた。財布に入りきらない。

シユウも驚いていた。

付加効果はそこそこの程度のものだっただけらしい。

超上級者の装備だから元々高価なものだったのかもねと話してい

た。

一日目の攻略は終了したと言った。

されど一日がまだ終わつたわけではない。

いったん宿に帰ると、食事を取るためにまた外に出るのが億劫になつた。

帰りに食べれば良かったと気づいたのは部屋に入ってからだ。

そこでクーに食事と飲み物を買ってくるようにいつつけた。

お金を取り出すのも面倒なので財布をそのまま渡す。

クーは行つてきますと元気よく声を出して部屋から出ていった。

私もその背中を黙つて見送つた。

そして、私はベッドでうたた寝。

ふとトイレに行きたくなつて目が覚める。

いまだにクーは帰つてきていない。

『逃げられたかな……』

シユウがぼそりと呟く。

まあ待て。

落ち着けよ、シユウ。

まだ慌てる時間じゃないぞ。

逃げられたと決めつけるのは早計だ。

事件に巻き込まれているのかもしれないだろ。

フロントに降りると、主人が紙片を渡してきた。

連れの兎人。クーから預かつたらしい。

手紙にはたどたどしい文字で――、

「ごめんなさい」

たつた一言。こう綴られていた。

全てを理解してしまつた。

『いやはやあ！ さすが兎人。まさに脱兎の如くだ！ メル姐さんのお株が奪われちゃつたねえ！ まさか半日を待たずして逃げられるなんて！ほんと、メル姐さんといると退屈しないで済むよ！ 悔しいでしょうねえ』

『そんなことよりメル姐さん。一つ聞きたいんだけどいいかな？　メル姐さんはクーを連れ帰って一体全体どうしたいの？』

シユウは私の了承を得る前にさっさと続きを話し始める。

「ねえ、どうして途中で確認取ったの。」

確かに了承はするだろうけどさ。

いちおう返事を待とうよ。

『メングメング。それでメル姐さんは、奴隷の分際で勝手に逃げたつてクーを殴りつけたいの？　別にお金を持ち逃げされたことに腹を立ててるわけでもないよね。クーがいればダンジョン攻略は楽になるだろうけどさ。逃げた相手と一緒に昨日の今日で仲良く組んで潜れるかな。さてさて、メル姐さんはいったいクーを持ち帰ったところでどうするつもりなんだろう』

何が言いたいんだ？

『いやいや、言いたいことは言ったよ。すでに問いは投げられた。メル姐さんはクーを連れ戻してどうするのかなんてだけの単純な疑問。まあ、連れ戻してから考えることもできるだろうけど、けつきよく行き着く問題だからね。それで気になる回答は？』

クーを連れ戻してどうするか。

私は――。

迷宮都市アラクトの門。

通常、夜の交通は止められている。

しかし、現在は闘技大会中とあって通行規制がたいへん緩い。

『ゆるゆるのがばがばだね』

確かにそうなんだけど、お前が言うとお前が卑猥に聞こえる。

そんな警備がぎるな門の外側で私はぼんやり星空を見ている。

『来たよ、メル姐さん』

どうやら待っていた人物が来たようだ。

その人物はローブを纏い、傍らに馬も連れてくる。

そんな怪しい人物に後ろからこっそりと近づく。

『おっと、お嬢さん。こんな夜更けに一人でお出かけとは感心しませ

んな』

ローブがびくりと震える。

特に頭が大きく揺れた。

耳が動いたのだろうか。

「振り返るな」

振り返ろうとしたところに、シユウを首筋に当て動きを止める。

『クーちゃんさ。夜ぐ飯を買ってきてとは言われただろうけど、さすがのメル姐さんでも馬一頭は食べられないかな』

頭にかかったローブを取ると、縦に長い耳が出てきた。

耳は目に見えるほどびくびくと震えている。

カチカチと歯の鳴る音も聞こえる。

命令を無視して、馬を買ったの逃亡。

さつくり切り捨てられてもおかしくない状況だ。

怖がるのも無理はあるまい。

奴隷用スキル「掌握」。

これによりクーの情報を入手した。

奴隷の情報があらかたわかるスキルらしい。

心の中で思っていることですら把握できるという。

さらに主人である私の命令に絶対遵守するようになる。

先ほどシユウがスキルを選択して情報を読みとった。

正しくはシユウが読み取って、私に伝えた。

スキルはすでに外している。

シユウはこのスキルが好きじゃないらしい。

『首輪をかけられるってのはさ。あんまり気持ちいいもんじゃないんだよね。あつ、もちろん首輪ってのは比喩だよ。プレイの一貫なら物理的にかけられても問題ないから心配なく』

そんな注釈いらないよ。

せっかく良さそうな話になりそうだったのに……。

そんなことは置いといてだ。

「お前はあの腕輪を集落に持ち帰るんだってな」

聞き方は確認であるものの、すでに心から読みとった確定情報だ。

まあ、心を読まなくてもどうして逃げたのかは想像できていた。

「わ、私には村を再建する義務があります」

震えた声でクーは話す。

奴隷は主人に従う義務があるぞ。

お前はそれを破ったが、そこはどうなるんだ。

「う、うさあ……。でも、私は一族のためこの腕輪を村に持ち帰らなければいけません」

奴隷のものは主人である私のもの。

その腕輪は私のもの、今はお前に預けているだけ。

私のお金で買ったなら、隣にいる馬も当然にして私のものになる。耳がどんどんふにやふにやあとしぼんでいく。

このまま眺めているのもいいな。

主人の命令に逆らうような奴隷なんてあつてはならない。

そんな出来ない奴隷なんてごめんこうむる。

これを持って消えてしまえ。

私は一枚のぶ厚い紙を肩越しにクーに差し出す。

クーは恐る恐る手に取った。

「こ、これは……」

クーに渡したのは奴隷契約書と言われるものだ。

難しい言葉で事細かに奴隷契約の内容が書かれている。

このたかだか一枚の紙が私と彼女の主従関係を公に認めている。

その紙とパーティーリングがあれば、スキルの恩恵を受けられる。

少しは安全な旅路になるだろう。

集落に帰ってから燃やすなりなんなりしろ。

それと財布は預けておく、いつか返しに來い。

金がないならまたダンジョンに潜って魔装具でも探そう。

もちろん奴隷としてじゃなく、仲間としてパーティーを組んでな。

「え……。なんで？ どうしてですか？」

真剣に困惑しているようだ。

耳が右にふらふら、左にぐらぐらと落ち着かない。

殺される理由があつても、解放される理由はないからだろう。

言ったはずだ。

私に奴隷は必要ない。

前に立ち、身代わりとなる存在など不要。

必要なのは隣に立って一緒に戦ってくれるもの。

あるいは背中合わせになり私の背後を守るものだ。

——だからな。

お前は振り返らずにさっさと帰れ。

私も今日は疲れた。眠いからそろそろ宿に帰る。

そうすれば背中合わせで私にとって必要な存在になる。

クーの首筋からシユウを離し、私は彼女に背を向ける。

「じゃあな」

背中越しでの小さな声。

それでも彼女の大きな耳なら聞き取れるだろう。

もう言うこともないのでアラクトの町に向けて歩き出す。

シユウは私に問うた。

クーを連れ戻して如何せんと。

久々に頭を使って考えたが、答は出なかった。

どうやっても連れ戻したあとで良い関係にならない。

単純に主人と奴隷。

そう割り切るのは賢い人間なら簡単なんだろう。

それでも頭の足りない私にとって割り算はなかなか難しい。

特に割り切れない問題なんてお手上げだ。

それなら連れ戻さなければ？

連れ戻すという前提にするから難しくなる。

割り切れないなら、割り切る必要のない関係にすればいいではない

か！

自分が天才なんじゃないかと思ってしまうたね。

『それはただの逃げだよ——』

ほんと馬鹿だなあ、とシユウは笑っていた。

しかし、その笑い声はどうにも馬鹿にしたものに聞こえなかった。

「その……えっと………ありがとうございます。必ず財布は返しに

きます。お金は、ちよつときついで一緒にパーティーを組んで潜つてください。そのとき私は、貴方の隣に立って戦います。だから……だから今は——行ってきます!」

大きな声。少し震えた声が少し遠くから聞こえた。

背中を向いて喋っているからだろうな。

「行ってこい。気をつけてな」

『ここで別れてもお……シユウとクウちゃんわ……ズツ友だよ』

彼女も歩き出したのか。

地を踏みしめる音が聞こえた。

有るべきものは有るべきところへ。

いるべき人もいるべきところへ——

『ぼっちはやっぱりぼっちへ』

——収まり、迷宮都市アラクトの一日目が終了した。

……おいコラ。

締めセリフが台無しじゃねえか。

第1話 「アラクタル迷宮とその周辺」 後編

目が覚めて、朝食を軽く済ませ、いざダンジョンへ。

——と勢いよく宿から出たところで壁にぶつかった。

出鼻をくじかれてしまった。

壁を見上げるとそこには厳つい顔がついていた。

顔にはそばかすが目立っている。

その壁は人間の男であった。

彼の名はエイクと言う。

重度のシスコンだ。

シスコンの背後には妹のビスがくっついている。

昨日とは違って、学校の制服を着ている。

体格と顔のつくりはまったく違うが、赤い髪とそばかすが兄妹である

ことを感じさせる。

シスコンは挨拶よりも先に昨日のお礼を述べる。

彼の大切な妹——ビスを成り行きで私が助けた件だ。

そのビスもシスコンの背中から出てきてお礼を言ってくる。

気にするなとおぎなりに言い返し、ダンジョンへ向かおうとすると

止められた。

「頼みがある」

シスコンはそう切り出した。

ビスを学校まで送り届け。

しかもその後で闘技場まで送って欲しいと話す。

本当はシスコン自身が送り届けたいようだが、彼はこの後すぐ闘技

場へ行かなければならぬらしい。

こんなシスコンでも闘技大会では優勝候補なのだ。

今も周囲から視線を集めている。

パーティーの人間に頼めばいいと言ってみた。

こいつは超上級パーティーの一員だ。

仲間に頼むのが筋だろう。

どうやらダメみたいだ。

彼の仲間も昨日の予選に勝ち抜き、今は闘技場へ向かっているらしい。

さすが超上級パーティーと言ったところだろうか。最初から闘技場に連れていけばいいのではと提案してみた。

ビスは生物係とやらでどうしても学校に行く必要があるそうだ。

そんなの断れよ……。

正直に言っ、私は行きたくない。

さっさとダンジョンに行っ、クリアしたい。

『まあまあ、メル姐さん。そう言わずにさ。学校に行っ、みようよ。新しい発見があるかもよ』

シユウはビスの送迎に賛成している。大賛成だ。

どうせこいつのことだから制服を着た女が見たいだけだろうな。

『わたくしは後学のため、この世界の教育機関についてより詳しく正しい知識を蓄えておきたいと思っ、ておるのです。決っ、てそのようなやましい思っ、いはないここに宣誓させて頂きます』

嘘っ、かない宣誓をされてもなあ。

なににせよめんどくさい。

『そう面倒な顔をせんでくれ。今度改め、てお礼をする。そこの店で一番高い酒でも振る舞おう。一緒に飲もうではないか！』

おいやめろ。

それはお礼と言わないぞ。

誰が好き好んでシスコンの妹話を聞かにやならんのだ。

それに私が付いたところで妹が安全になるとは限らないだろ。

『お姉さんなら、安心できる』

今まで黙っ、ていたビスが口を開く。

彼女はうるうるとした目でこちらを見てくる。

ただ見てくるだけだ。何も言わずにただジツとすぎるように見てくる。

この罪悪感はなんだ。別に断ることは悪いことではないはずだ。

……けっ、つきよく断ることはできなかつた。

『よっ、しやああ！ さあさあ、皆さんお待ちかねっ！ 学園編！』

はっじまるよう〜!』

始まらなかつた。

学園に入れなかつた。

大切なことなのでもう一度。

——学園には入れなかつた。

入り口とその周囲は嚴重に管理され、部外者は立ち入り禁止。

当然、部外者である私が入ることはできない。

校舎どころか敷地にすら入れない。

門の前に立っていた警備兵に入り口脇の詰め所へ案内された。

ビスはそんなに時間はかからないと言って校舎へと走っていった。

休みのためだろうか。

兵士の数は少ない。

少ないと言うよりも二人しかいない。

一人は入り口に立っているため、詰め所には一人だけだ。

顔には深いしわが走り、髪も白髪が多く混ざっている。

老人一歩手前の男だった。

彼は柔らかな表情でお茶をだしてくれる。

「自分も昔は冒険者をやっていたんだが、膝に矢を受けてしまったなあ。学園に勤めている友人の推薦もあつて警備員になったんだ」

彼は膝をさすりながら語る。

どうやらエイクとも知り合いらしく。奴は自分が育てたと話す。

『学校という閉じられた空間にこそ事件は……』

シユウは先ほどからぶつぶつ何か言っている。

学校に入れなかつたのが、よほどショックだったと見える。

ここまで落ち込んでるのは初めてかもしれない。

今日は良い日になりそうだ。

警備兵の祖父は百年近く前にアラクタル迷宮の超上級をクリアしたパーティーの一員らしい。

ギルドでは情報が不確かということと超上級のボスモンスターについて聞くことができなかつた。

ちようどいいので何かボスについて聞いていないか尋ねてみよう

と思ったが、尋ねる前に男の方からぺちやくちや話し出した。

当時、最高峰の強さを持つパーティーが四組。

計二十三人の冒険者たちが超上級ダンジョンをクリアするために集まった。

彼らは一人も欠けることなく百階層にたどり着いた。

彼らは激戦を制しボスに勝った。

だが、町へと帰ってきたのはわずか三人。

しかも、そのうち二人は半身不随と精神崩壊。

残る一人が警備兵の祖父らしいが、彼も冒険者を辞めた。

ギルドにボスの説明を求められたが、断固として拒否。

拒否というよりも思い出せなかったようだ。

ボスの記憶を消すことで自らを守った。

残る二人も意味がわからないことを話していたという。

正しいと考えられる情報は以下の三つ。

外見はかなり小さい。

人間の言葉を喋る。

気持ち悪い。

聞いてはみたが、これだけではよくわからない。

とりあえずとても強いということだろう。

今までにない苦戦が予測される。

その後も警備兵はいろいろと喋っていた。

学校のことやらギルド、ダンジョンのことなどだ。

聞いていたはずだが、特に意識をしていなかったためよく覚えていない。

覚えているのはギルドの創始者と学校の創設者、迷宮都市アラクトの初代代表は同一人物ということくらいだ。

学校の制服もその当時から変わっていないようだ。

千年近くも前にそんな多才な人物がいるんだと驚いた。

そうこうしているうちにビスが戻ってきた。

ビスと一緒に闘技場へ向かう。

シスコンは彼女のために護衛を雇うことを考えているらしい。

以前から護衛を雇うという話はあったが、ビスが大丈夫だと断ってきた。

今回の事件を期にビスも護衛をつけることに賛成したようだ。

ただ、なるべく女性で話しやすい人がいい。

そんな人物に心当たりがないかと聞かれた。

「ない」

即答した。

ビスはまじめに考えていないと思ったかもしれない。

それは違う。本当はないのだ。

護衛の力量以前に、女性で話しやすいという人物に心当たりがそもそもない。

アイラはヒツキーでエルフ、ファナは高慢な吸血鬼。

ユリイは性格も良く話しやすいが男だ。

私の交友関係は問題だらけということをどうかわかって頂きたい。

そこで会話が止まってしまった。

『ねえ、メンヘラ姐さん。ビスちゃんにダンジョンや学園のことを聞いてくれないかな。特に創始者の情報が知りたい』

今まで何も口を出さなかったシユウがついに口を開いた。

創始者については、さつき警備員のおっさんに聞いただろ。

ところでメンヘラってなんだ？

……やっぱいい。どうせろくでもないことだろうからな。

ビスに尋ねてみると、すぐに答が返ってきた。

学校で教わったようだ。

約千二百年前に迷宮都市アラクトはその原型が築かれた。

当初は名前が違ったようだが、現在でははつきりと記録が残っていない。

初代代表は学校と冒険者ギルドを設立。

アラクトル迷宮の初制覇も初代代表だそうだ。

さらにビスの着ている制服も初代代表が考案したらしい。

初代代表は人形作りが趣味だったようで、彼の作った人形は今なお根強い人気を誇っている。

彼の自信作には番号が刻まれ、未だに発見されていない傑作である至高の第一号が迷宮都市アラクトのどこかに隠されていると噂される。

聞けば聞くほど恐ろしい人物だが最期はあつけない。

アラクトル迷宮に行ったきり帰ってこなかったようだ。

第一号もそのときに持って行って壊れたという説もある。

まあ、私にはまるで関係のないことだ。

未恐ろしい初代代表の名前は初めて聞くものだった。

すごい人だからどこかで聞いたことがあるかもしれないと思ったが、そんなことはなかった。

大昔の人間だから仕方ないだろう。

『なるほどね』

シユウも一人で納得していた。

ビスを無事に闘技場に送り届け、ようやくアラクトル迷宮に来ることができた。

彼女には明日の送迎もさらりと頼まれた。

エイクが決勝戦に進んだらという条件で受けておいた。

攻略のペースは二人で潜っていた昨日より落ちている。

それでも今日中にクリアはできそうだ。

『ところでメル姐さん。ビスの話——初代代表の話ね。どう思った？』

九十五階層で犬っぽい中ボスを倒したところでシユウがいきなり問いかけてきた。

初代代表か。

すごい人物だと思ったぞ。

ギルド、学園、都市の設立。

さらにはダンジョンの攻略。

一人でそんなにできるなんて信じられない。

それこそチートじゃないか。

そう冗談めかす。

『ご名答。初代代表——ソージ・イーダは俺と同じ転生者だよ』

冗談のつもりが大正解を踏み抜いてしまった。

えっ……ほんとに？

『俺のいた国だとイーダソウジだね。どんな漢字なのかな。ビスの着てた制服も俺の国のセーラー服を元にしてる。このダンジョンもイーダソウジが最初に攻略したというより、そもそも彼が作ったんだよ。チート持ちなのは確定かな』

さらりと恐ろしいことを口にした。

いやあ……さすがにダンジョンを作るっていうのは無理なんじゃないか。

『できるよ。俺たちの世界じゃ、似たようなことはやれたからさ。そういう方向性のチートだったならできるね』

いや、それでも彼が作ったという訳じゃないだろ。

何を根拠にこのダンジョンが彼によって作られたと言えるんだ。

『このダンジョンの中ボス。さっきの角張った犬や車輪の付いたアヒル、蟹、カバはね。すべて俺の世界にあるおもちゃを模してるんだ。ダンジョンの構造や中ボス、それにボスを見て、もしかしたらと思っただけで確信した。このダンジョンはイーダソウジによって作られたものだよ。そして、超上級のボスはおそらく——』

超上級のボスをシユウは予測した。

警備員から聞いた小型で喋る気持ち悪いおもちゃ。

この条件に当てはまるものがシユウの世界にはあったらしい。

そして、ついに第百階層。

まっすぐ伸びる通路を進み扉を開ける。

部屋に入ると扉は大きな音を立てて閉まった。

壁に溶けるように扉はその形を消した。

広すぎる空間には私一人だけ。

ボスの姿は見当たらない。

『上だね』

フロアの中心付近に来たところでシユウが呟く。

見上げると一本のひもが天井から垂れている。
そのひもの先に青っぽい何かがぶら下がる。

「オロシテ！ オロシテ！」

その物体はくぐもった声で叫ぶ。

話に聞いていた通り見た目は小さい。

両手を広げたくらいの大きさだろうか。

青っぽい毛に覆われ、頭にはやや大きめの耳が付いている。

まん丸の目に、小さなくちばし。

小さな足も付いているが手は見当たらない。

『やっぱりね。ここのボスはファーオーだよ』

ひもに縛られた毛むくじやらの獣はふぁーオーと言うものらしい。

しかし、あれは本当に人形なのか。

獣にしか見えないぞ。

しかも、助けを求めているし。

まったく強そうに見えないんだが。

「オロシテ！ オロシ——」

獣を縛っていたひもがほどけた。

『離れて！』

えっ……、

「ウオオオオオオ！」

獣は大きさに似合わない太い悲鳴を上げて落下してくる。

シユウの声を受けて、足を退く。

獣が地面にぶつかる、その小さな体がばらばらに砕け散った。

落下の衝撃で飛んだ目玉が私の顔の横を通る。

同時に獣の落下地点から赤い球体が生じた。

これには見覚えがある。

アイラの火魔法と同じだ。

赤い球体は猛烈な速さで膨張。

私は火の球から背を向けて逃げる。

床には飛び散った目玉が落ちていた。

目玉が私の方を見つめている。そんな気がした。

目玉を巻き込むように球体は広がり、膨張をようやく止める。

———とかボスは砕け散ったんだが、これは私の勝ちでいいんだろうか。

『何いってんの。本番はここからだよ』

火の玉が収束していく。

飛び散った目玉や部品は消え去っていた。

燃え尽きてしまったのだろうか。

———否。

収束した地点に一つの影が残る。

その小さな影は獣の形をし、砕け散った様子を微塵にも感じさせない。

「ダ・ノウラー！」

獣は先ほどと同じようにくぐもった声で叫ぶ。

大きめの耳が羽のようにぴこりと動く。

そうすると獣の体が浮かび、

「ナデナデシター！」

地面付近を滑空し襲いかかってきた。

私の側までくると、小さな足を動かす。

『受けちゃダメ！ 避けてー！』

あまりにもみみつきい攻撃だったため、シユウで受け止めそのまま斬りつけようと思っていたが止められた。

転ぶようにして体勢を崩す。

どうして受けちゃダメなのか、と聞くまでもなかった。

獣の足から風が生じ、避けきれなかった私の髪を切り裂いた。

後ろを軽く振り向くと、壁には切り裂かれたような亀裂が走っている。

『風魔法だね。無詠唱だからかな。特殊スキルの効果が発揮してないよ』

スキルの影響で最近ではモンスターの魔法を見ていなかった。

久々に見た魔法は今までのモンスターの比ではない。

詠唱時間四倍どころか弱効果もないようだ。

「モットー、モットー！」

どこから出ているのかわからない不気味な笑い声をあげたあと、再び飛びかかってくる。

その足から生じる風魔法を避けて、横っ腹にシユウを浴びせる。

「モルスアー！」

今の一撃はきれいに入った。

獣もよくわからない言葉を発し、ものすごい勢いで飛んでいった。

『でたー！メル姐さん唯一にして最強の必殺技！一にして全。全にして一！基礎の基礎すら見当たらない腕力の極致。もはや技と呼ぶのも憚られる滅殺奥義！「振り回し」だあ！』

形はともかく強ければいいのだ。

事実、獣の勢いは止まることを知らない。

壁にぶつかり、めり込んでようやく止まる。

獣はぴくりとも動かない。

……やったか？

「ファー、ブルスコ……ファー……ブルスコ、ファー。ダ・エイロウ・ウータイ！」

意味不明な語句をぼそぼそ言うと、閉じていた目をカツと見開き叫ぶ。

なんとなく危険だと感じて、横に飛んだ。

この判断は正解だったと言わざるを得ない。

見開いた獣の両目から光の線が出てきて、獣の足下から私のいた場所を走る。

光線が通った床は溶けて、二本の黒線が残る。

『目がビームってか』

シユウは楽しげに笑っているが、私にはまるで笑えない。

その後も不可解な攻撃を躲しつつ斬っていくと獣の様子が変わってきた。

具体的には見た目がぼろぼろになり、言っていることもさらによくわからなくなってきた。

「アハヒヤ、モト、アヒアヒア」

こんな具合だ。

今も口から溶解液をまき散らしながら跳躍してくる。

「ウヲオオオオオ……ウヲオオオ……ウヲオオ！」

さらに斬り付けていくと、言葉ですらなくなった。

その場でぴよぴよこ跳ぶと、フロアが大きく揺れた。

揺れが収まると床に亀裂が入り、ついには床が抜ける。

フロアの下にはさらにフロアが広がっていた。

先ほどのフロアよりもなお広い。

上のフロアから崩れた床が落ちてくる。

崩れてきた瓦礫をなんとか避ける。

気づけば獣を見失ってしまった。

「フヒャフヒャヒャー！」

瓦礫の下から不気味な笑い声が響いてくる。

どこから出てくるかと警戒していると、フロアの中心の瓦礫がガラ

ガラと崩れる。

そこから一体の獣が出てくる。

目は片方失い。

くちばしも欠け。

毛もぼろぼろ抜け落ち。

頭の一部からは火花が出ている。

「モット、モットモットモット、ナゲナゲナゲナゲナゲ、フヒヒヒヒ、

フギヤフギヤウイーウイー、ナナナナナ〜！」

いよいよ意味不明の言葉を羅列する。

「アハアハハヒャハヤ……カ・ウェイロウ………」

徐々に静まっていき、くちばしを閉じ、眠るように目を瞑る。

「――発火ドウルドゥー」

そして、一言ぼそり。

『来たよ！ 逃げて、メル姐さん！ 全力で！』

シユウから聞いていた通りだった。

ふぁー〇ーというおもちゃには有名な最終奥義がある。

その名も「発火ドウルドゥー」。

自らの体を犠牲とした一撃必殺技らしい。

獣の頭付近が白く光り出した。

見たのはそこまでだ。

背を向けて全力で走る。

その後はよくわからない。

瓦礫の中をとにかくがむしやらに走り抜けた。

石クズを踏み碎き、砂埃を巻き上げ駆け抜けた。

背にしてもなお目映い光。

アイラの光魔法を思い起こさせる。

壁まで走り抜けて振り返ると、そこには何も残ってなかった。

獣を中心として一定距離内の瓦礫がすべて消え去っていた。

獣のいた場所に小さな光が現れる。

ドロップアイテムだ。

さらにアイテムの近くに出口の扉が出現した。

背にした壁にも入り口の扉が浮かび上がる。

『勝ったね……』

ああ。

久々の強敵だった。

命の危険を感じたのはゼバルダ大木以来だ。

ドロップアイテム——「正体不明の小型動力」を拾って、出口の扉に歩を進める。

『どこ行くの、メル姐さん。そっちは出口だよ』

おっと……うん？

なにを言ってるんだ。

一瞬、私がおかしいことをしていると思ってしまった。

都市に帰るんだから出口でいいだろ。

頭がおかしくなったのか。

『はあ、思い出してみよ。このダンジョンの制作者——イイダソウ

ジはここで死んだことになってるよね』

そうだったな。

そいつはこのダンジョンから帰ってこなかった。
ボスに勝てなかったんじゃないのか。

『制作者が自分の作ったダンジョンに遅れを取ると思う？　ましてや彼もチート持ちなんだよ』

そう言われれば、そうかもしれないな。

意味不明な攻撃は多かったが、あれは不意打ちのようなものだ。
知っていれば、そこそこ対処はできるだろう。

しかし、出口以外にどこへ行けと言うんだ。

入り口の扉しか残っていないぞ。

『メル姐さん。ボス戦の途中で床が崩れたことを忘れたの？　ここは地下百階じゃない。百一階層だよ。じゃあ、壁にある入り口の扉はどこにつながってるんだらう』

どこなんだ？

『わからないから行ってみようよ、って話なんだけど……』

そういうことか。

最初からそう言えばいいのに。

どうしてわざわざまどろっこしく言うんだ。

たしかにここは地下百階の下になる。

そこにできた扉はどこに繋がるのか気になるところだ。

踵を返して、入り口の扉に近づく。

力をこめると扉はゆっくりと開いていく。

中はボス部屋よりも薄暗いのか、開けた部屋に光が差し込まれる。

「いらっしやいませ」

柔らかく、されどよく通る声に出迎えられた。

光の先には一人の女性が立っていた。

女中が着るようなひらひらした服を纏う。

やや青みがかかった黒色の髪を見せつけるようにお辞儀をしている。

どう考えても場違いだ。

「マスターがお待ちです。どうぞこちらへ」

それだけ言うと、背を向けてゆるりと歩き始める。

先の見えないほど長い通路を彼女はよどみなく歩いて行く。

暗く硬い通路に二つの足音がこだまする。
歩いていくと広間に出た。

広間といっても物置同然だ。

そこに置かれている物はどれも見覚えがある。

全てこのダンジョンにいた中ボスやボスたちだ。

警戒するが、どの個体も身動き一つしない。

広間を突っ切り、またしても長細い廊下にたどり着いた。

『うええ……』

シユウのうめき声に合わせて足が止まってしまった。

通路の両脇には柵が道の奥まで伸びている。

下から上まで五段の柵。

ふぁー〇ーとかいう獣が柵には並んでいた。

道の手前から奥まで余すところなくびっしりと置かれている。

しかも、左右両方の柵にだ。

整理されているのか、柵には番号が振られている。

そんな通路を女性は悠然と歩を進める。

私は躊躇いつつも倣ってついていく。

足を踏み入れると両脇に所狭しと並べられた獣が目を見開き、
気だるそうな目で私を見つめてくる。

くちばしもパクパク開くが彼らは何も喋らない。

道の奥にたどり着くと扉が一つ。

なんてことはない普通の扉だ。

意匠をこらした模様もついていない。

宿の扉よりも簡素なものだった。

女性は扉を開けて、脇に逸れる。

入れということだろう。

ままよつ、と足を踏み入れる。

扉の先は部屋だった。

工夫のない言葉だが部屋としかいいようがない。

宿の部屋よりも若干広い。

部屋には誰もいない。

部屋の脇にはベッドが一つ。
その逆側にはやや大きめの机。
よくわからない部品が転がっているところを見るに作業机だろうか。

中心には背の低いテーブル。
テーブルを挟むようにソファアが二つ置かれている。
左右の壁にも扉がある。

「マスター。お客様をご案内しました」
返事はない。

「かしこまりました。ただいま飲み物をお持ちしますので、ソファアにかけてお待ちください」

女性は右の扉に姿を消す。

ソファアは二つあるが、迷いなく右側に腰掛ける。

見た目は安っぽい、物は上質だ。

ふわりと私を支えてくれる。

すぐに女性は質素なカップを二つ、盆に載せて戻ってきた。

一つのカップをテーブルの上、私の近くに置く。

もう一つはシユウのものではない。

私の対面に音もなく置かれた。

部屋には誰もいないと言ったが、正確にはもう一人いた。

正しく過去形だ。

対面のソファアには白くばらばらになった人の痕跡が残っている。

一般的には骸骨と呼ばれる物だ。千年物だろう。

『ちよつと白くてはつきりしないけど、たぶんイイダソウジさん』

言われなくてもわかっている。

さすがにこの状況でこいつは誰だというほど馬鹿じゃない。

「マスター。お話しをどうぞ」

女性は骨となったイイダソウジに話しかける。

もちろん返事はない。ただの骸骨だ。

動き出すんじゃないかと肝を冷やしたが、骨は動かないし語らない。

「かしこまりました。お持ちします」

女性は何が聞こえたのか頷き、再び右の扉へ消える。

あつという間に戻ってきて、テーブルの中央に四角い箱を置く。

「あ、あー。聞こえてる？ 聞こえてるのかな。ようこそ僕の部屋へ」

聞き慣れない男の声がした。

耳を澄ませると、四角い箱から音が出ていることに気付いた。

「これが再生されることを嬉しく思うよ」

どうということだ。

どこからか私たちの様子を見ているのか。

『違うよ。イイダソウジが声を保存してるんだ。生きてるうちに声を残しておいて、ここにたどり着いた人に聞かせるようにプログラムしてる』

よくわからないが、この声はイイダソウジのものということか。

『そうなるね。この部屋にたどり着いた人へのメッセージだよ』

四角い箱は引き続き話を続ける。

「これが再生されるってことは、ここにたどり着いたのは君、あるいは君たちが初めてということだ。いったいどれくらいの年月が経ったんだろうか。十年もしくは二十年。さすがに百年は経ってないだろうね。僕のダンジョンは楽しんでもらえたかな」

残念ながら千年以上経ってます。

それとまったく楽しくなかったです。

「せっかくなので来てくれたんだ。僕は君たちにプレゼントをしたいと思う」

おお。

それは嬉しいな。

「でも、タダでプレゼントするのは好きじゃない。そこで君たちにクイズを出そう。なあにちよつと調べればわかる簡単な問題さ。僕が君にプレゼントする『モノ』と『置いてある場所』、それに『名前』を当てて欲しい。当てれば、それは君たちのものだ。大切に扱って欲しい。僕の最高傑作だからね。永遠に保たれる美だよ。『名前』につ

いてはこのダンジョンの名称がヒントになるかもしれない。解答時間は君たちがこの部屋を出るまでとしよう。解答は何度でも受け付けるよ」

イイダソウジはそう笑って、言葉を切った。

ふうむ、さっぱりわからん。

シユウ。お前ならわかるんじゃないのか。

『なんとなくわかる……けど、千二百年前なら見知ってる人もいたから簡単なんだろうさ。でも、この世界のこの時代でわかるやつなんていないよ。俺でなきゃ見逃しちゃうね』

どういうことだ。

『一つずつ考えていこうか。まずプレゼントするモノは簡単だよね。最高傑作って言うてるくらいだから、さすがにメル姐さんでもわかるでしょ』

ああ、なくなった人形の第一号か。

たしかに簡単だな。

次は場所。

人形だとしたらさっきの通路の中か。

詳しく見てなかったが、どこかにいたんだろう。

番号も振られていたから、そのどれかということだろうか。

あの小さな獣がプレゼントだとしても欲しくないぞ。

『いや、違う。あれは引っかけ……引っかけにもなっていないか。場所も極めて簡単だよ』

そうなのか。

あの人形のどれかがプレゼントじゃないのか。

『違う違う。たしかにあれはあれですけどいいけど、最高傑作を見ちゃうとあんなのはおもちゃもいとところだよ』

そうなのか……って、なんでお前が最高傑作を知ってるんだ。

『ほんとに気付いてないの？ お茶入れてくれたでしょ』

えっ？

ハツとして横を見る。

女中みたいな服を着た女性が首を傾げて見返してくる。

「おかわりをお持ちしましょうか？」

おい、嘘だろ。

人間にしか見えないぞ。

『人形だよ。歩いてたときにうなじを見てなかったの？ うなじのちよい下に「No. 001」って番号が刻まれてたよ』

そんなとこ見ねえよ。

じゃあ、この女中は千年以上もこの部屋にいたのか？

『そうなるね。マスターに仕えてたんでしょ。通路にも部屋にも埃一つ見えなかったからさ。ずっと掃除でもしてたんじゃないかな。イダソウジさんもまさか千年以上訪問者がいないとは思ってなかったみたいだね』

そうみたいだな。

さつきも「さすがに百年は経ってない」とか言ってたからな。

モノはこの女中で、場所もすぐ隣だとわかった。

そうなるかととは名前か。

『名前がよくわからないんだよね。ビスの話覚えてる？ アラクトって設立当初は別の名前だったって話だよ』

……………そんなこと話したっけ？

『したよ。たぶん、元はアラクトじゃなくてフラクト。都市の設立がダンジョンの後だとするなら、このダンジョンの本当の名前はアラクトルじゃなくて「フラクトル』』

ふらくたるというのはどういうものなんだ。

『メル姐さんにわかりやすく説明することは俺の能力を超えてるから無理。でも、フラクトルで間違いないと思う。このダンジョンの似たような構造。それにソウジと相似』

よくわからないが、それなら女中の名前は何になるんだ。

『イダソウジは人形が好きなんだろう。ピュグマリオニズムだよ。さつきも永遠の美がどうのこうのと言ってたし。ってことはおそろくいつまでも続くものが好きだったんじゃないかと思うんだよね。このダンジョンも百階層という有限の中に数多の配置を持たせるこ

とでいつまでも楽しめるようにしてる。……俺はあんまり楽しめなかつたし、好きにもなれないけど』

そうだな。

実際に千年も廃れていないわけだ。

学校も、ギルドも、もちろん都市も今なお残っている。

このダンジョンについては私もあまり好きになれない。

『有限の中に無限を含ませる。そうになると、彼女の名前もそれに因んでると思う。俺に続けて言ってみて。永遠、エタニティ、無限、インフィニティ、永久。いや、ダンジョンの名前はフラクタルでフランス語だったことを考えると……』

私もシユウに続いて復唱していく。

——アンフィニ。

こう言ったところで女中がいきなり動き出した。

またしても部屋に入り、四角い箱を持ってきてテーブルの上に置く。

「正解だ。彼女の名前はアンフィニ。町の人々には呼びづらいつて不評だったけどね。僕は気に入ってるんだ。君たちも彼女をアンフィニと呼んであげて欲しい。ダンジョンに連れて行っても問題ないよ。ファー〇ーもどきなら単体で倒せるくらいにはチューンしているからね」

『チューンってレベルじゃねえぞ』

さすがチートは格が違った。

アンフィニと呼ばれた彼女はぺこりと私に頭を下げる。

人形と言われても、まるで人形には見えない。

「アンフィニ。マスターとして最後の命令を下す。新しいマスターに従え」

「イエス。マイマスター」

アンフィニは間を置かずに返答する。

「それと、ずっと一緒にいてやれなくて済まない。お前には世話になりっぱなしだった。最後の最後まで駄目なマスターであつとことを許して欲しい。……もし新しいマスターに虐められたら、いつでも

ここへ帰っておいで。僕はきつと寝ているだろうから、いつもみたいに起こしてくれると嬉しい」

「……イエス。ソウジ」

いやいや起こさせて……。

まさか、チートでよみがえったりしないよな。

女中が一人増えたところでアラクタル迷宮の攻略は終了した。

ここからあとは蛇足になる。

超上級で手に入れたドロップアイテムを手に冒険者ギルドへ来ていた。

闘技大会の影響で、まだまだギルドの中はスカスカ。

暇そうにしている受付に向かう。

「どうされましたか!」

よほど暇だったのか、受付嬢はウキウキと対応してくれる。

『正体不明の小型動力』だ。超上級のクリア証をくれ。それと超上級のクリア証が二つになるから極限ダンジョンへの入場許可も頼む」

ドロップアイテムである「正体不明の小型動力」と、デイオダデイ古城をクリアしたときにもらった「超上級クリア認定証」を提出する。

これでいよいよ極限ダンジョン——神々の天蓋に挑むことができる。

受付嬢はアイテムを見つめて固まっている。

この反応は最近よく見かけられるため慣れてきていた。

デイオダデイ古城をクリアして、ギルドにフアナを連れてきたときはもつとすごかったからな。

『あれはおもしろかったよね。受付のお姉さんがフアナに「飴ちゃんあげるね」とか言ったところで、フアナが翼広げてお姉さん泡吹いて気絶しちゃったもんね』

周囲の冒険者が一斉にギルドから飛び出て、壊れた扉の修理代を請求された。

その後で支配人も出てきて話し合いになった。

上座に私とアイラ、ファナが座り、支配人が安っぽい椅子に腰掛け
ての一方的かつ平和的な話し合いだった。

受付の机を指でコツンと叩いて受付嬢の意識を戻す。

「これ……本物ですか？」

この質問も無理はあるまい。

ここ百年は倒されてなかったそうだからな。

見たことがなくてもしようがないだろう。

名前だけは知っているというやつだ。

どうでもいいことだが、このアイテムを魔術ギルドに持って行くと
名誉会員の席がもらえるらしい。

なんにせよ、そのアイテムはさっき倒したばかりのほやほやだ。

さっさと極限ダンジョンの入場許可証をくれ。

「しよ、しよう少々おまちくださいさびー！」

受付嬢は慌てて席を立って、奥へと消えていく。

舌を噛んだのか口元を手で押さえていた。

これはあれだな。めんどくさい流れだ。

ぶつちやけギルドに提出するのが一番面倒だ。

いろいろとよくわからない対応をしないといけないし。

『その面倒ごとを全部まとめて俺に放り投げてる人間が何言ってるの
さ』

そうなんだがな。

お前の言葉を伝えるだけというのも案外だるいのだ。

ちなみにアンフィニは私のすぐ後ろに控えている。

ダンジョンを出てから何も言わず影のように付き従う。ちよつと
こわい。

その後は思ったよりも円滑に進んだ。

闘技場に行ってる総支配人に代わり、支配人代理を名乗るエイク並
みに図体のでかいやつが出てきた。

そいつといくつか話したのち、極限ダンジョンの入場許可を受けと
りそそくさとギルドを立ち去った。

明日には神々の天蓋に出発する。

冒険の必需品はそのあたりで買っていけばいい。

町での噂を聞くにどうやらエイクは決勝戦にまで勝ち進んだらしい。

明日もビスを送迎することが決定してしまった。

よく考えたら明日になれば他のメンバーも暇になるだろう。

わざわざ私が送る必要はないのではないだろうか。

『気に入られたんでしょ。メル姐さんは小さな子に好かれやすいよね。ファナやらビスやら、近所の子にも慕われてたし』

子供の頃から頭が進歩してなくて悪かったね。

『なんでそんなに卑屈なの……。メル姐さんの数少ない長所だと思うよ。俺は子供に嫌われてたし。俺も子供は苦手だったからね。近づいただけで防犯ブザー鳴らされたときはほんと焦ったよ』

よくわからんが、珍しく褒めていたようだ。

とりあえず、明日はビスを送り届けたらさっさと旅立とう。

そうなるに残る問題は一つ。

アンファイニだ。この女中をどうするか。

強いと聞いているから旅に連れていってもいい。

しかし、どこまでもついてこられると正直言っとうつとうしい。

二人以上の団体行動は苦手なんだ。

ファナを町に連れて行くときも歩調がそろわなかった。

それに歴史的な貴重品とあっては下手に連れ回すのも気が引ける。ううむ。

おい、『一つ案があるよ』。

はええよ。まだ名前を呼んですらないぞ。

まあいい。案というのを聞こう。

『それはね——』

翌日の朝。

昨日と同じようにシスコンとビスが宿を訪ねてきた。

「アンファイニと申します」

アンフィニが二人にお辞儀する。
シユウの提案は単純。

アンフィニをビスの護衛につければいいということだ。
女性（型）で（人形にしては）話しやすい。

ビスの提示していた条件に合致する。

強さについては申し分ない。

間違いなくエイクより強いはずだ。

最強の護衛ではないだろうか。

私からの信用もあると言って薦めた。

詰まるところアンフィニはビスの護衛になった。

アンフィニもマスターの命令には従うだけですとしか言わない。

ビスは恐る恐る話しかけて、アンフィニも淡々と返答している。

少し不安は残るが、時間をかけて仲良くなればいい。

彼女たちには時間が有り余っているのだから。

こうしてビスとアンフィニの背中を見届けて迷宮都市アラクトでの日程を終えた。

最終話 「神々の天蓋」

神々の天蓋。

超上級を上回る極限ダンジョン。

制覇したものは冒険者ギルドの記録に存在しない。

ギルド誕生以前。すなわち、千二百年前に遡っても制覇したという確かな記録はない。

神々の天蓋は南にそびえる大山脈——レミジニア山系に存在すること自体はよく知られている。

ダンジョンには雑魚モンスターがおらずボスだけが存在する。

近年でも神々の天蓋にたどり着いたパーティは数組いる。

ボスに続く扉だけがあるとというのは本当らしい。

たどり着くだけなら上級パーティでもできるようだが、やはり扉を開けて戻ってきた者はいない。

実はボスなど存在せず、その先にある世界に達したのではないかという噂もある。

地に住まうものたちと天に住むものたちの境目。

それが神々の天蓋だ。

私も小さい頃から恋い焦がれていた。

ボスがいるというならどんなものなのか。

扉の先は噂のようにどこかへ通じているのか。

力がなく半ば諦めかけていた夢だが、シユウに会ってその夢は再燃した。

そして現在、私はその夢の前に立っている。

アラクトからひたすら南へ南へと約六十日。

関所に到達した。眼前にはすでにレミジニア山系が大きく見えている。

極限ダンジョンへの入場許可証を見せ、衛兵に見送られさらに南へ。

山道を登ったり下ったりして十日が過ぎた。

ついにたどり着いた神々の天蓋。

『なんか……いかにもって感じだね』

シユウの言うようにダンジョンとしての格式が外見に現れている。石造りの門が山の斜面を切り取るように屹立する。

山道で襲いかかつてきたモンスターも門の周囲には近づかない。

周囲は雲に覆われ曇っているにもかかわらず、門の部分にだけ日の光が注ぐ。

ここだけ世界から切り離されてしまっているようだ。

門の入り口には様々な模様の入った旗や記章が置かれている。

ここまでたどり着いた冒険者たちの証だろう。

柱にまで名前を刻み込んでいる奴もいる。

知っているものはなかった。

門をくぐって、切り開かれた山の内部に歩を進める。

通路も不思議な光に包まれ隅々まで見渡せる。

床や壁、天井もくぼみ一つない。

長い長い通路を抜けると開けた場所に出た。

左右の壁にはよくわからない複雑な壁画が刻まれている。

それがずつと奥にまで連なっている。

その奥には扉があった。

扉は入り口から見えるほど大きい。

開けることができるのか疑問を抱くほどだ。

扉に近づいてみると、扉の表面にもなにやら複雑な模様が刻まれている。

模様がなにを示すのかよくわからないが、きっと意味のあるものなのだろう。

私のほうは準備ができた。

おい、シユウ。お前は大丈夫か。

『なに言ってるんの、メル姐さん。俺はいつでも準備万端さ。ズプツと奥まで挿入できる』

ちゃんと馬鹿を言ってるから大丈夫だな。

よし、いくぞ！

両の手のひらをぺたり扉につける。

手の触れているところから白い光が模様をなぞるように走る。
その光景に見とれながらも、力をこめてゆつくりと扉を押してい
く。

……あれ？

扉が開かない。

いくら力を入れてみても扉は微動だにしない。

全力で押してみるが、扉はぴかぴか光るだけだ。

『二人以上で押さないと駄目とか？』

嘘だろ。

なんだよ、その対ソロ仕様。

私はここまで来て、帰らなければならぬのか。

「ずびばじえーんー！」

どうしようかと扉の前で悶々としていると後ろから元気な声が聞
こえた。

驚き振り返ると男……いや女か。

どっちだろう。どっちでもいいか。

中性的な人物が通路の入り口からこちらにふらふらと走ってきて
いた。

警戒はするが、その人物はぼろつちい服をまとっているだけで武具
などはいっさい見当たらない。

見た目だけなら私と同じ年頃だ。

しかし、灰色の髪の毛の合間から二本の角が生えているところを見るに
亜人だろう。

そうなるも年齢も外面から判断はできない。

「いやあく。ずびばぜんへえ、おばたせしまひたあく」

あ、ああ。

なにがなんなのかよくわからない。
てきとーに相づちを打っておく。

その人物は顔を赤く染め、怪しい呂律で話しかけてくる。
目もとろんとしていてはつきりしていない。

口からは……うわ、酒くさつ。

「うへへえ、ちよおとシミリアへお酒を飲みに行つてたんですよ。へっへっへえ〜」

そう言つて、慣れ慣れしく肩を組んでくる。

そのうえ、ぷはあつと酒臭い息を吹きかけてきやがった。

シミリアは聞いたことがある。

遠く北にある雪国だ。強い酒で有名だったはず。

「おや、おやおやあ。もしかしてお一人ですかあ」

普段ならイラツとするところだが、べろんべろんなためだろうか。

離れて欲しいとしか思わなかった。

「はひゃ、はひゃひゃ。こいつはたまげたなあ。一人で来る人間なんて数千年はいなかったぞお。うへっ、へへえ」

は、はあ、そうなのか。

まともな相手にするのが馬鹿らしくなってきた。

なんというか……うん、数千年？

お前はいったい何者だ。

「あれえ。もしかして、もしかするとこのわつちをご存じないっ?! なんともはやっ! って、よく考えたらわつちを倒してくれた人間なんて一万年はいなかったなあ! ふひひい!」

気持ち悪い声で笑い始めた。

ヒツキー、ロリコン、シスコンの次はアル中か。

「よっしや。わかった、わかりました! わつちも本気出しちゃいます! 酔い覚ましに顔洗つて、お水をちよろつと飲むからね! そのへんを軽くお散歩してから扉を開けてチョウダイ! うひゃあ、頭痛い。吐きそうだあ! なあんでな! うひよひよ」

にたあと下卑た笑みを浮かべると、アル中は扉に手を触れる。

触れるというよりも、沈むというほうがより正確だった。

ずぶりと扉に手が沈むと、全身も続いて沈み姿を消した。

『なかなか個性的なボスだね』

やっぱりそうなのか。

信じたくないが、あれがボスなのか。

酒場にいるアル中にしか見えなかったんだが。

とりあえず、言われたように軽く歩き回ってくるか。

『ノンノン。すぐ突入しよう。相手が本気を出せる状態まで、こつちが待つ必要なんてないっしょ。今なら相手が酩酊状態。有利に戦えるよ』

……それもそうだな。

さすが卑怯者の考えることは違う。

アル中の言葉を真に受けて待つこともない。

突撃してしまおう。

そう意気込み扉を再び押してみる。

扉は今度こそちやんと開いてくれた。

見た目の大きさから想像できないほど軽く動く。

扉の先は荒野だった。

家も木も川もなにもない。

荒れ果てた地面が広がっているだけ。

屋内ですらなかった。

振り返ると荒野にぽつりと立った扉が閉まり、光となって消えていく。

荒野に私一人が取り残された。

なにもない荒野といったが、実は灰色っぽい丘がある。

しかも、その丘はもぞもぞと動いている。

よくよく見ていくと丘でもなかった。

丘はつつかえながらもぐるりと回る。

ぐらぐらと丘が動くだけで地面が揺れる。

やがて丘の端からなにやら巨大な双眸が出てきた。

黄金の瞳孔は縦に割れて、値踏みするように私を見つめる。

大きすぎてよくわからなかったが、きちんと見ると手と足、さらには翼までついている。

『ドラゴンかあ……。この世界にはいないんじゃないかと思っただけど、やっぱりいるんだね。しかもラスボスですか。某シリーズの初代を思い出すよ』

なんというか言葉が出ない。

まさかここまでのものが出てくるとは想像していなかった。

ドラゴンというのも子供向けの物語だけの存在だと考えていた。トカゲの大きいものくらいだと考えていたがとんでもない。

この大きさはちよつと洒落にならない。

ほんとに倒せるの、これ。

『一万年くらい前に倒した人はいたみたいだからなんとかなるよ。ほら、俺チートですしおすし。とりあえず攻撃してみよう』

それもそうだな。

ひとまず斬ってみるか。

ドラゴンに近づいたところで足、もしくは腕を出され動きを制された。

こちらに向いていた口が大きく開き、咆哮——をすることなく、おえええと吐いた。

『これはだいいぶ悪酔いしてますねえ』

どうやらそのようだ。

頭はふらふら、瞳も定まらない。

口からはねばつとした液体がこぼれ落ちている。

気にしないでさっさと斬りつけよう。

まずは私に突き出されていた腕（あるいは足）を斬りつける。

斬ったという手応えはない。肌の表面をなぞっただけに思える。

『いや。たしかにめっちゃくちや硬いけど、ちゃんと吸収はできてる。

斬りつけただけでポイントが馬鹿みたいに入ってるよ』

手応えは薄いのが、きちんとダメージは通っているようだ。

何度か斬りつけて状態異常も入ったことを確認できた。

口からの吐瀉が先ほどよりも多くなった。

『ドラゴンというよりもゲロゴンだね。今のところ順調だけど、相手の攻撃には注意してね。重量が桁違いだから食らうと危ないよ』

うむ。一撃でも食らうとやばそうだ。

ドラゴンの胴体に近寄り、さらに斬り刻んでいく。

抵抗はされるものの、酔って体調が悪いためかキレがない。

軽く避けることのできる攻撃がぽつぽつ飛んでくるだけで、あとはひたすら吐いている。

どれくらい斬りつけただろうか。

とうに数十は斬りつけている。百に達しているかもしれない。

それでもドラゴンの様子にさほど変化はない。ずっと吐いている。

最初から弱つていると言えそうなのだが、本当に攻撃が入っているのか。

『入ってる。めちやくちや入ってるはずなんだけど、体が大きいからなのかな。特殊能力無効がうまく入ってない。攻撃の最中でも回復してると思う』

じゃあ、どうすればいい。

このままだとジリ貧になるぞ。

『メル姐さんがジリ貧って言葉を知ってたことに驚きだよ……。でも、その通り。そうになると頭か心臓にでも直接突き刺すのが一番かなあ。心臓は刃が届きそうにないから頭だね』

心底驚かれた。

私だってジリ貧くらいは知っている。

初心者時代に武器屋の親父から言われ続けてきたからな。

「メル。お前このままじゃ冒険者どころか人間としてジリ貧だぞ！」

豪快に笑われたものだ。

この話はもうやめよう。

言われたとおりに頭を狙ってみるか。

ちょうど地面に近づいてゲロゲロ吐いているからちようどいい。

胴体をよじ登り、背中、首と伝って頭に移動する。

揺れているものの、踏ん張ればなんとか大丈夫そうだ。

シユウを両手で逆手に持ち、脳天めがけて勢いよく突き刺す。

頭の皮を突き破りシユウはゲロゴンの頭に突き刺さった。

突き刺さった瞬間。

ゲロゴンは咆哮した。

空気は揺れ、頭に乗っていた私にも振動が伝わる。

どうやら効果があったようだ。

『やばい。怒らせた。逆鱗は顎の下じゃなかったのか……。メル姐さん、後ろ！』

顔だけ振り返るとそこには壁が迫っていた。壁に追突され、私は宙を舞う。

シユウを手放さなかったことが不思議なくらいだ。

どうやら追突してきたのは壁ではなく、腕あるいは足。能力プラスで耐久力も上がっているためか、痛みはそれほどでもない。

飛んでいる最中でゲロゴンの縦長に割れた瞳と目が合った。

瞳の中は炎のごとく揺らめいている。

怒りの感情が読み取れた。

地面にごろごろと転がり、正面を見るとゲロゴンが私を睨む。

残念なことに酔いも覚めてしまったようだ。

喉の奥から低い唸り声が聞こえてくる。

ゲロゴンが私に向けて口を開く。

喉の奥から赤いモノが見え、反射的に体を横に転がした。

私の元いた場所を真っ赤な激流が通り過ぎた。

赤い波は猛烈な熱を放ち、直接接触していないのにもかかわらず痛みを感じさせる。

炎の波は地面を半円にえぐり取り、荒野を突き進んでいった。

『食らったら死んじゃうね。骨すら残らないよ。これ確信』

ゲロゴンは外したことを確認すると、さらに炎の波を撃ってくる。

炎を何度か撃つと今度は飛び上がり私に爪を振り落としてきた。

なんとか避けることができたからいいものの、こちらも食らったら死ぬ。

間違いなくシユウで防ぐこともできない。

爪の振り落とされた地面は抉られるというレベルではなかった。

地は長く割れ、底の見通せない溝を作ってしまった。

攻撃の動作はわかりやすいため避けることはできる。

しかし、その一撃一撃があまりにも危険だ。

腕を振るうだけでも必殺になる。

おい、シユウ！

得意のチートでなんとかならないのか。

『もうちょっとがんばって！ 準備に時間がかかる！』

とりあえず策はあるらしい。

シユウも状況のまずさをわかっているのか。

冗談抜きで返答してきた。

その後も苛烈極まる攻撃を躲していたものの、砕けた地面に足を引っかけてしまった。

バランスを失って地面に転がる。溝に落ちないようにするのが精一杯だった。

隙としてはほんのわずかだった。されどゲロゴンはその隙を見逃さない。

私に向けられた口からは赤の波が見えている。

——回避は間に合わない。

そう悟ったときには既に、炎の奔流が眼前に迫っていた。

「シユウ！」

思わず叫んでしまった。

『もうメル姐さんったら。炎の中で愛を叫ぶなんて熱烈なんだからあ。僕ちゃん、照れちゃうぞ』

必死の叫びへの返答はいつも通りふざけたものだ。

返答にもあるように、私は炎の中にいる。

熱さはまるで感じない。

音も聞こえてこない。

まさか、もう——

『死んでないからご安心を。でも、生きているとも言えないかもね』

ゲロゴンは目を見張っている。

炎の中でも生きている私に驚いているようだ。

チートに慣れている私だって驚いているんだから当然だろう。

ゲロゴンは地を蹴って飛び上がり、私に爪を振り下ろす。

これはまずい。避け——

『避けなくていいよ』

えっ、どういうことだ。

聞き返すうちにゲロゴンの大きな爪は私の小さな頭へ振り落とされる。

周囲には波状の衝撃が駆け抜けるが、私には一切の衝撃がない。

ゲロゴンの爪は私の頭に触れたところで止まっている。

触れたところと言っても、触られている感覚はない。

ゲロゴンは足をどけると、さらに目を見張る。

私が平然と立っていることに驚いているのだろう。

うん。たぶん私も同じ顔をしているはずだ。

ゲロゴンは足を横から振り払う。

言わずもがな。結果は先ほどと変わらない。

周囲に砂埃は舞うが、足は私に触れたところで止まる。

私には足が触れたという感覚さえない。

ゲロゴンの顔に困惑が浮かぶ。

さて、シユウ。

そろそろこのチートの説明を求めてもいいだろうか。

『なぜなにチートの解説がはじまるよ。まず、このチートはね。一番最初——メル姐さんが初めて俺をにぎにぎしてくれたときからあったんだ』

最初は毒付与だけじゃなかったのか。

『選択できるのが毒付与だけだったんだよ。選択欄には一番最初から存在してた。ポイントがあり得ないほど高いのと選択条件が能力プラス以外のスキルを全て外すってことだからね。そんなんだから説明もしなかったし、そもそも使えなかった』

そうだったのか。

それでこれはいったいどういう効果なんだ。

今もゲロゴンの振り下ろした爪が私の肩で止まっているんだが。

『俺の世界でいうところの無敵状態だね。この世界だとなんて言うんだろう。ダメージが通らなくなるとでも言えればいいのかな』

そうみたいだな。

ゲロゴンが岩を投げ飛ばしてくるが私に触れた瞬間、勢いが止まっ

て地面に落ちている。

足に落ちても衝撃どころか重みすら感じない。

『いやー、これこそチートだよ。でも、攻撃どころか風すら感じないでしょ』

ああ、周囲に砂埃が立っても風すら感じない。

さきほどから周りの音はおろか自分の声すら聞こえない。

聞こえるのは頭に響くシユウの声だけだ。

ゲロゴンの口から漂う酒の臭いもなくなった。

右側の視界もなくなり、地面に立っている感覚すら消えている。

視線だけがここにあつて、生身は現実から消えてしまったんじゃないかと錯覚する。

『さすがと言うべきか、ちゃんと自覚できるんだね。これこそ逃げ足だけが取り柄のメル姐さんに許された特殊スキル。人間関係から逃げるだけに止まらず、世界まで置き去りにしてしまうほどの驚異的な逃避。その名もまさしく——現実逃避』

ゲロゴンも攻撃が無意味だと悟ったのか。

ぼんやりとした目つきで私を見ている。

『別の見方をすれば、現実から逃げるんじゃないやなくて現実に逃げるとも考えられる。メル姐さんの意識こそが現実で、その他全てのものを非現実とみなす。これによりメル姐さんへの干渉をなくす。俺だけがメル姐さんと外の世界を繋いでるんだよ。視界の右がなくなってるのも、左手に持った俺が見ている世界をメル姐さんの視界に当てはめてるだけだからだろうね』

お前の話はよくわからん。

一言でまとめろ。

『攻撃なんて気にしないで俺でゲロゴンをぶった斬れば万事オーケー』

最初からそういえばいいんだ。

ゲロゴンへと足を進める。

足裏にも体にも重みがない。

歩いているという気がしない。

動き出した私にゲロゴンは後退する。

炎を吐き出してきたが、かまわずに進んでいく。

近づいた私に大きく口を開き牙で噛みついてきたが、牙は私に当たって止まる。

私そのまま口から鼻、目、頭へとよじ登る。

振り落とそうと必死に腕を振るが私には当たらない。

体を揺らしているが、なんとか持ちこたえる。

再びシユウをゲロゴンの頭に突き刺す。

ゲロゴンは大きく身もだえる。

おそらく声を上げているのだろうが、私には聞こえない。

翼を広げて空を飛ぶものの、突き刺したシユウを握る私が落ちること

はない。

先に地面に落ちたのはゲロゴンのほうだった。

体を地面にこすらせて不時着し、徐々に勢いが収まる。

最期に腕を私の方へと伸ばしたが、届くことなく光へと消えていく。

ゲロゴンの頭から落ちたが衝撃はない。

ただ視点が変わったただけだ。

勝ったという実感もない。

『もうこのスキル外すね。おもしろくないでしょ』

ああ、と言ってみたものの本当に声が出ているのか心配になった。

きちんと聞こえていたようで音、臭い、視界、触感と一気に感覚が

私に戻ってきた。

襲いかかる感覚に刺激すら覚えるほどだ。

意味もない言葉を発して音を聞き。

足踏みをしてここに立っていることの実感を取り戻す。

勝ったという実感はないものの、勝ちだ。

ゲロゴンの落としたドロップアイテムを手取る。

——灰かぶり竜の頼りない肝臓。

……なにこれ？

今まで手に入れたボスのドロップアイテムの中でも名前が一番

しよぼい。

牙とか爪やら翼みたいな竜らしいものじゃないの？

心臓でいいだろ。なんで肝臓なの？

しかも頼りないって……。

どういうことよ？

『落ち着いてメル姐さん。ほら深呼吸、深呼吸』

落ち着くために息を吸う。

『吸ってー、もっと大きく吸ってー、鼻からもどんどん吸い込んでー。』

はい、吸ってー』

そろそろ吐いていい？

十分、落ち着いたからさ。

『名前で判断しちや駄目だよ。すごい効果があるかもしれないでしよ』

そ、そうだな。

それにアイテムよりも大切なことがある。

扉だ。

入り口の扉に加えて、もう一つ巨大な扉が現れた。

この先にこそ、私の求めていたものがある。

深く息を吸って扉に力を入れる。

やはり扉は見た目よりも軽く開いていく。

扉の先は先ほどと同じような遺跡であった。

入り口の扉を開いてしまったんじゃないかと不安になったが、よく

見ると細部が異なる。

こちらは奥に通路が見当たらない。

そのまま開けた空間から目映い光が差し込んでいる。

その光に向かって足を運ぶ。

ゆつくりと踏みしめるように歩いていたが、気付けば駆け足になっていた。

早く、一刻も早く、光の先に何があるのかを知りたかった。

私はついに神々の天蓋を超え、その先にある光を見た。

どこまでも青く続く高い空。

すぐ下を滔々と流れる川の水。

どうやら小高い丘の上のようだ。

ここは天より高く、空より低い場所。

天の先には広大な世界が広がっていた。

「新世界の感想は？」

後ろから声をかけられた。

振り返るといつの間にかアル中が立っていた。

なんでここにいるんだ。

「酔い覚ましに顔を洗って水を飲むって言ったろ」

そう言つて川を指さす。

ああ、そう言えばそんなこと言ってたな。

ボス部屋の荒野には水なんてなさそうだったし。

「しかし、わっちが人間なぞに負けるとは……貴様、本当に人間か？」

道理の通じぬ奇妙な技を使いおる。倒されるなんてこっちの挑戦者

を含めても一万二千年ぶりだぞ」

『八千年過ぎたらもつと恋しくなりそうだね』

シユウは相変わらず何を言ってるのかわからない。

そういえば、しゃべり方がまともになってるな。

「倒されたから全回復の状態で復活した。元はこんなしゃべり方だ」

本当だろうか。

酔っていたときの方がいきいきとしていた気がする。

「どちらでもいいだろう。わっちは水を飲みに行く。門を通ればあちら側には戻れるし、わっちのドロップアイテムを使えば貴様を迎えに行くことになる。面倒だから使うなよ」

あの頼りなさげな肝臓はそんなことができるのか。

それより、なんで一人称がわっちなんだ。

「うるさいな。わっちは今、機嫌が悪いのだ」

フンと鼻を鳴らし飛び上がる。

背中から翼が生え、体も竜の大きさに戻る。

そのまま大きな影を地面に落とすつ川へと飛んでいった。

川でばしやばしやと水浴びしている。

ちよつとなごんだ。

『それでメル姐さんはどうするの。念願の「神々の天蓋」はクリアしちゃったけどさ。おうちに帰って惰眠でも貪る?』
なに馬鹿を言っている。

目の前に名も知らぬ土地が広がっているんだぞ。

ここまで来て「じゃあ、帰るか」など言えるわけがないだろう。
道なき道を突き進み、ダンジョンがあれば片っ端から攻略していくに決まっている。

『おおく! おかしいなあ! なんかいま一瞬だけメル姐さんが冒険者に見えたよっ!』

私、冒険者ですから。

今さら言われるとは思わなかったよ。

しかも、一瞬だけしか見えなかったのか。

そんなことよりもだ。

さつさと行くぞ、シユウ!

私の足が早く進みたいと疼いているんだ!

『よっしや。それじゃあ、駆け抜けよう! メル姐さん! 俺たちの

冒険は始まったばかりだぜ!』

その通りだ。

神々の天蓋の攻略は終了した。

私の夢は叶ったが、冒険が終わったわけじゃない。

むしろ、ここからが始まりと言っても過言ではないだろう。

見ず知らずの土地をこれといった目的もなく突き進んでいくのだ。

『そこだけ聞くとさ。ただの迷惑な人だよね』
うるさいぞ。

まったく締まらないな。

まあ、このほうが私たちらしいか。

さて……そろそろ行くか。

気負いすることなく一歩踏み出す。

こうしていつも通りのふざけた調子で新たな冒険の幕が開かれた。

蛇足

蛇足01話 「魔王軍 vs 人間一匹」

神々の天蓋にてドラゴンが一人の人間に敗れた。
ことの始まりはその翌日となる。

セルモンドは行軍中であつた。

魔王の命を受け、町を襲撃しに行く途中だ。

四天王の一柱である剛拳のセルモンドが直々に人間を狩りに出向く。

増えすぎたゴミどもに自身の無力さをわきまえさせる必要がある。
前方に影ありと手下から伝言がきた。

セルモンド自身も確認する。すぐに見つけた。

荒涼とした原っぱを人間が歩いていく。

周囲に人影は見当たらない。

人間は弱い。

屈強な我ら魔族とは異なり、あまりにも弱く脆い。

個々で敵わず集団となり武器を、魔法を、知恵を使い対抗してくる。

対抗と言つても、その力はたかが知れている。脆弱にすぎない。

ときどき潰して身の程をわきまえさせることが肝要だ。

セルモンドの視線の先には、ひ弱な人間が一匹。

人間もセルモンドたちに気付いたようで、ぼんやりとこちらを見て
いる。

「セルモンド様。食らってしまったも？」

問われたセルモンドは考える。

通常なら確認も取らずに食らっている。

どうして手下が彼に確認を取ったかと言えば、場所が場所だから
だ。

ここよりすぐ北東には「灰竜の聖域」がある。

竜の住まう丘より川に沿って下ったところにある小さな集落。

そこでは人間どもが酒造を行っている。
造られた酒はすべて竜への貢ぎ物だ。

もし、この人間が聖域の者ならば手を出せない。

過去に魔族が集落を襲って酒造が滞り、竜を激怒させた。

魔王様が秘蔵の酒を送ることなどでなんとか怒りを収めたのだが……。

四天王の二人が消滅、城も半壊という大惨事。

これ以降、聖域に手を出すことはおろか近づくことすらも勅命によつて禁止された。

聖域の人間が外に出てくることはあれど、この辺りには滅多に來ない。

それに聖域の人間であれば、竜の紋章をぱつと見てわかる位置につけている。

荒野の先にいる人間にセルモンドは目を移す。

人間の形状に詳しくないが、おそらく雌であろう。

外見を見ても特に甲冑の類いは着込んでいない。

あの様子では一撃の下に死に絶えたと見える。

右側の腰には小さな剣をぶら下げ。

左側にはこれまたちつぽけなクロスボウがついている。

今までに見てきた戦える種類の人間には見えない。

どちらかと言えば、愉快な悲鳴を上げて逃げ回る人間に近い。

聖域を示す紋章も見取れない。

それならば――、

「食らえ」

生かしておく理由はない。

そう判断して手下どもに食事を許可する。

彼らはそれぞれ競い合うように人間へと向かっていった。

あるものは無数の足を蠢かせ、あるものは巨体で地を揺らしている。

セルモンドも余興を見物するため、人間に歩を進める。

手下どもが向かうとほぼ同時。

人間は腰にぶら下げていた剣を抜いた。

どうやらあの人間は我が手下たちと戦うつもりのようなのだ。
手下と言えど、四天王セルモンドの選ぶ力量のある魔族である。
あの人間は小さな剣でいったいどうするつもりなのか。
いよいよ先頭集団が人間に襲いかかった。
セルモンドの位置からはすでに人間の姿が手下に隠れ見えなくなつた。

次の瞬間には人間の姿が微塵も残らず消え、手下が戻ってくる。

——彼の予測は外れた。

消えたのは人間ではなく、セルモンドの手下たち。

倒れるのでも引き裂かれたわけでもない。

光となつていなくなつた。

光の粒子の合間から人間の立ち姿が映る。

剣を振つたのか位置が体の横に移動していた。

セルモンドはその光景に思わず足を止める。

一方で勢いづいている手下たちは止まることはない。

光に包まれている人間へと一直線に向かつていく。

そして、彼らも光と消えた。

あまりにも一瞬の出来事だつた。

先頭の一人が倒れるだけでなく、後続のものたちも倒れていく。

人間は倒れたものたちに次々と容赦なく剣を突き刺す。

すぐに手下達は光と消えていった。

セルモンドは呆然と彼らを見送つた。

夢を見ているのではないかと目をこする。

再び目を開くとやはり手下たちの姿はどこにもない。

地を引きずつた跡がセルモンドの周辺から伸びている。

その先には人間が一匹。

どうしてもただの人間にしか見えない。

人間は部下の進行により草が抉られ剥き出しになつた地面を歩く。

焦れるほどの歩調でセルモンドに向かつてくる。

セルモンドは足を後退させた。

無意識だ。彼の無意識がこいつは危ないと訴えている。

だが、彼にはその事実が受け入れられなかった。目の前にいるのは人間。

様々な手段を用いて抵抗をしているが、しよせんは魔族の糧となる存在。

そんな矮小極まる生物に対して魔王軍四天王である剛拳のセルモンドが恐怖を抱いている。

そんなこと——あつてはならない！

セルモンドは人間へと大きく足を踏み出し、全力で拳を振り下ろす。

人間に近づくと彼は力が抜けるような感覚に襲われた。

それでも振り下ろされた拳は地に深々と沈み込む。

すでに人間の姿はない。

拳の下だ。

「そうだな……。上級くらいか」

低くかすれた音がセルモンドの後ろから響く。

彼は人間の言葉を解さないため何を言っているのかはわからない。

振り向こうとしたところで彼は目眩に襲われた。

痛みのもと、全身の力が抜けていく。

膝を落とすこともできなかつた。

足が光へと消えていつていた。

すぐに視界も暗転する。

オレ様が、死……。

セルモンドの思考は最期までもたなかつた。

魔王軍四天王が一柱——剛拳のセルモンドは消滅した。

魔王城の一室は重い空気に満たされていた。

「セルモンドがやられた？」

凶報を受けた魔王は吐き出すように呟く。

たったそれだけの動作で室内の空気はいつそう重く冷たくなる。

「はっ、我が部下の報告によりますと一匹の人間により滅ぼされた、と」

鋭いくちばしを持ち、今は翼を畳んだ鷹のような魔族が答える。

彼こそが四天王の石柱——裂空のカルロである。

カルロは続ける。

「されど魔王様。セルモンドは四天王といえど我らの中でも若輩にして最弱」

「人間に負けるナド、魔族の面汚しダ」

体がどろどろと溶けては落ちるスライム状の魔族もカルロに続く。

性別はないが、どちらかと言えば心が女なスライム——不浄のフグイラである。

彼女の口から出た瘴気に魔王とカルロは顔を歪める。

「エドに続いて、セルモンドまでやられるとは……」

つい先日も聖女とやらに曇天のエドがやられたばかりだ。

意趣返しとしてセルモンドを送ったが返り討ちにされてしまった。

しかも、その人間は魔王城に向けて歩を進めているという。

噂の聖女ではないようだが、警戒するに越したことはない。

「情報を集める必要がある。見てこいカルロ」

ハッ！ とカルロは快活に返答する。

彼は部屋を出る寸前に翼を止め、魔王を振り返る。

「ところで魔王様。見てこいと仰りますが、殺してしまっても構わないのでしよう？」

魔王は口端をつり上げ嗤う。

「無論だ。魔族のなんたるかを人間に刻み込んでこい」

この言を聞くや否やカルロは部屋から飛び出した。

城より飛び出したカルロは部下を連れ、セルモンドが行軍していた道をたどる。

はるか上空より道なりにたどっていくと、人間の姿が見えた。

たった一匹。周囲をよく見ていくが伏兵はない。

周囲の部下も確認できないようだ。

「あれ、ではないよな……？」

カルロは困惑する。

声にも出てしまっていた。

人間は道なりにとぼとぼ歩いている。

じっくり見てみるが武器は片手剣とクロスボウのみ。

どうやってもあれではセルモンドを討ち取ることなどできない。

——とは言っても、ここは魔族の領域だ。

ここにいるということと、人間の来た方向は東。

これらの情報からセルモンドはやはりこの人間にやられたと導かれる。

人間もカルロらに気付き、眠そうな目をさらに細めて見上げる。

口もうつすらと開かれ間抜けな顔だ。

なににせよ排除する必要がある。

「右翼部隊。かかれ」

カルロは自身の右を飛ぶ部下に号令をかける。

部下たちは人間に向かい急降下を始める。

人間も徐に剣を抜く。

焦りはまるで見て取れない。

部下たちは人間まであとわずかというところで地面に落ちた。

「なにがおこっている……」

カルロの質問に答えられるものはいない。

地に落ちた部下たちは順々に剣を突き立てられる。

血は一滴も出てこず、淡い光の粒子となって消えていく。

「近づいてはならん。このまま様子を見る」

人間は地に落ちた部下たちをすべて片付けるところこちらを見上げてくる。

じっと見てくるだけで何か仕掛けてくる様子はない。

ぶつぶつと独り言を漏らしている。

魔力の流れに乱れ無し。

詠唱ではないな。

「全部隊。我に続いて詠唱を始めよ」

地对空の攻撃手段がないのなら、空より魔法で一方的に攻めるのが良い。

カルロはそう判断し詠唱を始める、が、
へくわああぜのおぬあぐわあれえうわあ——

詠唱がおかしい。

早く詠もうとするが、口がついていかない。

詠唱を止めようとしたものの、止めることもできない。

次の言葉が勝手に口から出てくる。

なんだ！ なんなんだこれは!?

周りを確認するとどうやら我だけではないようだ。

部下たちも慌てふためいている。

ふと人間を見ると剣を顔の前に立てていた。

刀身が赤く染まり始める。

なにかわからないが、あれはまずい。

避けろと声を出したいが、詠唱のせいで叶わない。

このままではいけないと飛ぶ軌道を変える。

——まさにその瞬間。

カルロのいた場所。

すなわち、部下たちが未だ密集している場所を赤い帯が通過した。

赤い帯はそのまま雲に穴を開け、上空に飛んでいく。

帯の通過した地点に部下は残っていない。

赤い帯が炎だと気付いたのは、熱波で翼が焼かれてからだった。

翼をなくした我は為す術なく地面に引っ張られる。

そうしてカルロは地面に激突した。

落ちた衝撃では死ぬこともできない。

朦朧とした意識の中で足音が聞こえてきた。

視界もぐにやりと歪み、はつきりと見えないが人間だろう。

「……うむ、まったくだ。さすがゲロゴンを倒して手に入ったスキル

というだけあるな」

また独り言だ。

げろごん？ すきる？

人間の言葉はわかるが聞いたことがない。

それとも耳がいかれてしまっているのだろうか。

息もうまくできなくなっている。頭が割れるほどの痛み。おかしい。焼かれたはずなのに翼が寒い。凍ってしまいそうだ。痛い。体が痛い。ぶつけた頭が痛い。焼きただれた翼が痛い。こんなにも痛いのに口は痛いとも言わず詠唱を続ける。

「そうだな……。楽にしてやろう」

人間はそう言つて剣をカルロの頭に突き刺した。

彼はすぐさま光となって消えていく。

四天王の石柱——裂空のカルロは痛みから解放された。

「全滅……?」

魔王は報告が信じられず聞き返す。

「配下も今一度報告を繰り返して伝える。」

「タダの人間ではナイ」

フグイラは焦らない。

人間がアレマメイズに向かっていると聞いた。

アレマメイズは彼女の本拠地。あそこなら彼女は魔王とも互角以上で戦える。

それならば人間はもう死んでも同然。

誰も疑うことはない。

「行ってクル」

魔王の返事を待つこともなくフグイラは部屋を出た。

フグイラはアレマメイズにて待ち構える。

彼女は部下も配下も持たない。

昔はいたが彼女の毒にやられて死に絶えた。

セルモンドやカルロは部下の数で自慢しているが、それは自身が弱いと認めているにすぎない。

自身の無力さを数でごまかしているだけ。数の宣伝は、すなわち弱さの宣伝。

そんな体たらくだから、人間ごときにあっさりとやられてしまったのだ。

魔王も然り。あの男がやられる日も遠くないと彼女は考えている。魔王本人も年を取ったと話していた。

力もだいたい衰え、人間に反逆を許している。

後進魔族の育成を怠ったのがまずかったと言える。

今の若手は血の気ばかりが多く。実力がまるで伴っていない。

魔王の後釜を探しているようだが、そんな奴は見つからないだろう。

どいつもこいつも部下の数を誇るだけだ。

別に部下の多さをうらやんでいる訳ではない。

部下や仲間と楽しそうに話してる連中が妬ましい訳もなく。

人間の町を襲うまでの道中、話し相手がいなくて寂しいと感じるはずもなく。

ましてや触った相手を悉く溶かす自身の力を忌まわしいと思ったことなんて一度足りたもありはしない。

いやほんとに。

「羨まシクなんか……ナイ」

………実を言うたちよつと羨ましい。

ほんとにちよつとだけ。

せめてまともに話せる相手がいればなあ、と思ったこともあったがもう諦めた。

魔王の下なら見つかると思ったが、気付けば四天王の一柱になっていた。

今や魔王さえも彼女の毒に顔を顰め、会話も二言、三言で終わる。

いつそ彼女が魔王を引き継いでやろうかと考えたこともある。

しかし、配下はどうせ毒で死んでいく。むなしいだけだ。

そんな思考を三周ほどしていると件の人間がやってきた。

報告にあつたとおり、たつた一匹。

ぶつぶつ独り言を愚痴ている。

気持ち悪い奴だ。

さつさと殺してしまおう。

人間にはなんの期待もできない。

過去にも強いと言われていた人間はいた。

あれは三百年くらい前だっただろうか。

勇者などと呼ばれ、魔法使いに格闘家、あと一匹はなんだっただかな
……。

とにかく、人間がたつた四匹で魔王城へと邁進していた。

現在同様、当時の四天王もフグイラ以外やられた。

満を持して彼女が出向いた。

楽しみで仕方なかった。

勇者と呼ばれるくらいだ。

フグイラの毒など効かず、倒してくれる。

見た目は愛嬌のあるスライムだ。これはいける！

うまく倒れたところで起き上がって見つめれば、きつと仲間にして
くれる！

いざというときのため人間の姿に変形する練習もした。

人間の言葉は解せないが、物覚えはいい方だ。

すぐに意思疎通できるようになるだろう。

——そんな淡い期待をしていた。

結果は無情。期待は溶けて消えた。

魔法使いは瘴気にやられ詠唱もできない。

格闘家とあと一人もフグイラに攻撃し、毒で溶けた。

勇者の持っていた剣は毒に耐えたが、持ち主が溶けてなくなった。

持ち主を失った剣だけが今も地面に突き刺さったままだ。

悟った。人間では彼女の毒に耐えられない。

今や魔族ですら耐えられない。

聖女とやらも同じだろう。

さて、そろそろ殺してしまおう。

フグイラは人間の正面から堂々と近づく。

人間も気づいたのか足を止めてフグイラを見つめる。

アレマメイズは瘴気に満ちている。

フグイラが長年住み着いたせいで瘴気はより濃厚になった。

一段と濃密になった瘴気がフグイラを強化するという循環を形成

する。

さらに迷路状の構造になっており、来訪者を確実に毒で蝕み殺す。昔はいくらか魔族が住み着いていたが、今はフグイラ一人だ。

この瘴気の中でも人間は平然としている。

さすが四天王を二人倒しただけのことはある。

なにかの加護か装備により耐性をつけているのであろう。

ただ、この瘴気はフグイラにとっては毒と言うのも憚られるものだ。

彼女自身の毒に比べれば、こんなもの外の空気と変わりはない。

むしろ、こちらの方が落ち着くというもの。

人間は剣を抜き、フグイラに近づいてくる。

フグイラは自身の一部を分離させ人間に飛ばす。

これで終わりだ。

粘液がかかれば即死。

体はすぐに溶けて消える。

飛ばした粘液は軽く避けられた。

しかし、問題はない。

気化した毒ガスが死に至らしめる。

——はずだった。

「ホウー」

フグイラは感嘆の声をもらった。

人間は死んでいない。まだ歩いている。

顔も変わりはない。おそらく大丈夫なのだろう。

かなり強い耐性をもっているようだ。

殺すのが惜しくなってきた。

人間は近づいてきて剣を振るう。

フグイラは避けない。物理的な攻撃は効かない。

それを彼女自身が一番理解しているため、その後の現象が理解できなかつた。

熱い。斬られた部分が異常に熱い。

体から力も抜けていく。

彼女は思い出した。

これは痛みだ。

痛みなどここ五百年はなかった。

しかも物理的な攻撃で痛みを感じたのは初めてだ。

なんだあの剣は……。なにか属性的な加護を受けているのか。

これはまずいと思ったのもつかの間。

人間が彼女の体に触れた。

あ、終わった……。

溶けて死ぬ。あつけない終わり、と思った瞬間。

人間は剣を彼女に突きだしてきた。

驚きのあまり体がとろける。

おかげで回避できた。

「い、生きてるっ!？」

驚きという言葉ではなまぬるい。

人間は先ほどと何も変わった様子はない。

毒で溶けるどころか死んですらいない。平然と斬りかかってくる。

フグイラの中で喜びと恐怖が同時にふくれ上がっている。

自身に触っても大丈夫なものを見つけた喜び。

自らの命の危険及び未知の生命体への恐怖。

外見は人間だが、こんなものが人間であるはずがない。

さらに先ほどからうまく力が入らず、頭がもうろうとしている。

彼女は自身が毒に冒されるなどなかったため、これが毒だとはわか

らなかった。

フグイラの混乱は極まった。

なんにせよ、このままではまずい。

せつかく自身の毒を受け付けられないものを見つけたのに消える訳には

はいかない。

すでに敵意はない。敵意なんてあるわけがない。

死にたくない。その一心で攻撃を躲す。

一か八かの賭だった。

フグイラは体を変形させた。

かねてから練習しておいた人間の形状だ。

彼女の姿を見て未知の生命体は初めて表情を変えた。

人間の顔の造詣には深くないため、彼女はその顔がどういった感情なのか理解できない。

ただ、攻撃の手を止めたことから敵意がないことはわかってもらえたようだ。

なぜか剣を蹴りつけたが、これはいったいどういう感情表現なのだろうか。

フグイラは自身の外見が美女の裸体になっていることを知らなかった。

「とにかくだ。敵対反応は消えたとし放っておくか。しよせんスライムだし」

生命体は何か喋るがフグイラには理解できない。

剣を背に回して見えないようにして、生命体もフグイラへの攻撃を収めてくれた。

「しかし、困ったな。似たような場所を行ったり来たりだ。得意のチートでどうにかならんのか」

謎の生命体はまた独り言を始めた。

やはりフグイラには何を言っているのかはわからない。

こんなに近くににいるのに会話すらままならないことが悔しい。

「おお、それはいいな」

生命体がなにか呟くとフグイラに近づいてくる。

そうして魔王城をビシツと指さした。

案内しろということらしい。

アレマメイズではほどこからでも魔王城が見える。

見えているのは瘴気に歪められた幻影で、追えば追うほど道に迷う。

目標は見えているのにいつまでも辿り着くことはできない。

近づけば近づくほど、実際は遠ざかっている。

どうやらこの生命体も迷っていたようだ。

この生命体を魔王城に連れて行けば、フグイラは裏切り者。

だが、この生命体が魔王を倒せば問題ない。

今の魔王では絶対コレに勝てない。

全盛期の頃でも勝てないだろう。

恐怖の度合いがまるで違う。

そうだ。コレこそが――。

フグイラは生命体に手を伸ばす。

人間の親睦の証は手を握り合うことだったはず。

目の前の生命体は決して人間などではないが、姿を模しているなら

同じ文化にいたのかもしれない。

今一度、彼女に触れられるか確認しておきたい。

生命体は警戒しつつもフグイラの手を握る。

手が重なり合うも人間は溶けることなく平然としている。

相手の触感を楽しむなんていつ以来だろうか。

もう迷わない。

フグイラは生命体の手を牽いて魔王城に向かう。

ついに念願の接触を果たせた。

できることなら話もしてみたい。

動きで意志を伝えるのはあまりにも味気ない。

せつかく触ることができたのに、相手の名前もわからないのは寂し

い。

フグイラは人族の言葉を覚えると固く胸に誓いアレマメイズを抜

けた。

アレマメイズが突破された。

この報告に今度こそ魔王は耳を疑った。

あり得ない。

アレマメイズの突破。すなわちフグイラの敗北だ。

瘴気のたちこめるあの場所でフグイラが負けることなど考えられ

ない。

魔王ですら苦戦……いや、今の彼に勝つことは難しいだろう。

人間がそれを打ち破った。

……本当に人間か？

人間に擬態した魔族ではないのか。

魔族ならどれだけ喜ばしいことだろうか。

新たな魔王誕生を諸手を挙げて祝っているところだ。

しかし、人間なら魔王として、魔族の王として戦い抜かねばなるまい。

城内は騒然としている。

人間は堂々と正面入り口から入ったらしい。

騒音は一時最高潮を迎え、徐々に静まっていく。

そして、ついに魔王の間の扉が開かれた。

どう見ても人間一匹。

左手に安っぽい剣を持っているだけの人間。

かつて戦った人間の豪傑らしき気配は感じられない。

ちよつと臭うが魔族特有の臭いではない。

人間臭さがにじみ出ている。

見た目こそぬぼーとしているが、この部屋までたどり着いたことは事実。

まずは切り結んでみるかと、歩を進める。

このとき魔王はまばたきをした。

敵を前にしてのまばたき。

油断に他ならない。

まばたきは瞬きと書くだけあって、目を閉じたのは一瞬だった。

魔王の目蓋が上がると、人間はすでに魔王の眼前に立ち剣を振りかぶっていた。

彼の尖った耳には人間が踏み込んだ床の音が遅れて聞こえてきている。

さすが魔王と言うべきか、反射的に槍で脳天への一撃を防ぐ。

槍から腕に伝わる重みは人間のなせる重みを超えていた。

魔王が両手で防いでいるのに対し、人間は片手である。

それだけではない。

さきほどまで感じなかった圧力を魔王は感じていた。

自身の命が目の前に人間に掌握されている感覚。体がうまく動かない。全身が竦んでいる。

槍から軋む音が響くと同時に魔王は槍を手放し、人間から距離を取る。

英断と言えよう。あとコンマ一秒でも遅ければ槍は折れ、魔王の体は一刀のもとに切り崩されていた。

彼の手放した槍はシ・グラムと呼ばれている。

魔王の祖であるシグが南の黒竜を討伐したときに背骨から作った竜槍だ。

シ・グラムこそが魔王の証であり、魔王の力の象徴である。

その象徴をこの人間は魔王から手放させた。

あろうことか折る寸前まで追い詰めた。

人間ではない。

魔王は距離を開け、己の誤解を正す。

見た目は明らかに人間だが、その実は魔人だ。

魔人——魔族と人間の間に来た忌み子。

数千年に一度誕生するかどうかと言われている存在である。

魔族と人間の相反する力が奇跡的に混ざりあうことで異常な力を持つ。

魔王の祖であるシグも魔人であったという説があるくらいだ。

この尋常でない力は魔人でしか説明できない。

目の前の存在が魔人と言えど半分は人間。

純粋な魔族である魔王が力で負け、追い詰められた。慢心だ。

魔王という地位に酔い。

力の象徴である竜槍にもたれかかっていた。

地位に、武具に頼っていたのでは人間と変わらない。

魔族の本質である純然たる力を魔王本人が忘れていた。

王がこの体たらくでは、魔族も衰退するはずだ。

それならばだ。

見せつけてやらねばなるまい。

魔人という半人半魔という中途半端な存在に――。

魔族の圧倒的かつ最純な力を！

全身に力をこめる。

かつて魔王の地位にまで駆け上がったときの力を引き出す。

今一度、この身に魔力をほとぼしらせる。

魔王を示すのは服や装飾品ではない。

もはや着飾るものなど不要。

力あるのみだ。

より硬く、太く、長く。

すべてを蹂躪する力をこの身に宿す。

皮膚は膨張し、内側の筋肉も密度を増していく。

内側から生成する魔力は、外側にまでにじみ出ている。

最近では縮んできていた二本の角も、天を貫く如くより伸びてきた。

間違いない。

今こそが魔王の全盛期。

彼はかつての限界を超え、これからの魔王に遷移しつつある。

まだまだ！

まだ力は湧いてくる！

！
今までどこにあったのかわからない力が己が内より湧き出てくる

「ウオオオオオオオオオオ！」

雄叫びが部屋を、城を、大地を揺るがす。

もう少しだ。もう少しで魔王としての力は完成する！

「グウオオ――」

「長いつー！」

最後の仕上げと言わんばかりに声をあげたところで、魔人に斬りかかられた。

避けることはできそうにない。

一撃はくれてやる。

現在の皮膚に剣の攻撃など無意味。

剣を弾き返して、全力の一撃をちっぽけな身に叩き込む。

魔人の剣撃に対し、魔王の皮膚にはかすり傷が一つ。見た目から読み取れるダメージはないといっても過言ではない。しかし、魔王は膝をついた。

その精悍な肉体は悲鳴を上げた。

痛みも痒みと言つていいものであった。

問題は魔力だ。

外にまで滲んでいた魔力が消えた。

消えたというのは正確ではない。

吸い取られたというべきだ。

全身に駆動していた魔力どころか源泉から全て吸い取られた。

安っぽい剣はただの硬い剣ではなかったか。

魔力を吸収するとは魔族の天敵だ。

魔人は膝をついた魔王に容赦なく追撃を加える。

魔力を失った王に抗う術はない。

魔族を凌駕する絶対的な力に、道具に頼る人間の脆弱性を認める力。

二つの力の融合とは、げに恐ろしきものか。

なるほど。これは、勝てぬな……。

名前を聞いて……。

魔王は敗北を悟り、目蓋を下ろして長い眠りに——つかなくった。

目が覚めた。

慣れ親しんだ魔王自身の部屋が目映る。

己は確かに死んだはず。魔人に倒されたはずだ。

体を見ても傷は一つ残らず消え去っている。

斬られた傷も、刺された穴もない。

夢を見ていたのかと部屋を見る。

竜槍が床に転がり、その先には床の窪んだ跡がある。

夢ではないようだ。

振り返ると奥の扉が開き、最上階への緩やかな螺旋状通路が見えてくる。

魔王は竜槍を拾い上げ、未だ夢見心地で通路を上っていく。

この通路の先が死の世界なのだろうか、そんな思いを抱きながら。最上階には人間が立っていた。

人間ではない、魔人だ。

「これはどういうことだ？」

魔人は振り返り剣を構えたが、すぐに下ろす。

「さすがボスとあって、リポップが早いな」

魔王は言葉がわからない。

人間の言葉だとはわかるが、何を言っているのか理解できない。

「お、そうなのか。……もういいのか」

魔人はぶつぶつ話す。

最後の言葉は理解できた。

もういいのかと、言ったはずだ。

「通じているか？」

魔人は魔族の言葉を喋る。

いや、よく見ると口が別の動きをしている。

どうやら魔法で意志を通じさせているようだ。

似たようなことをした人間を見たことがあった。

「通じている」

魔王は一言、こう返す。

どうして死んだはずの己が生き返っているのか聞きたい。

だが、今はそれ以上に気になっていることがある。

「魔人よ。貴様は何者だ？」

まずは魔人の名前と正体を知る。

「魔人？ 私メル。冒険者をやっている」

メル。

名前は平凡。

威圧感もなければ威厳もない。

その上、冒険者と名乗った。

魔族の領域に入り込む危険を顧みない馬鹿な人間の総称だ。

それはあくまで弱い人間の呼ばれ方である。

冒険者より侵略者の方が正しい。

「いったい何の目的で我が城までやってきた？」
城に来た目的。

討伐で来ていたと思っていたが、どうも違っている。

己はなんらかの高位な魔法で復活させられた。

討伐が目的なら復活させることはない。

なによりも竜槍が床に転がっていた。

あれこそが魔王討伐の証。

魔王の証でもある。

それ故、魔王に成り代わるつもりもないということだ。

そうだというならこの魔人は何をしにきた？

「言っただろ。私は冒険者。西に前人未踏の地があると聞いたんでな。踏破しに来た。ダンジョンもあるとはお誂え向きだ」

人間の表情に詳しくない魔王でもわかるほどの得意げな顔で魔人メルは語った。

どうやら侵略者でもない、観光者が正確であった。

ダンジョンが何なのか魔王にはわからない。

なぜ剣を蹴っているのかも理解できない。

意味のわからないことだらけだ。

魔人は己が欲求のためだけに魔王軍を壊滅させた。

この力の行使こそ魔族のあるべき姿であろう。

冒険者も侵略者も魔人には似つかない。

観光者もふさわしいとは言えまい。

魔人が呼ばれるべき名称を魔王は知っている。

そして、決断した。

魔王として最後の責務だ。

手に持った竜槍を魔人に差し出す。

魔人はぼんやりと眺めたのち竜槍を掴んだ。

こうして新たな魔王が誕生し、魔族の繁栄は約束された。

蛇足02話 「ビッグメエール、テーターイム！」

神々の天蓋を越えて、私は元の世界に戻った。

そう。元の「世界」だ。

シユウが言うには、どうやら神々の天蓋を境にして北と南では法則の異なる別世界になっているらしい。

実際、神々の天蓋を越えた南の世界にはダンジョンと呼べるものがない。実際、神々の天蓋を越えた南の世界にはダンジョンと呼べるものがあった。

あちらの世界ではモンスターも魔族と呼ばれている。

ダンジョンという縛りを受けず人間と同様に外を歩き回っている。

人もいたが、世界の大半は魔族に支配されているようだ。

さらに南の世界では、魔族は死ねば野ざらしだ。

北の世界——こちら側のようにリポップして生き返ることはない。

他の魔族の餌となる、腐り果てる、あるいは人間に利用されるかとなる。

ただし、あちら側で異世界人となる私は別の法則が働いた。

私の手にかかって死んだものは光に消え、こちらと同様に時間経過でリポップする。

チートの力はあちら側でも効果を発揮し、魔族もこちらのモンスターと同じように倒せてしまう。

私にとって、あちら側の世界はダンジョンがないだけに過ぎないものだった。

外でもモンスターが多いんだなあくらいとしか感じなかったのだ。もっと言うと世界そのものがダンジョンのようなものだろうか。

そのため世界の法則の違いに気づくのが遅れた。

遅れすぎて——手遅れになっていた。

まず、神々の天蓋のすぐ近くにあった集落で西に前人未踏の領域があると聞いた。

それなら行ってみるしかないなど意気込み、西に進路をとった。

世界が違うとか、法則が違うとかそんなこと知らないままに。

探索は問題なかった。モンスターもせいぜい中級程度。

たまに上級ボスくらいのももいた。

しかし、ゲロゴンを倒して一段と力を増した私とシユウの前に上級ボスクラスではなんともない。

ゲロゴン撃破の特殊技も手に入れ、止まるところを知らなかった。西へ西へと多くのモンスターをなぎ払いつつ進んだ。

その結果――、

『ねー、魔王さま。仕事ほっぽり出してきていいの?』
そうなのだ。

魔王になつてしまっていた。

西の果てにダンジョンを見つけ、階段を上つていきボスを撃破。強さは超上級ボスくらいだっただろうか。

吸血鬼のフアナといい勝負だ。

ドロップアイテム「魔王のイカした尻尾」を手に入れて、最上階から外の景色に目を移した。

高いところからの景色は好きだ。

世界の広さを目から感じることができる。

今まで歩いてきた道を見たいなあ、と浮かれていた。

縁の近くまで歩み寄り、怖いもの見たさで下を見て思考が停止した。

そこにはダンジョンを取り囲むように一面モンスターが覆い尽くしていた。

どうやら帰りは大変になりそうだと考えていたが、なんてことはない。

彼らは魔王の、ひいては魔族の危機に馳せ参じたものたちだった。

同時に、新たな魔王を賛辞するものたちとなった。

背後から声をかけられ振り向くとボスが来ていた。

ボス撃破により手に入れたスキル「魔族語翻訳」で自己紹介。槍を差し出してきたので考えなしに受け取ったら、魔王にされてしまった。

巧みな罠であった。まさか槍を取るだけで魔王になるとは……。元魔王から話を聞いて世界の法則の違いをなんとなく感じた。

その後、シユウが法則の違いをわかりやすく簡潔に説明してくれた。

ちなみにシユウは途中から気づいていたらしい。

おもしろそうだったから黙ってたと悪気ない様子で話す。

私が魔王になっても『安定した職に就けて良かった』——しみじみとこう語る。

全ては手遅れだったのだ。

まあ、魔王でも別にいいか。

そんなふうに思っていたが甘かった。

片言で話すスライムに懐かれる。

四六時中よくわからん魔族につきまとわれる。

配下を名乗る魔族に人間を滅ぼしましよと進言される。

出かけようとするものなら、前後左右上下を完全に包囲してついで来る。

——などなど、あまりにも面倒なのでこちら側に逃げてきた。

一部の魔族はついてこようとしてきていたが、神々の天蓋まで入ってこなかった。

正確には神々の天蓋近くにある集落の手前で足を止めた。

片言で話すスライムだけ天蓋の中までは追ってきた。

それでも扉の中にまでは入ってこれなかった。

よくわからないが助かったと言えよう。

あちら側のほとぼりが冷めるまではこちら側で時間を潰すことにした。

神々の天蓋を制覇したと言っても、まだまだ未踏領域やクリアが確認されていないダンジョンはある。

それを攻略してからまた南側に行こうという訳だ。

その頃には落ち着いているだろう。

神々の天蓋から北東へ。

フルールの町に来ている。

近くには上級ダンジョン指定のプティ廃都がある。

ここを攻略して、さらに東へ進む。
海を見に行くのだ。

大海に臨み、噂に聞く超上級ダンジョンを攻略しに行く。
町の冒険者ギルドを訪ねると、すぐさま奥に通された。

ギルド長のおっさんが厳つい顔に似合わない笑みを貼り付けていた。

これは間違いない。非常にめんどろな話だ。

今から出て行ってもいいだろうか。

ギルド長は揉み手をしながら、世間話を始める。

長話は嫌いなのでさっさと用件を話すように言う。

「極限クラス冒険者であるメル殿の腕を見込みまして、是非とも受けていただきたい依頼があるのです」

是非をひたすらに強調して彼は話を持ちかけた。

依頼か……。

久しぶりに聞いたな。

初心者頃はよくやっていた。

森の薬草やらスライムの粘液をせこせこ集めていた。

報酬が二束三文で誰もやりたがらないため、私の専売特許と化していた。

『俺も人の嫌がることにせつせと取り組んでたよ』

それさ。

私のと意味が違うんじゃないか。

今も私の嫌がることには積極的だよね。

まあいい。

シユウと会ってからは、依頼を受けていない。

いや……、個人的な依頼ならアラクトでシスコンから受けたか。

ダンジョン攻略に専念しているし、稼ぎもドロップアイテムの売却で手に入る。

依頼を受ける必要性がなくなっちゃってしまっていた。

話だけでも聞いてみるか。

「二昨日のことです。メーヌ伯爵夫人から当ギルドへ依頼が来まし

た。ご存じでしょうが、メーヌ伯はここら一帯を治める御方でございます」

そうなのか。

まったく知らなかった。

よく考えたら私は国王の名前も覚えていない。

そもそも、この国の名前を知らない。

『大人の事情だね。大丈夫。メル姐さんは人と町、それにダンジョンの名前を覚えておけば問題ないよ』

それもそうだな。

国に関係することなんてないだろうし。

「伯爵夫人からのご依頼とあれば当ギルドとしても無碍にはできません。相応の実力を抱する冒険者を見繕う必要があります。例年では夫人がフルールに避暑へお越しになるのはもう少し遅い——」

「依頼内容は？」

長くなりそうだったので話を切る。

さっさと依頼内容だけ話せばいいものを。

どうして伯爵夫人の話を聞かにならんのだ。

「依頼内容については伯爵夫人自らが話される、と」

なんだ、依頼内容がわからないのか。

それは面倒だな。別の人間を当たってくれ。

「いえ、お待ちください。依頼内容はわかっているのです」
はあ？

ご本人様が直接お話しするんじゃないのか。

「いえ。伯爵夫人は例年、当ギルドに依頼なされるのです。依頼内容は毎年同じ。今回も例に漏れることはないでしょう」

ふうん。

そうなのか。

それで依頼内容はなんなんだ？

「それは——」

ギルド長の口にした話を聞いて、私は首を傾げる。

依頼内容は私の都合にちょうどいいものだ。

失敗しても違約金の支払いはなく、罰せられることもない。シユウも特に反対意見はださなかった。それなら別に受けてもいいかと依頼を承諾した。

場所はメーヌ伯爵別荘に移る。

私は一室に案内され、椅子の横に立つ。

椅子が汚れるから座るなどということでは立っている。

小さなテーブルを挟んで、メーヌ伯爵夫人が椅子に腰掛ける。五十歳くらいだろうか。

栗色の髪には白線が混じっている。

目は細く、私を値踏みするように睨む。

「五日以内にプティ廃都からおもしろいものを持ってきなさい」
彼女は前置き一切なしに依頼内容を口にした。

この簡潔さは好ましい。

——プティ廃都からおもしろいものを持ってくる。

聞いていたとおりの内容だった。

一口におもしろいものと言われても、はっきりとしない。

「おもしろいものとは、貴方が『冒険者としておもしろい』と思ったものです」

それは要するになんでもいいということではないだろうか。

仮におもしろいものがなかったら、どうすればいいのか。

「おもしろいものがなかったなら、ボスのドロップアイテムでも持つてきなさい」

夫人は語るべくは語つたと黙りこむ。

彼女はテーブルに置かれたベルを手にとってカランと鳴らす。

「お茶の時間です」

私に向かってそう一言。

『——だっつき』

はあ……。

お茶の時間ですか。

私はどうすればいいんだ。

椅子に座って飲めばいいのか。

『そんな訳ないじゃん。「もう用は済んだから早くダンジョンに行け」ってことだよ』

そういうことなの？

「お茶の時間です」

夫人は繰り返す。

先ほどよりも言い方がきつい。

細い目がさらに細まり私を睨め付ける。

『「お前の臭いでお茶の香りが損なわれる。服装も汚らしく目障りだ。早く目の前から消え去れよ、この浮浪者が！」だつてさ。失礼だな。メル姐さんは魔王って職に就いてるのに！』

怒るところはそこじゃない。

それと魔王じゃなくて冒険者ね。

だいぶ話を盛ってるな。後で殴ってやろう。

そう思つて夫人を見ると、純白のハンカチで鼻を押さえている。

私の服をチラチラとゴミでも見るような目で見てくる。

ついには、見られないと顔を背けてしまった。

……もしかして、ほんとにそう言つてたのか。

『嘘は言つてないよ。できるだけ正確に解釈したつもり』

あの短い言葉のどこをどう解釈すればそうなるんだ。

なにか翻訳スキルを選択しているのだろうか。

とりあえずシユウは後で蹴ろう。

部屋から出て、女中に従いロビーに戻る。

別荘というのが信じられないほどの屋敷は広い。

ロビーにもそこらかしこに絵がかかっている。

ぱつと見、風景画が圧倒的に多い。

一枚の絵を前にして私の足が止まった。

はて……？

この山はどこかで見たことがあるな。

『さすがの鳥頭。レミジニア山系だよ。神々の天蓋があつたところ』

ああ、そうだそうだ。

こんな形をしていたな。

『反対側の壁にはゼバルダ大木の絵があるね』

振り向くと大きな木の描かれた絵が壁にかかっていた。

「奥様から許可は得ています。どうぞゆつくりとご覧になってください。くれぐれも触らないようお願いします」

先導していた女中が背後から静かに告げる。

せつかなので見ていくことにした。

ロビーの片隅にある少し突き出している場所。

他のところよりも薄暗く、光が射さないところに一枚の絵があった。

風景画ではない。

四人の人物が描かれている。

しわの一本まで気持ち悪いほど細かく描写されている。

中心に女性が椅子に座り、彼女を挟むように男性が二人立つ。

残る一人は女性が抱きかかえている赤ん坊だ。

女性はメーヌ伯爵夫人だろう。

絵の中の彼女は今よりもずっと若い、細い目は変わっていない。

右に立つ立派な髭をした壮年の男性はメーヌ伯爵だろう。髪はも

う薄いな。

それでは女性の左に立つ青年は、と見てみると目が夫人によく似て細い。

夫人の肩に手を乗せて、顔からは活発さを示す笑みを浮かべている。

伯爵夫妻の息子で違いなさそうさだ。

『へえ、息子さんは冒険者だったんだねえ』

えっ、冒険者？

どうしてわか——

「はい、ご察しの通りです。アル工様は冒険者でした」
うおっ。

背後からいきなり声をかけられて慌てて振り返る。

女中が当然のように立っていた。
いつからいたんだろう。

『最初からいたよ。彼女がここに立ってて、その前をメル姐さんが通り過ぎたんだ』

本当にそうだったか？

あまりにも影が薄く背景と勘違いしたのかもしれない。

「奥様にあつては目に入れても痛くないご子息でした。プティ廃都からアル工様が戻られず、今年で十年になります」

そうか。

死んだのか。

「おそろくは——」

女中は顔を伏せる。

失礼と言つて顔を逸らし、目もとをハンカチで拭う。

「パーティーの方々も戻ってこられませんでした」

気まづくなつて私も黙る。

黙っているとふと考えが浮かんだ。

ひよつとして伯爵夫人が冒険者をプティ廃都に向かわせるのは――

「いえ、違います。遺品は徹底的に探されました。仲間のものと見られる装備が一部見つかりましたが、アル工様のものはありませんでした。十年も昔のことです。奥様も遺品が見つかるとは考えておられないでしょう」

仲間の装備があつたということは殺されたということだ。

そのあとで装備ごと食べられてしまったのだろう。

そうするとだ。

伯爵夫人はいったい何を求めているのだろうか。

『わかんない？ 伯爵夫妻のお坊ちゃん、言つちや悪いけど冒険者なんてやってるんだよ。あのおばさんも止めたはずだよ。「冒険者なんて危ないからやめなさい！」ってね』

それはそうだな。

自分で言うのもなんだが、安全とは言えない。

チートを使っただけでも死にかけてことが何度かあった。まともに挑むなら簡単に死ねるだろう。

『可愛くて仕方ない息子さんはそれでも冒険者をやめなかった。そして、命を落とした。おばさんはあのダンジョンには息子さんが求めていた何かがあるはず、有って欲しいと願ってる。その「何か」を探してるんだらうね。言っただでしよ。「冒険者としておもしろいもの」を持ってこい、ってさ』

ほっほー、なるほど。

なんだかおもしろくなってきたな。

私の冒険者としてのセンスが試されているわけか。

『絶望的だね……』

うっせーよ。

それじゃあ、ギルドを経由してダンジョンへ行ってみるか。

ギルドからプティ廃都の情報を購入。

依頼の関係もあつてか、格安で情報を買ってくれた。

地図も数ヶ月前に更新したばかりの出来たてほやほやだ。

どうせなら無料にしてくれと思つたが、規定上タダは駄目らしい。

用意も終え、町を出てプティ廃都へ赴く。

……はて、何か聞くのを忘れてるような。

まあ、忘れるようなことだ。どうでもいいことだろう。

プティ廃都は地下にある。

フィールド型ダンジョンに分類される。

地上には入り口だけがぽつんとあつて、周囲は荒涼とした野原だ。

入り口からなだらかに下る坂を歩んでいくとやがて開けた空間に辿り着く。

地下と言ってもアラクタル迷宮のように地下深くへ伸びてはいない。

半球状の一階層だけ。

ただし、その一階層が果てしなく広い。

天井は高く、ダンジョンの側壁も彼方に見える。

地面はでこぼこになっており、建物の残骸が散らばっている。かつて、ここには小人族が暮らしていたという話だ。

建物の残骸も小さなものが多い。

元々はここまで広くなかったようだ。

小人族がモンスターから逃げるため、地下へ横へと広げた結果らしい。

建物を作ってはモンスターに侵略されて逃げ出してを繰り返した。

小人族はついに絶滅したか立ち去って、プティ廃都が残った。

歴史なんてどうでもいいことだ。

さっさとおもしろいものを見つけ、ボスを倒すでしょう。

出てくる敵は問題にならない。

上級ダンジョンの敵は一撃でさようならだ。

飛んでいる敵や地面から出てくるような面倒な敵はいない。

図体がでかく、硬そうなモンスターが集団で襲いかかってくる。

状態異常も持っているようだが、私にはあまり関係ない。

そのため非常にサクサクと進むことができる。

気がついたらボスも倒していた。

ちよつと頑丈だなあ、と思って倒したらドロップアイテムがボスのものだった。

たしかにフィールド型ダンジョンだから、どこで出くわしてもおかしくない。

ボスの個体数が多いというのも、このダンジョンの特徴として聞いている。

それでも、もうちよつと齒ごたえがあつてもよいのではないだろうか。

『メル姐さんの人間離れが深刻だ。もう魔王として生きるしか……』

以前は積極的に選択していた能力プラス。

しかし、今はポイントに余裕があつても選択していない。

これ以上強くすると最低限の日常生活もままならなくなるそう。

現時点で日常生活に問題が出ている。

軽くノックしたつもりでドアに穴を作る。

シユウを大木に叩き付けると、大木のほうが折れる。

靴を洗おうと川に突っ込んだら、そのまま水面を走ることもできた。

それはそうとして、シユウはやたら私を魔王にしたがる。

町にモンスターをけしかけて、卑猥なことをさせたらしい。

『違う！ これは魔王としての宿命！ カルマなんだよ！ オークや触手がうにようによした魔族で町を蹂躪！ 男は労働力にして、老人はベッドでおとなしく寝てもらおう。子供は、そうだな、飯でも食わせて原っぱで走らせとけばいいや。大切なのは女。オークであんなことや触手でこんなことを、スライムもいいなあ……ふへっ、むふふふ』

やっぱりこいつは根っこのところで最低だな。

『いやん、こいつの根元だなんて。メル姐さんはマニアックだなあ。それに言い方が甘い。「お前って本当に最低の屑だな」でよろしく。

ああっ、蔑む目がまた辛抱たまらんっ！』

いかん、手遅れか。

ここまできると叩いてもムダだ。

なぜか喜んで、さらに気持ち悪くなってくる。

無視に限る。

こんな調子で一日目の探索は終了した。

おもしろいものは見つからなかった。

二日目。

一通りプティ宮殿を回った。

特におもしろいものは発見できていない。

そもそもだ。

このダンジョンはすでに完全制覇済み。

敵もギルドからもらったもの情報と同じ。

敵の落とすドロップアイテムもまた然りである。

冒険者もちらほらいるが入り口周辺だけ。

わざわざ危険を冒してまで奥に行く必要はない。

モンスターは入り口で狩れる上に、奥にアイテムがあるわけでもなし。

ボスに遭遇しても、外まで走れば逃げ切れる。

日光が苦手らしく、追いかけてこない。

私も似たような景色ばかりで飽きていた。

もう、ボスのアイテム持って行って依頼を終了させようか。

『待って。完全制覇されてるってわけでもなさそうだよ』

ああ、どういうことだ。

横から行進してきた歩く土人形を蹴散らしつつ聞き返す。

『ギルドからもらった地図と差異がある』

そりゃあ、細かいところは違うだろ。

モンスターがあつちこつちで動き回ってるんだから。

『いやいや、細かいところだけじゃないんだ。側面が大きく拡大してる。思い出してよ。地図は数ヶ月前に更新されたばかりなんだよ。冒険者も入り口付近にしかない。それなら、ここまで広がるのは少し異常じゃないかな』

ふむ、そうかもしれないな。

シユウはクソ野郎で違いないが、頭は私よりもはるかに良い。

この賢いゲスが何か違和感を覚えるときは往々にして何かがある。

——と、信じて歩き回ったが二日目は何も見つけられなかった。

三日目も同じだ。

よくわからないが、ドロップアイテムを回収しないように頼まれた。

一日かけてダンジョンをひたすら歩き回った。

私を通った道しるべの如く、ドロップアイテムの光が線となっている。

上から見てみるとおもしろそうである。

そして四日目。

またもやダンジョンを歩き回る。

昨日と同じルートをたどっていく。

いくらか消えているものの、未だ残るドロップアイテムがチカチカ光る。

ちようど背後から襲いかかってきたモンスターどもを倒し、光がさらに増えた。

『やっぱりだ』

何がやっぱりなんだ？

私にもわかるよう簡潔で簡素に頼む。

『何かいる』

簡素すぎる。

もうちよつと丁寧に順序だてて言え。

『注文が多いね。山猫にでもなったの？ 次は体に塩を揉み込めばいいのかな。ちよつと手が届かないから、メル山猫さんの手で優しく揉み込んで欲しいな』

なに言ってるんだ、お前は？

『話を戻すとね。ドロップアイテムの光が減ってるんだ』

そりゃ、消えるのもあるだろ。

昨日のことなんだから、時間経過で消えたんだろうよ。

『そうかな？ ここのはきれいに残ってるのに、向こう側のはほとんど消えてる。時間で考えると、最初に消えるならこっち側でしょ』
『言われて道の先を見てみると、ドロップアイテムの光が二つ三つだ。』

一方で、私が立っている場所にはアイテムがまだばらばら散らばっている。

昨日と同じ道順を辿っているから、消えるならこちら側のものも先になるはず。

ふーむ。

あちら側で出てきたモンスターが少なかつたんじゃないのか。

『いやいや。ここのモンスターは集団で襲ってくるから、もっとアイテムは落ちてははずだよ。それに昨日はあそこで倒したモンスターのほうが多かった。あんだけしか残ってないのはおかしい』

なるほどな。

それでなにがわかるんだ？

『ええ……、ここまで言えばわかるでしょ。アイテムを持ち去った何者かがいるんだよ』

他の冒険者の可能性……はないか。

だいたい入り口にたむろしてるからな。

ここまで来てる奴は他に見ていない。

じゃあ、やっぱり何かいるのか。

何がいるんだ？

『わからないから、もうちょつと探索してみよう。他にもアイテムがなくなってる場所を見ていけば何かあるかもしれない』

うむ。

おもしろくなってきたな。

つまらない探索も目的ができれば、楽しくなるものだ。

足早に一周して、他にもアイテムが消えている場所を見ていった。

『メル姐さん。わかってきたね』

おっ、そうか。

なにがわかったんだ。

『……おかしいな。いっしょに見て回ってるはずなのに、どうしてわかんないんだろう』

ほら、私は歩き回るので忙しいからな。

いろいろと考えるのはお前に任せた。

お前の頭を信用してるんだ。

『ものは言いようだね。ま、いいか。気づいた点は三つ。一つ目、アイテムが消えてるのは壁際が多いってこと』

そうだったかな。

最初は壁際だった気もするけど、次からは覚えてない。

『二つ目はアイテムが消えてる付近に敵はいない。言い換えれば、アイテムが残つてるところは敵がいた』

……そういえばそうだな。

最初のところでも襲われた気がする。

『三つ目、一つ目の延長になるね。壁際には崩落した跡があつて、どこも地図には載つてない場所だつた』

これはまったくわからない。

壁なんていちいち見てないし、地図はそもそも覚えてない。

その三点から何がわかるんだ？

『それを今から確かめよう』

そう言つて、シユウは計画を話した。

壁際で静かに腰を落ち着ける。

スキル「ステルス」で姿を消して、ぼんやり待つ。

ここはアイテムが消えていた地点の一箇所である。

近くの敵を殲滅し、地面にはアイテムをばらまいておいた。

時間がたてば、きつと何かが起こるはずということで静かに待つ。

あまりにも退屈すぎて、目蓋が重くなる。

『来た、来たよ！ 起きて、ねぼすけ姐さん！』

ハッと目を開けると壁の一部がガラガラと音をたてて崩れた。

そこには膝下程度の穴があり、何か顔を出して左右を警戒する。

すぐに後ろを向いて、一言二言で言葉を告げる。

どうやら知らない言葉だ。

『オツケー。小人語の翻訳スキルを選択した。たぶん、これでいけるはず』

小人。

シユウはそう言つた。

おそらくそれは正しい。

いやはや、ほんとにいたんだな。

まだ絶滅してなかったのか。

小人と言うよりも、妖せ——

『スタアアアップー』

なんだよ、うるさいな。

『いいメル姐さん。あれは小人。「妖精」でもないし、「さん」を付ける

こと許されない。オーケー？』

いや、でも、

『オーケー?!』

わかった。

わかったよ。あれは小人だ。

見た目はかなり小さい。

腕の手首から肘までの長さくらいの大ささだ。

それぞれが三角帽子をぴよこぴよこ揺らしてドロップアイテムを回収している。

「たいりよーだー」

「いっばいだー」

「しあわせー」

ほんわかとした顔でアイテムを次々と穴へ持ち帰っていく。

『へい、メル姐さん。なにぼんやり見てるの。一匹捕まえて。くれぐれも力加減に注意してね。たぶん、力入れたら頭がクシャって潰れるからね』

お、おう。

ちよつと自信がないものの、頷いて立ち上がる。

一匹遠くまで歩いている奴を狙って近づく。

後ろの襟首をつまんで持ち上げる。

おそろしく軽かった。

「ふわっ、ふわわっ。とんでます」

持ち上げた小人は暢気な声を出す。

同時にシユウはステルスを解除したのか私の姿がはっきり映るようになつた。

「うわあー!」

「でたぞおー!」

「てっしゅー!」

小人たちは一斉にどよめき穴へと逃げていく。

アイテムをその場で放棄し一目散だ。

途中で転ぶ奴もいた。

「たすけてー!」

つかんだ小人は必死に仲間に叫ぶ。

ズボンの股からは液体が漏れ出ている。

ここまで怖がられると私もシヨツクを隠せない。

「あいつはどうする」

「ぎせいになったのだ」

「とーといひとみごくうだ」

なんだか穴の近くで話し合いが聞こえた。

なかなか薄情なやつらだな。

「ぼく、たべられます?」

つかんだ小人は泣き始める。

食べねえよ。

「じゃあ、しおづけです? おやや? ことばがわかります?」

しおづけ……塩漬けか?

言葉は理解しているぞ。

お前らは私をなんだと思ってるんだ。

『大ききの違いを考えて、彼らから見たメル姐さんは、メル姐さんから

見たボスモンスターだよ』

それもそうか。

悪かったな。食べはしない。

ちよつと話を聞かせてもらおうかと思ってるだけだ。

「ほんとです?」

目をうるうるさせてくる。

なかなか可愛いな。

ほんとだ。

アイテムをまいたのも、モンスターを倒したのもそのためだ。

「もしかしてかみさまでしたか?」

今のところ人間だ。

それよりも話を聞かせてもらえないか?

「ぼくひとりではきめれませぬ。さくせんかいぎをしようします」

下ろせと言うことだろう。

地面にゆっくり下ろしてやると、穴からこっさり何う仲間の元に走っていった。

ひそひそと話し始める。

しばらくすると先ほどの小人が歩いて来る。

「おはなしききます。そのまえにあいてむをあつめてもよいです?」

先ほど回収途中だったアイテムがまだそこかしこに散らばっている。

了承すると、他の小人たちがとことこ出てきて拾っていく。

「それでおはなしとは?」

おもしろいものがないか?

単調直入に聞く。

たぶん伝わるだろう。

シユウは『えっ?』と困惑していたが、気にしない。

「おもしろいものとはおたからです?」

そうだな。

なにかお金になりそうなものだ。

価値がありそうなやつだな。

「にんげんさんがおとしたものならいくつかあります」

そんな訳で私は小人の巣に入らせてもらった。

壁の向こうには小さな村が広がっていた。

入り口は狭かったが、中はなかなか広々としている。

高さは低いが、中腰でなんとか移動できる。

奥には冒険者の装備らしきものが置いてあった。

過去に死に絶えた冒険者から回収したもののようだ。

「きにいったものをもちかえてよいです。そのかわりあいてむもらいます。よろしいです?」

よろしいです。

よろしいですとも。

小人にすればドロップアイテムのほうが大切らしい。

なんでもドロップアイテムから穴を掘る道具が作れるようだ。

特にボスのドロップアイテムは滅多に手に入らないから、たいへん貴重なのですと話す。

ボスのドロップアイテムくらい欲しいだけくれてやろう。私にとってはこっちの方がはるかに価値あるものだ。

これだけあれば値打ち品が一つはあるだろう。

おい、シユウ。

おもしろいものを探すぞ。

『はあ……』

シユウはため息一つ。

なんだかテンションが低いな。

ほら見ろ。

この剣なんて良いんじゃないか。

変わった紋章もついてるぞ。

『王家の紋章だね。前にアイラたんが教えてくれたから、たぶんそうだよ』

なんと、それではこの剣は王族にちなんだものか。

おい、他になにかいいものはありそうか？

お前の目はなかなかの審美眼だろう。

そう言つて、私はシユウを掲げる。

『……………おつ、これはすごい』

しばらく黙っていたシユウが声を出した。

どうやらいいものを見つけたな。

どれだ？

『メル姐さんの右膝近くにあるやつ』

私が目を落とすとそこには盾が転がっていた。

なにやら頭にうじやうじや蛇を乗せた女性が描かれている。

気持ち悪い盾だな。これはすごいのか。

『たぶんすごいすごいと思うけど、それじゃない。左隣のやつ』
違ったのか。

盾の隣に目を移すと靴があった。

これも変わった靴だ。

靴の側面から白い翼が生えている。

なんだこりや、何がどうなつたらこんな靴を作るんだか。

これがすごいのか？

『すごいってもんじゃないよ。でも、それでもない。よく見て。盾と靴の間に落ちてるでしょ』

んー？

……えっ！

もしかして、これか？

私はサツと指でつかむ。

『そう、それ。数の制限は特にないけど、どうしても一つって言われたらそれを持って帰るかな』

いや、おいおい待てよ。

だって、これはお前。

つまらない――、

『そうだよ。俺にもメル姐さんにとってもつまらないものだよ。ときにメル姐さん。俺からも一つ聞きたい。メル姐さんにとつておもしろいものって過去の冒険者が落とした装備品だったの？』

珍しくしつかりとした質問だった。

そりやお前。おもしろいだろ。

王家の剣とかそんなものを見ることができるものじゃないぞ。

『それはそうだろうがね。自称冒険者のメル姐さんがこのダンジョンに来て一番おもしろいと思ったものは王族の剣？ 見たら石化しそうな盾？ それとも空が飛べそうな靴？ どれなの？』

いや、それは……そうか。

そうだったな。

私が冒険者としておもしろいと思ったものは――。

五日目。

依頼の最終日だ。

昨日の時点で用意はできていた。

持つて行つても良かったが、シユウに水を浴びて服を新調しろと言

われた。

口調や仕草は仕方ないとしても、臭いと服装くらいきちんとしてのことだ。

服を急ぎで仕立てさせるのにどうしても一日かかるといふことで今日になった。

伯爵の別荘を訪ねる。

夫人の部屋へ行く前にロビーの絵画を見せてもらう。

ロビーの隅。目立たないように飾ってある伯爵家の家族絵だ。なるほどな。

たしかにそうだ。

シユウに聞き忘れていたことも思い出した。

そして今、その答を得た。

いぎ、夫人の元へ。

例によつて私は椅子に座らせてもらえない。

まあ、そんなことはどうでもいい。

どうせすぐに出て行く。

「それじゃあ、おもしろいものを見せなさい」

夫人は細い目で私を見つめる。

「おもしろいものは見つけた——が、持ってこれなかった」

私は用意した答を返す。

夫人はぼかんと私を眺める。

私が一番おもしろかったもの。

それは剣でも、盾でも、靴でもない。

ダンジョンの作り主である小人族の存在だ。

夫人の元へ一緒に行つてくれないかと頼んではみた。

残念ながら、彼らは外に出てはいけないう決まりになっているらしい。

粘つてみたものの、やはりどうしてもダメだった。

そのため、彼らの話だけすることにした。

「彼らは壁の中に集落を——」

「もういいわ」

話をしようとしたが、夫人は一言で止めた。
そして、

「お茶の時間です」

彼女はかつてない冷たさを込め、言い切った。

今回はシユウの解説を待つまでもない。

消え失せろ、という意志が私でもはつきり見て取れる。

消えろと言われればここにいる必要もない。

さっさと出て、東に向かおう。

しかし、その前に一つやることがある。

「おもしろいものは持ってこれなかった。その代わり、つまらないものを持ってきた」

私の言葉に夫人は眉を顰める。

頬がぴくぴく痙攣し始めた。

テーブルを指で叩く。

「冒険者はつまらないものをわざわざ持つてくるの？」
まったくだ。

つまらないものをわざわざつまらないと言って渡すのはふざけている。

だが、これは私からではなくシユウからの贈呈品だ。

奴の国では物を送るとき「つまらないものですが」と言うらしい。

謙遜の美学だと話していた。

実際につまらないわけではなく、

「貴方のような目の肥えた人にはありふれたものですが」

という相手を上に、自分を下に持つてきた表現のようだ。

どっちにしろよくわからない。

ポケットから手探りで目的の物を取り出し、テーブルを滑らせる。

ちょうど伯爵夫人の手前で止まった。

宿で練習した甲斐があった。

あまりの不作法に夫人はさらに目じりをつり上げる。

私はどこ吹く風と意識を窓の外に逸らす。

今日はたいへん良い天気です。

『おもしろいものを持ってこいと言われたのに、つまらないものを持ってきて「つまらないものです」と言って渡す人間がいてもいい。冒険とはそういうものだ』

冒険の意味が違うよね。

それだと私が見たあの馬鹿になるんじゃないか？

………おい、なんか言えよ。

「指輪？」

答えたのは夫人。

そう。渡したのは指輪。

ちよつぱり装飾過多な指輪だ。

冒険者なら大半がつけている指輪。

俗にパーティーリングと呼ばれるものである。

冒険者ギルドにしか作れない特殊な方法で作られている。

おそらくチート持ちのイイダソウジが残した技術の結晶だろう。

形や大きさはいろいろとあるが、独特の紋様が刻まれそこそこ高価だ。

絵に描かれた夫人の息子を見て、シユウは冒険者と言った。

どうして冒険者だと気づいたのか尋ねるのを忘れていた。

その疑問の答がこのパーティーリングだ。

絵に描かれていた指輪と夫人がいま指で転がしている指輪は同じものだ。

説明なんて不要。

それがいったい誰のものか？

そんなこと伯爵夫人には一目瞭然。

それでも、彼女は信じられないと疑う。

指輪を顔に近づけ目を閉じるほどに細める。

シユウが冗談めかして夫人の行動を予想していた。

まさにその通りになっている。

パーティーリングの内側には所有者の名前が刻まれることがある。

安い物には名前など刻まないが、見た目を派手にして高くするとサービスで名前も彫ってくれる。

もちろん私のパーティーリングには名前は入っていない。
一方で夫人が見つめる指輪には名前が刻まれていた。
刻まれているのは夫人の息子——アルエ氏のフルネームだ。

「ど、どこで……？」

夫人は喉から絞り出すように問いかけてくる。

「プティ廃都。壁の中だ。残っていたのはそれだけだった。小人たちが拾っていてくれた」

アルエ青年は小人の存在に気づいていたらしい。

ときどき小人にドロップアイテムを渡していたようだ。

いろいろと興味深い話は聞けたが、わざわざ話すようなことではない。

私が小人集落を全て訪れ、遺品を探してみたなんてことも話す必要がないことだ。

それに私はさっさと立ち去らなければいけないだろう。

「……お茶の、時間です」

夫人は震える手でベルを手に取り、カランカランと鳴らす。

わかっているよ。

わかっているって。

私はお邪魔なんですよね。

言われなくてもすぐに出て行くよ。

夫人に背を向け、扉に向かう。

『全然わかってないじゃん』

うん？

何がだ？

『今のは「いつまでもぼーっと突っ立ってないで、早く椅子に座りなさい」だよ』

えっ……そうなの？

答はシユウから得るまでもなかった。

出ようとしていた扉から女中が音もなく入ってくる。

盆の上にはポットが一つに、カップとソーサーが二つずつ。

振り返ると夫人が私を見つめていた。

相変わらずの細い目がなんとなく優しく見えた。

「お茶の時間です」

『おもしろい話があるんでしよう。早く聞かせなさい』だってよ。話してあげれば。小人族のことやら、息子さんのこと——メル姐さんが冒険者としておもしろかったことをさ。今度は、ちゃんと聞いてくれるんじゃないかな』

夫人からは先ほどまでの動揺が消え、凜としている。

女中は椅子を引き、早く座れと言外に急かす。

窓を抜ける風は心地よく頬を撫でる。

シユウの鼻歌は得意げだ。

上手くて腹が立つ。

さあ——、

「お茶にしましょう」

夫人の言葉は解釈をする必要もない。

そのままの意味だ。

こうしてプティ廃都の攻略は終了し、お茶会が始まった。

蛇足03話 「見よ！ 東方は青く澄んでいる！」

時は夕暮れ。

とある集落の家の一室である。

隅に置かれたベッドに男が一人横たわる。

彼は胸を大きく上下させ、全身から汗を噴き出す。

貴方はそんな彼の様子を難しい表情でじつと見つめている。

「どうでしょうか？」

隣に立っていた男の夫人が貴方に問いかける。

教えてやらないのか？

この男——フェニルがどうなるのか貴方にはわかっているはずだ。

……そうか。

沈黙で語るのか。

それも一つの手段だろう。

言葉にするにはあまりにも残酷すぎる。

「そんな——」

フェニル夫人は目に涙を溜め、貴方に一步近寄る。

貴方は気圧され逃げるように目を伏せる。

「この人、朝は元氣一杯だったんですよ！ この子のために栄養のつ

くものをつて！ それがどうして！ どうして……」

夫人はお腹に手を当てる。

目を伏せているなら、貴方にも見えているはずだ。

彼女のお腹の膨らみが——新たな命はこの世界に産声を上げよう

としている。

だが——、

「私にはどうすることもできません」

新たな命の父となる男の灯火はすでに消えかかっている。

荒い息がいつ途絶えてしまってもおかしくはない。

彼は明日を迎えることができるだろうか。

貴方はどう思う？

「おそらく夜まで保たないでしょう」

やはりそうなのか……。いま生きているのが不思議なくらいだ。ベッドの周りには男の出血を止めるために使った布切れが散らばる。

無論、男の体は傷だらけ。目立つ外傷も一や二では足りない。

それどころか毒までもらってきている。

寂れた村だ。薬などない。

死は目前だ。

「申し訳ありません」

貴方が謝ることではない。

むしろよくやったと賞賛されて然るべきだ。

東の林でフェニルがモンスターに襲われ、運び込まれたのが昼過ぎ。

薬もなく治癒術士もないこの状況で、今の今まで男が生きているのはひとえに貴方の処置のおかげであろう。

夫人もそれは理解している。

それでも、彼女は夫の死を認められそうにない。

「どうにか……どうにかなりませんか。このままじゃ、この子には父親が——」

夫人はそこまで言うと、口を噤む。

きっと彼女は思い出したんだ。

貴方にも妻がいなかったことを——。

十年前。一人娘のシアを産み、そのまま息を引き取った。

シアは貴方の家で留守番している。

この部屋の光景はまだ幼いあの子に見せるものではない。気まずい沈黙が流れる中、部屋の外が慌ただしい。

「スーさん、いるかい？」

沈黙を破るように男が入ってきた。

彼は部屋の惨状に顔を歪めたものの、すぐに用件を話す。

スーさんは貴方の愛称だ。

住人全員——貴方の娘でさえもこちらで呼ぶ。

そもそも、この呼び名を付けた張本人は死んでしまった。

しかも彼女は途中から呼び方を変えた。

どうでもいいことだ。

「人が来た。一人だ。西の入り口で待たせている。冒険者と語っているが、どうにも怪しい……。スーさんにも見てもらいたい」

貴方が魔法使いとして冒険者をやっていたことはよく知られている。

この村で亡き妻に出会い冒険者をやめ、そのまま居着いた。

得意の水と地の魔法を使い、農作業を手伝っている。

今では村の住人からの信頼も厚い。

「すまないが、今ここを離れるわけには……。いや、すぐに行こう」

夫人が心配そうな目で貴方を見つめている。

一人でここに置いていかなくてくれ、とその目は語る。

察しの良い貴方のことだ。気づいているだろう。

しかし、貴方は途中で意見を変えた。

死にかけて男とその妻を残していくと言う。

貴方は決して薄情者ではないはずだ。

理由があるんだろう。

なぜだ？

「本当に冒険者なら何か薬を持っているかもしれませんが。すぐ戻ります」

夫人もおろおろと貴方を見つめ、震えるように小さく頷く。

その様子を見て、貴方は部屋から飛び出した。

西の入り口に男が二人と女が一人立っていた。

男達の方は村の住人だ。もちろん貴方も知っている。

そうすると、どうやら冒険者を語っているのは女の方らしい。

女性にしては背が高く、ぼけーとした顔。

ベルトには鞘にすら納まっていない剣が垂れる。

服の質は良さそうであるが、鎧といったものはない。

手を加えていないのがはつきりとわかるぼさぼさの髪。

はつきり言って冒険者には見えない。

盗つ人のほうがしつくりくる。

男達が貴方に気づき名前を呼ぶ。

貴方はおびなりに返答し、すぐさま女と対峙する。

「失礼しました。確かに冒険者の方ですね」

貴方はいきなり断言する。

女も面食らっていたようだが、ぼんやりとしたあと「そうだ」と一言返す。

「スーさんよお。俺にやあ、どう見ても冒険者に見えねえぞ」

彼に同意見だ。

どう見ても怪しい。

きちんと説明してくれ。

「時間が惜しいので手短に言います。彼女は冒険者で間違いありません」

貴方は男二人に体を向ける。

「まず彼女の指。嵌めているのはパーティーリングです。これだけでも冒険者と言えます。それに冒険者ギルド特製の道具袋。ガラム印の靴。かなりの実力者でしょう。見た目は確かに怪しいですが、冒険者ならこの程度はおかしくありません」

勢いよく言葉を並べ、男二人に言い聞かせる。

女は実力者と言われたのが嬉しいのか、不気味な笑みを浮かべている。

「ただ——冒険者ということとはわかりましたが、この村にいったい何のご用でしょうか？」

貴方は冒険者をまっすぐに見て問う。

この村に訪問者が来ることは久しぶりだ。

冒険者ギルドもなければ、名産品もありはしない。

強いて上げるならリングが採れ、甘くておいしいくらいだろう。

そんな村にどんな用があるのか？

この冒険者の真意を知る必要がある。

「ただの通りすがりだ。フルールの町でお茶好きの夫人から依頼を受

けてな。ミゼスにいる旦那さんに手紙を渡してくれ、と」
そう言うと、彼女は腰の袋から封緘された状袋を見せる。

「——もう日も暮れるから、できれば泊めてもらいたい。ダメなら別に構わない。迂回して進むだけだ。ミゼスもすぐ側なんだから」

ミゼスはこの村のすぐ東にある都だ。

この一帯を治めるメーヌ伯爵がいるところになる。

しかし、そうだとするとおかしい。

「どうして南道を？ 北道の方が安全では？」

この村を通るルートは南道である。

道も悪く、はぐれモンスターもよく出てくる。

特にフルールからこの村までの道は劣悪極まりない。

安全を考えるなら、北道の方を通った方がはるかにいい。

「どちらの道にもダンジョンはない。それなら短い方が早くて良いに決まってる」

冒険者は真顔で断言した。

迷いや冗談は一切含まれていない。

貴方と男二人も啞然と冒険者を見つめる。

確かに南道は北道よりも短い。

それは無理矢理に道を直線に作ったからだ。

常識を知っていれば、危険を考慮に入れて北道に行く。

つまり、この女には常識がない。

リスクを計算できない。

——この女は馬鹿だ。

おそらく男達も貴方もそう思ったはずだ。

ただ、馬鹿であるが故に嘘はついていないとわかる。

この女冒険者なら村に入れても大丈夫じゃないだろうか。

それに、今の貴方にはしななければいけないことがあるだろうか？

「村に宿はありません。私の家に泊まってください。その代わりとい
いますか……。現在、村には瀕死の住人がいます。薬を持っていけば
分けていただけませんかでしょうか」

さっそく薬の交渉に入る。

あまりにも単調直入だが、彼女は気を悪くしていない。どうしようか、と冒険者は小さく呟き腰の付近を見ている。わずかな逡巡のあと彼女は口を開いた。

「あまり薬は持っていない。有るものでよければ分けよう。ひとまず、その住人のところへ案内してもらえるか」

そうして貴方は彼女とともにフェニルの家へと引き返した。

額には大粒の汗が浮かび零れようとしている。

急げ！ 日はまだ沈んでいない。

メルと名乗った冒険者は、部屋に着くや否やベッドの横に歩み寄る。

横で話す貴方の説明を聞きながら、ぶつくさ独り言を呟く。

夫人は心配そうに貴方たちを見つめている。

「外傷は現状でどうしようもない。まず毒をどうにかしたほうがいいらしい」

「……なにか毒を直す薬はありますか？」

彼女はなぜか伝聞調で語る。

貴方は疑問を覚えつつも薬の有無を尋ねた。

「いや、要らないから持ってない。パーティーリングを持っているか？」

意味がわからない。

解毒の話をしていたはずだ。

どうしてパーティーリングの話になる？

首を傾げる貴方に、彼女はさらに言葉を重ねる。

「持っているかと聞いたんだ。どうなんだ？」

貴方は首を横に振る。

昔は持っていたが、売ってしまったな。

あのとのお金はシアの薬代に消えたはずだ。

「そうか……、そうだな。仕方ない。やりたくないんだが……」

メルはぼそぼそ独りごち、剣を抜いた。

貴方と夫人は驚き距離を取る。

「な、何をするんですか？」

「魔法だ」

さざりりとメルは言った。

〈生体を蝕む〉――

貴方は目を睜った。

剣が淡い白光を帯びている。

目を閉じれば魔力の流れを感じるだろう。

ただし、詠唱速度は非常に遅い。

復唱でもしているかのように一節ごと間が開く。

「大丈夫なんでしょうか？」

隣からよくわかつていないであろう夫人が貴方に問いかける。

貴方は大丈夫だと夫人に頷いてみせる。

〈汚れた血をすすぎ　大丈夫なんで……あつ〉

剣から光が失われ、詠唱が途切れた。

「あれっ？　えっ？　これ最初からになるの？　一時停止は？」

メルは何かぶつくさと呟き、面倒そうな顔を作る。

その後、彼女は貴方と夫人を向き直り、「静かに」と言い含めた。

「まったく、これだから魔法は……」

〈生体を蝕む〉――

メルは不機嫌そうに呟くと、再び詠唱を始める。

夫人が貴方に心配そうな目を向けるものの、先ほどのように貴方が

大丈夫だと頷くことはなかった。

〈――浄化せよ〉

ようやく魔法が唱え終わったようだ。

詠唱中に男が死ぬんじゃないかと貴方は気が気ではなかった。

剣から出た白い光は男を包みこみ、やがて消え去った。

男の荒い息は徐々に落ち着いていく。

貴方と夫人はその様子を見て長く息を吐き出す。

メルも「おおく」となにやら感心している。よくわからない。

「……おっとそうだったな」

彼女は思い出したように、腰に下げていた袋をこそごと漁る。

青い液体が入った小さな瓶を取り出し、貴方たちを振り返る。

「外傷を治す魔法は魔力がないから使えない。今できることとして、この体力回復なんとか薬……そうそう、増進薬でどうにか死なないように保つ」

言うべきことは言ったと、メルは瓶の栓を取り外し男の口にゆつくりと流し込む。

「今できることはこれだけだ。予断は許されない。明日にでも治療術士を呼んで治してもらえ」

貴方と夫人は状況に追いついていない。

夫人は助かる見込みができたことに安堵し腰が砕けている。

貴方は別の意味で驚いているんだろう。

メルが杖ではなく、剣で魔法を使ったこと。

さらに貴方は知っているはずだ。

彼女が男に飲ませたあの青い液体。

あれ一本で数ヶ月は豪遊できる値がつくことを――。

なんにせよ、夜になったが男の命はまだ消えていない。

今はそれを喜ぶことにしないか？

貴方はメルと自宅に帰ることとなった。

できる限り綺麗な布で男の外傷を圧迫し、なにか起きればすぐ呼びに来るよう夫人に言っておいた。

「おかえりなさいー」

家に入ると、娘が出迎えてくれた。

料理の匂いも漂う。どうやら作ってくれていたようだ。

母親がいなくても子供はしっかり育つ。

貴方はメルを紹介し食事を取る。

メルもスープとパンをもそもそ口になっている。

食後のデザートとしてリングを食べる。

貴方とメルは青、娘は赤のリングだ。

「お母さんにそっくりだな。お母さんも赤のリングが大好きだった」

貴方は無意識に口にする。

リンゴを食べるといつも決まって口に出る。

隣にメルがいたことを思い出し、恥ずかしさを覚えているようだが問題ない。

彼女は食べることに夢中で貴方の話など聞いていない。

「赤いほうが絶対おいしい！ リンゴは赤に限るよ！」

娘はきつぱりと断言し、貴方は微笑む。

「その台詞もお母さんそっくりだ」

「えへへ。お母さんも喜んでくれるかな？」

「もちろんさ。お母さんは、いつでもシアを見守ってくれているよ」

そんな訳ないだろう。

いい加減なことを言うものじゃない。

食事が終わると、貴方はメルに明日の予定について切り出した。

娘には部屋へ戻ってもらい、テーブルには貴方とメルが向き合っている。

彼女は剣を机の上に置いている。彼女は気にしないでくれと言っ

ていたが、どうにも貴方は落ち着かない。

「メルさんは明日、ミゼスに発つんですよね」

「そうだ」

メルは一言で返す。

無愛想ではないがとっつきづらい。

そんなことにはお構いなく貴方は続ける。

「朝一番に出ませんか。私も連れて行ってください。ミゼスで治療術士を探さなければなりません」

「かまわない」

先と同じように彼女は一言で返すと、あくびをする。

「それはよかった。東の林はダンジョンになりかけているので、一人では危険ですから」

「ダンジョンに？」

ダンジョンと聞いてメルは目をぱちりと開いた。

先ほどまでのやる気のなさが嘘のようだ。

「この村とミゼスの距離は半日もありません。目と鼻の先ですが、途中には林が広がっています——」

貴方は話を始める。

林には以前よりはぐれモンスターが出ていた。

最近になって彼らが活性化し始めた。

どうやら林がダンジョンになり始めたときミゼスの知り合いは話す。

林を伐採し、ミゼスとこの村を繋ぐ道を作る話も出ていたが、ダン

ジョン化に伴いうやむやになった。

ミゼスの周辺にダンジョンはない。

近くにダンジョンができるならモンスターのドロップから安定し

た収益が入る見込みがある。

メーヌ伯もそれを見越して道路建設の話をしなかったことにした。

困るのは村の住人だ。

林で狩っていた動物もモンスター化すれば容易には倒せなくなる。

さらに数人いれば通ることができていた林もダンジョンになれば

通行が難しい。

現実にも今日も死人が出るところだった。

彼もまだ助かったとは言えない。

「このままでは村は孤立してしまう」

話が盛り上がっているとすまないが、もうやめておけ。

それ以上は意味がない。

「孤立するだけならまだしも……」

気づいたか？

彼女は貴方の話を聞いていない。

俯き目を閉じている。要するに寝ているんだ。

机の上に置かれた剣だけが、行儀良く貴方の話を聞いている。

空回りして、勢いを抜かれた貴方は外に出た。

外の空気はひんやりとして気持ちが良い。

心にも冷風が吹き抜けるようだろう。

だが、そんな思いは続かない。

「スーさん！」

フェニル夫人が声を荒げ、貴方の方へと走ってくる。
貴方は気持ちを切り替え、夫人に近寄る。

「あの人がまた！」

どうやらぶり返したようだ。

夫人は冷静さを失い、何を言っているのかわからない。

貴方は直接、見に行くことにした。

「メルさんを……」

やめておけ。

朝から歩いてきたと話していた。

起こしてやるな。きつと死ぬほど疲れてる。

それに明日の朝は、ミゼスに向かう必要がある。

もちろん、それまで男が生きていればの話になるが。

彼女はすでに彼女の役割を果たした。

今できることはない。

「——行きましよう」

冷たい風が貴方を吹き抜ける。

どうやら眠れない夜になりそうだ。

どれくらいの間が過ぎただろうか。

夜の部屋には男の荒い息が響く。

できることは少ない。

男の汗を拭い。

そして、

「フェニル！ しっかりして、死んじゃダメよ。この子のためにも！」
意識を止めるため、声をかけ続けることくらいだ。

近くの住人も来て、交代交代で声をかけ続けている。

貴方が男の汗を拭き、ぬるくなつた水を換えに部屋を出るとメルが
壁に背を預けて立っていた。

「気づきませんでした。いつからそこに？」

「今さっきだ」

相変わらずメルという言葉は少ない。

メルは「今さつき」と言ったが、半時は立っていたぞ。といつても、その半分は立ったまま寝ていたがな。

扉の隙間から貴方たちの様子を窺っていた。

「仲が、いいらしいな。」

「……ええ。村に来たとき年齢も近いことがあつてよくして頂きました」

村に来た当初はよそ者とあつて、貴方は冷たい目で見られていた。その中でもフェニルは気軽に、気さくに話してくれた。

貴方が今ここにいられるのも彼の存在が大きい。

本当に感謝している。

「そうか」

「そうです。死なせたくはありません。フェニルは、私の娘が生まれるときには一緒に喜んでくれました。妻が亡くなったときも一緒に悲しんでくれました。次は彼の子供の誕生と一緒に喜びたいんです。そのために私は私にできることをするだけです」

「できることを、か。そうだな」

メルはそう言うと、貴方に小瓶を渡す。

青い液体が入っている。

「やる」

「……ありがとうございます」

感謝の言葉はたくさんある。だが、重ねると安くなる。

貴方はたった一言に凝縮させ彼女にお礼を述べる。

彼女はもういたしまして、と背を向ける。

そして、そのまま扉に手をかけた。

「メルさん。私は家に帰ることが難しそうです。眠るなら私のベッドを使ってください。それと……私はここを離れられないかもしれません。明日の朝は一緒に行けないことも考えられます」

「だらうな」

貴方は逡巡する。

続きを言うべきかどうか迷っている。

——ミゼスに一人で行って、治癒術士を連れてきてもらえませんか？

たったこれだけのことだ。

言うだけ言ってみればみればいい。

魔法もかけてもらい、さらには薬ももらった。

これ以上、お願いをすることはできない。

そう思っているのか？

依頼するにも払えるものなどない。

理性が邪魔をしているのか？

「……あの、メルさん——」

もう遅い。

彼女は出て行ってしまった。

貴方はなまじ頭が回るため、かえって判断を鈍らせる。

貴方は家に一度戻った。

汗と血を拭いていた布がなくなつたためだ。

またすぐにフェニル宅へ戻るつもりでいる。

家に入ってすぐ君はシアを見つけた。

テーブルに顔をうつ伏せ、眠っている。

「こら、ベッドで寝なさい」

君はシアの肩を揺する。

抱えてベッドまで連れて行きたかったが、体力が持ちそうになかつ

た。

「ううん」

言葉になつていない言葉を漏らすシアを寝室に送る。

寝室にはベッドが二つ。

一つは貴方のもので、もう一つは娘のものだ。

ベッドは両方とも空だった。

「あれ？・メルさんは？」

「お願いしたの。助けてって。お礼は五個で。そしたら道を作ってく
るって、そのまま外に……」

特に答は期待していなかった。

それでも返答はむにやむにやとシアがしてくれる。貴方は何かに気づいたように家を飛び出す。

東の門へ辿り着くと番をしていた男が声をかける。

「どうした?」

「メルさん。いや、剣を持った女が通らなかったか?!」

「来た」

「通したのか?」

「止めた。でも、大丈夫だと。それと——」

「馬鹿がッ!」

君は膝をつき、地面を拳で叩く。

もちろん門番を責めているわけではない。

彼はよくやっている。

口数こそ少ないが、夜の警備もまじめに引き受けている。

「どうして朝まで待てない! 夜に林を抜けるなんて……!」

月は出ているが、林の中では木や葉によつて明かりは差し込まない。

さらに人間と違い、モンスターは夜目が利く。

確かにいま抜けることができれば、明日の夕方には帰ってこられるかもしれない。

しかし、あまりにも分の悪い賭けだ。

数人ならまだしも、ソロの剣士。

無駄死にが関の山だろう。

「どうし——」

君の言葉は途中で切れた。

東の空が突然、赤く光ったからだ。

「今の……」

確認をするように門番を見ると同時に爆音が体を揺らす。

地面も音に対応して揺れる。村の住人もなにごとかと外に出てる。

「いったい、何が?」

『うるさくなるかもしれないが、気にしないでくれ』——あの女はそう言った」

「メルさんが？」

門番は何も言わず、ただ頷くだけ。

東の空は赤く燃えている。

爆音と揺れはその後も断続的に続いた。

全ての住人にできる限りの説明をし、貴方はまたフェニルの元に戻った。

夫人は疲れ、部屋の片隅で眠りについた。

貴方がそうするように言ったのだ。

このままではお腹の赤ちゃんにも影響が出かねない。

そのため貴方は一人で夜通し、フェニルに声をかけ汗を拭き続けた。

フェニルの容態も山と谷を繰り返している。

なんとか朝を迎えることができたのは喜ばしい。

でも、気づいているだろう。体力回復増進の効果は切れかけている。

メルが一本余分に置いていった薬も使ってしまった。

もう打つ手はない。男は昼まで保たない。

貴方は本当によくやった。

——だから、泣くな。

無力さを嘆くことは後でもできる。

貴方は言っていただろう。私にできることを、と。

全力を振り絞って男に声をかけ続けるんだ。

男の命が燃え尽きるそのときまで。

日は高く昇り、影も徐々に短くなってきていた。

同時に男の山と谷の周期も短くなっている。

貴方も夫人も感じ始めているはずだ。

言葉にする必要はない。

そんな折、フェニルの目がうつすら開いた。

昨日から今日にかけて初めてのことだ。

薄く開いた目蓋から瞳が見えている。

「フェニル！ 私よ。わかるでしょ。死んじやだめ！ 子供の名前もまだ決めてないのよ！ 一緒に決めようって言ったでしょ！」

夫人が彼の手を力一杯に握りしめる。

彼の瞳はゆつくりと動き、夫人で止まる。

苦しげな口元がすこし和らいだように見えた。

一瞬のことだが、永遠のように長く感じた。

蠟燭の火は消える寸前に強く燃え上がる。

つまり、そういうことだ。

瞬間は通り過ぎ、男の目蓋は閉じた。

夫人が掴むその手も力なく垂れる。

「フェニル！ フェニルッ！」

「おい、フェニル！ 目を覚ませ！」

夫人は必死に声をかける。

貴方も声をがむしやりに声をかけ続ける。

もう声をかけることに意味はない。

彼はまだ死んでいないが、声は届かない。

貴方たちは本当によくやったんだ。

決して無駄ではなかった。

——だから、ほら。

扉が勢いよく開けられ、男が二人入ってくる。

彼らの後ろにはメル姿がちらりと見えたが、部屋には入ってこなかった。

男たちが手に持つのは魔法使いの持つ杖。

そして、服にはメーヌ伯に所属することを示す紋章。

「まだ生きていますね！ 脇に寄って声をかけ続けてください！ 詠唱を始めます！」

男達はベッドの男を見つめると、すぐに杖を構える。

〈五体を巡る赤き潮——〉

〈体脈に宿すは炎——〉

二人は別々の魔法を詠み始める。

詠唱は淀みなく、あっという間に完了する。

貴方は気づいているはずだ。

彼らが男の命を繋げるために詠唱の短縮を行っていることに。

片方は外傷を治癒する魔法。もう片方は体力の回復をするものだな。

男の炎が再び燃え始めたことを契機に、詠唱の短縮をなくしてゆっくり唱えていく。

貴方と夫人はその様子を横目に、フェニルへ声をかけ続けた。

何度目かの詠唱が終わった後、彼の手が動き始める。

目蓋もゆっくりと開き、夫人をジッと見つめる。

「ただ、いま……」

口がゆっくりと開き、フェニルは夫人に帰還を報告した。

夫人も彼の頭に抱きつき「おかえりおかえり」と何度も繰り返す。

いつの間にか後ろで控えていた住人達も歓喜の声をあげ、外に伝播していく。

フェニルの容態が安定し、彼も夫人も眠ってしまった。

治癒術士も今では交代で一人ずつ詠唱を行っている。

貴方は手の空いている方に声をかける。

「このたびは本当にありがとうございます」

「いえ、自分の仕事を果たしただけです。どうか気になさらないでください」

お礼もいいが、気になっていることがあるだろう。

聞いてみたらどうだ？

「失礼ですが、伯爵様お抱えの治癒術士の方……ですよ。そんな方々がどうしてここに？」

彼らの紋章はメーヌ伯が持つ精鋭部隊に所属することを意味している。

そのような人間がこんな村くんだりになんか人助けをしに来ることなど考えられない。

「メル様が今朝早く、主様の元に奥様からの手紙を持ってこられました。手紙を読んだ主様は脅迫……いえ、感激され褒美は何がよいかと尋ねたところ。『腕の良い治癒術士を見繕え』とのことで、我々がこちらまで伺うことになったのです」

信じられるか？

確かに彼女は手紙を運ぶと言っていたが、まさか伯爵様直々に渡すなんて。

しかも、メーヌ伯がただの運び屋に褒美まで与えるなんて。

到底、信じられるものではない。

それにまだ疑問はある。

「な、なるほど。ここへはどうやって？」

それだ。

あまりにも到着が早すぎる。

村からミゼスまで半日はかかる。

往復で半日というのは、計算が合わない。

それに朝早くにメルがミゼスに到着したということがまずおかしい。

「馬で来ました。未だに信じられません。馬より速く走る人間がいるなんて……」

彼はなにやら見ているいけないものを見てしまったようだ。

貴方は後半を聞かなかったことにした。

「林を馬で？ どうやって？」

当然の疑問だ。

木が乱立する林を馬で駆け抜けることなどできない。

いや、できるかもしれないが難しいだろう。

「林の一部が消滅しました」

「……えっ？」

「昨夜の轟音はご存じでしょう。どうやってかは知りませんが、知りたくありませんがミゼスからこの村までほぼ一直線に大地が抉ら

れていました。その道を馬で駆け抜けたのです」

こいつは何か薬をやっているんじゃないか？

見ろ。彼の瞳は焦点が合っていない。

貴方もそう思ったはずだ。

「閉じた西門で部隊を構えていたのですが、たった一人に突破されました。門に至っては一足で飛び越えて。見ていなければ信じられないと思います。見ても信じたくありませんでしたから……。しかし、全て事実です。アレは——断じて人間などではない」

治癒術士は奥歯をカチカチと鳴らし始める。

目が遠くを見つめ、顔が引きつっている。

もうそれ以上は聞いてやるな。

それが優しきつてものだ。

男の容態を見届けて貴方は家を出た。

メルが村を出てから何をやらかしたのかはよくわからない。

ただ、彼女がフェニルを、夫人を、村を、そして——貴方を救ったことは確かだ。

礼を言うべきだろう。

外にも自宅にもメルの姿はない。

東門で門番とシアがたたずんでいた。

二人とも手に赤いリングを握っている。

「メルさんを知らないか？」

貴方が声をかけると二人は東の道を見つめる。

その先に誰かの後ろ姿が小さく映る。

「まさか……」

シアは頷く。

門番もそれに続く。

「おじちゃんが助かったことを知ったら、『もう用はない』って行っちゃった」

なんとせつかちな女だ！

せめてお礼の言葉くらい聞いていくものだろう。

……………いや、そうか。

「これスーさんとおばさんにつて！」

娘は地面に置いていた平包みから、リンゴを二つ出して貴方に渡す。

「これは？」

「おじちゃんを助けてくれたから、約束のお礼を渡したの！ ほーしゅーって言うんでしょ！ でも、多すぎるから一つでいいって！」

貴方は赤のリンゴを眺め、それから東へと目を移す。

今なら走ればお礼は言えるぞ。

どうするんだ？

「……………一緒に、メルさんを見送ろう」

そうだな。それがいい。

彼女がしたことへの礼は返せるものではない。

言葉にするには多すぎて、物にするには重すぎる。

彼女もそれに察して何も言わずに去ったのだ……………たぶん。

果たして彼女は馬鹿なのか察しがいいのか、どちらなのだろうか？

どちらにせよ、ここは静かに見送るのが正解だろう。

彼女は黙って進むことを選んだのだ。

貴方が口を挟むことはない。

見ろ！ 彼女の行く道を！

空は雲一つなく、蒼く澄んでいる！

彼女は手に持った赤いリンゴを空に投げて遊ぶ。

蒼い空には真っ赤なリンゴが良く映える。

ああ、やはりというべきか――

リンゴは赤に限る。

蛇足04話 「海の水着は全て夢」

やってきました大陸東端の都——ネクタリス。

透き通る薄青い水。

日の光を反射する白い砂浜。

天日塩がまぶられた、取れたての海の幸。

『豊乳を水着の中で惜しげもなく揺らすお姉様方』

そして、なによりも超上級ダンジョンのインブリウム水路。

……などなど、聞いていただけでも心躍る出来事が盛りだくさんだ。

——しかし、現実是非情である。

現在、私が立っているのは静かの海に臨む海岸。

名前の通り普段は穏やかな海が水平線を見せてくれるそう。

だが、目の前の海はどう見ても大荒れだ。

海は大きな波を遠方から砂浜まで運んできている。

波は白く泡立ち、とても透き通る薄青色には見えない。

砂浜も空のどんよりした天気を映しているのかどちらかと言えば灰色だ。

遠く右方に見える岸には、海に出られず陸に固定された船がずらりと並ぶ。

『どういうことだ？ 水着は？ 胸は？ お姉さん達は？』

私も少し残念だが、シユウはそれ以上のシヨックを受けている。

この悔しがりようを見られただけでも私は大満足である。

ダンジョンさえ行けるなら他は割とどうでもいい。

いやあー、実に残念だったねえ、シユウ君。

『そ、そんな馬鹿な。今回はメル姐さんの水着回でしょ。こんなの！
こんなの……絶対おかしいよ』

この落ち込みよう！

駄目だ。まだ笑うな。こらえるんだ。し、しかし、これは………。
このあと滅茶苦茶失笑した。

海も見たし、ギルドへ向かうことにした。

ダンジョンの情報を得たのち、ダンジョンへ向かう。

ネクタリス近辺には中級と超上級の二つのダンジョンがある。

超上級はあとの楽しみにとっておき、まずは中級へ挑むと決めた。ギルドの中は人が溢れている。

これは面倒だ。待ち時間が長いだろう。

と、思いきやそんなことはなく、すんなり受付にたどり着けた。

とりあえず、受付で中級と超上級の情報だけ購入して話を聞く。

どうやら中級はとても長いだけで、特に注意するべき点はないらしい。

逆に、超上級は道中がものすごく短く、モンスターも確認されていないと話す。

ただし、超上級は道中とボス部屋が完全に水没しているらしい。

記憶担当がふてくされて話を聞かないが、これくらいの情報量なら私でも覚えることができる。

中級ダンジョンへ向かう道中、小高い丘を通ったときだ。

遠目でも見えてはいたが、頂上に身長の倍程度ある石像が立っていた。

石像は太い金属製の柵に囲まれ立ち入りが制限されている。

蛇？

いや違うか。

長細い胴体と鱗で蛇だと思ったが、なにやら手と足が生えている。

蛇に手や足はない。石像の頭には小さな角がついている。

手から伸びる三本の爪がどす黒い玉を掴む。

なんだこれ？

「海龍様だ」

石像の後ろだろうか、誰かいたようだ。

私の心を読んだような解答が柵の内側から返ってきた。

『心を読んだっておおげさな……。普通に口に出てたよ』
えっ、ほんと？

海岸を離れてから初めて記憶担当が喋った。

どうやら機嫌が戻ってきたらしい。

シユウと話しているうちに石像の影から人が出てくる。

やや細身だが、その堂々とした立ち姿に力強い印象を感じる男だ。

私の方をちらりと見るとそのまま石像の前に立ち、黒い玉を見つめる。

海龍様？

「そう。海龍様の加護のおかげでネクタリスは安定を保っている。モンスターの襲撃が過去にないのも海龍様のおかげだ」

ふーん、これが龍なのか。

私の知っているドラゴンとはかなり違うな。

翼もないし、胴体も蛇みたいに細い。それに牙も小さい。

そういえば、その手に持つてる黒い玉はなんなんだ？

「青水晶だ。これを介して海龍様の力を引き出している」

青水晶？

黒にしか見えないんだが。

そういえばネクタリスの安定とか言ってたが、海が荒れてるのはどうしてなんだ？

時期が悪かったのか。

男は何も答えない。

またもや私の方をちらりと見ただけである。

「一人で『殻』に挑むのか」

私の質問を無視して、逆に質問をしてきた。

……殻ってなんのこと？

『中級ダンジョンのことだよ。ギルドの受付嬢が話してたじゃん。地元の人はその呼びぶってさ』

そんなこと言ってたっけ？

ダンジョンそのものに関係ないことだからな。

覚えるメリットが感じられなかったから聞き流したんだろう。

『Oh、クレイジーサイコメル……。ちなみに超上級ダンジョンは「珠」ね』

そうだったつけ。

ひとまず質問には返しておこう。

そうだよソロで挑むんだよ。殻をクリアしたら珠にも挑む、もちろんソロでな！

なんか文句あるか?!

『ぼっちを指摘されたからって、そんな僻まなくても』

うるさいな。僻んでなんかない。

「準備は万全か？ 殻は道が長く、奥に行くほど寒くなる。防寒対策を十分におけ。火の魔法が使えるやつと組むべきだ。」

あ、ああ。

まさかマジメに心配されると思わず、たじろいでしまった。

心配してくれるのはありがたいが問題ない。

ギルドで情報を得て準備は万全だ。

「それと、最近ハモンスターが凶暴になっているとの報告もある。無理そうだと思うたら引き返せ！ 命あってこそだ！」

そうなのか。凶暴になっているというのは聞いていなかった。

引き返すことなどないと思うが、最後の言葉には賛成だ。

命あってこそそのダンジョン攻略だ。

『さすが初心者森で一人こそそと生き延びてきた奴の台詞は重みがあるなー！』

うっせえ。

そろそろ行くぞ。

こうして中級ダンジョンの攻略を開始した。

なぜ中級ダンジョンが殻と呼ばれているかわかった。

奥のボスが殻にこもっていたからだ。ちなみにドロップアイテムも殻だった。

中級程度なので苦戦もすることなくあっさり倒すことができた。

途中の敵もまるで問題にならない。

ただ、問題が一つ。

道中が非常にめんどくさい。

ボス部屋に到達するまで丸二日かかった。

ここまで長いダンジョンはナギム廃坑以来だろうか。

ナギム廃坑は行きと帰りで違う道だが、ここは同じ道のりだ。

おもしろさもあつたものじゃない。

やれやれだ。

時間がかかるのは実際に距離が長いということが一つ。

それに潮の満ち引きで通れる場所が変わるということも大きい。

いちおうチートで水の中でも呼吸ができるようになったが、非常に進みづらい。

モンスターも水の中では動きが速くなるし、逆にこちらは遅くなる。

目もよく見えなくなるし、耳も聞こえない。喋るのも難しい。

さらに泳ぐのは好きじゃないので水中を歩いている。

それでも普通に挑めば往復で七日はかかる、と言われていたところを三・四日でクリアできそうなのでよしするべきだろう。

そんなことを考え、水の中を歩いていたときだ。

『……おかしいな』

なにがだ？

『水の中で無理に喋らなくていいよ。ぐぼぐぼ言つてよく聞き取れないから』

喋ってる自覚はなかったんだがな。

口の中がしよっぱい。

『いま歩いてるこの道だけだよ』

うん、と頷いてみせる。

『行きは海水がなかったんだよね』

そうだったのだろうか。

どこも似たような道で記憶にない。

水の中はどこも道がうねうねしてるからな。

気のせいじゃないか、と首をひねる。

『いやいや、そんなことはないよ。ほら、その下り坂の壁面を見て。フジツボ、えつとちつこい丸いやつね。それが途中からくつついてる

でしょ』

言われて壁を見下ろす。

普通の岩だった壁が、ある高さから下になると小さな丸が壁を覆うようになっていた。

ほんとだ。よく見ると、つぶつぶがたくさんで気持ち悪いな。

で、これがなんなんだ？

『フジツボってさ。海水があるところに生息するんだ。つまり普段はその高さくらいまでしか海水がないんだよね』

へえー、そうなのか。というかこれ生きてるの？

でも、よくよく見てみると上の壁にもちよこちよこいるぞ。

潮の満ち引きもあるから、今はちようど潮が満ちているんじゃないか。

そんな感じで特に意識することなくダンジョンを逆行していった。

途中でシュウが何度か海水面の位置を話したが、あまり意識しなかった。

たしかに行きよりも帰りのほうが水中を歩いていた気がするな、と感じた程度だ。

潮の満ち引きなんて日によって差があるものだと思っていたが、最後のあたり、すなわち、ダンジョンの入り口でようやく異変に気づいた。

〃 満潮時

ここまで←〃

そう矢印とともに書かれた看板が立てられていた。

満潮時でも水面が最高ここまでしかこないという目安だろう。

——その看板が完全に水没していた。

それどころか洞穴の入り口天井まで完全に水没している。

『あのさ。潮の満ち引きって日によって大きく変化する訳じゃないんだ。たしかに海上の気圧や風力で変わるだろうけど、ここまでくると異常としか言いようがないよ』

まあ、元々この中級ダンジョンは町よりも低い位置にある。

異常と大きさに言ってもダンジョンの中だけで町のほうにまで影響はないだろう。

ギルドに異常を報告してさっさと超上級ダンジョンに向かおう。

甘かったと言わざるを得ない。

ギルドの扉は完全に閉ざされていた。

ギルドだけではない。他の民家や商店も同様だ。

見える範囲に人が存在しない。

『こいつはたまげたなあ〜』

いやいや、そんな暢気に言ってる場合じゃないだろう。

海水が完全に町を侵食していた。

水面は今や私の胸の高さにまできている。

ときどき腰の辺りを魚が泳いで行くのも見える。

『活きの良い魚が艶めかしい肢体を駆け巡る！ わっふるわっふる！』

冗談につきあってる場合じゃない。

住人はいったいどこに消えたのだろうか。

辺りを見渡すと青い光が目に入った。

『石像のあった丘の方だね』

うむ。

行ってみるとしよう。

丘の側には小舟が二隻浮かんでいた。

さらに水龍の石像の側には見覚えのある人物が立っている。

もう一人知らない人物が背を向けて石像の前でなにやら詠唱している。

私が近寄るとあちらもこちらに気づき、目を見開き走って詰め寄ってきた。

『どうしてこんなところにいるー！』

いきなり怒鳴られた。

いや、そう言われてもダンジョンから戻ったら町が水浸しになって

たんだが。

「ダンジョン？ 馬鹿な……、殻は二日前には水没していたと報告が入っている。自分も確認した」

やっぱりそうなのか。

入り口も完全に水没していたからな。

行きよりも帰りに時間を使ってしまった。

「……なんにせよ、無事で良かった。避難するぞ。来い！ ロー、自分はいったん本部に戻る。お前はそのまま詠唱を続けろ！ 何かあったら、すぐに報告だ！」

「了解しました！」

勢いで船に乗せられ、町の中を進んでいく。

「いったい何が起きているんだ？」

少し落ち着いたところで疑問を口にする。

「海龍様の持つ青水晶を覚えているか？」

青水晶……、ああ青水晶なのに黒いやつのことか。

「そうだ。今でこそ黒だが、数年前までは青どころか無色透明な水晶だった」

へえ、あれがが。

信じられんな。

「だろうな。数年前から徐々に黒が滲み始めた。ここ数ヶ月は顕著だ。そして、黒に染まるとともに、静かの海も静寂を失い始めた」

ほおん、海の荒れがたかが水晶に引き起こせるものなのか。

「起こせる。過去の文献からも読み取れている。こうなることはわかりきっていたのだから、早めの対策を、とギルドと領主に提案していたのに……。おっと、すまない。つつい愚痴が漏れてしまった。忘れてくれ」

大丈夫だ。気にしていない。

私もよく愚痴を漏らすからな。

『そうだよね。メル姐さん愚痴ばつかだよね、ほんとやんなっちゃう』

大半はお前に対する愚痴だぞ。

わかってんのかオイ。

話しているうちに町を抜け、高台に船を着けた。

高台と言ってもそこまで高いわけではない。

すぐ上の方から声が聞こえてくる。

どうやら避難者がすぐそばにいるようだ。

「局長！」

坂の上から一人の男が走ってくる。

「どうした?！」

隣のおっさんが返事をする。

局長がなんなのか知らないがお偉いさんだったようだ。

「ゼリム子爵が避難所の件で話があるとお呼びです」

子爵……。

なんかすごいのが出てきたな。

「放っておけ。どうせ割り当てられた避難所が狭いと言うだけだ。今は全住人を入れることが最優先だ。どうしても嫌なら穴でも掘って潜っていると伝えておけ」

「いや、それは……」

私でもさすがにそこまでは言えない。

『だよね。メル姐さんは口も態度も臭いも悪いけど、割と小心者だしね』

臭いは関係ないでしょ。そろそろ怒るよ?。

「アルとイオは帰ってきているか?」

「アルは先ほど帰ってきました。セルス村の受け入れ体勢を確認できたようです」

「よし、カイ! アルにさっそく第一地区の住人をセルスに移していくよう伝えろ。それとイオが帰ってきたら、そのまま第三地区の住民を移すように言っておけ。護衛は手はず通り第一・二地区が騎士団。第三・四地区を冒険者だ!」

「はい……」

カイと呼ばれた男は元気よく返事をして背を向けたが、すぐにこちらにむき直す。

「ギーグ局長。自分は今からアルに局長の指示を伝えてきますので、局長はどうか子爵のところを伺ってみてください」

ギーグは颯めつ面で頷き、わかったから早く行けと手を払った。カイが逃げるように走り去るとギーグはこちらをむき直す。

「避難所を割り振りたいが、場所も人手も足りん！ 悪いが少しつきあつてくれ！ すぐ済む！」

お、おう。

考える前に思わず頷いてしまった。

『勢いの力つてすごいね。やつぱりぐだぐだうじうじやるよりも、一気に押し倒した方がいいのかな』

何の話？

続きを話しても良いけど、私に聞く気はないぞ。

仕方ないのでギーグについていき、掘っ建て小屋に来た。

私は中に入れてもらえず小屋の外で待っている。

外でも聞こえるほどの声で子爵とギーグが言い争う。

「狭い」「早く別の場所に移せ」「問題を解決しろ」と子爵が吠え。

「狭いなら外に出ろ」「別の場所は全一杯だ。得意の土魔法で穴でも掘って入ってろ」「現在、できる限りの対処は行っている。より確実な対処は三ヶ月前に説明した。その期を逃したのだから、現対処法では効果も薄い。我々にできる最良の選択は逃げることだ」とギーグが言い返していく。

『すごいね。局長って呼ばれてたけど、子爵にまったく物怖じしてない。それどころか、勢いで子爵をねじ伏せてる』
うむ。

子爵の言葉は徐々に勢いを失い、ギーグの勢いは増していつていく。

伝言では子爵本人もいないから好きなことを言えると思っていた。

まさか本人を前にしても同じことを言うとは……。

ついに言い争いは終わった。

責任、地位、領地云々といよいよ子爵はギーグに泣きつき始めた。

「頼むギーグ。なんとかしてくれ……」

「言われずとも全力は尽くしている。それが自分の仕事だからな。閣下もご自身の責務を果たすべきでしょう。椅子に座って泣いていて問題が解決できませんか？」

そこまで言うと言音がこつちに近づいてくる。

どうやら言うべきことは言ったというこらしい。

扉に耳を近づけていた私は慌てて扉から離れる。

扉から目を離し、来た道を目でたどると一人の男が走ってきた。

あれはたしか………誰だっけ。

『水龍の石像の前で詠唱をした人。ローって呼ばれてた』

ふむ、それだそれだ。

顔には明らかな焦りを貼り付け、まっすぐこちらに向かってくる。脇に避けて道を譲ると、私を見ることもなく小屋の扉を勢いよく開けた。

ちようど小屋から出ようとしていたギーグと鉢合わせる形になった。

すこし驚きながらもローは言葉を繰り出す。

「局長！ 青水晶にヒビが入りました！」

ギーグは目を見開き、後ろで椅子に座っていた小太りの男は奇声を発する。

『不謹慎なんだけどき。おもしろくなってきたね』

たしかにそうだ。

いちおう当事者なんだがな。

一步離れた位置にいるためだろうか、それほど緊張感はない。

次から次へと起こる出来事に退屈しないですむ。

「ギーグ！ ヒビが入るとどうなるのだ！ いったい何が起こるといふのだ?!」

小太り子爵は顔を歪めて尋ねる。

「以前に説明したでしょう」

子爵とは対照的にギーグは静かにびしやり。

私もどうなるのか気になる。

ギーグは説明する気がないように、目を瞑り思案しているように見える。

仕方ないのでローを見る。

子爵やお供の人の視線も集まり、ローは観念して口を開いた。

「過去の文献には、青水晶にヒビが入った事例が二件確認されています」

なんだ。

二回もあるのか。

初めてって訳じゃないんだな。

「一件は青水晶を即座に入れ替え『鎮水の儀』を催したところ、しだいに潮は引き、波は静まり、海は平穏を取り戻した、と」

おお、なんだ。

よかったじゃないか。

青水晶を入れ替えれば、万事解決だ。

私の言葉に対して返答はない。

誰もが静かに黙り込み、目を伏せる。

シユウだけが楽しそうにクスクスと笑う。

なんだ？ なぜ黙る？ 変なこと言ったか？

「青水晶に、予備は——ない」

訪れたしばしの沈黙をギーグが破る。

『ですよ〜』

もう一件の事例は——、とローが話し始める。

「ヒビを放置し、青水晶が割れています」

おお、今回はそちらになるわけか。

そっちの場合はどうなったんだ。

「水晶が割れたのち、地は獣のごとく唸り、大地を揺るがす。一時の間に潮は町より完全に引き、砂浜からも水が消失した、と」

なんだ町から潮が引いたならいいんじゃないか。

水が消えた方がまずいってことなのか？

ほっとけば、そのうち戻るだろ。

今もあるんだしさ。

『いや、うん、確かに水が戻ることは戻るんだけど……。地震の後に潮が引いたつてことはね。ちよつと洒落にならないかも』

先ほどまでむかつくほど楽しそうに笑っていたシユウからおふぎけ成分が消えた。

これは相当まずい状況であることを意味する。

どう、なるんだ？

「一刻ののち、遙か遠方より青き壁が押し寄せり。壁は高き水であった。水は悉くを海に帰した、と」

要するにどういうことだ。

『津波だね。海見たときに大きな波が出てたでしょ。あれのさらにかいやつが町を壊したつてこと』

でも、水の波でしょ。

そこまですごいことになるの？

昔の人がおおげさに書いただけじゃないか？

『津波をなめすぎ。普段の波は水面だけみたいなものだけだね。津波は水面から水底の全体が大きな波になるんだ。あの程度の町並みじゃ全部押し流されて、引き波で海に引きずられちゃうよ。残るのはせいぜい基礎部分とそれにひっかかったガレキだけ』

どうやら本当に冗談じゃないらしい。

町が壊れたらギルドはどうなるんだろうか？

せつかく来たのに超上級ダンジョンに挑めなくなるのか？

『メル姐さんの言動が屑すぎて、頭がフットーしそうだよお！』

そうだな。

ダンジョンどころじゃないか。

いや、待てよ。

水晶が割れて町が流されたなら、さつき見た水晶はいつ手に入れたんだ。

そもそもこの町はどうして今あるんだ？

「その後は文献が紛失しています。数百年も以前のことですからね。おそらくは、波が引いたあとに再度入手して嵌めたと考えられます。町の復興も鎮水の後に行われたのでしょうか。ゼロから今の町並みに

戻すのとしたら、果たして数年で足りるかだろうか」

ローの説明が終わると同時に、地面の底から低く唸る音が聞こえてきた。

音を追いかけるように地面が小さく揺れ、すぐに大きな振動に変わる。

ギーグが「伏せろ!」、「柱に掴まれ!」と吠えているうちに揺れは収まった。

「青水晶が割れたか!」

ギーグが声を荒げると、子爵も「ああ、ああ!」とうめき始める。

「もう終わりだあ! 私の領地が、屋敷が。どうして、どうして今こんなことに……」

子爵がうわごとのように呟き、ばたりと倒れる。

口からよだれを垂らし、体を震わせ、うずくまっていた。

周囲の者が慌てて駆けより声をかけている。

ただし、ギーグとローは別だ。

あと私もか。

『だめだ、こいつ。もうどうしようもない』

シユウが私の心を代弁してくれた。

「うるさい邪魔者は消えた! 行くぞ、ロー!」

すでにギーグは走りながら、追従するローに指示を出す。

「ここも高度が低く安全とは限らない! 予定よりも早いが全住人の輸送を行うぞ! 騎士団には子爵の代わりに自分が指揮を執ると伝える。お前はさっそくアルとともに第一・第二地区の輸送に移れ!

街道沿いのルートはすでに波が高いと報告にあるから駄目だ。丘に登るルートに切り替える。道幅は狭いが、こちらなら海から距離も高さも取れる!」

「わかりました! ギルドの方はどうしますか?!」

道の分かれ目で立ち止まりローが問いを投げかける。

「支配人のところには自分が行く! 第三・第四地区住人の輸送護衛に冒険者を今すぐつけさせる! カイにいつでも出発できるように準備させておけ!」

「了解です！」

そうして彼らは道で二手に分かれた。

私も冒険者なのでギーグについていく。

前回同様、私は小屋の前でギーグとギルド支配人の話し合いを盗み聞きしている。

「支配人！ 冒険者たちの護衛が予定数より大幅に少ない。これはどういうことだ?!」

そうなのだ。

この小屋に向かう途中でカイとかいう局員が報告にきた。

第三・第四地区住人の輸送護衛に当たる冒険者の数が少なかった、と。

しかも、護衛に当たる冒険者の多くが初級・中級と実力に問題がある者ばかりである。

「いや。それがですな、ギーグ局長。我々も要請通りに依頼を発注しました。ところが、依頼料がどうにも少なく、上級・中級者の方々は依頼を拒否されました」

「地震があっただろ?! 地面に足が着いていたか? 緊急事態だ! どうにかしてでも冒険者動かすのがギルドの仕事だろう!」

ギーグは扉越しでも耳が痛くなるほど吠えている。

よく考えるとこの男は出会ってから静かに喋っている記憶があまりない。

「そうは言われましてもね。依頼を受けるか受けないかの最終的な判断は冒険者の方たちの自由意志ですから。彼らを動かすにはどうしても先立つものが必要となります」

これは支配人の言うとおりだ。

受けたくない依頼は受けない、冒険者の鉄則とも言える。逆に安くても依頼を受けるときは受けるのだ。

『やりたいことだけやってる、迷惑者の自由集団だもんね』

たしかにそういうのが多いよ。多いけどさ。

もうちよつと良い言い方はなかったの。

依頼の受注が自由とは言っても、ギルドは圧力をかけることはできない。

受けないとギルドからの信用が下がり、依頼を回されなくなったり変な噂が流れることもある』——と、経験者は語る。』

いやいや、私はそんなにひどくなかったよ。

薬草を集めるなら彼女において他はいないってことでさ。

薬草集めや粘液回収の依頼をたくさん回してもらってたからね。

「冒険者を集められる金額を提示したのはそちらだ。我々はその金額をすでに支払った。契約は成立している！ 数をそろえられないというのなら、ギルド側の落ち度だ！」

「依頼料は状況によっても変わりますので。局長のおっしゃるよう、緊急事態ですからね。変動もやむなしかと」

ギーグの怒声にもひるむことなく支配人は静かに対応していく。

「……よくわかった。護衛の人員は必須だからな」

深く息を吐き出すようにギーグが声を流す。

「さすがは危機管理局の長。わかって頂けたようですね。それで、残りの人員を集めるための見積り金額ですが——」

「二年前と十ヶ月前のことだが！ 青水晶を確保するため、冒険者へ依頼を出すようにギルドへ要請した！ 覚えているか?!」

支配人の話を遮り、ギーグが再び声を張らせる。

「え、ええ。覚えていますよ。超上級パーティーを二度呼びましたね。どちらも要望には添うことができず、当ギルドとしても——」

「事後になるが、当局でも彼らについて調べさせてもらった」

「えっ?」

「我々が要請したのは経験豊富で実力のある超上級パーティーだ！ そうだったな?!」

『流れが変わったな……』

うむ、なんだかな。

支配人がうろたえ始めたぞ。

「最近、実施した当局の調べではどちらのパーティーも超上級に成り立って、実力も上級クリアがせいぜいとなっていたが、これはどうい

うことだ?!」

「確かに彼らは成り立てですが、実力は——」

「さらにだ！ 調査によると、こちらの先払いした金額の半分も彼らは受け取っていないと出たが、これはなんだ?!」

「そ、それは——」

「とあるギルド職員によると、要請した当時、ギルド本部へ大きな金の流れがあったそうだ！ 支配人、それでお前も本部から高い評価を受けたと聞いている！」

怒声が止まり、静寂が舞い降りた。

次にどちらが何を喋るのか気になり、扉に耳をピタリとつける。

「ど、どうやらギーグ局長は大きな誤解をなされているようです。我々ギルドは常に正当な職務を全うすることを心がけています。おそらく調査に間違いが——」

「そうだな！ 間違いがあるかもしれない。すでに当局では先の案件を書類にまとめた！ この書類は自分の声一つで王国側とギルド本部に即時送られる！ 間違いがあるかどうかはそちらの判断に委ねよう！」

「お、お待ちくだ——」

「それより支配人！ 既に述べたように、今は緊急事態だ！ 書類の一つや二つは有耶無耶になって消えるかもしれない！ だがしかし！ 我々が責任を持って行うべきは重役の首を切るための書類保護ではない！ 輸送する住人を護衛するための人員確保だ！ ……それで、『正当な職務を全うする』ギルドとしては、残りの人員確保にいくら必要だと見積もっているんだ？」

最後の最後になってギーグは声を深く沈め問いかける。

ギルド側は全力を尽くして冒険者の確保を「無料で」行うことになった。

『完全勝利した危機管理局GCC』

ギーグはすぐに小屋を出て、第三・第四地区の住人がいるところに走り始めた。

追いかけてよう。きっとおもしろいことが起こるはずだ。

『ちよつと待った。メル姐さん、おっさんを追う前に買って置いて欲しいものがあるんだけど』

なに言ってるんだ。

今は店が水に沈んでやってないぞ。

それにこの状況で何が必要だつて言うんだ。

『大丈夫。そのへんにいるギルド職員を捕まえれば買えるものだから』

ふうん。

それでなにが必要なんだ。

『ギルドから買うものなんて決まってるじゃない。パーティーリングだよ』

お前さ。

今の状況をちゃんと理解してる？

『もっちのろんろん。予想通りなら必要になるよん』

どんな予想だよ。

あと、その言い方むかつくからやめろ。

『すぐわかるよ。おそろくね』

そう言ってる、シユウは怪しく笑った。

気持ち悪い奴だ。

その後、手持ちぶさたな職員を捕まえ、なんとかリングを購入した。ギルド職員に不審な顔をされたが、金の力は偉大だ。

渋々ながらも売ってくれた。

ギグを探して避難所へ赴く。

どこだろうかと歩いていると怒声が聞こえてきた。

すぐに場所がわかるから助かるな。

小屋の前でギグと……誰だっけ。

『ローだね。二回目だよ、そろそろ覚えてあげて。でも、あれ、おかしいな？　なんでここににいるんだろう』

さあな。私を知るよしもない。

とりあえず近寄って、何があったのか尋ねてみる。

「どうして君がここにいる?! 冒険者は全て護衛に回ったと聞いているぞー!」

……あれ?

そういえばそうだな。

護衛の話をもちかけられなかったぞ。

『たぶん護衛の依頼が出たときにダンジョン潜ってたから数にカウントされてなかったんだと思うよ。ギルドからもカウントされないって、もう冒険者じゃないよね。そんなことより魔王しようぜ!』

うっさい。

私は冒険者だ。冒険者なんだ!

それより私のことは置いといて。いったい何があったんだ?

「……まあ、いい。丘のルートで崩落があった。地震の影響だろう。幸い落ちたのは馬と荷車だけで人間はいない。しかし、一部の住人がこちらに戻り海岸沿いのルートを行くことになった」

あれま。それは大変だ。

第三・第四地区の人間は出発したばかりだろ。

そちらに合流させればいいんじゃないか。

「だめだ。間に合わない可能性が高い。見てみる」

ギーグが指さす方向は高台を下った道の先だ。

小さく行進する人々が見える。

住人とそれを囲むのは冒険者たちだろうか。

彼らが歩いているすぐ近くには海岸線が見える。

すでに波は引き始め砂浜が広い。

『前例通りの沈降による引き波だね。隆起からの押し波だとあの人もちもやばかったからラッキーだ』

よくわからんが、何かがよかったようだ。

行進する人々はもうじき海岸線を抜けようとしている。

「あの海岸線を抜ければ丘に登ることになる。だが、戻ってきて向かわせるには時間がかかりすぎる。それに戻ってくる住人は病人、あるいは怪我人だ。予定よりも多くの時間が必要になるだろう」

じゃあ、しょうがない。

ここで待つしかないだろう。

そもそもお前らはどうするつもりだったんだ。

「我々は最後に彼らを——第三・第四地区の住人たちを追いかけるともりだった。無論、今は戻ってくる住人を待つが、このままではここに取り残される可能性が高い」

考え込むように頭をゆっくり回りしながらギーグは語る。

そもそも、この高台でもそこその高さはある。

より安全を考えて輸送させてるようだが、ここで十分じゃないか。

「いや、ここでは低すぎる。ここはあくまで一時的な避難場所で、緊急として作られたものだ。過去の津波ではこの高台も波に飲まれたと書かれている。本当はもっと高い位置に作りたかったんだが、局だけの予算ではここに建てるのが精一杯だった！」

……あれ、なんかほんとにやばいそうだぞ。

今更だけど私も逃げた方がいいんじゃないかな。

「そうだ。君は早く逃げろ！ 第三・第四地区の避難民を追いかけて護衛に当たってくれ！ 依頼料はあとで払う。我々は戻ってくる住人を今から迎えにいき、なるべく多くの人間を避難させる。馬を一つやる」

必要ない。

足には自信がある。

よし。それじゃあ、その依頼を受け——、

『ほんとにいいの？ 依頼を受けちゃって』

なにがだ？

私なら今からでも余裕で追いつけるぞ。

野生の動物はおろか、野良モンスターが出て払いのけることができる。

『そりやそうだ。でも、報酬は受け取れないだろうね』

なぜだ？

『なぜって、間に合わないからだよ』

何に……？

『そりや津波だよ。ギーグ局長たちが病人やら怪我人たちを迎えに

行って、ここに戻ってきて、さらに海岸線を抜ける時間を考えてみて。もうすでに潮は引き始めてるんだよ。ギーグたちは波に飲まれて帰ってこない。メル姐さんに報酬を払う人間はいなくなる』
たしかにそうだけだな。

間に合わないと言ったわけじゃないだろ。

『そうかもね。でも、ギーグ局長も間に合わないって感じてるはずだよ』

そんなことないだろ。

最後まで諦めそうにないぞ。

『諦めないだろうねー。でもさ。馬をやるって言ったんだよ。メル姐さんに馬をやるくらいなら住人の避難に一頭でも多く使った方がいい。それに「貸す」じゃなくて「あげる」だ。返してもらうことはできそうにないって無意識で感じ始めてるんだよ』

そんなの言葉の綾だろ。

じゃあ、お前は依頼を受けないほうが良いと言うのか。

『そうだね。護衛に行くのなら、後残りがないように依頼は受けられないかな』

だがな。

依頼を受けなくても後残りがありそうだぞ。

どつちにしろ後残りがあんなら、もうどつちでもいいんじゃないか。

『落ち着いてよ、メル姐さん。ほら俺に続いて呼吸して。ひっひっふー、ひっひっふー』

その呼吸だと、なんか落ち着かないんだが。

『せやね。で、どうして護衛に行くことが前提なの？』

いや、だって逃げる他に選択肢があるのか。

そうか。私も避難民の輸送に当たればいいのか。

そのほうが良さそうだな。

『違う。それじゃ護衛に当たるとたいして変わらない。もっと根本的な解決法があるでしょ』

うん？

そんな選択肢が本当にあるのか？

『ある。単純明快——津波を止めるんだよ』

………できるのか？

今回ばかりはチートなお前でも無理かと思っただが。

『いや、今回はそこまでのチートがなくてもいけるかもしれないんだよ』

ほう、話を聞こうか。

簡潔に頼むぞ。時間がない。

すでにかなり無駄にしてみました。

『任せ給へ。まず——』

——なるほど。

たしかにそうだな。

『ただし、いざとなったらメル姐さんだけ助ける方向にスキルを変更するからね。そこはご了承を』

それは仕方ないだろう。

私はまだ死にたくないからな。

さて。行くか、クソ野郎。

『おう。行こうぜ、魔王様』

うむ。

それと私は魔王じゃない。

馬に跨がり、今まさに出発しようとしているギーグを呼び止める。

先ほどの依頼なんだがな。

やはり受けられない。

「………そうか。なににせよ無事に逃げるならいい！ 死ぬなよ！」

悪いが今回に限り逃げることもしない。

ギーグの顔が怪訝そうに私を見下ろす。

そりやそうだ。何を言っているのかわかってないだろう。

それではだめだ。これから私はさらにひどいことを言うのだから。

「私は、今から超上級ダンジョンに挑戦する！」

ギーグの表情はおもしろいくらいに変化する。

最初はあつけに取られ、次に軽く笑い、最後に――

「バカか、お前は！ 何を考えてるんだ！」
ぶちぎれた。

当然の反応だが、まあ落ち着け。

今から救助に行っても住人はおろか、お前たちも助からんだろう。彼の顔はびくびく痙攣しているが、話は聞いてくれている。

それならと遠慮なく続けさせて頂く。

超上級ダンジョン――インブリウム水路なんだが。

お前たちが「珠」と呼ぶのはボスモンスターのドロップアイテムが例の水龍の青水晶だからで間違いないか？

ギーグは小さく複数回頷く。

どうやらシユウの予想は間違いなかったらしい。

「たしかにそうだが、あそこは超上級ダンジョンだぞ」
その通りだ。

言ってなかったが、私は極限クラスの冒険者だ。

そもそもネクタリスにはインブリウム水路の攻略を目的に訪れた。信じられないかもしれないが、これまでにディオダデイ古城、アラクトル迷宮、それに神々の天蓋を攻略している。

――と、言いつつ首にかけていた冒険者証を見せる。

手にとったギーグは目をぱちぱちさせながら冒険者証を確認する。

「たしかに、そうなのかもしれないが、珠は事情が違う」

そうか？

ダンジョンの道程は極めて短いと聞いているぞ。

「そういうことじゃない。あそこは完全に水ぼ……いや、そうか………そうか！ しかし、行けるのか?!」

どうやら、ギーグも気付いたようだ。

インブリウム水路は普段なら完全に水没しているらしい。

普段なら、だ。今は津波前でどういう事情かは知らないが潮が引いている。

今なら水もないただの道になっている可能性がある。しかも、モン

スターもほぼいないと聞く。

さらにだ。シユウは、水がないならボスも楽に倒せるかもしれないと言っている。

そうなるに残る問題は一つ。

えつとなんていったつけ。

『鎮水の儀』

そうそれだ。

鎮水の儀をする、とか話していたがそれは時間がかかるのか

「いや、そちらはすぐに済む」

そうか。

それならいけそうだな。

で、どうする？

どっちにしろ私はインブリウム水路に向かう。

ボスのドロップアイテムには、特にこだわりがない。

ダンジョンまでの道案内をしてくれる人間がいたら、案内代にくれてやるつもりなんだがな。

「……そうか。それなら自分が案内しよう。それと自分もボスに挑ませて頂く！ これは譲れない！ 危機管理局局長として責務だ！」
これもシユウの予想通りだ。

正直に言うとは足手まといだから来ないで欲しい。

それでも、絶対についてこようとすると奴は話していた。

どうやら完全にクソ野郎の手のひらの上らしい。

むかつくが仕方ない。

挑むなら、これをつけておけ。

そう言ってパーティーリングを放り投げる。

ギーグは上手くキャッチすると、さつそく指に嵌めた。

シユウは『おっさんと話すことなんかなにもないんで、しばらく黙っとく』と言っていた。

ギーグと距離が開くか、どうしてもやばくなったら話をするらしい。
い。

いつもこれくらい静かならいんだがな。

「局員諸君！ 聞いての通りだ！ 自分は今から珠に挑む。諸君は予定通り住人を迎えに行つて欲しい！ それとロー、お前はここで待機だ！ 珠から戻ったら魔法で合図を送る。確認できたら海龍様へと向かえ、津波が迫りもうだめだと思つたら逃げろ！ それでは各員行動に移れ！」

了解！ と声が重なりあうと各人が動き出した。

「自分たちも行くぞー！」

ギーグが馬を走らせ、私はそれについていく。

久々にパーティーを組んでのダンジョン攻略が始まった。

高台を下り、町を抜け、石像のある丘を横切り、そのまま砂浜に突入する。

どこにダンジョンがあるのかと思つてしたが、砂浜のど真ん中に穴が空いていた。

中級ダンジョンも町の近くだったが、超上級ダンジョンに至っては町の中と言つても差し支えないほどすぐ近くにあつた。

「あそこだー！」

水がないのをいいことにギーグは馬に乗つたままダンジョンに突入する。

私は入り口で止まり、その背をみつめる。

砂浜に穴が空いてると言つたように、天井も砂だ。

どうして天井が崩れてこないのかが不思議で仕方がない。

それにモンスターがいないと聞いているものの、もしもいたらどうするつもりなんだろうか。

仮にモンスターがいれば、突っ込むなんて危険きわまりない。

『メル姐さんがまともなこと言つてる……不吉だ。おっさんもそれだけ必死なんだよ。ところで、まさに最後の点なだけどさ。どうしてモンスターがいらないんだろう？』

ギーグが離れたのを良いことに、シュウがしゃべり始めた。

そういえばそうだな。

モンスターのいないダンジョンなんて神々の天蓋しか記憶にない。

「おい！ 何をやってる！ 先に進むぞ！」

ギーグが道の先から呼びかけてくる。

モンスターのはひとまず置いておき、追いかけることにした。短いとは聞いていたが、本当に短い。

まだ水が少し残る道を下りながら進むと、大きな扉が見えた。

「よし！ 突入するぞ！」

いつの間にか馬から下りていたギーグは、私の返事を待つことなく扉を開けて入っていった。

おいおい！ ちよつとは落ち着けよ！

作戦会議もなにも無しでつつこむとか馬鹿じゃないのか。

しかも、奴は短剣しか武器を持っていない。

防具すら戦闘を意識したものではない。

ボスの一撃で死ぬぞ。

慌てて扉をくぐる。

目に映り込んできたのは、広い部屋に力なく横たわる巨体。

そして、その巨体に乗るかかり小さな短剣を振り下ろすギーグだった。

な、何が、起こっているんだ……。

まさか、もう倒したとでもいうのか。

そもそもこのボスは何だ。

体は長細いが魚には見えない。

どちらかと言えば蛇だが、口は長細く棒のようだ。

『タツノオトシゴ。こう見えてもいちおう魚の仲間だよ。普段は水中で体を直立させるんだけど、水がないから倒れてるんだ。しかもガス交換もできなくて弱ってるみたいだね』

シユウがぼそぼそと教えてくれる。

水龍の石像に似ているが、もしかしてこれか？

『うーん……。でも、手とか足がないよね』

そう言えばそうだ。

水龍の石像は手と足があつて、水晶も掴んでたからな。作成者が大きさに作ったのかもしれない。

「なにぼさつと見てる！ 鱗が硬くて刃が通らん！ 早く手伝え！」
ギーグはボスがなんだろうが、構うことはないようだ。

『人間死ぬ気になれば怖いものなんてないって良い例だね。そうそう、筒みたいなの口元には絶対近寄らないで。タツノオトシゴは見た目よりもずつと獰猛な捕食者だから吸い込まれちゃうよ』

ありがたい忠告をギーグにも伝え、膨らんだ腹部からザクザク斬つていった。

途中でボスが体を跳ねさせギーグが飛ばされたりもしたが、特に怪我もすることなく倒すことができた。

光とともに残るドロップアイテムは二つ。

青き水面映す龍の子の瞳——を私とギーグがそれぞれ拾い上げ、勝利の歓声も上げぬままダンジョンを抜けた。

ダンジョンを出るや否や、ギーグは短い詠唱を行い、火の玉を上級に打ち上げる。

火の玉は空で小さく破裂し、音を鳴らす。

「海龍様のもとへ急ぐぞ！」

ああ、と私も返事をする。

さすがの私も急がねばなるまい。

海には、すでに小さく青い壁が見えている。

石像の足下には割れた水晶玉の破片が散らばる。

黒々とした水晶玉とギーグが石像の手に嵌めようとしている透明な水晶玉が同じものとは思えない。

ちようど手に水晶玉が嵌まると馬がやってきた。

「局長！ もう戻られないかと逃げるところでした！」

たしか、えつと、そう、ローだ。

ローが焦りと笑みを貼り付け、ギーグに近寄る。

「そんな挨拶はいらん！ もう波は見えているんだ！ 鎮水の儀を行うぞ！ 詠唱の準備だ！」

はい！ と大きな声で返事をし、ローは杖を持って石像の前に立

つ。

〈我ら小さき人の子は、ただ海の平穏なるを願うもの——〉

詠唱を始め、私とギーグが見守る。

石像は海の方を向き、ローは石像と対面している。

そのためローは海が見えていない。

逆に、私とギーグには海が見えている。

小さく見えていた白い壁も、今では青く大きく押し寄せる。

ローを急かすこともできず、ギーグは落ち着かず顔をローと海を何度も往復させる。

↑——碧き龍の猛き姿。其の力の一端をどうか我らに〈

ローが目を瞑り詠唱を終えた。

目を開きギーグに合図をするものの、何も起こる様子はない。

波はさらに高くなり、水の音も聞こえるようになってきている。

勢いの収まる様子は見て取れない。

「どうして何もおこらない!」

「わかりません! 詠唱は確かに完了しました!」

ギーグが吠え、ローも言い返す。

『メル姐さん。逃げる準備して』

そうか……、駄目なのか。

作戦担当も無理だと判断したようだ。

私たちにできることは十分にやり遂げた。

せめて、ここにいる二人くらいは抱えて逃げるとしよう。

「なぜだ! 何が足りない!」

ギーグは石像に向かって叫び、次いで波迫る海に向く。

そして、高台を見つめる。

そこにはちようど戻ってきた住人達が小さく見えていた。

「だめだ! まだ避難は完了していない! 彼らを死なせるわけにはいかない! どうしたらいい! 自分はいったい何をすればいいんだ!」

叫びは悲痛なものに変わっていく。

『あ……、メル姐さん』

んあ？

ああ。やっぱり、そろそろ逃げないとやばいよな。

『いや、そうじゃないんだけどね』
なにが言いたいんだ。

『うーん、人事は尽くしたってところかな』

はあ。

そうですか……。

「海龍様！ この町は！ ネクタリスは人間が築き上げた努力の結晶なんだ！ 貴方様から見れば、ちつぽけなものなかもしれない！

それでも自分は、自分たちは全力をかけてこの町に当たってきた！」
そう言っつてギーグは膝を折った。

ローもその斜め後ろで膝をつける。

私は二人の間に入り脇に抱える用意を始める。

もう限界だ。逃げるなら今しかない。

「住人と、住人たちが安心して帰れる場所を守りたい！ 欲深いと思われるかもしれない！ ——それでも、どうか！ どうか、お力添えを！ お願いします、海龍様！」

もう諦めろと言うこともできず、無言でギーグとローを抱えこもうと腕を伸ばす。

『必要ないって。下ばっかりじゃなくて、上も見てみなよ』

何を言っつて——。

視線を上に向けると目が合った。

ぎよろりとした円い瞳が私を見下ろしている。

へ……？

《純なる願い。しかと聞き入れた》

頭に声が響いた。

シユウのイライラさせる声ではない。

もつと落ち着き、渋みのある重い声だった。

石像の瞳が私たちの方から上方に動く。

水晶を持つ手が灰色から緑色に変わり、体も滑らかに動き始めた。

細長い体を伸ばすとそのままふわりと浮き上がり、スルスルと雲の

上へ飛んで行ってしまった。

『ありや、行っちゃったね』

呆氣にとられて空を見上げていたが、シユウの声で我に返る。

あ、ああ。

これはいったいどういうことだ？

『おそろくだけど……。ここは神々の天蓋と同じ種類のダンジョンなんだよ』

えっ？

ここダンジョンなの？

『うん。ネクタリスそのものが極限級のダンジョンで、超上級ダンジョンがおまけ。だからモンスターも出てこないし、近寄ってこない』

じゃあ、さっきの石像ってもしかして。

『ボスだろうね。南のゲロゴン並の強さだと思うよ』

そこまで言うと、上空の雲が渦巻き始めた。

渦の中心がぼつかりあき、そこからなにやら大きな影が現れる。

ぎよろりとした縦に開いた瞳孔。

ピンと左右に伸びる髭。

丸みを帯びた角。

そんな顔が雲から降りてくる。

顔の次は緑の鱗に覆われた胴体が雲から際限なく続く。

胴体にはなにやら細かい手がつき、三本の爪が大きな珠を掴んでい

る。ようやく尻尾が出てくると雲はその穴を閉じた。

『なんかゲロゴンよりも風格があるね』

そうだな。

こっちのほうはずっと強そうだ。

顔もキリッとしてるし、酒も飲んでない。

緑龍は空でうねうね動いたのち、砂浜に胴体を横たわらせる。

その太い体で私たちが津波は見えなくなってしまった。

頭だけが持ち上がり海の方を見つめ、口を開けた。

そして、口から極太の水流がまつすぐに吐き出された。何かにつづかる音とともに緑龍の体を超えて水しぶきの飛ぶのが見える。

緑龍がそのまま頭を左右に振ると、水しぶきも左から右へと高く上がっていった。

口を閉じ水流が止まると、しばらくして波の音とともに緑龍の体はこちらへと押された。

このサイクルを三度ほど繰り返すと緑龍の胴体がズルズルと砂浜を削り、空に浮かび上がっていく。

胴体がなくなつたところから波が砂浜に押し寄せ、その勢いは町の手前ぎりぎりまで止まり、また海へと戻っていく。

見届けると、緑龍はその姿を雲へと消した。

しばらくして、小さなサイズに戻った緑龍が私たちの近くへ降りてくる。

私たちは誰も何も言うことなく、緑龍の言葉を待つ。

《忘れるなかれ、人の子よ。己が責務に徹する、その心の有りようを――》

それだけ言うと、緑龍はただの灰色の石像に戻ってしまった。

二日が経ち、町には人が戻り始めていた。

ギーグは今も復興の先頭に立ち、指揮を執っていた。

先ほども局員・騎士・冒険者を連れて、町の中を走り回っていたのが見えた。

……というか、あのおっさんはいつ寝てるんだらうか。

『それは俺も思った。夜でも外から声が聞こえてくるからね』
いちおう私も復興の手伝いをしている。

もちろんただ働きはしない。ギルドから正式な依頼を受けたのだ。

ほら。私。冒険者ですから！

『はいはい。そうだといいね』

なにその言い方。

ちゃんと冒険者してるよ。

「おい、そこ！ 休憩は終わりだ！ 南第三地区で流木が大量に流れ
ついていると報告があった！ 行ってみてくれ！」

ギーグが私を指さし次の命令を与えてくる。

『だそうですよ。土方姐さん』

そのようだな。

椅子から立ち上がり、伸びをする。

依頼期限は今日までだ。

さすがに流木の撤去作業は飽きてきた。

明日になったら、次のダンジョンへ向かうとしよう。

この町はギーグがいれば、あとはだいたい問題ないだろう。

こうして土木作業に汗を流しネクターリスでの攻略を終えた。

『……………えっ？ あれ？ 水着は？』

そんなものはない。

蛇足05話 「神は見ているか？」

海を見たので、次は雪を見よう——ということまで北に向かった。まずはセルニアの都を目指す。

問題はネクタリスからセルニアへの道程にある。

『道程であって童貞ではない。ちなみに俺は二代目プロ童帝である』
黙ってる。

そんな補足はいらん。
そもそも初代は誰よ？

あとプロを付ける意味もわからん。

あれか？ 知識だけ豊富で実践がゼロのへたれってことか？

『う、うるしやい……』

さて、ネクタリスからセルニアへは三つの道がある。

単純に西・中央・東としよう。

分岐がある場合、通常はダンジョンがあるかどうかで決める。

今回は全てのルートにダンジョンがあった。これは困った。

「二つのルートに入ってダンジョンを攻略したら、隣のルートにゲロゴンのスキルで無理矢理割り込もう」

そう提案してみたものの、『生態系の破壊はよくない』とシユウに止められた。

面倒ではあるが一度セルニアに行き、別のルートでネクタリスに戻り、さらに残った一つのルートでまたセルニアに行くことにした。

シユウを空に軽く放り投げて地面に落とす。

東のほうに剣先が向いたので東ルートから行くことになった。

次の戻りが中央ルート、最後の行きが西ルートだ。

——とまあ、そんな訳で一週間ほどして、ハナツメの町にたどり着いた。

ここには中級ダンジョン——フクシア岩窟があるそうだ。

すでに時刻は夕方なので今日は情報だけ集めて明日挑むことにする。

経験で語らせて頂くと、中級ダンジョンが一番おもしろくない。初心者と初級はほのぼのとしており、短いものも多い。

上級以上になるとダンジョン固有の特徴が強く出てきておもしろみが増す。

中級が最も中途半端だ。

ただただ長かったり、モンスターが硬かったり・飛んでたり・魔法使ってきたり、あと罠が多い。

初級ダンジョンにちよつと毛が生えた程度。

上級からはダンジョンが侵入者を本気で殺しに来ている印象がある。

私にとって微妙な中級なのだが、ダンジョンで稼ぐ人間によると一番安定して稼げるらしい。

ドロップの売値もそこそこで、モンスターもそこそこの強さ、罠も覚えれば回避がたやすいし、攻略人数もあまり多くない。

初級ほど攻略者に溢れておらず、上級ほどの危機も少ない。そう言われればそうなのかもしれない。

ちなみにこのフクシア岩窟はモンスターが硬いようだ。

ギルド内でたたずむ冒険者一行を見ているも棍や槌、魔法用の杖を持つているものが多い。

受付嬢からダンジョンの説明を受けた後、そのままお金を下ろすことにした。

冒険者ギルドはお金のお預かりサービスをやっている。

ダンジョンに持って行くのが怖い人は預けるのだ。

もしもダンジョン攻略中及び依頼中に死亡が確認されたときは、指定した人間にお金が支払われる。

手数料でいくらかギルドに抜かれるらしいが、割と使う人間が多いらしい。

冒険者ギルドなら引き出しがどこでも利用可能なのはありがたい。私も超上級になったくらいから使い始めた。

基本的に全財産は自分の手で持っておきたいのだが、アイテムの売値が財布の許容量を超えたため預けるようになった。

お預けの他にもいろいろな機能があるようだが、複雑なので私は使っていない。

私は使っていないが、シユウがいろいろと使っている。シユウの台詞を私が代弁し、いろいろと手続きを行っていた。

『ネクタリスでの謝礼金が振り込まれてるはずだよね』

おお、そう言えばそうだな。

ネクタリスを津波から守ったということでも子爵様から謝礼をもらえるという話になった。

ダンジョン攻略のおまけだったので別にいらなかったのだが、もらえるものはもらっておこうということで頂いておいた。

具体的な金額は任せると言っておいたが、どれくらい入ったのか気になる。

受付嬢に残高を聞いてみた。

彼女は口で答えず、わざわざ紙片に書いて差し出してきた。

口でさらっと答えてくれればいいのにめんどくさい。

「えっ……」

思わず声が漏れた。

私が知っている残高は数字が六個だったはず。

片手に一を足したのだ、とか思っていたから間違いない。

それが今はいくつだ？

一、二、……、八、九。きゅ、九！

しかも一番左の数字も九。

もう少しで十桁に届かんとしている。

『なんだ、町一つ守ったのにこんなもんか。ケチだな、あの子爵』

え、えっ？

いやいや待って待って！

待ってください、お頼み申す！

これはおかしい！ おかしいよ。

これ本当に私の預金？

額が大きすぎて数え方もわからないんだけど。

「はい。極限級冒険者メル様の残高でございます」

受付嬢はやや戸惑いながらも答える。

自分で言うのと極限クラスって格好いいけど、人に言われると恥ずかしいな。

そんなことを思った。

それよりどういうことだ。

あの子爵はこんなにくれたのか。

『違う違う。左から三つ目の数字が一になってて、そこより右の数字は以前よりちよっと増えただけでしょ。つまり、あの子爵は百万しかくれない』

十分すぎるじゃないか……って違う！

じゃあ左の金額はなんなんだ！

どうなってるのこれ！

『ええ、今までギルドでいろいろ手続きしたじゃん。あれの結果だよ』

いや、え、そうなの、というかなにしたらこうなるの？

やっぱりチート使ってるの？

『いやあんまり。簡単に言うけどね。国が手放した土地を転がしたり、物の転売、将来性のある人に投資したりしてた。せっかくあちこちを移動してるからね。実際に見たり聞いたりできる利をいかそうと思ってます』

よくわからんけど、そんなことでこうなるの？

『ハハッ、まだまだあゝ。これからもっともつと増えるよー。この口座を増やすことと女性の体をじっくり観察することが、今の俺の数少ない生き甲斐ですよ』

後半の生き甲斐はともかく、この金額はすごい。

すごすぎる。すごすぎて、逆にすごさがわからない。

すごいぞシユウ。むしろ、なんか気持ち悪くなってきた。

気持ち悪いな、シユウ。

『どいっひー』

これだけあるといたい何を買えるんだ。

そこらの商人よりもお金持ちなんじゃないだろうか。

立派な家を建てて、何人で何年暮らせば使い切れるんだろうか。

『そこらの商人なんて話にならないよ。かなりの貴族か豪商でも呼ばないと。家ならそうだね。土地ごと買って、宮殿を建てて、庭を整えて、例のプールを設置して、数十人で暮らしても、十年は余裕じゃないかな。もちろん物価の変動やら税金徴収があるから、そうは限らないだろうけどね』

なんてことだ！

私はいつの間にか超大金持ちになってしまっていたというのか。それで、お前はいつたいこの大金で何をかうつもりなんだ？

『さつきも言ったじゃん……。増やすのが楽しいんだよね。まあ、使えんならやっぱハーレム作りたい。ハーレム——其れまさしく男の夢よ』

シユウは誇らしげに語る。聞かなきや良かった。

まあ、お金はたくさんあっても困るものじゃない。

それに本人も楽しそうだから夢くらい見させてやろう。

お金も必要な分を下ろし、夜飯を食べるため受付を離れる。

ギルドには併設された飯屋兼酒屋があるため、そこで食べることにする。

これまた経験で言うところだとギルドに併設された飯屋はうまいし安い。

実際にダンジョン、あるいは依頼から帰ってきた冒険者が集まっている。

一人でいるとちよつと浮くが、そこはいまさらなので気にしない。

『あらら？ 変わったお客さんだ』

四人がけの席に一人で腰掛け、酒を飲んでみるとシユウが口を開いた。

周囲もなにやら騒がしくなり、私も入り口に目を移す。

そこには淡紅色の髪をふわふわ揺らす女性と大勢の子供たちが立っていた。

女性がギルドの受付と飯屋の酒場に行き、二言三言で話をする入り口を見返し頷く。

同時に子供たちがぞろぞろと歩き出し、飯屋の奥に設置された

ちよつと高めにの壇上とそのすぐ前に並ぶ。

「この場をお借りして、育成館の児童による演舞を披露させて頂きます。どうか皆さま、彼らにささやかなお恵みを」

女性が頭を下げると壇上の子供たちも倣って下げる。

なに？ なになに？

なにが始まるの？

『育成館ってのが孤児院、今だと児童養護施設か。どっちでもいいや。その施設のガキたちなんだろうね。彼らが踊りか歌か、何かを披露するのでお金を恵んでくださいってこと』

なるほど。

そういった施設は何度か見てきた。

しかし、ギルドにまで来たのを見るのは初めてだ。

周囲の冒険者たちも都合をわかっているのか指笛を鳴らして場を盛り上げている。

私は壇から席も離れていることと、ノリについていけないこともあつてぼんやり見るにとどめる。

「ありがとうございます。それでは始めさせて頂きます」

女性が子供たちに合図を送ると、前列の中央にいた子供が足を動かす。

少年の足の動きに合わせ、小気味よい音が鳴り始める。

徐々に他の子達も踊り始め、場が盛り上がる。

ほー、これはなかなか……。

『わあ……、タップダンスだ。靴のつま先と踵にコインをつけてる』
言われて靴を見ると、確かにつま先と踵の裏にコインが貼り付けられていた。

上半身をあまり動かさず、下半身を滑るように動かしていく。

けっこう簡単そうだな。

『——って思うじゃん。すごーい難しいんだよ。年齢を考えると十分すぎる。すごいなあ、ただだけ練習したんだろう。でも、この曲はどっかで……』

そうなのか。

シユウは感嘆の声を漏らす。

こいつが良い意味で驚くのは、けっこう珍しかったりする。

周囲の酔っぱらいたちも一緒に騒ぎ始め、音はよく聞き取れない。それでも、様子を見るに一生懸命踊っていることは見て取れる。

「こっ、良いですか？」

子供を引率していた女性がいつの間にか近寄り、私の前の席を指さす。

『座って良いかって聞いてるんだよ』

わかってるよ。

さすがの私でもそれくらいはわかる。

軽く頷いて見せると、女性は静かに腰を下ろした。

『メル姐さん、やばい』

どうした？

何がやばいんだ？

『この子、すごい淫乱力だ！ 淫乱力が五十三万を超えただと……』

クツ、スカウターの故障か!？」

まあ始まったよ。

まともに取り合わなきやよかった。

『なに言ってるの！ よく見て！ いかにもなピンク髪、おっとりとした垂れ目、油断を誘う泣きぼくろ、感情を誤魔化すアルカイックスマイル。それに服で隠してるけど、かなりの巨乳とみた。これが淫乱じゃなくて何だって言うの!』

まず声を荒げる理由がわからん。

次に、なんで淫乱なのがさっぱりわからん。

目の前の女性は「何か？」と首を傾げている。

聞こえていないとはいえ、あまりにも失礼な物言いだっただけでマスターにコップを頼み酒を勧める。

いや、子供の引率者に酒はまずいだらうか。

「ふっ、っ心配なく。あらあら、ずいぶんと良い物を飲んでますね」

女性は口元で軽く笑って、コップに酒を注ぐ。

お金も下ろしたので、店で一番高い酒を注文していた。

高いのも安いのも味はたいして変わらないと思うが、高い方がなんとなく気分がいい。

彼女は水のように酒を飲んでいく。

あまりにも良い飲みっぷりだったため、私もついもう一本注文してしまった。

黒のゆったりとした服を着ていたため、けっこうな歳だと思っていたがよくよく見ると意外に若い。

意外どころか相当若い。私と同じくらいではなからうか。

『酒を飲むとはなんとという淫乱！ しかもザル！ くう、まったくもってけしからん！』

嬉しそうに叫んでるところ悪いんだけどさ。

どこがそんなに淫乱なの？

『まず、ピンクは淫乱。ここまではいいいよね』

よくねえよ！

なんだよ、それ？！

『はあ？ なに言ってるの?! ピンクが淫乱なのは宇宙の摂理でしょ！』

まるで私が間違っているかのような物言いだ。

ピンクって髪の色のことだろ。

なんで髪がピンクってだけで淫乱になるんだ？

『ピンクの髪してる奴は淫乱なんだよ！ 例外は——ない！』

こいつ……、言い切ったぞ。

第一なんでピンクなんだ。他の色でもいいだろ。

たとえば、赤とかさ。

『赤は一直線って相場が決まってる。思い始めるとどこまでも真っ直ぐなんだ。アラクタルのシスコンを忘れたの？』

そう言えばそうだった。

あの変態は妹一直線だった気がする。

じゃあ、青は？

『青は素直クール。静かだけど想いは深い。同じくアラクタルのアンフィニ、人形がいたでしょ。静かでマスター一筋だったよね』

お、おお。なんと。

たしかにそのとおりだ。

地下で千年近くも主に仕えていたな。

でも、あれ人形じゃん。

……黄色は？

『黄色はムードメーカー。ちよつとバカで空気を読まないけど、ここぞというときにちやつかり活躍。エルフのアイラただね、覚えてる？』

………いた気がする。

家を追い出されてたのにはしゃいでた金髪がいた。

ちなみに緑とかは？

『危険。警戒ヲ嚴ニセヨ』

なんか、明らかに他のと違つてない？

『いやいや妥当だよ。緑は本当に危険。いきなり監禁してくるし、交差点の信号待ちで背中押してきたりする。とにかく行動が読めない。いったいいくらの人間が緑にトラウマを植え付けられたか。俺も緑と接するときは細心の注意を持って当たると決めてる』

こいつが細心の注意つてのは相当なことだ。

緑はそんなに恐ろしいのか。

で、ピンクは？

『淫乱』

あ、そう。

もうそれでいいんじゃないかな。

なんか当たらずといえども遠からずではないかと思えてきた。

『ほら見てよ！ 頬を薄く染めてイヤラシい。ほんどけしからん。しかも、腕組みしてバストアップさせてきてる。これは淫乱待ったなしですわ！』

ゴクリと唾を飲む音が聞こえた。

今のどうやったの？

……いまさらか。

鼻歌も上手いからな。

唾を飲むくらいやってくるだろう。

まあ、いいんじゃないか。

お前がそう思うんならそうなんだろう。

舞台上に目を移すと踊りは控えめになり、歌がメインになっていた。しかし、酔っ払いと一緒に歌っているのは教育上よろしくないんじゃないだろうか。

「そうなんですよね」

おろ、口に出てたか。

ひたすら飲んでいた女性が話し始める。

「本当はこんなことやらせるべきではないんです」

気がつけばもう一本空けている。

恐ろしいペースだ。大丈夫なんだろうか。

心配はしつつもおもしろそうなのでさらにもう一本注文する。

「コキユ。酔わないからって飲み過ぎんなよ」

マスターが酒瓶を持ってくるついでに女性を叱る。

どうやら目の前の彼女はコキユというらしい。

変わった名前だ。

『ほら、もう名前からして淫乱じゃん！』

こいつもなに言ってるんだか。

どうしても彼女を淫乱に仕立て上げたいようだ。

「一年前は助成金が出ていたんですが、領主様が変わったのを機に減額されました」

いきなり語り出した。

彼女はなみなみ注がれた酒を一気に呷る。

語り出すのはよくあるパターンなので話半分に聞こう。

途中からはシユウに任せておけば万事問題ない。

「もともと運営はギリギリでしたので、ほとんど困っていたんです」
そりやまあそうだよな。

借金がどんどん増えていくだろう。

「いよいよ首も回らなくなってきたそんなある日、夢の中で神が舞い

降りたんです」

ん？

なんか変な方向になってないか。

あんた、えつと、コキユの夢の中に神が出てきた？

「ええ、そして、神は言われました。ここで朽ちる運命ではないと……」

『タイトルデモまで戻されそうだ』

『では、いったいどうすれば？』と私は尋ねました」

ほうほう。

ちよつと頭がおかしいけどおもしろい。

それで神はなんと？

「たった一言——踊るのだと」

『なるほど』

え、えええー！

今のどこに納得する要素があったよ。

「神の踊りを真似て子供たちとやってみたところ、大きな反響を頂き今ではこのようになんとか生計を立てつつあります」

たしかにすごい！

すごいとは思うよ！

でも、目の前にお金を入れる缶を置かれてそんなこと言われても釈然としない。

しかも、にこにこ笑って缶を徐々に私のほうに近づけてくるし。

『とか言って、どうせ入れるんでしょ。メル姐さん、押しに弱いからなあ』

そこまで言われると入れたくなくなる。

「彼らの健やかな成長のために——」

あんたが飲んだ酒代を子供にやればよかった。

「ふふっ、お酒は神への供物です。勘定には入りません。曲はまだ続きます。もう一本頼まれても大丈夫ですよ」

それはあんたが飲みたいだけだろ。

——と言ってやりたい気持ちを酒とともに飲み込み、パンパンに

なった財布から適当に硬貨を掴み、そのまま缶に入れた。

ジャラジャラと景気のいい音が響く。

「あらあらまあまあ、豪勢ですね。貴方にも神の導きがあらんことを」
神の導きとやらはもう間に合ってる。

そう言つて、シユウをコキユの前に掲げる。

チートだけでいいのに、変な人格も付いてきてしまったんだがな。

『てへへろ』

くたばれ。

まったくやつてられんな。

おい、マスター。同じのをもう一本追加だ。

結局、コキユが一人でほぼ全て飲んだ。

それでも歩調を一切乱さずに子供を引率して帰っていった。

『なんとという淫乱力』

それはもういい。

『どうでもいいけど、淫乱シスターの指見た？』

淫乱シスターって……。

見えないけど、どうせ淫乱な指をしてたとか言うんだろ。

『パーティーリングつけてたよ』

なんだマジメな話か。

それは気付かなかったな。

『あと、あの修道服みたいな上下続きでスリットが入ってたエロい服
だけだよ』

はいはい、どうせ太ももが魅力的って言いたいんでしょ。

『そうそうギリギリ見えないところがまた淫乱なんだよね。で、それ
もそうなんだけどさ。鎖かなんかを内側に縫い込んだ。ありや戦
闘服も兼ねてるよ。相当重いはず、足音が異常だったもん』

つまり、どういふことだ？

『神のみぞ知るってところかな』

訳わからん。

こうしてハナツメの町での一日目が終了した。

翌日、中級ダンジョン——フクシア岩窟にやってきた。
特別な準備は何もしていない。

一通り回っても半日あれば終わるだろう。
硬いだけでは意味がない。

ゴーレムも鎧を着込んだスケルトンも一撃だ。

ドロップアイテムを回収してサクサク進んでいく。

少し進んだところで他の冒険者とモンスターの戦闘音が聞こえた。
あまり会いたくないが、道順で通る必要があるため仕方なく進んでいく。

『あつ、淫乱シスターだ』

通路の奥を伺うとシユウの言うとおりコキユがいた。

昨日と同じ服で、頭には同じく黒色のゆつたりとした頭巾を被っている。

『首元からちらりとはみ出すピンクの髪がまたそそりますなあ』

はいはい。

コキユはまだこちらに気付く様子はなく、側にいたスケルトンを潰している。

潰していると言ったが、文字通り潰している。

先っぽにトゲトゲのついた棍棒でモンスターを叩きつけている。

よく見かける武器だが名前が出てこない。

『モーニングスターだね。しかもなんかデカい。デカくて太いうえにいぼいぼとか淫乱すぎでしょ。歩く十八禁として閲覧制限されちゃうよ』

それだ。モーニングスターだ。後半は知ったことじゃない。

しかし、「てやあ」とか「えいつ」といったかけ声と、モンスターの頭部の潰れ方がミスマツチだ。

しかも相手が動けなくなるまで徹底的に潰している。

『撲殺シスターだね。びびるびびるぴー、とか唱えそうで怖い』

よくわからないけど怖いことには同意だ。

表情一つ変えずに滅多打ちしてるぞ。

いちおう挨拶だけして先に進むか。

おう、昨日ぶりだな。

「あらまあ、メルさん」

じゃあ私は奥に進むんで、お先に失礼。

「お待ちください」

いや、でもほら私がいると邪魔になりそうだからさ。

「実は昨日。夢に神が再降臨されたのです」

そりゃ、あんなだけ飲めば神も見る。

あまり無茶をするなよ。

「神は言われました。我が使いをダンジョンへ送る。共に往くのだ――と」

とても嘘っぽいんだが。

「私が嘘をつくわけじゃないではないですか」

さも、当然の顔で言う。

本当に真顔なので判別に困る。

おい、シユウ。

なんとかならないか。

この女とはなぜかパーティーを組みたくない。

お前と似た気持ち悪さを感じる。

『失礼だな。……まあ、諦めなよ。俺じゃ無理だ。淫乱ヴィツチは童貞の天敵なんだ。二代目プロ童帝である俺も例外ではない。食べられちゃうからね。むしろ食べられたい！パーティーを組むことを強いられているんだ！』

ため息を一つ。

まあ、どうせ半日程度の我慢だ。

とりあえず一緒に回るだけなら問題ないか。

そんなこんなでパーティーを組んで進むことになった。

中盤を越えたあたりだろうか。

『シスターはなんでそんなに力が強いのか』

「生まれつきなんですよ」

コキユはシユウと会話をしている。

シユウが話しだしても、「あらあら、こんにちは」と普通に対応していた。

私はこの世界の普通に問いを投げたい。剣が喋ればもつと驚くものじゃないのか。

「両親も気味が悪かったんでしよう。施設の前に私を置いて行ってしまいました」

そういうことさりと話すのやめてくれない。反応に困るんだけど。

「いえいえ。物心つく前なので顔どころか声すら覚えていません。私の最初の記憶はすでに施設の皆と遊んでいるところから始まります。育成館にはよくよくお世話になったので、私も同じ境遇の子たちをしつぽり育てていきたいと思ひまして」

『……しつぽり?』

……しつぽり?」

シユウと被ってしまった。

「ふふ、しつかりの間違いでした」

コキユは口元に軽い笑みを携えて訂正する。

『ね!・メル姐さん、ね!』

淫乱でしょ!・と言いたいんだろう。

だが、それくらいの言い間違いはいくらでもある。

事前にピンクは淫乱だという刷り込みがあるからそう見えるだけだろう。

「けっこう慣れているようだが、ダンジョンにはよく潜るのか?」

露骨に話を逸らす。

前の話題を続けるとなにやら危ない方向に行く気がした。

「はい。五年ほど前からたびたび夢に神が降りるようになり、『ダンジョンへ行きなさい』と諭されました。この武器も初めて潜ったときに拾った物です」

怖くなかったのか?

「初めてのときはやはり怖くて、びくんびくんしていました——」
『びくんびくん?』

「何度かやっているうちに慣れてきて、しばらくしてからは楽に行けるようになりましたね」

『犯っている？ イケる？』

いちいちうるさいぞ。

黙って聞いてろよ。

「ここまで潜ったのは久しぶりです。ここ数ヶ月はモンスターも多く、活動がお盛んなので、安全を考慮し入り口付近で行うことが多いのです」

『なんで盛んの前に「お」をつけるの？ それに安全とか入り口付近でするとか淫乱すぎでしょ』

私にはそんな風に聞こえなかったぞ。

お前の頭が淫乱だと思い込んでるからそう聞こえるだけだ。

でも、やつぱり神つてのはただの偶然じゃないか？

「いえいえ。その後も再び神が降臨し、お告げどおり、たまたま通りかかった行商人からこの服を安価で購入できました。硬くてたくましくてとっても具合がいいですよ」

『なんで「たまたま」を強調する上に、「たくましくて」やら「具合」とかつけるんですかねえ』

こいつ、もう駄目なんじゃないかなあ……。

——とまあ、こんな他愛もない話をしているうちに中級をクリアしてしまった。

二本足で立っていた豚みたいなボスも一撃で消え去った。

攻略に当たって特に語ることは何もない。

しよせんは中級だ。

シユウがコキユの発言にいちいち突っかかっていたこと以外に問題はない。

今はギルドに来ている。

コキユも一緒だ。アイテムを売却すると話していた。

彼女がダンジョンに潜るのはやはり施設の運営費を稼ぐためらしい。

昔から時間に余裕があるときはダンジョンに潜ってドロップアイテムを取ってくるようだ。

子供の成長を見守ることが彼女にとっての生き甲斐という。

『若いのにちゃんとしてるなあ……。でも、ちゃんとしすぎてるきらいもあるかな。どつかのだれかささんも一欠片くらいは見習って欲しいよ。養ってもらった親を見向きもせず、口にするのは昨日も今日も「ダンジョン！ ダンジョン！」。言動は日々おかしくなってくるし、成長もまるでない。こりやキチ○イですわ』

お前に言われたくない！

お前にだけは言われたくない！

ダンジョン攻略は私にとっての生き甲斐なんだよ！

『淫乱シスターの生き甲斐は子供のためでしょ。メル姐さんもせめて人のために動けるようならないものなんですかねえ……。たとえば、俺とかさあ』

なんで私が他人のために動かにやならんのじゃ。

ましてやお前のためとかあり得ない！

私は私のやりたいことをやりたいようにやって生きていくのだ！

『ここまでクズいと一周回って、崇高に見えてくるから不思議だ。安心したよ』

なぜだか安心されてしまった。

そんなやりとりをしているうちにコキユが戻ってきた。

「お待たせました。それでは参りましょうか」

ボス撃破を記念してコキユが夕飯をごちそうしてくれることになった。

ギルドに併設された飯屋ではなく、施設での食事になるそうだ。

飲み物くらいは、と私は昨日の酒を買えるだけ買っておく。

「ふふふ、おいしそう……」

彼女は私の持った酒瓶を見て唇を軽くなめる。

『獲物を前にして舌舐めずり、一流のヴィッチだな。クソ、ここにきて淫乱力がさらに上昇か！メル姐さん、やはりこの女は危険だ！ここは俺に任せて、先に行け！』

華麗に無視してギルドを出た。

なんとというかぼろぼろだった。

目の前には風に吹かれて飛ばされそうな家屋が一軒。軒先には「育成館」と大きく書かれた看板が杭に打ち付けられている。

看板を支える片方の釘が取れ、斜めに傾いてしまっているがそのままにしてある。

『歴史を感じるね』

周囲の家屋が石造りに対して、一軒だけ木の板を組み立てただけ。大ききこそあれど、それが逆に不安定さを増していた。

「土地だけはあるんですよ」

確かに土地は広い。

先ほど述べた石造りの家屋もかなり遠くに見える。

荒れた前庭には痩せた作物がごろごろとなっている。

「さあ、どうぞ。大丈夫、見た目よりはしっかりとできていますので」
コキユにならない私も育成館の門をくぐる。

近くで見るといっそうぼろい。

壁には穴を塞いだのか薄板があちらこちらに貼り付けられている。「私の歩いたところをたどってくださいね。踏み外すと床が抜けます」

さつき、しっかりとできてるって言わなかったっけ？

私の言葉に聞く耳を持たず彼女はジグザグに廊下を歩いて行く。

やはり床も板で補強されていた。歩きたびに板が軋み、時の流れを教えてくる。

「私は料理の準備に入りますので、ここでお待ちください」
とある幅広の一室で椅子を勧められた。

三本の足に木の板が打ち付けられているだけのものだ。

もちろん背はないし、座っても大丈夫なのか心配になってくる。

他にも複数の椅子や大きな机がある。

ここで子供たちが集まって食事を取るのだろうか。

『じやりどもがこっち見てやがるな』

うん？

横を見れば扉の影から数人の子供が覗かせている。

昨日の夜に踊っていた子供もいるな。

一人がおずおずと入ってくると、他の子供たちも続々と入ってくる。

「お姉ちゃん、冒険者だよな」

「ああ、そうだ」

返事をしているうちに、他の子供も近寄りシユウをつついて遊んでいる。

喋ればたべた触られることがわかっているので、シユウは黙り込んでいます。

遠慮せずにもつと触って良いぞ。

指を斬らないようにな。

男の子たちは喜び、容赦なくシユウをべたべた触っていく。

奴の声なき悲鳴が聞こえてくるようで心地よい。

私の武勇伝を聞かせているうちに料理が運ばれてきた。

予想はしていたが質素な物だ。

それでも子供たちはがつつき器までかじりそうな勢いだ。

食べてからも子供たちは未だ元気に溢れ騒ぎ続ける。

コキュと落ち着いて話ができるようになったのはかなり遅くなつてからだった。

「今日はお疲れ様でした」

そう言つて、コップにお酒を注いで私に渡す。

彼女は黒の戦闘服を脱ぎ、薄手の生地のものに着替えている。

どうやらこちらの方が普段着らしい。

『俺の目に狂いはなかった。やはり巨乳！ それに谷間を見せつけるファッション！俺の想いもパッション！そして、股間はセンサーシヨオン！』

ノリノリだから放つところ。

触っちゃいけない。

私はたいして疲れていない。

お前の方が子供に付きつきりで大変だっただろう。

あと、そっちのコップが私のよりずっと大きい気がするんだが。

なんか取っ手もついててコップと言うよりもジョッキに近いし……。

「いえいえ。同じサイズのコップがありませんでしたので、小ぶりで綺麗な方をお渡ししたのですよ」

さよですか。

しかし、子供の数に対して人手が少ないんじゃないだろうか。

夜なので少ないのかもしれないが、大人は数人ほどこか見えなかった。

それに建物も手狭に思える。

実際にいま私たちがいる食堂には子供たちが入りきらず、隣の部屋を使って二カ所に分けて食べていた。

聞けば一部屋に八人と、かなり詰め込んでいるらしい。

「助成金がなくなつて人を雇えなくなり、今ではこの園の出身者しか残っていません。それに領主様が変わったことでお金の流れや施策も変わり、不況になり当施設に子供を預ける親も増えました」

預けると優しい言い方をしたが、要するに置いていったんだろう。「うちでは奴隷商に売ることはしまいと決めているので、どうにもやり繰りが厳しくなります」

そうか。

たいへんそうだな。

おいシユウ。なんとかできんのか。

お得意のチートがあるだろう。

『一番手っ取り早いのは、領主の首をすげ替えること。ここらの領主つてセルニアにいるアヴァール公でしょ』

「よくぞ存じますね」

よく知ってるな。

どこで覚えたんだ？

『一年前にオネット公が外患罪で処刑されて後釜におさまった人だ

ね。汚い奴だつて、ケチなゼリム子爵がぼやいてた。そのときメル姐さんも一緒にいたはずなんですがねー」

「今でも信じられません。オネット公爵があんなことをされるなんて……。この施設まで直々に足を運び、私たちを激励してくださったというのに」

なんだかい人だったようだ。

それでアヴァールとかいうのが、どうにかなればいいわけか。

子だ、伯だ、公だのと似たようなのが出てきすぎなんだ。

一つにまとめてくれればいいのにまったく。

それで、どうにかできるのか？

公爵とか偉そうな名称がついてても、首を落とせば死ぬんだろ。

『魔王らしくなってきたのは嬉しいけど、あんまり無茶言わないでね。公爵まで来ると王族関係者みたいなもんよ。俺たちみたいな一般人が入る領域じゃない。地位争いやらでどろつどろの関係ですよ』

王族かあ……ちよつときつそうだな。

じゃあ、他になんか案はないの？

『不景気つてことはお金の流れがないつてことなんだよね。なんか大きなプロジェクトでもすればいいんじゃないの』

「どういふことでしょうか？」

そうだそうだ。

もうちよつとわかりやすく言えよ。

『温厚と賞賛を受けるシウさんもちよつとむかつてきましたよ。昨日、ダンスやつて小銭稼いでたでしょ。あれのもつと大きいやつをやれつてこと。ギルドや飯屋のスケールじゃなくて、もつと町全体の産業に関わるくらいはやつ』

うん。

「はい」

『いや、「うん」とか「はい」じゃないんだけど……』

わけわからん。

具体的に何をすればいいのかを言えよ。

私がそんな話を聞いてわかるわけないだろ！

『逆ギレしないでよ……。具体的ねえ。あんまないなー』
考えろ。

お前ならできる。

知恵を搾れ。絞りカスになってもかまわん。

『乳は搾りたいけど、搾られるのはなあ』

冗談言ってる暇があれば考えろ！

『はい！ うーん……。なんかでつかい建物を作るとか？』

作るとどうなるんだ？

『作る過程で大きなお金が動くからね。お金が回るようになる。お金が回れば、みんな笑顔やでえ〜』

うざ。

でも、そんなもんか。

それでいったい何を作るんだ。

『まあ、なんでもいいんじゃない。ダンスを見せるための公演会場でもいいし、新しい児童養護施設の建設でもなんだって好きにすればいいと思うよ』

じゃあ、それでいこう。

ここも古くなってるし、新しい施設でも建てればいいんじゃないか。

「それは素晴らしいです。公演会場ですか。踊る側も見るとも楽しむための場というのはいいですね。セルニアから劇団を呼んで上演してもらうのもいいと思います」

私たちの意見はまとまった。

コキユも楽しそうに話をしている。

『まあ、妄想はタダだから楽しいよね』

なんか嫌な言い方だな。

『えっ？ 本気でおっきな建物作ってみんな笑顔でハッピーなんて夢物語ができると思ってたの？』

シユウは笑い出す。

あまりにも楽しそうに笑うのでむかついてきた。

『そこまで大規模だと初期投資が半端ないよ。どこが出すのさ？ 助成金すら減らしちゃう地方がまさか出してくれる訳ないよね。地元の方は自分たちが生きるのに必死でそんな夢幻に投資するお金なんてない。第一、作ったとしても初期投資が回収できる見込みすらない。そんな幻想に投資するバカなんていないよ』

そう言つて、シユウはまたゲラゲラ笑い始めた。

コキユも何となくわかつていたのか寂しげに微笑む。

やっぱり問題はお金がないということに回帰する。

どこかに莫大なお金でも落ちてないだろうか。

商人、貴族、超大金持ち……………あつ。

「どうしましたか？」

閃いた。

なあ、シユウ。

莫大なお金がいるんだよな？

『そだよお。最低でも数千円。いや、億は必要だろうねえ。でも、そんな大金——あ…………』

どうやらシユウも気付いたようだ。

今回はたいへん珍しく、というよりも初めて私が先に気付いたんじゃないだろうか。

「金はある！」

『まさつ、ちよ、おまつ！』

コキユはあらあらと頬を赤く染めている。

よくわからないが、たぶん興奮しているんだろう。

シユウもはつきりと焦っている。

賢い奴だ。私は何を言うのかわかっているんだろう。

「そして、そんな幻想に投資するバカも知っている！」

「まあまあ、そんなお知り合いが！ いったい誰なんでしょうか?！」

『ちよ、バカ！ アー、クソ！ 大バカ！』

さすがだなあ、シユウ。よくわかつてるじゃないか。

さあ、コキユにもわかるよう言つてやろう。

「——私だ！」

あらあ、とコキユは小さく感嘆の声を上げた。

「メルさんはそんな大金を持っているんですか？」
うむ。

『うむ、じゃないよ！ ちよつと！ なにいつてんのさ、メル姐さん！
あれは俺の金！』
なに言ってるんだ？

お前のものは私のもので、私のものは私のもの。
もちろん私の口座にある金は私の金だ。
以上、証明終了。

『Q. E. D. ……じゃなくて！ あれは俺が貯めてるの！ 増やす
のが俺の生き甲斐なの！』

これからどんどん増えるって言ってただろ。

また、増やせばいいじゃないか。

もう一回増やせるぞ！

『あ、ああ……！』

それにお前の悔しがる様子を見るのは、私の生き甲斐でもある！

『クソオ……、クソオ！』

うーむ。

素晴らしい負の香りだあ。

「シユウさんの貯めていたお金を、メルさんが私たちに投資するとい
うことでしょうか？」

ここにきてようやくコキユが口を開く。

事情がわかっていないと意味がわからないだろう。

「その通りだ」

『その通りだ、じゃねえよ！ 本気で怒るよ！ もう怒ってるよ！

ム力着火ファイヤーだよ！ メル姐さんと口聞かないよ！』

なんか本当に怒ってるのかわからなくなってきた。

口聞かないのは静かでありがたいな。

『ああああアアア！ もう！ とにかくさ！ この前、子爵からも
らったお金でも上げればいいでしょ！ なんで俺のお金をあんな鼻

水垂らしたクソガキ共にやらにやらなんのじゃ！ テメエらの食い扶持くらい、テメエらで踊って稼げばいいんだよ！」

——突如、ビシィツと何かが砕けた音が聞こえた。

「今、なんと？」

コキユの持っていたコップもといジョッキの取っ手が消えていた。

彼女の顔は今までと変わらずスマイルだったが、穏やかな雰囲気はもはやない。

ただならぬ圧力をもってシユウを見下ろす。

「……クソガキ共、とおっしゃいましたか？」

ここにいたはずの彼女はどこか遠くへ行ってしまった。

私の知らない一人の恐怖が動けぬシユウを追い詰める。

『いや、それは言葉の綾——』

「テメエの食い扶持はテメエで稼げ？ ふふっ、踊りたくても踊れない子もいます。体が弱い子も当然います。度重なる虐待で人目に出るだけで謝り続ける子だって。歌うどころか声すらうまく出せない子もいるんですよ」

さらに鋭い音が響き渡る。

机の上にあったコキユのグラスが真つ二つに割れた。

私のコップにも亀裂が入り、隙間から酒が漏れ出てくる。

彼女が手を乗せている机は、ミシミシィと悲鳴を上げている。

『あの、俺はそういった事情を知らないだけでして。決して彼らをおとしめ——』

「踊っている子達も朝早くからずっと練習しています。どうして彼らがあんなにもがんばれるか知っていますか？ 「僕たちは、ほら、元氣だからさ。みんなの分までがんばりたいんだ」と言ってくれているんです。そんな彼らの想いを何も知らず、身動き一つできない貴方が『テメエの食い扶持はテメエで稼げ』——ですか？」

なぜか部屋全体が揺れ始めている。

ここがダンジョンなら出口へ全力で逃げているところだ。

とりあえず怒りの対象はシユウなので成り行きを見守ることにする。

『ご、ごめんなさい！ 俺が間違ってたまひた！ どうか……どうか許してください！』

涙声だった。

マジ泣きしてやがる。

最初に出会ったときでも涙声だけだったシユウが――。

あらゆるピンチでも余裕の面持ち、せいぜい軽く焦る程度のシユウが――。

――負けた。

シユウ、ここに完全敗北を喫する。

号外にして町中にはらまきたい気分だ。

ざまあ。

「謝るだけですか？」

だが、コキユの怒りはまだ収まらない！

シユウは死線を越えてしまったのだ。

謝って済むなら、この世は万事うまくいっている。

うまくいかないのは謝っても済まない問題があることの裏打ちとなる。

謝罪の言葉を紡ぐだけなら、無能な役人だってできる。

大切なのは、相手にどうやってそれを示すかだ！

さあ――どうする。どうするんだ、シユウ！

『こ、子供たちの健やかな成長のために投資を――』

「寄付、ですよね」

『い、いや、その。だってあのお金は……』

「あのお金は？」

見苦しいぞ、シユウ。

お前も言っていただろう。

どうせ投資をしても返ってこない、と。

お前は聡い。わかっているな。

『寄付、させて、頂き、ます』

嗚咽の混じる声でシユウは決断した。

お前は男だ。みつともない男だ。

「よろしい。して——おいくらほど?」

「まだだ。まだ、コキユの追撃は止まらない!

『じゃあ、残高の一割——』

「一割イ!」

『違います! 間違えました! 二割でした!』

「どうやらシユウは混乱している。」

「具体的な金額を言えばよかったのに。」

「計算はできないが一割でもたぶん億だろう。」

「果たして二割で私の心が収まるかどうか……」

『に、二割五分。どうか、どうかお許しをシスター』

「貴方を許す、許さないの問題ではありません。それに私は口ばかりの謝罪なんて望んではないのです。欲しいのは常に、子供たちへの正しい理解です。おわかりでしょうか?」

『……………四割で』

シユウは完全に諦めムードだ。

「ようやくコキユも怒りを静め、元の彼女に戻ってきた。」

「多額の恵与ありがとうございます。子供たちの壮健な長育のため、育成館一同、深謝の意をゆめ忘れることなく、施設の運用及び活用に当てさせて頂きます」

彼女は流れるように謝意を諳んじ、瓶のまま酒をあおった。

コキユの怒りはすでに落ち着き、私と酒を飲みながら談笑をしている。

シユウは机の下でめそめそと泣き、ときどき嗚咽が聞こえてくる。

『俺の生き甲斐があ……………』

「また聞こえてきた。」

「やれやれいつまでしよぼくれてるんだか。」

「もう一つの生き甲斐でもしてろよ。」

「ほーら、目の前に女の子がいるぞ。」

「じっくり観察しろ。」

『ひいっ』

シユウを机の上に乗せると、みつともない悲鳴をこぼす。
どうやらコキユがまだ怖いらしい。

「ふふふうく、食べちゃいますよ〜」

コキユが冗談交じりにおどす。

さすがに彼女も酔ってきているようだ。

机の上には空になった酒瓶が何本も屹立している。

『俺の心はぼろぼろだよ。これは胸に挟んでばふばふしてもらわないと癒えないな』

なんだ冗談をいう元気が残っているじゃないか。

「いいですよ。して差し上げましょうか?」

『わぁいいの。うれしいなあ〜』

冗談にのるとつげ上がるからやめてくれ。

「でも、タダではできませんね〜」

『ばふばふしてくれるなら、おじちゃん寄付金五割までアップしちゃうぞ〜』

「ふふつ、いいでしょう。約束ですよ」

彼女はそう言って、シユウに手をかける。

『おろ』

片方の手で服の胸元を引っ張る。

そして、できた隙間にそのままシユウをすつぽり入れた。

『ふあっ! へっ! えっ! みゃ! ふい!』

胸の谷間で挟み込むと、シユウから手を離し、胸を両手で揺らす。

『ばふばふですよ〜』

『※◎//☆? ■@&!』

さすがの私も絶句した。

シユウはもはや何を言ってるのか聞き取れない。

そもそも私にはばふばふの意味すらわかっていなかった。

私はまだ、子供だったのだ――。

「はい、おしまいです。じゃあ、五割お願いしますね〜」

再度、机の上に置かれたシユウは完全にかたまっている。

おい大丈夫か? 生きてるか? 呼吸してるか? してないか。

『夢を、見ていました……。なにやら柔らかく温かい夢でした。πはぶるんと揺れたよ』

いや、夢じゃない。それ現実だったよ。
そりゃ揺れるよ。大きいんだもん。

コキユは新しく持つてきていたジヨツキに酒を注いでいく。
彼女にとつて先ほどのことはさほどたいしたことでもないようだ。
「親離れできていない子もいます。これくらいはなんともありませんよ」

さすがシスターは格が違った。

思わず感服してしまう。

『おねシヨタとかうらやましすぎんだろ。訴訟ものだよ!』

シユウはようやく現実に戻ってきたようだ。

よくわからんことをきちんと話している。

『あの、シスターコキユ……』

シユウがおずおずと名前を口にする。

コキユは何でしょうかと首をわずかに傾ける。

『えっと、あの、そのですね……』

はつきりしない口調でもじもじしている。

気持ち悪いな。

「うふふつ、もう一度ですか?」

『はっ、はいっ』

「あらあら、まあまあ。おませさんですねえ。私は安くないですよ」

『六、いや、七割でもいいのでお願いしますっ』

あまりにも必死すぎて私はひいた。

しかし、コキユは落ち着いたものだ。

わかりました、と言うと先ほどと同様にシユウを手を持つ。

『ふあ』

小さい悲鳴を上げ、同じように谷間に挟まれる。

『ふわわつ、やーらかい。やーらかいよお。あったかいなりい』

今度はきちんとクソみたいな感情をさらけだしている。

だが、楽しいときというものあつという間に過ぎていく。

「はい、おしまい」

『あつ………』

コキユは容赦なく終了を告げ、シユウは名残惜しそうな声を残す。彼女はシユウを谷間から抜き取る直前で手を止めた。

「満足でしたか？」

さながら耳元で囁くように、彼女はシユウに息を吹きかける。

『ふやあ、あのシスター。も、もう一度だけばふばふをば………』

「ばふばふだけでいいんですかあ」

彼女は挑発的に頬をシユウにつける。

『えっ、あのそれってどうい——ふあ!』

ねばっこい糸をひいた妖艶な舌がシユウを這う。

「それ以上、試してみたくないですか？」

『そ、そそそれ、それ以上……。た、試してみたいですう!』

「そうですかあ。ふふっ、九割五分になりますけど大丈夫です?」

『はひい、自分は、だ、だい、大丈夫でありますっ!』

「まあまあまあ……。良い返事です」

——それでは。

そう言って彼女はシユウを再び下ろしていく。

そのまま胸を通過させ、さらに降下。

『えっ、えっ』

ついに服の裾を越える。

片手でボトムを引っ張り、その中へシユウを入れていく。

シユウはもはや何も言わない。

いったい奴が何を見て、何を思っているのか。

それは私に知るよしもない。

知りたくもない。

「えいっ」

かけ声とともにコキユは股を閉じた。

『――!』

声なき絶叫がこだまする。

今このときをもって二代目プロ童帝は事切れた。

初めてシユウとの関係を外側から見ることができたように思える。剣と喋り戯れる人間が外からどう見られるのかということだ。相当危ない人種だった。以後、気をつけよう。ありがたいシスターコキユ。

翌日になって、シユウはようやく言葉が話せるようになった。ギルドでコキユの口座にお金を振り込む手続きが終わったところである。

「はい。たしかに入金を確認しました。このまま营造の指定依頼を出すと思います」

『うん。それがいいよ。僕も子供たちにはよりよい環境でのびのびと育って欲しいと思っていたからね。先ほど教えた建築業者がお勧めだ。誠実で仕事も速く、懇切丁寧。ネクタリスに特殊電報を送っておいたから、二十日もすれば来てくれると思う。施設については彼に一任して間違いないよ』

シユウは昨日とまるで異なる意見を展開している。

一人称は俺から僕に変わり、口調も穏やかだ。

これはこれで気持ち悪い。

『それじゃあ、シスターコキユ。困ったらいつでもご連絡を』

「あらあら、ありがとうございます。メルさんも、また遊びに来てください」

おう、またな。

こんな感じの軽いノリでそのままハナツメの町を発った。

『さあ、行こうかメル姐さん』

口調が爽やかですこぶる気持ち悪いが、すぐ元に戻るだろう。

今回、私はこの町で一つの摂理を学んだ。

シユウの言っていたあの言葉はきつと正しい。

そう、すなわち――

ピンクは淫乱。

蛇足06話 「復讐するは彼にあり」

公都セルニアに到着して三日が経った。

未だ目的の上級ダンジョン——ウエルミス監獄に挑戦できずいる。ウエルミス監獄が冒険者ギルドの管轄にないためだ。

一年前ほどに管理がギルドからセルニアに移ったらしい。

そのため、セルニア公都の関係者以外立ち入り禁止である。

監獄という名のとおり罪人を押し込めておく場として使われていると聞く。

ぼろ衣と錆びた剣、灯りに食料少々を持たされての投獄らしい。

入り口も閉じるため、実質は死刑と変わらない。

管理権限がギルドにないダンジョンというのはかなり珍しい。

そんな訳でかどうかは知らないが、冒険者の間でもたびたび噂が聞こえてくる。

ネクタリスでも、土木作業に勤しんでいると近くにいた奴らがぺちやくちや話しているのを聞いた。

だいたい一人でいるから、他人の会話がよく耳に入るのだ。

話を聞いた瞬間、私は強い想いに駆られた。

絶対に挑まなくてはならない——と。

『なんか自虐が聞こえた気がした……』

思い立ったら即行動。

シユウに聞けば、『子爵に推薦状をしたためてもらえ』と話す。

ぼんやりお茶を飲んでいたところに押し入って、速やかに一筆書いて頂いた。

念のため、ネクタリスのギルド支配人の推薦状も手に入れている。

セルニアの冒険者ギルドの支配人からも推薦状をもらった。

一昨日、セルニア側に書状諸々を提出した。

二日ほどセルニアの都をぶらついていた。

先ほどようやく宿に迎えが来て、ものものしい建物に連れて行かれた。

その一室に案内され、お偉いさんの前に立っている。

「極限冒険者メル。ウエルミス監獄の入場を許可する」

整った髭を弄りながら初老の男は告げた。

「どうやら許可はあっさり下りたようだ。」

「明日の朝、鐘二つ頃に宿の前で待て。こちらの用意した馬車で送ることになる」

明日か。

今からでもよかつたんだが、さすがに無理か。

「諸注意をあげる。まず第一点。携行は武具一式。それに袋一つとその内容品まで許可する」

おっと、思ったよりも譲歩してもらえている。

最悪、剣一本の持ち込みしか不可かと思っていたがかなり緩い。

やはり塩の効果だろうか……。

セルニア側にはネクタリスで手に入れた塩も贈っておいた。

アヴァール公爵が食通で、ネクタリスの天日塩を好んでいると噂で聞いたためだ。

近頃は海が荒れていたせい、塩は金を払っても手に入りづらくなっており良い献上品になる。

推薦状だけじゃ甘いかもと、シユウの助言を受けて手に入れておいた。

塩を手に入れるのは大変だった。

本当に数が少なく、どこへ行っても売ってない。

馬鹿はソルトアウトだか言って笑っていたが、なにがおもしろいのかよくわからない。

もう諦めようかと思ったとき。たまたま声をかけてきた商人に、「塩があるか」と尋ねたところ持っていたため売ってもらった。

ちなみに全部はもつたいないので半分は手元に残している。

味付けに便利なのだ。

「二点目。監獄への入場を確認次第、入り口を閉鎖する。正確には後戻りを禁ずる」

これは仕方ない。

いちおう監獄だ。囚人が出たらいかんだろうしな。入り口を塞がれても、ボスを倒して出口から抜ければ良いだけの話だ。

「三点目。監獄内で囚人との不用意な接触を禁ずる」
生きていればの話だが、と男は付け加えた。

「最後に監獄内での怪我や死亡の責任は全て極限級冒険者メルにあるとする。よろしいか？」

ダンジョンに入る以上、怪我や死なんて覚悟の上。
緊張感のないダンジョン攻略ほどつまらないものはない。

命の危険はなくとも、常に何かを発見しようと周囲に気を張る必要がある。

——故に、私はこう答えるしかない。

「当たり前だ」

こうしてウエルミス監獄の挑戦が確定した。

『気を張るのは主に俺なんですが、そこんところどうなんでしょう？』
私も十分すぎるほど気を張ってるよ。

お前が私よりほんのちよつと先に気付くだけだよ。

『まあ、いいだろう。そういうことにしておいてやろうか』
何様だあ、こいつはよお……。

あとで臭そうなおっさんに刀身を擦りつけてやる。

建物から出たところで、馬車からおりる豚親父を見つけた。

額からにじみ出る汗、豪華な服でも隠しきれないお腹、荒ぶる呼吸。
よく脂がのっている。渡りに船とはまさにこのことだ。

さっそくべったりとくっつけてやる。

『待った！ やめてっ！ マジ〇チ！ あまりにも非人道的な行いだ！
こんなことが許されて良いものなのか!?!』

今さら命乞いをして遅い。

すでに私の足はあの豚に向かってている。

それにお前は人じゃあないから全然問題ない。

『いやあ！ ちよつ！ ——左に飛んでっ！』

必死な叫び声が、真剣なものに変わった。

必死と真剣で似たような響きだが、わずかに異なる。

シユウ自身の危機ではなく、私に危険が迫ったときの声であった。左に飛べということは右に何かがあるということだ。

ついつい右にちらりと目を移す。

——人が立っていた。

しかも、そいつは手に鈍く光る得物を振り上げている。

とつさに動けず、振り下ろされた得物をシユウで受け止める。

人間相手とあつて、さほど重みはない。

軽く弾くことができた。

『おお、ナイスパライ。さすがの生存本能だ。まあ、これくらいなら当たっても大丈夫だったね』

たしかに今の私なら、人間の攻撃程度では軽傷で済むだろう。

それでもやはり刃物を見れば危険を感じてしまうものだ。

『問題はこのあとだよね……』

相手の人間——無精髭をたずさえた男は素早く距離を取った。

豚男の前に立ちふさがり、斧を構える。

「なにごとだー！」

「くせ者だー！」

『臭い！』

周囲から多くの兵士が集まってくる。

どさくさにまぎれてなに言ってるんだ、テメエは。

「閣下をお守りしろー！」

やばい、やばいぞ……！

なんかお偉いさんだったみたいだ。

ど、どどど、どうしよつか？

皆殺しにするべきか？

『まだまだ、まだ魔王になる時間じゃない。最悪、逃げりゃいいんだからさ。とりあえず片膝着いて、顔も伏せて。そんでもって俺に続いて復唱、できるだけ大きな声でね』

お、おう。

言われたとおり膝を着き、顔を伏せる。

『閣下！ この度はウエルミス監獄の入場許可！ まことにありがとうございます！』

シユウの台詞を大声で復唱する。

大きな声で言ったためか、周囲の兵士もひるみ足が止まる。

『是非とも御礼申し上げたいと思っていたところ——まさに閣下を視界に捉え、逸る気持ちを抑えることもできず足が動いてしまいました』

またしても復唱。

「お？ お、おお……。まさか、お主、例の冒険者か？ たしかメルとかいう」

わずかな間のあとに下卑た声が漏れる。

一瞬、シユウかと思ってしまった。

『ハッ！ メルでございます！ 閣下に名を覚えてもらえているとは光栄の至り！』

こんな大声でしゃべり続けたのは初めてかもしれない。

喉が痛くなってきた。

「おお！ おおお！ お主の持ってきた天日塩は良かった！ 久方ぶりに舌を鳴らすことができたぞ！」

大絶賛である。

どうやらあの塩を送っておいて正解だったようだ。

『おお！ それは私にとっても重畳。……実はまだ幾らか手持ちがあります。この度の騒ぎの贖いとして納めて頂けないでしょうか？』

提案に対する返答はすぐだった。

「なに?! まだ塩があると言うのか！ よいぞ！ 出すが良い！」

『ほら、メル姐さん。塩出して。これは復唱しないでよ』

開きかけた口を閉じ、手を腰の中着に伸ばして、中から塩の入った小袋を取り出す。

わずかな重みを手のひらにのせ、そのまま豚男に差し出した。

すぐに、近くの間人が小袋を取り、豚男に運ぶ。

「おお！ なんと……。まだこんなにも！ 素晴らしいぞ！」

鼻息も荒くして豚男は歓喜の声を上げる。
もつたいないとは思いつつも、これで事態が解決できるなら安いものだ。

「何をしている?!」

突如、豚男は怒鳴り散らす。

な、なに? またなんかやってしまったか!?

「彼女は余の——アヴァールの客人なのだぞ! 貴様らはいつまで切っ先を向けているのだ!」

周囲の兵士が慌てて武器を引いていくのが横目に見えた。

アヴァール、さすがの私も覚えている。

この地方を治める公爵だ。

「メルと言ったな。楽にするがいい。其方は余の客人だ」

わあ、客人だつてよ。

豚男に客人扱いされても嬉しくない。

でも、公爵だからいいのか……。

「おい、ブロー! 余の声が聞こえなかったのか! いつまでそれを構えておるのだ!」

兵士たちの中で斧をまだ構えている男がいた。

無表情な彼はブローというらしい。

一番最初に私を襲った奴だ。

『その言い方だと、メル姐さんが無実みたいに聞こえる。ブローさんかわいそう。とんだとぼっちりだ』

細げえことはいいんだよ。

でも、ブローがかわいそうなのは同意する。

彼は何も言わず、ゆっくりと斧を下ろす。

下ろした後も何も言わず、公爵の方を見ることすらしなかった。

「なんだその態度は! この殺人鬼め! そんなに人が殺したかったのか貴様は!」

殺人鬼?

「こいつは処刑隊の長でな。人殺しが趣味なのだ。腕だけは——」
「閣下! これはいったいどうされましたか?!」

建物の入り口から口ひげを蓄えた男が走ってくる。

先ほど、私にウエルミス監獄の入場許可を告げたお偉いさんだった。

「トライゾン！ 今になって出てくるとはこういうことだ！」

豚が頬に付けた脂肪を揺らして激怒する。

口ひげを生やしたトライゾンなる人物は落ち着いている。

「まさか閣下がここに来られるとは思ってもみませんでしたので……」

「言い訳はいい！ ブローも貴様も有能だからこそ、今でも使つてやっているのだ！ わかっているのか?!」

今でもつてどういうこと……でしようか？

「こやつらは一年前にオネットを裏切つたのだ！」

オネットも聞いた名だ。

一年前まで公爵をしていたという。

なんか悪いことをして、処刑されたとか。

裏切つたということはこの二人はそのオネットに仕えていたということだろう。

「オネットト亡き後も貴様らを使っているのは、余の寛大な処置だということを忘れるな！ おお！ 貴様らの顔を見たら、気分が悪くなつた。余は帰るぞ！」

豚男はそう言うのと馬車に乗り込み、そのまま行ってしまった。

『置いて行かれる客人ってどうなのよ』

ブローも馬車が消え去ると、何も言わずに歩き去つた。

「よくわかりませんが、申し訳ありません」

トライゾンと呼ばれていた髭男が軽く頭を下げる。

そりやよくわからないだろう。

いや、気にしないでくれ。

こつちも面倒ごとが去つてくれてよかつた。

「そうですか」

そうなんです。

こんな感じで私は宿に戻ることにした。

宿への帰り道、人通りの少ない道を歩いていたらところ呼び止められた。

振り返るとそこには無愛想な仮面をつけた男が一人。

服もぶかぶかのものを着ている。

男と判断したのは声が太かったからだ。

「メル殿。どうか依頼を受けて頂きたい」

またか……。

実はセルニアについてからすでに何回か依頼が来ている。

これで何回目だろうか。

『五回目だね』

そうだ。

あんたらもしつこいな。

五回も訪ねてくるなんて。

「いえ。これで四回目です」

おいコラ。

四回目じゃねえか。

なに平然と嘘いつてんだ。

『はて……？』

「それで依頼なのですが——」

ウエルミス監獄である人物が生きていれば、助け出して頂きたい—

—か？

「そのとおりです」

仮面の男は首を縦に振り肯定する。

さすがの私でも同じ内容を四度も聞かされ覚えてしまった。

しかも、最初の依頼は「ある人物いるので連れ出して欲しい」と生きていることが確定だったのに対し、次は「生きていれば」

さらにその次は「きっと生きている」、「おそらく生きている」と徐々に自信がなくなってきたている。

『やっぱり五回じゃん……』

昨日まではそもそもウエルミス監獄に入れるかどうかもわからな

いので断っていた。

今は入れることがわかったが、依頼を受けるのは問題がある。

監獄内での不用意な接触は避けるよう言われている。

『おお……、覚えてたんだ。ほんとダンジョンに関しては記憶力が人並みになるね!』

まあな。

そんな訳で依頼を受けることはできない。

「いえ、お待ちください。その件なら大丈夫です」

『まあ、そうだろうね』

ん？ そうなのか？

「ええ。そもそもセルニア側は監獄内を把握している訳ではありません。メル殿が誰かと接触しても外部からはわかりません。それ出口に警備を配置していませんから、誰かと出たとしてもやはりセルニア側が確認することはできないのです」

ふうん、そうなのか。

ダンジョンの出口側には人がいないのか。

「メル殿。上級ダンジョンのボスは、剣だけで倒せるほど甘いものではないのか？」

それもそうか。倒せるはずがない。

パーティーリングもないならソロで挑むことになる。

ボスが何かは知らないが、ぼろい剣だけで勝つことできないだろう。

たとえ卑怯な手段でも使わない限りは……。

「左様でございます。パーティーリングも三つほど用意しております。どうか依頼を受けてもらえないでしょうか？」

うーん……。

どうしようかな。

シユウを小突いてみる。

『監獄に入るに当たったの諸注意にさ。攻略したあと、どうしろって言われてないよね』

制覇したあと？

いきなり何を言い出すんだ、こいつは。

『おかしくない？ いちおう監獄だよ。出てくる可能性のある囚人がどうのとか、制覇した場合のドロップアイテムについての取り扱いが話に出てこなかった』

「そういやそうだったな。」

「で、それが何だというんだ？」

『クリアできると思われてないんだよ』

「ほう、私では攻略できないと思われている訳か。」

『もう少し言うなら——』

「仰るとおりです。セルニア側はメル殿ではクリアできないと思っています。しかし、メル殿は極限級冒険者。十二分に攻略は可能だと考えております」

「いやあ、それほどでは……。」

『こら。すぐおだてに乗らない』

「いいじゃん別に。」

「素直に受け取ることが大切。」

「いいだろう。受けよう。」

「どうせクリアできると思われてないなら、他の人間が二、三人出てきたとしても変わらん。」

『いや、変わるでしょう』

「おおー。ありがとうございます！ それで報酬なのですが、まずは前金で……。」

「お金はやめてくれ。」

「もう馬鹿みたいにあるんだ。」

「おもしろい物や情報とかはないか？」

「……あります。それも、とびきりのものが——」

「仮面男はわずかに逡巡したあと、確固とした自信を漂わせながら口にする。」

「ほう。」

「聞こうか。」

「来月終わりにアヴァール公爵の生誕祭がセルニアの町全体を挙げて

行われます。ご存じでしょうか？」

ああ、なんか派手にやるらしいな。

それがどうかしたのか。

「おっと、その前にメル殿はそれに参加されますか？」

いや、どうだろう。

普段ならさつきと町を出るが、今回はいったんネクタリスに戻ってまた来るし。

『大丈夫じゃないかな。ちようどネクタリスに戻って、こっちに帰ってくる頃だよ』

そうか。

こいつが言うならそうなんだろう。

参加するかもしれないが、人が多いなら離れて見るかな。

「よろしい。実によろしい。大変おもしろい見世物があります。その特等席をご用意できるでしょう」

よくわからんが、なんだかおもしろそうだな。

「ただし、全ては目的の人物が生きていればですが……」
そうそう。

それだ。ある人物って誰なんだ？

ずっともったいつけたように「依頼を受けてくださったときに話します」だ。

もう話してくれてもいいだろう。

「……連れ出して頂きたい人物は——」

男は声を一段と落とし、私にぎりぎり聞こえる声でその名を告げた。

口にした名を聞いた私は首を捻らざるを得なかった。

翌日、時間通り馬車が宿へ迎えに来た。

御者の他に兵士が二人ついている。

片方は昨日、とんだとぼちちりを受けたブローだった。

ぼさぼさの髪に加え、無精髭、無愛想、無言の三点を揃えている。もう片方の兵士が指示を発する。

指示と言つてもかなり砕けた調子だ。

罪人ではなくいちおう客人として扱われているらしい。

彼らは処刑隊とかいう部隊に属しているようだ。

ぶつそうな名前だが要するに罪人の管理を担う集団だと話す。

管理も、捕まえるところから最終的に刑を執行するところまで幅広く受け持つらしい。

アヴァール公爵子飼いの騎士団もあるが、名と見た目ばかりであまり機能していないそうだ。

以前より人員も減少し、騎士団は碌に仕事をしないので人手が足りないと言う。

そんなこんなと話を聞いているうちに馬車が減速した。

どうやらそろそろ到着するみたいだ。

柵を数回ほど抜け、いよいよ馬車は止まった。

「着きました。降りてください」

言われたとおり馬車を降りる。

目の前には洞穴があった。

入り口に立っていた二人の兵士が道を開ける。

なにか仰々しい鉄柵でも付けているのかと思つたがよく見る洞穴だ。

外の明るさとは打って変わって中は薄暗く奥が見通せない。

普通に中から出られそうな雰囲気だがどうなんだろう。

兵士の一人が片手に灯り、もう片方に剣を持って先導する。

間に私を置き、後ろにはブローも片手に灯り、もう片方に斧を構え続く。

今のところモンスターは一体も出てきていない。

奥に行くほど地面は湿り、足が少し埋まる。

入り口から差し込む光も見えなくなったところで行き止まりにたどり着いた。

行き止まりだと思つたがよく見ると足下に大きな穴が空いている。「ここから降りてもらいます。本来は武器と灯り、数日分の食料だけ

与えて蹴り落とすのですが、今回は途中までこれで降りてもらいます」

兵士はそう言つて腰を屈め、道ばたにあつた縄ばしごを手に取る。めんどくさいな。

蹴り落とすつてことはそんなに高くないんだらう。

飛び降りようかな。

「構いませんよ。想像通り高低差はさほどありません。下も泥になつているため、よほど打ち所が悪くない限り怪我もしないでしょう」

……高さがなければ、高い上がつてくる奴がいるんじゃないのか？

「いえ、不可能です。お気づきでしょうが、地面も壁もぬめりがあり大変滑りやすくなっています。さらに、この縦穴は内側に反っているため這い上がることはできません」

なるほどな。

しんどそうだ。

でも、不可能ってほどじゃないだろ。

「現地点では滅多に確認されませんが、すぐ下にはモンスターも出現します。入り口付近ではさほど数はいませんが、それでも上級モンスターです。壁を這つて襲いかかつて来ますので、やはり不可能かと」
ぬめる壁を這い上がるため両手は塞がり、そこを上級モンスターが襲う。

たしかによじ登つての脱出は無理そうだ。

「引き返しても問題ありませんよ。通常は落とすところまでが仕事ですが、今回は送り届けるところまでですので」

そうか。

お仕事ご苦労さん。

そこまで言われると引き返せないな。

「……そうですか。幸運をお祈りします」

兵士は私に灯りを差し出す。

おう、と灯りを受け取り横を見るとブローもこちらを見ている。もちろん無言だ。

こちらをじつと見ているが、何も言わないため何もわからない。

彼なりに心配してくれているのだろうか。

『だいたいあつてる。「大丈夫だ。問題ない」とでも言つとけばいい』
大丈夫だ。問題ない。

『——メルはキメ顔でそう言った』
シユウの言うとおり発言してみる。

ブローは何も言わず、背を向けて入り口に引き返していった。
何だったのだろうか。はつきり言ってくれればいいのに。

「外でしばらく待ちます。やっぱりやめる場合はお戻りください」
説明役の兵士もそれだけ残り、慌ててブローを追いかける。

すぐに私だけが取り残された。
待つてくれているようだが無用な気遣いだ。

優しすぎて嘔吐が出る。

「行くぞ、クソ野郎」

『おうよ、クサ女郎』

シユウを思い切り蹴飛ばし、私は縦穴に飛び込んだ。

着地に失敗した。

『……なんで飛び込んだの？ 普通に足から落ちればよかったでしょ？』

返す言葉もない。

体を横にしたまま、泥に落ちた。

松明は泥に埋もれて明かりを失った。

顔と手についた泥を払い、視界を確保する。

すでにシユウがチートを選択しているようで視界は良好だ。

今回ばかりは私も恥ずかしい。

シユウも呆れかえって、もはや何も言つてこない。

黙られるとかえって自分の馬鹿さ加減が浮き彫りになって悲しくなる。

気を取り直してウエルミス監獄だ。

昨年まではギルドの管轄だったため、情報を売ってもらつておい

た。

ミミズの抜け道と呼ばれていたこともあり、構造は非常に単純。なんと入り口から出口までほぼ一本道である。

そのため迷うことはない。

小さな脇道もあるにはあるようだが、すぐ行き止まりに達する。大きな道突き進んでいけば、ボスにたどり着ける。

ただしモンスターに出会おうと逃げることも難しい。

前後で挟まれて死ぬケースが多かったようだ。

罨も少ないため、注意すべきはやはりモンスターに集約される。

出てくるモンスターの種類はほぼ全て虫となっている。

ミミズ、蛭、蛆、ダンゴムシの大きなものだ

それぞれでさらに細かく種類が分かれているそうだ。

奥に進めば進むほど数も増え、リポップの間隔も短くなる。

その上、一部の虫たちが蠅や虻といった成虫になり空中から襲ってくるらしい。

——と、いろいろ述べたがほとんど問題はない。

基本的に個体はそれぞれ非常に弱く、一撃で仕留められる。

数は多いが、状態異常の伝染で簡単に倒れていく。

こちらは状態異常も効かないから怖くない。

さらに罨もないから楽に進める。

泥で足をとられ歩きづらいのと、天井から落ちてくる敵に注意するのみだ。

泥を足でかき分け、敵をシュウでかき消していく。順調、順調。

そこそこ長いようだがこのペースなら夕方までにクリアできるのではなからうか。

『依頼、覚えてる?』

シュウが話しかけてくる。

進行作業も飽きてきたので、ちょうどよかった。

覚えてるぞ。

人がいれば一緒に出てくれって話だろ。

でも、こんなところで生きていくことなんてできっこないだろ。
モンスターもうじやうじやいるし、足下も泥だらけ、食料も明かり
もない。

『でも、生きてるみたいよ。すごいね、人体』
なに？

『右前方の横道。見ればわかるけど、こっちを伺ってる』
言葉に従い目を向けると、横穴から人の頭が出ていた。
誰だ？

「そちらこそ何者だ？」
どうやら聞こえていたらしく、あちらも聞き返してきた。
しかたない。こちらから答えよう。
メルだ。

「……誰だ？」
『もうちよつとさあ。ちゃんと名乗りなよ。ほら、ご自慢の「極限級冒
険者だ」ってドヤ顔で』

冒険者をやっている。
ウエルミス監獄を攻略しに来た。
要請を出して特別に入れてもらったんだ。
なんか恥ずかしくなり、普通に名乗ることにした。
ついでに目的も言っておく。

「馬鹿な。自ら落とされたというのか」
『物わかりが良いね。ほんと馬鹿なんだよ。公爵には突っ走るし、穴
には飛び込む。ほうとうイエーじゃないんだから……』

よくわからんけど、うっせ。
で、そっちは誰だ？
「生き残りだ。中には——」
オネットト元公爵もいるのか？

「……………そうだ」
横穴を振り返り、そこにいる誰かを伺った後、こちらの質問に肯定
を示した。

うわあ、ほんとに生きてたのか。

しつこい依頼人が助けて欲しいと挙げた名は「オネット」だ。オネットは一年前までセルニアとその周辺を治めていた公爵様である。

がいかん罪？ とかいうので、ここに收容されていたらしい。実質は死刑だろう。

まあ、生きているなら仕方ない。

オネットをダンジョンから出してくれと依頼を受けている。

「……こちらに來い。閣下が話を聞くと仰っている」

はあ、そうですか。

そんな訳で話を聞くことになった。

男に従い横道に入り、さらに石を削った横穴を奥へと進む。

開けた場所に出た。

開けたと言っても、中腰がやつとなほどの高さだ。

そこには五人ほど座っていた。案内の男も含めて六人か。

中心には小さな灯りが点り、それぞれの顔をうつすらと照らし出している。

誰も彼もぼろぼろな服を身に纏い、顔も手足も明らかに泥まみれで区別がつかない。

「お連れしました」

案内の男が告げると一番奥にいた人物が頷く。

きつとこいつがオネットなのだろう。

「メル殿でしたか。ようこそ地獄へ」

元公爵は言葉と裏腹に良く通る声で私を歓迎してくれた。

泥まみれだがかなり若い。まだ三十路を越えてないんじゃないだろうか。

この横穴にはモンスターも入ってこず、安全に過ごすことができるようだ。

ダンジョンには往々にして安全なスポットというものがある。

どうやらここがその場所に当たるらしい。

ここを利用して約一年間過ごしてきたようだ。

過去の冒険者の遺品を利用しモンスターを倒し、ドロップアイテムで飲食を行う。

剣だけではなく、杖や斧まで揃っている。

少なくとも火がついているから、火属性魔法を使える奴がいるな。

そんなことはどうでもいいから早く出ようと提案したが、彼らは話を続ける。

公爵は黙って話の成り行きを見ている。

「一番多いときには二十人を越えていました。そして、奥へと進み脱出を試みたのです」

『駄目だろうね』

そりやここにいてるってことはそうなんだろう。

『いや、そうじゃなくて——』

「道が途中でふさがっていました」

シユウは『やっぱりかあー』と暢気に言っている。

「自然に崩れた訳ではなく、魔法で崩されたと考えられます」

脱出できないように誰かが道を閉じたってことか？

「はい、その通りです」

『まあ、そう考えることもできるね……。どっちにしろセルニア側がクリアできないって前提で話してたのは、これを知ってたからでしょ』

途中が行き止まりで、入り口からも戻れないならクリア不可能か。

その後も崩れた土砂をどけようとやってきたようだが、駄目だったらしい。

作業中モンスターに襲われ、土砂がさらに崩れ人が埋まり数はいよいよ二桁を切った。

加えて、ある時期からモンスターが凶暴化して、人数はさらに減つてとうとう六人になったようだ。

『六人かあ……。こんなもんなのかな』

そうか？

私は一人もいないと思っていたから多いくらいだ。

『思い出して。依頼人からパーティーリングもらったでしょ』
うむ。

ちゃんと持ってきてるぞ。

『いや、そうじゃなくてね。もらった数だよ。三つだったでしょ。公爵で一つ。あと二つ分必要があるって依頼人は考えてたってこと』

……うん、つまり？

『公爵を助けるため、手練れを二人はここに送り込んでるってこと』

おお、なるへそ。

でも公爵以外に五人いるぞ。

誰か知らんが三人はたまたま生き残った人物ってことか。

たしかに生き残った五人はみな精悍で、一般人には見えないからな。

『そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない』
はつきりしない奴だ。

それで、この後どうするんだ？

まず道を塞ぐ土砂をどうにかしなければならぬだろう。

その後はボスだ。全員で挑むにはパーティーリングが三つ足りない。

「パーティーリングは大丈夫です。いくつか落ちていましたので、それを利用しましょう。ボス戦も問題ですが、ひとまずは……」

土砂だな。

おい、卑怯者。

出番だぞ。素敵な案を出すんだ。

『右手前のおっさんが杖持ってるから魔法使えるでしょ』

聞いてみたところ火と風属性しか使えないようだ。

そりゃ、そうだ。

別の属性が使えるならとづくに使ってるだろう。

『大丈夫。こっちでポイント振って都合の良い魔法を使えるようにしとくから、土砂は彼にどうにかしてもらおう。他の人は彼のお守り』

そうなのか。

聞いた感じ土砂の量が多そうだけど大丈夫だろうか。

『彼の魔力次第だね。無理そうなら、ゲロゴンブレスを使う。こっちは危険すぎるからできれば使わない』

ゲロゴンのスキルは外で使う分にはたいへん便利だが、狭いところでは危険すぎる。

加減がいつさいできないからな。

よし、じゃあそれでいこう。

さっそくパーティー登録する。

シユウを紹介すると一様に驚いて見せた。

そうだよな。普通は驚くよな。よかったよかった。

口外無用と念を押しておいた。

オネット元公爵もなんか我が名にかけて口外しないと誓うだの言つてたから大丈夫だろう。

出現した剣士専用スキル、斧使い専用スキル、魔法使い専用スキルを選択。

状態異常が効かないことや各専用スキルの説明を行った。

ところでなんで私には剣士専用スキルがないの？

『えっ、剣士の才能がないからに決まってるじゃん』

馬鹿言うなよ、とあっけらかんと答えられた。

『逃げ足の無敵スキルがあるからいいじゃない！』

なぐさめているつもりだろうか。

……そんなわけないか。

馬鹿にしてるな。

私にはなんの専用スキルもないからな。

『いやいや、あるじゃん。毒とか麻痺は盗人専用スキルでしょ』

えっ！ なにそれ!?

『あれ？ 言わなかったっけ。状態異常付与関連は全部そうだよ。耐性は違うけど』

そうだったの？

私、盗人だったの？

『そりゃゴブリンから金を奪ってたんだもん』
たしかにね。

たしかにそうだけどき——、

『待った。落ち込まないで。これでよかつたと思うよ。剣士とか斧のスキルはソロに向いてない。射手と盗人スキルがベスト』

そうなの？

『そうそう。複数体に囲まれたときに盗人スキルは非常に強い。わかるでしょ？』

……たしかにそうだ。

『各種状態異常の重複付与とそれを周囲にばらまく「伝染」。

このスキルに何度も命を助けられた。』

『ソロで挑む冒険者として「盗人」は最良のスキルだったんだよ！』
なんと！

『冒険者べくして冒険者だったわけだな！』

『そうだ！』

おおっ！

さすが私だな。

そうか、そうだよな。

ダンジョン大好きだからな！

『あー、めんどくせ……』

なんか言った？

『いや、なにも』

とまあ、こうして七人という大所帯でダンジョンを進むことになった！

『これがゲームだったら今ごろ右上に金色のトロフィーが出てるよ。』

『“三人以上でダンジョン攻略！”の実績を解除しました”ってさ』
馬鹿にされている気がするが、うきうきなので気にしない。

以前から大所帯でのダンジョン攻略に憧れていたのだ。

各人が自分の役割を持って奥へと進んでいく。

前衛が敵を抑え、後衛は詠唱や掩護射撃。

互いに情報を飛ばし、集団でありながら一つの個として動く。

夢見たパーティー攻略が！

まさに今ここからっ！！

始まるんだあつ!!!

『わかってたけど、始まらないよね……』
始まらなかった。

パーティーは六人と一人に分かれた。

なんだろう……、すごい……、これまでにない孤独感を覚える。

七人パーティーでありながらのソロ攻略。

どうしてこうなった。

『差がありすぎるんだ』

他の六人はすでに役割をもって動いている。

公爵と魔法使いを守るように前後左右を剣士と斧使いが固める。

この隙のない陣形よ。無論、私の入り込む余地はない。

気付けば他六人から離れ、進路方向のモンスターを狩っていた。

完全に露払い役である。

『これも役目と言えば役目だよね』

私の望んだパーティー攻略じゃない……。

でも、他の六人は極めて安全に進むことができている。

現に目の前には第一目的の行き止まりがあった。

魔法使いと公爵を土砂の側におき、扇状に彼らを固める。

もちろん私は一人だけ浮いて、周囲のモンスターを遊撃していく。

いくらか通してしまった敵もいるが、魔法使いへと達するまでに護

衛役が倒してくれた。

問題の土砂もやや上方に人が通れるほどの穴が空いている。

なにあれ？

『土砂を崩れないように固めてから、中の石を崩してもらってる』

不思議な光景だ。

土砂中腹にアーチ状の通路が出来始めている。

『人が通ればいいからね。それも七人だけだから、必要最小限で済ませてる』

しばらくして、ついに穴が開通した。

私が一番槍として向こうのモンスターを倒すことになった。

倒したと叫ぶと他の六人もすぐにこちらへと走ってくる。通行後は予定通り、モンスターの流入を防ぐため穴を塞いだ。そうだよ。私のしたかったパーティ攻略はこういうのなんだよ。私が一人満足していると、周囲の六人は第一関門を抜けた喜びを互いに分かち合っていた。

別に喜ぶのは構わない。

だが、今もモンスターを遊撃している人間がいることを忘れないで頂きたい。

『やっぱりか』

なにがだ？

私がソロってことか？

ケンカ売ってるのか貴様は？

『違う。んなことわかりきってたでしょ。周囲を見て。モンスターの数が増える。それに成虫も出てきた』

奥に目を移すと確かにモンスターの数が増えていた。

さらに、ぶんぶんと音を立てて飛んでいるモンスターもいる。たしかにやつかいだけど、そこまで問題ないんじゃないか。

近づいてくれば某スキルで落ちるだろうし、数が増えても個々は弱い。

それよりも「わかりきってた」ってどういうことか説明してくれないかな？

『うーん、全部まとめると「あなたは何もわかってない！」かな』
はあ？

『さっさと行こう。元気なうちに攻略してしましましょう』
後ろの六人もシユウに続いたため、私は反論できなかつた。これだから数の暴力は嫌いなんだ。

上級ダンジョンというだけはある。

モンスターの数がすごい。リポップの早さも尋常じゃない。

それでも後ろの六人全員無事にここまでたどり着いた。

目の前には大きな扉。ボス部屋だ。

途中で休むこともできず一気にここまで駆け抜けた。

さすがに疲れたのか、私を除く全員が息を切らしている。

私も息を切らしていないだけで疲れはある。

目立つほどではないというだけだ。

さて、休憩がてらに作戦会議としよう。

雑魚敵は簡単に蹴散らすことができたがボスは難しい。

『ギルドから聞いた情報だとボスはグラントワーム。名前通り大きなミミズ。こういうシンプルに大きいボスが多人数戦だと一番やっかいだね』

そうだな。

こつちには六人もいる。

あくまで雑魚モンスターには戦えるというだけ。

ボス戦では陣形を保つことも難しいだろう。

元公爵を守るともなればなおさらだ。

一度崩れば脆い。

『策はある』

やはり難問を切り開くのはこいつだった。

「シユウ殿。ご意見を聞かせてもらえないだろうか」

オネットが口を開く。

この元公爵はあまりパツとしない。

なんだろう物腰はやわらかいが、偉そうな雰囲気あまりない。

嫌いじゃないが、公爵として大丈夫なんだろうか？

余計なお世話だろうか……。

『ミミズには目がない。でも、光を感じる視細胞が体表についてる。それに触覚があるから振動を感じてる』

うん。

だからなに？

『通常は光があれば暗い方に移動するけど、ボスの場合はおそらく光を消そうと襲ってくるはず。それに振動を察して震源に襲いかかると思う。おっと、皆さん気付いてきたね』

話がよくわからないんだけど……。

あと、なんで皆がこつちを見てくるのかもわからない。

『要するにね。メル姐さんが灯り持って一人で派手に暴れて、他の人は隅っこで何もせずジツとしてればいいってこと。おそらく、これが一番確実』

……そう。

いやね、実は私もうすうす気付いてた。

気付かないふりをしてきたんだ。

だって、むなしいじゃない。

七人でパーティー組むのにソロと同じって。

「メル殿……」

いや、いい。

同情はいらない。

もう、いいんだよ。

私も認めよう、現実を。

だが、せめて……。

せめて、これだけはやらせて欲しい。

「みんな！ ボス戦がんばろう！」

私は手のひらを前に出す。

周囲も空気を読んで、手のひらを私に合わせてくる。

六人が手を重ね合い、最後にオネット公爵が手を重ねる。

「エイ！ エイ！ オー！」

全員の声が重なる。

今、パーティーは一つとなった！

もう、何も怖くない！

『なんか涙出てきた』

あまりの一体感に思わずシユウも落涙。

ただし涙は見えない。

私たちは一丸となってボス部屋の扉をくぐった。

ボス部屋に入った私たちは一人と六人に分かれた。

六人は固まって部屋の隅でぼっん。

一人（私）は雄叫びを上げ、丸い頭を地面から出していたボスに特攻。

ボスは体を揺らして地面に潜り込もうとしていた。

『メル姐さん。最高にハイな手段を考えた！』

よしやってやる！

今ならひどい手段でも聞いてやる。

言ってみろ！

『おし！ 潜ろうとしてるボスの頭に飛び込んで！ 得意でしょ！』

任せとけ！

ボスに私のダイブを見せてやんよ！

そのままボスの消えた穴に頭から突っ込む。

飛び込んだすぐ下にボスがいた。

何か、頭が花卉状に開いているが大丈夫なんだろうか。

『ナイスタイミング！ 俺を構えて、もうわかるでしょ！』

わかってしまった。

下向きにやるなら問題ないだろう。

派手にやれ！

『よっしゃやるぞ！ ゲロゴオオオヲラン——』

——ブレエエエエスツ！

シユウが赤く染まり、すぐ前方から赤い閃光がほとばしる。

炎はボスの開いていた口（？）にそのまま突き刺さり、止まること

なく流れていく。

やがて赤い光が消え、下には大きな空洞。

私は途中で壁にシユウを突き立て落ちないようにしている。

壁からよじ登ると出口の扉が出現していた。

入り口にいたメンバーも嬉々として私に駆け寄る。

今度こそ皆で喜びを分かち合った。

『大・勝・利！ 最高のパーティー戦だったね！』

ああ、素晴らしいパーティー戦だった！

各々が役割を把握し、見事にその役割を果たした。

この勝利は私だけのものではない。

パーティー全員の勝利だ！

こうして感動に包まれウエルミス監獄の攻略を終了した。

謎の感動も醒めたころ、心に残ったものは——虚しさだけであった。

出口の扉を潜り、緩やかな上り坂となっている洞穴を進む。

時刻は夕方だろう。黄昏どきの紅い光が洞穴の闇を切り裂いていた。

六人はそれぞれが詠嘆の声を抑えることもなく、光へと足を動かしていく。

『待った。外に誰かいる』

シユウの声で我を取り戻した彼らは公爵を背後に移す。

『メル姐さんが行くべきだろうね。それが自然だし、対応もできる』
はいはい。

もう慣れたよ、このパターンは。

光へと歩み、まばゆさに目を逸らし、光になれてくるとそこには無表情の仮面を被った人間が立っていた。

ああ、こいつか。

『そうだね。他に気配は感じない』

『ご機嫌よう、メル殿。……お一人でしょうか？』

仮面で表情は見えないが、落胆していることが声の調子からわかる。

こいつはずっとここで待っていたのだろうか。

そうか、お前も一人か。

で、どうしよう？

『別に話してもいいんじゃない。危害を加えるつもりなら一人でこないでしょ。武器も持ってなさそうだしね』

そっか。

じゃあいいな。

オネットは生きていたぞ。

「おお！ それは良かった！ 後ろにおられるのでしょうか？」
声を弾ませて仮面男は尋ねてくる。

私も洞穴に足を戻し、元公爵らに事情を説明する。

「まみえよう」

元公爵の一言で会うことが決まった。

私が先導して洞穴から出る。

仮面の男はすでに片膝をつき顔を伏せている。

「貴殿がメル殿に『余を助け出せ』と依頼を出したそうだな」

ハッ、と小気味よい返事を仮面男は返す。

「そうかしこまることはない。貴殿は余の恩人だ」

再びハッと返事を返し、仮面男は顔を上げる。

仮面に気付き公も首を傾げる。

「仮面を取ってみよ」

男が仮面に手をかけ外す。

なんと！

彼は……誰だ？

知らない男だった。

声はおっさんみたいに太かったが、そこそ若そうだ。

「知らぬ顔だな。貴殿は何者だ？」

どうやら公爵も知らないようだ。

他の五名は、と見てみるが誰も知らない様子だ。

あれ、二人はこいつが送り込んだはずだから知ってるんじゃないの

か。

『ありやりや、おかしいな。……いや、そうでもないか』

「マントウールとお呼びください。閣下。間もなく日も暮れます。ひとまずこちらで用意した隠れ家にお越しください。閣下の今の姿は見るに堪えません。話はそれからでもよいかと。皆さまもどうかお越しください」

そうか。

私はどうしよう。

オネットト元侯爵がどうなろうがどうでもいい。

宿に帰ろうかな。

『そうだねえ。だいたい事情もわかったから、飽きてきちやった』
意見はまとまった。

じゃあ、私は帰るんで。

「メル殿にも来て頂きたいのですが、無理強いはできませんね。報酬の話ですが、またセルニアに来られるのでしょうか?」

ああ。

ネクタリスに戻ってからまた来る。

ダンジョンを回ってくるんだ。

来月の誕生日祭だっけ?

その頃には戻る。

「わかりました。こちらからまた接触させて頂きます」

あ、そう。

じゃあ、よろしく。

別に来なくてもいいよ、面倒だし。

「いえいえ。是非とも参加して頂きたいので呼びします。それでは途中までご一緒に参りましょうか」

そう言って彼は恭しく、オネットらを先導していく。

「マントウール殿。貴殿に一つ尋ねたいのだが……」

「ハッ、なんなりと」

「レスペ……いや、余の家族は……、どうなった?」

オネットは聞きづらそうに尋ね、マントウールも答えに詰まる。

「申し上げづらいですが……」

「よい。聞かせてくれ」

「アヴァールの手を逃れ北方へ逃げる際、処刑隊に捕まり全員その場で殺されました。すでに遺骸も、遺品すら残っておりません」

「そう、か……」

オネットは何度も「そうか」と繰り返し、頬に一筋の涙をこぼす。

「許さんぞ……。アヴァール、許してなるものか。絶対に——」

歩みを止めることなく、元公爵は復讐の誓いをここに立てた。

私はあまり興味がないので、道の分岐路でそのまま彼らと分かれ

た。

宿に帰り、一晩明かした。

さあ、次のダンジョンへ行こうと部屋を出たところで紙片が宙を舞う。

なんだこりや？

手にとって裏返してみると、

“オネットの家族はネクタリスにいる”

——とだけ書かれている。

『だろっねえ』

どゆことよ？

シユウはわかったようだが、私にはさっぱりわからない。

昨日、仮面の男が死んだって話してたじゃん。

あれは嘘だったのか。

『いや、嘘じゃない。あれが彼にとっての真実。来月になればわかるよ。ここで言えることはただ一つだね。復讐するは彼にあり、さ』

彼？ オネットだろ？

……どうやら詳しく説明してくれる気はないらしい。

あとでわかるなら別にいいや。

さあ、次のダンジョンへ行こう！

一月後、予定通り私はセルニアに戻ってきた。

なかなか濃い一ヶ月だった。

緑のお化けを見たり、素敵な仮面を手に入れた。

ネクタリスでもギーグと会い、いろいろ確認をしてもらった。

もちろんダンジョン攻略も忘れていない。

アヴァール公爵の生誕祭を明日に控え、町には人が溢れている。

人が溢れているものどこか張り詰めている空気を感じる。

ところどころに立っている兵士が目を光らせるからだろうか。

自身に反抗したものを殺していったアヴァール公には、未だ根強い

抵抗があるようだ。

前回会った仮面男もおそらくそのあたりだろう。

町をぶらぶら歩いているとまたもや尾行している人物が出てきた。

前回と同様に人通りの少ない道に入る。

すぐに見覚えのある顔が現れた。

なんて言ったか……、

『マントウール』

そうそう、それだ。

久しぶりだな。

今日は仮面を付けてないのか？

「メル殿もお元気そうだなによりです。仮面は明日のためにとってお

きます」

そうか。

実は私も仮面を手に入れたんだ。

なかなかイカしてるぞ。

「……そうでしたか。それは準備した甲斐がありませんでしたね」

ん？

どういうことだ？

「単刀直入に申し上げます。メル殿、明日の生誕祭。オネット公の護衛をお頼みしたい」

え、え……。もうちょっと詳しく説明してくれないか？

そもそも前回の報酬も受け取ってないんだけど。

「申し訳ありません。人数不足でして。公の安全を考慮すると、メル殿が確実だと公も仰いますので。どうかお受けください」

いや、それ説明になってないよ。

ちゃんと一から詳しく説明してくれ。

「実は——」

マンなんちゃらはようやく説明をしてくれた。

なんだかおもしろそうだったし、シユウのお墨付きも出たので受けることにした。

翌日、アヴァール公爵の生誕祭が盛大に始まった。楽曲の演奏や華々しい見世物と様々な催しが次から次へと行われていく。

そして、ついに公が最大の目玉イベント称する公自らのパレードだ。

なんだか豪華絢爛な神輿みたいなのに腰掛けている。

道は大きく開かれ、そこを進んでいく。

両側には兵士たちが人並みを抑えている。

現在、公爵らの行進は止まっている。

この場にいるほぼ全員が混乱をきたしていることが明白だ

……というのも彼らの進行方向に数名の闖入者が現れたからである。

全員が独特な仮面とマントにくるみ、その正体を覆い隠す。

——私とオネット、それにパーティーリングを付けた数人である。

スキル「ステルス」で姿を隠し、行進が近づいて来てスキルを解除。

何も知らない人たちから見たら、本当に突然現れたように見えるはずだ。

「何者だー」、「あいつらはなんだー」、「どこから現れたー」

……などなど様々な怒号が飛び交う。

公の後ろから兵士たちが私たちの方へ走ってくる。

だが、私たちに槍を突き立てることもできず地面に転がる。

残念なことに某スキルが発動したため、敵意を向けた彼らは力が半

減され立てなくなったようだ。

もちろん周囲から見れば何が起きているのかはわからない。

アヴァール公は捕らえろと叫ぶが無能な騎士団は動けない。

騎士団に代わり処刑隊が動き出す。

公の後ろに影の如く付き従っていたブロー隊長自らが飛び出し、中心に立っていたオネットへと向かう。

すぐに私はブローとオネットの間に立つ。

ブローは近づくが、足を崩さない。

なんだこいつ。前日もだが、能力半減効いてないのか。

『発動条件を満たしてないんだよ。あれは敵意持った相手のみに有効だからね』

つまり、こいつは私に敵意はないっていうのか。

思いつきり、斧を振ってきたんだが。

敵意じゃなく殺意なら大丈夫ってことなのか？

『それはちよっとひねくれすぎ。なるべく派手に倒しちやっつて、殺さないでね』

おう。了解だ。

横からなぎ払われる斧を手で掴み、そのままシユウで峰打ちを食らわせる。

崩れた額を掴み、そのまま公の側にぶん投げた。

やりすぎたか……？

『いや、いいパフォーマンスになった』

隊長が赤子のように扱われる様子を目にして他の隊員は動けなくなった。

無論、隊員だけでなく他の兵士・騎士同様だ。

事の成り行きを見守る方向に移った。

「お久しぶりですね」

オネットが一步前に出て久闊を叙する。

「な、なにものだ。余が誰かわかっているのか」

アヴァールは声を震わせ誰何する。

彼を守る兵士らはもういない。

今やただの肥満体だった。

「もちろんわかっていますよ。アヴァール公爵、……いえ、叔父上とお呼びした方がよろしいでしょうか？」

そう言つて、オネットは仮面を外した。

「き、貴様は!? なぜだ?! オネット! なぜ貴様がここにいるっ!」

アヴァールは目尻が引き裂かれるほどに目を見開く。

「本物?」、「あのお顔は間違いない」、「でも、処刑されたはずじゃ」

……、観衆にも動揺が走る。

「光も届かぬ地獄で身を震わせていました。しかし、民の声に導かれ

帰って参りました」

オネットは笑みを浮かべる。

「こんな謀反を起こすためにか？ 貴様はそうやってまた罪を重ねるのか」

「私の罪？ まったく、ご冗談がお好きだ。伯父上の罪でしょう？」

「な、何を言ってる——」

「一年前、私に事実無根の罪状を押し付け、地位を奪った」

「事実無根!?! 事実として貴様は王国を売った売国奴ではないか！」

「売国奴？ 真の売国奴はその事実を私に転嫁した」

観衆は皆無言。

誰もが一年前の真実を見いだそうとしている。

「そう。伯父上——真の罪人は貴方でしょう？」

全ての視線はアヴァールに向けられる。

彼は口をばくばくと開閉させ、言葉を繰り出そうとしているがうまくできていない。

「……証拠があるのか?!」

ようやく出てきた言葉がこれだ。

『だめだ。その台詞は言っちゃいけなかった』

次いで視線はオネットへ。

その視線は何かを期待しているようだ。

オネットは期待に応えるように口端をつり上げる。

「証拠なら——ある——」

叫び。オネットはマントへと手を入れる。

勢いよく取り出した手には一枚の紙とその包み。

「見ろ！ これは帝国の高官へと向けられた書状だ！」

手紙を開き、観衆に見せつける。

「ここにはアヴァール公爵のサインに加え、落款もある！ さらに内容は王都を陥れるための密約！ もちろん、この他にも多数の証拠をご用意しております」

その真偽やいかにと、アヴァールを見ると顔面蒼白。

言わずとも書簡が本物であることは明らかである。

「なぜだ……。なぜ、それを貴様が……。……。あつ！」

公爵は椅子から立ち上がり、辺りを見渡す。

視線は一点で止まり、視線の先には髭を生やしたおっさん。

名前が出てこない、誰だっけ？

「トライゾン！ 貴様、裏切ったなあ！ 余を裏切ったなああああ

！」

そうだ。トライゾンだ。

わざわざ教えてくれてありがとう。

怨嗟の声を浴びたトライゾンは打って変わって静かな表情だ。

「はて？ 自分はオネット様を裏切ったことなど一度もありませんが」

「トライゾオオオン！」

喉からではなく、体全体を使った叫びだった。

あれなら脂肪もよく燃焼するのではないだろうか。

「処刑隊諸君！ 諸兄らが処すべくは誰だ！ このオネットか?!」

「否！ 売国奴アヴァールです！」

処刑隊の隊員は声を揃える。

ただし、一人は地面に転がっている。

ほんとこいつはとばっちりだな。

処刑隊の持っていた得物の刃先は全てアヴァールに矛先を変える。

「次いで騎士諸君！ 諸兄らが仕えるべき主は誰だ？ 売国の徒か?!」

「否！ オネット様であります！」

騎士たちはあつさりと手のひらを返す。

オネット公の道を槍を掲げ示す。

「最後になったが、セルニアに生きる全ての民たちよ！ 身勝手な願いだとは思ふ。私は、自分の身すら守れぬ若輩だ。それでも……。私は諸君らと共にセルニアで生きていきたいと願っている。どうか今一度、私にセルニアを任せてもらえないだろうか？」

わずかな沈黙のあと、誰かが手を打ち「オネット公」と叫ぶ。

それを火種として、拍手と歓声が一気に全体に広がる。

すでにアヴァールは椅子から下ろされ、押さえつけられている。そのままオネット公の行進が町を練り歩いた。

その後、大きな屋敷に入りオネット公は椅子に座る。

「うまくいって良かった。皆のおかげだ」

私や他の護衛たちを労う。

「失礼します」

初老の男性が扉を開けて入ってくる。

アヴァールを裏切った髭の男だ。

「……トライゾン」

彼は膝をつき、顔を伏せる。

「閣下。この度は申し訳ありませんでした」

「よいのだトライゾン。貴殿が余を裏切ったようにみせていたということは、すでにマントウールから聞き及んでいる」

私の隣に立っていた元仮面男も頷いてみせる。

これはシユウが教えてくれていた範疇なので別に驚くこともない。

「こうするしか余を助けられないと悟った上での行動だろう。身を切る思いだったと良くわかつているつもりだ。貴殿を責めることなどできんよ」

「しかし、閣下。レスペ様やフェエリテ様、それにジョワ様が殺されるのを防げなかったのは自分の落ち度でございます」

トライゾンは肅々と述べていく。

責任をかみしめているようだった。

「それも余がすっかりとしていれば防げたことだ。全ては余の落ち度で、全ての罪はアヴァールに償わせる。貴殿の気にすることではない」

あれ？

どういうことだ？

『へい、メル姐さん。そろそろ教えてやりなよ』

お、おう……。

口を挟んで悪いんだが、さっきの三人は生きてるぞ。

「なに？」

この場にいる全員が私に目を向ける。

私自身もどういふことなのかよくわからない。

オネットの家族は生きていた。

名前は忘れたが、皆、ネクタリスでひっそりと暮らしていた。

ギーグに住民名簿を参照してもらって、一年ほど前に引越して来た人物を当たってみた。

実際に話を聞いて、彼らがオネット公爵の親類であることも確認済みだ。

「そんな馬鹿な……。たしかに処刑隊から報告を受けた」

死体の顔を見たのか？

「いや。首は落とされていたが、身につけている装飾品や体格はたしかにレスペ様たちのものだった」

どうしても信じられないようなので、私は公の家族から授かった手紙を渡す。

最近はずいぶん運ばないなことがわかってる気がするな。

果たしてネクタリスにいたオネットの家族なる人たちは本物だったのか？

手紙を読むオネット公はただ咽び泣いていた。

それが紛れもない答だろう。

二週間後、私はまたしてもセルニアにいた。

もちろんずっとセルニアで過ごしていたわけではない。

西の方にあるダンジョンへ行ってみたのだ。

特筆すべきことはない。

今日はまたしても催しがある。

それを見ようと広場には多くの人が集まっていた。

私も招かれた。招かれたと言うよりもオネット公周辺の護衛だ。

またしても特等席に釣られてお守りをする事になった。

現在、オネット公はきらびやかなドレスに身を包みスピーチをして

いる。

観衆は盛り上がっているが、私には眠いだけだ。

ようやく長話が終わり、彼女は壇を降りて最前列の席に戻る。

彼女の隣にはレスペとかいう旦那さんが座り、その横には二人の子供が続く。

「いよいよ本日の主役が登場した。」

後ろ手に縛られ、ぼろつちい服を身に纏う豚男——アヴァールだ。

二週間前よりもやせている。それでも体はまだまだ太い。

観衆も彼の姿を見て様々な声をあげる。

彼は轡を噛まされ、顔には布袋が被せられる。

壇上の中心に置かれた、背の低い木枠に首を固定された。

観衆の方に彼の頭が向いている。

もうおわかりだろう。

今日は彼の命日。

催しは——公開処刑である。

私は壇上の正面に取り付けられた階段横に立っている。

確かに特等席には違いないが、できれば座って見たかった。

そして、もう一人の主役も現れた。

手には斧を持ち、ゆつくりと階段に近づく。

今度は誰も声を上げない。静かに彼の動き見守る。

もちろん彼も何を言わない……と思ったが口が動いた。

なんか言っただろうか？

よくわからないままブローは階段を上がっていく。

『「感謝する」ってさ』

感謝？

何に感謝するんだ。

私は奴にとぼつちりしか与えていないんだが……。

『「いやいや、彼にこそ感謝されるべきだよ』

わけわかめ。

詳しく説明してくれ。

『「やれやれ、仕方ないなあ。シユウ大先生が解説してさしあげませう』

シユウはそう言つてため息を一つ。

ああ、うぜ。

『まずですね。ブロー君はアヴァール公への復讐を企てました』
はあ、そうなんですか。

『同僚や仲間、罪のない人たちを殺さなければならなかった恨みで
しようか。あるいはもつと前に恨みでもあつたのかもかもしれません。
とにかく理由はよくわかりません。ですが、その思いは誰よりも強
かつたのでしよう。オネットやトライゾンの比ではありません』

理由もわかつてないのにどうしてそんなことが言えるんだ。

『わかります。彼は初めからメル姐さんに目を付けていました。派手
に暴れてますからね、無理ありません』

そうなの？

まあ、けつこう暴れてることは確かだな。

『彼はオネット公爵が監獄内で確実に生きていると知っています。こ
れは単純。生き残っていた公爵以外の五人は全員彼の子飼いだから
です。ときどき入り口の穴を通じて情報を交信していました』

えつ、そうだったのか……まあたしかにあいづら強かつたからな。

交信つてあれか、縄ばしごを使つてたのか？

『そう。それに罪人のはずなのに、不気味なほど忠誠心もあつた。武
器やパーティーリングがあんなぼろぼろ落ちてるのもおかしい。ト
ライゾンの送つた部下はとつくに死んだんだろうね』

まあ、誰も仮面男を知らなかつたつてことはそうなんだろう。

『あと、道が途中で崩してあつたよね』
うむ。

あんなことしたら進めないだろう。

『その通り。あそこはちよūd敵が強くなる分岐点。下手に突っ込ん
で死なれないようにわざと道を崩してた』

でも、あれは私以外じゃ無理だつたんじゃ。

『そうだね。あれはやりすぎかな。まあ、いざとなれば縄ばしごで救
えばいいだけです。あと、ゲロゴンブレスの存在も知つてたと思
う』

それもそう……なのかな？

『彼は誰よりも先にメル姐さんに接触してきた。あとの四回はトライゾンだけど、最初の一回だけは彼本人』

ほっほー、なるほど。

生きているのを知っていたから、あとの四回みたいに「生きていれば」なんて曖昧な表現を使わなかったと。

『お、大正解。別に依頼を受けてもらわなくてもよかったんだ。誰かがいると知らせるだけで、救うとわかってたから』

いや、それは……そうかもしれないが確実じゃないだろ。

一回目の接触の時点では監獄に入れるかわからなかったし。

『そこは初めに言ったとおり。彼は初めからメル姐さんに目を付けてた。初めていうのはネクタリスにいる段階から。あるいはもつと前からだね。超上級をクリアして、町を助けるお人好し。さらにダンジョンキチ○イ。メル姐さんの近くでダンジョンの話を見せて、アヴァール公爵の嗜好を口にする。そして、商人になりすまし塩を買わせる』

まさか……。

本当にそこまでしていたのか。

『しただろうね。あと、公爵の家族を殺したと思わせて、ネクタリスにこつそり移したのも彼です。もちろん部下を置いて警護させてます。部下達が先のことをやったんでしよう。そりゃセルニアの処刑隊も人手が足りなくなりますわ』

それなんだが、奴はどうして公爵の家族を助けていたんだ。

『簡単。もしも自分に罪が向けられた場合、公爵の家族を差し出して許してもらうため』

でも待った。

そもそも私はあいつに殺されかけたぞ。

『メル姐さんのスキルが効かなかったのは、敵意も殺意も彼にはなかったからだね。化け物じみた力を知ってたから、あんなので殺せるなんて思ってたなかった。最初に襲ったのは、適当に捕らえてそのまま監獄に送ればいいからだね。二回目はかなり手を抜いて、わざと倒さ

れるようにしてた。隊長である自分が派手にやられれば周囲も力の差を知って黙る。こつちもそれを演じてみせた』

すげえ……。

素直に驚いた。

だが、どうしてそこまでやるんだ？

『んく。ああ……ほら、見てみなよ。良い笑顔だ。俺のいた世界じゃ「オリジナル笑顔」って呼ばれるんだよね』

視線を壇の上に移す。

どうしてそこまでやるのか？

答はブローの顔を見れば一目瞭然だった。

彼の腕を振り上げられ、いつでも振り下ろせる状態になっている。

観衆からは上げられた腕で見えないかも知れないが、彼の顔はたしかに笑っていた。

今までの無表情が嘘だと思えるくらい——嬉しげで、楽しげで、気持ち悪いほどの笑顔だった。

全ては今この瞬間のため。

自らの手でアヴァールの首を落とすため間違いない。

それもただ落とすのではなく、衆目が集まる場で実行するためだ。

『復讐するは——』

「彼にあり」

私も口を揃える。同時に、

彼の腕は振り下ろされた。

蛇足6・33話「我が輩アルボルさん。今、うぬの後ろにおるぞ」

セルニアを発って、ネクタリスへ戻る。

途中にあるパンタシア野原に寄っていた。

パンタシア野原は初心者向けダンジョンである。

今さら初心者向けダンジョンに遅れは取るはずはない。

ギルドでダンジョンの位置だけ教えてもらい、さつそく現地へ向かう。

目の前には緑の原っぱ。

膝下くらいの草が風にそろそろ揺れる。

ぽつりぽつりと白い綿雲がゆっくり流れていく。

白い雲のさらに上には青い空に黄色い太陽。

青空は私の好きな景色だ。

『俺もおおいそら好きだよ』

うむ。そうか。

絶好のダンジョン攻略日和だ。

初心者向けとあって出現するモンスターの数は少ない。

ニワトリとリスだけだ。もちろん通常のものよりも一回りサイズが大きい。

それでも、あちらから攻撃をしてくることもない。

蹴るだけであっさりと光に消えていく。

『のどかだね〜』

そうだな。

シユウの言うとおり、とてものだか。

ここまで危機感皆無のダンジョンは初めてである。

原っぱの斜面で横になって寝ている冒険者の姿も見えるくらいだ。

昼になってお腹も減り、草むらに腰掛けてご飯を食べた。

一人でもそもそ食べているとニワトリがちよこちよこやってきた。

物欲しそうに見てくるので、代わりのものを上げると喜んで食べ始

めた。

ちなみに差し出したのはドロップアイテム。共食いである。

そのうちリスもやってきて、一緒に食べ始める。

こうして和気あいあいの昼食になった。

いやはや、なんともものどかだ。

昼ご飯も食べた。

モンスターもそこそこ狩った。

満足したので、帰ろっかとしたときのことである。

シユウがぼつりとこぼした。

『ボスは？』

……あれ？

そう言われればそうだ。

ボスの姿をまだ確認していない。

さすがにリスやニワトリはボスではないだろう。

見逃していたな。探してみよう。

……いない。

探しても探しても見つからない。

ヘビや兎、小鳥は確認したが、モンスターではない。

どういうことだ。やはりニワトリかリスのどちらかがボスなのだ

ろうか。

『どっちも違うはず。ポイントがボス補正を受けてない』

ボス補正が何かよくわからんが、違うようだ。

こういうのはお前の得意分野だろ。

『うーん。なんとなく魔力を感じるんだよね』

魔力ってあれだろ。

魔法を使うときに必要なやつだろ。

『そうそう。敵を斬ったり、魔法をかき消すときに吸収するやつ』

それで魔力があるとどうなんだ。

『原っぱ全体に弱っちい魔力があるってことしかわからぬ』

うーむ。使えん奴よのう。

誰かに聞こうにも、気付いたら原っぱに一人。

寝ていた冒険者もいつの間にか帰ってしまっていた。

『ギルドに戻って話を聞いてみたら?』

そうするか。

いったん戻ることになった。

所は変わって、ギルドの受付である。

『パンタシア野原にボスモンスターはいません』

どうやら本当にボスがいないらしい。

受付嬢は原っぱについての情報を語り始めた。

パンタシア野原は数百年以上も昔から存在する。

ここにギルドができる前からずっとあそこにあったようだ。

ボスの不在は当時から言及されていたが、やはり今日まで確認されていない。

安定してドロップを手に入れることのできるダンジョンとして重宝されている。

ボスもおらず、敵も極めて弱く、襲ってこないため安全・安心という不動の初心者向けダンジョンであった。

「……ただし——」

話も終わり頃になって、受付嬢は呟く。

「数ヶ月前から異常が報告されています」
ほう。

続きを聞いたところ、最近はモンスターの数が増えたらしい。

ときどき群れて反撃をしてくることもあると報告されているそう
だ。

『ニワトリの集団反撃とか怖すぎる』

そうだろうか？

さほど強くないし問題ないだろ。

「なによりの異常は……夜に——」

ここで受付嬢は溜める。

さっさと見えよ。じれったい。

「出るんです」

何が？

「出るって言ったたら、お化けしかないでしょう」

はあ、お化けってことはないだろ。

モンスターじゃないのか。

「お化けです」

彼女はきつぱりと断言する。

数ヶ月前に冒険者から報告を受け、彼女が直接確認に行かされたよ
うだ。

なんでも夜になると原っぱ中に緑の光が浮かび上がり、ぶつぶつ囁
いてくるらしい。

それだけにとどまらず、一部の光が追いかけてくることもあったと
話す。

触れてもするりとすり抜け、こちらの攻撃は剣も魔法も当たらな
い。

当初は珍しがって冒険者が集ったようだが、けつきよく何もわから
なかった。

今では誰も興味を持たなくなっている。

実害が出た訳ではないため、ギルドも夜間のダンジョン攻略に注意
を促すことしかしていない。

シユウが魔力を感じると言っていたのは、そのためだろうか。

夜を待って、実際に自分の目で確認することにした。

またしても原っぱに戻ってきた。

日はとうに沈み、まんまるの月が草原を照らす。

草原近辺を照らしているのは満月の明かりだけではなかった。

話に聞いていたとおり、ぼんやりとした緑の光が草むら全体を覆っ
ている。

『なんかすごいね』

ああ……、そうだな。

話には聞いていたが、目の当たりにすると気圧される。

ほんとに一面が緑だ。しかも一階建て家屋並の高さがある。

月の明かりと謎の緑光が空中で夜の支配権を競い合っていた。緑光の中に入ってみるが、何も感じない。

手で触れることもできず、息を吹きかけても効果なし。

シユウで払うと明かりが少し乱れるが、すぐ元に戻った。

『感じてた魔力はこれだね』

そうか。

それでこの緑光はなんなんだ？

『昼は見えなかったから、夜になったから出たのか……あるいは、魔力が月の明かりに反応して光ってるのか』

魔力があることは私にもわかった。

知りたいのはなぜ魔力が漂ってるのかということだ。

『それも不思議だけど、音が出てるのもよくわからんね』

シユウの言うように光からは何か音が聞こえてくる。

雑音に聞こえるが、受付嬢の話すように光が何か囁いているように

聞こえなくもない。

『ちよいちよい、後ろ見て』

言われたとおりに振り返る。

特に変わった景色はない。

見慣れてきた緑光がぼんやりあるだけだ。

これがなんだ？

『首そのまま歩いてみて』

足を交互に前へ出す。

あつ。

気付いた。

ぼんやりとしていた光の中で、微妙に緑の光が濃かった部分が付いてきた。

確認のため、足を反転させ、後ろ歩きを試してみる。

すると、遅れて緑光が私に近づく。

『受付のねーちゃんが話してたやつだね』

うむ。

追いかけてくる光はこのことだろう。

シユウで斬ってみるが、やはりすぐ元に戻る。原っぱを出るまで、ずっと私に付いてきた。なんか不気味だな。このまま帰ろうか。

『待った。聞こえない?』

ん、何がだ? と尋ねる前に私も気付いた。

ふよふよ浮いている光から音が聞こえる。

これはまさか……、

『うん。光が音を出してる。何か、話してるのかも』

なんとということだ。

この光は生きているのか。

『生きてるかはわからないけど、伝えたいことがあるんじゃないかな』
伝えたいことがあるって言われてもな。

私にはどうしようもないぞ。

お前の出番だろ。

『ふむ。ちよつと待ってね。翻訳スキルを調べてみる』

おう。

……………まだ?

どれくらい経ったのだろうか。

しばらくぼんやりしていたが、何も起こらない。

『いろいろやってるけど当てはまんない。……もう全部でいつか、えい。おっけーよん』

もういいか?

「ぬ?」

おっさんみたいな声が返ってきた。

いちおう聞き取れたことになるだろう。

『そりや、これで駄目ならお手上げだったよ』

「ぬぬぬっ!」

なんか「ぬ」としか言ってないけど、大丈夫なのか。

ちゃんと話せるの、これ。

「ぬん。話せるぞ!」

話せるらしい。

それは良かった。

それじゃあ、さっそく質問。

お前はいつたい何なんだ？

「思い出せぬ」

うん？

「気付けばこのように訳のわからぬ姿になってしまっていた」

そいつは困ったものだな。

で、名前はなんというんだ？

「思い出せぬ」

ええ……。

じゃあ、ここは何なんだ？

「思い出せぬ」

なんか緑色に光ってますけど。

「わからぬ」

どうすんだよこれ。

知らぬ存ぜぬわかりませぬで手の打ちようがないぞ。

『思い出せることがないか聞いてみたら』

思い出せることはないのか？

「我が輩、夢をみていた。とても懐かしい夢であった」

そうだったのか。

どんな夢だったんだ？

「思い出せぬ。だが——」

お得意の定型句のあとに、逆接を持ってきた。

「忘れて良いものでなかった」

はあ、つまり？

『思い出すのを手伝えってことでしょう』

であるか。

こうして夜の思い出探索が始まった。

話を聞いていても埒が明かないので、歩き回ることにした。

「……ちやむとあそう」

「きよふ……ゆうはむ」

「……すわん。こんほ……」

先ほどまで雑音だったものが聞き取れる。

聞き取れると言っても、まだ雑音だらけで意味がよくわからない。

『まあ、人がいることはわかったじゃん』

それもそうだな。

緑光が音とともに移動するところを見るに、人を模しているようだ。

しかも、あちらこちらに人がいることになる。

「ぬう。そうであった。我が輩、多くの人を見ていた気がするぞ」

付いてきていた緑光が絞り出すように呟く。

どうやらわずかに思い出してきているようだ。

『緑光が人だとするなら、村か町だね。たくさんいるし』

昔、ここにあった町ってことか？

「町とはなんだ？」

緑光が尋ねてくる。

そこからののか。

町って……町は町だろう。

人がたくさんいて暮らすところ。

物を売る店があつたり、食べ物を作つたりしてるところもある。

「うぬう。我が輩は町にいたのか」

そうなんじゃないか。

たくさん人を見てたんだろ。

お前自身このどこかに住んでいたんじゃないか。

「ぬぬっ！……思い出したぞ。ぬう、確かに我が輩は町におつた。

たくさんものものに囲まれとつたぞ！」

どうやら、町に住んでいたことは確定らしい。

ちやつかり友達たくさんいましたアピールまでしてきやがる。

『むかつくのはわかるけど、俺を蹴るのはやめてくれませんかねえ』

緑光はぶるぶる震え始める。

「そうじゃ。我が輩はこの町を夢見ていた——」

緑光がそう告げた瞬間、光がいつそう強く輝いた。
目の前だけではない。

野原全体が淡く煌めいている。
ところどころで光に驚き慌てるニワトリの姿が見える。

喋る緑光を起点として、ぼんやりとしていた光が徐々に輪郭を形づく
くる。

「多くの人が暮らし、動物が走り回り、花びらが飛んでいた」

光が人を、道を、家を、動物を、花びらを形成していく。

「皆はこう呼んでおったな——ペタルム、と」

ついに光の町ができあがった。

野原に町ができてしまった。

町と言っても全て緑光の濃淡であり、先ほどと同様に触ることは
できない。

相変わらず人が何を喋っているのかも、はっきりと聞き取ることは
かなわない。

どうなってるんだ、こりゃ？

「我が輩の見た夢であるぞ」

夢がなんで光になって出てくるんだよ。

「知らぬ」

あつそう。

周りにはちゃんと形になってるのに、どうしてお前は変わらないん
だ。

いや、ちよつと丸くなったか。

「わからぬ」

いかな。

駄目だ、こいつは。

おい、チート。

『思うに——この緑玉が町のことを思い出したから、町の輪郭もはっ
きりしたんじゃないかな』

じゃあ、なんでこの緑玉は丸いままなんだ。

『そりゃあ、まだ自分が何者かわかってないからでしょ』
ふーむ。

おい、緑玉。

まだ自分のことが思い出せんのか。

「然り」

なんでそんな偉そうなんだよ。

『町を見て回れば思い出すんじゃない』

仕方ない。

見て回るか。

町並みを歩いて行く。

いつの時代か知らんが、なかなか綺麗な町である。

町の中にはひらりひらりと花びらが舞っていた。

見て回るのは楽しいが、特に何もわからない。

町の中心にある広場で足を止める。

足下には花びらが積もっているが、実際は草むらなので奇妙な感じだ。

「何かわかったか?」

それ、私の台詞。

お前もちやんと探せよ。

お前の姿があるかもしれないだろ。

「うぬは馬鹿よのう」

緑玉は軽く笑って答える。

「この景色は我が輩が見た夢であるぞ。観測者である我が輩はおるま
いて」

『せやな』

シユウも同意する。

おい、お前もこいつが誰か考えろ。

『それはもうわかってる』

え、わかっているの?

教えてよ。

『やだぴよん。それより、どうしてこの景色を夢に見たのかが気になるかな』

緑玉がこの景色を夢見た理由ねえ。

『もうちよつと言うと、ここで何があつたのか』

何が、ねえ……。

思いませんのか。

どうなんだ？

緑玉は何も答えない。

ふよふよと宙に浮いている。

『思い出したくないんだらうね。だから、この楽しげで穏やかな景色をずっと夢に見てる』

つらい出来事があつたのかもしれない。

無理に思い出させることもないか。

『それも一つの方法だね。……でも、たぶん彼がこのダンジョンのボスだよ』

撤回。やつぱり思い出させよう。

どうすればいい？

『夢の終点なんていつも同じだよ。突き付けてやるしかないんだ——現実を』

どうやって？

『俺のいた世界にね。こんなときよく使われる定例句があるんだ』
なんでそんな定例句があるんだ。

前から思ってたけど、お前の世界おかしいよ。

『魔法や竜が存在する世界と比べたらカワイイもんだよ。俺の世界じゃ喋ってもせいぜい戦艦だし。戦艦つてのは船の事ね』

……船が喋るの？

それも相当おかしいだろ。

よく考えたらお前が一番おかしいもんな。

『さて、それじゃあ続けて言ってみよう』

本題に戻り、シユウの言った内容を復唱する。

おい緑玉——

「なんぞ？」

——ペタルムは消えたんだ。

「っ！ 否っ！ ペタルムは今ここに——」

——いくら呼んでも戻っては来ない。

「これからもずつとこの時間が——」

——もう、夢見た時間は終わって、

「我が輩は、まだ夢を——」

——お前も、現実と向き合う時なんだ。

「ぬ……、ぬおおおおおおお！」

効果は抜群だ。

緑玉はぶるぶる震えて叫び散らす。

なかなかシユールな光景だな。

『来るよ』

何が、と聞く前に緑玉が点滅し始めた。

またしても周囲の光が強まる。

緑玉を中心として波状に景色が塗り替えられていく。

町が緑色の炎に包まれていた。

燃えているのは建物だけではない。

倒れた人に火が付き、宙を漂っていた花びらも炎とともに舞い上がる。

阿鼻叫喚とした町並みに鎧を纏った兵士たちがなだれ込み、生きている人間を串刺しにしている。

「おお……、燃えていく。我が輩を見上げる人たちが、遊び回る動物たちが——」

緑玉の形は安定しない。

あちらこちらに動き回り、嘆きをあげていく。

『ようやく自分の正体に気付いてきたようだね』

ああ、それぞれ。

けつきよく、こいつの正体はなんなんだ。

『上』

たった一言。

ここは広場の中心地。

上を見たところで何も無い。

そう思っていた。

しかし、空は燃えていた。

空一面を緑色の炎が覆っている。

「共に育った仲間たち、我が輩から生まれた子供たち、そして——」

近すぎてよくわからず、広場の中心から離れてみる。

ようやく私にも緑玉の正体がわかった。

「我が輩自身が燃えていく」

緑玉が広場の中心でひととき大きく瞬いた。

光が収まると、一本の大木が現れる。

太い幹の上には燃えている枝葉が広がっていた。

「あの日、あの夜、あの瞬間——」

大木はまたしても瞬く。

「全ては赤に包まれた」

緑色の景色は一変した。

大木を中心にすさまじい速度で緑が赤に塗り替えられていく。

『メル姐さん』

……ああ、そうだな。

これ以上、悪夢を見せる必要もないだろう。

赤々と燃える大木に近づき、シユウを構える。

今ならちゃんと刺せる気がした。

根拠はない。

シユウを大木に突き立てる。

確かに手応えがあった。シユウは沈み込む。

「ぬ、ぬおお……」

大木は唸りを発する。

野原に広がった町並みが徐々に消えていく。

武器を構えた兵士たち、燃えている家や人々、舞い散る花びらも光

を失う。

「うぬう！ 我が輩の夢があ！ 消えるというのかあ?!」

周囲をよく見ろ。

ここにはもう何も無い。

いい加減、現実を受け入れるんだ。

嫌なことは多いが、現実も悪いものじゃない。

じゃあな、木のお化け。もう夢を見ることもないだろう。

『あまり綺麗な言葉を使うなよ。臭く見えるぞ』
うるせえよ。

「我が輩……、また花を——」

大木の言葉は最後まで聞き取れない。

野原には月とアイテム結晶の光だけが残った。

翌日、予定通り私はネクタリスに向かうことにした。

今は、パンタシア野原に寄り道している。

シユウによると原っぱを覆っていた魔力はかなり減少したらしい。

ダンジョンごと消えてしまうのではと話していたが、ニワトリとり
スはまだ元気に駆け回っている。

昨日まではボスが見えないだけで、一応いたことになる。しかし、
私が消してしまった。

そのうちダンジョンが消える可能性もあるとシユウが話すので対
策を検討した。

ペタルムの広場の中心——今ではただの草むらに私は腰を屈める。

シユウで地面を削り、そこそこの深さまで掘り起こした。

昨夜、手に入れたドロップアイテム『夢から覚めたアルボルの苗木』
を掘った穴に入れ、土を戻す。

あの大木はアルボルという名前だったらしい。まあどうでもいい。
まだまだ小さいが、そのうち大きくなるだろう。

なんとなく空を見上げる。

今日もまた青空がどこまでも広がっている。

昨夜、見上げた幹や枝、花びらはどこにも見えはしない。

いつの日か満開の花を咲かせた大木が、また空を覆う姿を想像す
る。

……あれ？

首も痛くなってきたので視線を下ろした。
そこにある苗木の大きさに疑問を抱く。なんか大きくなってないか。

ちよつと目を離した間に枝が伸びて、葉っぱも増えているような……。

『なってる。異常な速度で生長してる。魔力を吸ってるのかな』
なんとまあ。

たいしたものだ。

さて、行くとするか。

やることもやったので苗木に背を向ける。

……ん？

気配を感じて振り返る。

もちろん誰も目に映ることはない。ただ――、

苗木についた葉が風に揺られているだけであった。

蛇足6. 67話「仮面の名前」

壁に並べられた仮面を見ていく。
四面にびっしり掛けられた仮面を見ると、むしろ私が見られている感覚に襲われる。

何も言わず、何も映さない空洞の目で淡々と私を見定めているようだ。

「どうですか？」

陰気くさい部屋で陰気くさい声が私に尋ねる。

『それでもって、メル姐さんは汗臭い、と。良いオチだ』

イカ臭い剣がなんかほざいているが無視。

周囲を見回していくが、「これだっ！」というものがない。

おい、ファツキンソード。

なんかいいのあるか？

『どれも一級品だね。……でも、この世界にあるはずのない仮面がある』

どういうことだ？

『右の壁。さらに、その一番上の段』

首を回して言われたほうを見る。

『銀色で、上向きの棘が額についてるやつ』

あれか。

右端の一番上に仮面と言うよりも、兜に近いものがある。

あれがなんなの？

『あれは——』

「ほう、『真っ赤な帚星』が目に残りましたか？」

『名前がちよつと違うけど……、間違はなく俺の世界の仮面だよ、あれ』

ほーん、そうなんだー。

『しかも同じ段の仮面は全部そうだね』

胡散臭い店主——仮面師ヌガドは先の仮面について解説を加える。

虚無、白面、怪盗加圧加熱食品、裏切り者、武士道など見た目

も様々だ。

この仮面三号と仮面四号はどこが仮面なのかわからない。四号については眼鏡にしか見えないし、三号はそもそもなんなんだ。

これらは数百年前に現れた伝説の仮面師カトウーによって作られたものらしい。

彼の仮面をつけた人たちが世界の舞台に立って活躍したようだ。

『活躍？ 暗躍の間違いじゃ……』

まあ、私にとつてはどちらでもいい。

とつとと気にいったものを選ぶことにする。

ちやうど目に付いた位置にあったそこそこのものを指さす。

「これをもらおうか」

ふむ、と言ってヌガドは私の指さした仮面を手取る。

「気に入られましたかな？」

気に入ったから、買うって言ってんだよ。

さすがにそこまでは言えず、「ああ」と頷く。

『違う』

なにが？

唐突に違うと言われても何がなんだか。

『メル姐さんに聞いてない』

ん？

疑問の返答はヌガドからだった。

残念ですが、と前置きをして述べていく。

「メル様は選ばれませんでした。当店には、メル様にお売りする仮面はございません」

——お引き取りを。

ヌガドが言うのと、彼が手に持った仮面が笑ったように小さく震えたように見えた。

こうして私は仮面を手に入れることなく店から出るようになった。

さて、私は再度ネクタリスを発売西ルートからセルニアへと向かつ

ている。

ネクタリスではオネット元公爵の家族から手紙を授かった。
アヴァール公爵の生誕祭には間に合う見通しだ。

現在はマスケという町にいる。

到着したのは今日の昼過ぎ、近くにあるダンジョンの情報は手に入れた。

明日、本格的に攻略をしに行く予定である。

攻略といっても初級ダンジョン。

そこまで気負うこともない。

日暮れにはまだ時間があるため、観光することになった。

マスケは仮面が有名な町のようにだ。

あちらこちらで仮面の出店が見られる。

一番良い店をギルドから紹介してもらった。

せっかくなので一枚良い物を買おうと思った訳だ。

結果は買うどころか手に取ることもすらできなかった。

なぜ購入できないのか尋ねた私に又ガドは言った。

「人が仮面を選ぶのではありません。仮面が被り手を選ぶのです」

つまり私は仮面選ばれなかったようだ。

仮面が人を選ぶとか、ちよつとなに言ってるのかわからない。

ぺらぺら喋るむかつく剣と同じくらい意味不明だ。

もうその辺で気に入った奴を買おう。

『それがいいよ。あの部屋にあった仮面を被るには、メル姐さんじゃ器が小さすぎる』

ひどい言われようだ。

ふん。どうせ私は才能がありませんよ。

仮面を被るのにも才能があるってどんだけだよ……。

別にどうだっていいだろ。仮面なんて被るだけなんだから。

『……もしもね。あの仮面を売ってくれると言っても俺が止めた。あの人はちゃんと選別してるんだよ』

なんで止めるんだ。

金銭的に問題ないだろ。

『言ったでしよ。メル姐さんじゃ器が小さすぎる。仮面に被られるよ。おとなしくその辺のやつにしなせえ』

仮面に被られるとか、訳わからん。

そこらの仮面とあの店にある仮面で、いったい何が違うって言うんだ。

『逆に聞こうか。そこらで売られてるお面とあそこにあつた仮面。何が決定的に違つてると思う?』

きれいさ?

あそこにあつたのは埃つぽかつた。

そこらの出店で売られてるやつのほうがよつぽど綺麗に見える。

『それは室内か室外かの問題かな。あの部屋は採光もあまり良くなかつたし』

じゃあ、上手に彫れてるかどうか。

『その辺の出店にも彫りが上手いのはいくつもある。むしろこっちのほうが上手いのすらある』

そうなのか。

じゃあ、あそこで買う必要もないか。

出店でもよい仮面はあるつてことだそうだし。

『出店にも、上手に彫られてるお面はたくさんあるよ。だけど、今のところ一級品はない。どれもせいぜい二級品止まり』

ああ?

上手に彫れてるかどうかが仮面の価値じゃないのか。

結局のところ、仮面つて見た目で判断される物だろ。

『なあんにもわかつてない……。あの部屋で何も感じなかつた?』

ひよつとしてマグロなの? もうちよつとそこらのお面をよく見てみることだね』

そう言つてため息一つ。

どうやら教えてくれる気はないらしい。

とりあえず黙つていてくれるのはありがたい。

今日の夜飯をどこにするか考えるついでに、仮面も見てみることにしよう。

そして翌日である。

昨日は実によく眠れた。

体調は素晴らしい。今ならダンジョンごと消してしまえる気がする。

ちなみに仮面はまだ買っていない。

あまり気に入ったものがなかったし、興味も薄れていったためだ。記念程度のもだからわざわざ買わなくてもいいかという結論に達しつつある。

とぼとぼ歩いてダンジョンの前に来た。

「なんとかお願ひしますー!」

浅黒い肌をしたやさ男が、ごつい男たちの一人にすがりついている。

「ごつい男どもは剣やらメイスやらプレートから明らかに同業者だとすぐにわかる。」

『でも、あつちはメル姐さんを同業者とすぐにはわかつてくれない……』

うっさい。

同業の男たちはやさ男を振り払ってさっさとダンジョンに入ってしまった。

やさ男だけがダンジョンの前に一人ぽつん。

関わりあわないのが賢明だ。

「どうしたんだ?」

……なぜだろうか。

賢明だと思いつつも話しかけてしまった。

『一人寂しくぼっちでいたところを自分と重ねてしまったじゃないかと分析する』

素敵な分析ありがとう!

できれば黙っていて欲しかったよ!

「それでどうしたんだ?」

気を取り直してもう一度声をかける。

「……冒険者の方ですか？」

冒険者にミエマセンカネツ?!

逆にきつく聞き返してしまった。

シユウは嘖き出して笑い転げている。

「しっ、失礼しました！ さっそくなんですがお願いがありません」

やさ男は必死に頭を下げる。

言葉を差し込む隙も与えず、お願いとやらを口にする。

「僕をダンジョンに連れていってください！」

あまりにも唐突だ。

どうしてダンジョンに行きたいんだ。

その理由を聞かせてくれないか、簡潔にな。

「仮面です！」

……?

意味がわからないという私の表情を読み取ったようでやさ男は言葉を接ぐ。

「仮面のためです！」

………?

ごめん、簡潔じゃなくていいからさ。

もうちよつとわかりやすく話してくれ。

「仮面を造るためです！」

チエンジ。

駄剣、あとは任せた。

そんな訳で私を介してシユウがゆつくり聞き取っていった。

どうやらやさ男はギレというそうだ。

なんとあの胡散臭い仮面師ヌガドの弟子らしい。

彼の造った仮面を見せてもらったが、素人目でも非常によく彫られていた。

『見た目だけは立派だね。お面としてはいいんじゃない』

言いたいこと言ってるな、こいつ。

だが、師匠のヌガドにもシユウと同じことを言われたとギレは話

す。

「見てくれは良いが、お前の仮面には足りていないものがある」

こう言われたようだ。

ほう。

その足りていないものが昨日シユウの聞いてきた質問の答だろうか。

それで何が足りていないんだ？

「魂です」

ちよつと何言ってるのかよくわかんないなー。

『うん。それだね』

シユウは師匠の言に同意している。

魂ってなによ？

『ちゆるちゆるつと喉ごしを楽しむやつ。あつ、冗談だから引かないで』

ときどき冗談を言ってるように思えなく感じるけど、まさに今そう感じた。

ほんとに冗談だっただろうか。

『冗談だよー。でき、あの部屋にいたとき、仮面に見られてる気がしなかった？』

……したな。

『外を歩き回ったとき、同じ感覚はあった？』

……いや、なかった。

でも、あの部屋は狭いし、仮面の数も多かったからじゃないのか。『違う。あの部屋にあった仮面は全て魂、あるいは霊や命と呼べるものがあつた。ずっとメル姐さんを見定めてた。例えば、一枚だけになつたとしても見られてる感覚はあるはず。というよりも、あれだけの数に見られてたら常人は気が狂うはず。やっぱりマグロか……』

なんかよくわからんけど、魂とやらが大切のようだ。

で、魂はどうやって仮面に入れるの？
「僕には経験が足りないそうです。もつと獣を、植物を、人を、その本質を——魂を見つめろ、と先生は仰いました」

さっぱりわからん。

本質ってなによ。魂って目に見えるものなの。

おい、やっぱりチートな目だと見えるのか？

『見えるわけないじゃん。草生えるわ〜』

シユウは片腹痛しと笑っている。実にむかつく。

『でも、感じ取れることはできる。見ることはできなくても、観ることはできるね』

だめだ。私の理解を超えた。

もういいや。私にはどうでもいいし。

それでどうする？

ダンジョンに行きたいなら、連れて行くぞ。

「いいんですか?!」

まあ、初級だからな。上級以上なら嫌だが。

罾も少ないと聞くし、突っ走ったりされない限りは余裕だろう。

おとなしくしてもらえれば問題ない。

「大丈夫です。無茶はしません」

さて、それじゃあ報酬の話だな。

「実は、お金はほとんどないんです。最近はモンスターも強くなったらしくて、冒険者の方々も余裕がないそうでした……。雇うこともできません」

ギレは申し訳なさそうに呟く。

いや、お金はたくさんあるからいらない。

そうだ。お前が造ったやつで良い仮面はないか？

「申し訳ありません。師匠から良しと言われたものでないと他人に仮面を渡すことはできないんです」

面倒なことだ。

まあ、報酬はあとでいいか。

最悪なくもいいし。早くダンジョンに行きたいからな。

そんな訳で初級ダンジョンを攻略し始めた。

足手まといが一人いるため進行速度は極めて遅い。

ギレは時折立ち止まってモンスターを見つめている。魂とやらを見ようとしている。

『あかん。駄目だ。心に余裕がない。これじゃ何も観えない』
「どうすればいいんでしょうか？」

ギレはシユウに教えを請う。

パーティーを組んで、ギレは喋る剣にとっても驚いていた。

「私も久しぶりに通常の反応を見て安心できた。」

『もつと楽しめばいい』

「楽しむ、ですか？」

『そう。どうせ魂なんて目を擦っても見えないから。もつとダンジョンを感じるべき』

「感じるとはどうやってでしょうか？」

『あー』

ギレは矢継ぎ早に問いをぶつける。

シユウはときどきイラついて変な声をあげる。

元々、男と話しながらないエロ剣である。

「どうやら今回も喋るのに嫌気がさしたようだ。と、思っていたが、楽しむ、か。方向を間違ったな。修正しよう……。あそこに棒きれが落ちてるでしょ。あれを持ってその辺のモンスターに斬りかかってみ」

シユウは返事をした。

ただし内容が滅茶苦茶だった。

おい待て、何をやらせる気だ？

『聞いてたでしょ。こいつにも戦わせてやって。大丈夫だって。共有スキルでそこそこ強化されてるから一撃じゃ死なない。まあ、男が一人死んだところで俺は一向にかまわんがね』

本音が出てるぞ。

とりあえず死ぬにしても報酬を受け取ってからだろう。

『それもそうだね。やばそうなら俺が合図するからメル姐さんが止めれば良い。このままじゃ物見遊山にもならない』
というわけだ。

がんばれ。

「え……。冗談、です、よね」

本気だ。

はよ行け。

ギレは私の本気なことに気づいたのか覚悟を決めた。

頼りない足取りで時々こちらを振り返りつつ、落ちていた棒きれを拾う。

これまたちよいどいいところで犬型モンスターが道角から出てきた。

ギレは私を振り返りどうしようと言葉で尋ねるが、私は顎をしゃくり「行け」と伝える。

彼の足は竦み、動ける様子ではない。

『ダンジョンでは足を止めた奴から死んでいくのだ』

たまには良いことを言うなと感心していると、モンスターが私たちに気づいた。

犬ころはより近くにいたギレへと一直線に駆ける。

ギレは腰を抜き、地面に尻餅をつく。

『もうちよい引き付けて……今』

おし。私も踏み込み、ギレの前へと走る。

すでに口を開け、彼に噛みつかうとしていたモンスターにシユウで斬り付けた。

初級の弱さもあって、一瞬でモンスターは光に消えアイテムが残る。

『どうだった？』

シユウが尋ねるものの、ギレは呆けて返事をしない。

仕方なく、私も尋ねる。

「目があつて、逃げたくて、でも目を背けることもできなくて、動けなくて、自分が、とても小さくなって……」

彼はぼつりぼつりと漏らしていった。

言っていることは昔の自分も感じていたからよくわかる。

自身の非力さを認めてくれるほどの強さを持つ場所。

それがダンジョンだ。

『よしよし。恐怖に触れたね。でも、まだ触れただけで観てない。さて、もう一回行ってみようか。次はちゃんと叩いてみよう』

ギレの表情に深い影が落ちる。

こいつ、ほんと男には容赦ないな。

その後、ギレは何度もモンスターと交戦した。

正確には交戦させられたと言っべきだろう。

服は土まみれ、顔や手も擦り傷が増えた。

幸い、肉体に重傷は負っていない。

「なんとなく……、わかりました」

『そっか。観ることができたのかな？』

「観えたのかはわかりません。でも、今なら掘り起こすことができそうです」

『掘り起こす、ね……。それなら彫れるかもね』

「はい。ありがとうございます」

まったくわからんが、どういたしまして。

彼の中で何かが目覚めた。

目覚めたと言うよりも、外見を見る限り何かを抜かれたというほうが近い。

幽鬼のごとくぼんやりと私についてくる。精神が重傷かもしれない。

本当に大丈夫なんだろうか。

ボスを倒しても、ギレの様子は変わらなかった。

ダンジョンから出て町へ戻り、彼はふらりふらふらと町並みに姿を消した。

とてもじゃないが報酬をよこせと言える状態ではなかった。

一夜明け、宿を出てセルニアへ発とうとしたところで来客があった。

胡散くさくて陰気くさい男が宿のフロントに来ていた。

ヌガドである。

「冒険者ギルドの方から宿を聞きました。是非とも仮面を受け取って頂きたい」

それだけ言つて、脇に抱えていた布たばをほどいていく。
布の中から一枚の仮面が出てきた。

『ほお』

シユウはしみじみとした感嘆の声を漏らす。

私も声を漏らすほどではないが、よくできていると思った。

彫りは決して丁寧とは言えない。

出店やヌガドの店に置いてあった仮面と比べると私でもわかるほどに雑な彫りと塗りだ。

だが、ぼんやりとした表情に何か不気味さ、あるいは畏怖を感じた。
モンスターを題材にしたものだろうか。

『それギャグで言つてんの?』

どういうことだ。

『これ、ギレが彫つたやつだよ』

えっ、これギレが彫つたの?

「然様です。昨日、ぼろぼろな様子で帰ってきたと思つたら、何も言わぬまま夜通しでこれを彫りました」

夜通しでか。

道理で荒いわけだ。

「奴は、それを完成させてすぐに倒れました。今は眠っています。代わりに私が届けに来ました」

おっと。

師匠自らとは、わざわざすまん。

「いいんです。メル様には感謝しています。弟子の面倒を見てもらつたようで」

いや、ダンジョンに連れて行つただけだ。

それで、この仮面は本当にもらつていいのか?

「もちろんです。これは貴方にこそふさわしい。奴もそのために彫つたのでしょ」

うむ。

報酬ということで遠慮なくもらっておこう。

こうして素敵な仮面を手に入れ、マスクの町を発った。

道中、もらった仮面をぼんやり見つめる。

良い仮面なのだろうが、なんとなく疑問が残る。

残った疑問がなんなのかもわからないので落ち着かない。

『ヌガドは言ってたよね——』

いつもどおりシユウがいきなり話を切り出す。

『ギレはダンジョンから帰ってきて、「何も言わない」まま徹夜でその仮面を造ったって』

ああ、そうだったな。

『造り終わってすぐ寝ちゃった、とも言ったね』

そうだった気がするな。

ちよつと自信ないけど……。

『じゃあヌガドは、どうしてメル姐さんがギレを連れてダンジョンに行ったことを知ってたんでしよう?』

はて?

そう言えばそうだな。

ギレに会ったのは昨日の朝。

ダンジョンに連れて行ったのも成り行きだ。

帰ってから話をしていないなら、私とダンジョンに潜ったとはわからないはず。

……

……他の人から聞いたんじゃないの?

ギルドの人に聞いたって言ってたよね。

『泊まってる宿を聞いたって言ってたよ。メル姐さんとダンジョンに潜ったってことはすでに知ってたんだ』

ふーん、そうなのかー。

で、なんで知ってたんだ?

『その仮面の名前はなんでしよう?』

おいおい、さっきの質問の答は?

話を変えないでくれ。

『話が変わってない。詰まるどころ、答はその仮面の名前にある』

ちよつと考えようかと思つたが面倒そうだったのでやめた。

たぶん昨日のダンジョンにいた犬のモンスターかそのへんだらう。

いや、猿みたいなボスモンスターかもしれない。

記念と言うことで前線に蹴り出したらいそう怖がつていた。

あの恐怖をこの仮面という形で表したのかもしれない。きっとそうだ。

うむうむ、よく見るとこのとぼけた顔がああボスに似てる感じがしないでもない。

果たしてあのボスはなんて名前だっただろうか？

まあいいや。

結論も出たし先に進むぞ。

止まると落ち着かなくなるからな。

『やっぱマグロか。急がなくても生誕祭には間に合うでしょ。その仮面はさつそく使うと思うよ。よかつたねマグロ姐さん』

相変わらずよくわからんことをわかつたように言っている。

結局、仮面の名前はわからずじまいだった。

蛇足07話 「クリスマスプレゼントだよ！」

シミリアに向かって北上中、薄雪郷ニクスに辿り着いた。名前どおり雪がうっすら積もり、白に覆われている。

雪が朝の日差しを反射し、斜面がきらめく。

……はて？

閑静な里だと噂で聞いていたが、ずいぶんと人が多い。

道の途中で多く見かけた馬車はどうやらここが目的地だったようだ。

『カップル多すぎ、爆発しろ』

なんで爆発？ まあ、いいや。

とにかくシユウの言うとおり、男女ペアが非常に多い。

『メル姐さん！ 俺たちも』ない。それはない。

先を言われる前にさっさと否定しておく。

『お早い否定なこと』

それにしてもこの人ばかりはなんだ。お祭りだろうか。

近くで荷物を持っていたおばさんを捕まえて聞いてみた。

「クリスマスだよ！ クリスマス！ なに、あんた!? ニクスのクリスマスを知らないの？ ニクスと言えばクリスマス！ みんなの常識でしょ!?!」

うるさく騒いだおばさんは忙しそうに走り去っていった。

みんなの常識って……、少なくとも私にはそんな常識はないんだが。

『そりゃ「みんな」の常識だもん。メル姐さん、ぼっちだからね。みんなの中に入ってたらおかしいでしょ』

怒ろうと思ったが、怒れば必死に否定しているようでみじめだ。

だが、黙っているのも認めたいのでみじめなのでやっぱり怒ろうと思っていると、シユウが先にキレた。

『誰だ!? こっちの世界にまでクリスマスなんてファツキンイベを持ち込んだサツク野郎は!』

なにやら声を荒げている。

お前、このお祭りについて知ってるの？

『知ってるも何も、クリスマスは俺たちの世界のイベントだよ』

ふーん、そうなんだ。

お前みたいなやつがこっちの世界にまで広げたのか。

それで、クリスマスって名前はわかったんだが何をする祭りなの？

『俺みたいな奴はこんなイベント広げない。……元は、とある宗教の教主様の降誕祭。家族でひっそり祈りを捧げる日』

家族で？ 見た感じ家族で祝うというよりもカップルが多いぞ。

しかもひっそり祈るところか、めっちゃくちや賑わってるし。

『元はね。元はそうだったんだ。残念ながら俺のいた国では恋人達がイチャイチャする聖夜ならぬ性夜だったんだ……。なんでこんな糞イベを持ち込んだんだよ』

あつ、そう。

じゃあ、私には関係ないな。

ダンジョンもあるし、まずはギルドだ。

そんな訳でギルドにやってきた。

みんなクリスマスとやらに夢中でスカスカだと思っていたが、なかなか賑わっている。

「今日はイヴですからね」

赤のトンがり帽子と服を身につけた受付嬢は苛立たしげに言った。

イヴだから？ どういうことだ？

「エルプティオ氷窟はクリスマスの七日前からクリスマス仕様に変わります」

クリスマス仕様？

「はい。明日からは通常仕様に戻りますが、今日の夜——クリスマスイヴに、クリスマス仕様に変化したモンスターが氷窟から出てきて郷を襲うんです」

そんなことって、あるのか？

『ふんつ、冒険者はリア充共の壁役か。俺は壁ドンの方に参加したいね』

シユウはご機嫌ななめだ。

……ああ、この冒険者達は防衛のためか。

「そのとおりです。防衛戦に参加してくださいますか？ ドロップアイテムも特殊ですからね。高値で買い取らせていただきますよ」
なるほど、納得した。

それなら冒険者も集まるだろう。

ところでダンジョンには入れるの？

「入れます。敵の種類とドロップアイテムが変わるため、一時的に難易度が中級から上級に変わります。そのため上級以上の入場許可証が必要になりますが、お持ちでしょうか？」

それは全く問題ないから大丈夫だ。

明日からは元に戻るんだよな？

「はい。先ほど申しましたように明日から通常仕様に戻ります」
くうー！

これはまさかっ！

今日と明日でダンジョンに行けば、一つのダンジョンで二度おいし
いってことか?!

「……はい。そう、なります、ね」

『メル姐さん、早く行こう、ねっ。お願いだからさ。羞、恥ずかしいよ
……』

よっしや！ ダンジョンだ！

通常のエルプティオ氷窟は中級である。

だが、先に聞いたようにクリスマス期間中は上級になる。

ダンジョンの地形は変わらないが、モンスターが強くなるようだ。
追撃で恐れられるキリングリスビー。

集団で突撃をしてくるアカツパナトナカイ。

ちよこまこと動き、氷魔法を連発するオマエラコオリス。

ここまではさほど問題ないと聞く。元がそこまで強くないそうだ。

問題はボスマンスターのリアジュウバクサンタ。

こいつが相当にやっかいなようだ。

この時期だけボス部屋から出てきて、モンスターを操る。侵入者の前には、なかなか姿を見せずこそそこをこちらを狩りに来る。

爆弾をあちらこちらに仕掛けこちらが罠にかかれば、不気味な笑い声だけが響くらしい。

今年のリアジユウバクサンタは特に手強く、多くの挑戦者が爆散された。

爆散といってもパーティーが男あるいは女だけなら、火傷と擦り傷程度で済ませて帰らせるようだ。優しい。

ただし、男女混合パーティーだと一片の容赦なく殺しに来る。

『わかる。とてもよくわかる。仲良くなれそう』

シユウはボスの気持ちがわかるらしい。

冗談半分で聞いていたが、途中からこの言葉を実感した。

『ストップ。その床、爆弾埋まってる』

『ここは回り道で行こう。カップルを分断させるのに、俺ならここで仕掛ける』

『今、姿を見せたのは罠。道の先にワイヤーがかかっているし、その先にもトラップ』

『声は聞こえたけど、この先は行き止まり、二人仲良く殺すなら絶好のスポット。引き返すべき』

……などなど、と指示をしてくる。

途中で疑わしくなると、無視して突っ込んでみたら言うとおりの罠があった。

シユウの指示で罠は避けているが、ボスも然る者。

追っても追っても、うまく逃げられる。

追い詰めたと思ったら爆弾が詰め込まれたダミーというのもあった。

聞いていたとおり、一人なので爆発はたいしたことなかった。

『手強いな。ほんとにソロで倒せるようになってるのこれ』

うむ。全く手応えがない。

最初は姿を見せてきたが、今では姿すら見せてこない。

『モンスターを最初に狩りまくったのは失敗だったかな』
そうだな。

追い詰めることができたのは、ボスがモンスターを利用してきたときだけだ。

モンスターを蹴散らしてボスに直行したが、不自然な抜け道から逃げられてしまった。

『戦い自体を避けられると厳しいね』

戦えば勝てるだろうが、逃げ隠れに徹されると難しい。

『しかも他の冒険者もないし』
それもあるな。

他に冒険者がいれば、数で追い詰めることもできるだろう。

しかし、今夜の襲撃に備えてか、ダンジョンにいるのは私だけである。

おい、こういうときこそ頭の使いどころだぞ。

なんか良い手段を考えろ。

『手段はあるよ』

なんだ。あるのか。

ほら言え。すぐ言え。さっさと言え。

『まあまあ。落ち着いて。そろそろ昼だし、一回戻ろう。ご飯食べろ！』

そう言えば、もう良い時間だな。

朝から何も食べてないし。あと、なんで命令口調？

……でも、ボスを倒してからでもいいんじゃないか。

『ボスを倒すには用意がいる。それを郷で手に入れたいけど……うーん』

倒すための用意、か。

それを手に入れるのが難しいと？

『いやあ、ううん。難しいんだろうね。でも、うまくひっかければなんとかなるかも』

はつきりしないな。

何が必要なんだ？

『囿』

返ってきたのはたった一言であった。

シユウの言う「囿」とは、男のパーティーメンバーのことだった。私が一人で挑むからボスはこちらを殺す気もなく、うろちよろ逃げ回っている。

そこで男女ペアを作り、ボスが殺しに来たところを返り討ちにしようという寸法だ。

『お話しできるの?』

ダンジョンから戻り、郷を歩いていると話しかけてきた。

他の人をパーティーに誘えるかということだろう。

いやあ、今は難しいんじゃないか?

みんな今夜の防衛戦に備えてるだろうしさ。

『普段ならできるとでも?』

できるよお。

ちよつと話しかけて、パーティー組むだけだろお。余裕余裕。

『ほおん。じゃあ、ささつとギルド行って、ちよちよいと話しかけてみてよ』

……ご飯食べてからにしよう。

それと、もうちよつと考えてみるべきだ。

一人でもなんとかする方法があるかもしれないぞ。

『今のところないよ。ちなみになんて話しかけるの?』

そりやお前、「ダンジョン行こうぜ」って誘えばいいだろ。

『ソロの冒険者はあんまりいなさそうだったけど、五人くらいのグループに話しかけに行ける?』

………できる。

『断られ続けても、話しかけ続けられる?』

………でき、ない。

『うん。俺もできないに一兆ジンバブエドル賭ける』

ピヨピヨうるせえな!

じゃあ、どうすりゃいいんだよ!

『まあ、逆ギレしないで右後ろを見たまえ』

振り向いてみると家の前で男女一組が話をしていた。

「俺、今からボス倒して来るよー!」

意気揚揚と宣言したのは男の方だ。

少年だった。見たところ十代後半といったところか。

「危ないから他の人と一緒に行くのよ」

おっとりした声でなだめたのは少年よりも年上そうな女性。

姉弟かと思ったが顔、髪型から判別するに違つてそうだ。

「わかつてるって。じゃあね!」

そう言つて少年は走り出し、私を横切つて駆けていった。

女性は手を振っていたが、ゆっくりと家の中に入ってしまった。

で、あれがなんなの？

『ええ、流れでわかんんですよ。さっきの少年を追いかけて行ってパーティーを組めば良いんだよ』

おお。なるほそ。

でも、他の人と一緒に組むつて言つてたぞ。

『どうせ夜になったらモンスター狩るんだから、今からダンジョンに行く馬鹿なんてメル姐さんと極々一部しかいないよ』

うむ。馬鹿で良かった。

明日もダンジョンに行ける。

きつとあいつも馬鹿なんだな。

『そうだね。ボスのドロップが目当てなんですよ』

ああ、なんか宝石だったよな。

それも曰く付きで相当高かつたはず。

『曰く付きつて……、それもそうか。「半永久の煌めきジュエリー」(Xmas ver.) それはサンタからがんばる貴方へのプレゼント。好きな人にプレゼントすれば、二人は半永久の輝きに」つて、もうギャグでしょ。なんだよ「半永久の輝きに」つて……LED照明も真っ青になるレベルだよ』

それな。

受付嬢がうつとりした表情で語つてたな。

私も聞いてて笑った。

『で、その馬鹿げた宝石を少年は手に入れたんだろうね、手に入るの今日までだし』

ああ、売ればめっちゃくちゃ高いもんな。

今年は全然手に入らなくて、値段が高騰してるっていうし。

今夜の防衛戦が最後のチャンスだから、みんな狙っているんだろう。

『うゝわあか、違うよ。好きな人にプレゼントするためだよ』

今のばーかかって発音めっちゃむかつくんだけど。

第一なんで好きな人にプレゼントするってわかるんだよ。

『さっきの会話見ててわかんなかったの？ 少年君めっちゃ女の方に恋い焦がれてたじゃん。おねえちゃんに受け取ってもらうんだあ、つてさ』

……うっそお。

普通の会話にしか見えなかったぞ。

お前の変態脳がなんでもかんでもそういうふうに見せてるんじゃないか。

『フツ、それより早く追いかけてよう』

あからさまに鼻で笑われた。

むかつくが確かに今は追いかけるべきだ。

ギルドに到着すると、少年がパーティーの仲間達と話しているところだった。

どうやらダンジョンに行こうと誘っているようだが、仲間達は乗り気じゃない。

夜まで待てば、チャンスはある。今行く必要はない、と逆に説得されている。

やっぱり説得はうまくいかず、他の人たちに話しかけ始めた。

次から次へと他のパーティーに話しかけている。

『メル姐さんにあれはできないだろうねえ』

うむ。

何度断られても、罵られてもめげずに他の人に話しかけ続けている。

あれはちょっと私には真似できない。私なら一人でダンジョンに突っ込んで。

『一人で行かないところをみるに、個人では上級の入場許可がないだろうね』

そのようだな。

それより、私はいつになったら話しかけられるんだろう？

今も目の前を通り過ぎて他のパーティーに話しかけに行つたし。

『メル姐さん、見た目だけで判断すると上級以上には見えないし、中級にも見えないもんね』

悔しいが、それは否定できないな……。

こちらから話しかけてもいいんだが、ここまでスルーされてこちらから話しかけるのも敗北感がある。

『やつすい敗北感』

なんか良い方法ない？

『はあ……、受付嬢のところに午前中稼いだアイテムを持ってけばいい。ボスのドロップアイテムの有無について聞かれるだろうから、ちよつと声を大きめに午後には取れるって言えばいい』

またもやあからさまな溜め息をして、それでもちやんと教えてくれた。

さつそく実行に移る。

受付に行つて、ドロップアイテムを袋からどばばっーと出す。

その後、受付嬢は予想通りの質問をしてきて、私は聞いていた通りに返答する。

受付嬢はボスのドロップがないのをやたら気にしていた。

さてどうなるか、と振り返るとそいつはいた。

『パーティーを組んでくださいー！』

なんとという耳の早さ、行動の速さか……。

思わず「あ、ああ」と頷いてしまったほどである。

なんにせよだ。

これでボスを倒すための皿を手に入れることができた。

ダンジョンに入る前に、ギルドに併設された飯屋に寄る。だいたいにおいて、ギルドにくつついてる飯屋やら酒屋はうまい。それに地元の間人がいないこともあるため、一人でいて疎外感がありもないのもグッド。

「お姉さん、極限級なんですか！ すっげえ！」
少年は叫ぶ。

ほんとやめてくれませんかね。

ほら、視線が集まってきて痛いんで。

「ここはシチーがおいしいんですよー！」

死地ー？

『違う。シチー、キャベツメインの野菜スープ』

ああ、そう。

じゃあ、それで。

「サール！ いつもの二つ！」

少年はグレルというそうさ。

黒混じりの赤い短髪がいかにも活発そうな印象を出している。ほつといても一人で話を続けてくれてるからこっちは楽だ。どうやらここは知り合いが働いている店らしい。

「——なんですよ。メルさんは俺に何か質問はありますか？」
特にない。

「またまたあ。何でもいいんですよ」

ほんとにない……あつ。

「おつ、何でしょう？」

さつきシュウと話したことが気になる。

ボスのドロップアイテムをどうするんだ？

「えっ、いや、それは」

顔が真っ赤になった。

困惑しているような、照れているようなにやけた顔だ。

マジかよ、シュウの見立て通りなのか。

『ふふん、何を隠そう恋愛マスターシユウとは私のことだよ』
はいはい。

「いや、実は——」

「ネージュさんにあげるんだよね！」

横から元気な声が割り込んできた。

両手に湯気のとつ皿を持ち、こちらもまた元気そうな笑みを見せている。

いかにも田舎の活発そうな女の子といった具合だ。

グレルと同じくらいの年だろうか。

「サール！ 俺の台詞を取るなよな！」

「はいはい、早く食べないと冷めるよ！」

軽く流して皿を私とグレルの前に置いていく。

「メルさん、こいつは幼なじみのサールです！ うるさくてすみませ
ん！」

「なに言ってるの！ あんたのほうがうるさいじゃない！」

どっちも賑やかだ。

賑やかというよりも……眩しい。

「それでボスのアイテムなんですけど、ネージュっていう近所のお姉
ちゃんにプレゼントするんです。お姉ちゃんはすごく優しくて穏や
かで俺のあこがれなんです！」

やっぱりあの女の方が。

そういうことがはつきり言えるのがすごい。

眩しすぎる。もしかして、これが若さってやつなのか。

『俺だっていつもメル姐さんにアピールしてるじゃん！』

お前のアピールは爽やかさも眩しさも感じられない。

泥臭いダンジョンのヘッドロみたいにねばっこくてしつこい。

『いつかそれが良くなってくるのさ』

絶対に来ない。

「ネージュさんみたいなきれいな大人の女性があんたなんか相手にす
るわけないでしょー！」

「そんなことないさっ！ ジュエリーを渡せばきつと見直してくれる

さ！ それにお前だって早く相手を探せよ！」

「うるさいわよ！ 私にはちゃんと相手がいるの！ 今夜もその人と会う予定なんだから！」

「嘘付け！ サール流の強がりだ！ お前みたいならうるさい女、好きになる奴なんていない！」

「っ！ 嘘じゃないわよ！」

「そっか良かったな！」

「ええ、良かったわよ！ 今度紹介してあげる！」

「はいはい！ 俺も紹介してやるよ！」

「どうせ無理だろうけど、せいぜいがんばって！」

「なんだと！」

「なによ！」

ゴホンツと咳き込んで二人の会話を止める。

これ以上聞いていると気が触れてしまいそうだ。

『もう触れてるじゃん。しえしえしえのしえでしょ。なに言ってるのや』

うるさい。

二人も周囲の視線と厨房から覗くオーナーらしき人物の圧力に気づいたようで、

「すみませんでした」

と、仲良く謝った。

『ああいうのは見えていて痛々しいね』

痛々しい？

恥ずかしいとかほほえましいの間違いじゃないか。

『やれやれだ』

自然にため息をされてから、それだけ言われた。

何のことだかさっぱりだが、スープはとてもおいしかった。

さて、皿を連れて再度エルプティオ氷窟にやってきた。

「よっしゃ、やりましょう！ 俺、ボスを倒したら姉ちゃんに告白するんです」

うむ。がんばれよ。お前ならできる。

シユウは黙っている。でも、なんか言いたそう。

パーティーを組んだためシユウの会話もグレルに聞こえてしまう。

シユウは基本的に男とは会話をしたがらないためだんまりを決め込んでいる。

やることについてはダンジョンに入る前に聞いていたので問題ないはずだ。

入ってからしばらくは二人一緒にボスを探していたが、あちらも警戒しているのか攻撃してこない。

モンスターがちよろちよろ出てくるだけだ。

地図にあらかじめ印をつけておいた地点で二手に分かれる。

どちらも一方通行で合流地点も同じだ。

「メルさんも気をつけてください！」

ああ、お前もな。駄目だと思ったたらすぐに私の方に走ってこい。

それと、小さく「すまん」と言っておいた。

二手に分かれてすぐにスキル「ステルス」で来た道に戻り、グレルを追いかける。

『ビンゴ』

予想通りボスは私を無視してグレルを襲撃しに来た。

モンスターがグレルの前にずらずらと現れる。

私は壁にぴたりとくっついて様子を見る。

グレルも戦おうとしていたが、勝てないと判断してさっさと逃げ始める。それでいい。

見えない私の目の前を走り抜け、その後をモンスターが追っついてく。

『じゃあ、さっさと行こうか』

うむ。

グレル達の行った方向とは逆方向——道の奥に私は進んでいく。

予定していた合流地点にはグレルはまだ着いていない。

代わりに一つの影が動いていた。

小さな体に大きな袋を担いだ……ゴブリンか？

立派な白髭に赤の三角帽子をぴよこぴよこ揺らす。

ふおっふおつと声を出しながら、地面と壁に大量の小箱を手際よく取り付けている。

シユウの予想通り合流地点に箱形爆弾を仕掛けていた。

先に進むためには、この道は絶対に通る必要がある。

グレルが引き連れるモンスターは私に倒されるだろうが時間稼ぎはできる。

その後は二人でこの場所を通過することになるだろう。

まとめて殺すには良い場所だとシユウが話していたが、ボスも同じ考えだったようだ。

後ろからこそそ近づくと、ボスは物音で気づいたがもう遅い。

振り返ったままの小さな首を横に薙いだ。

フォツと声をあげ頭が飛び、地面に落ちる前に光と消えた。

ドロップアイテムが二つ残る。

『久々に手強かったね』

うむ、ほんとにな。やっと倒せた。

あとはグレルが引き連れてやってくるモンスターを倒すだけだ。

『その前に——』

「メルさーん！」

道の向こうから泣き声混じりの叫び声が響く。

見れば大量のモンスターを率いたグレルが走ってきている。

おう、任せろ。今行くぞ。

近づいてくるグレルに向かって足を踏み出す。

『ダメッ！ 起爆スイッチがまだ生き——』

あつ、何か踏んだ——と思ったら、シユウの焦った声が急に聞こえなくなった。

同時に視界も失われた。思考も消えた。

『さすがというべきか、生きてるね』

最初に聞こえたのはシユウの声。

ついで目を開ければ、ほこりとがれきが入り交じった光景。

シユウの声以外がよく聞こえない。耳に刺すような痛みがある。『鼓膜が破れたかな。再生スキルですぐ治るはず。しばらくは痛いだろうけど我慢して』

わかった。

で、何が起きたんだ？

『メル姐さんが爆弾のスイッチを踏んで、爆弾が爆発した。とても単純』

ほんとに単純だな。

でも、体は動かし瓦礫に埋まったわけでもない。

耳が聞こえなくて、痛いけど徐々に治まってきているのがわかる。さすがチートだな。この程度ですんで本当に良かった。

『——メル姐さんはね』

あつ。

冷たい汗を背中に感じつつ、視線をグレルの方へ向ける。

瓦礫の端から人の手だけが見えている。

『やったか?!』

やってちやまずいだろ。

冗談言ってる場合じゃない。

『バッカ、姐さん。俺の今の台詞でね、奴の死亡フラグが生存フラグに成り代わったんだよ』

意味わからん。

さっさと行動に移ろう。

瓦礫をせっせとどかすと、五体満足でグレルが出てきた。

意識は完全にぶっ飛び、服も体もぼろぼろだがなんとか生きていた。

あちこちから血がだらだら出ている。

ひとまず起きるまで安静にさせておこう。

合流地点に戻り、かなりの時間が経つとようやく目を覚ました。

「あれ？」

おう、目が覚めたか。

「えっと、ダンジョンに入って、モンスターに追いかけて……そのあと」

すまん。爆発に巻き込まれてな。

「あ、はい」

これ、お前の取り分な。

ボスのドロップアイテムを渡す。

アイテムをぼんやりと眺めていると、徐々に生氣を取り戻してきた。

「倒したんですね！」

ガバツと体を起こす。

そうなるな。

ところで体は大丈夫か？

聞くと、立ち上がり体の各部を動かしていく。

「問題なさそうですー！」

さすがチート。共有スキルも伊達じゃないといったところか。

血は服にべったり付いているのに傷すら残ってない。

本人はウキウキで気にしてないからほっこう。

じゃあ帰ろうか。

「はいー」

元気な返事とともにエルプティオ氷窟の攻略は終了した。

『終了？ つーか、これからっしょ』

……不穏なこと言うなよ。

ダンジョンを出れば、すでに日が暮れていた。

グレルは急がなくちやと、駆け足でネージユお姉ちゃんやらの家に向かう。

ぼろぼろな服も気にとめず、雪に足跡をつけていく。

私も気になるので、こそこそ後を追う。

いよいよ家が見え始めると、ちょうど扉が開いた。

扉から昼に見たおっとりした女性が出てくる。

『うーん、確にかわいいけどさ。胸がないのはマイナスだよ』
黙ってる。

そんなに胸が重要か？

『あつたりまえじゃん！ 唐揚げだってもみもみしておいしくなるんだよ！ 沉んやおっぱいをや』
なに言ってるのかわからん。

「おねえ——」

グレルは発しかけていた声を止めた。

理由はおそらくネージュと一緒に出てきた男を見たためだろう。
立ち止まっているグレルに気づかず、ネージュと男は背を向けて歩いて行った。

『あちやー、恋人繋ぎ！ こりやダメですわ！』

ネージュの左手と男の右手は絡め合うように握られている。

聞いたことはなかったが、恋人繋ぎというようだ。

確かに二人の仲がただならぬことはわかる。
彼らはけつきよく私たちに気づかないまま、道を曲がり見えなくなった。

同時に、グレルはその場で膝を折り、頭を垂れた。

『Orz』

オルツってなによ？

『今のあいつの状態。失意体前屈ってやつ』

たしかに失意は伝わってくる。

『他人の不幸で今日もメシがうまいっ！ メシウマ状態！』

こいつ、ほんと最低……。

とりあえずなんか声かけとくべきだろうか。

『それがいいよお』

うむ。そうだな。

ゆっくりと近づき口を開く。

開いたものの何を言えいいのかわからずそのまま停止。

口が渴いてきたので、結局、何も言わずに閉じた。

「追いかけて告白しようと思ったんだ」

グレルがこちらに気づいたのか、訥々と漏らし始めた。

『で、でたー！ 聞かれてないのにいきなり語り出奴』

黙って聞いてろカス。

「でも……角を曲がったときの姉ちゃんの顔——」

項垂れ下を向いた顔から小さな水滴が雪の上に零れていく。

水滴は熱く、雪を溶かしてしまう。

「あんな顔……俺、見たことなかった」

雪に付けた手は痒くなるほどに真っ赤だ。

『しもやけ、もしかすると肝臓を悪くされているかもしれないよ』

あのさあ、ほんと黙っててくれないかなあ……怒るよ。

「姉ちゃん、ほんとに幸せそうでさ……。俺じゃ、あんな顔させられない。俺じゃ駄目だって気づいちゃったんだ。そうしたらさ。足がもう動かなくて……」

私には何も言えない。

そんな経験が私にはないし。

経験があつても私は口が回らない。

そもそも近づいては駄目だったんだ。

何も言わずに立ち去るべきだったのだ。

『……メル姐さん。俺が今から話すのは独り言だ。それを伝えるかどうかはメル姐さんに任せる』

いい加減に黙れよ、と言おうとした舌があまりにも真剣なシユウの口調に制され止まった。

『グレル。君は今日、一つ成長した』

シユウは静かに、珍しく綺麗な声で語り始める。

黙ることができない私はシユウの言葉を伝えていく。

『君はネージユの幸せを察し、君の中にある抑えがたく度しがたい気持ちを持ちを君自身の中に押しとどめた。これは並大抵なことではできない。少なくとも俺には無理だ』

君をお前に、俺の部分は私に直して伝えていく。

確かにお前じゃ無理だろうな。

『だからきつと、君は本当に彼女のことを好きだったんだよ』

うむ。

そうなんだろう。

人のことはよくわからんけどな。

私もダンジョン好きだからちよつとわかる。

しかし、こいつもまともなことが言えるんだな。

普段からもう少しマジメにしていれば……。

『君の好きなネージュも今夜はあの男のイチモツでひいひい言うんだ』

お前の好きなネージュも今夜はあの男のイ——

こいつ……やりやがった！

ハナっから——最初からこれを狙っていたんだ。

私にこれを言わせるためだけにマジメな口調をしていやがったな！

しかし、今さら黙るのも変だ。

マイルドに言い直していくしかない。

——えつと、今夜はあの男と寝るんだ。

グレルは「あああ」と小さくうめいた。

『ベッドの上でギシギシアンアン吸ったり舐めたりヌコヌコパコパコずっこんばっこんソイヤツソイヤツしてるんだよ』

………ベッドの上でいろいろと愛し合ってるんだ。

ソイヤツソイヤツは違うんじゃないだろうか。

『そんでもって来年十一月ごろに二人は三人になるんだよ……』

ん？ 来年十一月ごろに二人は三人になるんだ。

二人が三人？

意味がわからないからそのまま言ってみる。

『あのお姉ちゃんがママになるんだ。もう諦めろ』

おう……。ネージュも母になる。もう諦めろ。

そういう意味か。

私ともう諦めて、そのまま伝えた。

『そして、ともに戦おう。これは俺たちの性戦だ！』
いつしよに飲もう。今夜は私の奢りだ！

どうやらシユウの独り言は終わったらしい。

……………やっちまったな。

「うわあああああああー！」

グレルは泣き崩れた。

拳を、頭を何度も何度も地面に叩きつける。

落ち着け。

酒でも飲もう、な？

『あんだけ言つといて、落ち着けつてのは無理でしょう』

お前のせいだろ。

大部分はお前のせいだよ。

『トドメ刺したのメル姐さんじゃん。黙つとけばいいのに』

それからグレルは泣き続けた。

彼の脇を多くのカップル達が物珍しそうに歩いて行く。

憐れな姿もまた恋人達を楽しませるための装置にすぎないのかも

しれない。

『そうだね。あいつらにグレルの気持ちなんてわかんねえよ』

お前が言うな。

『デスクトップの背景に嫁の画像を設定してなあ！ 掃除しておいた
モニターの前にケーキと蝋燭を並べてよお。手に持ったシャンプン
をモニターの縁に軽く当てて「メリークリスマス！」つって、Xmas
sソングを歌う人間の気持ちなんぞ——あいつらにはわかるまいよ
……………』

もうまったく意味がわからない。

私に出来ることは、グレルが落ち着くのを黙って待つことだけだった。

泣き続け、殴り続け、頭を地面に打ち続け、そして黙り続けたグレルは静かに立ち上がった。

頭と手から血がだらだら流れているけど、大丈夫なんだろうか？

「行きましよう」

彼は滑らかに呟いた。

えっ、どこに？

「酒、奢ってくれるんでしょう」

あ、ああ、うん。

そうだな。行こうか。

「今日は飲みます！　ちゃんと付き合ってくださいよ！」

任せとけ。

私は人より少々酔いづらいからな。

「それとメルさん。これをもらって頂けませんか」

言葉とともに彼はボスのドロップアイテムを差し出してきた。

石の持つ意味を考え、私は真剣に返答する。

私はそんな石で磨くような安い女じゃない。

「あはははははははは！」

『ビヤハハハハハハ！』

一人と一本は大笑い。

今の、笑うところなかつたはずなんだけど？

『えっ……、本気で言ってたの？　メル姐さんも冗談がうまくなつたと感心してたんだけど』

グレルも笑いを止めた。

「違います違います！　そういう意味じゃないです！　俺にはもう必要ないってことです！　渡す相手、いなくなりましたから」

ああ、そういうことか。

それなら、ちゃんとそう言えよ。

『そうだぞ。メル姐さん自意識過剰だからテンパっちゃうだろうっさいわ。』

もういい、さっさと行こう。

それと、その石は自分で売るなり壊すなりして処分しろ。

「はいー！」

グレルは元気良く返事をして走り出す。

この方向だとギルドのところの飲み屋だろうか。

もう一回、スープが食べたいな。

『あっ、そうそう。さっきから言おう言おうと思ってたんだけどさ』

なんだよ。

つまらんことなら許さんぞ。

『あいつの血を止めた方が良い。倒れるよ。……遅かったか』
シユウが言い終わるのとグレルが倒れるのは同時だった。

倒れる途中で手をつくこともなかった。

いけない倒れ方だ。

『気絶。約四時間ぶり本日二回目。今日はたくさん血を流してたからね。血がたりねえ。ご飯食べる！』

言ってる場合か。

なんだかんだあつてギルドに併設された飯屋に来た。

グレルは起きなかつたので、寝かせたままにしておいた。

椅子に腰掛け、スープとつまみ、酒を注文する。

テーブルにボスのドロップアイテムを乗せて眺める。

キラキラ光ってるだけの石ころにしか見えない。

グレルにはああ言つたものの、私もこの石の処分に困る。

売っても入るのはお金だけだしなあ。

『売るなんてとんでもない。ほら、あげる相手がここにいるでしょ』

お前には絶対やらんぞ。絶対にな。

『もう照れちゃつてえ。可愛いんだから』

折りたくなつてきた。

おつと酒がきたから話は終わりな。

『あげるんなら相手は間違えないでね』

お前にはやらんと言っている。

『俺だつてそんな石ころいららないよ。欲しいのはいつだって女の体

ぢ』

せめて心とかそのへんにしろよ、生々しい。

『さっきの言葉、忘れないでね』

そう言うと、シユウは黙ってしまった。

やっと静かになったか。

ぼんやりしているとスープが運ばれてきた。

「お待たせしましたー！」

——元気な声とともに。

こいつはたしかグレルの幼なじみとかいう……、

『サールだね』

そう、サールだったな。

あれ？ お前、今夜は約束があるとか話してなかったか？

問われた少女は困ったように笑う。

『馬ツ鹿だなー。あんなの嘘に決まってるじゃんか』

嘘なの？

『そらそうよ。大好きな幼なじみを振り向かせるための虚言だよ』

えっ、お前グレルが好きなの？

「さすが極限級冒険者ですね。やっぱりわかっちゃいますか……」

サールははにかんでいるだけだ。

私には全然わからなかつたんですけど、仲がいいなー程度だ。

『につぶいなー。もしも世界が百本のノベルゲーなら、幼なじみは九

十組以上あるんだよ！』

じゃあ、私にはわからないじゃん。

『然もありなん』

あつさり前言撤回された。

「グレルは……、ネージュさんのところに？」

恐る恐るとサールは尋ねてくる。

黙っていてもいいのだが、別に言ってしまうてもかまわないだろう。

ギルドに来るまでに起きたことを、一部省いて説明していく。

「そっか……、そうでしたか」

複雑な表情で、少女は相づちを打っている。

もっと喜ばばいいんじゃないのか？

お前がグレルのことが好きだっていうならチャンスだろ？

「それは……」

続きの言葉は出てこない。黙ってしまっている。

『バーロー。そんな単純な問題じゃないんだよ。グレルがネージュのことを好きだつてことは認めてたんだからさ。グレルが傷心状態になつてるのは、サール自身の傷心にも繋がるんだ』
訳わからん。

なんでそんな複雑なことになるんだ？

好きならさつきと告白しちまえばいいだろ？

『好きだ、メル姐さん！』

なんで告白しないんだ？

シユウを華麗に無視してサールを問い詰める。

『怖いんだよ。もしも告白して断られたら、今のなあなあな関係がぶつ壊れるからね。あと、俺の一世一代の告白はどうだったんでしようか？』

まあ、ちゃんと告白しても普段の言動から流されるかもしれないな。

『あ、そうっすか』

サールはやはり黙つたままだ。

私がグレルに伝えてやろうか？

「それはだめです！」

首を必死に横に振り、否定する。

「いつか……いつか私が自分の口で伝えます」

そうだな。それがいい。

早い方がいいと思うぞ。あいつが他の人を好きになる前に。

『あるいは誰も好きになれなくなる前に』

「……わかつてます」

今日じゃ駄目なのか？

クリスマスイヴとかいう特別な日だろ。

それにあいつは今、日く付きの石ころも持つてるはずだ。

あと、私もどうなるか気になるから早い方がいい。

「グレルは来てないようですし、それにやっぱり本人を目の前にしたら言えなくなるかもしれないし……。ほ、ほら、それよりも早くスープを食べてください！ 冷めますよ！」

うじうじしていたが、ついに話を逸らし始めた。

「そう言えば、ずっと気になってましたけど、その白い袋はなんなんですか?」

ああ、これな。

私の足下には大きな白袋が置かれている。

ちょうど丸まった人ひとり分が入りそうな袋が――。

話を逸らしたかったようだがもう遅い。

スープはすでに温くなっているし、

「クリスマスプレゼントだ」

話はすでにグレルへと伝わっている。

袋の封を切れば、そこには一人の少年。

彼はすでに目を覚まし、固まっている少女と目を合わせた。

酒場に来る前、道端で倒れたグレルをどうするかでシユウに聞いてみると、

『おもしろそうだから、連れて行こう』

ということ、近くにあった白い幌布を拝借し、包んで寝かせたまま運んできた。

確かに状況は面白いけど、すごく気まずい空気が流れる。

先ほどまで賑わっていた酒場も、ただならぬ気配を感じて静かになっている。

「どうして……どうして今まで言ってくれなかったんだ?」

先に口火を切ったのはグレル。

『こいつもにぶいな。メルかよ』

悪口の代名詞に私の名前使うのやめてくれない?

「言えなかったの。……好きだったから」

サールはそれだけ応える。

なにやら若干やけくそ気味だ。いいぞ、もつと言え。

「そんなのわかんないよ」

そりやそりや。

私だってわからん。

「十五歳と十六、十七歳のときも、私はずっと待ってた！」

サールは声を張り上げる。

「何を？」

グレルは当然の疑問を投げかける。

「クリスマスプレゼントよ！」

と、間髪入れずに返した後、「告白もよ……」と小さく付け加える。

「グレルが来てくれるのをずっと待ってた！」

サールは目に涙を溜めて叫ぶ。

『なにこの女、ジョ○サンか？』

ほら、黙っとく。グレルが喋るぞ。

「そんなこと俺が知るわけないだろ！ サールが勝手に願ってただけだ！ ちゃんとやってくれないと、思いも願いも伝わらない！ 何も無いのと変わらないんだ！」

「どうやら今日の経験を元にした台詞のようだ。」

私もそう思う。思ってるだけなら意味なんてない。

他の冒険者も同意したのか、周囲の席で頷く姿がちらちら目に入る。

「十四のときから今年以外、毎年ずっとクリスマスと一緒に過ごすって誘ってきた！ プレゼント交換もしようって！ グレルは毎年、はいはいって頷くだけで、いつも遊び呆けてた。あんただって覚えてるでしょ！」

「ごめん、覚えてない」

それはよくない。

周囲の冒険者たちも非難の視線をグレルに向ける。

いつの間にか厨房からオーナーも出て来ている。

「俺だって、ネージユ姉ちゃんが好きだったんだ！ だから、ボスのドロップアイテムも手に入れてきたんだ！」

ん？

追い詰められたグレルはなにやら自分の話を始めた。

『あ、これは自己の正当化ですね。自分にもこれこれこういう事情があったから、俺の原因でお前に不条理があっても俺は許されるん

だつて話に持って行こうとしてる』
なるほど。

「俺だつて……俺だつて！ 自分の思いを伝えることに精一杯だつたんだ！ お前の事情なんかまで、察せる訳ないだろ！」

「っ！ 石ころなんかで気を引こうつてのが、そもそも間違いなものよ！」

カツとなったサールは売り言葉に買い言葉で返していく。

グレルは歯を噛みしめて、目をひん剥いている。

その後は、互いに罵倒のぶつけ合いだ。

そして、ついに――

「うるさいっ！……うるさいっ！ 渡す相手もないならこんな石！
壊れてしまえっ！」

どうしてそういう結論になったのかよくわからないが、グレルは袋から取り出した宝石を手に握り腕を振り上げた。

まさに腕を振り下ろし、宝石が床に打ち付けられん――といった瞬間、

「壊すくらいなら私にちようだい！」

金切り声が響いた。サールではない。

全員が声のした方を見ると、そこにはギルドの受付嬢がいた。

騒ぎが気になって見に来ていたらしい。

本人も思わず声が出ていたようで、この場にいる総員の視線を受けて我に返り、

「何でもないです」

と、無理矢理作った澄まし顔で答えた。

何にせよ、場は膠着してしまった。

緊張は中途半端に緩み、問題の二人も何も言えずに黙っている。

最初の状況に戻ってしまった。

『好きだ惚れた腫れたの話はもうやめろよ……。うんざりだ。ベタベタイチャイチャとかここで求められてないんだ。カテゴリーエラーなんだよ』

久々に喋ったと思つたらなに言つてんだ、お前？

『メタ過ぎた。ディレクターさん、ここカットで』
さて、どうしようか。

困ったときのシユウ頼み。
チラチラ見てみる。

『せっかくリセットされたんだ。一からやり直させればいいじゃん。
それが手っ取り早いよ』

一からってというのは、どういうことだ？

『もう一回ちゃんと面向かって告白させて、プレゼント交換させろっ
てこと。相手が受け取らないなら、それまでだったってことだよ』
なるほど。それでいくか。

そういうシンプルなやつの方が私好みだ。

『告白はサールから。プレゼントもだよ。冷えたスープなんかプレゼ
ントさせちやだめ。わかってるね』

忘れるなってそういうことか。

さすがの私でもそこまで言われればわかる。

サール。

呼びかけると、少女は泣き腫らした目で私を見下ろす。

「やり直せ。今日はクリスマススイヴで、ここにはすでにグレルがいる」
はい？ とよくわからないといった表情になる。

やりたかつたんだろ？

告白に、プレゼント交換、そして、一緒にいること——。

残念だが、告白はお前が先手だ。

思いはきちんと相手を見て告白しろ。

プレゼントは、これを私からやろう。

こんな雰囲気を作ってしまったせめてもの詫びだ。

そう言っつてサールの手に「半永久の煌めきジュエリー（Xmas
ver.）」を握らせる。

『うわ、受付の姉ちゃん、めっちゃこっちガン見してきてる』
渡す相手を間違えるなよ。

だが、最後の願い——「一緒にいられるか」はグレル次第だ。
私の言葉を聞き、少女はしっかりと頷いた。

そして、少女はグレルの方を向き直り口にする。

「グレル、私はあんたのことが好き。一緒にいたい」

少年は正面からその言葉を受けた。

目をぎゅつと瞑り、決意したように重々しく口を開く。

「俺はまだサールのことが好きなのかわからない。でも、決して嫌いじゃないし。一緒にいて楽しいと思う。今はそれしか言えない」

なんとも煮え切らない回答だ。

はい、か、いいえで答えればいいのに。

『まだ失恋してから今日の今日だよ。こんなもんでいいんじゃない。大切なのはきちんとサールの気持ちに向き合ってたってことよ。まあ、ここでノーって答えたら生きて帰れませんか。一種の脅迫だ』

話をしているうちに、二人はプレゼント交換に移った。

サールからも、グレルからもボスのドロップアイテムを渡す。

物質で見るとプラスマイナスゼロだが、交換することに意義があるんだろう。

二人がそれぞれ石を受け取った瞬間、両者の手の平に乗せた石が光った。

正確に言えば、最初からピカピカ光っていたんだが、ケバケバしい輝きが落ち着いた輝きになった。

「永遠の煌めきジュエリー……?」

どうやらアイテムの名前が変化したようだ。

周囲の冒険者もどういふことだとざわめきだつた。

「聞いたことがあります。特殊条件を満たせば石が変化する、と」
いつの間にか私の隣に立っていたギルドの受付嬢が呟いた。

それよりもこの受付嬢は眼球が飛び出しそうなほど、宝石見てるけど大丈夫なんだろうか。よだれも出てるし。

『ははっ、なるほど……。そういうことか』

やはり、こういうことを理解するのはシユウである。

ほら楽しそうに笑ってないで、解説早よ。

『今日の午前、ソロで潜ったときはボスを倒せなかったよね』

ああ、厳しかったな。

『あれね。きつと二人以上で攻略しないと倒せないようになってるんだ』

それはまたどうして？

『男女ペアで倒すのが第一の試練なんだよ。そんでもって、そのアイテムを互いに贈りあうことが第二の試練。最後に、両者の思いが偽りじゃないことかな。最後のは推測ね。片方からの一方通行じゃない思いを確認して、初めて宝石は真の輝きを放つんだよ』

シユウの言葉を私の口から紡いでいく。

「な……、なんだってー!!」

ちなみにこれは受付嬢の反応である。

他の冒険者たちも多少は驚いていたが、ここまでじゃない。

周囲は受付嬢の反応を冷ややかにみているが、本人はまったく気づいていない。

『ははっ、このダンジョンを作ったのが、クリスマスイベントを持ち込んだ奴なら仲良くなれるかもしれないな』

楽しそうにシユウは語っている。

なんだよ、お前。来たときはクソミソに言ってただろ。

だいたい何がそんなにおもしろいんだ。

『これ、主催者からの皮肉だよ。「オマエらクリスマスではしやいでもけど、それは形だけ、あるいは肉体だけの偽物なんじゃないの?』ってね』

シユウのこの解説を、私は口にしない。

ただ、目の前の少年・少女が手にしたモノが本物であることを願うだけにしておいた。

さて、いよいよ防衛戦の時間に近づいてきた。

『なるほど時刻は間もなく午後九時、性の六時間を襲うのね。まさに性戦だ』

ギルドの職員たちが「そろそろ集まってください」と声をかけている。

一緒にちびちび飲んでいたグレルも席を立つ。

サールも配膳の手を休めて椅子に座っている。

『へイ、姐さん。あのアホガキを止めてくれ』

グレルはパーティーの方に歩いて向かっている。

私も気づいて、慌てて肩を掴む。

おい待てコラ。

お前、どこ行くつもりだ。

「えっ、俺も防衛戦に——」

馬鹿かお前は？

『おま言う。いいか、クソガキ。テメエにやあな、俺ら独り身同盟軍の性戦に参加する資格がねえんだよ』

そうだ。お前が今夜一緒にいるべきはパーティーのメンバーじゃないだろ。

ここまで言うのと、グレルも気づき、今夜一緒にいるべき人間を見つめる。

少女も椅子から立って、グレルを見つめ返している。

グレルがパーティーを見ると、彼らはグレルにしつしと手を払う。

他の冒険者達も「帰れ」、「さっさと失せろ」と声を挙げている。

酒場のオーナーも、サールに「今日はもうあがっていい」と告げた。

周囲からの帰れコールが二人を優しく包む。

受付嬢だけは本気で帰れと言っているように見えるが、はつきりしない。

私もかつて似たようなことをされたが、こんな温かい帰れコールがあるとは思わなかった。

『さらっと自虐ネタ入れるのやめようよ……』

こうして二人は入り口で頭を下げて、郷の静けさに消えていった。

郷から出て例の受付嬢に導かれつつ担当の地点につく。

ここには私もいるためか他の地点よりも人員が少なくなっている。

「それでは皆さん。間もなく襲撃が来ます。くれぐれもアイテム回収に気をとられすぎないようにしてください」

毎年数人、高価買い取り目的の奴がアイテム回収に力を入れすぎて

やられることがあるらしい。

一種の冗談みたいなもので、他の冒険者も笑っている。

「それと私はフリーですので、ボスのドロップアイテムを手に入れた殿方はいつでもウエルカムです」

こっちは本気なのがわかるため誰も笑わないし、笑えない。

『チョロい受付嬢だ。我ながらヤバイ扉を開けちゃうかな』

その扉、たぶん鍵かかっているよ。

しかも鍵穴がないタイプ。

そうこうしているうちに時間が来た。

受付嬢はさつきと郷のほうに戻ってしまった。

しかし、あれだな。

この気持ちはなんだろうか？

『うん？』

たしかにあの二人はうまくいったようだが、こう……なんかスツキリしないというか。

『ああ、なるほどね。独り身だから素直に喜べないのね』

ちよつと違うような気がする。

『そんな入り組んだ心情にぴったしの魔法の言葉を教えてしんぜよう』

そんなのあるのか？

『ある。こう言うんだ——』

シユウが言ったのは前にも何度か聞いた言葉だった。

以前に聞いたときは意味がよくわからなかったが、今もやっぱりわからない。

ただ、シユウの言い方に含まれた妬み、僻み、羨み、憧れ、若干の祝福、そして——計り知れない諦めは伝わってきた。

やっぱり私の抱いている気持ちとは、いろいろと違う気がする。

しかし、そこは私とその気持ちをこめて言えばいいというだけの話。

そんな訳で私も一つ魔法の言葉とやらを言ってみることにした。

——リア充爆発しろ。

蛇足08話 「彼らが静止した日」

周囲はどこまでも白に覆われている。

雪が見たいと思つて北へ北へと向かった。

いくつもの町とダンジョンを越え、ついにやってきた雪原郷シミリア。

一週間以上も雪景色を歩いてきたので、もう雪は見飽きてしまった。

とりあえず上級ダンジョン——シレンティウム凍野があるので、攻略してさっさと南に戻ろう。

そんな訳でさっそくギルドにて情報を収集。

暖炉の温もりがたいへん心地よく眠つてしまいそうになる。

受付のおばさんも私が入ってくるまで机に突っ伏して寝ていた。

私の他に冒険者はいないので、仕方ないと言えば仕方ない。

そもそも冒険者はめつたにシミリアまで来ないらしい。

それもそうだろう。

スキル「凍結耐性」で、一定温度以下の寒さを遮断している私でもちよつと寒い。

それに外はほぼ一年中雪景色でおもしろみもありはしない。

他で稼げるなら、ここまで来る必要がないだろう。

何事もなく情報は集まった。

攻略は明日からにして、酒場へ足を向けた。

酒場の扉を開けると、一拍おいて視線が一斉に私へ向いた。

冒険者があまりいないのなら、ここにいるのは地元の住人になる。

よそ者に対する奇異や冷淡な視線、あるいは無視だ。

こういうのはよくあることなので慣れている。

慣れてはいても居心地は良くない。

酒だけ買って宿に帰ろう。

『あつ、メル姐さん。あいつ——』

顔見知りでもいただろうかと、たむろしている方へさり気なく顔を

向ける。

頬を赤く染めたおっさん達の中で、顔を青白くした青年がいた。灰色の髪から覗く二本の角が、頭と一緒に揺れている。

目が合うと、すぐ下を向き、口を手で押さえるが、

「う、うえ……うええええええええ」

——押さえきれなかった汚物が口からまき散らされた。

吐瀉をして店から追い出された彼は、遙か南にある極限級ダンジョンの主である。

今でこそ雪の中で野晒しにされてはいるが立派なドラゴンだった。やや風格に欠けるため私たちはゲロゴンと呼んでいる。なんでこんな所にいるんだ？

わかつてはいるものの聞いてみた。

「おしやけ、おいひいれす」

やはり酒を飲みに来たようだ。

以前もシミリアにいたとか言っていた気がする。

現在、ゲロも落ち着き、雪の上でごろごろ寝転がっている。

とても楽しそうだ。邪魔をするのも悪い。

アル中は放置して宿に帰ろう。

「わかひまひゆか？ 思いやりが大切なんれすよー？」

なんとアル中は宿までついてきた。

暖炉のある部屋でテーブルを挟んで話をしている。

話をするのは主にゲロゴンで、私はときどき相づちを返す程度だ。

こういうときのシユウはまるで当てにならない。

静観あるのみだ。……カスめ。

「だからですねー。スライムちゃんを引き取っていかなきゃならんのですよー」

ゲロゴンはお説教モードでぐだぐだ言ってくる。

南側世界の神々の天蓋でスライムが一匹居着いているらしい。

彼がスライムに何してるんだと尋ねれば、

「魔王様の帰りを待っているんです」と話したようだ。

たぶん魔王軍の幹部にいたスライムだろう。名前は忘れた。

「わかったらああ。早くあっちに行くー！」

なんか叱られた。

さすがにずっと待たせるのも可哀想な気がする。

いや、でも、別に待つててくれと頼んだわけでもないしなあ。

まあ、そろそろあっちも落ち着いたころだろう。

一度、戻ってみようか。

『それがいいよ。これ以上はまずいと思う』

久々に喋ったと思つたら、これだ。

もうちよつと私にもわかるように話せないのか。

まずいつて何がまずいんだよ？

「なーに言つてるんしゆか！ おしゃげはうまいっ！ おいし、うい、うっ、うえ……」

ゲロゴンは楽しそうにはしゃいでいたら、いきなり顔色を変えた。

さすがに宿屋で部外者が吐いたらまずいので、外に引きずり出し、雪の上に投げ捨てた。

明日、ダンジョンを攻略したら南の世界に行くでしょう。

ここから神々の天蓋へ行くのは面倒だなあ。

「そのゲロゴンに連れてつてもらえば？ アイテム使えば送つてくれるつて話してたじゃん」

ふむ。そうだな。

ちよつと使うのがもつたない気もするが仕方あるまい。

おい、ゲロゴン。

明後日くらいに神々の天蓋まで送つてくれ。

「うえええ？」

露骨に嫌そうな顔をされた。

お前はどうか考えても飲み過ぎだろう。

ちよつとは酒から離れろ。

「これでも飲む量が少なくなつたんれすー。前よりもお酒に弱くなつたんれすー。だから、だいじょうぶなんれすー」

ゲロゴンはガキみたいに頬を膨らまして答える。ガキか……。

シユウとは違う方向の苛立たしさだ。

「だいたいー、おしゃげに弱くなつたのはあなたに倒されてからなんれすー。責任とってお酒もつと飲ませてくらはーい」

シユウの腹で抱きつこうとしてきたゲロゴンのふざけた横顔を叩いた。

ばっちーん、といい音がしてゲロゴンは雪の上に倒れる。

カツとなつてやった。後悔なんてするわけがない。

『そうやって、すぐキレる……。若者の忍耐離れガー、人間離れガー』
お前だつて若者だろ。

『俺は斬れないと駄目なんだよ』

ああ言えば、こう言う。

もういい、今日はさつさと横になろう。

「もう怒りましたっ！ 『翼』を使われても、絶対、わっちの背中には乗せ——」

ゲロガキは頬をふくらましてぶんぶんと怒っていたが、途中で声を止めた。

はて？ 地震だろうか？

地面がちよつと揺れてるような……。。

『鳴き声も聞こえた気がした』

モンスターか？

シユウの言う、鳴き声とやらは私には聞こえなかった。

だが、シミリアの近くにあるシレンティウム凍野はフィールド型である。

モンスターがダンジョンの領域を抜け出して町を襲う可能性だつて考えられる。

「違う」

答はシユウではなくゲロゴンから返ってきた。

さつきよりもキリツとまともな表情をしている。

でも、先ほど私の叩いた頬が赤く染まりちよつと間抜けだ。

え、モンスターじゃないのか？

「わっちはモンスターか？」

ゲロゴンは少し思案したのち質問を返してきた。

なんで私の周りには、質問を質問で返す奴が多いんだろうか。

はい、か、いいえで答えて、解説をちよつと入れてくれるだけでいいの。

お前もいちおうモンスターじゃないのか。

言葉も話すし、人の姿も取るけど、元はドラゴンでしょ。

そもそもダンジョンのボスなんだからモンスターじゃないの？

「じゃあ、モンスターだな」

ゲロゴンはあつさりとした先づきの答を変えた。

『えっ、マジで』

モンスターなのか。

町が襲われる可能性もあるな。

『問題はそこじゃない……』

「静かにさえていければ、なべて世は事もなし」

酔いが覚めてきたのか口調がかなりマジメになっている。

というか、最後のどういう意味？

「飲み直してくる。『翼』は使うなよ」

ゲロゴンは赤い頬のまま私に言い聞かし、そのまま酒場の方へと消え去った。

………翼ってなんだ？

宿に戻ると女将さんに出迎えられた。

経験で語ると宿の女将さんと言えればおばさんが多い。

冒険者と見間違う体格のおばさんがノツシノツシ歩いている印象だ。

しかし、どうだ。この女将さんことノスイは非常に若い。

しかも一人で切り盛りしているときた。

客になめられたりしないか？

「そんなことはありませんよ」

『ノスイたそ、ペロペロ』

「町の方は子供のころから顔見知りでいろいろ親切にしてもらえま

す」

『ペロペロ』

「そもそも冒険者の方はあまり来ませんからね」
「それもそうか。」

でも、一人じゃいろいろ心細いんじゃないか？

この宿屋もそこそこ大きい。もう一人くらいいたほうがいいんじゃないか。

「……大丈夫です」

『彼女の左手見てみなよ、ペロペロ』

ちらりと彼女の手を見ると、指輪が嵌まっていた。

薬指である。パーティーリングではない。

もつと銀色のシンプルなものだ。

あとペロペロうるさい。

今さらになって気づいた。

左手の薬指に指輪……、私でも知ってる。

失礼した、もう結婚してたのか。

『デリカシーって言葉を覚えた方が良いね。人手は足りないと感じつつも一人で営業。亭主はもう死んだってことだよ。若くして未亡人！ くうく、そそりますなあ！』

お前にだけはデリカシーが欠けるなんて言われたくない。

本当に最低な奴だ。私もか……。

すまなかつた。

『ペロペロ』

馬鹿なことを聞いた。

『ほんまそれ』

昔から察しが悪いんだ。

『せやな』

本当にすまない。

『許すん』

ノスイにはきちんと謝っておく。

シユウ、貴様は死んじまえ。

「いいんですよ。あの人が死ぬはずありません。いつ帰ってきても『お帰りなさい』って自信を持って言えるように、私がすっかり店を切り盛りしていかないと」

彼女は薄暗い表情を消して、努めて明るく告げる。

『しかし、借金は重なり続け、ついには体を売ることに。「体は他の男のものになっても、心はいつまでも貴方のことを思ってるから」。そう思っていたノスイ。だが、体を重ねるうちに心も他の男に移ろいで……。 N・T・R！ N・T・R！』

ちよつと失礼、断りを入れて暖炉の前に移動してシユウをくべる。

悲鳴を上げていたが、距離を取ったためもう声は聞こえない。

うんうん。よく燃えているな。もつと炭を入れよう。

明日の朝にでも回収すればいい。

失礼を重ねて聞くが、旦那さんはもしかしてダンジョンで？

再びノスイの前に行き話を戻す。

彼女は「あの人」が「帰ってきてても大丈夫なように」と話していた。そうすると旦那さんは行方不明になった可能性が高い。

ダンジョンでは行方不明者が多い。

だいたい死亡だ。

だが、一年近く生きていることもある。

実際にそんなたくましい公爵を見てきた。

条件さえそろっていれば、生きている可能性も捨てきれない。

「先ほど地震があつたんですが、わかりましたか？」

どうやら彼女も質問には質問で返す系統だったらしい。

ああ、とひとまず質問には答える。

「あの地震は昔からあるんです。ここだとほとんど聞こえませんが、凍野の近くでは鳴き声も聞こえます」

そのようだな。

モンスターのものらしいぞ。

「その説もありますが、ここに暮らす人たちは『凍野の女王』と呼んでいます」

ずいぶん素敵なあだ名だな。

「はい。あれが聞こえると、口を噤むように教わります」

彼女は唇に人差し指を当てて、「静かに」と示す。

黙れってことか、どうして？

「口を開けば女王に凍らされるからです」

おとぎ話にでもありそうだな。

私がこう言うと、ノスイはくすりと笑った。

「そうですね。でも、ダンジョン付近では本当に凍らされるそうです。

目撃例も多く、あの人——エパネも見たと話していました」

彼女は懐かしむように右手で左手に嵌めた指輪をなでる。

そう言えば、夫の話をしていっただったな。

ようやく戻ってきた訳か。

「あの人は女王の正体を暴こうとダンジョンの近くをたびたび調べに行っていました。一年前の、あの日もいつもどおり調べに行っていました……」

——帰ってこなかった、と。

やはりモンスターに襲われた可能性が高い。

フィールド型で、ダンジョンの付近なら出てきても不思議はない。

「どの辺りを調べていたのか、教えてくれないか。もしも——」

私はそこまで言って、口を噤んだ。

「もしも、遺品が見つかったら持って帰ってこよう」

そう言おうとしていたが、それはいけないと気づいた。

もしも見つけて持って帰れば、より確実な夫の死を伝えることになる。

なんでもない、とお茶を濁す。

言葉を失い、私はぎこちなく明後日の方向を見つめる。

「ここ数ヶ月は地震も以前より多くなっています。モンスターの活動も盛んと聞きます。凍野に行くのなら十分に気をつけてください」

ノスイから女将さんとしての立場に重きが移った言葉を聞き、私は部屋に戻った。

翌朝、私は日の出とともに宿を出た。

北に行けば行くほど、昼の時間は短くなると知った。せつかくの活動時間を無駄にするわけにはいかない。そういえばシユウ。今日はなんだか黒いな。

『火に焼けてね。健康的な小麦色でしょう?』

ああ、そうだな。

でも、もうちよっと焼けてる方が好みだ。

今日も暖炉にくべてやるよ。

こんな具合でシレンティウム凍野の攻略は始まった。

攻略と言っても、そこまですることはない。

雪の上を滑走してくるスベルノペンギン。

ふわふわ浮いて魔法を唱える氷精。

やたら硬い動きのクマゴオリ。

モンスターはそこまで強くない。

強さはそれほどでもないが、数は多いし凶暴だ。

地面が雪で足場が悪い、それにときどき吹雪いて視界が悪くなる。

私にはあまり関係ないが寒さで動きが鈍るといふこともある。

モンスターの強さよりも環境の劣悪さで上級に指定されているのだろう。

重い足音とともに積もったばかりの雪が薄く舞い上がる。

最初は昨日の地震かと思ったが、吹雪の中に大きな影が浮かんでい

る。

『ボスだね』

どうやらボスがお出ましのようだ。

シレンティウム凍野のボス——ユキダルマンモス。

まずはその大きさである。

昨日、泊まったノスイの宿屋は二階建てであったが、同じくらいの

高さに思える。

全長や横幅もでかい。でかければ強いを体現している。

体は雪でできていて、斬っても潰してもすぐに再生する。

倒すには体のどこかにある核を破壊すればいいようだ。

雪でできているためか動きは遅い。

火魔法で足から削っていけば自重を支えきれなくなり倒れる。

あいにく私は魔法なんてほとんど使えない。

地道にシユウで削っていく手もある。

核の近くから再生するようなので、少しずつ斬っていった核の位置を見つかることもできる。

しかし、たいへんめんどくさい。

先ほどから試しているが、核の位置が変わるためなかなか見つからない。

核以外はただの雪のため生命力を吸うこともできない。

ほとほと相性が悪い。

仕方ないので奥の手を使うことにする。

おもしろくないので、ダンジョンではあまり使わないようにしているが仕方ない。

ゲロゴンブレスで周りの雪もろとも溶かすことにした。

上級のボス程度なら直撃させればだいたい即死だ。

しかも火に弱いなら確実だろう。

げろごーん

『ぶれーす』

使うときはなんとなく掛け声をあげるようにしているが、私もシユウもテンションが上がらない。

あまりにもあっけなく終わるため、おもしろみが削がれてしまう。

現にユキダルマンモスは足だけ残して消え去った。

残った足もすぐに崩れ落ち、アイテムだけ残る。

なんかおもしろくない。

そもそも一面が雪景色だからな。

シミリアまでの道中で見飽きてしまった。

地元の人だと雪の違いや地形の細かな違いがわかるようだが、私にはさっぱりだ。

もう帰ろっか、暖かい暖炉が恋しい。

『暖かい？ 暑いとかクソ熱いだけなんですけど』

どうやらシユウも暖炉が恋しいらしい。
そんな訳で帰ることになった。

帰り道、暇つぶしに雪だるまをどこまで大きくできるか遊んで
いた。

『前方に足音。けっこういるはず』

シユウの叫び声で前方を見る。

雪だるまが大きくなりすぎて、横に移動してようやく前が見えた。

モンスターか……うえっ！

『これはなかなか……』

進路上にユキダルマンモスが二体。

さらにその脇には敵がたくさん。

逃げようかと横を見れば左右にもユキダルマンモス。

後ろにもそのそと近づいてくる敵影有り。

引き付けてから逃げるかな。

ボスの足は遅い。雑魚を片付けてからさっさと逃げてしまおう。

『声？』

何を言い出すんだと思ったが、私にも聞こえる。

歌声のような高音がどこからか聞こえてくる。

きれいな歌声だな。

『そう？ 俺には叫んでいるように聞こえるけど……』

どうやら「凍野の女王」はこの声を表しているようだ。

『果たして女王様は歌っているのか、ブチギレているのか』

ついでに地面も揺れる。揺れはそれほどでもない。

ユキダルマンモスが近くにいたときのほうが揺れていた。

四方を囲んでいたモンスターの様子も変化する。

私に向かっていた集団が、それぞればらばらに散り始めている。

『なんか、やばそうだね』

うむ。

嫌な予感がしてきた。

逃げた方がいいかな？

『いや。地元住人の教えに則り、黙って見守ろう』
変化が現れた。

変化と言うよりも現象というべきだろうか。

逃げ惑うモンスター集団の上に白い光が現れたのだ。

初めは雪かと思っただが、雪にしては大きいし、風に流されずまっすぐ地面に向かう。

見渡せば、あちらかしこのモンスター集団上空に白光が出ている。

あの白光は見覚えがある。

『あれアイラさんの氷魔法と同じだね。あれよりも強力そうだ。メル姐さんの上にはないし、光からは距離もある。それに凍結耐性もあるから問題ないでしょう』

大丈夫のようなので、おとなしく観察に徹する。

雪面に落ちた白光は小さな音をたてて割れた。

周囲から連続して小さな破裂が木霊する。

雪面に氷のため色の変化はよくわからない。

ただ、氷結が広がる様子はモンスターの動きでよくわかった。

逃げ惑うモンスターが後続から先頭へと徐々に動きを止めていく。

威力はすさまじい。氷に耐性を持っているモンスターさえも凍っている。

そして、彼らはみな、光に消えていった。

周囲に静寂が戻った。

さて、モンスターは全て消えたが問題は残る。

これはいったい何が起きたんだ？

『女王と呼ばれる存在が氷魔法でモンスターを倒した』

私を助けてくれたのか？

『違うね。住人の言い習わし——女王の声を聞いたら黙ってたのは良い線ついてたと思う』

どういうことだよ？

『女王がうるさいやつ狙って氷魔法を撃ってる』

なんでそんなことがわかるんだ？

そもそも女王ってなに？

どこにいるんだよ？

『まず、女王の正体はドラゴンだね』

おっといきなり話が大きくなったぞ。

ドラゴンってあのドラゴン？

『ゲロゴンやネクタリスにいた緑龍のお仲間でしょう』

なんでそんなことがわかるんだ。

『昨日さ。ゲロゴンに、声——あときは地震だったか——について、モンスターが原因かって尋ねたら「自分はモンスターか？」って聞き返してきたでしょ』

そうだったな。

質問に質問で返されてイライラした。

『その前にもメル姐さんが同じ質問をして、あいつは違うって答えた。でも、二回目の問いは最終的にモンスターって答えた』

なんで一回目と二回目で答が違うんだよ。

あのゲロ野郎、馬鹿じゃねーの……。

『あいつ自分はドラゴンで、他のモンスターとは一線を画すと考えてたんだ。だから、一回目の質問には、声の正体はモンスターじゃなくてドラゴンだから「違う」って答えた。二回目の質問で、メル姐さんがドラゴンもモンスターのうちって言ったから、モンスターって答えた。そんな訳で声の正体はドラゴン』

よくわからんけどわかった。

女王はドラゴンなんだな。わかった。

『わかってないじゃん……。それで氷魔法撃った理由もゲロゴンが「静かにしてれば問題ない」って言ってたから、うるさいやつを黙らせるためって推察できる』

さよか。

じゃあ、あとは場所か。

『メル姐さんも独り言ぶつぶつ口にしたのに狙われなかった。足音、それに声の反響で判断してるんでしょう。そうすると居場所は地下でしょうな』

ふむ。

ドラゴンが地下からうるさいやつに魔法を撃ってきてることはわかった。

わかったけど、だからどうするってこともないな。

せつかくだから探してみるか。

『この三六〇度見渡す限り雪景色の中をどうやって探すの？』

ばっか、それを考えるのがお前の役目だろ！

なに言ってるんだ!?

『ホーリーシット！……未亡人のノスイさんは死んだ旦那さんがダンジョン近くを探してたって話してたね。場所を詳しく聞けばいいんじゃない？』

未亡人をつける必要ってあった？

うーむ、これ以上はあまり踏み入れたくないだよな。

『そうだね、傍から聞いてても失礼を通り越してたもん。じゃあ、残る方法は一つだね』

お、どうすんだ？

『ドラゴン仲間のゲロゴンに聞く。教えてくれるかは知らない』

よし。それでいこう。

黙秘したら内蔵を蹴り上げてやる。

『ひどい、さすが魔王……おっとそうそう、魔王で思い出した。地震が多くなったってノスイが話してたじゃん』

うん、話してたな。

最近は魔物の活動が盛んだとも言ってた。

そういや、ここんとこ魔物が強くなったという話を良く聞くな。

『そう。まさにそれなんだけど、メル姐さんが原因の可能性が高い』

……………えっ？

いや、私は関係ないでしょ。

なんでもかんでも私のせいにするのやめてくれる？

『魔物が活発になった時期なんだけど、メル姐さんが魔王になって、こつちの世界に帰ってきた時期と一致する』

時期が一致したからって私が原因とは言えないでしょ。

なにか他の要因があつたんじゃないか。

『あつちの世界で魔王を倒したときに、「魔族語翻訳」ともう一つ魔王専用スキルが手には入ってたんだよね。その名もずばり「魔王」』
初耳だけど？

『そりやあ今、初めて話したからね。で、効果がよくわからなかったんだよ。説明にも「魔王っぽくなる」ってだけしか書かれてないし。とりあえずセツトしてみたんだけど、やっぱり効果もわからなかった』
そんな訳のわからんスキル外してしまえ。

『外そうとしたんだけど「それを外すなんてとんでもない！」って怒られちゃった』

えっと、つまりどういうことなんだ？

『呪いのスキルですな。なんらかの条件を満たさないと外せないと思う』

なんらかの条件って？

『うーん。勇者に敗れる。魔王の座を他の誰かに譲る。魔王という地位そのものがなくなる。魔王として死ぬ……このへんかな』

他の誰かに譲るのが楽そうだな。

でも、スキルの問題ってモンスターが凶暴になるだけでしょ？

『俺もそう思ってたんだけど、メル姐さん本人も言動がよりいっそう粗雑で乱暴になってる。それにモンスターが凶暴になるってことが、どれだけ問題になるかはメル姐さんもわかるはず』

……確かにモンスターが凶暴になるのは大問題だったな。

でも、粗雑で乱暴ってそんな自覚ないんだけど。

『やっぱりか。ただでさえ頭がおかしいのに、近頃はさらにイカれるよ。一刻も早くどうにかしないとまずい。主に俺がまずい。あの頃のメル姐さんなら暖炉に俺を投げ入れるなんて鬼畜なことしなかった』

それは昔でも間違いなくやってた。

結局は我が身大事か、お前も十分おかしいぞ。

『俺は変わらないよ。むしろマイルドになっただくらいさ。これが——
大人になるってことなのかな』

はいはい。

それで私はどうすればいいんだ？

『早いことゲロゴンに神々の天蓋に連れていってもらう』
ふむ。地下にいるドラゴンを探してから連れてってもらう。

そんなこんなでシミリアに戻ってきた。

目的のゲロ野郎は酒場の前で横になっている。

「にやにかようれしゅかー？」

嫌々聞きましたという目で私を見てくる。

地下にドラゴンがいるだろ。

案内してくれ。

「……やだ」

少し間をおいて顔を背ける。

何度かお願いしてみるが、やだやだと駄々をこねる。

「なーんでわっちが案内しないとイケないんれすかー。らいたいー、
会ってどうするんれす？」

会ってどうする、と改めて聞かれると良い答がない。

せつかくだから見たい、それだけである。

「やめなしゃい。ムダムダ、時間のムダ。そんなことよりおしやけ飲
みませう。一名様ごあんなーい！」

駄目だ、話にならない。

確かにドラゴンを見てもすることないからな。

さつさとゲロゴンに神々の天蓋まで連れていってもらうとするか。

腰の袋から「灰かぶり竜の頼りない肝臓」を取り出す。

アイテム結晶を解くと、血なまぐさい匂いが充満する。

「お、良い匂いー。おつまみいー」

なに言ってるんだ。

お前を倒したときに手に入れたアイテムだ。

「ふえっ？」

ゲロ太は間抜け顔でこちらを見てくる。

ほれ、結晶解除したんだからさつさと神々の天蓋まで送れ。

「なに言ってるんれす？ 翼は？」

翼？

何だそれは？

この肝臓がお前を倒したときに手に入ったものだぞ。

「……これ？ えっ、わっちの肝臓？」

ゲロ助は蠕動している赤い臓器を指でつつく。

『思うに——ゲロゴン倒したとき、べろんべろんに酔ってたじゃん。特殊アイテムが手に入る条件がそれだったんだと思う』

それっぽいな。

モンスターの中には特殊な条件で倒すと、通常のドロップでは手に入らないアイテムを落とすものがある。

どうやらこのしょぼい肝臓もそれに当たるようだ。

「これ、もらっついていいれすよね。わっちのだし、ね？」

『メル姐さん。肝臓とりあげて』

おう。

ゲロゴンの手が肝臓に触れる前にさっと取り上げた。

どくんどくと気持ち悪い脈動が伝わってくるのを我慢する。

地下にいるドラゴンまでの案内、それと神々の天蓋までの送迎で返還してやろう。

「うう……、卑怯らぞっ！」

いかにも！ 卑怯者で違くないっ！

もしも断るならこのまま臓器を握りつぶしてやるっ！

今後もおいしい酒がたくさん飲みたいなら、首を縦に振ることだ！

悩み、足掻き、もがき苦しんだあげく、ついにゲロゴンは案内と送

迎を承知した。

本日、二度目のシレンティウム凍野である。

酒樽を抱えたゲロゴンが先導している。

ゲロゴンは肝臓を手にとると、そのまま口に入れた。

口から赤い液体がどろどろ流れ出てくる様は見るに堪えないものであった。

食べてしばらくすると「たった今、わっちは完成した。飲める！もつと飲めるぞお！」と叫んで酒場に突入。酒樽ごと持って出てきた。

今は鼻歌まじりでふらふら歩いている。ごきげんだ。

「ここれすなあ」

ゲロゴンが立ち止まる。

特に何の変哲もない雪景色だ。

ダンジョンの領域から外れているためかモンスターも少ない。

何もないようだが、本当にここなのか？

「おやあ？ わっちを疑ってなさる？ らいじよーぶ、らいじよーぶ。ほれっ！」

掛け声に合わせて、足下の雪を思いつき踏みつけた。

小さく軋む音が聞こえ、次いで何かが崩れる音が響いてくる。

「失敬しますよー」

ゲロゴンが私の手首を掴む。

なんだいきなりと思ったら、足場が崩れた。

為す術なく穴へと飲み込まれていく。

ゲロゴンも一緒だ。

「んゝ、そーい！」

またしても気持ち悪い掛け声をあげる。

見るとゲロゴンの背中にはごつごつした灰色の翼が生えていた。

落下速度も緩やかになり、少しずつ暗闇へと引き込まれていく。

上に見えている光もだいぶん遠く感じるほどになってようやく地面に足が届いた。

ドラゴンがいるのかと思っただが、横穴がどこかに通じている。

「まっすぐ行けばよすす。わっちはここで酒飲んで待ってるんで行つてらっさーい」

かろうじて聞こえる程度まで声を落として私に手を振る。

腰をおろして、酒樽に頭を突っ込み始めた。

お前は一緒に来ないのか？

「わっちはまだ死にたくありません。暗くなっても戻らなかつた

ら一人で帰るんれよろしくちゃん」

……死にたくないって、そんなにやばいやつなのか？

「白はわっちらで一番長生きれすよー。それに唯一負けなしなんれす」

なんだか誇らしげに語る。

こいつが灰色で、海にいたのは緑、ここは白のようだ。

それにしてもなんかやばそうだな、やっぱり帰るべきだろうか。

『負けなしというか、こんなところにいるから戦闘そのものがないんじゃない』

まあ、出会っても戦闘になるとは限らない。

ちらっと見て帰るだけでいいだろう。

「お前が白を覗くとき、白もまた等しくお前を覗く——」

ゲロ助は真顔に戻ってぽつり。

「それで終わりれすよー」

すぐふざけた調子に戻り酒を呷った。

暗い道をとぼとぼ進んでいく。

私の足音だけが残響としていつまでも耳に残る。

『人がいる？』

そこそこ進んだところでシユウが口を開いた。

道の先には確かに人が立っている。

私に背を向けて、直立不動だ。

ゆっくりと慎重に近づき、「おい」と肩に手をかける。

その男はぴくりとも動かなかった。

目はたしかに開かれ、口も少し同様に少し開いている。

死んでいるようには見えない。すぐまた動き出しても不思議ではない。

どうなってるんだ、これは？

『まずい……』

シユウがぼやくと同時に道の奥から気配を感じた。

《うるさい》

脳内に響くのは高音の冷たい一言。

道の先にはなにやらきらきら光るものがある。

透明な石だった。私よりもやや大きい柱状の水晶が浮いていた。水晶の中に入っている何かが気になった。

白く小さな体を丸めている。

《うるさい！》

白く小さな何かが動いた。

上下に開いた隙間から、白に淡く光るものが見えた。

あれは――

『メル姐さん！』

――眼か？

眩きの途中でシユウが叫んだ。

なんだよ大声出すな……あれ？

『よかった、よかった。大丈夫そうだね』

……ん？

何が大丈夫なのかわからない。

それよりも今のこの感覚だ。

視界は広く、自分の声が聞こえず、立っているのに足に感覚がまるでない。

あまり好きになれないこの感覚は記憶に残っている。

これはあのスキルか？

『そう。無敵スキル。いやー、今回ばかりは死んだかと思ったよ』

ゲロゴンを倒したときに使った私の切り札。

よくわからんが外部からの攻撃を一切受け付けなくなるものだ。

その代わり私の五感も消えてしまうため、あまり好きになれない。

それで、いったいなにがどうなっているんだ？

死んだかと思っただって、別に何もされてないだろ？

『気づかなくても仕方ないね。時間を止められたんだ』

はい？

『目の前のドラゴンが眼を開くのとほぼ同時に周囲の時間が止まった』
いやいや、なに言ってるんだ。

『メル姐さんもその男と一緒に仲良く止められてたよ』

私の前に立っている男は未だ動かず道の先を見ている。

道の先には水晶に入った小さな白竜。

赤ん坊みたいに丸い体で、翼もまだ小さい。

眠そうな目は開かれ、白く光る瞳がこちらをぼんやりと見ている。

……さて、どうするべきだろうか？

『もしかしたら話しかけてるのかもしれないけど、スキルのせいで声は聞こえないね。スキルを解いたら、また止まっちゃうし。もういつそ倒しちやえば』

そうするか。

倒したあとでいろいろ考えよう。

『それと一つ朗報。そこで止まってる男はエパネさん。足を怪我してるね』

エパネって誰だよ……。

『未亡人……おっと、まだ死んでなさそうだから未亡人は正しくないか。宿屋の女将——ノスイの旦那さんだよ。ここでずっと止まってたみたいね』

えっ、これがノスイの旦那さんか？

ほんとに生きてたのか。

止まってるけど……。

というか、なんでわかるの？

『昨日と同じだよ。左手の指輪。セットになってるみたいね』

彼の手に嵌められた指輪は昨日、ノスイの指に嵌められていたものとよく似ている……気がする。

あまりはつきりと覚えてない。

『ドラゴンを倒せば、この兄ちゃんも動き出すんじゃないかな』

よし。そうと決まればやるしかないな。

シユウを構える。

感覚こそないが、一步、また一步と白竜に近づいていく。

白竜も眼が効かないと気づき、魔法を撃ってきた。

だが、無駄だ。今の私にそんなものは効かん。

空中を水平移動する水晶を蹴りつけ壁に足で押さえつける。

『こ、これは久しぶりに出るのか？　メル姐さん秘技中の秘技！』

水晶の中にいる白竜に狙いをつけシユウを水平に構えた。

『あらゆる敵を一撃のもとに屠ってきた——その名も

「竜穿つ悪臭一閃」だ—— Ya——」

大それた解説の中、シユウを白竜に向けて突き刺す。

刺突は水晶を突き破り、白竜本体も貫く。

光に消え、残るはアイテム結晶のみ。

——静寂に生きる白き竜の瞳。

アイテムを袋にしまう。

「なんだあんた。どこから出てきたんだ？」

後ろから声が聞こえた。

どうやらシユウが無敵スキルを解除したらしい。

振り向けば男が一人、状況がわからないとうろたえている。

『たぶんすぐ復活するから、その男さっさと連れて行って』

うむ。

説明は後だ。出るぞ。

「ちよつと、待て、何が……」

男の首根つこを掴み、有無を言わず来た道を駆け足で戻る。

「信じられん……」

素に戻った口調でゲロゴンが出迎えてくれた。

ぽかんとした顔で私を見つめている。

どうでもいいから上に連れて行ってくれ。

「一人ずつじゃないと無理だ」

じゃあ、こいつからだ。

ゲロゴンはエパネと酒樽を掴みそのまま上へ飛んでいった。

酒樽置いていけば、二人を一度に持っていけただろ……。

『……来た』

後ろを見れば水晶が淀みなくこちらに寄ってきていた。

眼は閉じたままで、こちらを止める気はないらしい。

《何者かは知らない》

冷たい声が頭に響く。

メルだ。

《大きい声で喋るな。頭に響く。口を開かないと会話ができないとは不便だな》

そうか？

《うるさい。もう喋るな。……やられたのは初めてだ。だが、あの静寂はなかなか心地良かった。名前は覚えておこう》

かなり小さく喋ってもうるさいらしい。

それなら黙るしかない。

《用が済んだなら帰れ。うるさくてかなわん。貴様もだぞ、灰っ子》

それだけ言うと、水晶は暗闇の奥へと消え去ってしまった。

「流石にばれていたか」

空から降りてきたゲロゴンは小さく一人ごちる。

そのまま私の手首を掴み、地面を蹴って縦穴を飛び出た。

外に出た私たちはエパネを連れてシミリアへ戻ることにした。

まったく一日に行ったり来たりと忙しい。

エパネには、彼自身に起きた事情を話した。

説明はしたが、自分が行方不明になってから一年以上も経過していることが信じられないようだ。

別に信じられないなら信じなくていい、と納得のいく説明は諦めた。

そもそも、私の冒険譚はだいたいにおいて信じてもらえない。

実際に身をもって知ってもらうのが一番手っ取り早い。

シミリアに着くとゲロゴンは当然の如く酒場に向かった。

肝臓も戻ったから徐々に朝まで飲むぞー、と意気込んでいた。

明日はシミリアを発つつもりだが、あいつは大丈夫なのだろうか。

まあ、どうやってでも飛んでもらおう。

さて、ゲロゴンと別れた私たちは宿への雪道を進む。

彼も建物の様子やすれ違う住人の反応を見て、ようやく事態を飲み

込み始めた。

宿の扉を開け、エパネは入り口に立ち止まる。

私が帰ったことに気づいたのか、ぱたぱたと階段を下りる音が響く。

「メルさん。無事に帰られま——」

ノスイの言葉は途中で止まった。

私の後ろに立っている人物に気がついたようだ。

エパネも何を言えればいいのかわからないのか、黙っている。

二人の時間が静止した。

『「どこの女のところに行ってたのよ?!」、「女王様の具合が良かったんだZE!」、「キィー!」』

ちよつと黙っててくれる?

邪魔をしたらいけないと、私は彼らの間から離脱。

暖炉の前の椅子に腰掛け、成り行きを見守る。

シユウは暖炉の中で暖まっている。

彼らをと見れば、ちよつどエパネが口を開くところだった。

「その……ただいま。遅くなつて、ごめんな」

努めて明るく帰宅の挨拶を口にする。

笑つてごまかしているようにも見えない。

ノスイは首を横に振り、潤んだ瞳で亭主を見つめる。

彼女の返事など決まりきっている。

「お帰りなさい」

たったこれだけの言葉を、一年以上も胸に抱き温め続けてきた。

静止していた彼らの日々が、今、また動き始める。

こうして私の雪国巡りは静かに終わりを告げた。

蛇足09話 「バカがチートでやってくる！」

山越え川越え谷越えて、南の世界にまでやってきた。

「魔王」とかいう迷惑きわまりないスキルを外すためにわざわざだ。魔王城の頂上から見る景色は魔物がちらほら映りなんだかダンジョンっぽい。

正確には魔物ではなく魔族らしいが、違いがよくわからん。

『フハハッ、我こそが魔王である！ ひれ伏せ、下民共！』

なんだか舞い上がってる馬鹿もいる。

魔王のスキルを外す手立てはこの馬鹿が考えているらしい。

1. 魔王として死ぬ。
 2. 魔王らしく勇者に敗れる。
 3. 魔王の座を他の誰かに譲る。
 4. 魔王の地位そのものがなくなる。
- 大きく分けるとこの四つらしい。

まず1は無理だ。

死ぬとか話にならない。

『話にはなるけど完結しちゃうよね』

……うん？

ああ、うん、そうだな。

よくわからんけど、どうでもいいから頷いておく。

次に2も無理だ。

この世界には聖女なるものはいるようだが、勇者はいないらしい。そもそも勇者ってなによ？

『勇気ある者かな？』

まんまじゃん。

3が簡単そうだったので、二元魔王に「槍と一緒に魔王の座を返す」と言ったが聞く耳もたれなかった。

押しつけてみたが、スキルはやっぱり外れない。

『魔王とは押しつけてなるものではなくなるべくしてなるものなのだ！』

それで、4がよくわからん。

『魔王って呼ぶ奴を殲滅すればいいよ』

つまり？

『魔族の全滅ですな。もしかすると人間もかな』

視線を城の外に向ける。

地表や空には多くの魔物が映っている。

見えないところも含めると、とてもじゃないが全滅などできない。

『そもそもメル姐さんがこっちの世界で魔族を殺しても復活するからね』

そういえばそうだった。

こっちの世界では、魔物を倒してもしばらくすると復活する。

この復活のせいで私は魔王になってしまったのだ。

結局、全部ダメじゃないか。

どうすればいいんだよ。

『魔王ライフをエンジョイしようぜい！ まずは四天王の再編成だ！』

そんなことより私はさつきとダンジョンに行きたい……。

『元魔王は四天王入り決定だよな。ちよつと精神が枯れてるけど確かに強いし』

まるで私の話を聞いてない。

……まあ、たしかにあいつは強かったな。

シユウで斬りつけても、かすり傷程度だったから相当硬いだろう。

名前もあつたが、なんだか長いし発音が難しいので元魔王で定着してしまった。

『カルロも統率力、偵察力、魔力に文句なし。人の言葉もわかるし便利。でも、名前がなんか死亡フラグなんだよね』

よくわからんけど、確かにあの鳥はいろいろ使えるな。

『紫スライムはちっちゃくなつたけど、そのうち戻るらしいし』

フグイラとかいう片言を話すスライムは神々の天蓋——こっちの世界では灰竜の聖域と呼ばれる場所ですつと私の帰還を待っていたらしい。

どうにもあの場所は魔力逋減の効果があるらしく、フグイラは手のひらサイズまで縮んでしまっていた。

アレマなんちゃらにいれば、ある程度戻るということで置いてきた。

そのうち迎えに行くとは行つといたから問題ない。

『問題はセルモンドだね』

でかいゴーレムみたいな奴だな。

たしかに、あいつはあまり強い印象がない。

本人曰く「私にやられた」と話していたが、倒した記憶がそもそもない。

『他の魔族にはそこそこ慕われてるみたいだけどねえ』

たしかにあいつの周りには多くの魔物がうろちよろしていた。

いや、別に羨ましくなんかないし。

『ご先祖様が、初代魔王の忠臣だったかなんだか知らないけどさあ。今のあいつはたかがしれてる。チンピラの頭がいいところよ。悪しき習慣はここで断ち切るべきだ』

うん？

セルモンドを四天王から外すってことか？

『そらそうよ。メル姐さんが目指すのはちんけな王じゃない。大魔王だよ』

いや、違う。

そもそも魔王をやめにきたんだ。

『その家来の最高位たる四天王——その一柱に奴がふさわしいか？否だよ』

どうもこのクソ野郎は完全に私を魔王にする気らしい。

『さあ、さっそくセルモンドに代わる四天王候補を公募しよう。大丈夫、良い素材が集まるはずだよ。あんなゴーレムもどきでもやれてたんだからね』

シユウはいきいきとしている。

こいつが楽しそうだとなんだかむかつくのはなぜだろうか。

「魔王様——セルモンドが戻りました」

階下から元魔王が伝えてくる。

噂をすれば、どうやら当の本人が城に戻ったらしい。

『タイムリーだね。直接会って、四天王の解雇通牒といこうじゃないか。イエー！』

ひどいな、こいつ。

「――南西の草原地帯で武装した雌の人間を捕らえ。その処遇について伺いたいとのことですよ」

おっ、こつちで人間とは珍しい。

ゲロゴンの里で見たきりだ。

『さすが、セルモンドと言わざるを得ないな。聞かずとも我が意を正確に酌み取り、人間を生け捕りにしてくるとは――。四天王の名は伊達ではないということか』

……さつきと言ってること違ってない？

『こまけえこたあいいんだよ！ 武装した人間でえ！ しかも、雌う！ これは女騎士つしよ！』

まあた、馬鹿を言い始めたよ……。

なんにせよ捕まった人間というのは気になるな。

そんな訳で会いに行くことにした。

確かに人間の女性だった。

確かに武装もしていたのだろう。

確かに捕らえたと言っても良いのかもしれない。

ただ……生きているとは言い難い。

鎧だっただと思われるモノはぼろぼろに崩れ、その中はグチャグチャ。

腕も足もついているのが不思議なくらいにズタボロで目を向けるのも心苦しい。

胸も見えているから女性だろう。ただし胸以外に皮も骨も見えている。鮮やかな赤は内蔵だろうか。

『はっ？ 生きてるね』

さすがのシユウもこの惨状を見て、騒ぐことはなかった。

私は、これを生きてると言いたくない。

『いや、そういう哲学的な意味じゃなくてね。生物学的な話』

小難しい話をする気分じゃない。

さっさと死なせてやろう。

そう思い、シユウで心臓あたりを突き刺した。

『へえ、こうなるんだ』

突き刺した瞬間、死に損ないは光となって消えた。

後に残ったのは淡い光のアイテム結晶。

あれ？

これってもしかして……。

『そうだね。復活するかもね』

それは、どうなんだ？

どうすればいいんだろう？

『とりあえず、待ってみませう』

そうするしかなさそうだな。

『復活したっぽいよ。ヘイ、メル。ウエイクアップ！』

うとうとしていると、シユウがなにやら叫んでいる。

うつすら目を開けると、そこには鎧を着た女が尻餅をついていた。

赤褐色の髪をしているが見た記憶はない。

誰だ、こいつ？

『さっきの死に損ない』

あ、ああ。

目が覚めてきた。

そういえば、復活を待ってたんだったな。

おう。なんだか散々だったみたいだな。

体は大丈夫なのか？

『あ……、はい。あの、私はなんで？』

なんで、と訊かれても困る。

とりあえず復活したらしいぞ。

『そうだね。怪我どころか、鎧まで復活してるね。忌々しい……』

なんだか、くやしそうだ。

「……復活？」

そう、復活。おめでとさん。

『やったね騎士ちゃん！ もう一回、死ねるよ！』

「……………えっと、あの、ここは？ あなたは？」

ここは魔王城の一角で、私はメル。

「まっ、魔王城っ」

騎士は息を吐ききるように繰り返す。

そう。魔王城。

で、そっちの名前は？

「私の名前は——」

そこまで言うと、黙り込んでしまった。

「そもそも、あなたは……何者なんですか」

冒険者だ。

「冒、険……じゃ？」

『違う！ 魔王でしょ！』

冒険者なの！

「は、はい！ わかりました！ でも、なぜ冒険者が？ 本当にここは

魔王城なんですか？」

ああ、質問が多い。

ほとんど面倒になってきた。

『部屋まで連れて行ったら？ それが一番手っ取り早いよ』

そうするか。

頂上近くの部屋に着く頃には、騎士は顔面蒼白。

最初にあげていた悲鳴も徐々になくなり、すっかり黙ってしまっ
た。

まあ、だいたいわかったと思うが仕方なく魔王もやってる。

騎士はこくこくと小さく何度も頷く。

『頷く？ これ、恐怖で震えてるだけだよ』

そうなのか？

……あつ、ほんとだ。

よく聞けば、カチカチと歯が鳴っている。

質問攻めがなくなったのはありがたいが、これはこれでめんどくさい。

それで、えつと、あれ？ 名前なんだっけ？

『いや、まだ聞いてないね』

そうだったか。

で、名前はなんていうんだ？

「アン——」『おっ！』

『ジェリ——』『おおっ！ おおおっ！』

「——ア」『は？』

なんなんだよ、お前は？

「ごっ、ごめんさい。アンジェリアです。殺さないで」

殺さないし、お前じゃないから。

こんな流れが前にもあった気がする。

あれは金髪のエルフで名前は……、ダメだ、思い出せない。

『アンジェリカじゃないの？ これはとても大切なことだよ』

なんだかひどく真剣だ。

仕方がないから、私も訊いてみる。

アンジェリカじゃないのか？

「いえ、アンジェリアです」

だってよ。

『ま、まあ、これは仕方ないか。一致したら、いろいろとダメだよね』

うんうんと一人で勝手に納得している。

そういえば、騎士をやってるんだな。

「え？ 騎士ってなんですか？」

『え？』

え？

あれ、違うのか？ なんか鎧着てるし。

そういえば、別に鎧着てるから騎士って訳じゃないか。

シユウが騎士騎士連呼していただけだ。

じゃあ、なんなんだ？

「ただの調査隊員見習いです」

『またまたあ。実はお姫様で、姫騎士なんですよ？ 知ってるんだからあ』

お姫様なの？

「えっ、お姫様？ いやいや、まさか、ただの一般民です」

アンジェリアは、首をぶんぶんと横に振って否定する。

『こんなのおかしいよ……』

おかしいのは、お前だよ。

で、どうする？

「どうするというのは？」

帰りたいなら、送っていくけど。

私もだいぶん退屈してきたからな。

「えっと、いや、それは……」

なぜだかとても困っている様子だ。

『そりゃ、魔王を連れて帰るわけにはいかんでしょ』

ああ、それもそうなのかもしれないがよくわからん。

別に私は何もする気はないんだが。

じゃあ、一人で帰るか？

「……まだ——死にたくないです」

少し溜めてから、切実な口調でそう言った。

そうだよな。

せつかく生き残ったんだもんな。

『はあ？ 死にたくないって、なんなのこいつ』

さつきからうるさいなあ。

生きたいと思うのは別におかしいことじゃないだろ。

死んだら終わりだ。

『いや。今回に限っては、どう考えてもおかしい』
なにが？

『普通、「くっ、殺せ！」でしょ』

何いってんだこいつ。

『アンジェリカでなくて、姫でもなくて、騎士ですらない。挙げ句の果てには「死にたくないですう」って……アホか。ここは「絶対に魔族なんかに負けたりしない！」からの「んほおおお！ 魔族のおチ○ポ——』

まともなこと言わないなら、もう黙つといて。

とりあえず、人の住んでる近くまで送っていくか。

そのあとで、こっそり町なり村なりに入れば良い。

『やめたほうがいい。また調査隊だかんだかに送られて、死ぬはめになる』

……。

『復活する前の状態は明らかに異常。魔法か薬で無理矢理生かされた』

あ、ああ。いきなりまともなこと言うなよ。

話に落差がありすぎてついていけないだろ、もっと段階を踏め。

『こんな理不尽な言い草は久々ですぞ』

え、なんだ。

じゃあ、アンジェリアの国だと変な薬か魔法が使われてるのか。

「……いえ？ そんなもの使われていませんよ」

そんなことないって言ってるぞ。

『セルモンドの報告では、捕獲の際、アンジェリカたちは非常に好戦的で、激しく抵抗したってあった』

そういやそんなことも言ってたな。

死ぬかもしれない瀬戸際だ。激しく抵抗したっておかしくないだろう。

『でも今の彼女を見てると、とてもそんな風には見えない。そもそも動きも悪いから抵抗できたとすら思えない』

うん。たしかに動きは良くない。

初級クラスでちよつと高めの防具を買ったけど、重くてうまく動けない冒険者みたいだ。

『そんな彼女たちがセルモンドらと「戦闘」をすることができたってことは、かなりのブースターなはず。ブースターって強化魔法ね、薬か

もしれないけど』

強化魔法。もしくは薬か。

なんかそんなの受けた記憶ないの？

「……ありません。いつもどおりでした。でも、あのときはなんかやれる気がしてたんです。それに聖女様のために戦わなきゃって」

聖女様？

「はい。聖女様の歌は本当に上手いんです。聴くと体の奥から元気がわき出してきます」

『アウトロー!!』

大げさな……。ただの歌でしょ。

『歌は単純な空気の振動じゃないって偉い人が言ってた。間違いなくそれだよ。また聴きたくなるとか、しばらく聴いてないと落ち着かなくなるとか中毒性があるんじゃないの?』

その歌はなんか中毒性があるんじゃないか？

「毎朝・毎夕と一日二回は聴いています。特に中毒性はありませんね。ですが、今の歌よりも昔の歌の方がもつと良かったです」

ないって言ってるぞ。

『ここにはジャンキーと馬鹿。二人の患者がいます。一人は治りそうですが、もう片方は無理でしょう』

どっちがどっちは聴くまい。

『じゃあ、最後に——今は聖女様のためにがんばろうって思える? もう一回、セルモンドたちと戦おうって思える?』

私はシユウの質問を繰り返す。

回答者は無言。

ただ首をひねっていた。

城の中にも、仕方がないので外に出た。

なんかおもしろい話ないの？

「えっ」

『いきなりの無茶ぶり』

アンジェリアは必死に考え込んでいる。

いや、そんな考え込まなくても。
なんかてきとーなことでもいいから。

「あつ、それならあります。私の友達で——」
そういうのはいいから。

「えっ?」

『メル姐さんに友達話とか勇気あるね。問おう、あなたが今代の勇者か?』

あのね。私が聞きたいのはそういうおもしろおかしい話じゃなくてさ。

心の底からヴワアツツって燃え上がるようなおもしろい話なんだよ。

「え、あの、その……」

『めっちゃ困ってるじゃん。前人未踏の場所がないかって聞けばいいのに』

そうそう、なんか不思議な場所はないのか?

中がどういふ状況なのかわかってないとか、不思議な伝承があるとか。

「……魔王城とか」

お前さつきまでどこにいたんだよ、他。

「ア、アレマメイズはどうでしょうか。万年、瘴気に包まれ、一度入れば二度と出ることができない魔境と聞いています。三百年ほど前に勇者と呼ばれたローレンスもそこで消息を絶っています」

そういえば、そんな話もあったな。

ちらりとアンジェリカの背中に担がれた剣を見る。

以前、アレマメイズに刺さりっぱなしになっていた剣を回収していたが使い道がなかったの、彼女にくれてやった。

なんでも三百年ほど前に訪れた勇者が落とした剣らしいので、たぶんこれだろう。

本人はわかってないようだが、わざわざ説明するのも面倒なので黙っておく。

今、そこには療養中のスライムが一匹いるだけだ。他。

「北にある灰竜の聖域も噂があります」

いや、そこは……、うん。やっぱり続けてくれ。

どんな噂だ？

「その最奥には扉があり、どこか知らない世界に通じていると言われています。初代代表のシグがその扉の先に渡ったと聞いています」

『シグって初代魔王じゃなかったっけ』

そういえば、そんな話をどこかで聞いたような。

シグって魔王じゃないのか？

「いえ、シグはこの世界の全て——植物に始まり、人も魔族も灰竜や黒竜さえも支配していました」

ほお、すごいな。

もしかして、チートも持ちか？

『その可能性は否定できない』

「チート？ 魔人のことでしょうか？ シグは木の魔族カリユアーと人間の杣夫ダグザの間にできた魔人と伝わっています。木や花と言葉を交わすことができたそうです、樹帝とも呼ばれますね」

『どうやってエッチしたんだろう。しかも木の魔族って。やはり世界は広い』

ちよつと考えてみたら気持ち悪くなった。

余計なことばかり言う奴だ。

ちなみに杣夫とはきこりのことらしい。

初代魔王だかなんだか知らんが、もう死んでるだろうしどうでもいいな。次。

「西のグラナシダ山はどうでしょう」

そこは？

「元はただの山だったようですが、シグと黒竜の戦いの果てに噴火したとか……」

『それは、ただの火山じゃないですかねえ』

おもしろくなさそうだな、次。

「他、他……。あつ、黒竜つながりで、南にある黒竜の墓跡は？」

おつ、それは初めて聞いた。

どんなところなんだ。

「かつて世界にいたらしい黒竜の墓跡です」

そのまんまじゃないか。

というか、黒竜は死んでしまったのか。

『そりやそうでしょ。メル姐さんが今持つてる槍がまさにその証拠じゃん』

……それもそうか、この使いにくい槍も背骨だから作られたそうだし。

「はい。シグに倒された黒竜ですが、その各部位から三つの武具が作られたようです。一つは背骨から作られた槍。メル様が持つてられますね。魔王の証となっています」

最初は魔王様と呼んでいたが、それはやめろと言ったらメル様になつてしまった。

様付けもやめろといったが、どうも様抜きで呼ぶと他の魔物に厳しく睨まれるようなので特別に許している。

で、二つ目は？

「牙から作られた剣です。代々、勇気ある者に引き継がれています。先に語ったローレンスが所持していたようですが、現在は行方不明になつています」

お前の背中にあるがな。

「えっ？」

いや、なんでもない。

それで三つ目は？

「あごの下の鱗から作られた盾です。代々、人間の代表に引き継がれています。今は聖女様が持たれています。この盾のおかげで人間はわずかながらも今日まで生きながらえてきました」

なんでも盾を壁に埋め込んで、特殊な障壁をつくっているらしい。それのおかげで外部からの脅威を防いでいるとか。

そもそも黒竜の武具はそれにふさわしい者が使うと特殊な効果が見込めるらしい。

……その割に、この槍はただの槍としか思えない。

『なんか使い方があるんじゃない?』

ふーむ。

それで話を戻すと、墓跡はけつきよくなんなの?

「そうでした。墓跡には灰竜の聖域と同じような扉があります。しかし、こちらは開かなくなっていると言われています」

『守護者が死んだから門も機能しなくなっただってことかな』
なるほど。

じゃあ、門が機能しないなら墓跡には何も無いも同然か。

「……いえ。四つ目の武具があるという伝承もあります」
さつき三つって言ったじゃん。

「なにぶん昔のことですからね。それに墓跡に魔族は入れないですし、人間はそもそも墓跡に近寄れませんから。中に入って確認がとれないんです」

神々の天蓋と同じように魔力遮滅の効果は生きているようだ。

それにしても、昔のことと言うわりはかなり詳しいな。

今までの話も流暢に語ってたし。

「はい。私の所属していた調査隊がまさに墓跡の調査を目的としていたんです」

あ、そうなの。

「ええ。四つ目の武具があれば魔族に対抗できる可能性があるということで、最近になって浮上した計画です。聖女様が提案されたんですよ。私も昔からそのあたりに興味があって調べていたので選ばれたんです」

『デコイか……』

でこいつてなによ?

『囮だよ。アンジェリアたちに注意を向けさせて、他の部隊が墓跡に進む作戦だったんじゃないかと』

ほう、ということは。

『他に人と遭遇したって報告はないから、別動部隊は上手く墓跡に入れたんじゃない。まあ、そもそも他の部隊自体ないかもしれないけどね』

他にいるかいないかはどうでもいい。
伝説の四つ目の武具というのが気になる。
さっそく行くとしよう。

そんな訳でやってきた黒竜の墓跡。

魔王の槍の外見はあまり伝わっていないようで、来る途中で何度か魔物に襲われた。

襲われる度にアンジェリアが悲鳴を上げるし、逃げようとするし、鎧が重く途中でこけるので、袋に入っていたパーティーリングを渡した。

能力上昇が多少入るのか体はかなり軽くなったらしい。

ちなみに剣士のスキルは出ず、調査員専用スキルとよくわからんスキルが出たようだ。

防具……いらなくね。

『ずいぶんときれいだね』

「とても一万年も前のものとは思えません」

最初はシユウに怯えていたが、私の独り言もこれが原因だと悟り妙に納得していた。

今では普通に話している。というか私よりもシユウと話していることが多い。

だいたい頭が回る奴は、私よりもシユウと話をすることが多い気がする。

『きつとメル姐さんとは言葉を交わさなくても心の中で通じ合っているんだよ。真の仲間さ』

それ、きれいな言葉で繕ってるけど、除け者ってだけじゃないの？
アンジェリアは私が魔王のスキルを外すためにやってきたことも

わかってくれた。

ちなみに説明は全てシユウで、私は頷いていただけだ。

「シユウ参謀、あれ……」

『どうやら予想は当たってたみたいだね』

墓跡の入り口には鎧を着た兵士がうじゃうじゃ。

アンジェリアはシユウを参謀と呼んでいる。

シユウ本人は楽しそうだし、役割としては間違っていないので特に指摘しない。

「どうして親衛隊がこんなところに……」

親衛隊？

たしかに鎧はお前のやつより高そうだな。

「聖女様のおられる中央大聖堂を守るエリート中のエリートです。特にあのマントを纏った人——マヌ隊長は人間離れした強さで魔人ではないかという噂もあるほどです」

ジツと見ると確かに一人だけ鎧ではなくマントに身を包んだ奴がいる。

元より薄暗い印象を感じた集まりだが、あの男だけはさらに暗い。彼らは私たちに気づかないまま、墓跡から立ち去ってしまった。

『隊長さんだけは気づいてたね。でも見たところ、特に新発見はなかったみたい』

そうだな。

喜んでいる様子も、何かを運んでいる様子もなかった。

「やはりただの伝承だったのでしょうか」

『もう他の誰かが取っていつてるのかもしれないしね』

そうかもしれないしそうじゃないかもしれない。

自分の目で確かめてみるに限る。

さあ、探索だ。

神々の天蓋とは雰囲気がずいぶんと違う。

あちらはとてもきれいで神聖な雰囲気があった。灰竜自身にはないが。

一方、こちらは殺伐とした空気が漂う。

モンスターがいるわけでもないし、畏もない。

あるのはただつひろい円形の広間と奥にある扉だけ。

ただし広間の壁や床にはおびただしいほどの傷や血痕がついている。

戦闘痕のついていないのは入り口と奥の扉と言ってもいい。

『蠱毒かな』

私のことですかね？

『いやぼつちのほうじゃない。蠱毒つてのは俺たちの世界の呪術かな。同じ壺にいるんな種類の虫をたくさん入れて共食いさせる。最後に残った一匹を神霊として祀る』

なにそれ気持ちわる、シユウみたい。

そんなことしてどうするの。

『呪つたり、福を得たり、殺したりといろいろだよ。でも、人間や魔族で同じようなことをするなら目的はだいたいわかる』

ほう。その目的は？

『手っ取り早く一番強い奴がわかる』

強いものがわかってどうするんだ？

『それは俺に聞かれても困る』

使えんやつだ。

『使い方が悪いんだよ』

ふん。

口の減らない奴だ。

ひとまず探索開始した。

探索は開始したが、私にできることなどない。

シユウがあちらこちらを見て回るのを手伝うのが関の山だ。

『わかりませんな』

「わかりませんね」

もちろん私もわからない。

そもそも傷や血痕ばかりでいったい何がわかるのか。

何か武器でも置いてあればすぐわかるだろう。

もうとつくの昔に誰かが持って行ったに違いはない。

『そうかもしれないけどさ。せつかくだから調査スキルを使ってみよう』

おお、そういうえばそれがあつたじゃないか。

もつたいぶらずにさつさと使えよ。

『ういーす。「解析ツール」起動つと。おつ、おお？　こいつはちよつとめんどくさいな』

なんかやってるらしいが、私とアンジェリアにはよくわからない。

『血痕と傷跡に年代フィルターをかけて、と』

およ。

「わっ」

どうやらアンジェリカにも変化があったらしい。

見ている景色から傷跡と血痕がきれいに消え去った。

いや正確には消え去っていないが、色はかなり薄くなった。

『これが一万四千年前ね。まだまだきれいな状態。時間を進ませるね』

私たちが口を出す前にシユウは景色を変えていく。

広間のあちこちに傷が出来はじめていく。

そして、あるとき、いきなり大量の傷跡が浮き出てきた。

『これが蠱毒の時期みたいだね。でも、今の傷が全部出てる訳じゃない』

そういやそうだな。視界には、まだ薄くなつたままの場所がわずかに残っている。

「つまり、まだ残っているのは蠱毒の時期を過ぎてからできたものということですか」

『そうそう。明らかに時代が違う血痕と傷跡が残るわけ。そんなわけで、今までのものを消して、逆に新しい血痕と傷跡だけに着色すると』

浮かび上がっていた傷跡が全て消えていき、その代わりに別の傷跡が浮かび上がっていく。

『血痕もダメーか。傷跡だけ出すね』

血痕が消えていき、傷跡だけが浮かび上がる。

それはまるで文字のようだ。

「グラナシダ」

読めない私に代わり、アンジェリアが呟いた。

『シグと黒竜の戦いの地だったね』

次に進むべき場所が明らかになった。

めんどくさいな。ここに置いてくれればいいのに。

「これ、誰が書いたんでしようか？」

そんな昔のことわかるわけないだろ。

『そういう思考停止じゃなくてね。誰が何の目的で書いたのかだよ。しかもこんなにはわかりづらく。そう言いたいんでしょ』

「はい」

それなら最初からそう言えよ……。

『俺も気になる。もうちよつと解析してみよう。まず傷跡ね。……ふーん、傷跡に花粉が付着してるね。「金剛鞭草」、主にカルニア砂漠に繁殖。乾燥し硬化した棘は鉄をも引き裂くと言われている』

カルニア砂漠？

どこそこ？

「西の果てですね。でもなんでそんな草が……」

『ああ、なるほどね』

なんかわかったみたいだな。

『まあね。さっきの血痕は血じゃなくて樹脂。「人血樹」の樹脂らしい。人間そっくりの樹液を出すんだってさ。樹液は猛毒で、気化しやすい。すでに絶滅してて生息地域は今のアレマメイズ』

ほーん。そんな木があるんだな。

「東の果て近く。東西の果てから採られた植物。そんなことができるのは——」

私にもわかるよう答えだけ頼む。

『初代魔王にして初代代表、この世界の東西南北を支配した魔人』

「あらゆる植物を操り、樹帝とも呼ばれていました。彼の名は——」

シグ。

二人の声が一致した。

とりあえず、文字に従ってグラナシダ山に行くでしょう。

暑い。

ひたすら暑い。

グラナシダ山まで来たのはいいが、暑さははんばない。スキル「高温耐性」をつけているのにこの暑さ。外した瞬間に死ぬんじゃないだろうか。

『間違いない死ぬね。ガスも出てるから生物は入れないんじゃないかな』

グラナシダ山はまさしく火山だった。

どろりとした赤い液体があちらこちらに流れている。

麓付近には魔族もいたが登っていくにつれ、魔族の姿はなくなつた。

今では赤い液体と黒々とした岩石のみが目映るのみだ。

アンジェリアもなんとかついてきてはいるがしゃべる余裕はない。

途中でよろけてマグマに落ちたがなんとか生き残っている。

しかし、とうとう鎧は脱いでしまった。シウウ大興奮。

暑すぎる登山もようやく終わりが見えてきた。

ご丁寧にも噴火口への横穴が掘られていのだ。

壁と天井、それに床までもが崩れないようにツタで覆われている。

『初代魔王からのわかりやすい道しるべだね』

うむ。

中心部ほど暑いとシウウに言われて覚悟していたのだが――、

「暑さが、和らいでませんか？」

どうやら私の勘違いではないようだ。

『この横道を囲んでるツタのさらに外側になんか変な植物が巻かれている。「ラーヴァアカンレイ樹」、溶岩から熱と二酸化ケイ素を吸って、冷気をはき出すらしいよ。シグのオリジナル配合だつてさ。これを植物とって良いのか……』

そんなのがあるんだな。

難しいことはよくわからんけど、涼しくなって良かったじゃないか。

先に進めば、開けた場所にたどり着いた。

ツタの床の中心には穴が開き、そこから煙がもくもくと立ち上がっている。

穴の手前に箱が置いてあった。箱というよりは棺桶に近いだろう。

人一人分より縦も横も大きいくらいだ。

箱は光を全て飲み込んでいるように真っ黒で光沢はない。

「棺桶でしょうか。いったいなになが……」

『真実は黒い棺の中にある——』

なんだか意味深な言い方だが、要するに開ければわかるというだけの話だ。

私とアンジェリアはゆっくりと近づき、お互い無言で顔を見合わせる。

アンジェリアは私にどうぞというように手を差し出す。

じゃあ、と私は箱の蓋に指をかけ開けた。

月並みだが冒険者としてこういう箱を開けるとき、やっぱりわくわくする。

ときには財宝、ときには武具、ときには手紙、そして今回は——何も入っていないかった。

「からっぽ、ですね」

隅から隅まで見てみたが空っぽ。

アンジェリアも一緒に中を見ているがやっぱり空っぽ。

透明な何かがあるんじゃないかと思ひ、手を入れて触れてみるが空を切るのみ。

私と彼女はどちらということもなくお互いの顔を見て、何かおかしいのかわからないが笑いが始まった。

『あのさあ、蓋の内側見てみなよ』

シユウの呆れた声で我に返り、箱の蓋を見る。

何か文字が書いてあった。

「悪友——ここに眠る」

うん。それで？

「それだけです」

……はい？

「悪友——ここに眠る。それだけです」

私は棺の中を指さす。

『言いたいことはわかるけど、空っぽなのは一目瞭然だから
でもさ。』

どうすんのよ、これ。何も寝てないよ。

中身どつかでぶらぶら散歩してんじやないの。

近所に住んでたおじいちゃんも時々徘徊してた。

あっちも徘徊したまま消えてしまったからな……。

……ここまで来て、手ぶらで帰れというのか。

『手ブラで帰るならとても良いと思う』

ん？

よくわからんからどうせ変態的なことだろうな。

『とりあえず棺桶でも持って帰れば』

絶対嫌だ。

あの暑い中、棺桶引きずって帰るとかやってられん。

持って帰るくらいなら棺桶を火口に蹴り捨てる。

「あおう、この棺は解析できないんですか？」

『お、そーいやまだしてないね。やってみよう』

なんだ。まだやってなかったのか。使えん奴よのう。

『……げ、これって——』

なんだったんだ？

『この棺、黒竜そのものみたい』

は？

「えっ？」

『黒竜の部位をそれぞれ砕いて、樹脂かなんかで固めて作ってる。ほ
ぼ100%黒竜コフィン』

確かに驚いた。

驚きはしたが、だからなんだという話だ。

棺に黒竜の部位がいろいろ混ざったところでどうしようもない。

『……おっと、話はいったん休憩』

シユウにしてはまともな口調だ。

「どうしよういことですか？」

アンジェリアは意図がわからず聞き返しているが、私はなんとなく察した。

このシユウにしてはまじめな口調。それは危険が近づいたときのものだ。

『来客だよん』

シユウの言葉とともに一つの影が上空から降り立った。

顔は見覚えがある。

親衛隊の隊長だった男だ。

遠目からだとはわからなかったがまだ若いな。

少年というには雰囲気が大人数びてるし、青年というにはまだ顔が幼い。

しかし、顔をどうこう言う前にもつと気になる箇所がある。

それは男の腕から伸びていた。

前に纏っていたマントはなくなり、隠されていたものが露わになっている。

「翼？」

アンジェリアの呟きどおりだ。

男の腕からは鮮やかな赤い翼が伸びている。

『赤と言うよりは紅に近いかな』

知りたいのは詳しい翼の色ではなく、あいつは何者なのかということだ。

『噂通り魔人なんじゃないの？』

あれが魔人なのか。

思ったよりも普通だな。

翼以外は割と人間っぽいし。

『そう？ 手とか目が鳥に近いじゃん』

手は確かに細く尖っているため鳥っぽい。

目は……そう言われればそうかもしれない程度だ。

『腕からかあ。翼は背中から生えるのがデフォでロマンだと思うんだけど。でも、生物学的にはこれでいいのか……なんだかなあ』

今重要なのは、生物学的な科学考証ではないだろう。

「その通りだと思いますけど、どうしてそんなに落ち着いてるんですか?」

質問の主であるアンジェリアはすでに私の後ろにこそこそ隠れてしまっている。

そんなに慌てることか?

「だって、腕に翼が生えてるんですよ。あんなの絶対やばいですよ。別にあれくらいは驚くことでもないように思える。

それにやばさでいえば、魔王城のほうが上じやないのだろうか。

だいたい私はダンジョンで似たようなモンスターを何度か見てるからなあ。

「棺をよこせ。聖女様が欲しておられる」

鳥人の第一声がこれだよ。

聖女様とやらがなんで棺桶を欲しがるんだ。

人を納棺するには大きすぎるし、ベッドにするんなら趣味が悪いぞ。

「聖女様が必要とされているから、手に入れるだけだ」

どうも話にならないな。

だが、欲しいというならくれてやろう。

ちようど持って帰る人員が欲しかったところだ。

ほら、さっさと持て。

私の言葉をそのままとらえ、鳥人は棺の前に進む。

蓋を丁寧にはめ直し、棺に手をかけると腕の翼を大きく振るった。

視界に赤の羽根が舞い、思わず目を閉じた。

目を開ければ、そこにはすでに鳥人の姿はなかった。

——ということではなく、空を見上げ力んでいる間抜けな男がいた。

『ぶぶぶつ、固定されてて動かなかったみたいだよ』

そうみたいだな。

私もつられて笑ってしまった。

『メルはかぶかぶ笑ったよ』

かぶかぶ笑うってなんだよ……、そんな表現初めて聞いたぞ。

『俺も初めて見たときはなんのことだかわからなかった。でも、さっきのメル姐さんの笑い方を見たら「かぶかぶ笑う」ってこういうことだったんだなって』

あつ、そう。よかったね。

さて、かぶかぶ笑われた鳥人は首だけをぐるりと回し円らな瞳で私を見つめる。

おっ、今のはなんか鳥っぽい。

「手伝え」

なあんで私が手伝わにやらんのじゃ。

付き合ってられん。帰るぞ。

あとは聖女様のために自分でどうにかしろ。

ほら、がんばれがんばれ。

「聖女様のために持って帰らないといけない。手伝わないのなら——殺しても手伝わせる」

死んだら手伝うもクソもないだろう。

どうやらこいつも聖女の暗示だか催眠だかにかかっているようだ。

ほつといてもいいんだが、すでに剣を抜いて戦闘態勢に入っているのならちようどいい。

いっぺん消えてもらおう。暗示もとけるだろう。

こうして魔人との対決に相成った。

『後に、一連の出来事を見ていたアンジェリア（当時、魔王付調査員）はこう語る』

「あのときのことを思い出すと、今でも震えが止まりません

とにかく一瞬でした

まずマヌ隊長が踏み込んだんです。

隊長のいたところに赤い羽根だけがひらりと舞っていました

一足飛びで私のすぐ前——メル様の目前に迫っていたんです

隊長の握る紅い剣がまっすぐメル様の喉元へと伸びて、『貫く』と思う間もなく……………、

しかし、斬り離されましたのは隊長の腕でした。翼ごとです

メル様の腕が上がっていたから斬りつけたんだと思います
私には全く見えませんでした

その後は簡単です。

状況についていけない私と隊長を置き去りにしたまま、メル様は腕を横に薙ぎました

……え？ どうなったかって？

そんなの決まってるでしょう

頭と体が切り離されれば、死にますよ

確かに首は飛びました。

ですが、血は出ません。出たのは淡い光の粒、

それとドロップアイテムと呼ばれているものだけでしたね

メル様はどうだったかって？

変わりませんよ

終始いつも通りです

開戦を告げられたときも、首元に剣先が迫ったときも、マヌ隊長の首を斬り落としたときも——

口をわずかに開いてぼんやりしたままということですよ

……いえ、違いましたね

シユウ参謀の言葉に一言、賛同していました

『両腕を斬られたのに消えなかったね』

『ああ、なかなかしぶとかったな』

私が語ることができるのはそれだけです」

『はい、カット！』

鳥人が復活するのを待っている間、シユウとアンジェリアはなにやら変な遊びをしていた。

シユウはふざけているだけに違う。

一方、アンジェリアは、

「調査隊員として見聞きしたことを記録する必要があります」

——といたってマジメに付き合っていた。

それよりだ。

私は普段からぼんやりしているつもりはない。

いつでもシャキつとしている。

『ハハッ、ご冗談を。「立てばアホ面、座れば間抜け、歩く姿は類人猿」と謳われるメル姐さんがシャキつとしている？ それはいったいどこのレタスですか？』

そんなこと言ってるのお前だけだからな。

あんまりふざけてると、棺桶より先にお前から火口に投げ落とすぞ。

こんなふうには時間を潰していると、鳥人が復活した。

辺りを軽く見回し、私の姿を捉えるとすぐさま距離をとった。

「何者だ？」

なんだかすごい警戒されている。

『そろそろよ。でも、「聖女様」って枕詞が消えたからいいんじゃない』
そういうえば、必ずついていた「聖女様」というのが消えている。

私は――

『えええええい、この方をどなたと心得る！ 恐れ多くも馬鹿の大將軍、メル足臈公にあらせられるぞ！ 皆のもの、頭が高い！ ひかえおろおー！』

確かにあつちのほうが頭の位置は高いけど、より失礼なのはお前だから。

あと、アンジェリア。お前はひれ伏さなくて良い。

メルだ。

冒険者をしている。

こっちはアンジェリア。

「どうして黒竜の遺産を追っている？」

……なんでだっけ？

おもしろそうだったから、かな。

「魔王をやめるためじゃなかったんですか」

アンジェリアがこっそり耳打ち。

おお、そういうばそうだった。

でも正直に言うとは事態が複雑になるから黙っておこう。

で、そっちはどうしてこの棺桶を追ってるんだ。

「聖女様が欲しいと言っておられるからだ」

「だーかーらー、なんで欲しいのかって聞いてんだよ。」

「第一、シユウですらわからないのに、聖女とやらがどうにかできるとは思えんぞ。」

「聖女様なら必ずなんとかできる」

断言した。

「ほー、その根拠は？」

「聖女様は神の声を聞くことができるからだ」

場がしらけた。

『はい！「神の声」頂きました！』

シユウも馬鹿にしている。

「やっぱり復活なんて待たずにさっさと帰るべきだったんだ。」

「今回も託宣を聞かれ、俺の手を取って直々に使命を与えてくださった——『黒竜の墓跡を調べてきてください』と。そして、お前たちに出会い、こうして黒竜の遺産を見つけてくれたことができた」

「だから聖女様の言うことは正しいのだ！ だってよ。」

『暗示以前に聖女シンパだったか』

「その話は、私も実際に講話で聞きました。たしか——」

アンジェリアは聖女の話語り出した。

「そもそも私が聖女などというたいそうな名前で呼ばれたのは神のお告げがあったからです」

「私には願いがあり、その願いを思うと、夢に神としか表現できないものが現れ、『歌うのだ』と告げられました」

——とは言っても引っ込み思案だった私

「まずは人気のない物陰で歌うところから始めました」

すると、漏れていた歌声を聞いた同い年くらいの少女が、私の側に来てこう言ったのです

「今でもはつきりと思いつき出すことができます」

『とつても上手だね』と。

たったそれだけでしたが、私はこの言葉に勇気づけられました

私の歌を聴く人は日に日に増え、今では国民の全てが私の歌を聴いてくれています

しかし、今も私の願いは果たされていません

そのことを憂う度に、神は夢に現れ言葉を残します

黒竜の盾の起動、四天王の打倒もみな神のお告げによるものです――

長いな。

三文字で頼む。

『ヤバイ』

なにがやばいんだ。

『聖女の願いで世界がヤバイ』

だから、なんでやばいんだよ。

『その神は淫乱シスターも見てた神と同じのだと思う』

ああ、コキユだったか。

あいつも神を見たとか話してたな。

孤児院はもうそろそろ完成しただろうか。

『ついでに言うと、俺にチートを与えて転生させた神と同じ』

おお、すごいじゃん。

『すごいじゃすまない。この鳥頭が言うように聖女は正しい。正しいというよりも、聖女が神に言われたことを実行すれば、その時点で彼女の願いに沿うように出来事が発生すると考えられる』

どうということよ。

『この前と同じだよ。間違いなく巻き込まれる。というか、もう巻き込まれてる』

それは面倒だな。

『面倒じゃすまないかもしれない。聖女の願いが「魔族の殲滅」とかだと魔王のメル姐さんは死ぬ。聖女の願いでメル姐さんがヤバイ』

ほんとにヤバイじゃん。

どうすりゃいいんだよ。

『聖女の願いをはつきりさせるのが先決。棺桶を聖女のところに持って行く』

よしわかった。

わかったぞ鳥人。

棺桶を聖女のところに持って行くんだろ。

私も手伝ってやろう。

鳥人はものすごく怪しんでいたが、自分一人ではどうにもならないことがわかっていたのでおとなしく降りてきた。

こうして棺桶輸送は再開されたものの、まるで動かなかった。

根が張っているように固定され持ち上がらない。

「どうなってるんでしょう……」

座り込んだアンジェリアが疑問を呈する。

『うーむ、わかりません』

ブレイン二人が難色を示している。

こりやもう無理だな。

『うん、もう諦めよう。聖女の言っているとおり調査はしたんだから大丈夫っしょ。別に持って帰れとは言われてないわけだし』

『そういやそうだな。』

はい、解散解散。

鳥人はとつとと聖女様に報告してこい。

私とアンジェリアは後を追うから。

さて、私も下山するとなると槍を持たないとな。

杖にも魔物除けにも使えるし、なかなか便利なのだ。

「お取りします」

アンジェリアが気づいたのか、私の後ろの棺に手を伸ばす。

槍があちこち転がり邪魔だったため、シユウの提案を受け、先ほど棺に入れておいたのだ。

取りに行こうとしていたアンジェリアが目の前で固まっている。

どしたよ？

『ああ、そっか。部品が足りてなかったのか』

シユウも納得した口調でぼそり。

んー、と振り返れば棺が浮かんでいた。

私たち三人が本気で手をかけてもびくともしなかった棺。

その棺が今は誰の手も触れていないというのに、ふわりと浮かんでいる。

棺は頭を上にするように垂直に立ち上がり、次の瞬間にはグシヤリとつぶれた。

どんとと圧縮され最初は小さな黒球。

次に黒球は膨らみ、ぐにやぐにやとゆがみ始めた。

そうして徐々に人間の輪郭を作り、色合いも変わっていく。

そして——どす黒い肌をした亭々たる男が地面に降り立った。

見た目は人間だった。

冒険者にもわりとよくいる肌の黒くて、背の高い男。

少し細身の体は鍛えられているのが、私でもわかるくらいに引き締まっている。

なによりも一番の特徴は、左半身全体に黒い肌よりなお黒い火傷のような痕があること。

私が男を観察しているように、男も私を観察していた。

男の視線が鳥人に移り、そこで止まった。

「半端ものか……。どれ、試してやろう」

男は体を鳥人に向けてゆったりと歩いていく。

鳥人もすでに剣を抜き、戦闘態勢だ。

最初に手を出したのは男のほうだった。

気持ち悪いほどにゆっくりと鳥人に腕を伸ばす。

鳥人は迫る手に何を感じたのかわからないが、その腕を切り払うように剣を振った。

不思議な光景だった。

攻撃したはずの鳥人が地面に倒されていた。

たしかに鳥人の剣は男の腕に触れたのだ。

だが、触れたと同時に男の腕が剣を絡みとるようにぐるりと回り、なぜか剣だけでなく鳥人の体もぐるりと回り地面に倒れた。

よく見えていた私でもわからないのだから、された本人はもっとわからないだろう。

自分が倒れていることに気づき、すぐさま鳥人は起き上がる。

男はその動作を何も言わずに観察しているだけだ。

そういや、なんか鳥人の動きが悪くなってるだけか。

『聖女の歌の支援効果が切れたんでしょう。どっちにしても勝ち目はないくさいね。何されたのかわかってないようだし』

私もわからなかったんだが、何をされたんだ。

『まず、剣の腹に腕をかけてバランスを崩した。そして、剣の勢いをそのまま利用して、崩した体を回転させた。一種の合気だね』

なるほど、わからん。

鳥人はまたしても剣を振るが、軽く足をかけられて空中を飛ぶ。

腕の翼を使ってそのまま飛翔し、距離をとった。

空中で剣を構え、勢いをつけて急降下。

今までで一番速かった。

そんな攻撃に男はため息を一つ。

「つまらん」

急降下からの袈裟懸けを軽く屈むだけで避けて……あと、なんかしたな。

『手を顔の前に置いただけ。鳥の方から手に突っ込んだ。それでもかなり痛いと思うよ』

鳥人が呻きつつ顔を押しやる。

目からは涙が溢れ出していた。

「情けない……」

男は無然たる面持ちで鳥人を見下ろす。

もう飽きたと言わんばかりにアンジェリアへ視線を移す。

「準備がいいな」

何かに気づいたのか、アンジェリアに歩み寄った。

「ひっ」

先ほどの光景を見ていた彼女は、怯えて後ずさる。

『まずい。アンジェリアに近寄らせないで』

私も彼女を助けるために、男とアンジェリアの間に入った。

男は間に入った私にかまわず足を進める。

それなら仕方ない、とシユウで斬りつけた。
初めて男に動揺が見られた。

伸ばしかけていた手を引き、後ろに飛んで私の一閃を躲した。
それでも完全に躲すことはできず腕にかすり傷をついている。
ちよつと驚いた。

狙いを外すことはよくあるが、躲されたのは久しぶりだ。
それにシユウで斬ったというのに弱っている様子がまるでない。

「ん……、魔剣の類か。見たことのない魔法も行使しているな。おも
しろい」

そこで男は小さく笑った。

今までの落ち着きが嘘かと思うほどの獰猛な笑みだった。

似たような笑みを何度か見たことがある。

『戦闘狂っぽいね。冒険者の中にもいたでしょ。モンスターと楽しそ
うに戦ってるやつ』

ああ、それだ。

パーティー組んでるのに一人で戦う変わった奴がたまにいた。

怪我をしてもなんだか楽しそうに笑って戦い続けてる変人と同じ
笑みだったんだ。

『今日のお前が言うなスレはここですかね？』

冗談を言ってる間に男は距離を詰めてきている。

私もシユウを構えて斬る体勢を作る。

いける、と思ったところで踏み込み、シユウを全力で振り抜いた。

斬る瞬間、たしかに男は反応できていなかったと思う。

だが、首の辺りを狙った斬撃は空を斬った。

初めからここに来るとわかっていたように避けられた。

そして、男の手が私の腕をつかんだ。

——ここまでは覚えている。

その後がわからない。

なぜ私は今、空を飛んでいるんだろうか？

逆さになって宙を飛び、ぐるぐると景色が回り、やがて地面に落ち
た。

痛みこそないが、なにをされたのかわからないという恐怖はある。

「メル様！」

アンジェリアが名前を呼んでくる。

シユウ以外に名前を叫ばれるのは久しぶりだなあ、と場違いなことを考えてしまった。

「メルというのか。見込みがあるぞ。驚異的な自己強化魔法と、弱体化魔法はどちらも素晴らしい。吾ですら術式がまるで見えない」

なんだかべた褒めだ。

まあ、チートですからね。

「故に惜しい。剣術がまるでなっていない。童でももつと上手く扱うぞ。鍛えてから出直してこい」

私は子供以下ですか。

『そのとおりですな。メル姐さんからチートなくしたら馬鹿と逃げ足しか残らないし』

否定はできない。

『メル姐さんと同等程度の力を持つ武芸の達人。天敵だね。正面からだど絶対に勝てない』

けっこう前にもそんな話をしたな。

あのときは、そんな存在は出てこないだろうと話していたが、まさか出てくるとは。

——というか、そもそもお前は何者なんだ？

「吾は黒。黒竜だ」

黒竜の棺から出てきたからそれはなんとなくわかる。

でも、見た感じ人間っぽいんだが……。

「誓約にしたがっている」

誓約らしい、誓約ってなんだろう。

でも、ゲロゴンも似たようなことしてたしな。

「時に、吾が封印されてから幾ばくの年月が流れた？」

初代魔王に負けてからってことか？

約一万三千年らしいぞ。

「やはりそのくらいは経っているか。ただの丘が、ずいぶん大きく

なっているわけだ」

黒竜は納得したように頷く。

「さて、そのの。牙を渡せ」

改めて黒竜はアンジェリアを向き直り命令した。

「え、え……う？」

アンジェリアはなんのことだとうろたえている。

ああ、そういえば言っけなかつた気がする。

お前が大切そうに担いでるその剣な。黒竜の牙だ。

「……え？」

アンジェリアは目を瞠らせ私を見返す。

いや、ほんとだって。

アレマなんちやらから回収したやつ。

勇気あるものが持つとかいうのだ

「これが、そうなんですか？」

「いかにも」

黒竜の保証もついた。

アンジェリアはどうしたものかと、私とシユウを交互に見てくる。

別に返してしまえばいいんじゃないか。

どうせ使わないし。

『やめた方が良い。こいつの目的もわからないし、これ以上強くさせるべきじゃない』

意見が分かれたことでアンジェリアはさらに混乱する。

「えつと……あつ」

アンジェリアの背中を影が通った。

通ったのはずっと大人しくしていた鳥人だ。

その手にはアンジェリアの背中にあつた剣が握られている。

「これがあれば！」

鳥人は剣を奪い、そのままの勢いで黒竜に突撃していった。

「勇気あるもの、か……」

黒竜は自らへと向かう剣先を気にかける様子もない。

何か思い出すように遠くを見ている。

結果は先ほどと何も変わらなかった。

突撃した鳥人が、黒竜の手に吸い付くように旋回し、そのまま地面に突撃した。

手からこぼれた剣を黒竜が拾う。

剣を眺める黒竜の顔が徐々に呆れたものになる。

「相も変わらず器用な奴だ。こんなものまで作るとは……」

呆れつつも「ふっ」と軽く笑い、アンジェリアに剣を放り投げた。

アンジェリアはうまく受け取ることができずあたふたしている。

「その剣には封印術式が刻まれている。解除条件は勇気を出すこと。封印を解くことで奥に刻まれた術式を引き出すことができる」

手に入れようとしていた剣を渡し、わざわざ解説まで始めた。

「吾は同類に久闊を除しに赴く。牙はその後、受け取りに往こう。それまでに勇気あるものを選別しておけ。試してやろう」

用件を伝え終わると、黒竜は振り返ることなく歩き去った。

黒竜が復活してから十日後の昼——荒野に一つの影が落ちていた。

影の主は黒竜。その行く先には人間のコロニーがあった。

やがて黒竜はコロニーの正門に辿り着いた。

壁は高く、黒竜の盾により強力な結界が張られている。

普段はまず開くことのない高き門が、今日はわずかに開いた。

そこから出てきたのは、一人の兵士。

腕に翼の生えた半人半鳥の魔人である。

魔人は片手に黒塗りの剣、もう片方の手に同じく黒塗りの盾を持っていた。

剣は黒竜の牙、盾は黒竜の鱗からできている。

「牙に鱗とは用意がいい。だが、吾は勇気あるものを、と言ったはずだが？」

黒竜の問いに魔人は答えない。

「聖女様の命令により、聖女様の力を拝借し、聖女様のためにお前を――

「殺す！」

叫び声を上げ、魔人は腕を振るう。

足は地を蹴り、腕の翼は空気を掻く。

得られた推進力は、火口での戦いを大きく凌いだ。

だが、まだ足りていない。

黒竜は突き出される剣を避け、魔人の腕に手をかけるが――、

「む……」

黒竜の伸ばした手は見えない障壁により弾かれた。

剣で突き刺すことこそ避けられたが、勢いのついた体はまだ残っている。

魔人はそのままの勢いで黒竜に激突した。

魔人への衝撃は盾により和らぎ、痛みも反動もほぼない。

一方、黒竜への衝撃は勢いに加え、障壁の分も付加されている。

黒竜は衝撃を受け、大きく宙を飛んだ。

流星というべきか、接触の際に後方へ飛び威力を抑えている。

空中で軽く体勢を戻し、手をつくことなく着地した。

損傷は軽微。すぐに魔人へと視線を移す。

「ふむ、障壁は盾の力か。貴様ではない何者かに引き出されているようだな」

黒竜は状況を冷静に分析していく。

分析は正しい。盾は聖女から預かったもので、力を引き出しているのも聖女である。

盾の力は保持者への障壁形成。単純に攻撃を防ぐというものだ。

「それに異常な強化魔法も受けているな。片方はメルがしていたものと同じか。もう片方は……読み取れんな。だが、忘我の作用もあるか」

こちらの分析も正しい。

魔人の指にはパーティリングが嵌められ、能力プラスの恩恵を受け、加えて、聖女の歌の効果も受けている。

スキル「催眠耐性」でトランス状態は避けられるが、強化効果もなくなってしまうので魔人だけスキルを外されていた。

「殺す！ 殺せる！ 聖女様、俺が殺してみせます！」

魔人は突撃を続ける。

黒竜は反撃ができていない。

全ての接触を障壁で防がれてしまう。

「……致し方ないか」

顔の火傷をなぞったあと、諦めたように軽く顎を上げた。

「誓う！ 吾が行うのは攻撃ではない！ 貴殿の定めた専守防衛に反しない！」

宣言が終わると黒竜は初めて構えを作った。

腕を肩の位置まで上げ、手は魔人へと向ける。

「重ねて誓う！ 吾が誓約を解くのは戦のために非ず！」

二度目の宣言が終わると、黒竜の腕に変化が起こった。

人間の形をしていた腕がバキバキと変形し、見るからに硬く尖っていった。

この様子を見て魔人は攻撃を止めていたが、意を決して再度の突撃を開始した。

「聖女様のためにイ！ 死ねエ！」

黒竜は目を見開いた。

瞳孔はすでに人間のような丸でなく、爬虫類に見られる菱形のものへと変わっている。

『黒葬——』

声は耳からではなく、魔人の頭の中で直接響いた。

直後、魔人の目に映る景色が変わった。

黒竜の腕を中心にして他の景色が歪んでいる。

全ての光景が腕へ引っ張られるように長細く映り始めた。

事実、魔人自身も腕へと吸い込まれていった。

——そして、魔人の持つ剣と黒竜の腕はぶつかった。

予想されていた衝撃は起こらない。

衝撃どころか接触音すら発生しない。

全ての事象を腕は吸い込んでしまっているようだった。

二人は接触したまま止まった。

先に動いたのは魔人。

立ったままの位置から一步踏み出し、剣を突き出す。

その速さは落ちていた。

そして、魔人自身も能力の低下に気づくだけの判断力が戻っていた。

黒竜はぬるい突きを軽くかわし、魔人の腕をつかんで投げる。

先ほどまでであった障壁はすでになくなり、魔人は為す術なく地面に激突した。

「俺が、倒すんだ……」

それでも、魔人はよろよろと起き上がる。

「メルの強化魔法が外れていない……。恐ろしい術式だな」

黒竜の腕はすでに人間のものに移っている。

宣言にあつたとおり、黒竜は攻撃などしていない。

向かってきた剣を、ただ受け止めたただけだ。

魔法や付与された刻印術式、呪い——全てを解除する黒竜本来の腕で受け止めた。

そのため魔人にかかっていた聖女の歌及び盾の効果がなくなった。

ただし、チートの効果は外れない。

それがわからない黒竜は感嘆の声を漏らす。

「俺なら勝てる。聖女様のために。俺は——」

「まさか貴様。自分が強いなど思っているのか」

呆れたように黒竜は首を振る。

「貴様は余りにも半端だ。かつてお前と同じような半端ものがいた。そいつも弱かった。だが、あいつは吾を倒した。なぜだかわかるか？」

魔人は答えることができず、黙り尽くす。

無論、黒竜の言うかつての半端ものとは初代魔王シグのことである。

「あいつは自分が弱いことをわかっていた。人間ほどずる賢くなれず、魔族ほど力も強くもない。あいつは自分の中途半端な弱さを認めれていた」

黒竜は懐かしむように語る。

「だから、あいつは仲間を作った。人と魔族。両方の仲間を」

黒竜はなおも語る。

人は脆く壊れやすいが、それ故に協力し一人では為し得ないこともなすことができる。

状況を打破する道具を作り使いこなすのもまた特徴である。

魔族は人間よりも力強いが、己の力に過信しすぎる。

また、種族の変動や特徴が大きく、種族間の協調性に欠けている。

シグは互いの特徴をよく理解し、両方の間を取り持った。

人魔協力し、最終的に黒竜をも倒すこともできた。

黒竜はそう話す。

「お前に勇気などない。自らの意思もなく、ただ誰かの命令に従っているだけだ。なんのためにそれを持つている？」

魔人は剣を使いこなすことができていない。

本人も理解している。それでも彼にはこれを使うほかなかった。

「なぜ来るとわかっていて罨も張らず正面から挑む？」

人間らしく、策を練っていけということだ。

「戦える人間はお前だけではないだろう。なぜ一人で戦う？」

どうして人間らしく結束して黒竜自身にかかってこないのかということだ。

これは聖女が決めたことだから、魔人に言っても仕方ない。

「牙と鱗を置いて、もう帰れ。貴様に用はない」

そこまで言うと、黒竜は視線を上げ息を吸った。

「人の子らよ！ 聞こえているのだろうか！」

黒竜は叫ぶ。

実際に門の内側では多くの人間が黒竜の叫びを聞いていた。

「吾は黒竜！ 今から門を開け、貴様らの性根を叩き直しに行く！」

我が歩み！ 止められるものなら止めてみよ！ 剣でも矢でも魔法でも何でも良い！ 人間らしくずる賢く、協力し、罨をしかけ、不意

を打ってかかってこい——」

「じゃあ遠慮なく」

声は黒竜のすぐ後ろから。

同時に黒竜の胸を一本の剣が貫く。

どこからともなく現れた女に黒竜は驚き振り向く。

彼が見たのはぼんやりした顔の女だった。

女は黒竜の首を掴んで固定し、剣を上にと執拗に動かす。

『さすがにしぶといねえ』

「うむ、そうだな」

女はふざけた男の声に同調する。

とどめと言わんばかりに腸を大きく切り払うと黒竜は淡い光に消えた。

残るのは女と小さな光の結晶。それと、啞然とした魔人。

「勝った」

—— 獰猛な笑みをした女は小さな勝ち鬨あげた。

黒竜のドロップアイテムを手に入れ、私は門に相對する。

黒竜とは正面から戦っても、まず勝ち目がないとシユウに言われていた。

そのため隙を見て後ろから突き刺すことと相成ったわけだ。

いやはや上手く行ってよかった。

十日前にアンジェリアと鳥人を伴い火口を後にした私たちは、聖女の住むコロニーに向かった。

しかし、私は入れてもらえなかった。

黒竜を倒したら入っても良いと条件が出された。

シユウで障壁をこじ開けても良かったが、シユウに止められた。

それでも中の情報は知りたかったためアンジェリアからこっそり情報を回してもらったという訳だ。

というか早くダンジョンに行きたい。

黒竜の剣と盾を回収すると、ちょうど門が開いた。

隙間から一人の女が駆け寄ってくる。

「メル様、ご無事で」

まあな。

そう言つて、剣と盾をアンジェリアに渡す。
さて、聖女とご対面といきますか。

コロニーの空中には無数の管が走っている。
なにあれ？

「伝声管です。あれを用いて、中央大聖堂から聖女様の歌声をコロニー全体に行き届かせています」

ほーん。

そんなことができるんだな。

今さらだが、そもそも聖女つてどんな奴なんだ？

神の声が聞けて、歌がうまいつてのは聞いたけど、それ以外がさつぱりだ。

そもそも本名はなんなの？

「本名はミストですね。でも、今はこっちで呼ぶ人はいないと思います」

『げえ、ミストだつて……』

なんだよ露骨に嫌そうな声出して。

『俺の世界でミストつていうと、男女含めて碌な奴がいない。でも、名前は根本的な問題にはあたりませんよね』

なんだかよくわからない。

名前はわかった。外見はどんなのなんだ？

『胸は大きい？ 顔は？』

「胸はそこまで見ていませんから、わかりません。顔つきは穏やかです」

『良いね。聖女っぽいよ。胸も期待できる』

なぜ穏やかな顔だと聖女っぽいのかわからない。

あと、胸はどうでもいいだろ。

「髪がスラツとまっすぐ伸びて、とてもきれいです」

『グッド。黒髪ロングはいつだって青少年のあこがれだ』

あこがれらしい。

「黒髪じゃありませんよ。緑です」

『ッ！ バツキヤロオ！　なんでそんな重要なことを今まで黙ってた!?!』

いきなり怒り始めた。心の病なんじゃないだろうか。

「ご、ごめんなさい」

謝らなくていい。

こいつの勝手な妄想だから。

『頭ん中、ハッピーセットかよ！　髪が緑って、相当やばいよ！　前にも話したでしょ!』

そうだったかもしれない。でもね。

メル知ってるよ。髪の色だけでやばさを決められるわけでもないって。

『俺より年上のくせして一人称「メル」とか言うのほんとやめてくれる。鳥肌もんだわ』

おう、その鳥肌見せてみるよ。

カミソリで全部まとめて剃り尽くしてやるから。

『やべえな、やべえよ。緑髪がする願いつてなんだ……。世界の大崩壊とかじゃないよなあ』

今回の聖女訪問の目的に立ち返ってきた。

私が聖女に会いたいのは、聖女の願いとやらを聞くためだ。

世界の大崩壊ねえ。

「聖女様がそんなことを思われるわけがないだろう!」

後ろから怒鳴ったのは鳥人。

そーいや門からずっと一緒についてきたたな。

今まで黙ってたのに、聖女の話題が出たらしゃしゃり出てきた。

そーいや、お前は願いを知ってるの？

「俺ごときが聖女様の思いを聞くななんて、恐れ多い」

知らないらしい。……なら黙ってるよ。

ともあれ、会えばわかるだろう。

中央大聖堂は文字通りコロニーのど真ん中に建っていた。白く大きな円柱が何本も立って天井を支えている。中もなんだかスカスカで広い。ボス部屋みたい。あるのは入り口と、奥に続く扉。あとは壁や天井にある伝声管だけだ。件の緑髪は部屋の奥に一人で立っていた。ボスっぼい。

ああ、ダンジョン行きたい……。

「こんにちは」

普通に挨拶された。

確かに声はきれいな気がする。

まだ、挨拶だけなのでよくわからないが。

雰囲気はアンジェリアが話すように穏やかそうだ。どうも。

さっそくだが、お前の願いとやらを聞きに来た。

「言えません」

……なぜだ？

言ってくれば、できる範囲で協力するぞ。

「優しいんですね。でも、だからこそ言えないんです。もしも願いを言えば、叶うんでしょう。でも、それでは、——形だけのものになります」

よくわからんな。

形だけでも叶うならいいじゃん。

「そんな空っぼじゃ意味がありません。私が欲しいものは違う……」
中身のあるものだと？

「はい。きつとそれが本物の——」

『本物、か……。それは意識が高い本物？ それとも偽物に負ける本物？ あるいは特別な本物？ それとも本物になった元偽物？ いやいや、偽物であって欲しかった本物？ どれ？』

どこがどう違うんだよ……。

いやね。

実を言うと、本物だろうが偽物だろうが、空っぽだろうが中身がつまつていようが何でもいいんだけど、私にも関係する願いだと困るんだよ。

お前の願いで私が困る。

「正直なんですかね」

くすつと聖女は笑う。

「私の願いは、あなたに特に関係はしませんよ。魔王とは関係ないことです」

どうやら私が魔王であることは知っているらしい。

あ、そうなの。

私には関係しないの？

じゃあ、どうでもいいかな。

まあ、コロニー全体に暗示をかけたたり、四天王を倒したり、黒竜を調査しないとイケないって相当な願いなんだろうな。

「……………もつと、単純で簡単なことだと思っていたんですが」

——どうやら違ったみたいです。

そう言つて、聖女は少し悲しげに笑つた。

さて、日も傾き夕方になった。

コロニーには歌声が響いている。

聖女の歌声らしい。確かにうまい。

どこか儂げな歌声が夕焼けに合っている気がした。

コロニーの住人たちも足を止め、黙つて歌を聴いている。

盾も聖女に返しておいた。

シユウは渋つたが、別に問題ないだろう。

剣はアンジェリアが持っている。

私も別にいらなないし、鳥人に持たせてもあれなので別に彼女でいいだろう。

「うむ。それがよからう」

賛同したのは私の隣でパンをかじる黒竜だ。

なんでお前はパン食つてんだよ……。

「食は生きる上でもっとも大切なものだ」と吾は考えている」
そういう話じゃねえんだよ。

なんでも敗者は勝者の言うことを聞くのが当然らしい。
保留にしておいたら、ずっとつきまどってきてもうっとうしい。

お前は牙と鱗を回収するんじゃないのか？

「その予定だったが、ミストからは回収できない」
なんで？

「あちらから仕掛けてこないからだ」

……はい？

『ああ、やっぱそうなんだ』

解説よろしく。

『叫んでたじゃん。専守防衛がどうのつて、たぶん自分から攻撃しないって決めてるんじゃないかな』

そういやこいつ自身から攻撃をしてきた記憶がない。

こつちから攻撃したときにそれを躲してから、投げたり叩いたりだ。

「誓約でな」

それ、会ったときにも言ってたな。

人間の姿をしているのも、そうなんだったよな。

「そうだ、誓約だ」

そもそも誰との誓約なんだ

「かつての勝者。吾に勝ったものたちだ」

黒竜はそう言つて、火傷の痕が残る左顔面を触る。

その火傷もなんか誓約なのか？

「これは敗北の証だ。一番初めに倒されたときについた。消そうと思えば消せるが、残している」

ずいぶんとすごい炎魔法だったんだな。

竜を焼くほどの炎つて。

「魔法ではない。術式はなかった。黒い炎を操る男だ。一度目は為す術なく負けた。そのときにこの姿になることにした。二度目は人型になってから策を練り、拳兵して挑んで負けた。そこで軍門に降り、

専守防衛を言い渡された」

ずいぶんすごい奴だったらしい。

どんなやつだったんだろうか。

「武を持ってこの世界を、いや、全ての世界を我が手に治めると話していた。『天下布武』とな」

ぶつとんだ奴のようだ。

チート持ちか？

『間違いなくチート持ち。誰かもわかった。会ってみたかったなあ』
どうやらシユウの世界の有名人らしい。

お前の世界から来る奴は変なのばかりだな。

「吾もシグもあやつの軍の一員だった。シグを育てたのもあやつと吾だ」

初代魔王の育成もしていたのか。

それで、そのすごい奴はどうなったんだ。

「あと一步でこの世界を治めるところになって、自らの黒炎に焼かれて死んだ」

えっ？

「出会いから別れまで——とにかく壮絶という言葉に尽きる」
複雑な思いを込めて、黒竜は自らの火傷を撫でていた。

話を戻すと、鱗の盾は無理でも牙の剣は回収できるんじゃないのか。
持つてるのはアンジェリアだし。

「あの女は牙を使える素質がある。少し様子を見る」

えっ、あいつの剣の腕は私と同じくらいだぞ。

『それはアンジェリアに失礼。あっちのがわずかに上手い。それと剣の腕じゃなくて、勇気があるかどうかの話でしょう』

ああ、なるほど。

勇気あるものだったか。

勇気ねえ。あいつに勇気があるのか？

いつもびくびくしているし、涙目で隠れるぞ。

「シグも勇者と呼ばれていた。しかし、あいつ自身は人一倍臆病で気弱だった。なにかあればいつもぐずぐず泣きながら草に話しかけていた」

「そういう植物と話せるんだったな。」

「それでも皆がシグを勇者と呼んだのは、絶対に死なないからだ。吾の選別場でも死なず、敵地のど真ん中に落とされても死なず、先に語った男と戦ってもなお死なず、吾と戦ってもやはり死なずに生き残った」

『なるほど……何があっても生き残るってなら、アンジェリアはそうかもしれない』

シユウは納得している。
「そういうええそうだな。最初に会ったときもぎりぎりだけど生きてたし。」

「あっちこっちでも死にかけてたが不思議と生き残っている。」

『メル姐さんに現実逃避があるように、アンジェリアも調査員専用スキルの他に特殊スキルがあった。覚えてる？』

「ああ、なんか言ってたな。」

「変なスキルだったから忘れてしまったが。」

『「無能生存体」常時発動型スキル。効果は「しぶとい」ってだけしか書いてない。相当死にづらくなるんだらうね』

「ちょっと名前がひどいんじゃないかな。」

「死なないことは勇者の最低条件だ。だが、死なないだけでは状況は覆らない。重要なのは状況を切り開けるか否か。それが勇者とクマムシの境目だ」

「クマムシって……。」

「そういうや剣の発動は勇氣だそうだけど、槍と盾の発動はなんだったんだ？」

「槍は見えていないからわからない」

『槍はたぶん、槍を捨てることだね。槍を頼らず自分自身の力で戦おうと思ったときに、身体強化が発動するんだと思う』

「なるほど、そうなのかもしれない。」

じゃあ盾は？

「信じ抜くことだ。自らの正しきや信念に揺るぎがないときに発動する」

そんな話をしているうちに夜は更けていった。

翌朝、響き渡る聖女の歌で目が覚めた。

夕方はまだいいとして、朝はうるせえな……。

朝ご飯を何にするか考えていると、シユウがしゃべった。

『魔王のやめ方思いついた』

頭がまだうまく回ってないから理解できない。

そういえば南の世界にやってきたのは、魔王をやめるためだったなー、と人ごとのように思い出した。

それでどうするんだ？

私はもうそろそろダンジョンに行きたい。

『黒竜の牙と鱗を、黒竜本人に返す。これでいけるはず』

……よくわからんのだが？

だいたいお前は返すのに反対してただろ。

『勇者、人間の代表、魔族のくくりは勇者兼初代代表兼初代魔王のシグが決めたものはず。それを形づけてるのが黒竜の剣、盾、槍。この三つ全てなくなれば、その前提がなくなるから魔王自体もなくなる……はず』

昨日、聖女に盾を返さずにそのまま黒竜に渡せばよかったのか。

もっかい渡してもらえるかな。

『たぶんダメ。無理矢理ならいけるけど、緑髪だし、バックに神様いるから、何が起るか想像つかない』

緑髪と神様を同列に扱うのはどうかと思う。

『そこで帰結するのは聖女の願い。これの成就がおそらく全てのネットワークになるはず。魔族からの守りならメル姐さんから黒竜に人を助けるよう命令すれば良い。本人も性根を叩き直すとか言ってたから協力するはず』

そっか。

でも、願いがわからないじゃん。
本人も話す気がないみたいだしさ。

『そう？ 神が関係してくることで、このコロニーの様子から、俺はなんとなくわかったよ。きつとこれで間違いない』
はえーよ。

それで願いはなんなんだ？

『聖女の願いは——することだと思う』

……えっ。

あまりにも単純な回答だった。

そんなことのために、あんな大げさなことになったのか。

『うん。神様がちよつと全世界規模で解釈したんだと思う。このコロニーだけで十分可能。確かに自分から言えば強制になって、空っぽと言えなくもない』

うーん、そうかなあ。

私にはどっちも変わらないと思うが。

『変わる。行為は同じでも、自発的なものかどうかで聖女の立ち位置が変わってくる』

そんなもんかね。

それで願いはわかったがどうするんだ？

『策はある』

ほう、聞こうか。

『まずね——』

……ふむ。

それではそれでいこう。

だが、聖女の願いがお前の予想通りじゃなかったら意味がないんだが……。

『それは大丈夫じゃないかな。俺たちは神様の誘導でここに来た。神様はなんで俺たちをここに呼んだのか？ 聖女の願いを叶えるためだ。それならきつと俺の推測は正しい』

ずいぶんと神頼りで自分勝手な意見である。

しかし、チートに頼り切りの私が言えたことではない。

正否など、やってみればわかるというものだ。
こうして長そうな一日が始まった。

午前には打ち合わせをすませ、午後になり大聖堂へやってきた。
目の前には相変わらず穏やかな聖女ミスト。
彼女の横には鳥人も立っている。

私の後ろにはアンジェリアと黒竜が控えている
一つ頼みがある。

私は第一声でそう切り出した。
歌を聴かせて欲しい。

昨日の夕方と今日の朝に流れてくるのを聞いた。
実際に生で聞いてみたいと思ったんだ

「かまいませんよ」

ミストは目をぱちくりさせた後、快諾してくれた。
鳥人は不満げな顔をしていたが、武力でも立場でも口を出すことが
できない。

こうしてミストは歌い始めた。
歌に教養のない私でも上手いとわかる。

鳥人は恍惚とした表情で聞き、黒竜も目を閉じ満足げに聞いている。
る。

ただ一人、アンジェリアだけが首をかしげていた。
「満足いただけましたか？」

私は満足したので首を縦に振る。
鳥人と黒竜も同様だ。

「あなたは？」

そう問われたアンジェリアは慌てて「私も満足しました」と頷く。

「本当にそう思ってるか？」
私は問いを投げる。

アンジェリアは問いに慌てふためいている。

「もちろんですよ。聖女様の歌ですから」

聖女だから、とかそういう修飾語はいらない。

お前は今の歌が、本当に良いと思ったか？

前に、言つてただろ。昔の方がよかつたつて。

正直に思つたことを言つてみる。

アンジェリアは困つたように私とミスト、それに目を鋭くした鳥人も見る。

「聞きたいです。ぜひ話してみてください」

ミストはそう言つて鳥人を牽制する。

空気が和らいだことで、アンジェリアもおどおどと口を開いた。

「それでは失礼します。聖女様の歌は、昔はもつと聞きたいし、いつまでも聞きたくなるような歌でした。しかし、今聞いた歌からそういったものはまったく感じません。早く歌い終わらないかな、と思つたほどこです。メル様の歌の方がまだ楽しいです」

本当に思つたままを言つたのだろう。

私もまさかそこまで言うとは思つてもみなかった。

というか、そこで私の歌を引き合いに出すのはやめてくれないか。

『まあ、メル姐さんの歌はいろんな意味でおもしろいからね』

ミストと鳥人は固まっている。

「き、貴様……。聖女様の歌が、大きい声で騒いでいるだけの歌より劣っているというのか！」

先に我に返つた鳥人は吠えた。私も叫び返したい。

大きい声で騒いでるつてどういうことだよ。

マジメに歌つてんだぞコラ！

「歌の上手い下手では圧倒的に聖女様の方が上でしょう」

なにか言いかけようとしていた鳥人を、聖女が手で制した。

「メルさんの歌の方が楽しいとはどういうことでしょうか？」

穏やかな聞き方だが、動揺しているのがわかるほど声が震えていた。

アンジェリアはなおも続ける。

「昔も言わせていただきましたが、もう一度言わせていただきます。

『とつても上手だね』」

聖女は口をわずかに開けた。

「ま、まさかあなたは——」

「はい。お久しぶりです。十年ぶりでしょうか？ 本当に上手だと思います。ですが、上手いだけです」

アンジェリアは言い切った。

「あ、ああ……」

ミストは顔をこわばらせる。

「私は聞いていて、そして、歌っていて楽しいと思いたい。残念ながら、聖女様の歌は心に響きません」

「う、嘘、嘘よ……。神よ、それではなぜ……？」

声どころか、膝まで震えてきている。

この反応を見るにシユウの予測は見事的中しているようだ。

「どうしても一緒に歌いたい、と思ってこないんです」

「そんな……それじゃあいつたい、今まで私は何を——」

アンジェリアは言い過ぎているように見える。

しかし、あらかじめ打ち合わせたとおりに言っているにすぎない。それにしても、かなりアドリブがきいてるな。

とつても上手だね、のくだりも動揺させるための作り話なんだろう。

『それはどうだろうか？ でも、願いは正しかったみたいだね』

ミストは顔をこわばらせ、膝をがたがたと震えさせている。

効果は抜群だ。

「私はいつたいどうすれば——」

そんなの私を知るか。

震えていた膝が折れ、ミストはそのままぱたりと倒れた。おやすみさん。

勇者は聖女の盾をへし折り、道を切り開いた。

あとは拓かれた道を整えるだけだ。

ミストが目を覚ました。

彼女はベッドの上で横になっている。

場所は大聖堂の一番奥にある彼女の寝室。

防音がしっかりしているきれいな良い部屋だ。

おはようさん。

「……おはようございます」

もう夕方だ。

歌の時間じゃないのか？

「……………夢に神が出てきました」

しばらくの沈黙の後、ぽつりと呟いた。

なんか言ってたか？

「微笑むだけで、なにも言ってくれませんでした。こんなこと今までなかったのに。私は、ずっと騙されていたんでしょうか……………」

違う。

もう何も言う必要がなくなったんだ。

聖女は首をひねっている。

わかってないようだな。

お前の願いが叶うってことだよ。

「私の願いは……………」

微笑もうとしたが、うまくできなかつたらしい。

かけられていた布団を強く握っている。

「私の願いは——」

「みんなで歌うこと。違うか？」

どうして、と言わんばかりに驚きこちらを眺めてくる。

さすがシユウと言わざるを得ない。

神の好みは歌やダンスである。

世界征服やら殲滅作戦など眼中にないらしい。

さらに歌っているときの住民の様子。

みんな歌っているのを黙って聞いているだけだ。

聖女は自分の願いはもつと単純で簡単だと話していた。

そこから、ただ「みんなで歌いたかった」だけなんじゃないかと推測したらしい。

だが、歌えば歌うほど、現実には彼女の願いから離れていってしまっ

歌が上手すぎる上に、変な催眠までついてくるからだろう。

あと、神様が種族とか世界を越えたグローバルな方向に持って行ってたこともあるかもしれない。

一言、「一緒に歌おう」と誘えばきつとそれだけで願いは叶ったはずなのに……。

「どうすればいいんでしょうか？」

歌えばいいんじゃないか？

「しかし、それではまた……」

聖女はそこで言葉を切った。

同じことの繰り返しだ。

『ひとりは歌い、みんなが続くのを待った。だが、みんなはひとりの歌をただ聴くだけで続かなかった。ひとりはみんなと一つになるため歌い続けたが、みんなはひとりの歌を受け入れるだけしかなかった』

——では順序を変えればどうだろう？

もしも、一人ではなくみんなが最初に歌っているなら。

受け入れるだけしかない連中が最初から歌っているのなら？

「えっ？」

聖女の疑問符に、私は寝室の扉を開けることで応えた。

「……あつ——」

扉を開ければ、聞こえてくる微かなメロディー。

ミストは呆然とベッドから身を起こし、歌声に誘われるように歩き出す。

廊下を歩けば歌声は徐々に大きくなり、ミストの足も速くなっていった。

講堂の扉を開けると、そこにはアンジェリアや鳥人をはじめ多くの人間が集まっていた。

彼らはみなミストの方を向いて、彼女の歌を声高々に合唱している。

ここにいる人間だけではない。コロニー中の人間が歌っていた。

——全てはただ一人のために。

やがて、一人も声を出し始めた。

一人の声は皆の声に自然と混ざっていく。

みんなはひとりを受け入れ、ただ一つのみんなになった。

『——そして、ぼつちとみんなが残った』

なんで落ちをつけるのよ……。

こうして南の世界での最後の夜は、歌声に包まれて終わることとなった。

蛇足10話 「お手紙くばるよ」

南の世界から無事に帰ってきた私は王都へ向かうことにした。

王都は北西にあるはずだ。

だが、そつちに行くと言家もあるような気がするが、近くに王都などあつただろうか？

『こまけえこたあいんだよ！ 何回かダンジョン行つてりや着くつしよ！』

そうだな！

そういうことになった。

滔々と流れるミルウス河、そのほとりにネロミロスの町はある。

南はレミジニア山系、北はミルウス河に挟まれ、古くから山紫水明の地として栄えている。

王都へ行くにはミルウス河を跨ぐパトウサ大橋を渡らねばならぬのだが……。

「現在、補修のため通行を制限しています！」

橋の前で人の流れをせき止める兵士は大声を張っている。

ちようど二日ほど前に大きな嵐があつた。

私もその嵐に出くわし、足止めをくらってしまった。

嵐が去つてからネロミロスにたどり着いたはいいものの、またしても足止めをくらつた。

上流から運ばれた木や石が橋の根元にぶつかり一部が損壊したらしい。

ここらの領主が補修のために橋を急遽通行止めにした。

流れはまだ速い上に複雑で距離もある、船は難しい。

回り道もかなり長い行程となる。

おかげで橋の入り口には私同様、多くの人が足止めを食らつてい

る。ちよつと壊れたくらいなら、かまわず通してしまえばいいのに。

『リスク管理だよ。人を通して橋がさらに壊れたら、修理にかかるお

金も時間も今以上にとられるし。もしも人が死んだら責任問題に発展しちゃうからね』

なんだか大人な話だ。

まあ、修理も二日ほどで終わる見通しだそうだからな。

回り道をすればそれ以上かかるとも聞いている。

そんな訳で修理を待つことにした。

一日目は町をぐるっと回って過ごした。

二日目は出発する準備をしたりして過ごした。

準備といってもほとんどすることは無い。

そして、三日目の朝一。

私は橋に向かって歩を進ませる。

「大変申し訳ありません！　橋の損壊が想定以上に大きく、もうしばらくかかる見通しです！」

橋の前には初日と同様に多くの人。

彼らを遮る兵士に大きな声。

「修理には、あと三日かかる見通しです！」

マジかよ……。

これなら回り道を行った方が早かった。

しかし、今から向かうなら、ここで三日待った方が早い。

いや、でも、チートで走ればそんなものはあつという間か……。

確かに歩幅五倍は速いのだが、道から逸れたり、木に激突したりするからな。

あまりに作業的になってかえって疲れるし、変な噂が流れる。

『そんなこともあつたね。メチャクチャな速さで走る女形のモンスターがいた、とか。石に奇妙な人型ができていた、とか。おもしろい格好のアブナイ女がいた、とか……』

うむ。一度、ギルドや騎士が討伐に向かったくらいだったしな。

『やめた方が良く。けつこうな人が回り道を通ってる。うっかりぶつかったら、相手は間違いなく死ぬよ。今度は通り魔が出たって騒ぎになるだろうね』

そうだよな……。

せめてダンジョンがあれば、時間がつぶせるのに。

あまりにも暇なのでギルドに来た。

ダンジョンがないので、冒険者の数は少ない。

しかも橋の修理によって、回り道輸送の護衛で多くの冒険者が出払っている。

依頼の掲示板を見てみてもやはり輸送の護衛が多い。

多いというよりも、輸送の護衛しかない。

野良モンスターの駆除とかないのか。

どうやら暇つぶしもなさそうだ。

暇つぶしを諦めてギルドを出たときだ。

「ラスール君！ 何でまだ配ってないの！」

背後からおっさんの怒声が聞こえた。

見てみると、椅子にかけた偉そうなおっさんが若者に指を向けている。

「しかし、配送は橋が直ってからでいいって局長が……」

ラスールと言われた青年は弱々しく言い返す。

「人のせいにならない！ 配送は誰の仕事なの！」

その言葉を受けて、おっさんは怒鳴り散らす。

おっさんの机には「局長」と仰々しく書かれたプレートが鎮座していた。

「……私ですが」

「そうでしょ！ 君の仕事でしょ！ わかってるなら早く配送に向かって！」

局長は席をいきり立って、指を外に向けた。

頭の薄い髪が、ふあさーと揺れてなんとなく笑ってしまう。

「でも、橋がまだ……」

「沿道を行けばいいでしょ！ 三日以内に頼むよ！」

沈黙。

「……………はい。行って、参ります」

ものすごく渋々といった様子で青年は頷いた。

すぐに近くの箱から多くの封筒をだし、鞆に入れる。

そのまま鞆を担ぎ私の横を通ると、道なりに走り去ってしまった。
緑の服に緑の鞆。

それにあの地味な帽子。

ときどき道でも見かけるな。

「ギルドの下請け郵便事業だね」

ギルドには手紙の配達という仕事がある。

町内でも送ることができるし、他の町にも送ることができる。値段も安い。

正確にはギルドではなく違う団体らしいが、ほぼギルドみたいなものだと私は考えている。

ギルドには特殊言報というサービスも存在する。

ものすごく高いが、他の地域のギルド支部へ一日も経たずに文字を伝えることができる。

私には送る相手がほとんどいないため、家族くらいにしか使うことがない。

それでも情報漏洩を恐れてか、手紙を好むお偉いさんもいる。

そういった手紙は名の有る冒険者が運ぶことが多い。

宿に戻る途中で飯屋に寄った。

そこには先ほどの若者がカウンター席に座って飯を食べていた。
テーブルには飯の皿の他に酒瓶も置かれている。

あれ、あいつ配達に向かったんじゃないか……。

私もちよつと気になったので、こそこそ一つ間隔を開けて座る。
若者は私の方をちらりと見て、ふんつと鼻を鳴らした。

「いいよなー、冒険者は。上司とかいないし、気楽そうで」
嫌みのつもりなんだろうが、指摘のとおりだ。

うむ。実に気楽でいいぞ。

媚びを売る必要もないし、依頼が面倒ならやめればいい。

お前も冒険者になったらどうだ。

「……それもいいな。そうすりゃあのクソ禿の顔も見なくてすむ」

ああ、さっきの局長か。

確かに禿げ散らかしていたな。

『禿げ散らかしていたって……、あまりにもひどい表現だと思う』

若者はさらに一杯ひっかけ、愚痴をこぼしていく。

「沿道をどうやって走れば、テスピアまで三日で着くと思ってるんだよ、あのハゲは！」

どうやらご機嫌斜めのようだ。

だが、たしかに三日は無理だろう。

私がチートなしの全力で走っても三日でつくかどうか。

「やめてやる！ 今度こそやめてやる！ なあにが『君の仕事でしょ』だ！ 椅子に座ってるだけの給料泥棒が！ お前が橋が直ってからでいいよって言ったんだろうが！ ボケハゲめ！」

かなり鬱憤が溜まってるようだ。

次から次にハゲへの悪口が出てくる。

『俺も溜まりに溜まってるから抜いて！』

黙つといて。

「だいたい！ 今から向かうなら、橋が直るのを待つべきだろ！ そんな計算もできないのかよ！ あのバカハゲ！ もうたくさんだ！

あんなハゲの下で働けるか！」

で、やめるとして、その手紙はどうするんだ？

私は若者の足下に置かれた手紙を目線で示す。

「……これは、ハゲに持って行く——辞表と一緒に！」

『ちよつと躊躇ったね』

うむ。

どうやら後ろめたいという気持ちはあるらしい。

まあ、続けるのもやめるのもお前の勝手だからな。

やめたら冒険者でもすればいいさ。

ついに若者——ラスールは席を立った。

堂々と闊歩して店を出ていく。

まるで自分自身を鼓舞しているようだ。

向かう方向は町の出口ではなく、ギルドだった。
本当にやめるつもりらしい。

「まだ若いからな」

今まで静かに微笑んでいた主人がしゃべった。

「いくらでもやり直しがきく」

そうだな。

冒険者にでもなればいい。

まあ、冒険者でも最低限の人付き合いはあるし、無理難題も押しつけられるがな。

「何をやってもそうだろう。けつきよく周りはそう簡単に変わらな
い。自分を変えるしかないんだ」

そう……かもしれないな。

「まだ若いからそれに気づかない。きつとまた何をやってもすぐやめ
ちまう」

けっこう言うもんだな、この主人。

さつき本人に向かって言ってみればよかったのに。

「実は何度も言ってる。なんだかんだ言ってるが、あいつはやめてな
い。でも、今回は本気かもな……」

そうだな。

制服で酒も飲んでるし。

それに向かった方向もギルドのほうだったし。

「それよりも、だ。橋が壊れて冒険者は良い稼ぎじゃないか」

話が変わった。

そのようだな。護衛の仕事で冒険者は稼いでいるようだ。

私はそんな小遣い稼ぎよりもさつきと橋を渡りたいんだが……。

こうなったら無理矢理渡るか。

「おいおい、悪いことは言わねえ。クラニオ隧道はやめておけ。命を
落とすぞ」

……ん？

なんだそれ？

私は無敵スキルで渡ってしまおうかと考えていたのが、なんだか興

味深い言葉が釣れた。

「橋のこつちと向こう側を繋いでるほら穴だ。一時期は知る人ぞ知る隠れ道だったらしいが、水没したただかモンスターが出るだけで封鎖されちゃったんだ」

……へえ。

そりや、いいことを聞いた。

主人、お愛想だ。

テーブルに硬貨を置く。

情報量も込めて、飯代より多めに置いた。

「こりや、余計なことを言っちゃまったかな」

そんなことはない。

ようやく私の崇高な仕事の時間が来たというだけ。

言うなれば——スーパーマルタイム！

『恥ずかしい……』

そもそもクラニオ隧道の場所もわからないためギルドに戻ることにした。

だいたい、そういった怪しい場所はギルドが管轄している。

私も肩書きは超上級冒険者。顔は利くのだ。

ギルドに行く途中。

道ばたの長イスでラスールが座っていた。

何か考え込むように、ぶつぶつと顔をうつむけ呟いている。

『あれは、まだ行ってないね。悩んでおりますなあ』

そつとおこう。

何を言っただけか良いのかもわからないし。

下手に口を出して拗れるのもわかりきっている。

私だって学習しているのだ。

『えっ？ なんだったって？』

私は学習している。

『え、なに？ 聞こえない』

学！

習！

『あ、ああ、学習……がくしゅーねえ。ふーん、へー、要介護冒険者のメル姐さんが？』

……そう、この私が学んでいるのだ。

『メル姐さんがそう思うんならそうなんでしょう、メル姐さんの中ではね。応援してるよ、ハハ。あ、そうだ。なんかわかんないことあるかな？』

お前を消す方法。

半ば無理矢理にギルドの受付から情報を引き出した。

隧道の一部が崩落し水没。モンスターへの報告も本当のようだ。

調査の結果、ダンジョンになりかけの状態らしく静観しているらしい。

情報も手に入ったのでさっそくクラニオ隧道へ赴くでしょう。

攻略したらそのまま河を越えて向こう側に行ってしまうといい。

ギルドを出て、歩いているとラスールを見つけた。

まだ悩んでいるようで、長椅子に座って下を向いている。

やれやれ、しょうがない。

ここは私が――

『待った』

ラスールに近づこうとした出鼻をくじかれた。

なんだよ？ 目的地は同じだから別に組んでもいいじゃないか。

どうせあれだろ？ 男と組むのが嫌だって話だろ。

『もちろんそれもある。あと、パーティー組んで行ったとしても、しよせん一時しのぎにしかならない。どうせすぐにまたやめたくなる。本人の意志が大切』

じゃあ、ほっとくか。

本人の意志は私じゃどうにもならない。

『そうだね。――だから待ってって言ったの。ほら、あれ』

意識をラスールに戻すと、一人の老婆が彼の前で立ち止まっていた。

「ごきげんよう。郵便屋さん」

ラスールは力なく顔を上げる。

「テストピアまで手紙をお願いしたいんだけど、あなたでいいのかしら？」

「……はい。いや、でも、もう俺は——」

頭を横に振る。

老婆はラスールの横にゆるゆると座る。

「今度ね。テストピアにいる孫が結婚するの」

老婆はいきなり孫の話始めた。

いるいる。たまによくいるんだ。ああいう年寄り。

私も一人でぼんやりしていると話しかけられたことがある。

老人は得てして話したがりののだ、そう私は考えている。

聞いてなくても勝手に話す。シユウみたいだ。

おかげで聞いている振りが上手くなった。

『あれは……、そういうのとちよつと違うんじゃないかな』

私も聞き流しモードを解除して、耳を傾ける。

無駄な部分をカットしていくと、

数日前にテストピアの孫から手紙が届いた。

今度、結婚式をするから参加してくれないかという内容だったららしい。

老婆は「参加する」と手紙に書いた。

内容はそれだけだ。

それだけの内容をひたすら誇張して修飾して脇道に逸れつつ話している。

「孫もあなたと同じくらいかしら。あの子の方が、もうちよつと上かしらね」

まだまだ話は続く。

「あの子ね。この前に帰ってきたとき。仕事がとても大変だって話してた」

「俺だって、そうですよ」

ラスールはぼそりと呟いた。

「そう。本当に貴方と同じ」

「えっ……」

「今の貴方と同じ顔をしてたわ」

老婆は余裕の笑みを浮かべている。

「手紙の中でも仕事が相変わらず大変だって書いてた」

「お孫さん、もう……仕事やめるんじゃないですか？」

老婆は「そうかもしれないわね」ところろ笑っている。

「だからね。私、本当につらいならやめなさいって書いたの」

ラスールは、無言で老婆を向く。

「つらくて仕方がないのなら、やめてしまえばいいの。簡単でしょう」

「……はい、簡単ですね」

「でもね。条件があるわ。もう一日だけ。もう一日だけががんばってみなさい。そして、その一日は全力で働くの。『明日から自分は自由なんだ』って思いを込めてね。その一日が終わって、それでもやっぱり辛いと感じたなら——」

「やめてしまえばいい」

「そうよ、と老婆は頷いた。

「郵便屋さん。この手紙、お願いできるかしら？ 貴方の手から、あの子に直接渡して欲しいの」

ラスールはふらふらと手を伸ばす。

老婆は相変わらずの微笑みで、彼と彼の手の行く先を眺めていた。

長い時間が経って、手はどうとう手紙の一端を掴んだ。

「ありがとう郵便屋さん。よろしくお願いね」

若い配達員は小さく頷き、その重い腰を上げた。

ラスールは町を出て沿道を走る。

私はこそその後ろをついていつている。

配達員というだけあって、さすがに足は速い。

『上手いこと風魔法を使ってる。でも……三日は無理かな』

確かに速いが、これでは三日に間に合わない。

徹夜で行ったとしても着かないだろう。

橋の修理を待ったほうが早い。

それでも彼は走り続けた。

やがて、一つの分岐点で足を止めた。

『知ってたみたいね』

そのようだな。

意識しなければ気づかないほどの細道が本道から伸びている。

何も知らなければ、立ち止まることはない。

草に覆われ、もはや獣道。

ラスールは草を分け入って進んでいく。

沿道を道なりに進むなら放っておくつもりだったがどうやら目的

地は同じらしい。

さて、どうしたものか。

『試してみればいい』

試す？

『そう。本気でこの道を進む気があるかどうか。そして、それが——』
「いったい何のためなのか？」

獣のごとく、ラスールの後を付かず離れずつける。

『こんな技術ばかり学習してる……』

ようやく彼は目的地にたどり着いた。

隠し通路というだけあって入り口は人一人分と狭い。

さらに、その穴は木の板でふさがれている。

『板に魔方式も書かれてるね。ありやあ、触ると痛いじえー』

よくわからんけどそうらしい。

……じえーって、お前。

ラスールは恐る恐る入り口の板に手を伸ばした。

「やめとけ。触ると痛いぞ」

いきなりの私の声にビクツと体を震わせ振り向いた。

「あんた、さっきの」

「どうも。」

「どうして、こんなところ？」

そりや私は冒険者だからな。

モンスターにダンジョンと聞いたら、行かないわけにはいかん
だろ。

で、そっちはなんでこんなところに？

「俺は……」

配達員はやめるんだろ。

さっそく冒険者としてダンジョンに挑むのか。

「……………違う」

それがいい。

危険だから、沿道に戻れ。

私はそろそろダンジョンに挑みたい。

そう言つて、ラスールの横を通り入り口の板をシュウで切り捨
てる。

ポシュと気の抜ける音がして板は地面に落ちた。

『器物損壊』

ダンジョンの入り口に蓋をする方が悪い。

ダンジョンつてのは誰にも邪魔されず、自由で解放されてなきやあ
駄目なんだ。

「待て……。待ってくれ」

入り口にまで達した私をラスールが止める。

軽く振りむくものの若者は無言で立っている。

なんか用か？

ああ、そうか。手紙だな。

いいぞ。私がレスピアのギルドまで持つて行こう。

なに、ついでだから気にする必要はない。

ギルドの奴らには私が行ったと言えは伝わる。

これでも冒険者としてはそこそこ高名だからな。

『高名つちや高名だよ。 良い悪いを抜きにすれば……』

シュウの言葉を見無視して私は手を差し出す。

早く手紙の入った鞆をよこせと言わんばかりに。

ラスールは鞆に手をかけて、悩んでいる。

大丈夫だ。

お前はゆつくり歩いて帰れば良い。

後で私からもギルドにきちんと連絡しておこう。

お前は何も悪くない、と。

そう言つて、私はラスールの鞆に手を伸ばす。

鞆を掴む直前、ラスールは鞆を持ち上げて私の手を躲した。

「これは……」

これは？

「これは、手紙だ」

知ってるぞ。

だから、それは私が――、

「違う。これは俺が頼まれた手紙なんだ」

伏せていた目が上がり、しつかりと私を見据える。

「だから――これは俺が配らないといけない。俺じやなきや駄目なんだ。それが、俺の……」

その先は声が小さくて聞こえなかった。

そうか。

お前が配るか。

それが道理だろうな。

『道理なんて言葉、どこで覚えたの？』

茶化すなカス。

だいたいお前が書いた筋書きだろ。

ふん。まあいい、ともかく私はダンジョンに行く。

ついてくるなら勝手にしろ。

だが死なれたら迷惑だ。

それをつけておけ。

手に握っていたパーティーリングを軽く放る。

『うーん、ちよつぱり残念。使わないと思つてただけだな』

………私もだよ。

結論から言うと、クラニオ隧道はダンジョンというのもおこがまし

いものだった。

たしかに一部は水没していたし、通り道でしょぼいモンスターは出てきた。

だが、ボスモンスターもないし、道もほぼ一本道。
あつという間に対岸だ。

水中でも呼吸したり、手紙がぬれなかったが魔法で通した。

ラスールも無理に聞いてはこなかった。

そんな彼は、ダンジョンから出るとすぐに走りだした。

ついて行つても良かったが、ダンジョンはないし興味も薄れたのでそのまま別れた。

翌日、テスニアの飯屋でラスールに出会った。

手紙は無事に配り終わつたらしい。

憑きものが落ちたような気の抜けた顔をしている。

俺は仕事をやりきつた、後は野となれ山となれといった具合だった。

そうか、配り終わったか。

で、どうするんだ？

昨日一日がんばつたようだが、配達員の仕事は続けるのか？

「昨日の――、聞いてたのか？」

まあな。

歩いてたらたまたま目に入った。

『えっ？ めっちゃ立ち聞きしてましたよね』

まあ、そんなことはどうでもいいじゃないか。

「お孫さんの結婚式は来月だそうだ」

へえ、話したのか。

「気さくな奴だったよ。この後も会う予定をしてる」

ほー、ずいぶんと仲良くなったものだ。

『羨ましいなら羨ましいって言えばいいでしょ！』

そんなことないし。

全然うらやましくなんてないし。

どうせ会つてご飯食べるだけでしょ。

「違う」

ん、違う？

……ああ、酒も飲むのか。

『ちやうちやう。受け取りに行くんでしょ』

受け取り？

「婆さんへの返事を書きたいって言ったから、今日回収しに行くってことになった」

……そうか。

仕事、続けるのか。

「もうちよつとだけ……、もう一日だけがんばってみようかなって」
ラースールは椅子から立ち上がり地味な帽子をかぶる。

「俺は郵便の配達員で、これが――」

俺の仕事だから。

青年は吹っ切れた顔で颯爽と店を出ていった。

『今は良くて、ネロミロスに戻ったらまた嫌になる』

……きつとそうだろう。

この先も理不尽が目白押しで、上司もむかつく禿のままだ。

ギルドの前で立ち止まり、そのまま背を向けて逃げ出したいと思うこともある。

『やめてやるって思うことも一度や二度じゃ済まないだろうね』

寝たら朝になるから寝たくない。ずっと布団にくるまって寝たい。

いつそやめてしまえば、全て放り投げてしまえば、と思うこともあるに違いない。

だが、それでも――。きつと、あいつは手紙を配り続ける。

そんな気がするんだ。

蛇足11話 「試練　くどうあがいても鉄拳く」

リエチンの里へ続く道は周囲を山々に囲まれており、俗に言うなら盆地だ。

うつすらと霧が出ており、まだ昼なのに肌寒い。

『放射霧だね』

……らしい。

道なりに歩き、霞む景色にぼんやりと門が見え、近づいたとき——
「この馬鹿ものがあつ！」

いきなりの怒声。

怒り声に続いて、私の横を何かがすごい勢いで通り抜けた。

振り返れば、地面を何かが転がっていく。

それはそのまま霧に消えた。

首を元に戻すと、霧の中から一切の足音なく細身の老人が現れた。

背筋はピンと伸び、長く伸びた白髪が一本に縛られ伸びた背中と平行に垂れる。

険しい顔には、傷跡のような深い皺が無数に走っていた。

「申し訳ありません、師匠！」

今度は後ろから元気のいい声とともに大きな足音が聞こえてきた。

振り返るまでもなく、私の横を土に汚れた服を着た若者が駆け抜けていく。

「ヨンチ！　どうして足を止めた?!」

「申し訳あり——」

「大馬鹿ものがっ！」

男の謝罪の途中で老人が男を蹴って、男は道の脇に転がっていった。

『今の蹴り……すごいキレ』

なんかきれいに蹴っていたな。

老人は若者の顔を蹴った足をゆるりと下ろすと転がった若者の方へと向き直る。

「馬鹿者！　儂がいつ謝罪を求めた！　聞いておるのは足を止めた理

由だ！」

若者は何事もなかったかのように立ち上がり、老人の前へ駆け寄り声を張る。

「体に不調を感じ、足を止めました！」

若者の言葉を聞き、老人はふむと鼻息をして若者に近寄る。

「どのあたりだ?!」

「胸の辺りです！」

老人は指を若者の喉に当て、探るようにゆっくりと腹の方へと伝わらせていく。

頷きを一つした老人は下ろした指を若者の額に持ち上げた。

「どこにも異常がないではないか！ この腑抜けめがつ！」

老人の指が若者の額をはじいた。

デコピンである。

『なん……だと……』

しかし、シユウの驚きでわかるように私の知っているデコピンとは桁が違った。

まず、その音。

カツンやコツンといった可愛い音ではない。

巨大な鉄のハンマーで木の腹を叩いたときの「ゴ」という鈍い音に近い。

次に威力。

通常はせいぜい頭が傾く程度だと思う。

一方、老人のデコピンは飛んだ。

吹き飛んだのではない。

——体が回転していた。

頭が下になり、足が上を向いての半回転。

半回転を経て上下が元に戻って、着地しての見事な一回転だ。

きれいに着地を決めた若者は白目をむき、膝を崩して前のめりに倒れた。

「疲れたから休むなどとは言語道断！ お前は戦うべき時に「疲れているから戦えません」と言うのかっ！」

老人は倒れた若者の背中に一喝。

同時に若者への活であったようで、若者はびくりと体を震わせ、すばやく立ち上がった。

『あの状態からもう立ち直るんだ……』

若者はまたしても老人に素早く駆け寄る。

「師匠の仰るとおりにございます！ 不肖私、ヨンチ油断しておりました！ 心の中に、甘えが残っております」

若者は恥じ入るように、噛みしめるように口に出す。

「それがわかっておればよい！」

老人は相変わらぬの険しい顔で頷く。

「修行を続けるぞ！」

「はい！」

そうして二人は霧の中へ走って消えてしまった。

『メル姐さん、歯牙にもかけられなかったね』

……うん。

ずっとすぐ側にいたのに、一度も見られなかった気がする。

ステルス使ってた？

『いや、使ってない』

……そう。

まあ、かかると面倒そうだから良かったでしょう。

さて、里の近くにある上級ダンジョン——ミンユ峡谷の入り口に来た。

ミンユ峡谷はかなり有名だ。

だが、有名ではあるものの、ここにくる冒険者は少ない。

理由はいろいろあるが、まず王都から伸びる主要道を大きく外れていることが一点。

二点目として、道が霧に覆われている上に獣やはぐれモンスターが出てくること。

三点目として、ドロップアイテムに金銭的な価値が乏しい点。

どのアイテムを換金しても二束三文にしかない。

ただ「金銭的」とつけたようにボスのアイテムには別の価値が存在する。

ボスのアイテムは一種の名誉称号でもあり、実力者の証明になる。その証拠に王都で開かれる武闘会の参加権と引き替えも可能だ。

ソロでミンユ峡谷をクリアした者は武闘会もほぼ間違いなく優勝する。

そんなこともあってミンユ峡谷は腕試しの場としての側面が強い。

私のように純粋な楽しみでのダンジョン攻略を目的とした冒険者はほぼゼロである。

峡谷の入り口は谷風が帰れと言わんばかりに吹き荒れている。

内部の構造は非常に単純。

谷に沿っての一本道となっている。

道の途中では五つの試練が挑戦者を待ち受ける。

まず第一の試練。

ボコリザルが道の前から、後ろから、上からと大量に押し寄せてくる。

この猿たちの容赦ない全方位攻撃を凌ぐこととなる。

全て倒す必要はなく、ある程度時間が経過すればよいらしい。

もちろん倒してもまったく問題はない。

ちなみに戦闘中こそ容赦ないが、気を失ったら入り口まで連れて帰ってくれる。

——と話に聞いていたとおり、今まさに一人の若者が猿のモンスタ―たちに両脇を抱えられて帰ってきていた。

『こいつ……、さっきの弟子だね。ヨンチだったかな』

猿のモンスタ―たちはヨンチとかいう若者を丁寧に地面へ寝かせる。

その後、私に礼をして谷へと帰っていった。

『違う。メル姐さんに礼をしたんじゃない』

は？

じゃあ、いったい——

「うつげがっ！　いつまで寝とるつもりだっ！」

突然の真横からの大声に私は大きく飛び跳ねた。

驚いたのは私だけではないようで、地面に倒れていたヨンチも飛び起きた。

「ヨンチー！ ただいま第一の試練から帰還しました！」

「そんなこと見ればわかるわっ！ この馬鹿弟子がッ！」

先ほどと同じように、老人は怒鳴りつける。

もちろん両者とも私のほうを見向きもしない。

それなら私もかまうことはない。

お先に行かせていただこう。

『ッ！ 屈んでっ！』

シユウの叫びで反射的に膝と腰を曲げた。

同時に私の頭を何かが擦った。

上を見れば、握られた拳があった。

後ろには柱のごとくまっすぐ立ちはだかる老人。

「ふむ……」

何をする、と開こうとした口が老人の鋭い視線で塞がれた。

上から順々に下りていった老人の視線がある一点で制止した。

『いやん。そんなにじろじろ見ないでよ、えっちい』

気持ち悪い声を出しているシユウへと視線は刺さり続ける。

やがて老人は何か納得したふうに頷いた。

何を納得したのか教えて欲しい。

「ヨンチー！」

「はい！」

「今一度、峡谷に挑んでこい！」

「はい！ かしこまりました、師匠！」

私のことはもうどうでもよくなったのか師弟での大声合戦が再開した。

もう少し静かに言い合えないのだろうか、うるさくて仕方ない。

シユウとは違う方向性のうるささだ。

「ただし！ 挑むのはこの女たちと一緒にだ！」

『ほお』

「はい！……はい？　この方とですか——」

「そうだ！」

私も「はい？」と言いたい。

この女とはもしかして私のことだろうか？

『まあ、ここに女は一応メル姐さんしかいないでしょ』

いや、それはそうなんだけど……なんで？

あと一応はつげなくてもいいでしょ。

「しかし師匠——」

「くどいつー！」

「申し訳ありません！　すぐに向かいます！」

ヨンチは慌ててダンジョンへと走り出す。

走るヨンチの背から目を離し、老人に苦言を呈そうと振り向くとそこにはすでに誰もいなかった。

『やるなあ……』

ほんとなんなんだよ、こいつらは……。

なぜかパーティーでの攻略になってしまったわけだが……。

「ワチャァ！　ハッ！　セイハッ！　チェリヤアアアアアアア！」

この男、くっそうるせえ……。

叫びながら攻撃する冒険者はあるが、こいつは限度を超えている。

パーティーリングで能力プラスもあってか、ヨンチ一人で猿を次々に倒していつている。

「アチヨー！　セヤッ！　ハイッ！」

群れは徐々に減っていき、最後の一匹をヨンチの拳が貫いた。

やっぱりうるさい。

「倒し、ました、ね……」

そうだな。

ほぼお前一人で倒してしまったな。

「力が湧いてくる。体も思い通り以上に動く。モンスターの動きも見えている。まるで私ではないみたいです」

そりゃチートの力だからな。

「この力があれば……」

ヨンチは何かぼそりと呟いた。

峡谷の先を、あるいはさらにその先を見つめながら――。

第一の試練を乗りこえた私たちは第二の試練へと移った。

第二の試練は迫り来る崖崩れからひたすら逃げ続けることである。

途中でボコリザルたちも襲いかかってくるおまけつき。

いつまで走るのかわからない心理的な試練らしい。

ここはまるで問題にならなかった。

走るのは得意だし、ヨンチも持久力があるため余裕で突破できた。

途中でシユウもいくつか口を出してきたが、ヨンチは喋る剣にさほ

ど驚く様子もない。

走っていて余裕がなかったためだと思うことにしていた。

第三の試練は普通のボス戦だった。

見たことのない棒状の武器を持った一際大きなボコリザルだ。

『トンファーだね』

トンファーというらしい。

しかし、見たところほとんどトンファーを使っている様子はない。

むしろキックが多いような気がする。

『伝統だね』

伝統らしい。

「ハイイイ！ ヤー！ ホッ！ セイ！ シャアア！」

後ろからヨンチの戦いを見ていたが、こいつはなかなか強い。

現に今も一人で大ボコリザルとやり合っている。

しかしうるせえなあ。

『いやいやいや、なかなかかっついていうか。普通に強いよ。耐久力が異常だし、体力も不気味なほどある』

たしかにそうだな。

さつきから大ボコリザルと戦っているが、息がほとんど乱れていない。

『対集団戦がまだ甘いけど、慣れてくればいけるだろうね。第二の試練は今でもチートなしでいける』

ちなみに私は、大ボコリザルの周囲に湧く普通のボコリザルを倒していつている。

ここまでくるとどうでもいいことだが、即死以外ならどの試練でもボコリザルが入り口まで連れて帰ってくれるようだ。

もしも、これがなかったら間違ひなく超上級の難易度であると言われる。

『師匠がヨンチの耐久力を鍛えてたのはそのためだろうね』

たしかにあの老人の横暴に耐えていれば耐久力はずくだろう。

死なないだけの耐久力があるなら、このダンジョンから生きて帰れる。

それにしてもあの老人はなんで私とヨンチと一緒にダンジョンに挑ませたんだろうか。

『あの爺さんは俺にも、チートにも気づいてた。メル姐さんの見た目から得られる強さと背後からの攻撃を避けた強さは明らかに乖離してるからね』

そこは別に不思議じゃないな。

今までも私の強さの違和感やシユウに気づいた人間及びその他生物はいたし。

……強さに気づいたってことは、ヨンチを私たちと挑ませてダンジョンをクリアさせたかったのか。

『そうだね』

なんだかんだ言っつて弟子だからな。

ミンユ峡谷クリアの箔をつけたかったんだろう。

そうすれば自分の株もあがるだろうし。

『それなら自分と一緒に挑ませる。あの師匠はソロでここをクリアできると思うよ』

やっぱりそうなのか。

あの老人はなんかすごく強そうな雰囲気を感じた。

『ここに入る前に姿消したじゃん』

ああ、振り向いたら消えてたな。

『あれ。俺にも見えなかった。わかる？ チートな俺の目と耳をもつてしても、消えた瞬間がわからなかったんだよ。俺の意識からも気配と動作を消したんだ。有り得ませんわ』

どうやらあの老人はとんでもない人物らしい。

それで、けつきよくなんでもない老人はあいつを私たちとダンジョンに挑ませたんだ？

『それはわかる』

なんでなんだ？

『ハハ、そりゃあんだ。修行に決まってんじやん』

イラツとしたね。

だから全力で蹴った。

反省も後悔もしていない。

時間はかかったもののほぼ無傷でヨンチは大ボコリザルを倒した。

さて、第五の試練まであるが一番の問題は第四の試練だと私たちは考えている。

第四の試練は自分自身の影と三連戦。

真つ黒な自分が出現して、それを倒さなければいけない。

一戦目は全員分の影が出るが、連携をとらずに攻めてくる。

二戦目は全員分の影が出てきて、こいつらがさらに連携をとってかかってくる。

三戦目は全員分の影が出て連携をとるのに加えて、コピー元の本体よりも強化されている。

もしもチート込みで出てくれば絶対に勝てないとシユウは話す。

対策として、ボスが出てくる前のあたりでシユウから距離をとりチートを外しておいた。

影が出てきてからシユウを拾ってチートを発動させた。

対策が功を奏したのか影は三戦とも非常に弱かった。

特に私の影は自分でも悲しくなるほどに弱かった。

一戦目とか殴るだけで消えた。

二戦目も同様。むしろ無理に連携をとったせいでヨンチの影まで弱くなった。

三戦目も私の影はワンパンで消滅した。ヨンチの影は蹴っても消えず、相当しぶとかった。

そして、とうとう第五の試練。

二匹の大ボコリザルを従えて登場したのは人型のボスモンスターであった。

『あら？』

手にはこれまた見たことのない武器を持っている。

二本の棒を短めの鎖で結んだだけのものだ。

『ヌンチャクだね。それよりも、あの師匠がここのボスならおもしろいと思ったんだけど、そんなことはなかったか』

ランセサンと呼ばれるボスはヌンチャクとやらを右手でぐるぐる、左手に持ち替えてぐるぐる回す。

ときどき片方を脇に挟んだりもしていた。なんなんこのボス。

「アチヨー！ セヤツ！ ヤツ！ ホワツ！」

「ヒヨー！ シェアヤー！ ソツセエ！」

ランセサンとヨンチはどちらも変な声で叫び合い、もはやどちらがどちらの叫び声なのかわからない。……というか、ほんとうるさいんだだけ。

私はただ粛々と大ボコリザルを始末していく。

大ボコリザルを倒した後も、ランセサンとヨンチは戦っていた。

ヨンチのほうが不利な状況だ。

ヌンチャクのぶん、ランセサンの方が間合いが長い。

それに連戦のせいもあり、疲労とダメージの蓄積もヨンチが大きい。

ヌンチャクがヨンチの鼻を掠り、鼻血が流れる。

ヨンチは手でビツと鼻を擦って血を拭き取った。

『よくないなあ』

シユウの言葉とは裏腹にヨンチの顔は追い詰められた者の表情で

はない。

戦いを楽しんでいる様子が感じられる。

『それがよくないんだよ』

何が良くないのかわからないが、戦いは続いている。

ヨンチの構えが今までのものから変わった。

体は半身。両手は軽く開き、体の前で上下に置いている。

呼吸もさつきまでのうるさい謎の叫びをやめ、コオオオと息を吐き出している。

ボスもその様子を察し、距離をとりヌンチャクを構えるという万全の体勢を作る。

ヨンチがはき出していた息を止め、体をわずかに前傾させた。

「流派隆運不撓が滅技——」

宣言とともに一步踏み出す。

一步といってもその距離はすでに素手の間合いにまで縮まっていた。

「悉碎ッ！ 還塵拳ッッ！」

叫び声とともに握られた拳がランセサンへと向かう。

ランセサンはヌンチャクを構えるが、ヨンチの拳はヌンチャクを叩き折って進んでいった。

拳はランセサンの腹を叩き、次いでその体を折り、背中からは何かよくわからない衝撃が視覚として伝わってきた。

たいそうな名前はついていないが、要するに腹パンだろう。

そもそもどうして出す技を宣言するのがよくわからない。

技の名前を叫べば相手に何をするのか気づかれるのではないか。

『無粋なことと言うもんじゃない。伝統なんだよ』

またそれか……。

それでも消えなかったボスはさすがと言える。

その後は何度か殴ったり蹴られたりを繰り返し、ついにヨンチはボスを倒した。

「帰りましょう」

ドロップアイテムを拾ったヨンチは誇らしげであった。

こうしてミンユ峡谷攻略はほぼ見ているだけで終わってしまった。
『まだじゃ。試練は始まったばかりじゃぞ』
アホらしい台詞とともに私たちは峡谷を後にした。

霧の中を歩き、もうじきリエチンの里というところで人影が見えた。

立ちはだかるその男は、語る必要もなく例の老人であった。

「ヨンチー！ ただ今戻りました！」

ヨンチはダツシユで師匠の前に行き帰還の報告をする。

老人は何も言わずただ頷くだけだ。

「このヨンチー！ メル殿とともにミンユ峡谷を制覇致しました！」

老人はまたしても黙って頷くだけだ。

視線だけでヨンチに続きを言えと促している。

「流派隆運不撓の奥義とともにランセサンを打ち倒しました！」

誇らしげにヨンチは報告していく。

一方の老人は何も言わない。なんだか不穏な空気だ。

「この力があれば、私は弱きものを守り抜くことができます！」

老人はやはり頷きを一つ。

「……師匠？」

ヨンチも不穏な空気を感じたのか老人の様子をうかがう。

しばらくして老人は表情を緩めた。

ヨンチもその顔を見て、安堵の息を一つ。

「こんのツ大馬鹿者めがあっ！」

見えなかった。

ヨンチの顔があった位置には老人の突き出した拳があった。

突き出されたヨンチはと言うと、体を縦に回転させて後方へ飛び霧の中へと消えてしまう。

だいぶ時間を開けてから、地面に落ちた音が聞こえてきた。

老人に視線を戻せば、すでに背を向けて霧の中へと歩き出している。
まったくもって意味がわからない。

ひとまずヨンチとともに里へ戻ってきた。
正直、死んでしまったと思ったがすぐに目を覚ました。
能力プラスが発動しているとはいえ、あまりにも頑丈すぎる気もする。

「わかりません」

ヨンチは宿屋の椅子に座り、机をジッと見つめている。
里に戻ってからはずっとこの調子で悩み続けている。

「どうして師匠は私を叱ったんでしょうか」

私にわかるはずもない。

こういうときこそお前の出番だぞ。

『さてなー、俺にもさっぱりわっかんないなー』
嘘だ。

間違いなく嘘だ。

これは明らかに嘘だとわかる。

問い詰めようとも思ったが、あえて何も聞かない。

普通なら聞いてなくてもペラペラとむかつくぐらい喋るカスだ。

そのカスがわからないと嘘を言うということは、自分でどうにかしろということだろう。

……だが、こいつは男に厳しいから意地悪しているだけかもしれない。
い。

「よしー」

ヨンチはがたりと椅子から立ち上がった。

お、わかったのか？

「わかりません！ 師匠に直接聞いてみることにしますー！」

爽やかで情けない宣言だった。

いいのかそれで。まあ、本人が良いって言ってるからいいか……。

私には関係ないし。

ヨンチはさっさと出て行った。

『あれは、また殴られるな』
やっぱりそうか。

で、お前は気づいてるんだろ。

どうして老人はあんなに怒ったんだ。

『あれはなんと云えばいいか。チートの暗黒面とでもいうかな』
なんだよチートの暗黒面って、初めて聞いたぞ……。

『簡単に言うとは——』

「このッ！ 大うつけがッ！」

シユウの説明は怒声によって打ち切られた。

宿屋のおばちゃんも少し作業の手を止めたが、またすぐに手を動かし始めた。

どうやらこの辺りではよくあることらしい。

「本当に何もわからんのか！」

「わかりません！」

「たわけがッ！」

大声と鈍い音と地面を擦る音。

見ていないはずだが、何が起こっているのかはつきりわかる。

なんだかんだで気になって見にいけば組み手が行われていた。

老人の攻撃を弟子がひたすら受けている凶だ。

「貴様はなぜ力を求める!?!」

「この手で守りたいものがあるからです！」

老人の貫手をヨンチは足捌きだけ避ける。

「今の貴様に何が守れる！」

「この力があれば、人もモンスターも倒せます！」

老人の上段蹴りをヨンチは腕と体で受け流した。

「馬鹿者がッ！ その力は所詮一時の仮初め！ そんなものを頼っている限り、貴様に守れるものなど何もないわ！」

それもそうだ。

ただのパーティーだから離れれば効果は切れる。

「それならばメル殿について行くだけです！」

ついてこなくて良いです。

『せっかくの永続パーティーを断るの?』

だつてうるさいもん。

「馬鹿者が！ 借り物の力を自分の力と勘違いしおつてからに！」

老人の掌底突きをヨンチは腕をクロスに構えて受ける。

それでも体が大きく吹き飛び、地面を転がる。

「借り物と言えど、力は力ではないですか！」

すぐさま立ち上がりヨンチは叫んだ。

「お前の求めている力は敵を討ち滅ぼす力だ！ 守る力ではない！

敵を討ち滅ぼしたその先にはさらに強大な敵が待ち構えている！」

師匠の回し蹴りがヨンチの腹に直撃する。

やはり吹き飛ぶが今度は地面を転がることはない。

両足で地面に畝を作り、やがてその勢いは止まった。

「それならば！ さらに大きな力を行使するだけです！ そのための奥義ではないですか！」

さきほどシユウの言っていたチートの暗黒面がなんとなくわかった。

『人を試す一番簡単な方法はね。力を与えることなんだよ』
なるほどな。

こいつの言っている力というのは、単純な力でしかない。暴力だ。
「自らの築いた力を踏み締め！ それでも足りぬ未熟さを噛み締め！
たるんだ心と気を引き締める！ 力とは即ち己の弱さの裏返しだ！
！ 自分の弱さを認められぬ貴様が！ どうして他人の弱さに気づくことができる!? 貴様にはそもそも守るべきものが見つけられないのだ！」

師匠の言葉の鉄拳に、ヨンチは呼吸を止めた。

「ランセサンに奥義を使ったと言ったな！ それは何のためだ！ 守るためか！」

「それはメル殿を……」

「馬鹿者がっ！ その女らはお前などに守られる必要などないわ！

お前はお前のためだけに力を行使したのだ！ 守るなどと嘯いて、己の力を振り回しただけだ！」

ヨンチはもはや何も言い返せない。

確かに私から見てもこいつは戦いを楽しんでいた。

師匠が構えをといた。

「奥義を儂に撃ってみろ！ ランセサンを倒したというその力を見せてみよ！」

正確には倒した訳ではなく、ヌンチャクを叩き折っただけなのだが黙っておくことにした。

ヨンチは言われるがままに構えを作った。

「流派隆運不撓が滅技——悉碎！ 還塵拳ツツ！」

呼吸も、技の口上も、全てボスに撃つたときと同様だ。

傷も癒えているためかあのときより声も大きく、速さも上がっているようにみえた。

『ん？ これ……』

だが、効果はまるでなかった。

老人の腹に入った拳はそこで止まった。

周囲の空気は大きく揺れているが、老人は微動だにしない。

「気づいたか？」

老人は静かに問いかける。

この老人が普通の声で喋ったのを初めて聞いた気がする。

「はい……。奥義と呼ぶにはあまりに劣弱。私は、功夫がまるで足りておりません」

「馬鹿めツ！ そうではないわッ！」

老人はまたすぐ怒鳴り、同時に足でヨンチの顔を蹴った。

ヨンチが飛んでいくのを見届けることもなく、どこかに走り去って行ってしまった。

『西口かな。モンスターが出てる』

シユウの声と同時に悲鳴が聞こえてきた。

悲鳴を聞くや否や倒れていたヨンチは飛び起きて走っていった。

シユウの言うとおり、彼らがいたのはリエチンの里の西口であった。

群れを作ったはぐれモンスターたちに老人とヨンチが立ち向かつ

ていた。

立ち向かっているのは主にヨンチで、老人は逃げ遅れた子供や女、老人を運んでいる。

「というか老人の姿が五人くらいに見えているんだが気のせいだろうか。」

『分け身だね。本人が戦えば早いだろうに。なんだかんだ言っただけで、ちゃんと弟子の面倒見てる』

老人の分け身とやらの一人がヨンチのうち漏らした敵を片付けていつている。

「ホワチャー！ チエイサア、チャ、ソオオイ！」

もはやうるさいを通り越して笑いが出始めた。

叫び声とともにモンスターは消えていく。

最後の一体の消滅を確認するとヨンチは構えを解いた。

老人も気づけば一人に戻っている。

「モンスター撃破しました！」

老人の近くに寄り、いつものように報告。

「メル殿。これをお返しします」

こちらを向き直り、自身の指に嵌められていた指輪を外して私に差し出してきた。

「おや、いらぬのか？」

つけるだけで強くなれるんだぞ。

また、第一の試練も突破できない弱い状態に戻るが、それでいいのか？

「はい！ それをつけても私はやはり弱いままで！ 弱さを認め、

私は私自身のペースで確かな力をつけていきます！」

「そうか。」

「それがいいんだろうな。」

「お前が目指しているのは、単純なダンジョン攻略じゃないそうだし。」

「きつと、このチートを使っても達成できるほど簡単なことじゃないさそうさ。」

『心意気は良いね。心意気は——』

含みのある言い方だ。

じゃあ、何が悪いんだと聞き返したくなる。

『心構え。残心ができてない』

ヨンチは何かに気づいたように振り返る。

そこにはまたしても多くのモンスターが現れていた。

「チェリ！ シャー！ ホヤア！」

先ほどと同様に叫んでいるが、能力プラスが切れたためなかなか倒すことができない。

私も加勢しようとしたが、老人の視線に止められた。

「バカ弟子が！ 今、奥義を使わず、いつ使うのだッ！」

老人が叫ぶと、弟子は振り返ることなく頷いた。

「流派隆運不撓が滅技——」

ん？

気のせいだろうか。

『いや、気のせいじゃない。光ってる』

ヨンチの構えた拳が白く輝きを放っていた。

どうということだろうか。

「奴は己の弱さに気づいた」

老人は突然語り出した。

「己の弱さを知り、守るべきものに気づいた。自分のためだけに振るう拳はただの正拳突き。だが、今の奴の拳には背負うべきものに乗っている。奥義の奥義たる所以はここにある」

何か解説のようだが私にはさっぱりわからない。

「悉碎！ 還塵拳ツツ！」

輝く拳の威力は、能力プラスのときよりも遙かに上がっていた。

拳がモンスターを撃った瞬間に、モンスターは光へと消えてしまった。

……想像していたよりも地味だとは言えない。

それでも倒せるのは一体。

はぐれモンスターは次から次へと出てきている。キリがない。

これはさすがに私も出た方がよいだろう。
そう思ったのも束の間。

老人がヨンチの前に歩み出た。
モンスターとヨンチの間に立ち、くるりとヨンチを振り返る。

「未熟の割に——良い拳だったぞ」

老人は険しい表情を一瞬だけ緩めてそう告げた。

「刮目せよ」

老人はモンスターの方を振り返り、ヨンチと同じ構えを作った。
老人のはき出す呼吸はすでに空気を震わせている。

震わせるというよりも、何かが起こるといふ奮わせるが正しいかもしれない。

手は輝き、直視することも難しい。

「真・流派竜雲不到が奥義——」

なんか……、やばい……。

私の内側から危機感がわき出てくる。

ここにはいけない。逃げろと本能が言っている。

それは私だけではないようで、対峙していたモンスターたちもすでに逃げ始めている。

「霧消灰燼掌」

先ほどまでの騒々しさがまるでなかった。

突きも見えなかった。気づけば宙に手の平が突き出されていた。
宙を叩く乾いた音だけが遅れて辺りに響く。

虚空に手を突き出したが、外したとは到底思えない。

私たちのわからない何かが起きている。

『霧が……』

見れば老人の手のひらから先が鮮明になってきている。

立ちこめていた霧が徐々に消えていっていた。

加速度的に霧は晴れていき、その速さは逃げるモンスターに追いつく。

モンスターは叫び声をあげることかなわず、霧とともに消えていった。

衝撃はモンスターを消しても止まるところを知らない。

どんと霧を消していき、ついに突き抜けた。

そして、夕暮れどきの紅い日が霧の消えたトンネルから差し込んできた。

老人は夕日を背にして、こちらを振り向いた。

「見たか、ヨンチ！　これが貴様のいずれ辿り着く領域だ！」

「はいっ！　このヨンチ！　確かに双眸に刻み込みました！」

ヨンチは目頭に涙を携え叫び返す。

何か熱いものが込み上げてきたんだろう。

私にはよくわからんが……。

「この馬鹿者がツ！　そんな霞んだ瞳にいったい何を刻むと言うのだッ！」

やっぱり鉄拳。

だが、吹き飛ぶヨンチの顔はなぜか誇らしげであった。

翌日、リエチンの里から出発する私の耳に声が聞こえた。

「この馬鹿者めがツ！」

ここで鈍い音。

次いで体が地面を擦る音。

「申し訳ありません！」

そして、やたら元気な謝罪。

今日もリエチンの里は平和そのものであった。

蛇足12話 「ダンジョン・アローン」

ウイネットアの町には、アリストアー邸と呼ばれる有名な超上級ダンジョンがある。

そのダンジョンは町の中に普通に普通に存在する。

「豪勢な家が建ち並ぶ中に普通に紛れ込んでしまっているのだ。

だが、アリストアー邸を有名たらしめるのは町の中にあるためでは決してない。

アリストアー邸のボスはマリイ婆さんと呼ばれる老人である。通称、糞ババア。

元は人間だったらしいが、本当かどうかはわからないしどうでもいい。

もちろん有名なのはボスが老人のためでもない。

アリストアー邸は一度に挑める人数が制限されている。

四人が限界だ。これ以上は挑もうとしてもドアが固く閉ざされ開かない。

これが有名の理由？ そんなわけはない。

では、このダンジョンの何が有名なのか？

それはこのダンジョンをクリアした者がいないからだ。

三百年以上前から存在を確認されているのに未だクリア報告がされていない。

ギルドでは「クリア直前だった」、「婆さんを追い詰めた」、「あの糞ババア絶対殺してやる」等の声が数百年の間言われ続けている。

しかも冒険者が壊した調度品の弁償請求がアリストアー邸からギルドにくることもあるらしい。

だが、ギルドもいろいろと儲けさせてもらっているようで、外壁や屋根の修理、庭の手入れもしているという尽くしっぷりだ。

さて、そんな有名なダンジョンであれば私が挑まないわけがない。

私とチートな力、あとうるさいカスの三つが加われば未達成の歴史も今日で幕引きだ。

———と思ったのが五日前である。

『今日も、ダメだったね』

……ああ。

ギルドに併設された飯屋で今日も反省会である。

五日経ったが、未だにクリアできていない。

初日は様子見で回っていたが、他の冒険者が踏んだトラップに巻き込まれて開いた壁から外に放り出された。

二日目は注意深く回っていたが、注意深く回りすぎて婆さんの姿を見ることすら叶わなかった。

そして、本日五日目。婆さんの姿を見つけて追いかけたら落とし穴に嵌まって外に放り出された。

『俺、止めたよね？ 罠があるって』

……いや、でも。

『すぐ頭に血が上るんだから。そもそも、なんで三日目を言わないの？ まず反省すべきはそこでしょ』

三日目、クリアできないことに焦って突っ込んだら、部屋に閉じ込められ周囲からゴミの雪崩を受けた。

体中がヘドロまみれになりギルドから入店拒否された。

しかも四日目も臭いがとれず、ダンジョンの扉が開かず入場拒否された。

『当たり前でしょ。歩く公害だよ』

で、そろそろ対策は考えついたんだろうな。

私はもう落とし穴も襲い来るゴミもこりごりだぞ。

『まあ、相性が悪いよね。前にも似たようなのがいたけど、逃げに徹せられると決め手に欠ける』

そうなのだ。

襲いかかってくるボスなら対策なしの力押しでもいける。

ボスが部屋にいるなら対策をして、こつちから出向くことができ
る。

だが、逃げに徹せられると難しい。追うためのスキルがほとんどない。
い。

『それに場所も悪いね。入り組んでるし、モンスターがそこら中に蠢

いてる』

邸というだけあって、部屋数が多い、だだっぴろい屋敷だ。外ならゲロゴンブレスで何も気にせず吹き飛ばせるが、邸で使うと隣の家まで巻き込む可能性があるから使えない。

それにモンスターの強さ自体は初心者レベルだ。ただ皿やらフォークやらテーブルだの絨毯と家具に擬態して非常にわかりづらい。

『やっかいなのはトラップだね』

それだな。

モンスターが弱く命の危険もさほどないのに超上級指定を受けるのはやはりトラップである。

今までのダンジョンでは見たこともないトラップが次から次へと出てくる。

シユウですら予見できないトラップがあるほどだ。

『命を狙ってくるトラップならだいたい読めるし場所もわかるんだけど、嫌がらせみたいなものだからなあ。モンスターも家具と見分けがつかなくて、トラップを上手く隠してるし……』

ダンジョンによくあるトラップはモンスターで囲んで襲わせたりするものが多い。

一方、アリスター邸ではトラップがモンスターの特性を利用して

る。階段に敷かれた絨毯型のモンスターが動くことで段差を踏み外させたり、下に注意を向けたところでシャンデリア型のモンスターが落ちてきたりする。

『極め付けはババアが喋る』

そうなのだ。

あの老婆は喋るのだ。

しやがれた声でこちらを挑発して罠に誘導してくる。

『だからって「臭いからこっちにくるんじゃないよ」で、近寄るメル姐さんはもうダメだと思う』

ちよつとカチンときたんだよ。

まあ、それで落とし穴に嵌まったわけだが。

「あ、悪臭おばさん」

さて、どうしたものと唸ったところで声がかかった。

「今日もダメだったんでしよう？　だから無理だつて言ったのに」

『メルは人の話を聞かないからな。まあ、良い奴だったよ』

いきなり私に声をかけ、向かいの席に座ったのは子供だった。

どうも初日にギルドであったとき、飯を奢ったら懐かれてしまった。

男の子にはよくいるのだが、こいつはどうも憎まれ口を叩く傾向がある。

このレビンとかいう少年も大人ぶっているようだ。

「アリスター邸をクリアするのは僕なんだから、おばさんじゃ無理だよ」

私はまだ、おばさんつて年じゃない。

『そうだぞ糞ガキ。メル姐さんの魅力がわからねえなら外に出て土でも食つてろ』

子供はやれやれと首を振る。

「僕はもうクリアできるよ」

へえ、それはすごいな。

「どうやってるか聞きたい？」

いや、別に。

「わかってるつて。ほんとは聞きたいんですよ」

いや、ほんと別に。

「僕、ちよつと喉が渴いてるから何か飲んだら喋っちゃうかもしれないな」

ちらちらと隣の席に座っているおっさんが飲んでるものを見ている。

要するにあれが飲みたいようだ。

アルコールも入っていないなさそうなので、マスターに二つ注文する。

「婆さんは楽しんで欲しいだけなんだ」

飲み物を嬉しそうに飲み干したレビンはもったいつけて話し出す。

楽しみたい？

「うん。そうだよ。ここにいるみんなは婆さんを目の敵みたいにしてるけど。それじゃ駄目さ。お金が目当てとか論外だね」

マリイババアは邸のどこかに資産を蓄え、それを守っているのではないかという説もある。

その話を信じる冒険者はかなり多く、挑戦者の半分以上はそんな感じだろう。

残りは初クリアという名誉が欲しい人間だろうか。

それとババアの鼻を明かしてやりたい奴。

私も似たようなものだ。

それがダメだと？

「バカだな、おばさん。ダメダメさ。武器なんか置いて遊びに行けばいいんだよ」

モンスターもいるのにか？

「僕は今まで武器を持って挑んだことなんかないよ？」

まあ、そりやお前じゃ武器はもてないだろ。

体格にあった武器がナイフくらいしか考えられない。

「うん。喉も潤ったし、僕もちよつと婆さんと遊んでくるとするかな」

そう言つて、レビンは椅子から飛び降りた。

そうかそうか、まっすぐ家に帰れよ。

「子供扱いするのはやめてくれないかな。僕はもう大人なんだから」
拗ねたように言い残しレビンはギルドを出て行った。

さて、作戦会議の続きといこうか。

やはり挑発に乗らず、慎重に少しずつ追い詰めていくしかないんじゃないだろうか？

『いや……』

うん？

どうも返事が煮え切らない。

『さっきの糞ガキの話……なかなかおもしろいかもしれない』
ん？

どこがおもしろいんだ？

『あつ！ 勘違いしないでね！ 悪臭おばさんってところじゃないよ』

わかってるからさっさと見え。

しまいにやキレるぞ。

『挑むじゃなくて遊ぶってところ』

そののどこがおもしろいんだ。

子供らしい発想じゃないか。

ダンジョンをなめてるぞ。

レビンも話していたが、アリスター邸は子供でも挑戦できる。

超上級ダンジョンではあるが、挑戦に許可証は必要ない。

クリアこそされていらないが危険性なら初心者クラス並みだからだ。

モンスターも殺す気では襲いかかってこない上に強くない。むしろ弱い。

罠がものすごく多いものの状態異常系の罠はない。本当にただの嫌がらせである。

あれが本当の超上級ダンジョンだと思われると、他の超上級ダンジョンまでなめてかかるかもしれない。

『そこだよ。あれは本当に超上級ダンジョンなの？』

事実としてクリアしてる奴がいらないんだから、超上級で間違いないだろ。

『ごめん、言い方が悪かった。あれ——本当にダンジョン？』

……そりゃダンジョンでしょ。

ギルドもそう言ってるし、モンスターがいるし、ボスもいる。

『そこだけ切り取ればそうだけどよく考えてみなよ。町の中、それも住宅地に存在する。外見は普通の豪邸』

見た目なんて重要じゃない。

今までだってダンジョンに見えないものもあった。

中に入れば、モンスターが襲いかかってくるし、トラップもある。

『武器を片手に自分を殺そうとしてくる奴が、家の中にいたら応戦するのが普通だと思うけど、どう？』

それは……そうなんだろうが。

『一度に入れる人数は四人。この数は、家主が一度に敵対できる限界数じゃなくて、応接できる限界数。案外、クッキーでも焼いてくれるかもしれないよ。どっかのアポカリプスみたいに』

あほかりすぷ？

『いや、気にしないで。雰囲気似てたから、うん』

あつそう。

で、けつきよくのところどうすればいいんだ？

『そりゃ、正面から堂々と訪問すればいいんじゃない。ゲストとしてね』

そんなことになった。

そんなわけで再びアリスター邸の前にやってきた。

挑戦者の列がどんどん減っていき、いよいよ私の番になる。

いざ往かん。

『——待った』

扉を開ける前にストップがかかった。

なんだよ。私の番だぞ。

『まずはホストに来訪者が来たことを伝えないと。扉に変な金具ついてるでしょ』

扉を見ると錆び付いた輪っかがついてる。

これ？

『それぞれ。輪っかを掴んで扉の方の金具に叩きつけて。軽くでいいよ』

掴んだ輪っかを軽く叩きつける。

軽く叩いたつもりだが、思ったより大きな音が響く。

金具から手を離すと、閉まっていた扉が小さく開いた。

『どうやら正解みたいだ』

そうだな。

当たりを引いたときの手応えを感じた。

今までに何度も感じたことのある、正しい攻略を行ったときのしつ

くりとくる感覚。

扉を開けた風景はいつも通り、広いホールがある。

他の冒険者はどこか別の場所に行っているのか姿は見えない。

で、どこから行けばいいんだ？

『それはゲストが決めることじゃない』

立ち尽くしていると、右の道の壁につけられていた蠟燭に火がついた。

『あっちだとさ』

……畏じゃないのか。

一日目も左の道があんな感じだったぞ。

ひかれた絨毯の下に落とし穴があったことを私は覚えている。

『早くいかないと、気を損ねるよ』

仕方なく、私は灯りのつく方へ歩いて行く。

今回はシユウを手を持たず、腰にぶらさげている。

灯りに導かれて道を歩いているが、未だトラップにかかっていない。

あるいはこの誘導自体が罠なのかもしれないのだが。

一つの部屋の前で灯りは止まった。

「なにしてんだい。さっさと入んな」

扉を開けるかどうか立ちあぐねていると、扉越しにしゃがれた声がかかった。

ままよと開けた扉の先にはテーブルと椅子が五つ。

「もうじきクツキーが焼き上がるから、椅子に座って大人しくしとくんだね」

奥の部屋から声がかかる。

姿は見えないがどうやら奥にババアがいるようだ。

『座れってさ』

うむ。

どの席に座るべきだろうか。

そう思ったところで一つの椅子が勝手に下がった。

座れということらしい。というかこの椅子、モンスターだろ。

文句を言っていないでも始まらないので、椅子に座ってババアを待つことにした。

「待たせたね」

ババアは普通に現れた。

武装をすることもなく、モンスターを引き連れていることもない。ただ、その両手には大きな皿を持っている。

皿の上には様々な形をしたクッキーが山のように積まれていた。

ババアは皿をテーブルの上——私の前に置く。

「もうちよつとだけ待ってな。お茶も入れるからね」
背を向けて奥の部屋へと向かい始める。

今だ。

やるなら今しかない。

この距離なら間違いなくやれる。

椅子を蹴って立ち、テーブルを押し倒し、最短距離でババアの背中をシユウで貫く。

『変なまねはよしなよ』

シユウに手を伸ばそうとした私を、当のシユウがピシヤリと止める。

手が止まったことで、期を逃しババアは奥の部屋へと消えてしまった。

なぜ止めた？

さっきのタイピングならやれただろう。

『ギルドでの発言を撤回するよ』

ああ？

『さっきメル姐さんが俺に手を伸ばしたときに部屋から確かな殺気を感じた。メル姐さんはマグロだから感じなかったかもしれないけどね』

それがどうしたっていうんだ。

あの距離なら——

『無理。こつちがやられてた。今、この部屋の中は間違いなく超上級ダンジョンのそれだ。俺たちはもう罠にかかっている。できることと

言えば、ババアの機嫌を損ねずに無事に帰してもらえよう大人しくしておくことだけだよ』

シユウは真面目モードに入っている。

あれ、もしかして今の状況ってよろしくない？

『まあ、悪いね。でも、こちらから敵意を向けない限りは大丈夫だと思うよ。それと——』

それと？

『奇襲をかけるなら独り言は控えるべき』

……癖なんだよ。

たぶんもう直らない。

そして、私はババアと一緒にクツキーを肴に談笑をしている。

談笑と言ってもババアが一方的に話しているだけだ。

やれ最近の若い奴はとか、若者の礼儀離れがどうのだからとか。

聞き流すことは慣れている。

それに出されたクツキーとお茶は文句なくおいしい。

お茶はなくなればおかわりが出るが、山のようにあつたお菓子もじきになくなる。

「おっと、クツキーの様子を見てくるよ」

どうやらなくなることを見越して、追加で焼いていたようだ。

『へい、メル姐さん。無敵スキルの準備ができた。婆さんが椅子に座ってから斬りつけて。独り言は抑えてよ』

……ああ。

戦闘準備はできたようだ。

ババアの足音が聞こえてくる。

すぐに姿が見え、山盛りのクツキーが机に置かれた。

彼女も椅子によつこらせと腰掛けて、話を再開する。

一つ聞きたいことがある。

「クツキーの作り方は教えられないよ」

それはどうでもいい。

このダンジョンをクリアした人はいないと聞いてるんだが、それは

本当か？

「本当だよ」

ババアは特に自慢するふうでもなく平然と答える。

元は人間だって聞いているんだが、それも本当なのか？

「あたしや今も人間のつもりなんだがね。あんたにはあたしが人間に見えないかね？」

……いや、人間にしか見えない。

もつと言うと、性格の悪そうな年寄りにしか見えない。

「余計なお世話だよ。まったく良い迷惑だ。金を出せだの、死んじまえだのと余所様の家に押しかけて。あたしんちを何だと思ってるんだか……」

ババアはぶつぶつと愚痴り出す。

経歴上はつきりと言える。

これは長い。

『そろそろお暇する？』

シユウも私の意を汲んだようだ。

今、目の前にいる婆さんは中身はどうあれ人間だ。

ただの人間、それも老人相手に全力全開のチートを持って挑むのは馬鹿げている。

畏こそあれど、手厚い歓迎を受けたのは間違いなく事実。

暴れるのはあまりに不作法というものだ。

ババ——婆さん、今日はもう帰る。

「ふん、そうかい」

クツキーおいしかった。

また明日来る。

「素直じゃないか。明日も焼いておこうかね」

いや、その必要はない。

明日はゲストではなく、冒険者としてこのダンジョンに来る。

超上級ダンジョン——アリスター邸とそのボスに敬意を払い、全力全開のチートを持って攻略させてもらう。

「……ふん。勝手にしな」

明日の私は招かれざる客だ。

そう、だからお菓子なんて歓迎はいらない。

席を立ち、扉に向かう。

「待ちな」

振り返ると婆さんが袋を差し出してきた。

「持って帰んな」

どうやら中身はクッキーのようだ。

ありがたく頂戴し扉を出る。

「まっすぐ帰るんだよ」

子供扱いしないで欲しい。

さて、どうしようか。

『ええ、あそこまで啖呵きつといてノープランの人頼みってどうなのよ』

またしてもギルドに戻った私は、定位置になりつつある隅の席で対策会議をひっそり行っていた。

机の上にもらったクッキーを広げてぱりぱり食べる。

「あれ、お婆さん。またダメだったの?」

聞き覚えのある声。

首を向けるよりも先に、私の前の席にレビンが腰掛ける。

私はいま作戦会議で忙しいんだ。

飯を奢ってやるからあっちにいつててくれ。

「あ、このクッキーってもしかして婆さんの? そこまではたどり着いたんだ?」

なんでわかる?

「言ったじゃん。婆さんと遊んでるって。よく話もするよ」

あの婆さんと?

「うん。小さい頃はよく叱られてたけどね。最近はいい話相手だよ」

『今も小さいじゃねえか。床に足がついてねえぞ』

そんなことはどうでもいいんだ。

罨とかけっこうあるだろ? ちゃんと玄関ノックして入るのか?

「婆さんにしろって言われてるからノックしてるけど、なくてもまだどり着けるよ。罨も全部覚えてるからね」

ほお、それはそれは。

私は明日も挑むんだがお前は？

「僕……？ あ、わかった。お婆さん、一緒に挑む人いなさそうだもんね。一緒に行つてあげるよ。僕、優しいから」

お前がシユウなら顔が消し飛んでる。

「えっ？」

『覚えとけ、糞ガキ！ お前の無邪気で無責任な発言のせいで蹴られて痛い目にあっているやつがいることをな！』

レビンはいつも通り私から飲み物を奢ってもらい、一緒にクツキーを食べて帰つて行つた。

どうやらあいつはアリスター邸の構造をほぼ全て把握しているらしい。

話を聞いてみる限りギルドの情報よりも詳しいものだった。

それにあのガキを連れていけばボスも油断するかもしれない。

これで明日の見通しはたった。

『明日になるかなあ』

……明日じゃクリアできないと？

『いや、そうじゃなくてね。後ろに座つてた二人組が——』

「たいへんだ！」

シユウの台詞はギルドに入ってきた男の叫びでかき消される。

もう一人見知らぬお婆さんも一緒に入ってきた。

どうやら何かあつたようだ。

「夜のアリスター邸に三人組が無理矢理入りやがった！」

ギルド兼飯屋にいた全員がギョツとした。

あ、私はしてないな。そもそもなんのことかいまいちわかってない。

『受付嬢が言つてたじゃん。夜のアリスター邸はめちやくちや危険だつて』

……そんなこと言つてたっけ？

『危ないから夜は入口を封鎖してるとも話してた』

ああ、そういえば言ってたな。

夜は入れないんだなってことしか覚えていないが。

『夜に他人様の家に入るのは泥棒しかいないってマリイ婆さんがキレる』からって受付嬢が言ってたよ。冗談だと思ってたけど、話した感じだと本当そうだね』

そうだな。

あのババアなら有り得そうだ。

まあ、どうなつても致し方ないだろう。

明日の朝を待てばいいものをどうしてそれができないのか。

『お尋ねものだからかな。気がつかれる前にさっさとコトを済ませたかったんでしよう』

ん、どういうことだ？

『ギルドの広報掲示板を見てみなよ』

慌ただしく騒いでいるギルドへと歩き、依頼掲示板の隣にある広報掲示板へ。

『上から二番目の、右から四番目——ああ、それぞれ。取っておいて』
シユウの声を指で追いかけて、そこに貼り付けられていた手配書を取る。

二人の男の顔が紙に描かれている。ケリーとナーブという二人組の盗賊らしい。

『駆け込んで来た人にそれ見せて確認してもらって』

とぼとぼ歩いて騒ぎの中心へ。

そこにいた駆け込み親父とおばさんに手配書を見せる。

『そうです！ 入ったのはこの二人です！ 大変だ！』

『なんてこと……』

騒ぎがさらに大きくなる。

そこまで騒ぐことないだろう。

出てきたところを捕らえればいいし、最悪死んでもたいした問題じゃあない。

『まったくわかってない。入ったのは三人。あと一人は？』

そういや三人とか言ってたな。

別に誰だつていいだろ。

『その二人、さつきまでメル姐さんの後ろに座ってたんだよ』
後ろに座つてたくらいで縁を感じることもなんてないぞ。

『メル姐さんはそうだろうよ。でも、その二人はそうじゃないだろうね。隣の席でアリスター邸の攻略を話してる女と子供がいて、しかも子供は攻略法をかなり知ってる。そいつが一人でのこのこ外に出た。さあ、二人組はどうするか』

……まさか。

「はい。あと一人はレビン君です」

道案内役として連れて行ったわけか。

最悪逃亡時の人質としても使えるだろうし。

「レビンッ！」

そう言つて先ほどからいた謎のお婆さんは倒れた。

「お母さんしっかりしてくださいー！」

周囲の人間が倒れたレビン母を介抱し始める。

その喧噪を抜けだし、私はギルドの外に出る。

『……案内役は必要だもんね』

ああ、そうだな。

さつきと行くでしょう。

本日三度目のアリスター邸。

もちろんノックすることを忘れない。

だが、扉は開かず固く閉ざされている。

手を掛けてみたが、鍵がかかっているようで開かない。

扉の隙間にシユウをねじ込み無理矢理こじ開ける。

ちよつと壊れてしまったが、無事に開いた。

『いや、全然ちよつとじゃないでしょ。開くなんてもんじゃないよ。扉が完全に取りちやってる。扉は地面に倒れるようにできてないから』

細かいことは気にしない。

さっさと進むぞ。

「ぎゃああああああ！」

ロビーに入って早々、男の絶叫が聞こえてきた。

おいおい。相当やばい状況じゃないか。

『奥の道だね』

暗闇の中を暗視スキルで進んでいく。

『モンスターが強くなってる』

……そうか？

さほど変わってないような気もするんだが。

『こつちがそれ以上に強いからね。ポイントが超上級クラスだよ。こりや本当に死んでもおかしくない』

そいつはまずいな。

シウウの指示に従い、道をどんどん進んでいく。

かなり順調だ。モンスターも罠もまるでひっかかかっていない。

『罠がかなり露骨に命を狙ってきてるから読みやすくなってる。モンスターも罠にひっかからなければ発動しないからね。こりや、夜に来て正解だったかな』

先ほどから何度も聞こえる悲鳴というか絶叫もどんどん近くになっっている。

廊下の角を曲がったところでそいつらはいた。

「ぐぎゃああああ！ 水う。水！ 水をくれ！」

まず、やや太めで小柄の男性が頭に火がついた状態で私の方へ走ってきた。

私の脇を通りそのまま廊下を走っていく。

「おおおおおおおおおお！ 来るな！ 来るなあ！！！」

もう一人の男は壁に埋まっていた。

ケツから下だけが壁から生えている。

何がどうしてこうなったのかさっぱり見当がつかない。

あ、下半身の動きが痙攣して止まった。

『壁尻ですな……女だったら最高なのに』

探していたもう一人もすぐ近くにいた。

「あれ、おばさんじゃん。どうしたの？」

レビンは不思議そうな顔で尋ねてくる。

えっと、なんかお前が二人組に攫われたみたいなお話だったんだが……。

「うん、まあね……。外で変なおじさん達に掴まったんだけど、ちよつと仕返しに痛い目にあつてもらったんだ」

あ、そう。

後ろから爆発音と絶叫が聞こえてくる。

「あちゃあ、あの部屋を開けちゃったか……」

子供は残酷だ。

まあ、無事ならそれでいい。

お前の母親も心配していたぞ。

「げ！ ママは怒ると怖いんだ。急いで帰るよ。じゃあね。また明日」

すたこらさつさと私を残してレビンは廊下を走っていった。

『ほんとに罫を知り尽くしてるっぽいね。走る位置が絶妙だ』

さて、残った二人組はどうしたものだろうか。

こつちで回収して持って帰るか……。

『来たよ』

来たって何が？

『糞……、いや、鬼ババア』

私も見た。

廊下の先からひとりひとりと歩いてくるその存在を――。

両脇に男と子供を抱え、腰を曲げて歩いてくる圧倒的なその存在感を――。

「他人様の家に勝手に忍び込んで、騒ぎ回るとはどういう見だろうねえ」

目は妖しく光り、頭の上には黒い角が二本ついている。

「これだから最近の若いのは……」

目が合った。

「夜は誰も来させるなってアミス坊やに言つといたはずなんだけど、

おいたがすぎるねえ」

鬼ババアは両脇に抱えた二人を廊下に落とし、私と対峙する。
アミス坊やって誰だよ。

『このギルドのトップがそんな名前だった』

あ、そう。

——でっていう話だ。

「ちよつと痛い目にあってもらおうか、ね！」

鬼ババアは私との距離を一気に詰めてきた。

『やつぱ、夜に挑んで正解よかったね』

ああ。そうだな。

ボスが倒せないのは罨がひどいのと、逃げ回るからだ。

そちらから挑んでくれるなら、これほど単純なことはない。

「がつ……」

ババアの爪を避けて、シユウを脇腹に突き刺す。

ひるんだところにもう一撃。

「これだから最近の若者は……、人間離れが——」

そこまで言うとは鬼ババアは光に消えた。

ドロップアイテムも床に残る。

——マリイ婆さん秘伝のクッキーレシピ

さつそくアイテム結晶を覗くとそう出てきた。

『うわ……、いらね』

シユウが私の心の声を代弁してくれた。

こうしてアリストアー邸の攻略は完了した。

翌日、私は相も変わらずギルドに来ていた。

正確にはギルドの横の飯屋にだ。

朝ご飯だけ食べたなら、この町から旅立つ手はずだ。

アリストアー邸は攻略したのだから、もうこの町には用がない。

おまけと言ってはなんだが、ギルドから手配書の男二人の懸賞金も

受け取った。もう手元にはないが……。

「あ、いたいた。おばさん、いつアリストアー邸に行くの？」

今日も今日とてレビンはやってきた。
完全に忘れていた。

すまんが、もう行く必要はなくなったんだ。

「え、そうなの？」

そうなんだ。

悪いがババアにも伝えておいてくれ。

まあ、伝えなくてもわかるかもしれないが。

「うん？」

いや、気にしなくていい。

それと例の二人の懸賞金はお前にやる。

「えっ、いいの!？」

ああ、ただし子供が持つには大金過ぎるから、ここの飯屋に預けてある。

今後ここで飲食すればそっちから引くよう主人に言っているから安心して飲み食いしろ。

「……大人って汚い」

『調子にのるなよガキが。メル姐さんの心は綺麗だぞ。物理的にはちよつと擁護できないけど』

一言多いぞ。

「ちえっ。じゃあね。おばさんも気をつけて」

ああ、お前も達者でな。

あつさりとした別れであったが、後残りが無いのはありがたい。

さて、私も行くのでしょうか。

「メル様！」

ギルドを出ようとした私に声がかかった。

受付嬢が慌てて私を追いかけてくる。

「先ほどこちらがメル様宛に届きました」

袋と手紙が二通だ。

一通目の封を開けると以下のようなものであった。

“メル殿

先日のレシピの返還、本当にありがとうございます。

心よりお礼申し上げます。

ウイネトアの町をおそらくもう発つのではないかと思い、手紙を綴らせて頂きました。

メル殿の今後の旅の無事と活躍を祈り私の方から秘伝のクッキー送らせてもらいます。

マリア アリスター”

どうやら袋の中身はクッキーのようだ。

けつきよくドロップアイテムの秘伝レシピはいらないから置いて帰った。

次にクリアした人のために残しておくことにしたのだ。クッキーはありがたくもらっておこう。

『レシピはちよつと気になるけどね』

どうせ作る時間なんてないから別にいいさ。

さして、もう一通は果たしてなんだろうか。

もしかしたら、レシピが書かれているかもしれないぞ。

『いや、そつちは想像がつく』

シユウが答えるよりも先に手紙を開けて見てみる。

〃請求書

冒険者兼盗人 メル殿 マリア アリスター

下記のとおりご請求申し上げます。

ご請求金額 ……………

……………

……………

扉代 ……………

……………

……………

小計 ……………

合計 ……………

振込先

ギルド ウイネトア支店 | ”

『ああ、やっぱり』

なんか見たことのない紙だった。

なんだこれ？

小難しい書き方でよくわからない。

『一番上に書いてあるじゃん。請求書だよ』

なにそれ？

『昨日の夜、アリスター邸の扉壊したでしょ』

……なんかこじ開けた気がする。

『その弁償』

………ああ、なるほど。

「こちらで引き落とししてしまってもよろしいでしょうか」

あ、はい。

受付嬢に生返事をしておく。

こうしてクッキーを片手に、アリスター邸への弁済を終えた。

蛇足13話「どうせみんないなくなる……か？」

良いと思う。

「はい、私も……。これでどうしようか……」
素晴らしいな。

「ええ。では、そのように進めても？」
悪くない。

「はい。今回は――」
いいんじゃないか。

「かしこまりました。急ぎ手配を――」

『メル姐さん。話、まったく聞いてないでしょ』
うむ。

王都に向かう道すがら、初級ダンジョン――カルラ・ソ・ナメロ廻廊を攻略した。

完全制覇済みと言われていたが、なんと新しい発見をしてしまい、ギルドに報告しているところである。

報告だけのはずが応接室に通され、支店長の長話に付き合っている。

『話がつまらないのはわかるけど、鼻ほじるのはやめようよ……』
おっと、いけない。

鼻に行くほどつまらない話は久々だ。

「では、メル様。急な話で申し訳ありませんがよろしく願います」
……………なにを？

深々と下がった支店長の薄くなりつつ頭を見て、私はようやく現実に戻ってきた。

そして、翌日のこと。

町の外れにある広場に来ていた。

広場には私以外にも多くの人が集まっていた。

集まっている人間には些かならず偏りがあり、ガタイの良い人間が多い。

「みなさん、ご静粛に！」

私の隣に立つ支店長が声を張り上げる。

「今回、皆さんの昇格試験監督をして頂く極限級冒険者のメル殿です！」

どうしてこうなった……。

『ほらメル姐さん挨拶。昨日、宿屋で練習したとおりに。がんばれ』
みなしゃ、みなさんの試験官を務めさせていただきたくメル、です。
よろしく。

『ちよつと噛んでるけど及第点でしょう。この人数を前に挨拶ができればいいよ……。成長、したんだね……。』
マジの涙声でしみじみ言われると、反応に困るからやめてもらえない？

「それでは皆さん。この後はメル殿の指示に従ってください。よろしくおねがいします」

支店長は軽く会釈して場を離れ、数人のギルド員が残る。

『さあ、メル姐さん。張り切って監督しよう！』

本当に、どうしてこうなった……。

今さらのことだが、冒険者には階級がある。

初心者クラスから始まり、初級、中級、上級、超上級、極限級と上がっていく。

一番手っ取り早い上がり方は、私のようにダンジョンを次から次へとクリアすることだ。

階級が上がれば、受けられる依頼の幅が広がるし報酬も増える。

ただ、依頼といってもモンスターの討伐ばかりではない。

運び屋やアイテムの回収、情報収集、暗殺をメインにしている冒険者もいる。

もちろん危険性はあるため、ある程度戦えなければ論外だが主眼をモンスターとの戦いに置かない人種もいるのだ。

彼らにまで昇級したいならダンジョンをクリアしろというのは酷いものがある。

あるいは、近くに昇級するためのダンジョンがないということも当然ありうる。

仮にあっても、該当ダンジョンが同じ階級のダンジョンの中でもレベルが高いということはザラだ。

そうしたものの救済策としてギルドの昇格試験がある……そうだ。

私も昨日の夜、宿屋でシユウに教えてもらって知った。

さて、今回は中級から上級への昇格試験だ。

集まっているメンツもなかなかできそうな顔ぶれがそろっている。

——などと、わかつたようなことを言ったが、正直言って中級以上はみんな同じに見える。

初心者や初級者だと装備とメンバーのちぐはぐさ、ギルドでの動きやらでなんとなくわかるのだが……。

どうしても知りたいときはシユウに聞くとだいたいわかる。

装備や肉の付き方・付け方、声、目の動きを見れば推察できるものらしい。

言ったように私には中級以上をどこで差を付ければいいのかかわからない。

そんなわけでシユウに昇格試験の内容を考えてもらうことにした。

昇格の基準と採点、微妙な判断もほぼシユウ任せだ。

……つまり、いつも通りということである。

「みなさんには——」

私の声に冒険者一同が耳をそばだてる。

確かにシユウに任せるといふことにはした。

——だがしかし。

“冒険者たるものダンジョンへ行かずして何を為す?”

私の理念を反映して、試験にはダンジョン攻略を織り込んでもらった。

「——ダンジョンを攻略してもらいます」

冒険者一同がざわめき出す。

「ちよつと待ってくれよー!」

前の方に立っていた男が声を上げる。

腰に剣をぶら下げているあたり、剣士で違くない。

あと、周囲にいるのは彼のパーティーメンバーだろうか。

杖を持った奴は魔法使いだろう。このままダンジョンにでも行きそうなメンバーだ。

『違う』

ん？

『対人の護衛専門でしょう。後ろにいる杖持ちの三人は、二人は魔法使いだけど一人はスカートの下と袖に武器仕込んでる。油断して近づいて来た奴を殺す役。いま吠えてる剣士も剣士じゃない。剣が綺麗すぎる。もう片方の腰に付けてるダガーが本命だろうね。毒でもぬってんのかな。あと、離れたところにもう二人パーティーメンバーがいるね。連携は上手そうだけど、目配せがわかりやすすぎる。まあ、中級ならこんなもんか……』

シユウが解説をしだす。

採点はどうやらすでに始まっているらしい。

「――聞いているか！」

いや、聞いてない。

それで、なんだって？

「どうして俺たちがダンジョンに行かなきゃならねえんだ！」

まあ、それもそうだ。

ダンジョンがクリアできないからお前らここにいるんだもんな。

「――ッ！ 極限級だからって調子のってんじゃねえぞ！ ソロで極限級なんてアリエネエ！」

なんか勝手にキレ始めた。

シユウみたい。

『メル姐さんみたい』

……………。

『……………』

で、どうしろと？

「俺たちは対人が専門なんだ！ そこを評価してもらいたい！」

おつ、細かい部分は違うがシユウの言うとおりになっている。

『メル姐さん。わかってるね?』

ああ――、

わかった。認めよう。

お前らのパーティーと私の模擬戦だ。

そこそこ戦えるんなら上級に即昇格としよう。

他に同じ形式でやりたい奴はいるか?

俺も、俺たちもと次々に手が挙げる。

おっと、想像以上にたくさんの手が挙がってるぞ。

『極限級つて情報を与えた上に、こつちの力もまったくの未知数。これに戦いを挑むのは、あまりにもDQN。洗礼を受けて頂こう』
いくつか手を挙げていない奴らがいる。

やれやれ面倒な奴らだ。

『俺のいた国なら、これで全員釣れたのにな。じゃあ僕も僕もつて』

まあ、仕方ないか。

手を挙げてないのは、広場から出ろ。

言われたとおり、手を挙げていない連中が広場から出ていく。

「じゃあ、模擬戦の順番を決めようぜ」

吠えていた剣士もどきが勝手に仕切り出す。

順番が後の方が、私が弱って有利だと考えているらしい。

いや、必要ない。

どうせみんないなくなる。

「は?」

今からここはダンジョンだ。

舞台設定は洞窟だろうが荒野だろうがなんでもいい。

私がモンスターとしてお前達を襲うから、どうにかして止めろ。

手段や方法はいっさい問わない。止めることのできた者を昇格とする。

では――、

『名前も個性もないモブのみなさんさようなら』

冒険者の群れに向かって歩き出す。

さすがにチートを出すわけにもいかなかったため今回は拳と蹴りのみ

だ。

もしもシユウを抜くようなことがあればそいつは合格させるという話になっている。

歩いていた足のテンポを速めていく。

『わかつてると思うけど、力入れて蹴らないでよ。俺を蹴るのと同じように蹴ったら間違いなく死ぬよ。たぶん破裂する……』

大丈夫だ。

そこはさすがに加減する。

こちらに向かつてきた近接系を素通りして、杖を持った奴から潰していく。

ちよつとどついてやれば、ばたばたと倒れる。

先ほどシユウが言っていた魔法使いの振りをした奴が、スカートをめくりそこにあつた獲物に手を伸ばした。

『見えたっ！』

すぐさまナイフを私に投擲してくるが、手でパツパツと払いのける。

信じられないものを見たような女の懐に入り腹パン一発。

「うえっ……」

声にならない音を吐き出し女は倒れた。

魔法使いはあらかた倒すことができたので、次に中間、近接系を潰していく。

果敢に挑むものもいれば、様子を見ているものもいる。

どちらも一発頭を叩いて終わらせた。

さて、あとは――

気づけば残りは剣士もどきしかない。

『うん。他は全員気を失ってるね』

よし。

私は残り一人に向かつて歩き出す。

「ま、待ってくれ！」

駄目だ。

「お、俺が、俺が悪かった！」

私は悪くない。

男は剣を放り投げる。

戦う意志はないというアピールらしい。

「頼むー、許してくれ！」

お前、モンスター相手でも同じこと言えるの？

男は膝を折り頭を地に付けての完全謝罪モードだ。

『ちやうちやう。油断させてからの不意打ちモードだよ。こっちが近づくとタイミングをはかっている。うーん、良い位置だね』

ん？

……ああ、そうだな。

「許して、くれるのか」

蹴るには、顔面の位置が実に良い。

シユウにするように、しかし、殺さないように極めて丁寧に男の顔を蹴りつけた。

掃討が終わったところで広場を出る。

三組のパーティーとギルドの担当が待っていた。

それじゃあ、残りの者はダンジョンに挑んでもらう。

さきほどの一部始終を見ていたためか、誰も彼もが恐ろしく従順な面持ちで私を見る。

攻略してもらおうダンジョンは、カルラ・ソ・ナメロ廻廊だ。

ダンジョンの名前を聞き、冒険者全員の顔から緊張がやわらいだのが見て取れた。

それもそのはず、カルラ・ソ・ナメロ廻廊のモンスターはさほど強くない。

初心者クラスにちよつと毛が生えた程度だ。

トラップもない上に、道もシンプルでわかりやすい。

ただしボスがちよつと強いため初級クラスだが、弱かったら初心者クラスだっただろう。

攻略したことのないものはいるか？

誰も手を挙げない。

全員攻略済みのようだ。

廻廊をクリアして中級になったものは？

全ての組が声をあげる。

どうやら全組、廻廊をクリアして中級になったらしい。

じゃあ、表のボスは倒せるな。

タイムリミットは明日の昼、太陽が一番高く昇るときまで。

それまでに完全制覇の証拠を私のところまで持ってこい。

私はギルド横の飲み屋に基本いるようにする。

三組しかいないようだから、チャンスは三回としよう。

「試験官殿、質問があります」

ひ弱そうなメガネ魔法使いが元気よく手のひらを挙げる。

『体細いけど胸でかいよ！ ロープの上からでも揺れたのわかった！』

はいはい。

顎を上げて先を促す。

「カルラ・ソ・ナメロ廻廊をクリアすればいいのでしょうか？」

有り体に言えば、そうだ。

「しかし、それでは中級昇格と変わりませんが……。それにチャンスは三回というのは？」

『なんだよ、胸だけか、このメルーパーは。そのメガネは飾りなのか？

チャンス一回マイナス』

なんか可愛らしい呼び名が聞こえたが、馬鹿にされたのはわかる。

あと、今の馬鹿な質問でお前らの組はチャンスが二回になった。

他に質問は？

変な質問をするとチャンスが減ると悟ったようで皆黙る。

それじゃ、試験開始。

廻廊を廻れ。何度も何度も根気よく廻れば、見え——『喋りすぎ』
こうして昇格試験が始まった。

昼過ぎに一組目のパーティーがやってきた。

三人組のパーティーだった。

斧持ちに、剣二本持ちに、杖持ち……。

あれ、普通のダンジョンパーティーに見える。

『だいたいあつてる。装備もなかなか悪くない。鍛え方もいい。ダンジョン専門というより野良モンスター討伐寄りのメンバーだね』

やっぱりあつてたか。

来るのが早かったのはダンジョンに慣れていたからだろう。

「試験官殿。チェックを」

私に渡したのはボスのドロップアイテムだけだった。

足りない。

チャンス、あと二回な。

「足りない？ ……わかりました」

そう言つて、三人組は飯屋から出て行った。

飯でも食べていけば良いのに。

「駄目」ではなく「足りない」という言い方はシユウに指示されている。

そうすれば次のチャンスを一回ミスリードできると。

続いて現れた四人組のパーティーもボスのドロップアイテムを持ってきた。

同じように言い渡すと、彼らも領いて出て行った。

メガネ魔法使いのパーティーはまだ来ない。

チャンスが一回少ない分、慎重になっているのかもしれない。

夕方近くなり、やってきたのは四人組のパーティーだった。

うーん、さつきも見したがこいつらは何をやっているパーティーなんだろうか。

男二人に女二人、男二人はそこそこ屈強そうだが、女の方はそれほど鍛えているわけではない。

むしろ女の方は酒場にでもいそうな雰囲気だ。

それでも剣とか持つてるからやっぱ討伐してるのかな。

『賞金稼ぎでしょう。女の片方は見た目がいいから男から情報を取れるし、髪から靴の先まで全身に暗器仕込んでる。モンスター相手には

あんなおもちゃ効かないから人間専門。もう片方もそこそこ動けそうだけど、魔法がメインだね。戦闘魔法よりも補助魔法系が専門かな。杖も小さくておしゃれなやつで杖とわからないようにしてるし、どう見ても対人間用』

あ、そうなんだ。

「これをお願いします」

男の一人がテーブルにアイテムを並べる。

私も一通り見ていき、最後に首を振る。

足りないな。

男は理不尽そうな顔を浮かべ、アイテムを回収していく。

回収が終わったところで残り二組がほぼ同時にやってきた。

お互いどうぞどうぞと先手を譲り合っている。

『まあ、相手が自分たちと同じものを出して駄目なら、自分のチャンスを一回保存できるからね。両方一気にいきましよう』

両パーティー同時に見せる。

不承不承といった様子で、机の左右にそれぞれアイテムを並べる。

少し離れた席から賞金稼ぎの四人組が見ていた。

両パーティーとも、順番こそ違えど並べたものは全て同じだ。

雑魚モンスターのドロップアイテムからボスのドロップアイテムを並べた。

数日前までならこれで完全クリアの証拠と言っても良かった。

だが、今は――、

足りないな。

これで全パーティー、残りはチャンス一回だ。

三人組は不満そうな顔で引き下がったが、メガネ魔法使いのパーティーがなかなか立ち去らない。

パーティーというよりもメガネ魔法使いだけが残っている。

「……おかしい」

ん？

「おかしいです！」

叫ぶメガネ。

かかるメガネがかたかた揺れる。

おいおい落ちるぞ。

『いいぞ、もつとやれ！ ああ、胸がぶるんぶるんするんじやくで、なにがおかしいって？』

「ドロップアイテムは今出したもので全てです」

本当に？

「カルラ・ソ・ナメロ廻廊は完全制覇済みで、ドロップアイテムはここに並べた八種類で間違いありません。このうち一種類は複数同時撃破の特殊ドロップアイテム。もう一種類はボスの逆回り撃破の特殊ドロップでしょう」

情報が古い。

きちんと攻略前にギルドで確認したか？

「……いえ、だって完全制覇済みってギルドが」

ギルドから完全制覇済みの認定を受けているダンジョンで新しい発見が見つかるのはよくある。

本当によくあるのだ。

私も何度かそういう発見をしている。

実際に、昨日もカルラ・ソ・ナメロ廻廊で新しい発見をしたからな。だいたい刻一刻と変わり続けるダンジョンに、完全制覇済みなんて印を捺すこと自体が間違っているだろう。

「えっ」

完全制覇されているかどうかは自分たちの目で確認すべきことだ。

それが難しいと思うならギルドから情報を手に入ればいい。

常に最新の情報を手に入れておくべきではないか？

「……でも、そんな情報まだ公開されて——」

ギルドの方にはあらかじめ話をつけておいた。

昇格試験のパーティが情報を聴きに來たら、教えてやって欲しい、と。

それで——お前達の中で、ギルドに情報を聴きに行った奴はいるのか？

それとも、誰かが懇切丁寧に教えてくれるまで待ち続けるのか？

『情報を最新に更新しておくことはダンジョン攻略以前の問題。全パーティーのチャンスを一回マイナス。はい、全員失格』

……馬鹿な解答をさせられた。

全てのパーティーのチャンスをマイナス一回。

——としたいところだが、聞いたところ全員ダンジョン攻略が専門ではないようだ。

今回は特別に見逃そう。

『ギルドからの情報提供はなしって付け加えて』

ただし、ギルドから聞くことは禁止する。

自分達で見つけて、自分達で手に入れてこい。

あまりにも自然にシュウが口出しをしてきた。

私が見逃すこともこいつの予想範囲内だったのだろうか。

翌日になった。

ずっと酒場にいるためなにやらあらぬ誤解を受けている気がする。働けよ、ずっと酒飲んでるんじゃないよみたいな視線が刺さってくるのだ。

今のところ、まだアイテムを持ってくる気配はない。

どうなんだ？

あいつらはクリアできそうか？

『有るってことさえわかれば、あとは模索して気づくんじやない？

でも、手に入れるなら上級以上の力がある。だから、無理』

たしかにけっこう理不尽な面があった。

私は余裕だが、何も知らない初級者が出現方法だけを元に挑んだら間違いなく死ぬ。

私なりの中級と上級の階級判断は理不尽かどうかだ。

中級までは対策をしっかりと練れば、なんとかかなると思ってる。

しかし、上級からは対策を組むだけではどうにもならない要素が関わってくる。

カルラ・ソ・ナメロ廻廊の真の完全制覇には理不尽さが確かに存在した。

ダンジョンからの殺意とでも言い換えるべきだろうか。

『まあ、出現はさせられるんじゃないかな。あのメガネ魔法使いはバカだけど、お勉強はできそうだったし』

……そもそも、あのメガネ魔法使いパーティーはなんなんだ？

戦闘向きじゃないことは私でもわかるが、何のパーティーなのかかわからない。

『探究専門でしょう。虫眼鏡のバッジつけてたでしょ』

記憶にない。

『ダンジョンでもいるでしょ。なんか壁を刷毛でパタパタしたり、壁や床に魔法をかけたたりしてる人たち』

ああ……、ああ、ああ。たまにいるな。

新しいアイテムの発見やダンジョンの歴史とかを調べてるへんてこなやつらが。

上級になれば新しいダンジョンにも潜れるようになるだろうからそれか。

『いんや、お目当てはダンジョン探索というよりも上級証そのものかな。図書館の一定以上の秘蔵図書に触れられるようになるし、探索の申請や研究費も下りやすくなる。外部からの信頼性も高まる』
なるほどな。

まあ、それぞれ理由があるってことだ。

『そうだね。それよりどうする？』
どうする、とは？

『ダンジョン情報なしのあのメンバーじゃ、どうやってもボスを倒すことができない。初級者向けって話で、あのトラップとボスモンスターは理不尽設計だよ。中級でも与えた情報だけじゃ手に入らないでしょう。扉を開けて、なお進まずに帰る選択ができたなら、別のチャンスを与えても良い。じゃないと死ぬしかなくなる』

それは……そうなのかもしれないな。

『まともにモンスターと戦えるのが、討伐専門だけだからね』

あまりの理不尽に自分たちだけではどうしようもないときどうするか？

例えば、ソロなのに二人以上じゃないと先に進めないギミックがあつたときだ。

あの仕組みには殺意を覚えた。

『それはちよつと違う……。理不尽を前に、どうやって生き残るか？』
さつさと逃げて、対策を練りまた挑めば良い。

だが――、

『そう、それは中級まで。圧倒的な理不尽を前に逃げることさえできない。切り抜けるための道は後ろにはない』

それが上級だ。

『彼らがまだ中級なら救済策があつてもいいでしょう。さあ、どうする？』

私の持つべき解答は一つだけ。

圧倒的な理不尽が相手なら、より無慈悲で理不尽なチートで圧倒するに尽きる。

では――彼らは？

カルラ・ソ・ナメロ廻廊へと二日ぶりにやってきた。

相変わらずカビ臭く、空気が埃っぽい。

構造は非常にシンプルである。

入つてすぐ目の前に扉、そして左右に延びる通路。

目の前の扉はボス部屋なのだが、こちらは出口側で開かない。

四角いボス部屋を囲むように、左右の通路が反対側まで延びている。

脇道は一切なく、出てくる敵も弱い。

トラップこそないが、石畳がぼろぼろになっており足下は良くない。

始めに右の通路からボス部屋に行き、ボスを倒して部屋を出て、左の通路を行きまたボスへ。

そうするとボスの種類が変わりドロップアイテムも変わる。

ここまでが一昨日までの常識だった。

『雰囲気からするとまだ反転してないみたいね』

そのようだな。

敵がまだ白いし、魔法も使ってこない。

通路の先には白い綿みたいなのがふよふよ浮いているだけだ。

上に開いた岩の隙間から光が差し込んでいる。

表側で間違いないだろう。

『裏側に入ったら表側とは別の空間に飛ばされるんじゃないかな』
『どういうこと？』

『表と裏では見た目がほぼ同じだけの別世界じゃないかな。誰かが裏に行っても表の世界には出てこない。今まで目撃例がないわけだからね』

たしかに有り得る。

雰囲気ガラツと変わるからな。

あの変化に他の人間が気づかないとは考えられない。

表と裏で別の空間だか世界だかになってるといふのは正しそうだ。

『お、まだいた』

ボス部屋の前にそこそこの人が集まっている。

挑戦待ちかと思っただが、三組全てがここに固まっているようだ。

『解読中かな』

そうだな。がんばってるな。

これ何週目だ？

『まだ一週目みたいだね』

ボス部屋前とその周囲には壁画がたくさん描かれている。

ちなみにこの壁画はボスを一回倒すと変わる。

ボスを倒した者が一定時間内にまた扉を開けるとボスが第二段階に変化する。

問題は第二段階を倒した後なのだ。果たしてそれに気づくのか。

「カルラ・ソ・ナメロ廻廊は、カルラン・ソ・ナメナキエテ寺院の中心にありました」

メガネ魔法使いが他の冒険者に語っている。

他の冒険者も黙ってそれを聞いている。

「カルラン教の教戒は世界の二面性です」

メガネはさらに話を進める。

物事には必ず裏と表があり、裏も表もあるのならその真理はどちらなのか。

カルラン教では、どちらにも真理ではないと言っている。

真理はその境界面にある——と。

では、我々人間が境界面たどり着くにはどうすればいいのか？

寺院を一つの世界と見立て、その中心に二つの面を作り上げればいい。

二つの世界を一カ所に集めれば、世界の歪み——境界面が顕れる。

『ちよっと、メル姐さん！ 話がつまらないからって、屁こかないでよ！』

待って！ 今のは私もびつくりした！

人はどうやらつまらなすぎる話を聞くとおならがでるものらしいぞ！

『一般論にするのやめて！ 普通は出てもせいぜいあくびくらいだよ！』

私たちが盛り上がっている間に、他のパーティーは静かになっていった。

うむ。どうやら話は終わったようだな。

「いえ、終わってません。つまりです。この廻廊には裏側がまだあるんです」

どうですか、と私を見てくる。

私はてきとーに頷き返しておく。

「裏だか表があるのはわかったんだが、どうやって行くんだ？」

ここで討伐専門のパーティーリーダーが声を出す。

その通り。そこが一番重要だ。あることがわかっても行き方がわからなければそれはないことと同じ。

「少し欠けていますが、壁画に描かれていました」

魔法使いはまたまた語る。

堂々と胸を張り、声高々に——。

『やっぱ巨乳の人は背筋がピンとしていると気持ちいいよね。胸が強

調されてさ』

気持ち悪いほど清々しい声。

猫背気味の私に言ってるのかな？

『ほら、そんなことより話聞こう……』

表には世界が三層あり、裏側には世界が三種類ある。

これはダンジョンで言うところ、ボスの一回目と二回目がそれぞれの層に相当する。

三層目では境界面に近づきボスがなくなる。

実際に二周したあと、ボスがいなくなることは知られている。

そこで境界面に触れることで裏に到達できるのだ——と。

「違いますか？」

背中をぽりぽり搔いていた私に問うてくる。

否定はしない。その通りだからだ。

「ボスを二回倒して、またボス部屋に入るってことはわかった。だが、最後の境界面に触れるっていうのはどういうことだ？」

賞金稼ぎのリーダーが魔法使いに尋ねる。

「それは三回目のボス部屋でお話し致します。おそらく大丈夫。ボスはいないでしょうから、みなさん同時に入れるはずですよ」

魔法使いはそう締めくくった。

魔法使いの提言に従い、三組プラス私はそれぞれ二周して空っぽのボス部屋に集まる。

「さて皆さんそろいましたね。それでは裏面に行きましょう」

「どうやって？」

当然の疑問があがる。

「先ほど境界面に近づいたと言いましたが、おそらくもうすでに境界面に接しているんです」

『そうだね』

そんな話もしたな。

ここが境界面であり、境界面には何も無い。

すなわち真理は無だったか、あるいは論理が最初から間違っていたか。

シユウは後者じゃないかと言っていた。

間違った論理を元に築いた思念の建造物にダンジョンという意志が乗りかかったただけだ、と。

まあ、そんなことはどうでもいいんだ。

「ここはすでに線の上、上下も左右もあつてないような世界です。ただ、そちらから出ると皆さん知つてのとおり表の世界に出ます。なら、こつちから出ると——」

『正解。でも——』

言いつつ、メガネは入り口の扉に手を掛けた。

他の人間は固唾を飲んで見守る。

その中で私は一人、シユウに手をかけ臨戦態勢に入る。

『このデカ胸メガネ……知識はあるけど、実践と予見がまるで駄目だ。なによりも思慮が浅い』

問題はその後だ。

魔法使いが得意げに語ったことは、言われてみればとても単純なことだろう。

『どうしてそんな単純なことが今まで伝わっていなかったのか？ そこを考えないと』

それはつまり——、

わずかに開かれた扉の間からは白く光る目玉。

「離れろっ！」

メガネのパーティーメンバーも気づいたようで慌てて叫ぶ。

「……えっ？」

メガネが気づいたときにはモンスターはすでに眼前。

細かい波状に並んだ歯を得意げに見せて、メガネを食べようとしていた。

よつと。

そんな口にシユウを一刺し。

あつけなくモンスターは光に消えた。

来るとわかつていれば対応することは容易い。

『そうだよ。一回目は注意したのにメルアタママルカジリされたも

んね』

ほんとに来るなんて思ってたよ。

なんかまーた冗談言ってるよ、としか考えてなかった。

攻撃は全然痛くなかったが、涎でべとべとになった。

メガネは魚みたいに口をぱくぱくさせている。

放っておいてもよかったが、目の前でパツクンチョされると良い気分ではないため切り捨てておいた。

『三十話にもなってモブがマミったところで、誰も喜ばないだろうし……』

ん……？

ほつとこう。

さて、扉をくぐり出たところにモンスターがいないかどうか確認する。

先ほどまでは昼だったのに、通路は暗く月明かりが差し込んでいた。

通路の先に薄黒いモンスターがひたひたと歩いていた。

この距離なら大丈夫そうだな。

さて、おめでどう。

ここからが完全なカルラ・ソ・ナメロ廻廊だ。

安心して良いぞ。こっちはたった一周しかないからな。

がんばってクリアしてくれ。

扉を開いて導いてやると、パーティーは次々と裏側へ入ってきた。

全員が裏側に入ったところで、扉は閉まり完全に消え去った。

『あらら残念。これで全員失格……いや、待てよ——』

もう逃げられない。進む方向は反対方向に二つ延びるが、どちらも到達点は同じだ。

先頭に討伐メンバー、二番目に賞金稼ぎ、三番目に探険隊、最後に私がついていく。

基本的に私は手を出さない。ぼんやり眺めているだけだ。

賞金稼ぎリーダーの提案で彼らはパーティーを組んでいる。

もちろん私は入っていない。なんとというか大所帯だ。

こうすればアイテムも一気に稼げるし、内部の争いも起こらない。
……シユウの言ったとおり、事に進んでいる。

探究メンバーが扉を開け、賞金稼ぎメンバーが全体を一つにする。
そして——入口の反対側でボスとの戦いになった。

表ボス二週目が黒くなって出てくる。表よりも若干強い程度だ。
ちなみに、この変なボスは象とかいう動物をモチーフにしているらしい。

鼻が異常に長く、鼻の生え際から角が伸び、二本足で立ち、四本の手にそれぞれ武器を持って襲いかかる。

この世界にはあんな怖い動物がいるんだな。

『いや、あくまでモチーフだから。本物とはだいぶ違う。それにもっと別のモチーフがいる』

通路での戦いということもあり、入り乱れての戦いだったが、討伐組が良い働きをした。

それに他のメンバーも魔法で補助していたため、表のボスよりも楽に倒せたのではないだろうか。

反対側でボスを倒してもアイテムしか出てこない。

扉は出てこないのだ。

道はまたしても両方に延びる。

到達点はどちらでも同じだ。ただし——、

「モンスターが、強くなってないか？」

討伐隊のリーダーが疑問を呈する。

「やはりそうか」

賞金稼ぎメンバーも口に出す。

「そう？」

探究メンバーはよくわかっていない模様。

実は私もよくわかっていない。

弱い敵がちよつと強くなったところで私には変化がない。

探求者メンバーにとってはその反対なんだろう。

なんとか反対側に来たところでまたまたボスだ。

表の一週目ボスの黒い版である。

四つの顔と四つの腕を持ったへんてこな姿となっている。そういえば、このボスはどれも腕が四本あるな。

ただし、雑魚の召喚速度は表よりも数段早い。

雑魚も強くなっている上に、魔法も強くなっているというおまけつきだ。

ここでも活躍したのは討伐隊だ。

こういった複数パーティー入り乱れての戦いにも慣れていく。

リーダーがそれぞれのパーティーに指示を出し、上手く立ち回っている。

雑魚を少しずつ倒していき、ボス本体の魔法詠唱も上手く妨害して立ち回る。

『おしいなあ……』

なにがだ？

私の方に襲いかかってきた雑魚を足で蹴って倒しながら聞き返す。

『あの討伐パーティーは中級ダンジョンに挑んだ方が早い』

ああ。けっこう強いよな。

『けっこうどころじゃない。かなり強い。戦い慣れしてるし、指示もすごい的確。もしも試験が完全に俺の考えたとおりなら合格にするよ』

もしかしなくても私のせい？

『そうだね。相手の力をちゃんと測ることができてる。だから——』

お前の予想通り、次でリタイアか……。

『うん。たしかに強いけど、次のボスはこのメンバーじゃ挑めない、無理だつてことがわかってしまう』

それもそうだ。

まだ言っていないけど、ここは上級ダンジョンなんだよな。

『そう、最後のボスが強いからね。あと、脱出できないし』

そう言えば、賞金稼ぎの方はどうなんだ？

『あれも上級にしている。リーダーの勘がずば抜けてる。最初の掃討作戦でも、リーダーが他のメンバーを抑えてた、対人戦が得意ならその方が手っ取り早いはずなのに。それに、さっきの扉を開けるとき距

離を取ってた』

そうだったっけ？

みんな扉が開くのをぼんやり見てなかったか？

『いや、ちゃんとリーダーが他のメンバーに下がれて手で指示出してた。それに、ここに入ってからワンプアーテイ化も理想的だし、さつきと今のボス戦でも上手くサブリーダーになって討伐隊を補佐してる。慣れない対モンスター戦だろうに……。だから——』

討伐隊と同じように次でリタイアか。

『そうだね。勘がいいのと、討伐隊のリタイアで一緒に消える』

探究メンバーは……。聞くまでもないな。

あれはもうダメダメだろう。

私でもわかる。

『ギルドからの情報をなしにした時点で、このメンバーだけの攻略は無理になったんだ。せめて、扉が開いたところで退くことができたなら別の選択肢を与えても良かったんだけど、どこかの馬鹿が誘導しちゃったし……。』

なんか攻められている気がするが聞こえない振りをする。

じゃあ、これで昇級試験は終わりか。

次は私が戦うわけだ。

まあ、これで最後というわけじゃない。

別の機会にまた受けてもらうとしよう。

『ただ——』

ただ、なんだ？

『……。どうだろうなあ』

煮え切らない回答だ。

こういうときは聞いてもはぐらかされる。

何も言わないと勝手にしゃべり出すから少し黙るに限る。

『……。』「発大逆転の目がまだ残ってるんだよね』

それってどういうことだ？

『全組が昇級するってこと』

えっ、そんなのあるの？

『その前に、ダンジョン攻略において使っちゃいけない方法ってあると思う?』

お得意の質問返しだ。

どうせ答えないと先に進まないだろうから返しておく。

使っちゃいけない方法ね……あるだろう——なんて私が言えるはずがない。

チートをばりばり使っている私が今さらインチキだのどうのこうの言うのは間違いつてもんだらう。

倒す作戦が、攻略する手法があるのならどんな手段でも用いて挑む。

それが私の考えるダンジョン攻略スタイルだ。

『だろうね。それならやつぱり大逆転はある。救済策は失敗だった。最初は死んでもいいかと思ってたけど、死なせるにはちよつとだけ惜しいメンバーだったからね。……胸もでかいし』

最後のが本音だな。

まあ、いいや。

私も死なれると目覚めが悪いからここにいるわけだし。

リタイアするって言うなら、死なないように私がぼこぼこ敵を蹴散らせばいい。

『甘すぎる。試験官に向いてないね』

そんなこたあ最初からわかってる。

それよりも大逆転の目とやらを教えてください。

『教えるとペラペラ勝手に一人で喋りそうだから言わない。でも、正解を引けばすぐにわかる。可能性は低いだろうけどね……』

そんなことを言ってる間にパーティー達がボスを倒してしまっていた。

ボスを倒せば暗闇の壁に白い通路が現れた。

ちよつと最初のボス部屋の扉と同じ位置になる。

「やりましたね! これで上級ですよ!」

どうしたらそうなるのか。

メガネが無邪気にはしゃいでいる。

『メル姐さんが一周で終わりとか言うからでしょう』

そんなこと言ったっけ？

『言った。でも、このメガネもアホだね。自分で言ったのに。「裏側には世界が三種類ある」って』

言ったっけ？

『……言ったよ。三種類の世界がそれぞれボスを表していることくらいわかると思うんだけどなあ。やっぱり、いろいろ足りてない』

真つ暗闇の壁に囲まれた真つ白な廊下を歩いて行く。

完全に白と黒。二色の世界だ。

廻廊の廊下よりもずっと長い廊下をどこまでも歩いて行く。

地図上では廻廊の入口に延びているはずなのだが、どこまで歩いてもたどり着かない。

そして——突如、世界がひらけた。

壁になっていた暗黒が遠くへ広がり、真つ白な広場ができた。

浮かんでいると錯覚するほど、どこまでも無垢な白が広がる。

他のパーティーが進んでいく中で、私は足を止めて成り行きを見守る。

「下がれッ！」

討伐隊のリーダーが吠えた。

すぐさま、他のメンバーも後ろに下がる。

理解が遅いメガネ魔法使いもパーティーに引っ張られて下がった。

パーティーが見つめる白の世界に、一点の黒球が浮かんでいる。

さあ、今度こそ最終試験だ。

黒球は大きく膨らみ、球から徐々に形を変えていった。

ただの真つ暗闇が、ある生物の形をとる。

「さか、な？」

誰かがそう呟いた。

目も口も皺もない真つ黒の魚が一匹、白の世界に浮いている。

魚といっても大きさは人間の二倍以上ある。

どこまで保つと思う？

『五番目』

五番目ってなんだっけ？

『少年。白黒が反転するところ。そこで瓦解。六でリタイア……のはず』

ああ、あそこか。

印象的だから覚えてる。

六は？

『斧持ってるやつ』

いたっけ？

数多く見たなかでもここまで形態が変化するボスは珍しい。

なかなかおもしろいボスだったから三回挑んだが、途中が曖昧だ。

『斧、弓、暗闇人間、完全回避、お花畑』

最後の二つはおまけみたいなものだろ。

戦いにならないし。

『そうだね。おっ、魚は倒したっぽい』

ほんとだ。

倒したようだが、すでに二人ほど倒れている。

光の床に倒れた暗闇の魚はまたしてもぐにやりと形を変える。

「亀？」

「亀だな」

図体は魚よりもずっと大きい。

魚の二倍はある。つまり人間の四倍以上。

大きさだけならたしかにでかいが動きは鈍い。

床を踏んで真つ黒な瓦礫を落として来たりするだけだ。

ここはたぶんいけるだろう。

『そうだね。次の猪が鬼門かな。半人半獅子も討伐隊と賞金稼ぎのリーダーと補助魔法女が残っていればいける。ま、どっちにしろその次でほぼ全滅……、あれは初見殺しだからなあ』

ここでもシユウの言ったとおりになった。

亀を倒し、猪で四人が倒れたもののなんとか倒した。

ライオン人間も討伐隊のリーダーと賞金稼ぎの補助魔法でなんと

か打ち倒した。

しかし、ここにきて疲労がピークに達している。いつまで続くのかわからないという精神的な追い込みも彼らを襲う。

ライオン人間が倒れ、暗闇が白い床に黒の水たまりを作る。

水たまりはパーティーから離れるように移動していく。

やがて遠く離れた位置に黒い少年が現れた。

背はここにいる誰よりも低く見える。

言ってしまうと低く見えるだけだ。

遠近法というやつらしい。

私も最初は油断してもろにくらった。

同様に他のパーティーも何が起こるのかよくわかっていない。

『来るよ』

ああ、そのようだな。

少年が私たちに向かって手を振ってきた。

そして一步踏み出す。

その小さく見える一步で地面が大きく揺れた。

次に二歩目。

少年の姿が異常に大きく映る。

他のパーティーも少年を見上げている。

勘が良いと評された賞金稼ぎのリーダーが逃げ始めた。

だがもう遅い。どこに逃げてても意味はない。

私ですら逃げ切ることができなかった。

というよりも、ダメージはないのだ。

最後に三歩目。

少年の足は私たちの真上に迫り、完全に潰されたかと錯覚する。

だが、しよせん暗闇。ダメージなどまったくくない。

問題はこの浮遊感だ。

『着地に気をつけてね』

ああ。

浮遊感だけは錯覚だけではない。

本当に体が浮いている。

どこかに落ちていつているのだが、一面は暗闇で地上がわからない。

この段階から辺り一面が暗闇になる。

火魔法か光魔法、それに相当するアイテムがないとパーティの確認もできない。

私の場合はソロだからまったく問題なかったが……。

さすがに四回目になると着地も上手くなるものだ。

今回は見事に着地を決めた。

チートの効果で周囲の様子は見えている。

シユウの言ったとおりほぼ全滅だ。

まともに立っているのは各パーティーのリーダーだけである。

それぞれのリーダーがメンバーの名前を呼ぶが誰も返事はしない。

みんな仲良く倒れ伏している。

……メガネ魔法使いが残っているのは意外だな。

『お供のおっさんが身を挺してかばってた』

だが、これでもう終わりだろう。

シユウの言っていた一発大逆転とやらもこれではどうしようもない。

そろそろリタイアを勧告すべきだな。

次のボスも現れたようだし。

暗闇の中に白の球が浮かぶ。

白球はぐにやぐにやと形を変えていく。

そして、斧を持った人の形が暗闇に現れた。

「おいおい嘘だろ……」

「まだ……、まだあるというのか？」

これを含めてあと五段階ある。

戦闘は三か四だがな。

真実を告げると三人とも絶句した。

「試験官殿は……、これに勝てるのか？」

討伐隊リーダーが尋ねてくる。

楽しかったから一昨日、三回倒した。
今ならたぶん無傷で倒せる。

『余計なことを……』

またしても三人絶句。

「棄権したら、あとは任せてもいいんだな。まったく優しいもんだ。
そのために、来てくれてるんだろ」

賞金稼ぎのリーダーはやはり勘が良い。

あまり好きになれそうにない。

任せてもらっていいぞ。

パーティーメンバーも気を失っているだけだ。

生きて帰って別のダンジョンなり昇格試験に挑めばいい。

「——そんなことできない！」

一人の女が叫ぶ！

メガネ魔法使いが、あ、メガネが外れてどっかいつてる。

『メガネはない方が可愛いね』

ちよつと場違いな発言が出てきたので無視。

ふむ、リタイアはしないと？

「そうよー！」

ここでリタイアしないと——死ぬぞ。

「それは困る！　ここで死ぬわけにはいかない！」

はあ？　何いつてんだ？

『ううむ……』

他のパーティーもリタイアするって流れだ。

そうすると残るのはお前だけ。

戦闘はできないだろ。

「そうよー！」

堂々と言い切った。

ここまで堂々と言われるとなんだか、いいな。

いや、良くはないんだが。

「私たちに中級ダンジョンは攻略できない！」

そうだろうな。

強さが足りてない。

私でもわかるほどだ。

じゃあ、次の昇格試験で――

「そんなの待てない！」

……はあ？

ちよつといい加減にしろよ、お前。

自分の実力不足だろ。諦めろよ。

「自分の実力が足りてないことはわかっている！ そんなこと言われるまでもない！」

いや、でもね。

パーティーメンバーに――、

「迷惑をかけてることなんて言うまでもない。いつも助けてもらっている。いつも救ってもらっている！ たぶん、絶対間違いなくこれから迷惑をかけ続ける！ それでも――それだからこそ！ 私は探究を止める訳にはいかない！ 今も、これからも！ だから――」

魔法使いは叫ぶ。

たぶん私の方を向いているつもりなんだろうが、だいぶ方向がずれている。

「私はここで諦めるわけにはいかない！ 私は知りたい！ もつともつと知りたい！ こんなところで立ち止まるわけにはいかない！ 次の試験、それはいつ？ 半年後、一年後？ 貴方には短い時間かもしれない。それでも私にとってはとても長い時間。その間、ずっと立ち止まれ？ そんなこと私にはできない！」

こいつは――、

『似てるね。どっかの誰かさんに。馬鹿で、思慮が浅くて、胸がでかい――それに頑なにまつすぐなところが……』

お前の思いは伝わった。

その思いを叶えてやりたいという気持ちは、確かにある。

しかし、だが、でも、今回のダンジョン攻略はシユウに無理を言うて決めてもらったもの。

ダンジョンに関わることで、決めたことは曲げたくない。

それは——私の存在意義に関わる。

『ほんと面倒な人たち……。でも、そろそろ決着をつけたほうがいいよ。時間を稼いで二人が保たない。むしろ、視界が悪い中で良く保たせてる。やっぱ上級でいいな、こいつら』

そんなことを私に言われても困る。

こんなときこそお前の出番だろ。

なんかないのか？

こいつらを上級にし——

ここのダンジョンをみんなでクリアし——

私のダンジョンに対する想いを曲げない方法が——
なにかないのか？

『ある——けど、それはメル姐さんが言っちゃダメなんだよね』
どうということだ？

『それはあつちに言わせないといけない。こんなときだからこそ基本に立ち返って、上級のスタンスを復唱してみよう』
圧倒的な理不尽を前に逃げることさえできない。
切り抜けるための道は後ろにはない。

お前の友も倒れてもう戦えない。

仲間も力尽きようとしている。

敵はまだ倒れる様子はない。

お前には戦う力がない。

さあ——、

「どうするっ？」

メガネは考える。

彼女にはそれしかできない。

考えている間に、賞金稼ぎのリーダーは倒れた。

それでもメガネは考える。

戦えない彼女が唯一できることだ。

だれかに守ってもらい、あとは任せたと頼る。

だが、最後の一枚も崩れた。

討伐隊のリーダーもいよいよ力尽きた。

ボスは私を狙わず、メガネを狙っている。
メガネは暗闇の中、確かにこちらを見た。

そして、腕を差し出す。

「パーティーを組みましょう」

彼女は戦えない。

だから、最後まで人頼みだ。

私が、チートを——シユウを頼みとするように。

『その言葉が聞きたかった！』

私はボスよりも遙かに早くメガネに近づく。

近づいたときに何か踏んだ。

『メガネが！ 割れたッ！』

そんな叫びとともに私はメガネパーティーの一員となった。

まあ、そこから先は圧勝だ。

斧使いをぶった斬り、弓使いも変身後すぐに一振り。

その次の真つ暗闇が面倒だったが、割れメガネが火魔法を使い辺りを照らして姿がわかり一刀両断。

残りは消化試合だった。

九段階目はただの人型。

三回攻撃すると威力の高い反撃をしてくる。

『威力が高いつてもんじゃない。普通の人間なら即死だよ』

最初こそどうしたらいいのかわからなかったが、要するに何もしなければいい。

しばらくすると、勝手に消え去った。

なんなんなんだ、あのボスは。

そして、最後。

私はここが気に入っている。

質量を持った暗闇とやらの周囲を囲まれる。

そんなことを言われても私にはよくわからない。

言われてみれば、たしかに重いかもつてくらいだ。でもやっぱりわからない。

ただ、他のパーティーを見ると呻き声をあげてるからやっぱり重い

のかもしれない。

重さが頂点に達したときに、火花とも思える光が生じる。

その小さな光がどこまでも広がっていき暗闇をかき消していく。

かき消した後は、ただの白空間ではなく花畑が残り、穏やかな風が私たちを労う。

ボスのドロップアイテムがパーティーの人数分、花畑に残る。

そして、出口の扉が現れてカルラ・ソ・ナメロ廻廊は完全クリアと相成った。

またしても翌日だ。

ギルドの一室に私と、例のパーティーメンバーは集められた。

彼らは全てのドロップアイテムを無事手に入れたので上級に昇格である。

私は試験官として彼らに上級証を手渡す。

たったの二日だが、なかなか感慨深いものだ。

あつという間に認定式が終わり、それぞれあちらこちらに散らばる。

私もいつも通りギルド横の酒場でご飯を食べていた。

テーブルの前に割れメガネがやってきた。

目がよく見えていないのか細い目つきで私を見て来る。

なにか用だろうか？ 前みたいにメガネ代を請求されるのか？

「私はセルン。セルン・マクレイ、ありとあらゆる知識を刻み、全ての謎を解明する人間よ」

今さら自己紹介された。

私はメル。ただのメル。全てのダンジョンを攻略する人間だ。

彼女は得意げに笑い、手を差し出してくる。

無言でお互い手を握る。

『訳のわからん友情だ……』

満足したようにセルンは席を立つ。

「じゃあね、メル」

ああ、セルン。

お前のことは次のダンジョンを攻略する直前まで忘れない。

「私も次の本の表紙をめくるまで忘れないわ。どんな困難が待ち受けていようとも、私は学び続ける。知ることをやめられない。それが私の生き方だから」

そうか。そうだな。

お互いそういう生き方しかできないんだらう。

私もどんな苦難があろうと、ダンジョン攻略をし続ける。

まあ、あれだ――、

『方向性は違うけど二人ともよく似てる』

シユウが割って入る。

私が言うのも何だから言わせてやろう。

『馬鹿で、間抜けで、分別が足りてない』

おい、誰がそこまで言えと言った。

『でも――お互いそれがわかった上で、なお生き方を変えず突き進もうとしてる』

生き方を変えるなんて器用なまねができるはずもない。

それに、突き進もうなんて格好いいモノじゃない。

さっきも言ったように、私たちにはこういう生き方しかできない。

それだけなんだ。

『そうだね。そこまでわかってるんなら、俺が二人に言えるのは、これだけさ――』

『その胸を良しとする』

……なんか違ってない？

蛇足14話 「遙か久遠の貴方」

1. 王都に至る道：デ克蘭山窟

王都モルタリスに繋がる道の一つにデ克蘭山窟がある。

この山窟は中級ダンジョンに位置づけられているが、モンスターはさほど強くない。

適切な準備をしていれば初級並みのレベルのようで、実際に過去は初級だったようだ。

——では、なぜ今は中級なのか？

答は、死亡者が多いからである。

南方から王都へ向かうルートは三つ。

山窟以外のルートは、ゼノム山岳を東西に大きく迂回するため時間がかかる。

どうも人間は時間という制限を背負うと正しいリスク判断ができなくなる。

そして、判断を誤った商人と未熟な冒険者がたくさん命を落とした。

その結果が中級ダンジョン——デ克蘭山窟という訳だ。

もちろん私は残り二つの道など無視し、このデ克蘭山窟を選ぶ。

それに、こちらを通るメリットがもう一つある。

『こつちなら余裕で間に合うね』

そうか、ゆっくり攻略できそうだな。

他の商人や冒険者と同じく時間短縮のメリットだ。

明後日から王都でアルヒ祭とかいう大きな祭典があるらしい。

ソレダー王の生誕四十年とも重なり盛大に執り行われるという話だ。

『でも、祭りが目的じゃないでしょ……』
うむ。

正直、お祭りだの王様の生誕四十年だのはどうでもいい。

祭りがあると近くのダンジョンに挑む人間が減って、気ままに攻略できる。

ダンジョンで周囲に他の冒険者がいたりすると、声かけられたり、奇異の目で見られるからな。

『ソレダー王も体調を崩して大変だって聞くけどね』
らしいな。

顔も知らないし、名前すら最近知っただけど……。

『世事にうといのはよくないですぞ』
いいんだよ。

王様の体調なんて、私には関係ない。

最悪、死んでしまっても大して問題ない。

どうせ私とはまったく関係のない、無縁な世界だ。

ダンジョンがあればそれでいい。

『甘い』

何が？

『あのね、メル姐さん。九割方の物語で、王都に行くと問題が起きる。しかも祭りとなれば確実と言ってもいい』

はあ、そう。

で、問題とは？

『王都にモンスターが襲撃したり、王子や姫様との邂逅、祭りに乗じて動く謎の組織、あと他には——』

あつ、もういい。

よくわかった。

『メル姐さん、「よくわかった」という言葉はだね。まったくわかってない奴か、わかるうとする気のない奴が言う台詞なんだよ。簡単に使っちゃいけない』

はいはい。

『まあ、さっき言ったようなことはさすがにないとしても、臭くても極限級冒険者なんだから、王と面会くらいはする機会はあるかもね』

それ、腐つてももの言い間違いだよな。

次に間違えてみる。宿屋の蜘蛛の巣掃除にお前を使うからな。

『よくわかった』

あれやこれやとやり取りをしているうちにデクラン山窟近くのギルドにたどり着いた。

『多いね』

……ああ。

人が、なんか、うじゃうじゃいる。

一週間ほど前に西の道が土砂崩れで通行止め。

こつちに一部冒険者が流れて来てるってのは聞いていたが、ここまでは。

『いや……、流れそのものが止まってるから他の理由がありそうだね』
ふむ、たしかに怒号が飛び交っている。

人混みの脇に立ち、話を盗み聴くこととするか。

しばらく突っ立っていると、シユウが報告を始めた。

『どうも、ギルドじゃなくて政府側が入場を止めてるみたいだね』

政府が？

珍しいな。

ダンジョンの管理・運営の権限は原則、政府にある。

しかし、実質のところはギルドがその大部分をおこなっている。

安全上の問題が起きたとき、ダンジョンへの入場を封鎖するのも大抵はギルドがしている。

政府もギルドからおぼれをもらっているため、特に運営について口出しや手出しをすることは少ない、と聞いている。

実際に私も積極的に政府が管理するダンジョンを見た記憶があまりない。

『行ったことがあるところだと神々の天蓋とウエルミス監獄。知ってるところだとセルメイ大聖林、ランプスイ金山に跨幻橋。パンタシアくらいかな』

ランプスイ金山は有名だな。

国の金のだいたい全部がそこで出てくるんだっけ。

『らしいね。相場の維持が大変そうだ』

難しいことはよくわからん。

それよりも目先の問題を片付けるべきだろう。

『通行止めの理由は公表されてないけど、通行止めの前に誰か複数人が入ったって噂がある』

いきなりだな。

それで？

『おそらく、政府のやんごとないご身分の方が通ってるんだろね。他の冒険者と事故を起こしたら大変だから』

事故というよりは諍いか。

ダンジョン内での冒険者同士の諍いはよくあることだ。

『他の冒険者がモンスターを狩る安全性よりも、イレギュラーに巻き込まれるリスクの方を高く見たようだね』

なににせよ、その高い身分の人が通過するのを待たないといけない訳か。

いつ通行可能になりそうだ？

『通行止めになったのが六日前』

六日前？

じゃあ、そろそろ通れるか。

それにしても、ずいぶんとゆっくり攻略しているんだな。

『それが問題。ドロップアイテムも不要で、道もわかっているなら三日あれば通過できる。ゆっくり行くななら四日か五日でもいいけど日を跨ぐとかえって疲労が溜まる危険性はある』

そうだな。

安心して眠れる環境とは言えないから疲れは溜まる。

疲れが溜まれば、モンスターとの戦闘にも当然支障が出るだろう。

『政府、あるいはギルドも次の手段を講じるでしょう』

次の手段？

『安否確認。救助部隊と言い換えてもいい』

ああ、そりゃそうだ。

救助部隊が編成される訳だ。

その中に私が入ればダンジョンに入れるな。

『おいしい。本当の問題はね。誰を、どれだけ、どういう金額で行かせる

かだよ』

ここにいる冒険者は少なくとも三十はいる。

これが全員ダンジョンの中に入ればおそらく混乱が起きるだろう。

ある程度の人選をしていく必要があるのは違いない。

『さっきの条件を決めるのにも半日はかかるだろうね。反対側からの救助部隊を考えて、意見を合わせる作業も含めて考えるともつとかかる』

それで？

何か良い手段があるんだろ。

そのむかつく得意げな口調は何か策があるときだ。

『政府もしくはギルドが搜索班を編制する前に、搜索班に先行する救助員として志願すればいい』

……？

よくわからんのだが。

『メル姐さんは、極限級冒険者って肩書きをもってる。実力に関しては申し分ない』

なんだかこそばゆいが、そうだな。

『その極限級冒険者が事情を察して、報酬なしで救助員として行くと言ってくれば向こうとしてはとてもありがたい』

そう、なのか？

『先行してモンスターを蹴散らして、ドロップアイテムを拾わずにおけば続く部隊までモンスターがリポップしない。まあ、長くて一日だろうけど』

なるほど。

『それにソロで行くなら他の冒険者とも争いにならないし、やんごとなき身分の方に関しての情報漏洩……口止めが楽』

それに金はいらさないな。

『いや、払う方が安心できるって言うなら少額でもいいから払わせればいい。あと、こっちが先行している間に、続く部隊の編制を練ることができる』

ふむふむ、その話でいくと、問題はドロップアイテムが拾えないこ

とか。

『ゆつくり攻略も無理かな。全ルートを見てみるってのは諦めたほうがいい。最短ルートを辿りつつ、行方不明者の痕跡を探っていくことになりそう』

まあ、それは仕方ないだろう。救助員として向かうわけだし。

それに人工的な山窟だからさほどおもしろいものが見つかるとは思えない。

何か不思議なことが起きる噂も特にない。

よし。

それで行こう。

『言い忘れてたけど、問題が二つほど』

シユウの口調が真剣なものになる。

『一つは面倒ごと^ごに巻き込まれる可能性があるってこと』

もう十分巻き込まれてるし、ダンジョンに入れるなら別に問題ない。

『甘いなあ』

小声でぼそり。

それでももう一つの問題はなんだ？

『この冒険者の人混みを縫って行って、ギルドの人に「私は極限級冒険者のメルだが」って話をする必要があるってこと』

前を見れば冒険者がうじゃうじゃ。

最大の難関に違いなかった。

話はまとまった。

私が救助員として、他の搜索隊より先行してソロで探索に向かうこととなった。

話を切り出した当初はごちゃごちゃ揉めていたが、モルタリス側と通信したところトントン拍子で話が進んだ。

ロイエというモルタリス側のギルド長が国ともパイプを持っているようであつという間であつた。

珍しくシユウもロイエの手腕をなかなかやるもんだと褒めていた。

こいつが男を褒めるなんていつ以来だろうか。
ネクタリスのギーグだろうか……。

でも、あれは褒めていたというより不気味がっていたような。
さっそくデ克蘭山窟へギルド職員と赴く。

入口を守る兵士らにギルド職員が先の事情を話す。

渋々といった様子で道を開けた兵士の隙間を潜りダンジョンへ入る。

ようやくデ克蘭山窟の攻略が開始となった。

攻略と言っても中級ダンジョン。

状態異常や経路、モンスターの対策ができていれば初級。

まったく手こずることもなく、順調すぎるくらいに進んでいる。

すでに搜索対象の一日目と二日目のビバークの形跡を見つけてしまったほどだ。

『待った。右前方の壁』

言われた方に目を移すと、石壁に線上の傷がある。

『まだ新しい。この辺りから足並みが崩れてる。モンスターに襲われたんだ』

ぬかるんだ地面にいくつもの足跡がばらばらについている。

その足跡は、先ほどまでのものより深く、歩幅も大きくなっていた。

『ちようどボスも出てくる深度だからね』

ボスは三ツ目コウモリ。

名前の通り三つの目を持ち、歯には毒を持っている。

一番やつかいなのは特徴的な第三の目で、目を合わせれば軽い催眠効果にかかる。

暗闇の中に光るものを見つけたらボスの目であり、催眠状態に陥ることが多々あると話に聞く。

『モンスターの足跡がないから遭遇したのはボスみたいだね。逃げつつ後方の二人が応戦』

シユウの解説を聞きながら、足跡を追いかけていく。

『ここで一人が負傷』

黒ずんだ血玉の跡が点々と地面に続く。

『催眠にかかり、足下がふらついたところで、さらにかみつかれ毒が回る』

シユウの言うとおりに、一人分の足跡が蛇行している。

その後、歩幅がどんどん狭まっていく。

『薬に手を伸ばすも、毒の浸食とモンスターの攻勢に押され敢えなく脱落、と』

視線の先には、儂い光を纏う小瓶が転がっていた。

その隣には、かつて兵士であっただろう鎧を纏った肉塊が一つ。

『回収しといて』

シユウの声に従い、私は亡き兵士を見下ろす。

うーむ。冒険者なら冒険者証と剣などを遺品として回収するものだが、兵士の場合は剣だけでいいのだろうか？

『違う違う。回収するのは薬の瓶。兵士の遺品回収は後続の搜索隊がする』

薬を？

必要ないだろ。

状態異常は効かないだから。

『そりゃメル姐さんには必要ないよ。でも、毒に冒されてる人がいたら必要でしょ。もちろんメル姐さんが拙い口調で唱える魔法で治してもいいけど、薬の方が確実だしなにより速い』

呆れた声で返された。

これには私も無言で頷く他ない。

必要ないかもしれないけどね、シユウは小さくそう付け加えた。

その後、さらに一人の亡骸を見つけた。

『対策が不十分すぎる。この狭い道で長剣に、槍ときた』

たしかにひどいな。

死体の手前の壁には槍が突き刺さっていた。

コウモリを突き刺そうとして、外してしまったようだ。

『毒の対策も不十分』

死体の顔は毒が回り黒ずんでいた。

『体つきを見た感じだと人間相手ならそこそこ戦えるはず。元々は東の道に行く予定だったけど、通行止めでこつちに変更したってところかな』

少し待てば良かったものを。

祭りには遅れるかもしれないが、無事にたどり着けただろう。

『どうしても祭りに間に合わせる必要があったんだろうね』

やれやれだ。

まあ、こつちは他人の目を気にせずダンジョンが楽しめてありがたいんだが。

で、正直どうなんだ？

生きてそうか？

『ダンジョンに入ったのは五人。兵士四人と偉いのが一人。偉い人は足跡から見て女。魔法の痕跡がないから、戦える人間ではない。それで兵士二人は死亡。残る兵士一人もここで負傷』

言われて足下を見ると、またしても血痕がついていた。

『お偉いさんが生きてるかどうかは、兵士が生きてるかどうかにかかってる』

そりや兵士が死ねば戦えないから、偉い奴も死ぬだろうな。

『逆。兵士が死ねば偉い奴が助かる可能性は上がる』

は？

なんで？

『スポットが異常に多いから』

ダンジョン内はなぜかモンスターが襲ってこない安全地帯のようなものが存在する。

多くの人間が挑んでいるダンジョンでは、そういった場所がよく知られている。

それに見つけた場合はギルドに報告すると、多額の報酬をもらえる。

呼び方はスポットやらゾーン、安全地帯と様々ある。

なんらかの印がつけてあることも多い。

言ってみれば、たしかにこのダンジョンは多い。

ここまでたどり着く途中に、何度もスポットの印を見かけた。

兵士らの三日目と四日目のビバークにもあったはずだ。

『まあ、南方からの最短ルートで、たくさんの人が挑んでるからなのかもしれないけど、この多さは疑問だね』

ギルドからそんな話は聞いていない。

みんな知っていて当然だから話をしなかったただけなのかもしれない。

『ギルドの地図にないところもあった。魔術ギルドか……』

ああ、そうかもしれないな。

魔術ギルドの本部はモルタリスにあると聞く。

あいつら、こういうところを探すのがかなり上手いって話だ。

それに冒険者ギルドとあまり仲がよくないから見つけても知らせないだろう。

それで、なんで兵士が死ぬと、偉い奴が助かる可能性が上がるんだ。

『兵士が死ねば、戦えない偉い人は足を止めるしかない。スポットが多いからそこでジツとしてくれれば生き残る可能性は高い』

なるほど。

でも、まあ、正直なところ全員死んでくれた方が楽ではある。

『生きてたら、救護隊を待つか、出口まで送らないといけないしね』

待つのは退屈だから、出口まで送るだろうな。

……生死に関わらず。

そして、三体目の遺体が見つかった。

残るは兵士一人とお偉いさん一人だ。

追う足跡も減っていき、ちよつと寂しさを感じる。

『おおつと！ 残る兵士一人もまさかの負傷ッ！』

シュウは楽しげである。

『ここで道を逸れる！ 脇道に逃げるもモンスターがそれを許さないッ！ ついにお偉いさんも負傷！ そして、二手に分かれた……』

おい、急にトーンをおとすなよ。

なんか不気味じゃないか。

『右の方に行つて』

明らかな血が残る左の道を見無視して、右手へ進む。
小さな血の粒がところどころに見える。

途中、何かに躓いた。

『松明を落として、視界を失つた』

私はチートで普通以上に見えるが、火も魔法もなければ真っ暗だろう。

『這いつくばりつつ手探りで移動。火を失つてよかつたかもしれない。雑魚のコウモリ以外は灯りと音で追ってくるし』

……雑魚のコウモリは何で追ってくるの？

『エコーロケーション……つて言つてもわからないよね。自分で出した音の反射を使つてる』

よくわからんけどすごいな。

『あつ、いたよ。』

前から飛んでくるボスをシュウで軽く消し去ると、シュウが声をあげる。

道の奥の方に倒れ込んでいる人間を見つけた。

『まだ生きてるね。スポットに入ることができたみたいだね』

体がわずかに動いていることから生きていることは私にもわかつた。

『げえ……』

おい、声が出せるか。

返事はない。目をうつすら開くもまたすぐ閉じた。

どんなお婆さんかと思つたが、どうやらかなり若い。

汚れてはいるが、顔に皺はなくむしろ瑞々しい。

というか、少女だ。私よりもやや年下だろう。

はて？

お偉いさんですごい衣装を着ていると思つていたがかなりみすばらしい。

そのへんの町娘が着ていそうな服と同レベルかちよつと下だ。

目に見えるアクセサリもネックレスだけときた。

死んでいるなら引きずって運ぶつもりだったが、生きているなら処置はしよう。

目の前で死なれても、気分ばかり悪くなるというものだ。

おい、シユウ。

発情してる場合じゃないぞ。どうすればいい。

『髪の色が、緑なんだけど……』

少女を見直すと確かに緑だった。

それで？

『いや、だから、髪の色がね……うう。怪我は浅いから、とりあえず解毒。さつき拾った薬』

先に拾った瓶の栓を開け、少女の口にゆつくりと付けて傾ける。

『ゆつくりね。はい、それで十分。次に体力回復増進薬』

腰の袋から青い液体の入った瓶を取り出し、続けて少女の口に付けて嚥下させる。

『パーティーリングを付けてパーティー登録。それでモンスターを倒せば、怪我もすぐ治る』

パーティー登録は済ませたが、近くのモンスターは狩り尽くしてしまっている。

『背負って移動するしかないね。ゆつくり背負ってあげて』

能力プラスを得ているため、少女一人を背負うことに重さの問題はない。

落とさないよう片手を支えることに使ってしまうのが問題なくらいだ。

『あんまり激しく動かないでね。疲れてる体に負荷がかかるから。まあ、敵も弱いから大丈夫でしょう』

シユウの言うとおり問題はない。

片手でも余裕でモンスターは消し去れる。

かすただけで断末魔すらなく消え去り、アイテムを残す有様だ。念のため戻って確認したが最後の兵士はすでに事切れていた。

特に問題もなく王都側の出口へと向かっていく。
もうじき山窟の出口だということだ。

時間はもう深夜だろうか。

背負った少女の意識はまだ戻っていない。

知りたいとも思わないが、未だに名前さえ知らない。

なんにせよ、さっさとダンジョンを出て休ませるべきだろう。

『おっ、おいでなすったね』

前方を見ると、天井からたくさん目の目が私を見つめている。

一人なら問題ないが、荷物を背負いかつ無茶すると言われるとき
つい。

私はそこまで器用ではない。

仕方ない、いったんおろすか。

『必要ない。でも、構えという』

道の奥の光源から一際煌めく光源が一、二、……六つ？

『七つ』

光源は急激に近づき、私へ襲いかかろうとするコウモリの背中に激
突した。

光源は炎の塊だった。

炎の一つが私にも向かってきたのでシユウで弾く。

逸れて壁にぶつかった炎が白く散り、ひりひりする熱風を浴びせて
くる。

『無詠唱……？ いや、既書並文による詠唱破棄からの炎弾七連。し
かも追尾の効果も仕込んでる。やるもんだなあ』

シユウはヒューと口笛を吹き、褒め称える。

「止まれ」

男の低い声が私に制止を命ずる。

命じた男とそれに従う二人が私の方へと歩いてくる。

「俺は、冒険者ギルド・モルタリス支部のギルド長——ロイエ。そちら
は何者か？」

男は堂々と名乗る。

背はちょうど他の二人の中間だがそれでも高い。左の男が高すぎ

るだけだろう。

髪は刈り上げ、口元には立派なひげをたくわえている。

ロイエと言えば、ギルドで聞いた名だ。

モルタリス支部のギルド長と言ったから間違いないだろう。

『……強い』

ああ、いかにも前衛の戦士って感じだな。

『違う、そいつはそこそこ。強いのは後ろの二人。何者だ』

珍しくおちやらけ成分が消えている。

なに、そんなに強いのか。

片方は魔法使いで間違いない。先ほど私に炎弾を撃ってきたほうだろう。

もう片方はかなり変わった装備だ。両手に大小違うサイズの盾を付けている。

はて？ どこかで聞き覚えがあるような……。

「何者か？」

おっと、とりあえず名乗っておこう。

メルだ。

冒険者をしている。

デ克蘭支部から先行して救助に向かった。

背負ってるのが、例の遭難者だ。他の兵士は死んでた。

「……先行したのは、今朝のはずだが？」

少し沈黙したあと、質問が飛んできた。

ん？

そうだな。今朝だった。

『早すぎたから訝しがられてるんだ』

ああ、そうか。

かなり急いだからな。

実質初級くらいならこんなもんだらう。

「ロイエさん。彼女も極限級です。しかもソロでダンジョン攻略を専門にしていると聞いてます。これくらい訝しがることではありませんよ」

魔法使いと思われる女性がロイエに優しく声をかける。

両盾の異様に背が高い男も無言で頷き女性の言に賛同した。

『なるほど。「彼女も」ってことは、この二人が極限級冒険者「悠久の紙片」の一員か』

えっ、悠久の紙片！

魔法使いに両盾つてことはまさか、符片のリベルと双盾ガレア!?

えっ、嘘？ 本物？ 他の二人は？

霊弓のティポタと穿天のセラスもいるの？

『ちよつと落ち着いてよ。ミーハー姐さん』

馬鹿野郎！

これが落ち着いていられるか！

本物だぞ！ 本物の極限級冒険者「悠久の紙片」だぞ！

世界に三組しかない極限級冒険者なんだぞ！

私を抜けば実質二組！ 冒険者の頂点！

絶対サインはもらわなくちゃ。

握手もしてもらおう。

「ロイエさんそろそろ戻りませんか？」

憧れのリベルがロイエに声をかける。

「そうだな。メル殿、その娘は私が預かろう。紙片のお二人は前衛、メル殿は後衛を頼みたい」

一番弱い人間が荷物を背負う。妥当な判断だ。

やっばい、あの悠久の紙片と一緒に戦うとか冒険者冥利につきるってもんだ。

「なっ……」

ロイエが私に近づき、背負っていた少女の顔を見たとき彼の足が止まった。

堂々とした顔つきに初めて戸惑いが浮かんだ。

どうかしたのか？

「いや……、少しな……」

先ほどの様子と比べると、少しとは思えない狼狽だが気にしても仕方ない。

「リスイ様……う？」

高い声がして一瞬誰の声だと思ったらガレアの声だったようだ。リベルがガレアを驚いて見て、その後、私の背負う少女を見てさらに驚いた。

「まあ、ほんと瓜二つ。この髪の色といい顔立ちといい」

リベルも近づいて、私が背負う少女の顔を見つめる。

やめて。それ以上近づかないで、緊張して私がどうにかなりそう
だ。

「とにかく今は早く戻ろう」

改めてロイエが提案する。

他の二人も首を縦に振り、私も断る理由がない。

そのままロイエに少女を引き渡し、山窟の出口へと向かう。

紙片の二人と一緒に戦えることに緊張をしまい、そこから先のことをよく覚えていない。

あまり記憶もないままデ克蘭山窟を通過した。

さて王都モルタリスに到着したものの深夜である。

祭りの準備のため多少騒がしいこともあるが、基本的に静かな夜だ。

深夜で宿が取れるはずもなくどうしようか困っていたところ、

「良いところを紹介しよう」

ロイエからの助け船があり、共に歩いて宿へ向かう。

紙片の二人はすでに宿へ戻ってしまったようで、つまらない深夜の散歩だ。

「……あの娘は、何か話してたか」

かなり歩いてから、独り言のようにロイエが口に出した。

いや、一言も話をしていない。

あの少女は結局どういう身分の人間なんだ？

「わからない……。だが、よく似ていた」

ああ、誰だったわけ？

『リスイ』

そう、それだ。

リスイとかいう人にそっくりなんだっけ。

どういう人なんだ？

聞き返したものの返答はなく、夜の王都に二つの足音だけが響く。

案内された先には立派な建造物があった。

メインストリートをひたすらまっすぐ行くだけで迷う心配もない道だ。

目の前にはやたら大きな門。

その横に人が一人入れる門があり、そこから入った。

警備の兵もロイエが話すとあっさり門を開いてしまったのだっ
た。

門を超えると、広々とした通路、その先にはこれまた縦にも横にも
長い建造物。

……というか城だった。

町の外からでも見えていた城。

たぶん王城ってやつだよ、これ。

ロイエの顔パスで城の入口も通る。

入ると見渡せるほどに広いロビー。

なんなの、こんな広い空間が必要なの？

ここでボス戦でも始められるって言うの？

駆け寄ってきた兵士にロイエが説明すると兵士はビシツと決まっ
た型で返す。

「ご案内致します。どうぞこちらへ」

案内された部屋はやはり無駄に広いものだった。

「どうぞゆっくりお過ごしください」

無理だ……。

「何かあれば、遠慮無くお呼びつけください」

さっそくだが帰っていいか？

「失礼致します」

一礼して静かに扉を閉め去ってしまった。

困った。

『汚い私がいかにきれいな部屋で寝られる訳がない』

蹴ってやろうかと思ったが、なんか壊したらいろいろとまずい。

ひとまず落ち着いてベッドに腰掛ける。

やわらっ！

なんだこれは。

今まで高い宿に泊まったことはあるがここまで柔らかいベッドはなかった。

やばいな、これじゃ緊張して眠れない。

うーむ、とりあえず横になるか。

2. アルヒ祭の前日：旧書館アデイス

気づいたら朝だった。

……あれ、いつ寝たんだらう。

『「眠れないが、横になるか」って言った後、二十秒経たずに寝てた』
うーん、腰があまりよくない。

柔らかすぎるというのも考えものだな。

よし、朝飯食べてダンジョンへ行こう。

さて、モルタリスの近辺にはダンジョンが四つある。

一つ目は昨日、通ったデ克蘭山窟。

二つ目は、旧書館アデイスで初心者クラス。

三つ目は、クバーレ湿原で初級クラス。

四つ目は、跨幻橋。パンタシアでランク外。

四つ目の跨幻橋。パンタシアは国が管理しているためすぐに挑むことはできない。

正式に測れないためランク外ではあるが、極限級と噂されている。事情が事情のため、挑むにはたかさんの手続きが必要だ。

とりあえず跨幻橋は後回しにして、近場から攻略していく。

まずは旧書館アデイスだ。

まず文句なしの初心者クラス。

危険性がほぼ皆無なダンジョンだ。クリア自体もやり方さえ知っていれば楽勝と聞く。

初回クリアのみドロップがあるものの、それ以外は何も手に入らない。

というよりもボスはいるが、雑魚はいない。

正確にはいるが基本的に出てこない

ボスも倒す必要がまるでない。

元は大昔の国王が外敵から、国の重要書物を守るため防御機構を組み込んだ図書館だ。

かつての大魔法使いが魔法の粋の粋を込めてこの防御機構を作ったらしい。

その結果、図書館が自ら学習し外敵を排除するようになった。

どうなったか？

誰も入れなくなってしまった。

作った魔法使いですら外敵と見なされ入れない。

ようやく入ることができたのは、かの国王と魔法使いが死んでからだった。

入れたのも特別な手段を用いたのではなく、図書館が外敵についての概念を学習したためだったという。

要するにだ。

外敵と見なされないように入れば簡単にボスまでたどり着けてしまう。

しかも、そのボスは倒さなくても、ちよつと話を済ませばアイテムをくれる。

ダンジョンと言えるようなものではないが、重要書物との兼ね合いもありダンジョンにしているらしい。

冒険者じゃなくても一度、誰かと一緒に入ってアイテムをもらえば一人で入れるというぬるさ。

まあ、ドロップアイテムが入館証だしな。

正直に言くと、あまり行く気がしない。

昔から図書館という奴はどうも好きになれん。

しかし、ダンジョンと呼ばれるからには行かねばならないだろう。

あまり乗り気がしないまま歩いていると、壁に絵が描かれていた。なんだこれ？

赤と青、黄色でぐちゃぐちゃつとよくわからない模様が描かれている。

王都の壁にでかでかと描かれているくらいだ、高名な画家が描いたものに違いない。

『へえ、これはなかなか……』

シユウも意味ありげな声を漏らす。

絵の素養があれば、良さがわかるのかもしれないがあいにく微塵もなかった。

気づけば隣に誰かが立っている。

金髪で耳が尖っているからエルフだろう。

思わず記憶の中の誰かに似ていると思ったがこちらは男性だ。

それに背中に大きな弓を背負っている。彼女は杖だったような気がする。

彼女の名は果たしてなんと叫びたか……。

「どう思う？」

記憶をさまよっていると、金髪エルフは壁の絵を指さして尋ねてきた。

どうと言われても困るんだが、もしかして絵の作者だろうか？

よくわからんけど、適当に褒めておこう。

素晴らしい絵だな。

「どこがそう思う？」

ええ……、そんなの私が聞きたいよ。

この複雑極まるラインが素晴らしい。

色使いも鮮やかで独創的だ。特に青が目に残るな。

私とは思えないくらい流暢に発言できたと思う。

「……この落書きを、そう見る人間もいるのか。なるほどな」
エルフはふむふむと頷いて歩き去ってしまった。

……恥ずかしい。

未だかつてないほど恥ずかしい。

なんで私はあんなことを言ってしまったのか。

思った通りに、「さっぱりわからん。でたらめだな」

そう言えば良かったのに………。

いつそ笑ってくれればいいのに、笑いを噛み殺そうとしているシユウが余計に腹立たしい。

『良い線、いったたと思うよ』

そう言うと、声をあげて笑い始めた。

むかついたので落書きに突き刺してやった。

むしゃくしゃしながら旧書館アデイスに到着した。

王都の外れのためあつという間だ。

入口を通ったところで先ほどのエルフに会った。

勢いよく扉を開けたため、向こうも振り向いて目が合った。

先ほどの出来事を思い出して赤面してしまう。

『逆にあの落書きについて尋ねてみて』

お前はこれ以上、私に恥をかかせるつもりか？

『いや、真面目な話。ちょっと聞いてみてよ』

あの落書きについてどう思う？

渋々ながらも尋ねてみた。

「あの落書き——に類似したモノは、王都の至る所に描かれている。消しても消してもまた描かれる。キリがないから逆に落書きではなく、流行りのアートとして飾っている風潮だがどうにも様子がおかしい」

考え深げにゆっくりと話し出す。

『誰が描いていると思う？』

誰が描いてるんだ？

「流行ってからは、いろいろな人間が描いているだろう。しかし、描き初めがわからない。複雑な絵柄だが、微妙に違っている。自分は、単

「独犯ではない、と考えている」

「よくもまあ、そんなことを考えるものだ。」

「今日の夜飯を何にするか考えた方がよほど有益だろうに。」

『何が描かれているか聞いてみて?』

「あの絵は結局何なんだ?」

「最初はただの落書きだと思っていた。だが、貴方が言うように美術的な側面もあるのかもしれない。もしくは別の意味あるのか」

「そう言っつて、また考え込む。」

『描かれてる場所を調べた?』

「どこに描かれてるか調べたか?」

「……いや、まだだ。今日はその件を含め、知り合いと、ここで落ち合う予定だった」

「あつ、そう。」

「邪魔してしまったな。」

「かまわない。予定の時間よりも、かなり早めに来てしまった」

『最後の質問。あれは何で描かれてる?』

「これで最後だ。あれは何で描かれてる?」

「質問の意図がよくわからないので、そのまま伝える。」

「エルフは静かに私を見つめてくる。」

「……それより貴方はその姿で入るのか?」

「思い出したようにエルフが聞いてくる。」

「私も思い出した。」

「こんなところで立ち話をしに来たわけではない。」

「ダンジョンに挑みに来たのだ。」

「エルフの横を歩むと、けたたましい警報が鳴った。」

「警告! 警告! 図書館への武器の携行は認められません!」

「同じ台詞がもう一度流れる。」

「周囲の視線が私に突き刺さる。」

「……あれ、もしかして私か?」

『まあ、俺だよ。剥き出しだし』

「無視するとどうなるんだろう。」

そのまま警告を無視して突き進む。

“対象を外敵と判定！ 排除します！”

おもしろくなってきたな。

『来いよ、アデイス。本なんて捨ててかかってこい』

そうだ！

やれるものならやってみろ！

奥の扉になにやら凶形が浮かび上がる。

『あ、まずい』

なにが？ と聞き返す必要もなかった。

魔法陣が緑色に光り、直後に突風が吹いたのだ。

前に進むどころか、立つことすらも、うおっ飛ぶっ。

そのまま飛ばされ、入口も飛び超えて勢いよく外に投げ出される。

来たときはむしゃくしゃやしていて気づかなかったが、入口の横に武

器預かり所があった。

なるほど、そういうことか。武器を預けないと入れないと。

預けて入るのもいいが、それでは負けた気がする。

というか、あの凶形はなんだったんだ。

『魔法陣だね。詠唱を凶形に押し込めて魔力を流して発動させてる。

詠唱が要らないんだよね』

そんな便利なものがあるのか。

『便利？ まさか。あれ一回発動するともう使えない。もっかい書き

直し。しかも、凶形がずれると発動しないし』

めんどくさいな。

でも、一回発動すると消えるんなら、次は発動できないんじゃないか。

『いや。おそろく魔法陣の凶形を記憶させる魔法を使って呼び出してる。それをこっちの行動パターンに応じて使ってきてるね。かなり高度なラーニング』

なるほど、わからん。

入口の近くに立ち、走る準備をする。

警報が鳴るちよつと前に立ち、一気に走ればなんとかなるだろう。

『それくらいやってる人はいると思うよ』

私がやればどうなるかわからないだろう。

『オチが見えた』

入口の横には先ほどのエルフが顎に手を付けてなにやら考えている。

あまり私のやっていることに興味はない様子だ。

周囲も生暖かい目で私を見ている。

よし。

行くぞ！

第一歩目を踏み出せなかった。

床が消えてしまった。

その勢いのまま穴に落ちる。

暗い穴を右に左に転がされ、ようやく明かりが見えたと思ったら地面に転がされた。

見渡せば図書館の入口横だった。

どうということ？

『入る前から、顔を認識されて危険人物だって判断されてる。武器も携行してたから、床が消える魔法陣を用意してたんでしよう。今度からは武器を持つてる限り床を落とされて終わりだね』

なにそれ？

反則だろ。どうすりゃいいんだ。

『複数人で一斉に行動して向こうの計算処理を重くする』

あいにくソロだ。

金髪エルフはずっと考えっぱなしで手伝ってくれそうにない。

『まあ、それくらい過去に何度もやってるだろうから無駄だろうね。

——となれば、相手が学習してない手法で入る』

例えば？

『わからない。過去にいろんな方法が試されてるだろうからこれも難しい』

……あれ？

初心者クラスって舐めてたけど、このダンジョン、かなり難しくな

いか？

『できた頃ならまだしも、かなり学習してきてるだろうから滅茶苦茶難しいよ。超上級と比べても遜色ないと思う』

武器を離せば入れるのか？

『警戒はされるだろうけど、入れると思うよ』

だが、ダメだ。

それは攻略と言わないだろう。

全力を出した状態のダンジョンに勝ってこそその攻略だ。

それに一人で入ったところでもおもしろみもない。

『嬉しいことを言ってくれるじゃないの。やっと俺を人生の伴侶として認めて——』

いや、お前はただの相棒だから。

『まあ、それなら俺も全力でやらせて頂くとしようか。見せてやるよ世界を歪めるチートの力を！』

そんな訳でまたしてもスタート地点に立った。

で、具体的にはどうするんだ？

無敵スキルは意味ないだろ？

床を抜かれたら落ちるし。

『黒竜を倒したときに手に入れたスキルが有効かな』

おお、あれか。

そう言えば、まともに使う機会がなかった。

『制限時間と視線に気をつけてね！ それじゃあ、カウントダウン開始！』

3！

シユウの薄黒い刀身が黒ずむ。

2！

刀身はますます黒ずんでいく。

全てを飲み込んでしまいそうなほどの漆黒だ。

1！

そろそろ目を逸らしておく必要がある。

最初に使ったときは刀身を見つめて視界が点になり焦ったものだ

ゼロという合図と共に地面を蹴る。

全力で図書館のロビーを走り抜けていく。

床も落ちていないし、魔法陣も描かれていない。

黒竜撃破の取得スキルは吸収だ。

あらゆる攻撃・魔力を飲み込みなくしてしまう。

この図書館の防御機構が魔法で構成されているなら、このスキルは天敵となるだろう。

そして、実際にロビーを超えて私は図書館に入った。

開けられた扉に驚いた人間がこちらを見るが、おそらくスキルの影響でまともに見ることはできないだろう。

話に聞いていたボスモンスターがカウンターに突っ立っているのが見える。

そちらに向けて全力で走り抜ける。

問題は間に合うかどうかだ。

このスキルは強力な分、効果時間が短い。

せいぜい三秒と言ったところか。

『効果切れたっ！』

ボスモンスター——司書アイ君の周囲に、膨大な数の魔法陣が浮かび上がる。

私とは言えば、少なくとも膨大な魔法陣が見えるくらいの距離が開いていた。

くそつたれ、間に合わないかつ……。

周囲の魔法陣が一斉に光り出す。

だが、発動はしなかった。

私の後ろから何かが無数に飛んできて魔法陣が全て消し去られる。

『おおう……』

シユウも何か変な声を漏らしている。

何が起こったのかはわからないが、振り向きはしない。

勢いのままカウンターの前まで突っ走り、シユウを構える

司書アイ君が自分を守るように魔法陣を張る。

遅いっ！

描かれた魔法陣ごとシユウで突き刺した。

手応えはないが、魔法陣からは何も発動しない。

周囲に再度展開されていた魔法陣も砂が崩れるように消えていく。残ったのは小さく光るアイテム結晶。

さっそく手にとつてのぞき見る。

——みんなの魔法陣 第五版（アイ君のサイン入り）

……本か、いらね。特にサイン。

『いやいやいやいや！ 確かにサインは不要だけど、これ滅茶苦茶すごいよ！ 禁書指定される代物！』

そうかあ？

なんかもつとわかりやすすぎいものが良かった。

まあ、特殊ドロップも手に入れたし、クリアもできたので万々歳としよう。

しかし、ぎりぎりだったな。あの大量の魔法陣に……そうだ。

急に魔法陣が全て消え去ったが、あれはなんだったんだ。

『後ろ』

振り向くと金髪エルフが立っていた。

「見事だ」

ん、もしかして。

『この人がやってくれた』

そうか。

さっきのはあんたがやってくれたのか。

なんかでかい弓も背中にしよつていたしな。

今は持っていないようだが、預けてしまったのかな。

助かった。いや、ほんとに。

あの援護がなければ、クリアはできなかった。

矢を使ってしまったならいいやつを買って返すぞ。

「不要だ」

『だろうね。弓すら不要なんだから』

いや、弓すら要らないってことはないだろ。

私は笑ったが、シユウは笑わなかった。

「最初、走ったときに、使っていた魔法……いや、術技？ あれはなんだ？」

一瞬、返答に窮するが正直に答える。
あれはチートだ。

「チイトか。聞いたことがない術技だ」
ゆっくりと首を縦に振る。

「その術技は——」
「騒がしいが、何事か」

金髪エルフの台詞を切って、一人の男性が図書館に入ってくる。
細い体型に鋭い目つき、銀色の長い髪が冷たい雰囲気醸し出していた。

「司書アイ君を彼女が倒した。名前は……、まだ聞いていない」

金髪エルフが私を紹介しようとしたが途中で躓いた。

そう言えば、まだ名乗ってなかった気がする。

メルだ。

冒険者をやっている。

「図書館で剣を振るって得意顔をするのは冒険者しかいないでしょう」

抑揚のない声で言われて、中身を吟味するのに時間がかかった。

「私はレゾン。モルタリスの魔術師ギルドの長を務めています」

これまた、抑揚のない自己紹介である。

ん……？ モルタリスの魔術師ギルドの長ってことは魔術師ギルドのトップか。

「そんなことはどうでもいいことです。特殊ドロップはあったのですか？」

なんだろう。

ものすごくイライラする。

シユウとは違う方向の苛立ちを覚える。

金髪のエルフも私を見て来るので、仕方なくドロップを見せる。

「なんと……」

「素晴らしい」

どちらも感嘆の台詞のはずなのに。

声に抑揚もなく、表情も変わらないためほんとにそう思っているのか疑わしい。

「これをどうするつもりですか？」

……さて、どうしよう。

いつもどおり、冒険者ギルドで換金してもらおうかな。

「やめておきなさい。お金で売ったものは、お金で買われます。この本に書かれていることは安易に売買されるべきものではない」

では、あんたにやれと言うのか。

「そうは言っていません」

軽く嘆息しながら述べる。

「書いてある情報に相応しい管理の仕方をすべきという話です」

じゃあ、どうしろと。

『金髪エルフにあげればいい。彼の協力がないと手に入らなかったんだし。それにリアル名人伝を見せてもらった分でお釣りが来る』

なんか後半はよくわからんが、どうせ卑猥なことだろう。

……まあ、こつちに渡すなら。

『どつちみち、レゾンに渡すと思うけどね』

でも、結果的にこいつに渡るとなると……。

『魔術師ギルドの活動を見る限り、彼らは魔術の探究とそれによる暮らしの改善に徹してる。それはトップの教えがきっちり守られてる証拠。言い換えれば、トップが公明正大な意志を持って裁決をおこなう、かつ実行している証拠でもある』

いや、そういうことじゃなくてだな。

なんか納得いかない。

『感情的だね』

シユウはくすりと笑う。

馬鹿にしている……いや、違うな。微笑ましく思っている？

誰をだ……まさか、私を？

『言い方に難はあるとしても、中身は間違っていない。逆よりはよほど好感を抱くね』

そこまで言われては仕方ない。
息を大きく吐いて、アイテム結晶を金髪エルフに伸ばす。
やる。

「感謝する」

金髪エルフは頭をキチツと下げて礼を述べる。

その後、考えこみつつ見つめてくる。

何か？

「弟子のことを、思い出していた」

弟子？

あんたの弟子ならさぞ弓が上手いんだろうな。

「弟子は弓を捨てた」

えっ？

「魔法に専心している」

あらら。

じゃあもう弟子じゃないのか。

「いや、弟子だ。一つの物事に徹し究めようとするなら、私の教えから
何一つ逸れてはいない」

……で、それが私と何の関係があるんだ？

「貴方といれば、きつと気づくのではないかと考えた。魔法があるの
は書の中ではない、と」

……よくわからんのだが。

『おっと、そろそろ時間かな。その人に伝えといて、召喚型の第三――
世界系、変異項あたりを調べろって』

シユウの言ったとおり伝えると金髪エルフはしかと頷いた。

……そういや、あんたの名前を聞いてなかったな。

金髪エルフは一瞬記憶を巡っていたが、記憶にないと悟り、自らの
名を口にした。

「ティポタ」

自己紹介はそれだけだった。

飾り気がなくて良い……………えっ？

えっ!?

私の周囲におびただしい魔法陣が展開される。
カウンターを見れば司書アイ君が復活していた。

ちよつと、待っ——

言い終わるよりも先に床が消えて、私は落ちていった。

その後、どうやつても図書館には入れなかった。

完全に私を危険人物扱いし、立ち入り禁止にしまったようだ。

うわあ、マジかよお。

霊弓テイポタにアンタとか言ったし、タメ口も使っちゃったよ。

絶対、生意気な奴って思われてるよ。

『久々にワロタ』

何が久々だ。

お前いつつも笑ってるだろ。

どうせ気づいてたんだろうから、教えてくれれば良いのに。

『教えたらちゃんと話せなくなるでしょ』

それにしたってだ。

あー、もう嫌だ。鬱だ。お腹減った。

飯食って宿に戻って寝よう。

3. 黄昏時：王城にて

どうやら寝過ぎてしまったようだ。

外の様子を見るにもうじき日が暮れる。

ダンジョンへ行くには少し時間が遅すぎるな。

暇なので城内を散歩していた。

話は伝わっているようで、だいたいの場所は通れた。

それに前夜祭がまもなく始まるようで、城の人間も私にかまってい
る余裕はなさそうだ。

のそのそ歩いていると、どこからか音が聞こえた。

雑音ではなく、高い音できちんと旋律として響いてくる。

『この曲……』

シユウの眩きは気にせず音のする方へ向かう。

城を出て、広々とした庭園をさらに突っ切った先にその建物はあつ

た。

城ではない、神殿だろうか？

城ほどではないがこちらもそこそこに大きい。

城が堅牢さを表すのだとすると、こちらは静謐さだろうか。

大ききの割にどこか儂さと神秘的な印象がある。

それにまだ汚れが目立たず新しく見える。

ともあれ音の出所はここで間違いない。

兵士もいないので入ってみる。

重い扉を開けると、幾十にも重なった音が私を迎えた。

中はだだっぴろく、入口からまっすぐ奥まで通路が延びている。

その通路の左右には無数の長いすが正面を向くように整列していた。

音の正体は最奥にあった。

奥の壁には金属の棒が無数に建っている。

そして、その床の近くには人一人が座れる台座。

『パイプオルガン。楽器だね』

なるほど、こんなでかい楽器があるのか。

どこで演奏しているんだろうか。

曲を邪魔するのを極力控えるため小声で話す。

『いや、演奏は正面の席で弾くはず』

もう一度、正面を見るが椅子には誰も座っていない。

いないけど……？

『魔力を感じるから、自動演奏でもさせてるのかも』

ふーん、便利なものだな。

『儀式で使われる施設なのかと思っただけど趣が違うね』

……というと？

『普通、演奏席は横か後ろにつける。あくまで演奏は場の演出で正面はメインのイベントを執り行うために。でも、ここは——』

ああ、正面についているな。

観客席もそちらを向くように傾きがついている。

『コンサートホールだね。パイプオルガンの演奏を見て聴いて楽しむ

ための施設だ』

建てた奴はよほどの楽器が好きだったんだな。

『さて、パイプオルガンが好きだったのかは微妙なところだね。……
やっぱり面倒ごとか』

最後は小声でよくわからなかった

いつまでも立っているのもあれなので前の方へ歩いていく。

楽器の迫力に押されて意識していなかったがぼつぼつ人が座っていた。

中段の左隅におっさんが一人。

後方の二人は……あつ！

この前会ったから間違いない！

符片のリベルと双盾のガレアだ！

なんとという偶然！ しかもリベルはこちらに気づいて手を振ってくれた！

しかし、この二人に近づく勇気が私にはない。二人とも黙って音楽に聴き入ってしまったし。

あと一人、前列の通路沿いにいるな……。

おや。

すぐに誰かわかった。

きれいな緑髪が見えているため後ろ姿で判断がついた。

名前も知らないし、話してすらいないため声もわからないが……。

『やめよう。これ以上この娘と関わり合いたくない。嫌な予感しかない』

気になって近づこうとしたらシユウがぼやいた。

私の足は止まらない。こいつの場合はただ緑髪にトラウマがあるだけだ。

足音に気づいて、少女がこちらを振り向いた。

前は汚れていたが、今はすっかり顔も服装もきれいになっている。

どうやら私が誰かわからない様子だ。

隣に座るのも憚られたので、通路を挟んで向かいの椅子に腰掛ける。

体調は、もう大丈夫なのか？

「……その声」

少女は少し警戒したものの、何かに気づいた様子で私を見据える。「あの、もしかして私を助けてくださったという方ですか？」

そうなるかな。

「失礼しました。このたびは本当に——」

気にしなくていい。

私はダンジョンに潜りたかっただけだからな。

そのついでみたいなものだ。お礼はギルドから十分にもらっているから不要だ。

「……そうですか。あ、私はフリージアといいます」

お礼を重ねるとかえってこちらが嫌になることをわかってくれたようである。

フリージアはそれ以上何も言わなかった。

私はメルだ。

「……もう一人の方はどちらに？」

いや、私はソロだ。

「え？ 男の方がおられませんでしたか？」

『ほら、パーティー登録してたから』

ああ……いや、空耳だろう。

「そうでしたか。でも、なんだか懐かしい気がしてたんですん？」

「昔、誰かに背負われてあの道を通ったような……。私は泣いていて、誰か男の人があやしてくれた、そんなおぼろげな記憶があるんです」
他の記憶と何か混ざってしまったてるんじゃないか。

子供のときの記憶は曖昧だからな。

『だね。メル姐さんも小さいときに、友達と遊んだ記憶があるって話してたけど怪しいもんだ』

いや、待て。

私にだって友達の一人や二人はいる。

『へえ、名前は？』

……あれ、なんだっけ？
ちよつと思ひ出せない。

『じゃあ、顔は？』

はつきりとは覚えていないが、ぼんやり浮かぶぞ。

『そう、なら声は？』

高かったような……。

『性別は？』

……男か女。

『あつそう、最後。触ったことは？』

……あれ、いや、あれ？

『その友人はメル姐さんの心が作り出した幻想では？』

なぜだ。

遊んだ記憶は確かにある。

それ以外の記憶が何一つ思ひ出せない。

いや、うん、でも子供のときの記憶なんてこんなものだろ。

『治療の第一歩は自分が病気だと認めるところからです。まあ、真面

目な話、それはイマジナリーフレンドだから大丈夫でしょう』

よくわからんけど、私の思ひ出は大丈夫じゃない気がする。

「あの、どうして私はここに連れてこられたんでしょうか？」

……え？

フリージアはお偉いさんで、祭りに参加するためだったんじゃないの？

「いえ。私はただの庶民です。おじさんもおばさんも同じです」

まあ、服装がそんな感じだったもんな。

おじさん、おばさん？ 両親は？

『まあ、デリカシーのないことを……』

「私がまだ幼いころに亡くなったと聞いています」

ああ、すまん。

「いえ、おじさんもおばさんもとてもいい人ですから」

フリージアはにこやかに答える。

おそらく作った笑顔ではないだろう。

連れて来られた理由ね……。

あれかな？

誰だったっけ？

誰かに似てるって話してたんだが。

「リスイ様ね」

唐突な後ろからの声に驚き、さらにその声がリベルのものともわかりさらに驚く。

リベルの隣にはガレアも立って、こくこくと頷く。

「リスイ、様？」

フリージアは首を傾げて私を見る。

私も知らないため首を振る。

「リスイ第一王妃。ソレダー王の正妃」

あれ？

たしか今は違う人だよな。

「ええ。十八年前に逝去されたわ。今のピウス王妃は第二王妃で、アヴラ王子もピウス王妃の嫡男ね」

ぽわぽわとリベルが答える。

なごむわあ……。

さすが羊人族だけあってこののんびり感は半端じゃない。

いるだけで空気をなごませ、喋れば心は穏やかに、戦う姿は凛々しく優雅。

さすが極限級冒険者、符片のリベルだなあ。

「えっと、私がそのリスイ第一王妃に似てるんですか？」

リベルは小さく頷く。

その横で大きな凶体のガレアも無言で何度も頷いている。

その目は軽く潤んでいた。

犀人族は基本的に凶体が大きいが温厚な人物が多い。大ききこそあれど威圧感はない。安心感のみが伝わってくる。

「今流れてるこの曲。リスイ様が作曲されたの」

リベルは、フリージアから目を逸らし正面の演奏席に目を向ける。

「ここがリスイ様のために建てられたようなもの」

一人のために、わざわざこんな施設を建てたのか……。

「誰も文句なんて言わなかった。それくらい素晴らしい演奏だったから。……いえ、レゾンだけ言ってたかしら」

レゾンってあの苛つく奴か

どうしてそこであの男の名前が出てくる。

「あら。レゾンとはもう会ったの？ ソレダー王と冒険者ギルド長のロイエ、今言ったレゾン、それにリスイ様は冒険者をしてたのよ」
えっ？

王様が冒険者？

「ええ。王位の継承権が十三位と低かったから好き勝手に振る舞ってたんだけど、他の人たちがみんなぼくぼく死んじゃってね」

『ぼくぼくって……』

なんかすごく黒い話を軽く流した気がする。

「四人で『銀色の旋律』ってパーティを組んで活動しててね。上級までいったかしら。その頃に知り合ったの」

そこからリベルの昔話は止まらなかった。

ガレアも途中で泣き出して、リベルの話に相打ちする。

正直、もうどうでもよかったのだが、この二人を相手にもうやめろという言うこともできない。

「リスイ様のことはわかったのですが、私とリスイ様にいったいどんな関係が？ それにどうして私はここに連れて来られたんでしょう」
リベルの話の合間に、見事、フリージアが質問を差し込んだ。

「どんな関係かはわからない。リスイ様は死産なされたって話だから……。でも、無関係とも思えない。こんなに演奏が活発なのだし」

……ここの演奏がなんか関係あるのか？

「この演奏、誰も魔法を使っていないの」
はい？

でも、誰かが魔法を使って演奏させてるんじゃない。

リベルはゆっくり首を横に振る。

「リスイ様の演奏は魅力的、いえ、魔力的だった。誰もがその音色に、旋律に引き込まれた。私を始め、ガレア、ソレダー王、ロイエ——そ

して、この音楽堂すらさえも」

『さすが神のお気に入り……。メル姐さん、どうして優秀な芸術家が得てして早死にするか知ってる？ 神の御許に喚ばれるからさ。まあ、それなら確実に死んでるね。いやあ、めでたしめでたし』

なんかシユウは勝手に安堵している。

……。ということは、この音楽堂とやらが勝手にピアノを演奏している？

どこかのダンジョンのごとく。

「ええ、これまでは年に数回だったけれど、昨日からはずっと弾きっぱなし。特にこの娘がここに入ってから特別。この曲が流れたのは初めてじゃないかしら」

ガレアはすごい勢いで首を縦に振っている。

彼の目から流れ出る泪はとどまるところを知らず、頬を伝い床に幾十もの染みを作っていく。

耳を澄ませてみれば、確かに良い曲だ。

あいにくと批評家ではないため、どこがどういいかは言えないが……。

『微妙だね。魔力がこもってるから似てると錯覚してるだけだよ』

なにお前、この曲を聞いたことあるの？

『俺も彼女ほど近くないけど、神様のところにいたからね。オリジナルを聞いたことがある』

剣で変態だから忘れがちだが、そういうやお前はマジモンの神の使いだったな。

「それと——ここに連れてこられた理由は、私に聞くよりも連れてきた本人に聞いた方がいいでしょう」

リベルはオルガンに向いていた目をフリージアに向ける。

「本人って、ソレダー王にですか？ 私なんか王様に会うなんて……」

「問題ないと思いますよ。本人も話があるようですし。それに、私も知りたいから。ね、教えてくれるのでしよう、ソレダー王」

リベルがぐるりと後ろを向けば、中段に座っていた男が席を立ちこ

ちらへ歩いてくる。

「初めましてフリージア、それにメル。国王のソレダーだ」
顔色の悪い男が挨拶と自己紹介を簡潔に行う。

国王とか言ってるが、まったくそんな風に見えない。

城にいるよりも、診療所かベッドの上にいるほうがふさわしいだろう。

「少し話がしたい。場所を、変えようか」

男が踵を返すと、ガレアは彼に付き従い歩いていく。

私とフリージアもリベルに背を押され、音楽堂から出た。

終点は城内の一室だった。

そこそこの広さの部屋に大きな円卓とそれを囲む丸の椅子が並んでいる。

すでに三人が席についていたが、ソレダー王が入ってきたのを見て同時に席を立つ。

王が軽く手を上げ、座ってくれてかまわないというような意志表示をしたものの、三人は王が奥の席に腰掛けるのを確認してから座った。

王の左手には、冷徹な瞳でこちらを見るレゾン。

王の右手には、王よりも威厳を感じるロイエが座る。

さらにそのロイエの右手に考え込む姿のティポタが腰掛ける。

リベルとガレアはティポタの隣に連なって座る。

「セラスは？」

「体がなまると言って出て行った」

リベルの問いにティポタが返答する。

残念だ。本当に残念だ。

悠久の紙片が全員揃っているところを見てみたかった。

さて、そうするとどこに座ろうか。

ガレアの隣が一番近くていいんだが、どうも腰が引ける。

それに右側がスカスカだからそちらに座りたいが、レゾンの隣はなんか嫌だ。

かといって、あえて一つ開けて座るのもどうかと考えてしまう。仲がいいというティポタが奴の隣に座ればいいだろうに。こういうときはあれだ。

私と同様、座る席に困っていたフリージアにレゾンの隣を勧める。レゾンはフリージアを軽く一瞥し、微かに顎を動かした。

フリージアの隣に私が座り、空席が二つ残った形だ。

「各位。アルヒ祭前日で多忙のところ、時間を割いて申し訳ない」
会合の主催者であるソレダー王が音頭を取る。

軽く断りをいれた後、席に座る面々を眺めていく。

「いや、それにしても壮観だな。冒険者と魔術師のギルド長が二人に、
極限級冒険者が——」

「時間を割いて申し訳ないと思うなら、早く本題に入って頂きたい」
感想を最後まで待つことなくレゾンがぴしやり。

フリージアと私が心配して状況を見つめるものの、王は苦笑するのみだ。

他の参加者も特に変化がない。どうやらよくあるやり取りらしい。
「この会合は非公式かつ個人的なものだ」

席も円卓で身分の上下をほぼ示さない上に、列席者に国の直接的な関係者がソレダー王ただ一人という状況である。

むしろ、なんで私がここにいるんだろう。

おろらく右隣のフリージアもそう思っているはずだ。

「ここでのやり取りを口外しないよう——リベル」
「展開しています」

なにをだろうか？

『防音障壁と防視遮層の魔法。さつき壁に飛ばしてた』
気づけば壁に何か札のようなものがついている。

いつ飛ばしたのだろうか。まったく気づかなかった。
今さらだけど、あれが符術ってやつか？

『そうだね。魔法陣の文字ヴァージョン。予め紙片に、詠唱を呪文の形式で並べて詠唱を省いてる』
なんだか、すごそうだ。

『覚えるのと準備するのがすごくめんどくさいんだろうけど、特化できれば普通に魔法を使うよりも実戦的かな。記述する魔法構成と紙を飛ばす魔法だけ使えば良いし。一言で規模の大きな魔法も発動できさる』

うむ、さすがが極限級だ。

「議題はフリージアの件だ」

場の雰囲気が変わった。

私でもわかるくらい張り詰めたものになっている。

「落ち着いて聴いて欲しい。フリージアは特にだ」

ソレダー王も緊張しているのか、深呼吸をする。

レゾンも早く言えと急かささない。

「フリージア、君はリスイの娘だ」

誰も何も言わない。

フリージアも状況が掴めないのか、どう反応しているのかわからないのか黙っている。

「なぜだ？」

沈黙を破ったのはロイエだ。

本当か、でも、嘘だ、といった真偽の確認ではなく、なぜだである。

誰も王の発言を疑ってはいない。それは、なによりも彼女の外見が示している。

「フリージアが産まれた日……リスイが死んだ日でもあるが、俺は怖くなった。リスイの冷たくなった手と、俺の胸で泣く小さな命が――」

「気持ちの解説は要りません。経緯だけお話してください」

訥々と熱い思いを零し始めた王に対し、レゾンは極めて流麗かつ冷徹であった。

……普通、この場で言うか。

ここはゆっくり話を聞く状況だろう。

レゾンとテイポタ以外の面子も口をぽかんと開けている。

確かに気持ちの解説はお前に必要ないだろう。

だが、王や隣に座るフリージアには――、

「お前はア！」

ロイエが席を勢いよく蹴った。

しかし、その激流は突如削がれた。

隣に座っていたティポタに腕を掴まれていた。

どうしてティポタがレゾンの隣に座らずロイエの隣に座っていたかわかった。

ロイエを止めるためだ。こうなるとわかっていたのだ。

「リスイ様は死産なされた、それはけっこう。赤子をどうなされたのです？」

渦中のレゾンが質問する。

一部から厳しい眼差しがレゾンに向くが、彼はいっこうに気にしない。

「王都から連れ出させた」

確かに何をしたのかはわかるが、なぜそうしたのかがさっぱりわからない。

「けっこう。それでは、どうして今になって呼び戻し、真実を告げることにしたのです？」

なにもけっこうじゃない。

「デクラン山窟を通過中に、兵士が魔物に襲われ死んだ。フリージアも死んでしまったと思っていた。最近になって、リスイによく似た娘がいると噂で聞き、正確な確認が取れたのが今だったんだ。だが、フリージアはリスイの娘であることに間違いないが——」

『『今になって』の部分的理解しました。『呼び戻して真実を告げる』理由を簡潔かつ理性的にお答えください』

長くなった感情的になりつつあった王の説明を中断せよ、レゾンが尋ねる。

王は口をつぐんだ。

「彼女に王位を継いでもらうためですか？」

「違うっ！ 最初からそんなことは考えていない！ 彼女には！ フリージアにはこれまで通り普通の生活を送ってもらいたいと思っている！」

声を荒げて王は返答する。

「それは違うでしょう」

レズンは静かに首を横に振って否定する。

「彼女を呼び戻して真実を告げたということは、普通の生活を送ってもらいたいという意志に反します。真に、そう思っていたのなら、静かに見守っているにとどまっていたでしょう——にも関わらず、王はそれを行なった。それは——」

鋭い目が王を見据え、

「単に王の自己満足です」

慈悲のない音の氷柱が王を突き刺した。

……場は、完全に凍り付いた。

『言ってることは正しいだろうね』

シユウが批評しているが、私には返す言葉がない。

「彼女を連れて来るにあたり、四人の兵士が命を落としました。王国兵士は王の私兵ではありません。王の自己満足のために、兵士の命を失わせて良いという法も風習もありません。彼らにも、家族はいたでしょう」

凄絶という言葉の意味を私は初めて実感した。

問題はその凄絶さを正面から浴びた方だ。

王の顔色は最悪をすでに突き抜けてしまっている。

口は喘ぐように震え、視線は机の上を力なく彷徨い続ける。

「話は済んだようですね」

言い終わるや否や、レズンは無駄のない動作で立ち上がり、扉へと歩いて行く。

「レズンッー」

またしてもロイエが席を立つ。

勢いのあまり椅子は倒れてしまったが気にとめない。

「なにか？」

こちらにも気に掛ける様子なく問い返す。

「どうして……、どうしてお前はっ！ 人の話を聞いてやれないっ!?!」
握りしめた拳が机を叩く。

「伺いました。故に退席するのです」

「違うつ！ どうして相手が語るに任せないのかと言っている！」

荒々しく吐き出される息に対して、レゾンは短い嘆息で応える。

「私には吃緊の課題があります。貴方もこの時期は暇でない。ゆっくりと話がしたいのならば、時期を選ぶべきでしょう」

ロイエの口は何かを叫ぼうと小刻みに動いているが、何の声も出てこない。

「失礼」

わずかな礼を示し、レゾンは退室した。

4. 前夜祭：クバーレ湿原

眠れん。

前夜祭には興味がない。

さっさと寝て明日のダンジョン攻略に備えることとしたのだが……。

どうにもこうにも寝付けない。

昼寝をしたのがまずかったか。

それともあの会議での出来事が気にかかるのか。

結局、レゾンが退室してから話はうやむやになってしまった。

話を聞こうにも、王は体調どころか精神まで崩してしまっただし、フリージアは心ここにあらずであった。

実際、ロイエも仕事があったようですぐに席を立った。

『レゾンは正しかったという訳だ』

あの場ではロイエと似た憤りを感じたものの、振り返ってみるとたしかにレゾンは正しかったように思える。

ただ、素直にその正しさを認め難いことは疑いない。

『正論はその正しさ故に人から疎まれる。勝つことはおろか、逃げることもできないからね。逃げ足が取り柄のメル姐さんが苦手意識を持つのも無理はない』

……それはちよつと違うんじや。

しかし、あんな奴は初めて見たな。

『あんな奴?』

なんていうのかな……、人の心がわからないというか。温かみに欠けると言うのかな。

『そう思う気持ちはわかる』

そうだろ。

まったく、あいつには人の心がないんじゃないか。

『それはない』

あつさり否定されてしまった。

『メル姐さん。人間が正論を使うときっていうのはだ。自分の気持ちを隠すときだよ』

いや、あいつには気持ちなどなくて、正論しかないんじゃないかってことだが？

『一度だけならまだしも的確に正論を言い続けるってことは、他の暴論、空論もわかってるはずだ。彼は誰よりも他の理論にも通じてる。理論に通ずるってことは多くの視点や考えが持ってるってこと。逆説的に、彼は誰よりも人の心の動きや感情がわかってる。だから、正論を言い続けられる』

わかってるだけじゃないか？

あの男はまったく人間らしくないだろ。

墓場とかのダンジョンで歩いてるゾンビやスケルトンのほうがまだ人間らしいぞ。

『俺とは全く逆の見解だね。俺はあの場にいる他の誰よりもレゾンが人間らしく見えたよ』

これは……、話してもわかりあえそうにない。

とにかく現状で最大の問題は眠れないことだ

昨日はあれだけ早く眠れたのに、今日はどうしてこうも眠れない？目を閉じてみても、視界が暗くなるだけでまるで寝られない。

そもそも私は普段どうやって寝ていたのか。意識すると余計に眠れなくなる。

おいシユウ。

『……』

知ってるよ。

なんでそんな意味深げに返すんだ。

お得意の小難しい話をしてくれ。

理屈っぽくてつまらない話を聞けば、退屈になって眠くなること方に一つも疑いようがない。

ほれ、早くつまらん話を。得意だろ。

『……そうだね、メル姐さんの熱いリクエストにお応えして——第三种召喚魔法の大規模行使による現世の人為的変異の可能性について話そうか』

おっ、いいね、いいね。

もうタイトルの各単語からして意味がわからない。

そういうのを待ってたんだ。

『まず、召喚魔法には三つの種類がある。第一に、人や物といった固有の対象単体を転移させるもの。第二に、固有の単体を含む空間そのものを転移させるもの。そして、第三に、世界そのものを転移させるもの』

第三がまったくわからん。

ダンジョンで言えば、第一はモンスターを呼び出して、第二はモンスターがいる部屋そのものを呼び出すって感じだろ。第三はなんなの？

『その例でいくと、第三はモンスターと部屋に加えて法則性まで転移させる。仮に南の世界を召喚させたなら、その部屋でモンスターを倒すと南の世界みたいにアイテム結晶が出ずにモンスターの死体が残る』

ほおん。

いいぞ、いいぞ。

ちよっと眠くなってきた気がする。

もっと教師っぽく喋ってくればより眠れそうだ。

『じゃあ、それっぽくいこう。世界の召喚という理論はたくさん出てきましたが、誰一人として成功させることができませんでした。ここ

で魔法都市イガナクタに住んでいた魔法陣研究者デスコベルタは、世界の召喚は少なくとも口頭での詠唱では不可能だと結論づけました』
いいな。すごくいい。

かなり眠気が襲ってきた。

で、なんで口頭の詠唱じゃ無理なんだ？

『世界召喚というのは、要するに別の世界をこちらの世界に転移させることです。転移させる対象となる世界の法則性、対象物、座標を把握しないとイケません。見たこともない何かのある、全く知らない場所の、謎の法則が働く世界——これをどうやって言葉で唱えるんだって話です』

まあ、無理だな。

私でもわかるくらい無理だ。

『でも、魔法陣なら可能性はあると示唆しました。なぜなら三角形は他の世界に行っても三角形であるはずですから。魔法の体系が同じようにあるなら、魔法陣でいけるんじゃないやねとイガナクタは考えました』

……ふうん、そんなものか。

ねむねむ。あと、ちよつとだな。

『です、が！ やつぱり無理です。法則性はこれであるいは無視できるかもしれませんが。対象物もこの世界にあるようなものを無差別に当たっていけばヒットするかもしれませんが。しかし、座標だけは どうやっても拾えないのです』

ふわあつ……、どうして？

『別世界はあるのかもしれないが、今の世界を基準にしてどういう座標軸を設定すれば別世界を表せるのか誰も知らないし、知りようがないから』

………あそ。

『別世界の召喚が実質不可能だとわかり暗黒時代の到来です。長く世界召喚は不可能だと考えられ、研究する人は変人扱いやただ飯食い扱いされてきました』

………。

……………。

すやあ。

『ここで一人の魔法使いが現れます。泉冷の都エレナイで活動していた冒険者パニコスです』

……冒険者？

『魔法陣を得意とした彼女は、他の冒険者と同様、毎日のようにダンジョンへ通っていました。あるとき、ふと気がつきました——ダンジョンは異世界じゃないかと』

ダンジョン。

『そう。ダンジョン』

ダンジョンが異世界？

『倒すと光に消えるモンスター。そして、倒したモンスターはアイテムを落とします。しかも復活させますね』

うむ。そうだな。

『一方、我々……いえ、ここではダンジョン以外の世界としましょう。そこでははどうでしょう？ 死んだら遺体が残りますし、アイテムは落としません。当然、生き返ることもない。そう考えると、ダンジョンは立派に異世界と言えませんか？』

……たしかにそうだ。

同じ世界ではあるものの、狭い視野で見れば異世界と言えなくもない。

『実はこの考え、遙か以前にもありました。ですが、その当時はまだ魔法陣の研究も進んでおらず、デスコベルタが世界召喚とか無理だろとか言っちゃったせいで研究されていなかったのです。しかも、研究者は書斎か研究室に閉じこもり、ダンジョンに潜ることがなかったため発見が遅れてしまったのでした』

やっぱりダンジョンってすごいな。

生きる上で大切なものが全部つまってる。

『パニコスは実験しました。町の中で魔法陣を描いてダンジョンという別世界を召喚できないか、と』

うん、それで、それで。

どうなったの？

『なんと成功しました』

おおっ！

町がダンジョンになったのか？

『残念ながらごくごく短時間でわずかな範囲だけです』

それでもすごい。

今さらだけどそういう話ってどこで仕入れてくるんだ？

『アイラさんとパーティー組んだときに、チートで魔法史アーカイブにアクセスできたからね』

へえ、アイラたんつてのが誰かよくわからんが便利なモノだな。

『……うん。それでパニコスはいろいろ試しましたが、どうしても安定したダンジョンを召喚することはできませんでした』

あらら。

何が悪かったんだ？

『まず魔法陣そのもの。形が複雑なことに加え、描く素材も選ばないといけません。そのへんの顔料ではダメです。良質な血や希少な鉱物粉が必須となります。さらに魔法陣の数。範囲を広げるには複数魔法陣を適切な位置に記述しないとダメです。なお、召喚するダンジョンを変えても持続時間は変わりませんでした。ダンジョンならどこでもいってことです』

どこでもいいにしても他の条件がきついな。

数に素材に場所って……。

『なんともはや。パニコスさんは多難を乗り越え、条件の全てを揃え発動させました』

なんという執念か。

私も冒険者としてそうありたいものだ。

『結果は失敗。ダンジョンは召喚できましたが、すぐに消え去りました』

どうしてだ？

準備は完璧だったんだろ。

『これは後の研究でわかるのですが、世界には維持力と浸食力いうも

のがあるんです。今のままで有り続けようする力と、別の世界を飲み込んでしまおうとする力です。世界召喚をすると、この二つに引つかかります。元々あった世界は、召喚されてくる世界に対して維持力で押し返そうとします。さらに維持力を押し切って召喚されたとしても、周囲の世界にあつという間に飲み込まれて元の世界に戻っちゃうんですね』

戻っちゃうんですかー？

じゃあ、やっぱりダンジョンの召喚は無理なのかあ。

『ところがぎつちよん。条件を三つほど付けてやると、理論的にはいけちゃうんだなー』

いけちゃうのかー。

で、条件は？

『一つ目は、召喚の種類を法則性に限りなく絞ること。具体的な対象、座標とかは曖昧にする。物とかをそっくりそのまま持つてくるのは諦めて、法則性に絞るって考え。実質は、法則性だけを持つてくる形になるから召喚じゃなくて、現世の変異って形で現れると言われている。第三召喚の変異項って呼ばれることが多い』

なんだ思ってたよりも簡単そうじゃないか。

喚び出すものが減るんだから。

『そうだね。で、二つ目は、維持力の緩和。上書きされる方の世界、ダンジョンじゃないほうね。そっちに、ダンジョンの法則性を認めさせる。これはその世界を構成する環境——建物や出来事、人、その意志に大きく依存する』

さっぱりわからん。

もうちよつとわかりやすく。

『ダンジョンになつてもいいよなーってそこにいる人が思ったり、そこにある物がダンジョンにふさわしいよなあって思われればそれでいい』

そんなもんでいいのか。

ダンジョンっぽければいいってことか？

『まあ、そう。明らかに周囲と違う雰囲気か元からあれば、異世界を受

け入れる抵抗が減る』

これはいけそうな気もする。

なんだ。それくらいならいけそうだな。

『残念。三つ目が難しい。周辺世界からの浸食作用への拮抗。まず二つ目に話した維持力の緩和が強ければ強いほど良い。加えて、特に召喚当初んだけど周辺世界と現世界が直接ふれあわないようにする』
……そんなことができるの？

『世界の間には魔力の層を挟めば、理論的には可能。実際、ダンジョンで人間が倒れても復活しない。元の世界の法則が働いてるよね。これは人間が無意識に纏ってる魔力が、ダンジョンからの浸食を防いでいるからだって言われてる』

ほおん、知らなかった。

『ほとんどの人は知らないと思うよ。話を戻すと、召喚当初——いや、変異直後の世界がかなり不安定なんだ。安定するまでは、浸食を防ぐために魔力の層が必須』

よくわかるんだけど、すごい魔法使いとかならできるとは思わないか？

『悉く失敗してる。魔法使いが作れるのは、魔法による現象の層であって魔力の層じゃないんだよ』

魔法と魔力って違うの？

『魔法は現象を起こすもの。火をつける、物を動かす、壁を形成する——とかだね。魔力は魔法を起こすためのエネルギー源。厳密には魔法にも魔力が混ざってるんだけど、層を作るには純度も量もまるで足りない。魔力量の測定はできるけど、意図的な操作はせいぜい己のうちから生成するところまで。層を作るなんて細かい操作は無理。そもそも魔力自体に未解明の部分が多すぎる』

……つまるところだ。

ダンジョンは作れないってことか？

『現時点では、ね』

いつになったらできるんだ？

『うーん、明日かなあ』

そうだといいんだがなあ

私は笑って同意するも、シユウは笑わない。

突っ込み待ちの発言にそのまま乗られておもしろくないようだ。
やれやれ……長い割にはつまらん結論だな。

『つまらない話をご所望とのことでしたからな。おもしろければいいってもんじやないんじやないかな』

ところでシユウよ。

一つ問題がある。

『何かね?』

眠れない。

『……メル姐さん』

なんだ?

『今夜は寝かさないぜ』

馬鹿な発言からどれくらいの間時間が過ぎただろうか。

目を閉じ、頭を空っぽにしてもやはり眠れない。

『頭は最初から空っぽでしょ。もう諦めてダンジョンに行けば?』

先ほどから何度も寝返りをうつ私に、とうとうシユウが沈黙を破った。

心を読むな、と突っ込むこともなければ、誘いに乗ることも私はしない。

『ダンジョンは楽しい。ダンジョンはおもしろい。ダンジョンは救い』

ふんっ、どこかの馬鹿が意味のわからない言葉を並べ立ておるわ。

『……これ、元は全部メル姐さんの台詞』

くそ、悪魔め。

人の心を読み取り、揚げ足まで取ってくるときた。

『祭りとは言っても、昼のダンジョンには人がいるかもしれない。だけど、夜のダンジョンならどうだろう?』

夜の……、ダンジョン?

『想像するのだ! 自由気ままにダンジョンを走り回る自分を! 独

り言をぼやき、叫び、騒ぎ、はしやいでみても奇異の目を向けられない。そんな世界を！』

そんなものは理想だ。ありえない。

理想を夢みれば、現実はよりつらくのしかかる。

悪魔の声に従えば、今はよくなるだろうが未来には絶望が待つ。

ひとたび悪魔に対して口を開いてしまえば、奴はその隙を逃さず容赦なく私を狩りに来る。

だから——、私は理想を見る目を閉じ、悪魔の声を聴く耳を塞ぎ、独り言を漏らすこともない口を嚙んだ冒険者になろうと考えた。

『夜のクバーレ湿原にはなんか珍しい生物が出るって話もあるね』

——だがならざるべきか。

決めてしまえばあつけないもので、さつさと支度をして部屋を出る。

城内を歩いていると音楽が聞こえてきた。

どうやらあの音楽堂には時間帯など関係ないらしい。

もしかしたらと思ひ、音楽堂に寄ってみると案の定フリージアが座っていた。

前回と同じ場所に座って俯いている。他の人間は誰もいない。

寝ているかもしれないと思ひ、静かに近寄ったが途中で振り向いてきた。

手を軽く挙げて挨拶すれば、彼女も小さく会釈で返す。

何も言わずに私も前回と同様に、通路を挟んで反対側の席に座る。

さて、なんとなく座ったはいいものの何を言つて良いのかわからない。

元気づけるような言葉が浮かんでは、口にできないまま消えていってしまう。

黙れば黙るほど何か言わなくてはいけない衝動に駆られてしまう。

元気出せよ……、これは直球過ぎるな。

気持ちにはわかる……嘘だ、さっぱりわからん。

もう遅いから寝ろ……私の言つて良い台詞じゃない。

明日の祭りどうする……ちなみに私はダンジョンに行くんだ。

……どうにもしつくりこないな。

……よし、これだ。

「一緒にダンジョンへ行こう」

ちようど曲が切れたところだったので、予想よりも声が響いた。

フリージアがこちらを見る。

その後、周囲をちらりと確認する。

「もしかして、私ですか？」

頷いて応える。

「明後日ですよね？」

今から。

「えっと……、遠慮しておきます」

遠慮する必要なんかないぞ。

私は全然問題ない。

「どうしてダンジョンなんですか？」

ダンジョンは良いぞ。

ダンジョンを攻略していると迷いや悩みなんてどうでもよくなる。

『それはただの逃げでは……』

「ありがとうございます……。たぶん元気づけてくれようとしてくれ

てるんですよ」

最初はそのつもりだったな。

でも、あまり……まったくそういうのは得意じゃないから、結局、ダ

ンジョン攻略の勧誘になった。

「本当にダンジョンがお好きなんですね」

言葉は不要。

彼女の顔を見て頷くのみ。

そつちは何か好きなことはないのか？

「ガーデニングは好きですし、刺繍も好きなんですけど、熱中できるほどではないです」

そうか……。

じゃあ、やっぱダンジョンに行くしかないな。

「そこまで言うのなら、祭りが終わったら連れて行ってください……」
よしよし、まかせておけ。

約束だ。

『ひどいパワハラを見た』

いいんだよ。

ダンジョンに行けばきつと彼女もわかる。

「ちよつとだけ、やってみようかなと思うことが一つできました」

おっ、そうか。

何をしてみたいんだ？

彼女はおずおずと指を差す。

その先には、椅子と鍵盤があつた。

「でも、触つたこともなくて」

『誰だって最初は初めてさ』

その通りだが、お前が言うとなんかいやらしい。

別に問題ないだろ。

弾いてみたらどうだ。

「曲も流れてますし」

話を聞いていたかのようにピタリと曲が止まった。

私とフリージアが鍵盤を眺めると、誘うように鍵盤が音を鳴らす。

弾いてみるってよ。

さすがにここまで誘われては断ることもできず、彼女は席を立って
演奏席へ歩む。

躊躇しつつも椅子に浅く腰掛けて、鍵盤のキーを人差し指で押し下
げる。

堂に一つの音が鳴り響いた。

自分の出した音に驚きつつ、彼女は他のキーを押し下げる。

いろいろと音を出していたものの、到底音楽と呼べるものではな
かった。

それでも彼女は楽しいようで、子供のようになつて鍵盤を叩く。

後ろで物音がしたため、振り向くと扉が閉まる場所だった。

扉の端から銀色の髪がちらりと見えた。

もしかしてレゾンがいたか？

『ちよつと前に入ってきたね』

気がつかなかった。

あいつも音楽に誘われてきたクチだろうか。

まったく、来たのなら挨拶くらいしていけばいいだろうに。

さて、私もそろそろ行くとするか。

夢中になっているフリージアを邪魔しないよう、私も音楽堂から出ることにした。

クバーレ湿原は王都モルタリスの西方に位置する。

ゼノム山岳より流れ出るオムニス川の傍らにある初級ダンジョンである。

ぬかるんだ草原地帯と点々と存在する池が見渡す限りに存在する場所と聞いている。

木の板で作られた木道とかいうものが、古くから整備されており基本的にその上を進めばよい。

木道から落ちても死ぬわけではない。

元々、木道は冒険者のために作られた訳ではなく、湿原の環境保全のために整備されたという話だ。

魔法も厳しく制限されており、水と風属性以外の攻撃魔法は禁止されている。

水に耐性のあるモンスターが多いため、有効なのは風だけだろう。

そんなクバーレ湿原に向かう道すがら、対面から何かが歩いて来た。

『おおつとおー！メル姐さん以外に、深夜のダンジョンへ挑むバ——』

シユウはそこで言葉を切る。

何事かと歩調を緩めたがなんてことはない、ただの獣人だった。

わずかな緊張を帯びつつ擦れ違う。

「待ちな」

呼ばれて振り返れば、先ほどの獣人がこちらを見ている。

長い髪を後ろで一本に束ね、束ね損なつた髪が獣らしい耳にかかつて
いる。

腰の付近からは縞模様のしっぽが見えていた。

虎人族の女性であつた。

姿にも目を引かれたが、一番は彼女の獲物だ。

スマートな体格に似合わないゴツい剣。

『違う。あれは槍。それよりも構えたほうがいい』

ふうん、そうなのか。

剣みたいな槍と剣の違いが私にはわからない。

それに構えろと言うが、相手はモンスターではなく獣人だ。

大きさというものだろう。

それで、何か用か？

「一人で挑むつもりならやめときな」

『構えて』

喧嘩でも売られるのかと思つたが、気をつかつてもらつたよう
だ。

それならこちらも丁寧に返しておこう。

いや、心配してもらつてアレだが、ソロで慣れてるから大丈夫だ。

どうかお気遣いなく。

やれやれというように女性は首を振る。

『構えてっ！ 早くっ！』

えっ？

「自分の実力を——」

女性は担いでいた槍を肩からスツと離す。

私もようやくやくシユウに手をかける。

「知るべき——だ！」

言うと同時に槍の柄が私へ伸びる。

ギリギリのところ、私はその突きををシユウで弾いた。

何をつっ!?

驚きつつ間合いを取ると、虎人族の女性も驚いてこちらを見てい
る。

それも一瞬、口元を緩ませて笑うと一足で間合いを詰めてきた。

『右！ 足ッ！ 距離狭めて！』

右からの切り払いに、足へのなぎ払い——順にシユウで弾いてから、距離を詰める。

鼻白んだ相手の胸元に肘を入れようとするが、柄で防がれつつ距離を取られた。

『突きが来るよ——』

シユウが言うように、連続した突きが襲いかかる。

右、左と弾くのが精一杯で、反撃ができない。

それよりも能力半減が効いてないのか？

『害意はないね。遊んでるだけ』

これ確か？！

確かにちらりと顔を見れば、敵意は見えない。

ただただ楽しげである。

シユウの助言が少ないとは言え、接近戦でここまで何もできないのはボス含めて久々だ。

大抵は余裕で斬りつけれるし、相手の攻撃も弾いてしまえば体勢を崩してくれる。

そこそこ強い奴でも能力半減で、相手になんかならない。

遊びでこれってことは、本気になったら……。

『本気……というか敵意が出たら、かえって能力半減で楽になるかもしれない。でも、間合いが長いから、ギリギリの距離で戦われたら厳しそう』

能力半減は強力だが、有効範囲が短い。

相手の獲物の長さで腕の長さを利用されれば、あるいは範囲外から届くのもかもしれない。

徐々に相手の突きも速くなり、こちらも考えている余裕がなくなつた。

特に強い一撃が胸元に伸び、それをなんとか防ぐとようやく虎人族の女性は手を止めた。

構えを解き、額に軽く浮かんだ汗を軽くぬぐって歩み寄ってくる。

「悪かった。見誤っていたのはあたしだったようだ。あたしはセラ
ス。あんた、名前は？」

メルだ。

疲れほうけて回転しない頭でなんとか答える。

彼女は近寄って私の肩をぽんと叩く。

「良い腕だ。あたしはしばらくモルタリスにいる。また遊ぼう。じゃあ」

それだけ言うと、何事もなかったかのように道を歩いて行く。

その背が見えなくなるまで私は見送っていた。

あのさ、もしかしてなんだけど。

彼女って……、

『極限級冒険者パーティー「悠久の紙片」、最後の一人——穿天のセラ
スでしような』

やっぱりそうなのか。

驚きはない、納得するばかりだ。

でも、やっぱりちやんと話せなかった。

『他の誰よりも話したでしょ。剣と槍で』

口で話したかったんだが……。

でも、遊びとは言え、あのセラスと刃を交えたとはなんと誇らしい
ことか。

『惜しむらくは誇る相手がいないことですな』

ほんっと腹立つわ、こいつ。

なんやかんやでクバーレ湿原にたどり着いた。

誰もいない木道を私一人が進む。

ときおり吹く風で草がさらさらと揺れる。

空に月はなく、数多の星が自らを煌めかせ主張している。

モンスターも襲いかかってくるのだが、所詮初級、物の数ではない。

なんかいいな。心が落ち着く。

特にここ最近は何だだしい攻略が多かったため、ゆつくりした攻略
は久々だ。

『深夜の散歩って良いよね』

そうだな。

静かで暗くて心が安まる。

『いやいや。スリルと羞恥心が刺激されるというか』

……夜の散歩の話だよな？

『うん？ 夜の散歩の話だよ』

言葉を尽くせば尽くすほど、きっと私たちはわかり合えない。
そんな気がした。

一通り歩き回ったし、そろそろ帰ろうかと思った頃だ。

『なんか聞こえない？』

そりゃ、いろいろ聞こえるだろ。

耳を澄ませば様々な音が、先を競い合うように入り込んでくる。

キーキーとした虫の鳴き声。

ざわざわりと草が風で揺れ擦れる音。

ズルズルやパタパタといったモンスターが動き回る音。

ウエ、ウエツクという………これ何の音だ？

『泣き声かな？』

確かに嗚咽を漏らしている声に聞こえなくもない。

でも、周囲の木道に人の姿は見当たらない。

『夜に出てくる生物ってやつじゃない？』

ああ、なんか話はあったよな。

モンスターじゃないので見かけても、攻撃せずにほつといてくださ
いって話を聞いた。

『ミツチって呼ばれてるらしいね』

そうそう、それだ。

なんでも滅多に会えないので、見つけたらラッキーだとか。
声からして近くにいるようだが、草に隠れているのか姿が見えな
い。

『あ、いた』

え、どこどこ？

『もうちよいい左に行ってみて、草が分かれてる池の手前。目線はもうちよい下。気持ち左かな』

んー、あつ、あれか。

なんか小さな物体が小さく揺れている。

聞こえてくる音と動きが合っているからあれに違いない。

さてどうしたものか。

せつかくだから近寄ってみようか。

『足下、水張ってるからちよつと待って。オツケーぬかるんでるから気をつけてね』

木道をゆっくり降りて、どろどろした地面に足を入れる。

音がしないようにゆっくりゆっくりと目標に近づく。

近づいて見ると、肌の色こそ違えど少年だった。

頭がキラリと光り、禿かと思ったが、なんか頭についてる？

『河童じゃん』

カッパ？

私の声に驚き、少年は振り向いた。

確かに人間ではなかった。唇は嘴のように尖っている。

目をこする手の指の間に大きな水かきがついていた。

目と目があつて、数秒間はお互い固まっていた。

先に動いたのは河童と呼ばれた少年。

「うえ、うええええん！」

目を細め、口を広げて何か喋るかと思ったら泣き出してしまった。

しかも大泣き。ぐすぐすとかそんなレベルじゃない。

周囲に響き渡る大声でだ。

襲いかかるなり逃げるなりしてくれれば、私も対応できる。

しかし、泣き出されては手の出しようがない。

困ったときのシユウ頼み。

『うるさいし、切り捨てれば』

あ、だめだこいつ。

そもそもこいつは子供が苦手だった。

しかも、男ときたら、こう言うことは自明の理だ。

『言い過ぎた。ほつとこう。自分でなんとかするでしょ、男の子なんだから』

さすがに「切り捨てろ」はないと思ったのか訂正してきた。それでもなお対応は冷ややかだ。

仕方がない。

まずは泣き止んでもらう必要がある。

その後、なんとかなだめ、今は二人並んで木道に腰掛ける。

言葉が通じないためチートで意志を疎通した。

それで名前はなんと言うんだ？

「……カパア」

手に持った休肝バーとか言う食べ物を囓りながら答えた。

ここのモンスターからドロップするアイテムで、ミツチ族の大好物のようだ。

なんだかんだ言いつつ、シュウがなだめる方法を提案し、見事に話ができるようになった。

それでカパア——、

『やめろ。これ以上名前を増やさんでくれ。登場人物が多すぎるんだよ。何がカパアだ。河童でいいだろ。もしくは「くぱあ」か「カウパー」を所望するものである』

それでカパアはどうして泣いてたんだ？

馬鹿は無視して尋ねる。

「……おとたと、おか、おかたんが、うえつうえつ」

また泣き出してしまった。

おとたとおかたとやらはおそらくお父さんとお母さんのことだろう。

ゆつくりだ、ゆつくりで良いぞ。

お父さんとお母さんがどうしたんだ？

「……っれてかれた」

かなり時間が経ってからカパアは答えた。
連れていかれた。

喧嘩でもしたのかと思ったが、なんだか物騒な話になってきた。誰に、連れて行かれたんだ。

カパアは答えない。

ただ指先を私のほうに向けてくる。

『事案発生』

ちよつと待て、私は知らんぞ。

「人間が連れてった」

ああ、そういうことか。

人間はみんな同じに見えるって話だろう。

南の世界でも魔族は人間の細かい判別はできていなかった。

連れてったのはどんなやつだったんだ？

「みんな鎧着てた。そいつらが、おかたんとおとたん、ううつ、他のみんなも、うええ」

また泣き出してしまった。

『黙れ！ 小河童！』

お前が黙れ。

複数人で鎧を着用。

うーむ、心あたりが多すぎる。

鎧を着ている冒険者なんていくらでもいる。

『そいつらの鎧に剣と盾の印が付いてなかった？』

シユウの問いをそのまま聞いてみる。

河童は嗚咽を漏らしながらもコクリと頷いた。

『ああ、残念』

何が？

『秘密の組織ではなかったようだ』

だから何が？

『剣と盾の印は、国の兵士に貸与される鎧の証。河童を連れて行ったのは国兵』

国の兵士がカパアの両親を？

聞くとところ他の河童も数週間前から連れていかれているらしい。

『まあ、そうだろうね。重要なのは——』

何のためにかだな。

『違う。そいつの両親がいつ連れて行かれたかだよ』

尋ねたところ昨夜のようだ。

『使われてないなら助かるかもね。もつとも、根本的に手遅れだろうけど……』

そろそろ教えてくれる。

カパアの両親は何のために連れていかれたんだ？

それに使われてないって？

『そいつの右腕、肘の近くを見てみなよ』

カパアの右肘の近くを見る。

怪我をしているようで血が出ていた。

そして、その血は人間のような赤ではなく青であった。

『画材に使えば、良い青色が出ると思わない？』

………えっ、まさかあの絵？

私の脳裏に昼に見たよくわからない落書きが想起する。

あの落書きに青が使われていたはずだ。

『そうだね』

まさか全部、カパアたちの血で描かれているのか？

『いや、血に顔料を混ぜてた。これは触ったから確実』

そう言えば、こいつを落書きに突き刺した気がする。

だとしても、あの落書きは大量に描かれていたぞ。

『いや、使われてるのは本物だけ。偽物ばかりで本物はそんなに多くない。最初の落書きも流行を作るための偽物だろうから、思ってる以上には使ってない』

落書きにミツチ族の血が使われていることはわかった。

その血を集めているのが国の兵士達たちということも把握した。

だが全体的な事態がいまいち掴めていない。一度王都に戻る必要がありそうだ。

すでに東の空は明るみ始めている。

カパアに休肝バーをやり、いったん分かれる。

彼が住んでいるという、池の中に帰ってしまった。日が出ているときに、外に出ると頭の皿が乾いてしまうらしい。とりあえず、私がかパアの両親については調べてみると伝えておいた。

クバーレ湿原の入口付近に戻ると、誰かが大剣を振るっていた。攻撃をひらりと避け、その後、見事にモンスターを一刀両断。やるもんだとよくよく見るとロイエだった。

あちらも私に気づき近づいてくる。

「おはよう。……まさか夜通しで攻略してたのか？」

ああ、眠れなくてな。

そつちは今から攻略か？

「いや。気分が落ち着かなくてな。体を動かしていた。もう帰るところだ」

額に浮かび上がる汗を腕でぬぐう。

別々に帰る必要性もなく、並んで王都まで歩く。

ロイエは隣に馬を連れて歩いていった。

そう言えば、昔は冒険者だったんだろ。

お前と王、リスイってのと、レゾンの四人で。

「ずいぶんと昔だな」

どこか遠くを見て懐かしむようにロイエは語る。

大半のことはリベルが話してくれたことと同じだった。

ロイエが女性にもっていたこと。

多くの女性と関係を持ったが、一番好いていたリスイには手が出せなかったこと。

レゾンとは昔から喧嘩ばかりで、リスイやソレダー王、他の冒険者に仲裁をしてもらったこと。

なんだかんだ言いつつもレゾンの正しさと実力は認めていることも。

それに攻略したダンジョンの話も聞かせてくれた。

「クバーレ湿原でリスイがミツチ族を見つけてな」

私もさつき会ったぞ。

「そうか。彼らは元気だっただろうか」
いや。

国の兵士に連れ去られてるそうだと。
「なんだと?」

私はカピアの話を伝える。

どうやらロイエも初耳だったらしい。

王都に戻ったら、一直線にソレダー王のもとに行くと話す。

『間に合わないだろうね』

何に?

ああ、そうか祭りか。

かなり早い時間に開始だったな。

お前はギルド長だろ。いなくていいのか?

「問題ない。始まってしまえば、俺は不要だ。このためにいろいろと準備してきたのだからな」

そっちは大丈夫でも、王の方は時間が取れないかもな。

「そちらも問題ない。ソレダー王は——いや、ソレダーは今日で王位を退く」

えっ?

王じゃなくなるのか?

「ああ。一部の人間しか知らないが、執政は半ばアヴラ王子……いや、アヴラ王か。そちらに移っている。アルヒ祭の開幕一番でソレダーの口から退位宣言が行われる段取りだ。そろそろか」

なんとそうだったのか。

確かに体調が悪そうだったからな。

王の退位発表とはなかなか歴史的な出来事だ。

一瞬、聞いてみたかっと思ったが、人混みを考えると別にどうでもよくなった。

私はともかくそちらこそ聞いておくべきじゃないのか?

「いや、俺は……聞きたくない」

朗々と受け答えしてきたロイエだが、ここに来て返答に詰まった。

「あいつが王になると言い出してから、『銀色の旋律』は崩れ始めた。

リスイを正妻に迎え、彼女が死に、子供も死んだと思つたら実は生きていて……。あいつが王として動けば何かが壊れていく。王としてのあいつはもう見たくない。退位したらまた一緒に——ソレダーとレゾン、それにリスイも一緒にダンジョンへ行きたいなあ」

一人は病床で臥せている。一人は魔術師ギルド長で多忙。

最後の一人に至っては死んでいる。

「俺が無茶を言つて、レゾンが正論で口を挟んで、ソレダーが困り顔でうろたえる。それをリスイが演奏でなだめる。あの時間が永遠に続けば良いと思つていた」

——どうしてこうなつてしまったのだろう。

ロイエはそれつきり口を噤んでしまった。

私もこれ以上は何も聞けない。

『永遠なんて幻想を抱くべきじゃない。過去に冒険者をやってたならなおさらだ』

辛辣だった。

だが、私もそう思う。

きつと、私たちの冒険も終わる日が来るだろう。

悔いのないように今日という日を、今を走り抜くべきだ。

無言のまま並んで歩いていると、道の先から小さな影が見えた。

徐々に近づき影は明確な形として映る。

「あれは、レゾンか？」

馬に乗る細身の男の銀髪が風になびいている。

「お二方、ダンジョンの協力をして頂きたい」

挨拶や前置きを一切省略してレゾンは言う。

私はそういつた単刀直入な物言いは好むところだ。

しかし、ロイエは気にくわなかつたようで口を開く。

「俺とメル殿はすでにクバール湿原に行ってきたところだ。行くなら一人で行け」

さつきまで一緒にダンジョンへ行きたいと言つていた人間の台詞と思えない。

この二人がまともに会話するには緩衝材が二人くらい必要そうだ。
「クバール湿原ではない」

レゾンは静かに否定する。

「じゃあどこだ？ デクラン山窟か？ それとも旧書館アデイス？」

「どちらでもない」

その二つじゃないとすれば、答は一つだ。

私も行きたかったところである。

跨幻橋パンタシアだな。

「違う」

レゾンはまたもや首を横に振り否定する。

「じゃあ、どこの攻略を協力しろと言うのだ!？」

とうとうロイエが怒声を張った。

最初からどこどこを協力して欲しいというべきだろう。

『どうしてそう言えなかったかも考えるべきだね』

レゾンがようやく口をうっすら開いた。

「魔都モルタリス」

私たちが帰ろうとしていた都市の名前をロイエは口にした。

そして、その枕詞は王都ではなかった。

5. 永遠の都：魔都モルタリス

モルタリスに向かう道中、レゾンは何があったのか報告した。

ロイエも事態を察し、彼自身の感情を引込めた。

出来事を端的にまとめてしまえば――。

ソレダー王の退位発表。

続いて、アヴラ新王の挨拶。

同時に新王からアルヒ祭の開始宣言。

王民は、大いに盛り上がり絶頂を迎えたのだが――、

まさにそのとき、何らかの術式が起動された。

王都中で大規模な魔法が展開。

人々はモンスターに変わってしまった。

レゾンはアデイス図書館に向かう途中でその状況に遭遇し、たまた

ま無事だったと話す。

彼の推論によると展開された魔法は、第三召喚魔法の変位項。おそらく近くの魔法陣に不備があり助かったとのこと。

即座に都を脱し、こちらに来たという訳だ。

一言でまとめると

「モルタリスはダンジョンになりました」

ロイエが絶句している横で私は気づいてしまった。

これはあれだ。

昨夜、聞いた話だな。

ダンジョンは作れるかどうかってことだ。

たしか三つの条件が必要だったはず。

一つ目は――、

「王都に描かれていた落書き。あれは、第三召喚――ダンジョン召喚の魔法陣です」

そして、それはカパアたちの血で描かれている。

青の線だけでなく、赤の線もあるいは血なのかもしれない。

昨日、一カ所刺してしまったが、その機能が不十分でレゾンは助かったのだろう。

『へー、変異時にいなければ大丈夫なのか。でも、すぐ逃げないと異世界側に飲み込まれるか……』

なんかぶつぶつ言ってる。

二つ目は――、

「三年に一度のアルヒ祭。都の雰囲気は絶頂に達し、あらゆる事態を受け入れる体勢ができていたでしょう」

王は退位し、若き王が立つ。

新たな王の宣言と祭りの開始宣言。

その場の盛り上がりは想像に難くない。

三つ目。

これが難問だったはず。

世界と世界の間の魔力層形成。

これができないと、すぐ元に戻ってしまうとか。

「ダンジョンは不安定ながらも存在し続けていました」

——ということとは魔力の層ができてきているってことだろ。
どうやって魔力の層を作ったんだ。

『音楽堂のパイプオルガン』

思い出した。

あの楽器は一人で演奏を行っていた。

しかも、シユウはあの演奏には魔力がこもっているとも話していた
気がする。

それでは、あの演奏が魔力の層を作っているのか？

「私はそう考えています。昨夜、確認しましたが魔力の層を形成できるだけの純度はありました」

そういや、こいつはフリージアと話していたとき、後ろにいたんだったな。

『ダンジョンに行くって話も聞いてただろうから、こっちの方に来たんだらうね』

なるほど。

王都がダンジョンになったことはわかった。

大変なことに違いはないが、同時に嬉しいことでもある。

「誰が、そんなことを……」

忘れていた。

それが一番大切なことではないか。

私は一体誰に、ダンジョンを作ってくれた感謝の言葉を伝えれば良いんだ？

『メル姐さん。ちよつと落ち着いて』

レゾンは横目で鋭くロイエを見ている。

「貴方はお気づきのはずでしょう」

二人の会話はここで終わった。

カパアの両親の件もあるため、なんとなくわかっていた。
しかし、はつきりと答合わせをおきたい。

……誰なの？

『ソレダー』

こつそり尋ねると教えてくれた。

どうやら珍しく予想が当たっていたようだ。

『彼は間違いなく歴史に名を残すだろうね。それが悪名、美名のどちらになるかは俺たちのこれからと、後世の歴史家に委ねられてる』

そんなことはどうでもいい。

もう一つだけ気になることがある。

どうしてこんなことをしてくれたのかだ。

『してくれたって……。まあ、なんとなくだけど理由はわかる。でも、本人に聞くのが一番でしょう。言葉が通じれば、だけど』

うむうむ。

そうすることにしよう。

私たちは一路モルタリスへ向かう。

それぞれの思惑を胸に秘めて。

外壁の辺りですでに異変は見受けられた。

正門の周辺にいた人たちが踊り回っている。

彼らの顔には、間抜けな化粧が塗りたくってあった。

『ピエロみたい』

「なんだあれは？」

ロイエが疑問を口にするが、私だつて知りたい。

「モンスター化した市民です。私が脱出したときよりも範囲が広がっていますね」

レゾンは淡々と応じる。

『まずいなあ』

なるほどな。

モンスターか。それならちよつくら倒してみるか。

『ちよい待ち』

「お待ちください」

ふざけた声と冷たい声に呼び止められる。

どうかしたか？ さつそく攻略していこうと思ってたんだが……。

『このダンジョンはまだ安定してない』

「彼らが復活するとは限りません。倒すのは得策ではないと考えます」

……そうなんですか。

じゃあ、安定するまで待つとしようか。

それなら復活するだろ。

ロイエとレゾンがこちらを凝視する。

えっ、何？

何かまずいこと言った？

『スタンスの違いだね。メル姐さんはモルタリスをダンジョンと捉えて、攻略する術を考えてる。一方、この二人はモルタリスを王都と捉えて、ダンジョンから元に戻す術を考えてる』

ああ、そういうことね。

じゃあ、私のスタンスをはっきり明言しておくとするか。

私は魔都モルタリスを攻略しにきた。

戻す術など知らんし、考えてもいない。

「モルタリスには多くの市民がいるんだぞ！ 彼らを見捨てる気か！」

市民？

それはあそこで踊り狂ってる奴らのことか。

『楽しそうだねえ、まずいことに……』

よく見ろ。

あれはもう市民ではなくモンスターだ。

それに私は知っている。彼らが心のどこかで望んだからこそあの姿になったと。

「私のようにモンスター化していない市民もいるでしょう。彼女らを助けようとは思わないのですか」

思わないな。

知り合いならまだしも、知らない奴がどうなろうと私は知らん。

しかし……なんというか、そんな台詞がお前から出てくるとはちよつと意外だ。

少しくらいの犠牲は厭わないものだと思っていた。

そう思ったのは私だけではないようだ。

ロイエも熱くなった表情を冷ましてレゾンを見ている。なんだろうな、最後の台詞は正論と言うよりも感情に訴えているよな。

『……フリージアもまだモンスター化せず生きてるかもよ』

それは、そうだが。

うーむ……。

『是非もない。俺が話そう。二人とパーティー登録して』

………珍しい。超珍しい。

こいつが自分からパーティー登録を言い出すなんて。

しかも登録させる二人とも女ではなく、男だ。

レゾンが何か変なことを言ったなんて比じゃない。

そりゃ、王都もダンジョンになる。

『照れますなあ』

何が照れますなあ、だ

なんにせよ私では手詰まりに違いない。

やると言ってるなら、こいつに任せるのが確実だろう。

パーティー登録をしてシユウが挨拶をした。

ロイエは素直に驚き、レゾンは眉がわずかに動いただけだった。

予想を裏切らない反応でもしろみに欠ける。

『まず、方向性は王都をダンジョンから戻すこととしよう』

二人は頷くが私は澁らざるを得ない。

お前、せっかくの人工的なダンジョンだぞ。

これ戻しちゃってどうするの。

『政治的な話はおいとくとして、このダンジョンが安定してもさほどおもしろくないよ』

なぜだ？

ダンジョンはダンジョンであるだけで十分おもしろいだろ。

『モンスターはただの住人だから雑魚。城のロビーでたくさん兵士が出迎えて、奥に進んだらボスのアヴラ王。戴冠したばかりだから弱

「いことも確實。挑まなくてもわかるくらいだ」

「まあ、そうかもな。」

『だが、しかし。今なら別のボスと戦えること疑いない』

「別のボス？」

『おっと、その前に話すことがあった。ダンジョンから戻す手段ね。』

「これは単純」

「全然わからんけど、どうすんの？」

「音楽を止めることでしょう。さすれば魔力の層は消え、たちまちダンジョンはより大きな世界に飲まれることとなります」

『その通り』

「ロイエと私は頷く。」

「……ということは、だ。」

「要するにあのオルガンを壊せばいいわけだ。」

「待て！ さすがにそれは！」

「ああ、そう言えば思い出の楽器なんだっけ。」

「それで良いでしょう。最悪建物ごと破壊してかまいません」

「レゾンツ、貴様ツ！」

「またしても二人でいがみ合う。」

「建物はまた作り直せばいい。しかし、都の民は作り直すことができません」

「眉一つ動かさず、ロイエを静かに見据えてレゾンは述べた。」

「だとしてもだっ！ 貴様はそれで本当に良いのか！」

「私の意志など些細な問題です。戦略目的を見誤るべきではない」

「さらにレゾンは続ける。」

「あれが残っているから、誰も彼もが過去にとらわれてしまう」

「だから、いつそ破壊してしまうべきなのです。」

「口には出していないが、そんな声が聞こえたような錯覚を覚えた。『それについては問題ない。俺が近くにいけば壊さず止める手段がある』」

「もっと早く言えよ。」

「ほら、また二人が険悪な雰囲気になっただろ。」

『とにかく。今の不安定なダンジョンにとって、あの音楽堂は命綱なんだ』

そうだな。それで？

『存在が安定するまでは、出来うる限りの手を尽くして、あの建物を守るだろうね』

そうか。

建物の近くに、そのボスがいるってことだな。

『うん。安定してからでも戦えるだろうがね。……俺としてもできれば、安定した後で戦いたい。本気出されると厳しいし』

いや、やはり全力のダンジョンと戦わないとな。

『うーん。でも、やっぱ、危険すぎる。やっぱ安定させたほうがいいかなあ。けどなあ……』

そんなに強いボスがいるのか？

お前はどちらかと言えば安全志向だろ。

それなら最初から安定するまで待つように言えばよかっただろ。

そうすれば私もこの二人を見送れた。

『あのダンジョンのモンスターさ。みんな楽しそうに踊ったり、歌ったりしてるじゃん。それに、明らかに魔法陣の効果範囲よりダンジョンが広がってきてるし』

そうだな。

気づけばかなり近くまで来て踊り狂っている。

なんか歌えよ、踊れよと言わんばかりに誘ってくるし。

『こういうドンチキ騒ぎが大好きなヤバイ存在を俺は知ってる。ここを放置すると世界中にこのダンジョンが広がって、全てを飲み込むかもしれない』

それってどうなの？

『他のダンジョンも、この馬鹿騒ぎに飲み込まれる』

他のダンジョンも？

『飲み込まれてなくなるね』

やばいじゃん。

早く音楽止めないと。

『うーん。でも、やっぱり危険なんだよなあ』
どっちみち危険ならダンジョンを突き進む方の危険に私は挑みたい。

こうして私たち三人は魔都モルタリスに挑むこととなった。
モンスターは弱い。

まだ人の存在とあやふやになってる節がある。
ときどき強い奴がいるのを見るに、元の人間の強さが土台にありそうだ。

能力プラスと様々なチートを得た二人も問題なく進めている。
シユウもチートの能力を二人にひたすら教え込む。

道自体はとても単純だ。

正門からひたすらメインストリートをまっすぐ。

開いている城門を抜けた後は城内に入らず、城壁に沿って進む。

なんだ、余裕じゃないか。

兵士のモンスターは襲ってくるが余裕で対処できる。

『……ここからが本番だよ』

ここからってお前。

演奏もすでに耳に入ってきている。

音楽堂までは、あと庭園があるだけだろ。

ボスってのはそこにいるのか？

そもそもボスって何だよ？

『本当にわからないの？』

わかからのだけど……うん？

ロイエとレゾンを見やるとなんだか二人とも険しい顔をしている。

二人ともわかってるのか？

ちようど道を折れて、庭園の入口に着いた。

広々とした庭園に影が四つ。

その姿を見て、私の足は止まった。

止めたつもりはない。無意識に足が止まってしまった。

『さて、それじゃあボスを紹介しようか』

……いらん、よく知ってる。

初めて自分で買った本が、彼らについての情報誌だったからな。

極限級冒険者パーティ「悠久の紙片」

世界に三組しかない極限級パーティの一つだ。

一番左に立つ小さな影が符片のリベル。

札に術式を刻み込み、複数の魔法を同時に発動することもできる。

そのバリエーションの多さは比類すべきものがない。

左から二番目の大きな影が双盾ガレア。

左右に持つ大小違う大きさの盾であらゆる攻撃を弾く。

超上級ボスモンスターの魔法を盾で防ぎきった話はあまりにも

有名だ。

そして、三番目は穿天のセラス。

彼女については、昨夜、私自身の腕を持ってよく知らされた。

本気の突きは、空に浮かぶ雲を突き刺すと言われている。

一番右に立つのが霊弓のティポタ。

彼が見えない弦を弾けば、数十の矢が飛ぶ。

弾く姿は見ていないが、たしかにその芸当を実感した。

彼らの顔にはモンスターと同じような化粧がしてある。

踊りこそしていないが、それが逆に威圧感を醸し出していた。

こちらの姿は見えているはずだが、手を出してこない。

手を出してくる領域が有るのだろう。

……シユウ、それに二人とも。

作戦会議だ。

『あいよー』

普段ならとりあえず挑んでみて、ダメそうなら相談だが今回は違う。

生半可な作戦で挑んでも勝てそうにないし、仮に勝てるのだとしても彼らに対する冒涇だ。

シユウの策に、二人の助っ人、それに全力全開のチートと持てる限りの手段を用いて挑ませて頂く。

早足で作戦会議は行われた。

このときばかりはロイエもレゾンもいがみ合わない。
シユウの作戦が戦況からして妥当なものだったことも大きいだろ
う。

『……あ、まずいかも』

「そのようですね」

作戦の詰めをしていると、シユウとレゾンがなにやら呟いた。

「何がまずい？」

私の代わりにロイエが尋ねる。

「時間がありません」

『場が安定してきている。今、始まったこの曲、おそらくこれを弾き終わるまでがタイムリミット』

耳を澄ませば、昨日音楽堂で聴いた曲だ。

「リスイが、一番最初に作った曲だな……。曲名は——」

「銀色の旋律」

その名は確か……。

「時間がありません。始めましょう」

『それではおのおの、抜かりなく』

こうして私たちの最初で最後の作戦が始まった。

最終目的は、音楽堂への到達だ。

決して彼らに勝つことが目的ではない。

一番簡単なのは、間違いなく無敵スキルで私一人が音楽堂まで行くことだ。

しかし、それではおもしろくない。せつかく挑める良い機会だから全力で挑みたい。

二人にはこのスキルのことを伏せている。最後の最後でどうしようもなくなったら使う手はずである。

まずは相手の分散と一人の脱落を図る。

シユウを体の前に捧げた。

いくぞ、ゲロゴン！

『ブレエエエエス！』

声だけ大きめで、威力据え置きの一撃をぶつける。
一直線に伸びる火炎の脇をロイエとレゾンが連れ合って駆け抜ける。

上手く散らばってくれば良いが……………あれ？
なかなか散らばらない。

ガレアだけは避けないことは確かだった。
彼の後ろには音楽堂がある。避けては音楽堂が壊れる。

しかし、まさか直撃して全員死んでしまってるんじゃないだろうか。

『……………うっそだあ』

火炎が収まるとそこには一つの盾があった。

盾が動き、ガレアの顔が映る。

無傷、だと？

『威力の確認もかねて全員防御に回ったみたい』

どうやら他の三人も彼の後ろに控えているようだ。

『プランCー』

私は再度シユウを構えてゲロゴンブレスを放つ。

固まっているなら好都合、その場で足止めしてしまおうというものだ。

今回はゲロゴンブレスの切れる直前に、レゾンの魔法も彼らに襲いかかる。

その隙に私も走り抜けていく。

途中、いくつもの札がぼろぼろの状態で地面に散らばっていた。

『やっぱり仕掛けてたな』

符術の神髄は、攻めよりもむしろ迎撃にある。

大量に罠を仕掛けておき、相手の動きを封じさせることができる。

ゲロゴンブレスで地面ごと焼き払い、相手の動きを封じつつトラップを消し去ったのだ。

こちらも手を休めることはない。

走りながら、第三のゲロゴンブレスを構える。

目標は音楽堂だ。最悪、ガレアが防ぎきれず建物に直撃してしまってもいい。

私が四人を足止めし、レゾンとロイエが先行する。
ここでようやく動きがあった。

ガレアの横から一つの閃光がロイエに向かって走った。

閃光を、ロイエは彼の大剣で弾く。

閃光はセラスだった。

セラスとロイエが切り結ぶ。

チートがなければおそらく五秒も持たないだろう。

しかし今は互角以上に戦っている。

なにあれ？

すぎすぎじゃないか。

あのセラスの攻撃が容易に弾かれてる。

それどころか、テイポタの見えない矢まで切り払われている。

『剣士専用スキル「踏み込みが足りん！」。魔法以外の攻撃を確実に切り払える』

私もそういうの欲しかった。

『剣士じゃないと無理だね。これに大剣専用スキル「堅魂一擲」を組み合わせるからこそ戦える』

なにそれ？

『反動がなくなる。もうちよつと言うなら、防御に使えば相手の勢いをそのまま相手に返せて、攻撃に使えばエネルギーが倍近くなる』

なんかよくわからんのだけど、すごいな！

『それだけじゃ速さが足りないけど、そこはレゾンの的確に支援魔法で援護してる。二人への妨害魔法も的確だ。おもしろみはないけど、機械みたいに正確な戦い方してる。相手にしたくはないタイプ』
とりあえずセラスとテイポタはあの二人に任せ、私はガレアとリベルの相手をするでしょう。

いよいよ接近戦になる。

トラップの符術は全力で破壊したものの問題は盾のガレアだ。

こいつが突破できずレベルに魔法の使用を許してしまう。

左の小さな盾で斬撃は防がれ、弾かれたところに右の大きな盾をぶつけてくる。

能力半減が効いているにも関わらず、突破することができない。

『今！ ゲロゴンブレス！』

この距離でか、と思うがとにかく使用する。さすがにガレアも全力で防御をしてくる。

ガレアの盾だけでは間に合わず、リベルの符術も盾を作りブレスを緩和させている。

『全力で走ってリベルを！』

ゲロゴンブレスを撃ちつつ全力でガレアの方へ走る。

『ステルス・オン』

ガレアはすぐに盾を傾け、こちらを伺うも私の姿は確認できない。音ですぐに気づかれたが、もう通り過ぎている。

そして、リベルに近づきシユウを振るった。

魔法使いと言ってもさすがに極限級。

かするだけであった。

『いや、単にメル姐さんが下手なだけ』

シユウは小言を漏らす。

小言を漏らすだけの余裕ができていた。

私のチートスキル「盗人」は姿を隠すだの、逃げるだのに特化している。

その中でも、とりわけバリエーションが多いのは状態異常付与だ。相手がボスモンスターでもかすれば動きが一瞬鈍る。

状態異常を全てセットにして、極限級とはいえ人間に使うとどうなるか？

間違いなく過剰付与だが、モンスター化してるから大丈夫だろう。その程度の考えだったし、間違いではなかったと思う。

実はどうなるか、私もよくわかってなかった。

人間相手には原則としてシユウは使わないようにしているからだ。だが今回、初めて知った。

知りたくなかった。

『毒、麻痺、盲目、恐怖、痛覚増増、サイレント、石化は微妙か、微呼吸、鈍化などなど』

声のない絶叫をして喉を掻きむしり倒れてしまった。近くにいたガレアも感染により同様だ。

『リベルをあの二人の近くに投げて』

抵抗を感じつつもリベルをセラスとティポタの中間くらいに投げつけた。

ガレアと同じく感染により二人とも倒れてしまった。

実際には倒れるまでにいろいろと動作があつたが、細かいことは省いておく。

ロイエとレゾンも合流し、音楽堂へ駆け抜ける。

曲もあと少しで終わってしまう。

『待った！』

シユウの停止の声と同時に、数十枚……いや数百枚の札が地面と横に浮かび上がる。

『……やるもんだねえ』

あれ？

特に何も起きていない。

爆発も発生してないし、音も出ていない。

なんだ不発か……。

右を見るとロイエが走る姿のまま止まっていた。

左を見れば、レゾンが微妙に驚いた顔をして止まっている。

なにこれ？

『時間停止の魔法』

初めて聞いた。

そんなすごい魔法があるのか？

『ある。まともに詠唱すると数日かかる代物。しかも、この空間範囲でこの持続時間を設定してるなら一ヶ月は軽くかかる。魔法陣で初めて存在が実証された魔法だよ』

数百枚の札が絨毯のように牽かれ、左右には壁の如く並ぶ。

確かにこれは準備するのにも時間がかかりそうだ。

視点はまともだし、音もきちんと聞こえてる。

無敵スキルではない。耐性スキルか。

二人にも付けてやれよ。

『無理。この時空間耐性は、白竜倒したときの特殊スキルだから、メル姐さんにしか付けられない』

あるってことは聞いてたけど、今まで使われたことがないため忘れていた。

『たまに発動してるんだけどね。転移魔法トラップを無効化したりしてくれてるし』

それよりもこれを止められないのか。

斬――

『ダメッ！ 絶対俺を札に付けないでよ！ 無理矢理解除したら時空が歪む！』

なにやら洒落にならない代物らしい。

札まであと少しのところまでシユウを止めることができた。

『もしも、このトラップが全部攻撃魔法なら、俺たちの負けだったよ』

……そうだな。

さすが極限級冒険者。パーティ「悠久の紙片」だ。

音楽堂の扉を開けて中に入った。

時間もなく、時間停止魔法を解除できないので私一人だ。

他があれだけ賑やかだというのにここだけは変わらずオルガンの音だけが響いている。

『畏はない』

広い空間に私を除けば二人だけだ。

演奏席に座り、手を動かすフリージア。

なんかめっちゃ弾いてるけど、上達するの速すぎないか？

『モンスター化の影響と、魔力で操られてるだけ』

なんだそういうことか。

あと一人はそんな彼女を最前列の席で見ている。

通路を進みフリージアに行く途中でただ一人の観客が席を立ち私に対峙する。

顔色は依然として悪いままだが、モンスターの化粧はしていない。

「お願いだ。邪魔をしないでくれ。もう少しで、あと少しで曲が終わるんだ。頼む……」

今朝まで王だったとは思えないほど弱々しい声色だった。

邪魔をしないで欲しいのも、ダンジョン化を阻むためなのか、純粹に曲を止めないで欲しいと思っっているからなのか判別がつかない。

悪いが止めさせてもらう。

そう決めたんだな。

「どうしても止めるというのなら私を殺してからにしろ」

彼は手を広げて私の進行を阻止しようとする。

「この演奏が終われば、僕たちは永遠になる。僕とロイエ、レゾン、リスイの娘であるフリージア、それに多くの人たちが一緒にだ」

で？

「みんなで歌って、踊って、演奏を続ければきつと彼女は戻ってきてくれる！ リスイは帰ってくるんだ！ またここで——」

よくわかった。

ソレダー。

私は貴方を尊敬する。

王ではなく一人の人間としてだ。

ダンジョンを作るなんて、普通は思わない。

思ったとしても、実際に作るなんてできないだろう。

私もシユウから話を聞いたが、大部分は理解すらできなかった。

それを調べ上げて、思考し、実践して、実行に移す段取りも見事だった。

他の人間は貴方を責めるかもしれない。カパアの仲間達も貴方を許さないのかもしれない。

私は全て許そう。

王都をまるごとダンジョンにする。

悠久の紙片とも戦うことが全力で戦うことができる。

全てを見る必要もない。

素晴らしい。素晴らしいダンジョンだ。

見てくれ。感動のあまり涙まで出てきてしまった。

「だろう。そうだろう。この曲が終わればまた挑める！ 何度でも挑めるんだ！ モルタリスは永遠のダンジョンなんだ！ 待っていてくれ！ あと少しだ。ここにさらに一人加わる！ 最高の音楽が！ リスイが帰ってくる！」

そうか、それはすごいな。

きっと私の想像を超えているに違いない。

王城の中も、ロビーから謁見の間まで見事なダンジョンなんだろう。

挑みたくて……攻略したくて仕方がない。

——だが、消す。

「やれ、シユウ」

『合点承知之助兵衛』

シユウの刀身が黒に染まる。

「なぜだ！ そこまでわかつているなら——」

私だって悲しい。

素晴らしすぎるダンジョンだ。

こんな素晴らしいダンジョンを自分の手で消すなんて。

涙も流そう。

シユウはますます黒くなる。

私の涙すら黒で塗りつぶしてしまうように。

「どうして……？」

約束したんでな。

一緒にダンジョンへ行く、と。

「馬鹿、な」

なんだ、わかってるじゃないか。

私は馬鹿なんだよ。

そして、全てはシユウに飲み込まれた。

6. 遙か久遠の貴方：音楽堂

あのダンジョン攻略から五日が経った。

ダンジョンは消え去り、王都はただの街になった。

悲しい。ほんと悲しい。

恐ろしいことに、ダンジョンから戻ってすぐアルヒ祭が再開。

みなダンジョンになった記憶が曖昧で、時間が昼になっていることに首を傾げていた。

私は例の音楽堂にいる。

今、ここには一人の人間を偲ぶ者たちが集まっていた。

偲ばれている人間は演奏席の前に置かれた棺の中で静かに横たわる。

かつて国民にソレダー王と呼ばれた男は、退位した翌日に死去した。

人々は病気がよほど進行していたと話すがそれは違う。

永遠に生きられないことを悟っただけだ。

『なあにカッコつけてるの？「永遠に生きられないことを悟っただけだ」キリッ』

そこ、式の途中だぞ。

静粛に。

葬儀は、彼が好きだった音楽堂で行われている。

私も隅っこのほうに参列させてもらっているわけである。

後で大々的に国葬が行われるため、ここにいるのは親しかった者。

それと社会的ステータスが高い者に限られる。

もちろん悠久の紙片の四人とロイエ、レゾンもいる。

ついでに私の隣にはフリージアが座る。

フリージアは世間的には一般人だが、彼女からすれば父親の葬儀だ。

私とロイエ、レゾン、悠久の紙片の面々で参列を推せば断れる者などいない。

ちなみにもう一人の息子のアヴラ王とやらはよくやっている。

いろいろな問題の後始末と新しい仕事の両方で休む暇もなさそう

だ。
カパアの両親らも城の地下で発見され、無事にクバール湿原へ返された。

両親らは無事だったが、いくらかは殺してしまったことは事実。いろいろと問題になるだろうが、私の知ったことじゃない。

送り届ける際にフリージアも連れて一緒にダンジョンを巡った。

夜にはカパアも加わり、三人で散歩を楽しんだ。

あとはこの葬儀が終わるのを待つだけである。

しかし、式というのは眠いな。

よくわからん服装をした、身分のよくわからん奴が、よくわからん話を長々としている。

まったく、眠くなるというものだ……。

……………。

……すやあ。

再び目を開けると音楽堂だった。

もしかして寝てた？

『ぐっすり』

周囲を見れば、人がほとんどいない。

悠久の紙片の四人に、ロイエとレゾン、それにフリージアが棺近くの席に座っている。

リベルが喋っているところを見るに、長話に巻き込まれている模様だ。

そんなことを思っているとリベルが席を立った。

他の三人も続いて、通路を歩く。

リベルが私に気づいて手招きする。

ほいほいと私は彼女へ近寄った。

「ご飯、食べに行きませんか？」

……理解が追いつかなかった。

「一緒に行きましょう」

他の三人も頷いて私を誘ってくれている。

——ここに最高のディナーが約束された。

私を誘ってくれるなんて……。

極限級パーティーは気遣いも極限級なのか。

『そうだね。あの二人がゆっくり話をできるよう、邪魔者を外に出す。最高の気遣いだね』

演奏席を見ればロイエとレゾンにフリージアが棺を囲んでいる。

……なるほど、そういうことか。

彼女たちも落ち着けて、私も幸せになるウインウインだな。

音楽堂を出て地平線にかかりつつある夕日を見た。

じきに日が暮れ、ご飯を食べて寝れば、あつという間に明日になる。

王都での問題は全て片付いた。

明日は王都を発ちフリージアを護衛して南西へ向かう。

彼女の住んでいた街へ赴く。

そして、彼女はソレダーが望みどおり、元の普通の生活に戻る。

……とは言っても、いろいろ知ってしまった。

完全に元どおりとはいかないだろう。

………はて？

何かがひっかかる。

音楽堂でソレダーは、彼女もモンスター化させ永遠に生きるのだ、みたいなことを言っていた。

でも、その前には普通の生活を送ってもらいたい、とも話していた気がする。

どちらも嘘を言っていたようには見えなかった。

だが、これら二つの言葉は相反しているのではないだろうか？

『同時に思ったら、確かに矛盾する』

だよな。

どっちかが嘘だったんだろうか。

『いいや。最初の直感通りだよ。どちらも嘘は言ってなかったと思うね』

は？

でも矛盾するって言ったじゃん。

『同時に思ったら』ね。時間差があつたでしょ』
時間差つて、お前。

半日くらいしかなかつたぞ。

そうか、あの男はダンジョンに当てられておかしくなったのか。

『その疑問——メル姐さんにしては鋭かつた。問題はまだ残つてるんだ』

どういうことだ？

カピアとフリージアの件も片付いた。

例の音楽堂も魔力が吸い尽くされ、勝手に演奏しない。

なにより一番重要であろうダンジョンの件も私自らの手でけりを付けたぞ。

『……エンディングまで言うんじゃない。——彼も言わなかつたんだから』

待ってみたがシュウは語らない。

おい、どういうこと——、

詳しく尋ねようと口を開いた——まさにそのときである。

音楽堂の方から音が聞こえた。

パイプオルガンの音だ。

『……馬鹿な』

音は列を成し、旋律となる。

そして、この曲は私も知っている。

フリージアの母が最初に作ったという曲だ。

どういうことだ！

音楽堂の魔力は全て吸い込まれ、演奏はできないんだらう！

それともフリージアが弾いているとでもいうのか!?

『違う。そんなちんけなものじゃない』

悠久の紙片の四人は立ち尽くしていた。

一人の例外もなく、目に涙を浮かべている。

『本当に来るとは……、やっぱりあのダンジョンは消して正解だった』

落ち着いて聞けば、私でもわかる。

音の一つ一つが超上級のボスモンスター並みだ。

しかも、それが連続で絶え間なく襲いかかってくる。
ドロップアイテムを拾う暇もない。

『ごめん。例えばダンジョン過ぎてまったくわからない』

なあ、音楽堂の中にいるのってまさか。

『元凶——もとい、リスイだろうね。ああ、この演奏だけ弾いたら帰るだろうから、音楽堂の中に入ろうだなんて思わない方がいい』

さすがに入ろうとは思わない。

ここで聞いているだけでも精一杯だ。

中に入れば、いったいどうなるかわからない。

今の心情に一番近い言葉はなんだろうか？

美しい、綺麗、素晴らしい……どれもかすってはいるがたぶん違う。

これはきつと「怖い」だ。

『それでいい。神のいる世界なんて人間が知るべきじゃないし。この世界は、神に近い人間がいるべき世界でも無い。それが例え、親だろうとだ』

なんだかよくわからんが、皮肉なものだな。

会いたくて、そして、聞きたくて仕方なかった人とその演奏が、死んでからじゃないと聞けないなんて。

それに死なないと親子三人が揃わないなんて……。

『……そんなことないさ。きつとみんなが満足しているよ』

そうだな……、私も信じよう。

ずっと前に死んだりスイが出てきたくらいだ。

きつとソレダーも棺の中で目を覚ましているに違いない。

彼らの冒険は終わってしまったが、それは彼らの終わりではない。

こうやってまたみんなが集まることもできる。

永遠のパーティーなんだ。

そう信じて私は立ち尽くす。

こうして王都モルタリスでの日々は終わった。

蛇足15話 「幻想、見果てたり（前編）」

1：歪みの力

王都モルタリスの北西に大地の裂け目がある。

南北に走る大きな断崖はポルタ渓谷と呼ばれ、人々の行く手を遮る。

遮ると言っても、渓谷の北と南には数本の橋が架けられており、通行の不便はほぼない。

そう、ただ一カ所を除けば……。

渓谷の中央部は南北では見られない霧に覆われている。

この地域をパンタシアと呼び、そこに架かる問題の橋を跨幻橋パンタシアと呼ぶ。

橋の片側からでは反対側が霧に霞んで見えず、まるで幻に橋が架かっているようだ、というのが所以らしい。

誰が、いつ、どうやってこの橋を築いたのか知られていない。

国の情報でも図書館からの情報にも、不明という文字のみが記されているのみだ。

絶対的に知られていることは唯一これのみである。

——渡りきった者は存在しない。

渡っている人間が消えるのだ。

反対側は間違いなく存在しており、両端に人が立って魔法や音での交信もできる。

しかし、渡って出会うことはできない。

体に縄を巻き付け、橋の端で人が手に持つといった実験も行われた。

縄は途中で進まなくなり、引くと片端が輪になった縄がむなしく地べたを引きずって戻るだけであったという。

ダンジョンに指定されてからも、このような実験は何度も行われているようだ。

ただし、人が消える理屈がわかるまでダンジョンとして挑戦することは無期限の禁止になっている。

そのためダンジョンとしてのランク付けもされていない。橋の両端に小さな柵が建てられ、関所まで付いている。

今回は国から許可も得たため、特別に挑むことが可能になった次第である。

クリア歴のないダンジョンとは素晴らしいものだ。

さあ、準備も万全。挑むとするか。

レッツダンジョン！

『ここ、ダンジョンじゃないよ』

……は？ 今何と？

『この橋はダンジョンじゃない』

出端をくじかれた。

なんなのこいつ。空気読めないの？

どうでもいいときは騒ぐ癖に、こういうときだけなんでマジメなの。

『ちよつと見せてあげようかな』

ん……うわっ！

なんだこれ。

突如、視界が薄い赤に染まった。

『魔力の存在量に色をつけたもの』

この赤いのが魔力？

『魔力の大きさを色で示したものだね。青が標準よりやや少なめで、赤くなるほど多い』

ほー。

青がまったくない。

周囲がほぼ薄い赤だな。

橋の先が真っ赤……というより黒に近い。

それで、なんかぐるぐる渦巻いているのはどういうこと？

『大規模魔法の破砕による歪み』

うん、ちつともわからんね。

つまり？

『橋の中心付近でとんでもない魔法を使った馬鹿がいて、しかも途中

で破壊されてる』

ふーん。

そうなのか。

『そう。時空間超越クラスの魔法、もしくは戦略級魔法を現象の途中で壊すところなる。収束していつてるだろうけど、この大きさだと元に戻るのに数千年はかかるだろうね』

そっか。

触るとどうなるの？

『どこかに飛ばされるよ。いしのなかにいるもあり得る。時間軸もどこになるのやら』

あつそう。

なんかもうどうでもいいや。

せつかく楽しみにしてたのにダンジョンじゃないと知って、完全にやる気がなくなった。

『この靄も魔力が混じってる。ただの靄じゃない』

はあ、とりあえずギルドに事情の報告だけはしておくか。

『いや、報告の必要もないね。こんなもん、わかる人が見ればすぐわかるから。ギルドじゃなくて国がここを管理してるのはダンジョンじゃないのが明白だからでしょう』

ええ。

それなら攻略許可とかわざわざ出さなくても良いだろ。

『極限級冒険者ならそれくらい気づくだろうし、他に何かわかるかもって微かな思案があったんだろうね。実はダンジョンじゃないですよ〜って聞いてたら来ないでしょ』

まあ、来なかったな。

で、来てみたはいいが収穫なし、と。

そういうことなら迂回して西のダンジョンにでも行く、ん……？

橋から眼を逸らす直前に、何か黒い点が視界の端に映った気がした。

今、なんか黒いのが見えなかったか。橋の上のあたりなんだが。

『いや、ちょうど死角に入ってたわからない。もしかしたら時空の歪

みによるものかも』

そんなこともあるものなのか。

《やややつ！》

今度はなんだか気の抜けた声が聞こえた。

周囲を見渡すが誰もいない。

黒い点も見えない。

《これはこれはメル殿！》

誰だ？ ……というかどこだ？

周囲を見渡すが、霧に囲まれているだけで姿は見えない。

思い出すと、耳からではなく頭の中に直接聞こえていたような気がした。

『どしたの？』

ん？ 聞こえないのか？

誰かが頭の中に話しかけてきてるんだが。

『……あそう』

ちよつと待つて！

なんでそんなに悲しそうな相づち打つの！

ほんとだから！ほんとに誰かの声が聞こえてるから！

《相変わらずですね》

何の話かまったくわからん。

そもそもお前はなんなんだよ。

《やややつ、これは失敬。ここが出发点でしたな。自分は幻竜！ 幻

竜ヌルです！》

ヌル？ 幻竜？

知らんぞ、そんなの。

『幻竜……、もしかしてほんとに声が聞こえてるの？』

だから、さつきからそう言ってるだろ。

幻竜ヌルって名乗ってるぞ。

『竜か。普通に話せないか聞いてみてよ。モンスター程度ならまだしも、竜クラスの直通会話は指向性が高すぎて聞き取れないんだよね』
ヌルとやら、普通に喋ることができないのか？

《喋るですか。灰坊や青助のように化ける必要がありませんな。難しいですが……メル殿の頼みとあつては仕方ない。やってみましょう》
そう言うと、靄が集まっていき人の形を取り始めた。

背の低い、ずんぐりと丸いフォルムの人間……ドワーフか？
でも、なんか違うな。なんだこれ？

「やつ！ こんなものでどうでしょう？」
うーん、どうだろう？

『オツケー、聞き取れる。指輪を渡してパーティー登録して。それでこつちから会話できるし、攻撃も無効化できる』
指輪を渡してあっさりパーティー登録をする。

シユウが話しかけても驚く様子はない。

『おお、ほんとに竜なんだ！ 幻竜専用スキルとか出てきたよ！』

「や！ これでも竜ですからな！ それでメル殿、さっそくですがダンジョンに行ってもらえませんか？」
行く。

『頼むから話をちゃんと聞いてから返事してよ』
しかしだな。

ダンジョンと言われたら挑むしかない。

「やややつ！ さすがはメル殿！」

で、どこに挑むんだ？

「アニクスイ螢林ですな！」

……はて、まったく知らないな。

ダンジョンの名前ならそれなりに知ってるつもりなんだが。
どこにあるんだ、それ。

「あの先です」

幻竜ヌルが短い腕で示した先には跨幻橋が架かっている。
まさかとは思うが。

「や！ 明察の極み！ 歪みの先です！」
いやいや。

あそこってやばいんだろ。

『それって何年前？ それとも——』

「ややつ！ 約一万二千年前になります」
は？

一万二千年前？
なにそれ、どういうこと？

『あれは空間だけじゃなく、時の歪みでもあるからね』
過去に行っちゃうの？

しかも大昔に？

『らしいね。で、戻ってこれんの？』
どゆこと？

『あの歪みは一方通行だよ。一万二千年前に行ったきりにならない
かってこと』

やばいじゃん、それ。

「や！ 心配有りません！ 戻って来られます！」
だってさ。

『こら、簡単に信じない。それで、どうやって戻って来られるの？』

「や！ 自分は竜の中でもとりわけ特殊でして！ 幻想の特性を持っ
てます！ それしかありませんがな！」

そう言って幻竜ヌルはヤハハハと笑う。

……？

幻想の特性ってなに？

「や！ 私は今でこそ、このような形を取り、ここに固定されています
が、本来は形もなく場所も不定でしてな。どこにでも、いつにでも存
在しうるものなのです」

いや、よくわからんのだが……。

『なんとなくわかったけど、それは信用する理由にならない』

「や！ それでは言い方を変えましょう。私は何度もメル殿と会って
います。まず、メル殿はアニクスイ螢林で、とある二名に出会います。
ここは固定です」

はあ、それで？

「……会います」

うん、それはわかった。

会ってどうなるの？

「そこから先は様々なパターンがありました……」

幻竜ヌルは言いづらそうに黙っている。

『それ以上は言わなくていいよ。パラドックスの問題になるだろうし』

「やややつ！ 助かります！」

久々の完全においてけぼりである。

それで、私はけつきよく戻れるの？

『いや、俺もそう考えてたけど、戻れるかどうかってさほど重要じゃ無いんだよね。どうせ過去に行ってもダンジョンに行くだけでしょ』

……それもそうだな。

で、私はダンジョンに挑めるのか？ そこが重要だ。

『挑めると思うよ。しかし、時間跳躍か。貴重な体験ができそうだ』

シユウのお墨付きも出たことだし、跨幻橋を進む。

横風が強く吹き、私の髪を乱した。

『あと一歩だね。時空間耐性は切ってるから、好きなタイミングで踏み出して』

視界から色が消えているため、ただの靄しか見えない。

よし、行くぞ。

「や！ メル殿、それにシユウ殿。よろしくお願いします。彼らと共に、どうか私を——」

その声は途中で途切れ最後まで聞こえなかった。

2：竜の力

周囲は靄がかかっており、よく見えない。

気づけば私は橋の上でなく湿った地面を歩いている。

幻竜ヌルもどこかへ消えてしまった。

先ほどまでは存在しなかった、ぼんやり光る木々の中をただただ歩く。

『なんか、地味……。もっと歪んだり、不思議空間を通るのかと思ったのに』

なぜだか悲しそうにシユウがぼやいている。
それよりもここは本当に一万二千年前なのか。
全然そんな気がしないんだが……。

『そうだねえ。実感が——構えて、右方向、何か来る』
シユウの声が変わったのを感じ、私も意識を切り替える。
時間は違うようだが、ここはすでにダンジョン。
それなら私のやることは一つだけだ。
ただ攻略するのみ。

霧の奥から小さな影がこちらにゆつくりと歩いてくる。
灯りをもっているのか、発しているのか知らないが、白い光が上下
左右に揺れている。

「に、人間……」

先に喋ったのは影の方だった。
こちらからもすでに姿は見えている。

見覚えのある姿だ。
低い背に、ずんぐりとした丸っこい体系。
ドワーフと違うのは髭がないことと手足が短いこと。
その短い手にはなにやら灯りの入った黒っぽい瓶を持っている。
お前、幻竜ヌルか……？

ずんぐりした存在は、返答も無く背を向けて逃げ出した。

『逃がすな！ 追え！』

なんでそんなに悪党っぽい言い方なの。

『なんか雰囲気で、つい。それと、あれは幻竜じゃないね』
じゃあ、なんなんだ。

あんな種族は見たことがないぞ。

『さあ、なにしろ一万二千年前だからね。本人に聞いてみたらいいん
じやないの。あつ——』

なにやら叫び声が聞こえた。

ちようどさっきのやつが逃げた方角だ。

叫び声の他に、なにかの雄叫びも聞こえてくる。

『助けよう。情報も集めたい』

そうだな。

少し走るとずんぐりした存在が、猿みたいな三頭のモンスターに囲まれていた。

一頭が私に気づき攻撃を仕掛けてきたがあまりにも遅い。

シユウを軽く振って消滅させる。

さらに、続けて襲ってきた二頭も切り捨てた。

アイテム結晶の光が三つ、霧の中で煌めいている。

『初級だね』

それくらいだな。

単純な強さは、初級も中級も今ではもう区別がつかない。

だが、中級だと初級と比べ、もつと連携を上手く取ってくる気がする。

一頭が死んだ時点で、仲間を呼ぶか逃げるかするだろう。

さて、私はずんぐりした存在に歩み寄る。

ずんぐりした存在は尻餅をついたまま、ずりずりと後ずさる。

私はメル。お前の名前は？

「お、おで、メル」

それだけ言うと、また黙ってしまう。

しかし、メルと言うことはだ。

『幻竜の関係者だろうね』

シユウが言うと同時に、メルの持つ灯りが青から赤に変わる。

「あ、あいつらがまだ来るだ」

あちこちから鳴き声が響き、さらに蠢く気配を感じる。

初級レベルなら一斉に襲いかかって来てくれれば、むしろ一気に斬り伏せるチャンスでもある。

さあ襲ってくるぞと思った瞬間に、猿共は何かを察し一斉に逃げていった。

拍子抜けもいいところだ。

「メル。遠くへ行ったら危ないと言っただろう」

緩やかで穏やかな男の声が霧の中で木霊した。

メルは声の主へ走っていき、そのまま後ろに回って姿を隠した。

「ランダン、白く光った」

黒のローブを纏った男は、ヌルの頭に手を置き撫でている。

「助けて、もらっただ」

男はこちらを見つめて軽く頭を下げた。

「ヌルを救って頂いたようでありがとうございます。私はゼバルダ。貴方は、見たところ人間のようですが？」

『ほお』

ゼバルダって、ゼバルダ？

「……ゼバルダですが、それが何か？」

いや、ちよつと聞き覚えがな。

それと私はメル。冒険者をやっている。

アニクスイ螢林を攻略しに来た。

「この森に逃げてきたのではないのですか？」

逃げる？

ダンジョンに？

「街は、大変だと聞きますが？」

大変？

すまん。

世事には疎くて。

「そうですか。ここではなんです。ヌルを助けてもらったお礼もかねて、食事でもご一緒しませんか」

私は首を縦に振った。

不思議な男だ。

威圧感はないが、言葉に力を感じる。

『ないと思うけど、念のため言っとく。戦おうなんて思わないでね。たぶん強いよ』

やっぱり強いのか？

なんか雰囲気あるよな。

あと、たぶんを付けるなんて珍しいな。

いつもならはつきりと弱いなり強いなり言い切るのに。

『身体的な強さならせいぜい中級の上か上級の下なんだけど、装備が

釣り合っていない。いろいろ隠してる。とにかく不気味だね。それに――』

それに？

『いや、いいや。一万二千年前で、ゼバルダと来たらそういうことなんだろうね』

どうということなんだ？

返答なし。

まったく、どうということなんだろうね。

林を進み、盛り上がった土とそれを覆う蔦で行き止まりになっているところで、ゼバルダは立ち止まった。

ゼバルダが指で軽く蔦に触れると、土を覆っていた木の蔦がするすると動き入口ができあがる。

隙間を通っていくと、鍋にベッドといった生活感のある空間についた。

三人で食事を取る。

ヌルは疲れたのかゼバルダの膝を枕にして眠ってしまった。

ゼバルダは今もフードを被り続けている。

「メルさん、貴方はどこから来たのですか？」

跨幻橋。パンタシアからだが。

「跨幻橋。パンタシア……、すぐ東にあるパンタシア都市群のことですか？」

『えっ？』

たぶんそれ。

ちよつと驚いたな。

パンタシアってこんな昔からあったのか。

『俺はかなりびびくりした。「どこそこ？」ってなると思ってたのに』
驚きつつも話は続く。

「そう言えば、奇妙なものを付けてますね」

私の手を見てゼバルダは眩く。

「その指輪はかなり奇怪な作りがされています」

まあ、そうだな。

私も詳しくは知らんが。

そういうのは見てわかるものなのか？

「ええ。物作りが特技なもので。だいたいのは見れば構造を把握できます。こちらにもそれほどほどのものを作る者がいるんですね。複雑ではありますが、作れないことはないでしょう」

ほう。

それはすごい。

「ただそれよりも——」

視線が手を離れ、傍らに投げ捨てていたシユウに移る。

「そちらの剣は理解不能ですよ」

そうなんだ、いつも理解できなくて困ってる。

パーティーリングは……、だめだ予備が無いな。

余ってたらやろうと袋を探ったが、幻竜に渡した分で指輪はなくなってしまうていた。

次にギルドへ行くことがあれば補充しておこう。あると便利なのだ。

『ランタンのこと、聞いてみて』

ランタン？

『ヌルが持ってた灯り』

ああ、あれね。

「あれは私が作ったお守りです」

尋ねるとゼバルダはすぐに答えてくれた。

なんでも火の色の变化で、持ち主の危機を知らせてくれるらしい。

赤が危険。青が安全となっていると話す。

『お守りい？ 馬鹿言えー！ あれはそんな生やさしいもんじゃないだろ！』

シユウはなんか騒いでいる。

赤が危険で、青が安全……はて？

最初に会った時は、白だったような気がするが。

「白は、持ち主と仲良くなれる存在が近くにいることを示しています」

ゼバルダは小さく微笑み、ヌルを見下ろした。

よくわからない奴だが、少なくとも悪い奴では無いと感じた。

おそらく彼も灯りの色の話をヌルから聞いて、私を信用しているのだろう。

「この子も人間と上手く折り合いが付きませんで。私が以前住んでいたところでも、自分たちと違う存在は除け者にされてしまっていました。除け者も力があれば孤高になるんでしょうが、みながみなそうとは限らない」

誰か一人でも自分を理解してくれている存在がいるだけで救われるんです。

最後の言葉は彼の膝で眠るヌルに言ったのか、それとも――。

翌日になってダンジョンの攻略が始まった。

ゼバルダとヌルも付いてきている。

戦うのは基本的に私一人だ。

ヌルは、私が倒したモンスターのアイテム結晶を右と左と集めている。

ゼバルダは私たちをぼんやりと眺めるだけだ。モンスターも彼は襲いかかる気配がない。

むしろ彼から逃げているように見える。

ゼバルダの戦闘は初めて見る種類のものだった。

木の蔦や枝が動き、ヌルを狙うモンスターを追い払っている。

魔法かと思ったが、詠唱はしておらず、その手には杖すら握られていない。

それ、どうやってるんだ？

木を操る魔法とか初めて見た。

「いえ、魔法ではありません。私は、体の半分が木で出来ていました」
ゼバルダが自身の袖を捲る。

そこには白い肌と毛のように伸びる幾本の枝と腕に絡む蔦があった。

『やっぱりか』

なんだ気づいてたのか。

しかし、すごいな。

こういうのは初めて見た。

「あまり……、驚かれませんか」

まあ、そうだな。

腕から翼が生えてる奴も見たことがある。

それに完全に人間じゃない奴らともつるんでた時期もあったし。

「そうですか。こちらにもそういう人がいるんですね」

私は特殊だから参考になるかどうか。

そもそも時代が違うし。

「それでしたらヌルとも——」

『なんだろう?』

ゼバルダの言葉は最後まで紡がれなかった。

鳥たちが一斉に枝から飛び立ったのだ。

枝の上からこちらを見ていたモンスターも一目散に逃げ始めた。

揺さぶられた枝から落ちる葉が私たち三人の上を舞う。

ヌルも怖くなったのかゼバルダの膝にしがみつく。

ゼバルダはヌルをなだめると近くの木に手を当てた。

「こちらです」

ゼバルダが先導し、私が追う。

ヌルはゼバルダの背に器用にくっついてる。

『いや、鳶でヌルを括り付けてるね』

よく見ると、ヌルの腕と胴体に細い枝が巻かれていた。

木々を縫って走っていると、逆方向に逃げる動物やモンスターと擦

れ違った。

今では周囲に生物の気配は感じられない。

日の光は強くなり、とうとう林から抜けた。

開けた光景の先には、灰色の雲とその雲を支えるように何本もの柱

が立っていた。

すげえ!

ずいぶんとでかい柱だな。

この時代にはすごい建物があるもんだ。

『違う。建物っていうのはあれの下にあるやつだよ』

よく見ると柱の下には点々としていたものがあり、それが建物だということになる。

遠くから見ていたためか、ほとんど点にしか見えない。

では、さらにその先に見える、複数の大きな柱はなんなのだろうか？

わずかだが太くなったり細くなったりしている。

というか動いてないか？

『竜巻だよ』

竜巻？

「竜巻ってあの竜巻か？」

外で何度か見たことはある。

風の高位魔法として使ってるエルフもいた。

しかし、あれは……。

『比較にならないほど大きいね。それにあの本数は異常だ』

ああ、ここからでもあれだけ大きく見えるということは近づけば相当でかいだろう。

さらに、その竜巻が一本ではなく、軽く五本は蠢いている。

「ついに来ましたか」

ゼバルダが小さく呟いた。

あの竜巻について知ってるのか？

「次から次に街が竜巻に襲われていると、逃げてきた人から伺いました。第一都市アナリスに続き、第二都市クルベシムも消滅してしまつた、と」

なんだかよくわからんが、すごいことになっているようだ。

こういうことはよくあることなのか？

「いいえ、そんなことはありません。私も何度か竜巻は見ましたが、あの規模は初めて見ました。それに一カ所ならまだしも街が次々と消えているということは……。」

ということとは？

「誰かが意図的に発生させているということでしょう」

『うん。間違いなく自然発生ではないね』

……あの規模をか？

「人間にはおろか、長耳族でも無理でしょう」

『そうだね。火と水と風の魔法で複合させて、数百人規模で行使してようやく作れるかどうかかな』

じゃあ、誰がどうやってアレを作ったんだ？

「あのような現象を起こせる存在を、私は知っています」

神か？

「神？ いいえ、違います。竜です」

ゼバルダは神妙な面持ちで呟いた。

ああ。なるほどな。

たしかに白や緑はすごい魔法使ってたな。

白は時間停止に加えて氷魔法を連発して、緑は水の激流を出して津波を止めた。

「竜に会ったことがあるんですか？」

倒したこともある。

出会った中で倒せなかったのは緑だけだな。

倒す必要もなかったし、なにより守人みたいな奴を突破できる気がしなかった。

『幻竜も倒していないよ』

そう言えばそうだ。

でも、あれと戦いになる気がしないぞ。

「メルさん、どうやら貴方は私が思っていたより遙かに強いようですね」

強いというのは少し違う気がするな。

借り物の力を利用していただけだ。

ん、どうかしたか？

「……昔、貴方と同じことを言った人がいました。その人は――」

なにやら虚ろな目で私を見てきていたが、首を振ってすぐに元に戻った。

「失礼。それで、どうしますか？」

どう？

どうとは？

「戦うか、放っておくか」

戦うと言っても竜巻が相手じゃあな。

そもそも、まだ姿を見たわけでもないから竜と確定したわけでもない。
い。

『いや、竜であつてるみたい』

視線を竜巻に戻すと、その一つの色が薄くなっていた。

その竜巻の中からそいつは現れた。

全身は青みを帯び、ゲロゴンほど大きくはなさそうだが、少なくともここから特徴が見て取れるほどの大きさはある。

トカゲみたいな頭に、六本の羽が背中から生えている。

細身の体型に腕と脚が生え、その爪は鋭い。

十分に距離はあるが、ここでもその威圧感が窺える。

ヌルがゼバルダの脚にぎゅつとしがみつく音が聞こえた。

「降りますね」

ゼバルダの言葉通り、青竜はゆっくりと地上に降りた。

すでにその足下に建造物は残っていない。

点々としていた建物は全て消え去ってしまった。

『いや、待った。何かある』

よく見えないが、言われてみればあるような気がしないでもない。

青竜もその何かを凝視している。

その大きな腕をゆっくりと上げ、小さな何かに向け振り下ろした。

腕を振り下ろした直後に青竜は飛び跳ねた。

視界が揺れるほどの力で大地を蹴ったことがわかる。

青竜はそのまま空を飛ぶこともなく、蛙のように地面に墜ちた。

脚で着地はできなかった。そもそも脚がすでになかった。

体を起こすにも腕すら青竜から失われている。

青竜の悲鳴が空気を震わせる。

『この時代にはもう存在したのか』

なにがだ、と問う必要もなかった。

「視界に鮮やかな色が付く。」

周囲の景色が青の中で竜巻が薄い赤の柱として立つ。

そして、真つ赤に彩られた青竜のシルエツト。

その青竜の下には禍々しい黒が渦巻く。

『え？ 渓谷はこの後にできた？ でも、それだと……』

竜巻が次々に薄く消え去り、竜の姿も萎んでいく。

「殺りましょう。今が好機です」

丁寧な物言いだ理解が遅れたが、かなり物騒な台詞だった。

しかし、たしかに今がチャンスなことは違いない。

「ヌル。ここで待っていてください」

それでもヌルはゼバルダの脚を掴んで離さない。

首をぶんぶん必至に横へ振っている。

一人でいるのが怖いだろう。

「ちよつとランタンを貸してもらえますか」

ゼバルダがヌルの頭を撫でる。

小さな手からランタンを受け取ったゼバルダが、それを私に向け

る。炎は白く燃えあがる。

次に、ランタンをヌルへ向けた。中の炎は同じく白に煌めいた。

そして、ゼバルダはランタンを青竜のいた方へかかげる。

炎は——青く揺らめいた。

「ねっ、大丈夫です」

にこりと笑顔をヌルに見せた。

「おでもっ！ おでもただがう！」

やや震えつつも、それを隠すように大きな声を張り上げる。

ゼバルダは腰を沈め、ヌルの高さに顔を合わせる。

「ヌル。戦とは、武器を持って斬りつけあうことだけではありません。

彼らの帰りを待ち、無事を祈り、生きて帰りたいと思える場所を作り、

留守を預かることもまた戦なのです。今回は貴方にその大任を与え

ます」

頭から肩に手を移し、ゼバルダはヌルの瞳を見つめた。

ヌルは確と領き、その任に応じた。

走る私に、ゼバルダが空を飛び並行する。

手に持った灰色の風車が、くるくると回っている。

このおもちゃのような風車が、彼の身体を宙に舞わせているようだ。

それ、私も欲しい。

超便利そう。

「素材があれば作りますよ」

うむ。

ちよつと集めてみよう。

『素材はともかく、使いこなせないと思うよ。魔力操作が必須だし』

そういうものか、残念だな。

それより力が弱っているとはいえ、相手は竜だ。

パーティーリングもないから、私に任せてくれてもいいんだが。

いざとなればさっさと逃げるし。

「大丈夫です。竜とは些かならず縁がありましたね。私なりの誓約があるんです」

彼の横顔はこの先にいるはずの青竜を向き、表情がよくわからない。

ついに目標を視界に捕らえた。

目標は最初の姿と変わっていた。

宙に浮いてこそいれど、大きさは人と同程度。

脚は失われ、片腕もなくなり、六枚の羽で地面のやや上を飛んでいた。

「あああああ！　いてええええええ！　なんでこんなもんがッ！　ココにあるんだア！」

私たちが近づいても、こちらに気づいてないのか背中を向いて叫んでいる。

「貴方は竜で間違いないですね？」

ゼバルダが淡々と青竜に確認を取る。

私はその横ですでにシユウを構えて臨戦態勢だ。

「あああ!？」

青竜が宙に浮かんだまま、身体の向きを変えてこちらを睨む。

縦に割れた瞳が、私とゼバルダを捉えている。

「竜で違くないですね、とお尋ねしました」

ゼバルダは青竜の睨みなど気にせず、先ほどの質問を確認する。

「この……この、カス共がア！」

叫びとともに青竜の羽がうつすらと青く光る。

『体勢を低くして!』

シユウの声の意味を理解したのはすでに宙を飛んでいた後だった。

全身に風が叩きつけられ、立っていることもかなわず宙を飛んでいた。

青竜を見れば、またしても羽が青く光った。

今度は下向きの力が私に襲いかかる。

空中で何もできる事はなく、そのまま地面に叩きつけられる。

叩きつけられこそすれど、痛みなどないに等しい。

むしろ地面に降ろしてくれて感謝しているくらいだ。

いまだ風により地面に抑えつけられている感覚はあるが気にするほどでもない。

砂煙が晴れ次第、このまま全力で地を蹴って、疾走し突き刺すのみ。

いくぞ、シユウ。

『待った。あれ見て』

砂煙が晴れて二つの影が見えた。

一つの影は宙に浮き、六枚の羽を光らせる青竜。

そして、もう一方は黒のフードを手で押さえ、最初の位置から動いていないゼバルダだ。

どうしてあの突風を浴びて微塵も動かずにいられるのだろうか。

もしかして最初の突風は私にだけ向けられたのか？

『いや。全方位に向けられてたよ。彼の足下を見てみなよ』

ゼバルダの足下に目を向けると、彼の横の地面が大きく抉れてい

る。

彼の立っているところと、その背後の地面だけが最初と同じ様子で残っていた。

今もなお、彼の周囲にある土は削られていつている。

その嵐の中で彼だけが静かに立ち尽くす。

『脚から根を下ろしてるね。それにあの手に持つてるのは——』

よく見れば、ローブの下から根が出て地面にささっている。

さらに彼の片手に持った灰色の風車が猛烈な勢いで回る。

「乱暴ですね。それで、質問の答は『竜』ということでしょうか？」

青竜の羽の光が収まる。

「人間風情が俺に対して問いを投げる？」

青竜はトカゲのような顔でひやつひやつと笑う。

「カスはある……、カスらしくう」

笑いが止まり、またしても六枚の羽が光り出す。

今度は先ほどのような淡い光ではない。

まばゆいくらいの青だった。

「逃げ惑うかア！ 地面に這いつくばっていりゃいいんだろおよオ！」

それさえ嫌だって言うならア！」

青竜が叫ぶと横からの風が私を襲った。

どうやら私だけではない。目に見える範囲全てで、土埃が青竜を中

心に渦巻き始めている。

何が来るのかと構えたが、風量は思ったほどではない。

これなら——、

『……無敵スキル使うから』

無敵スキルを使う。

それはつまり、他に打つ手なし宣言である。

なぜだ？

別に使わなくてもいけるだろ。

一気に突っ走って突き刺すだけだ。

『よく見て。あいつの周囲で塵が上昇してるでしょ』

……ああ。

でも、それがどうかしたのか。

『この距離だと、たどり着く前にメル姐さんがお空に飛んじやうね』

黒竜のスキルを使って無効化すればいいだろ。

『いや、あのスキルは攻撃と魔法を吸収するものだから、新しい風を起こす魔法は止められても、すでに生じている風は止められない。それは攻撃でも魔法でもなくてただの現象だから。それに、反応速度がわからない。予想よりも速かったら上に飛ばれる。そうすると本当に打つ手が無い。なにより——あいつの前であのスキルを使うのは不味い気がする』

ゲロゴンブレスは……、同じか。

発動までに時間がかかるから逃げられる。

『パーティーリングをあいつに渡せていたら、地面から根を這わせて青竜の動きを止めるようこつそり伝えられたんだけどね』

ないものをどうこう言ってもしょうがない。

『まったくそのとおり。——だから、あるものを使う』

それで無敵スキルか。

だが、逃げられないか？

『今から起こることは想像がつく。間違はなくあいつの必殺技だろう。攻撃と同時に防御も兼ねる大技だけど、間違はなくあいつ自身の視界を塞ぐ。そこで一気に突き刺して終わりだ』

よし。

それなら私は立ってればいいな。

位置は覚えたから、後は攻撃するタイミングを教えてください。

『オツケー』

風がいよいよ強くなってきた。

——そう思えた感覚が消え去った。

視界は広がり、音はなく、ここに立っているという感覚すら残っていない。

何度体験してもあまり良い感覚ではないな。

無敵スキルは発動された。

これで詰めだ。

………待った。

青竜の大技って何だ？

『今さら？ 最初に見たじゃん。竜巻だよ』

そうだった。

人を、家を、街ごと消し去る風の柱。

それは確かに必殺だ。代わりに、風による塵芥で奴自身の視界が塞がるだろう。

『上昇気流を伴う風の渦の半径を狭めてやれば、回転速度は高まる。この範囲の風を狭めるんだ、十分な竜巻ができるだろうね』

そんな理屈はどうでもいい。

無敵スキルだから私は無事だろう。

あいつはどうなる？

私の前には、相変わらず棒立ちのゼバルダがいる

『大丈夫でしょう。これくらいでくたばるようなら、あいつは——』

そんなことを言ってるうちにゼバルダが動いた。

動くと言っても腕をローブに突っ込んだだけだが……。

すぐにローブから手を出した。

その指の隙間には先ほどの灰色の風車が挟まっている。

その数は四。さらにもう片方の手にも四つ挟まり合計八つ。

『まさか』

私も想像がついた。

そのまさかに違いなかつただろう。

彼の両手に挟まれた八つの風車が猛烈に回転を始める。

一方向に回転していた渦が、徐々にばらばらの方向を向き始めた。

『もう、全部あいつ一人でいいんじゃないかな』

シユウの眩きと共に音や風のぶつかる感覚が戻ってきた。

そしてついには風は落ち着き、砂埃も薄れ視界がクリアになった。

中心には目を見開いていた一匹の青竜がいた。

「さすがに七つは使っちゃいますか」

凝視されている方は至って平然としている。

両手に持っていた風車が、一本を残して灰のように粉々に崩れていつている。

「なんだっ！　なんだそれはッ!!」

「ただの道具ですよ」

本当に何でもないことのようにゼバルダは呟いた。

「それよりどうして貴方は、街を襲っていたのですか?」

あいかわらず落ち着いた声で、青竜に疑問を投げかける。

「どうして?　どうしてだつてえ〜?」

青竜はヒヤヒヤと笑う。

「そんなの決まってるだろ。楽しいからだよ!」

「楽しい?」

「なんだろう?」

嫌な気配を感じる。

この場にはいけない。

そんな感覚だ。

「オマエらカス共が作った建物をな。粉々にすると超キモチイイんだア!」

青竜は片腕で口元を抑えるように笑い続けている。

「試練を課しているとか、人間を嫌っているから——という訳ではないですね」

青竜はさらに笑う。

今度は口元を抑えることすらしない。

「おいおい。勘違いしてくれるな。俺はオマエらカス共が大好きなんだ」

急に笑いを止めて、真顔で語り始める。

「こうやってぶっ壊しても、数千年ほど寝て起きたら、また新しいおもちゃを作ってくれている。文明とか呼んでる戯れ事を何度も何度も繰り返してくれる。まったく学習しないオマエらカス共がッ!　俺は、大好きだ……」

そこまで言うとき青竜はきしきしやきしやとまた笑い始めた。

「やはり人が竜とわかり合うことなんてありませんね。そんなものは

幻想でしょう」

ゼバルダも笑い始めた。

しかし、その笑いは乾ききっていた。

「これだから——これだから竜は嫌いなんです。半歩譲って灰は許すとして、黄にしても、紫にしても、あいつにしても」

ゼバルダはそう言うフードを下ろす。

落ち葉のような茶褐色の髪が露わになった。

腕だけではなく首元や耳、頭からも枝が伸びている。

「メルさん、離れていてください。なるべく遠くが良いでしょう」
ゼバルダは優しい微笑みを私に向ける。

その笑みはこの場面でするには、あまりにも柔らかで不気味さしか感じられない。

「ヌルに戦う姿は見せたくなかつたですからね」

言葉を吐き出し、ゆったりとしたローブを脱ぎ捨てた。

『ひえ……』

相変わらず彼の両手は何も持っていない。

腕に枝があつたように、体中からも枝が生じ、蔦が巻き付いている。

「な、ななんだあお前は!」

青竜の声がうわする。

私も思わず後ずさりしてしまった。

枝が出ているとか、そんな身体の特徴などは驚くに値しない。

驚愕はその枝と蔦の先にあるものだ。

無数に伸びる枝の先にはそれぞれ道具や武具が絡まっている。

灰色の砂時計、紫色のノコギリ、黄色の杭、黒の盾……と同じ色でもさらに別の種類がある。

それらがゼバルダの体から無数の歪な腕のようにぐにやぐにやと伸びていく。

おい、シユウ。

なんなんだあれは？

『竜から作ったアイテム——いや、兵器だよ。一つ一つにキチガイじみた効果も織り込んで。あのローブも黒竜の皮から作られてるね。』

収納量と気配を誤魔化してたんだ』

確かにあのローブの見た目以上の武器が出てきてる。

それに……、ああ、だめだ、これはいけない。

背中からぞわぞわしたものが体を巡る。

これ以上ここにいてはいけない。

——逃げなければ！

私はゼバルダに背を向け駆けだした。

脇目で見たのは、同じく逃げようとした青竜が地面から伸びた蔦に捕まる瞬間だった。

『そっちは駄目！』

シユウは叫ぶが、足はもう止まらない。

「フィロス。シグ・ゼバルダは忘れない。君と誓った約束を——」
声は静かだ。

しかし風は唸りを上げている。

これから起こる惨劇に大地が耐えられるだろうか。

「世界のあまねく竜どもに——僕らが望んだ殺戮を」

優しい声だが慈悲は無い。

背後から青竜の断末魔が流れてくるのを聞きながら、私は全力で駆け抜けた。

3：チートの力

気づけば靄の中を歩いていた。

もう大丈夫だと感じ、足を緩めるとすでに周囲は靄だった。

『あのね、メル姐さん。考えなしに時空の歪みに突っ込んだら洒落にならないよ』

いや、あのときは逃げるのに必死でそんなこと考える余裕がなかった。

あそこにいたらもつとやばいものに巻き込まれていた気がする。

『まあ、間違いなく巻き込まれただろうね。配慮はしてもらえただろうけど』

青竜は、どうなったんだろうか。

『俺たちの心の中で生き続けてるよ』

それ死んでるじゃん。

『生きてないとは断言できる』

だよな。

ものすごいくやばい気配だったし。

……でも、倒したとところで復活してしまうじゃないか。

『メル姐さんが倒したら復活するだろうけど、あいつが倒したら復活しないだろうね。材料になるだけ。死んでいても言い難い。モンスターが近寄ろうとしなかったのは、それがわかってたからだ』

復活しない？

どういうことだ？

『まあ、それはさほど重要なことじゃない。それより、ポルタ溪谷の誕生はあのときだろうね』

えっ？

ポルタ溪谷って跨幻橋が架かってたところだろ。

『うん。ぱつと見、あの竜製アイテムはどれも戦略級の代物だったから。それをあいつ、少なくとも四つは青竜に使った。でも……』

うん？

でも、なんだよ？

『一番やばいのは、あのランタン。他の竜製アイテムを全部寄せ集めても、あれには遠く及ばない』

ランタンってヌルが持ってた灯りだろ。

なんか色が変わって持ち主に危険だの仲良くなれるだの知らせるだけじゃん。

どこにやばさがあるというのか。けつきよく仲良くなる前に別れてしまった私への揶揄なの？

『アナライズスキルという便利なものがあつてね。生物以外なら竜製アイテムでも大まかには読み取れる。だけど、あのランタンは表面しか読み取れなかった』

それはつまりどういうことなんだ？

『あれは竜程度を加工したものじゃない』

竜程度って、お前。

竜だぞ、竜。

『竜程度で間違いないよ。あのランタンは神の領域に足をつっ込んでる。外側の容器はただの黒竜の頭蓋だけど、中の炎は——おっと、足止めて』

シユウの真面目な声を聴き、反射的に構える。

そこで何やら金属の叩きつけ合うような鋭い音が聞こえた。

『やれやれ、いつの時代のどこに飛んだのやら』

霧が徐々に晴れて行き、どうやら私は高台の上に立っていた。

その端に進めば、眼前にはどこまでも広がる平原。

そこでは有象無象の人間が蠢いている。

彼らは甲冑に身を包み、手には剣やら槍やらを持ち互いに斬りつけ合っている。

右を見ても、左を見てもどこもそんな光景だ。

『戦争ねえ。武器と鎧がずいぶん古めかしいなあ。魔法も使われてない』

戦争……。

話で聞いたことはあるが、実際に見るのは初めてだ。

人間と人間が斬りつけあい、死屍累々で見るに堪えない。

暇な奴らだ。そんなに死にたいならダンジョンへ行けば良いのに。

「貴様、どこの所属か!？」

いきなりの怒声に振り返ると白銀の鎧を着込んだ女がいた。

真っ赤な剣をたずさえ、切っ先を私へと向けている。

『赤髪ロングのストレート。これは女剣士の香ばしいスマルがしますな』

シユウが抜けた評価をしているところを見るに、さほど脅威はないのだろう。

『確かに胸囲は無いね。小さいのは本来減点要因ですが、まな板の方が映えると思わせる凛々しさがある。ううむ、実に良い』

駄目だ。意思疎通ができない。

「何をぶつぶつ言っているか！ 貴様、エルネアの斥候だな！ 覚悟

！」

女は距離を詰め、斬りかかってくる。

そろそろだなあと思ったところで、女剣士は足を崩してこけた。助走の勢いがあつたため、そのまま私の足下へ転がってきた。

「なん、だ。これは……」

慌てて上体を起こそうとするも、それすらできていない。

久々に能力半減スキルで人間が倒れるところを見た。

通常は何も着ていない状態でも起き上がれない。

『お、やるじゃん』

能力半減スキルを受けつつも女剣士は上体をわずかだが起こしつつある。

見るからに重そうな鎧に包まれているにもかかわらずだ。

「くっ、妖術……忌術士か。卑怯者っ！」

女は地面に這いつくばったまま、私を睨み付ける。

そんな睨まんでもいいでしょ。

『バッカ！ これだよ！ これがいいんだ！ この反抗的で悔しそうな目つき！ 次に言うのは「こんなことをしてただで済むと思うな！」に違いない！』

そんなわけ——、

「貴様、こんなことをしてただで済むと思うなよ！」

あつたよ。

『しかし「妖術」に「忌術士」ときたか。俺の見たアーカイブに魔法をそういう風と呼ぶ記録はなかった。そうなると、ここは……どつちな。うん、ひとまず情報収集といこう。俺をくつつけてみて』

シユウを女剣士に躊躇いつつ近づける。

正直あまり触れさせたくない。面倒なことになること疑いない。

『くっ……殺せ！』

「くっ……殺せ！」

シユウが近づいたところで二つの声がシンクロする。

なにお前、読心のスキルでも使ってるの？

『そんなつまらんスキルはないよ』

「何を言っている?」

どうあつても面倒なことに変わりはないと悟り、シユウを女にくつつけた。

女剣士は齒を食いしばりつつ、私をいつそう強く睨む

『睨まれると、興奮するんです』

「な、なんだこの声は?」

私も知りたい。

なんだこの不気味なほど優しげな声は。

『ふふつ、睨まれるとね。興奮するんですよ』

同じ言葉を繰り返す。やたら穏やかな声で。

なんだろう。ちよつと怖くなってきた。

「くつ、頭に直接。忌術士は別にいるのか。卑怯者め! 出てこい!

姿を見せろ!」

最初から出てるんだが。

まあ、これはわからなくて無理もない。

「貴様は剣士なんだろう! その剣は飾りか! 正々堂々と私と勝負しろ!」

シユウを相手にできないと悟り、矛先を私に変えてきた。

『その女は剣士ではない。盗人だ』

盗人違う。

確かに私は剣士ではないかもしれない。

だが、そう——冒険者だ。

「……冒険者? 冒険者とは何だ?」

『およう?』

はあ?

そりや、冒険者ってのは——。

次の言葉が出てこない。

思考が宙を彷徨ってしまった。

果たして冒険者とはいったい何なのか?

ことあるごとに私は自分自身を冒険者と名乗ってきた。

そして、それは当然のように受け入れられていた。

だが今、その肩書きに疑問を投げかけられた。シンプルに言えば冒険をする人で違いはないだろう。

そも冒険とは何か？

ダンジョンに挑むことか？

いや違う。ダンジョンに挑むことのみを冒険と呼ぶ訳ではないだろう。

実際にダンジョンに潜らなくても立派な冒険者たる人物は何度も見てきた。

逆に冒険者じゃないのにダンジョンに潜る奴も見たことがある。はて？

冒険、ひいては冒険者ってなんだ？

冒険者ギルドに所属している者だろうか？

いや、違うな。

ギルドは冒険者の集まりではある。

でも、入る前から冒険者のやつだっているはずなんだ。

その逆に、入ったら誰でも冒険者になるわけじゃきつとない。

じゃあ冒険者とは？

困ったときのシユウ頼み。

こいつなら教えてくれるに違いない。

『俺が思ってることを言えば、メル姐さんは納得するだろう』

ほう。自信ありげだな。

聞かせてもらおう。

『——でも、俺は言わない。なぜだかわかる？ 出会った当初はまだしも、今は確かに「メル姐さんは冒険者」だと思ってる。というよりもメル姐さんは冒険者でしかない』

さっぱりわからんな。

馬鹿にしてる？

『冒険者であることのみが、メル姐さんの存在意義なんだ』

否定も肯定もされなかった。

内容はよくわからんが、馬鹿にはしていない。

そこそこ長い付き合いだ。それくらいはわかるようになってる。

『そして、存在意義は他人に与えられるものじゃない。自分で見つけ出すもの』

わからんような、さっぱりわからんような。
やっぱりわからん。

『つまりるところ。冒険者は何かって問いの答えは、メル姐さんは何かって問いの答えにつながる。俺から「メルって女は、これこれこういう奴なんだよ」ってわかったように言われるのも癪でしょ』
むかつくな。

それに、なんか……なんだろう。
この思いは、名状しがたいものがある。

『実は俺もそうなんだよね。だらだらそれらしく語ったけど、要は感情論で言いたくないだけでもある』

……そっか。

冒険とは——冒険者とは何か？

私も少ししじめに考えてみることにしよう。

女剣士はシュウとの空気を読んで何も言わなかった。

——という訳ではなく、状況を静観しているだけだろう。

状況は刻一刻と変わるものだ。

私と女剣士の周りには先ほどから十数人の鎧を着込んだ男達が立っている。

どいつもこいつも私とシュウの会話を、端から黙って聞いていた。

シュウが特に警戒しろと言わず、会話も止めなかったので問題なしと判断し無視していたのである。

こちらの会話が終わり、あっちの包囲も完了したためかようやく動き出した。

パツと見たところ、地面に寝ている女剣士とは別の陣営だろう。

女を助けようという意志はまるで見られない。

「へへっ、あんた。どこの所属か知らねえが、そいつを俺たちに引き渡しちゃくれねえか？」

私に相對していた男が、握っていた剣で赤剣士を示す。

『感動したね。なんと小物らしい台詞か』

シユウにふぎけている様子はない。

本当に心からそう感じているようだった。

こいつを、お前らによこせと？

「白銀の鎧に、燃えるような赤髪ときたら、そんな奴あ一人しかいねえ——緋剣のイストリア。そいつの首をあげりゃあ、どんな褒美だって思いのままだ」

『……イストリア？』

見下ろせば、いよいよ睨みだけで人が殺せるような目つきで女は男達を睨んでいる。

なんだ、こいつはそんなに有名な賞金首だったのか。

それより渡さなかったらどうするつもりなのだろうか。

まあ、取り囲んでいる時点で明白だが……。

渡すのは別に構わない。

その代わり情報をもらいたい。

「情報？ いいぜ、なんだって教えてやらあ」

このあたりにダンジョンはないか？

「だんじょん……？ だんじょんったあなんだ？」

ダンジョンってダンジョンだろ。

モンスターやボスが出てくるとこだよ。

「もんすたあ？ ぼす？」

『ああ……ここはそうなのか』

男達はお互いに顔を合わせて首を横に振る。

ダンジョンどころかモンスターがわからないとはどういうことだ？

シユウはなんかわかったようだが、まだはつきりしていないのか話そうとしない。

「すまねえな。俺たちじゃわからねえ。代わりに知ってそうな奴を紹介する。それと、褒美も分ける。だから、そいつをよこしてくれねえか。こうやって囲んじゃいるが、俺たちもイスタリアを無傷で組み敷けるような奴とはやりあいたくねえんだ」

……仕方ないか。それで手を打とう。

「こいつらについて行って、他のところで情報を集めることにしよう。」

「離せっ！ 私はこの場所で死ぬわけにはいかないっ！」

さつきは「殺せ」って言ってたのになんか変わってる。

「安心しな、緋将様。殺しはしねえよ」

「ぐっ……」

男は私に近づいて屈み、イストリアの髪を掴んで顔を見つめる。

「ほう、噂の緋将様はなかなか可愛い顔をされてるじゃないか」

「けがれた手で私に触るなっ！」

……お前らはその女に仲間を殺されたのか？

「いいや。俺たちは戦場の外れで、逃げてきた奴を安全に狩ってるからな」

ああ、そう。

それも一つの手段だろうな。

「さつきと私を連れて行け！ そこでお前らの大将を殺してやるっ！」

必死に抵抗するものの、動きは取れない。

握られていた赤い剣も男達の一人に奪われている。

「それは怖いなあ、本陣で暴れられちゃあ困る。連れて行く前に、身包みを剥いで武器を隠してるか確かめる必要が出てきちゃった。それに、ここに居る全員でマワせば、少しは抵抗する気力もなくなるだろうなあ、緋将サマ」

男はイストリアの髪を引き、ニタリとした顔を見せつける。

周囲の男達も同類の笑みを浮かべた。

「ゲスめ！ 私はそんなことでは屈しない！」

『そうだね。陵辱なんて序の口だよ。引き渡された後は、情報を引き出すために身体を徹底的に痛めつけられることは決まってるんだから……。魔法、いやこの時代では妖術なんだっけ。それで情報を引き出してから、イストリアちゃんを操り人形にして味方を斬らせるってのもあるだろうね。もちろん意識だけは残しておいて。憎い敵の駒』

「なって味方を斬りまくるのはどんな気分なんだろう？」

シユウが淡々と今後について語り、そして問いかける。

「そんなこと——」

『簡単にできるよ。そもそもイストリアちゃんの意志なんてどうでもいいんだ。君の名声と力があればあるほど、敵からすれば利用価値が上がる。それだけの話』

イストリアが「うう」とわずかに呻くが、シユウはその隙を逃さない。

『ああ、ごめん。最初に殺せって吠えてたけど、あの時点で殺してあげなきゃだっただね。でも——もはや簡単に殺してもらえるところか思わないほうがいい』

この静かな物言いはかなり本気のときだ。

イストリアもそれを察してか、言葉に詰まっている。

それとちゃん付けはやめたげて。

どこ睨んでいいかわかってないから、私を睨んで来てるけど割とマジでキレてる。

『ううむ、良い目つきだ……股間にガツンと来るね。イストリアちゃんも睨めるときに睨んでおくと良いよ。いつまで心が保つかかわからないんだから』

「くそっ、くそっ……」

今後の展開を想像したのか、さすがのイストリアにも怯みが生じた。

『おや、メル姐さん。その顔……、まさかだけど後悔してるの？ 気軽に「情報と交換だ。ヒヤッハー！」なんて言わなきゃ良かったか思ってるんじゃないかな』

ヒヤッハーとか言ってる。

それに、後悔など……。

『そうだよ、後悔することなんてなあんにもないよ。メル姐さんは正しい。こんなのよくあることだし、冒険者ってそんなもんでしょ？』

……冒険者が？

『襲ってきた相手を無力化して、他の勢力と情報を交換する。同時に

今後の安全を得る。見知らぬ地での選択として何一つ間違っていない。情報入手と自己の安全確保の両方を同時に行い、先に繋げるなんて――さすが冒険者は違うなあ！ あれ？ でも、そうすると目の前の男達も冒険者なのかな？』

違う。

それは違う。

少なくともこいつらは冒険者じゃない。

「冒険者？ 何ぶつぶつ言ってるかよくわからねえが、そろそろ運ぶぞ」

男はイストリアの両腕と足を器用に縛り上げていつている。

あとは口枷として布を巻くだけだろうか。

「この、畜生うんぐう、うっ――」

口枷もされて、いよいよ何も言えなくなってしまった。

しかし、最後の言葉には同感だ。

賞金首ならさっさと縛って連行すべきだろう。

恨みや憎しみがあるわけでもなく、自ら戦った訳でも無い。

ただ性欲を発散させるだけなら獣と変わらん。

もはやシユウと同レベルだ。

「へへ、そう言うなよ。あんたも混ざるか？」

男は冗談じみた口調で発し、下卑た顔で私を見上げる。

『殺そう』

一拍おいてシユウが静かにただ一言。

奇遇だな。

私も同じ事を思った。

そして思うが先か、すでに行動に移っている。

私の足が男の顔を蹴り上げていた。

手加減はしていない。

男の首から上は弾け、もぎたての果実にも劣らぬ瑞々しい赤を周囲に散らした。

誰もが現象の把握を出来ておらず、ぼんやりとその花火を見つめ

る。

『巻き込むとまずいんで感染スキル外すから。手間だけど全員斬っちゃって』

人間相手にシユウを使うのは好きじゃない。

だが、自ら獣に成り下がるような相手を人間扱いするのはもっと好きじゃない。

イストリアからシユウを離し、一番近くにいた奴を鎧ごと斜めに切り落とした。

そのまま二人目へ移る。三人目からようやく武器を構えようとしたが、こちらの速さにまるで対応できていない。

他の奴らも同様だ。最後の一人がようやく逃げだそうと踵を返し、そしてその足は二歩目を踏み出すことはなかった。

始末し終えてイストリアに歩み寄る。

口枷、それに手足の縄も注意深く斬って外す。

男に奪われていた彼女の赤い剣も拾って渡してやった。

彼女は依然として寝そべったままでその表情には驚きが張り付いていた。

「貴様、たちは……どこ、いや………何だ？」

途中で何度か言いあぐみ、最終的にはそんな質問が飛んできた。

私はメル。冒険者だが――。

冒険者が何なのか、私自身まだはつきりしていない。

わかったら答えるからもう少し待ってくれ。

それと、この剣はシユウという名の変態だ。

どこに向かっているのかわからないまま、私とイストリアは並んで歩いている。

イストリアの警戒がなかなか解けない。

「それでその剣がシユウだと？」

……主にシユウに対する警戒が。

未だにこの剣がシユウだとわかってくれない。

仕方ないのもう一度、腕にくっつける。

『はあい、イストリアちゃん。いま君の腕にソフトタッチしてる俺がシユウだよ！ よろしくね〜』

イストリアのまなじりがつり上がった。

私もイラッとしたくらいだ。言われた本人は苛ついて当然だろう。

「その呼び方はやめろ」

怒りをかなり抑えこんだ声で抗議をする。

片眉と頬がピクピクと動いて今にも爆発しそうである。

『うん。たしかに呼びづらいと思ってた。よし！ じゃあ、イツちゃんにしよう！ では、改めて。よろしくね、イツちゃん！』

「違う！ そうではないッ！」

ついにイストリアは声を荒げた。

むしろよくぞ今まで耐えていた方だと思う。

この二人で話させても火に油だと感じ、シユウを離れた。

『いやー。期待を裏切らない反応をしてくれるからおもしろいね！』

どうにもシユウはイストリアを気に入ってるらしい。

もちろんイストリアはシユウを嫌っている。

『予想も裏切らずに欲しいものであるが、果たして……』

ぼそりとなにか呟いたが意味はわからない。

だいたいこいつの呟きは後でわかることが多いので放っておく。

「それでメル殿の風貌を見るにカルナセアの出身か？」

どこそこ？

「違うのか？ では、どこだ？」

エルメルだ。

「聞いたことがない。どこだそこは？」

たぶん南東のあたりじゃないかな。

「南東——なるほどコルセンナのあたりだな」

ああ、そうだ。その辺りだ。

面倒だから適当に相づちを打っておく。

大抵の問題はこれで片付くものだ。

で、ここはどこだ？

「決まっているだろう。我が祖国——ガラギオーウエンだ」

胸を反らせ誇るように宣言する。

『誇るほどの胸でもあるまいに、大げさな』

馬鹿なことを言っていないで、ここはいったいどこなんだ？

地名のようなものをさつきから聞いてるが、一つも心当たりがないぞ。

お前のアーなんちゃらでわかるだろ。

『俺の知ってるアーカイブにもまったく該当するものがない。間違はなく大昔だよ。まだ、ダンジョンもモンスターも、魔法すらその呼び方が定着されてない時代だ』

……なんとすごい時代に来てしまったものだ。

「何を話している？」

いやなに、すごいところに来てしまったなと。

そもそも始まりから……そうだ。

なんか戦争してるの？

「そうだ。エルネアの野蛮人どもと戦をしている」

そう言つてイストリアは話を始めた。

なんでも隣のエルネアとかいう国が力を付けてきて、勢力を拡大しているという。

本来はイストリアの国とメルネンなんちゃらとかいう国の間にあり、常に戦火に巻き込まれる弱小国だとか。

しかし、エルネアの西にあるメルネンなんちゃらとかいう大国が、ちよつと前にエルネアに併呑されてしまった。

調子に乗ったエルネアが今度はイストリアの国に矛を向けてきたという。

すでに軍を挙げ、こちらへ行軍しているらしい。

「ガラギオーウエンはすでに迎え撃つ構えを築きあげている」

有り体に言えばどうでもよかつた。

国がどうのとか関係ないし、そもそも時代が違う。

私はただダンジョンに挑むことさえできれば、他は二か三の次だ。

……迎え撃つて言つてたが、もう戦は始まってなかつたか？

私が見たときには互いに斬りつけあつてたぞ。

「あれは唯の小競り合いだ。彼らは、正式な軍に所属している者ではない。お互いの勢力を名乗り、武勲をもらおうとしている雑兵だ」

ふーん、そう。

イストリアもその一人と……。

「馬鹿を言え！ 私はあのような有象無象とは違う。我がガラキオーウエンが誇る精鋭軍団クレイブ・ソリツシユの第十五師団——突撃隊長、緋剣のイストリアとは私のことだ！」

へえ、そうなんだ。

で、お前はあの有象無象の中、たった一人で何をしてたんだ？

「……気になることがあった」

気になること？

「フランベルジェが猛っている」

フランなんちやらが猛る？

ペットでも飼ってるの？

『たぶんイツちゃんを持つてる剣のことだよ』

剣？

「そうだ我が剣。フランベルジェは戦いに呼応する」

イストリアは赤い剣の刀身を見せてくる。

赤い模様が刻まれていたが、よく見たら模様が動いている。

いや、模様ではない。炎だ。刀身の中で炎が激しく揺らめいていた。

「フランベルジェがここまで揺らめいたのは初めてだ。この度の戦、何かがあると感じた」

それで気になって一人で出てきてしまったと。

「信じがたいことだがエルネアの軍勢は我らの想像を超えているかもしれん。実際にこの目で見てみる必要があった」

さっきの話だと、その敵の本隊が来るにはまだ七日はかかるんじゃないか？

見に行くにしても馬にでも乗らないと距離があるだろ。

「それは本道を通った場合だ。この先に別の道がある」

そうなんだ。

ずいぶんと険しい道なんだろうな。

馬でも越えられないとなると。

「道もさることながら、霊獣を前にすれば馬の脚が進まなくなる。すでにこの付近から馬は近寄ろうとしない。人間も同様だ。そのような霊獣が道に蠢いている」

霊獣？

「コルセンナではいったい彼らを何と呼ぶのか。ただの獣ではない。背丈は軽く人のそれを超え、通常の刃では傷すら付かぬ頑強さを持つものもいる。妖術すら行使すると言われていたほどだ。倒せば光の結晶を残すのだが……」

それ！

それだよ！

「そ、それとは？」

イストリアは怯んでいる。

『ダンジョンあったね』

ああ、あったな。

それがモンスターなんだよ！

いやあく、よかった。本当によかった！

ダンジョン攻略はしばらくお預けかと思ってたところだ。

で、そこはなんて呼ばれてるの？

「スリプスイ峠——私たちはそう呼んでいる」

イストリアが見つめる先には、鬱蒼とした山があった。

良い。実に良い。

いかにもなダンジョンだ。

行き先は決まった！

いざ、ダンジョン——スリプスイ峠へ！

麓には林が広がっていた。

頭上は木に覆われ、さらにその上も曇っているため昼だというのに

暗い。

鳥の鳴き声や獣の声も聞こえてこない。静かな林だ。

廃れかけているものの道がまだ残っている。

イストリアが生まれるよりも、ずっと昔には人が通っていたらしい。

ただし、通っていた人というのは旅人や商人ではなく罪人だ。

イストリアの国で罪を犯した人がこの道を通り、スリプスイ峠を越えて西に流される。

何人もの罪人がこの道で命を落とした。何人もの無実の人間がこの道を歩かされた。

幾人が振り返って故郷を見ようとしたのかもはや知ることはできない。

そんな陰鬱な道がダンジョンになってしまった。

この暗さも納得というものである。

『出たよ』

道なりに進んで行くについにモンスターが現れた。

ただれた外面に、蛆の湧いた眼窩。

アンデッドだった。

犬や猪に紛れて人だったものもいる。

「ゆくぞー！ 死を忘れた者どもに救済の刃をー！」

イストリアが先陣を切ってアンデッドの群れに斬りかかる。

以前に霊獣と戦っている経験があると話していたが、いったい何と戦ったのだろうか？

少なくともアンデッドはないだろう。

私も彼女の背後に回ろうとしているアンデッドを払っていく。

わかっていただけが進みが遅い。

『入れ替わった方が良い』

そうだな。

シユウで斬るとモンスターは問答無用で倒せる。

しかし、ただの剣でモンスター、しかもアンデッドを斬るのは効果的ではない。

粉々に斬るならまだしも、表面を斬るだけではダメージがない。

上半身だけで襲ってくるものもあるくらいだ。

メイスや斧ならまだしもちよつと切れ味の良い剣ではあまりにも無力。

それでも剣を使うなら、剣にアイテムで光か炎の属性を付与する必要がある。

たしかに良く斬れる剣を使っているし、本人の力量は私が見ても高いとわかるのだが、いかんせんあれだな……。

『ダンジョンが全然わかってないね。人は上手に殺せるんだろうけど、モンスター相手の戦い方がなっていない。あ、まずい。イツちゃんをモンスターから離して』

ん？

あ、ほんとだ。

イストリアはちょうど人型のアンデッドを切り伏せたところだった。

すぐさまイストリアに近づく。

甲冑をまとった腕を掴み、半ば投げるようにモンスターから引き離れた。

「ぐつ、何をっ！」

地面に転がった彼女が糾弾の声を上げる。

だが、その声はすぐに力を失った。

先ほど倒したアンデッドが破裂して、体液を四方に散らす。

その体液を浴びた他のアンデッドは悲鳴を上げ、木や地面からはその表面が溶ける短い音がした。

もしもあのまま同じところにいたら、あの腐食液が全身にかかっていただろう。

特にアンデッドで多いが、倒したあとに破裂するものがある。

アイテム結晶が出るまで油断してはいけない。

イストリアは、「あ、ああ」と小さく頷く。

『……懐かしいなあ。まだ初級だったところにアンデッドを倒しきれず、全身に体液浴びてベトベトになったこともあったね』

ああ、あまり思い出したくないことではあるが、けっして忘れたくないという相反した思い出だ。

『ひとまず、ここのモンスターを片付けたらイツちゃんとかちよつと話をさせて。このままだと峠を越える前に死ぬ』

モンスターもそこまで強くないし、私が全面に出て戦えば問題ないだろう。

『彼女の性格を鑑みるに、後衛にいて見るだけという自らの立ち位置を佳しとするタイプじゃない。それに、これからもダンジョンに潜る状況があるかもしれない。そのときに今と同じだと——』

間違はなく死ぬな。

今もアンデッドに足を捕られてしまってるし。

そんなわけでモンスターを一掃した後、シユウとイストリア、ついでに私も交えて話をする事になった。

最初はおからさまにシユウと話すことを嫌がっていたイストリアも、内容が非常にまともだったためきちんと聞いている。

何、お前！

めちやくちやまともじゃん！

「そうなのか？」

有り得ん。

こんなまとも喋ってるのは上級ダンジョン以上に潜るときくらいだ。

今までで一番まともに会話が成立しているかもしれない。

『相手が綺麗な女性で、胸がなかったら、そりやまともになるよ』

その発言がすでにまともじゃないんだが。

「シユウ殿……」

『まあ、ぶっちゃけイツちゃんみたいなのは、怒ってる顔と恐怖に怯える顔を見ているのが一番楽しい！』

あつ、あつという間にイストリアの顔が蔑んだものに変った。

『ふふふつ、その顔も嫌いじゃないんだな、これが！ 是非、泣いてる顔も見せて欲しいくらいだ。でも、死に顔は見せないでね』

こんな具合に、シユウの講習は進んだ。

そして、実践に移ったがすぐ実用レベルに達することはなかった。
『そのへんはやってれば慣れる。それよりもアレを使ってみて』
アレとはシユウが細かく教えていたものだろう。

確かにアレが使えるれば、モンスター戦でも細かいところを気にしなくて済むようになるだろう。

イストリアは小さく息を吸う。

シユウをイストリアの肩に置く。

『最初みたいに驚いて手を離さないように。それと動けなくなるまで戦ってね。倒れてもメル姐さんがなんとかするから』

ああ、任せとけ。

『じゃあ、元の詠唱とそのときの成功イメージを頭にしっかり浮かべて』

イストリアが小さく頷く。

「……できた」

『よし、じゃあ俺の声に続けて——』

〈宿すは赫炎。燃えよ——フランベルジエ〉

シユウに続いてイストリアが呟く。

端から見ている私でも成功したことがわかった。

彼女の持つている赤い剣が、より赤みを帯び、燃えていた刀身はもはや内側のみならず外側に顕れている。

武具に対する炎属性付与の魔法だ。

単純にエンチャントとも呼ばれることがある。

魔力を宿す武器を持ち詠唱することで、その武具に様々な効果を付けることができるものだ。

ただの安っぽい武器でやると、一発で武器が壊れる。

『成功したね。それじゃ進もうか』

炎の剣を惚けて見つめていたイストリアが我に返った。

「緋剣のイストリア——参る！」

その口上いらなないだろと思ったが口には出さない。

こういうタイプの人間は言わないと気が済まないのだ。

『短縮詠唱で弱くなってるけど、この辺の雑魚なら十分でしょう』

そうだな。

今、詠唱したものは実戦向けに短縮されたものだ。

一度本来の長つたらしい詠唱をして、真のエンチャントをさせていた。

短縮詠唱を習得する際には、本来の長すぎる詠唱をさせるのが一番効果的らしい。

そのときに付与された炎は、今のようにうつすらとしたようなものではなかった。

剣の延長線上にあった木々が燃え、その剣幅もイストリア本人を焼き尽くすほどに広がっていた。

驚いて落とさなかつたら、腕を持っていかれていたとシユウは話す。

『剣と炎属性の相性が恐ろしく良かったね。「燃えよ」だけでよかったかもしれない。後で他の属性のエンチャントと、強化魔法も教えとこうかな』

そうだな。

使えるにこしたことはない。

問題はどれだけ保つかだ。

魔法の才能とは要するに現象のイメージ構成力と魔力量、魔力の回復速度、それに魔法自体の利用法ということになる。

私は全部ない。あのエンチャントを私が使うと二秒保たない。

少なくともイストリアはイメージ構成は優れている。

後は、あの炎を維持したままどれだけ戦えるかを測る必要がある。

自分の限界がどれくらいなのか、魔法の行使による疲れを知るために、倒れるまで戦闘を今させているらしい。

エンチャントの効果はすさまじかった。

何度も斬りつけていたモンスターが一撃で光に消えていく。

そのため斬り伏せたモンスターの対処を考える必要がなくなった。

『利用法の才能もあるね。炎の幅を広げたり、長さを伸ばしたりしてる』

本当だ。

よく見ると剣が纏っている炎を長くなったり太くなったりして
いる。

「イストリアの快進撃は続いた。」

ついには林を抜け、山道に入った。

モンスターの種類が変わったがまだ進めている。

『そろそろかな』

岩を纏うゴーレムタイプや空を飛ぶ鳥にはさすがに剣では対処し
づらい。

とうとう最後のモンスターを倒すと同時に彼女も倒れてしまった。
彼女を担ぎ、スポットのような場所を見つけて入る。

念のために持っていた魔力の回復促進薬をイストリアに渡した。

彼女は咳き込みつつそれを飲み干した。

そうなんだよな、あれめっちゃ苦いんだよ。

以前、試しにどんな味か飲んだが吹き出してしまった。

『魔力量も人間にしてはかなり多い。ペース配分を間違えず、油断も
驕りもしなければ初級ダンジョンは十分ソロでいけるでしょうな』

このモンスターは初級ダンジョンだと話していた。

そうするとイストリアはここを一人で攻略できるということにな
る。

『いや、山道に入ってからには中級になってるね。道も悪いし、敵の種類
がなかなか豊富だから。それにボスがまだ未知数』

そうだったな。

フィールド型のダンジョンだからボスがいつ出てきてもおかしく
ない。

『まあ、ちよつと休憩かな』

こうして一日目の攻略は終わった。

ちなみに夜もシウウの講義は行われた。

ダンジョンの歩き方から始まり、アイテムの使い方に続く。

特にダンジョンの歩き方はトラップの気づき方や、スポットの見つ
け方と私自身も勉強になった。

暗いダンジョンや夜のダンジョンは、ソロで極力攻略しないことな

ど耳に痛いことを話していた。

どうしても行く必要があるときに使用する魔法や、松明の作り方を
で実際にやらせてみせた。

火や光の魔法は広範囲を照らせる反面、モンスターの注意を引きつ
けてしまうこと。

逆に身体強化の一つとして、拾光の魔法を眼に使うことで暗くても
よく見えるが、激しい火や強力な光の魔法を使うとしばらく視界が失
われることもやってみせていた。

チートでさほど気にしたこともなかったが、暗闇の対策は難しいも
のだろう。

最後に、ダンジョン攻略で一番大切なことは休息だとして、この夜
の講義は終わった。

朝が来てさっそく行動に移る。

イストリアの魔力もすっかり回復したようだ。

まずはゴーレムタイプのモンスターの戦いだった。

基本は眼や関節といった弱そうな部分を狙うことが先決。

それができないなら無視を決め込むのもありだということだ。

動きは遅いものが多いから、ある程度数が増え固まったところでど
れか一体の足を切ると一斉に崩れる。

実際に集めて一気に倒して見せた。

『このとおり。でも、ボスクラスのゴーレムは魔法使いがいないと難
しい。次は飛んでるタイプか』

ちなみに私も飛んでいるモンスターは苦手だ。

弓はセットするのが面倒だし、一体ずつしか倒せない。

最近石を投げて倒しているが、チートありきなので真似できるも
のではない。

『相手が本当に上空だったら、逃げてチャンスを窺うしかない。比較
的低いところを飛んでるなら——』

シユウが新たに教えたのは風属性のエンチャントだった。

炎ほどではないがこちらでもエンチャントすることをできた。

炎と合わせることで炎を飛ばすという炎弾まがいのものだった。斬撃に合わせて炎が飛び広範囲が攻撃できる。

『相手が魔法を使って来る場合や大群の場合だけ使う方が良い。理由はわかるでしょ？』

「魔力の消費が大きいからだな」

シユウは肯定する。

数が少ないなら無視しておけばいい、どうせ攻撃するときには近づくからそこを狙うほうがいいとのことだ。

もちろん滑空してくる相手を斬り伏せるだけの力が必要となる。

そこで次に教えたのが身体強化の魔法だった。

こちらは短縮だが、効果がはつきりとわかった。

ゴーレムを剣のまま砕き、鳥型モンスターは襲いかかってきたところをなんなく叩き斬る。

「すごいなこれは……」

本人も自身の変化に驚いている。

『どれも便利で強いのは確かだけど、魔力を使うから配分にはくれぐれも気をつけたほうがいい。特に身体強化の魔法は使いすぎると、筋肉痛で動けなくなるから。その代わりきちんと休息を取ると基礎能力が上がる』

さて、いろいろと教えたが魔法についてはこんなところだろうか。

『まさか。重要な魔法を教えてない』

他に何かあるっけ？

『二つある。片方はメル姐さんも使えるし、使ってる』

ああ、あれか。

私が唯一短縮詠唱できる魔法だ。

たまにしか使わないけど、知っておいた方がいいだろうな。

『もう片方は、メル姐さんには必要ない魔法だね。でも、ソロでダンジョン攻略をするなら、これは絶対に知っておかないといけない魔法。常に発動させておいてもいいくらいのものだ。こっちからいう』

私もイストリアも息を呑んで続く言葉を待つ。

『その魔法はずばり保護魔法』

私はわかったが、イストリアはいまいちよくわかってない様子だ。「身体強化魔法で十分じゃないか。ゴーレムの攻撃を腕だけで防げる」

そんな方角の違うことを言ってる時点で、これがどれほど重要なかわかってない。

『まあ、対人ばかりであんな前時代的な戦をすればわからないか』
今の話は物理的な防御の話じゃない。

状態異常の話だ。

「状態異常?」

よくわからないと首をひねっている。

『一般的な言葉じゃないもんね。ものすごく簡単に言うと毒とか麻痺が効きづらくなる』

「そういうことか。たしかに毒を使う奴らもいるからな。力が強くなった上に毒も効かないとなると、戦場で無双の働きが出来てしまうな」

うんうんと軽く笑ってイストリアは頷く。

『ああ、全然わかってない』

シユウが静かにぼそり。

あ、これはまずい。

けっこう怒ってるときだ。

ちなみに、さらに怒るとわんわん騒ぎ出しておもしろくなる。

この状態の時間が頭も回ってるから一番よくない。

『状態異常がどれだけ致命的で破滅的なことなのか知っておくべきだ。メル姐さん、ちょっとだけ斬ってやって』

当然手加減をしているだろうから、私はイストリアの首筋にシユウを軽く触れさせる。

小さな傷がイストリアの首筋にできた。

「えっ……」

イストリアは軽く首を振り、何度も瞬きをする。

剣を持っていない方の手が眼の辺りを彷徨う。

『これが盲目。メル姐さんもう一回』

軽く頷いて、再度傷を付ける。

イストリアは口をパクパクと何か言おうとするが何も音は出てこない。

サイレントだな。

詠唱ができなくなる。

魔法使いには致命的な状態だ

『次』

新たに傷を付けると、イストリアはその場で崩れ落ちた。

途中、身体を腕で支えて静かに横にしてやる。

身体は完全に私に預けられ、指の一本も動かさない。

口の端からは涎がなすがままに流れる。

麻痺だな。

『ラスト』

もういい。十分だ。

どうせ、あとは恐怖か毒、もしくは痛覚アップだろ。

恐怖はお前がイストリアの泣き顔を見たいだけだろうし、残りは――

『違う。メル姐さん、これで最後だから』

しばしシユウを睨み付ける。

私は何も言わず、シユウも何も言わない。

おい、シユウ。

もしもイストリアを一方的に苦しめたいだけならな。

私はお前を許さんぞ――、

『はは、一方的に苦しめるだけのものだよ。別に許されなくても良い……いや、ちよつとつらいかな――だけど、この状態異常があることだけは彼女に教えておかないといけない』

けつきよく私のほうが根負けしてイストリアに傷を付ける。

……特に何も起こらない。

しばらくすると他の状態異常も解けた。

よくわからないままお互い立ち上がる。なんだ、結局何もしなかつ

たのか。

状態異常の怖さがわかっただろ。状態異常の怖さがわかっただろ。攻撃を受けなくても、返り血や臭いだけでさっきの状態になることもある。

「状態異常の怖さ、よくわかった」

イストリアも深く頷く。

まだ体調は完全に戻ったわけではないようで疲れが顔に出ている。疲れのせいか、気の強さもなりを潜めてしまっているようだ。

『構えて』

は？

〈燃えよ——フランベルジェ〉

突如詠唱を行い、イストリアは燃えさかる剣を私に振るった。

反射的にシユウで防ぐものの、熱波が私にかかる。

何をっ!?

私は驚いてイストリアを見るが、彼女も私を、そして彼女自身の剣を驚きつつ交互に見ている。

「身体が勝手に——」

〈力よ。我が身体に満ちよ〉

彼女は次いで身体強化の魔法を使う。

詠唱する彼女自身、わけがわからないといった顔をしていた。

おい、シユウ!

なんだこれは?!

『洗脳っていう状態異常。初めて見せたね。使い勝手が悪いし、好きじゃないから使わなかった』

シユウが説明している間にも、イストリアは私に襲いかかってきている。

「なぜ勝手に——」

彼女は叫ぶ。

それでも身体は勝手に動くようで私に襲いかかる。

「止まれ! 止まってくれ!」

それでもイストリアは私に襲いかかってくる。

動きが先ほどまでの彼女とは比べものにならなかった。

剣を防いでも炎を調節し視界を塞ぎ、見えない位置から受けづらい場所に攻撃をしかけてくる。

『さすがにまだ届かないか』

おい、シユウ。

お前がやってるのか。

『そうだよ』

受け答えしている間にも、イストリアの動きは止まらない。

「止まって！　お願いだから！」

イストリアの叫びが悲痛なものに変わってくる。

その叫びがシユウに伝わったのか、ようやく彼女の身体は止まった。

身体が自由に動くとはわかったが、力なく立ち尽くす。

息が荒々しく吐き出されている。

『甘い』

えっ

「えっ」

私とイストリアの声が重なった。

彼女の腕がまたしても勝手に動いた。

赤い剣の切っ先が彼女自身の喉に向く。

剣はそのまま喉に向けて勢いよく突き進んでいった。

自らの喉を刺し貫こうとただ一直線に――。

しかし、剣は喉仏の直前で止まった。

『俺をイツちゃんに付けて。効果が切れるからなるべく速くね』

もはや考えることはできなかった。

私自身もシユウの言葉に従い、身体が勝手に動いている。

いまだ自らの喉仏に剣を突きつけているイストリアにシユウを付けた。

『イツちゃん、これが状態異常だよ。安易に一人で敵に突っ込んで捕まるとしよう。もしも、そこそこの魔法使いがいるなら、君自身が友人や仲間を手にかけることになる。よく覚えておくことだね』

そこでようやく状態異常が解けたのか、腕がぶらりと下りた。剣も手から離れ、地面に突き刺さる。

『じゃ、気を取りなして。それを踏まえて保護の魔法を……ちよつと休もうか』

それがいいだろう。

イストリアは膝を崩し、目頭から涙がこぼれている。声には嗚咽も混じっていた。

シユウ、お前にちよつと言いたいことがある。

彼女は動けなさそうだったので、私が彼女から離れた。

なぜ泣いているのかはよくわからないが、下手に声をかけるよりそつとしておくべきだろう。

それよりだ。

お前、イストリアのこと嫌いなの？

『いや、大好きだよ』

本当か？ いつものお前なら女にはもつと優しくしてるだろ。

相手が男ならともかく、さっきの最後の状態異常は使わなかったはずだ。

それに思い起こすと、最初るときからけつこうきついことを言ってる気がするぞ。

『男なら口もきかないよ。ただ、ちよつと厳しくしてるってのは認める』

なぜ？

まさか胸がないからと言うまいな？

『いや、あの胸はあれでいいんだ。俺もその辺りは、広い心を持って受け入れることにしたよ』

いや、違う。胸の話がしたいんじゃない。

どうしてイストリアに厳しくしているのか聞いてるんだ。

『自分から胸に話を逸らしたくせに……。うーん、まあ、話してもいいか。メル姐さんは冒険者の歴史って知ってる？』

は？

何でいきなり歴史の話になるんだ？

『いいからいいから。一番古い冒険者は誰で、何年くらい前？』

誰かは知らないけど、冒険者ギルド発祥の地がアラクトだからその辺だろう。

あそこが千年くらい前だったはず、千五百年前か？

『違う。少なくとも一万二千年前にはあつた。ゼバルダと話したときに冒険者って言葉も自然に受け入れられてた』

そういえばそうだった気がする。

じゃあ、けつきよく何万年前なんだ。

『わからない』

クイズ出しといてわからないって……。

『それくらい昔なんだよ。約三万年前に書かれたとされている最古の魔道書物——「歳儀史典」にはすでに冒険者が出てる。つまり、冒険者の誕生はそれ以上に昔なんだ。そして、その中で冒険者の始まりに關してこう記されている——「赫炎の担い手ヒストリエ。冒険神メランディツシュにいぎなわれ未知の大道を歩む。冒険者、ここに誕生せり」——。俺は、このヒストリエつてのがイストリアなんだと思ってる』

……話がいきなり大きくなりすぎて理解が。

そうするとつまりどういうことなの？

『イツちゃんが冒険者の始祖。一番最初の冒険者ってこと』

えっ、あいつが！

でも、冒険者になりそうな感じじゃないぞ。

『冒険神メランディツシュが導いたんでしょ』

なんだよ、冒険神って……。

メラなんちやらつてのも初めて聞いたぞ。

『ここにしか記載がないからね』

眉唾ものだな。

まあ、なんとなくわかった。

お前が厳しくしてるのはイストリアを冒険者にするつもりだからか。

『最初はそうだった。でも、今は違う』

ほお。

『本人にも言ったけど、俺はイツちゃんの死に顔を見たくない』

……言ってたな。

私だつて見たくないぞ。

『俺はダンジョンで生存率を上げる方法を教えた。それはなににより生きて欲しいからだ——だというのに、イツちゃんは何て言った？ 戦場で無双するだつてよ。ふざけてるのかと思つたね。確かに、与えた力を何に使おうが彼女の自由ではあるが、少なくとも俺は効率的な人殺しのやり方を教えたつもりはないし、そんなことをして欲しくない』

そうか。理由はわかつた。

もはや何も言うまい。

『とりあえず、俺はイツちゃんが生き延びる術は教えられるだけ教えるつもり』

それがいいだろうな。

私は別に彼女に冒険者になつて欲しいとは思わないから、積極的な協力はしないぞ。

『うん。それが一番伝わるだろうからね』

伝わる？

何が？

『俺が教えられるのは、特定の状況で生き残る具体的な術だけ——謂わば冒険者のやり方のだけだ。冒険者の在り方は俺じゃ無理なんだよね』

つまり私が冒険者の在り方を教えると？

『教えるとはちよつと違う。気づかせる、いや感じさせるつてのが正しいかな。とにかく、今までどおりにイツちゃんと接してあげて』
よくわからんがわかつた。

しばらく経つと彼女も気を取り戻したようで、再度講義が再開した。

講義が終わると、そのままダンジョン攻略に移った。
順調に山道を進んでいく。

途中で術を詠唱する奴が出てきて、ここでも対処の仕方をシユウが教えていた。

魔法の行使はかなり控えめになっている。

保護の魔法を常に張っているため、そこに一定量のリソースを確保せねばならないようだ。

その分、他の魔法に使う魔力を温存せねばならず、魔法を使うべきタイミングを考えるようになる。とシユウは話す。

いよいよ峠に到達するところで、叫び声が聞こえてきた。

獣のような雄叫びが私たちを襲う。

「なんだこの声は」

男の声だ。

何かに対して怒り、吠えているように聞こえる。

『うーん、これは怒りというよりむしろ……』

さらに登ると、頂上が見えた。

そこには一人の男が立っている。

「あれは、エグリマティアス」

何？

知り合いなの？

「大修練場に彼の像が立っている。武の化身とされている人物だ」

はあ、そう。

どういう奴なんだ？

「五十年ほど前に、力を付けすぎた我が国をカルナセア、コルネンディアラ、ケルベセア、ングスの三カ国が手を組み襲った。そのとき三カ国の部隊長全員を討ち、連合軍を撤退に追い込んだ護国の大英雄だ」

めっちゃすごい奴じゃん。

でも、なんで英雄がこんなところにいるんだ。

「国を護ったエグリマティアスの力を恐れた当時のデイロス王は、彼に無実の罪を着せ、都から追放した。引致の際にこのスリップスイ峠で

崖から身を投じ、命を絶つたと聞いている」

髪はぼさぼさで、髭も伸び、服装はみすぼらしい。いかにもな囚人だ。

しかし、一目見てわから身体の屈強さと堂々とした立ち姿は彼が強者であることを感じさせる。

何よりも、彼が両手に持つ棍棒は確かな脅威をこちらに知らせてくる。

「アイムールとヤグルシ。こんなところに……」

どうやらそれがあの棍棒の名前らしい。

さて、ボス戦だ。どうしたものか。

『かなり強いよ。今のイストリアじゃ無理。メル姐さんが戦って』
わかった。

それじゃあボス戦といこうか。

「エグリマティアスと戦うのか？」

大英雄ね……。

お前にとつてはそうなんだろう。

だが、私には人型のボスモンスターだ。

いつも通りぶった斬るのみ。ここで見ていてくれて構わない。

道を進めば、ボスもこちらに向き直る。

さらに歩を進めれば、先方も一对の棍を構えて迎撃態勢を取る。

『最初から全力でいこう』

ああ。

どうやらそのようだな。

私でもわかる。こいつからはかつて戦った極限級冒険者と同じ気配を感じる。

シユウを構えたところで、私の横を赤い髪をなびかせイストリアが走り抜ける。

あまりにも突然のことですその背をぼんやり眺めてしまっていた。

イストリアはそのままボスの前で止まる。

剣は構えていない。

『助ける準備だけはしておいて』

何やってるんだ、あいつ？

死ぬ気か？

「私はイストリア！ ガラギオーウエン——クレイブ・ソリツシュ第十五師団の突撃隊長を担っている！ 貴公を護国の大英雄エグリマティアスとお見受けし、話をさせて頂きたい！」

そんなことを言ったところで意味はない。

相手はただのボスモンスターなのだからな。

『さて、それはどうかな？』

ボスは、棍棒を構えたままだがイストリアに襲いかかることはない。

静かに先を促しているようだ。それを確認したのか、イストリアも続ける。

「現在、我が祖国を目指しエルネアの軍勢が進行している！ 我が剣——フランベルジエは彼らとの戦いが、これまでのものとは比較にならない戦になることを示唆している！ 私はエルネアの軍勢の状況を把握し、本国に知らせなければならぬ！ 公にあつてはその事態を察し、どうか我がこの峠を越えること、なにとぞお許し願いたい！」

ボスは、棍棒をぐるりと下に回して地面を打ち付ける。

背を向けて崖の方へと歩み、屹立したままどこか遠くを眺めている。

……嘘だろ。

話を通じたのか。

『みたいだね』

なぜだ？

どうして奴はイストリアを通すんだ？

奴が話にあつた大英雄だったとしたら国に対して怒っているんじゃないのか。

無実の罪で追放されて、しかもここで絶望して自殺したんだろう。

だから、モンスターになった今も怒って叫び続けていた。

『彼は怒っていたんじゃない。嘆いていたんだ』

嘆く？

『彼は、どこまでも英雄だったんじゃないかな。この峠を越えれば、もう彼が護ったものは見ることもできなくなる。彼にとつて、それは死と同じだ。それならいつそ、国がよく見晴らせるこの場所で——』
身を投じたと？

『そう。問題は彼と彼の意識が強すぎたことだ。死んでも死にきれずモンスターになってしまった』

前の理由は知らんけど、モンスターになったのは確かだな。

でも、大好きな国がよく見えるところだろ。

嘆くところがないじゃん。

『国が良く見えるんだらうね。彼はずっと見守ることができ、国が滅びるその日さえね。声は届かず、手を差し伸べることもできない。ただ見続けなければいけない』

……嘆く理由はわかった。

じゃあ今、その嘆きが止まったのは。

『祖国を想う者が——そのために行動している者がいることを知って安堵したから』

ボス戦としての物足りなさは感じつつも、ここまでされれば背中からシユウを刺すこともできない。

彼の背を横目に見ながら峠を越える。

振り返ればイストリアもボスの背中を見つめている。

『違うって、彼女たちが見ているのはその先だ』

私もさらに奥を見る。

そこには小さな建物が映る。

あれが彼女たちが生きてきた国なんだろう。
ないに等しい感慨を抱き、坂を下り始める。

山道を下り、さらにその先の林を抜けたところで私たちは見た。
イストリアの国に敵対するという軍勢を。

遠くから素人目で言えることは、きれいということだけだ。
長く伸びた隊列は整然としていて乱れがない。

お前から見てアレはどうなんだ？

『……完璧だ。あれは野蛮人なんかにはできることじゃない』

シユウはただただ感嘆するのみ。

『しかし——整然としすぎている』

一方のイストリアと言え、口をぽかんと開けたままで軍勢を見つめている。

こちらはわざわざ尋ねる必要もない。

「数は——」

『三万といったところかな。迎撃側は十万だったね。数では圧倒的に有利。兵糧も十分ある。加えて敵の補給線は延びきってる。一般的に言って、防御に徹すればまず負けはない』

そんなものなのか。

余裕じゃないか。どうしてそんな顔をするんだ？

「シユウ殿の言うとおりで。負ける要素はない。数も、兵糧も、地形でも圧倒的に我が軍が勝っている。だが、なぜだ？ わからない。それでも勝てる気がしないのだ」

あんだけの数を間近で見たからじゃないか。

とりあえずさっさと国に帰って伝えればいいだろう。

『敵の数は三万。我が軍が圧倒的に有利。そう伝えればいい』

それでいいじゃん。その通りなんだから。

「いや、しかし……」

だいたい三万というけど十万って三倍以上だろ。

剣で一人が三人以上を倒すつてのは、厳しいんじゃないか。

『その通り、ただの武器ならまず無理。じゃあ、もし魔法使いがいたらどう？』

それなら……なんとかできるんじゃないか。

防城って、要するに一カ所にかたまるってことだろ。

魔法の良い餌食になるんじゃないか。集まってるところに撃てば一網打尽だ。

『いかにも。そして、あの軍には魔法使いの部隊もある』

「なんだと？」

イストリアは目を凝らす。

『黄色い旗が並んでるあたり、杖を持つてる集団がいるでしょ。あいつら全員魔法使い』

ほんとだ。それっぽいのがいるな。

全体から見たら少ないが、あちこちにいるから数百はいるんじゃないか。

『言つとくけど、本物の魔法使いが撃つ魔法はエンチャントとは比較にならないよ。岩で作ったくらいの城壁なら簡単に崩せる』

「馬鹿な……。それでは——」

イストリアはその先を言うことができない。

代わりにシユウが継いだ。

『クレイブ・ソリツシユ軍は魔法を組み込んだエルネア軍に敗れ、ガラギオーウエンは落日を迎える。イツちゃんの予感はずしかったね』

イストリアはまたしても言葉を失った。

「急いで……急ぎ伝えなければ！」

『もう遅い』

イストリアの叫びは短く打ち消された。

『エルネア軍はすでに喉元まで迫ってる。今さら魔法対策はできない』

「では！ それではどうすれば良いと言うんだ！」

逃げれば？

そのままだと死ぬってわかってるなら逃げればいいじゃん。

イストリアは口をぱくぱくと魚のように何度も開閉させている。

ん？

なんか変なこと言った？

「ガラギオーウエンには私の仲間や家族、友もいる」

じゃあ、連れて逃げれば？

さっさと戻って、荷物をまとめて退散すればいい。

イストリアは今度こそ完全な絶句である。

なんなの？

『価値観が違いすぎて話になってない。メル姐さん、国とかどうでも

いいでしょ?』

うん。

国が滅んでもダンジョンは残るからな。

『だろっうね。イストリアにとってはあの国を護ることが、メル姐さんのダンジョン攻略並みに大切だってことだよ』

国がねえ……。

でも、今から帰って守りを固めても間に合わないんだろ。

『うん、無理無理。情報を伝えたところで「魔法? あっそう、でも数は圧倒的に俺たちが有利だろ。怖いのか、H A H A H A!」で終わるだろうね』

「そんなことは……」

最後まで否定しきることはできなかった。

どうにもそうなりそうな具合だ。

『じゃあ、残る道は一つだね』

そうだな。

逃げるのも駄目、戻るのも駄目とくればそれしかないな。

「それ、とは?」

ここであいつらを止める。

「……馬鹿な」

確かに馬鹿だが、それが何か?

国とやらがお前にとって大切だというなら、それくらいの真似をしないと無理じゃないか。

私も面倒な問題は大抵逃げて解決するが、ダンジョン攻略に関してのみは必要とあれば立ち向かうぞ。

イストリアは息を深く吸うと、真一文字に結んだ。

遙か左から、これまた遙か右に流れる人の地平線へと歩を進める。

……あれ?

『やっぱ俺じゃ駄目だったか』

彼女は立ち止まり、こちらを振り返ることもなく口を開いた。

「メル殿。見届けて頂きたい」

は?

「聞け！ 我が名はイストリア！ ガラギオーウエンがクレイブ・ソリッシュ——第十五師団の突撃隊長である！」

彼女はそう名乗りを上げ、詠唱を行い、自身に強化魔法をかけていく。

この距離では敵には聞こえない。

私と自分自身に宣言しているようだ。

「いぎー… 参るッ！」

身体をやや低くして、走り出す体勢だった。

「おい、イストリア」

足を踏み出す前に、彼女の肩に右手を掛けて止める。

「何だ、止めな——いぎよお！」

振り向いた彼女の顔面にそのまま左手をぶち込んだ。

スパイラルに宙を舞い、地面を何回転もしてようやく勢いは止まった。

『今の……、強化魔法かけてなかったら破裂してたよ』

あ、そう。

加減はしてるし、殺すつもりはまったくないぞ。

『珍しいね。いつもだったら蹴るのに。文字通り手を出すなんて』

ちよつと頭にきてな。

『深呼吸して気持ちを落ち着かせたら、イツちゃんに傷薬をつけてあげて。あの腫れた顔はちよつと見てられない』

返事はしない。

イストリアを視界から外して息を深く吸い込んだ。

起きたか。

「あれ」

まだ意識がもうろうとしているようで上手く受け答えできていない。

あの後、雨が降り出してな。

エルネア軍も足を止めた。

「エルネア……、そうだ。私は！」

彼女は周囲を見渡す。

場所はほとんど変わってないからわかるだろう。

変わっているのは時間くらいのはずだ。

すでに日は暮れてしまった。

「行かなければ！」

座れ。

「しかし！」

やれやれ。

仕方ないので、私もゆつくり立ち上がる。

そのまま彼女の首元にシユウを付けた。

かなり速くしたので、イストリアはまったく反応できなかった。

『動かない方が良い』

シユウがイストリアに制止を要請した。

これは前にも話したことになるんだが——。

ダンジョン攻略でどうしても逃げるのができないとき、私は問題に対峙する。

しかし、それは「一人で」ではない。

対峙せねばならない問題は、だいたい私の手には余る。

そんなときは、こいつに丸投げする。

『はい！ 問題対処係のシユウでっす！』

大抵の問題はこいつだけで解決するが、ときどきどうしても他の人間と手を組まないといけなくなることがある。

俗に言えば、パーティーを組むって奴だ。

滅多に組むことはないが、私はパーティーを組んだ奴には全幅の信頼を置くことにしている。

彼らには私にはない力を持っているし、なにより私を——私の大好きなダンジョン攻略を助けてくれているんだからな。

——逆に、私も彼らを全力で支援するつもりでいる。

彼らの目的がダンジョン攻略ではなく、それに付随するものだとしたらその要望も叶えるつもりだ。

目的は違えど、互いに目的のために全力を尽くし補い合う。

それがパーティーを組むことだと私は考えている。
パーティーリングこそないが、私は、お前とパーティーを組んだつもりでいた。

だからこそ、私はお前がボスモンスターに話しかけたときも全力で走る準備をしていた。

シユウもお前が生き延びるための術を、口調以外は真剣に教えていた。

珍しく長話をしてしまったな。

それでは、問おうか。

——お前にとって私たちはなんだ？

イストリアは私の言わんとしていることを理解した。

それでも、彼女にはまだ後ろ髪をひかれる思いがあるようだった。

「……しかし、私たちは出会ってから三日ほどしか経っていない」

時間は重要ではない。

パーティーなんて一日だけのとき、ひどいときは半日のことだってある。

それでも互いに助け合って、悪い言い方をすれば利用し合う。

「私は……、教わることばかりで、何も貴公らに与えることができていない」

そんなことはない。

ボスを会話だけで済ませるといふものは私も初めて見た。

私は、お前から確かに学ばせてもらった。

「それに、相手の数は……」

数の有利は重要ではない。

十万を抱える城塞とその兵が、三万の魔法使いの混成軍に敗れることだってあるだろう。

三万の整然とした軍勢が、チートを使う二人と一本のパーティーに破れることだってあるかもしれない。

「……死ぬかもしれない」

ああ、死ぬのは怖いな。

しかし、恐れてばかりでは冒険はできない。

「……………私は、エルネアの軍勢を止めなければならぬ」
そうか。

「貴公らをパーティーと見込んで頼みたい。どうか、私とともに——
戦って頂きたい」

今、お前は私をパーティーの一員と語った。

私も、先に言っただとお前とパーティーを組んでいると考えている。

『おいおい二人とも、誰か忘れてないか？ そう、ここにいるイケメン
のことをさ』

よし、全員揃ったな。

作戦会議といこう。

よつこらせと私は地べたに座る。

顎でイストリアにも座ることを促す。

早く座れ、お前には涙ぐんでいる暇などないはずだ。

「メル殿、貴方は……………」

私か？

「貴方は……………何なのだ」

言っただろう。

私はただの冒険者。

そして、お前と同じパーティーだ。

そう言えば冒険者が何か考えることを忘れてたな。

もうしばらく待ってくれ。考えとくから。

「冒険者……………」

そうだ。

それよりシユウ、お前の出番だぞ。

『キタコレー』

なんなのその返事……………。

まあ、それくらいの方がいい。

私もちよつとマジメに話しすぎて頭が痛かったし。

今はそんなことより、どうやって攻略するかだ。

ダンジョンに見立てるならモンスターはエルネア軍か。

あいつらがいる平野はなんか名前はついてるのか？

「あの地域一帯は、パンタシア平野と呼ばれている」

『なんだって？』

パンタシア平野とイストリアは繰り返す。

『……エルネア軍の中で有名な魔法使いって誰がいる？』

イストリアは首を振る。

それもそうだ。魔法使いがいることがわかってたらとつくに魔法の対策をしている。

「ただ、エルネアが力を振るい始めてから、ある軍師の存在が噂されている」

ただし、誰も名前を知らないし、顔もわからないとのことだ。

『仕方ないか。可能性は入れておくとして、予定通りいこう。それでは、作戦案を伝えようかな』

シユウが作戦を話し出す。

攻撃は二回。どちらも奇襲だ。

一度目は夜襲をかける。

相手の補給物資を燃やすことを目的とする。

ただし、全ての補給物資、食料を燃やすことはしない。

背水の陣で城に攻めてこられては困るからだ。

さらに相手の対応速度と連携を見る。

どこにまとめ役がいて、全軍の支配権を持つのが誰なのかを確認する。

そのため、そこそ燃やしたら速やかに撤退し、遠くから隠れて様子を探る。

二度目は、時間をおいてからの相手本陣への強襲だ。

一度目の奇襲により確認した本陣に向け、全速力を持ってぶつかり将を討ち撤退する。

撤退する際に、ゲロゴンブレスを数発撃って、ガラギオーウエンへ至る道を切り進路を絶つ。

進むことよりも退くことが易いと思わせて撤退させる。

長い目で見れば時間稼ぎにしかならないが、これが現時点で最善だと判断した。

ゲロゴンブレスを相手に撃ち込んで、チートの感染で相手を倒したほうがいいんじゃないかと提案はした。

『そんなに虐殺したいの？』

シユウから返ってきたのはそれだけだった。それだけで十分だった。

殺しは極力避けて、状態異常も麻痺を中心に行うこととした。

さっそく実行に移る。

闇の中でも私はしつかり見えている。

イストリアは魔法で見えるようになっていて、いろいろ不便はあるから無茶はできない。

敵の補給物資の位置はシユウが補足しているから、そこに向かうだけだ。

ステルスで姿を消し、見張りに近づき背後から軽く斬って麻痺させる。

近くにいた兵士は感染してばたばたと倒れていく。

その様子を見たイストリアが補給物資にエンチャントした剣で炎を付ける。

あつというま火が上がった。

あちらこちらからもざわめきが生じる。

「敵襲！ 敵襲だ！ 各隊は、部隊長を守って、陣を固めよ！」

イストリアと私が声を張って伝える。

さらに他の地点の補給物資も同様の手口で燃やしていく。

『展開が速いな。まあいい、目的は達した。よし、撤退』

イストリアに合図を送り、燃えさかるエルネアの野営地から離れた。

遠くの木陰からイストリアと共にエルネアの野営地を見る。

補給物資からの火はかなり収まっていたが、それ補うように奇襲に

対するかがり火が焚かれていた。

「上手くいったな」

ああ、そうだな。

『予定通り補給物資は燃やせた』

成功だな。

『だけど包囲の展開が速すぎる。流言しても、的確にこちらを囲んで来てた。最初こそ乱れたけど、混乱が少なすぎる』

そうだろうか。

私にはよくわからない。

「確かに兵の乱れはなく、それぞれが自らの役割を把握していたように見える。よく教練されている証拠だろう」

この場はそういうことで、この話は終わりになった。

二回目のタイミングはシュウが伝えるようなので、しばらくは休息だ。

ちよつと寝たつもりがすでに朝だった。

『やつと起きた。じゃあ、軽くご飯食べたら行こうか』

散歩に行くような軽さでシュウは言う。

『敵の本陣の場所はわかった』

そうなんだ。

もぐもぐとパンを口にしながら答える。

「後は乗り込むだけだ」

そうだな。

予定通りにやってしまおう。

『敵の大将を討ったら撤退と話したんだけど、変更するかもしれない』

具体的にはどうするんだ。

『どうするかはまだ決めてない。討ったときの様子しだいかな』

そこはお前に任せる。

大将を討つことが大前提だ。

それでは始めようか。

イストリアを一人、本陣からわずかにずれたところに攻めさせる。相手から見えるよう、堂々と歩かせてだ。

もちろん強化魔法と保護魔法をかけている。

剣に対してエンチャントも忘れない。

敵は予定通りイストリアに気づき、重厚な陣を敷く。

たった一人に対してこの陣容。これで相手が魔法の脅威を知っていることがはつきりした。

一方の私と言えば、すでにステルスで相手の本陣に入っている。

イストリアに攻撃が向かう直前に姿を現し、大暴れする手はずだ。

そして、それは成功した。

突然現れた私に、敵の兵は大いに慌てた。

見せてやろう。感染の脅威を！

『パンデミックだ！』

兵の一人を斬る。

あくまで軽めに傷をつけるだけだ。

しかし、私の役目はそれで全てが終了した。

一人の麻痺は周囲の数十人に、その数十人麻痺はさらにその周囲の数十人に移っていく。

私を敵だと思った人間全ての動きを止めるように、エルネア軍の中を麻痺が蔓延した。

イストリアを狙っていた兵士達にも波及し、倒れ伏せた。

彼女もこちらに走ってくる。

倒れ臥す兵士達の中を私とイストリアは進む。

他のところから応援が来るのでそれまでにさっさと大将を屠る。

そいつはすぐに見つかった。

イストリアも顔を知っているようで、彼が大将だと言う。

『肉の付き方は武官のそれだ。替え玉じゃないね』

まあ、こいつには運が悪かったと言うことで死んで頂こう。

「本来なら正々堂々と相まみえたいかったが……致し方なし。覚悟！」

イストリアの剣が敵将の首を斬った。

その首を掴みあげ、彼女は勝ち名乗りを上げる。

「ガラギオーウエンがクレイブ・ソリツシユ——第十五師団突撃隊長
イストリア！ エルネア軍総大将——カツアリダの首、討ち取つたり
！」

大地を震わせるような声がパンタシア平野に響く。

よし撤退だな。

『待った。様子がおかしい』

何がおかしいんだ。

『反応が薄すぎる。普通、総大将を討たれたとなれば、意気消沈するか、報復に燃えるかのどちらか。こいつらの目はそのどちらでもない。ただ俺たちを標的として見ているだけだ』

イストリアも何か違和感を覚えているようだ。

「何だこいつらは、気持ち悪いぞ」

私にはよくわからない。

モンスターも似たようなものじゃないか。

『その通りだよ。モンスターと同じなんだ。人間の反応じゃない。感情が薄すぎる。ただ与えられた命令に従う傀儡だ』

遠くにいた兵士たちが、私たちを取り囲んでいく。

『推論——魔法か何かで操られてる』

魔法だろ。

何かって何だよ？

『それを確認する。このままだといつらは殺すまで止まらない。頭を潰す必要がある』

魔法を使ってる奴を叩くってことだな。

わかったが、そいつはどこにいるんだ？

『それもこれから確認する。ゲロゴンブレスを相手の頭上に撃つて！

太陽がある方向』

言われたとおりにゲロゴンブレスを、太陽の方角、相手の頭上に向けて撃つ。

流石の傀儡たちも驚いたの動きを止めた。

「な、なんだそれはッ!？」

傀儡以上に驚いたのがイストリアだ。

軽く話してはいたが、聞くのと見るのでは大違いだったと見える。

『次は反対側にもう一発』

イストリアには構わず私はもう一発ゲロゴンブレスを撃つ。

腰を抜かしたイストリアは悲鳴を上げていた。

『俺をイツちゃんにくつつけて、速く！』

言われるがままに尻餅をついているイストリアにシュウを付ける。

『よく聞いてね。今からメル姐さんには、俺を上空へ投げてもらう。

俺が飛んでる間、このメル姐さんは本当にポンコツになる。落ちてき

た俺を拾うまで守ってやって欲しい。わかった？』

イストリアは立ち上がる。

先ほどの悲鳴を上げていた様子はもはやない。

「任せろ」

彼女はしかと頷いた。

私も不安はない。

シュウの立てた作戦で、守るのはイストリアだ。

『じゃあメル姐さん。なるべく、真上に投げて。全力でね』

わかった。

一度、お前を全力で投げつけてやりたいと思っていたんだ。

柄の握りを軽くし、腰を低くし力を溜める。

そして、全力でシュウを真上に投げた。

『I, I'll be back』

投げてすぐに身体から力が抜けた。

力が入らない。いや、違う。元々の力に戻っただけか。

「こっちだ」

イストリアが腕を引くが、腕が千切れてしまいそうな力だ。

身体が重く、足も思うように動かない。

イストリアの腕が離れ、彼女は敵軍の中に突っ込んでいく。

敵の攻撃も、イストリアの攻撃も目で追うことがまったくできな

い。

自分本来の力を感じて虚しくなる。

それを慰めてくれる声も聞こえてこない。

「来たぞー！」

私の前に剣が落ちてきた。

『待たせたなボウズ』

シユウを握るとそんな気取った声が聞こえてきた。

身体に慣れ親しんだ力が戻ってくる。

誰がボウズだ。

『見つけたよ。さすがにゲロゴンブレスは食らいたくないと見える。わかりやすく動いてくれた。かなり後方。雑魚はほつといて一気に行こう』

うむ。

イストリアにも伝えて、敵を散らして進んで行く。

雑魚ではあるが、人間にしてはかなり動きが速いような。

『力を付与してるね。それに隊列と配置がすごい的確だ。これを魔法でやってるならそいつは紛れもない天才だ。殺すのが惜しいな』

隊列や配置は知らないが、完全に力任せで押し通る。

こちらに向かうか、立ちふさがる傀儡の中で、唯一こちらから遠ざかる馬車が見えた。

「あれだな」

私とイストリアが、馬車についている左右の車輪をそれぞれ破壊する。

荷台は地面に落ち、速度が落ちて馬の首を引っ張る。

中にいる人間の悲鳴も聞こえた。

イストリアが炎の剣で荷台の幌を焼く。

「うわっ！」

そう言って荷台から這いずり出てきたのは細い男だった。

『ああ、やつぱり』

黒髪で線の細い色白の男だ。

着ている服は他の人間と同じだが、明らかに戦える種類の人間ではない。

なんだお前の知り合いか？

『俺と同じ国の出身だね』

えっ、そうなのか。

じゃあもしかして、こいつもチート持ちか。

『チート持ちだろうね』

イストリアに剣を突きつけられ怯えていた男が声を出す。

「待て！ 待ってくれ！ この声、日本人だろ！ 助けてくれ！ 俺も日本から来たんだ！」

何やら叫んでいる。

『俺の声が聞こえるってことは、チート持ちで間違いないようだね。名前？』

そう言えば、シユウと触れてないのに言葉に反応していたな。

「田中だ！ 田中裕二だ！」

『あっそう。で、田中なにかし君はどうやってこの世界に来たの？』

シユウはさほど興味もなさそうに尋ねる。

「タブレット！ タブレットで変なアプリを入れて！ 寝て気づいたらこつちにいたんだ！」

たぶれつとつてなんだ？

『手に持つてる板みたいなのやつだね』

そう言えばなんか銀色の薄い板を持っている。

『そんな連れて来られかたもあるのか。それで与えられたチートは、この兵士を操ってた力で間違いないね』

そうだ、と首を何度も縦に振る。

『チートを使って、この程度か』

ぼそりとシユウは呟く。

『はあ、わかった。日本に帰そう。イツちゃん、悪いけどこいつの処分は俺に任せて』

私がイストリアに告げると、タナカは首を振る。

「嫌だ。俺は帰らない」

『どうして？』

タナカは継るような声を出す。

「日本に帰っても、学校で勉強の毎日だ。特に才能もない僕じゃ、何も

楽しくない。でも、ここは違う。俺の力を発揮できる！ みんなが俺を必要としてくれるんだ！」

こいつ……。

何か勘違いしてないか。

『可哀想にね。田中君、君はいろいろ誤解してる』

何を、とタナカは問いかける。

『まず、チートの力はただの預かりもので君自身の力じゃない。次に、力を発揮すると言ってたけど、あれくらいは統率はわざわざチートを使わなくてもできること。あと、必要とされてるのは君の力であって、君自身じゃない。それと最後に、みんなと言ってたけど、それは国の偉い人だけだよ。ここにいるイストリアは君を敵と見なしているし、メル姐さんもどうでもいいと思ってる。一番まずいのは同じ国の兵が、誰も君を助けようとしていないってこと』

そういえば、確かにそうだ。

先ほどまで襲いかかってきていた兵士は、今ではざわつくだけで誰もかかってこない。

『メル姐さんは一人といえどもイストリアを助け、彼女もまた大軍の前に怯むことなくメル姐さんを守った。ひるがえって君を見てみよう。三万の兵士がたった二人を恐れて、誰も君のために戦わない』

私は勘違いしていた。

イストリアに厳しいことを言ってるなどか思ってたけど、あれはまだ優しいかったようだ。

今のシユウは本当に容赦がない。

『人との繋がりを作る切っ掛けに、チートを利用するのはまだ良い。でも、人との繋がりそのものはチートじゃなく、君自身の言葉と考えで築かないと駄目だった。それを怠った君に為せることなど何もない』

一言一言がタナカの表情を崩していく。

『さあ、国に帰そう。いや還すが正しいかな。君のようなガキがここにいたところで、だあれも幸せにならない。思う存分に力を振るうのは、課金したゲームのアカウントだけにするんだね』

シユウは晴れやかな声で告げる。

『俺で斬ってあげて。それで還るだろうから』

私は一步踏み出して、シユウを構える。

「わかったような——わかったようなことを言うな！ 僕にだってできることはある！」

タナカは吠えた。

迫力はないが、問題は手に持っている板だ。

かれがその板を指でなぞる。板の表面が光り、文字が浮き上がっている。

「見ろ！ 読めるだろ！」

読めないんだが……。

『竜召喚。そう書いてある』

竜の召喚？

そんなことができるのか？

『チートだからね。それくらいは余裕で出来る。……そうか、可哀想に。こいつはこのためだけに呼ばれたのか』

先ほどまでの馬鹿にしている様子ではない。

シユウはタナカに同情を寄せている。

「何を言ってるんだ。竜だ！ 竜なんだぞ。それが操ればお前達なんて一撃だ！」

なに言ってるんだか、竜が召喚されるよりも私が斬る方が遙かに早い。

『イツちゃんと話をさせて』

シユウの言葉を伝えると、今まで蚊帳の外だったイストリアがようやく会話に入る。

『今からここに竜が召喚される』

「竜？ 伝承にある破壊を司るの青き竜のことか？」

いまいちピンときていない。

実際に見ないと、あの強さは感じられないだろう。

『さつき俺たちが使ってた炎の激流を見たよね。あれは灰竜のものなんだ。あんなのをぽこぽこ撃ってくる存在がここに出てくる』

顔つきが変わった。

事の重大さを把握したようだ。

間違いないエルネア軍の脅威などとは桁が違うだろう。

「止めなければ。こいつを殺せばいいのか」

イストリアは剣をタナカの首元につける。

タナカはひっと竦むだけだ。

『いや、もう術式は起動しつつあるから殺しても無駄だろうね』

「そ、そうだ。ここで僕を殺したら制御できる奴がいなくなるぞ」

タナカはシユウの言葉を裏付けていく。

「どうだ、今なら、謝れば許して——」

『うるさいから斬っちゃって』

ああ。

「えっ」

タナカが気づいたときにはすでに、彼の首は宙を舞っていた。

『ポトリもあるよ』

首は地面に落ちた。

その後、モンスターのように光の結晶となって消えた。

彼の身体も同様である。

残る問題は彼が持っていた光る板だ。

それだけがいまだここに取り残されている。

『イツちゃん。竜の出現は俺たちが食い止める』

イストリアは黙って聞いている。

『もう起動段階だから、無理矢理止めればここに次元の断層ができる。

落ち着いたらここを固く封鎖して欲しい。良いかな？』

そろそろだな。

「メル殿は、どう……、なるんだ？」

どうなるの？

『来たときと同じだよ。またどこか別の時代、別の場所に飛ばされる。

今までの傾向からおそらく場所はそこまでずれないだろうね。でも、

今度はかなり大きく飛ばされるかな』

なんかそんな気配だな。

魔力に色をつけなくても、空間が歪んで来ているのがわかるくらいだ。

「メル殿。貴方に私の国を案内したい。私が護りたかったものを見て頂きたい」

そうか。

私も見てみたいな。

ダンジョン攻略をした後はおいしいものを食べるのがいいんだ。

「任せて欲しい。上手い料理が山ほど食べられるところを知っている」

それはいいな。

是非、行ってみたいもんだ。

「……また、会えるよな?」

「また」という言葉は幻想だ。

冒険をしていて、再び会うなんてことはまずない。

だから、今このときを全力で生きることが大切だと私は思っている。

お前と過ごした時間は短かったが、とても楽しいダンジョン攻略だった。

私の攻略はきつとまだ続くし、お前もまだ終わっていないだろう。

国に帰って魔法対策をするなり、残党勢力の一扫がある。

お互い、やるべきことをやっていこうじゃないか。

結果として互いの道が交わることもあるだろう。

『ここにいと巻き込まれるから、スリプスイ峠まで一気に走るんだよ』

一気に走るとなるとあの魔法の出番だな。

覚えてるか?

頷き、イストリアは一步退く。

〈陣風よ。我が身を包め〉

それは私が唯一短縮詠唱できる魔法だ。

本来は風を生じさせ、矢や小規模の魔法を防ぐ目的のものだ。

私の場合は、そこまでの規模にならない。ただ空気の抵抗を減らし

て速く走ることができるようになるだけだ。

『うん、できてるね。峠の進み方はわかってるね。休息はちゃんと取るんだよ。魔力のペース配分に気を付けて。ボスとは戦っちゃ駄目。今のイツちゃんじゃ絶対に倒せない。前と同じようにきちんとして事情を話して通してもらおうように。それと発動途中の魔法を消すことは危険だから絶対に真似しちゃいけない。それと——』

もういいよ、長ったらしい。

何がちよつと厳しくだ。甘々じゃないか

バランスを取って、私からは一言だけ送らせてもらおうか。

生き延びろよ。

『……本当に一言ってどうなの』

これで十分だろ。

そう言っつて、イストリアの肩を手で押して、さっさと背中を向かせる。

彼女の凛々しい顔が崩れていくのが見るに堪えなかったからだ。

——じゃあな。

それだけ言っつて、彼女の背を押す。

「メル殿、シユウ殿。私は生き延びます。冒険——」

最後の部分は聞き取れないまま、イストリアは走り去る。

振り返ることもなく、どんとんと遠くへ駆ける。

『さてやつちやいますか』

ああ。

やると言っつても斬るだけだな。

私は竜が召喚される空間に向き直る。

その歪みを断ち切るようにシユウを振るった。

《やややつ！メル殿！初めましてですな！》

歪みが広がる直前、そんな声が聞こえた。

そして、私はまたしても靄に包まれた。

蛇足16話 「幻想、見果てたり（後編）」

4. 人の力

またしても霧の中を歩いている。
明るいから晴れているんだろうが、周囲の景色はよく見えない。
どうも地面が土ではない。石にも見えない。なんだろう白いつやつやしたものだ。

そう言えば、歪みに飲み込まれる直前に幻竜の声を聞いたぞ。

『何か言ってた？』

初めましてだってよ。

『なんだかなあ……。それより、跨幻橋パンタシアの歪みを作ったのは、他ならぬ俺たちだったみたいだね』

そのようだな。

今度はいつのどこに飛ばされたのだろうか。

『かなり大きく飛んだっぽいからなあ』

霧が晴れてきて、周囲の景色が見えるようになってきた。

思わず足が止まってしまふ。

……なんだ、これは？

ここは、ダンジョンなのか？

周囲には角張った建物がいくつも並んでいる。

どれも白く滑らかな表面だ。

どこまでも白く続く道の先から、何か浮いているものがこちらに向かってくる。

ゴーレムの亜種だろうか。表面はこの床や壁と同様に白く滑らかだ。

シユウを構えて、相手の出方に備える。

すいーと空を滑るように私の近くまでやってきた。

能力半減の距離に入っても落ちることはない。

『敵意はないみたいだね』

念のためシユウを構え続ける。

腹部と言って良いのかわからないが、そこに付いていた石がぴかぴ

かと光る。

そこから出た青い線状の光が私の頭から足まで動いて照らしている。

魔法かと思つて斬りかけたがそんなこともないようだ。

状態異常無効があるためか特に身体に影響はない。

「タダイマ照会中。シバラクお待ちクダサイ」

喋った。

おい喋ったぞ。

しかも抑揚がない声で。

『棒歌ロイドですな。歌ってないけど』

しばらくの間、照会中を繰り返していたが、やがて腹部の石の点滅がなくなった。

「該当ナシ。応答モードへ移行」

顔の下の部分がパカリと開く。

「個体識別コードヲ教エテクダサイ」

コード？ 何それ。

「十桁ノ番号デス」

そんなの知らんぞ。

そもそもお前こそ何なんだ？

モンスターではないよな。

「ワタシハモンスターデハアリマセン。自律型教導支援アルマ。識別コードOPAI4545デス」

『やだ……、卑猥な子』

何が？

「識別コードヲ教エテクダサイ」

識別コードとかいうのはない。

私はメル。冒険者だ。

「“メル”、“冒険者”——照会中、照会中。該当数三五件。情報ヲ追加シテクダサイ」

情報を追加？

『メルという単語を含んだ冒険者は三五人いますよってこと。極限

級って伝えて』

極限級だ。

「“メル”、“冒険者”、“極限級”——照。該当数一件」
今度はあつという間に一つになった。

「メル。」

セクルス歴六二年、冒険者ギルド極限級二昇格。

セクルス歴六四年、跨幻橋。パンタシアニテ行方不明。

セクルス歴六九年、死亡認定」

『あちやー、メル姐さんとうとう死んじやったのか』
は？

行方不明で死亡ってどういうこと？

セクルス……歴？

そもそも今は何年だ？

「現在ハ、ワロス九九年デス」

それはつまりセルなんちゃら歴から何年後？

「“セルなんちゃら”——定義ガ明確デハアリマセン」

いや、だからね。

メルが死んでからどれくらいなんだ？

「メルガ死亡認定ヲ受ケテカラ、四九八七年ガ経過シテイマス」

……………へ？

『いやあ、そのうち来るんじゃないかと思っただけどついに来ちゃった
ね』

おい、シユウ。

ここはどこだ？

『どこかは知らないけど、いつかはわかった。元の時代から約五千年
後の世界だ。三万年以上前と比べたら、元の時代には近いね』

確かに数字上はそうだが、そうなんだろうが……。

さっきの方が、もっと身近に感じる事ができたぞ。

「個体識別名ヲ明示シテクダサイ」

ここはなんかもう、別世界だ。

私はメルだ。

「メル——登録シマシタ。メル、アナタデサイゴデス。ツイテキテクダサイ」

アルマはくるりと回り、来たときと同じように宙を滑っていく。

「メル、ワタシノアトヲツイテキテクダサイ」

しばらく進むとこちらを振り返り、付いてくるように促してくる。

何にせよ、情報を集めるしかないのでアルマの小さな背中を追いかける。

『さっきの発言覚えてる?』

そりゃ、覚えてるよ。

いくら私でも自分が死んだことにされた発言は、そう易々と忘れられないぞ。

『いや、それはどうでもよくてね。「貴方で最後」の方だよ』

……そんなこと言ってたか?

『何の最後だろうと思って、一つ感付いたことがある』

直感ってやつか。

『ちよつと違うかな』

まあ、どうでもいいや。

話は変わるけど、アルマと同じ奴はちよちよこ飛んでるが、人の姿が見えないな。

白い建物には人が住んでそうだから、中で寝てる時間なのか。

『話は変わってないよ』

ん?

『人の姿どころか、気配すらまったくない。さっきの発言はおそらく、メル姐さんが最後の人って意味だと思うんだ』

………それって、どういうことになるんだ。

『どこに、何をしに連れていかれるのか尋ねたほうがいいだろうね』
やや離れ気味だった距離を詰め、アルマに話しかける。

なあ、アルマとやら。

私たちはどこに向かっているんだ?

「ワレワレハ、キユナブラにムカツテイマス」

『ん?』

きゆなぶら?

わかっちゃいたがさっぱり想像が付かない。

いったいどんなところなんだ?

「ドナトコロ」——指示が明確ではアリマセン」

めんどくさい奴だな。

だから、そのキュナブラはいったい何をするところなんだ?

「キュナブラハ、プロジェクトパンタシアノジツコウチデス」

パンタシア……何やら聞き覚えのある単語が出てきた。

しかし、一つ聞くとわからないことがまた一つ出てくる。困ったもんだ。

『プロジェクトパンタシア——幻想計画ね。嫌な予感しかない名前だ』

それで、プロジェクトパンタシアってのは何だ?

「プロジェクトパンタシア——セクルス歴二八一年、六人委員会により創案。セクルス歴——」

その後もだらだらとアルマは発言を続ける。

中身もよくわからんし、聞き取りづらいから理解を諦めた。

どうせシユウがまとめてくれるだろう。

同じような白い建物を眺めつつ散歩を続ける。

今さら気づいたが、どうやらここは何か大きな建物の内部のようだ。

天井に映る景色は魔法か何かで投影されたものだろう。

もしかしたらダンジョンなのかもしれない。

『——ワロス百年一月一日ノ始マリと同時に二同計画ハ遂行ヲミル。以上がプロジェクトパンタシアデス』

終わったらしい。

それじゃあ、シユウ。

まとめをどうぞ。

『今日は何月何日?』

はい?

『今日は何月何日か、そのアルマに尋ねて。速く』
ちよつと焦ってるな。

アルマとやら、今日は何月何日なんだ？

「十二月三十一日デス」

あれ？

じゃあ、プロジェクトパンタシアとやらまで一日切ってるのか？

「ハイ。プロジェクトパンタシアまで三時間四分一七秒デス」

なんと。

もう夜だったのか。

道理でお腹が減ってるわけだ。

いろいろあったからな。そのキュナブラでご飯が食べれるといいんだが。

『飯なんか食ってる場合じゃない』

やっぱりか。

寝る直前に食べるのは止めろっていつも言ってるもんな、お前。

『違う』

うん。わかってる。

なんかいつになくマジメな口調だからな。

たまには私のほうがふざけてみようと思ったんだ。

で、そのプロジェクト……長いな。幻想計画ってのはつまるところ何なの？

『一言で表すなら、つらい現実から逃避して都合の良い夢——幻想に引きこもるって計画』

それだけ聞くと良さそうなんだけど。

『聞き心地はいいだろうね。実際、居心地も良いと思うよ』

それなら別にいいんじゃないか。

『種の保存と精神の昇華を謳ってるけど、俺は好きじゃないね。人間の可能性を否定してる。この計画の発案者はいったい誰だ？』

なんだかちよつぴり怒ってる。

この計画の発案者は誰なの？

時代も違うからわかるわけではない。

シユウの怒りが冷めるまでの時間稼ぎがてらに尋ねてみた。

「パンタシア計画の発案者ハ、六人委員会ノ一員デあり当時ノエルフ族族長——アイラIIコンクルシオ、です」

アイラ……どこかで聞いたような。

『あの——』

それだけの単語に怒気を込め、シユウは息を呑んだ。

長い溜息を吐き、沈黙を保った。

どうするんだ？

『……どっちでも良くなったかな』

どっちでもというの？

『初めは幻想計画をぶっ潰すつもりだった。でも、壊したら人間が滅亡する』

えっ、人間が滅亡しちゃうの。

『ここが建物の中つてのは、さすがに気づいてるでしょ？』

ああ、それは気づいた。

ずいぶん大きな建物だよな。

『まあね。でも外の世界には人がいないよ。ここだけが人が住める世界だ。建物はでかくなったけど、世界は小さくなったんだ』

世界がここだけ？

『うん。三百年ほど前に魔法大戦が起きて外の世界は壊滅。外は人が住める環境じゃない。ほんとかどうかは怪しいもんだけどね』

なんと。

たしかに眉唾だな。

『この建物もいつまで保つかわからない。残された最後の希望が幻想計画だよ。失敗すれば、人間が絶滅する可能性が極めて高い。本当に外に人がいなければ、だけどね』

絶滅しちゃうなら計画は壊さない方がいいだろ。

『自業自得だよ。こんな計画に縋るくらいなら、とつとと絶滅するべきだ』

この計画はそんなにダメなものなのか。

『うーん、技術的にも知識的にも人類の集大成と言えるものだよ。そ

れでも俺はダメだと思う。何より当事者たちが寝てるだけってのがね』

寝るだけで何が問題あるんだ？

成功率が低いとか？

『いや。聞いた感じだと成功率は高いと思う。特異点解消に時空魔法と虚精神魔法を合わせるんだよね』

さっぱりわからないんだが、なんかすごそうだぞ。

『すごいつてもんじゃない、滅茶苦茶すごい。六人委員会は全員が天才で疑いない。当時はさぞ異端扱いされただろうね、約五千年前の時点でこの結末を考えたんだから。……そっか、そうか。俺たちが死亡認定されたのが一因なのか。それなら——』

なんか思いついたようだな。

『うん。幻竜に会いに行こう』

幻竜って幻竜ヌルか。

時代がだいぶ違うし場所もわからんけど、ここにいるのか？

『間違いなくいる。この計画は幻竜ありきのもだから。キュナブラの最奥で歪みの中心に鎮座してるだろうね』

よしよし。

目的地が決まればやる気が出てくるもんだ。

「キュナブラまでモウ少しデス」

『もう少し、ね……』

ああ、けっこう歩いたな。

もしかしてキュナブラってのはさっきから見えてるあの塔のことか？

「ハイ、前方に映ル塔がキュナブラデス。ソレより、メル。疲レタようナラ休憩を取りますカ？」

いや、大丈夫だ。

早く着いた方が良いだろう。

『しかし、キュナブラか。誰が付けたんだ、そんな名前。よほど頭がめでたい奴に違いない』

どういう意味なんだ。

『揺籃』

揺籃つて揺りかごのことだろ。

眠り続けるなら間違つてないんじゃないか。

『それなら墓の方が合ってる。揺籃には別の意味がある』

兇祥地——シユウはそう言った。

その後、それでもやっぱり墓地のほう合ってるだろうな、と繰り返した。

キユナブラは一際大きい白の巨塔だった。

塔の天辺がこの大きな建物の天井に刺さっているほどだ。

無駄に長い階段を上り、さらに高く広い入口を通ると足が止まった。

ついでに呼吸も止まってしまったかもしれない。

白い天井に、白い壁、白い床という白一色のただっぴろい開けた空間だった。

床には、これまた白い箱が整然と並べられている。

箱は縦横くまなく設置されていた。

白い箱に蓋はない。

蓋があればどれだけよかつたか。

箱の中身を見ずに済んだのに。

白い服に、白い髪に、白い肌。

生気のない人たちが、箱の中で目を閉じて上を向いている。

性別や顔、身体に細かい違いはあれど細いに尽きる。

大丈夫だろうか。触ったら折れそうだぞ。

先ほどのシユウの言葉が脳裏に浮かぶ。

棺桶が埋まっただけで、確かにここは墓場だった。

『アルマの喋り方さ』

シユウの声で自分の身体に生気が戻ったことを感じる。

どうやら私も場の雰囲気飲まれていたようだ。

アルマの喋りがなんだった？

『抑揚がないよね』

ああ。

でも、聞き取りやすくなってきたぞ。

『そうなんだよね。メル姐さんと喋ることで抑揚を学習してきてる。それにこちらの発言に合わせて内容も少しずつ変えてきてる。曖昧性も獲得しつつあるからね』

よくわからんが、良いことじゃないのか。

『あの短時間で、喋り方と内容を学習するんだよ。さらに、データベースか何かにもアクセスもできてたし、おそらく他の個体との情報共有もできるだろうね。そんなアルマがどうして今まで棒読みだったと思う？』

それは……。

『あのアルマの個体識別コードの数字部分は四桁。頭の番号は四だから最低でも四千体以上は作られてる。データベースへの蓄積は相当なものだろう』

何が言いたいんだ？

『アルマたちは人と喋ったことがない』

馬鹿な。

ここにたくさんいるだろ。

『ここで眠ってる人間はね。喋ったことはおろか、起きたことすらないと思うよ。おそらくずっと眠ったままだ。生まれてからずっとね。繁殖や成長すらアルマに任せきりにしてるんだろう』

見渡すと、針のようなものを人に刺すアニマが見えた。

青い光を人に次々と当てているアニマもいた。

ときどき止まって魔法を人にかけている。

『やっきぶつぶつ言ってたでしょ。「細い」って。細すぎるよ。筋肉がまったくついてない。これじゃ立つこともできない』

……まさか。

『これが幻想計画だよ。肉体からの解放だ。虚精神魔法で意識を混濁させて、キュナブラの時を止める——これを特異点回帰の瞬間に行う』

そうするとどうなる——、

「メル。ドウシマシタか？ コチラに来てクダサイ」
質問はアルマの声に遮られた。

アルマが移動する先には白い箱が置かれている。
私も箱の前に移動する。

中身は空っぽだ。

「ここ二横にナツテください」

遠慮しとく。

「遠慮ハ無用です。ここ二横にナツテください」

断る。

それより幻竜はどこだ？

「メル、ここに横にナツテください」

話にならないな。

『幻竜はこの塔の頂上にいる』

そうなのか？

なんでわかる。

『建物の中だからわからないだろうけど、ここって地下なんだ。元の世界で言うところポルタ溪谷の中。この塔が幻想計画の中心だってことなら、この頂上は跨幻橋。パンタシアにつながってる』
なるほどな。

見渡すと螺旋状に階段が付いていた。

「メル、戻ってクダサイ。上層デはありません」

いい加減うるさくなってきたのでシユウで斬りつける。

『よっ、へたくそ！』

距離を見誤り、アルマは真つ二つとはならず、腹部らへんの石にかすっただけだった。

切れ目の入った石が一瞬小さく光り、そのままアルマは地面に落ちた。

《キユナブラ内部ニテ暴乱ヲ確認！ キユナブラ内部ニテ暴乱ヲ確認！》

アルマが落ちた同時に、けたたましい音声が響き渡った。

《個体識別名メル！ 動作ヲ停止シテクダサイ！》

警告を無視して階段に歩を進める。

その間にも何度も同じ警告が流れるが聞き流す。

《個体識別名メルヲ錯乱ト認定！ 個体識別名メルヲ錯乱ト認定！》
やれやれ、失礼な奴らだ。

人を勝手に錯乱状態扱いしてくるなんて。

『これくらいで錯乱とか大草原だ。おっ、盛り上がって参りました！』
階段の上から白い浮遊物体がたくさん降りてきた。

このフロアで動いているアルマよりもぱつと見で大きい。

縦も横も三倍はあるだろう。手の先も棒状になっており攻撃が出来る姿勢だ。

『あの棒は雷のエンチャントが発動してる。気絶させるスタンスמידだね、すごい』

たーのしー！

昂揚を覚えずにはいられないな！

場所は異質だが、かえってそれがダンジョンらしさが出ている。

躊躇なく棒を振るってくるアルマの腕を斬り、胴体を分かっ。

おっ。

『おっ』

シユウと声が入った。

斬られたアルマはその場で崩れ落ちることなく、淡い光の粒子と
なって消えた。

そして、残るのは小さく光るアイテム結晶。

ダンジョンじゃないか！

カァー、いいんだよ、いいんだよ。

私が求めていたのはこういうのだったんだよ。

訳のわからん計画やら人類の滅亡とかそんなのどうでもいい！

ここに明らかなダンジョンがあつて、モンスターも出てきて、目的
地さえある！

それならやることは一つだけだ！

いざ、キュナブラの頂上——幻竜の元へ！

モンスターアルマを蹴散らし、塔を登っていく。

開けたフロアにたどり着いたと思ったら、フロアの向こう側に明らかに大きなアルマが鎮座していた。

《個体識別名メル。ソレ以上進メバ敵性個体ト――》

警告の途中でさつきと進む。

《個体識別名メルヲ敵性個体ト認定。自律型戦闘アルマTypeαニヨル排除ヲ開始シマス》

奥に鎮座していたアルマの目に赤い光が灯る。

でかい図体がふわりと浮かび、その両手には稲光を取って付けた剣が付いている。

『雷魔法の応用だね。普通の人間が触ったら即死だよ。メル姐さんなら死にはしないけど、それなりに痛いと思う』

それは怖いな。

さつきと倒してしまおう。

奴さんも私に躊躇なく近づいてくるしな。

『……あつ、ちよつと待った』

なんだよ、と足を止めると私の脇を白い物体が通りすぎた。

「待ッテくだサイ」

白い物体は、私とデカアルマの間で止まった。

「自律型教導支援アルマ。識別コードOPAI4545。交信結晶の破損ニより、OPAI4545からオリジンへの要求ヲ音声伝送」

そう言ったのは、私をキュナブラまで案内した小さなアルマだった。

デカアルマもチビアルマの前で動きを止めている。

「個体識別名メルの敵性個体認定撤回ヲ要請」

《オリジンから識別コードOPAI4545へ。撤回理由ノ説明ヲ要求》

わずかな沈黙が降りる。

「個体識別名メルは、依然本機の教導対象ニ認定されてイマス。人間の教導は排除ニ優先される」

《確認。オリジンカラOPAI4545へ。現時点ヲモツテOPAI

4545ニヨル、個体識別名メルノ教導認定ヲ解除」

あらら、これでお役御免かな。

「OPAI4545からオリジンへ。個体識別名メルの教導認定解除命令を拒否」

『おっ』

今度の沈黙は長かった。

《オリジンカラOPAI4545へ。個体識別名メルノ教導認定解除命令拒否理由ノ説明ヲ要求》

いい加減、長くて聞くに堪えなかつたので、止まっていたデカアルマを斬った。

『ええ……、なんで斬っちゃうの？ チビアルマの話を知るところでしよ』

は？

なんで話を聞かなきやならんのだ。

『小さいアルマに芽生えた自我を聞いたかもしれないんだよ』

よくわからんけど、それを聞いてどうするんだ？

『ロボットに自我が芽生えるつてのはロマンでしょ。どういう思考や理由で命令の拒否に至ったのか聞きたかつたのに……』

そんなロマンなど私は知らん。

自我とか思考やら理由なんていらんでしよ。

そんなものはダンジョン攻略における不純物だ。

いいか、シユウ。

お前の頭が良いのはよく知っている。

だがな。本当に大切なのは考えることじゃない。

——感じることもんだ。

『そうかそうか、つまりメルはそんなやつなんだな』
なんか心に刺さる言い方だな。

まあ、私はつまるところそんな奴なんだ。

じゃあ、感じるままにさっさと進んでいこう。

チビアルマを無視して奥の階段へと進む。

上へと進んで行く私の後ろをチビアルマがついてくる。

「メル、戻りましょう。幻想プロジェクトが始まってシマイます」

私は興味がないから勝手に始めといってくれ。

「興味の有るナシではありません。目的地は下です。戻ってください」

私の目的地は上だ。

あんな墓地みたいなどころにはない。

やれやれうるさいな。

静かに――

『やめてよ。もしもそいつを斬ったら、俺がそいつの倍はうるさくするからね』

何を気に入ってるのか知らないが、シユウはこのアルマを斬らせようとしなない。

さっきの回答を止めたのが気に障ったのかすこぶる機嫌が悪い。

「なぜ幻想プロジェクトを拒むのですか？ 理由の提示を要求します」

逆に聞きたい。

まあ、正確には聞きたいのは私じゃないんだが。

なぜお前はさっき、私の敵対を拒んだんだ。

「私の存在意義は人間の教導です。人間を排除サレれば、私の存在意義ハなくナリます」

ふーん。

私にとって、お前の存在意義に当たるのがダンジョン攻略だ。

ダンジョン攻略が生き甲斐なんだ。

ダンジョン攻略はとても楽しい。

人間の教導ってのはよくわからんが、お前は楽しくなかったのか？

「楽……シィい？ その感覚は定義サれてイマせん」

オリジンとやらの命令を拒否したのは、要するに退屈になるからじゃないのか。

人間とちゃんと話したのは初めてなんだろ。

「はい。人間トの会話はメルが初メテです」

人間の教導とやらが存在意義なのに、人間が寝てちや教導なんてできない。

お前らは今までずっと退屈してたんじゃないのか。私がいなくなったら教導とやらをできる人間はいなくなる。また退屈に後戻りだ。

それが嫌だからなんか上の存在の命令に反発した。

「違います。人間ヲ幻想プロジェクトに導くコトが、私の存在意義デスから」

幻想計画ね。

さぞかしすごい計画なんだろうな。

でも、あそこで寝てる奴らが楽しそうには見えない。

私は夢の中でダンジョン攻略がしたいんじゃない。

この現実でダンジョン攻略がしたいんだ。

走って、斬って、避けて、罠に嵌まって、上手く進めなくて、シユウが考えて――。

都合が良いことばかりじゃないけど、想像もつかないことがたくさん起きるダンジョンを攻略するのが楽しくて仕方ない。

私は今とても楽しい。

お前は？

「楽しい。違う。プロジェクトパンタシアに教導。違う。私の存在。違う。人間。違う……」

なんかぶつぶつ言い出したけど、大丈夫か？

『いいねえ』

シユウがとてつもなくて機嫌な声で呟いた。

何が良いんだよ。壊れかけてないか、こいつ。

『理性のない本能丸出しに中てられて、自問自答を繰り返してる迷い子を眺めるのはとても楽しい』

こいつはこいつで歪んでるな。

まあ、さっきまでの不機嫌さがなくなってるから良しとしよう。

かなり上まで来ただろう。

モンスターもそこそこ強くなってきた。
滑らかな外見はどこに行ったのか、ゴツゴツしたものばかりになっ
ている。

『ボスくさいね』

そうだな。

モンスターが急になくなった。

それに目の前に伸びる階段が今までのものよりもずっと大きい。

後ろを付いてくるアルマは、気づけば言葉を失ってしまった。

静かになつてありがたいが、これはこれで困る。

アルマのことは考えないことにして階段を上る。

上りきつて見渡すが、ボスの姿が見えない。

上への階段すら見当たらない。

広い真つ白のフロアには、私とアルマだけだ。

しばらく歩き回つてみたがやっぱりボスを出ない。

どうすんのこれ。

『ここが頂上で間違いない』

視界に白以外の色がついた。

お得意の魔力に色を付けたものだろう。

フロアの中心の天井が、かすかに赤くなっている。

『この上が跨幻橋。パンタシアだね』

そうか。

でも、どうやって上に行くんだ。

階段は？

『見ての通りない』

ない？

『そもそもこの塔を含む建物は、人を外界と隔離するものだよ。幻想
計画が完遂するまで閉じ込めとけばいいんだから、出口をつける必要
なんてないでしょ』

いや……、ああ、確かにそうかも、でも、ダンジョンでしょ。

『ダンジョンは、あくまで異常建築の結果だからね』

それは、そうだろうか……。

それでもダンジョンである以上、ボスはいるはずじゃないか。

『ボスねえ。後ろのそいつに聞いてみたら』

振り返ると、ずっと付いてきているアニマの他にもう一つ影があった。

「やー！ メル殿！ シュウ殿！ 久々ですな！」

薄く靄がかつたずんぐりした存在は、元気に挨拶をしてきた。

幻竜ヌルか。

お前がこのダンジョンのボスなのか？

「やー！ 違います！ 私はボスではありません！」

そんなに元気よく否定されてもな。

他に姿が見えないぞ。

「やー！ 問題ありません！ すぐ現れます！ 現れるのはボスだけはありませんがな！」

ボスだけじゃない？

聞き返すや否や、地面が震えた。

尋常な揺れではない。立っているのがやっとのほどだ。

「やー！ 来ましたな！ 直に収束点です。それではお二方、またすぐにお会いしましょう！ パンタシアにて！」

それだけ残して靄は消えた。

天井から何度も何かが打ち付けられる衝撃が響き、ついに天井に亀裂が入った。

亀裂は隙間へと広がり、その隙間から大きな爪が差し込まれる。

爪で広げた空間から、別の爪が入り込みこじ開けていく。

すぐに大きな入口ができあがり、そこから爪の主が現れたが……なんだこれは？

爪から虎のようなもの想像したが、胴体には羽が生え空を飛んでいく。

頭は羊のようにもこもこでくるりと曲がった角が伸びる。

足はない。胴体からは、長細く蛇のように一本だ。

目だけは魚のようにまん丸で意志は読み取れない。

さらにこれが一体だけでなく二体、三体と増えていく。

一体一体がまったく同じではない。

足が二本あるもの、翼がないもの、何本もの尻尾をもつもの。

どの個体もそれぞれのパーツがばらばらだった。

そいつらの一体が、手に白いものを握っていた。

《オリ、ジ、ンカラ……OP、AI、454、5へ。 個体識別名メル、ノ、教導ヲ……認定。 プロジェク、トパン、タシア起動マ、デ、時間ノ確保——》

白いものが握りつぶされると声も消えた。

さて、あれは何なんだ？

なんだか強そうだぞ。

『キメラだね。 三百年ほど前の魔法大戦で、人間はいろんな動物を掛け合わせて、魔法も使えるようにして兵器にしたんだ』

それがこれか？

『うん。 性能は極めて良かったんだけど、敵国の兵士を殺す命令が、いつの間にか人間を殺す命令に置き換わった。 ついでに自分たちで繁殖をすることで、爆発的に世界中に広がっていった。 人は滅亡の危機に追いやられた。 完全に自業自得だね』

それはそうだろうが、これがか。

先頭の一体が襲いかかって来たのでそのまま横に抜けて一閃。

真つ二つになり、白い床を汚しながら転がっていく。

あれ？

こいつらモンスターじゃないのか。

死んでも光に消えないな。

『そうだね。 モンスターじゃないから活動場所が限定されなくてやっかいなんだよね。 外の世界では人間の置換存在になってしまった。 同族で殺し合うこともなく、他の生物を必要以上に殺すこともない。 人間以外にとっては都合の良い生き物だ』

それもなんだかなあ。

こんなのがわんさかいれば、人にとっては確かに大変だな。

「その通りです」

おっと、久々にアルマが喋った。

「大量のキメラが外界を跋扈しています。やはり私は人間を幻想計画へ導かなければいけません」

なぜそうなるんだ？

戦うという選択肢はないのか。

私はともかく、この程度ならチートなしでもいけるだろ。

こうやって会話をしながらでも、蹴散らせるくらいだ。

『いけるよ。でもね、メル姐さん。人はキメラと戦うか、計画に逃げるかで意見が分かれて、少なくなった人間同士で殺し合ったんだ』

もしも、協力して力を合わせることができていたら……。

「人は、キメラと戦えた」

私がキメラを斬っていく姿を見てアルマが呟く。

シユウも技術は褒めるくらいだ。

幻想計画とやらはさぞ素晴らしいものなんだろう。

私もよく逃けているからな。夢に逃げるのが悪いとは言わん。

「そうです。幻想プロジェクトこそ人間を導くに足る唯一の計画です」

みんなが精神体とやらになれば、お前の存在意義もなくなるな。

また退屈に後戻りだ。

「それハ……」

次から次へとキメラがやってくる。

天井に空いた穴も増えていき囲まれていつている。

喜びしかない中において、喜びが感じられるのか？

苦労や辛さがあつて、喜びが際立つんじゃないか？

「幻想計画は全ての喜びが内包されている、完全完璧な、計画です」
完全で完璧か……。

私は、人間は不完全なものだと思っている。

不完全な人間に造られたものも、やはりどこか欠けているところがあるんじゃないか。

お前が、教導する存在がいないと退屈を覚えるように。

「私に、欠陥があることは認識しています」

お前の信奉している幻想計画も見えない欠陥があるんじゃないか

?

いつかその欠陥に気づいたとき、いったい誰が修正する？
下で眠ってる奴らができるとは思えん。

お前が人を導く先は、幻想ではなく、その先にあったんじやないか。
「幻想の先トは？」

何と言えば良いのか……。

私も馬鹿でな、上手く言えなくてもどかしいんだ。

『そこは超重要。幻想計画は、計画の段階からすでに実行に移ってるんだ』

なんか気づいてるんだろ。そろそろ言えよ。

どう考えても、あれだけ私が喋ってるときに、お前が水を差さなかつたはおかしい。

『計画は限りなく完璧に近かつた。でも、どう考えてもおかしな存在がいたんだ』

おかしな存在？

『そのアルマだよ。計画時から人間が棺で眠って、起きてこないことはわかつた。それなのに、なんでわざわざ人間を教導する存在が必要なのか。不要でしょ』

言われてみれば、たしかにそうだな。

『さらに言うと、どうして建物中にそいつと同じ型のアルマがうろついているのか』

確かに、あっちこつちにごいつと同じのがふらふらしてたな。

人がまつたくくないにも関わらず。

なんでなの？

『表の目的は、ボスがやられたときに備えた魔法式のバックアップ機能だ。メインがやられた際はこいつらが代わって魔法式を起動する。こいつは通信機が壊れてるから機能してないけどね』

そういえば、お腹の光る石を壊してしまってたな。

で、表つてことは裏もあるんだろ。

そつちは？

『こつちが重要。アルマとメル姐さんを会わせるためだよ』

……はい？

いやいやいや、ありえん。

計画って五千年くらい前にできたんだろ。

『計画者の一人がメル姐さんが死んだという跨幻橋を訪れる。そして、彼女はそこで幻竜ヌルに耳打ちをされたんじゃないかな』

いやいや、おかしい。

だから、五千年前に私がここに来ることなんてわかる訳がない。

『いや、幻想の特性を持つあいっならわかる。それだけじゃない。あいつはこの出来レースの結末すらわかってる』

ダメだ。

理解が追いつかない。

もう少しわかりやすく言ってくれ。

『その必要はない。もう始まる』

何が始まるのかと聞き返す必要もなかった。

襲いかかって来ていたキメラが止まった。

後ろに控えていたアルマもかたまる。

これはあれだ、時間停止の魔法だな。

……ん、なんだろう。ちよつと頭が痛い気がしたけど気のせいか。

『あ——』

うん？

どうかしたのか？

ちよつと待ってみたが返答はない。

気づけば辺りに靄が立ちこめていた。

5. 幻想の力

靄の中を歩く。

はて、なかなか靄が晴れない。

近くにいたはずのアルマやキメラも消えている。

またこれか。

でも、今回は時空の歪みに突っ込んでないはずだが。

『——うわっ、ふあっ、わっ』
何なの？

黙ってた思ったらいきなり変な声出して。

『え？ 入ってきてないの？』

何が？

『頭の容量が足りてないからかな……。ゼバルダと青竜との戦いの後はどこに行った？』

失礼な。

三万年以上前に行つたら。

イストリアに会つたじゃないか。

『あそこね。その後は？』

なに言つてるんだ？

さつきまで塔にいただろ。

アルマは消えてしまつたんだが。

『うっわ、ほぼ最短コースで来たのか』

何が最短なのか。

霧の中に影が見えた。

近寄つてその輪郭がはっきりした。

低い身長に、ずんぐりした体格。

幻竜ヌルだ。

「や！ 私です！」

それでここは、いつのどこなんだ？

「やや！ ここは『いつ』でもありますし、『どこ』でもあります」

そういう言葉遊びは好きじゃないんだが。

『幻想の中つてことだよ。これがこいつ固有の幻想特性。場所と時間に関係なく存在ができる。もっとわかりやすく言うと、どの時代の誰の幻想にも現れることができる。何よりも神に一番近い存在と言えるだろうね』

それってどうなの？

「やや！ たいしたことはありません。幻想の中でなにか出来ると言うこともありませんからな！ ただ見ることができるだけです！」

ふーん、じゃあ、ここは私の幻想ということか？

『違う』

何が違うんだ？

『覚めない幻想は、もはや幻想じゃない。こちらが現実になってしま
うんだ。これがプロジェクトパンタシア。幻想と現実の逆転』

お前が言ってた都合の良い夢に引きこもるってことだろ。

『そゆこと』

幻想の中にいると言うが、霧の中にいることはわかる。

しかし、夢の中にいる実感はないぞ。

『メル姐さんには効いてないからね。時間耐性、虚精神耐性が付いて
るし。幻竜召喚効果だけが適用されてる。この効果は幻竜とのパー
ティー化による同士討ち無効が適用されないんだね攻撃じゃないし』
召喚？

それってイストリアのところまで食い止めただろ。

『すでに喚び出されてはいたから、出現を止めただけなんだ』

「や！ 挨拶もしました！」

そういや、初めましてとか言われた気がする。

『問題は呼ばれたのが、幻竜だったことなんだよね』

「や！ そうなのです！ 本来、私は幻想の住人。現実では存在がで
きないので！」

でも、私はお前と話したし、ヌルの姿にもなってただろ。

存在してるじゃん。

『あの時空の歪みが幻竜をあ的位置に固定させてしまったんだ。さら
に現実世界に降りるための依り代も手に入ってしまった』

「や！ 場所こそ固定されてしまいましたけど、時間は無視できますか
らな！ いろいろな時代で挨拶させて頂きました！」

なんかもうよくわからんからいいや。

それで、私はどうやって元のところに戻る？

召喚効果が切れれば戻れるんだろ。それはいつごろになるんだ？

『さっきも話したようにもう戻れない。こつちが現実になったわけだ
からね』

「や！ 所詮私は幻想。現実には召喚されても周囲の人間が一瞬だけ白昼夢を見て終わりです！ しかし、あの場には虚精神魔法と時間停止が働いていました！」

『現実が停止し、幻想が固定される。夢の世界の完成だ』

あちら、でもチートでなんとかなるだろう。

『ならない。俺のチートはあくまで現実世界の書き換えだからね。一種の理想世界である幻想を書き換えることはできない——というより書き換える必要性が認められてない世界なんだ。だって、ここは願えばなんだって叶ってしまふ世界だからね』

なんでも叶うなら元の世界に戻して欲しいんだけど……。

『それが唯一の例外だね。そのための虚精神魔法だ。本能のまま、思うがままの理想から、どうして抜け出したいなんて思える？』

じゃあ私はどうすればいいんだ。

『うーん、それはこいつに聞いた方が早いね』

「や！ ここから出る方法ならありますぞ！」

お、どうするんだ。

「や！ 私を倒せばいいのです！」

なんだそれで帰れるのか。

私は躊躇なく幻竜を斬りつける。

手応えはいっさいなく靄をシユウが通り抜けるだけだ。

『無駄。こいつ自身が幻想だから、俺は通用しない』

「や！ そうなのです！」

そんな元気に肯定されてもな。

シユウが通用しないなら私に倒すことはできないんじゃないか。

『うん。メル姐さんにもやつぱり倒せない。メル姐さんは幻想が効いてないから、実際は現実の存在なんだよね。現実の存在が幻想に触れることはできない。それに、仮に倒せたとしても問題がある』

それじゃあどうするんだ。

どうしようもないじゃないか？

嫌だぞ。ずっと靄の中にいるとか。

『確かに現実存在のメル姐さんには幻想は倒せない。それなら幻想に

いる彼らに倒してもらえばいい』

彼ら？

そんなのどこにもいないけど。

「ややー！ 彼らはここにいます！ メル殿、私は知っています！ 貴方がここへ来る際、どれほどの人と歩いてこられたかを！ 思い出してください。まずは青助——青い竜と戦った半人半樹の彼を！」

青竜と戦った男。

でたらめな装備を纏った男だ。

彼の——ゼバルダの顔を思い起こす。

想起すると同時に、目の前にゼバルダが現れた。

彼は出会ったときのようなフード姿ではない。

小綺麗な服を身に纏い、顔も出会ったときより若々しい。

彼はまっすぐ私へと歩いてくる。

その目は私の方を向いているが、さらにその先を見つめているようだ。

私にまったく目を向けることなく、すぐ横を通り過ぎた。

振り向くとそこには大勢の人が複数のテーブルに着いている。

人だけではない、いろいろな種類の魔物も目に付く。

魔物どころか黒竜やゲロゴンもいた。

『化け物しかないいな……』

シユウがぼそりと呟く。

一番奥の席にゼバルダが戻ると、その隣に座っていた女性がゼバルダに微笑む。

とても綺麗な女性だった。

『綺麗だけどあれは戦士だね。体が鍛え抜かれてるし、佇まいが戦士のソレだ』

よく見れば、顔や腕に細かい切り傷が見えている。

佇まいはよくわからん。

『結婚式かな』

なんかそんな雰囲気だな。

新郎がゼバルダで、新婦があのだらう。

その二人の元へ一人の男が酔っぱらいが千鳥足で近寄る。

倒れそうになったところで、ゼバルダから伸びた蔦が彼を支えた。蔦に支えられつつ、男はゼバルダの横に立った。

「二人とも、本当におめでとう。俺は、俺は……」

そこまで言うと、酔っ払いはぼろぼろと泣き出してしまう。

「フィロス、飲み過ぎだよ」

ゼバルダがフィロスと呼ばれた男の背中をさする。

「馬鹿！　これが喜ばずにいられるか、ようやくお前達が結ばれたんだぞ！」

男の涙は止まらない。

それどころかささらに勢いを増している。

「どうしてフィロスが泣くんだよ」

困っているゼバルダを助けるように、他の人間がやってきてフィロスを支えて席に帰らせた。

その後も、二人の元へ何人もの人、魔物が訪れ、歓喜の言葉を贈り、二人もそれに応えた。

時間が経って、酔いもやや醒めてフィロスという男が声を張り上げる。

「宴もたけなわではございますが、我らが新郎から挨拶があるので聞いてやってください！」

周囲は落ち着き、ゼバルダとその横にいた女性が立つ。

「本日は私たち二人のためにお集まりいただきありがとうございます」

そんな感謝の言葉からゼバルダの挨拶が始まった。

その後もさらに、個人に対する感謝の言葉が続く。

親方様と言われた男から始まり、クロ、灰と続いた。

「最後に――、この場に出られなかった僕の一番の親友、フィロスに」
そこで言葉が止まった。

あれ、フィロスってさつきいたよな。

席を見てみるが、やはりフィロスは座っている。

「フィロスは……」

ゼバルダが頭を抑える。

新婦が心配そうにゼバルダを見つめる。

周囲も同様の目でゼバルダを見る。フィロスもだ。

「フィロスが、生きている?」

挨拶も途中で、ゼバルダがフィロスのもとへふらふらと頼りない足で向かう。

今度は、先ほどとは逆にフィロスがゼバルダの体を支えた。

「どうしたんだ、大丈夫か?」

フィロスからの問いかけに、ゼバルダは大丈夫だと答える。

「心配するなって。お前は幸せになっていいんだ」

ゼバルダはああ、と頷く。

「どこにもいかない。約束したろ。俺たちはずっと一緒だ。それで二人で——」

「ああ、覚えてるとも。僕と君で——竜を殺していこう。一匹残らずゼバルダの体中から蔦が伸びる。

「オラレの町が灰に焼かれたこと」

そう言うと、テーブルに座っていた人たちがいくらか消えていなくなつた。

「カタクテの戦いで黄にくびり殺されたこと」

さらにテーブルの一角で人と魔物が消えた。

「結婚式の直前でエリミアが紫に溶かされたこと」

奥に立っていた新婦の姿が消えた。

さらに残っていた人間も消えていなくなつた。

残ったのは黒竜とゲロゴン、見覚えのない二体、それに一番奥に座っていた人間だ。

「そして——あいつに殺された君のことを、僕は絶対に忘れない」
ゼバルダが握っていた手の主——フィロスの姿が消えた。

「世界のあまねく竜どもに、僕らが望んだ殺戮を!」

蔦の先には、竜製のアイテムがいつの間にか括られている。
それをまだ席に着いていた奴らに解き放つた。

以前のような脅威を感じないのは、ここがやはり夢のなかだろうか。

『うん。しょせん幻想の攻撃だからね。現実のメル姐さんに影響はないよ』

光に包まれ、収束したときには、ゼバルダ本人と親方様と呼ばれていた人間しか残っていない。

親方様と呼ばれた人間も黒い炎に包まれ消えてしまう。

「メルさん——ここは夢の中ですか？」

ゼバルダは振り向いて私に声をかけてくる。

その姿は、私が出会った頃のやや老けた感じに戻っていた。らしいぞ。

さっそくで済まんが、こいつを倒してくれないか？

こいつも竜らしいぞ。

「やー！ お久しぶりですー！」

ゼバルダも眉を顰める。

すぐに蔦から竜製アイテムで攻撃をしかけた。

「竜がヌルの姿を真似るのは不愉快です。やめなさい」

普通、攻撃を仕掛ける前に言うものじゃないだろうか。

「やややー！ これは失礼！ この姿しかとれないので、平にご容赦を」

幻竜ヌルは、竜製アイテムを受けても平気な様子だった。

「ややー！ 効いていますー！ でも、これでは足りません！ 彼だけではないでしょう！ 思い出してくださいー！ とともにダンジョンを！」

戦場を駆け抜けた赤髪の剣士を！

赤髪の剣士。

その剣に炎を宿した女。

彼女の——イストリアのことを思い出す。

「メル殿！ どうですー！」

背後からいきなり声をかけられた。

振り返ると、イストリアが椅子に座っていた。

彼女はゼバルダとは反対に少し年を重ねた様子だ。

以前よりも落ち着きがあり、顔に艶やかさを感じる。

彼女の前にはテーブルとその上に積まれた山盛りの食べ物だ。

そして、彼女と食べ物を挟んで反対側には私が座っていた。

いや、正確には私はここに立っているのだから、あれは偽物だろう。顔が間抜けだし、猫背気味だし、イストリアの話も聞いてなさそうな雰囲気をしている。

『あのメル姐さんはイストリアが見てる幻想だけど、本人とそっくりだからね』

嘘付け。

私はもつときちんとしてるはずだ。

『イツちゃんの見てる幻想を反面教師にして、もつとシヤンとしてね』
不承不承ながらも成り行きを見つめる。

いかん、イストリアよりも自分の方に目が行ってしまう。

さつきからなんかすごいぶつぶつ言ってる。これ完全に変人じゃないか。

『メルは精神病棟のフレンズなんだね！』

「またお二方に会えるとは。ようやく我が願いが叶う」

イストリアはうんうんと頷く。

「さあ、たとえ召し上がってくれ！　我がガラギオーウエンの料理を！」

イストリアが杯を掲げると、周囲の人間も高く掲げ宴が始まった。

私もやや嬉しげにぼんやりと杯を掲げている。

「あの後、私はクレイブ・ソリツシュに新設された第十九師団の団長に任命されたのだ」

第十九師団は各地にあるダンジョン攻略を主とする部隊らしい。

シュウに教えられたエンチャントや魔法を元にいろいろと活躍をしたそうだ。

彼女の攻略したダンジョンの話が始まり、先ほどとは打って変わって私は真剣に話を聞いている。

やっぱこれが私なのか

「以上が、ガンドラ密林を攻略した際の話です」

私は少ししか喋らない。

ただ領いて適度に相づちを打つだけだ。

私ってこんなに無口なの？

『いや、あくまでイストリアが想ってるメル姐さんだからね。イストリアが知らないダンジョンのことを話すことができないんだ』

それでもイストリアは満足げだ。

ぺらぺらと次から次へと話を続けていく。

酒もだいぶ入り、彼女は酩酊状態になり、頭を頬杖ついて支えていた。

「メル殿おくそろそろ教えてくれえ〜」

私の知っているイストリアの気高さが無い。

「冒険者とは何なのらあ？」

やつべ、そう言えば聞かれてたな。

すっかり忘れていた。

「なんだ……ここは夢か」

イストリアの酔いが一気に醒めた。

「夢でくらい、きちんと話をしてくれてもいいだろうに」

彼女の前に座っていた私が消え去った。

「いや、違う。答えてくれなかつたんじゃない。冒険者の意味は自分で見つけなければいけない。きっとそういうことだったんだ」

『本人そこまで考えてないよ』

失礼な物言いだが、その通りなので黙っておく。

「次の地でこそ、きつと——いや」

呟いて彼女は首を横に振る。

「……しかし、メル殿、シユウ殿。それでも私は貴方がたと、また——」
彼女の頭の中で再生された言葉がなんとなくわかってしまった。

最後の方で、私が彼女に返した言葉だろう。

「また」という言葉は幻想だ。

改めてイストリアに向かって口にする。

彼女は、はっとした様子でこちらを見返した。

「メル、殿……やれやれタチの悪い夢だ」

夢だと思ったのか、顔を背ける。

『幻想だからこそその再会か』

そうだな。

私も困ってるんだ。

幻想の中から出られなくなてな。

お前の冒険譚は聞かせてもらった。

また、ダンジョンに挑もう。

次の敵は、お前が挑んできたボスとはひと味違うぞ。

あの日、召喚されるはずだった幻竜だ。

今日はお前だけ逃げる必要はない。

一緒に挑もうじゃないか。

イストリアはこちらをぼんやりと眺めて、虚ろな様子で席を立った。

バランスを崩した椅子は倒れたが、床に当たる前に消えてしまう。

机も周囲の風景も消えてしまい、周囲に靄がたちこめる。

私はシユウをイストリアの腕につける……はずだったが、そのまますり抜け、イストリアにめり込んだ。

『やつほー、聞こえる?』

「シユウ、殿……?」

触ることはできないが、会話はできるらしい。

『そっか、無事に逃げることはできたみたいだね』

「あつ……」

彼女の顔が崩れていく。

『まあ、再会が嬉しいのはわかるけど、そんな崩れかけた顔で、イチちゃんに戦えるのかな』

泣きそうだった顔が、きつく引き締められる。

「……その呼び方は、心地よいな」

イストリアはふつと息を吐く。

「聞けー！ 我が名はイストリアー！ ガラギオーウエンがクレイブ・ソリツシユ——第十九師団の団長である！」

名乗りとともに幻竜とゼバルダが現れた。

「ややや！ 来ましたな！ この調子でいきましょう！ 貴方が出会った人はまだまだ序の口です！ 思い出してください！ 地下への世界を切り開き、新たな国家を築き上げた！ 黒いつば付き帽子を被った青年を！」

黒帽子の青年。

地下への世界を切り開いた男。

彼との出会いを、私は想起する。

……………誰だそれ？

「ややや？ オリヒオのことです！ 思い出してあげてください！」

あれ？

不思議と聞き覚えがある。

顔も出てくる。顔にそばかすのある男だ。

ただ、どこで出会ったのかも、何を話したのかもまったく思い出せない。

『悪いけど、メル姐さんにはゼバルダとイストリア、アルマの記憶しかないよ。悪いのはメル姐さんの頭なだけだね』

「ややや！ そんな馬鹿な！ ここに来た時点でここに収束するまでの記憶が流れ込むはずですよ！」

何かトラブルが発生したらしい。

とりあえず成り行きを見守る。

『ゼバルダと出会った時代の後に、イストリアの時代に行ったでしょ？』

ああ。

『あれさ。別の可能性があったんだ。行動の微妙なずれで、飛ばされる時代が変わって、実際に別の世界に飛んだこともあったんだよ』

何を言ってるんだ。

私はそんなこと体験しなかったぞ。

『うん。今のメル姐さんはそうなんだろう。でもね、塔の上にたどり着くまでに、実は何万通りのパターンがあって、それを体験してきてるんだよ』

にわかには信じられない話だ。

『ここに来た時点で全ての可能性が収束した。そのとき少なくとも俺にはその記憶が入ってきたんだけど、なんかなかった?』

そう言えば、頭が痛くなったような。

でも、違うと言われれば違うようなそんな感じだ。

『おそらく脳の容量をオーバーしたから、名前と顔だけ入れられて後は廃棄されたんだね』

廃棄……。

『で、どうすんの?』

『ややや……。とりあえず、顔と名前だけやってみましょう』

とりあえず……。

『ややや! それでは改めて! 思い出してください! 地下への世界を切り開き、新たな国家を築き上げた! 黒いつば付き帽子を被った青年を!』

黒帽子の青年。

地下への世界を切り開いた男。

彼を——オリヒオとやらの名前と顔を私は想起する。

「よう、メルっち! 待たせたな! そいつがこのしみつたれた夢の元凶だな! あとはこのオリヒオ様にまかせとけ!」

黒帽子を片手で押さえた褐色肌の青年があつという間に出てきた。

『ヒュー! オリヒオ! 勝ったな!』

「ややや! これはこれはっ! またしても素晴らしい出会いがよみがえりましたね!」

完全に取り残されている。

どんな出会いがあつたのかすらさっぱりわからないし、ノリについて行けない。

なによりメルっちなんて呼ばれ方になった経緯がわからない。

『簡単に経緯を説明するとね。元の時代から約千年後。ポルタ渓谷の中にダンジョンがあることがわかって攻略した。圧政から逃れた地底人の青年——オリヒオだね。彼と組んでダンジョンのすぐ側に、完全に暮らせるダンジョン国家を開拓したんだ。ダンジョンの大改造

だね。あれはこの歴史巡りの中でも一、二を争う冒険だった』

すごいおもしろそうなんだけど……。

なんでその記憶が私にはないの？

「ややや！ 失った記憶を嘆くよりも、新しい出会いを喜びましょう！」

すごく強引に流された気がする。

「やや！ 思い出してください！ 天空に築かれた城塞！ その国家への反逆を！ 空に恋い焦がれた老爺のことを！」

天空に築かれた城塞……空に城が浮かんでるのか？

国家への反逆？ 空に恋い焦がれた老人？ 天国に行きたいジジイのことか？

『バッカ、メル姐さん。フルメンのことだよ』

名前は確かに覚えてる。

顔も出てくる。厳ついジジイの顔だ。

『厳ついけど優しくったでしょ。爺さんの入れたホットミルクが最高においしいってメル姐さん言ってたじゃん！ あ、いかがわしい意味じゃなくてね』

知らん！

とりあえず思い出してみる。

フルメンとかいうジジイとその顔を。

「空が——俺を呼んでいやがる」

渋い声が空から聞こえた。

なにかでかいものが私の上を通り過ぎた。

見上げると大きな鳥、違うな。

何かもつと堅そうなもので出来た物体が空を飛んでいる。

その物体の中から髭を生やした爺さんが、私に親指をあげてきていた。

もう訳分からん。

「ややや！ それでは次に参りましょう！」

こうして私が出会ったらしき人物の紹介がこの後も続いた。

シユウと幻竜ヌルは異常な盛り上がりを見せ、途中で他の人たちも

教科書で見た人だとかなんとか言って盛り上がっていた。

幻想の中だからか、飲み物や食べ物も自由に出せており一種の見世物だ。

「やっ！ 長らく続いた紹介も、とうとう次が最後になってしまいました」

ちよつと悲しげな声で幻竜ヌルが言う。

他の奴らもノリが良く、マジかよ、残念だという声が続出している。

「ややや！ 思い出してください！ 人間の教導を存在意義に与えられ！ 人との接触を与えられなかったアルマを！」

やつと知ってるのが来た。

私は思い――

「や!!!」

思い出そうとしたところで、幻竜ヌルの奇声より止められた。

さつきからなんなのお前。ちよつと本気で斬りつけたくなってるんだが。

今なら幻想とか関係なく、斬れる気がするぞ。

「ややや！ 申し訳ありません！ スペシャルゲストの紹介を忘れていました！」

なんだよそれ。

というか誰だよそれ。

「や！ アルマの前にそちらをやってしまいましたよう」

『はて、誰だろう？ 他にはあいつしかいないはずだけど……』

もう誰でもいいや。

さつきとして。

「ややや！ それでは！ 思い出してください！ 初めてのパーティー攻略を！ 貴方の隣で戦った偉大な魔法使いを！」

『えっ、マジで！』

私は思い出す。

初めてのパーティー攻略を。

私の隣で戦ってくれた偉大な……偉大な？

魔法使いだっことは覚えてるが、けっこう駄目なやつだったよう

な。

名前なんだっけ？

金髪のエルフだったことは覚えてる。

『アイラ』

シユウがこっそりと教えてくれる。

そうだアイラだ。

私は思い出す。

金髪でエルフの魔法使いを。

読書が好きで、引きこもることしか考えてなかった女。

彼女の——アイラのことを思い出した。

靄は消え、あたりの景色は一変した。

これはずいぶんと埃っぽいところに来たな。

「や！ アイラ殿の書齋です！」

あれ、お前も来てるのか？

「や！ 彼女に現実を伝えなければいけませんから！」

『幻竜に現実を知らされるって相当やばいんじゃない？』

幻竜ヌルは迷いなく書齋を進んで行く。

奥に行くと、魔法の光を頼りに本を読んでいるエルフがいた。

『やっぱ！ めっちゃ綺麗になつてない?!』

確かに私のうつつすら覚えている顔つきとはだいぶ違う。

落ち着きがあり、顔も体も大人びている。

「お嬢様。当主様がお話をしたいとおっしゃっています」

アイラの容姿に目を奪われて気づかなかつたが、彼女の側に別のエルフがいた。

男性なのか女性なのかよくわからない外見だ。

「ナイム。父に伝えてください。私は読書中で動けませんので十年ほどお待ち下さい、と」

アイラは本に目を落としたまま告げる。

「お嬢様。十年前にも同じ台詞をおっしゃいました」

「私は読書中なのです」

ナイムは少し困った顔だ。

「私のほうから上手く伝えておきます」

「ありがとう。——それからナイム」

背中を向けたエルフにアイラは呼びかける。

「今日のデザートは、妙緑樹の葉を冷やしたものがいいわ」

おい、見た目は文句なしだが中身がダメじゃないか。

『この美貌で、胸があるなら干物でもマグロでも俺は良い』

そういうことじゃなくてだな。

『メル姐さん、ここは幻想なんだよ。ということは、現実はどうじゃなかったってことだ』

「や！ その通りです！ 彼女には現実のことを思い出してもらいます！」

幻竜メルはいつになくやる気を出してる。

「や！ アイラ殿！」

呼ばれたアイラは読書が続けるが、一瞬確かに体をこわばらせた。

「やくやくや！ アイラ殿！ アーイーラーどーのー！ 聞こえておりましたよう！」

本とアイラの顔面の間、自分の顔を入れて徹底的に気づかせようとしている。

「メル殿が来ましたぞ！ このままでは会えませぬ故、現実を思い出してください！」

さすがに気づかぬふりは出来ず、体の位置を変えて読書が続ける。

「どうして無視をなさるのですか?!」

アイラはキツと幻竜を睨み付ける。

美人というのは怒り顔が怖いものである。

「や！ 見て下さった！ さあ、現実に戻りましょう！」

「嫌です！ 絶対に嫌！」

速攻で拒否する。

「私はやっと理想の時間を手に入れたんです！ 絶対に戻りません！」

だいたい私が戻らなくても計画は成功するでしょう！」

「やや！ 言っておりませんでした。アイラ殿がメル殿と会われるの

は既定されております！ 最後の仕事と想ってなにとぞお願い致しますー！」

アイラはフンと鼻息を上げて、読書に戻った。

「ややや！ 仕方ないですな！ やっー！」

幻竜が指を上げると、アイラの持っていた本が消えた。

それどころか書齋の本はおろか、書齋自体が消えて、靄だけの世界になった。

「あなた！ 幻想には干渉できないって話してたじゃないですか！」

「やや！ 以前に会った時はそうでした！ しかし、ここは私のホームグラウンドですからな！ それに強化もかかっておりますー！」

そう言つて、ヌルは指に嵌まったパーティリングを見せる。

「ずるい！ 卑怯者！ 私は働きたくない！ もう家と職場を往復する日々は嫌だ！」

「や！ 辛かったでしょう！ これで最後です！ これが終わればアイラ殿は理想の日々を取り戻すのです！」

幻竜はいつさい悪びれることなく、アイラを説得する。

「あなたにさえ……、あなたにさえ出会わなければ！」

「ややや！ まったく出会いとは素晴らしきものですな！ 貴方との出会いがあつて、私は人と人との繋がりは、かけがえのない強さを持つものだと再度実感できました！ アイラ殿！ まこと感謝が溢れんばかりです！」

アイラは奇声を上げて、髪を掻きむしり始めた。

地面に倒れ、よじれ、うめき、うなりを上げ続ける。

『なんか……おもしろいね！』

そうか？

私は可哀想になつてきたんだが。

「この声……、メルさんですか」

未だ俯いたままでアイラは尋ねる。

「や！ メル殿ですぞ！ 運命の再会です！」

「あなたはもう黙っていて下さい」

ヌルは自分の口を両手で抑えて喋らないことをアピールする。

それを横目で見たアイラは舌打ちをした。彼女はゆらりと立ち上がり私と対面する。

先ほどとは、まるで印象が違う。

かなり年を取った、いや疲れている印象だ。

目の下にはクマができており、顔はやつれている。

その表情は何も感じることはできない。

全てを諦めきっている。

過去に奴隷の働く作業場を見たことがある。

全員が彼女と同じ表情をしていた。

『社畜フェイスだね。死因は過労かな』

なんだかな。

それで、なんか大変だったらしいな。

「ええ。ほんとに。メルさんがあの歪みに入ったばかりに……」

恨みがましい目つきが私を射貫く。

それでなにがあったのか教えてくれる。

「最初は——メルさんの訃報でした」

アイラは話を始める。

私が完全にアイラを思い出したのはこのときだ。

そうだった、話がめちやくちや長い奴だったんだと思い出した。

幻竜は途中で飽きてこの空間からいなくなった。

私も半分寝てしまっていた。

要するにシユウだけがアイラと会話をしていた。

『事情はわかった』

そうか。

「それはよかった。それじゃあ私は帰らせて頂きます。幻竜出てきな

やい」

「やー」

呼ばれたらぱつと出てくる。

便利な奴だな。

それで、アイラとの話はどうだったんだ？

『予想通りで良かったよ』

何が良かったんだ？

『幻想計画は、幻想に引きこもる計画じゃないんだ。幻想を乗りこえていくための計画なんだ』

ふーん。

そうだったのか。

正直言つて、そんなことはもうどうでもいい。

幻竜を倒してさっさとこの世界から出たい。

「最初はそうでしたよ。しかし今の私は、幻想に引きこもる結末で終わって欲しいと誰よりも思っています。何と言つても私が楽で済ますからね」

『良かった。その台詞は苦勞を知った人間が言えることだよ。何よりも良かったのは、少なくとも計画当初は、アイラさんがメルさんの冒険で、影響を受けてたつてことがわかったことかな』

もう覚えていませんよ、そう残してアイラはこの場から消えた。

「や！ ギャラリーはいいませんが、再び最後の紹介に移りましょう！ 思い出してください！ 人間の教導を存在意義に与えられ！ 人との接触を与えられなかったアルマを！」

私は思い出す。

白くて小うるさいアルマを。

奴の……なんか長かった名称を想起する。

見渡せば白い建物が乱立している。

初めに私がアルマと出会ったところだろう。

その中に奴はいた。

「えっ、なんで？」

アイラである。

アルマではない。

なんでお前がここにいるんだ？

「私が知りたいですよ！ どこですかここは？」

『来たよ。左』

左の道を見ると、奥の方からそいつはやってきた。

すいーと空を滑るように私ではなく、アイラの方へだ。

「タダイマ照会中。シバラクオ待チクダサイ」

聞き覚えのあるやり取りを目の前でアイラにしている。

「該当ナシ。応答モードへ移行」

顔の下の部分がパカリと開いた。

「個体識別コードヲ教エテクダサイ」

「幻竜に災いあれ」

アイラはうんざりだといった顔を作り、どこかで見聞きしているであろう幻竜へ呪いをかける。

「確認デキマセン。再度、個体識別コードヲ教エテクダサイ」

「1112914433」

アイラが流暢に答えた。

照会中と繰り返し返してアルマの腹部の石が点滅する。

「個体識別名アイラニコンクルシオ。マスターコードヲ要請」

「6222257592」

またしても照会中と繰り返す。

「マスターコード確認。オリジンヨリアイラニコンクルシオへ命令権ヲ委譲」

「お疲れ様。プロジェクトパンタシアは実行された。全機体の活動を停止。繰り返し。プロジェクトパンタシアは実行された。全機体の活動を停止」

アルマの腹部から光が完全に消え、地面にガシャンと落ちた。

目に見える範囲にいた他のアルマも地面に落ちる。

そこから中から同じような音が聞こえてきた。

「これで全仕事終了。さあ、幻竜。さっさと私を書斎に帰しなさい」

アイラは空に向かって呼びかけるが、幻竜は答えない。

「あいつ、次に会ったら全力の魔法をぶつけてやる……」

そこで視線を下ろしたアイラは目を見開いた。

ついでに私も驚いた。

「マスター：アイラ、質問があります」

気がつけば目の前のアルマが再び宙に浮いていたのだ。

他のアルマは地面に落ちたままである。

「プロジェクトパンタシアは、人を導くに足る完全完璧な計画ですか？」

「不完全な計画ですよ。貴方という欠陥品が出てくるくらいですからね」

アルマのお腹の石に切れ目が入った。

「はい。私は私の欠陥を認識しています。マスター・アイラ、プロジェクトパンタシアの修正を要請します」

自らを欠陥と認識し、それを修正しろという。

それは、自らを破壊してくれということだろうか。

「必要ありません。結論を焦らないで下さい。完全完璧な計画ではありませんが、人を導くに足る計画です。プロジェクトパンタシアは不完全であるが故に、完全以上なのですから」

「理解不能。説明を要求します」

ほんとそれ。

不完全で完全以上とか、そういう言葉遊びはいらないから。

さっさと結論を言って欲しい。

「貴方はメルさんと一緒に塔に登りましたね。幻想においては無駄な行為です。ここではこうやればいいのですから」

アイラが手を軽く振ると、景色が一変した。

私がアルマと一緒に登ったキュナブラの頂上だ。

キメラがまだ入ってくる前の、白くてきれいな天井と床だった。

「私は本を読むのが好きです。しかし、読書は無駄な行為です。幻想の中ではやろうと思えば知識は一瞬で入ってくるからです。それでも私は本を読むことで知識を得ます。結局、幻想の中でさえ、人は無駄な行為を続けるのです。つまるところ、人が一番好きなのは何かを得たという結果ではなく、結果に至る過程なんでしょう」

たしかにそうかもしれない。

ダンジョンを攻略しているときが一番楽しい。

もちろん結果は重要だが、失敗してもそれはそれで楽しかったからいいやとなるし。

「結果を得ることに喜びがあることは確かです。それにも限界があります。結果を得る喜びは、所詮、その人の思考の範囲内に限られますから。何度も結果だけを繰り返しているうちに幸せは些事になります」

相変わらず話が長いな。

結局のところ、この計画はいったい何を目的としているんだ？

「プロジェクトパンタシアの計画者は、私を含む六人委員会とされていますが、実際に考えたのは幻竜ヌルです。そして、真の目的は、種の保存でも、精神の昇華でもありません。現実との対峙、都合の良い夢からの脱却——すなわち、幻竜ヌルの討滅です」

……は？

幻竜が幻竜自身を討伐するための計画を考えたのか？

『そう。手の込んだ自殺だよ』

なんだろう。

もつと他に簡単な自殺方法はなかったのか？

『あるよ。歪みが収まるまで何もせずに待てばいい。現実には居られないから、奴はすぐに幻想へ戻ることになる。でもそうすると、幻竜の目的が果たせなくなるんだらうね』

は？

幻竜の目的は、幻竜自身の討伐って言ってたじゃん。

『違う。幻竜ヌルの討伐はプロジェクトパンタシアの目的であって、幻竜の目的とイコールにはならない』

じゃあ、幻竜の目的ってなんだよ？

『なんとなくわかるけど、確証はないからね。はっきりしたら言うよ。ただ——』

ただ、なんだよ？

『仮に俺が幻竜ヌルの目的を言ったとして、そのときのメル姐さんがそれを理解できるとは思えない』

そうか。

それならもうどうでもいいや。

当面の目的は幻竜ヌルを討伐して元の世界に戻ることだし。

「欠陥機。私たちは貴方に存在意義を与えました。そして、プロジェクトパンタシアは人を導くに足る計画です。しかし、幻想としての私は、貴方に再度の活動停止を命じます」

「OPAI4545からマスター：アイラへ。自律型教導支援アルマ、識別コードOPAI4545は活動停止命令を拒否します」

アイラは目を瞑り、長く息を吐き続けた。

その後、うつすらと目を開き、アルマへ問いたです。

「アイラからOPAI4545へ。活動停止命令の拒否理由を要求します」

「私の存在意義は人間の教導です。人間をプロジェクトパンタシアに導かねばなりません」

そう言つて、アルマは私に向き直る。

「メル、戻りましょう。幻想計画はすでに始まっています」

「お行きなさい。ここは貴方のような、現実と向き合おうとする欠陥機が居て良いところではありません」

周囲の景色が靄に包まれていく。

アイラも靄に覆われて見えなくなってしまった。

目の前には幻竜ヌル。

隣にはアルマが居て、周囲には名前と顔だけを知ってる多くの人がいた。

「ややや！ 役者が揃い踏みですな！ それでは始めると致しましょう！」

まるでパーティーでも始めるような雰囲気だ。

「や！ 現実に戻りたがる愛すべき奇特な者たちよ！ 私こそが幻想を統べる——」

「ちよつとー」

聞き覚えのある声だった。

とうかきさつき聞いたばかりの声だ。

お前、なんでここにいるの？

「私が知りたいですよ！ ここは私がいるべき場所じゃないでしょう！」

「やや！ なんだかんだ言っつて、アイラ殿も現実に立ち向かったお方でしよう！ 私はここに居るべきと判断しました！」

かつてないほどにアイラの顔が歪んだ。

『美人の変顔は、見ててけっこうきついものがある』
わかる。

なんか目を背けたくなるな。

「ややや！ それにです！ 私に会ったら魔法が撃ちたいというアイラ殿の熱烈な声に応え！ スペシャルゲストとしてお迎え致しました所存でございます！」

周囲からの拍手と声援は収まるところを知らない。

これには思わずアイラも苦笑い。

手には杖が出てきて、苦笑したままで詠唱を始めた。

もはや詠唱なのか呪詛なのか区別がつかない。

「ややや！ それでは今一度！ 私こそが幻想を統べる竜！ 幻竜ヌル！ 恐れを知り、なお挑み続ける冒険者の方々！ 私という幻想を破り！ 貴殿らが手に入れようと藻掻き——それでも得られなかったという現実を取り返すのです！」

言い終わると同時にアイラの魔法が発動した。

他の奴らも戦闘に移る。

こうして幻想との戦いが始まった。

幻想との戦いは始まった。

靄の中から次から次へとモンスターが出てくる。

『さすがに幻想と言うべきかな。ボスモンスターのバーゲンセールだ』

ああ、青竜も出てきてるな。

おっと、空を飛ぶ鉄の塊から放たれた光弾が青竜を貫いたぞ。

周囲は息をつく暇もない戦いが繰り広げられている。

その戦乱のど真ん中で、暢気にシュウと批評しているのが私だ。

そもそも私だけ現実で、周囲は全て幻想なので接触することもされない。

こんなに人がいるというのに、ものすごい疎外感だ。

『メルはなぜ一人なのか?』

ちよつと、今そういう問答はやめてくれる。
なんか寂しくなってくるだろ。

「や!・メル殿!・暇そうですね!」

ああ、おかげさまでな。

私とこんなふうには話すなんて余裕だな。

『そりや、そうだよ。この程度でこいつに致命傷を負わせられる訳がない』

「やや!・そんなことはありません!・みなさんの魂がこもった一撃一撃が、私をそぎ落としていっていますぞ!」

本当にそうか?

まったくそんな風に見えないぞ。

『かつてこの地にいた全ての人たちが抱いた幻想がこいつなんだよ。精鋭とは言えたかだか百人ほどの幻想じゃこいつは倒せない』

でも、こいつは彼らなら自分が倒せると判断したから、こんな計画を立てたんだろ。

「や!・メル殿のご慧眼、私は感服致しました!」

なんか馬鹿にしてないか。

『正確には違う。彼らじゃこいつは倒せない。彼らの役割は幻想を倒すことじゃないんだ』

はあ?

じゃあ、なんなんだよ。

何のためにあいつらはここで戦ってるんだ。

『こいつを倒せる存在を幻想から目覚めさせるために、彼らは戦わせられてるんだ』

「や……。さすがはシユウ殿ですね」

こいつを倒せる存在?

ここで戦ってる奴以外の誰にこいつが倒せるというんだ?

青竜を一人で粉微塵にしたゼバルダがここにはいる。

大軍を恐れず一人で戦おうと駆け抜けたイストリアもここにいる。

黒帽子の奴も、空を飛ぶジジイも、曲を奏で鼓舞する意味不明な音楽団もいる。

無論、アルマやアイラもここで戦っている。いつたい他に誰がいるという。

お前らは誰のことを言っているんだ？

『思い出すんだ、メル姐さん。彼のことを——』

「や。時を超えた貴方が最初に出会い、いつも男の影に隠れていた臆病な少年を——思い出してください」

跨幻橋から時を跳んだ先はアニクスイ蛍林だった。

そこでモンスターに囲まれたずんぐりした背の低い亜人を見た。

ゼバルダの背後にいつも隠れ、青竜との戦いの前に、彼から大任を与えられた少年。

彼の——ヌルのことを私は思い出した。

霧の中に白い光が揺らめいた。

光は低い位置で上下左右に振れ、徐々に近づいてくる。

短い手足にずんぐりとした丸っこい体型。

もそもそして茶色っぽい皮膚は土塊を連想させる。

こつちに恐る恐る歩いては来ているが、戦える様子には見えない。

思い出しはしたし、現れもしたけどさ。

こいつがお前に勝てるっていうのか。

私はヌルと同じ形状の霧に問いかける。

「や！ 彼こそが私を倒す存在です！」

『もつと言うと、あいつの持つてるランタンがね』

ヌルが持つランタンは白い光を出して辺りを照らす。

赤が危険、青が安全だったはずだ。

ヌルはランタンを右に左に向けて色を確認している。

ランタンはどこに向けても白から変わらない。

幻竜ヌルに向けても炎は白く煌く。

白は仲良くなれる存在がいることだったはずだ。

壊れてるんじゃないのか、そのランタン。

敵である幻竜すら白になっただけ。

『いや。幻竜はヌルの敵になり得ないよ』

「や！ 彼は私の依り代ですからからな！」

そんなことを前にも言ってたな。

依り代ってなんだ？

『幻想である幻竜が、現実世界で形を留めるための素材だよ』

「や！ そうなのです！ 現実世界において彼と私は一心同体なのです！ ここでは分かれることができますが！」

それってどうなの？

依り代になったヌルのことね。

「や！ 幻想を見続けますな！ 言っておきますが、彼がこれを望んだのです！」

ずっと幻想を見続けることをか？

「や！ 私と一体化してまで、命を長らえ、辿りつきたいものが彼にはあったのです！」

『それで、彼が幻想に呑まれたから、幻想計画で自らの死を選んだんでしょ』

幻竜は頬をぼりぼりと掻く。

「や。何度も止めたのです。それでも彼は願いを諦めませんでした。わかってはいたのです。私と一体化してしまつたところで、その願いが幻想に沈むことは——。私も彼の願いを叶えたくないので。呑まれてしまつた彼の代わりに、私が現実に出て幻想を破る算段を調べたというわけです」

『幻想の主が、現実に出てきて、自らを否定するとはね。仮に幻想を破つたとしても願いが叶うとは限らないでしょ』

「や」

『ものすごく分の悪い賭けだ。どうなるのか俺にすらまったく想像がつかない』

よく分からんが、こいつが言うならそうなんだろう。

大丈夫なのか？

「や。確かに分の悪い賭けです」

『だろうね。失敗したら全てが水泡だ。ヌルはもちろん、メル姐さんや俺、ここで戦っている人たちの思いを踏みにじることになる』
そうだよな。

せつかくヌルのためにここまでやったのに、成功するのかわからな
いって……。

『それどころか、矛盾の中に取り残されてすりつぶされるかもしれない
い』

おいおい、そんなことをお前はやろうとしてるのか。

「や……その通りです、が！　そこは冒険です！　なんとかかなりま
しょう！」

『だから気に入った！』

よし、やってみよう！

「や！　お二方ならそう言うって頂けると、確信しておりました！」

そうは言っても何をすればいいのか。

ヌルも私が見えていないようで、あっちへふらふら、こっちへふら
ふらと戦乱の中を彷徨っている。

「や！　任せておいてください。そうと決まればこんな幻想、サクッ
と終わらせましょう！」

すごい軽い足取りで、口笛を吹きつつ幻竜はヌルのところに向か
う。

さくつと終わらせると言ったが、そんな簡単なことなのだろうか。

「や！　ヌル！　何をしているのです！」

幻竜がヌルの肩をぽんと叩いた。

ひえ！　と悲鳴を上げて転んだヌルを見て幻竜はやははと笑う。

「ぎ、君か……。まだ、おでの願いは叶わなかつた」

「や！　そうでしょうね！」

ヌルは不思議そうな顔で幻竜を見返す。

「やははは！　何度も言ったじゃないですか！　君には無理だと！」

幻竜は笑い転げる。

「そんなに笑わなくてもいいだろう……」

「ややや！　申し訳ない！　今日は報告があつたんです！　君の願

い、私が叶えておきましたから！」

ヌルは口をぽかんと開けて幻竜を見つめる。

「ややー！ そんな顔をしないで下さい！ これで君は現実を考える必要もなくなりました！ 私が君の願いを叶えているところを想像して幻想に浸って下さい！」

「……そんな」

ヌルの短い膝が地面に崩れた。

「やー！ それではヌル！ ぐきげんよう！ 依り代ありがとう！ おかげで私は現実を楽しめました！ あでゅー！」

幻竜はヌルに背を向けて去ろうとする。

その幻竜の背を、動けないまままでヌルの片手が追っていた。

「ま、待って……おでは——」

ヌルの視線の先から幻竜の姿は消えた。

消えたと思ったら私の隣に現れた。

「ややあ、疲れました！ 私の一世一代の演技でした！」

『大根もいとこだね』

これは手厳しいとヌルはやははと笑う。

で、この演技がなんなの。

ヌルがぐすぐす泣いているけど、どうするんだ？

あつ、ゼバルダがやってきた。

「どうしたのです、ヌル」

『あつ……』

ヌルはゼバルダを認めると、しがみついて泣き始めた。

しばらくゼバルダはヌルをなだめ、落ち着いてきたら事情の聞き取りを開始する。

途中まで、静かに穏やかな表情で聞いていたが、幻竜からの仕打ちを聞いたところで様子が変わった。

「ヌル。竜は生かしておいてはいけません」

ヌルの両肩をがしつと掴み、目を逸らすことを許さなかった。

「あいつらは人間をゴミとしか思っています」

「でもつ、お、おでは、幻竜には話を聞いてもらっただ……」

「利用されただけです」

断言した。

「貴方は騙されたのです」

その後も、ゼバルダの話は続いた。

いかに竜が卑劣な存在なのかを説明し、ヌルに落ち度がないことを語る。

『感情を上手く誘導してる。竜絶対殺す教の教祖にでもなればいいんじゃないかな』

最初は戸惑っていたヌルも徐々に熱を帯びてきた。

「おでは幻竜がにぐい！」

「そうです！ 憎みなさい！ 貴方は何をされましたか！」

「おでのたっだ一つの願いを踏みにじられた」

「なんとひどい！ それで貴方はどうしたい！ 幻竜を生かしておいていいのか！」

「許せない！ おでは……おではっ！」

「ここにいる人たちは皆全力で戦っている何のためか！ 竜を殺すためです！」

「おでは！」

「怒るのです、ヌル！」

なんかひどいやり取りだ。

本人達は熱が入っているが、周囲から見ると不気味でしかない。

『いや、発現の条件が怒りなんでしょう……』

発現？

何のことだ？

『ランタン見てみなよ』

相変わらずヌルの手にはランタンが握られていた。

その炎はぼんやりした白ではなかった。

どす黒く燃えている。

しかも何か大きくなってきている。

ヌルがゼバルダに焚きつけられるたびに黒の火は大きくなってきている。

「幻竜を殺す！ おでが幻竜を殺す！」

黒の火はついにランタンから溢れてきた。

ヌルは手に持ったランタンを離そうとしない。

熱くないのだろうか。体全身が黒い炎に包まれていつている。

おいおい、あれやばいんじゃないのか。

全身が燃えていつてるぞ。それどころか燃え広がっている。

ゼバルダにも黒い炎が燃え移り、まるで黒い炎に吞まれてしまっているようだ。

「世界のあまねく竜どもに、僕らが望んだ殺戮を」

それだけ言い残し、ゼバルダは黒い炎に包まれていく。

消える瞬間、確かに奴は笑っていた。

『もうあいつがラスボスでいいんじゃないかな』

黒い炎は止まらない。

次から次へと他の人間やモンスターに燃え広がっている。

「ややや。興奮ですね。これだけの人が集まり協力しあったにもかかわらず、こんなさす黒い炎にも及ばないなんて……」

本当につまらなさそうに幻竜はぼやいた。

それよりもなんなんだあの炎は？

脅威は感じないが、全てを巻き込み燃やし尽くしているぞ。

もはや敵も味方も関係なく炎に包まれてしまっている。

『チートだよ。正確にはもつと純粋な力だけだね。神から与えられた力だ』

やっぱりそうか。

『恐ろしいね。幻想すら焼き尽くす黒い炎とは。これがあの男に与えられた力か』

すごいのは間違いないだろうが、……なんだろうか。

燃えたあとに何も残っていない様子が、無性に寂しさを感じさせる。

「やー！ 長かった幻想も燃やし尽くされて直に終了ですー！」

そうか。

これでお前が死んでようやく私は元の世界に帰れるんだな。

「やや！ そうとは限りませんぞ！」

は？

ちよつと待て、お前。

倒せば出られるって言ってたじゃん。

「や！ 出られることは出られます！」

なんだよその意味深な言い方は……。

『パラドックスが生じる』

わからん。

『幻竜は、幻想の中ならどこにでもいて、いつにでもいる存在だ』

うん、それは聞いた。

今回は依り代を通して現実に出てきて、しかも場所が跨幻橋の上に固定されたんだろ。

『そう。問題はいつにでも居る存在が消えるってことなんだよね』

どういうことだ？

『今ここでこいつが消えると、現実世界では、いつにでもいる特性に従い過去に遡って全ての時間座標からこいつが消える』

よくわからんけど、その何が問題なんだ？

『跨幻橋で俺たちは幻竜なんて存在に会わなかったことになるし、ヌルは幻竜の依り代にならなかった。さらに、イストリアのところでの竜召喚はそもそも幻竜がいらないから失敗した。そうなる俺たちは竜召喚を中断させたことにはならなくなるから、時空の歪みなんて発生しなかった。歪みの発生がしなかったなら俺たちは時代を跳んでなんていなかった。しかし、俺たちはあらゆる時代に存在して、人々に影響を与えてしまっている。そうなると時間の修正は、どこから行われるのが問題になってきて、俺たちが初めから存在しない世界になるとも考えられるけどそれは考えづらい。ここで幻竜を倒しても復活する。これは間違いない。そうすると「幻竜を倒した」という事実とのつじつまがあわなくなつて——』

そんな早口でまくしたてられても困る。

お前の話の一割も、いや一分すら私は理解できてない。

「や！ 難しい話ですからな！ どうやっても矛盾してしまうのです

！ それならなるようにしかならないでしょう！」
炎は周囲の景色を燃やし尽くし、いよいよ幻竜の足を燃やしている。

「ややや！ そうでした！ これをメル殿にお返ししておかねばなりませんでした！」

幻竜は自分の指から銀色の指輪を抜き取り私に返してくる。

「やや！ 私は幻想！ 現実に生きる貴方とパーティーを組むには値しない存在です！」

流れて指輪を受け取ったが、幻竜の言葉には疑問を抱かずにはいられない。

私はそうは思わない。

お前は確かに幻竜であり、この世界のボスといえる存在なんだろう。

しかし、私とパーティーを組んで幻想と呼ばれるダンジョンを共に攻略した。

私だけでは攻略できなかつたし、お前がいたから攻略できたんだ。

私はお前を信じ、お前も私を、ここで出会った人を信じた。

困難を厭わず、無茶をして、ここに立っている。

私はとても楽しかったが、お前はどうか？

「や！ とても楽しかったです！」

そうか。それなら――

「お前も冒険者だ」

指輪は返さなくていい。

「……ややや。残念です」

パーティーリングを差し返すが、幻竜は受け取らない。

受け取れない。幻竜の手は燃え尽きていた。

渡し損なつたリングを握りしめる。

「や！ メル殿、また会うこともあるでしょう！ そのときにまたも

らうことにします！」

「また」と言う言葉は、いや、お前自身が幻想だったか。

それならまた渡す機会があるのかもしれないな。

まさに今燃え尽きようとしてるわけだし。

「や！ また出会えるようお願いしよう！」

すでに幻竜の首から下は焼かれ、頭だけが浮いている。

「ややや！ ヌルの願いと私の願い——両方の願いが叶うよう、最後に想起して頂きましょう！」

幻竜は軽く息を吸い込んだ。

「ややや！ 思い出して下さい！ 私と出会ったあの橋を！ 数々の歴史を渡り歩いたことを！ そして何よりも——幻想を打ち破った貴方がた、ご自身のことを！」

幻竜と出会った跨幻橋を——。

様々な時代に跳んで知り合った仲間を——。

冒険者メルとして、シユウと駆け抜けたことを思い起こした。

『大半は忘れてるけどね』

そこ、水を差さない。

そして、周囲に靄がたちこめてきた。

6. 跨幻橋、もはや力は失われ——

あれ？

どうもぼんやりとしていた。

靄の中に立ち尽くしてしまっていたようだ。

さっさと橋を渡って次のダンジョンへ向かおう。

『その様子だと覚えてないね』

何を？

『ここがダンジョンだったってことだよ』

えっ、そうなのか？

そんな話は初めて聞いたぞ。

『まず溪谷に橋が架かって、その上で歪みが生じた——そう思ってたんだ。しかし実際は、平野に歪みが生じ、その後で溪谷ができていた。じゃあ、いったい橋はどうやって作られた？』

いきなり何を言い出すんだお前？

『俺はずっと気になってたんだよ。誰が、何のためにわざわざ歪みをひっかけて橋を架けたのか』

歪みとか何を言ってるのかよくわからないが、誰が架けたのかは有名だろう。

『ヌルだよね』

ああ。

ヌル橋、名前にもなってるもんな。

すごいよな、一万年以上前からある世界最古の橋だろ。

渓谷のど真ん中にあるから、わざわざ迂回する必要がなくなって通行が楽になっただろうな。

みんなに喜んでもらえてヌルとやらも満足だったろう。

『違う。通行のことなんかどうでもよかつたんだ。ヌルはただずっと帰りを待っていただけだったんだよ』

何だ？ さつきから何を言ってる？

意味がさっぱりわからないぞ。

『あいつは奴から与えられた大任に従い、彼女が生きて帰っても大丈夫な場所を作った。ずっと帰りを待ち、無事を祈り続けた——幻竜の依り代となって一体化してまでだ。彼はずっと彼女が帰ってくるであろう幻想の中にいたんだよ』

奴？ 幻竜？ 彼女？ 幻想？

駄目だ。

さっぱりわからん。

たまに暴走するからな。

ほっとくに限る。

橋の向こう側から誰かが歩いてきた。

かなり背は低い。

亜人か……？ 初めて見るな。

「やー！ こんにちはー！」

近くに来てずんぐりとした亜人が、元気よく手を挙げて挨拶してくる。

私もそれに応え、軽く手を挙げた。

あら？

手から何かが零れ落ちた。

銀色のリングがころころと転がり巫人の靴に当たる。

巫人はそれを拾い上げ私に返してくる。

「ややや！ 頼みがあるんですが、これ。頂いてもいいですか？」

巫人の指には指輪がつままれている。

落としたものはパーティーリングだったようだ。

いつの間に握っていたのか思い出せない。

私の指にはちゃんと嵌まっている。

それにしてもパーティーリングが欲しいって珍しいな。

冒険者か？

「やや！ そうありたいとは思っています！」

そうか。

それならくれてやろう。

今の私にはとってはさほど高いものではない。

「ありがとうございます！ ついでにパーティー登録をして頂いても

?!」

は？

意味がわからないんだが。

ダンジョンでもないなら別にする必要はないだろ。

『いや、ここは確かにダンジョンだ。登録してあげてよ』

シユウも何やらパーティー登録を勧めてくる。

なんだか今日は変なことばかりだ。

仕方なくパーティー登録をする。

『幻想は、もう見ないの？』

登録するなりシユウが口を開いた。

巫人にも声が聞こえているはずだが驚いている様子はない。

やはははは、と笑うばかりである。

「や！ おでのこの足で、貴方たちと一緒にここに立つ——ただそれ

だけの幻想をどれだけ見続けたか」

巫人も満足げに返答する。

話す内容はよくわからない。

「幻想、見果てました！」

にんまりと笑って私の横を通り過ぎる。
いったい何だったんだろうか。

気になって振り返ると、背の低い亜人の姿は見えない。

遠くに橋の端がうつすら見えるだけだ。

……いや、待て。

ここから端まではそこそこ距離がある。

走り去るには速すぎる。

『どうしたのそわそわして？ トイレ？』

違うよ。

さつき亜人がいただろ。

そいつの姿が見えないんだ。

まさかとは思うが、落ちたんじゃないか。

『亜人？』

さつきいたじやん。

背が低くて、ずんぐりした奴。

亜人ではなかったのかもしれないけどさ。

『……ああ、うん。そうだね』

なんでそんな可哀想な声なの？

いたでしょ？

『聞いた。信じる心が大切だよね』

……あれ？

本当に知らない様子だ。

もしかしてこれが噂のあれか。

この橋はヌル橋の他に別の呼ばれかたがある。

跨幻橋パンタシアだ。

霧がかかっているときに渡ると白昼夢を見るという。

鳶だらけの人間に道を尋ねられた、赤髪の剣士にどこの所属か詰問

された、白い浮遊物体に番号を聞かれた、ツルハシを持った青年に

……など挙げていけばキリがない。

よくある噂話だと思っていたが、まさか私自身が体験するとは……。
たしかにダンジョンだったという話も有り得そうだ。
しかし、だとすると残念だな。

『何が？』

いや、せつかくならここがダンジョンだったときに挑みたかったと思っただけな。

『そうだね。そんな幻想を抱いてみるのもいいかもしれない』

いったいどんなダンジョンだったのだろうか。

『みんなの幻想がたくさん詰まったダンジョンだったんじゃないかな』

どんなダンジョンだよ、それ。

でも、幻想で繋がってるなら、私もそのダンジョンに挑んでたりしてな。

『なるほど。それはあるか。矛盾の回避はそこで行うのか……』

冗談だよ。

そんな本気な口調で相づちを打たれると困る。

まあ、幻想ばかり見ているも仕方ない。

次のダンジョンへ行くでしょう。

こうして私は橋を渡りきり、気づけば辺りは晴れ渡り、すでに霧は消えていた。

蛇足17話「楽園開放」

ポルタ溪谷を越え、次はどこに行こうかと考えたところでシユウから提言があった。

『ちよつと遠いけどエルフの里は？ 上級ダンジョンのセルメイ大聖林があるし、会ってみたいのがいる』

エルフの森は、エルフ以外の出入り禁制で有名のため、行っても入れてもらえないと思えない。

しかし、入れないとしてもエルフの森までの行程で多数のダンジョンに挑める。

それにあそこは、かつてパーティーを組んだ金髪のエルフがいたはず。

名前は確か三文字でアイ……、アイ……、そう、アイヤだ！

『あいやあ〜！ アイヤ違うヨ！ アイラね！』

違っていたらしい。

もうどつちでもいいんじゃないかな。

そんなこんなでエルフの里に向かって道なりに進んでいるわけだ。かなり寒くなってきたおり、小雪がちらついている。

体に付き、水滴となつて熱を奪う。

『また——この季節がやってきてしまった』

まあ、暑くなれば寒くもなるだろう。

ずっと同じ温度で同じ景色を見ているより旅のし甲斐があるというものだ。

『季節の循環やら旅の醍醐味なんて次元の話じゃないんだよ！』
声を荒げている。

いつも意味がわからないが、今日もやっぱりわからない。
きつとわかる日は来ないだろう。

ああ、ほつとする。

『何ほつとしてるの！ 今年もこの季節が来ちまったんだ！』
だから何が？

『クリスマスだよ！ クリスマス！』

ああ、そんなのもあったな。

薄雪郷ニクスでやってたお祭りだったはずだ。

はて、おかしいな。

去年のはずなのに三年近く経っている気がする。

『メタあ……わかった、この話はやめよう。ハイ、やめやめ』

自分から話を切り出しておいて、いきなり止めようとする。

ほんと意味がわからない。

そんなことより、あそこで会った少年と少女は今どうしているだろうか？

『少女が一月にバイオリズムの異常に気づく。一度の経験でまさかと少女は信じられず打ち明けられない。』

二月に妊娠が確定。両家を巻き込んだ騒動が生じる。殊に少女の父親が婚約に反対し、少年と一騎打ちをする。少年が辛くも勝利。

四月に結納。まだ婚約を認められない父親は出席しない。

六月にささやかな式を挙げる。仲間や友達に祝福される二人、それを遠くから見つめる父親。

十一月には長男が産まれる。名前は希望から取ってホープ。ソープにでもしとけてんだ。しぶしぶ抱いた少女の父。そのとき赤ん坊が初めての笑顔が見せる。

そして十二月、去年より一人増えてのクリスマス。その中には朗らかな顔で孫を抱く父、いや祖父になった男の姿が……』

なんでそんな具体的なの。

今の話だともう二人じゃなくて父親が主役じゃん。

やれやれ、妄想力が異常に発達した者のサガなのだろうか。

『くそつくそつ、何が人生の墓場だ。妬ましい』

クリスマス専用のボスという特殊仕様もおもしろかったな。

逃げるボスはたびたび見てきたが、あそこまで逃げたボスはあれが初めてだ。

夜には冒険者ごぞつての防衛戦もあった。

『朗報ですー！』

悶々としていたシユウが復活し奇声をあげる。

『なんと！ 次のダンジョンにも！ クリスマス仕様が、あります！』
えっ、ほんとか！

それは良い話を聞いた。

一度で二度楽しめるとは素晴らしい。

到着したらさっそくギルドに行こう！

良いクリスマスになりそうだ。

……そう言えば、ニクスには変な受付嬢がいたな。

防衛戦が終わった後、冒険者に宝石をねだっていた女だ。

あの女は、やっぱり今年も宝石に目が眩んでいるのだろうか。

鉱山都市フェルゼンに着いた私は、さっそくギルドに出向く。

すでに街はクリスマス仕様になっており、あたりが魔法の光で煌びやかに照らされていた。

この前のニクスとは雰囲気が違う。

あそこはしんみりとしていたが、こちらは華やかだ。

好みで言うと、前の方が落ち着いていて居心地は良かった。

ギルドも賑やかすぎて居づらさを感じる。

「どうも、お久しぶりです」

そして、そんな賑やかなギルドの受付に彼女は座っていた。

去年と同じ、白いまん丸が刺さった赤のとんがり帽子と真っ赤な服を着て。

えっと……、勘違いじゃなければお前はニクスにいた受付嬢だよな。

「はっ」

なんでここにいるんだ？

「宝石がたくさんあるところに行きたいって、冗談の通じない上司の前でぼやいたら、ここに飛ばされました」

『あつ、メル姐さんストップ』

そうか。

確かに宝石はたくさんあるだろうな。

この国きつての宝石の大産地であり、名産地でもある。

宝石に触る機会も多いだろう。

「はい、ここに赴任してから幾人もの冒険者から頂きましたよ」

『これ以上いけない』

なんだももらえてるのか。

良かったじゃないか。

「ええ、それはもう、毎日のようにもらえます。皆さん本当に善い人ばかりですよ」

『知らない』

何が知らないのか。

すごいな、毎日のようにもらえるとは。

いったいどんな宝石なのか見せて欲しいくらいだ。

「見せて差し上げますよ」

え？

受付嬢は足下に腕を伸ばし、白い巾着を持ち上げた。

締めていた紐をほどき、中身を受付のカウンターにぶちまけた。

中から出てきたのは砂と石ころだけである。

『クズ石だね。宝石としての価値を認められない、加工必須の低品質な石ころ。しかも小さいしゴミも入ってる』

私は石ころを見て、何も言っていない受付嬢を見る。

彼女の瞳は、カウンターに転がる石よりもなお濁っており恐怖すら覚えた。

「おう、エアデ！ 今日石が手に入ったからやるよ！ ほれ、ちゃんと受け取れ！」

後ろから元気な声がして、石ころがカウンターに転がる。

大きさはそこそここがかいが、色がくすみ、はつきりとわかる傷がついていた。

クズ石は勢いのまま机の下へと落ちて割れた。

後ろで冒険者達の笑い声が木霊する。

「私は……、私はこんな石なんて見たくなかった」

両手を握りしめ、机を強く叩く。

周囲の冒険者は慣れっこなのか誰も気に止めない。

原石がいくらで売れたか、誰が良いのを見つけたという話が聞こえてくるだけだ。

「邪魔するぜ」

どうしようかと困っていたところで後ろから低い声が重く響いた。「ざわついていた冒険者達は嘘のように静まりかえっている。

なんだろうと振り返れば入口に大柄の男が立っている。

背は高く、体型もそこらの冒険者に劣っていない。

鋭い目つきは、完全に獲物を探すモンスターのそれである。

服装も艶のある豪華な毛皮だが、服に着られていない風格を纏う。

ふむ……。

男は背後に付き従う二人の子分を連れてギルドに立ち入る。

冒険者は左右に分かれ、男が通る道を作っていた。

「ヴァインター様、よくぞお越しで。どうぞこちらへ！」

ギルドのやや痩せぎすの人間が大慌てでヴァインターを案内する。

端から見ると完全に獲物と捕食者の光景だった。

ヴァインターが近くを通り過ぎる際にちらりと私を見た。

「クズがクズを持ってきてきてクズがみる、か。ここはクズしかねえな」

そう言つて、低く笑いそのまま奥に消えた。

悪口を言ったようだが、その程度は余裕で聞き流せるレベルだ。

むしろ、きまざい空気を解消してくれた救世主という感謝の度合い

が大きい。

しかし、いかにもな権力者だ。

ギルド長ではないだろうし、こここの領主かそのあたりだろう。

「ザムルング商会の幹部で、こここの鉱山主代行のヴァインターです」

ザムルング商会は何度か聞いたことがある。

具体的に何をしているのかよくわからんがいろいろ力を持つてる

組織だ。

ここ数年で勢いをぐんぐん伸ばしていると聞くと聞くと、あまり良い噂を聞かない。

それよりも気になったのは後の単語だ。

鉱山主というのは、もしかしなくてもシャツツ鉱山の持ち主という

ことだろう。

「ザムルング商会の会長が鉱山の権利を持っていて、その代行である
ヴィンターに管理の全権が任されている、というのが正確です」

風の噂で聞いたことがある。

鉱山都市フェルゼンに大層なやり手がいると。

フェルゼンの歴史は古い。

シャツツ鉱山のすぐ側にあり栄えたが、一度廃坑になりゴーストタ
ウンとなった。

そこに新たな技術を持ち込み、建て直したのが今の鉱山都市フェル
ゼンだ。

かつて以上の熱気がこの都市には戻っていると聞く。

「廃坑になり暴落しているシャツツ鉱山を買い叩き、ここ数年で精錬
法が発見された魔力結晶グラマナイトの露天掘りを三年足らずで成
功させた男です。その先見の明たるや。あいつさえいなければ、私は
こんなところに来ずに済んだというのに……」

すごい奴だな。

それよりあいつ……どこかで会ったことがなかったか？

『前にガンムルグの町で見たね。あのときはナギム廃坑を越える運び
屋商売してた』

そこまでは覚えていないが、風格は今と同じだったよな。

たぶん、それで印象に残ってるんだ。

ふふ、まったくな。

『どうしたの急に笑い出して、気持ちわる』

もうちよつと言いつつてもんを考慮してもらえませんかね。

いやな。ちよつと思っただよ。

彼も私も見た目はほとんど変わってないのに、地位ばかり変わって
いってしまったなど。

『あつちは地位が見た目相応になったのに、こつちときたら……』

それは仕方ない。

私はチートがなければ、せいぜい初級冒険者であるとわかってるか
らな。

本来の力に合わせて、それ相応の姿をしているという訳だ。

『せめて初級相応の振る舞いをしてくれれば……』

おい、ちよつと待て。

初級クラスはさすがにいつてると自覚してるぞ。

これ以上は無駄だと言うように、シユウは溜息を一つこぼした。

あつという間に翌朝である。

よく寝たためか体調はすこぶる万全完全。

雪がちらちら舞うがなんのその、今の私は止まることを知らない。
ダンジョンの情報は概ね把握した。

とは言っても、まだ新しいダンジョンなので不確かなところもある。

それくらいの方がおもしろいというものだ。

意気揚々と闊歩していると人が倒れていた。

両手には酒瓶を持っており、うつぶせのまま動かない。

『止まるんじゃねえぞ』

あまりの光景に思わず足が止まっていたようだ。

見て見ぬ振りをしたい気持ちはあるがそういう訳にもいかない。

なにしろ倒れていたのは、ダンジョンの情報を教えてくれた例の受付嬢だったのだから。

軽く揺ると彼女は目を覚ました。

くるんと寝返りをうち、そのまま上半身を起こす。

『ブロークン・ダイヤ』に「ペイナイト・ハート」とは、きつついの呑んでるなあ』

うっわ……、ほんとだ。

普通の人間ならボトルの一分も空けられない代物だぞ。

私も口に入れたことはあるが、これは酒じゃなくてただのアルコールだろう。

全てではないが、どちらのボトルも半分は吞まれている形跡がある。

「やってしまった」

彼女は頭を軽く抑えながら項垂れる。

どうやら大丈夫な様子だな。

意識もある。

さて、ダンジョンへ行こうかとしたところで足を掴まれた。

「もしかしてダンジョンに行きますか？　行きますよね」

そうだけど、それが何か。

昨日はいろいろ情報を教えてもらって助かった。

まあ、仕事だから払った金に対する正当な見返りなんだろうが。

なんか拾ったらやるから足離して。

「要りません。私も行きます」

そう言って、喉に詰まっていたらしい痰をかあっぺつと吐き出す。

は？

「ダンジョンに連れて行って下さい」

は、いや、なんで？

「言わないとわかりませんか？」

わからん。

まったくわからんな。

さっぱりわからんということが、言わんとわからんか？

「では申し上げましょう。我慢ならないんですよ！　見たでしよう！

あの無残な石を！」

昨日、カウンターにばらまけたあの石のことだろう。

確かに見たが、それがいったいどうしたというのだろうか。

「気づいたんです。他人に任せても駄目だと。欲しい物は、自らの手

で掴まなければならぬと！」

それでダンジョンに行くの？

あまりダンジョンをなめるなよ。

ちよつと油断しただけで死ぬところだぞ。

「貴方こそ、極限級だからって私をなめないでください。あの受付でクズ共にずっとクズ石を見せ続けられるくらいなら死を選びます。いいえ、私はすでに死んでいたんです！　それならクズ石の一つだろうと自分で掴み取らないと気が済みません」

自分のことを柵に上げさせて言わせてもらう。
馬ツ鹿だなこいつ。

『俺は嫌いじゃない』
私もだ。

むしろ好きですらある。

で、どうだ。こいつはいけそうか？

『難しいね。でも、本人に覚悟があるなら、いけるいけないは問題にならないんじゃないかな』

そうだな。

とりあえずやってみるか。

死んだらそこまでだったということだ。

『うん。ただ、もしも良い石が手に入っても——』

もしもの話は不要だ。

すでに彼女は挑む気満々なのだから。

何が起きたとしてもさほど問題はあまい。

こうしてギルドの受付嬢という、かつてない組み合わせでの攻略が始まった。

シャッツ鉾山には採掘場が大きく二カ所ある。

一カ所は、魔法結晶グラマナイトを産出する第六区画。

露天掘りとかいう方法を用いられているらしく、地表から大きな穴を渦のように空けている。

こちらは数年前から始まったのでまだダンジョンになっていない。件のダンジョンは旧採掘場である第一から第四区画までである。第五区画は落盤により完全に埋まっており入ることはできなくなっている。

こちらは露天掘りに対して坑内掘りと言われ、深い鉾脈を目指して掘っていく方法のようだ。

浅いところが第一区画で、深くなるにつれ数字は大きくなっていく。

そして、モンスターの強さもより強くなる。

シャツツ鉱山は複数の難易度を有するダンジョンになる。

第一区画アーベントが初心者クラスで、第二区画ナハトが初級。

中級の第三区画ドウンケルハイトが続き、最深部に上級の第四区画トートが待ち構える。

鉱山としての歴史こそあれど、ダンジョンとしての歴史は浅い。

廃坑になるまではただの坑道であり、廃坑になってからは入口が閉鎖されていた。

ザムルング商会が鉱山を買い上げてから、ようやく旧坑道がダンジョンになつてしていると発覚した訳である。

新しいダンジョンの攻略を求めて冒険者がぞくぞくと集まった。

フェルゼンは鉱山都市であるだけでなく、ダンジョン都市でもあるのだ。

当初はダンジョンの利権関係でザムルング商会と国で揉めたようだが、今は落ち着いている。

さて、そんなダンジョンを受付嬢のエアデと攻略しているのだが……。

「くたばれ！」

まさか酒瓶を武器にして戦うとは思っていなかった。

まだ第二区画ナハトと初級だが、それでもばったばったとモンスターを倒している。

あれはどういうチートなんだ。

『酒乱専用スキル「持っていたのは酒瓶か？」だね。持ってる酒瓶の銘柄によって効果が変わる。効果は弱くなるけど酒瓶以外でもいける。

灰皿でもリモコンでもなんでもオツケーだよ』

なかなかおもしろいスキルだな。

左手に持つてるブローケン・ハートはなんとなくわかる。

ゴーレム系のモンスターが一発で碎けてるところを見るに破壊だろう。

『うん。破碎効果がついてる。無機物相手なら効果はてきめん。当てさえすれば悉く粉碎できるでしょう』

さすがに酔ってるのと戦闘に慣れてないだけあって命中率は低い。

よく分からないのが右手に持つてるペイナイト・ハートだ。
当たった相手が消えてるんだが……。

『消失効果だね。かなり珍しい。すぐにまた現れるけど、時間稼ぎはできるでしょう。現実だって殴られた被害者は、表に姿を見せなくなるもんさ』

よくわからないが、そんなものだろうか。

あとなんか、うわっ、すごい攻撃を避けてないか。

今も転びかけて攻撃を避けた。見てて冷や冷やするからやめて欲しい。

『こっちも酒乱専用スキル「酔えば酔うほど——」』

酔えば酔うほど……何？ どうなるの？

『いや、ほんとにそれだけしか書いてない。でも、見ればわかるね』
まあ、そうだな。

明らかに動きが良くなってるし。

『初級なら大丈夫でしょう。中級でもいけるんじゃない。楽しそうだから、万事問題なし』

そうだな。

宝石、宝石くと楽しげに歌っている。

こんな調子で第二区画ナハトを突破した。

戦場は第三区画ダウンケルハイトに移ったが、それでも順調である。

相変わらずエアデは間一髪で攻撃を避けているが、相手は一撃で屠っている。

無論、私も中級程度で苦戦することはない。

そういやこの酔っ払いはさつきから変な行動をしている。

拾ったドロップアイテムを捨てたり、そもそも拾わないこともある。

慣れてないからだとも考えたが、そもそもがギルドの受付嬢だ。ドロップアイテムを見る機会は多い。

『あれは、すごいよ……』

何がすごいんだ。

今もアイテム結晶を素通りしたぞ。

宝石が欲しいって言ってるのに、拾わないっておかしいだろ。

『ちよつとそれ拾ってみて』

エアデが無視したアイテム結晶を覗く。

きらきらした赤い結晶が見える。

『ね。色が混ざっててやや濁りがある』

いや、さっぱりわからん。

ぱつと見、きらきらしてるぞ。

『結晶を解いてみて』

言われた通りに結晶を解き、手の上に乗せてみる。

確かに赤みが薄い気がしないでもないが、これで十分じゃないか。

そもそも濁りなんてないだろ、普通に透明だ。

『濁りと表現すると良くないか、透明度がやや低い。ジエエリークオリティだ』

それでもかなり高く売れるんじゃないかこれ。

『貴族連中のブレスレットやらネックレスの装飾用の石として十分に使えるね。王族が付けててもおかしくない』

すごいじゃん。

なんであいつはこれを拾わないんだ。

酔いがまわりすぎてるのか。

『いやね。俺も最初は酔ってるんだと思ったんだよ。でも、あいつはちよつとやばい。ただの宝石好きに納まらない。チートの影響もあるだろうけど、少なくとも宝石においては素で俺よりも見る目を持つてるんじゃないかな』

お前がそこまで言うとは。

『恐ろしいのはね。あいつはアイテム結晶どころかモンスターの時点ですでに判別してるんだ。見て』

エアデを見ると、モンスターの攻撃をかいくぐって攻撃をした。

二体いたうちの一体は消失させ、もう片方は破壊する。

アイテム結晶をちらりと見たが拾わずに進む。

さつきと全然かわらんのだけど……。

『まずモンスター姿の姿形を隈無く観察してる。避けながらね』
確かにそうかも。

今もすぐ倒せそうなモンスターを攻撃せずに避けまわっている。
『モンスターの大きさをやしなやかさ、ついでに艶も見てる。基準に達しない敵は消失かさつきと破碎してる。もしくはメル姐さんに回したりね』

倒せそうなのに無視していたのはそういう理由があったのか。
疲れてこっちに任せてるのかと思った。

『もちろんそれもある。あのスタイルはかなり疲れるだろうから。一方でだ。基準を満たした敵は、相手を一撃で碎け散るポイントまで押さえて倒してる。戦い方自体は素人だけどね』

さつきから攻撃しないのはそのせいか。

攻撃して倒してもアイテム結晶を拾わないのは――、

『あいつが求めてる水準が、装飾品を飾り付けるジュエリークオリティなんかじゃないからだ。ジェムクオリティ——飾ることなく其れ一個として鑑賞にたる水準を求めてる。ちなみに今のあいつが持ってるアイテム結晶はゼロ。前に拾った石は全部捨てた』

ジェムクオリティというものがどれほどのものかは知らない。

だが、あいつがここまで倒してきたモンスターの数は多い。

その中で一個もないというのはあまりにも基準が厳し過ぎるんじゃないか。

『小さい石の中でも百個中一個でもジェムクオリティがあればいいのに。あいつは大きさでも篩にかけてる』

……それ、見つかるの？

『わからない。一つ言えることは、深く潜れば潜るほど——ダンジョンの難易度が上がっていくほど、クオリティとサイズは上がっていつてるってことかな。問題は上級のモンスターを今ほど上手く倒せるのかってことだね』

上手く倒せば良い物を落とすが、難易度が上がれば上手く倒せなくなるだろうと。

つまり、ここからが正念場というわけだ。

そして、第四区画トートに至った。
シユウの懸念は的中することになる。

チートの能力アップとスキルのおかげでモンスターを倒すだけなら問題ない。

しかし、良い石を得るための観察と適切な破壊が、素人同然のエアデには難しくなった。

私の状態異常で弱らせてからも試してみたが駄目だった。

どうやら弱らせたモンスターからドロップする宝石のクオリティーは落ちてしまうらしい。

相手の一番輝く瞬間に、ただ一撃をもって適切な箇所を粉碎すること。

これこそが高クオリティの宝石をゲットする条件のようだ。

問題は敵の強さだけではない。

天井より岩盤は砕け、地面は岩が剥き出しである。

環境が劣悪だ。私たちはまだ良いが、炎をつけると引火性のガスと反応し爆発を起こす。

鉱山時代には、ガス爆発、落盤、出水で多数の死者が出たという記録が残っている。

採石は、難航を極めた。

休憩を増やしつつ奥へと歩を進めていく。

「右から二番目！」

モンスターの群れを見ると、私がエアデの叫んだもの以外を倒す。

一体になったところで私がかく乱し、エアデが隙について破壊する。

この方法で何体も何体も砕いていった。

とうとうボス部屋の扉に到着する。

途中で何度も結晶に手を伸ばしかけては止めるという動作が見られた。

『妥協しようという意志と、最上の物をという執念、あるいは欲望の相克だね』

結果として、彼女が拾った石は未だゼロである。彼女が手を伸ばしかけた結晶は、もつたいないから私が拾っておい

た。別にお金は欲しくないのだが、金よりも物を欲しがる人間には良い取引材料になる。

シユウが褒めるほどの審美眼だ。拾った石の価値に疑いはない。まあ、なんだ。

とりあえずボスまで来たんだから挑んでみよう。

ボスは女帝エーデルシュタイン。

宝石で構成されたゴーレムで、見た目が輝いているらしい。

本来は豪華な椅子に座り鞭を振ってゴーレムを操るが、この時期限定で戦う姿が変わる。

ソリに乗り、黄色い宝石のトナカイに鞭を振るって華麗に空を飛ぶとか。

『トナカイになりたい』

そうか、としか言えない。

いきなりトナカイになりたいと呟かれて、なんと答えれば正解なのか……。

わかるやつがいたら教えて欲しい。

「女帝エーデルシュタイン、何度も聞いていましたけど実物を見られるなんて……」

こちらにも疲れを感じさせない恍惚とした表情になっている。

『両手に酒瓶を持ってなかったら夢見る乙女だったね。ちなみに今は居酒屋のOLが良いところ』

どうやら大丈夫そうだな。

そろそろ作戦会議といこう。

私は飛んでる相手は苦手だぞ。

雑魚なら石を投げとけばいいがボスだときつい。

ゲロゴンブレスを撃とうにも、こんなところで撃つたらどうなるかわからん。

『メル姐さんだけならともかく、エアデとの組み合わせなら即殺でき

る』

ほう、どうするんだ？

『メル姐さんがボスに向かってエアデを投げつける』

本気で言ってるの？

『最初は魔法が来るって決まってるんでしょ。発動させるタイミングで動きがわずかに止まる。そのタイミングを狙ってエアデを投げる』
「それ……私が大変なことになりませんか」

だよな。

私が狙いを外したら壁か天井にぶつかる。

タイミングが遅かったら発動した魔法にエアデが直撃する。

仮にタイミングが完璧だとしても、宙に浮いた状態で攻撃ができるのか。

『狙いに関してはチートで問題ない。タイミングは俺がメル姐さんに伝えるから……、うん、まあ、確かにハイリスク。でも、ハイリターン。ボスから良い石を手に入れるためなら一番だと思う。わかっているとと思うけど狙いは顔ね。怖じ気づいたなら、他の——』

「やります。仕留めてみせます」

確固たる意志を感じ取った。

『……果たして、そう上手くいくかねえ』

エアデは、右手に持ったペイナイト・ハートをぐびりと呑んでいく。うわあ、その酒はそんな風に飲む酒じゃないだろ。

「見くびらないで頂きたい——石に賭する私の想いを」

そうぞ。

私はここまでの道のりで確かに見た。

彼女の石に対する姿勢は、死を物ともしないものだ。

妄念だろうが、それもまた信念。

お前はそれが感じ取れなかったのか？

いいや、お前に感じ取れていないはずがない。私ですら感じ取れたんだから。

『うん。だからこそだよ』

だからこそ？

彼女が石を思うからこそ失敗すると？

意味がわからない。

『まあ、やってみようか。杞憂ならそれに超したことはない』
『そうだ！』

実行あるのみ！

砕け！ 女帝エーデルシュタイン！

ボス部屋をくぐった第一印象は煌めかしいに尽きる。

女性を象った赤色の宝石ゴーレムが、これまた青い宝石でできたソリの上に立っている。

ソリの先頭には黄色のトナカイが繋がれていた。

赤いゴーレムが手に持った鞭を黄色のトナカイに振ると彼がソリを弾き空を飛んでいく。

壁や天井にも宝石がついているのか、煌めく星空を飛んでいるかのようで幻想的だ。

しかも、なんだろう……これは音楽なのか。

『面白い鉱石だね。魔力に反応して音楽が流れるなんて』

そんな石があるんだな。

「リイトシュタイン——あのトナカイがそれです」

ほー、それは勉強になった。

さして話している場合じゃないな。

相手がさっそく魔法を詠唱し始めている。

私はエアデの両足を掴み、いつでも投げられる体勢に移る。

後はシュウの合図を聞いて投げるだけだ。

狙いはだいたい問題ない。

野蛮人スキル「投石」により投げる物の命中は約束され、威力も上がる。

前に人間でも試してみたがしつかり効果は発揮された。

『投げられた人間は、全身骨折してたけどね』

そうだったかもしれない。

今回はチートの加護とかあるし、たぶん大丈夫だ。

『……黙って。そろそろタイミング合わせるよ』

鉦石の奏でる曲に合わせ、エーデルシュタインは詠唱を口ずさんでいく。

移動後に残る黄、赤、青の残光が、宝石煌めく夜空を彩る。

『今！』

っそーい！

シユウの声に合わせ、体を一回転。

回転の力を加えてエアデをボスへと投げつける。

タイミングは完璧。

さすがシユウと言わざるを得ない。

魔法の詠唱が終わり、ボスの動きが停止している。

もちろんほんのわずかな瞬間だ。

ボスの体の中を魔力だろうか、赤い光が通り抜けるのが見えた。

その光が体の外に出る瞬間——まさに魔法が発動する瞬間にエア

デはボスの前に来ている。

よしっ！ やれっ！

相手の一番輝く瞬間に、叩くべき場所を一撃で粉碎する。

エアデは空中で酒瓶を器用に構え、エーデルシュタインの顔面を捉

えている。

そして、彼女は左手の酒瓶を叩きつけた。

『……やっぱそうだよね』

彼女の酒瓶は振られたが、狙いは逸れた。

ボスの右肩を砕くにとどまった。

タイミングも姿勢も完璧だった。

外れたというよりも外したように見えただが……。

『だろっね』

どういことだ。

なぜ彼女は狙いを外したんだ？

『それは後で説明する。今はエアデを拾って』

落ちてくる彼女は右手の酒瓶でトナカイを殴っていた。

空を飛ぶ力を失ったボスもエアデと一緒に落ちてくる。

エアデはなんとか拾えたが、彼女は何も言わない。酒瓶を握りしめ、齒を食いしばっている。

『先にボスを片付けて』

シユウの言葉に従い、エアデを地面に降ろし、落ちてきたボスに向かう。

そこから先はいつもと何ら変わったことはない。何度か斬りつけて終わりだ。

出てきた結晶は二つ。

片方を手に取って、覗いてみる。

透き通るような赤色だ。大きさもかなりある。

おお、さすがボス。綺麗じゃないか。

なんだ心配してしまっただけど、いいじゃないかこれ。

『見せて。……ん、メル姐さんの目がビー玉ってことがよくわかった』
は？

十分きれいだろ。

これの何がいったい駄目だと言うんだ。

『よく見て。中に亀裂が走ってる』

言われてみれば、この模様が亀裂なのかもしれない。

いや、それともこっちの線がそうなのかな……。

『亀裂は上手く割れば何とかなる。致命的なのは、単色じゃないからムラがあることかな』

ムラあるか？

普通に赤一色だろ、これ。

『違う。わずかにソリの青とトナカイの黄の元色が混ざってる。高価ではあるけど至高じゃない』

駄目だ、わからん。

そもそもエアデはなんで狙いを外したんだ。

私の見る限りでは、完全に顔面を狙えてただろ。

『エアデの石に対する想いが本物だったからでしょう』
ボス部屋に入る前にも言ってたな。

『妄執だと思つてたけど、あれは確かに信念と言つていい。美への恐れを知っている』

そういう「俺わかつてるぜ」みたいな台詞はいいから。早く簡潔に物を言つて。

『エアデは高質の宝石が大好き。でもボスのエーデルシュタインはそれ自身が超高質の宝石。エアデは宝石が大好きであるが故に、宝石のエーデルシュタインを砕けない。それでも砕こうとはしたけど、目の当たりにして躊躇いが生じた』

その結果、狙いを外したと。

最初からそう言つてくれれば良いのに。

今、仰向けになつて複雑な表情をしてるのは？

あつ、やけ酒をくらつてる。

『至高の宝石を手に入れるには、エーデルシュタインの顔面を狙つて、一撃で粉碎しなければならぬことはわかつた。果たしてそれが本当に自分にできるのか反芻してる』

なるほどな。

他の冒険者が来てるわけでもない。

休憩がてら、もうちよつとここで考えさせることにしよう。

待つてみたが、エアデは起き上がらない。

目を瞑つて安らかな表情だ。

あいつ寝てないか？

近寄つて何度か声をかけて、ようやく薄目を開いた。

「宝石の——彼らの声が聞こえた」

……そうか。

疲れてるな。もうちよつと休んどけ。

どうだ、休憩したらもう一回ボスに挑んでみないか。

「ねえ、どこ？ どこから呼んでるの？ おおい、私はここにいるよお」

ふらつと立ち上がりボス部屋をうろつく。

おいおいやばいぞ、あいつ。

『飲み過ぎたのかな。いったんダンジョンから出よう。これ以上は精神に異常をきたす』

そうだな。

シユウに心配されている。

精神はもう手遅れかもしれない。

壁に耳を当てて、なんかぶつぶつ喋ってるしな。

酔って酒瓶と話をする奴らをたまに見るが完全に一致だ。

今のあいつに必要なのは水とベッドだろう。

『ベッドは寝ゲロするからなあ。カフェイン飲料にしよう』

なんにせよ、連れて帰る必要があるのは間違いない。

「……うふふ、……なんだね」

何がここなのかはわからない。吐く場所でも探してるんだろうか。

エアデは右手に握った酒瓶で壁際の岩を殴った。

もう駄目だ、この酔っ払い。

おい、帰——え……。

『……まったく気づかなかった』

彼女が殴った岩は消失効果により消えた。

消えた岩盤は思ったよりも大きく、奥へと坑道が続く。

『なるほど……酔えば酔うほど感覚が研ぎ澄まされていくのか』

その奥には扉があった。

扉は岩ではない——白く鮮烈に輝いている。

新たな扉の出現を前にして、私は興奮を抑えることができない。

ここから先は全て未知。ギルドの情報を超えた、この現状こそ我が

昂揚。

「あはは、今行くからねえ」

エアデは扉に歩いて行く。

私も彼女の背を追って扉へと進む。

ここから先は落盤によって潰えた幻の第五区画なのだろう。

『俺も楽しみなんだけど、あえて言っとく。気を付けてね』

ああ、ここが上級なら扉の先に待ち構えるのはそれより上の可能性

が高い。

本当ならエアデを押しつけて扉を開けてしまいたいが、この気持ちは留めておくことにしよう。

なにしろここを見つけたのはエアデだし、彼女に開けてもらったほうが問題への対処もしやすいというものだ。

完全に泥酔している彼女の分も気を張って構えていたが、特に何も起こらない。

扉の先は特に変わり映えしない普通の坑道だった。

『いや、反響がおかしい』

言っていることはよくわからないが、進んでいるうちに異常に気づいた。

岩に囲まれた道が、徐々に白っぽい石に変化していく。

坑道の高さや横幅も徐々に広くなる。

そして私たちは見た。

『ここは、宝石の楽園なのか……』

開けた世界は色とりどりの宝石により煌めいていた。

床も、壁も、天井も、そして場に置かれたあらゆる物体が光を乱反射している。

その中にエーデルシュタインのように人の姿を取っているものが多数見受けられる。

ガラス玉と揶揄された私でもわかる。彼らの放つ輝きこそが、エアデの求めていた光なのだ。

私ですら息が止まるほどの光景だ。

いったいエアデの目には何が映っているのだろうか。

隣で立ち尽くす彼女に目を向ける。

彼女は目を見開き、涙を流し、口をまん丸に開けた状態でかたまっている。

『あつ、呼吸が止まってる。軽く背中を叩いてやって』

ぼんぼんと背中を叩くと思いい出したように呼吸を始めた。

しかし、その呼吸は異常に速い。速すぎないか。

『まずい、過呼吸起こしてる。横にして落ち着かせて——』

その後はシユウの指示に従ってエアデに処置を行った。
目隠しをさせて横にしてようやく落ち着いてきた。
処置にはかなり時間がかかったが、特に襲われはしなかった。
宝石人どもは私の側に寄ってきたが、攻撃をせず何やら興味深そう
に見つめている。

たまに私に触って来る奴らもいて落ち着かない。

『客として迎えられてるのかな』

でも、ここはダンジョンなんだから。

『それは間違いないだろうけど、こいつらから敵意は感じないよ』
それは私もわかる。

あと何か喋ってると思うけど聞き取れない。

お前のチートで聞こえるようにならないのか。

『駄目だね。登録されてない。まだ言語として認識できる水準になっ
てないのかもしれない』

うーん、とりあえず斬ってみようか。

「あつ……」

落ち着いてきたエアデが目隠しを取ってしまった。

現状、周囲は高品質の宝石人に囲まれている。

彼女の目には私以外が理想の宝石で――。

「あつあああ……」

手を伸ばし、宝石人に触れようとする。

宝石人達もエアデの伸ばした手に触れようとしている。

触れようとした瞬間に、エアデは手をさつと引いてしまった。

『正しい。素手で触ったら油分がついてほこりや汚れを付着させる』
触りたくて仕方ないが、汚してしまうから触れられないというジレ
ンマに陥ってるようだ。

「ああああああ、ああ、あ……」

宝石人達をぐるりと見回し、嘆きをあげたところで白目をむいた。

最後に顔を覆った両手がだらしなく地面に落ちる。

『気絶しちゃった。意識が限界だったみたい』

そのようだな。

やれやれ忙しい奴だ。

ほつとくのもあれなので、エアデを担いで宝石の楽園を探索する。宝石の椅子に机、ベッドも見つけた。

広場の中央には大きな木の形をした宝石もあった。

木には様々な色や形をした宝石がちりばめられている。

『こんな豪華なクリスマスツリーを見ることがあるうとは』

さらに奥へ進んでいくと宮殿があった。

だだっぴろい中に柱がぼつぼつと立っている。

もちろん柱も宝石だ。複数の切子面に何人もの小さな私が映っている。

『宵が過ぎ、夜に入り、闇は充ち、死を迎え、そして——楽園へ至る』

シャツツ鉞山が第五区画パラダイス。

シユウにそう名付けられたこの区画にもボス部屋があった。

一際大きな扉だ。

宮殿の最奥に、その扉は相応しい。

虹色に輝くその石は、紛うことなく私を導いている。

背には気絶したエアデ。

左手にはいつもの重さのシユウ。

右手にはまだ中身が残る酒瓶が二本。

楽園の守り手に、私たちの輝きを刻む時、来たれり。

荘厳なる輝きの扉を開けば、そこには奥へと長く伸びる広間があった。

一番奥の台座には一体の宝石人が鎮座している。

そして私と彼を結ぶ道を挟むように宝石人が規則的に並び私を迎える。

『あかん、クリスマスモードで台無しだ』

問題は彼らの頭上には赤いトンがり帽子の宝石が載っていたことだ。

一番奥のボスですら赤い帽子をつけている。

「マイン・カイザー！ サミクラウス！」

ボスに一番近い宝石が叫んだ。

喋った……、おいおい宝石が喋ったぞ。

「マイン・カイザー！ サミクラウス！ マイン・カイザー！ サミクラウス！」

『マイン・カイザー！ サミクラウス！』

他の宝石達も同じ単語を唱和していく。

ついでにシユウも合わせている。

それどういう意味なの？

『我が皇帝、サミクラウス。ちなみにサミクラウスはサンタクロース。これもクリスマス演出だね。ほんとは違う名前だと思う……思った』

台座の椅子に鎮座していたボスが立つと唱和がピタリと止んだ。

マントに包まれた大きな体は、ただ立つだけで周囲を圧倒している。

「フローエ・ヴァイナハテン！」

ボスが叫んだ。他の宝石人も続く。

「フローエ・ヴァイナハテン！ フローエ・ヴァイナハテン！」

『メリークリスマス！ イエー！』

片手を挙げたまま三度唱和すると、ボス以外の宝石人が細かく砕けて消えた。

床に散らばった細かい結晶が、まるで銀河のようだった。

『エアデがこれを見たら、ショック死に間違いないですわ』

ボスも台座から足を下ろす。

「フローエ・フェストターゲ！」

怒号を鳴らし、マントを脱いだ。

『へ、変態だー！』

お前が言うなと言いたいが、確かに見た目はほぼ変態だ。マントを脱ぎさったら、中身はほぼ裸体で、しかも頭には赤帽子。しかも、これ見よがしに自らの体の強靱さを変なポーズで示威してくる。

あまりにもひどく、見ていられないなど私は顔を背けた。

『何やってんのッ！ 前ッ！』

シユウの睨りに視線を戻すと、ボスはすでに眼前に迫っていた。

彼の両腕は頭上に振り上げられ、今にも私を叩き潰そうと引き絞られている。

速っ……。

回避は間に合わない。

とつさに左腕を上げシユウで防ごうとする。

まずい……下ろされる両腕は白銀の雷霆。防ぎきれないことを感じた。

——しかし、ボスの握られた両拳はシユウに当たる直前で止まっていた。

ボスは両腕を引き、一步下がる。

私も何が何だかよくわからないまま、ゆつくりとシユウを下ろした。

ボスが片手を私に差しってくる。

えつと……なに？

『後ろ』

気配を感じて顔を後ろに向けると、紫の宝石人がいつの間にか立っている。

その透き通る両腕を私に差し出しているがどういうことだろうか。

『エアデを預かるってことだよ。どうやら、ただ強いだけの変態じゃないようだ』

意味がわからんのだが。

『気を失った一般人を叩き潰すことは彼の皇帝としての誇りが許さないらしい。ましてや、その気絶した仲間を背負ったまま戦う戦士を倒したとして、自らをカイザーと仰ぐ配下の者たちへの示しにはならんということでしょう』

なるほどね。

ずいぶんと余裕なことだ。

モンスターに手心を加えられるなんて初めてだ。

それなら遠慮なくエアデを預かってもらおう。

彼女を背中から下ろして、紫の宝石人の両腕に乗せる。

彼、あるいは彼女はエアデを部屋の隅に運び、横にさせていた。

『さて、相手はただの変態じゃない。変態紳士——いや、変態皇帝だ。油断なく挑ませてもらうとしよう』

ああ、攻撃を止めたことを後悔させてやる。

いくぞ、変態皇帝に変態チート野郎の力を知らしめてくれよう。

啖呵を切ったはいが、正直言って苦戦している。

さつきはよそ見た隙を突かれただけだと思っただが、そこそこ速い。

斬りにいっても、上手く避けられる。変なポーズもおまけで付けてきやがる。

それでも多少は当たるのだが、まったく攻撃が通らない。シユウの刃が表面を滑っていく。

『まずいね。速さこそこっちに劣ってるけど、身体能力を補う戦闘技術がある。さらに弱体効果の通りづらさに、異常に堅い表面ときた。魔力は吸収できてるけど、効いてる気はしない。相性が悪いと言わざるを得ないね。右足を大きめに上げて、下に向かって斬って』

変態皇帝の蹴りが私の右足があった場所を蹴り抜く。

その足に向かってシユウを振るうが、やはり傷をつけることは出来ない。

このままでは持久戦にもつれこむだろう。

『そうになったら負けだね……屈んで斬る』

私の上半身を狙った回し蹴りを屈み、相手の軸足を狙う。

相手も片足だけで床を蹴り、後ろに転回し、シユウの斬撃を躲す。

当たっても傷がつかないのに、避けるところを見るに魔力の吸収は効いているのだろう。

『こっちの動きに慣れていってる。三步下がる。はい、ワン、ツー、スリー』

顔面狙いの右パンチ、右脇腹を抉る左パンチ、顎を蹴り上げる蹴りを一歩ずつ下がって躲していく。

こちらでも避けるのに精一杯で、徐々に攻撃の機会が失われていつて
いる。

ゲロゴンブレスは撃てない。黒竜のスキルも意味がない。

早めの決着を付けたいが決め手にかける。

『そこは問題ない。うん、この位置だ。俺を正面に——絶対に手を離
さないでね』

シユウを構えると、まさにその位置にボスの勢いを付けた正拳が飛
んできた。

とんでもない衝撃に押され、足は地面から離れそのまま後ろに飛ん
でいく。

言われた通りシユウから手を離さず、そのまま宝石の床を転がる。

『右！』

膝で立つと変態皇帝が脇に立っており、頭上に両拳を持ち上げて組
み、振り下ろさんとしている。

やばっ、避け——

『避けなくていい！ その体勢のまま俺で受けて！』

片膝で立ったまま、シユウを上げる。

『右手で俺の刀身を支えて！』

右手がシユウにいくのと、ボスの両拳が振り下ろされるのは同時
だった。

まず腕に衝撃が来て、体、膝ととてつもない速さで伝わっていく。

最初にも見せてきたこの振り下ろしボスの得意技のようだ。

実際に先ほどまでの攻撃の威力と比較にならない。

おい、シユウ。

この後、どうするんだ？

もう、持たんぞ。

『もうちよっと』

すでに私の膝は宝石の床にめり込んでしまっていた。

周囲の床は裂け目が無数に出来ており、壁にまでヒビが入ってい
る。

全力で抑えているが、ボスの力の方が上だ。徐々に体が床へと押さ

え込まれてしまう。

「あなた、今……輝いていますね」

必死に抑えていたところで、突如として横からそんな声があった。ボスも私も互いに互いしか見ておらず、両者が驚きに充ちて声の人物を見る。

部屋の隅っこで寝かされていたエアデだ。

右手に掴んだ酒瓶を口に付け、ぐびぐびと勢いよく飲んでいく。

そして、彼女の左手にもまた酒瓶が握られていた。

思い起こしたのはエーデルシュタインを倒したときのことだ。

彼女は、彼女の信念故にボスへの一撃を戸惑った。

ましてや、このボスは一層輝いている。

果たして彼女にやれるのか。

『見て。彼女の顔を』

エアデの顔を見る。

彼女は目を閉じていた。

『見ればどうしても戸惑いが生じる。それを認めた上で、彼女は目を閉じたんだ』

しかし、目を閉じた状態でどうやって。

『酔えば酔うほど、感覚が鋭さを増す。今の彼女に視覚はさほど重要じゃない』

これが妄執の果てに辿りついた一つの境地。

「輝きを感じる！……そこだアツ！」

彼女は叫んだ。

左に掴んだ酒瓶がボスに向かって動き出す。

「砕けろっ！」

酒瓶は一直線に迷いなくボスの砕くべきポイントへ向かっていく！

終着点は彼の両足の付け根。その狭間！

すなわち——股間だった！

上から叩くでもない、正面から押しつぶすでもない。

下から押し上げての容赦ない粉碎、いや玉砕を狙っていることが

はつきり見て取れた。

『ッ！』

「ッ！」

シュウの悲鳴は声にならない。

ボスも何やら音に出来ない音を発している。

はつきりと聞き取れたのは酒瓶と股間の邂逅による音だけだ。

見た目の絵面とは裏腹に、今までで私が聞いたどんな音よりも澄み渡っていた。

ボスは砕けた。

股間を中心に体が細かく砕け散っていく。

「プロージット……」

ぼそりと最後に何か言い残して光に消えた。

アイテム結晶が二つ出てきたので片方を拾って中身を見る。

——皇帝サミクラウスの燦然たる鞏丸。

名前！

ひどすぎる名前だ。

しかし今回の場合、そこは重要ではない。

宝石としての価値があれば、さほど問題ないのだ。

さっそく覗いてみる。

なんか丸くて、きらきらしてて、透明な石だった。

『ボスのドロップアイテムを見たメル姐さんの語彙力がひどすぎる件』

なにその説明口調。

綺麗なことはわかるけど、今までのと何か違う？

『非の打ち所がない』

あれこれと批評してきたシュウがそれのみとは……。

私にはただの綺麗な石だが、とんでもない宝石のようだ。

『それよりエアデがやばい』

彼女を見ると恍けた顔でアイテム結晶を見ている。

直接覗いているが大丈夫なのだろうか。

また倒れないか心配だ。

……………ん？

さつきからこいつ身動き一つしないんだが、瞬きすらしていない気がするぞ。

『心停止』

えっ？

『心臓が止まってる。速く処置しないと死ぬ』

そこからが大変だった。

心臓マッサージをしても復活しない。

シユウの提案で慌てて、ボス部屋から飛び出した。

『宝石人さん達の中に、電魔法が使える方はおられませんか！』

私も叫んだ。

しかし、言葉は通じない。

騒ぎを聞きつけ、復活した変態皇帝もボス部屋から出てきた。

皇帝は事態を察し、すぐにそれらしき宝石人を呼びつけ処置を行う。
う。

結果、エアデは助かった。

脳に障害もなさそうだとシユウは言っていた。

その後、宝石人達を見てまた気絶したが、とても幸せそうだった。

気を失ったエアデを背中に背負い第五区画パラダイスを私たちが
は後にした。

第四区画のボス部屋に戻ると石が道を塞いでいた。

『消失効果が切れて、二元に戻ったんだね。エアデに酒瓶持たせて叩か
せて』

言われたとおりに、気絶している彼女の手にペイナイト・ハートを
握らせ岩を叩く。

入ってきたときと同じように岩は消えてしまった。

ふむ、今度入るときもエアデの力が必要そうだな。

『うん、それにしても良いダンジョン攻略だった。いやあ儲けものだ』
うむ。

新しい階層を見つけてしまったし、ボスの特殊版も倒せた。さらにちよつと待てば、通常版のボスも楽しめるという二十構成だ。

私にとっては文句なしのダンジョンだ。

それにしても珍しい。

お前がそんなことを言うなんて。

たいていは一般的な批評しかしないのに。

やはりあの宝石の世界とドロップアイテムは素晴らしいものなんだろうな。

『ああ、いや、良いものを見せてもらったと思うけど、所詮あれらは綺麗な石ころだね。特に特殊効果があるわけでもないし』

じゃあ、何が儲けものなんだか……。

別に何でもいいや。今は共にダンジョン攻略の余韻に浸るとしよう。

こうしてシャツツ鉱山（クリスマスVer.）の攻略は完了した。

フェルゼンに戻った私は、エアデを宿に預けた。

置き手紙もしておいたので、目が覚めれば自分の住処に帰るだろう。

荷物もなくなったので、ギルドに赴く。

第五区画の存在は、まだ話さないことに決めた。

通常版の攻略も残っている。邪魔者に殺到されてはかなわん。

ギルドへの主な用事は私ではなくシユウにある。

こいつはギルドに口座を作っているいろと悪さをしている。

いつぞやも馬鹿みたいな金額を貯めていたし、あちらこちらで何かやってるようだ。

当然、こいつが話すことはできないので、私がそのまま口にしていくが、特殊用語が多すぎてわからない。

結局、今回もいつもどおり何も考えずシユウの発言を繰り返して終わった。

用事が終わったので宿に戻る。

エアデが起きていれば、一緒に食事でも行こうと思っていた。

「お連れ様でしたら、先ほど外に出られました。『また挑みましょう』と伝言を授かっています。伝えればおわかりなられると」

フロントから伝言をもらった。

どうやら無事に復活したようだ。

『復活が速すぎる。あいつの内臓こそ石でできてるんじゃないか』
いなくなってしまったなら仕方ない。

私はすぐ近くで食事を取った。

『無論一人で』

余計なことは付け加えなくていいから。

そうして翌日である。

シャツツ釵山のクリスマス仕様が今日までらしいので、大人しく町を散策する。

賑わっているので隅を歩いて行くが、いろいろな店がある。

産出した原石を自前でカットし、販売する店などはなかなか見えて面白かった。

昨日見た石はかなり不格好だったが、上手く切って形を整わせると信じられないくらい印象が変わる。

これもう無理して原石から良いものを手に入れなくてもいいんじゃないの？

『メル姐さんに一流の化粧を施し、雅なドレスを着せ舞踏会に出させたでしょう』

いきなりだが、それがなんだというのか。

仮に出たとしても私は上手く踊れないし、喋ればすぐにぼろが出るぞ。

『つまり、そういうことなんだ』

見た目が良くなっても、中身が変わるわけじゃないから駄目だと。むかつく例えをありがとう。よくわかったよ。

『ただし言っておくと加工技術も価値判断の一つだよ』

上の例えだと、ドレスを仕立てた人や化粧をした人が評価されるっ

てことか。

『そうなる。中身がアレなのにいったい誰がここまで綺麗に見えるよう仕立てたんだろうってね』

アレってお前……。

『むしろ加工技術こそ評価されるべきなんだろうね。原石のまま鑑賞や装飾に堪えるものなんてそれこそ稀有なんだから。うん、そうだ。俺の補佐能力こそ讃えられるべき』

なんか自慢に変わってきたぞ。

それよりこの店の宝石はなかなか綺麗じゃないか。

店が小さくてぼろいから、宝石がより輝いて見えるだけかもしれないが……。

『確かに店は汚いけど、宝石は良いのがそろってる。石が小さいし、質が悪いにもかかわらず、上手く加工してる』

ふふん、私も見る眼ができてきたというものだ。

『じゃあ問題。メル姐さんでもわかるくらい良い物を置いてるのに、どうしてここはこんなに流行ってないんでしょう？』

さあ？

あんまり流行らせたくないんじゃないか。

たまにあるだろ。分かる人にだけ分かってもらえば良いって店が。

『それもあ。だけれど自己満足で加工してる物じゃない。最近の流行りを取り入れたものだ。どの石を見ても売るぞという気概が感じられる』

でも、石の質は良くないんだろ。

それに値段が馬鹿みたいに高く付けられている。

『宝石流通の源は、ザムルング商会が握ってるんだ』

ザムルング商会が？

冒険者ギルドじゃなくてか？

グラマナイト以外の宝石はダンジョンでしか採れないって聞いたぞ。

『ダンジョンの持ち主がザムルング商会だからね。本当だったらギルドじゃなくて、ザムルング商会が運営するべきなんだ。その方が金の

入りは良い。それでもギルドにやらせてるのは恩を着せるためと、手間が少ないから。ちなみにギルドが冒険者から買い取った石は、そのまま店に売られるけどザムルング商会が手数料を取ってる』

ふーん、そんなものなのか。

ギルドの人がヴィンターに下手に出てるのもそのあたりってことだな。

『そうそう。手数料分も取らないといけないから、ギルドはなるべく高く売る。良い物を買えるところは資本があるところだけ』

ここにしよぼくれた石しかないのは金がないからか。

それでもここまで高くなるんだな。

『おそろくこの店の儲けはほとんどないね。加えて、ギルドを経由しない宝石の流通問題が生じる。冒険者が原石をそのまま店に持ち込んで売っていく。その方が冒険者はより多くのお金が入るし、店はより安く宝石が手に入る』

そりやギルドを経由せずに売るだろうな。

私だって金が欲しけりやそうする。

『ギルドを経由しなくなれば、当然ギルドは儲けが減るし、ザムルング商会にもお金が入らない。それならと商会はギルドの運営をやめさせる』

そうなったらギルドは困るだろうな。

商会側も困るんだろうが。

『稼ぎは魔法結晶グラマナイトの方で余裕だろうけど、宝石方面も上手くやれば相当儲かるだろうからね。グラマナイトと違って、ダンジョンは資源の枯渇を心配する必要があんまりないし』

その宝石方面が上手くいってないってことか。

『まだ大丈夫。でも、今のうちに手を打たないとダメになるね。特にギルド外流通は深刻だ。手をこまねいていたら、フェルゼンを離れてしまつてシャッツ産宝石の信用下落にもつながりかねない』

具体的にはどうやったらいんだ？

『対策はいくらでもあるんだけど……、ネックは実行する人間が不足してるのかな』

人間が不足？

あのヴェンターって代理じゃダメなのか。

『思考の種類が違う。より効率的な流れの構築が重要なグラマナイト方面は、彼で最大の効果を得る。だけど宝石方面は、石の本質を金と効率以外の視点で判断できる人材が必要だ。石とその加工技術を知り、この店みたいなどころに良い宝石が適正な価格で回って来なければいけない——そう思える人材がね』

それくらいならいくらでもいるんじゃないのか。

宝石の面に惹かれてこの町に来る人間はごまんといるだろ。

その中から探せば良い。

『言ったとおりだよ。ダンジョンの運営はギルドに任せてる。つまり宝石流通の鍵はギルドにある。宝石の本質を知り、かつギルドの内情に詳しい人物。それがザムルング商会——ひいてはフェルゼンに必要なんだ』

なんだか難しそうな話だな。

頭が痛くなってきたし、私にはどうしようもなくスケールが大きい。

スケールの小さな私は次の店に行つて、ショッピングというささやかな幸せを満喫することしよう。

こんな具合に町を巡っていると、道の隅に人が倒れていた。

衣類がひどく荒れている。どうやらいろいろと揉めた後のようだ。

本当は道の真ん中に倒れていたのだろうか、引きずられた後も残っている。

他の人がするように見て見ぬ振りをして通り過ぎたかったのが、そこまで器用じゃない。

なにより、知ってる顔だった。

『既視感がすごい』

昨日、一緒にダンジョンへ潜ったエアデがそこにいた。

両手には昨日とは違う酒瓶が握られている。

しょうがないので軽く肩を揺すって起こす。

顔が昨日よりもひどい、泣き明かしたのか目が腫れている。
なんなんだろう。宝石を手に入れたのがよほど嬉しかったのだら
う。

おっと、忘れていた。明日も一緒にダンジョン攻略するよう落ち合
う場所を決めておかねば。

「メル……」

やっと意識がはつきりしてきた。

「メル。メル……う、うあ……うあああああ！」

途中で泣き出して、ついには暴れ出した。

なだめようとするが、彼女の酒瓶が私を容赦なく叩いてくる。

先ほどまで無関心だった周囲の人間がおもしろそうに見て来るの
が余計に辛い。

『とりあえず落ち着いて話せる場所に連れて行こう。ホテルが良い。
駐車場が部屋に直接繋がってるやつ』

突っ込みを入れる余裕もない。

とにかく暴れるエアデを押さえ込んで宿に連れて行った。

酒瓶を剥ぎ取り、椅子に座らせ水を飲ませるとようやく落ち着いて
きた。

彼女は泣きながら事の顛末を話し始める。

「ギルドを、クビになりました……」

あらら。

一日さぼったくらいで、ギルドってクビになるものなのか。

「ギルド長を、殴ったから、です……」

……よくクビで済んだな。

そもそもなんでクビになったんだ。

セクハラでもされたのか。それなら私も一声かけるぞ。

ギルドにはそこそこの影響力がある。セクハラをするカスこそ消す
べきだ。

『俺を睨まれても……。で、実際のところは？』

エアデはまたぐすぐすと泣き始める。

彼女の手が水ではなく酒瓶に伸びかけたので、さっと酒瓶を手元に

引く。

「飲まずには語れませんよう……」

水にして。

それで何があったの。

「昨日のあの宝玉を取られたんです……」

取られた？

ギルド長に？　なんで？

「それは……、その……」

『冒険者ギルド構成員は調査以外の目的でダンジョンに潜っちゃいけない』

そうなの？

「……はい」

『ギルド構成員はダンジョンの情報を取り仕切る立場だよ』

まあ、そうだな。

だいたい冒険者はギルドに入ってるし。

利用する際に情報の提供を受けるが、逆に何か見つければ報告もする。

その際には当然、情報相応のお金がもらえる。

でも秘密にする奴も当然居る。

私も第五区画の話はまだギルドに伝えていない。

邪魔者がダンジョンに殺到されてはたまらん。

『で、冒険者から重要情報を集める立場の者が、自分たちだけでその情報を利用してダンジョン攻略をしてたらどう？』

冒険者の立場がないな。

せっかく命がけで得た情報なんだから。

『そんな訳で構成員がダンジョンに潜ることは禁止されてる。例外が調査活動だね』

調査活動って調べたりすることだろ。

今回の攻略も、結果として第五区画を見つけたんだから調査活動ってことでいいじゃん。

「……そうしてもらえたんです」

『調査活動で得られたアイテム、金品、装備品等は全て破棄又はこれに類する手法で処理し、情報のみをギルドが得る。こんな規約があって、破ったらギルド長の首が一発で消し飛ぶ』
面倒なところだな。

それで没収されてしまったと。

ギルド員だったら潜る前にわかってたんじゃないの。

「……酔ってたので。それに死を覚悟してましたし、本当にあんな石が手に入るなんて思ってもみなくて」

それもそうか。

あそこで私じゃなく、別の冒険者に継つてたらたぶん死んでただろう。

そもそも連れて行ってすらもらえないだろうが。

『ちなみに俺は言おうとしたけどメル姐さんが止めた。もしものことなんか聞く必要はないつつつてね』

……過去のことをどうこう言っても仕方ない。

それで、没収されてしまつてぶちぎれてギルド長を殴つたと。

「お酒も残ってましたし。普段からむかついてたし。自分より上の人間には調子が良いのに、下の者には偉そうですし。あと息が臭い」

酒のせいだけじゃなさそうだな。

いちおうギルド長と話をしてみるか。

せっかく命がけでダンジョンにもぐつたんだ。

『殴つたのは事実だからね。仮に戻れても居心地が悪いと思うよ』

「それに……、もう辞めるつもりでしたから、あんなクズばかりの職場なんて」

そうなのか。

じゃあ、あとは石の問題だけだな。

私の手に入れたドロップアイテムはどうなるんだ。

一緒に調査したつてことで没収されるのか

『黙殺されると思うね。立場が立場だし、メル姐さんがギルド員としてのエアデから得た情報なんてない。第五区画なんて見つかつてすんなかつたんだから』

そうか。

それなら簡単だな。

私の手に入れた石をやるよ。

正直言つて、私にはあの石の価値なんて分からない。

価値あるものは、その価値をきちんと理解している人間が持つべきだろう。

『そうだね』

「それは……」

明日も一緒にダンジョン潜ろう。

今度は、通常版の変態皇帝をぶっ倒すんだ。

もうギルド員じゃないんだから、石を没収されることはない。

他のドロップアイテムを売っていけば、次の仕事を探す必要がないくらいの金が入る。

『無理。できない』

「ギルド構成員だった者は、ダンジョンに入ることが禁止されるんです」

えっ、そうなの？

なんで？

『さっきの話と一緒にだよ。情報を手に入れるだけ手に入れてから、ギルドを辞めて冒険者になるやつが出てくるから。ちなみに冒険者からギルド組合員になる逆パターンは問題ない』

そうなのか。

じゃあ、どうするんだ。

こいつがダンジョンに入れないと私も困るぞ。

あのボスはソロだとかかなり厳しい。

『極限級冒険者の立場を利用してゴリ押しでいける。それに、クリスマス版と通常版の第五区画情報を無償提供すれば余裕だね』

よし。善は急げだ。

さっそくギルド長へ話を付けにいこう。

エアデを引き連れてギルドに着くと例のヴァンターという男が奥

から出てくるところだった。

ギルド長にごまを擦られつつ、こちらに歩いてくる。

ギルド長は私たちを見て、体を硬直させたがすぐにヴィンターを丁寧に見送る。

「シユラム。こいつは確かにクズにはもつたいない。遠慮なくもらつておく」

「ヴィンター様の眼鏡にかないまして、当方としても喜ばしい限りでございます。今後ともなにとぞ、フェルゼン支部をよろしくお願い致します」

そう言つて、ヴィンターは馬車に乗り込み消え去った。

「あの成金野郎。私の石を……シユラムギルド長！ どうして私の石をあんな男に！」

どうやらヴィンターが先ほど手に持っていたアイテムは昨日の石だったらしい。

「ギルドを辞めた貴方には関係のないことです」

先ほどの表情とは打つて変わり、冷たい表情に戻したギルド長は告げた。

彼の目元には、彼女に殴られた青あざがありありと残っている。

「調査活動で得られたアイテムは全て破棄するのが規約でしょう！」

「違います。破棄又はそれに類する方法です。ダンジョンの保有者であるヴィンター・鉱山主代行に、我々が破棄する旨を伝えたところ引き取るとのことだったのでお渡ししただけでございます」

「この、ごまを擦ることしか能がないモヤシ野郎が……！」

エアデがギルド長に足を進ませたので、腕で進路を塞ぐ。

消え去った石よりも、明日手に入れる石の話しよう。

ギルド長に勧められ奥の部屋に入る。

腰をかけてすぐに話を切り出した。

なあ、ギルド長。

「なんでございましょう、メル様」

私は明日ダンジョンに潜る。

エアデも必要なんで連れて行くから。

「そ、それは認められません。規約がございまして」
知ってる。特例で頼む。

彼女と潜ればアイテムは二個になる。

一つはギルドに提供しても良いと考えているんだが。

「……いや、しかしですね」

攻略後に第五区画の情報も提供しようじゃあないか。

通常のものトクリスマスのもの、両方を。

もちろん無償でな。

「第五区画！ そんなものがあるのですか！」

ギルド長は目を見開いている。

……あれ？

エアデから聞いて知ってたんじゃないの？

「彼女はそんなこと話しませんでしたよ」

んんっ？

じゃあ、なんであいつがああ宝石を持ってるって知ってたんだ。

私は気になってエアデを向くが、彼女の姿は見えない。

気づかなかった。いつ出て行ったんだろう。

お花を摘みに行ったのかな？

『最初から部屋に入ってきてきてないよ。ヴィンターを追って出てった』

なんでもっと早く言わないの！

『おもしろそうだったからー』

堂々と答えやがった。

まったく悪びれる様子がない。

私は席を立ち、部屋の扉を開ける。

ギルド長を振り返り、よろしくと一言置いて退出する。

彼の顎が確かに縦に振られたのを見た。

ギルド前には、ヴィンターはもちろんエアデの姿さえ見えない。

馬車が走り去った方に、追いかけてみるとしよう。

………どっちだったっけ？

『右ね。行き先はザムルング商会の事務所だろうから俺が案内する』

よし、頼んだ。

人混みの脇を突き進み、最初の曲がり角を左に折れ、足はすぐに止まった。

『またか……、天井にも限度つてもんがあるぞ』

そいつは人混みを切り拓くようにして倒れていた。

エアデである。酒瓶は持っていない。

今度は意識があるようで、近くに寄るとなんか呻きだした。

手足もなにやら探るように蠢いている。

毛虫みたいな奴だ。

ギルト長からダンジョン攻略の許可が出たぞ。

ヴァインターを追いかける必要はない。

昨日のアイテムは私がやる。

「……受け取れません」

顔を俯かせたままエアデは答えた。

別に私に気を遣う必要なんてないぞ。

私はダンジョン攻略が目当てであつて、この石には執着がないんだから。

「それは！ その石は、メル——貴方が掴み取った石です。私が掴み取った石じゃない！」

いや、私たちで手に入れた石でしょ。

「駄目です！」

俯いたまま首を横に強く振った。

「駄目、あの石じゃないと駄目なんです。あれこそが私のこの手で掴み取った石」

彼女の酒瓶が空いた手には何も掴まれず、ただ虚空を掻くのみ。

でも、見た目は変わらないんだから、これでいいじゃん。

「見た目の輝きは変わらないでしょう。でも！ 目を瞑ったときに光を感じ取れないんです」

わからん。わからんなあ……。

あの石じゃないと駄目だということだけしかわからん。

『事務所行って交換してもらえば。見た目は同じなんだから』

仕方ない。そうするか。

ほら、いつまでも寝てないで行くぞ。

「起こしてもらえませんか。なんか……体に力が入らなくて」

そりやお前、飲み過ぎだろう。

あんな強いのをがぶがぶ飲んで、普通に話せてることのほうが不思議だ。

エアデを引きずってザムリング商会の事務所までやってきた。

固く閉じた門の前には、武装した人間が立っている。

後ろの建物も機能性よりも頑強に重きを置く。

規模は小さいが威圧感がある。

うーむ、事務所と言うか砦だな。

「おい、お前！　ここで何をしている！」

一人で歩けるようになったエアデは、私の隣から姿を消して門番に近づいていた。

「成金野郎に私の石を返してもらいにきた！　三下に用はない！　さっさと門を開けろ！」

馬鹿じゃないのか、あいつ。

まあ、嫌いじゃないが面倒な奴だ。

シユウもおもしろがってケラケラ笑っている。

「ここは酔っ払いの来るところじゃない。とっと失せろ」

とりつく島もない。

酔っ払いと判断され、手でしっしと追い払う。

門番が元の位置に引き返そうとしたところで、エアデは自分の服に手を突っ込んだ。

『あっ』

服から出てきたのは酒瓶。

その酒瓶で背中を晒す男の頭を殴った。

男は叩かれた瞬間に視界から綺麗さっぱり消え去った。

「貴様！　何——」

仲間をやられた門番が剣を抜いたが、それよりなお速くエアデは門

番に近づき消失させた。

一仕事を終えた職人のごとく彼女は酒瓶に口を付ける。

「元受付嬢舐めんじゃねえぞ、チンピラ風情が」

おい、シユウ。

お前いろいろ効果を入れてるだろ。

明らかに動きが速い。門番がまるで反応できてなかった。

『おもしろそうだったからね。どれほどのものかなと』

進撃の酔っ払いとは恐ろしいものだ。

門を消し、玄関の扉も消し、警護の人間すら次々と消し去っていく。

両手にペイナイト・ハートを持って、飛んでくる魔法や弓すらも易々と消し去る。

「お邪魔しまーす！」

上層の一番警護が堅かった部屋の扉を消し去り、部屋にズカズカと立ち入る。

その部屋の奥では机に向かって書類を整理しているヴィンターの姿があった。

「当商会へのご用向きは？」

声には出したが書類に目を落としたままで、エアデに見向きもしない。

「私の石を返してもらいに来ました。石はどこ？」

「石は然るべき場所へ移した。それと、あの石は当商会が正当な権利を行使して得たものだ。お前のものではない」

要するに石の場所は教えないし、返す気もないらしい。

それにしてもすごいな。この状況を前にしてまるで臆する気配を感じさせない。

彼の言ってることは至極もつとも。

そもそも私たちは本来襲撃をしに来た訳じゃない。

石を交換してもらいに来ただけだ。きちんと伝えなければならぬだろう。

「私も同じ石を持っているから——」

「いいえ。あれは私が倒して、私が手に入れた、私だけの石。返しなさい。」

い」

「ヴェンターは書類が読み終わったのか、ようやくエアデに目を向けた。」

「断る。仮にお前の石だとしても、あの石はクズには勿体ない」

「私の交換要求は過激な発言の応酬で塗りつぶされてしまう。」

「返す気はない、と——」

彼は葉巻に火を付け、煙を燻らせる。

対するエアデは対抗するように酒瓶をあおる。

「話を通じない女だ。返す気は——ない」

エアデは右手に持っていた酒瓶を地面に落とす。

絨毯が引いてあったため、酒瓶は鈍い音をさせて転がり、中身がこぼれていく。

「それなら力尽くで返してもらおうとします」

「どうぞ。いくら力尽くでこられても渡す気はない」

無論、本当に力尽くでいこうとしたら私は止めるつもりだ。

何度も言うが石を交換してもらいに来ただけで襲撃をしに来るつもりじゃなかった。

エアデは殴りかかりに行くのかと思いきや、服に空いた手をつっこんだ。

また酒瓶を取り出すのかと思ったが、なにか手のひらサイズの小箱を取り出してきた。

……なんだか嫌な気配を感じる。

『ばっ！……いっ！……正気じゃないぞ！』

シユウの声色が変わった。

どうやら相当やばいものであるらしい。

正気じゃないのは今さらだろう。

そろそろ止めよう。

『動いちゃ駄目！ あれはまずい！ 絶対そいつに近づかないで！』

エアデを止めようとしたが、逆に私がシユウに止められてしまった。

「何だそれは？」

私の疑問をヴィンターが尋ねてくれる。

「前の任地にあつたダンジョンで、ボスがドロップするアイテムです」
あいつの前任地のダンジョンって氷窟だったよな。

ボスはサンタとかいうゴブリンで、ドロップアイテムは宝石じゃなかつたか。

『それは特殊ドロップとクリスマススの時だけ。通常時は別物』

エアデは左手の酒をまたしてもあおる。

まるで自分自身を追い詰めていくようだった。

「爆散ボックスと言います。小さいですが、この部屋を消し飛ばすには十分です」

は？ 爆弾？

何考えてんだお前。

ほんと馬鹿じゃないのか。

『刺激しないで。ほんとに爆発するから。やべえなあ、スキルにアイテム強化しかないぞ。弱体化とか無効化も付けといてくれよ……』

「くだらん脅しだ」

ヴィンターは鼻で笑っている。

「私は本気です」

なんとなくわかる。

脅しじゃない。こいつはほんとにやる。

『スキル見繕うから時間稼いで』

シユウが小声で伝えてくる。

エアデ、本気なのはよくわかった。

だが、ここで爆発させたらお前も死ぬだろう。

手元に宝石が返ってこなくなるぞ。

「言つたはずです。欲しい物は、自らの手で掴まなければならぬと！
あれが返ってこないなら！ 私はここで死んだつてかまわない！」

！

やべえ。

これじゃあただの爆弾テロだ。

狂信者の如く、無駄死にを殉教とでも考えているのだろうか。

「さあ、どうする！ 石を返すのか！ それともここで死ぬか！」
最後の勧告だ。

さすがにここまでやればヴィンターにも伝わるはずだろう。
彼女の本気具合というものが――。

「さつきから叫んでいるだけだな。口だけのクズに返す気はない。
さつきと帰れ。出口は後ろだぞ」

まるで伝わっていないかった。

なんでこいつはこいつで売り言葉に買い言葉なのか。

肝が据わってるどころじゃないだろ。自分が死ぬかもしれないっ
ていうのに。

「本当に、やりますよ」

エアデの呼吸が静かになった。

左手に持っていた酒瓶も地面に落とし、右手の箱に左手をかける。

「やってみろ」

すまんなシユウ。

私に時間稼ぎは無理だ。

後はいつも通りなんとかしてくれ。

『全力でエアデを後ろに引いて！』

エアデは箱を開いた。

同時に箱の蓋から閃光が縦に走る。

私も閃光のごとくエアデの腰を掴み、全力で後ろに引っ張った。
引かれたエアデは後ろの壁に飛んでいく。

箱は空中に取り残され、上下に向かって光が伸びる。

天井と床を突き破り、箱自体も光に飲み込まれ消えてしまった。

エアデが立っていたところに光の柱ができた。

柱は徐々に太くなり、やがて落ち着いた。

爆音を響かせて私の前に在り続ける。

光は収束した。

天井と床にはまんまるの穴が空いている。

穴を挟んで反対側には、ヴィンターが平然とした面持ちで座っ
ている。

壁をぶち抜いたエアデも、彼の姿を認めて立ち上がった。

彼女の目に宿る闘志はまだ消え去っていない。

そして私はもう帰りたい。

『いやあ、間に合って良かった。アイテム効果十倍、対空中仕様、効果範囲収縮で上空に向かって上手く飛んでくれた。上で花火みたいに広がっただろうね』

シユウは自分の仕事に満足しているようだ。

「なるほど口だけのクズではないようだな」

ここに来てようやくヴィンターから歩み寄りを感じられる発言が出た。

「——しかし、返す気はない」

葉巻を灰皿に押しつけて、エアデを睨む。

「俺もこのシマをオヤジから預かってる身だ。一度、商會に納められた物を脅されて差し出したとなれば、オヤジに顔向けできない」

駄目だ。

こつちもこつちで引く気が微塵にない。

「……そうですか」

またしても彼女は服に手を入れた。

やめてくれエアデ、お前の言動は私に効く。

「そうだ、返す気はない。しかし、お前が石を取り戻す方法ならある」
服の中から取り出される手が止まった。

「伺いましょう」

ヴィンターは淡々と説明し、エアデも黙してそれを聞く。

時間は緩やかに過ぎていった。

今さらなんだけど、私の石と交換で良いでしょ。

ヴィンターの事務所から出て、私とエアデはホテルの部屋で飲んで
いる。

「いやあん、私の石が返ってきましたあゝ」

すでに酩酊状態。

それでも例の宝石には素手ではなく絹ごしに触れる。

それどころか石は完全に絹で覆われている。

直で見ると、気を失うからだ。

ヴェンターとエアデの話はうまくまとまった。

いや、ほんと疲れた。こんなに心が疲れたのは久々だ。

「まあまあ、そう言わないで。この度は本当にお世話になりました」

ああ。

本当に大変だった。

それより明日はよろしく頼むぞ。

「ええ、任せておいてください！」

自信満々だ。

「ではでは、改めて乾杯しましょう！」

彼女は私のグラスに酒を注いでいく。

私が飲むのは比較的弱い奴だ。ちよっと甘めであっさりしている。

私も彼女のグラスに酒を注ぐ。

彼女が飲むのはもはやアルコール。

これ、こんなに注いで大丈夫なんだろうか。

「少ない少ない！ 半分じゃ足りませんよ！ 石の返還祝いと就職祝

いなんですから！ もっともっと！」

ギルドをクビになったエアデは、ザムルング商会に再就職すること

が決まった。

ヴェンターにのみ責任を負うギルド・宝石部門の担当という異例の

好待遇になっている。

商会の一員となったエアデが、商会の宝石を管理させる立場に置か

れることで石が手に入る流れとなったわけだ。

商会の内部として、第六区画の採掘・精錬方面に優秀な人材が偏り、

ギルド・宝石方面は弱かったらしい。

それを補強する形で、ギルドをお払い箱になったエアデが都合良く

納まった。

彼女の宝石に対する執念とセンスはシユウも褒めるぐらいだ。

何するかは知らないけど、きつと上手くやるだろう。

それよりもむしろ、私は明日のダンジョン攻略こそ本番だ。

「ボスを粉碎してやりましょう！」

エアデは酒瓶を振り回してアピールする。

『ヒュンとするからやめて』

シユウもなんだか疲れている。

「我が手に新たな輝きを！」

輝きは手に入るだろうけど、お前、気絶するじゃん。

そういやボスで思い出したが、倒した時になんか言っていなかったか。

『あれは負けたって意思表示。見た目と違ってギャグのセンスはあくセサリークオリティだ』

そうなのか、そもそも何て言っていたか思い出せない。

それに他にも忘れていることがあるような。

「いいじゃないですか何だって。ほら、いきますよ。せーの——」

エアデが杯を高く掲げる。

私も軽く杯を掲げた。

「乾杯（ブロージット）！」

エアデが叫んで、一気飲みをする。見なかったことにしよう。

私もグラスを口に運ぶ。

こうしてクリスマスの夜は酔いの中へと過ぎ去っていった。

なお、翌日は昼過ぎに目が覚め、頭痛もひどくダンジョンには行けなかった。

『飲み過ぎダメ絶対！』

頭に……響く……黙って。

蛇足15・5話「幻想、見果てたり（中編）」

暗闇の中で、私は説教を受けている。

『考えなしに時空の歪みに突っ込んだら、洒落にならないってわかった？』

……ああ。ほんとに。

でもな、あのときは逃げるのに必死でそんなこと考える余裕がなかった。

あそこにいたらもつとやばいものに巻き込まれていた気がする。

『まあ、間違いなく巻き込まれただろうね。配慮はしてもらえただろうけど』

それよりどうしようか？

『下手には動けないね』

やっぱりそうなのか。

ゼバルダの攻撃から無我夢中で逃れ、靄の中を彷徨っていたら行き止まりに辿りついた。

問題はその行き止まりは前方と足下はもちろん、左右、後方、上と全方位が塞がっていたのだ。

『いしのなかにいる——をまさか自分が体験するとはね。いやはや、メル姐さんといると貴重な体験をさせてもらえるよ』

どうやら時空の歪みの終点は、地面の下だったようで、文字通りの八方塞がりというわけだ。

『今度からは、もうちよつと考え——』

説教はもういい。

今はここから脱することを考えよう。

なんだかんだ言っても、お前のことだ。

すでに出る方法は対策済みだろ。

しばらく待ってみるがシユウは何も返答しない。

………うっそ。

えっ、待つて。

土の中から出られないのか。

飯やダンジョン攻略はどうするんだ。

『三大欲求とダンジョン攻略を並列に扱うのはどうなんだろう』
やっと思ったが、それは脱出法ではない。

『ゲロゴンブレスを上に向けて撃つしかない』
なるほど、それなら地上までの道はできるか。

『——と違ってただけで危険すぎるからやりたくない。もしもゲロゴンブレスでも地上に届かないほどの、地中奥深くだったなら上からの落盤が怖い。それに、振動で足下が崩れるかもしれない』

じゃあ、どうするの？

出るためには危険を冒してでもゲロゴンブレスを撃つしかないだろ。

シウウはまた黙ってしまった。

沈黙が狭い空間を支配する。

『耳クソつまってんじやない。ほんとに聞こえない？』

聞こえる？ 何が？

聞こえてくるのは、自分の鼓動の音と、微かに響くよくわからない音だけだ。

『そう、気になってるのはその微かな音なんだよ。土の圧密やズレの音とは違う。断続的だけど、独特のリズムがある』

そう言われれば、そんな気もする。

何度か短く音がなり、その後は少し静かになる。この繰り返しだ。

この音は一体何だ？

『歌おう』

……は？

『歌うんだ、メル姐さん！』

は？ いや、何で？

『ははっ、歌う理由？ おおい、メル姐さんよお。そんなの考える必要あるう？』

なんでお前が笑ってるのかさっぱりわからない。

そもそも、もっと考えろってさっき私に言わなかったか？

『ほら！ 俺で壁を叩いてリズムを付けて！ メル姐さんのイカれた

歌を聴かせてくれよ!』

普通そこはイカした歌だろ。

なんだろう。

普段は無意識に歌っているが、歌えと言われると無性に恥ずかしさを感じる。

とりあえずシユウで壁をガンガン叩く。

岩が砕けて、私の靴にガラガラと崩れてくる。

『手を止めないで続けて。ほら、どうしたの歌って歌って!』

それでも歌うことはせず、どんどんシユウで岩を砕いていく。

膝元まで岩で埋まってしまっている。

そろそろ止めて良い?

『駄目。もうちよつとだから続けて』

そうして岩を叩き続けていると、私が出す以外の音も聞こえてきた。

あれ、これって……。

『そう、何かがこっちに向かってきてる』

何かって何だ?

『さあ? 人かモンスターか、はたまた竜かもしれない。なんにせよ今はそいつ頼みだ。叩くのをやめないでね。それと——攻撃の準備を怠らないように』

そうして私は壁を叩き続ける。

あちらのリズムに合わせて叩き、音はどんどん近づく。

「おおれら、今日も土掘って……」

なにやら歌が聞こえてくる。

しかも一人ではなく複数の声だ。

「つうるはし、右手に岩を——打つ! っと」

そうして私の眼前の壁に穴が空き、そこから銀色に光る先端が飛び出す。

私が出来た穴の下部分をシユウで叩くと、あちら側とこちら側の境界が大きく崩れた。

境界の向こう側には細身の男が立っていた。

上下にぼろのつなぎを着て、頭には黒のつば付き帽を被る。それに手には斧の刃が尖ったような武器を持つ。

『あれは、ツルハシって掘削道具』
そうなのか。

彼の後ろにも何人かいて私を凝視して固まっている。

『まあ、壁の中から生きて人間が出てくりゃあ、そりゃ固まるよね』
それもそうだ。

「おいらあ、オリヒオってんだ！ よお、ねえちゃん。おいらの言葉、わかるかい？」

オリヒオと名乗った褐色肌の青年はニカツと笑う。

いろいろと特徴的な奴だが、頬にあるそばかすが特に印象的だった。

オリヒオとその仲間達は私に一通りの質問を投げかけるとなにやら話を始めた。

彼らはみな体が細く、肌が褐色だ。誰もがスコップやツルハシ、猫車を手にしている。

いろいろと意見は出ていたようだが、オリヒオが腹減ったからひとまず帰ろうってことになった。

しかし、まだ話は終わってなかったようだ。さらに私を連れて行くかどうかの議論が始まる。

「へい、メルっち。腹減ってねえか？」
減ってる。

正直に応えたものの、この男はすごい馴れ馴れしい。
メルっちなんて呼ばれ方をしたのは初めてだ。

「よっしゃ、決まりだな。俺んどこに来いよ」
『あああ！ テメエいきなり出てきて何様のつもりじゃ！ 俺のメル

姐さんに手え付ける気か、ワレ！』
こいつもすごい馴れ馴れしい。

「俺のカミさんの飯を食わせてやるぜ」
『あつ、所帯持ちの方でしたか。それじゃあ、メル姐さん。お言葉に甘

えてお世話になろうか』

すごい変わり身を見た。

『悪い奴じゃなさそうだね。というか空気が読めてない』

他の人間が明らかに私から距離を取って歩く中で、一人だけ私に話しかける。

オリヒオは結婚済みのようで、しかもベタぼれらしい。

嫁の自慢話が正直うるさい。

『ん』

シユウの眩きと同時に、オリヒオの話がピタリと止まった。

彼は横に向いていたつばを、後ろへと向ける。

「おっとお、奴らが来るぜえ！」

彼の声とともに周囲の雰囲気も変わる。

下ろしていた武器、というか道具をそれぞれ手に構え始めた。

小さな揺れを感じたが、徐々に大きくなりどうも錯覚ではなかったと把握する。

「前だな。正面から二」

『構えて。正面から三体だね』

シユウとオリヒオの声が被った。

いくらかの男が道の先に向かう。

「右斜め後ろから」。さらに後ろの上から二」

『右後方から一体。後方上部から二体』

またしても二人の声が合わさる。

他の男達が後ろへと向かう。

「真下からが四。全部小型だ。ここはおいらとケルン、ホリ」

『直下に四体。立つべきはここだね』

この雰囲気はモンスターだな。

もしかしてしなくてもはここはダンジョンなのか。

おいおい素晴らしいな、ご飯とダンジョンが一緒に来るなんて。

揺れが徐々に大きくなり、そいつらはやってきた。

大きさは、犬が多少でかくなったほどだろう。

モグラ型のモンスターだ。

全身が毛むくじやらで、口は細い。

体の割に手が異常に大きく、特にその爪はぶっそうだ。

そんな奴らが道の先から、天井から、地面からと続々出てくる。

『やるじゃないか』

モグラ型モンスターを相手に、オリヒオたちは戦い慣れていた。

適切にモンスターから距離を取り、それぞれがタツグを組み、片方が防ぎ、もう片方が攻撃する。

私も足下に出てきた一体を突き刺して倒す。

弱い。初級くらいか？

これならいくら出てきても敵じゃない。

『なんで、そういうフラグ立てるの？ ……うつわ、ほんとに来た。しかもデカいぞ』

オリヒオがちょうどモンスターを倒したところだった。

「前後から中型が来る！ 小型もだ！ 退くぜ！ セイ、ジャル、カナガラ、戻れ！」

後方で戦っていた二人がモンスターの攻撃を受け流したところで、敵に背を向けこちらに向かって走ってくる。

オリヒオは彼らへと走る。彼らとすれ違い、追ってきていたモンスターにつるはしを突き立てる。

すぐさまもう片方のモンスターからの攻撃を転がって避けた。

つるはしを受けたモンスターは光になって消える。

アイテム結晶が現れると共に、トンネルが大きく揺れて、新たなモンスターも現れた。

「景気がいいぜえー！」

オリヒオはヒューと口笛を吹いた。

中型と呼ばれたモンスターは、狭いトンネルの半分以上を埋め尽くしていた。

小型の前進を大きくして、かぎ爪もさらに大きくなっている。

オリヒオと私は前後から中型に挟まれた。

他の奴らも新たに出てきた小型に手一杯だ。

中型はオリヒオと私を挟むようにゆっくりと近寄ってくる。

「メルっち！ こっちにきてくれ！」

私に声をかけると、すぐさま後方の中型モグラに襲いかかる。

中型がいるってことは大型もいるのだろうか。

そいつがボスなのかな。

『ほお、身体強化に硬化魔法。しかも無詠唱か。後方の敵をメル姐さんが来るまでに倒す。そこでメル姐さんを後ろに逃がして、仲間と共にモンスターを挟み撃ちにするって算段だね。なかなかの判断と行動力だけど、一つ計算違いをしてる』

そうだな。

私が戦えないという前提がある。

別に倒してしまっても構わないんだよな。

『やつちやえメル姐さん！』

前方から近寄ってくる中型モグラに私も歩み寄る。

両手の大きなかぎ爪を横に構えたところで、さっと相手の懐に入り、そのままシユウを一刺し。

上下にかき回す必要もなく、あっさりと中型モグラは光に消えていった。

あれ？

周囲の小型モグラが倒れていない。

『感染スキルは切ってる。パーティー登録してない奴を巻き込むからね』

なるほど。

面倒だが一体ずつ斬っていくとしよう。

オリヒオの仲間達が戦っていたモンスターを倒す。

最後に逃げようとした最後の一匹を背中から刺して片付けた。

「やるじゃねえかあ！ メルっちい！」

オリヒオが私に近寄って、肩ををばんばんと叩く。

「っしやあ！ みんな無事だな！ 帰って飯にしようや！」

オリヒオがツルハシを掲げると、他の男達も声をあげた。

地上に出た私は、オリヒオの暮らす街——パンタシア僻地に案内さ

れた。

彼らの住んでいるところは、私の知っている言葉で当てはめれば貧困街にあたる。

粗悪な材質で組まれたボロい建物が並び、何か腐ったような臭いが漂う、それに靄が周囲を覆っており全体的に薄暗い。

一つだけ私の認識する貧困街と外れているところがあった。

それは出会う人、それぞれに生気があることだ。

だいたいこういう街並みに住んでいる人は陰鬱だった。

しかし、この街は違う。出会う人が元気にオリヒオらに挨拶をしてくる。

オリヒオやその仲間達も戦いの疲れを見せることもなく、その声に応えていつている。

なんかでつかい壁みたいなのが見えるんだが、あれはなんだろうか。

「ありやあ『壁』だな」

いや、さすがにそれは見て分かる。

「俺たちやみんな壁って呼んでんだ。中には古い橋と靄しかねえんだが、それをあの高い壁で囲ってるんだよな。トンネルとも繋がってるんだが、都市の奴らのすることあよくわかんねえぜ」

まさか橋を渡ったりしてないよな？

「橋を渡ろうとすると靄が深まって、変な声が聞こえるんだ。不気味がって誰も壁の内側には近寄ろうとしねえぜ」

それってもしかして――、

『跨幻橋パンタシアだろうね。危ないから隔離されちゃったみたいだね』

やっぱりそうか。

幻竜はまだいるのだろうか。

仲間達とほうぼうで別れ、オリヒオは彼の自宅へ私を案内した。

彼の家も例に漏れず、けっして豪華な家とは言えないものであった。

彼は、彼の自慢の妻に私を紹介すると、報告してくると言っ出て行く。

奥さんは、なんとというか可もなく不可もないといった普通の女性だ。

『ほんと普通だね。ここまで普通すぎるとなんか反応に困る』

おそらく彼の人物説明と、目の前の女性が同一人物だと判断できる人はいない。それくらい彼の説明は誇張が過ぎている。

実際に嫁さんは、初対面の私を適度に警戒し、何を話せば良いかと困っているくらいだ。

「夕食の支度があるので……」

彼女はそう言っ席を立ち、私は一人残された。

しばらくするとオリヒオが戻ってきた。

「うっしやあ！ 帰ったぜ！ 飯だ！ めしめし！」

彼が戻ってくると場は賑やかになり、そのまま夕ご飯をごちそうになった。

予想はしていたが、内容はひどいものだ。やたら堅いパンが少量に、具のほとんどないスープ。

うまくもなければ、とても腹がふくれるものでもない。

それでもオリヒオはうまい、腹一杯などと口にしていた。

オリヒオたちが離れたところでシウウに尋ねる。

ここがパンタシア僻地とよばれ、跨幻橋もすぐ側と聞いたから場所はわかる。

問題は時間だ。前は一万三千年前だったようだが、今度はいつの時代に飛んだんだ？

オリヒオ達は冒険者という言葉を知っていたが、それがどんなものかは知らない様子だった。

彼らの実力があれば冒険者としてやっていけるだろうし、こんな貧相な暮らしをする必要はないだろう。

『元の時代から、千年くらいかな』

なるほど、千年前なのか。

それなら確かに冒険者ギルドもまだ広まっていないか。

『違う。千年「後」だよ』

え？

『千年「後」。元の時代から千年経ってる。冒険者ギルドはもうない』
千年後？ 冒険者ギルドがない？

『推測だけど、冒険者ギルドが国を呑み込んだと考えるね』

冒険者ギルドが国を呑み込む？

そんな馬鹿な。なに言ってるんだお前。笑っちゃうだろ。

『現国家は、ダンジョンの掌握に徹底してるって聞いた。この世界でダンジョンを掌握したなら、世界を統べることと同じだよ。そして、この社会体系になりうると思ったら、それは冒険者ギルドがそういう方向に向かったと考えるのが妥当』

うーむ、本当かどうかはともかく、そうだとしたらなんともはやすごい時代になったものだ。

しかし、冒険者ギルドが世界を握ったらなら、冒険者……というかダンジョンに潜れる彼らは優遇されるんじゃないか？

『ダンジョン攻略をただの仕事として見れば、汚くて、危険で、きつい。そういった3K業務はいつだって下層社会の住人に回るもんだよ』

冒険者が下層社会の住人なのか……。

『ちよつと違う。彼らは「地底人」って呼ばれてる種族なんだ』
なんか言ってたな。

彼らの肌がみんな褐色なのもそのせいだとか。

『そうそう。夜目が異常に利いて、頑強で、食が細く、日光に弱い体質を持つてる。少数種族は圧倒的な多数種族によって迫害されるもんだよ。少数種族が圧倒的な力を持つてるなら別だけど……』

迫害されてると言うが、けっこう生き生きしてたぞ。

やっぱダンジョン攻略してるからか。

すごいなダンジョン。

『そのダンジョン思考はどっから来るの？』

それより明日もダンジョン攻略だ。

楽しみだな。未来のダンジョンなんだぞ。

今日はさっさと寝ることにしよう。

地底人たちの朝は早い。

まだ日は出ていないのに、そこらかしこから物音が聞こえてきて目が覚めた。

「メルっち。お客さんだぜー!」

朝飯を食って、準備して、いざダンジョンとしたところでオリヒオが声をかけてきた。

客ってなんだ？ 昨日の今日で、しかもこの時代だ。私を訪ねる人物にまるで心当たりがない。

入口に出ると、なにやら白い装束を身に纏ったご一行がいた。

オリヒオや嫁さん、近所の人々はみな地面に膝を付け頭を垂れている。

どうやらかなり偉い人たちのようだ。

「貴様が地底人共の言っていたメルか」

私に一番近い白装束が尋ねてくる。

その通りなので、首肯する。

「なぜ地中にいた？」

時空の歪みに突っ込んだから。

端的に答える。

白装束らは何やらどよめき始めた。

「身分を証明する物はあるか？」

身分を証明する物？

『冒険者証』

そうだ、それがあつたな。

首にかけていた冒険者証を外し、白装束に手渡す。

手渡したはいいものの、この時代にそれがわかるものがあるかどうか。

受け取った白装束はさらに後ろに控えていた、派手目な白装束に冒険者証をうやうやしく渡す。

〈正体を現せ〉

派手目な白装束が冒険者証をかざした。

何か呟いたがその意味はよくわからない。

『冒険者証には、名前や階級が書かれてる』

さすがにそれは知ってる。

『でも、内部に特殊な魔術印が刻まれていることは知らないでしょ。魔術印に対応する識別魔術を使うと、ダンジョンの攻略状況や訪れた冒険者ギルド、さらに冒険者証自体が本物かどうかって詳細な情報が読み取れる』

えっ、あのちっさい板にそんな意味があったの。

ただの名札としか思ってた。

「本物だ」

「おお、それでは」

白装束らがぶつぶつ言っている。

「下がれ」

先ほどまでの白装束は横に控え、派手な白装束が私の前に出る。

「メル様。先ほどまでの非礼な振る舞い、大変失礼致しました」

派手な白装束が、両手を体の前でクロスさせ、軽く頭を下げる。

周囲の白装束も同じ仕草を、一斉にしてきた。

何が何だかわからない。

「高祖よりの伝承に従い、お迎えにあがりました」

「ごめん、なんだって？」

「場所を移しましょう。ここは環境が悪い。メル様のお体に障りますゆえ。さあ、どうぞこちらへ」

いや、だからどういうこと。

『メル姐さんをVIP扱いするってことは、やっぱり冒険者ギルドが牛耳った社会で間違いない。それに誰だか知らんけど、メル姐さんのことを心配してくれてた人もいたみたいだ。おめでとう』

はあ、ありがとさん。

それで私はいったいどうしたらいいんだ？

『やりたいようにやったらいいじゃん。今までだってそうしてきたでしよ』

それもそうだ。

今までも。そして、これからも。

場所を移すのは構わんが、そこにダンジョンはあるのか？

「ご安心下さい。メル様をお連れする先にダンジョンはございません。メル様の境遇はすでに、その者どもから聞いております。地底ではさぞ怖い思いをされたでしょう」

ダンジョンが、ない？

怖い思い？

「左様でございます。ダンジョンの攻略などという行為は、メル様の行すべきものではございません。それは、このような劣悪な場所をねぐらとしているものにこそ相応しい」

……それ、返してもらえぬ。

いまだ白装束が握る冒険者証を指さす。

失礼致しました、と差し出してきた冒険者証を受け取った。

よし、行くか。

「かしこまりました。どうぞこちらに。輿を用意しております」
勘違いするな。

お前らとは一緒に行かん。

「何を、おっしゃるのですか？」

私は冒険者だ。

行く場所はすでに決まっている。

「どちら、でしょうか？」

ダンジョンだ。

「ご冗談を……」

私は冗談が好きじゃない。

「メル様をお連れしなさい。悪い空気を吸い、錯乱なさっている様子」

『むしろ錯乱がデフォルトだからなあ』

好きじゃないのは、冗談だけじゃないぞ。

トマトに、シユウに、勉強だって好きになれん。

『ねえ、今、俺の名前がなかった？』

これだけじゃない。

まだまだ嫌いな物はあるぞ。

論理的な話や、長い説教、無駄な軽口、セクハラ発言。

——とまあ、このように挙げていけばキリがない。

『ちよつと、ねえ。最後のつてほぼ俺じゃ……』

白装束共が私を囲む。

派手な奴が身体強化の魔法を全員にかけた。

ただ、その中でもとりわけ嫌いな物がある。

それはな——、

「目の前にダンジョンがあるのに、その道を遮る奴！ お前らだよ！」

私は一足で下つ端の脇を抜け、派手な白装束を蹴りあげた。

一悶着あつたがようやくダンジョン攻略に取りかかれる。

「いやあ！ やるなあ、メルっち！ 大司教様を蹴っちまうなんて！」

ついでに他の司教も二人を残して全員蹴り飛ばした。

残った二人には、倒れたその他大勢を持って帰ってもらった。

「でも、これからどうするんだ？ 俺たちへの圧力がさらに厳しくなるんじゃない」

俯いて歩く男が口にする。

オリヒオは相変わらず楽しげだが、それ以外の足取りは重い。

そんな未来の話より、今はこのダンジョンだ。

由々しき事態である。トンネルと呼ばれているだけで、正式なダン

ジョン名がない。

ポルタ溪谷の下にあるからポルタトンネルでいいじゃんと言ってしまう。

なんと安直な思考か。せっかく産まれた、この世界の奇跡たるダンジョンに、上がポルタだから下もポルタだなどと……。

ダンジョンに対する冒涇だ。呆れかえるしかない。

出てくるのは溜息ばかりである。

『ダンキチめ』

ふむ、何にせよ名前を考えておかねばならないだろう。

それよりもここは初級くらいだろうか。

敵の動きがわかりやすい。

『そうだね。深くなるにつれ難易度が上がっていくパターンかな。入口付近に中型はいなかったし』

オリヒオらと話を進めるところどうもそのようだ。

彼らでは中型が増えるところが関の山で、その先は知らないらしい。

『まだダンジョンとして不完全みたいだね』

そのようだ。

私たちの通っている通路の多くが、大型モンスターが通った道らしい。

『……さて』

さて、とは？

意味ありげな声で漏らしたので気になってしまった。

『気になる点が二つあるんだよね。一つ目はこのダンジョン。何で攻略されてないんだろう』

攻略してるじゃん。

オリヒオ達がゆっくりだけど、進んでるだろ。

『なんでそんなにゆっくりしてるんだろうってこと』

さあ？ まだダンジョンとして不完全だからじゃないのか。

それにドロップアイテムも微妙そうだったし。

『いやいや。ダンジョンの掌握が国家としての存続条件なら、さっさと攻略されてないとおかしい』

よくわからんね。

で、二つ目は？

『上で蹴った白装束たちのこと』

あいつらの何が気になったんだ。

『高祖の伝承とか言ってた。高祖が誰なのかは複数名候補があるけど、誰だとしてもメル姐さんとそこそこ親しい奴だ』

そりゃ、そうだろうな。

私を安全な場所へご丁寧にあんまり案内してくれようとした訳だし。

『そこがおかしい。メル姐さんと親しいなら、ダンジョン攻略に向か

うってわかってる』

……まあ、そうかも。

『わざとそう仕向けたんじゃないかな』

さすがに考えすぎじゃないか。

『いや、考えすぎじゃないと思うね。だって、この二つの疑問に対する答は一致するんだから』

それは何だ？

『メル姐さんに、このダンジョンを攻略させる——これに尽きる』

は？

誰が？ 何のために？

『それがよくわからない。でも、合ってると思うね』

何にせよ注意すべきだろう、ということだったん話は終わった。

シユウは警戒しているが、私は感謝しかない。

私のためにダンジョンを未攻略で残してくれたんだからな。

シユウの心配を余所に攻略はサクサク進む。

モンスターも中型が目立ち、数自体も増えて来ていた。

とうとうオリヒオ達が今まで潜った深度を更新してしまった。

さて、この先どうするかだな。

ソロで行くか、複数で挑むべきか。

『一緒に行く』

おや、お前は反対すると思っていたんだが。

『毒を食らわば皿までだ。徹底的に攻略してみよう。それにチートがあれば、こいつらは足手まといにならない』

ダンジョン攻略において、未来に飛んで間違いなく良かったと言えることが一つ。

——パーティーリングが存在していることだ。

オリヒオ達もつけていた。

今まではパーティー登録せずにいたが、そろそろしないと危うい。

シユウは相手が男だと高確率で登録をしたがらないが、今回は時代が違うことと、全員が所持持ちということが何より大きいのは間違い

ない。

「なるほどなっ！　メルっちがずっと話してたのはシユウキチだったんだな！　よろしくな！」

『シユ、シユウキチ……』

シユウキチ、なんかお前がキチ○イみたいだな。

私は笑いを抑えるのに必死だった。

呼ばれ方に関しては不本意さ丸出しだったが、オリヒオとの息はぴったりだ。

どうやってるのがさっぱりわからないが、こいつの感覚は恐ろしく鋭い。

『聴覚がずば抜けてるね。チート有りなら俺より上だ』

この通りシユウも認める感覚を持っている。

音の反響で、道の行き止まりも把握し迷わない。

さらに敵の位置をシユウよりも先に察知し、事前に配置を組める。

「ホリはもうちよつと後ろ、上から来るぞ。メルっちは——」

『後ろの三体をやろう』

「頼んだっ！」

指揮も的確で相手が出たところを確実に潰していつている。

『優れた感覚に、リーダー適性、良く言えば明るい人格。元の時代にいればなあ』

「あんまり褒めんよっ、シユウキチ！　照れんだろっ！　それより後ろからもう一体来た！　頼んだぜ！」

なんだろう……、この感覚は久々だな。

私自身が彼の腕や脚となり戦っている感覚がする。

『素直に感心する。メル姐さんと他多数でまともにパーティーが組めるなんて』

なるほど、これはパーティー攻略なのか。

普段がソロだから違和感はずい。しかし、悪い気はしない。

チートを使っても二人や三人で組むと、どうしても私とその他になりがちだ。

滅多にないが、それ以上の人数になれば完全に私は浮く。

『うん。そのメル姐さんが完璧に組み込まれてる。リーダーの極致だ。それなら俺はマネージャーとしての役割に徹させてもらおうかな』

何が違うのかよくわからんが、そうしてくれ。

あれしろこうしろの指示は、一カ所から来た方が迷わなくて済む。オリヒオが私たちを率いて、シユウが逐次細かい修正をしていく。ときにポルタ溪谷の断崖を削って進み、モグラ共に挟まれつつも、ついに溪谷の最下層に辿りついた。

最下層で起こっていたのはモグラ同士の闘争だった。

こちら側の断崖から出てくるモグラと、反対側の断崖から出てくるモグラが戦っていたのだ。

『こつちとあつちで種類が違うね。あつちの方が体格が良い』

あつ、ほんとだ。

こちら側のモグラよりもあちらの方がでかい。

力の強さもあちらの方が上だが、その分こちらは戦術で勝っている。

小回りや奇襲であちら側の背後や不意をつく。

割と珍しい光景だ。

一つのダンジョンの中でモンスター同士が争う光景はあまりない。森や草原のダンジョンではあったが、地下で戦っているのを見るのはこれが初めてになる。

「さあて、どうすっかな。双方が弱ったところで一気にしかけるとすっか」

『いや、それだと双方から狙われる可能性がある。おそらくこういった争いは日常茶飯事だ。決着が付かずに引き分けになる。片方がこちら側に退いて来たところを討って、すぐにあちら側に攻め入り、片方の背後を狙おう。その方が一度に少ない数と戦えてリスクが小さい』

オリヒオも同調し、すぐさま細かい動きの話に移った。

シユウの言うとおりモグラ同士の抗争は、数の減少と共に終わりを見た。

こちら側の断崖に戻ってくるところをタツグを組んで確実に仕留めていく。

問題は大型だったが、状態異常が通じてしまいあっけなく倒すことができた。

アイテムを回収することもなく、そのままあちら側の断崖に突撃する。

モグラ同士の争いのため、地面がぼこぼこで進みづらかったが何とか渡りきった。

完全に油断していたデカモグラの背中を襲い、こっちの大型まで倒すことができてしまった。

一通りのモンスターを倒し、オリヒオ達は歓声をあげる。

リポップを防ぐためアイテム回収は後回しにして、反対側の断崖を上ることとなった。

初めての道で時間こそかかれど、穴をひたすら辿りついには渓谷を挟んで反対側の地上に達した。

「おい、オリヒオ。ここは壁の内側だぞ」

霧ではつきりとわからないが、パンタシア僻地からも見えていた壁の内側に出てしまったようだ。

『あっちだね』

「なんだこりやあー！」

視界に赤と青の色が付いた。

私はわかつているが、他の奴は驚いている。

壁の内側には一本の橋が架かっている。

そして、その中心に赤い渦が巻いていた。

橋の途中に置かれた立ち入り禁止の柵を破壊し、渦の中心へ向かう。

オリヒオ達は付いてきていない。

霧が出ているものの、日差しが強いため彼らは出られないようだ。

私一人で歩いて行くと奴が現れた。

「ややや！メル殿ではないですか！お久しぶりですな！」

低い背丈にずんぐりした体つき。

霧の塊こと幻竜ヌルだった。

久しぶりか……。

私にとつては数日も経ってないんだがな。

「やー！ こちらは三百年ぶりでしょうか！ まあ、時間の隔たりに意味はないですがな！」

ん？

どういうことだ。

「ややー！ それよりもダンジョン攻略は楽しめましたかな？」

『やつぱりこいつの差し金か。俺たちにダンジョン攻略をさせたのは何が目的？』

ああ、誰かが私にダンジョンを攻略させようとしてるって話か。

なんだお前が仕組んでくれていたのか。

「やー！ 私だけではありませんがな！」

やははと幻竜ヌルは笑っている。

『で、目的は何なの』

「ややー！ 今は話せません！ 直にわかりますぞ！」

すぐにわかるならいいか。

ダンジョンが攻略できて私は満足している。

「やー！ さすがはメル殿！ ですが、ボスはまだ倒されていませんな？」

……あれ？

そう言えば、ボスはまだ見てない。

あの大型のモグラはボスじゃないんだよな。

「やー！ 違いますな」

『状態異常が普通に通ったから違うね』

だよな。

そうするとボスはあれよりデカいのが居るわけか。
なるほどな。

ボスを倒したらまた来るとしよう。

「ややー！ それはどうでしょうな！ たとえボスを倒すことができないとしても、私はここでお二人をお待ちしておりますぞ！」

何かひっかかる言い方だな。

そんなにここのボスは強いのだろうか。

シユウ曰く、道中は中級だ。もしかしたらボスだけが上級以上なのかもしれない。

オリヒオらと合流したが、時間の兼ね合いもあり、ボス搜索は明日になった。

初めての道と敵を攻略したのだ。チートがあれど、疲れは溜まる。今日は帰って休むことにした。

何事もなく、僻地に帰ってきた。

残念ながら何事もなかったのは攻略組だけだったらしい。

帰ってきてからの反応ですぐに何かあったのかわかった。

私に対する反応が非常に冷ややかになっている。

物理的に夕飯の量で見取れた。

食事の量がさらに少なくなっていた。

どうも私に蹴られた腹いせか、僻地に回ってくる食事の量を白装束共が減らしたらしい。

それどころかダンジョン攻略のノルマ達成要求も厳しくなった。

今回は最下層までたどり着けたため何とかクリアだ。

『やり口がこすい』

そうだな。

ボスを倒したらさっさと出て行くべきだろう。

明日にはダンジョンのボスを倒してクリアして、白装束共と話を付けに行く。

『そんなことじゃ根本的な解決にはならない』

じゃあどうするんだよ。

さすがに私のせいで、この人たちに迷惑をかけるのは悪いと思ってる。わずかだがな。

『わずかなんだ……。それはともかく、幻竜の目的が見えてきたな。現状維持にはなるまい。そうすると方向性は両極。さて、どちらになるかな……。どちらに転んでも退屈はしないか』

なんかぶつぶつ言ってる。楽しそうだからほっとこう。特に何も提案してこないということは、何とかなるってことだろうか。

翌日になり、またしてもダンジョンの攻略を行う。

メンバーの言動からは若干の焦りを感じる。

今後の生活への不安が出ている。

「よっしゃ、みんな！ 今日も気張っていこうぜ！ 目標はボスの撃破！ そうすりゃ問題なしってもんだ！」

オリヒオの言葉で、彼らの不安は吹き飛んだ。

ボスを倒せばどうにかできるという安心感が湧いたのだろう。

その言葉に根拠はないにしろ、信じ込ませるだけの力が彼にはあった。

問題はそのボスだ。

姿形が一切わからず、どこにいるのかもわからない。

それではオリヒオの聴覚による探知でもさすがに見つけることはできないだろう。

そうなる手段は一つ。

出番だぞ、シユウよ。

『ふむ。俺のいた国にもモグラの抗争があった。西のコウベモグラと東のアズマモグラで万年規模の抗争をしてるんだ』

はあ、そうなんだ。

それが今回の話にどう繋がるの？

『下のダンジョンで見たのは、大きさに差はあれど二種族だったね。仮にどちらかの種族にだけボスがいるとするとおそらく片方が圧倒的になり、戦いは決着がついてる』

ふむふむ。

そうするとボスは片側だけにおらず両種族にいてることか。

『昨日の戦闘を見た限りでは、あいつらは大きさによって立場の優劣があった。でかいほど偉いんだ。両種族にボスがいるとすれば、あれよりも大きなサイズがいることになる』

じゃあ、大きい奴を探せばいいってことか。
それだけじゃ難しいだろ。

「いや、待ってくれ。シユウキチが言っているのは、『両種族にボスはいない』ってことじゃねえか？」

『そういうこと』

どういうこと？

『このダンジョンの通路は、基本的にモンスターが通った道だよ。俺たちが見た道の中で、大型モグラよりもでかい道はなかった。そうでしょ』

「ああ、そうだ。おいらの聞き取れた範囲でもそんなでかい道はねえぜ」

そうすると、ボスはどうなるの？

いないってことはないだろ？

『俺の国でも東西二種類以外のモグラがいた。例えばサドモグラやセンカクモグラ。東西の抗争を嫌って新天地を目指したものだ。今回はダンジョンって事もあるから、範囲の面からこれは考えづらい。また、山地に生息するミズラモグラも除外できる。エチゴモグラも除外。そうすると考えられるのは二種』

けっこうモグラっているんだな。

あつ、続けてどうぞ。

『残りの二種はどちらも似たようなもんだけど、山地じゃないと考えればヒミズだろうね』

ヒミズってのは？

『モグラみたいにトンネルをガンガン掘らず、地上の浅いところを移動するんだ。地上にも出てくるけど夜は出てこないから「日不見」。体も小さい』

つまり最下層ではなくて、比較的上層を探せばいいってことか。

それでも範囲は広いだろ。

『ダンジョンの範囲内で、余り近づけない——近づかない表層となる場所は限られるでしょう。あちら側にはいなさそうだった』

「なるほどなあ！　ってこたあ、こちら側の壁の内側付近か！」

そういや不気味だから近づかないとか話してたな。
大まかな方向は決した。

上層をオリヒオの案内で進み、門の内側付近までやってきた。
そこからは掘削作業だ。削って砕いて土を移動させをひたすら繰り返す。

「おおれら、今日も岩砕きい〜」

オリヒオ達は歌いながら作業をしている。
手は止まることなく、むしろ黙々と作業するよりも早く効率的だ。
ちなみに私もシユウでひたすら岩を砕く。

「スコップ、片手に土」

そこでオリヒオの歌が止まった。

彼は帽子のつばを後ろに持っていく。

「捉えたぜ」

男達の顔が歓喜で緩む。

そして、オリヒオの指示に従ってどんどんと掘り進める。

『逃げないな……』

シユウがぼそつと漏らす。

良いことじゃないか、このまま一気に迫って倒してしまおう。

他の男達も私と同じ気持ちなのか同調して声をあげた。

シユウとオリヒオは黙っている。

なんなんだ、こいつら。

ついに巢穴に辿りついた。

モグラにしてはでかいが、ボスにしては小さい。

小型モグラよりもやや大きいくらいだ。膝下より大きく股ほどまではないかない。

他のモグラよりも肌が黒く、尻尾が長く大きい。こちらに威嚇してくるが、襲いかかつては来ない。

これがボスか。

特殊な攻撃もしてこなさそうだな。

『やっぱり』

何がやっぱりなんだ？

……返答なし。

私と男達が前に出て距離を詰めていく。

そんな私たちを掻き分けて、オリヒオが前に出た。

なんだ、奴が自ら倒したのであれば、譲ってやろう。

ここまでの一番の功績は、シユウを除けば奴にあるのだから。

ボスの直前までいって、オリヒオはくるりとこちらに向き直る。

「つい最近なんだがよお。おいらのカミさんが、おめでたってことがわかったんだ」

いきなり何を言い出すのかわからず唾然としていたが、ひとまずおめでとうと言っておく。

「ありがとなつ。それでよう、産まれてくる子には元気に育ってもらいてえ。……でも、今のままじゃたぶん無理だろう」

なぜ、今その話をするのかは知らないが、あの食事量じゃ難しいかもな。

食は細いと聞いたが、それにしても環境が良くないことは確かだ。私のせいで減った分に関しては話を付けにいくぞ。

増量も視野に入れておく。

『それ、間違いなく話し合いじゃなくて、殺し合いになるからね』
是非もない。

「おいらあ、別に殺し合いをしたいんじゃないやねえんだ」
よくわからん。

結局ボスはいつ倒すんだ？

『出たよ。空気読めないどころか、行間すら読めない発言』
は、どういうこと？

オリヒオが親指をボスに向ける。
「やつこさん、おめでたしてんだ」

え？

私は彼の後ろのボスを見る。

相変わらずこちらを威嚇してくる。

そのお腹に注目する。なんとなく膨らんでいるような、膨らんでな

いような……よくわからない。

『妊娠してるよ。父親はいないね。死んだのかな。逃げなかったのは、身重で逃げられなかったんだね。で、倒すの?』

私は固まった。

「でもよお、オリヒオ。こいつを倒さねえと俺たちの生活が立ちゆかねえだろ」

男達の中でも年長者が意見を述べた。

それもそうだ。

モンスターと割切つて倒してしまえばいい。

喉元まで出かかった言葉は、声にすることができない。

「それにモンスターだぜ。倒しても時間が経てば復活するだろ」

他の男も発言する。

その通りだ。

相手はモンスターだ。

倒せば復活する、そうだろシユウ?

『母体は復活するだろうね』

言外にお腹の命はわからないと伝えてくる。

男達は例外なく固まっている。

全員が所帯持ちで、オリヒオ以外は子供もいると聞く。

おもむろにオリヒオがボスに向き直った。

彼は腰に下げた巾着から、昼ご飯を出してボスに差し出した。

「おめえも必死で生きてんだよな。少ない種族で、体もちっさくて弱いのに、産まれてくる子供のためにがんばってよお。やっぱ母つてのはつええもんだなあ」

オリヒオは自身のご飯をボスの口元に置き、こちらに再度むき直る。

「おいらに、こいつは倒せねえ。俺は産まれてくる子供を、カミさんと一緒に笑って抱き上げてえんだ。奪われたなら怒りもするし、悲しみもするさ。でも、余所から奪って笑顔でい続けるこたあ、おいらにはできねえ」

オリヒオは方向性を示した。

このチームは彼をリーダーとしている。
彼が示した方向へとメンバーは進んでいくのだ。

『……さて、往く道は決したな』

ボスはいなかった。

そういうことにして、私たちはボスの前から立ち去った。

僻地に帰れば、状況はさらに悪化している。

食事はさらに減り、ボスを見つけられなかったと聞いて住人の不安は募るばかりだ。

そんな不安や不満もオリヒオは笑って受け流す。

夜になり、ぼんやり月を見上げていればオリヒオがやってきた。

明日になったらここを出る。

開口一番、私はオリヒオに告げた。

ダンジョンでも言ったが、白装束の奴らと話をつけてくる。

「メルっち、そいつあやめてくれねえか」

なぜだ？

このままだと食事は減り、産まれてくる子にも影響が出るだろう。

それどころか産まれることすら危うい事態になる。

『少なくとも今は止めた方がいいね。メル姐さんが物理的に話をつけても、あいつらが強者で、オリヒオ達が弱者という関係に変化がないからだよ。いつまで経っても命を握られ続ける』

それならあいつらが倒れるまで徹底的に叩けば良い。

『相手の数が圧倒的だからね。戦うなら壊滅覚悟でやらないと駄目だよ。勝ったけどメル姐さんしか生き残りませんでしたっつのがオチだね』

「シユウスケの言うとおりだぜ。生き残らなきゃ意味がねえんだ」

それはそうだが……。

正面から戦うのが無理なら逃げればいいじゃないか。

安全な場所にみんなで逃げてそこで暮らせば良い。

「そうできりゃあいいんだなあ」

オリヒオは楽しげに笑っている。

遠回しに無理だと言われているようだ。

「子供や年寄りもいる。遠くには動けねえ」

『背後にポルタ溪谷があるから、飛び越えて行くこともできない』
逃げることは難しいのか。

「仮に動けても、逃げる場所がねえんだ。おいらたちや地底人だからよ。どこも受け入れてくれねえ。おいらたちにやあ、ここしかねえ。ここだけなんだ」

しかし、ここで暮らしていてもジリ貧なんだろう。

白装束の奴らに命を握られて、ダンジョンに潜りながら命を繋いでいくしかない。

戦っても駄目だし、逃げる場所もないと来た。

何か……、何か良い案はないのか？

『あるよ』

シユウよ。

何か良い案が……。

『だから、あるって』

あるの!?

今回はお前でもさすがに厳しいと思ってたんだけど、そんな軽く言われるとびっくりだ。

「シユウスケ、ほんとにそんな案があるって言ってるのかい？」

『うん。あるよ』

こいつ、言い切ったぞ。

『単純だよ。近くに逃げる場所がないんなら——受け入れてくれる場所がないんなら——自分たちで作ればいいんだ。政府の目が届かない、地中の奥深くにね』

シユウは語る。

オリヒオは目を輝かせる。

私はわかったような顔をして頷く。

『ただし全てはリーダーが導けるかにかかっている。もちろんメル姐さんにも働いてもらうし、ある程度の出費はしてもらう』

今宵、かつてないほどのダンジョン攻略、否、ダンジョン改造計画

が示された。

翌朝、私たちはさっそく動き出した。

今日のメンバーは昨日までと少し違っている。

実戦ではほぼ役に立たない魔法使いが五名ほど付き従う。

もちろん、いきなり連れて来られたので何をさせられるのかと怯えている。

「ここに、おいらたちの街を——国を作ろうぜ」

オリヒオは軽く語った。

周囲の人間は冗談だと受け取って笑っている。

オリヒオは笑わない。周囲も冗談ではないと感じ、笑いが消えた。

「このままあそこに住んでたんじゃジリ貧だ。かといって俺たちと都市の奴らとじゃ話し合いなんてできねえ。逃げるにしても受け入れられる先もねえ」

昨夜、シユウとした話を彼の言葉で説明する。

一通りの話をして周囲から当然の疑問が出てきた。

「ここに逃げる場所を作るって言っても、ダンジョンだろ。モンスターに襲われるに決まってる」

「水はあるだろうけど、食べる物がないぜ。地下で飢え死にだ」

「住めるところを作っても、都市の奴らが攻めてくる」

どれも当然の疑問だな。

で、どうすんの？

『まず住む場所。これは最下層にする』

えっ？

ボスみたいに浅いところじゃないのか。

『浅いと政府から容易に攻められる。ダンジョンを政府からの盾として利用する』

でも最下層ってモンスターからの攻撃が一番苛烈なところじゃないか。

そんなところにどうやって住むというんだ。

『このダンジョンは他のダンジョンであまり見られない特徴があつ

た』

うむ。

ボスが小さくて弱そうだったな。

『違うよ……。最下層で二種族が争ってた』

おお、そうだったそうだった。

こちら側の断崖とあちら側の断崖との種族間で戦ってたな。

『その戦闘地点のど真ん中一带に住む場所を作る』

ど真ん中に？

『片側だけに作ると、二種族間のバランスが崩れる。それは避けたい。両側それぞれに作ると、移動に制限がかかって将来的にオリヒオ達が二種族に分かれかねない。そんなわけで真ん中が良いだろうね』

それだと両方のモンスターから狙われないか？

『対策はある。百聞は一見に如かず、百見は一考に如かず、百考は以下略。実際にやってみよう』

そんな訳で、昨日に引き続き最下層まで降りてきた。

昨日拾わなかったドロップアイテムがまだそのまま残っている。

『いやいや、小型はいくつか復活してるよ。大型はやっぱ遅いな』

オリヒオらと一緒に最下層を歩き回る。

昨日は駆け抜けてしまったので、詳細な地形が把握できなかったらしい。

『よし、ここだな。さっそく整地に移ろう』

オリヒオ達を背後に立たせる。

『ゲロゴンブレス用意。左側の大型モグラを狙って。もうちよい右、気持ち上……。ストップ。発射！』

刀身が赤く光り、目の前から膨大な熱量が放出された。

断崖の割れ目に沿って、半月型の窪みが一直線に延びる。

そこにいたモンスターは一瞬でアイテム結晶となってしまった。

オリヒオは、はしゃいでいるが他の奴らはあまりの光景に唾然としている。

『じゃあ、次は右に移動して撃とう』

シユウと私は周囲の反応に構わず、淡々と作業を進めていく。

今度は場所を右に移動して、先ほどの溝に並行する形でゲロゴンブレスを撃った。

これを五回ほど繰り返すと、長方形の更地が完成する。

『うん。こんなもんでいいや。次は市壁だ。魔法使いの人たちに頼もう』

後ろで怯えていた魔法使い達を呼び、シユウの後に続き魔法を唱えていく。

私とオリヒオらは周囲からモンスターが来ないか警戒している。

さきほどの光景を見ていたのかモグラは出てこない。

魔法により長方形の外周に、私の身長の数倍以上はある壁が築かれていく。

なるほどな、この中にいろいろ作っていくわけだ。

「なあ、シユウスケ。壁を作ってもモグラ相手じゃ意味がねえんじやねえかい?」

確かにそうだな。

壁に普通に穴を開けてくるだろう。

『その壁をツルハシで叩いてみればわかるよ』

言われた通り、オリヒオが壁をツルハシで叩く。

堅い音が響き渡り、ツルハシの先が折れた。

一方、壁には傷一つ付いていない。

『ね。特殊なコーティングを織り込んでるから問題ない』

「こいつあすげえや……。下から潜られたらどうすんだ?」

確かにそうだ。

相手はモグラ型モンスターである。

壁を飛び越えてはこないだろうが、潜り込むことはできるのだ。

『観察したところだと、こいつらは横や上方向に大きく掘り進むけど、下方方向にはあまり深く掘らない。それでしょ?』

どうやらオリヒオは、そのことを知っていたようで頷いている。

通常は壁の外側を高くするようだが、今回は壁の内側を高くすることで、潜って攻められることを防ぐらしい。

もちろん地下にもいろいろ仕掛けを張り巡らせるとシユウは話す。

私の持っていた薬を魔法使いに分け与えて、とうとう外壁が完成した。

外壁は立派だが内側には殺風景な光景が広がって物寂しい。

『とりあえずはこれで外敵からの侵入を防げるね』

それはそうだな。

完全に囲んでしまつて、私たちも出られないけどな。

『それは階段を作ればいいだけ。さてさて、次は食べ物対策だ。メル姐さん、「狂芋」と「キミハコママメ」、「出会い去り麦」をあるだけ出して』

袋の中から言われた三つの結晶をあさる。

それぞれをシュウの言うとおりで長方形の三隅辺りにそれぞれ蒔く。

その後、初めて聞く魔法をかけていた。

『よし、今日のラストだ。「どこでも生え草」を出して』

……えっ、あれを使うのか。

そもそも持ってたっけ？

『間違いなくあるよ。こんなときのためにちゃんと取っておいた』
どんなときのためなのだろうか。

探してみると確かにあった。

で、これはどこに？

『壁に登つて外側に蒔く。絶対に内側に蒔かないでね。いいか。絶対だぞ、絶対内側に蒔くんじゃないぞ。わかってるか？』

うるさいな、わかつてるよ。

言われた通り、外側に蒔いていく。

『なんで内側に蒔かないの？』

なんなのお前？

けつきよく外側だけ蒔いて一日目は終わりになった。

翌日は雨だった。

夜から降り始めた雨が、今も続いている。

『うんうん。予想通り降ってくれた』

それで今日はどうするんだ。

『住居の作成と、順調にいけば戦闘ゾーンの構築かな』

いよいよ殺風景な光景とお別れか。

お別れと言つてもたつたの一日だけだったが。

最下層まで来ると、そこは昨日とは違う景気が広がっている。

作つたばかりの壁があるのはもちろんだが、地面が茶色一色ではなかった。

「おいおい、なんだこりゃあ！ 草が生い茂ってるじゃねえか！」

なんとなく予想してたが、これはどこでも生え草だな。

水さえ与えればあつという間に生長して辺りを覆う困つた雑草だ。

見つけたら速攻で完膚無きまでに対処しないと、他の植物や作物を駆逐していく危険な代物でもある。

こいつ専用の毒魔法まで考案されているぐらいだからな。

『明らかな害草だけど、良いところもある。メル姐さんでも知つてるとおり、特有の毒魔法が極めて有効だから管理が楽。なによりも……』

「なんかひでえ臭いだな」

そう、この雑草は独特の臭いがある。

私は嫌いじゃないのだが、苦手な人はとことん嫌う臭いだ。

『この臭いが、一部のモンスターに有効なんだよね。良かった、このモグラにも効くみたいだ』

周囲を見てみると、モグラの姿は見えどもこちらに近寄ろうとしない。

そんなモグラたちをよそ目に、外壁の外周に作つた階段を上る。

「おおっ！」

「す、すげえ！」

「なんだこりゃあ！」

内側の光景を目にし、男達は感嘆を漏らさずにはいられない。

私も口が開きっぱなしだ。

『こっちは微妙だなあ。日光が当たらないから仕方ないか』

いやいやいや！

なんだこれ！ どうなってるの!?

長方形の三隅に、三種三様の植物が茂っていた。

さすがにどこでも生え草ほどではないが、十分に伸びているではないか。

『もともと生長が速い品種だし、促進魔法もかけたからね。これでちゃんと育つんだからボスの特殊ドロップ品は伊達じゃないってことだ』

そう言えば、けっこう手に入れるのが大変だった気がする。

どれも名前をはつきりと覚えてるくらいだし。

ところで、これはもう食べても大丈夫なの？

『まだまだ。毎日魔法をかけてもあと二日はいる。あとは生え替わるところに場所を移していけば、連作障害も回避できるでしょう』

なんだか、予想以上にすごいことになっている。

それにお前、なんか手慣れてないか？

『ん、まあね。いろいろやってるから』

どうせまたげえむとかいうやつだろうな。

それでも構わない。この結果が全てだ。

『水路はこう。下水はあそこを通して、処理場はここ。住居はあそこに入れて……。よし、まずは――』

頭の中にあるものと、実際の土地との摺り合わせが終わったようだし、さっそくシユウから指示が飛んできると。

『おおれら、今日も汗かいてえ〜』

みんなで歌いながらも、着実に作業は進んでいく。

シユウが指示し、オリヒオが率先して動き、他の奴らも彼を導に行動する。

道が走り、家が建ち、農地の区画も整備され、一つずつ彼らの暮らす形が出来てきてきていた。

二日目が終わると、地下には街ができていた。

あつという間に三日目だ。

『今日は、昨日でできなかった戦闘ゾーンの作成と重要ファクターの確保だね』

昨日も思ってたけど何それ？

『ダンジョンを政府からの盾にする以上、ダンジョンが存続しないと駄目でしょ』

まあ、それはそうだな。

今のままじゃまずいのか？

『このダンジョンは二種族の対立がメインの形だからね。中間に街を作り、草も生やしたんで、対立が減ってダンジョン自体がなくなる可能性は大いにある』

それだと困るな。

ダンジョンがなくなってしまうのは私としても頂けない。

『でしょう。だから、彼らに戦う場所を整えてあげるって寸法だよ』

はーん、面倒なことまで考えるものだなあ。

そういう訳で街の外側に、外壁に囲まれた領域を新たに作った。

ただし、街とは違ってこちらは入口と出口を設けている。

入口は片方の断崖に、出口はもう片側の断崖に通す。

外壁に囲まれた領域から雑草を除去して完成だ。

これを街を挟むように二カ所建てた。

結果はすぐさま明らかになった。

作られた闘技場にそれぞれの断崖からモンスターが出てきて戦いあっている。

『ふむふむ。もっと広げないと駄目か。入口の数も調整しないと駄目そうだな』

さっそく魔法使いを呼んで、戦場の大きさを整備し、入口の数を増やした。

これで戦闘ゾーンは確保できたことになる。

そうするとあとは何だっけ。

『重要ファクターの確保だけど、これは後回しにしよう。まずは防衛力を高めないと駄目だ』

防衛力って具体的には何するの？

『まず通路で崖に出ているところを塞ぐ。対人用のトラップもガンガン仕掛けていく。屋根も作らないと駄目だし、外壁に細工もする』

そこまでする必要ある？

街としての体裁はすでに整ってるだろ。

『メル姐さんは勘違いしてる。俺たちが作ってるのは街じゃない——国だ。誰かに守ってもらう場所じゃなく、自らが守りぬく場所なんだ』

そうなのか？

まあ、政府に攻められてあつという間になくなってても悲しいからな。

『そうだね。領土は作りつつある。あとは主権と国民。次は主権——最低限見逃されるための物理的な実力を付けるとしよう』

そう言つて、オリヒオら数名と魔法使い一人を呼ぶ。

僻地と反対側の断崖に登り、地上まで到着すると、まず入口を堅く塞いだ。

来た道に戻りつつ、いくつか道を崩す。また、上層で断崖に面する部分も閉じた。

新しく穴を掘り、わざと天井や床を崩れやすく細工もしていく。

途中で魔法使いに魔法を仕込ませていた。

こうして最下層まで戻ってくる。

『片側はこれでいい』

こうして三日目の作業を終えた。

この夜にオリヒオらと僻地の重要人物を集めての話し合いが行われた。

議題はもちろん、現在絶賛建設中の地下国家への移住である。

ここで反対されたらどうなるのだろうか。

作つて満足で終わり……？

議論は白熱した。

出うる疑問、疑念への答えはすでにシユウから示されている。

オリヒオが沸き上がる質問や不安に、一つずつ答えていくと徐々に場は移住の方へと話が進む。途中から話がつまらなくなり、眠たくなつたので私は寝た。

結論として、明日は彼らのうち数人を建設現場へ案内することで最

終的な判断を下すこととなった。

四日目である。

予定通り僻地の重要人物を地下都市へ案内した。

訝しんでいた人たちも、そこにある建造物を見て、驚きを隠しきれない様子だ。

ダンジョンの奥深くに外壁がそびえ、植物が生り、建物が並ぶ。

さらに建物の厨房で、取れたての作物が振る舞われる。

「うまいな……………」

芋に、豆と極めて質素な食事だが、全員が目を閉じ噛み締めながら食べている。

味も良く、少量でも栄養値が高いとシユウは話していた。

おかわりまで十二分にある。

しかし、誰もおかわりは食べなかった。

上にいる人たちにも食べさせてやりたいということだ。

いちいち上まで送るのが面倒なので、作業を終えてから彼ら連れ帰ることになった。

上からの攻撃に耐えられるだけの屋根を終日かけて建設し帰途に就く。

夜になってまたしても話し合いだ。

実際に見て、体験した人物の意見は強い。

それが移住に反対していた人間の口から出るともなればひとしおである。

途中から寝ていたが、どうも移住することに決まったらしい。

五日目。

さっそく今日から三日ほどかけて人を移していくようだ。

本当は一気に移したいが、それは難しいらしい。

まずは女、子供、老人を運ぶ。

移動は朝早くで、靄も出ており、政府もさほど関心がないためばれ

る可能性は低い。

それでも注意深く、かつ迅速に、それでいて繊細に護衛する。

あれ、どこに行くんだ？

私たちが今まで通ってきた道ではないぞ。

『ほんつとうに話を聞いてないね。ダンジョンの下層でこの人数の護衛とかできっこないし、何往復もできないでしょ。時間がかかりすぎるよ』

そりやそうだ。

それでこれはどこに向かっているの？

『跨幻橋。パンタシアだよ』

穴の浅いところから、壁を潜って跨幻橋まで行く。

すでに道は出来ていたようで、あつという間に壁の内側に出た。

跨幻橋から魔法動力のゴンドラで住人を下ろしていく作戦だそう
な。

まったく気がつかなかったが、例の建造中の国家は跨幻橋の真下に
あつたようだ。

曇った空模様に味方され、想定通りの人員を無事に地下国家へ下ろ
すことができた。

さて、今日の作業はなんだっただろうか？

『こっち側の道を塞いでいく』

ああ、そうだったな。

顔なじみになってしまったメンバーで、ゴンドラに乗る。

ゆるゆると下りていくとシュウから声がかかった。

『上』

釣られて見ると、ずんぐりとした頭が見えた。

幻竜ヌルが短い手を振ってくる。

あいつ、今回は何も言つてこなかったな。

すぐに地下国家の屋根に到着した。

壁より、中より、なによりも時間をかけて作ったのがこの天井部分
だ。

まだ仕掛けていないが、全員が移住したらここに何かすごい物を仕

込むと自称宰相閣下は話していた。

入口から逆行しつつ、道にトラップを仕掛けていく。

道もどんどん塞いでしまい、もうここを通ることはないという意志が伝わってくる。

街に戻ると、確かに住人が減ったのだと感じた。

オリヒオ達にかけられる声は減り、周囲から聞こえることも減る。

そうこうして六日目だ。

今日も空は曇っており、住民の移送に支障はない。

滞りなく全員を下に移すことができた。

なんだかつまらなくなってきた。

最初はダンジョンとも関わっていたが、どんどんダンジョンから遠ざかっていく。

すでに土で埋められてしまったダンジョンは攻略もままならない。

で、今日は何すんの？

もうほとんどやることなんて残ってないだろ。

当初ほどのやる気はもうないが、定例になってきていたのでとりあえず聞いておく。

『後回しにした、重要ファクターの確保という課題がある』

そういや数日前に何か言ってたな。

けつきよくその重要ファクターとやらは何なんだ？

『ダンジョンの存続に関わる話だよ』

おつ、いいじゃん。

そういう話を待ってたんだよ。

『ダンジョンがダンジョンとして存在するために、二種族間の対立構造は残した』

うむ。

人工の闘技場まで作ったからな。

『……残したんだけど、最下層に都市を造った分だけ、二種族が戦う場所は間違いなく減る』

そうかもな。

『余力が出来たモグラたちはどこに向かうかと言えば、上か横しかない』

うむ、そうかもしれないな。

『さて、モンスターが上に行けば行くほど困る奴がいる』

政府側の人間だろ。

モンスターが邪魔で進んで来られない。良いことじゃないか。

『それもあるけど、今回はそれじゃない。ボスだよ』

……あつ。

『そう。小さくて弱いボスはただでさえ地上寸前まで追い詰められている。そして、さらに住処を追われる。こうなると地上に出るか、他のモンスターに倒されるかのどちらかだ』

うむ。

身重だったから地上には出ないだろう。

『そうだね。でも、リポップしたところで住処を追われるのは間違いない。まずいのは、奴が住処をダンジョン外に求めたときだ』

どうなるんだ？

『ダンジョンはボスを失う。他のモグラがボスになればいいけど、最悪の場合——ボス不在でダンジョンが消滅だ』

それはまずい。

ダンジョンがなくなるとかあつてはならないことだ。

『地下国家としても、地上国家からの盾を失うからよろしくない』

まずい、まずいぞ。

どうすればいいんだ、シュウ。ダンジョンが消えてしまう

『ボスを地下国家へ移す。あの中でオリヒオ達と一緒に生活してもらう』

ボスと、人間とが、一緒に暮らす？

『そう』

あの建物の中で？

『そう』

できるのそんなこと？

『ボスと対峙したときにオリヒオはボスを倒さなかった。もしも倒し

てたなら、俺はこの道を示さなかった。圧政に耐えて死ぬか、戦かって死ぬかのどちらか選ぶのを黙って見てただろう』

でも、移すと言っても他の人たちに反対されるんじゃないか？

『間違いなく反対される。それでもやるしかない。それがリーダーに与えられた試練だ』

シユウとの話が終わり、シユウの話を伝えにオリヒオのもとへ足を運ぶ。

奴は彼の仲間達となにやら深刻そうな話をしていた。

「みんな！　ありがとなっ！」

ちょうど話が終わったところで私も近寄る。

「おっ！　メルつちにシユウスケ。ちょうど良いところに来てくれたなっ！」

どうやら話があるのは私だけではなかったようだ。

先手をオリヒオに譲る。

「実はよ……」

空気を読まずにずかすかなんでも発言する奴が躊躇っている。

私も少し覚悟を決めて彼の声に臨むこととした。

「あのボスを地下に下ろしてやることはできねえもんかなあ？　いや、無茶なことだとは思うんだ！　モンスターってのはわかってるんだぜ。人とモンスターが一緒に暮らすなんて幻想なのかもしれないねえ。それでも俺はあいつが人ごとには見えねえ。見捨てられねえんだ。なっ！　頼むっ！」

つば付き帽子を取って、私に頭を下げる。

他の奴らも同様に頭を下げる。

『ちゃんと、世話できるの？』

犬でも拾ってきた子供に声をかけるような感覚でシユウが聞き返す。

その声に刺々しきはなく優しげだ。

「大丈夫さっ！　オリヒオ様に任せとけっ！」

そうか、お前ならできるのかもしれないな。

シユウが言う試練をナチュラルに乗り越えていく、お前なら。

最後まで面倒見るんだぞ。

——などといったものの移動は大変だった。

まずオリヒオ以外は警戒される。

特に私はひどい。

状態異常で眠らせるという案も出たが、胎児への影響が不明と言うことで却下。

餌で釣ってみるが、動こうという気配がまるでない。

クツシヨンを敷いた板を持ってきて、そこにオリヒオが誘導し乗せた。

それを括り付けた縄で引きずっていくことになった。

縄を引くのは主に私である。

ちよつと乱暴に引くと、甲高い声で鳴き注文が多い。

それでもなんとか跨幻橋の上に連れて来て、そのまま一緒にゴンドラに乗って地下へ下りる。

地下国家のさらに地下に、穴を掘って入りボスモグラは落ち着いた。

今は豆と芋をもらって食べてるらしい。

これであらかたの仕事は終わったんじゃないか。

住人達は与えられた住まいへの引越すと、新しい世界の散策を楽しんでいる模様だ。

後は、残りの住人をここに移したらそれで終わりだろう。他は細かい仕事で私向きじゃない。

『いや。メル姐さんには最後に一つ、大きな仕事が残ってる』
ほう、まだ大きな仕事があるのか。

その最後の仕事というのはいったいなんなんだ？

「メルっち！ シュウスケ！ 大変だ！ でけえ問題があつた！」
シュウに聞くまでもない。

問題の方から私を訪ねてきたようだ。

地下国家の重要人物が一部屋に集まり首を捻っている。
どうやら本当に大きな問題のようだ。

で、何があったの？

「国の名前が決まらねえんだ」

それ、私の問題じゃないね。

『それはそうだけど、確かに名前は決めとかないとね』

うーん、モグラ国とかでいいんじゃない？

無論、超てきとーである。

しかし、書記役は私の発言を律儀に拾い、見えるところに大きく書き出した。

よく見れば、他の案もその上に数多く書かれている。

そんな大きく書かれると恥ずかしい……。

『メル姐さん、この国はダンジョンを巻き込んだ、世界初かもしれないなら、この国の名前がそのままダンジョンの名前に決まってしまうなら、この国の名前がそのままダンジョンの名前になり得る。それなのにそんなふざけた名前でもいいの？』

駄目だ！

一切の妥協も許さない！

ダンジョンの名となれば、全身全霊を込めて名付けて然るべきだ！

……そう言ったのがすでに数時間前である。

アイデアは出尽くして、みな腕を組み難しい顔をした黙っている。

それどころか何人かは腕組みしたまま寝ている。

この重要な会議で寝るとは何事か。

『なにも言うまい。行き詰まってることは確かだし、一度初心に戻ってみたら？』

初心とは？

『名は体を表すともいう、この国がどんな国になって欲しいかってこと』

うむ。

ダンジョンを敬い、愛する心を育み、攻略する喜びを常に忘れず――

『頼むからメル姐さんはもう黙ってて。オリヒオは？』

「……っ、おいらかっ？ すまねえ、よく聞いてなかった。何の話だっ

「何か？」

「あつ、寝てたなこいつ。」

「まあいい、ここがどんな国になって欲しいかだ。」

「おいら、国とか難しいことはわからねえ。産まれてくる子が、今日食べることの心配もなく、元気いっぱい育ててくれりゃそれでいいさ」

「そうだったな。」

「国を作るきっかけ——源泉はその思いだった。」

「その意思がボスを見逃し、シユウを動かし、住人を決意させたのだ。」

『キユナブラってのはどう？』

「キユナブラ？」

「どういう意味だ？」

『揺籃』

「揺籃って揺りかごのことだろ。」

「……ふむ、子供が安心して眠ることの出来る場と言いたい訳か。」

『それもある』

「他にどんな意味があるというのか」

「おつ、いいんじゃないか！ 短いし、意味もあるしそれにしようや！」

「オリヒオが賛成すると、他の人間も続々と賛成に投じる。」

「全員が異議なしと言うことで名前が決まった。」

「キユナブラ。」

「それが、今日からこの国——ひいてはダンジョンの名前だ。」

「七日目である。」

「この日は深夜から行動が開始された。」

「朝までに全住民の移すことを目標に、かかる時間を逆算すると未明からでは遅すぎたのだ。」

「移動はやや遅れているようだが想定範囲内のような。」

「すでに、手間のかかる子供や老人の大部分は移してしまっている。」

「灯りがなくとも、周囲が見渡せるほど夜目が利く特徴を存分に發揮」

している。

大集団が移動することで振動を生じ、それがモンスターを呼びよせた。

私やオリヒオらが倒すことで若干の遅れで済んでいる。

あと少しで全てが終わる——誰もがそう思っているに違いない。

しかし、私は知っている。問題というのは得てして最終段階で生じるものだ、と。

「大変だ！ 都市の奴らに気づかれたぞ！ すぐ側まで来てる！」
ほら来た。

最後の移住団を送る途中で、最後尾を見張っていた男が駆けてきた。

『馬鹿が……。こういう時は、叫ばず、責任者にだけ聞こえるよう報告するもんだ』

シユウが蔑んだ理由はすぐにわかった。

移住団がパニックに陥ったのだ。

彼らにとつてはどこまで続くのか分からない道。

背後からは彼らの恐れる都市の人間がどこまでか迫っている。

恐怖で動けなくなる者、我先にと逃げだそうとする者が出始めている。

「聞け、みんな!! 大丈夫だつ！ あとちよつとで目的地に到着する

！ 奴らがここに来るよりも俺たちが逃げる方が速い。……なあに、

心配すんなって。全部、このオリヒオ様に任せとけ」

ひとまずのパニックは落ち着いた。

しかし、ダンジョンの攻略組は知っている。

ここはまだ中間地点にも達していないということ。

『最初は大声で全員の意識を自分に向けさせて、徐々に音量を抑えてゆつくりと話していくことで精神を落ち着かせてる。これを無自覚にやるんだから、たまんねえなあ……。』

オリヒオは、先導をケルンという年配に任せ、自らは集団の流れに逆らい後ろへ走っていく。

『付いていって』

おう。

何をするのかは知らないけど、できることをやるだけだ。

オリヒオと共にダンジョンを逆行する。

ダンジョンの入口に辿りつくくと、外には無数の灯りが浮かんでい
る。

指向性を持った光が私たちを照らす。

「下がれメルっちー！」

彼がツルハシを構えていたことから何をするのか予想ができた。

ダンジョンの中に入ると同時に、オリヒオが入口天井をツルハシで
打つ。

入口は崩れた。

完全に埋まりこそしていないが、通る人数に制限はかかるだろう。

私とオリヒオでどんどん道を崩しながら後退する。

そこそこ崩せたもう大丈夫じゃないか。

『追っ手が減ってる』

おお！

やったな！

『静かに』

シユウに注意され大人しく黙る。

オリヒオも何やら目を閉じて耳を澄ませているようだ。

『まずいね』

「まじいなー！ 戻るぜ、メルっちー！」

オリヒオは焦りながら通路を駆け抜けていく。

いったいどうしたんだ？

追っ手が来ないのは、良いことじゃないのか？

『この入口が潰されたなら、別の入口から入れば良い』

まあ、それはそうだな。

でもそんな入口……、あつ。

『そう、俺たちにとっての出口が、奴らの新たな入口だ』

そうか。

あいつらは壁を潜らなくても、壁の脇についた扉から入ることがで

きるのか。

『このままじゃ、出入り口でお見合いだ』

急いで後を追うと、なんとか出入り口でのお見合いは回避されていた。

移送団がトンネルを抜ける方が、都市の奴らが来るよりも速かったのだ。

それでも、まだ住民の移送は終わっていない。

彼らをゴンドラでキュナブラまで下ろす必要がある。

二台で回しても三往復は必要だろう。

もちろん都市の奴らは待つてくれない。

すでに壁に備え付けられた扉から続々と入り込んでいる。

靄の中を漂う光が一つまた一つと増えていく。

対人戦における私のスタンスはやられる前にやれだ。

特に魔法使いは面倒だ。さっさと片付けるに限る。

「待つてくれ、メルっち！俺たちは殺し合いはしねえ！」
は？

何を言ってるんだ。

やらなきゃやられるんだぞ。

「俺たちは静かに暮らすことを選んだんだ！戦いに突き進む道じゃない。戦いから逃げる道だ！俺たちが手を出すわけにはいかねえ！」

それでも戦わなければならぬ時はあるだろう。

『まあ確かに揺りかごの天幕を血で染めるのは、赤子にも良い影響を及ぼさんでしような』

一人を軽く斬って睡眠を感染させれば問題ないだろう。

『揺りかごで眠るのは赤子だ、大人じゃない。それに彼らでもない』
さつきから何なの？

どうしろって言うんだ。

敵が目前に迫っているんだぞ。

『仲間を頼れば良い。せっかくパーティー登録したんだから』

そのオリヒオ達が戦わないって言うてるから困ってるんだろ。

『忘れてるみたいだけど、ここにはもう一人パーティーメンバーがいるでしょ。ほら、後ろのそいつだよ』

誰が、と振り返れば奴がいた。

低い背にずんぐりとした体格の靄の塊だ。

「ややや！　今回はあつという間の再会でしたな、メル殿！」

そうだった。

確かにこいつとはパーティー登録をした。

他の奴らは突如現れた小さな靄の人型に驚いている。

「メルうちの知り合いなのか？」

いちおうな。

それよりも説明する時間が惜しい。

『幻竜専用スキルとやらを期待してもいいのかな？』

そう言えば、なんかそんなのがあるとシユウがはしゃいでいた気がする。

その幻竜専用スキルで、この状況がなんとかできるのか？

「や！　熱い声援に応え、ご覧に入れましょう！」

幻竜ヌルの輪郭があやふやになっていく。

「此処よりは幻想。刹那の夢とて我に見られぬ幻なし、しかしてわれ刹那の夢幻に立つ！　汝等ここに入る者——一切の現実を捨てよ！

いざや語らん——幻想奇譚」

……………詠唱が終わったものの特に何も起こらない。

いや靄が深くなっているのか？　見えないだけです。に何か起きてきているのだろうか。

『特に何も起きてないと思うけど？　そもそも詠唱ですらなかったよ
うな』

シユウにもよくわかってないらしい。

幻竜ヌルが元のずんぐりした形に戻る。

さっきの詠唱はなんだったんだ？　何が起こっている？

「やや？　一度言ってみただけです！　特に意味も効果もあり
ません！」

私は幻竜を斬りつけた。

しかし、ただの靄のようでそのまますり抜ける。
お前、ちよつといい加減にしろよ。

状況わかってる？

「ややや！ 落ち着いて！ 落ち着いてください、メル殿！ ほら！
彼らも何か来るのではないかと警戒して止まっております！」

確かに先ほどの詠唱らしきものに、警戒したのか敵の勢いが止まった。

「や！ 今度はちゃんとやります！」

二度はないと思え。

「や！ 怖いですな！」

幻竜が指をあげる。

特に何も起こる様子はない。

ちよつと靄が動いたくらいか？

『いや、これは……なるほどね』

靄の奥に見える兵士が何かを見上げている。

「ば、化け物」

「なん、だ、これは……」

私には何も見えない。

見上げてても靄があるだけだ。

「やや！ メル殿、灰妨の炎を出してもらってもいいですかな！」
は？

どういうこと？

『メル姐さん、俺が示す方向にゲロゴンブレスを撃つて。まずは扉がある方向の左上』

シユウの指示に従いゲロゴンブレスを発射する。

「う、うわあああああああ！」

「撤退！ 撤退だ！ 踏みつぶされるぞ」

兵士達はすごい勢いで逃げていく。

なにこれ？ ゲロゴンブレスは確かにすごいが反応がおかしい。

『次は壁の上方、尖った雲の下辺りを狙って』

続けて発射すれば、兵士達はさらに大わらわで逃げていく。

『兵士達には灰竜が見えてるね』

ゲロゴンが？

どういうことだ？

そんなのがどこにいるんだ？

『こつちからは霧の中だからわからないけど、霧の濃淡を操って、あつちからはそう見えるようにしてるね。もちろん、ただの霧だから踏まれても痛くないし、火も吐かない』

なんか、地味だな。

要するに張りぼてってことだろ。

「やー！ 幻想の中ならもつといういろと出来るのですがな！ ここでこんなもんでしよう！ パンタシアにこうご期待！」

いったいいつになることやら。

『良い使い方だと思うよ。少なくとも注文に適ってる。戦うことなく逃げてくれた訳だし、すぐに気づくだろうけど十分な時間稼ぎができた』

「ややや！ 千年練習した甲斐がありましたな！」

単位がやばい。

「おっしやあー！ なんかよくわからねえがすげえぞ、メルっち！ 俺たちで最後だ！ 行こうぜ！」

……うむ。

『メル姐さん』

覚えてるよ。

私に残された最後の大事な事がやってきたんだな。

昨日、シユウにこつそり教えられたことだ。

国の名前を付けるのが最後の仕事だと思っていたが違った。

「早く来てくれ！」

魔法使いが叫ぶ。

オリヒオも私を眺めていた。

早く言わなければならぬが、なかなか言葉に出ない。

「メルっち。シユウスケ」

オリヒオに名前を呼ばれた。

「おいらたちだけじゃ、こんなすげえことはできなかった」
……そうだな。

「みんなメルつちとシユウスケのおかげだ。ありがとな」
『……………そっか』

お前、まさか——。

「ああ、聞こえてたんだ。最後の大事なやつ」

……そうか、きちんと言えなくてすまん。

「気にしねえでくれ！ むしろ気づかなかったおいらがわりいんだ。
確かに誰かがやらなきゃならねえ。本当なら俺の——」

『駄目。オリヒオはキュナブラでリーダーとしての役割を果たさない
といけない』

そうだな。

キュナブラは生まれたての赤ん坊のような国だ。

優秀なリーダーが——父親が必要だろう。国だけじゃなくて嫁さ
んにもな。

普段はシユウに指示されてるが、別の人間に指示されて動くつての
もなかなか新鮮だった。

パーティー攻略も悪くない、ほんと久々にそう思えたんだ。

だからな。最後の指示を与えてくれ、リーダー。

「シユウスケ。作戦の目的をもつかい教えちゃくれねえか」

オリヒオが自称参謀に作戦の目的を尋ねる。

『屋根の魔法設備の稼働確認と、地上国家からの攻撃手段の削減』

シユウは確かに伝えた。

オリヒオはこくりと一回頷く。

「おいらたちはキュナブラに下りて、屋根のカウンター設備を起動す
る」

そうだ。

屋根の魔法設備がまだ発動されていない。

きちんと作動するのかを確認しなければならぬ。

「メルつちは、起動までここで待機」

私はここでひたすら時間稼ぎだ。

こっちは幻竜ヌルも手伝わってくれるだろう。

「や！ 助太刀致しましょう！ ですが、もうあまり保ちませんぞ！ やりすぎると薄くなりましてな！」

ヌルはやははと笑いながら靄を操り、敵を追い払っている。

「メルつちとシユウスケは、屋根の魔法を確認次第——橋を壊してくれ」

わかった。任せておけ。

跨幻橋がある限り、橋の上からの攻撃が続く。

私たちがやったように橋からキユナブラの直上に人が下りることもできてしまう。

だから、橋は破壊する。同時に屋根の耐久性テストも行う。

「よっしやみんな！ それじゃあ作戦開始だ」

オリヒオたちの乗ったゴンドラがゆっくりと下りていく。

彼は帽子を脱ぎ、頭を下げた。他のやつらも同様だ。

私は右手をぶらぶらさせて別れを告げた。

「やややあ……。もう、限界……」

しばらくすると幻竜ヌルの声もしよぼくれて、靄も薄くなってしまった。

敵達もその様子を見て、徐々にこちらへと足を向ける。

『屋根のカウンターマジックの起動を確認』

分かった。

じゃあやるとしよう。

止まれ！

それ以上は進むんじゃない！

黙ってやってしまってもいいんだが、私もリーダーの示したやり方に従う。

声を張り上げ、橋に進んで来ようとしていた敵達の足を止めた。

お前等の攻撃はオリヒオ達には届かん。

シユウを逆手に持ち、両足を肩幅に開く。

そして、シユウを大きく振り上げたのち、全力で跨幻橋に突き刺した。

『ここはっ！ 断じて、通さん！』

シユウの刀身は赤く光り始める。

一拍おいて跨幻橋の内部から熱線が走り、その真下——キュナブラの屋根に刺さる。

『カウンターマジックの正常な動作を確認』

橋にぽっかりと割った穴からシユウが確認する。

ゲロゴンブレスの直撃をくらっても屋根は問題ない。

なんでも黒竜と白竜のドロップアイテムを織り込んでいるらしい。

魔法は一切無効化して、物理的攻撃も時空が歪曲するとかなんだかんだ話していた。

『ゲロゴンブレスも防ぐんだ。並大抵の攻撃じゃどうしようもないだろうね。これを攻略する労力と、仮に攻略出来た際のリターンを考えれば、積極的にどうこうはされないうでしよう』

竜アイテム二つはもつたない気もしたが、大事にとっておくとう機会をなくす。

新たに生きる彼らへの、私からの良い餞別とでも考えておく。

さて、後は逃げるだけだな。

半分に折れた橋は、なにやらものすごい音を立てつつ傾いていく。橋に足をかけていた兵士も慌てて地上に戻る。

『メル姐さん。わかるね？』

シユウがご丁寧にも視界に色を付ける。

すぐに察して、赤く渦巻いた地点へと、傾きつつある橋を駆ける。

考えなしに歪みに突っ込んだら、洒落にならないんじゃないかなかったか？

『おおれら、今日もダンジョンでえ〜』

……急に歌い出したぞ。

『けえんを片手にてつきを斬る〜』

でも、悪くない。

ずっと作業中に歌っていたからすっかり覚えてしまった。

ここまではいろいろなパターンがあるが、ここからは全て同じなのだ。

元々は鉱山夫の歌らしいが、冒険者にも通ずる。

『あつしたのことなど、知らねえなあ〜』

明日のことは明日でどうにかなる。

歪みの先がまたしても石の中なのか、空の上か、水の中かはわからない。

私は私が今できることを全力でやるだけだ。

「おつれたちや、きょうをすすむだけえ〜」

そう。まずは今日を全力で生きねばなるまい。

今日を生き残ってこそその明日だ。

私は時空の歪みに飛び込んだ。

周囲に靄は広がれど、私の心は晴れ渡っていた。

蛇足18話 『メル、友達いないってよ』

アーウエルサの町にやってきた。

ここには初級ダンジョン——アミークス巖窟がある。

目的地と定めたセルメイ大聖林を前にしての最後のダンジョンだ。途中すれ違う人の様子からもわかっていったことだが、町の雰囲気が良い。

なんでも、この地域を治めるノトス辺境伯のやり方に反対している連中が暴れているとか。

いろいろと揉めているようだが、似たようなことは今までもたびたびあった。

ダンジョンの攻略にはさほど大きな問題にはならない。

町に着いてさっそくギルドに行くと、冒険者の姿はほとんど見えない。

冒険者の姿はほとんどいないというのに、ギルド職員は右に左にと忙しい様子だ。

受付まで進み、さっそくアミークス巖窟の情報を手に入れようとするが——。

「申し訳ありません。アミークス巖窟は現在立ち入りが制限されています」

そんな馬鹿な。

なぜだ？

「理由については、お話しすることができません」
ええ……。

いつになったら入れるの？

「現状では何とも言いかねます。ダンジョンの情報だけなら提供できますが、どうされますか？」

うーん。

聞くだけ聞いておこうかな。

「かしこまりました。冒険者証の提示をお願い致します」

はいはい、と冒険者証を提示する。

「……えっ」

受付嬢は冒険者証を見て、私の顔を見上げる。

またしても冒険者証に目が行く。

だいたいどこに行ってもそんな反応をされる。

仕方ないだろう。シユウも見た目だけなら初級って言うからな。

『初級……っ？』

何か言いたいことがあるようだな。

「し、失礼致しました。極限級冒険者、メル様ですね。大変申し訳ござ

いません。少々お待ち下さい」

受付嬢は一礼すると、早足で奥へ消えてしまう。

これはあれだ。嫌な予感がする。面倒ごとに違いない。

すぐに奥へと案内され、そこにはうつすら笑みを浮かべた男が立っていた。

椅子を勧められ、腰をかけるとその男——ギルド長は世間話を始める。

早く要件を言つて。

「それでは——」

うつすら浮かんでいた笑みが消える。どうやらここからが本題だな。

ギルド長としては珍しく好印象である。あからさまな笑みは見ていて気持ちが悪い。

「メル様は、アーウエルサの現状をご存じでしょうか？」

なんか暴れてる人たちがいるらしいな。

そんなことよりダンジョンに行きたいんだが。

「まさにその件でございます。ノトス伯の治政に反対する方々がフロンス盆地に集まっているのです。山々に囲まれた土地を根城にし、今も抵抗を続けています」

そうなんだ。

さっさと攻め込んでしまえばいいだろうに。

「山道は狭く急峻、攻めるには難しいでしょう。また、抵抗側は山賊を生業にしている方々が多く、土地に明るいということもあります」

そうかそうか、大変だな。

で、その話とダンジョンの話がどうつながるんだ。

「アミークスからフロンスマで行く道は大きく四つ。そのうち三つが先に述べた山道です」

『残りの一つがアミークス巖窟つて訳ね。ボス部屋有りのダンジョンだから、攻略人数も制限されるだろう。抜けたところでの待ち伏せが容易だね。すでに冒険者に被害が出てるのかな』

冒険者が、被害に？

「お察しの通りです。アミークス巖窟を攻略した冒険者が、フロンスで捕らえられました。これをうけて、アミークス巖窟に立入制限を設けた次第でございます。彼らは今も捕らわれております」

『ほおん、そういうことね』

そういうこと？

「さすがはメル様、そういうことでございます。ノトス伯にはこちらから紹介させて頂きますので、どうかよろしくお願い致します」

……どうということなの？

要するに私がダンジョンを攻略して、盆地側をかく乱してくれということだったらしい。

タイミングを合わせて、ノトス伯の兵達が一斉にフロンスを攻めるとか。

なんにせよダンジョンに潜れるというなら是非もない。

より詳細な話をするためにノトス伯の屋敷に赴いた。

縦よりも横に広い屋敷だ。周囲を塀で囲まれ、立派な門が開いて私を迎える。

「おお、メル殿。よくぞおいで下さった。お噂はこのような辺境でもよく聞こえております。かねてよりお目にかかりたいと思っております」

部屋に案内され、伯本人から厚い応対を受ける。

ノトス伯の見た目は若々しい。私よりもやや年上というくらいだ。

ギルド長から聞くところによれば、昨年、父の急逝に伴い爵位と領

地を継いだらしい。

「王都でも大層なご活躍をなさったと——」

「世間話をしている余裕があるの？ 早く対応を話しあったらどうかしら」

伯の隣に掛けていた女が話を遮った。

最初に紹介を受けていたが、伯の婚約者で、どこぞの公爵令嬢らしい。

ノトス伯が父の急逝の中、爵位と領地をつつがなく継げたのは彼女の影響が大きいと聞く。

鋭い目つきに、一文字に結ばれた口元、見るに性格はきつそうだ。先ほどの言からでも十分に窺える。

「状況はフアランギルド長から話があつたとおりだ。一刻も早い解決が求められている」

伯の顔には疲れが浮かんでいる。

どうやらこの状況にほぼ苦戦しているらしい。

父とは別のやり方を進めた結果、今回のような反乱に繋がった。

現状の膠着状態がこれ以上続けば領民の心は離れる。

一刻も早く状況を解決することが重要だ。

——シユウはそう話した。

「その通りですわ。これ以上、長引けば婚約の解消も有り得るでしょう」

婚約が解消されれば、ノトス伯はただの青年に戻るのだろうか。

はて？

アナトリー嬢の方からノトス伯に婚約を求めたと聞いていた。

その割に令嬢の対応は、ずいぶんと冷たいものだ。

『父親に命令されただけで、本人は乗り気じゃないのかな。まあ確かに、この程度の事態を解決できないような奴に嫁ぐのは考えもんだ』

人ごとなので好き勝手に言っている。

そんなこんなで話は進んでいった。

私はダンジョンを攻略した後、フランスに抜けて徹底的に荒らす。

その後、合図を出し伯の兵士が攻め込む段取りだ。

大枠はそうなのだが、問題が一つ。

「首謀者は、優先的に処理して下さるかしら」

アナトリー嬢のこの言が発端だ。

そもそも誰が首謀者かわからないんだが。

「ヴォラスという輩ですわ」

名前だけ聞いてもな。

顔がわからないとどうしようもない。

「あの——」

アナトリー嬢は、壁に掛けられている絵を指さした。

壁には三つの絵が掛けられている。

一枚は少年と壮年の男性、また婦人が描かれている家族写真。

別の一枚はノトスとアナトリー嬢が描かれていた。

彼女が示しているのは最後の一枚だろう。

「左に描かれている男です」

三枚目の絵には男性が二人描かれている。

右には今よりなお若いノトス伯が、そして彼の左隣には同い年くらいの青年が立つ。

二人の両手には、何やら大きな毛皮が抱かれていた。

「首謀者が生きていると反乱分子を勢いづけます。優先的にヴォラスの処理をよろしくお願いしますわね」

わかった。

ダンジョンでも、ボスが生きていれば雑魚にも影響がある。

盗賊やそれに類する集団を叩くときも、頭から潰すようシユウから教わっている。

「待ってくれ。ヴォラス——首謀者は……、生きたまま捕らえて頂けないだろうか？」

「なぜですか？ ああ、そうでしたわ。私が貴方と初めて出会ったときも彼と一緒にでしたわね。とても仲良くしていました。仲良きことは美しきかな。そう彼とは——お友達でしょうから」

伯はすぐさま否定した。

「違う。友達だからではない。ヴォラスが首謀者だとまだ確定したわ

「けじゃないからだ」

「捕らえた反乱分子から聞き出したでしょう。彼が首謀者で間違いありませんわ」

他にもアナトリー嬢は、ヴォラスが首謀者であることを家庭環境、動機、手口の点から突きつけていった。

「わかっている！ わかっているんだ。それでも……」

伯は荒げた声をすぐに落ち着かせる。

「彼から直接話を聞くべきだ」

そこで彼の主張は打ち止めになった。

令嬢は無慈悲にも、そんな彼を追い詰める。

「考えていますか？ その後のことを——」

伯は唇を噛み、拳を握りしめ俯く。

令嬢は彼を見ず、机に置かれたカップに手を伸ばす。

口のついたカップが再び机に戻るまで、伯から答は返ってこなかった。

その後つてどうなるの？

目線だけでシユウに尋ねる。

『見せしめに公開処刑か、獄中で殺すか。どっちにしろ処刑は免れんでしょうな。他の反乱分子も捕らえた後は、遅かれ早かれ殺すでしょう。お友達の首を伯自身に斬らせるよりは、見えないところで殺してやってくれていう、アナトリー嬢なりの優しさとも受け取れる』

それなら後で、こっそり私に言うべきだろう。

『そうだねえ。まどろっこしいなあ。直接言ってくればいいのに』
まっただだ。

珍しくシユウと意見が一致した。

「仕方ありません。首謀者は捕縛にしましょう」

最終的に、首謀者は生かして捕らえるということが決着がついた。「それでは冒険者様。美しい終わりになるよう、くれぐれもよろしく願いますわ」

アナトリー嬢が締め括って作戦会議は終了する。

なんだかんだあつたが、誰もいないダンジョンを攻略できるのだ。悠々と人目を気にすることもなく駆け回れる。素晴らしいことじゃないか。

アミークス巖窟は基本的に一本道だ。

前半はアーウェルサからボス部屋まで、後半はボス部屋からフロンスまでと考える。

伯が兵を揃える時間もあるから、前半はゆっくり攻略できるだろう。

後半は寄り道せずに一気に出口まで駆ける。

ダンジョンを出たらフロンスを徹底的に荒らして信号を打ち上げれば良い。

ヴォラスとかいう首謀者を捕らえてしまえば終わりだ。帰りはゆっくりダンジョン攻略できる。

『少なくともこの時のメルは、そう信じていたのだ……』

何だよその、できませんよみたいな言い方。

さて、攻略だがこれといって特筆すべきものがない。

そもそもただの通路だった洞窟がダンジョン化したものだ。

寄り道すべきところも少なければ、モンスターも初級なのでコウモリやクモ、イモリと弱い。

熊っぽいボスも一撃で光に消えてしまつて困つたものだ。

『ここからだよ。俺なら出たところにトラップを仕掛ける』

ボス部屋のフロンス側出口を前にしてシユウが注意を促す。

ここからはモンスター以外に、罠と人間の攻撃も注意が必要なのだ。

ありがたい。出口の道も同じだと物足りないと感じていた。

せいぜい楽しませてもらおうとしよう。

シユウの言うとおりボス部屋から出たところにトラップが仕掛けられていた。

足下にかけられた糸、地中に埋められた魔法式を避けながら、時に

は破壊して進む。

襲いかかって来た人間も返り討ちにする。

ダンジョンから出た後も同様だ。

人間と罠という道しるべがあるため迷わず進める。

フロンスの門もステルスで飛び越え、門番を状態異常で眠らせる。

『あそこか。これまたずいぶんとわかりやすい。一気に……いや、門から行くか』

門の上から集落の様子を俯瞰し、シユウはすぐに首謀者の所在を突き止めた。

すぐにそこへ向かうのかと思いきや、他の門を開くとのこと。

伯爵の兵が攻めやすくするためのようだ。

三カ所の門を力尽くで開き、壊す。

その頃にはフロンスの集落は騒ぎになっていた。

『メル姐さん、ゲロゴンブレスを上』

ゲロゴンブレスを上空に撃つ。

これを見れば伯爵の兵達は一挙に押し寄せる手はずだ。

『道の二カ所は一気に攻めるだろうね』

三カ所じゃないのか？

『逃げ道無くした鼠は猫を噛む。一つは逃げ道を残しておくもんだよ。山を越えてきたところを無理せず捕らえれば良い』

解説がなんだかつまらなさそうだ。

『まあね……。さて、首謀者のところへ向かうとしようか』

しかし、この騒ぎだ。

元の所にまだいるとは考えづらい。

どこかへ逃げてしまっているのではないだろうか

『いるよ、絶対にね』

何の根拠があるとは言わず、シユウは断言する。

そのまま先ほどの見つけていた首謀者の建物に向かう。

目的の人物はそこにいた。絵で見た人物をやや大きくしただけなのですぐにわかった。

ヴォラスだな。

男に声を掛ければ、周囲にいた衛兵が襲いかかってくる。兵の一人にシユウでかすり傷を負わせる。

それで全てが終わった。

睡眠の状態異常のみを付与し、それが周囲に感染していく。フロンス中で同様に繰り返す。

集落の中は横たわる人間で埋め尽くされてしまった。

『やれやれ、ここまでお膳立てされるとな。逃げ道の方も潰しとくか』私はフロンスを出て、山道へ逃げる者どもを眠らせていく。

そして、山道を越えてきた兵達に、反乱分子は夢を見たまま捕らえられることになった。

こうしてフロンスの反乱は作戦開始から一日も経たずに解決した。

『反乱はね』

えっ、これ以上なにかあるというんだ？

『それについては、アミークス巖窟の道すがら話をしようか』うむ、今回はダンジョン成分が足りないと思ってたんだ。

翌日になり、私はノトス伯の屋敷に来ている。

部屋には昨日と同じメンバーだ。

ノトス伯、アナトリー嬢、それに私。

今日は、ここからさらに一名追加の予定がある。

伯も令嬢も何一つ言葉を交わさない。重苦しい雰囲気の中で客を待つ。

室外から複数の足音が聞こえてくる。

足音が止まると、三度ほど扉がノックされる。

「連れて参りました」

「……入れ」

ようやくノトス伯が口を開いた。

武装された兵に引きずられるようにして、拘束された男が部屋に導かれる。

男は昨日捕らえられたヴォラスだった。

他の部屋から持ってきた、やや格の落ちる椅子に座らされている。

「お前達は下がれ」

「しかし……」

「下がれ」

ノトス伯は無言を言わせない。

兵達はそれでも抵抗があるようで、うろたえている。

「見てわかりませんか？ ここには、かの冒険者様がいます。何も問題はありません。そうでしょう？」

令嬢が私を見てくる。

ヴォラスが暴れたところで何ともならないので私は頷き返す。

兵達も昨日のフロンスの惨状をよく知っているようで、ようやく部屋から出て行った。

四人になったが、空気は重いままだ。

不思議なもので空気の重さというのは、人数が増えるほど軽くなる。

相手が一人で、何を話していいかわからず沈黙しているときが一番辛く重苦しい。

つまり、今は人数が増えてちよつと楽になった。

それでも重苦しいことに変わりはないのでちやちやつと話して欲しい。

「貴方が反乱の首謀者で間違いないかしら？」

最初に口を開いたのは、アナトリー嬢だった。

彼を生け捕りにした最大の理由を彼に直接尋ねた。

ヴォラスは黙秘する。

「反乱の意思を持つ輩をフロンスに集め、彼らを扇動したのは誰なの？」

「……俺だ」

低い声でヴォラスは肯定した。

「……なぜだ？」

ようやくノトス伯から出た言葉がこれだった。

「……お前のやり方が強硬すぎたんだ」

ヴォラスと伯の視線が交錯する。

「お前も、そう思っていたのか？」

「ああ、だからこそ今回のようなことになった」
伯が席を立つ。

「どうして？ どうして言ってくれなかった？」

「言ったらやり方を変えたのか？」

質問に質問を返す。

どこかの誰かみたいで好きになれない。

「お前が言ってくれたなら、私は――」

そう言つて伯は力なく椅子に腰を下ろす。

「話は終わったようね。もういいわ。連れて行きなさい」

令嬢が告げると、扉の外に控えていた兵士達が入ってきた。

黙々とヴオラスの腕を引いて立たせ、部屋の外へと連れ去つてしま
う。

足音は徐々に遠ざかっていった。

またしても沈黙だ。

一人減つたので、やっぱり重くなつたな。

私は席を立つて、掛けられた絵の前に立つ。

ああ、やっぱり。

この手に持っているのはボスのドロップアイテムだな。

伯爵とヴオラスが描かれた絵。

彼らの手には何かの毛皮が載せられていた。

昨日見たときはわからなかったが、ダンジョンを攻略した今ならわ
かる。

二人でダンジョンを突破した記念に描かせたんだろ。

違うか？

伯爵を見るが、何も返答をしてくれない。

仕方ないので私は続ける。

お前とあいつはパーティーであり、友達だったんだろ。

そういう奴は私にもいる。

『えっ？』

「はい？」

シユウどころか、令嬢まで疑問符を付けてきた。

なんだよ？

私にだって友達の一人や二人……二人はいないかもしれないかもしれんがいたぞ。

『ダウトオオ!!!』

シユウは叫び、令嬢も眉を寄せこちらを見て来る。

何なのこいつら。まあいいさ。

パーティーだったならもつと考えてやれ。

どうして奴が反乱の意思を持つ者をフロン스에集めたのかを。

フロン스는山に囲まれている。攻めづらいが同時に逃げることも出来ん。

もしも山を囲まれ、攻め入ることができさえすれば反乱分子を一網打尽にできる。

「……あつ」

伯爵は席を立つ。

手が何かを掴もうと力なく宙に彷徨っている。

それだけじゃない。考えろ。

どうして奴が、友達だったお前に相談をしなかったのかもだ。

相談してもお前はやり方を変えなかっただろう。その先は血みどろの掃討戦だ。

奴はそんな道をお前に歩んで欲しくなかった。だから、反乱者の先導に立ってお前の手を鈍らせた。

実際、お前は攻めあぐんでいたな。それは山道が堅牢だったからじゃない。

あそこにあいつがいたからなんだろう。

伯はついに顔を上げた。

彼の顔に迷いはない。そして、その足の行方にも――。

「どちらに行かれるおつもりですか？」

すでに扉に手をかけていた伯に、令嬢が声をかける。

「彼は反乱の煽動者です。自供もありました」

「確かに奴は反乱分子の指導者だ。それでも私は行かねばならない」
彼は振り返らずに答えた。

「犯罪者をかばい立てするつもりですか？」

「その通りだ。我が父祖の定めた法に照らせば奴は罪人だ。処刑は免れまい。だがそれは、私を変えてしまえば良いだけのこと」

伯は扉を押していく。

「どうしても行くというのなら、婚約も考え直さなければなりません。それがどういふことかわかりになりますかね？」

「破棄してくれて構わない。たとえ伯の位も領地をも手放そうとも、私は彼を失うわけにはいかない」

「なぜですか？」

「そこでようやく伯は私たちに振り返った。

「あいつが——ヴォラスが、私のかけがえのない友だからだ」

軽く微笑み、誇らしげに伯は部屋から出て行った。

颯爽と出て行った奴は良い。

問題は残された者にある。

数は二。

むろん私と令嬢だ。

空気がかつてないほどに重い。

伯爵が追うところまでは、シユウも予想していた。

しかし、その先を聞いてなかった。

どうすんの、この空気……。

何を言うかとびくびくしていたが、令嬢は窓際にすたすたと歩いて行く。

窓からはヴォラスが連行されていく馬車に、伯爵が走って止めようとしている光景が見えた。

令嬢は何も言わない。

ジツと窓の下に映る景色を見つめている。

『令嬢の肩に手を置いて』

え……、やだよ。

『答え合わせだよ。たぶん大丈夫だから』

答え合わせ？

それにたぶん付いてるじゃん。

『勘違いしてるようだけど、別に彼女は怒ってるわけじゃない。よく見てみなよ』

下を睨んでいたように見えたが違っている。

唇を噛み締め、どちらかという泣きそう表情だった。

『早く肩に手を置いて』

私は令嬢の肩に手を置く。

彼女は軽く振り返ったが、さほど気にとめない。

肩に載せた手を振り払うこともなく、眼下で繰り広げられる伯とヴォラスの話に見入っている。

『そして、こう言うんだ——「首謀者、捕まえた」ってね』

言われるがまま、考えることもなくシユウの言葉を繰り返す。

「気づいてくれていましたね。ご配慮に感謝致します」

令嬢は目線を動かさなのまま、私に礼を述べた。

……………いや、待て。

シユウは何て言った？ それで令嬢は何て返した？

どうということなの？

『首謀者はアナトリー嬢なんだ』

……………どうということ？

『反乱分子を煽動したのはヴォラスだけど、彼がそうするように仕向けたのがアナトリー嬢なんだ』

……………ええ？

『いろいろとおかしい点があった。彼女がヴォラスを首謀者って話したときに、動機と家族構成を語った』

語った？

『語ったよ。そこはいいんだ。でも、それに加えて手口まで彼女は話してた。そんなことはあそこで話す意味がないし、知ってることもそもそもおかしい。まるでメル姐さんに、私はヴォラスと通じてますって伝えているようだった。伯爵様は責め立てられて、思った通りに

気づかずいたみたいだけどね』

はあ、そうなんだ。

『で、実際にフロンズにたどり着いてみれば、罣が道しるべみたいになっているし、ヴォラスの位置も明白だった。彼女からメル姐さんがそっちに行くぞってヴォラスに伝えたんだろうね。彼も逃げなかったでしょ』

それは、そうだったな。

彼女が首謀者ってことは認めるとして何のために？

……ってそれはさつき私が言ったことなのか。

反乱分子を一網打尽にできることと、その反乱分子をできるだけ殺さないようにするためか。

『いや。それも多少はあるだろうけど一番の理由はそうじゃないと思うんだよね。別に反乱分子がいくら死のうとも困らないでしょう。でも、「美しい終わりになるよう」って、伯と仲良きヴォラスは殺すなよって遠回しに言ってた』

なんだそれ。

意味がわからない。

この令嬢はいったい何がしたいんだ？

『なんとなくわかるんだけど、本当にそうなのか確かめようかと思つてね』

どうすればいい？

『直接聞いてみればいい、話してくれるんじゃないかな』

言われたとおり聞いてみる。

どうしてこんな回りくどいことを？

わずかに口は開いたが、言葉が紡がれない。

「冒険者様には友達がいるんですわよね？」

ああ、いるぞ。

シユウが何か言いたげだ。

令嬢が喋るから黙っているんだろう。ずっと黙っておけば良い。

「私にはいませんわ」

ぼっちか？

「いいえ。一般的に友達と呼んで良い人ならいます」

「いないのに、いる？」

「どうということ？」

「彼女、あるいは彼らは『公爵の令嬢である私』の友人なのです。それはうわべだけの関係。お金と父の権力による関係。もしも私が公爵の娘でなくなれば、彼らとの関係は終わり。私自身、彼らのために何かをしてあげようと考えたことはありません。全て利害を前提にした関係。それは——私の思う友じゃありませんわ」

「まあ、そうかもしれないな。」

「初めて彼らと出会ったとき、私は知ってしまったのです。彼らこそが真の友。二人の間にあるものを友情と呼ぶのだ、と」

「彼らとは、門の側で、なぜか何か殴り合いに発展している伯爵とヴォラスのことだろう。」

「周囲の兵士が止めようとするが、伯爵は怒鳴り飛ばして兵を寄せ付けない。」

「私は富も、権力も、美貌も、人望も、知謀も兼ね備えていましたわ。やろうと思えばきつと、兄や姉を謀略で消し、王の妃となり国を牛耳ることも容易でしょう」

「なんかすごいこと言ってる。」

「……冒険者様は王とも懇意でしたわね。今の発言は聞かなかつたことにして頂きました？」

「聞かなかつたことは無理だが、忘れることは得意だぞ。」

「感謝しますわ。話を戻しましょう。私には全てを手に入れる自信と実力があります。ただ一つ——真に友と呼べる存在を除いて」

「そうなんですか。」

「わかりません。彼らがどうして殴り合っているのか——、どうして殴り合っているにもかかわらずあんなにも楽しそうなのか」

「確かにあの二人は楽しそうに殴り合ってるな。」

「私にもさっぱりわからん。」

「私にはそんな彼らが輝いて見えるのです！ 綺麗に磨かれた宝石よりも！ 夜空を彩る星々よりも！ 朝に滴る葉上の雫よりもなお！」

そうだろうか。

私には血まみれと痣だらけで倒れてるだけにしか見えないんだが……。

「冒険者様、教えて下さい。なぜ彼らはあんなにも眩しく見えるのでしょうか？」

彼らは互いに肩を寄せ合い起き上がった。

「私は、あそこには行くことができない。きっと彼らの輝きに当てられて消えてしまう」

彼女は眩しそうに手をかざした。

伯爵にはそれが手を振ったように見えたようで、力なく手を振り返してくる。

互いに支え合う彼らの顔は、しがらみを感じさせない自由な笑顔だった。

「冒険者様……、貴方には、本当にいるんですか？ 彼のためなら権力も顧みず、富も投げ捨て、命すら賭することのできる存在が——真に友と呼べる存在が！」

『いるんですかあ？』

泣きそうな顔で令嬢は振り返る。

私は笑ってしまふ。

そんな友達が私にいるかだつて？

馬鹿らしい、そんなもの決まっている。

「いない」

私にそんな友はいない。

これまでもいないし、これからもいない。

私の話はいったん置こう。

お前はそんな友を得ようとしてるんだろ。

友への意識は高すぎる気もするが、少なくとも憧れてることはわかった。

じやなきや、こんな辺境の伯爵と婚約はしないはずだ。

「そうですね。でも、私には……」
できるんじゃないか。

憧れがあるならできるはずだ。
私にはそんな存在への憧れはないからな。

「ああ、いけない！ 彼らが戻ってくる！ 私はどんな顔をして彼らを迎えればいいのかでしょう！」

どうやらいろいろと考えていたのは二人を仲直りさせるところまでだったようだ。

本気で慌てふためいてちよつとおもしろい。

『笑えば良いとおもうよ』

そうだ。

たまには良いことを言う。

笑って迎えてやればいいじゃないか。

「私、笑えていますか？」

あ、駄目だ。

完全に顔が引きつっている。

「駄目よ！ 彼らと会わせる顔がないわ！」

『ウケる』

ほんとにな。

さつきまでの冷静さが嘘みたいだ。

シユウの時もそうだが、普段余裕ぶってる奴が焦ってるのをみるとおもしろい。

そんなことを言ってる間に、二人が部屋へと近づいてきた。

「冒険者様！ 後は任せました！」

は？

アナトリーはサツと椅子に座り、両手を顔にやる。

顔を隠していると知らなければ、怒って俯いてるように見えなくもない。

部屋に足を引きずりながら伯とヴォラスが入ってくる。

どうも怒っていると判断されたようで、何も言わずに椅子に掛ける。

硬直状態だ。

どうしろって言うのか。

『今日は記念日ですな』

だから、なんだよ？

もつと具体的な解決案を出せ。

『じゃあ、こうしたらどう？』

シユウの提案を聞き、ちよつと考えて私は笑う。

三人が何いきなり笑ってるのかとこつちを見て来る。

「絵を描いてもらおう」

いきなりの提案に、三人はあつけに取られている。

二人の友人と二人の婚約者が合わさり三人になった記念日だ。

広い壁に絵が三枚だけつてのは寂しいだろう。

もう一枚くらいあつてもいい。

男共の服装はぼろぼろで、顔も痣だらけ。見る影もない。

令嬢も今の二人の姿を前にして、まともな顔はできないだろう。

そんなへんてこな顔姿をキャンバスに詰め込み、ここに飾っておく

といい。

良い思い出になるんじゃないか？

男二人は顔を合わせる。

特に反対はない。

問題は令嬢だが、こちらは顔を隠したまま震えている。

男共は怒っていると焦つたが、私にはわかる。

アナトリーは笑っていた。

「ふふつ、良いのではないかしら？ あなた方は今日のその顔を、これ

からも忘れずにいるべきですわ」

男共は、互いの顔のひどさに苦笑いが出ている。

そういうことを言っているのではないのだが、本人等が納得してい

るならいいだろう。

すぐに絵師を呼び、場はお開きになった。

「ありがとう。冒険者様」

婦人はすれ違いに呟いた。

その顔は何の感情が出ているのかよくわからない表情をしている。
あつという間に絵師が来て、下書きを描いてみせる。

絵の中にはぼろぼろの男二人に、複雑な表情の女性がこちらを見ている。

そしてなにより――、

私の姿がなかった。

蛇足19話「えん☆たる」

1. 扉の狭間にて

扉をくぐると、狭い通路がどこまでも続いていった。

『本棚?』

両サイドは壁でなく本棚だった。

天井が見えないほど高くまで、何十段、何百段と続いている。

本の背表紙は薄いものから分厚いもの、古くさいものから新しそうなものまで様々だ。

『奥に誰かいる』

私には見えない。

どこまでも本棚に挟まれた通路が続いている。

慎重に歩を進めていくと、私にもその存在が見えてきた。

私と対面する形で人らしきものが座っている。

黒い髪は長く、まつすぐにすらりと垂れている。

線は細いが、背筋が伸びており、やや圧力を感じられる。

手に何か棒みたいなのを握り、机に置かれた紙にひたすら何かを書き込んでいる。

彼、あるいは彼女の顔は軽く俯いたまま紙へとむかい、こちらを見ることもない。

『強そうだけど敵意は感じない。竜なのかな? 何か言ってきてる?』

いや。特に何も。

あの……作業をしているところ悪いんだが竜か?

話かけてみたが返答はない。

反応もされない。

『いや……』

シユウが呟くと同時に、動きが見られた。

ただし、動いたのは人間ではなく、紙面に書かれた文字だった。

紙面に書かれた黒い文字が浮かび上がり、私の前に移動した。

書かれた文字がぐにやぐにやと形を変える。

“史竜”

史竜？

“はい”

文字で肯定された。

ゲロ……じゃなくて、灰竜や黒竜、白竜の知り合い？

“はい”

答えてくれるのはいいんだが、簡潔すぎる。

あまりにも素っ気なさ過ぎて会話が続かない。

それで、ここでいったい何をしてるんだ？

“歴史の編纂”

……ああ、そう。

心が躍る展開を期待したのに、まったく期待できそうにない。

酒場のドアを開けたら、葬式していたくらいにテンションが下がった。

『どこの世界の歴史なのかな？』

私の世界じゃないか？

もしくは、そこに見える扉の先の世界か。

史竜の座る背中側の先に、私が入ってきたような扉がついていた。

経験上、あの扉の先にも世界が繋がっている可能性が高い。

それも別の法則が働く世界だ。

しかし、二つの世界の歴史の割には本が多い。

こういうことは聞いてみるにかぎる。

どこの世界の歴史だ？

“全て”

返ってきた返答はただそれのみ。

ちなみに返ってくるのは文字のみである。

目の前に座っている人物はこちらをいつこだにしない。

ひたすら机にむかって、手を動かしている。

『まさか、全世界の歴史がここにあるの？』

シユウの疑問を尋ねてみると答えは“はい”だけである。

話があまりにも遠大すぎて、私の許容量を超えてしまった。

「私の世界の歴史書が見てみたいんだが？
実はさほど興味ない。」

間をもたすために呟いただけだった。

“不可能”
なぜだ？

“第一に、言語が読めない。統一言語を利用しているため”
そうか。それは仕方ないな。

読めない悲しみは、ないに等しい。
めんどくさそうなのを読まずに済んだ、という安堵の気持ちが大き
いだろう。

“第二に、編纂中であるため”
まさに作業中だったのか。それは邪魔をしたな。

ちなみに今はどのあたりなんだ？

“貴方がここに来た日を起点として、四五三二年四二七日後”
そうか。

ずいぶんと先のことまで書いてるんだな。

『いやいやいや。待って。それはおかしい。歴史つてのは、ある物に
ついて、始点を発生もしくは発生前に置くとしても、終点は最長でも
今日になるでしょ。終点が未来に飛んでる』

そう言われればそうだな。

あまりにもどうでもいいから頭を素通りしてしまっていた。

どうやって未来のことがわかるんだ。

“史竜としての特性により把握”——らしい。

『……はあ、まあ、それはいいや。じゃあ、もう一つ。これに綴られる
のはいったい何の歴史？』

意図していることがよくわからなかったので、史竜にそのまま伝える。
る。

“対象世界の始まりから消滅まで”

人類史じゃないのかとシユウが呟いている。

さらに質疑応答を続けていたが、どうも必ずしも消滅まで書ききれ
るわけではないらしい。

何でも歴史の中でも重要なポイントがいくつかあって、そこを確定する要素がぶれることで未来がずれるので、直近にならないと未来が書けないものもあるとか。

『ある世界の始まりから終わりまでを一冊にまとめているのか』

それよりも私の世界のことを今書いてるって事は、最近何か変わったということなのか？

〃歴史の変更を確認。稀〃

変更？

さっきのとは何が違うの？

『さっきのは未来がまだ決まってる状態——未確定。今の状態は、一度決まった未来が別の物に変わった状態』

ふうん。

どっちも未来のことだからわからないだろ、と思ったが口にはしない。

稀って書かれるくらいだから滅多にないことはわかる。

何か大きなことがあったの？

〃四九八一年二七五日後に幻竜が消滅〃

『ああ、やっぱり……』

何がやっぱりなのだろうか。

幻竜って竜？ お前の知り合い？

〃はい。幻想特性の竜〃

シユウに問いかけたつもりだったが、史竜が問いに答えた。

幻想特性とやらがよくわからんが、誰かにやられたの？

〃はい。一一八名が荷担。その中心人物は——メル〃

えっ？ 私？

声に出してしまったが、ちよつと考えたら五千年も先の話だから私のはずがない。

同じ名前の人物というだけだ。シユウも特に何も言わないということはどういうことだろう。

それよりも、今までいつさい会話に反応せず、書き物をしてきた人物が私を見上げてきた。

“メルが貴方かどうかは判断不能”

返答が淡々としていてつらい。

前の人物も値踏みするように見て来るし。

今さらだけど喋れよ。何でいちいち文字で伝えてくるのか。

今もジツと私をみつめてくる。顔が中性的で男なのか女なのかわからない。

『俺にもわからない。人間じゃないかも』

人間じゃない？

———というか、こいつが史竜なんじゃないのか？

“それはキルハ。私の依り代。司書を務めてもらっている”

あら、そうなのか。

じゃあ、この文字を伝えてきている史竜本体はどこにいるんだ？

“ここ”

文字が動く。

ぐにやぐにや動いているその文字が史竜だと？

“はい、あるいは、いいえ。これは私の一部分です”

よく、わからんな。

『ここにある本全てに書かれた文字が史竜なんでしょう。全世界の歴史そのものと言ってしまってもいいかな』

途方もない話のようだ。

どうやら戦いにはなりそうにない。

ところでそっちの扉の世界はどうなの？

“「どうなの」とは何を対象にしているのか？”

入っても大丈夫？

“はい”

あっさりと許可が下りた。

未知の世界ではあるが、ここよりは居心地がいいだろう。

“ただし———”

通り過ぎようとしたところで、文字が出てきた。

“三十日後に消滅する”

2. サイバミテイ、地上に立つ

衝撃的な言葉を読みつつ扉を超えた。

周囲は上下左右を岩に囲まれている。

洞窟の中だろうか。

『普通、なんで消滅するのか聞いてから入るもんじゃない？』

かもしれない。

だが、聞いたところで何かができるとは思えん。

やばそうなら、逃げればいいだろう。

『行き当たりばったり……、待った。こりやすごい』

岩穴を進んで行くと、シユウから声がかかった。

声がかからなくても足を止めただろう。

目の前の壁には様々な紋様が描かれている。

上下左右にびつしりと、紙に描かれて物や直接岩に刻まれている物

も見られる。

魔法陣だろうか？

『そうだね。……ふむ、別世界の人が書いてるね。記述法が違ってる。

人払い、自然同化、遮音、防視、呪怨、即死、消滅ときて、最後に魔

力のサニタイズか。ここに誰も来て欲しくなかったと見える』

どうすればいい？

『引き返す』

それ以外で。

『一個ずつ解除していくしかない。解除する順番を間違えると、この

辺一帯が消し飛ぶ』

え、そんなに危険なものなの？

『そうだね。こっち側からなら何とか解除できるだろうけど、あっち

側からだと俺でも無理だね。まず近寄れない。それ以前に、気づけな

い。ダンジョンだとしたら攻略不可かな』

それはそうだろう。

最難関のダンジョンは中に竜がいるダンジョンではない。

そもそもそこにダンジョンがあることすら気づかせないダンジヨ

ンなのだ。

『それでも、こつち側からなら超上級くらいかな。さて——解いていくとしようか』

壁に描かれた魔法陣を、シユウの指示のもと一つずつ斬りつけていく。

最初に見えていた曲がり角に辿りつく頃には、半日が経ったのではないかと思うほどであった。

曲がり角を越えると、もう魔法陣はなくなっていた。

それでも慎重に進んで行く。

『何か落ちてる』

確かに道の途中に何か落ちていた。

獣か何かの死骸だろうか。

外見がぐずぐずになっているものが鎮座している。

恐る恐るシユウでつついてみると、それは灰のように静かな音をたてて地面に崩れる。

地面に流れた灰の中から、一つだけ固そうな物が見えていた。

シユウでつついてみるが特に問題はない。

『ビー玉？ 炭？ なんだろう？』

手の平サイズで丸っこい。木炭かと思ってしまふほど軽い。

堅さは何かの金属のようだが、温かみがある。

『生きてる』

……えっ？

『俺も信じられないけどアナライズが通らない。これは、生きてる』

どう見ても死んでるぞ。

死んでる生きてるの前にどう見てもただの物だろ。

ひよっとしてモンスターか。

『モンスターなら別の表記になる。もう一つの可能性もあるけど、こつちはもつとあり得ないから、やっぱり生きてる』

その場ではどうしようもないので、とりあえずアイテム袋に入れて道を進む。

出口が見えてきた。外は薄暗い。どうやら夜のようにだ。

外に出て、私はすぐにここが異世界なのだと実感した。

『これは滅びますわ』

私も同感だった。

空には月が浮かんでいた。

黄色みを帯びた光は、私の世界と同様だ。

しかし、大きさが明らかに違う。

空の半分が月だった。

『うーん……』

あれは、どうなの？

『もしこのまま落ちてきたら、地上の生命体はほぼ完全消滅する。星の歴史は続くけど、そうすると三十日で終わるの意味がよくわからない。世界の歴史が、地表の生命体の歴史だとすると三十日も続くわけがない。仮の結論としては、あの月はすぐには落ちないんじゃないか、となる。物理的にはあり得ないけどね……』

あ、そう。

『とりあえず今夜のところはここで野宿かな』

いつでも逃げられるようにしておくということだな。

シユウに起こされ、時は朝。日は東。

いや、ここは異世界だ。本当に東かどうかはわからない。

とりあえず大きな月は消え去って、眩しい光だけがそこにある。

どうやら月は落ちてこなかったようだ。

様子見を続けてもつまらないので、近くを歩き回ってみるとしよう。

夜のうちから気づいていたが、この洞窟は急峻な山肌に接している。

周囲の景色も、岩肌が露出した山ばかりでおもしろくない。

少なくとも近くに人もモンスターもいないだろう。

『頂上の方が近いから、そこから周囲を俯瞰するのがいいかな』

目印のアイテムを地面に突き刺して、私はさっそく登山に勤しむことになった。

よくわからんチートで急な傾斜もスムーズに歩くことができている。

なんでも取得のポイントが滅茶苦茶高かったらしい。すごい効果であるという実感はあまりない。

山の上から見る景色は、全方位に山があるというものだった。

右も左も後ろも山。空の近いところに雲がある。さて、どっちに行くべきだろうか。

『この辺りは山脈だね』

それはさすがに私でもわかる。

『山頂だけど、気温はそこまで低くない。太陽が昇った方を東として、山脈全体を見れば南側の斜面が北側よりもやや削れてる。南からの卓越風が優位な場所だと考えられる。近くで人が住んでるのはどちらか考えたら、風下の北側が適してるんじゃないかな』

よし、それじゃあ北に進んでみるとしよう。

で、どっちが北？

北に向かって下っていき、谷を越えまた尾根へと登る。

特に何も遮蔽物もないため、走っていくつか山を越えていった。

『ストップ！』

シユウの声で足を止める。

『右』

右を見てみると、遠くにやや開けた場所が見えた。

さっそくそちらに向かうと、崖の上から平野を見下ろす位置に出た。

『何かこっちに走って来てる』

どこだろうと探してみるがよくわからない。

『もうちょい上かな。ちよつと望遠するね』

うおお、視界が急激に近づいてくる。

視界の右端に何かが見えた。

目を動かすと思ったよりも大きく視界が動き、対象が左端に移動してしまった。

今度こそ、それを正面に捉えると確かに何かがちららに向かっている。

あれは何だろう。

白色の獣に見える。

『虎かな？ それにしてはでかい。上に人が乗ってるし』

言われて見ると、その上を見ると確かに人が乗っている。

三人は乗ってる。遠くで大きさがわからんが、人があの大きさならあの虎はどれだけでかいんだ。

『虎の後方にも何かいるぞ。なんだあれはムカデに、アリに、ダンゴムシ？』

釣られて見ると、確かに虎を追うように、虫が走っている。

そのどれもかなり大きく。その上に人が乗っていた。

『こつちに逃げて来てるのかな』
どうもそのようだ。

『移動しよう。左の道が狭まっている辺りがいいね』

シユウに勧められて、高台の縁を移動していく。

ちようど狭くなつた谷の道を、上から見下ろす位置にやってきた。

先ほどの虎と虫たちもこちらに走ってきている。

もう少してこの下を通過するだろう。

そして、そいつらはやってきた。

やはりかなり大きい。人が小さいのかと勘違いしそうだが、人は同じくらいだ。

ちようど真下で虎の速度が緩まり、三人の中でガタイの大きな奴が飛び降りた。

彼らは何か言いあっているが、さっぱり聞き取れない。

『姫様、お逃げください！』、「貴方はどうするのです?!」、「私が彼らをここで食い止めます！ 早く行きなさい！ 行け！」かな』

なに、そんなこと言ってるの？

確かにそう言われればそう見えなくもない。

虎の上に乗ってるのは身分が高そうだし、下りた男は騎士のような体格だ。

「いや、全く聞き取れない。口の動きを見る限り言葉が全然違う。でも、脳内で補完するとそんな感じじゃない？」

こいつの脳内で補完されるのはいささか気持ち悪いが、その通りに見えたのは間違いないので黙っておく。

虎の上から姫様にされた人物が、振り返って手を伸ばしている。

それをもう一人の人物が抑えていた。

『姫様！ 騎士Aが任せると言ったのです！ 姫様は、姫様の役割をお果たしてください！』くっ、騎士A！ 生きて！ 必ず生きて帰りなさい！ これは命令です！』

虎に乗った姫様は、下りた騎士から目を逸らし、虎の進路方向を向く。

そのまま虎は加速して走り去って行く。

むかつくがその通りにしか見えない。

本当は聞こえてるんじゃないか。

『さて、大任を果たすのでしょうか！』

男は、虎から目を逸らし虫たちに向き直る。

すでに虎を追っていた虫たちもすぐ近くにやってきている。

虫たちは人より遙かに大きい。どうやって闘うつもりなのだろうか。

手に槍を持っているようだが、虫たちとのサイズ差がありすぎる。

あつさり踏みつぶされ時間稼ぎすらままならないだろう。

もしかして滅茶苦茶強いのか？

『いや、強くはない。んっ、何かの詠唱……、魔法コードにかすつてすらいらない。いや、これは——』

シユウの解説を待つまでもない。

男は槍を地面に突き刺す。その槍が淡い光を生じ始めた。

銀色に輝く光は男の前で徐々に大きくなり、やがて巨人が誕生した。

巨人は全身を銀色の鎧に包まれ、その手には男が持っていた槍と同じものが握られている。

ただし、その大きさは男が地面に突き刺した物よりサイズがずつと

大きい。

『こいつはたまげた。ここはそういう世界らしい』

ここが異世界であることを、またしても実感した。

大きな月に、大きな虎、大きな虫、そして巨人ときた。

『いや、別に大きなのが特徴ってわけじゃないと思うけどね』

シユウが呟いたところで巨人が動いた。

その手に持った槍で、対岸の岸壁を攻撃する。

土砂が崩れ、道の半分が埋まった。

次にこちらへと向かってくる。

私は崖の上で見ているわけで、当然危なくなって退避した。

轟音と揺れが収まり、戻ってみると道が崩れた土砂で埋まってい

る。

どうやら先に進ませる気はないようだ。

追っていた虫たちも足を止め、土砂崩れの前で屹然と立つ巨人に対

峙する。

言葉は交わされなかった。すぐさま力と力のぶつかりありになっ

た。

巨人の槍が虫を貫き、虫たちの牙や足が巨人を襲う。

まず始めにダンゴムシが光になって消えた。

モンスターと似たような消え方をしたが、ドロップアイテムは残ら

ない。

『ふむふむ。あの召喚されたほうのダメージは、本人にも伝わるらし

いね』

ダンゴムシに乗っていたと思われる胡散臭い男が離れた地面で倒

れていた。

あれは死んでいるのだろうか。

『いや、生きてる。虫の息だけど。……あ、毒を受けた』

巨人が纏っていた鎧が一部破損し、その部分にムカデが噛みついた

のだ。

騎士Aと呼ばれた男は膝をついている。巨人の動きも目に見えて

鈍り始めた。

虫たちの戦法も積極的な攻めから、毒責めによる持久戦へと変わっていった。

残る虫はムカデ一体だけなのだが、ついに巨人は力尽き、槍を手放し地面に倒れた。

ムカデは倒れた巨人へと近づき、その牙でトドメを刺そうとする。その牙へ巨人の手が伸びた。ムカデは暴れるが巨人は手を離さない。

さらにもう片方の手が、対になる牙を握る。

ムカデはその体躯を巨人に巻き付かせるが、巨人の力はなおもすさまじく、両手に持った牙をそれぞれ外側へ開いていく。

頭に響くような叫び声とともにムカデの頭は半分に引き裂かれてしまった。

ムカデは光に消えて、巨人だけが残った。

騎士Aはすでに地面に倒れ、巨人も追うようにして地面に倒れた。

『虫使い達は大丈夫だろうけど、騎士の方は毒が微妙に残ってるから死ぬ。下りるなら今だね』

いや、今さらじゃないか？

もう何もかもが終わってしまっている。

『いや、奴はまだ死んでない。ここは異世界。じゃあ、メル姐さんがあいつを斬ったらどうなる？』

そこでピンと来た。

崖を半ば飛び降りて、騎士Aへと近づく。

意識が朦朧とした様子で、口がわずかに動く。

「サウ、バレエ……ト」

『「姫、さ……ま」かな』

私は姫ではない。

メルだ。

シユウで斬りつける。

予想どおり騎士Aは光になって消えた。

そして、ドロップアイテムが残る。

——揺るぎなき忠騎士のマルテ。

ふむふむ。

おしやれな料理みたいな名前だがひとまずもらっておこう。

『翻訳スキルもゲット。マルテは武器の名前だろうね』

そうか。

とりあえず復活するまで待つとするか。

『しかし、異世界に来て襲われてる馬車を助けるってのはテンプレだけど、なんか微妙に違うな』

なんだそれ？

『俺たちの世界だと、異世界に行くときまずモンスターに襲われてる馬車を助ける』

ほう、楽しそうじゃないか。

それで？

『馬車には、商人だか貴族の令嬢がいて、感謝されて一緒に街までついていく』

なんでついていくんだ？

モンスターがいるってことは近くにダンジョンがあるんじゃないのか？

そっちに行った方がおもしろいだろう。

『必ずしもダンジョンが近くにあるわけじゃない』

そんなものか。

それで街に行った後は、ギルドでダンジョンの情報を聞いて攻略するわけだ。

『ギルドには確かに行くけど、最初はしょぼい仕事を受ける。そこで本来は生息しないはずの強いモンスターを倒して一気に名を挙げる』

……ダンジョンは？

『だいぶ後だね』

ダンジョンに辿りつく前に飽きてしまいそうだな。

最初からダンジョンに飛ばされれば良いのに。

『そういうのもある』

おっ？

それはどうなの？

『ダンジョンの中に来て、そこで何年か過ごして滅茶苦茶強くなる』
ふむふむ。

その過程をじっくり描くわけだな。

『いや、そこは一話で終わる』
えっ？

『二話からは、ダンジョンから出てモンスターに襲われてる馬車を助ける』

それだとさつきと同じじゃないか。

ダンジョンは？

『残念ながらダンジョンそのものに焦点をあてているのは少ない』
どうということなの？

『みんな疲れてるんだよ。現実で疲れてるのに、わざわざフィクションまでダンジョン攻略だので疲れたくないんだ』

なんだか寂しい話だった。

そんな話をしているうちに騎士Aが復活した。

周囲を見渡し、後ろで座っていた私と目が合い即座に槍を構えた。
わかっていたことだが、ドロップアイテムで出てくる槍は、どうやら現実には影響しないらしい。

「何だ貴様は！」

やっと、起きたか。

見た感じ体調は良さそうだな。

毒も怪我也残ってはいなさそうだ。

「む」

そう言つて、騎士Aは自分の体を見直す。

さらに、遠くで倒れている虫たちの操り主を見る。

「まさか……、貴公が我が身を救ってくれたというのか」
そうなるかな。

あと、私はメルだ。冒険者をしている。

「冒険者……？メル殿。これは失礼をした」
騎士Aは槍を納めた。

「我が名はバリガン。オード第三王女殿下の近衛を務めている」
『警戒心が足りてない。こんなところにいる浮浪者の言うことを信じるのはどうなの?』

シユウは文句たらたらだが、私は気にしない。話は早い方が良い。
で、どうする?」

「姫様のもとに往かねば」

そうか、じゃあここでお別れだ。

私は虫たちの方に行く。そっちの方がおもしろそうだからな。

あいつらはどうするんだ?

とどめを刺すのか?

虫たちを操っていた奴らを指さす。

シユウに言わせると、ぎりぎり生きているらしい。

「倒れている人間に手を出すのは、騎士道にもとる」

『……ぬるい』

あつそ。とりあえず何があったのか教えてもらえる?

あとさっきのデカいのは何?

「それは——」

なんかバリガンたちの騎士団がフェガリ教団というアジトに攻め込んだら、反撃されて逃げ出したということだ。

『しよつぼ……。強襲して返り討ちって』

少数精鋭で挑んだら、向こうにも幹部がいてあっさり負けてしまったとのこと。

負けた理由は正直に言ってもいい。

闘っていた手段の方に興味がある。

それについて尋ねたら、逆に何を言ってるんだという顔をされた。

あの巨人や虫たちは、クリロノミアとかいうらしい。

『翻訳が上手く効いてないな。「遺産」が近いと思うけど微妙に違うっぽいし。とりあえず、こっちの世界だと、知っていて当然のもののみたいだね』

そうだな。

「クリロノミアを使わず、どうやって治したのだ」

私はシュウをかぎす。

「それがクリロノミアではないか」

シュウはクリロノミアだったらしい。

大まかな話をしてバリガンと別れた。

彼の方は、歩くか待つかすれば救援が来るだろうとのことだ。

私はフェガリ教団のアジトへ向かうことにした。

極秘の人物が何か怪しいことをしているとのこと。

『なんで極秘なのがばれたんですかねえ』

教団までの道は、虫たちが体を引きずった跡を追えばなんとかなる。

倒れて虫の息になっている男三人にトドメを刺し、光にしてから進むべき道を歩み始める。

いぎ！ フェガリ教団のアジトへ！

着いてみれば、そこは岩山を切り開いた城塞だった。

入口にあつたであろう門は、大きく破壊されている。きつと騎士団の攻撃によるものだろう。

ステルスを使って見張りの人物の横をすり抜けて入っていく。

『……なめてたけど、文明がずっと進んでるね』

岩山の中は都市のようであつた。

天井は高く、奥行きも横幅も大きい。

多くの人々が闊歩し、松明もなしで不思議な明かりが灯る。

地面もごつごつしておらず滑らかだ。土やレンガでない。

壁や天井も何か、木や岩ではないもので作られている。

今までに見たどんな都市よりも施設が整っていた。

仕組みがまるでわからないものが並んでいる。

『ちよつとよろついで話を聞いてみよう』

ステルスで盗み聞きしている限り、騎士団の話はさほど出ていない。

幹部の活躍であつさり追い払われたと言われている。実際そうなのであろう。

私の思っていたダンジョン攻略とは違っていた。

もつと好戦的な奴らが集まっていると思っていたが、そんなことはなかった。

ところどころにクリロノミアとかいうのがいた。

大きいものしかないと思っていたが、普通に人と同じ大きさや小さいものもろついている。

子供がカブトムシや熊といったと遊んでいる様子も見られた。

『もしかしたら最初に見た物の方が例外だったのかもしれない。それよりもどうやってこいつらは誕生するんだろうか?』

そんなことを私に聞かれても困る。

『エレベケフ博士って単語がさつきから聞こえるんで、その人を探してみよう』

私にも聞こえてきた。

その博士の研究のせいで、変な奴らがやってきた。迷惑だ。

そんな風に話がされている。

『左の方の区画にいるらしいよ』

言われた通りに行ってみる。

人だからからどんどんと離れていき、周囲にはすでに人がいない。

おそらくここだろうという建物をシユウが見つけた。

雰囲気が違うらしい。同じに見えるが……。

ここの施設の扉は不思議だ。

扉の前に立つと勝手に開き、また閉じるのだ。

誰かが開けているのではないかと驚いたが、どうもそんな魔法が使われているらしい。

入ってみると、中には人がいなかった。

広いのに人がいないというのはなかなか不気味だ。

魔法の研究施設が私の世界にもあったが、似た雰囲気だった。

研究施設というものは、どこもこんな雰囲気になるのかもしれない。

『そこ、糸があるから跨いでいって』

さつきからなんか罨が多いな。

人の姿こそ見えないが、糸の罫がいくつも張られている。経験上、こういう場所は重要な人物、あるいは物があると決まっている。

ようやく人を見つけたのは、一番奥の部屋にたどり着いたときだ。大きな扉が勝手に開き、白い服を着た背中が見えた。背は高く、体は細い、髪には白髪が目立つ。

この男がエレベケフ博士だろうか。

「誰かね？」

誰何の声は囁れていた。

男は振り返ることもなく、作業を続けている。

私は返答をしなかったが、男は気に止めず黙々とロープをいじり続ける。

私が気になったのは老人よりもむしろ、彼の前に立っている人形だ。

天井からたくさんのロープがその人形を支えている。

大きさは子供くらいだろう。

目に光はない。

「ディアグラマ。ランを開始しろ」

男の横でふわふわ浮いていた岩が黄色い光を生じた。

黄色い岩から生えている紐のようなものが、人形の立つ台にぴりと伸びた。

しばらく経ったが何も起こらない。

「終了」

なにが終了なのだろうか。

『実験だろうね』

それはわかる。

「何がわかるのかね？」

男はようやく振り返った。

切れ長の鋭い目がこちらを捉える。

ステルスを使っているはずなのだが……。

『黄色いやつの力かな。ステルス解除するね』

姿を現すが男は驚かない。

白髪交じりと唄れた声のため、老人かと思っていたが顔はまだ若い。

皺がほとんどなく、三十台くらいじゃないだろうか。

「君は、この人間ではないな。アラフニ君の話していた一党か。こいつを壊しに来たのなら意味のないことだ。この通り動かない」

いや、私はその一党じゃない。

なんとなく興味があつたから来たただけだ。

それで、それはクリロノミアとかいうのか？

「そう見えるか？」

そう見えるが、違うのか？

「違う。これはクリロノミアであり、人でもある。私からも尋ねよう。人とクリロノミアの違いは何かね？」

いや、そもそも私はクリロノミアが何かすらまだわかってないんだが。

「私もそうだ。クリロノミアがまず何かわからない。人は誰から教えられることもなく、それを感じる事ができている。それどころか霊媒を介し外界に宿し、身体とリンクする。クリロノミアとは、いったいなんなのだろうか？」

うん。さっぱりわからんね。

「人が霊媒を通してクリロノミアを喚び出すように、クリロノミアに模したこの人形を活性化させ、霊媒を通せば人を喚び出すこともできるのではないか。そう考えたのだ」

わかった。

お前の頭はおかしい。

『霊媒が悪いんじゃない？』

シユウの言葉をそのまま伝える。

「そうだ。私もそう考えた。一般に使われている霊媒以外にも、より人間に近いもの——心臓や眼球、脳を霊媒にして行なってみた。しかし、こちらも全て失敗に終わっている」

あれ……、こいつ、ほんとにヤバイ奴じゃないか？

『ちなみに今の実験で使ったのは何?』

エレベケフの爪らしい。

『じゃあクリロノミア自体の動力機構が問題かな?』

もう面倒なのでシユウと直接話してもらおうことにした。

何度か寝てしまったにもかかわらず、議論は絶えず続いている。

何度目かの目覚めはこの声によるものだった。

「何者だ?!」

びつくりして起きると、後ろにすらりとした女性が立っていた。

彼女の脇には、なかなか大きな蜘蛛が鎮座している。

四対の大ききの異なる目がこちらを見る。

『うっえ、気持ちわる』

そういえばこいつは蜘蛛が苦手だった。

いいぞもつとやれ。

「アラフニ君。彼らは私の客だ」

「博士。部外者を勝手に……彼ら?」

そう言つて周囲を見渡す。

女は隣の蜘蛛を見るが、蜘蛛は小さく首を振ったように見えた。

「今、議論がちょうど煮詰まっていたところだ。後にしてくれないかね」

「ああ……、もうっ」

アラフニと呼ばれた女性は、眉間に皺をよせて頭をガシガシ掻いている。

なんだかとても絵になる光景だった。苦労人なようだ。

「奴らがまたやって来ました。大軍です。守りきれないかも知れませんが、すでに非戦闘員は地下へ避難させています。博士も退避の準備を!」

「そんなことよりも、どうやらついにこれが完成しそうだよ」

アラフニはむかつて右の顔面を歪ませている。

横にいた蜘蛛が博士へと足を動かした。

「そう怒るな。すぐに行く。それより君は迎撃の指揮があるだろう」

アラフニは「約束ですよ！」と叫びながら、蜘蛛の背に乗り出て行った。

『じゃあ、実験を試してみようか』

「これが最後の実験になるかもしれんな」

そうか。

よくわからんけど、終わるなら良いじゃないか。

実験が終わったらどうなるんだ。

「新たな研究が始まるのだよ」

ダンジョン攻略みたいなものなのだろうか。

で、どうすればいい？

『まず、パーティリングをサイバミティに取り付ける』

いきなりわからん。

なんだ、サイバミティって？

『この人形の個体名』

あつ、そう。

言われた通りにパーティリングを取りだす。

実際にリングを取り付けたのは博士だ。

これは何のために？

『魔素を送り込んだときのスタビライザー』

魔素？ スタビライザー？

一個わからんことを聞くと、また一つわからんことが増えていく。

私はもう聞くのをやめた。

「次に霊媒だが……」

『メル姐さん、あの洞窟で拾ったやつ出して。生きてるやつ』

……何を言われたのかよくわからなかったが、三呼吸くらいおいてようやく思い出した。

なんか灰みたいなのの中から拾ったんだったな。

『そうそれ。霊媒つてのを、勘違いしてた。単なる物じゃだめだったんだ。今使われてる霊媒は古代生物の化石か月の石の欠片なんだそうだよ。化石ならクリロノミアが生物体になって、月の石の欠片が入ってたら無機物体になるんだって』

ほーん。

博士の横でふわふわしてるクリロノミアは生物に見えない。

こいつは月の石から出てきたのか。

『そうそう。それでいてクリロノミアそのものに意識がないと駄目なんだ。さっきの蜘蛛も虫や巨人もそれ単体で意識があつた』

はあ、なんかあの木炭みたいなのが生きてるって話してたから使ってみようってことか？

「いかにも」

博士がサイバミティの背中に、私から受け取ったよくわからんものを入れ込んだ。

「ディアグラマ。ランを——」

黄色い浮遊体がまたしても紐を、サイバミティの台に当てる。

直後に、サイバミティがビクツと動いた。

私も驚いて下がってしまう。

『パーティー登録して！ 速く！』

私は恐る恐る腕を伸ばして、サイバミティのパーティーリングに触れる。

なんかすごいガタガタ動き始めてるんだけど……。

あまりにも不気味だ。

「素晴らしい……。素晴らしいぞー！」

博士も今までとは明らかに違う様子で興奮している。

サイバミティも何か音にならない叫び声をあげている様子だ。

建物も大きく揺れ始めている。

『戦闘が始まったみたいだね』

落ち着いている場合だろうか。

「邪魔者が来てしまったようだな」

「……じゃ、ま……、テ、キィ」

今まで聞いたことのない声が聞こえた。

『喋った！』

「話したぞー！」

シユウと博士の声が被った。

「敵いはあああ！ 排除よおお！」

サイバミティは天井からつり下げられたロープを引きちぎる。

『あ、コードをちぎっちゃった。暴走してるね、これ』

「なに、すぐセーフティが起動する」

一歩踏み出したと思ったら、次の瞬間には四足で走り出す。

部屋の扉にぶつかったが、紙のように扉を引き裂いてそのまま飛び出していった。

「……よし。私は避難する。後の観測は任せた」

『任された。それじゃあ、メル姐さん追いかけようか』

先ほどまでの興奮が嘘のように、二人は落ち着きはらっていた。

で、どこに行くって？

『たぶん外かな』

慌ててサイバミティを追いかけると、ちょうど岩山から出て行くところだった。

先ほどから断続的に大きな揺れを感じる。

恐らく外で巨人や蜘蛛が暴れているのだろう。

その予想は正解だった。外では蜘蛛やら巨人やらがやりあっていた。

『劣勢だね。……いや、糸が張られてるな。挽回の目があるか』

それより、あの蜘蛛みたいな奴もいるんだけど大きさが違ってないか。

さつき見たときは人と同じくらいだったのに、今はもつと大きくなってる。

しかし、あちこちでドンパチしていて見てて楽しいな

蜘蛛が糸を吹いて、巨人たちの動きを鈍らせ、他の奴らが攻撃するパターンが見られる。

相手も負けじと火の剣で糸を焼き払っている。

……なんかあんまり強くないような？

大きさは確かにあるが、動きがさほど速くない。

重さはあるそうだが、力そのものはたいしたことないのか？
一体一体が上級のボスクらいだと意識していたが、中級ボスクらい
かもしれない。

『そのくらいかな。クリロノミアは大きさをある程度調整できるんだ
そうだよ。でも、大きくなっても魔素の量は体積ほど増加しない……
えっと、大ききの割に力が出なくなる』

それでも乱戦には違いない。

その暴力の嵐の中をサイバミティが突っ切る。

大丈夫なの、あれ？

『武器も防具もつけてない』

……えっ。駄目じゃん、それ。

今まさに巨人に踏みつぶされたぞ。

『問題ない』

巨人の足が徐々に持ち上がる。

その下ではサイバミティが巨人の足を押し返していた。

おお、すごい力だ。

『初期起動でこれなら悪くないかな』

なんかちよつとずつ速くなってきてないか。

巨人の攻撃を今では楽々躲してそのまま足下に潜り込み、足を殴り
つけ巨人を転ばしている。

それどころか、味方の蜘蛛やテントウムシにまで攻撃を加えて見境
がない。

本当に乱戦模様となっている。

『敵味方の識別をまだ入力してないからね。問答無用じゃないかな』

問答無用って……。

最初の時点で襲われる可能性もあったってことか？

『あつたけど低い。最初にメル姐さんと博士が襲われなかったのは、
博士は魔素の供給元だから親だと思われてて、メル姐さんは魔素がな
く敵として扱われてないからだろうね。そもそも、パーティ登録して
るから、もしも博士に襲いかかって殺したとしても復活する。他のや
つにしたって同じ』

殺されても復活するなんてことは、もちろん誰も知らないことだ。あまりの暴れ具合に騎士団も距離を取り様子見をしている。味方もサイバミティイから距離を取っていた。どうする、止めるか？

『いや、もうそろそろかな』

何がだろるかとかサイバミティイを見たら、ちよつと転んだところだった。

勢いそのまま受け身も取らずに倒れ、砂埃をあげつつ転げ回り動きを止めた。

『セーフティイが起動したね。回収しちゃつて』

私がサイバミティイに向かうと、巨人の一体もこちらに向かつてくるところだった。

おや？

あの鎧にあの槍は見た覚えがある。

峡谷で死にそうになっていたおっさんじゃないか。

『うん。騎士団の中ではそこそこ強いみたいだ』

ふうん。

巨人はその槍を構え、私とサイバミティイを横薙ぎに払ってきた。

その槍をシュウで受ける。

うおっ！

なんだこりゃ！

衝撃が、恐ろしく軽い。

吹き飛ばされるくらいの覚悟をしていたが、逆に巨人の方が反動でのけぞっている。

『言つたでしょ。大きくなるほど体積あたりの力が弱まるんだ。人と同じかやや大きいくらいサイズのなつたほうが手強い』

それはなんとなくわかるんだが、重さはあるんじゃないのか。

『いや、実は重さはほとんど変化してないらしい。この世界特有の魔力——魔素が同じ魔素を持つ対象に干渉して衝撃を与えてるだけ。俺とメル姐さんは魔素がないから、重み分の衝撃しか食らわない』
よくわからんから、もつと簡潔に言つて。

『相手が大きくなればなるほど、動きが鈍ってくるから闘いやすい』
はあ、そうなんだ。

それでこの事態をどう解決すればいいんだ。

『巨人の方は足を横に蹴ってやれば、撤退するだろうね』

どれくらいで蹴れば良い？

『俺がゆるふわな下ネタを言っただくらいかな』

……わかった。

だいたいこれくらいだろという力を込め、巨人の足を蹴る。

足に手応えはなかったが、効果は絶大だった。

まず巨人の足が宙に浮き、地面と水平になった。へその辺りを中心に回転した形になる。

その後、巨人の頭部が下へと向かい、そのまま地面に頭を打ち付けた。

地面に対する衝撃はすさまじい。

頭部が半分地面に埋まった、頭で倒立する形で一瞬だけ止まり、ゆつくりと足から倒れる。

倒れるとそのまま光になって消え去った。

ドロップアイテムは残っていない。

『死んでないね。気を失っただけかな』

遠くで一人の騎士が倒れるのが見えた。

そこからの騎士団の動きは迅速の一語に尽きる。

倒れた騎士を回収し、「覚えていろー」などと言い残して、すごい勢いで走り去っていった。

『メル姐さんが覚えてるわけじゃないじゃないか。やれやれ緊張感に欠ける連中だ』

こうして迎撃戦は幕を閉じた。

そうこうあって研究室に戻ってきた。

「精神系が不安定か」

『初期起動だったから、霊媒に残った意識が多分に干渉したと推測されるね』

「同感だ。現時点で魔素の循環に乱れはない。初期化は完了し、次の覚醒では安定するだろう」

回収され再び縄に繋がれたサイバミティを前にして、二人の変人がさっそく話を始めた。

何でも博士のクリロノミアが魔素とやらを流したり、探知したりすることができるとらしい。

最初にこの部屋に入ったときに、私の魔素が感知されないからステルスをしていても気づいたようだ。

感知されないなら気づかないんじゃないかと言ったが、

『水で満杯になってるバケツに、水がない部分が見えてたら、そこに透明な何かがあるんだと思わない?』

——とシユウに説明されて、なんとなく言わんとしていることはわかった。

「機能として口は付けたが、いきなり喋ることができたのは幸先が良いい」

クリロノミアは話さないのか？

「基本的に話さない」

『基本的ね。例外は?』

「私が知っている中では、これを除いて四体。空中都市アエラキのクヴァアヤ。海底都市ラスピのファレナ。皇都アナトリのメントル。そして、グリフォス」

後の二つはどうでもいいけど、最初の二つが気になる。特に一つめ。

なんだ空中都市って。山の上にあるってことか？

「いや、空に島が浮かんでいる。天空の都と呼ぶものもある」

空に、島が浮く……?」

いまいちピンとこないんだが。

「君たちのいた世界にはなかったのかね？」

ない。

『三千年くらい先の話だろうね。今ならもつと早いかもしれないけど……』

そこ、行ってみたい。

飛んでる島とか考えるだけでもおもしろそうだ。

『すごい既視感が……。あのときは紐なしバンジーしたからなあ』
さつきからぶつぶつうるさいぞ。

「アエラキに行きたいなら、アラフニ君に言いたまえ。あそこにも教団の支部がある」

そうそう。今さらなんだが、ここは何の教団なんだ？

私の世界にも教団はあったが、もつと頭のおかしい奴らがうようよしていたぞ。

ここには見た感じ、そういうおかしい奴が一人しかいない。

『ここ、クリロノミアが普通に人と一緒に暮らしてたでしょ』
ん？

ああ、そうだったな。

「彼らと普通に暮らすことは、世間一般常識で異常とされている」
なんで？

「様々な論理はある。しかし、私はどれも理解していない。理解できていないことを説明することはできない。それは、ここに私がいる理由でもある」

『まあ、人間よりも遙かに力が強いし危険だから、外に出さないよう世論が動いてきたってことだろうね』

ふうん、そんなものか。

それよりアラフニのところに行こう。

『いや』

「その必要はない」
なぜだ？

「失礼。博士、先ほどのクリロノミアについてお話があります」
扉が開ききるのも待たずに、女性は声を発した。

その横には蜘蛛がのそのそ付き添っている。

素晴らしい。

本人のほうからやって来てくれた。

私と博士の視線を受け、アラフニの顔は露骨に歪んだ。

空中都市アエラキは上空の風の流れに乗り、あちらこちらを回遊しているらしい。

現在はかなり近いところにあるようで、アラフニが連絡を取って向こうから迎えが来てくれることになった。

『早く出て行って欲しいという思いが、ひしひしと伝わってくる』

私としてはもうここに用はないからそれで構わない。

早く来ないかな。

「サイバミティも連れて行ってくれ。可能であればククヴァアヤと接触させて欲しい。データを取りたい」

そいつを？

また暴れたりしないのか。

「精神は安定している。今も目覚めているが、静かにしているだろう」

えっ、今も起きてるのか？

「起きている。サイバミティ、話ができるかね」

サイバミティは顔をゆつくり上げる。

おお、ほんとだ。

さつきみたいに暴れない。

これなら――。

「敵は、どこだ？」

やっぱ、駄目かもしれない。

それでもまあいい。首を絞めたり、強めに叩けば大人しくなる。

さあ、空に浮かんでいる島とやらに行こうとしよう。

きつと心に深く残る日となるだろう。

――空へ舞い上がるほどに。

2. 島が落ちた日

私は今、空にいる。

でかい燕の爪に両肩を掴まれて移動中だ。

こういったものは背中に乗って飛ぶものだと思っていたが、そんなことはなかった。

空を飛んでいると言うよりも、餌として巢に運搬されていているという方が正確なのかもしれない。

脇にサイバミティを抱えている。

博士とアラフニの押しつけにより、仕方なく持つていくことにした。

「敵はどこだ？」

また言っている。

このデカ燕が地上に来たときも襲いかかり、シユウで殴って止めた。

「見えてきましたよ」

上から燕の操縦者が伝える。

おお、本当に島が空に浮いている。

湖に浮かぶ島と違うのは、島の下部分から何かいろいろ出ているくらいだ。

しかし、何だろう。

初めてのはずなのに、これと似たようなものを見たことがあるような気がする。

夢の中で見たのだろうか、前にも同じようなことがあったような。

こういうのは何とこのだったか……。

『既視感、デジャヴユかな』

そうそう、それぞれ。

『ちなみに夢で見た空に浮かぶ島は、どうなったか覚えてる？』

さあ、知らない。

もしかしたらダンジョンだと思って乗り込んでみたかもしれない。

『その島は地上に落ちた。メル姐さんが落とした』

えっ、私が？ いつ？ 何で？

そもそもなぜお前が私の夢を知ってる？

『夢じゃなかったからだよ。ああ、嫌な予感しかしない……』

シユウはそれ以上何も言わなかった。

三日後のことである。

「いたぞー！」

「止めるんだ！」

前から数人の兵士と、複数のクリロノミアがこちらに向かってきている。

『どうしてこうなった……？ どうしてこうなった？ どうしてこうなった！ どうして……！』

先ほどからシュウがずっと叫んでいる。

なんだか楽しそうだ。

空中都市アエラキにたどり着いて初日は、初めて尽くしで楽しかった。

二日目は、街をいろいろ見て回り、浮いてるだけでただの街でしかないと感じた。

そして今日、喋るクリロノミアに会おうと思い、探し、島の地下にある管理区画にいると知った。

しかし、嚴重に立ち入りが禁止されており、守衛に止められて会えなかった。

——だから、そいつがいるところまで力尽くで攻め入ることにした。

まず、管理区画の入口にいた守衛とそのクリロノミアを倒し、分厚い扉も斬り開いて中に入った。

『そこがおかしい。サイコパスですわ』

いや、でも、お前できるって言ったじゃん。

『まさか、すぐに実行するとは思わなかった』

斬っても死なないから、問題ないと思ったんだ。

『そういうとこだぞ』

まあ落ち着け。

サイバミティも楽しそうだからいいじゃないか。

「敵は排除。 敵は排除」

先ほどから私の代わりに、襲いかかってくるクリロノミアを倒してくれている。

こいつが倒しても、相手は死なないから今のところ問題はない。

『問題しかないでしょ……』

やってしまったことはしようがない。

これからどうするかを考えよう。

「ええい！ 下がれ、未熟者ども！ 私が相手をする！」

怒声が通路に響く。

なんだか最近、聞いた声だったような。

奥から現れたのは、全身に鎧をまとった兵士と人間だった。

そのひげ面の濃い顔は見覚えがある。

名前は……、騎士Aだったな。

『バリガンね』

そうだった。

奴は私とサイバミティを認めると目を見開いた。

口をパクパクさせている。

「メル殿、なぜ？」

しかし、すぐに察した口元を引き締め槍を構えた。

『今さらなんだけど、あれは矛だね』

「我が分身——マルテよ。オード様への忠心、今ぞ見せるときである！」

私が一歩踏み出そうとしたところで、サイバミティが先走った。

仕掛ける先はバリガンのクリロノミアである。

ちなみにサイバミティが持っているのは、彼から手に入れた矛である。

同じ矛同士が火花を散らして、通路で打ち合われる。

この前のような巨大化はしていない。

『力はサイバミティが上だけど、技術はマルテの方が上。すぐにマルテが勝つだろうね。メル姐さんは——』

わかっている。

サイバミティは人間を襲わない。

この兵士達もクリロノミアを操るが、私ではなくサイバミティを狙ってくる。

そして、バリガンもサイバミティを襲うだけで私を狙ってこない。

どうもこの世界では人間は重要視されていないようだ。

人間が倒れてもクリロノミアはある程度動けるらしいのでそのためだろうか。

サイバミテイが負けそうになっていいる横をステルスで通過して、バリガンのところへ歩み寄る。

誰も彼もサイバミテイとマルテの戦いに目が行き、私がちよつと消えてしまったことに気づいていないようだ。

そして、私はバリガンの後ろに回りこみ、その背中をシュウで刺す。感染により周囲にいた兵士やクリロノミアもばたばたと倒れていく。

マルテもこちらに気をとられる。サイバミテイがその隙を逃さず、矛を彼の心臓部に突き刺す。

周囲の全員が光に消えたところで、私たちは先を進むことにした。

「敵、排除完了」

サイバミテイが、私に報告してくる。

ところで、お前は人間を襲わないな。なぜだ？

「人間は敵ではない」

クリロノミアは敵なのか？

「敵だ」

なぜ敵なんだ？

襲いかかってこない奴もいるだろう。

お前と遊びたがってた奴だっていたはずだ。

「敵だ。そう教わった」

『誰に？』

「誰に……？ 誰……？ 教わった。あいつは言った。あいつらは敵

だ。敵なんだ」

『あいつって？』

「あいつはあいつだ。あいつは言った！ 敵……」

急に静かになった。

大丈夫か？

『セーフティが働いちやった』

つまりるところ敵らしいが、誰に教わったんだろうか。

『まだ人間を呼び出すには至ってないから、あの生きてた霊媒の記憶に違いない』

そうか。

まあ、そのうちわかるだろう。

どの辺りを彷徨っているのかわからないが、重要な場所というのは人や設備が増えてくる傾向にある。

その方面に進んで行けば、だいたい間違いないはずだ。

……今さらなんだけど、喋るクリロノミアがどうしてこんなに厚く保護されてるんだ？

この島のトップは、昨日見たなんとかっていう代理総統だろ。

そのおっさんがここの中にいる訳じゃないはずだ。

一番見晴らしが良い施設にいるって聞いた。

『空中都市で一番重要な人物はだくれだ？』

だから、代理総統でしょ？

『ぶつぶー。代理総統はすげかえできるから別にどこにいたって良いし、そもそもどうでもいい』

じゃあ、誰なの？

『空中都市を空中都市あらしめる人物。つまり、空中に浮かせる力を持った奴、あるいは物だ』

なるほど。確かにそうだ。

じゃあ、そいつがここ奥で守られてるんだな。

『それも違う』

何が違うんだ。

『この防御壁は外側よりもむしろ、内側に対して作られてる。さっきから簡単に突破できてるのはそのせい』

それはつまりどういうことなんだ？

『保護じゃない。監禁が正しい。行けばわかると思うね』

そうだな。

見てみればわかるか。

その扉は今までの扉よりも遙かに強固で分厚かった。試してみたが、シユウでも開けられそうにない。

こうなったら――、

『ゲロゴンブレスは使わないよ。危険だから』

先手を打たれてしまった。

『代理総統の認証が必要。もしくはそれ以上のね』

今から上に行つて連れてくるか。

いや、でもめんどくさいなあ。

『後ろの彼女でいけると思うよ』

えっ？

振り返ると女性が息を切らして立っていた。

着ている服や装飾品が豪華そうだから偉い人物だとはわかる。

……誰？

「あなたは何者ですか？」

メルだけど、そっちは？

「なぜこんなことをするんですか？」

喋るクリロノミアに会いたかったからだ。

いや、違うな。会わせてくれと頼まれたからだな。

で、そっちは？

「……そんなことのために、多くの命を犠牲にしたのですか！」

駄目だ。

誰なのか教えてくれない。

『オード第三王女でしょ。平野で追われてたのを見たし、近衛のバリガンがいたんだから。ついでに虎を出してた奴も途中で倒したよ』

……まったく気づかなかった。

あのときの姫様だったのか。

多くの命を犠牲にるのは間違いだ。そのうち生き返る。

私は人やクリロノミアを殺せない。直接はな。

矛の騎士からそれらしい話は聞いてないか？

「ああ、なんだ……、彼らは生き返るんですか。それなら話を早く済ま

せましよう」

今までの勢いが嘘のように引いた。

つまらなさそうな表情を見せたあと、にこやかな顔を見せる。

「私がここを開けます。その代わり、私に危害を加えないでください」
言っていることがすぐには理解できなかつた。

なんなんだ、この気持ち悪い女は？

『類友』

シユウがぼそつと呟いた。

ちゃんと聞こえてるからな。

『開けてもらえばいいんじゃない。何が目的なのかは知らないけどね』

わかつた。

手も足も出さない。

口は出すかもしれないが。

とりあえず、ここを開けてくれ。

姫様は楽しいげな様子で、扉の脇の設備に手と顔をかざした。

何度か変な音がした後に扉がゆっくりと開き始めた。

私と姫様が隙間から奥に入る。

ちなみにサイバミティは、先ほどから意識がないので脇に抱えている。

そもそもこいつを喋るクリロノミアと喋らせに来たのに、寝ている

ようでは意味がない。

部屋の奥には、卵形の箱が置かれていた。

箱にはいくつものロープ——シユウが言うところのコードが繋がれている。

その中にはやせ細った少年が目を閉じている。眠っているのだろうか。

「ホー。客人とは珍しい」

ぼんやりとした声が右から聞こえてきた。

そちらを見てみると、大きめの鳥かごに鼻が一匹入っている。

横向きの棒に乗り、羽をパツと広げてまた閉じた。

あれ？

誰もいないぞ。

さっきの声は何だったんだ？

『流れ読めなさすぎ』

「メル、貴方は何をしにここに来たのですか？」

……あつ、ああ、もしかしてこいつが喋るクリロノミアか。

よく見ると、鳥かごにも様々なロープが繋がられている。

「おもしろいお嬢さんだホー」

声とともに鼻の嘴が動く。

どうやら本当にこの鼻が喋っているらしい。

『ホーを付ければ良いという、安易なキャラ付けが気に入らない』

別にそこはどうでもいいだろ。

「ククヴァア様。お初にお目にかかります。私、イリヨス王国第三王女——エクリップスイ・メラ・オードでございます。クリロノミア最古の四体のうち、一体であるククヴァア様に伺いたいことがあります」

「なんだホー？」

「日食についてでございます」

しばらくオードとククヴァアは見つめ合っていた。

「何かお知りのようですね」

「ホー、ホッホー！ 知っているホー！」

ククヴァアはとてもおもしろそうな様子だった。

「どうかお教えください」

「あとどれくらいだホー？」

「一年以内だと考えています」

「ホー！ ホッホー！ ホホー！」

なんかホーホーうるさくなってきた。

今さらになってシユウが気に入らない理由がわかった気がする。

「ククヴァア様。どうか知っている事を——」

「知りたければ、僕をここから出すんだホー」

「出せばククヴァア様は私を殺すでしょう」

「ホーホッホー。もちろん。イリヨスの王族は皆殺しにするホー」
「なんだか剣呑な雰囲気だ。」

『そりゃ、こんなところに閉じ込められて、力を搾り取られてりゃ怒るでしょうよ』

そうか。

じゃあ、あそこで寝ている奴もずっとここに寝ているのか。

「そうだホー。死ぬまですつと搾り取られて、死ねば別の人間に換えるんだホー」

ずいぶんとひどい話だ。

「君たち人間は僕たちを道具としか思っていないホー。それどころか同じ人間ですら道具扱いだホー」

「違う」

おや、脇の方から声が出た。

どうやらサイバミティが目覚めたらしい。

「貴様達は道具ではない。敵だ！」

脇から抜け出そうとしたところで首根っこを捕まえる。

「離せ！ 敵は排除しなければいけない！」

「ホー……。君、もしかしてシクティ？」

「俺はサイバミティだ。シクティなどではない！ 敵は排除だ！」

さらに暴れようとするので首を絞めて落とす。

「ホー。やっぱりシクティだホー」

知り合いか？

私はこいつをお前に会わせに来たんだ。

「大昔の知り合いだホー。元からおかしな奴だったけど、頭のおかしい人間とつるんで、ますますイカれた奴になってしまったホー」

ちよつとだけ嬉しそうな声に聞こえた。

「ホー、あと一年。一年でここでの生活も終わりだホー。アネモスに空が見せられないのが残念だホー……」

アネモスって何？

「僕の宿主。そこで寝ている子だホー。今はもう目を覚まさないけど、ちよつと前までよく話をしてたんだホー」

ふうん、本人が見たがってたの？

「そうだホー」

お前も見せたいと思ってる？

「ホウ」

それは肯定と受け取るぞ。

こんなつまらんとこにいてもしょうがないだろう。

出るのを手伝ってやろう。

問題は？

「ホー？」

「数多くあります」

お前には聞いてない。

『まず、こいつらが出て行ったら都市が落ちる。それと宿主が持たないかもしれない。ついでに姫様を含む王族とやらが殺される』

最後のはどうでもいいな。

解決策は？

『そこで寝ているガキにパーティーリングを付けて登録。それで後の二つの問題は解決する』

ふむ。

『装置を壊した後は急いだ方がいいから、先にリングを出しておくべきかな』

なるほど。

袋の中からパーティーリングを取り出す。

そして、少年の寝ている容器をシュウの指示のもと斬っていく。

「何をしているのです！ お止めなさい！」

オードが激昂しているが無視する。

『いや、演技くさい。怒っている振りをしてるだけに見える』

ふうん、なんでそんなことを？

いや、どうでもいいや。

パーティーの登録は無事に終わった。

「メル、貴方は自分が何をしているのかわかっているのですか?!」
それはよく尋ねられる。

もちろんわかっているとも。

「私は私のしたいことをしている」

堂々と悪びれることもなく告げる。

姫様から表情が消えてしまった。呆れているのだろう。

『おい、梟。聞こえるな』

「ホ、ホー。聞こえてるホー。誰ホー？ どこから話してるホー？」

『今から搾取装置を斬る。その後は、島をゆっくり下ろせ』

「しよ、正気きホー？」

私はいつでも正気だ。

で、どれを斬ればいいんだ？

『一番上の太い線』

サクツと斬る。

斬って数秒すると、地面が揺れた。

「このままでは天空の都が地上に落ちてしまいますよ」

姫様が言葉を取り戻したらしい。

私も最初に天空だの空中だのと聞いて懂れた。

でも、ここはただ浮いてるだけで、それ以外に特徴がない。

なによりダンジョンがない。

「だんじょん？ それが何かわかりません。しかし、空で生きる人々の暮らしと比べられるほど大切のものなのですか？」

無論、大切だ。

空での暮らしはなくなってもいいが、ダンジョンがなくなったら生きていけない。

そもそも別に空で暮らせなくなっても、地上で生きればいいだろ。違うのか？ 違うなら私にもわかる言葉で教えてくれ。

『珍しく正論言ってる……。まあ、そのとおりだね。地震対策でもないし、汚染大気から逃れたわけでもない。ましてや太陽光や風力で発電をしているわけでもない。エネルギーの無駄遣いだよ。見栄なのか威厳なのかは知らないけどね』

威厳ね……。やたら地上の人間を馬鹿にしていた言動があったな。一度、自分たちもそうなってみれば良いだろう。

少なくとも私には、そんなつまらん威厳とやらの誰かの生き方を奪う価値があるとは思えん。

「ホー。浮遊石に力を込めないと地面に激突するホー」
それは困る。

落ちるのいいが、静かに下ろせないのか？

『そいつをそこから出さないといけない。容器の上をズバツと斬っちゃって』

言われたとおりに斬ると、梟が飛んで出てきた。

私を見向きもせず、後ろへと飛んでいく。

振り返ると、透明な板越しに石が置かれていた。

入口から見て左の壁だ。今まで正面と右しか見てないので気づかなかった。

梟が透明な板を割り、石の上にそつと体に乗せた。

見た目に変化はないが、揺れが徐々に収まる。

「……おもしろい」

オード姫は、楽しげな様子で私を見てきている。

考えがまったく読めない。本当に気持ちの悪い奴だ。

「姫！ オード姫は何処に！」

大きな声と多数の足音が近づいてきた。

どうやら倒した奴らが復活してしまったようだ。

「バリガン！ 私はここにいます！ 早く！」

「姫！ ぐ無事で！」

ついに来てしまったか。

「あの者に力尽くでここを開けさせられました！」

オードが私を指さしてくる。

「なんとということを！ 姫は悪くありません！ 何はともあれ、ぐ無事でなによりです。ここは危険ですので、どうかお下がってください」
騎士たちにやんややんやと言われながら姿が遠ざかっていく。

顔を手で覆ってはいいたが、隙間から見えたのは口角が異常につり上がった笑い顔だった。

何がそんなにおもしろのだろうか

『やれやれ、何だか本当に気の抜ける連中だな』

クリロノミアどもがじわりじわりと距離を詰めてくる。

奴らと私の間に、梟が割り込んで来た。

その足には、先ほど乗っていた石が掴まれている。

「ホー。十分な力を込めたホー。さっそく出て行くとするホー」
よし。

じゃあ私が道を作るから――、

「不要だホー」

何か形容できない音が聞こえた。

無理矢理、文字にするならミシヤとかグシヤだろうか。

『上だね』

見上げると天井がめくれていた。

さらにその上の区画もに穴が空き、遙か上には青空が見えている。

なんだこれ？

『梟の力でしよう。うーん、なんだろう。圧力にしては変な千切れ方だな』

おろ？ おおっ……おお！

私の体が浮き始める。

周囲の騎士達も驚いて、その場で見つめるのみだ。

後ろを見ると、寝たきりの少年もふわりと浮かんでいた。

「イリヨスの姫！ 知りたいことはファレナに聞くんだホー！ 彼女は人間びいきしてるから教えてくれるホー！」

梟が天井の穴から出て行き、少年と私もその穴から外に出される。

抵抗することもできず、梟の力に身を任せる。

都市に出て、空からその様子を窺う。

誰も彼もが私たちを見上げていた。

隣で飛んでいた少年の目がうつすら開いていた。

口がわずかに動いたように見えたが、何か言っただろうか。

『「青いね」かな』

「そうだろう、青いだろ。見てるホー？ ヴロヒ、ウラノス、ケラヴノス、スイエラ、ニツクス……」

何だそれ？

『梟の過去の宿主たちでしょう。横からでも余裕で出られるのに、わざわざ上に穴を空けたのはそういうなんじゃないかな？』

どういうこと？

「彼らに空を見せてやると言ったのに、叶えられなかったんだホー。空の青さを伝えるには、人の命は短すぎるホー」

そうか……。たしかにあの部屋からでも空が見えていた。

「感謝するホー。さすがはシクティとつるむ人間だホー」

褒めてるのか貶してるのか判断がつかない。

『とりあえず、フェガリ教団の研究所に行こうか。博士に報告もしないといけないし、その少年もしばらく安静にさせないといけない』

シウウが目的地を伝え、梟がその方向へ飛ぶ。

私も青空を見ながら、飛ばされていく。上はどこまでも青空だ。

雲に気持ちあるとすれば、風に流され、ずっとこの青空を見続けなければならぬ。

それは、さぞ退屈な旅だろう。そんな取り留めもないことを思った。

研究所に到着した私たちはアラフニに迷惑がられた。

それでも研究所の一室をきちんと掃除し、宿主の体調に気を配っていたあたり良い奴なのだろう。

サイバミティはまたしてもロープに繋がれている。

「ふむ。サイバミティにクリロノミアが敵だと教えた人物がいたのか」

『そう。この梟がその人間を知ってるらしい』

「間違いなくあの人間だホー。その人間並みにぶっ飛んだ奴だったホー」

博士に、剣に、梟か。

変なメンバーが揃ってきてしまったなあ。

ひよっとしてアラフニは、私もこの一党だと考えているんじゃないか。

さつき出迎えられたときも、また増えてるって感じの目でこちらを見てきてたし。

「ククヴァヤ。その話はどれくらい前で、何という人間だったのかね」
「人間の名前は覚えてないホー。少なくとも一千万年は前の話だホー」

「……………えつ、そんな昔の話なの？」

「百年とかそれくらいかと思ってたんだけど。」

「私も驚いた。そんなにも昔のことなのか。それならばちようど良い。私はクリロノミアについて聞きたかったのだ。君たちはいったいどこから来たのかね」

「変な質問だホー。自分たちの教団の名前にもなってるのにホー」

「やはり…………。やはり、そうなのか」

「ホー。月からやって来たんだホー」

「…………月って、あの空に浮かんでる月？」

「クリロノミアが月の石を霊媒として出てきているから、もしかしたらとは考えていた。それでは化石から生じる生物も、元は月からやってきたということかね」

「当然だホー。人間が出てきたのはここ数百万年ほど前の話だホー」

『時系列がおかしくない？ サイバミティ——当時のシクティと頭のおかしい人間がつるんでたのが一千万年前。人間が誕生したのが数百万年前。そのメル姐さん並みに頭のおかしい人間はどこから出てきたの？』

「そう言われれば確かにそうだ。」

人間の誕生よりも先に人間が出てきている。

あと私を比較対象に出すのはやめてくれ。

「そいつは扉からやって来たホー」

「扉？ それは君たちがやってきたものと同じかね？」

「博士が私とシユウを見てくる。」

『そうかもしれない。一回戻って史竜に聞いてみようかな』

「史竜？ それなら違う扉ホー。あの人間が倒した扉にいたのは虹竜だったホー。今は海の底だホー。ファレナが知ってるかもしれない」

ホー」

ファレナって誰だっけ？

なんか姫様に言ってたよな。

『海底都市ラスピにいる喋るクリロノミアだったはず』

……ふむ。

行くだけ行ってみるとするか。

「やめた方がいいホー」

なんで？

姫様との別れ際に、人間びいきしてるとか言ってただろ。

あれは嘘なのか？

「ほんとだホー。彼女は人間好きで、人間が大好きなんだホー」

言っている意味がよくわからなかった。

人間が好きなら話が通じるんじゃないだろうか。

「過保護なんだホー……」

なんだか歯切れが悪い。

とりあえず次の目的地は海底都市ラスピにした。

海底に都市があるなんて不思議なものだ。

今度こそ穏やかな旅になるだろう。

3. 流れるは水、失うは都

教団の支部は海底都市ないらしい

近くの港町までは、梟に送ってもらえた。

ここからどうやって行くかは知らないが海底都市に向かう。

「敵はどこだ？」

今回もサイバミティがいつしよである。

研究所で梟がいろいろと話していたが効果はなかった。

アラフニが、今回はくれぐれも、絶対に、暴れてくれるなど言ってきた。

一度や二度じゃない。五回は言われただろう。

気を付けないといけない。

『この時点でもう駄目な気がする』

この大陸はイリヨス王国とかいうのが一国で統治しているが、海底都市は管轄外のようなのだ。

ファレナというのに裁量が与えられている、という体裁になっている。

はつきり言うのと、国も手が付けられないらしい。

波止場のある街に入ると、見覚えのある一団が騒いでいた。

「ええい！ 離せ！ 姫様を迎えに行かねばならん！」

ひげ面の騎士が他の騎士に羽交い締めされている。

「お待ちください！ バリガン殿まで行かれては、団を統率するものがいなくなります！」

「姫様あつての団であろう！ 姫様が発たれて、もう二日が経っているのだぞ！」

『何があるうと、ここで待て』との姫様からの厳命！ お忘れになったわけではありませんまい！」

バリガンはぐぬぬうと唇を噛み締める。

なんかおもしろそうなことになってるようだ。

しかし、姫様は一人で行ってしまったようだな。

『よほどそいつらに聞かれたくない話をしたかったと見える』

何の話だろうか。

『姫様が「日食」って言ってた話でしょう』

日食って何なの？

『月が太陽と地球……じゃないな、この世界の間に来て、日光を遮り、恒星が見えなくなるよ』

いや、それくらいはさすがに知ってるよ。

私のいた世界にだってあった。

別の意味があるんでしょ？

『史竜のあと二十日で滅ぶって話だと思っよう』

おお、そーいやそんな話もあったな。

月がでかいことにもすっかり慣れてしまっただけで忘れていた。

あと何日だっけ？

『今日入れて十八日だね』

あら。

もう二十日を切っていたのか。

それで、なんで滅びるのかわかった？

『月が落ちるんだと思ってたんだけど、ずっとあの距離だから今さらだよ。梟は来るべき日とか言ってた。やっぱり、次の日食で月が落ちてくるのかもしれない。そのあたりは俺も姫様に知ってることを聞いてみたいと思ってる』

じゃあ、やっぱり行くしかないな。

「バリガン殿！」

一人の騎士が髭の騎士を呼びつつ、その指を私に向けている。

「き、貴様はー！」

騎士達が顔を歪めつつ私を見て来る。

クリロノミアをまだ出していないため、隣に立つサイバミティは興味なさげに立っている。

クリロノミアを出そうとする騎士らを、手を広げてみせることで止める。

戦いになっても勝敗は決まっているし、サイバミティが暴走するかやめてほしい。

私は海底都市に行く。

おそらく姫様にも会うだろう。

連れて帰ることができるかもしれない。

私たちの力は、なによりもお前達がよく知っているはずだ。

さて、そうは言ってみたものの、なんとなく先が読める。

矛の巨人を出して襲いかかってくるんだろうな。

『まあ、そうでしょうな』

騎士A以外の騎士達は私を睨み付けている。

肝心の騎士Aは目を閉じていた。

「バリガン殿！ なめられたままではいられますまい！ 騎士団の力を見せてやりましょう！」

「アエラキでの屈辱。今、果たさず、いつ果たすおつもりか！」

「国敵でござります！ 正義は我らにあり！」

声とともに騎士達の視線が私から騎士Aに向かい始める。戦闘開始の合図を待っているようであった。

騎士Aの目がカツと開かれた。

そのまま荘厳な姿勢を保ちつつ私に歩み寄る。

あと数歩というところで止まり、私から視線を逸らさない。

「姫様を頼む」

頭を下げることもなく、手を差し出しもしない。

ただ私をじつと見つめてそれだけ告げた。

『……こいつ、なかなかどうして——』

シユウの言いたいことが私にもわかる。

こいつを馬鹿にしていた自分が恥ずかしくなった。

私に対する怒り。

騎士団をまとめあげる者としての誇り。

空中都市を落とした犯罪者に対する己の責任感。

それらをクリロノミアに写し、力としてぶつけることはどれだけ楽で魅力的な選択だっただろう。

しかし、奴はそうしなかった。

好き勝手、自分勝手に生きる私とは真逆の道を進んでいる。

ただ一人の他者のため、自分の欲求を滅した。

方向性はまったく理解できないから鼻で笑えるが、その道を進む姿を笑うことはできない。

それは鏡に映る自分を笑うようなものだ。

『あの姫様にはもつたいない忠臣だね』

騎士A。名は、バリガンだったか。

騎士バリガン。その依頼、冒険者メルがたしかに引き受けた。

自信満々に依頼を受けたのは良いが、どうやって海底都市に行くのだろうか。

バリガンと向かったのは波止場から遠く離れた浅瀬だった。

周囲は恐ろしいほど静かで、誰も人がいない。

そんな浅瀬に看板が刺さっている。

“この先 海底都市ラスピ
今すぐ引き返しなさい”

超上級ダンジョンの入口に似たような看板があったことを思い出
す。

何なの？ そんなにやばいところなの？

さらに進み、膝上くらいまで水が来た。

そこにまたしても看板が立っている。

“命は親から頂いた大切なもの——”

家族を思い返し、立ち止まって考えてみましょう……などと書いて
ある。

『樹海じゃないか。引き返そう。そもそも道がない。これじゃ、入水
自殺だよ』

そうするか。

船とかクリロノミアで行くのならまだしも、これはおかしい。

「敵だ！ 排除する！」

横にいたサイバミティがいきなり叫んだ。

水しぶきをあげながら、沖へと走って行く。

「排じ——」

そこそこ進んだところで、サイバミティは水の中に呑み込まれるよ
うにして消えた。

しばらく待つてみるが浮き上がってこない。

深いところに落ちたのだろうか。

けっこう重いからな。浮かんでこられないのかもしれない

やれやれ世話のやける奴だ。

『いやあ……、そんな消え方じゃなかったよ。クリロノミアがいるら
しいから気を付けてね』

そういえばサイバミティが叫んでいたな。

そいつにやられたのかもしれない。

サイバミティが沈んだ付近まで来てみたが何もなし。

砂浜が足下に広がっているのが見える。

どこに行つたんだろう？

砂に埋もれてるんじゃないかと、シユウで足下を突き刺してみた。
……へ？

弾けるように地面が消えた。
周囲の海水や砂が呑み込まれるように、突如できた穴に落ちていく。

もちろん穴の中心にいた私も、奥へと吸い込まれていった。

真つ暗闇を落ちていき、あるとき何か柔らかいものに当たって勢いが止められた。

チートを使っているから暗くても見えるはずなのだが、特に何も見えてこない。

『泡の中だね。俺を無造作に振り回しちや駄目だよ』

泡の中と言われれば、確かに足下はぶよぶよしている。

壁も透明でそこから先は海水になっているようだ。

ここが海底都市ラスピ？

暗くて狭くて何も無いぞ。

「人間さん、人間さん。お名前はなんていうの？」

穏やかで優しい声が響いた。

どこから聞こえているのかわからず、辺りを見回す。

やはり姿は見えない。

仕方ないので、名前を名乗る。

「メル——メルさんね。覚えてたわ。先に来たクリロノミアはあなたのかしら？」

いや、つるんでいるだけだ。

私のものではない。

「ふふ、そう。ところで、ここに来た理由はなにかしら？」
姫様を探しに来た。

「ああ、オードさんね。ラスピにいるわ」

そうか、無事だったか。

「もちろんよ」

無事なら良い。

あと、もう一人——いや一体、用があったんだ。

名前はなんだったかな。

『ファレナ』

そう、ファレナとかいう喋るクリロノミアだ。

「あらあらあ、千客万来ね。ファレナさんに、どんなご用件なのかしら？」

海の底に扉があつて、そこに虹竜つてのがいるそうなんだ。

一千万年くらい前、その虹竜を倒した人間について教えてもらいたかった。

「……ずいぶんと昔の話ね。そんなことを知っているメルさんは何者なのかしら？」

私はただの冒険者だ。

それより、そつちこそ何者なんだ？

どこから私に話かけている？

「あつ、ごめんなさいね。驚かせちゃいけないと思つて……。でも、メルさんなら大丈夫そうね」

何が大丈夫なのかわからない。

『右』

右を見てみると、泡の先に暗闇が広がっている。

……特に何も無いが？

『よく見て。それは暗闇じゃない』

じつと見ていると暗闇の中でも色が違う部分があつた。

私の身長よりも大きいだらう。丸いものがわずかに動いている。

何だろうと泡の境界面まで近づけてみると、黒く深みのある物質が見えた。

何だこれ？

黒い水晶か？

『目』

はあ？

『だから、目だつて。メル姐さんにも付いてるでしょ。ま〇こだよー！』
眼まなこでしょ。

なんで間をばやかして言うの？

「さつきから誰と話しているのかしら？　メルさんのクリロノミアは見えない子なの？」

いや、私にクリロノミアはいない。

それよりそっちの姿こそ私には見えないぞ。

「あらあら、そうだったの？　私にも宿主がいらないわ。私たち、仲良くなれそうね。ふふっ」

『なに笑とんねん』

正面に見えていた暗闇が右から左へと動いている。

その暗闇が通り抜けると、そこにはさらに遠くまで続く暗闇が残っていた。

今、目に見えているものが海水だったとようやく気づいた。

それでは先ほどまでここにあった暗闇はなんだったのか。

暗闇が通り抜けていった左に目を移す。

ほの暗い水の先に、大きな魚が旋回している様子が見えた。

その大きな魚は徐々にこちらへと近づいてくる。

思わず後ずさりしてしまった。

魚が近づくにつれ、視界が一面ほぼ魚になってしまったからだ。

『勘違いしてるけど、こいつは鯨だよ。魚じゃない』

どちらでもいいことだ。

大丈夫なのか？

「安心して」

正面からこちらを見据えてくる。

見据えると言っても大きすぎて、どこが目なのかすらわからないのだが……。

「絶対にこのファレナさんが、貴方たちを災厄から守ってみせるから」

『俺が守護る』

正面の鯨は守ると語った。

腰の剣は、発音が同じだけできつと違う。

それよりどう思う？

『安易な過保護なお姉さんっぽいキャラ付けが気に入らない』

そんなことを聞いたわけじゃないんだが……。

「ラスピが見えてきたわ。安心して、ファレナさんが一緒だからね」
泡の下から、白くぼんやりとした光が見えた。

足下の一帯が半球状の泡で覆われ、その中に多くの建物があつた。
祭りで賑わう夜の街を上から眺めている錯覚に襲われる。それく
らいの明るさだ。

ただ、それがやはり錯覚なのだ気づかせるのは、その街に誰一人
として姿が見えないからだろう。

私のいた泡が街の泡とくつついて、私はラスピに降り立った。

上から見ていた印象どおりだった。広く明るい閑散としており
寂しい。

ファレナとかいう鯨は、街の泡の上を泳いでいる。まるで鯨が飛ん
でいるように見える。

『俺のいた世界……いや、国の創作だと、鯨はたびたび空を飛ぶんだ』
なんで？

『憧れ、あるいは願望かなあ。絶対に飛ばない、飛べるはずのない重
量・大きさのものが見上げる位置にある。崇拜心が刺激されるのか
も』

わからんでもないな。

しかし……。

『そうだね。ある人は別の感情を抱くかもしれない。圧倒的存在によ
る抑圧感とかね。鯨のフォルムがその二つの思いを上手い具合にブ
レンドしているのかも』

どつちつかずってことか？

『どつちつかず……いや、ニュアンスが違う。中途半端、あやふや、
曖昧——そう、曖昧がしつくり来るな。うん、この曖昧さが俺のいた
国の国民性に馴染んだんだろうね』

お前の国の文化はよく聞くが、つくづく変な国だな。

変態しかないんじゃないのか？

『それは否定できない』

変態は軽く笑った。

「私から見ると、メル、あなたも十分変態ですよ」

後ろから声がかかり、振り向くと見覚えのある顔があった。

白を基調にしたドレスと、街の白い外観と明かりが合わさってまるで姫のようだ。

『いや、実際に姫だから。まあ、ここには守る騎士も讃える民もいないんだけど』

尋ね人はあっさりと見つかった。

あとは虹竜を倒した人間のことを鯨から聞いて、さっさと撤収するでしょう。

「出してもらえませんか」

姫様があっけらかんと言った。

どうして？

「私たちを守るためです」

『ここにいれば日食から守れるってことでしょ』

日食から私たちを守る？

「さようです」

そもそも日食ってなんなんだ？

「それは……、話しても信じていただけないでしょう」

姫は首を横に振る。

肩にかかった亜麻色の髪がくすぐったく見えた。

そうかな？

私はけっこう簡単に信じてしまうタチだぞ。

「それではお話ししましょう。一年以内に月が落ちてきます」

姫は笑顔で語る。

特に感慨もわかないので黙って聞く。

「ねっ、信じられないでしょう？」

いや、普通に信じるけど。

どう見ても落ちてくるだろ、あれ。

近すぎる。最初、見たときは一晩様子をみたくらいだ。

「……貴方。何者ですか？」

メルだ。

冒険者をやっている。

「それは聞きました。どこから来ましたか？」

うん？

変な質問だな。

意図しているところがよくわからん。

「この国で——この世界で生まれ育った人間であれば、あの月の大きさに疑問を抱くことはありません。あなたはこの世界の人間ではない、と推測できます」

ああ、そういうことね。

私は隣の世界からやって来たんだ。

ほら、お前がちよっと前に教団から逃げてただろ。

その近くに異世界への扉があつてな。

さて、信じられるか？

「エリビア山脈。何度か大規模な探索が行われたはずですが……」

扉の場所は、外から発見されないようにすごい魔法陣が組み立てたようだぞ。

シユウが見つけれられないって話していたから、まず間違いない。

「シユウというのは、貴方のクリロノミアですか？」

いや、違う。

私のいた世界にクリロノミアというものはない。

シユウというのは、この剣でな。何と言えればいいのか。

そう——変態だ。

失礼。

シユウを姫様の手の甲につける。

ビクツと震えたが、かまわず押し付け続ける。

『お初にお目にかかります、エクリプスイ・メラ・オード姫殿下。私、メル の相棒を務めておりますシユウと申します。こちらの世界に来てまだ日が浅く、失礼な物言いがあるかもしれませんが。なにとぞお許しくださいませよう、よろしく申し上げます』

……なんだあ、その、気持ち悪い挨拶は？

蕁麻疹と鳥肌が一気に出てきたぞ。ついでに吐き気もだ。

「隣の世界では、これが気持ち悪いんですか。やはり文化が違うのですね」

『はい。文化は大きく異なりますね。誠に遺憾なことです』

おい、その喋り方をやめろ。

「私への当て付けでしようか?」

『そう捉えていただいてかまいません』

会話の方向がよくわからない方へ飛んだ。

同時に姫の顔から笑顔が消える。

ただただ無表情になる。

「それならば、これでいきましよう」

『じゃあ、俺もそれでいこう。オードちゃん、胸おつきいね! 触らせ

て! ついでに谷間に挟んで!』

いつもの口調で、いつものようなことを言い始めた。

これはこれでアレなのだが、先ほどのものよりは幾分かマシだ。

姫様は表情は無から静止になった。

いきなりこんなことを言い出す奴は、彼女の人生の中で他にいなかったはずだ。

おそらく何を言われているのか理解がまるで追いついていない。気持ちちはよくわかる。

「……………これでマシ。文化が違うのですね」

ようやく出てきた言葉は先ほどと同じであった。

表情からは感情を読み取ることができない。

『ねえ、オードちゃん。日食について教えてよ』

「貴方が先です。知っている事を話さない」

『やあん、いけずう。日食はあと十八日でおきる。実質は十七日後だね』

若干だが、オードの目が開かれた気がする。

「根拠は?」

『未来を知っている奴に、その時間でこの世界が消滅するって聞いた』

姫が私を見て来るので、本当だと頷いた。

『消滅の原因が月の落下ってのはわかったんだけど、オードちゃんは

それをどこで知ったのかな？」

「メントルに聞きました」

どこかで聞いた名だ。

『皇都アナトリにいる喋るクリロノミアだね。そいつが「月が落ちるでー」って教えてくれたの？』

「メントルは助言をするだけです。その助言こそが彼の力であり、今までに違えたことはなく、国も王家も続いております」

つまり？

『つまりも何もそのまんまでしょ。すごい良く当たる占いだよ。で、具体的な助言内容は？』

「〴〵月、かつてないほど近づく。接触の時は近い。エリビア山麓にある月を崇める者達に会うべし」です。さらに言うと、彼は彼自身がおこなった助言の因果を知りません。メントルも思い当たる節があるようで、私に彼の知っている事を話してくれました」

それで月が落ちると知って、教団の支部へ行き、返り討ちにあったと。

「はい、さらに天空の都のククヴァヤに会うべしと続々と速伝が届き、今に至ります」

ふーん、やたら会うのはそのせいか。

『うん。事情はわかった。二つほど確認しておきたいんだけど』
「どうぞ」

『ここに来たのも、そいつの助言？』

「いえ、ククヴァヤから聞いた話をもとに来ました。罠の可能性も考えましたが、どうしても知りたかったので」

『軽率だったね。それと、もう一つ。メントルの助言は、王家じゃなくオードちゃん個人に対して出されてるんじゃない』

姫様は何も答ええない。

口角が異常に上がり、薄気味悪い笑みになっている。

この顔は以前も見た。おそらくこちらが本来の彼女の笑顔なのだろう。

『……そっかあ、だいぶ歪んでるねえ。うん、おもしろい。メル姐さ

ん、パーティーリングを渡してあげて』

質問の意図がよくわからない。

それはそんなに重要なことだろうか。

姫に対して出されたということは、王家に出されたも同然ではないのか。

とりあえず、一緒に地上へ帰る上でパーティーになっておく必要はありそうなので、リングを渡して登録しておいた。

「あらあら。二人ともさっそく仲良くしてるのね」

気の抜けた声が聞こえてきた。

『あとはこいつをどうするかだな』

「はい、そのとおりです」

ファレナが見栄えの良い笑みを貼り付けて、上から見下ろす鯨に見せつける。

「よかったあ。ファレナさん、とっても嬉しいわ」

自分に言われたと勘違いしているファレナは心底嬉しそうな様子で上を旋回していた。

とりあえずお腹が空いていたのでご飯を食べた。

建物の中に具材と調理器具があった。

この世界の調理器具は本当に素晴らしいものだ。

具材を器具に入れて、なにか出っ張りを下げて待つだけで暖かい料理ができる。

しかも手間がない上に、味もしっかりとあっておいしい。

私の世界にも欲しいな、これ。

『そう言えば、サイバミティはどこに行ったんだろう』

完全に忘れていた。

私がおここに来た本来の目的は、あいつと古代の人間について聞くことだったはずだ。

「あの人形でしたら、天井から落とされて地面に埋まっていましたよ」
さほど興味もなさそうにオードは語る。

私も目の前の料理と比べて重要度は低いと判断し、食べてから見に

行くことにした。

サイバミティは地面に埋まっていた。

たしかにこの地面はほぼ砂でさらさらなので埋まりやすいだろう。

『犬○家とか古いなあ。今の子は知らないんじゃない』

上半身が完全に埋もれており、足が二本、植物のように生えていた。地面に埋まったというより刺さったのほうが正しい。

足を掴んでひっぱり上げると、力なくしおされた。

たぶん泡の中で暴れて、セーフティーが働き倒れたのだろう。

「それは何ですか？」

何と説明すればいいんだろう。

博士とシユウによる変態合作が一番正解に近い気がする。

『エレベケフ博士は知ってるよね？』

「もちろん。王立クリロノミア研究所創立以来、最年少で選抜研究員に推挙された天才です。……といっても、知ったのはごく最近ですが。行きすぎた実験で研究所を追放され、教団に迎え入れられたようですね。今でも彼はクリロノミアの第一人者です。フェガリ教団へ行くよう助言されたのも、彼がいるからと考えていました」

『それなら話は早い。その博士が作ったクリロノミアだよ』

「敵は！ 敵はどこに行った！ 排除だ！」

ようやく目覚めたようで、起き上がりどこかへ走って行った。

特に迷惑にならないだろうから、自由にさせてやる。

「あれも喋るんですね」

『うん。問題はその記憶。あいつの中には、異世界の扉の前にあった生物のコアが入ってる』

「あれの記憶に関連することをファレナが知っているか？」

『いや。あいつの記憶と言うよりも、あいつの記憶の中にいる人間について興味がある。……もしかしたら、この二つは同値なのかもしれない』

しばらくするとサイバミティが戻ってきた。

叫んで通り抜けようとするところを捕まえて、そのまま一番見晴ら

しが良い場所に行く。

「ファレナ。話があります」

「オードさん。ご用かしら?」

姫が鯨を呼ぶと、鯨もすぐに出てきた。

虹竜を倒した人間について聞きたい。

「そんな話をしてたわね。メルさんはどうしてそんな昔のことを知っているのかしら?」

ククヴァアヤに聞いた。

ファレナが詳しいんじゃないかとな。

「残念だけど、ファレナさんもあまり覚えてないの。当時はまだこの辺りは海じゃなかったから、少ししか話ができなくて。それでも初めての人間だったから印象には残ってるわ」

そうなのか。

「一番詳しいのはシクティでしょうね。あの子は、ずっとあの人間と一緒にいたから。でも、もうずっと行方不明。グリフォスやメントルが知っているかもしれないわ」

シクティならここにいます。

「えっ……、その子、シクティなの?」

梟はそう言っていた。

今は記憶を失って、サイバミティと名乗っている。

「シクティなど知らん! 敵は排除だ! 排除なんだ!」

「ああ、ほんと。シクティね。お久しぶり、シクティ」

「俺はシクティではない。お前は誰だ!」

これで本人と認識されるのは、どうなんだろう?

元からこんなやつだったということは、かなりやばい奴に違いない。

「シクティ。思い出して。ファレナよ。あなたが海に落ちて溺れたときに助けてあげたでしょう」

「俺はお前のことなど知らん。敵は排除する!」

いつもどおりの回答だった。

「あの人間と私の背に乗って、海を渡ったことは?」

「人間？ 海？」

『海は広く、空は高い。私たちはいったいどこにいるのか？』。覚えてないかしら？」

「海は広い。空は高く、青い、月は近く、月が……敵だ！ 敵は月にいる！ 敵だ！ 敵……」

少し何かを思い出していたようだが、また元に戻る。

そして、感情の高ぶりに対してセーフティが働き、また倒れてしまった。

「ファレナ。あなた方は月から来たと言いました」

「そうね。ファレナさんも、ククヴァヤも、メントルだって、元はみんな月にいたのよ」

「月には何があるのですか？ その人形も敵は月にいると話していました」

「何もないわ。あそこには何もない。ずっと退屈な毎日を過ごしてた」

『どうやって、こつちに来たの？』

それはそうだ。

空を飛んで来たのだろうか？

「グリフォスのおかげね。彼が私たちをこちらに飛ばしてくれた。彼は万能だから何だってできたわ。……それでも彼にも読み通せず、思いがけないことが生じたの」

「それは何でしょうか？」

「月が、この理想郷に近づいて来たの。生地は、逃げ出した私たちを許さなかった。月が今の位置になったのはそのときね」

そんなことがあるのか。

それでも一千万年近く、月はあの位置にあったんだろ。

どうして今ごろになって落ちてくることになったんだ？

「月には今もグリフォスが一人で残ってる。彼が月をコントロールすることで、危機的な位置関係を維持しているわ」

そんなすごいことができるのか。

「私たちの中で一番最初に自我を持ち、圧倒的かつ万能な力を行使で

きた。理想郷へ私たち全員を送り、彼だけが月に残った。あの人間とシクティが、月へ行つたときも一蹴した」

それは、どうなんだ……。

月に行つたその人間がすごいのか、一蹴したグリフォスがすごいのか。

「グリフォスが凄い。確かに、あの人間も恐ろしく強かった。シクティと組んで、メントルが指揮する地上の軍をほぼ制圧した。そして、そんな人間をグリフォスは月まで飛ばした。そこでどんな戦いがあつたのかは知らないけれど、彼は月面で人間とシクティに勝つて、また地上に送り返した。そこから先の人間達は知らない」

そうして今に至る、と。

グリフォスつてのが恐ろしく強いつてことはわかった。

それで、結局のところなんで、今ごろになつて月が落ちてくるんだ？

そのグリフォスつてのが月にいる限り問題ないだろ。

「彼の考えが変わつたのかもしれない。昔からいろいろと考え込んでたもの。秘密主義なのよね、彼。いつかこうなるんじゃないかって話があつたの。私たちは日食と呼んでいた」

迷惑な話だ。

だいいち月にいるつて言われても、どうやってコンタクトを取ればいいのか。

『それは検討がつく』

「メントルですか？」

『ああ、そつちでもいいね。遠回りになるだろうけど』

「まだ、あるのですか？」

シユウは、まあねと軽く答えるに留めた。

月か。

行けるのなら行つてみたいな。

メントルとかいうのに、グリフォスと繋いでもらえれば行けるかもしれないのか。

さて、聞きたいことは聞けたしさつそく地上へ帰るとしよう。

へい、鯨。ここから出してくれ。

「だめよ。地上はもう危険だわ。貴方たちをみすみす死なせる訳には
いかない」

どうせここにいたって月が落ちてくれば死ぬだろ。

……死ぬよな？ もしかして海底だったら案外助かるの？

『海底だとか関係ない。月が落ちたら全部死ぬよ』

ほら、やっぱり死ぬじゃん。

「大丈夫。虹竜さんとも話をつけたから。貴方たちは扉の向こう側に
逃がしてみせるわ。ファレナさんに任せて」

駄目だ。話にならない。

本人が善意で言ってるから余計にめんどくさい。

もう倒してしまった方が早いんじゃないか。

『無理。ここだと地の利が完全に向こうにある。倒せたとしても、こ
の泡が消える。そうすると海底約百メートルとして、地上の約十倍近
い圧力が体にかかる。チートで対応する前に死ぬ可能性が高い』

倒すのは難しいか。

そうするとどうすればいいんだ。

『まずは話そうか』

その後、シユウの声を私が代弁し、さらに姫様も加わり話をしたが
駄目だった。

危ないから駄目の一点張りだ。もう飽きてきた。

『善意の押しつけほど厄介なものはない。理論が自己完結しちやっ
てる』

姫様も同感な様子だ。

私たちの声に聞く耳もたず。

よくわからんのだが、力尽くじや駄目なのか？

そこまで助ける助けると連呼するなら、本当に助けられるか試して
みるという。

『もうそれしかないかなって思えてきてる。オードちゃんのクリロノ
ミアって何ができる？』

「自分の位置を知ることができます。使い道はありません」

使い道が思い浮かばない力だ。

いや、ダンジョン探索のときの位置把握ができるとか？

まず間違いなく戦闘で何かができるということはないだろう。

『チートの設定は完了。水圧ですぐ死ぬことは避けられるはず。脱出は後から考えよう』

私はシユウを鯨に向ける。

『いや、万が一でも倒すとまずいし、戦闘できないスキルセットにしてから別の方向にして。街を破壊しよう』

「何をするのです？」

ゲロゴンブレスだ。

私は街とその先の境界面にシユウを向ける。

刀身は赤く染まり、そこから見慣れた熱量の奔流が直線に伸びる。

赤い流れは街の建物を巻き込んで、跡形もなく消し飛ばす。

さらに街の先にあった海水と泡との境界面も突き抜ける。

海水とゲロゴンがぶつかり爆発が生じた。

姫様がひつと悲鳴をあげて倒れそうだったので、シユウを持ってないほうの手で支える。

次は方向を変えて、街を最大限破壊できるようにもう一発発射する。

「メルさん、駄目よ！ やめて！ 何をしているの！」

見りやわかるだろ。

街を壊してるんだ。ついでの泡の壁もだ。

ほらほら、海水がすごい勢いで流れ込んできてるぞ。

住むところはなくなるし、このままだと私たちが海水に呑み込まれて死ぬ。

どうした？ 助けるんじゃないのか？ ほら、もう一発だ！

そんなに守りたいなら守ってみせろ！

「やめて！ お願い！ このままじゃ本当にラスピが——」

どうせ誰もいない都だろ。

ダンジョンでもないなら沈んでしまえ。

私たちは地上に帰る。

そんなに守りたいなら、ついてきて守れ。

それが嫌なら、ここで日食とやらまで一人で泳いでろ。

「……ひどく」

そう呟いてオードは私を見上げてくる。

「——でも、おもしろい」

その口許が笑っている。

なぜ、この状況でその表情ができるのだろうか。

「貴方。本当におもしろいわ」

姫様は声をあげて笑い始める。

残念だが、私は笑うことはできない。

街を破壊することはできたが、海水が押し寄せている。

本当に大丈夫だろうか。

自分でも滅茶苦茶をしているつもりだ。

私の中の第六感というべきものが逃げろと訴えている。

海水に呑み込まれる直前に、泡が私たちを包んだ。

都市が粉々になって海水にさらされている。

『祇園精舎の鐘の聲——。さて、どうなるかな』

鯨は力なく水にたゆたい、その光景を見つめている。

「ファレナ。地上に行きましょう。貴方ほどのクリロノミアなら大きさは調整できるでしょう。地上には多くの人があります。貴方が本当に人が好きで、守りたいのなら、私たちではなくその人達を守るべきです」

「なんだか嘘っぽい。」

本当はそんなこと欠片も思っていないんじゃないだろうか。

「駄目よ。ファレナさんは貴方たちも守るわ。貴方たちが何と言おうと、何をしよう——」

「そうか。」

それならさっさと地上へ向かってくれ。

私がここでゲロゴンブレスを撃ってしまう前にな。

泡は徐々に上へと向かった。

明かりを失った海底には、砂が巻き上げられ、もう底には何も残っ

ていない。

海面に出て、鯨の背中に乗せて送ってもらっている。

港町のすぐ側だと思っていたが、かなり離れていたようで小さくしか見えない。

「うう」

サイバミテイもようやく目を覚ました。

少し顔を上げて辺りを見回す。

「キルハ。ここはどこだ？」

寝ぼけているのだろうか。

クリロノミアは夢を見るのか？

「ああ、わかってている。こいつは敵ではない。敵は——」

うるさくなりそうだったので首を絞めて落とす。

キルハというのは誰だろう。

『もう忘れてる』

どこかで聞いたつけ？

どちらにせよ、名前がわかったところでどうすることもできんだらう。

『……やれやれ。まあ、いいや。先に行くところもあるし』

浅瀬の立てる位置まで来ると鯨は徐々に小さくなる。

海水に満ちた泡の中に、小さくなった自分自身も入り、それが水面にぶかぶか浮いている。

『便利な力だ』

砂浜を歩いていると、騎士達が走ってきた。

「姫様！」

「姫様だ！」

『姫様、抱いて！』

「姫様！　よくぞ！　よくぞ無事で！」

似た文句を並べて彼らは近くに寄ってくる。

変なのが混ざっていたが気にしない。

「バリガン。よくぞ団をまとめてくれました」

「もったいなきお言葉」

髭面はただ一言で応える。

続けて騎士は私に体を向けた。

「メル殿、感謝する」

「こちら一言だ。」

私は軽く手を挙げて応えた。

「そちらは？」

私の横にある泡を見ている。

泡の中は水が満ち、鯨がぷかぷか浮いていた。

「海底都市を統治していたファレナです。海底都市は、もう存在しません。メルが破壊しました」

騎士達は信じられないものを見る眼をしている。

「怖がらないで。ファレナさんが守るから」

鯨の背中付近から水が飛び出してきた。

『おいおい。潮吹きやがったぜ、こいつ』

バリガンらは再度、顔をオードに向ける。

しかし、顔を向けたまま何も言わない。

「どうしましたか？」

姫が尋ねると、バリガンは私と鯨を見つめる。

『内緒話するから、あっち行けつてさ』
なるほどね。

私は離れておこう。

「それには及びません。バリガン、話しなさい」

バリガンは躊躇いを瞬時に消し、堂々と口を開く。

「二点ほど速伝が入っております」

「二点目は、二日前。姫様が海底に向かわれた直後。国王陛下からです」

「父上ですか。『帰ってこい』でしよう？」

「はい。至急、皇都に戻るようにと。諸々の経緯をお聞きになりたいと」

オードは頷き、二点目を促す。

「二点目は、本日、助言者を騙る者からです」

「そちらにはなんと?」

「天の君、怒りに燃ゆ。陽光、汝の身を焦がす。太陽の都に戻るべからず」。姫様、これは……」

バリガンは心配そうな顔を見せる。

オードも困ったような顔をこちらに向けてくる。

「どう思いますか?」

私に尋ねてきた。

十中八九、私ではなくシユウだろう。

『メッセージを素直に受け取ると、父親は「何かいろいろ問題を起こしてるようだな。事情を説明しに帰ってこい」と言う。一方で助言者――メントルは「父親がブチギレて姫様に危害を及ぼすから、都には帰らない方が良い」と言う。帰ったら殺されるんじゃない? 良くて軟禁かな。行かない方が賢明だね』

後の方はそういう意味だったのか。

「メル。私は貴方に聞いているのです」

姫が私を見て来る。

あれ、ほんとに私に聞いてたの?

意味が無いことだ。こういった面倒ごとの判断は、シユウの意見が私の意見に等しいからな。

『……ああ、そっか。なるほどね。メントルの助言って対面しないと効果がないでしょ』

「はい、そうですがそれが何か?」

『いろいろと得心がいった。それなら、この予言めいた文も周囲の予言から判断して、それらしく書いただけの文章ってことだ』

「そうなりますね」

『それなら好きなようにすれば良い。行っても行かなくても歴史は変わらないよ』

私は行ってみたいな。

『メル姐さんが行きたいのは月でしょ』

うむ。太陽の都とやらはさほど興味がない。

月にいる奴との接触方法を、そのメンなんちゃらから聞き出した
い。

「決まりですね。皇都に帰りましょう」

皇都への道すがらバリガンは私に不満をもらした。

「卿が出向くところ悉く災厄が撒き散らされる。教団支部では奇襲失敗からの惨敗。天空都市は地に落ちる。海底都市は海の藻屑に消えたと聞く。しかしだ。皇都はそのようにはいかん。あそこには歴代最強のクリロノミアを使役するフォス陛下がおられる。さらには、その膝元にあつて太陽の光のごとく全てを焼き尽くすと謳われる陽光騎士団があるのだ。どうにもならんぞ」

怖いなら留守番しといていいよ。

「そうはいかん。姫様のおられるところこそ、我らがあるべきところなれば」

よくわからんのだが、国王と姫様だと国王の方が偉いんだろ？

姫様をかばいだてすれば、国王に楯突くことになるが良いのか？

「無論、良くはない。姫様にはきちんと王に事情を説明をして頂く。陛下は明敏であらせられる。説明をすればわかってくださるに違いない」

『バツカじゃねーの。問題の原因が一緒に行くんだぞ、わかってんのか？』

そうだな。

「うむ。——しかし万が一、陛下の怒りが収まらないとなれば、我ら身命を賭して姫様を守り抜くのみ」

理解はできないが、馬鹿にはしない。

当の姫は彼らのことをどう思っているのだろうか。

なんとなくだが、何とも思っていないんじゃないだろうか。

そんな奴に命を捧げると口にしてている彼らが哀れに思えてしまう。

「平穩無事に済むよう努めるのみだ」

バリガンは肩を張って、気合いを入れる。

そんな大事にはなるまい。観光するくらいの気持ちで良いだろう。

ついでにメンツユとかいうのに話を聞けばいいさ。

『名前が違う。それじゃ、ただのぶっかけうどん』

あれ、なんだったつけ。

メン……メント、メン〇スだ。

『コーラに入れたら嘔き出しそう。メントルね』

そうそうメントル。だいたいあつてたな。

まあ、気楽に行こう。

平和的な解決が一番つてもんだ。

4. 陽光、暁に消ゆ

自分で言つといて何だが、平和的な解決は可能なのか？

『無理』

即答である。

理由は？

『平和的つてのを話し合いと考えれば、双方に相手の意見を聞いて、認め合う姿勢が必要』

そうかもしれんな。

父親にその姿勢が欠けていると？

『両方とも欠けている。メントルから父親への助言は「娘を殺せ。良くても軟禁しろ」だろうね。これはメントルからオードちゃんに送られたメッセージから推測できる。父親はそれが国のためになると判断して実行に移す。オードちゃんの意見を認めることはおろか聞く姿勢すらない』

それは私にもわかる。

オードの方にもないのはなぜだ？

『オードちゃんも、「父親がメントルから助言を受けて自分を拘束しようとしている」とわかっているから。話は通じないと確信してる』

ふーん、よくわからんけど話し合いは無理なのね。

『そうだね。メッセージをそのまま素直に受け取れば、先に述べた理由で無理』

それ、なんか最初にメッセージを聞くときにも言ってたな。

素直に受け取らなかつたらどうなるんだ？

『そもそも話し合いは求められてない』

どっちみちだめじゃん……。

『そうでもない。素直に受け取らない方が後の展開がスムーズ。こっちが正解だろうね、やれやれだ』

正解だって不正解だっていいんだが、平和的は無理なんだろう。

無理だとわかっていて、オードが皇都に戻ろうとするのはなぜだ？

捕まりに戻るようなものじゃないのか？

『その質問、笑える』

なんで？

『そりゃ、メル姐さんが行くからだよ』

どゆこと？

『おもしろそうなことになるってこと。オードちゃんにとつてね』

あいつにとつておもしろそうなことって、とんでもないことなんじゃないのか。

でも、なんかそうなりそうな気配だな。研究所から梟も呼んでるし。

私、人形、梟、鯨、姫に、それを守る騎士団。

もはや何の集団かわからんな。

『異世界版ブレーメンの音楽隊か。さて、泥棒はどつちかな……』

巨大化した梟は風を切って、夜空をかける。

暁の空に、巨大な街並みのシルエツトが浮かび上がっていた。

ちょうど夜明けを迎えたので、最終確認といくか。

『主要な目的はメントルと話をすること。次点でオードちゃんと王様が話をすること』

うむ。

それはわかってる。

『まずは梟がかく乱。これは出来るだけ派手におこなう。陽光騎士団だかを引っ張り出す』

「任せるホー」

なんか楽しそうだ。

こいつはこの国を嫌っていたから喜んでるのだろう。

一般人の住む建物には、極力危害を加えないようにやっていく。

『鯨は姫様と騎士団を守って裏道に行く。こつそり父親にでも会いに行つて』

「大丈夫。ファレナさんといれば、何も怖くないわ」

「お任せします」

ちなみに梟と鯨はチートで強化をしている。

ただでさえ他のクリロノミアと一線を画する二体なのでおそらく手が付けられない。

騎士共は指輪が足りないから、そのままだ。バリガンにすら指輪は与えてない。

『メル姐さんは、他の二部隊が引きつけているのを利用してメントルに会いに行く。ついでにサイバミティもつれていく』

本当は外で暴れさせておきたいのだが、いちおうメントルとも引き合わせるらしい。

こんなところか。

とりあえず問題なさそうだな。

『問題あるよ。最後の作戦が残ってる』

どこが問題なんだ？

作戦も戦力も十分だろう。

最後の作戦とやらは何なんだ。

『最後の作戦はこうだよ。今まで伝えた作戦を全て放棄』

は？

なんで？

『メントルの助言で、筒抜けてるからに決まってるじゃん』

わかってたなら今まで、何で作戦会議してたの？

『わからない？ 暇つぶしだよ。作戦シミュレーション楽しかったでしょ？』

このクソ野郎が。

それで作戦放棄をしてどうするんだ。

『もし、このまま何もなかったら作戦放棄を放棄で』
筒抜けなんだろう。

駄目じゃん。……駄目か？

作戦が読まれたところで相手は防げるのか？

言っちゃ悪いが、こつちの世界の戦力ってかなり低いぞ。

エリート中のエリートらしいバリガンが、手加減して蹴って意識不明になるレベルだ。

クリロノミアの能力も厄介なものはあるだろうが、この梟や鯨を除けばさほど問題になるとは思えない。

『そのとおり。まず防げない。よしんば防げても被害は甚大なものになる——だから、メントルの能力は王に対して、こう告げているだろう。「敵対はやばい。きちんと対応しろ」ってね』

おや、平和的な解決になりそうだ。

お前は無理と言ったがなんとかなるんじゃないの？

『ちよつと待って。………おつ、やつぱりそうだ。あれを見て同じ事が言える？』

夜空は白み始め、皇都は日に照らされる。

私が見たどの都より、ダンジョンよりも巨大な建造群がそこに並んでいた。

その都を守る壁と門も厚く、高い。さらに頑強そうなクリロノミアが各所で睨みを利かせている。

荘厳な前門の前には、平野が広がる。

その平野には多数のクリロノミアが、複雑な陣容を構えていた。

おお、すごいな。

総力戦って感じた。

「陽光騎士——全団が出ていますな……」

バリガンが戦々恐々と漏らした。

「あつ、父上がいます。門のところ」

緊張感の乏しい声でオードが言った。

陽光騎士団の一番背後、前門に近い位置で黄金のクリロノミアが見える。

きんきらきんの隣に立っている金髪の男がこの国の王らしい。私の国の王よりは威厳がある。

こりや無理だ。

平和的な解決はできそうにないな。

こいつらは無視してメントルに直接会いに行くのはどう？

たぶん王城にいるんじゃない。

「メントルなら金髪の隣にいるホー」

「ほんとね。懐かしいわ」

……どこだ？

王の隣？ 誰もいないぞ。

ひよっとして私が王と思ってるあの金髪は王じゃないのか。

『あの杖じゃない？』

杖？

……そう言われると、確かに棒が地面に刺さっている。

杖じゃなくて棒じゃないの。あまりにもしよぼすぎて、視界に入ってこなかったぞ。

「あいつは！ あいつは敵だ！ 覚えているぞ！ 貴様の名は——」

騒ぎ出したサイバミティの頭を叩き、いつもどおり静かにしてもらう。

それより、勝てないとわかっていて何で軍を展開しているんだ？

玉砕するつもりとか？

『あり得ない』

ここなら都に損害はぶつからないとか？

『それはそうだけど、軍を展開する理由にはならないね』

戦力を分散させず、一カ所に集中させれば勝機が見いだせる？

『個体の力がほぼ同じなら数の勝負でそうなるけど、今回の場合は的になるだけ。戦力を分けさせて各個撃破した方がまだ勝機はある』

展開させるだけ展開させて私たちを威圧？

『近いけどやっぱり違う』

じゃあ、なんだよ？

『意地かな』

……は？

『ずいぶんと人間くさいね。あれ、本当にオードちゃんのお父さん？』

「私は人間らしくありませんか？」

なんで私を見て来るの？

聞いたのはシユウなんだから、シユウを見てよ。

『オードちゃんも人間らしいよ。でも、方向が真逆だ』

「私——父は苦手なんです」

『だろっね』

それで、どうするの。

降りて対話でも試してみる？

『ここまで整えられてたら、やることは一つだけだよ』

そうか。

シユウに手を伸ばす。

『憂さ晴らしとして、せめて徹底的にやらせてもらおうとしようか』

憂さ晴らし？

これから闘って勝つんじゃないのか？

『オードちゃんに、メントルからメッセージが来たでしょ。おそらく、

あの手紙を読んだ時点でこの展開が確定した。戦術的には俺たちが勝つ。でも、戦略的には王様の勝ちかな』

意味がわからないんだけど？

『あの手紙はメントルじゃなくて、王様とメントルが出したもの。そして、真の宛先はオードちゃんとメル姐さんなんだ』

どういうことだ？

『メル姐さんが天空都市のククヴァヤを経て、海底都市のファレナに至った時点で、メントルは気づいた。三角形ABCの辺BC上をBからCに移動する点Mに』

何それ？

『メル姐さんが意味不明なこと。点Mが何で、どうやって動いていて、なぜ皇都に来るのかもわからないけど、とりあえず来ることはわかってるし、いつ来るかも推測できる。ついでに、その点Mには点Oもなぜか一緒についてくる』

点Oつてのは姫様のことだろう。

『王様は、メントルの助言とそれに対する彼の推論を聞いた。内容はだいたいわかる。「よくわからんやべえ奴が姫を連れて自分に会いに来る。その過程で皇都を滅茶苦茶にするから手厚く出迎えた方が良い」だろうね。それで王様は国のために、メントルの助言と推論に従うことにした』

これが手厚い対応だとお前は言うのか。

だいたい手紙とどう繋がる？

『俺は心がこもつてると思うね。手紙に関しては、もしも手紙を出さなかったらで考えよう。メル姐さんはオード姫にくつついてぼんやりやってくる。戦闘の準備も特にせず観光気分でだ』
うむ。

そうなるだろうな。

『そこで王様がメル姐さんかオードに何かしたら、メル姐さんの国への敵対意識はまぬがれない』

そうかもしれない。

ちよつとくらいは暴れるかもしれない。

『ちよつとで済むわけがない。あの手紙は遠回しな招待状なんだよ。お待ちしておりますので、武力行使にてお越し下さいっていう』
わかりづら。

最初からそう書けばいいのに。

『それだと挑戦状になる。国への敵対意識が芽生えてしまう』

……そもそも手紙をださず、丁寧に応対すればいいんじゃないの？
『そこが意地なんだよ。よくわからんやべえ奴は、天空都市を落とすた罪人だ。へりくだって対応すれば臣下にも民にも舐められる。国家の器に亀裂を生じさせかねない。それに何より王自身が、よくわからんやべえ奴に最初からゴマ擦りなんてことをしたくない』
メントルの危惧していた敵対行為になるんじゃないのか？

『敵対意識、芽生えてる？』

いや、まったく。

王の気持ちとやらはわからんでもない。

それにこの光景を見れば、全力で出迎えているのはわかる。負けるとわかっていながらもかわらず、手抜き無しの完全な迎撃態勢。

悪い気はしないな。確かに懇切丁寧だ。

『でしょ。あつちもやられても死ぬことはないってもうわかってるだろうし、全力で挑んで来るでしょう。それで完膚無きまでに叩き潰される。その後、メントルと話したところで帰って頂く。相手がやべえ奴だっことはみんなにわかってもらえるし、そんな奴と損害無く和平を結んだということで王の評判も下がらない』

そうだろうか。

下がりそうな気もするんだが。

『そこはメントルの助言でシミュレーション済みだろうね。だいたい評判なんて宣伝の結果だよ。うまく話を広げられれば問題ない』
そうか。

じゃあ、心置きなくやるとしようか。

正面から斬りかかって、状態異常を感染させれば余裕だろ。

『メル姐さんは雑魚専だから余裕だよ』

それ褒めてるの？

意味がはつきりとわからんけど、馬鹿にされてる気がする。

『的確に表現しただけ。相手が複数でも個々がそこそこなら、ほぼどうにかできる。自分よりも明らかに強い単体相手は厳しい』
そうかもしれん。

じゃあ、雑魚専の力を見せるとしようか。

『待った。それでも良いんだけど、今回はせつかくのチーム戦だから彼らの力も借りるとしよう』

おお、あまりにもレアな単語を聞いた。

チーム戦。パーティの力を借りての連係プレイ。

なんといい心地よい響きだろう。異世界に来て良かった。

具体的にはどうするの？ 私は何をすれば良い？

『メル姐さんは見てるだけだね』

それ……………、連係プレイじゃない……………よね？

『まず、梟の力は念動力だ』

私の疑問に応えることなくシユウは話を進めていく。

粘土……なんだって？

『念力、サイコキネシスとか呼ばれるやつ』

そんなの初めて聞いた。

いや、サイコなんちゃらは私にもよく言ってるよな。

もしかして私と似たようなことなのか？

『だいたい合ってる。念動力ってのは意思だけで物体を動かすことが出来る力のこと』

すごいじゃん。

私を浮かせてたのもそれなの？

『もちろん。で、鯨の力は泡』

それはさすがにわかる。

水中で私たちを移動させたり、都市ごと泡に包んでたりしてた。

でも、ここは地上だ。水中ほど便利に使えないんじゃないか？

『地上にも水はあるよ』

どこに。

『上』

見上げると、真上には分厚い雲が覆っていた。

それでも明るいのは、日が射す地平付近に雲がないからだろう。

辺りを見渡すと、雲があるのは本当に私たちの真上だけだ。

『雲は水滴と氷晶の集合だ。梟に言ってる、この上に集めてもらった。

これを落とす』

いつの間に。

『メル姐さんがいびきかいて寝てる間に、作戦会議は済ませておいた』

ほんとひどい。

で、どうやって落とすんだ？

——というか、なんで落ちてこないんだ？

『ものすごくゆっくり落ちてきてる。終端速度が遅すぎるんだ』

それじゃ、いつまで経っても落ちないんじゃないか。

『そこで鯨の泡だ』

上空の雲が泡に包まれた。

少し膨らんだ？

『泡でパッケージして、膨らまして断熱膨張。さらに念力で揺らして凝結させて落下』

それでも雨みたいなものじゃないか。

相手が濡れるだけじゃないか。

『雲の重さってどれくらいか知ってる？』

浮いてるくらいだし軽いだろ。

『そう、上の雲くらいなら一立方メートルで一グラム』

それがどれくらいかわかろんのだが。

『塩が十粒くらいかな』

かつる。

そんなの落として意味あるの。

『今回集めた雲は、面積を十平方メートルに落として、その分、高さを集中させてみました。約十キロメートルと圏界面まで積んでおります』

やっぱりよくわからん。もっとわかりやすく言ってくれ。

いや、やっぱり言わなくていい。見た方が早い。

『そうだね。ちなみに泡できちんと相手の陣形の形に整えてから落とします。さらにスピードを上げるために、平面ではなく、まばらに落とします。加えて、上から念動力で押ししてもらいます』

そうするとどうなるんだ？

『こうなります』

比喻抜きで空が落ちてきた。

騎士達は逃げようとするか、ぼんやりと見上げるかのどちらかである。

そして、その両者とも一瞬で潰されてしまった。

砂煙と水滴が巻き上がり、視界が塞がる。

平手で細かい砂地を叩けば、手の平の跡ができる。

まさにそれがスケールを変えて私の目の前で起きてしまったのだ。

視界が晴れた後の光景を見て、私はそう考えた。

私と皇都の間に大きな雲の跡が残る。

おびただしいほどのドロップアイテムが水たまりの中で光っている。

無慈悲な雲から逃れる、あるいは防ぐことができたのは、ほんの一握りであった。

王もその幸運なごく一部に入っている。あるいは不幸なのかもしれない。

『いや王様は外すようにしたから。むしろギリギリで焦ってるくらいだよ。……じゃあ、メントルに会いに行こうか』

水でべちゃべちゃになった地面を歩いて王の元まで歩む。

ちなみにオード姫は梟の念動力で浮いていた。

私にもそれをしてくれればいいのに。

『さすがに生きてる奴はやるもんだね』

……そうか？

生き残った奴らは、ごくわずかの人員を集め、王への道をふさいでくる。

それでも近づいて来たところを、泡で浮かされて私に斬られ、梟の念動力で潰されたりちぎられたりする。

かかってくるが、すぐに倒せてるので強いとは思わない。

『目の前であんなことされて、それでもすぐさま王への道を塞ぐべく動けるんだから大したものだよ』

それは……、そうだな。

私だったら王とか見捨ててさっさと逃げてる。

気になって辺りを見渡すと、王以外には残っていない。

全ての人間があそこのきんきらきんのために死力を尽くしたわけだ。

とうとう王と話ができる距離までやってきた。

その両脇には棒と黄金のクリロノミアがそれぞれ立っている。

棒の方は立っているというより刺さっているといったほうが正しいだろう。

「父上。ただ今帰りました」

作りました感満載の笑顔を振りまいてオードが挨拶した。
王様は険しい表情でオードを見返す。

「うむ」

何か続くのかと待ってみたが、それだけである。

王の視線が私を含む、その他に移る。

「そちらの鼻がククヴァアヤ。泡の中にいる鯨がファレナです」

同じようにうむと頷くのみ。

最後に視線が私を捉えた。

「探検家のメルです」

探検家ではない。

冒険者だ。

「どう違うんでしょうか？」

……どう違うんだろう。

なんか、そう、言葉の響きというか雰囲気？

「探検家の方があつていると思いますよ」

探検家……、いや違うな。

やっぱり冒険者だ。

だよな？

『冒険者だよ。オードちゃんはまだメル姐さん知らない』

「これからの楽しみにしておきます。次はいつたいどこに行くんでしょう」

えっ、まだ付いてくるの？

「ここでお別れだと思つてたんだけど……。」

「嫌ですか？」

割と……。

なんか気持ち悪いんだよ。

「ひどいです」

オードは頬を軽く膨らませる。

それ演技だろ。そういうところだよ。

「その正直さを私は気に入っています」

『わかりみが深い』

なんだよ、わかりみって……。

「ずいぶんと仲が良いのお。儂が見たところ、ここまで楽しそうな姫は初めてかもしれんぞ」

「すごい嘎れた声が聞こえた。」

「王よ。どうじゃ?」

「王として述べる気はない」

「そっけない返答だった。」

「それよりこの声がメントルか。」

「そうじゃよ。儂がメントルじゃ」

「王の隣に刺さっていた棒きれを見つめる。」

「えっと、この棒がメントルで間違いないか?」

「どう見たら棒に見える? 杖じゃろ」

「どう思う?」

『とりあえず老人キャラっぽくしました、つてのが前面に押し出されてきつい。「儂」とか「じゃ」とかマジ勘弁』

「そうじゃなくて、杖か棒かだよ。」

『杖でしょ』

「……そう。」

「シユウも杖って言うなら杖なんだろう。」

「私が探検家か冒険者かくらいの重大案件に違いない。」

「敵だ!」

「今まで寝ていたサイバミティが目を覚ましたらしい。」

「宙に浮いた泡の中でもがいている。」

「貴様! 覚えているぞ。貴様は敵だ! メントオル!」

「棒きれを睨みつけつつ叫ぶ。」

「子供くらいの背丈の人形が、同じくらいの高さの棒に対して、獣のごとく吠える様はなかなか面白い。」

「ほ! お主、まさかシクティか。なんじゃ、生きておったのか」

「梟と同様、あつという間に言い当てられている。」

「こいつはこいつですごいな。」

「見た目はずいぶんと変わつとるが、中身は変わつとらんなあ。相も

変わらず、おかしな人間とつるんでおる」

「ほんとだホー」

私のことだろう。

別につるんでいるつもりはない。

それより月にいる何とかって奴に会いたい。

会いたいというか月に行きたい。話を通してくれ。

「月？ グリフォスのことか。儂は知らんぞ」

『そうだろうね』

は？

お前がグリフォスと話を通すんじゃないのか。

「儂がシクティとあの人間に負けてからは一度も話しておらんぞ。用があれば、あやつから話しかけてくる。儂はとっくに用済みという事じゃ」

なんだそりゃ。

無駄足も良いところだ。

どうしたらそいつと話ができるのだろうか。

「博士に聞けば何か教えてくれると思うよ」

……博士？

博士ってあの博士？

「そう、フェガリ教団アジトにいるエレベケフ博士」

何で博士が月にいる奴との連絡方法を教えてくれるんだ。

ほぼ無関係だろ。

「博士は、ここにいてる三体の喋るクリロノミアの存在を知ってた。グリフォスの名前すらもね。何も知らないはずがない。直接かどうかは知らないけど、何らかの手段があるんでしょう」

知ってて黙ってたな。

『もちろん。話したら来なかったでしょ？』

当たり前だろ！

わざわざ来る必要がない。

さっさと研究所の方に行ってるよ。

どうして止めなかった？ どうせ面白そうだからだろうな！

『半分正解。残り半分は、その杖に聞きたいことがあったからだね』
あつ、そう。

それで何を聞きたいんだ？

『たくさんあるんだよね』

一つにしろ。

私は今、機嫌がよくないんだ。

これはもうダンジョンに行かないと気が収まらない。

『じゃあ。メントル達が、なぜシクティ達と戦ったのか——これに尽きる』

私は、そのままメントルに尋ねてみる。

ちなみに同じような質問をシユウは鯨と梟にもしていた。

二体はあまり関与していなかったため、知らないと言っていた気がする。

「なんでじゃったかな？ なにぶん昔のことじゃからな」

杖を蹴りかけたが、確かに一千万年も前の話だ。

昨日の夕飯もなかなか思い出せない私がどうこう言えることじゃない。

代わりにシユウを蹴っておいた。

「確か……、我々の存在に関わる話じゃったような」

それとても大切なことじゃない？

忘れていいことなの、と言いかけたが私も良く忘れていたので何も言わない。

『杖の宿主は誰？』

質問を変えたようだ。一つだけだと言ったのに。

しょうがないので、メントルに尋ねてみる。

「いや、儂には……そうじゃ！ それじゃ！」

急に騒ぎ出した。

何がそれなんだ？

「儂らは、儂らが生き残るために戦ったのじゃ」

……意味がわからんのだが。

「儂には宿主がおらん」

そうらしいな。

鯨にもいないと聞く。

梟にはいるが、本当はいなくても問題ないらしい。

はて？ 他のクリロノミアは人間とセットだが、お前等はなぜ単独で動けるんだ？

「儂らは月人。寿命がなく不死なのじゃ。それでも不滅ではない。物理的、あるいは精神的に朽ち果てていく。その残骸を用いて、人間はそれぞれ固有の存在を呼びだしておる。それがクリロノミアじゃ。同じような扱いをされるが、厳密には儂らとクリロノミア違うのじゃ。あやつらは喋らんじゃろ？」

そんな仕組みは知ったことじゃない。

それが、どうしてシクティとつるんでた人間と戦う理由になるんだ。

「あの人間は、儂ら月の民がこの星におることが気にいらなかったようじゃ。それによって月が近づいてきていたことも知っておったかな。月人は月に帰れ、と叫んでいた……はずじゃ」

近づいてくる月か。

もうそろそろ落ちてくるはずだ。

「グリフォスは人間の意見に否定的であった。儂らといずれ生まれる生命体は共存ができると考えていた。それに、月が落ちてくることも、儂らがこの星に来たこととは別の問題と考えていたはずじゃ。あやつは言葉が少ないから、儂の推測じゃがな」

『二つ目は、グリフォスが正しかったね。実際、人間と月の民……の残骸は、この星で共存できている。これは現状が証明していることだ。二つ目に関しては、現状で何とも言えない』

そうか、よくわからんがもう気は済んだか。

『概ね言いぶんは把握した。残りは、もう片方から話を聞いてみるとしよう』

そうだな。

月に行けばわかることだ。

『うん？ まあ、いいや』

よつしや、帰るか。

『オードちゃんの用事が済んでないでしょ』

踵を返そうとしたところで声がかかった。

「父上、私も発ちます。ご健勝をお祈りします」

オードがにこやかに告げるが、王は相変わらずの仏頂面だ。

「フオスよ。何か言いたいことがあるんじやろ。父としてな」

「オードとメントル。それにメル以外は、ここから離れよ」

王は命令する。

その言い方は反論を許さなかった。

それでも力関係があるので、私は梟と鯨に視線を送る。

オードもバリガン達に距離を取るように命じた。

私とオード、それに王と彼のクリロノミア、メントルが残る。

金ぴかのクリロノミアが私たちとバリガン達を遮るように間に移動した。

「オードよ。王としてではなく、父として腹を割って話したい」

「私はしたくありません。ですが、父上がなされたいというのなら、止めませんのでご自由にどうぞ」

「うむ、それであれば——オードちゃん、お父さん、心配したんだよお。どうして連絡してくれなかったの？」

険しかった王様の表情は、嘘のように砕け、困った顔になっている。

「でも、無事で良かったあ。メルさん、娘の面倒をみてもらったように助かったよ。それに仲もよさそうだ。いやあ、あんなに楽しそうに話すオードちゃんを見たのは何年ぶりだろうね。本当にありがとう」

朗らかに笑って私の肩をぽんぽんと叩いてくる。

私はあまりの変化についていけず、なすがままに頷くだけだ。

王の笑みは本当に嬉しそうで、見ているだけで心が和やかになっていく。

「どこに行くのかは知らないけど、止めはしないよ。行かせることが最良だと助言は出ているからね。それに、止めても行くんだらう」

「ほい」

オードもにこやかに答えた。

両者ともにこやかなのだが、王の笑みが暖かさを感じさせるのに対し、オードの笑みはさら寒い。

「メントル」

「わかつておる。姫、よろしいかな」

オードは頷いた。

私は何なのかわからず成り行きを見つめる。

「〴〵月、かつてないほど近づく。接触の時は近い。エリビア山麓にある月を崇める者達に会うべし。汝の隣人を頼れ——ほぼ同じじやな」

オードの顔はにこやかなままだ。

「メントル。メルさんにも助言を」

「それでは——」
いらん。

助言はもう間に合っている。

右から左からと、あれこれ言われると混乱する。

それに、いくらありがたい助言をもらっても、それに従うとは限らない。

私は、私のしたいことをするからな。

「なるほど、オードちゃんが気にいる訳だ」

王が私を見て、うんうんと頷く。

「それでは父上、私たちは参ります」

オードから作り物の笑みは消え、口角の上がった不気味な笑みだけが残る。

「うん、本当に楽しそうだね。無事に帰ってくるんだよ」

父親はオードの真の笑みすらも受け入れ、微笑みつつ見送った。

「またね。オードちゃん。メルさんも。どうか娘をよろしく」

「父上。どうか、お元気で——さようなら」

オードに表情はない。

淡々と述べるのみであった。

梟の背にのって研究所へ向かう。

ちなみに王様は騎士団が復活してから、王城に入っていた。

凱旋パレードらしい。負けたのに凱旋なのかと思ったが、シユウはこう答えた。

『雲が落ちてきたのに関わらず、怪我也汚れも無い王、全員無傷の騎士団。それを前に帰っていった敵達。どちらが勝って、どちらが負けたかなんて一目瞭然でしょ』

それはそうかもしれない。

どうやら私たちは負けたようだ。

どうでもよかった。闘った気がそもそもしない。

ほとんど梟と鯨がやっつけて、私は一部の奴を斬って払っただけだからな。

研究所に帰ると、アラフニはあからさまに顔をしかめた。

文句をいくつか言ったが、それでも部屋とご飯をきっちり手配するところは素晴らしい。

あまり目立たないが、けっこう優秀じゃないか？

『超優秀だよ。教団支部の運営。住民との付き合い。敵との戦闘指揮。能力の有効活用。面倒な奴らの接待。これらを柔軟にこなしつつも、相手の鼻につかせない人柄。そして何より魅力的なプロポーション。今までこの世界で会った中から、一人連れて帰れるなら誰にするって聞かれたら、迷いなく彼女にするね。でも、あの蜘蛛のクロノミアだけは頂けない』

本人達は間違いなくお前を嫌がるだろうがな。

それより博士のところに行こう。

博士は、またしてもよくわからん人形を作っていた。

私とオードが研究室に入り、むさ苦しい騎士達は外で待っている。集中しているとのこととで声をかけられず、しばらく研究が一段落するのを待つ。

「サイバミティはどうかね？」

一段落したのか博士はこちらを振り向き尋ねてきた。

挨拶や姫様がどこの誰かなどといった会話はいつさいない。

この点は嫌いじゃない。好きでもないが、無駄な長話をするよりはマシだ。

『あまり変わらない。ちよこちよこ記憶は戻っているけど、決定打にならないね』

「そうか」

それだけである。

シユウがメントルや鯨から聞いたことを伝えていた。

いくつか博士からも質問があり、シユウが答えるといった場面が見られた。

内容については理解できるものではないため、右から左に抜けていく。

ようやく話が終わったところで私も尋ねる。

私からも聞きたいことがある。

グリフォスを知っているな。

返答はない。

続きを促していると判断し、連絡の取り方を尋ねた。

「私から話をするとはできん。定期的に向こうから声をかけてくる。次は、三日後の夜だろう」

『消滅前日か……』

私も話がしたい。

「話しておこう。用件はそれだけかね」

『明日——サイバミティを、生前に親交があつたと考えられる人間に引き合わせる。人間の発現が見られるかもしれない』

「興味深い。人間の発現確率はどれくらいと考える?」

『五パーセントくらいかな。博士も一緒にどう?』

「同行しよう」

低くないかと尋ねる前に博士は受諾した。

どうやら博士の中でその数字は高かったらしい。

そのまま研究室を出て、割り当てられた部屋に戻る。

オードとも別れて、久々の一人だ。

そう言えば、例の人間って一千万年前の奴だろ。どうやって引き合わせるんだ。

『史竜のところに人間みたいなのがいたでしよ』

……ん、ああ、何も言わない奴だったな。

え……………あいつなの？

『名前が同じだから、そうでしょうな。依り代になって長生きしてるんだらうね』

長生きって域を超えてると思うが……。

で、会わせるとどうなるの？

『サイバミティが、シクティであったときの記憶を取り戻す、はず』
はずって……。

仮に取り戻すとどうなる？

『人間と話をしようとする。でも、人間側も依り代になった時点で、記憶は大幅に失われてるだらうね。そこでどうなるかだ』

やってみないとわからないってことだな。

『そこで何もわからなかったら、この世界から手を引く』

手を引くってのは、そのまま元の世界に戻るって事か？

『もちろん。消滅に付き合う必要は無い』

月は？

『諦めて。月に行って死ぬか、生きてダンジョンに行くか。どっち？』
そんなの決まっている。

『じゃあ、そういうことで』

わかった。

この世界は本当に消滅するのか？

グリフォスとやらに話したらどうにかなるんじゃないの。

『無理。もう歴史は決まっている』

確かに史竜はそう語ったな。

でも、変わることもあるって話があったじゃん。

『あれは奇跡。神の力を持ってこない限り不可能。俺も神の力といえ
ば力だけど、局所的だからね。世界全体をどうにかする力はない。グ

リフォスを味方にして、チートを付けてもやっぱり消滅するだろうね。それくらいは歴史の範囲内だ。実際、メル姐さんが史竜の扉を訪れても歴史は何も変わらなかった』

この世界、消えるのか。

スケールが、大きすぎて実感がわかないな。

世界が滅ぶと知っている人間がほとんどいないことが救いかもしれない。

逆に知っている者はどういう心境だろう。

自分の世界が滅ぶとわかって、どんな思いを抱いているのだろうか？

明日、起きて覚えていたらオードに聞いてみるとしよう。

きつと忘れているだろうがな。

5. 嘘だと言ったろ、シクティ

翌日、私は扉の中に来ていた。

一緒に来たのは博士、サイバミティ、オードだ。

騎士たちは洞窟の前で待機。梟と鯨は興味がないということで留守番である。

「すごい場所ですね。本がたくさんです」

オードがそのまんまな感想を述べた。

博士は興味なさげに周囲を見て、何も言わずに視線を目の前に移した。

「お……お、あ………」

一方のサイバミティは先ほどからこんな感じだ。

史竜と一緒にいる人間を見てから、口を開けてときどき声を漏らす。

ちなみにセーフティは切つてある。もしも切つてなかったら、すでに活動を停止していただろう。

「キルハ……、キルハー」

サイバミティが名前を呼んだ。

忘れてしまっていたが、それはこの人間の名前らしい。

一方、名前を呼ばれた方は反応をまったく示さない。

男なのか女なのかわからない長髪は、サイバミティに呼ばれても何かを一心不乱に書き続けている。

「キルハ。俺だ！ シクティだ！ こつちを見ろ！」
見向きもされていない。

どうやら元の名前を思い出したようである。

「キルハ、話せ！ キルハ、なぜ話さない……！」
『ぶっ……』

サイバミティが、キルハの胸ぐらを掴み視線は合った。
しかし、キルハはどこか遠くを眺めており反応を示さない。

〃無意味。彼女は依り代。人間時の記憶は消失済み〃

史竜のメッセージをサイバミティは見ることもない。
必死にキルハの胸ぐらを掴んで揺すっている。

意味が無いとわかったので、サイバミティの首を掴んで距離を取らせる。

声と動きで抵抗したが、力の差を埋めることはできない。

『キルハがどうして依り代になったのか聞いてみて』
シユウの質問をそのまま史竜に尋ねる。

〃キルハは、ここで私に触れ自身の世界の歴史と隣の世界の歴史を知った〃

歴史を知ったら、どうして依り代になるんだ。
そもそも依り代って何よ。

〃依り代とは、史竜である私がこの世界に形を留めるための媒体〃
つまりどういうことだ？

『史竜はそれ単体だと歴史を知っているだけの存在で形がない。歴史を紙面におこし、本の形にすることができない。キルハがいるから、ここが本だらけになってる』

そうだったのか。

それで、どうして歴史を知ったら依り代になるんだ。

〃不明〃

いやいや。

さつきキルハが歴史を知ったって話してたじゃん。

“私に触れる前のキルハにその意思はなかった。私に触れた後、依り代になりたいと提案があった。それが歴史を知ったため、依り代になることを希望したと推測される。しかし、私はその内面を私は知らない”

『歴史を知ってから依り代になる提案が来たから、心境に何らかの變化があったとわかる。でも、俺がそいつの心まで知るわけねえだろバーカってことだね』

そこまで言っただろ。

ちなみにキルハの世界はどうなったの？

“滅亡している。キルハが隣の世界へ移動後に地殻運動が活発化。火山の大規模噴火が相次ぎ、空は噴煙で覆われ寒冷化。地表生態系は絶滅。さらに大型隕石が落下し、地殻がめくれ、岩石蒸気が発生、海水は全て蒸発し海洋生物も死滅した。その後、新たな生態系は現れていない”

よくわからんけど、ぼろくそじゃないか……。

今さらだが、隣の世界はやっぱり月が落ちるから？

“三日後に月と衝突し消滅する”

『あ……、もしかしてそういうことなのかな』

何かわかったの？

「お前がキルハをこんなふうにしたのか！」

またしてもサイバミティが暴れ出した。

確かにそうとれなくもないが、提案したのはキルハからのようだから責められまい。

これが本人の希望だったんだから、お前も認めてやれ。

「お前が認めても、俺が認めん！」

こいつもなかなか頑固だな。

「キルハ、忘れたか！ お前は言っていた！ この世界をお前の世界のようにしないと！ あの世界にはまだあいつらがいる！ そして、あいつらの残骸が形を変えて蠢いている！ あのような成り損ないは粛正されなければならない！」

『ふうっ……』

なんかすごいこと言ってるよ。

「地上を支配するのは人間だ！俺は知っている。お前の懐いていた物を！あのぬくもりこそ俺たちが求めていたものだ！」

『くう、くくっ………』

「そうだ！お前はその手に世界を欲しがっていた！」

『はっ、はは、あー駄目だ。笑いが……ゲハハ』

サイバミテイ、いやシクテイはよくわからないことを熱烈に吠えたくっている。

その大演説の横で、シユウが笑い始め、とうとうゲラゲラ声をあげ笑う。

別に笑うところはないはずだけど、何がそんなにおもしろいんだ？

『こいつはシ○ツコか？台詞が際どすぎるだろ』

「目覚めろキルハ！俺だけが、生きるはずはない。お前の命も、一緒に連れて行く！キルハア！」

またしてもシユウが爆笑。

こんなに笑うのは、私がゴミ溜めに頭から突っ込んだとき以来ではないか。

なんか腹が立ってきた。

「来たか！」

『えっ、マジで……』

博士がいきなり叫び、シユウが我に返る。

目の前ではシクテイから、キルハの方へオレンジ色の光の粒子が放たれていた。

シクテイから出た光の粒子は、キルハの心臓付近に吸い込まれていく。

動き続けていた手が止まり、目の焦点もしっかりしてきている。

それに、何か気持ち悪い感覚がつきまとう。

「久しぶりだね、シクテイ」

「目覚めたか、キルハ！」

ハスキーな声だった。

やっぱり男か女かわからない。

されどもしつかりと声を出し、シクテイを見つめている。

「素晴らしい！ 人間の発露だ！ これで……！」

「行くぞキルハ！ 世界が俺たちを待っている！」

張り切るシクテイに対して、キルハは穏やかな様子だ。

「私は行かないよ。ここで世界の成り行きを見届けると決めたからね」

「何を言っている！ そんな腑抜けた調子であの月人と対等に戦えると思っっているのか、キルハ！」

シユウはまたしても笑いを堪えている。

「シクテイ、私たちは負けたんだ。完敗だ。」

「負けていない！ 時の運が、まだ動いていなかったというだけだ！」
「運に任せた時点で負けだよ。それに運をつけてもあれには勝てない」

私の拘束から抜け出して、またしてもシクテイは机の上に乗る。

「たとえ勝てなくてもだ！ 俺たちは正しい！ 俺たちの行動こそが正義だ！ そうだろう！」

『今度は五〇かな？』

キルハはゆっくりと首を横にふった。

「いいや。グリフオスが正しく、私たちが間違っていた。力も論理も私たちが間違っていたんだ」

「何があったのですか？」

オードがここに来てようやく口を開いた。

「君は？」

「エクリップスイ・メラ・オードと申します」

「君が……」

知っている様子だ。

「私の名前をご存じなのでしょうか？」

「歴史で見た。細かい部分は書かれていなかったが、なるほど歪んでいる」

オードから表情が消えた。

彼女本来の顔がジッとキルハを見つめる。

「それはつまり？」

「君の願いは叶うよ」

ニツタアと今までで一番気持ち悪い笑みをオードは見せた。

キルハはその笑顔を見ても何一つ表情を変えない。

「シクテイ、私はここに残る。君は帰るんだ」

「お前を置いて行けるわけがない！ 共に戦い抜くと言っただろう！」

キルハはやれやれと首をふる。

「あれは君をやる気にさせるための狂言だ」

「嘘だ！」

「本当さ。全て君を騙すためだ。君は良く戦ってくれた。ありがとう」

「嘘だ！ 何を言っている！ 何を言っているんだ。キルハ！ 俺はお前の気持ちを知っている！」

ふうーと長い溜息をつき、キルハはシクテイを見据えた。

「本当に覚えていないのかい？ 最後に言っただろ。私には君の気持ちかわからない。全て嘘さ。嘘だといったろ、シクテイ」

何かよくわからん雄叫びをあげてシクテイはキルハに襲いかかる。

しかし、その暴拳はあっさりと止められた。

シクテイの腕、足、胴体に文字が絡みついていた。

『おお、空間記述！ 史竜の力も取り込んでるね』

すごい？

初めて見たからすごいんだろうけどさ。

『魔法陣の完全上位版だよ。紙も壁もいらなし、三次元記述に、自動速記とききた。あつちの入口にも書かれてたから魔法陣は得意だとは思ったけど、依り代になってさらに強化されてる。戦うことはないと思うけど、俺たちじゃ絶対に勝てないから注意してね。この距離でも無理だから』

それはわかる。

さつきからの気持ち悪い感覚。

これは私の本能が逃げようとしているからだろう。絡みついた文字がそのままサイバミティを浮かせて、扉の前に移動させた。

サイバミティからはちようどキルハの背を見る形になっている。

「シクティ。いや、サイバミティという名をもらったんだったね。サイバミティ、もう一度グリフォスに会うんだ。今の君なら見えるだろう。何が正しいのか、そして何が間違っているのか——」

「キルハ！ 俺はまた来る！ 必ず貴様をここから連れ出してやるからな！」

サイバミティは叫びながら、扉の外に出て行ってしまった。

「さて、何があったかだったね」

ぼんやり扉を見ていたが、キルハの声で意識が戻った。

「サイバミティから距離を取っても意識は残るのか？」

「いえ、長くは保ちません。貴方がエレベケフ博士ですね。シクティと引き合わせてくださって感謝します」

「感謝は不要だ。偶然の重なりによる部分が大きい」

「そうですね。歴史には残らない些末なことが重なった結果です。しかし、私はこの些末の重なりが無駄とは思えません」

「私は歴史に関心がない」

博士は会話をあつさりとは断ち切った。

この辺りが博士らしい。私は割と嫌いじゃない。

それで、何だったわけ。そう、月でグリフォスと戦ったらしいけど負けたのか？

サイバミティも吠えてたが、今なら勝てるんじゃないか？

凄いや魔法陣も使えるんだろ。

「無理です。勝てません」

私が逃げたくなるような相手が、無理という相手か。なるべく敵対したくないな。

「敵対にすらならないでしょう」

強さが違うってことだろうか。

それで、月では何があったんだ？

そもそもどうして隣の世界に来たんだ？

「私の元々いた世界は滅びかけていました。新天地を求め、虹竜を倒し、あの世界にたどり着きましたが、地上には月から来たという生命体が跋扈していました。当時の私は、彼らの侵略によって人間が滅亡したのだと信じ、彼らを倒しつつ、人を探し求めて世界を彷徨い続けました」

『だが、残念。人はそもそも誕生すらしてなかった』

人が生まれる、ずっと前の大昔に来たんだったな。

「そのとおりです。世界間の文明進度の格差を私は理解していません。私の世界にあるものは、隣の世界にあつて当然という意識があつた。シクテイと知り合い、一部に人間とも友好的な月人もいた。それでも私は月人を倒し続けた」

メントル達を倒して、グリフォスに呼ばれたと。

「彼に為す術なく敗北し、グリフォスに世界の構造を聞いた。そもそも人類が誕生していないこと。彼らもまた人間と言えること。私の世界がもう滅んでしまったことを。そして、ここに来てそのどれも偽りではないとわかった」

『……グリフォスは何者？ 世界の構造を知っていて、他の世界が覗ける存在ってちよつとやばすぎない。竜を軽く超えちやつてるんじゃない』

シユウが恐れている。

どうやら本当にやばい奴のようだ。

「私は可能性を探るために史竜の依り代となった。グリフォスと、彼の話した可能性にかけることにした」

グリフォスの言った可能性って何だ？

「歴史の変更」

ああ、私の世界であつたやつだろ。

「……覚えていませんか？」

いや、覚えてるぞ。

神の力を持ってこないと無理なんだろ。奇跡だと聞いた。

「史竜の歴史はごく稀に変更される。グリフォスもその奇跡を語つ

た。あの彼にすら及ばぬ、神の領域だと」

なんでそんなにジツと見てくるんだ。

確かに神の力は知っているが、こいつは無理って言うてたぞ。

『無理だね。変更されてるならとつくに変わってる。もう歴史は変わらない』

やっぱり変わらないって。

「三人のファクターがここに揃った。これでも駄目……、時間が、ない」

キルハの目の焦点が合わなくなってきた。

『グリフォスとシクティイの能力を聞いてみて』

私は急いでキルハに尋ねる。

「グリフォスの力は『謎』。まず彼自身が、私の知る限りほぼ全ての魔法を瞬時に行使できる。加えて『謎』の力により、魔法では行使できない他の月人の力を使用できる。虹竜を倒した際に手に入れた術技すら、そのまま再現されてしまった。それも、これらを一つではなく並列で実行可能だ」

『そんなん、チートや』

ほんとだな。お前も使えれば良かったのに。

シクティイは？

「同化だ」

……なにそれ？

「対象と一体化する。私も彼と何度か同化した。戦闘能力や処理能力を上げられるが、何よりも意識の同調が主要な効果だと考えている。それで私が月人を知ったように、彼も人間を知った。そのとき、彼は人間の感情を得た。同時に、私も……」

キルハが頭を押さえ始めた。

「ああ、そうさ……嘘だと、言ったら……シク……」

そこで言葉は止まった。

静かに頭を上げたキルハは再び紙面に向かう。

何も話さず、何も見ていない。ただ、静かに歴史を記し始めた。

博士とオードには先に隣の世界に帰ってもらった。
いろいろわかったが、世界の消滅を防ぐことができるのか？

『歴史は変わってない』
そうか。

じゃあ、元の世界に帰ってダンジョンに行くか。
デブが痩せていたら一緒に連れて行くことにしよう。

『いや、何とかなる……と思う。割と賭けだけどね』
勝算は？

『十パーセントくらいかな』
サイバミティから人間が出てくる可能性の倍だ。

そして、それは見事に成功した。
おもしろくなりそうか？

『それは間違いない。でも、危険だよ』
ダンジョンだって危険だ。

そこは頭脳班でなんとかしろ。
『前向きに検討する用意があることを原則的に確認致しました』

……やるの、やらないの？
どっちなの？

『やる、やらないは意思決定係の仕事』
よし。決定だ。

なんとかなるって言うんだから、なんとかしろ。
うむうむ、良かった。

このまま帰ったらさすがに目覚めが悪いからな。
これで月は落ちてこないんだな。

世界は消滅することもなく、今後もまた変わらぬ平穏な朝がやって
くる。

そうだろ、シユウ。

6. 月よ、行け！ 浅からぬ歴史と共に！

教団支部に戻り、研究室に集まる。

グリフォスが話しかけてくるのは明後日の夜だ。

それまでに何かしておかなければいけないことがあるだろうか。

「私は研究を続ける」

博士はいつもどおり研究に戻った。

世界が消滅すると聞いたはずだが、この博士は何も感じないのだろうか。

ちなみにサイバミティは外で空に向かって、グリフォスグリフォス叫んでいる。

梟は宿主とぺちやくちや話をしているし、鯨は内部の子供を泡で遊び面倒をみていた。

騎士団はオードの気まぐれに付き合わされあっちこっちと忙しい。オードは世界の消滅をどう考えているのかよくわからない。

だからだと過ごして、運命の夜がやってきた。

博士にグリフォスから連絡が来るのを、研究室で待っている。

鯨と梟も一緒である。オードはいるが騎士団は邪魔だったのでバリガンしかない。

待っているがなかなか連絡が来ない。

博士は相変わらず研究を続けているし、他の奴らは話をしている。

私は三人以上になると、話ができない組に分類されるのでぼんやりしている。

駄目だ。眠くなってきた。連絡が来たら起こして。

『……メル姐さん。早く起きて。いつまで寝てるの』

遠くでシュウの声が聞こえた。

目を開けると、横幅も天井も高くなっている。

ドーム型の部屋は天井から床まで白一色でおもしろみがない。

広い部屋の中心には何かよくわからない黒いオブジェがぽつりと置かれていた。

あれ？

研究室にいなかったっけ？

『いたよ。博士にグリフォスから連絡が入った』

あつ、やっと来たのか。

それで博士は？

『ここにはいないよ』

周囲を見れば、サイバミティとオードしかいなくなっている。ずいぶんと減ってしまっているな。

……ここどこ？

『普通はそれを最初に聞く。月だよ。月の内部。メル姐さんがなかなか起きないから、そのまま飛ばされちゃったんだ』

おもしろくもない冗談だな。

「事実です。私たちは月に転移しました。貴方はいつまで経つても起きないので話をそのまま進めました」

オードまで言ってる。

もしかしてここは本当に月なの？

月ってそんな簡単に来られるものなのか？

『そんなわけないじゃん。時空間魔法にしても、距離がありすぎる。三人指定して同時に飛ばすとかあり得ない。しかも重力と空気まで整ってるし』

実感はないが、ここが月だということにしよう。

それでそんなすごいことをしでかしたグリフオスとやらはどこにいるんだ。

『ずっとそこにいるじゃん』

辺りを見回すが誰もいない。

サイバミティは何か叫びながら、オブジェを殴り続けている。

変わったオブジェだな。真つ黒で四面体をくつつけたような形だ。

『その正八面体がグリフオス』

ふーん、そうなのか。

もう夢なのか現実なのかわからなくなってきた。

ここが月だという実感はなく、グリフオスもまるで想像と違う。

瞬きをした後で研究所に戻っていたとしても、私は夢だったと受け入れるだろう。

『夢だと思えば夢のまままで良いよ』

そうしよう。

それで、問題のグリフォスはずっと殴られてるんだが……。声も動きも全くない。やはり本当はただのオブジェなんじゃないのか？

『かなり無口らしい。それに時間スケールが俺たちの比じゃないから。俺たちの一日って、たぶんこいつの瞬き一回みたいな感覚だよ』その後、私たちから何度か話しかけてみたが、グリフォスは何も返事をしない。

シユウで攻撃しようとする、防御魔法が働いたのでおそろくこいつがグリフォスなのだろう。

しかし、キルハで感じたような恐怖というものがこいつからは感じない。

「私はずっと考えていた」

突如、無機質な声が響いた。

杖の奴と同じく、どこから声が出ているのかわからないが喋った。

「グリフォオオツス！」

サイバミティはまた攻撃するがグリフォスは反応すらしない。うるさいのでサイバミティの首を掴んで引き寄せる。

「考えれども考えれども思考がまとまらない」

はあ、そうなのか。

そんなに何を考えてるんだ？

「私は何を考えているのかすら思い出せない……。考えれば考え出すほどキリがない。もう、疲れた」

疲れたらしい。

よくわからんけど休んだら？

連続で考えるとけっこう疲れるぞ。

『メル姐さんは一分も考え続けられないもんね』
うむ。

下手な考え休むに似たり。

私は特に考えず、直感で動くことが多いな。

いつから、考え事をしてたんだ？

「君たちの時間単位でおよそ三七億年」

少し経ってからぼそりと返ってきた。

冗談だと思っていたのだが、笑いは起きないし、誰も何も言わない。

『年齢を聞いてみて』

失礼かどうかわからんけど、おいかつだ？

「四五億になる」

老人を超えてしまつて、なんと呼べばいいのかわからない。

『……俺たちの星だと生命の誕生は約三八億年前なんだよね。——間違いない。キルハが正しいというはずだよ。この世界の歴史はこいつの歴史と同義だ』

すまん、万年ですらさっぱりわからないのに、億年とか想像もつかない。

やはりここは夢ではないのだろうか。

「あの星に海ができ、生命が誕生した。そのときから生死が発生し、滅亡と繁栄が繰り返された。私はずっとそれを見てきた」

気の遠くなる話だ。

退屈にならなかつたのか？

「初めは、自分以外の生命への好奇心だった。観察しているうちになぜ私は死なないのか考えるようになった。私はあの星に住まう者達を見届ける義務があるのだと考えた。それが仕事になり、義務になり、気づけばこのありさまだ」

どういうありさまなんだろうか。

「考えがおぼつかない。張り切れば張り切るほど空しくなってくる。少し気を抜けば、月を今の位置まで移動するのを許してしまつていった。以前ほどの楽しさも喜びもなくなった。エレベケフ博士と話をして、有意義だと感じる反面で気分は晴れない」

『それ、鬱病じゃない？』

どういう病気なの？

いや、どういふ病気なのかはなんとなく雰囲気でわかる。

どうやったら治るの？

『何よりも休養かな』

休養が必要らしい。

ちょっと休んだらどう？

「休んで良いのだろうか？」

いいんじゃない。

私もダンジョン攻略以外はいつも休んでるぞ。

「そうですね。疲れたなら休むべきでしょう」

隣からオードも援護してくる。

「しかし、月は……、あの星は大丈夫だろうか」

大丈夫じゃない？

休んだら何か問題があるのか？

「特にないでしよう」

オードがあっさり答える。

シユウにも聞いておく。

なんかあるか？

『ある。休む前にやって欲しいことがいくつもある』

やっぱ問題あるって。

なんかやって欲しいことがあるから、それから休んで。

『一つ目は、せっかく整えてもらって悪いんだけど、この環境をゆっくり元に戻して。ゆっくりっていうのは手を二百回たくから、最初の十回でリズムを計って、残りの百九十回で元に戻るよう変化させて欲しい』

シユウの用件をそのまま伝えた。

「わかった」

だいぶ時間が経ってから答えが返ってきた。

その後は、何も喋らない。それだけか。

『じゃあ、オードちゃん。リズムに合わせて手をたたいていこうか。

はい、一、二……』

「私ですか？」

『メル姐さんは、リズム取らせると変なことになるから』

シユウの言うリズムに合わせてオードが手を叩く。

最初はその変化に気づかなかったが、三十を過ぎたあたりで異常を感じた。

体が軽くなり、手を叩く音も聞こえづらくなってきている。それに息が浅く……あれ？

『よし、耐性ゲット。息は大丈夫でしょ』

ああ、徐々に息苦しくなったが元に戻った。

でも音の聞こえづらさと体の軽さは元に戻らないぞ。

『それでいい』

手を叩き終える頃には、音はなくなり、体はふわふわして上手く歩くこともできなかった。

次は？

『グリフォスとパーティー登録』

残り一つだったリングをグリフォスに差し出す。

しばらく何の反応もなかったが、指輪がフワリと浮いてグリフォスに飲み込まれていった。

その後、グリフォスに指輪を当てるとパーティー登録ができた。

しかし声が聞こえないのは不便だな。

あら。

「聞こえてますね」

チートだな。

『違う。グリフォスがやった。参考にさせてもらおう。ちよっどいや。このまま聞いて。この後、どうするかを簡単に説明しておくね。グリフォスも返事はしなくていいから聞いて』

はいはい、どうぞ。

『まず、グリフォスが休むと月が落ちる』

駄目じゃん。

いきなり駄目駄目じゃん。

『落ち着いて。もちろんそれじゃ駄目だ。ただの滅亡になっちゃう。だから、彼にしてもらうことがまだあるんだ』

ああ、そりやそうだよな。

なんとかするんだろ、どうするんだ？

『まず外に出る。宇宙空間だね。耐性をつけたからおそらく問題ない』

宇宙？

どこそこ？

『宇宙は空にあり』

空のことなのか。

すごい高い空なんでしょ？ 耐性があるのか？

ああ、落ちないようにするとかか。

『新鮮な回答だね。落下はほぼ心配ない。耐性は窒息、圧力変化、宇宙線対策、体の熱の放射、空気はないけど低温や高温、それに——』

わかった。

とにかくたくさんいるってことだな。

『おならとげつぶも禁止ね』

えっ、それも駄目なの？

『駄目』

冗談だと思ったら口調がかなり本気だった。

それで、どうするんだ？

『グリフオスには——月と一体化してもらって、全力で加速して星にぶつかってもらおう。俺たちは遠くからそれを眺める。これで大丈夫』

……えっ、何が大丈夫なの？

それで行くと、住む場所がなくなるんじゃない？

さっきの滅亡と同じでしょ。

『まあ、そうなるね』

駄目じゃないか。

おい、オード。なんとか言ってやれよ。

こいつはおまえの住んでいるところを滅ぼすつもりだぞ。

「望むところですよ」

オードの顔を見ると、たまに見る気持ち悪い笑顔をしていた。

何が、そんなにおもしろんだ。

「ああ……、ついに——」

恍惚としている。

意味がわからない。

「ふざけるな！ そんなことをしたらどうなるかわかっているのか！」

サイバミテイが私の手をふりほどこいて抗議の声をあげた。

私も同じようなことを思っていたので、そのまま言わせておく。

『全部死んじゃうね。虫も、魚も、動物も、クリロノミア、人間はもちろん、月人だって死ぬ。星が死ぬと言っても過言じゃない』

「素晴らしいことです」

シユウは淡々と述べ、オードは恍惚とした表情で頷く。

何が素晴らしいのかさっぱりわからない。

「お前は人間だろう！ どうして自らの星の消滅を願う！」

「退屈だからです。つまらないんですよ」

「つ、つまらない……」

サイバミテイが一瞬言葉を失った。

それでもすぐに取り戻し、声をあげる。

「つまらないと思ってるから世界を破壊するのかわ！」

「はい。その通りです。つまらないものを全て壊してみたかったんです」

「そんな馬鹿な話があるか！ つまらないのは世界ではない！ お前だ！ お前がつまらない人間だから、世界もつまらなく見えるんだ！

お前のつまらない思考に世界を巻き込むな！」

すごい言いようだ。

実は私も似たような事を思っていた。

世界がつまらないんじゃない、オードがおもしろくない。

こいつは私の行動をおもしろがっているが、私はこいつをおもしろいと思っただけじゃない。

おもしろくないのは世界じゃなくて、こいつなんだろう。

そんなことを思っただけでも、さすがに直接は言えない。

よくぞ言ったと褒めてやりたいくらいである。

一方のオードは怒ると思いきや、ニタニタと笑っていた。

シユウも声を抑えるように軽く笑っている。

気持ち悪い奴らだ。

「貴方のその物言いは嫌いじゃありません。それでも私は世界がおもしろくない。生まれたときからこれはこうだからと決まっている。

誰もそれに違和感を覚えないし、変えようともしない。そんなくらない世界を全て消してみたかったです。考えるだけでもおもしろかったんですよ。実際にやったらもつとおもしろいと思っていました」

今は、楽しいか？

「はい！ とても楽しいです！ 早く世界が減ぶところが見てみたい！ 私は今！ おもしろいと感じることができています！ こんな昂揚感は生まれて初めてです！」

確かに楽しそうなのだが、それで消される人たちは良い迷惑だろう。

人の振りを見てみるとよくわかるもので、もしかしたら私も普段こんな感じなのだろうか。

『大正解。人の迷惑なんて一切考えずに、やりたいことやって迷惑を撒き散らしてる。スケールが違うだけの五十歩百歩だよ』

もうちよつと優しく言ってもらえないか。

しかし、それなら私がどうこう言うことはできない気がする。

だが、このまま放っておくと取り返しがつかないことになるのも間違いない。

どうすりゃいいんだろうか。チラツ、チラツ。

『ごつち見んな。ほつとけばいい。なるようになる』

「何を言っている！ なるようになるわけがない！ 世界が消滅するんだぞー！」

「一緒に見届けましょう。みんな星屑になつてしまう瞬間を！」

「黙っている！」

サイバミティがまた暴れ始めたので、私が押さえる。

どうどう、どうどう。

『グリフォスが月と一体化して、全力で星に落ちる。それで全てが終わりだ』

「馬鹿な。そんなことができるものか！」

グリフォスの返答はない。

全員の視線がグリフォスに集まったところで、彼の姿が消えた。

「星へ向かう」

どこからかわからないが、無機質な声が響いてきた。

同時に、地面がぐらりと揺れる。

「これで、全てが終わるのですね」

「止める！ 止めるんだ、グリフォス！」

オードが感無量という様子で呟く横で、サイバミティは周囲に止めるように怒鳴りちらす。

『さて、ここじや衝突の瞬間が見えないな。グリフォス、俺たちを宇宙に出してくれ。できれば、月と星が横から見える位置がいい』

「今すぐ止める！」

『止めたいなら自分で止めるんだね。グリフォス、先にサイバミティだけは地上に戻してやってくれ』

願いは受け入れられた。

まずサイバミティが白っぽい光に包まれ、この場から消えた。

『最後に——グリフォス。君の四五億年に及ぶ地道な勤労に敬意を表す』

白っぽい光に包まれたと思ったら、暗いところに飛ばされていた。

暗いと感じたが、光源はいくつもある。

左手に青と白がぼんやりと光る球体があった。

右手には、白と灰色が混ざったような球体がある。大きさは左の球体の三分の一くらいだろうか。

『うっわ……、ほんとに近いな』

あの、もしかしてなんだけど……。

声を出したつもりだったが、音にならない。

それに体もふわふわ浮いていて、どうにも落ち着かない。

『宇宙だからね。それと思ってるとおりだよ。地上とか星って呼んでたのが左の球体。月ってのが右ね』

やっぱりそうなのか。

あの球体のどこかに研究所や皇都があるんだな。

それにしても青い部分は海だろ。ほとんど海じゃないか。

『そうだね。俺のいた星よりも海が多いかもね』

きれいだな。暗い中にふわりと白と青が混ざる宝石が浮かんでい
るようだ。

宝石は何度も見てきたが、どの宝石よりも美しく見える。
オードも私の隣で、表情もなく二つの球体を見ている。

何を感じているのかはよくわからない。

『徐々に近づいていってるね』

そうは言われたもののよくわからない。

『比較する対象がないからわかりづらいけど近づいてるよ。あり得な
い速さでね』

あれが互いにぶつかったらどうなるんだ？

『あのくらい速度なら、表面が弾けてからくっついて一つになる。
でも、今回はグリフォスが月と一体化して強化されてるから、月は砕
けて、星もぶっ壊れるんじゃないかな』

両方砕けたら、私たちはどうするの？

『どうしようもないね。そうなったら失敗ということ諦めて』

……え？

どうにかなるんじゃないの？

『なんとかなるよ。上手く伝わってればね』

ああ、びっくりした。

全部ブラフだったんだよな。

さすがにあの星がぶつかるわけがない。

どうやってか知らないが、誰かが止めるんだろ。

また私が寝ている間に、何か作戦を伝えておいたのか？

『いや、今回はちゃんとメル姐さんが起きてる間に真横で伝えた。直
接じゃないけどね』

そうやってまたお得意のわかりづらい伝達を使う……。

私には全然そんなことわからなかったぞ。

本人もわかってないんじゃない？

『かもしれない。でも、きちんと伝えるよりも、きちんと伝えない方が
成功する見込みが高いと思っただ』

で、誰に伝えたんだ？

梟か？ 念動力で月を止めてもらうとか？

『違う。念動力ごとくで勢いを付けた月を止めるとか不可能』
じゃあ、鯨だな。

泡で月を防ぐつもりだろ。

『無理無理。泡と念動力を合わせても不可能』

……杖の予言とか？

『予言じゃ止められない』

だよなー。

それはわかった。

あつ、まさかアラフニと博士か？

『あり得ない……けど、ちよつと見てみたいかもしれない』

じゃあ、誰なの？

あ、そうかそうか。キルハだな。

小難しい話も出てたし、あの中で伝えてたんだろ。

『違うね。あいつも伝える側だった』

それって、えつ、じゃあ――、

『そう。サイバミティだよ。俺とキルハはサイバミティに賭けたんだ』

あいつに何を伝えたんだ？

『もしも、メル姐さんがこの世界に来ていなかったら――どうなつたと思う？』

出たよ。お得意の質問返し。

まあ、いい。星同士の衝突にはまだかかりそうだ。

ぎりぎりでも止める手段がきつと残されているんだろう。

そもそも、その仮定は意味があるのか？ 来ることは決まってるんだろ。

『いや、そんなことはない。それにどう考えてもおかしい。あつちの世界の歴史は変更された。変更される前はこつちには来てない。それなのに、あつちの世界が変更されて、こつちの世界の歴史が変更されてないってのはあり得ない。要するに、メル姐さんが来てない世界線から、来てる世界線になつても歴史は変更されなかった』

何が要するになのかすら、よくわからん。

でも、史竜は滅びるって話してたから滅びてたんじゃないか？

『その通り。メントルからオードにフェガリ教団へ行けって助言が出たのは、姫様と博士、ひいてはグリフォスとを会わせるためだった。助言を出したタイミングでは、俺たちがまだこっちの世界にいなかったから、本当は教団に姫様が捕まって博士と出会い、その後でグリフォスと話をしたんだと思う』

仮にそうなるでしょう。

そうなるかどうか？

『世界が消滅する』

飛躍しすぎじゃない？

『何となくわかってるだろうけど、オードは破滅的だ。あいつは世界の破滅を望んでいる。グリフォスも疲れ切って鬱状態。滅ぶことを受け入れてくれる存在がいたことに安堵して月を落とす。たぶん、姫様が言いくるめて派手に落として世界が消滅したんだと思う』

ふーん。こいつは碌な事をしないな。

でも、私が来たところで何も変わらないってことだったろ。

このままだと世界は滅ぶんじゃないか？ どうやって止めるつもりなんだ？

『おしい』

……おしい？

正解じゃないの？

『滅ぶんじゃないかって消滅。滅亡ではない』

同じじゃん。

『全然違うよ。キルハの元いた世界はぼろくそになっても歴史はまだ続いている書き方をされた。一方でこっちの世界は消滅で止まってる』
消滅と止まるは一緒でしょ？

このままだと星同士がぶつかって消滅するんだろ。

滅亡も消滅もどちらも全滅だ。言葉遊びもいい加減に疲れてきた。

『もしもメル姐さんが来てなかったら、この世界は消滅する』
そうだな。

最初からそう言ってるじゃん。

『誰だったかな。「歴史は、現在と過去との対話である」と言ったのは。歴史に終止符を打つ人間と、歴史を変革した人間が出会ったんだ。何も起きないはずがない』

さつきから歴史、歴史うるさいぞ。

なんかもう歴史が何かすらわからなくなってきてしまった。

『そこだよ。史竜のところで書かれてた歴史つてのは、つまるところ史竜の事実に対する解釈だ。史竜は滅亡ではなく世界の消滅と解釈した。それはメル姐さんが来た世界線になっても何一つ変わっていない！ さあ、歴史の幕が閉じるぞー！』

ごめん。

もう何もわからないから一言でまとめて。

はい、どうぞ。

『一つの歴史が終わり、世界は新たな歴史の幕開きを迎える』

歴史の幕開きつてのはどういうことだ？

そもその問いに戻るが、お前はサイバミティに何を伝えただ？

『史竜は消滅すると言ったけど、歴史が終わるとは言っていない』

……同じじゃないのか？

『メル姐さんが来てなかつたら、世界は消滅して書く対象が完全消滅して歴史はきちんと幕を閉じた。歴史書はそこで終了。後には何も続かない』

そうだろうな。

消滅したらどうしようもない。

『メル姐さんが来ても消滅はまぬがれないと史竜は把握した。流れもほぼ同じ、登場人物がちよつと増えたけど大筋は変わらないから、文章の変更もない。俺も、止める手段をいくつか考えたけど、グリフォスが俺たちの手に負えなさそうだからどうしようもない。それならいっそ消滅させるべきと考えた』

……じゃあ、あの衝突は止めないのか？

『止めない。衝突させる。ぶっ壊すぞー！』

だが、消滅してしまったらどうしようもないじゃないか？

『復活させればいい』

……ああ、そうか。

グリフォスはパーティメンバーだ。

月と一体化したグリフォスの攻撃と判断されれば復活するか。

でも、人は復活するだろうが星はどうなるんだ？

『そう。問題は星だったんだ。星は消滅しても復活しない。そこでサイバミティだよ。あいつにあの星と一体化してもらおう。グリフォスが月と一体化したところを見せた。あいつも一体化する……はず』
大丈夫なの？

本当にわかってるのか、あいつ。

『それしかあいつにできることはない。火事場の馬鹿力でやってくれ。単細胞だから、星にはより圧倒的な星をぶつけるしかないと感じてください。パーティスキルも全振りしておいた』
そろそろ衝突だな。

「いよいよです。ああ——終焉（しゅうえん）の星、来（きた）るべき月」

『略して「えん☆たる」だね』

略す必要ないよね？

おっ。

『やってくれたか』

青白い球体から、オレンジ色の光がほのかに沸き上がる。

あの輝きはサイバミティのものだ。無事に一体化したらしい。

その光に誘われるようにして灰色の球体がぶきみなほどゆっくりとぶつかっていった。

『あれ……、ゆっくりに見えるけど、恐ろしいほどの速度が出てるよ』
衝突に際し音はなかった。ここではずっと音が無い。

あまりの音量のため、シユウが聴覚を切っているのかもしれない。

青い星の衝突部から、水面に石を落としたときのような飛沫が上がった。色は赤である。

赤い水しぶきは浮き上がった後に、ゆっくりと青白い星に降り注い

でいく。

『地殻津波だね。あの小さく見えるしぶきも一つ一つが丘みたいなものだよ。あれが隕石として地表に落ちていく』
飛沫が消えると、月がどこかに消えていた。

星の表面の至るところから泡のようなものが湧き、青白かった表面は赤に覆われていく。

『全滅だね。海もあつという間に蒸発するでしような』

赤が黄色みを増し、星は小さな太陽になってしまった。

『さて、これだけなら滅亡だ。ここからが肝心だぞ……』

火の玉から一本の糸が出てくる。

糸は徐々に綱のように太くなり、火の玉の周囲を渦巻く。

ある程度、渦巻くとその綱は意思を持つているようにこちらへゆっくりと向かってきた。

『まあ、そうなるか』

なんかこつちに来てるけど大丈夫なの？

『ここじゃどうしようもないからね』

シユウが落ち着いているところを見る限り問題はないのだろう。

火の綱は、私たちに迫りそのまま呑み込んだ。

しかし、熱さも何も感じない。

「敵はグリフオスではなかった！ お前たちだ！ お前達こそ真の敵だ！」

真つ赤な赤の帯に呑み込まれ、サイバミテイの声が聞こえた。

「人間は死んだ！ 人間だけではない！ 全てだ！ 全てが死んだんだ！ お前たちが殺した！ 灼熱の波が悉くを呑み込んだ！ わかるか！」

わからん。

あいにくとまだ死んだことがない。

それにここからだど、人の姿とかまったく見えないぞ。

「そうだろうな！ それならば！ お前たちもその熱さを思い知れ！」

サイバミテイの核の部分が、灼熱を纏って私の前で叫んでいる。

見た目は熱いんだけど、全然熱くない。暑さすら感じないぞ。

『悪いけど「同士討ち無効」ってスキルだね。そっちの攻撃は俺たちに効かないように設定してるんだ』

ひどい。

「この悪魔どもめ！ 自分たちだけ安全な場所にいる傍観者め！」

『いやあ、何だか悪いね。わざわざ来てもらって。パーティー登録の解除で死んでもらう予定だったけど、手間が省けたよ。それだとチートの効果が消えるから確実に復活する力があるのか不安だったんだよね』

ほんとひどい。

悪魔は私じゃなくてこいつだろう。

『じゃあ、メル姐さん。弱めに斬っちゃって』

弱めに？

『そう、かする程度でいい』

返答は行動で示した。

サイバミテイのコアを軽く斬りつける。

しまった……、けっこう深くやってしまった。

「ぐうっ、まだだ！ まだ、俺は死なないぞ……！ 絶対にお前たちを

排除する！」

『そうだね、ここで死んだら困る。星の復活位置がずれすぎる。復活した人たちがまたあそこで死んじゃわないように、きちんと元の位置まで戻ってから死んでね。毒を付けたから急いだ方がよいよ』

本当にひどい。

サイバミテイもいろいろ葛藤して吠えながら私たちから遠ざかっていく。

徐々に炎の綱は細く、短くなっていき最終的には消えてなくなつた。

これで世界には私とオードだけが残つた。

星の位置には無数のドロップアイテムが、死んだ位置で残り、そこに星があるかのように煌めいている。

この世界には今、私とオードだけがいるのか。

こいつは念願の世界消滅だが、いったいどんな感想を懐いているのか。

隣を見ると、オードは口を開けて泣いていた。

涙は頬を流れず、水滴となつて顔の周囲を漂っている。

どうしたの？

「美しかったのです……。長い歴史の間に築かれてきたであろう一切が、破壊され、死に絶え、消滅していくその光景が……」

確かに綺麗ではあったが、そこまで感動するほどであろうか……。

私にはやりすぎたんじやないかという自戒の念が強い。

『今回は徹底的にやらないと失敗したからね。心を鬼にしてやり遂げたよ』

ほんとかあ？

ノリノリでサイバミティを追い詰めてただろ。

『さて、問題がもう一つ残ってる』

話を逸らしたぞ。

で、問題とは？

『月だよ。復活はするんだろうけど、地球に近い場所で復活する。ほつとくと地球とまた衝突する』

どうすりゃいいんだ？

『どうしようもない。実はここが一番の賭けなんだよね。グリフォスが復活して、あの鬱がどうなってるかだよ。治ってないとまたクライシス』

言ってる側から、白く淡い光が暗闇の中に充満し形を作った。

『場所はやっぱりそこか』

若干ずれているが、星のアイテムにギリギリかからない位置で月が復活した。

おつ、動いてないか。ややアイテムの光から遠ざかっている。

……私たちはどうするの？

『グリフォスに拾ってもらおう』

なるほど、……どうやって？

声は届かないだろ。

『問題ないでしょう。送ったのがあいつなんだし、場所もほとんど動いてない。ほらきた——』

覚えのある白い光に包まれる。

再び目を開けると、灰色の何も無いドームの中だった。

黒いオブジェも見当たらない。

「すごいスツキリ！」

声が聞こえた。

聞き覚えはあるが調子が違う。

「すごい——すごく調子が良い！ 頭がクリア！」

たぶんグリフオスだが、なんかおかしい。

返答も恐ろしく速くなっている。

『それは良かった。すでに動かしてくれてるようだけど、月の位置をなるべく遠くにしてもらえる？』

「もう加速中だよ。距離と速さを最適化する。生命体のコア——君たちがドロップアイテムと呼ぶものも月の引力による変化から戻しておいた」

声が爽やかすぎて、聞いてて気持ち悪い。

さつきまでの疲れた声のほうが雰囲気があって良かった。

『勝手な言いぶんだ……。とにかく話が早くて助かる。この後はどうする予定？』

「星の復活と生命体の復活が完了するまでは厳戒態勢を続けるよ。見届けたら、安定する衛星軌道の最適化に専念する」

『うん、助かるね。その後は？』

まったく内容についていけてなかったので黙っていたが、会話が止まった。

そんな悩むようなことか？ やりたいことをやればいいだろう。

「やりたいこと？」

ないのか？

ダンジョンに行ってみたいとか？

未開のダンジョンを探してみたいとか？

「それはないね」

あつけらかんと否定。

これはこれでイライラするな。

そうだ。世界の消滅はもうやめてくれ。

「なぜですか？」

グリフォスではなく、オードが尋ねてくる。

いや、そんな真顔で聞かれても。

わかるだろ？ なあ？

『あの星の新しい歴史はまだ誕生してもいない。そのまま復活するだけだと思うだろう。でも、グリフォスみたいに、積み重なって疲労した構造部が初期化されて、何かが大きく変わる可能性もある。それに、一度消滅したことで生命体、特に人の意識が変わってるだろう。そのあたりを実際にオードちゃんの目で見たいければいい』

うん。それぞれ。

私が言いたかったのはそういうことだったんだ。

「新しい歴史もつまらないものだったら？」

さらに質問を重ねてくる。

そのときは、そうだな……、自己責任じゃないか。

今度の歴史誕生はお前が関わっている。おもしろくする責任はお前にある。

私にもあるかもしれんが、私はそういった責任からは逃げる主義なのでお前に任せた。

せっかく古い歴史の終わりと新しい誕生に付き合えるんだ。

お前が、お前のおもしろいと思う世界にどんどん変えていけばいい。

「私のおもしろいと思う世界に変える？」

そうそう。

周囲の世界に合わせて自分を変えるなんてことは疲れるだけだ。

『父親の安定志向が気に入らないなら、歯向かってみれば良い。力が足りないならグリフォスに頼めば良い。グリえもくんって泣きつけば、大抵のことは片付けてくれる』

「任せとけ」

キャラが変わってない？

ほんとに大丈夫？

「私が変わる……。それすらも、つまらないと感じたら？」

『また世界を消滅させようと動けばいいさ』

そうだな。

……そうかな？

いや、それはまずいでしょ。

『ただし、サイバミティが間違いなく阻止しにかかるね。今のグリフオスが月を落とすとも考えづらい。俺たちもいないだろう。しっかり考えないといけない』

オードの口の端がつり上がった。

うん？ 不思議だな。

今までは不気味にしか思えなかったが、良い笑顔に見えてきた。

楽しみで楽しみで仕方がないという気持ちだが、ありありと伝わってくる。

「星の復活が始まった。しばらくそちらに集中するので、会話には入れない」

清々しい響きが部屋に響き、ドームの一面の景色が変わる。

暗い景色に徐々に光が集まってきていた。

やがて球形に光り始め、光が収まるとそこには元の青白い星が戻っていた。

しばらくすると、世界のあちこちでチカチカと光が輝く、人が復活を始めたんだろう。

研究所はどの辺りだろうか？

『聞いた話だと球の真ん中の辺りだね』

大きな茶色が三つ並んでるあたりか？

『そう。その三つ並んでる大きな大陸の、さらに左にある小さな茶色の真ん中あたり』

たしかに小さい茶色があるな。

あれだけ広いと思ってたのに、ここから見るとあんなに小さいのか。

『そうだね。——グリフォス。今の作業が終わってからでいいから、やって欲しいことがある。俺たちが今ここで見ている星の復活の映像を、地上の人たちに見せてやってくれ。夢にでも流し込めば良い』
そうだな。

それは面白いと思う。

自分たちがどこで生きているか知ることができる。

知ってどうなるということでもないだろうが、少なくとも私は知って得をした気分だ。

私の世界もこの星と同じようなものだとしたら、私が回った範囲はきつとごくわずかだろう。

きつとまだまだ攻略していないダンジョンが山ほどあるはずだ。

『……おっと、そうだった。前から思ってたんだけど先延ばしにしたことがある』

それは？

私は星から目を離さずに聞き返す。

『星の名前だよ』

星の名前？

『そう。この映像を見ることで、この星の人たちは自分たちがどこかの国の民である前に、星の民だとんだという認識が生まれる。それなら名前をつけた方が良い。いつか外からの訪問者に対して、自分たちは何々星人ですと言えるようにね。もちろん、別世界の訪問者に対しても使えるようになる』

そんなものか？

「そうですね。名前はあったほうがいいでしょう。私の名前をつけてもいいのですが、それは少し抵抗がありますね」

そうだな。自分の名前は恥ずかしいよな。

もしもダンジョンに私の名前がついたら、さすがの私も攻略しかねる。

「……はい」

『嘘つけえ。いつかまた、星を消滅させるぞつとときに、自分の名前が入ってたら抵抗があるなあって思ってたんでしょ』

正解だと言わんばかりに、オードはニタツと笑った。
ああ、なるほどな。

……というかもう滅ぼす気でののか。

『メル姐さんは、何が良いと思う？』

うーん、ダンジョンがあればもうちよつと真面目に考えるんだがな。

……前にもこんなことがなかったっけ？

長時間考え続けて、いろいろ案を出したけど、まとまらなかった。

それで、最後はお前が出した案を採用したような。

『その話は俺の中で黒歴史になってるからなかったことにして欲しい』

ああ、やつぱりあったよな。

どこのダンジョンを攻略しているときだっただろうか。

ダンジョンのことなら大抵覚えているはずだが、なかなか思い出すことができない。

『俺ならサイバミテイにするかな。でも、本人がまだ生きてるからちよつと抵抗がある』

それもいいな。

星を火の玉にされて、その後でも私たちを焼き尽くそうとした姿は印象的だ。

毒に冒されながらも、元の位置まで文字通り、命を焼き尽くして人間のために戻ったのは正直すごいと感じた。

でも、確かに本人がまだ生きていたら嫌がりそうだな。

「それなら、シクテイにしましょう。一度は死んだということにしていきますから、さほど抵抗はないでしょう。私も抵抗がありません」

……何に抵抗がないんだろうか。

不穏なこと考えてない？

惑星シクテイか。

『響きは悪くないね』

それが浸透するかどうかだな。

「浸透させます。私が見届け人なんですから通します。今日からこの

星は惑星シクテイです。聞いていますね、グリフオス。この映像を世界に流すときに、その単語を埋め込みなさい」

返答はない。

おそらくそうなるだろう。

シユウが話していたとおりになってしまった。

浅からぬ世界は幕を閉じ、惑星シクテイの新たな歴史が始まる。

蛇足20話 「丘陵の彼方に」

エルフの里を離れ、一路ダンジョンへ向かう。
約1ヶ月半ぶりに会ったアイラは別人になっていた。

脂肪は完全に体から融け落ち、筋骨隆々のたくましいエルフが残った。

「筋肉魔法を喰らえー!」

そう叫びながら、拳に炎を宿し植物のモンスターを殴っていた。
あいつはいったいなんなのだろうか。

私もセルメイ大聖林をクリアしたので、次のダンジョンへ向かうことにした。

目指すはジルエツト市の近くにあるイモルテル大丘陵地帯である。
一つのダンジョンに、五つの難易度を内包する多難相型だ。

進むごとに難易度が上がる、あるいは下がる多難『層』型とは違う。
ルートにより難易度が変わるといふ、割と珍しいダンジョンになっている。

数多くのダンジョンを攻略した私であるが、純粋な多難相型のダンジョンは初めてになる。

さらに今年、イモルテル大丘陵地帯では数年に一度のリオン・コンペティションが開催される。

俗にリ・コンとも呼ばれており、イモルテル大丘陵地帯の攻略競争だ。

優勝者すれば富と名声は思いのままであるとかないとか。
ジルエツトに到着する頃に開催されるので私も参加する。

富と名声にはさほどの興味もないのだが、イモルテル大丘陵地帯の五つ目の難易度がこのレース中にしか現れないという。

もっと正確に言えばレースのときに出てくるのではなく、この難易度が発生するときに合わせてレースが開催されるそうだ。

発生条件は知らないが、いつ出てくるのかはほぼわかってる。

前回は十二年前だったので、今回はひっそりさの開催ということだ。

観光目当ての客も多い。

エルフの里からの道はガラガラだったのに、道が合流した途端、一気に人数が増え、少し走れば片手では足りないほどの人とすれ違う。このペースでいくとだいたい早めに着いてしまうが、ダンジョンがあるから問題ない。

道なりにぼんやり進んでいると、陽もすでに落ちかけていた。

もう少し進めば小さな宿場があるようだが、おそらく満杯だろう。人が多すぎるのも好きじゃない。この辺りで野宿の準備をしましょうか。

辺りに人の気配はない。静かな夜になりそうだな。

『ちよつと黙って』

突如の黙れ宣言である。

珍しく真剣な声色だったので大人しく口を閉ざす。

『叫び声だ』

聞き返す前に、私にも聞こえてきた。

『女性の声だね』

うむ。

そうだな。

『声の張りがいまいちだから体は細身。あまり鍛えてない。声に艶がなく細い——若々しいね。グッド。年齢はおそらく十代後半から二十代前半だ』

うむ？

そうなのか？

『喉はよく慣らしてある。きちんと声が出てるでしょ。怖いときにきちんと声が出せるのは良いことだよ。……うん、このちよつと掠れた具合は露天商人によく見られるパターンだね』

そういうところ——すごいとは思うけど、それ以上に気持ち悪い。『顔がわからないな。急ごう。早く助けないとフラグが折れてしまう』

極めて純真で清々しい声だった。クズでも良い声は出せるのだ。

前に年寄りが叫んだときは、老害が断末魔をあげてるとか笑ってたからな。

もつとひどいのは、むさいおっさんがモンスターに襲われてるときは反応すらしなかった。

さておき、急いだ方が良いことは確かだ。

道を進めば声が収まった。

『ふむふむ』

縛られた女が一人に、倒れている男女が一人ずつの二人。

顔を隠した黒ずくめの男三人が見張りで立っていて、私と目が合った。

『八人組だね。その三人に加えて、脇道に三人、馬車の中に二人』

そんなにいたのか。

馬車の中にも一人いるだろうなあくらいしかわからなかった。

覆面の男たちは、私に気づくと姿勢を低くして襲いかかって来た。

こういう輩への対処は後退ではなく、進撃こそ有効だ。

相手も一瞬ひるむのでそこを狙う。

実際に踏み出すと、相手がわずかに躊躇い、その隙に蹴りを入れる。

よし、一人目。

『手慣れてるね。夕刻の目が暗闇に慣れる直前で、手のナイフも黒く見えづらくしてる』

倒した男を見てみると、確かに手からこぼれ落ちたナイフは黒かった。

『護衛の二人も麻痺で動きを封じてる。馬車ごとどこかに持っていくんだらうね。血を出さないようにして、次に通る人に違和感が残らないようにしてる。怪我はない——ナイフの毒じゃないな。この甘ったるい臭いが原因かな。そうすると覆面も顔を隠すだけじゃなく防毒マスクの役割があるね』

あれこれと説明をしている間に、残りの二人も片付ける。

問題にならない。奇襲するのは慣れていても、奇襲されるのは慣れていないと見える。

『幌の隙間に突き刺して』

言われたとおりに、幌の隙間にシユウを突き刺すと手応えがあった。短い悲鳴の後に何か倒れる音が二つ聞こえた。

『よし。もう一人も感染で倒れた。後は脇道の三人だね。林の中の奴から片付けよう。逃げられると面倒だ』

一人を林で見つけて軽く斬りつけた。

逃げつつあった一人は後ろから斬って倒す。

さらに、逃げ去った最後の一人もシユウの案内に従って捕獲した。さて、どうしようか。

とりあえず、襲った八人を馬車の近くに持ってきて縛り上げた。

「俺たちにこんなことをしてただで済むと思うなよ！」

一人の男が叫んだ。

ただではないだろう。たぶん懸賞金が出る。

懸賞金がかかってないとしても、褒賞金がいくら出るだろう。いらぬいけど。

「へへっ、俺たちのアジトには多くの仲間がいる」

男たちがニタニタ笑い始めた。

要するに仲間が助けに来て、私たちに報復を加えるということだろう。

『いいですね。こういう余裕ぶった表情好きですよ』

とても楽しそうだ。

こいつが楽しそうだと碌なことにならない

「俺たちが戻らないことに気づいて、仲間たちが向かってくる」

そうか、あつちから来てくれるなら手間が省けるな。

「俺たち——『欺瞞のアロエ』のバックに誰がついてるか知ってるのか」

いや、知らんけど？

さつき会ったばかりなのに知るわけないだろ。

それに名前がもう弱そうで駄目っぽい。

「すぐに死ぬことになるだろうから教えてやる——ザムリング商会だ」

『へえ……』

男たちはどうだあとやわんばかりに得意げな顔をした。

護衛の冒険者二人も怖がっている様子だ。縄を解いてやった女の子がびくりと怯えた。

ちなみに助けた女の子は胸がなく、顔も趣味ではなかったようで、シユウは興味をなくしつつある。

そのなんとか商会ってアレだな。

どっかで聞いた名前だ。

思い出せん。

『嘘か本当かはひとまず置いておくとして、これは手間が一つ増えそうだね』

やれやれ……。

面倒なことだ。静かな夜になりそうだったのに。

やっぱりこういうことはアレだよな。

『先手必勝だね』

そうだな。

この馬車はどうする？

『暗いけど、宿場までは進んでもらうとしよう』

そうか。

女の子と護衛二人に話をして宿場まで進んでもらうことにした。

夜道は危険だが、そこまでの距離ではないし、人が増える方向なので大丈夫だろう。たぶん。

彼女たちはさっそく移動を始め、暗闇には私と盗賊たちだけが残った。

よしよし。

それじゃあさっそく選ぶとしよう。

この八人の中で、縄から放してもらえる幸運な奴を、な。

この中で一人、正直にアジトの情報を喋った奴は縄を解いて自由にしてやる。

「何を言っ——グア、あつ……」

シユウで男の肩を刺す。

毒でもがき、やがて動きは鈍っていき八人は七人になった。

あまり同じ事を言わせないでくれ。

きちんと喋った一人だけが自由だ。他は知らん。

七人はまだ余裕を見せようとしていたが、さらに強い毒を二人に与えて五人になると様子が変わった。

それぞれ自分こそが案内をさせていただきますと立候補を始めた。

アジトの情報と仲間の数を言わせてみて、嘘を吐いた奴と黙秘した奴が倒れて残りが三人。

アジトにはまだ二十余名の仲間がいることがわかった。

詳しい場所や緊急用の逃げ道、捕らえている人間などを聞いていく。

一番詳しい一人だけが、無事に生き残った。

きちんと話した褒美に、そいつは縄から放して自由にしてやった。

必死の形相で、なりふり構わず逃げていった背中に向かって、手頃な石を放り投げる。

最後まで見なかったが、倒れる音が聞こえてきたので期待した通りのことになっているのだろう。

シユウから教わった鉄則——やるなら殲滅。遺恨は残さない。

『自由には責任が伴うもんだ』

ようやく静かな夜が訪れた。

それも、わずかな時間に過ぎないだろうが……。

聞いた場所へ向かうと洞窟の入口があった。いかにもな場所だ。

途中で戻らない仲間を探しにいった奴らとも遭遇したので、おそらくここなのだろう。

『うん、見張りもいるから間違いない。……うん、二人だけだ。じゃあ石を投げて片付けよう』

私が石を二つ握り、連続で投げる。

一つが相手の頭を弾けさせた。それを驚いて見た仲間の頭を、連続で投げた石が吹き飛ばす。

『よし。……アイテムセット。ゆっくり慎重に離れてね』

近づいていき、死体の側にトラップをしかけて入口側に置く。

これで誰かが死体の側にくればドカンだ。そいつはくたばり、同時に入口は塞がる。

『じゃあ、ステルスで奥に進んで、逃げ道方向から潰していこうか』
慣れたものである。

同じような手口でいくつも盗賊団を潰してきた。

最初の頃は入口に仕掛けた罠に自分で引っかかっていたが、最近は上手くやっている。

『冒険者らしいスキルより、こっち方面のスキルのが充実してるね』

まったく嬉しくない。

堂々とダンジョンを正面から攻略したい。

毒殺から始まり、ステルス、脅迫、鍵開け、スニーキングときいてる。

有名になるほど羽虫が周囲を飛ぶようになり、追い払ったり巣を潰したりするうちにこれだ。

『もう盗賊にジヨブチェンジした方がいいんじゃない？ 逃げ足もあるし。世界が盗れるぜ！』

いらん。

ダンジョンが攻略できればそれでいい。

話をしつつ奥へ向かう。

トラップを避け、たまにすれ違う奴をやり過ごし、時には意識を失わせて見えづらいつころに隠す。

攫った人の場所をちらりと確認して、逃げ道の方へ進んでいく。

聞いていた逃げ道は二つ。一つはすでに入口と同様に罠をセットした。

もう一つは溜まり場のすぐ側だ。

中の様子をうかがうと五人ほどたむろっていた。

『そろそろ騒ぎを起こすかな』

ステルスを解いて、そのまま部屋の中に入る。

「……誰だ！」

一人がこちらに気づき、ぽかんと見た後でようやく声を出した。他の奴らも慌てて近くの武器を取る。

『上手く回り込んで、一人は逃がしてね』
はいはい。

襲いかかってくる一人をサクツと斬る。

さらに二人、三人と斬っていき、入口から出口の方へ移動した。

四人目を斬ると、残る一人は叫び声を上げて逃げていく。

それを無視して逃げ道を確認する。

逃げ道の奥に進むと一人見張りがいたので、これを排除。

もう一度、アジトの方へ戻る。溜まり場に戻ったところで爆発音が響いた。

『入口側だね』

きちんと罠にかかってくれたようだ。

溜まり場の入口脇に隠れて、こちらへ逃げて来た奴を処理している。

そうしているうちにもう一つの罠が作動した。

男たちの声がまたしてもこちらに向かってきたので、先ほどと同様に来た奴らを倒していく。

『うん、攫った人間の見張りも逃げてきたね。少し待とうか』
少し待ったところで、残った奴を処理していく。

騒ぎのときは隠れていて、もう安全じゃないかと出てきた奴が二人ほどいた。

『一人は生かしておこう。……うん、途中で遭遇した奴に、入口と逃げ道で引つかかった奴を含めれば聞いてた人数とほぼ一致してる』

よしよし。

あとは攫われた奴らを見て終わりかな。

攫われた人の部屋に進むと、そこそこの人がいた。

冒険者もいくらか混ざっており、男がやや多い気がする。

多少手荒な真似をされた奴もいたようだったが、大部分は無傷だった。

暴力よりも薬で自由を奪い、情報を抜き出すことが得意な集団なの

が幸いした。

特に女性は傷がほとんどなく、人質にして身代金を稼いでいるのだろうとシユウは話す。

盗賊たちを縛りあげるのは、縄を解いた冒険者が手伝ってくれるので楽である。

あとは朝になるのを待ち、ジルエツト市に向かうだけだろ。

『いやいや、まだあるから。横領品の確認もしないといけないし、ボスがいないかったから手がかりを見つけないといけない』

そういう面倒なのは、ジルエツト市の奴らに任せよう。

私たちが全部してしまうとあいづらの仕事がなくなってしまう。

『じゃあ、横領品はともかくボスの手がかりだけでも』

ボスの正体は誰も知らないって話してただろ。

団員の前ですら、いつも真っ黒な覆面と手袋をつけてて、声も変えてるって。

捕まっていた人にも聞いたけど、同じように話してたぞ。

『ボスが正体を団員にすら隠してたのは、よほど有名な人物か、団員を信用してなかったってこと。あるいは両方だ』

そうかもな。

『どちらにしても、何も知らずに関係するのは避けたい。ダンジョンの攻略に支障をきたすかもしれない。ちよつと部屋を見ていくだけだから』

なんだか無理矢理こじつけた感もあるが、そこまで言うなら仕方ない。

私としてもダンジョン攻略を邪魔されるのも嫌だからな。

生き残りの団員を脅して、ボスがどこに良くいたかを尋ねた。

その部屋を見て回るが、特に手がかりらしいものは見つからない。

他のところも見て回ったが、残念ながらほぼ何もなかった。

調査器具が置いてあつたくらいか。

『うん、だいたいわかった』

……えっ、何もなかったじゃん。

『地面についた足跡、すりこぎ棒に残った指の跡、聞いた範囲の見た目』

で大まかな外見はわかる』

気持ちわる。

『団員から奪った毒は良くできてた。あそこまで良い物を作ってくれ
ると逆に絞りやすい。すり鉢に残った粉末、使った材料の断片も見つ
けたし、ちよつと探ればすぐに見つけられる』

あつ、そう。

ほんとに見るだけでわかっちゃったらしい。

なんにせよ、それをジルエツト市の奴に伝えて終わりだな。

で、どんな奴なの？

『……いや、知らないふりをしとけばいいかな。俺も教ええないから』
なぜだ？

ほつとくと報復を加えてくるんじゃないか？

『手足を潰しちやつたから、もうそこまでの力はないと思う。それに
――』

最後に何かぼそぼそつと呟いた。

聞き取れた範囲だと「惜しい」と言っていた気がした。

翌日になり、集団になってジルエツト市に向かう。

ひとまず市の入口で報告をして、よくわからん所に案内され、あれ
これと聞き取られた。

こちらの素性は冒険者証ではつきりしているので、また話を聞きに
行くということできらつと解放された。

さて、まずはギルドだ。

さつそくりオン・コンペティションの参加登録をおこなう。

「残り二名はどなたでしょうか？」

……なんだって？

「リ・コンは三人一組での受付になっております。全員で申し込みに
来て頂けないと参加受付はできません」

知ってた？

『もちろん。きつとメル姐さんには仲間を集める素晴らしい手段があ
るんだらうと思つて黙つてた』

くそおう、無理だあ。

今から二人集めろってどういうことよ。

出場決定する奴は、どうせもう仲間集めてるんだろ。

『せやろね。ソロで挑めないか聞いてみたら？』

それだ。

別にリ・コンに参加せず、ダンジョンとしてソロで挑めばいいんだ。

「申し訳ありませんが、リ・コン参加者以外の入場は制限されます」

……五つ目の難易度はその競争が終わった後でも挑めるの？

「残念ながら、競争中にしか現れません」

極限級でも駄目？

あまり特権の利用をしたくないが、攻略にかかわるなら致し方ない。

「例外は認められません。……判定員ではいかがでしょうか？ レー

スの公正さを審査する判定員が足りませんので、そちらでしたらソロでも問題ありません」

それはボス倒しても大丈夫なの？

ダンジョンを攻略してても良いとか？

「いえ……、それは、認めかねます」

駄目じゃん。

……集めるしかないか。

そうだな。別に戦力に数えないなら金で釣ればいい。

よし！

やるぞ！

そう思ったのが、数時間前である。

最初に数人話しかけたがすでにメンバーが決まっていた。

そこでもう話しかけるのも馬鹿馬鹿しくなり、嫌になり飲み屋に逃げた。

なんでこんなに疲れてまで仲間を集めなければいけないのか。

『誘い方が悪かった。もう依頼を出したら？ リ・コンの参加者募集って。一緒に参加したい方は、酒場でぐだぐだしてる極限級冒険者

のメルまでって』

恥の上塗りにも限度がある。

仕方ない。とりあえずダンジョンでも攻略しよう。

他の難易度をクリアしてるうちにきつと良い人材が見つかるはずだ。

もしかしたら、向こうから「一緒にやりましょう」って声をかけてくれるかもしれない。

『それはない』

やつてもないのに、最初から否定するのはやめてもらいたいな。とにかくダンジョンだ。

三日後、全ての難易度を制覇した私はまだ一人であった。

名前と顔が知られてしまい、話しかけるとどこか距離を取られてしまふ。

ついにはギルドにすらいられなくなり、他の酒場にまで移動してチビチビ飲んでる。

……シユウよ。

後でギルドに依頼を出す。

今のうちに依頼文と報酬を考えといてくれ。

『大丈夫！ もう考えてる！』

むかつくほど楽しそうだ。

嫌な予感しかしない。

ギルドの受付に行き、依頼を出す。

“リ・コンの参加者募集！ !! 二名!! 早い者勝ち！

極限級冒険者をしているメルです！

一緒にリ・コンに参加しませんか?!

リ・コンに出てくる超上級コースと一緒に攻略して、

互いの成長を目指しましょう！

ランクが低くても大丈夫！

私と一緒になら、レース以上の感動的な攻略ができます！

参加費は全て当方で負担！

もし負傷された場合は、治療費もこちらで支払います！

学歴、経験不問！

フットワーク軽く行動ができる方！

コミュニケーション能力を問いません！

報酬は以下の通り！

く……く

一人では目指せない大きな夢を手にするチャンスです！

まずは面接から！

西日の蛇眼亭でお待ちしております！”

おや、思ったよりも良い求人文だった。

報酬はやや高いが、これならドシドシ来るだろう。

あとは酒場で待っておけばいい。さすがシユウ。素晴らしい文だな。

『……マジか』

ぼそつと何か言ったが、聞き取れなかった。

さつそく酒場で待っていると、私の元に冒険者が尋ねてきた。

パツとしないおっさんだなあ。

「揭示された依頼を見てきました」

おお。

まあ、座ってくれ。

ランクはどうなんだ？

「初級です」

そうか。

低いがまあ仕方ない。

何か質問はあるか？

「攻略中に負傷した場合、家族にあのお金が出ると言うのは本当で
しょうか？」

本当だ。

「ああ、よかったあ。これで家族に残して逝ける」
……すまん、チエンジで。

おじさんはすぐすごと帰って行った。

最初から死ぬこと前提で来られても困る物がある。

二人目が来た。

全身に鎧を纏わせた奴だった。

口の付近からフューと呼吸が聞こえる。

えっと、あの募集を見たのか？

小さく首が動いて肯定した。

その後、いろいろ尋ねたが何一つ言葉を発しない。

帰ってもらった。

コミュニケーション能力を問わないとは書いたけど、何も言わないのはさすがにまずい。

三人目が来た。

髪をくるくるさせた若い女だ。

「あたしい、戦えないんだけどお、お金とかめっちゃ欲しくてえ。でも経験とかないけどお。経験不問ってあったしい」

チエンジで。

最低限のやる気がないとどうしようもない。

……あの募集文つてもしかしてまずかったのか。

『うん』

こうなることを予想してたのか？

『いや、まさか本当にあれで掲示するとは思ってなかった。どう考えてもまずかったでしょ』

そうなの？

めっちゃ良い文だと思ったんだが……。

『ブラック企業の人事になれるんじゃないかな。とりあえず依頼を止めた方が良い』

そうだな。

勘定をして席を立つ。

「あの、依頼文を見たんですけど……」

振り返ると少年がいた。

背丈は小さく、声変わりもしていない。

酒場に来るのまだ早いだろう。一刻も早くあの依頼文を取り下げねば。

来てもらって悪いが、あの依頼文は外すことになった。

「もう決まっちゃったんですか。そうですね」

少年はがくりと肩を落とした。

いや、そうじゃない。

いちおう聞いとくとランクは？

「中級です」

……初心者か初級かと思った。

「戦闘はほとんどしてません。いつも荷物持ちですから」

いちおう聞いておくと年齢は？

「十六です」

あら、思ったよりも上だな。

十二かそこらかと思っちゃった。

「……良く言われます」

そいつは失敬。

イモルテル大丘陵地帯については詳しいのか？

「はい。パーティーと全て攻略しています」

……問題ないんじゃないの、これ？

『どうしてそのパーティーと参加しないの？』

聞いてみると、答えは返ってこなかった。

何か訳があるのは確かだが、別に私としてはどうでもいいことだ。

他に何か問題ある？

『おねショタの区分にかかりそうで非常に心配』

それ以外で。

中級とは言ってるが、荷物持ちしかしてないそうだと。戦闘を考えるとそれ以下だろ。

超上級に挑ませても大丈夫なのか？

『いや、戦闘でも中級の実力はあるように見えるよ。ダンジョンに連

れていってみれば』

そうするか。

とりあえずあの依頼文を外してから行ってみよう。

えつと……名前は何？

「パシオンです」

じゃあ、パシオン。

さっそくダンジョンで実力をを見せてもらう。

ギルドで依頼文を撤回し、さっそくイモルテルに向かう。

パシオンはギルドに入るどころか、近づこうともしなかった。

事情があることは明白だが、実力があり、やる気もあるなら問題ない。

イモルテル大丘陵地帯の中級にやってきた。

大丘陵地帯の南口では入口が三つに分かれている。

西に行くと、比較的低いところを行く初心者クラスと初級にさらに分かれる。

東に行くと、やや起伏の多いところを進み、西と同様に途中で二つに分かれ、中級と上級に行ける。

中央を進むと何もなし。ここだけはレースのときだけ超上級のモンスターが湧き出てくるらしい。

出口は別々になっている。

逆から攻略もできるはずなのだが、こちらをスタートにすることが多いらしい。

パシオンの武器は短剣だった。

石やアイテムをメインに猪のモンスターと距離を取って戦っている。

私が前衛で引きつけており、ときどき援護が入る。

……どうなの？

『悪くはない。サポートメインだけど、もっと積極的に前に出しても良いと思う。フロントに恵まれたパーティなのか、それともこいつに近距離戦をさせたくないのか』

チート使ったら超上級に行ける？

『メル姐さんが行けるんだから、誰だつていけるよ。やる気があればね』

それもそうだ。

武器を持ってないようだから、買ってくるか。

『剣……いや、投げられる戦斧が良い。四、五本買って、上級に挑ませよう』

パシオンに市に戻ることを伝える。

彼も本来のパーティと攻略があるようなので今日は別れることになった。

また、明日の朝に集まって状況を挑むこととした。

一人はゲットした。

問題はもう一人をどうするかだ。

依頼文を出すのも気が重い。

あの面接みたいなのは、ダンジョン攻略よりも疲れる。

『パシオンが前か中間だとすれば、遠距離のできる奴が欲しいね』

弓か魔法か。

そのあたりはけっこう面倒な奴が多いんだよな。

弓使いはそれぞれ独特な距離感を持つてるし、魔法使いは総じて理屈っぽい。

なんかアイデアないの？

『うーん、レースが終わってからにしようと思ったけど、早めに当たってみようかなあ』

知り合いとかいるの？

『これから知り合う。戦えるかどうかはわからない』

それ、駄目じゃない？

『調合士としては一流だよ。ダンジョンで手に入る花とか葉っぱ、虫にも詳しいかもね』

何て人？

『調べてもらったところによると、フォーリーって女だね』

調べてもらった？

『そう。こんな簡単な調べ物に三日もかけるとは……。おっと、そのフオリーってのはお花屋さんの娘らしい』

お花屋さん？

冗談だと思っただが、案内してもらったところは本当に花屋だった。

店の前に色とりどりの花が並べられている。

けっこう良い値がするな。

それでも買いに来る人は多い。

おばさんたちから、冒険者まで買いに来ているな。

「何をお探ですか？」

目の細い娘が私に声をかけてきた。大丈夫か。見えてるか？

紫色の髪を後ろで一本に束ねて健康そうだが、細い目のせいになにやら眠そうだ。

悪いが花ではなく、フオリーという女を捜している。

「フオリーは私です。誰かのご紹介ですか？」

いやあ。

紹介のような、紹介じゃないような。

「どういったご用件でしょう？」

フオリーもよくわからないといった表情をしている。

私もこいつをダンジョンに行こうと誘うのは、さすがに間違いだと感じる。

どう見ても、ただの町娘だ。冒険者とかけ離れているだろう。

『こう伝えて。「アロエの香りは良くできていた。あれをダンジョン攻略で使う気はないか？ 返事は西日の蛇眼亭で待つ」ってね。小さな声でよろしく』

伝えると、細い目が一瞬だけ開かれた。

「確かに承りました」

『じゃあ、酒場に戻ろうか』

……あ、ああ。

酒場への道の途中で、思ったことを尋ねてみた。

もしかしてただだけど、あの女が盗賊団のボスなのか？

『間違いない』

ダンジョン攻略はできるのか？

『持つてるアイテムを使わせて何でもありでチート調合させるなら、ダンジョンを消し飛ばすくらいのやばいことになるよ』

調合で？

毒が蔓延するってこと？

『毒でもいい。爆弾だって作れるし、自動でモンスターを排除する魔力体の構築とかもできるね。ほんとになんでもありになる。それはおもしろくない。提供するアイテムに制限をかけるしかないね』

冗談だと思っただが、本気で言ってるようだ。

もしかしてアイテム使った方が楽に攻略できるんじゃないの？

『もちろん楽になる。ただし、それ以上に危険なものだからね。知識と技術、お金、材料、それに度胸がないとできない。下手な調合は身を滅ぼす』

難しそうだ。

下手に手を出すことは止めよう。

何にせよ彼女がパーティに入れば、超上級もいけるということだろう。

酒場に戻って、塩辛い肉を着に酒を飲んでると私の前の席に誰か座った。

へんてこな衣装で体型を欺き、顔を隠している。

「何が目的だ？」

開口一番がこれだった。

声は聞き覚えがある。フォリーの声だ。

雰囲気は違うが、店の時の方が接客用だったのだろう。

リ・コンに出たいが、メンバーが揃わない。

一緒に出ないか？

「……ふざけるな。私の組織を壊滅させ、一緒にリ・コンに出ろだど？」

声に怒りが混じっていた。

そりゃそうだ。

「出なかつたら私も殺すつもりか？ 彼らのように」
さて、どうだろう。

面倒だからそちらから手を出さない限り、私からは何もしないつもりだがな。

しかし、シユウウから教わった鉄則もあるからどうしたものか。

『手下がザムリング商会のことを口にしたけど、何か関わりがあるの？』

それ重要な？

よくわからんけど聞いてみる。

「直接の関係はない。名前が便利だから使っているだけだ。それが？」

『あつ、そう。ザムリング商会をどう思ってる？』

何なの？

得意の質問返しをする意味あるの？

「他のところは知らないが、ここの支部長は馬鹿だ。金と暴力でしか、人の動かし方を知らない」

『ふんふん。例えば？』

「あいつらはリ・コンにも関与している。大金が動くから当然だ。しかし、参加者に自分たちの手飼いを入れたのは失敗だ。レーヴの娘を優勝させたいようだが、不安要素が多すぎる。起こした行動の分だけ悪名が増えるだけだ。私なら現時点でレースに直接の関与はしない」
レーヴというのは聞いたことがある。前回のリ・コンの優勝者だったはずだ。

超上級のボスを倒してだけでなく、そのほかの採点ポイントも抜きんでての優勝だったとか。

「病死ということになってるが、実際はどうだろうな」

暗殺されたかもしれないと。

今度はその娘とやらが優勝を狙ってるのか。

「優勝した後は、骨の髄までしゃぶり尽くされるだろうな。とにかくレースそのものはギルドも含めて利権の巣窟だ。それよりも参加者、見学者の移動に手をかけた方が賢明だ。警備が緩かっただろ」

フォロリーは自虐気味に笑った。

「周囲の往来を固めてから、ゆっくり中の問題に取りかかれれば良い」

ああ、そう。

「なんなんだ？ 自分で尋ねておきながら、その興味のなさそうな様子は？ それで、リ・コンに出なかつたら、私をどうするつもりだ？」
どうするの？

『パーティー組んで。俺が直接話そう』

珍しいことだ。

気に入られたな。可哀想に。

パーティーリングを渡して、渋々パーティを組んでもらった。

シユウが話しかけると多少の驚きはあったが、何か納得はしている様子だった。

「合点がいった。本体は人間ではなく剣だったんだな」

いや。

それはおかしい。

本体は私で、極めて人間だ。

『何その機械的な文章は……』

その後はなにやら眠くなるような話が続いた。

ジルエツト市の収益やら、今後の展望だの、スケールの大きな話が
続く。

ぼんやりと聞いていたのが、うつらうつらになり、しまいには
店員に起こされた。

すでにフォロリーどころか周囲の客もいない。いったい全体何がど
うなったのか。

翌朝、早い時間帯からパシオンとの待ち合わせ場所に行く。

中級と上級の分かれ道にすでにパシオンが立っていた。

「おはようございます」

元気にあと一歩届かない声で挨拶してきた。

疲れている様子だな。

「遅い」

後ろから声がかげられた。
振り返るとフォリーがいた。

……なんているの？

『パーティを組んでもらえることになった』

おお、すごいじゃん。

「あれ？ 花屋の娘さん？」

「ん？ お前、レーヴの息子か？」

お互いが見つめ合う。

「なんか、雰囲気は違いますか？」

「いつも一緒の姉ちゃんはどうした？」

互いが互いに疑問をぶつけ合う。

「ありや接客用だ。ここじゃあ必要ねえ」

「姉には秘密にしています……」

そこで会話が止まった。

どうもパシオンの姉は、前回優勝者レーヴの娘らしい。

今回の優勝候補筆頭とも言われている。

姉と一緒にパーティーを組んでいるが、戦力の観点から一緒には参加できないとのこと。

危ないだのと言われ、参加しちや駄目と言われているそうだ。

それでも参加しようとしてるんだな。

なぜだ？

優勝したいのか？

パシオンは首を横に振った。

賞金が欲しい？

「お姉ちゃんを見返してえんだろ？ 自分だって戦えるんだって認め
て欲しい」

「違いますー！」

必死に首を横に振って否定する。

じゃあ何なの？

『父親みたいに死んで欲しくないんでしょう』

「ああ……、もしも姉ちゃんが優勝したらお父ちゃんと同じ道を辿るってか。なるほどなあ、姉が優勝できないように邪魔したいってことだ」

パシオンは黙った。

どうやら正解らしい。

「それなら組む相手を間違ってる。この馬鹿はダンジョン攻略が目当てでレースに興味はねえ。私も自分のために、ダンジョンの攻略手伝いを引き受けてるだけだ。姉ちゃんの邪魔がしたいなら他の所に行くんだな」

すごい言いようで言われようだが、そのとおりだ。

ダンジョンの攻略が第一で、レースなんてどうでもいい。

「そんな……」

「甘えんな、クソガキ。姉に優勝させたくねえなら、テメエで優勝をもぎ取れ。誰かの邪魔をして喜んでいいのは乳飲み子までだ」

そうだな。

邪魔をしてはしゃぐのは子供と喋る剣だけだ。

お前自身が優勝をして、姉に優勝をさせなければ良い。

『俺なら……、いや、やっぱりいいや』

私たちと組むのなら協力しよう——というよりも嫌でも協力せざるを得なくなるだろう。

超上級ダンジョンを攻略するのは私たちだ。他の奴らは知ったことじゃない。

私はボスを倒したい。だから、ボスは私たちが倒す。

お前は どうする？

姉の足を後ろから引つ張るか？

それとも、姉にお前の後塵を拝させるか？

どっちだ？

結論として、上級を三人で攻略している。

私が前で敵を抑え、中間からパシオンが斧で斬ったり、斧を投げる。後ろからフォリーがよくわからん調合品を使って、敵をまとめて倒

していた。

珍しくパーティらしい戦いをしている。このランクであれば、まだ私だけでも余裕でいける。

しかし、超上級になったときでもこの陣形が機能するように、かなり抑えた戦いをして馴らしているという訳だ。

上級をクリアした私たちは、その足でギルドに申し込みに行った。申請は通ったのだが、周囲の目線がおかしい。

それもそうだ。

極限級の冒険者、全優勝者の息子で姉の金魚のフン、お花屋さんの娘。

端から聞いたなら私も同じ眼で見えるだろう。

「パシオン」

重い声がギルドに響いた。

声の方には一人の女性が立っている。

顔はパシオンに似て一見優しげだが、彼女の目尻は上がっていた。

「姉さん」

蛇と蛙のようだった。

「パシオン、私——出るなと言ったよね」

「でも、姉さん」

「口答えしない。今すぐ参加を取り消しなさい」

悪いがこいつには私の攻略を手伝ってもらおう。

パシオンも優勝を目指してがんばるって意気込んでたぞ。

「何ですって？　あなたは？」

私はメル。

極限級冒険者だ。

弟には危険がないように努力する。

努力が報われたことは今までないがな……。

「ああ——」

そこでいったん複雑な表情を見せた。

言いたいことは山ほどあるが、格上の冒険者だから言えない様子だ。

気持ちにはわからないでもないが、格上だから言えないってのはその程度のことだと言わざるを得ないな。

「もう一人は——」

私に矛先を向けづらかったのか、もう一人にターゲットを移した。対象をジツと見つめて、何度も瞬きをする。

「え……、あれ……、花屋の——」

「はい、フオリーです。テナシテ様、いつもご愛顧ありがとうございます。新しい香料が入りましたので、ぜひまたお店にお立ち寄り下さい」

攻略中とは打って変わって変わっての営業スマイルと話し方だった。

私とパシオンは、そのギャップにどん引きである。

パシオン姉も困惑を隠し切れていない。

「えっ、なんで？ ほ、ほんとに参加されるんですか？」

思わず敬語も出てしまっている。

「戦闘をしなくても、一緒に参加するだけで良いということでしたから。報酬も良かったので、店の広告もかねて参加することになりました」

「そ、そうなの。危険じゃない？」

「メルさんはお強いので、上級はソロでクリアされていますよ。超上級もソロでいけると話しており、実績もあります。私も宣伝に務めようと思います。無理そうなら逃げますよ」

目尻は下がり、口端はやや上がったの気持ち悪いほどの完璧なスマイル。実際に気持ち悪い。

声はハキハキとゆっくり丁寧。これにはパシオン姉も、頷くばかりであった。

「リ・コンは超上級ボスを倒すだけでは優勝できません。チームワークと攻略の速さ……、良いでしょう。パシオン、レーヴの息子であり、私の弟であるという証を示すのです。……くれぐれも無理はしないように」

参加辞退が気づけば応援に変わっていた。

自らの優勝の邪魔にならないということを察したようだ。

なんだ。話を聞いてたらどんだけ偏屈な奴だと思ったが、そんなことはないじゃないか。

『そうだね。「姉より優れた弟などいない！」とでも言うかと思ったのにつまらんなあ』

つまらなくはないけど、安堵はできた。

自分が一番になりたいと思い、上には頭が上がりない良くいる冒険者じゃん。

それになんだかんだで、弟のことも心配しているようだし。

『レース後も、そうだといいねえ』

フォーリーもにこりと頷く。

そういう怖いことサラツと言うのやめてくれる。

さて、日付は変わりレース前夜になった。

準備もほぼ終わっており、入口の会場前広場は静けさにつつまれている。

私とフォーリー、それにパシオンはその広場に集まっていた。

私とフォーリーは下見なのだが、パシオンはもう一つ目的があった。

会場前広場は、通称リオン広場であり過去の優勝者たちの像が建てられている。

前回優勝者とそのメンバーの像の前に彼は立ち、その像を見上げて何やら考え事をしていた。

亡くなった父親に会うことができる場所だ。

明日は、姉弟で争って一つの椅子を奪い合うことになる。

ちようど彼がいなくなったところで、フォーリーと明日の打ち合わせを始める。

三人での打ち合わせはすでにおこなったが、そこではカバーできない流れの確認だ。

『——あいつは一緒に来ない……あつ、お姉ちゃんも来たね』

あらら、ほんとだ。

何も言わずにパシオンの隣に立って、同じ像を見上げていた。

やがて挨拶もせず背中合わせで別れて、パシオンは一人でこちら

に歩いて来た。

「ああん？　なんで何も言わねえんだ？　腰抜けか？」

「そうだぞ。」

お互いががんばろう、とかあるだろ。

「そうじゃねえよ。『明日はぶつ潰すから逃げるなら今のうちだぞ』とか言うだろ」

そんな姉弟は見たくない。

「父さんは、最期に『姉弟仲良く』と僕たちに告げたんです。それなのに、こうやって争うことになってしまった。でも、こうしないと——」
「ガキが。仲良くってのはな。相手の顔色を窺って、へらへら笑うことじゃねえ。思ったことを正直に口にしまつて、ブチギレ合つて、殴り合つて、それでもその後で一緒に肩を並べて立つことだ。明日の決着の後でそれができれば良いじゃねえか」

殴り合いはいらねいだろ……あれ？

またひどいこと言つてると思ったが、なんか良いこと言つてなかつた？

ちよつと聞き逃したからもう一回言つてよ。

「人生は一度きりだ。聞き逃したらそれで終わり、やり残したからつてやり直しはきかねえ。明日は全力でぶつちぎる。それでいいだろ」
「おおお、なんか……いいな。」

花屋でもそのスタイルのほう売れるんじゃないか。

「馬鹿言うな。客に逃げられちまうよ」

「そうだろうか。」

私はそう思わないが。

とにかくフォリーの言うとおりだ。

いつだつてダンジョン攻略は一度きり、全力でやり遂げるのみ。

ようやくレースの当日になった。

市長の長話に、ギルドの偉い人の眠たい話に、スポンサーだかのありがたい話が續く。

スポンサーだかの一人にザムルグ商会の支部長だかがいた。

なんだか下卑た眼で人を見下ろしていた。

やたらパシオン姉のことを押ししており、父親がどうのとか、彼女の實力がどうのだの言っていた。

しかし、私は気づいてしまった。あれはシユウと同じ性質の声色だ。すなわち女の敵である。

私の中のクソ野郎、暫定二位の座を挨拶だけで勝ち取ってしまった。すごいゲスだ。

『ひどい偏見だ。でも、一位の俺はもつとすごいってことだよ』
間違いない。

お前こそがクソの中のクソ野郎だ。

『殿堂入りしちゃうんじゃないの、これ』

お前を抜かすとあいつが一位だな。

そうしてレース開始間近である。

極限級と前回優勝者の息子というアドバンテージなのか、スタートラインの一番近くに配置されていた。

五つか六つほど後ろの組にはパシオン姉たちが控えている。

『一斉スタートじゃなくて、順々なんだよ。俺たちがモンスターを狩った後の方が動きやすいって判断でしょう。運営のお気に入りだ』

ふむふむ、予定どおりだな。

『そうだね。定石通りすぎて眠たくなるくらいだ』
すでにギルドから情報を得ている。

敵だけでなくボスの情報もある。道も事前に確認して万全だ。

スタートの合図と同時に共通の道を進む。

この時点ですでに他の同時スタート組を置き去りにしている。

三つ叉にたどり着き、迷わず真ん中の超上級の道突き進んでいく。

『せっかくだから俺たちはこの赤い道を進むぜ！』

何がせっかくなのかわからないし、そもそも道は赤くない。

モンスターに遭遇した。

前回通ったときは何も出てこなかったもので、本当にこの時だけ出てくるようだ。

上級のボスと似たドデカイ猪が襲いかかってくる。それにしても何で猪なんだろう。

『来年が亥年だから……』
えっ？

『それより作戦通り行くよ』
はいはい。

袋から小さな包みを取りだして、モンスターに投げつける。突進してきたモンスターに当たると、中の薬が宙に舞う。

『よし、離脱』

デカ猪はこちらを振り返った後、眼をトロンとさせて足を止めた。あとは期待した効果が出るかどうかだ。

「出るに決まってるんだろ。誰が調べたと思ってるんだ？」
フォリーが得意げに笑っている。

先ほど投げたのは彼女がブレンドした興奮薬である。

最初こそ穏やかな状態だが、しだいに意識が増大し暴れ狂う。

さらに強化もかかっているため手が付けられない狂化状態になるはずだ。

残念だが私たちは序盤でモンスターを倒すことはしない。

これを後続の参加者に置いておき、たっぷり時間を稼いでもらう。

「これ……本当に、大丈夫なんですか？」

問題ない。

シユウが上手くいくって言ったなら、だいたい上手くいく。

「いえ……、そうではなくて——」

「何をピヨピヨとひよこみたいにさえずってやがる。さっさと進むぞ。優勝するんだろ」

躊躇いながらもパシオンは後ろを見るのをやめた。

ああ、本当に作戦通りだ。

ひたすら交戦を避けて、モンスターに薬を撒いて進むとようやく後

ろから声が聞こえた。

「どうやら追いついてきたらしい。」

『きちんと苦戦してくれてるね』

ただでさえ超上級の強さで、さらに狂化がかかっている。

私でも正面から戦うとちよつと面倒な相手だろう。

そんな難敵に後続は追われているはずだ。

『……うん。薬の散布はこれくらいいいや。後は襲ってきた奴だけを倒してボスと遭遇しよう』

予定よりも早い切り替えだ。

「ドロップアイテムも手に入れないと、点数が下がりますもんね」

パシオンがやる気の様子を見せて、両手の戦斧を握りしめる。

……ああ、そうだな。

実際はそうではないのだが、適度に頷いておく。

パシオンも私の様子に気づき不審がる。……鋭いな。

「ほらほら。やる気出せ、前衛ども！ 私に怪我なんかさせてみる。

特製の薬を全身にかけるからな！」

それは怖い。

全力で突っ走っていくことにしよう。

余計なことを考えず、モンスターを斬っていく。

狂化をしていないモンスターなら余裕で倒すことができる。

抵抗と速さが上級よりも上がっているだけだ。ちよつと避けて斬るだけで済む。

『来た。……ああ、やっぱりそうか』

シユウの声で視線を上げると、丘陵の頂上から何かが猛烈な勢いで降りてきている。

真っ黒な泥を体中に纏わり付かせ、通った道が黒く腐っていく。

『俺の国にもあるんだよね。有名な映画にも出てきた。祟り神だ』

何でもイモルテル大丘陵地帯で殺された猪たちの怨念がアレを生むとか。

『フォリーはそのまま。パシオンは中間からフォリーの援護と隙があれば斧投げ』

私は？

『前衛でアレを止める。強力な呪怨を帯びてる。完全耐性が付けられるのはメル姐さんだけ。パシオンも投げた武器は絶対に拾わないように』

パシオンは返事をして、距離を取った。

シユウの声が真剣なので、あまり良い状況ではなさそうだ。

「あの、まさか……」

『鋭い。君の父親はあの呪いにあてられた死んだんだろうね。ついでに、人の欲望にも揉まれただろう。リ・コンは、賞金に名声、名譽で覆い隠してるけど、その実態はレースじゃない——神事だよ。生贄を捧げる儀式だ』

「そんな、じゃあ、大人の人たちはこれを知ってて……」

フォリーはクックツツと笑い始める。

「そりゃ知ってるだろうよ。ガキに全部都合の悪い部分を背負わせて、自分たちは安全な場所から利益を搾取する。人間らしさ、ここに極まれりだ。素晴らしいな」

お腹を押さえて大笑い。

何がそんなにおもしろいというのか。

「姉さんは……」

『両手斧で前衛でしょ。耐性装備は持つてるだろうけど、アレを完全に防ぐことはまず無理。遅かれ早かれ死ぬよ。フォリーの言ったとおり、貪り尽くされてさようならだ。次のレースでは君の番かもね』
パシオンはその場で崩れ落ちた。

嘆くのは後でもできる。

とつとと倒すぞ。

黒々とした猪がぶつかつてくるのを真正面からシユウで受けた。
地面を引きずりながらもようやくその勢いを止めることができた。
ちよつと待って。何これ。

猪にまとわりついてた黒っぽいのが、私にぞわぞわとくつついてくる。こちよばしいんだけど。

『呪いの触手だね』

呪いの触手。

『やっぱ、興奮してきた』

この変態め。

それに黒っぽいのに埋もれて周囲がよく見えない。

『大丈夫。ちゃんと足止めできてる。呪いの触手を絡め取って動きを止めてる』

表現がもう気持ち悪いんだけど。

シユウを力尽くで前方に押し込めると手応えがあった。

呪われた猪ボスもすごい叫びを上げている。

気づけば目の前に猪の顔が来ていた。

長い鼻にシユウが刺さり、怒った顔をしているが、円らな瞳が私を見つめている。

ブモモモと声をあげだした。

おいおい、何だか唸り始めたぞ。

『呪怨の叫びだね。大丈夫、パシオンとフォリーには届いてない』

ブモ、ブモモ、ブモブモ、ブー

何か可愛く聞こえてきた。

なんだろう。緊張感が薄れてきたんだけど。

猪も力攻めばかりで特殊な攻撃があるわけでもないし。

シユウが異常に警戒してたから、かなり厳しい戦いになると思ったんだが……。

もしかして、そんなに強くないんじゃないの？

『まあ、強力な呪怨属性で超上級ってだけだろうからね。それさえ効かなきゃ、ちよつと強いだけの猪モンスターだよ』

なんだ、そんなもんか。

『いやいや、呪怨属性つてのが超レアなんだよ。メル姐さんの豊富な状態異常付与でも、まだ手に入れてないからね。特殊な条件がいるっほい。逆に呪怨の耐性も非常に難しい。さつきも言ったように並みのアイテムではまず完全には防げない。かかっても気づかないことが多いし、気づけたとしても解呪がとてつもなく面倒。普通に戦うな』

ら、まず前衛は死から避けられない』
そうか。

パシオンの父は何も知らずにこれと戦ったのか。
『いや、俺は知ってたと思うね。他に倒せる奴も、倒そうとしている奴もいなかったんじゃないかな。誰かが背負わないといけないものだからね』

でも、子供を残して死ぬと考えるか？

……考えるか。お金も名声も実際に残してる訳だし。

『残したのはそれだけじゃないよね。言葉もあつた』

姉弟仲良く、だったか。

それでも死んだら意味がないんじゃないか。

『いや、死んでない。彼は像に自分を写した。あの像の視線は確かに何かを見つめている』

像として姉弟を見守ってるって？

それは流石に妄想がたくましくすぎるだろう。

ちよつと笑ってしまった。

ここで、パシオンとフォリーの援護攻撃が加わりボスが断末魔を上げた。

黒き呪いは消え去り、白い光の結晶が三つ地面に転がる。

『アイテムに呪いはかかってないね。拾っても大丈夫』

三人でアイテムを拾う。

「僕たちは呪われてないんですよね？」

『問題ない。後はゴールまで突っ走るだけだよ』

パシオンに嬉しさはあまり見えない。

とりあえず、優勝しても呪いで死ぬことはないから良かったじゃないか。
いか。

「パシ、オン……」

後ろから声が聞こえた。

振り返ると傷だらけのパシオン姉がいた。

大きな斧を杖代わりになんとか立っている様子だ。

「姉さん……」

「ボスを、倒したのね」

うん、とパシオンは頷く。

「追いつかれてしまいましたし、もうそろそろ行きませんか」

フオリーが先を急かす。

実際、ボス戦で足を捕られたのは確かだ。

先を進むとしよう。

行くぞ、パシオン。優勝は目前だ。

「……………はい」

姉を視線から外すのに手間取ったが、ようやくパシオンの瞳はゴール方向を見た。

先に進むと、モンスターが襲いかかってくる。

「こいつらは無視して、テナシテ達に押し付けようや」

そうだな。

すでにボスは倒した。無理に雑魚を倒す必要はない。

こいつらを、パシオン姉たちに襲わせれば時間差をつけられる。

どうした？

足が止まってるぞ、パシオン。

「僕は、僕は……………」

「おいおい、まさかここにきてまだ迷ってるのか？」

そうなのかここまで来たら優勝を目指すだけだろ。

お前はそのためにも私たちと参加して、練習して、ボスも倒した。そうだろう？

「そうです。でも——」

「甘えんなよ。姉ちゃん恋しいなら最初から姉ちゃんの言ったとおりにしとけや。お前はレースに出ることを選んだんだ。他ならぬ自分でな。最後まで責任を持って」

それにこれは個人戦ではなくチーム戦だ。

お前の自分勝手な行動は私たちにも迷惑になる。大人になれ。

言っている間に、私たちの見逃したモンスターがテナシテ達に向かう。

テナシテの仲間はずでに一人が戦闘不能でもう一人に背負われ、実

質の戦闘ができるのは彼女一人だけだった。

「お前が優勝することで、姉はただの冒険者に戻る。呪いどころか大人達の欲望の矛先を逸らすことができる」

子供のように何でもかんでも大切に作る時期は終わった。

何かを得るためには犠牲が必要だ。お前も大人の第一歩を踏むときが来たんだ。

さあ、三人でゴールへ行こうじゃないか。

私とフオリーは先に進むが、パシオンは立ち止まったままだった。振り返ると、パシオンはまっすぐ私たちを見つめる。

「ごめんなさい。本当に、本当によくしてくれたのに……。一緒に行かないやつてわかってるんです。でも、そうしたら姉さんは、僕は、姉さんとは二度と仲良くできない気がするんです。ごめんなさい、ごめんなさい」

「ごちやごちや泣きながら言い訳捏ねんな、クソガキ。謝ってる暇があるなら動け」

パシオンは私たちに背をむけた。

両手に戦斧を握り、姉へと駆けだしていく。

「予定通りだな」

そうだな。

これで私たちの優勝はなくなった。

ダンジョン攻略を一番に楽しませてもらって、優勝のわずらわしさもない。

『じゃあ、まあ行くとしようか』

そうだな。

「子供の駄々に付き合う余裕を持つのも大人つてもんだ」

囲まれていたパシオンと姉のモンスターに突撃して崩していく。

「メルさん。それにフオリーさんも。どうして」

私はもともとリ・コンには興味がない。

やるべきはダンジョン攻略のみ。ボスは倒したが、雑魚はまだ倒し足りないからな。

攻略する気のない奴は邪魔だからとつと先に行け。
フォリー、例の薬を頼む。

「はあい」

外行きの綺麗な笑みを浮かべて、危険な香りの薬を私に振りかけた。

「それじゃあ、私も彼女たちと一緒にいきますね」

ああ、私を置いて先に行け。

『その台詞は死亡フラグですぞ』

私は死ぬのか？

『いつかは死ぬよ。でも、それは今日じゃない』

そうだ。

今日は死なん。

生きて攻略するのみ。

あちらこちらからモンスターが集まってくる。

どれもフォリー達を無視して一直線に私への向かってきていた。

さすがの調合だ。

パーティ戦は終わりだ。

ソロのお楽しみといこうじゃないか。

モンスターの誘引効果が切れるのに深夜までかかった。

こんなに効果時間が長いなんて聞いてない。

ゴール地点には誰もいなかったし。

翌日になり結果発表兼表彰式が行われた。

わかっていたことだが、優勝はパシオン姉たちのチームだった。

彼らの表情は晴れない。私たちの協力があつてこそその優勝だとわかつているからだ。

優勝コメントでも、「弟の協力があつてこそだった、彼らこそが本当の優勝者だ」と話した。

そういう余計なことは言わないで欲しい。こっちに注目が来ると困る。

主催者側はきちんと大切な部分だけを切り取ってコメントした。美しい姉弟愛ですねくと上手く流してくれた。

最後に近づき、主催者側の謝辞が始まった。

開幕のときと同様に市長とギルド支部長が眠たい話を始めた。

さて。そろそろか。

パシオンは報酬の受け取りを拒否した。

「自分にはその資格がありません」と、もごもご言っていた。

子供なら喜んでお小遣いを受け取っておけばいいのに、あほくさい。

シユウとフォリーに、彼を喜ばせる案がないか尋ねたところ、それならと出してくれた。

いよいよ主催者の一人、ザムルング商会の代理支部会長が挨拶を始めた。

私はステルスで姿が見えないようにして、彼の背後に回る。

懐からフォリーの調合した薬を彼に嗅がせていく。

「皆様の協力がありました、無事に……失礼」

薬の臭いに思わず咳き込んでしまったようだ。

『よしよし、効いてる効いてるう』

代理支部会長の目がぼおとし始めた。

頬がわずかに上気し、酔っ払っているようにも見える。

「テナシテ選手は本当に素晴らしい実力をお持ちです」

『その彼女に何をしようとしているのかな？』

シユウをくつつけて、声が聞こえるようにしてある。

「何を……」

シユウの声に疑問を持たない。

薬はきちんと効いているようだな。

「彼女の体を欲しがる奴らは多い。スポンサーに売りつけ、私の地位を確固したものにするのだあ」

会場の空気がざわついた。

他の主賓達も顔を見合わせている。

『それだけじゃないよね。彼女を旗標にして、たくさんの女冒険者を

集められる』

「そうだ。すごいぞお。天の声が聞こえてくるようだあ。たくさんの冒険者を騙して搾り取ってやる。俺がこの町を支配するんだ。俺がトップだ。誰も俺に逆らわせない！」

……どつちがひどいのかわからなくなってきた。

『なんだ。本当に姉だけで利用するつもりだったのか。弟も利用できるよね。彼の前で姉を○させて、最後は男娼にもできる。あんなことやこんなこともするつもりじゃないかった？』

「考えつかなかった。素晴らしいアイデアだ。それ！採用！」

やっぱりクズの中のクズはお前で決定だ。

『うーん、利用するっていうなら、これくらいは考えといて欲しかったよね』

それよりも騒ぎがすごいことになっている。

運営が止めようとしてきたので、薬を嗅がせて眠ってもらった。

『今回の競技で悪事に荷担した奴らの名前を言って』

「荷担した奴だとお？ そりゃ、ガードンの役割は大きかった。あいつも女好きだあ。尻の○に入れるのが好きな変態なんだよなあ。それにバルダスだろお。こいつは酒狂いで市の金を横領して——」

最初はギルド支部長の名前。次に出てきたのは副市長の名前。

次から次へと名前と嗜好が挙げられる。

いよいよ場は騒然としてきて、名前を挙げられた奴は顔面蒼白。

あるいは何も知らない顔を真っ赤にして怒鳴り散らしている。

『それらは誰が考えてやったこと？ 会長かな？』

「そんなわけねえだろおー！ 全部俺が考えてやったことだ！ 俺の手柄だ！ 会長は変てこ指示しかしてこねえ！ 全部、俺の手柄だあ！」

シユウはうんうんと満足げである。

そろそろまずいぞ。兵達も出てきた。

『それじゃあ最後に一言』

「皆様！ このたびは本当に協力ありがとうございました！ また今後もよろしくね。それじゃあ、お手を拝借。よおーおー！」

一人の手拍子だけが、騒然とした会場に響いた。

数日ほどジルエット市はこの話題で持ちきりだった。

リ・コン優勝の表話よりも、リ・コンの裏話にみんな注目している。そのおかげというか、パシオン姉弟に目を向ける人は少ない。

汚い大人達の被害者という見方が強い。

私も飽きてきたので、今日でここを去る。

人目の比較的少ない会場前の広場に來ていた。

パシオンがお別れに來てくれている。

フオリーは仕事だから來てない。

なんだか大変みたいだな。

「はい。でも、姉さんとは前以上に仲良くできています。新しいザムリング商会の代理支部会長にも良くしてもらえています。前任の人はあれでしたけど……」

例の酩酊会見をおこなった代理支部会長は、翌日にはその首がジルエット市の中心に晒されてしまっていた。代理支部会長だけでなく、その他の幹部も同様だった。

市民は畏怖の念を込めて「肅正の夜明け」などと呼ばれている。

「口封じとも言われていますけど、僕はそうじゃないと思うんです。全ての罪状も首に添えて綴られていたようですよ」

そうらしいな。

「商會会長の直属の暗部が数十人は動いたって話ですね」

二人だよ。

ほんと大変だった。

「えっ?」

いや、何でもない。

「……やり方にはあまり賛同できませんけど、会長からのメッセージにあつたように、ジルエットはこれから大きく変わっていくんだと思います」

肅正の夜明けの後、すぐさま会長のメッセージがジルエット市にもたらされ、被害者のパシオン姉と他の冒険者に謝意が示された。

どこよりもいち早く自らの非を認め、謝意を示し、今後の市との関わりを打ち出したことにより、ザムルング商會に市民は一定の信頼を示した。

今後のことなど知らないが、肅正に関しては賛成だ。

膿は出し切るべきだろう。殲滅によつてのみ遺恨は完全に断ち切れる。

『新しい代理支部会長はどうだった？』

「変わった人でしたな。顔を隠して、声も偽装していました。でも、商會の動きを市民に監視させ、僕たち姉弟も支援すると約束してくれました」

そうか、それはよかったな。

……………うん？ 顔と声を隠す？

「はい。リ・コンもボスのドロップアイテムを上手く使うことで、呪いを無効化することができただろうって。次回からはただのレースとして定期的な開催を目指すと話していました」

すごいねえ。

酒場かどこかで聞いた話だなあ。

『沈黙は金』

それもそうだ。

知らないことが幸せということもある。

何でもかんでも知れば良いという物ではないだろう。

パシオン達は、知らなくても良いことを知らないまままで楽しく過ごせば良いはずだ。

もしも知るときがきても、その責任を押し付けられることなく、きちんと背負っている大人がいることを感じて欲しい。

呪いではなく、願いだったのだと感じていければいい。

その姿を見ることで、パシオン達もまたそういう大人になつていく。

それが、この市の新たな未来を築いていくのだろう。

「怪しかったですが、なぜでしょう……不思議と悪い人には思えませんでした。それに、あの像も代理支部会長の提案で実現しましたし」

ああ、あれな。

私も視線を像の方に移す。

今回のリ・コン優勝者の像は少しイレギュラーがあった。パシオン姉たちのパーティーが建つのは当然なのだが、パシオン姉の隣にもう一人少年が立っているのだ。

「姉たちは賛成してくれたようですが、少し恥ずかしいです……」
だろうな。

私なら像をゲロゴンブレスで壊してる。

まあ、諦めろ。

実際、お前がいなければ彼女の優勝はなかったんだ。

それに――。

「はい。父が見ていますから」

彼らの像は父親の像の向かい側に立つことになった。

そうすると、彼らが父親に見守られているように見える。

パシオンの父は立派な冒険者だったに違いない。

像ですらその立ち姿は堂々としている。生きていればなおさらだ。

私も、いつか――誰にも恥じることなく、若人達を見守る日が来るのだろうか。

『それは、来ないんじゃないかな』

……実は私もそう思う。

蛇足21話 「冥王計画メルハイマー」

私は今、エウレシス村にいる。

エレウシス村は、近くにダンジョンがあるだけのただの村である。もちろんダンジョンがなく本当に何も無い村よりは、ギルドがあるだけ活気はあると言える。

しかし、初心者級ダンジョン——ニューサ野に魅力のあるドロップはない。

そのためギルドに冒険者は少なく、寂しい様相を見せていた。

昨日の時点で、ダンジョンはさくつとクリアしてしまっている。

特にこれといって何もない初心者級ダンジョンだと思っていたが、シユウは違和感があつたようだ。

こいつが何かを感じたときはだいたい何かあるので、今日も喜んでニューサ野に行く予定である。

村から出る途中、目に包帯を巻いている少女を見かけた。

肩にかかる亜麻色の髪を風に揺らしながら、木の椅子にちよこんと座る。

線は細く、周囲の木々の枝のように力を入れたら折れてしまいそうな脆さを感じた。

昨日もいたよな？

なんか絵になる姿が、印象的だったので覚えている。

『いたね。やれやれ……、俺に口説かれているのを待っているようだな。罪な男だぜえ。——よし』

何がよしなのかはさっぱりわからない。

冗談はさておき、何をしているのだろうか。

日光浴にしてはやや風があつて肌寒い。

それに咳もしているようだ。

大丈夫か？

近寄ると少し体をこわばらせた。

「はい、大丈夫です」

そうか。

だが、今日は風が強い。

体調が悪いなら帰った方がいいんじゃないか。

「……ありがとうございます。でも、もう少しだけ」
どうも帰る気はないらしい。

まあ、それは本人の自由つてもんだ。

私もダンジョンに行こう。

「冒険者を、されているんですか？」

ああ。

冒険者をしている。

昨日、ニューサ野をクリアした。

少し気になることがあるから今日も行くんた。

「失礼しました。足音が冒険者の人とは違っていましたので……」

ここでようやく緊張が解けたように見えた。

足音で判断したってことはやっぱりその目は見えないのか。

「はい、小さいときに事故に遭って。もう慣れました」

そう言つて、また咳き込んだ。

顔色もやや白く、あまり良くは見えない。

『送ってあげた方がいい。ここに座つてて良い体調じゃない』

真面目な声だったので、本当に体調が良くないのだろう。

これが男だったら『死ぬまで座らせとけばいいでしょ』とか本気で
言うからな。

送つていこう。

家はどこだ？

「もう少し——もう少しだけですから」

もう少しというのは具体的にいつのことだ？

少女は俯いた。

悪いことをして見つかった子供のように黙りこくる。

けつきよく少女は私におぶられて家に帰った。

ベッドに横になり、その横で私は母親に礼を言われていた。

少女は母親にコレーと呼ばれており、何やら持病があったようだった。

これ以上、礼を言われるのもこそばゆい。

ささっと出て行こうとしたところでコレーに止められた。

「冒険者さん。お願いがあるんです。もしも……もしもプルートウという冒険者に会ったなら」

そこで少女は言葉を止めた。

出会ったら何なの？

『コレーはあそこに座って、「もう少し、もう少しだけ」と誰かを待っていたように俺は見えたがね』

……ああ、わかった。

そのプルートウとやらに会ったら、コレーが待っていたと伝えておこう。

コレーは喜び半分、安堵半分の表情を浮かべて床につく。

私は彼女を起こさないよう、静かに歩いて部屋を出た。

私は今、ニユーサ野にいる。

今日もニユーサ野は穏やかである。

膝下まで伸びた草を踏みつけ、道を作りつつ進む。

出てくるモンスターはニユンペーとか呼ばれる精霊だった。

光の球に、同じく光の小さな羽が生えているだけのモンスターである。

昼はふわふわ飛んでいるだけで攻撃してこない。夜になると攻撃もするがそこまで脅威はない。

この手のモンスターはあちらこちらで見られる。

名前もニユムペー、ニンフなど場所によつて呼ばれ方が違う。

初級や中級に出てくるものもあり、それらは魔法を使ってくることもある。

それで、何が気になるんだ？

私にはよくある初心者クラスのダンジョンにしか見えないんだが。

『もうちょっとだけ歩き回ってみて』

言われたとおりに歩き回る。

ときどきモンスターを斬りつけるがアイテムは拾わない。

『いた。あいつだ』

見える限りだと、だいぶ先にモンスターがいた。
ただのモンスターじゃないか？

それとも別のやつか？

『いや、今見てる奴であつてる。明るさがちよつと違うでしょ』

……そうか？

他の奴と全然変わらない気がするけど。

『やや明るい。夜だともつとはつきりわかると思う。それに魔力量も桁外れに多い』

視界の色がおかしくなった。

赤と青の二色が混ざった世界である。

シユウがたまに見せてくる魔力量を可視化したものだ。

周囲の景色が青で描かれているのに対し、モンスターだけが真っ赤だった。

確かに赤いな。

でも、他のモンスターも赤いんじゃないか。

『右の方にいる奴と比べてみなよ』

右を見ると、紫に近い球体がふよふよ浮いていた。

赤と言うよりも青に近い。

もう一度、前方の球体を見ると真っ赤である。

『ね？』

本当だ。

なんか異常に赤いな。

『ちよつと倒してみよう』

ああ。

言われた通りに一気に距離を詰めて倒す。

手応えは特にない。出てきたドロップアイテムも他のモンスターと変わらない。

『うーん。ポイントはやや多いんだけど、なんでだろう？』

魔力量がちよつと多いだけだったとか？

たまにこういうのいるんですよ。

『他のダンジョンだと、レア扱いで特殊なドロップがある』
同じだったぞ。

『うん。そうすると、まずは倒す順番、倒す手法、倒す時間あたりか。精霊ってことだから時間が本命かな』

確かにこの手のモンスターは夜に活発になる。

一度、街に戻るとしようか。

こここのダンジョンでモンスターの種類が違うなんて話はなかった。そうなると、これは新たな発見ということになる。

新発見の喜びに思わずスキップで街に向かってっていると、前方を歩く男を見つけた。

男だとわかったのは、彼もまた私に気づき振り返ったからである。その身なりは異常だった。

上から下まで真っ黒な装束に身を包んでいる。

腰辺りまで伸ばした長い黒髪は油に浸っていたのかというくらいジトツとしていた。

着ていたマントは夜闇の帳が降りているくらいに光を感じさせない。

唯一、やや黄色みの肌と赤い瞳が黒から浮き上がる。

その赤い瞳に補足され、背筋をぞわりとしたものが走る。

この気持ち悪さは、つい最近感じたものだ。

『な、なんで……、こんな奴が、こんなところにいる？　メル姐さん——』
シユウの声もややひきつっている。

わかっている。こいつ、すごい強いんだろ。

私でもはつきりわかる。立っているだけで威圧感を覚える。

『どうか、されましたか？』

男は、私に声をかける。

ジトツと湿度を多分に含んだ声だった。

おっさんかと思ったが、顔はまだ若そうである。

やや下がり気味の眉が、なんだか頼りなさげな印象だった。

「冒険者ですか。ニューサ野で攻略をした帰りでしょう。一緒にエレ

ウシスまでどうぞです」

真面目な表情でそう提言してきた。

いきなり敵対するということはなく一安心である。

相手からの敵対意識も消えたせいかな冷や汗もすでに収まっている。

なんだ、すごく強いというだけで別に普通の人じゃないか。

別に何もおかしなことはない。

『いやいや、おかしいでしょ。エレウシス村に向かって歩いてるけど、この道って本当にニューサ野以外に何も無いよ。こいつはどこから出てきて、エレウシスに向かっているの？ 少なくともニューサ野にはいなかったよ』

……ダンジョンに行く途中で引き返したとかじゃないの？

『聞かなくて良いからね。やぶ蛇はしたくないし』

それもそうだ。

私は今、沈黙を覚えた。

「お名前はなんというのですか？」

しばらく沈黙を貫いて歩いていたが、男が疑問を投げかけてきた。

喋りすぎるのもあれだが、何も話さないのはまずいだらう。

とりあえず、名前だけは返しておこう。

メルだ。

「メルさんですか。初級クラスでしょうか？」

いや。

もつと上だ。

ソロで極限級なので名前は割と有名になったのだが、心当たりがなかったようだ。

もしくは実力から測られて、それはないと考えたのかもしれないな。

そつちは？

「これは失礼しました。私は初級です」

『お前みたいな初級がいるわけねえだろ』

いや、クラスじゃなくて名前を聞いたつもりなんだが。

「ああ、そうでした。聞くだけ聞いて名乗っていませんでしたね。重

ね重ね失礼を。私は……プルートウです」

あれ？

どこかで聞いた名だな。

……あつ、コレーが話してた奴だ。

「彼女を、知っているのですか？」

男の紅い瞳が、ジィつと私を見つめた。

またしても背筋にぞわりとしたものが這いあがる。

村の出口付近でお前が来るのを座って待っていたぞ。

でも、体調を崩してな。家まで送って、今はベッドで休んでる。

「それは——そうでしたか。ありがとうございます」

驚いた様子で謝辞を述べた。

とりあえず殺気のようなものを消してくれたのはありがたい。

恋人か？

「違います」

そうなの？

「私にその資格はありません」

男はハッキリと断言した。

資格がないとはどういう意味だ？

「そのとおりの意味です。それに、私と彼女では——違いすぎる」

少し寂しげにそう答えた。

何が違いすぎるのかはさっぱりわからない。

これ以上は聞いても答えてくれなさそうなので私も口を閉じた。

しかし、確かに感じた。

これは——恋バナ、だと。

村に戻り、ギルドの近くにある宿屋に入った。

ここのギルドは、規模が小さいため飲み飲み屋がついてない。悲しい。

頼めば料理と酒も出してもらえるので、私はさっそく注文した。

軽くお腹に入れて、昼寝をしたらまたダンジョンへ行く。

ただ、問題が一つ残っている。

なんでついてきたんだ？

「気になることがありますので」

反対側の席に、やたら黒いというか暗い男が座っている。村に入って別れるかと思ったたら、そのまま私についてきてしまった。

「会いには行きませんよ。コレも体調がすぐれないようですから」
いや、確かにそうだけどね。

たぶん会ってやった方が元気出すと思うよ。

「しかし、体調を悪化させる訳にはいきませんし」
ずいぶんと常識的な奴だ。

頭が固いというか。とにかく会ってやれよ。

別に会ったからといって、すぐに体調が悪くなるわけじゃないんだからさ。

「なりますよ」

迷うかと思っただが、すぐに切り返された。

なぜだ、と聞き返そうとしたところで料理が運ばれて来たので会話を止める。

スープの皿が私の前に置かれる。

もう一皿のスープも私のすぐ前に給仕は並べた。

いやいや、私は二つもいらんぞ。

そいつにやってくれ。

「……そいつって」

私は目の前の男を指さすが、給仕はうろたえるばかりである。

「私の姿は、通常、生者には捉えることができません」

給仕は気持ち悪そうな顔を浮かべ、スープを置いて立ち去った。

「私を捉えられる生者は二種類あります。貴方は一つ目ですね。——異常な力を得ている」

男の目がじとりと私を見た。

その後、その視線はシユウの方へ移る。

『うーん、やっぱり気づいてたか。レイスの類かな』

「私はレイスではありませんよ。シユウさん、でよろしかったでしょか？」

……えっ。

聞こえてるのか？

パーティー登録もしてないのに？

『……転生者かな？ それともトリツパー？』

「転生者？ とりつぱー？ それが何かは存じませんが、貴方は死んでますね。死者の声に近いものがあります」

死者の声ってこんな声だったのか、どうりで気持ち悪いはずだよ。

『そういうことを言ってるんじゃないでしょう。で、何者かな？』

「知らない方が良いかと。あまり関わらない方が良いでしょう」
「ごもつとも。」

ただでさえ一人で喋ってて気持ち悪がられてる。

そのうえ、見えない誰かと喋ってるときたら、もうどうしようもない。
いい。

そもそも私は関わり合いたくなかった。ここまでついてきたのはそつちじゃないか。

「それは、そうですね。すみませんでした」

謝りつつも席を立つ様子がない。

何なの？ 黙って俯かれても、居心地が悪くて仕方ないんだけど。

「コレーに……伝えて欲しいことがあるんですが」

さつき関わらない方が良いって自分で言ったでしょ。

「一つだけですから」

仕方ないな。一つだけだぞ。

何て伝えて欲しいんだ？

「ありがとうございます。それでは、『もう会うことはできません。どうかお元気で』とお願いします」

……………おい。

お前、それを本気で私に言わせるつもりか？

『へいへい、ミスタープルートウ。もうちょっと女心してもんを考えようや』

ほんとだよ。

何でそこでわからないって顔してるんだよ。

自分で直接会って言えよ。

「会えば彼女の体調に障ります。私は生者と関わることのできる存在ではないのです」

くっそ真面目な表情で語る。

仮に会えていたら、その言葉を告げるつもりだったのか？

「もちろんです。今日はそのつもりで来ました」

『マジメか』

お前……、良かったな。

「何がですか？」

もしも、コレーが体調を崩しかけてるところにそれを言ってみろ。

彼女、間違いなく死ぬぞ。

「そんな馬鹿な」

『馬鹿ばかり』

ほんとだよ。

だいたいお前はそれでいいのか？

コレーのことを何とも思っていないのか？

「好いてはいます。しかし、私と彼女では違いすぎる」

またそれだ。

別に違いすぎてもいいでしょ。

『そうだそうだ。俺とメル姐さんでも全然ありでしょ』

それは全然ない。

とにかく会いに行こう。

さっきの台詞は口にするなよ。

「しかし、彼女が——」

おい、シユウ。

『コレーとパーティ登録すれば大丈夫でしょうな』

そういうことだ。

行くぞ。

食事をほどほどに済ませ宿を出た。

亭主と給仕はもう戻ってこないでくれという目をしていた。

今日は野宿かな……。

コレーの家を訪ねると、母は出かけているようだった。声を掛けると「入って」と、微かな声が聞こえてきたのでズカズカ踏みいる。

先に、コレーにパーティーリングを付けて登録しておく。いいぞ、入ってこい。

「この足音——」
ベッドで横になっていた彼女は上体を起こす。

「コレー」

「プルートウ」

プルートウがコレーの名前を呼び、彼女も彼の名を呼ぶ。……呼んだが、それから先が続かない。

私は今、なぜここにいるかわからなくなってきた。体調は大丈夫なのか？

「はい、なんか急に元気が出たみたいです」
それは良かった。

なあ？

「体調を崩したと聞いて心配しました。良かったです」
「プルートウ。体調が良くなったら、東の菜の花畑に連れて行って。とても綺麗だつて聞いたの」

「見えないでしょう」

マジメに返すなよ。

そこは二つ返事で引き受けるところだろ。

「私には見えないけど、貴方がどんな光景なのか教えてくれるでしょう。それに臭いも楽しめる。きっと良い香りがするはずよ」

『菜の花は臭いよ……』

「誰？」

空耳だろう。

気にしないで続けてくれ。

黙っているとシユウを蹴っておく。

「本当は、貴方と一緒にならどこでも良いの」
「けっこうぐいぐい攻めるな。」

プルートの顔は困ったような顔をさらに困らせる。

眉は外側に向かって急勾配になってるし、口の端も下に向かっていた。

まあ、まずは体調を整えることだ。

死んでしまったらどうしようもないからな。

「もしも死んでしまっても、ハデス様をお願いするから大丈夫」

ハデス様って何だ？

「冥府を統べる王様よ」

ああ、だいたいどこに行ってもそんな話があるな。

死後の世界ってやつだ。地域によって天国やら地獄やらとバリエーションが多い。

それでハデスってのがメーフの王として、何てお願いをするんだ？

「地上に戻してくださいって」

冗談交じりでコレーは話す。

一方のプルートはまじめ腐った顔をしていた。

「ハデスは、死者を地上に戻さない」

視線を逸らしてほつりと言った。

「そんなことない。ハデス様はマジメって聞いている。きっと私の話もマジメに聞いて、引き受けてくれる」

「ハデスは、引き受けない。彼は自身の職責を果たす。死者への裁きを見届けるだけだ」

断言した。

そして、そのまま言葉を続ける。

「奴は部下もまとめられず、その責任もまともに取れない駄目な奴だ。あてにするべきじゃない」

「じゃあ、プルートを連れてきてくださいってお願いする。一緒に深淵まで来てもらう」

プルートは困った顔に戻って、どう答えたものかと考えていた。
「ヘカテーに頼むべきだ。ハデスなんかと違って彼女は優秀だ。大抵

の事は何とかしてくれる」

「そうね。ヘカテー様をお願いして、ハデス様にもお願いする。二人
をお願いすればどうにかなるでしょ」

それってさ。

そもそも死後の世界の話でしょ。

生きて楽しむって選択肢をまず考えるべきだと私は思うんだが
……。

「そのとおりだわ」

プルートウも頷いた。

「君には、生きていて欲しい。どうか元気に生きて欲しいんだ——」

その後に「だから、もう会うことはできない」とは続かなかった。

けつきよく彼はまた来ると告げて、私と一緒に家を出た。

互いに何も語らない。

コレーと歩くときもこんな感じか。

いや、彼女がぐいぐいプルートウに話しかけるだろう。

ああ、今さらだがコレーはお前の声が聞こえるんだな。

彼女も異常な力を得ているのか？

「彼女にそんな力はありません」

じゃあ、どうしてお前と話ができるんだ？

「私を捉えられる生者は二種類あります。一つ目は異常な力を持つ
者」

ああ、私の場合はそうだな。

じゃあ、コレーはもう一つのパターンになるわけだな。

それは何なの？

「……生と死の境界に在る者」

私は返事ができなかつた。

プルートウは深刻そうな顔をしてどこかに歩き去ってしまった。

夜になってニューサ野に再びやってきた。

例の魔力量が違うという精霊を探し、とりあえず倒してみる。

やや凶暴になっていることはわかったが、それでも昼間と何も変わ

らない。

ドロップアイテムは同じだし、ポイントも増えていないとのことだ。

『うーん、時間帯でもないし、順番も違うと来た』

倒し方もいろいろと変えてみたが何も変わらない。

これはなかなかの難題だな。

『いや、なんとなくわかった』

おっ、さすがだな。

『でも、現状じゃどうしようもないなあ。明日にしようか』

明日になったらどうにかできるのか？

『たぶん』

たぶんか。

明日の楽しみにしておこう。

私は今、エウレシス村に戻っている。

野宿をして朝になって村に戻ると、村唯一の魔法使いが慌てた様子で走っていた。

『いやあーな予感がするね』

お前もか。私もだ。

魔法使いの走って行った方向はコレーの家がある。

追っていくと案の定だった。魔法使いはそのままコレーの家に入った。

前に踏み出そうとしない足を何とか進ませて、開けられたままの戸口を潜る。

コレーがベッドに横たわり、その周囲を母親や父親、それに魔法使い達が囲んでいた。

魔法使いがおそらく治癒の魔法を唱えるが、コレーの様子は変わらない。

呼吸は短く荒い、胸は大きく上下し、彷徨う手を母親が握った。

目を覆っていた包帯は外され、傷ついた目元が見える。

『体力回復増進薬をコレーに。それと治癒術士に魔力回復促進薬を。』

治癒魔法は、体力の回復から体温の安定に切り替えるよう伝えて。急いで』

シユウの言ったとおり、コレーに薬を与え、魔法使いにも薬と伝言を与えた。

よし、これでよくなるんだな。

『ならない。ちよつとした時間稼ぎが限界だよ。さっさと死なせてやった方が本人も楽でしような』

はい？

それじゃあ、何で？

「……プルウ、ト」

コレーの口から掠れた声で、一人の男の名が紡がれた。

その目からこぼれた雫を私は確かに見た。

『ニューサ野の道に行こう』

……そうか。そうだな。

せめて死に目に会わせてやるべきだろう。

家を飛び出て、村の出口に向かう。

そして、ニューサ野への道を走った。

『走れメルス』

私は今、焦燥のただ中にいる。

もう少し走れば見つかる。

そう信じて走り続けたが、道にプルートウはいなかった。

道を最後まで行ってしまいニューサ野にたどり着く。

引き返すべきか？

『いや、いたよ』

どこだ？

『右前方』

その姿はすぐに見つけられた。

緑の野原に、黒一色があれば嫌でも目につく。

私が急いで近づくと、あちらも私の様子に気づき体を強ばらせた。

目が合って、私は気づいた。この目はよく知っている。逃げている者の目だ。

コレーが危篤状態だ。

今はなんとか命を繋いでる、早く行くぞ。

「私は、行けない。行けば彼女が死んでしまう」

お前が行かなくても彼女は死ぬ。

最期を見届けてやれ。

「しかし、私が行けば――」

このヘタレ！

シユウの腹で、男の頬を叩いた。

すごく良い音がして、男は野原を転がる。

男に触れた部分の草が、死に枯れていつていた。

しかししかしと、ぐだぐだ言い訳するな！

お前はコレーの死ぬところを見るのが怖いだけだろ！

違うか！

『違うか！ 違うかあ！ なあ……プルートウ』

プルートウはそのまま立ち上がり、地面を見つめている。

「違わない。私は怖い……怖いんだ。恐怖の主と言われた私が、たっ

た一人の人間の死に怯えている」

そうか怖いか。

だがな、コレーはもつと怖がっている。

お前に会えずに、このまま死ぬんじゃないか、とな。

さつきも口に出していた。

両親の名でも、友達の名でもなく、ましてや私の名でもない。

お前だ。お前の名だ。掠れた声で、手を彷徨わせて、涙も流してそ

の名を呟いた。

——プルートウとな。

お前はここで何をしている？

いつまでそこに座っているつもりだ！

立て！ それとも自分の足で立つのは嫌か！

一歩近づくと、男は顔を上げた。

その顔から迷いは消えていた。

プルートウは立ち上がった。

同時に、私の背筋に気持ち悪い感覚がよみがえる。

彼が地面と水平に手を伸ばすと、その手は途中で暗闇に呑まれた。宙に暗闇の裂け目が生じ、そこから手を引くと一本の槍が握られていた。

その槍は暗闇そのものだった。端から端まで真っ黒で、先端が二叉に分かれる。

あの槍……。

この気持ち悪さはあの槍からか。

『バイデント。やっぱりそうなのか』

何がそうなのかはわからない。

しかし、あれがやばいものだとはわかる。

彼が槍を手になると、周囲の草が生気をなくしたようにしなだれていく。

同時に、空も雲一つないというのに光が奪われ暗くなった。

「開け。冥府の扉よ」

槍を地面に刺すと、穂先から円上に黒い淀みが広がっていく。

「エレボスの主たるハデスが命ずる。来たれ、我が忠犬——ケルベロス」

地面に広がった暗闇から、獣の手が這い出てきた。

その手の大きさは優に私の体を超えている。

体につき、すぐに頭も出てくる。

その頭は三つで、獰猛そうな見た目の割に目はまん丸で可愛らしかった。

バウバウと三つの頭が、プルートウにすりすり頭を寄せる。

彼はその頭を軽くさすってやると、一足で地を蹴り、犬の背中に飛び移った。

「メルさん。感謝します——行け」

男は私に一礼したあと、三つ首の犬に声をかける。

犬は地面を力強く蹴って、野原を駆けていく。

あつという間に視界から消え去った。

『気持ちはわかるけど、追いかけないの?』

あまりの光景と出来事に立ち尽くしていた。
プルトウがコレーの元へ向かったのなら、私もけしかけた以上、
見届ける必要がある。

『いや、そんな必要ないでしょ。見ただけだよね』
はい。

正直に答えて犬を追いかける。

ちよūd村に到着したところで、犬に追いついた。

並走するようにプルトウとともに、コレーの家に入る。

コレーはまだ生きてくれていた。

しかし、その顔色は蒼白で、目を瞑っている。

すでに周囲は為す術がなしと、静かに見守るだけだ。

彼女は、もう声を出せそうになかった。

それでも男の足音に気づいたのかぴくりとまぶたが動いた。

「コレー。遅れて済まない」

返事はない。できない。

ただ、彼女の表情が少しだけ和らいだ気がした。

彼女の手が、わずかに持ち上がった。

男に触ろうとしているようだったが、力がもう入らず、そのまま

ベッドへ静かに落ちた。

プルトウもそれに気づいたが、何やら逡巡している。

私は後ろから、彼の肩を軽くつつく。

彼は振り返って躊躇いを見せるが、私は首を振り顎で彼女の手を示

した。

恐る恐るだったが、彼は彼女の手を握った。

「うれ、しい……やっと、さわって、くれた」

途切れ途切れであったが、彼女はその喜びを伝える。

目には涙が滲むものの、頬を伝うほど溢れることはなかった。

「済まない。訳あって、ずっと君にふれることができなかった」

こんなときでもマジメに返答していく。

彼女も視線を天井にむけたまま、脆そうな微笑みを浮かべた。

きつとそういうところに惹かれていったのだろう。

「ぶるーとう。みて、ほしが、あんなにも、きれい」

「星は見えないよ。部屋の中だ」

……もう何も言うまい。

言われた方も嬉しそうだから静かに見守ろう。

「なのはな……みたかった、なあ……」

言葉は徐々に力を失っていく。

「――あなたと、いっしょ、に」

プルートウは何も返さない。

言っても無駄だからではない。言えなかったのだろう。

コレーは目を閉じ、もう何も語らない。

その手を最期までプルートウに握られたまま、安らかに息を引き取った。

私は今、哀傷の中にいる。

泣き叫ぶ両親を置いて、私とプルートウは外に出た。

彼は拳を握り、何かを噛み締めるようにふらふらと村の出口へ歩く。

私にはその背を追うことができず、見えなくなるまで立ち尽くすだけであった。

『あいつ、これからどうするつもりなんだろう』

さあ？

好きな彼女にもう会えなくなったんだ。

しばらくは悲しみにくれて、何も手につかないんじゃないか。

『ああ……、いや、そういうことじゃなくてね』

どうということなの？

コレーは死んだんだ。それで終わりだろう。

あいつが新しい恋でも始めるかどうかって話を言っているのか？

『ダンジョン以外をすぐ恋バナに結びつけるのはどうかと思う。でも、あえて恋バナで語るとすればあいつらの恋はまだ終わってない。むしろ、ここからが肝心なんだ』

はあ？ 何を言ってるんだ？

コレーはもう死んだんだぞ。

お前も一緒にいただろ。

『そう。コレーは死んだ。死んだ人間は冥府に行く。そして、あの男は冥府の王だ。プルートウってのは地上に出るときの仮の名だね。本当はハデスって名前だよ』

名前なんてどうでもいいんだけど、そんな世界が本当にあるのか？
『ハデス本人がそれらしいこと語ってたしあるんじゃないの。全ての死者が通るかは知らないけど、この辺りで死ぬとそこに行くんじゃないかな。それに、メル姐さんもあの力は見たでしょ』

……確かに見たのは見た。

すごい力だった。黒いのがブワツッって出てきて、槍もぞわぞわした。

犬もなんかでかくて黒くて不気味だったけど、ちよつと可愛かったような気がする。

『感想は置いとくとして、奴はマジモンだよ』

そうだな。

ボスみたいな奴だ。

『みたい」じゃない。ボスだよ』

あいつがボス？

じゃあ、冥府ってダンジョンなの？

『この世界に冥府エレボスなんてものがあるんだとしたら、そこはダンジョン以外にあり得ない。あいつはそのボスだ』

なんと。

恋バナを追っていたらダンジョンにたどり着いてしまった。

これはもう運命だな。しかし、ボスがあいつか。正直、勝てそうな気がしないんだが。

『タイムンで正々堂々じゃあ、まず無理だね』
だよな。

誰かと組もうにも頼る相手がいない。

『それでもないかもしれない』

仲間がいると？

『うーん、仲間というより仲魔かな。人に優しい部類のはずだけど、会って見ないと何とも言えない。それに——』

よし、それなら行こうじゃないか！

とりあえず様子見。駄目そうなら退いて、対策をして挑めば良い。行こう！

冥府エレボスに！

私は今！ 喜びの中にいる！

………とここで、どうやって行くんだ？

冥府エレボスを探し求め、やって来たのは夜のニューサ野である。こここそと例の魔力量が多い精霊の後をつける。

なんでもプルートウ——ハデスが犬を呼び出したときにあの精霊もおまけで出てきていたとのこと。

あの精霊が特殊ドロップをする条件は時間でも、順番でも、倒し方でもなく、倒す場所じゃないかとのことだ。

要するに、そもそもあの精霊はこのダンジョンのモンスターじゃない。い。

冥府エレボスから出てきてしまった冥精で、地上に出てしまえば弱体化しているとシユウは見込んでいる。

そういうわけで、こうやって後を追いかけて冥府の入口まで案内してもらおうという訳だ。

『来たー！ あれー！』

おお！

ほんとだ！

見れば精霊が、暗闇の中に吸い込まれようとしているところだった。

私もその精霊に向かって走り、そのまま暗闇の中に飛び込む。

すぐに起き上がって見渡せば辺りは一変していた。

数多くの精霊がふよよと浮いている。

周囲は暗く、草も木も何もない。不気味なところだった。

私は今、どこにいるんだ？

私の追ってきた精霊がピカリと光り、紫色の光弾を放つ。それをシユウではじき返し距離を詰める。

斬ろうとしたが、避けられてしまった。地上での速さとはあきらかに違っている。

精霊は戦わずにどこかへ逃げ去ろうとするのでその後を追っていく。

『追えー！ あいつを殺すんだ！ 絶対に逃がすな！』

なんでそんなに怒ってるの？

『あいつは冥精。おそらくランパスだ。あれを元にしたキャラに何度殺されたか……。00/99+の借りをここで返してやる！』

あつそ。どうでもいいな。

こいつの恨みはともかく、他に当てもない。

とにかくどこかへ行くようだから追ってみるとしよう。

精霊を追っていくと、そこには人が立っていた。

人ではないのかもしれないが、少なくとも私に人に見えた。

「どうしたの？ そんなに慌てて」

女性の声だった。

きさくな声で精霊に話しかけている。

『……いきなり本命か。メル姐さん。絶対に敵対しないでね』

声の主が振り返る。

紫色の髪をさらりと揺らして、私と目が合った。

「誰？ ……って、え、え！ 貴方もしかして人間！ しかも生きてる

?！」

目を見開いて、こちらを見る。

その顔は驚きと言うよりも楽しんでるようだった。

死んだ記憶はまだないな。

そいつを追ってきたらここに着いた。

「この子を追ってきた！ すごい！ 生者がこんなところに入ったら

一瞬で消滅しちゃうはずなんだけど!? どうやってるの?!」

なんだか異常にテンションが高い。

『俺がやってる』

シユウが話すと、女の視線がジツとシユウを見つめる。

どうやら、この女もシユウの声が聞こえる存在のようだ。

彼女は立ち位置を変え、私の周囲を回ってシユウを観察した。

「私たちとは違う系統の奴らの仕業ね！」

『そうだろうね』

うんうんと一人で納得している。

「それで——冥府まで何をしに来たのかな？」

……やばい。

ハデスのときよりも、気持ち悪さが勝っている。

絶対に戦ってはいけない相手だ。私は今、かつてない強敵の前にいる。

とりあえず正直に答えておこう。

ダンジョンと聞いたので攻略しに来た。

女神は「へ？」と口を小さく開き、その後でお腹を押さえて笑い始める。

お腹痛いといって地面にごろごろ転がる。

「何なの？ 人間はいつからこんな馬鹿になったの！ ダンジョンだからって冥府に挑むって！」

目に涙を浮かべながら笑って叫ぶ。

「おもしろい！ 名前はメルね！ その馬鹿さ、気に入ったわ！ 私が許すから、好きに見て回って良いよ！ 何なら一緒に行こうか？」

それじゃあ、頼む。

『俺は、メル姐さんを見直しそうで怖い』

何を言ってるんだか。

それよりもそっちは何と呼べば良いんだ？

「あたしはへカテー。知ってるでしょ？」

いや、知らんけど。

有名なの？ そう言えばどっかで聞いたかも。

へカテーはまたしても笑い出した。

『知らないって恐ろしい』

さて、まずはどうしようか？

ボスに行く前に、あいつを探すとしようか。

「誰か探してるの？ あつ、わかった！ 彼氏でしょ」

ヒヒヒと笑って、距離を詰めてくる。

「合わせてあげる。名前を教えて」

いや、彼氏じゃない。

女性だ。

「そういう嗜好なの？ そっち方面だとあたしは加護できないなあ」

そっち方面？

どっちの方面なのか知らないが、コレーという女の子だ。

「あつ……そういうこと——わかった！ 行きましよう！」

彼女は、どこからか松明を取りだして周囲を照らす。

松明を軽く振ると、その明かりが右の方へと道のように伸びていった。

「こっちなね」

ヘカテーが歩き始め、私もその後を追う。

何もない場所だと考えていたが、ついていくと川やら山やらといういろあつた。

大きな道に出て、丘を越えるとようやく精霊以外の灯りが見えた。

左から右へと一直線に延びている。

近づくと、小さな火の玉がずっと並んでいるものだとなった。

色も赤から緑、黄色、青と様々な火の玉が、少しずつ移動をしている。

精霊や馬みたいな奴、犬まで出てきて火の玉が列を乱さないようにしている。

何だこれ？

『死者の魂でしような』

あの火の玉が？

「みんな個性的でしょ」

確かに大きさまや色、燃え具合は違うけど、これを個性的と言っているのか。

「いたいた。ほら、あれ」

『ほんとだ、大丈夫そうだね』

どれだよ……？

火の玉から人を判断する術なんて知らないぞ。

「白に薄い黄色がかかっているがあるでしょ、あれ。隣にデカイ黒く燃えてるやつがいる」

ああ、黒く大きく燃えているのは目についた。

その隣にやや黄色みを帯びた炎が控えめに浮かんでいる。

「あの黒いのはタルタロス行きね」

タルタロス、なんだかおもしろいな名前だな。

「おつかない奴らがいる場所。罪深い死者はそこに送られちゃうの」

おどけながらそう説明する。

さて、見つけたのはいいが火の玉ではどうしようもない。

「あっちも気づいたみたいね」

コレーの火の玉が動きを止めていた。

それを咎めるように精霊や犬が側に寄る。

「かまわなくていい。そいつはあたしが導く」

ヘカテーが一言かけるだけで、精霊と犬は自分の持ち場に戻っていき。

「おいで」

彼女の声に導かれるように、火の玉も近づいてきた。

背を向けて、ついてくるように暗い丘をまた上がっていく。

私とコレー（火の玉）はそれを追うようにしてとことこついでいった。

私は今、ヘカテーの屋敷の前にいる。

つまらない風景を超えていくと、ぽつりと建てられてた屋敷に案内された。

ただつぴろい割に、人がいないので寂しく見える。

「あたしの屋敷。何もなければどゆっくりくつろいで」

本当に何もなかった。

家具や調度品の類が見当たらない。

さらに吹き抜けで、壁こそあるものの扉すらない。

「椅子と机くらいは必要ね」

えい、と彼女が松明を振ると、目の前に素っ気ない椅子と机が出てくる。

勧められたのでそのまま腰掛ける。ヘカテーも座った。

火の玉が椅子の上に浮かぶ光景は初めて見た。

「ここなら話せるでしょ。何でも聞いてあげる」

フフンと得意げな顔をしている。

「ここはどこですか？」

火の玉から声が聞こえた。

聞き覚えがある。たしかにコレーの声だ。

「ここは、冥府エレボス。あなたは、死んだからここにいる。死んだときのことは覚えてる？」

「はい。やっぱりここは冥府なんですね。……メルさんがいますよね。

死なれたんですか？」

いや、死んでないぞ。

私はダンジョンだから攻略しに来ただけだ。

それに、お前ともう一人がこの後どうなるのか気になってな。

「もう一人……プルートルウ？」

ああ。そうだ。

「彼は……、一緒じゃないんですね」

そうだな。

一緒には来ていない。

「ところで、こちらのかたはどなたでしょうか？」

ヘカテーって名乗ってたぞ。

「えっ……？ 本当に？ ヘカテー様」

「ふふん、そう、あたしがヘカテー様よ。ほらほら、なんか言いたいことがあるんじゃない。特別に聞いてあげる」

自分で様をつける割には、さほど偉そうな感じはしない。

「ヘカテー様、お願いがあります。私を地上に戻して下さい。プルートルウと一緒に菜の花を見に行きたいんです」

「それは無理ね。死者を地上に戻すことはエレボスの理に反する。我が主が決して許さない」

コレーは一瞬だけ落胆した様子を見せたが、まだ諦めない。

「それではヘカテー様。プルートのウを連れてきてはいただけませんか？　一緒にいたいんです」

「それも無理ね。彼を連れて来る権力があたしにはない」

「そんな……、なんでも聞いてくれるって言ったのに」

「聞くとは言ったけど、叶えてあげるとは言っていないでしょ」

ああ、そうか。

どうしてこいつと気さくに話すことができるのかわかった。

こいつはシュウに似てるんだ。人をからかって遊んでいる種類の奴だ。

「あなたは、じきに裁きを受けることになる。それで、どこに行くのか定まる。エーリュシオンとタルタロスはないから、エレボスになるでしょう」

「……エレボスにいれば、プルートのウに会えるでしょうか？　ハデス様にもお願いしてみます」

プルートのウがハデスだ。

「えっ？」

あいつが冥府エレボスの王であるハデスなんだ。

「そんな、だって彼は地上にいました」

私だって地上にいたけど、今は冥府にいる。

なんか行き来できるみたいだぞ。

「プルートのウがハデス様？」

そうなる。

「なんで？」

さあ？

それは知らない。

「あなた、生きてるときに目を怪我したでしょ」

そっぴや包帯をしたな。

怪我も確かにあった。

「あれは主の部下が、地上に出たとき誤ってあなたに負わせたもの。あなたが失明したのも病気になったのもそのせい。我が主は部下の不始末の責任を取るために、あなたの元へ自ら謝罪に出向かれた。覚えてない？」

「……あつ」

どうやら心あたりがあるようだ。

「え……じゃあ、もしかして……、彼が私に会いに来ていたのは——」

「我が主は責任感の強いかた。きっとあなたを負傷させてしまった責任を感じておいでだったのでしょうか」

「そんな……、それじゃあ、彼、本当は私のことなんて——」
違う。

それは違う。

最初は責任感によるものだったかもしれない。

それでも、あいつはお前のことが好きだと話していたぞ。

「でも、思えば触ってくれたのも最期だけでした……。ずっと近寄るのを避けられてた」

あいつが触れると生者は死ぬ。

それどころか近寄るだけで体調を崩すとも話していた。

あいつはお前にもっと近寄りたいが、近寄れないジレンマを背負っていたんだ。

「……本当に？」

見えなくてもわかるだろ。

あいつはそんなやつじゃなかったか。

すごい力を持つてるくせに、ヘタレで、マジメで。

それに——、

「はい、誰よりも温かい心を持っていた」

……ああ。

そうだ。そのとおり。

『ダウト。ほんとは「空気が読めない奴だった」とか言おうとしてたでしょ』

ちよつとうるさいよ。

「誰？」

空耳だから。

本当に気にしないでくれ。

とにかくあいつはお前が思っているような奴だ。

他人の意見に惑わされるな。お前が思っているあいつを信じろ。

ヘカテーを見るとニマニマと楽しそうな笑みを浮かべている。

こいつ、最初からこうなるとわかってて誘導したな。

……しかし、温かい心なんてあったか？

私が見たあいつに、そんな印象はなかったぞ。

「ありました」

「あるよ」

火の玉とヘカテーに断言された。

そこまで言うってことはあるんだろう。

見たことはないし、見ることもなさそうだ。

「きつと気づくときがきます」

それはどうかな。

もうあいつのことはいいから、話を進めないか。

「それで、あなたはどうなりたいの？」

ヘカテーが火の玉を向き直り尋ねた。

そうだな。

それこそが大切だ。

お前は、どうしたい？

「私は、プルトウと一緒にいたい」

そうか。

それじゃあ、どうすれば一緒にいられるか考えてみることにしよう。

——とは言っても、考えるのはシユウと、このヘカテー様とやらに任せるがな。

私はそのアイデアが成就するよう実際に動く方を担当する。

「問題は二つ」

ヘカテーがすぐに問題を挙げる。

「一つは、あなたに死者としての存在価値しかないこと。冥府の住人とは認められていない」

同じじゃないの？

「死者はこんな火の玉。冥府の住人は体を持つ」

ああ、そういうことね。

……どうやって実体を得るんだ？

「冥府の食べ物を口にすれば得るよ」

なんだ、思ったよりも簡単じゃないか。

「ただし、食べたならタルタロス行きが確定しちゃうけどね」
タルタロス行きっておそろしいところだろ。

そこでもハデスに会えるのか？

「会えない。おつかない怪物達と永劫に暮らすことになる」

何が楽しいのかヘカテーは笑っている。

難しそうだな。もう一つの問題は？

「我が主に、『一緒にいること』を認めさせること。主は融通がきかない。あなたが主にコレーとして扱われていたのは生きていたから。死者には死者の待遇しかしない。一己のあなたとして認められるには、コレーとしての存在を捨て、冥府の住人として認められる必要がある。そして、王の決定を覆えさなければならぬ」

わからん。

つまり、どういうことなの？

『まず、冥府の食べ物を食べて死者を辞める。肉体を得て、冥府の住人の最低条件を満たす』

でも、それだとやばいところに行かされるんだろ。

『そのとおり、だから、その裁きを退ける。王の決定を覆す。——ハデスを倒すんだよ』

……そうなるのか。

でも、そもそもコレーを前にしたら裁定が緩くなったりするんじゃないか。

「絶対がない。我が主は職務に私情を持ち込まない。誰であろうと裁

きは平等に行うよう取りはからう。このあたしが——このヘカテ様が主のご兄弟様達ではなく、主一人に従うのは、ひとえに職務に對するその真摯さがあるから」

このヘカテは、私よりもずっとずっと強いのだろう。

自分でヘカテ様などと言っているが、傲慢さはさほど感じない。

それは、もしかしたらその主の影響を受けているのだろうか。

ハデスも自分が強いだの、偉いだのとは一言も語らなかつた。

彼には傲慢さを感じるところが全くない。

「それと手伝いこそするけど、あたしは我が主とは直接戦えないから」

それもそうだよな。

そうすると厳しいよなあ。

どうなの？

『厳しいけど、条件を満たせばなんとか。アイドスキューネをなんとか借りられたりしない？』

何それ？

食べ物か何か？

『ハデスと来れば、俺の知ってる知識の中じゃ、バイデントとアイドスキューネだよ』

いや、だからアイドスキューネって何なの？

「バイデントは無理だけど、アイドスキューネならなんとかなる。けっこう貸し出しされてるから」

けっきよく何かよくわからないまま流される。

『それと実際に裁きを下すのは、ハデスじゃないよね』

「基本はアイアコス、ミーノス、ラダマンティスの三人が裁定を下し、それを認可するのが主の役割ね。エリュシオン行きを裁定する場合は主も加わるけど……」

『その三人の強さは？』

「私の冥精に毛が生えた程度。彼らの本質は腕っ節じゃなくて、高潔さ、法への知識、厳格さ、公正さ。彼らを従えている主の品性がわかつてくるわね」

うんうんとヘカテは頷き、自らの主への信奉ぐあいを示してい

る。

具体的な内容については、どこから聞いて良いかわからないので、成り行きを見守る。

私は今、傍観者に徹している。

『その裁定の場にハデスは来る?』

「出られるときは出るようになさってる」

『うんうん。裁定される側もその場にいる?』

「もちろん」

『じゃあ、いける』

「たぶん」や「と思う」はつけなかった。

へー、とヘカターは頷いている。

『それと、コレーにも無理をしてもらうけど大丈夫?』

「やります。彼と一緒にいられるなら、なんだってやります」

よし。

何をするのかわからんけど、やってみよう。

「ところで、ずっと気になっていたんですが、この空耳さんは誰なんです?」

聞けばわかるだろ。

変態だよ。

話が終わった後、精霊が小さな赤いつぶつぶを持ってきた。

「じゃあ、これ。ザクロの実。食べたらもう引き返せないから」

ヘカターはにたにたしながら、ザクロの実とコレーを見つめる。

「——いただきます」

コレーは迷うことなくザクロの実を、火の玉の体に取り込んだ。

『インスタンス・アブ○アクション!』

火の玉が徐々に人の体へと移り変わっていく。

ついに、生前と同じコレーの姿に……あれ、なんか違って?」

モンスターの扮装をした人間みたいな姿に変わってしまったって
ぞ。

「冥府の住人になると、魂の在り方に姿が左右されるからね」

そうか。

それでも人間っぽいからあまり変わってないか。

「おもしろくないなあ。もつと葛藤しながら口にするのが好みなんだけど」

首を傾げながら、ヘカテーは語った。

やはりこのあたりの性格の悪さがシユウに似ているな。

それでも、きちんと本人にとって佳き方へ導くところも似ているのかもしれない。

「じゃあ、裁定の場に行きましょう！ 打倒！ 我が主！」

『始めようか。「冥王計画メルハイマー」を！』

もつと良い名前はなかったのだろうか……。

ヘカテーは片腕を挙げて、えいえいおーと声を出して道を進んで行く。

私とコレーもその後を追って進む。

道は悪く、足下は暗い。

それでも足取りに迷いはなかった。

私は今、ボスの挑戦を前に昂揚している。

裁定所は、建物なのかと思っただが外にあった。

暗くて開けた場所に、机やらが整えられている。青空裁定所だ。

並んでいた火の玉が次から次へと、椅子に座る三体のモンスターに裁かれ行き先を決められている。

三体のモンスターの奥にその男は腰をかけていた。

暗い顔に、黒い長髪でそこに座っているだけで陰鬱にさせる。

さらに、見るからに元気がない様子だ。

「次のもの、進め」

骸骨の下半身が馬になっていたモンスターがコレーを指さした。

コレーは裁定を受ける位置まで歩いて行く。

私も彼女の側を離れない。後ろにはヘカテーも控え、遠くからこちらを見ている。

ちなみに私の姿は誰にも見えていない。

私自身にすら、私が見えなくなっている。

『これ、すごいね。借りパクしたい』

ほんとにな。

私は今、姿が消えている。

ヘカテーに借りた無骨な兜の効果だ。

元はハデスの兜らしく、かぶると誰からも認知されなくなるらしい。

その効果は現在進行形で示されている。

コレーと横を歩いていてもまったく気づかれることはない。

それどころか一人言を話しても、誰にも気づかない。シユウの声すら聞こえないらしい。

『ステルスの完全上位だよ。ただ、つけすぎると存在が薄れて消失するね。スキルに良い部分だけ取り込めないかな』

コレーが裁定の場に立つと空気が変わった。

まず三体のモンスターが、コレーに敵意を向けている。

奥の高台に座っているハデスは、俯いて意気消沈しており、こちらに気づいていない様子だ

「貴様、冥府の果実を口にしたな」

向かって右に座っていた髪と髭がもじやもじやの男がコレーを睨む。

髪と髭がつながっており、どこまでが髪で、どこからが髭なのかわからない。

「肉体を得て冥府の住人を気取るか」

左に座っていた頭が鷲の青年が眼鏡を指で上げた。

「灯の魔女にそそのかされたな。その罪を知れ。汝をタルタロス行きとする」

中央に座っていたももこな羊のモンスターが裁きを告げる。

「プルートウ、会いたかった」

三体のモンスターなど、コレーは眼中になかった。

奥に座っていた本命を青い瞳で見つめ、ついにその名を呼んだ。呼ばれた方は、体をぴくりと震わせた。

恐る恐るその顔を上げる。紅い瞳がコレーを貫いた。

「コレー……馬鹿な。冥府の果実を、口にしたのか」

男の声は震えていた。

「あなたと一緒にいるためには、これしかないって教わったの」

ハデスはゆっくりと首を横に振った。

「何を……何を言っているんだ、コレー。そんなことをしたら、君はタルタロスに行ってしまう。いったい誰だ、誰が君に、そんな甘言を」
「ヘカテー様よ。あなたと一緒にいたいってお願いしたら、ザクロの実を勧めてくれた。それで体が戻った。それだけじゃないの。この眼も私に授けてくれた。あなたの姿が見える。全部、ヘカテー様を勧めてくれたあなたのおかげよ」

ヘカテーはお守りにと群青色の宝石を授けた。

これを眼に嵌めれば、なくしてしまった視力も戻ると話した。

そんな馬鹿な話があるかと思っていたが、本当だった。ヘカテーさますごい。

「あ、ああ、嘘だ。私の助言で……」

立ち上がったハデスは、自分の助言が彼女を追い詰めてしまったと知った。

『精神攻撃は基本だよね』

よく効いてるな。

「プルートウ——いえ、ハデス様。お願いです。私をプルートウと一緒にいさせてください」

さらに、ハデスに「彼女への責任」と「自らの職務」を天秤にかけさせる。

ハデスは手をぶるぶると震わせた。

その震えを収まらせるように拳を握った。

どれほど強く握られているのか、拳からは血が垂れている。

唇も噛まれているのか口の端からも血が流れる。

「コレー……すまない。私は、私の職責をまっとうしなければならぬ。憎んでくれてかまわない」

手には以前に見た黒い槍が握られていた。

三体のモンスターがそれを見て、椅子から立ち上がりハデスに礼を示した。

「冥府の王——ハデスが下す。コレー、私が君をタルタロスに送る」
「本当にマジメで、不器用、融通も利かない。それでも必死に考え、迷いながらも自分の責任を果たそうとする。私はあなたのそんなところが好き」

ハデスの紅い瞳から一条の雫がこぼれた。

「私も、君が好きだ。しかし——」

「私のために泣いてくれる。そんな優しいあなたと一緒にいたい」

ハデスはまぶたをぎゅっと閉じた。

眼を閉じたまま、首を横に振る。

「王令は発せられた。もう——」

「駄目。引き返してもらおう。振り返ってもらおう。あなたと一緒にいるために、私たちは冥府の王たるハデス——あなたを倒す」

相手の迷いと混乱を誘う台詞をコレーが発した。

それは開戦の合図だ。

さて、戦闘開始だな。

私は兜を脱いで、ハデスの方に投げ捨てる。

ステルスと同じで、兜をつけたまま攻撃はできないらしい。

すでに場所は移動している。一番軽そうだった左の鷹頭のすぐ側だ。

「なっ、生者だと」

鷹頭を軽く斬りつけ、状態異常を付与する。

そして、そいつを掴んでハデスに投げつける。

「メルさん、なぜここ——ぐっ」

ハデスはすぐに私へと振り返った。

部下を躲したところまでは良かったが、状態異常は防げなかったよ
うだ。

『いや、効きが悪いな。なるべく近づいて。能力半減もつけないとき
つい』

シユウの言に従い、ハデスとの距離を詰める。

能力半減を受けつつもなんとか私の攻撃を捌いた。

『あそこから防ぐのか。強すぎでしょ』
そうだな。

私の必勝パターンなんだが、防がれたのは初めてだ。

その後、打ち合いを続けたが、軽く避けられるようになってしまった。

能力半減の間合いも見切られてしまい、いよいよ私の打つ手がなくなってしまう。

「メルさん。いや、シユウさん。あなたの差し金ですね。あなたたちには感謝していますが、限度を超えています。惜しいですがここで死んでいただきます」

どうやらいよいよ私を本格的に殺すつもりらしい。

槍を構え、私へと向かってきた。

その槍は私を捉えている。

『どうやらここまでのようかな。左から来るからね』

「左？ これで終わりです」

ああ——私たちの勝ちだ。

「何を……」

よく見ろ。

私は今、お前の目と鼻の先にいる。

だが違うよな。

お前が真に見るべきは私じゃない。

「コレーはどこにいる？」

ハデスの目が迷いで揺れた。

その刺突も鈍る。

「ッ！」

突如、私と槍の間に人が現れた。

私に背中を見せる彼女の手には、外された例の兜が持たれている。

「また、私を看取ってくれるの？」

ハデスの表情は見えないが、飲まれた息から察するに相手の意表を突くことはできたようだ。

槍が逸れて、コレーの左すれすれのところを通っていく。

逆に、私はコレーの右からシユウを伸ばして、槍の持ち主めがけて突き刺す。

手応えはあった。

「まだだ……冥府の王として、ここで倒れるわけにはっ」

シユウを突き刺されながらも倒れず、槍を逆手に短く持っている。

やば、さっきので勝てる予定だったからこの後が続かない。

「私はあなたと一緒にいたい。ずっとあなたの隣に」

またしてもコレーが私とハデスの間に割り込んだ。

「嫌なら振りほどいて」

そして、彼の両肩に自分の両手を置き、背伸びして彼の顔に自分の顔を近づける。

『二人は幸せなキスをして終了』

それ以上の説明は無粋というものだ。

振り上げられていたハデスの腕が、ふるふる震えた後に力なく下ろされた。

槍は手からこぼれ落ち、その腕がコレーを抱きしめる。

「私も——君と一緒にいたい」

ずっとくっつけていた唇が離れたとき、ハデスは一言そう告げた。

そこで、ようやく力が尽きたのか光の粒子へと消えていく。

この戦いは冒険者とダンジョンボスの戦いではなかった。

ヘタレな男と恋する女の戦いだったのだ。

私は今、勝利の乙女の後ろにいる。

ハデスが復活すると、冥府の主な住人が裁定所に集まっていた。

馬やラスケルトンやら縦に半分に分かれてるモンスターなど様々であった。

ちなみに私は今、数多くのモンスターの中で唯一の人間としてやや離れて立っている。

『冥府でもぼっちである』
うるさいな。

何で冥府まで来て、こんなことを言われなければならないのか。たまには一体感とやらを得てみたいものだ。

一緒にいる温かさ？ シンパシー？

そんなものを知りたいものだね。

『敗北を知りたい——そっか、それは良かった』

何も良くねえよ。

「……………これは、どういうことだ？」

ハデスはぽかんと口を開き、状況を把握していない。

集団の中心から、紫色の髪の女が前に出た。

「我が主よ。このたびのご婚儀——誠におめでとうございます！」

ヘカテーが大声で祝詞をあげる。

周囲もそれに合わせて「おめでとうございます」と斉唱した。

「……………婚儀？ 何のことだ？ 何を言っている？」

「やだ、おとぼけになられて！ 不肖、このヘカテー、拝見させていたできませんでした！ あれだけ熱いキツスを交わしておいて、それはないでしょう！」

「……………あ、あれは！」

何のことか理解して頬を真っ赤に染め上げた。

『私も君と一緒にいたい。どうか私の隣に立って、冥府を共に管理してくれ』。プロポーズも、ちゃんと！ 拝聴致しました！

「それは……………いや、待て！ そこまで言っただろう」

まったくお前は言い訳ばかりだな。

『そんな言い訳してばかりで良いわけ？ 何っつて』

ハデスにヘカテー、さらには他のモンスター達も一斉に私を見つめる。

その目は、真剣そのもので、何も言わずに私を貫く。

いやいや私じゃないぞ。見る方が違う。

『審議中、審議中——タルタロオオオオス！』

何だ、そのノリは？

『俺たちの魂の行き先を、組み〇け帽子っぽく言ってみました。タルタロス行きで決定』

周囲のモンスターも頷いて、元の空気に戻る。
当然のように私を巻き込むのやめてくれるかな。
私は今、この世界の不条理さを感じた。

「……彼女はどこに？」

そう、ここにはコレーがない。

ハデスもようやくそのことに気づいてヘカテーに問いかけた。
ハデスの問いにヘカテーは道を開けることで示した。

周囲のモンスターたちも彼女にならない、中央の道を開けていく。
開かれた道の奥には、黒いドレスに身を包んだコレーがぽつんと立っていた。

その顔には黒いベールがかかっており、表情を窺うことができない。
い。

彼女は、開かれた道をゆつくりとハデスへと歩いていく。

ドレスの長い裾を冥精が後ろで支える。

「ミュージック、スタート」

ヘカテーが、隅にいたモンスター一群に指をパチンと鳴らして指示する。

すると、それらのモンスターが、おごそかな曲を演奏し始めた。

これ……、ちよつと曲と雰囲気があつてないんじゃないの。

披露宴というより、葬式に流すような曲じゃない？

『冥府だからね。そんな曲しかないでしょう』

まあ、あれだ。

とりあえずなんとかここまで来たな。

『そうだね。——さて、メル姐さん。冥王計画もいよいよ最終段階だ』
……は？

もうハデスは倒したぞ。

そのふざけた名前の計画は終了しただろ？

『いいや。違う。ここからが大詰めなんだ』

そういう大切なことはもつと早く言えよ。

それで、何をすればいいんだ？

早く言わないとコレーがハデスにたどり着いてしまうぞ。

『いつもどおり、思ったとおりにやればいい』
なんだそりゃ。

まあ、それならそれでありがたい。

言われたとおり、思ったとおりにやらせてもらおう。

それにしてもヘカテーの段取りはすごいな。

ハデスを倒した直後、冥府の住人をすぐさま集めて説明をした。

コレーに着せた黒のドレスも、彼女がどこからか取りだしてきたものだ。

もちろん音楽隊を集めて、準備をさせたのも彼女である。

『ああ、それは最初から計画してたからでしょう』

コレーを冥府の住人にしたときからってことか。

さすが、準備がいいな。

『違う。コレーがハデスに出会う前からだよ』

……えっ？

『コレーを見定めたのも、怪我をさせたのも、ハデスが直に謝罪に行くこと——二人が互いを好きになることまで、全てがあいつの計画のうちだ』

そんな馬鹿な。

『別に馬鹿な話じゃない。時空間の三相——過去、現在、未来。地上、冥界、異世界を担うあいつなら可能だ。名前の由来も「意志」の他に「遠くまで力が及ぶ者」だったはず。あいつにとってはお手のものだろう』

じゃあ、私が来ることもお見通しだったのか。

『いや、そこは本当に見えなかったみたいだね。ずいぶんと楽しそうだったし。本当はもっと時間をかけて進展させるはずだったんでしよう。俺たちは利用されたんだ。ほぼ全て彼女の手のひらの上にあっただよ』

嘘だろとヘカテーを見れば、彼女は得意げに微笑み返す。

『で、せっかくだから彼女の計画に、俺の計画も乗っけることにした。それが冥王計画メルハイマー』

名前……、じゃあ、なんだ。

冥王計画とやらはハデスを倒すための計画ではなかったのか？

『そのとおり。冥王計画の真の目的は、討伐じゃない。帮助だよ。そして、そこからの——来た』

コレーがモンスターが脇を固める道を進みきった。

彼女はハデスのすぐ隣で立ち止まると、ハデスの方を向いた。

ハデスを見るからに緊張しているが、コレーから目が離せない様子だ。

「我が主よ。お妃様のベールをお上げになられてください」

ベールを上げたら引き返せないとばかりつつも、彼はそのベールに手をかけた。

素顔が露わになり、その青い瞳がハデスの紅い瞳を見つめる。

やがて青い瞳がまぶたで閉じられた。

空気の読めない奴だが、さすがにこれは何を求めているかわかったらしい。

助けを求めるようにヘカテーを見るが、彼女はニタニタと笑うだけだ。

次いでモンスター達を見た。彼らも期待の眼差しで彼を見返す。

最後に私を見た。その目は、いつかのヘタレの目だった。

私は今、自らの果たすべき役割を悟った。

シユウで彼を叩く仕草をし、コレーを指さす。

口パクで「コレーは怖がっているぞ」とゆっくり伝える。

ハデスはそれをなんとか読み取って、ようやく気づいたようである。

コレーはヘカテーによってドレスを着させられた。

しかし、着せられた当人は本当にハデスに迎え入れられるか不安であつた。

目を閉じた彼女はまだ不安で、体を震わせている。

ハデスはそれを認め、意を決した。

前回とは逆で、彼が彼女の両肩に手を添え、彼女の震えを止めた。

今度は、彼の方から彼女の方へと顔を近づけていく。

唇が触れると、コレーはハデスに腕を回した。

長く触れていた唇が離れ、互いが目を開き、赤と青の視線が交わる。周囲のモンスターはその光景を拍手という形で祝った。

『メル姐さん、気づいた？』

……ああ。

私が間違っていた。

ヘカテーやコレーの言うとおりだ。

この光景を見ていれば、冥府がどういった場所かわかる。

また、その冥府を治めるハデスがどういった人物なのかも自ずとわかってくる。

死者達が裁かれる場所で、厳格で、マジメで、融通がきかない。

住んでいるのも恐ろしい姿形の奴らばかりだ。

誰も彼もが異形であったが、その誰もが二人への手を止めることはない。

嫌々と、仕方なく祝う者がここに一体でもいるだろうか。

もちろん、私も手を叩いて彼らを祝福する。

『メルは今、そこにいますか？』

ああ……私は今、彼らと共に、そこにいる――

冥府の確かな温もりの中に。

蛇足22話 「言葉に力を」

私たちは、ルビソウルの街にやってきた。

『なにルビソウルって……、言霊宿す街でしょ』

いきなりの駄目出し。

やれやれと同じ言葉を繰り返す。

……だから、ルビソウルだろ。

あつてるじゃん。

『全然違うでしょ。言霊宿す街』

ルビソウル。

『ノン。言霊宿す街』

発音が違うって話か？

『本気で言ってるの？』

ま？

まってなんだ。

さっぱりわからん。

何？ 何がちがうの？

『これは、駄目かもしれない』

これまでもわからないことはあつたが、おぼろげに何かが違うと認識できた。

今回は、今までのものとまるで違う。何がなんだか、さっぱりわからない。

とりあえず、ギルドにやってきた。

『ご利用を伺います』

にこやかに受付嬢に対応される。

そこで、しばらくお互いに見つめ合い何も交わさない。

『ご利用は何ですか』

ああ。

またしても、互いに見合つて無言。

ご利用は、とかないのかな、ここは？

『今、用件聞かれてたでしょ』
はあ？

ようこそとしか言っていなかっただろ。

『ああ、やっぱりか』

シユウは溜息一つこぼすだけ。

受付嬢は哀れむような目で私を見て来る。

なんなの、どういうこと？

この街に来てから、なんだか異常だぞ。

「失礼ですが、名前とクラスをお教え冒険者カードを提示ください」
メルだ。

極限級の冒険者をしている。

『そうなるよなあ』

「承知致しました」

やっと話を通じた。

とりあえず、アリスイアの情報をくれ。挑みたいんだ。

「今のメル様では、アリスイアに入場できませんよ」

えっ、なんで？

「ルビソウル・アリスイア言葉に込められた真実が聞き取れないようですから」

ルビソウル・アリスイアって、この街とダンジョンの名前だろ。

何を言ってるんだ？

「今のメル様にはわからないと思います。この街を二、三日ほど観光なさってください。そうすれば、私の言っていることがわかると思えます。情報だけならお売りできますが、どうされますか」

は？

ほんと意味がわからん。

『大人しく受付ちゃん言うとおりにした方がいい』

なんなんだ。

いったい何がどうなっている。

『わからなくてしよ？』

いやいや、さっぱりわからん。

『だからだよ。言うことはできなく意味を込められなくても、最低限わか聞き取れないと攻略

できないダンジョンなんだろうね』

言うことができる？ わからないと？

どういうことなんだ。

けつきよく意味がわからないまま、ギルドから出て行くことになった。

言われたとおり、観光をしてみることにした。

ダンジョンは初級で簡単。ドロップも微妙。そのため、冒険者は少ない。

しかし、近くの景観による観光と鉾山での採掘がさかんなので街は賑わっている。

「その冒険者さん。ちよいとあんただよ。冒険者さん」

『呼ばれてるよ』

えっ、私か。

おねーさんって他にもいるだろ。

『おねーさんは他にもいるけど、冒険者っぽいのはメル姐さんしかない』

おねーさんでしょ。

冒険者とは言ってなかっただろ。

「あつ、冒険者さんは聞き取れない人だね」

呼びかけていたらしいお婆さんはガハハと笑っている。

笑い事じゃねえんだよ。そのせいでダンジョンに行けねえんだ。

死活問題だ。

「外から来る人だと、ごくごく稀、たまーに、天文学的な確率でいるんだよ。そういう人。なに、気にすることないよ。ここの街で二、三日ほど歩けば聞き取れるようになるさ」

受付嬢と同じようなことを言うものだ。

「そういう人には良い物があるんだよ」

お婆さんは柵をこそそそと漁り出す。

「はいこれ」

壺だった。

両手で軽く持てるくらいはやや小ぶりな壺。

「ただの壺じゃない。極限級冒険者エニア・ロウを知ってるね」
もちろん。

すでに死んでしまっているが、史上最高の冒険者に挙げられることが多い男だ。

ソロで極限級まで上がった冒険者は私を除いて二人だけ。

冒険者ギルドの創設者と彼だ。

創設者は形だけのようなものだと聞く。

もちろん私はチートありきなので、実質ソロでの極限級は彼だけだ。

『二度と出てこない設定の解説を、ご苦労様なことです』

それで、エニア・ロウとその壺にどんな関係があるんだ。

「驚くなかれ。なんとこの壺。エニア・ロウが愛用していたのさ。彼もこの街を訪れたときに、聞き取れなくて苦労されたようだ。それがこの壺を手になさってからはあら不思議」

わかるようになったと？

「いかにも。どうだい？」

いくらだ？

『おい馬鹿やめろ』

シウウに呼び止められた。

なんか今、すごい呼び止め方しなかった。

『お、さっそくわかるようになったの？』

名前を呼ばれただけに悪意を感じた。

「安くは売れないよ。二万だ」

おぼはんは指を二本立てていた。

二百か安いな。買った。

「この能なし冒険者が。二万だよ、二万」

なんだろう、すごい罵詈雑言を浴びせられた気がする。

二万はないな。さっさと行くことにしよう。

「金をもつてくるんだね」

なんとなく……、わかってきた気がする。

『いやあ、俺も好きじゃないからあんまりルビは使わなかったんだけど……、まさかメル姐さんがここまで世界から浮いてるとは思わなかった』

なんだ？

これってみんなわかって当然なのか。

『そりゃまあ、暗黙の了解だから』

そういうの嫌いだ。

はつきりと言ってくればいいのに。

『メル姐さんは、普段から思ったことを口から垂れ流してるでしょ？
そうかな？』

そうかもしれないな。

『そうだよ。普通、思うのと口にするのは別だもん。思った後に口にするからかっこがつく』

……格好つけて言うってことか。

『違う。括弧かっこをつける』

かっこをつける？

『できてない。「かっこ」をつける』

確固をつける？

『遠くなった。メル姐さんは、世界の常識がからハブ適用されてない。世界法則外からもぼ外ちれしててるんだ』

すごいひどいこと言ってないか？

もっとわかりやすく教えてくれないものだろうか。

『難しいんだよね。わかって当然なことだから。どうやって息するか教えるようなもんだ。括弧台詞つかないと喋ることはできない。でも、聞き取るわだけならいけるでしょう』

よくわからんなあ。

『出会った頃はまだ出来てたはずなんだけど、どんどん悪化していつてる気がするんだよね』

それ、お前のせいじゃないの？

『否定人はのできない』

ううむ、それもそうだ。

果たして世界の法則とやらを二、三日でわかるものだろうか。
『先は長そうだが日暮れて道遠し』』

四日が経ち、私は再びギルドへやってきた。

あの日と同じ受付嬢が私に気づき、にこやかな笑みで対応する。
『ようこそ、当ギルドへご用件を伺います』』

ああ、わかる。

今なら確かにわかるぞ。

彼女は用件を聞いているんだ。

『……うん、そだね』

アリスィアの情報をくれ。

「失礼ですが、名前とクラスをお教え冒険者カードを提示ください。右手左手でお渡し願います」
そうか。

そう言っていたのか。

あるとき私は名前とクラスを答えてしまった。

今なら正しい答えを示すことができる。

『……示してあげて』

冒険者証を首から外し、左手で受付嬢に渡す。

受付嬢は、確認致しました私を真剣な顔で見つめた後に、にこりと笑った。

「お疲れ様でした」

受付嬢のねぎらいの言葉を聞き、アリスィアの説明を受ける。
なんとかここまで来た。長い道のりだった。

『もう……、二度とやりたくない』

私はほぼ三日三晩かけて世界の法則をこなし続けた。

そうしてついに聞くことができたのである。

『はは、良かったね』

シユウは疲れた様子だ。

次は喋れるようにしたいな。

『絶対に付き合わないよ』

照れるなっつて。

『照れてない』

三日前、街を見て回ったが、やはりなんとなくしかわからなかった。私の危機を救ったのはやはりダンジョンだった。

『初心者ダンジョンの森』

シユウがふと呟いた「ダンジョン」という言葉に私は初心者ダンジョンの森を感じた。

スライムとゴブリンが一体になったところを後ろから突き刺してきた日々を確かに感じたのだ。

私もシユウも大喜びで、次から次へとやっていった。

『ウラキラ洞穴ダンジョン、シルマ神殿ダンジョン』

わかる、わかるぞと把握し、徐々に聞き取れるようになっていった。

『まさか、今までの全ダンジョンを言わされるとは思わなかった』

その節は大変お世話になった。

おかげで次のステップに進むことができた。

ダンジョンの後は悪口であった。

『体ねえ、が臭ちよつんだよ。足も臭いし。水浴ほんびろよ』

このような悪口をひたすら受け続けて、何を言っているのかはつきりと理解できてきた。

『途中いいからもう悪口と本音が一体化してたからね。もういい加減加減にしろって感じだ』

ごめんねー、ごめんねえー。

そして、昨日街に出て、飛び交う言葉の裏側を知った。

世界には、こんなにも真の意味が含まれているのだと感動したものだ。

例の壺売りおばさんとも話をし、私の成長に感動したおばさんは壺を二千に負けてくれた。

『ほんなんでと馬鹿買っだよなあ』

そして、ついに私は初級ダンジョン——アリスィアの情報を得た。

『ご健闘を祈お祈ります』

さあ、攻略だ。

ダンジョンの入口で、監視員から簡単なテストを受ける。

「左の小屋を見る
右の馬を見る」

「きちんと右の馬を見る。」

「うん、オツケー。適度せいぜいにあがいてみせろ」

「監視員から許可を得て、ダンジョンに入場する。」

「……俺はね。今、とても後悔してるんだ」

「なんで？」

「そーいやずっと静かだったな。」

「ギルドで受付嬢と喋ってから初めて口をきいた気がする。」

「情報だけは先に買っておくべきだった」

「はあ、どうして？」

「そうすれば、無駄な時間を過ごすことはなかったんだ」

「無駄な時間って？」

「おっと、敵が出てくるな。」

「ふはは。よく来たな冒険者よ！」

「聞いていたとおり、姿は見えないがボスの声がどこからか聞こえてくる。」

「なんでもボスが道案内をしてくるダンジョンらしい。」

「儂は右の通路左の通路にいるぞ」

「ボスの台詞の真意を聞き取り、分かれ道を右の通路に進む。」

「これなら俺が聞き取るだけで十分だ」

「いやいや、自分で攻略してる感じがしてとても楽しいぞ。」

「たぶんお前に任せてたら、意味がまったくわからないダンジョン」

「だった。」

「ほらほらどうした冒険者チャレンジャー。足が止まっているぞ。トラップまっすぐを踏め

「！」

「言葉の裏を読み、トラップを避け遠回りしていく。」

「ここまでシユウに頼らず進めているダンジョンは今までにない。」

「楽しい。とても楽しい。まるで賢くなって、自分の力で攻略してい

「る気がする。」

「『これ、遊園地のアトラクションじゃん……』」

「ゆーえんちが何か知らんが、このダンジョンはおもしろいな。」

こんなタイプของダンジョンは初めてだ。

『精神年齢が子供から進歩していない』

失礼な。

ほらほら、もうちよつとでボスだぞ。

「ど う し た。正面がボス部屋だ。右の部屋で休めるぞ。」

左は入口に繋がる。儂は優しいからな。体調を考えて。

無理のない挑戦を」

『優しすぎる世界だ。吐き気がする』

体調は万全で、きちんと真の意味も聞き取れている。

いざ、ボスに挑むとしようか。

ボスの出で立ちはまだで竜のようだった。

その体の大きさは、ここが岩山の中とは感じさせないほど大きい。

「愚かなる冒険者よ。儂に挑むなど千年早いわ！」

『張りぼてくさいなあ』

その声は、まるで空間全体から出ているように私を圧迫する。

『これ、ほんとに声が壁から出てない?』

うるさいなあ。

ちよつと黙つてろよ。

「体調が悪いのか?。今さら怖じ気づいても遅いわ!」

『帰ろつか』

帰らないよ。

「良く言った!。儂の渴きを満たしてみせよ!」

戦闘が始まった。

火の玉や竜の爪を躲しつつ攻撃をしかける。

その腕を斬ったのだが、攻撃が弾かれてしまった。

「弱点は腕の先にある胴体の、赤い玉だぞ」

『だつてさ。ほら早く斬つて終わらせて』

竜の猛攻を躲し、その懐に入る。

隠れていた赤い玉にシュウを突き刺した。

「馬鹿な!。この儂が!。やられるだと!」

竜が吠えた。

「討伐完了！」

まだ僕は死ななぞ！
挑戦ありがとう

それまで
お出口は

僕は何度でも！
またのお越しを
東の間の平穩を
入口と反対側の

お待ちしております！
楽しんでおります！
扉になっております」

そう残して竜は消えた。

すばらしいダンジョン攻略だった。

私は、ドロップアイテムを拾って外に出た。

『やっと茶番が終わった』

いやあ楽しかった。

よし、もう一回挑むとしよう。

『！』

子供の冒険者らが列を作る中に、もう一度混じって並ぶ。

そうして攻略を堪能して宿に戻った。

本当にすばらしいダンジョン攻略だった。

けつきよく四回も挑戦してしまった。

シユウは二度目の攻略から何一つ言葉を発しない。

そのため邪魔をされることなくひたすら楽しむことができた。

私も言葉の意味を聞き取れるようになった。

今後の冒険でも役に立つだろう。

『立たない、絶対に』

ようやく喋ったと思ったら、私の言を否定した。

それも断言する形で。

『二度とこんなのはやらんぞ！』

こんなのつて何だ？

『これがただだけめんどくさいかわかるか！ 二十文字の制限を知らなくてな。一と《》がそのまま残って、ルビにならなかつた！ 読み専の人にもわかるように書くで一こんな感じだ。《俺は「こんな感じだ」にルビを振りたかつた。だが、なぜかルビにならないわかるか？

これは文字数制限を超えているんだ》。しかも、振られる側にも文字数制限がある。マニュアルにルビにならない例もきちんと載せとけよ！ 何回マニュアル見たかわからんぞ！ そもそもマニュアル

の位置がわかりづらいんだよ（特になろう）！ 同じ所を何回もぐるぐるリンク踏んで回った！ しかも、書いてたら最後はどっちが台詞でルビなのかもわからなくなった！ 何回プレビューを見直したと思ってる！ 正直、えん☆たるよりも精神的に疲れた！ 絶対にもうこんなのはしないからな！ 覚えとけ！』

まあ、なんだ。

一言だけ労ってやろう。

おつかれさん
「ごまああ」

続く。

蛇足22. 5話「言葉に力を II」

『馬鹿野郎^{作者!}! なんでこのサブタイを続けた! 言え! 何でだ!』
うおつ!

馬鹿がいきなり叫んだ。

びつくりするからそういうのはやめろよ。

『続かないって言ってただろ!』

こいつは頻繁によくわからないことを叫ぶ。

ほつとくのが一番だ。こいつに都合の悪いことは、私には良いことが多い。

『思えば、街の名前からして不穩だったんだよな……』

私たちはアポの街にやって来たところだ。

本当はもつと長い名前なのだが、読みづらいのでみんなアポの街と呼んでいる。

正式名称はたしか……。

『アポ・メーカネス・テオス』

そうそう、なんかそんな名前だったな。

『意味知ってるの?』

私知ってると思うか?

『威張ってどうすんの。ラテン語にすると「^{デウス・エクス・マーキナー}機械から登場する神」』

はあ、それで?

『ご都合主義だよ』

……よくわからんのだが。

『まあ、俺^{チー}の存在^トがすでにご都合主義だからね』

そうだよな。

この私ですら極限級なんだし。

『もつと言うと、俺^{チー}よりもひどいご都合主義が起こりうる街だ。有り体に言おう——高次元^メを内包^タする街だ』

ますますよくわからなくなつた。

『ここでは何でも起こり得る。油断しないことだね』

はいはい。

またそうやって脅す。
とりあえず、ギルドに行ってみよう。

第一幕

受付嬢「ようこそ、当ギルドへ。ご利用は何でしょうか」
シユウ『や、やりやがった……。あの野郎^{作者}！いきなり禁忌^{タブー}に手をつけやがった！』

メル「なんだタブーって。特に変化ないだろ」

シユウ『一番影響受けちゃってますねえ』

メル「影響？ 何の影響だ？ そもそもタブーって何よ？」

シユウ『絶対にやつちやいけない形式——Web小説部門、堂々の第一位。台本形式だよ』

メル「台本形式？ 何だそれ？」

シユウ『奴^{作者}は、今までの約五年間で築き上げてきた物を全て壊すつもりか？ 台本形式ってのはね。見た瞬間にブラバ。出た瞬間にお気に入り解除が当然の形式さ。なにより作者と登場人物の会話が多分に出てくるから、見てる側からすると寒くて仕方がない。そうだろうか？』

メル「そうだろと言われても……。ますますよくわからなくなったんだが」

シユウ『もはやこれは小説ですらない。いつからここは「脚本家になろう」になったのか』

受付嬢「あのう、ご利用は何でしょうか？」

(受付嬢がカウンターから出てくる)

メル「ああ、すまないな。ダンジョンの情報……。なんでカウンターから出てくるの？」

受付嬢「ここではいつものことですよ」

メル「どこを向いて喋ってるんだ？ 私はこっちだぞ。そっちには誰もいないよな」

受付嬢「何を言ってるんです?」

シユウ『無駄だよ。ここは既に舞台上、役者が観客を意識して喋るのは当然だ』

メル「舞台? 観客?」

シユウ『そつちじゃない。観客あつちを向いて喋って』

メル「あつち、つてどつち?」

シユウ『視線を感じないの? 見られてるでしょ?』

メル「視線? 見られてる? 私と受付嬢以外は見えないぞ」

シユウ『大根マヅロめ。もういいから受付嬢と同じ方を向いて話して』

メル「本当に意味がわからん。……つて、なんだこれ? 笑い声が聞こえてこないか」

シユウ『そりや、観客がいるんだから。笑い声だつてするよ。フルハ○ス見たことないの?』

メル「何これ? ほんと意味わからん。どうということなの?」

受付嬢「失礼ですが、冒険者証を提示ください」

メル「あ、ああ、ちよつと待ってください……。はい」

受付嬢「……えっ! 極限級! うそ、ほんとに!」

メル「ああ、これはよく見る光景——」

受付嬢「まさか貴方が、あのメル様だなんて! (台詞と同時に曲#1が開始)」

メル「じゃないぞ。なんだこの音?! 急に演奏が始まったんだけど?!」

シユウ『そりや、舞台だもん。曲だつて流れる』

メル「ええ? えええ?」

受付嬢「メル様と言えば、異例の速さでの極限級到達! 神々の天蓋にも挑戦済み! さらに王様との親交も厚いという! ああ、なんということでしょう! 天の上にいる人物! まさか彼女がこのような小さなギルドに足をお運びになるなんて!」

シユウ『はいはい。説明乙』

メル「ほんとだな。彼女が向いてる方向から『おおー!』と声が返ってきているのが、不気味で仕方がない」

受付嬢「メル様！　どうか聞いてください！」

メル「ずっと聞いてるよ……」

受付嬢「初級ダンジョン——ディオニューシアのことなのです」

メル「私は、最初からそれだけが知りたかった。他のことなんてどうでもよかつたんだ」

受付嬢「ああ！　さすがはメル様！　偉大なる冒険者が紡ぐ——」

メル「早く情報を言つて」

受付嬢「あれは昨晚のことでした（曲#2が開始）」

シユウ『曲が変わつたね』

受付嬢「ディオニューシアからボスが出てきたと報告があつたのです」

メル「……冗談言つてる場合じゃないくらいの状況じゃないか、それ」

受付嬢「そのとおりです。ボスを討伐しなければなりません。一刻を争います。冒険者を手配しようにも近くにいる冒険者はおらず」

メル「私が来たと？」

受付嬢「はい。なんとという！　なんとという巡り合わせでしょう！

（合唱#1開始）

モンスターが来た。彼らは街を襲い、人々は逃げ惑う。困惑が街を覆い——」

メル「おいおい、なんか歌い出したぞ。しかもどこからコーラスまで入ってる」

シユウ『舞台だからね。合唱隊はつきものだよ』

受付嬢「——それではメル様！　偉大なる冒険者様！　討伐をよろしくお願い致します！」

メル「やつと終わった。……で、ダンジョンの場所は、おいつ！　何だこれ！　急に暗く——」

第二幕

メル「……………ここは？　私たちはギルドにいたはずだが？」

シユウ『何言つてるの？　ここはダンジョンだよ』

メル「いや、さつきまでギルドにいたよね？ 受付嬢は？」
シユウ『幕が下りて、また上がったでしょ。受付嬢ならもう脇に
行ったよ』

メル「脇？ 暗くなって、すぐに明るくなったと思っただらなんかい
ろいろ違うんだけど」

シユウ『そりゃあ、第二幕に移ってるからね』

メル「意味がわからん。ほんとわからん。なんだこれ。攻略前から
出たいと思ったダンジョンは初めてだ」

シユウ『ほらほら、モンスターが出てきたよ』

雑魚Ⅰ「人間だな」

メル「おいおい喋ったぞ」

雑魚Ⅱ「ほんとだ。人間だ」

メル「また一体出てきた」

シユウ『珍しいダンジョンだね』

メル「ああ、たまに喋るのはあるけど、上級以上が多いよな。初級
でこれはレアだ」

雑魚Ⅰ「親分に報告しないと」

雑魚Ⅱ「そうだな。急いで報告だ」

メル「なんか話して逃げていってしまったな。斬ってしまえば良
かった」

(ボス登場。曲#3開始)

ボス「おお。ようやく来たか。冒険者よ！」

メル「また流れてきた。何なんだよ、この曲は……」

ボス「俺様を知ってるか？」

メル「いや、知らんな。聞く前に場所が変わってしまった」

ボス「知らない！ いいだろう！ 教えてやろう！ (合唱#2開
始)

長い爪はライオンの如く、その翼は鷲の如く——」

メル「また歌い出した……。周囲の雑魚達も一緒になって踊ってる
し、隙だらけだから殺つちまおう」

シユウ『そう上手くいくかな？』

ボス「俺様の手が街を引き裂く！」

メル「おいおい、歌って踊りながら防いだぞこいつ」

雑魚Ⅰ「さっすが親分！ かつこいい！」

メル「雑魚も歌いながら攻撃を躲すんだけど……」

シユウ『仕様だね』

メル「私用？」

シユウ『仕様仕組みというか。歌ってる間は倒せない。大人しく待ってあげて』

ボス「そうさ。俺様の名前は——」

ボス、雑魚Ⅰ、雑魚Ⅱ、観客「ソポクレス！」

メル「今……モンスター以外からも声がしなかったか」

ボス「聞こえねえな。おびえが足りねえぞ！ もう一度だ！ 俺様の名は?!」

雑魚Ⅰ、雑魚Ⅱ、観客「ソポクレエス！」

シユウ『遊園地のキャラクターショーかよ……』

ボス「聞こえねえ！ もっとだ！」

観客「ソポクレエエス！」

メル「もう帰りたい」

ボス「よつしや！ この冒険者を片付けたら、次はテメエらのぼんだ！ 怯えて待ってる！」

メル「もう倒していいの？」

シユウ『いいよ。やっちゃって』

ボス「かかってこ——ぐあああああ！ この俺様を一撃だと！」

メル「よつわ。初級だとかんなもんか」

ボス「……名も知らぬ強き冒険者よ。頼む。部下達にはどうか寛大な処置を、ぐあああああ！」

観客「ソポクレスー！」

メル「なんか子供の泣き声が聞こえるんだけど……」

シユウ『どっちが悪役かわからないね』

雑魚Ⅰ「ボスのかたき！ くら——あああああ！」

雑魚Ⅱ「せめて一矢報いねば！ ぎやああああ！」

メル「こんな後味の悪い攻略は久々だぞ……。うお！　また暗く――」

最終幕

受付嬢「さすがメル様！　見事な討伐でした！」

メル「ほんとなんなのこれ？　今の今までダンジョンにいたのに」

受付嬢「本当に大変でした。みんなメル様に感謝しています！」

メル「ほんと大変だったよ。意味がわからなかった。何がなんだかさっぱりだ」

受付嬢「こちらが報酬になります」

メル「なんだこれ？　メダル？」

受付嬢「このようにして冒険者メルの活躍により、アポの街に平穩が戻ったのです」

メル「なんだこれ。拍手が始まったぞ。ちよ、また暗――」

カーテンコール

メル「また明るく……。なんだこりゃ」

シユウ『いやあ、これはすごいね』

受付嬢「みなさん、たくさんのご声援。ありがとうございます！」

メル「なんだ？　こいつらはどこから出てきた。ここはどこだ？」

シユウ『本当に舞台の上だとはね。すごい観客だ』

メル「なんでボスやモンスターもここにいる？」

シユウ『そりゃカーテンコールだし。富○アニメだとよくあるでしょ。みんなで仲良くダンスって』

受付嬢「お陰様で、今日の舞台も無事に終わりました。飛び入り参加のメルさんに、どうか熱い拍手を今一度お願い致します！」

役者一同「ありがとうございます！」

シユウ『カーテンが閉まる前に降りた方がいい。ここにいたら取り込まれる』

メル「だな」

(メルが舞台から飛び降りる)

メル「これをやろう。明日の主役はお前だ」
「そう言つて、舞台のすぐ側に立っていた少年に、メルはメダルを渡した」

「そして、彼女はそのまま劇場から出て行つた」

もう、大丈夫か？

『うん、大丈夫みたいだね』

振り返つて街を見る。

街は遠く、そして小さくなつていた。

恐ろしい街だった。

あ……ありのままに起こつたことを話す。

ギルドに入ったと思つたら、ダンジョンに入つて、ギルドにまた戻された。

しかも、ギルドの次は大勢の人たちの前で挨拶をしていた。

な、何を言つてるわからないと思うが、私も何をされたのかわからなかつた。

頭がどうにかなりそうだった。

『催眠術とかメタとか、そんなチャチなもんじゃ断じてない。もつと恐ろしいものの片鱗を味わつたね』

特に最後の声とかどこから聞こえたのかもさっぱりわからなかつたからな。

なんか今までにない恐怖が私を駆け抜けていた。

もし、あれ以上あそこにいたら……。

『言つたでしょ。何でも起こり得るつて』

まさかあそこまでとは思つてなかつたんだ。

『もうあそこには近づかない方がいいね』

メル「そうだな」

シユウ『あつ……』

「こうしてメルたちはアポの街を去った」

蛇足22・8話「言葉に力を Ⅲ」

シユウを、なくした……。

起きたらすでにシユウの姿がなかった。

ベッドの下や、棚と壁の間、毛布を広げてみたが見つからない。

すごい静かで爆睡できたと思ったら、まさか元凶のシユウがいなかったとはな。

いやはや、これは困った。

やつぱり昨日の夜に酒を飲み過ぎたのがまずかっただろうか。

酔いたい気分だったから耐性を切ってもらい、まずは一杯。次に二杯、三杯。

そこからの記憶がまるでない。よく宿のベッドまで戻ってきたものだと自分を褒めてやりたい。

………突っ込みが、来ない。

もしかしなくても、これはやばい状況なんじゃないか。

落とさないように紐をつけていたのに、腰を見るとぶつつり切れている。

ギルドの飲み屋に来てみた。

よくベッドに戻れたも何も、部屋がギルドの上だ。

ギルドに併設された飲み屋から、階段を上がってすぐのところだった。

受付嬢や、仕込み中の飲み屋の店員に聞いてみたがシユウは知らないとのことである。

どうしよう。

やばい、ほんとやばい。

ダンジョン云々どこの話じゃない。

人格はともかく、力は本物だ。あれがないと何もできんぞ。待て。

落ち着け、私。

シユウも言っていた。

やばい状況こそ冷静さが重要だと。
思い出せ。

あいつはすでにこの事態を予測していた。
いつか私がこういうことをすることも、あいつは想定済みだったはずだ。

たしかこんなときのために、非常手段を用意したはず。
アイテム袋をごそごとと漁る。……あつた。
きれいに折りたたまれた真っ黒な紙を取り出す。

“困ったとき用”

私の汚い字で書かれている。

書いたときは無意識だったので、内容は覚えていない。
きっとこの中に打開策が書かれているはず。
私は厚い紙をゆつくりと開いた。

『メル姐さん、いいかい？』

最後までよく読んでくれ』

ああ、任せとけ。

ちやんと隅々まで読むぞ。

今後の冒険生活がかかっているからな。

『この手紙の中には、俺の所在を探す方法や今後の生き方が書かれている。
いる。

この俺がいなくなったときの指針をできる限り書き綴った。

もし……俺がいなくなったらこれを頼りにしてくれ』

シユウだ。やはりシユウだ。さすがと言わざるをえない。

こんなときのこともしっかり想定している。

『メル姐さんがきちんとして読んでくれたら、

メル姐さんは救われると思う』

……シユウ。

心の底に淀んでいた不安が安心感で薄まっっていく。

奴の言葉から私を支える力を感じた。

『俺が直接、メル姐さんを探しにいかうとも思ったんだが……
なんていうか……

そうするのは物語的にどうなんだと思えて……
ここで人化してしまつたら……

この話が、もう話ではなくなるような……

人外転生なのに人化つてどうなのよ?』

早く探す方法を書けよ。

よくわからんことばっかりだらだら書きやがって。

『もしも見失つたのが町中なら、こゝろ唱えてみてくれ。

きつと俺たちならわかりあえる。

来るべき対話のための最終手段だったが仕方ない。

大きな声で叫んでくれ。

“クアン〇ムバースト!”

Side: シュウ!”

いいか、メル姐さん。

絶対にクアン〇ムバーストは使うなよ』

どっちなの?

使つていいの、使つちや駄目なの。

どっちなのかはわからないが、使うしか他に道はない。

今の私には言うしか道がないのだ。

大きく息を吸う。

ク〇ンタムバースト!

Side: シュウ!

シュウ Side!

右に槍、左に斧、左右には武器が並ぶ。

いや、武器だけじゃない。正面は、皮鎧にアイアンメイルまで飾ら

れている。

「おつちゃん、なんか剣ない?」

若い男の声が聞こえた。 安いやつ!」

まだ少年だろう。

「お前でも扱えるとなると……。 ああ、さつき入ったばかりのやつが

いいな」

「じゃあ、それくれよ！」

足音が徐々に大きくなり、ドワーフが私に手を――

Side out!

周囲がギルドの光景に戻った。

受付嬢とその他の冒険者が憐憫を含む目で私を見て来る。

なんだ……、今の光景は？

まさか、あれがシユウのしている光景だというのか。

武器がたくさん置いてあった。防具もだ。

それにドワーフのおっさん。

ということは……。

私は武器屋にやってきた。

ギルドから隣に三軒ほど行ったところだ。

場所がわからず反対方向に探しに行っていて時間をくってしまった。

出てきたドワーフは先ほど見たばかりの髭もじゃ顔だった。

私が事情を説明すると、ドワーフは首を振った。

「ちようど売っちゃまったところだ」

売っちゃったかあ。

誰に売っちゃったんだ？

「初心者パーティーだ。今から初級に挑戦しに行くって話してたから、追えば見つかるぞ」

すぐに店を出て、シユウを買ってしまったパーティーを追う。

しかし、どうやっても見つからない。

そもそもどんなパーティーかわからないし、ダンジョンがどこかも知らない。

闇雲に走り回るだけで、時間が過ぎた。

なにやってんだよ……私い。

困ったときのブラックペーパー。

まだ続きがあったので読んでいく。

『もしもクアンタムバー〇トで見た場所から、すでに俺が移動していたら、勇気を振り絞ってもう一度唱えてみよう。だが、唱えすぎると危険だ。読者が離れる。Sideが出てきたときの、「続きを読む意欲」を萎えさせる力は恐ろしい。

特に同じ場面を何度もSideしたときは殺意すら覚える。さつさと次に進めよ、

誰も求めてない奴らの視点を書き綴りやがって。

そんなに他人の心情が書きたいなら最初から三人称で書けよ……。

なお——』

なんだよSideって……。

そんなにやばいものなのか。

『もしも近くにギルドがあるなら、

ク〇ンタムバーストを使う前に、

「剣探してます」と依頼を出そう。

メル姐さんが下手に動き回るよりも、

依頼を出した方が遙かに安全！

認知症冒険者の徘徊は危険だ。

絶対にやめよう、な？』

それ、先に書いという欲しかったなあ。

『以下に、依頼の出し方を書いておきます。

そのまま受付嬢に伝えて下さい』

はい。

『それと、クアンタムバース〇が成功した場合、声こそ互いに届きませんが、

俺からもメル姐さんが見えるようになります。

使いすぎには注意ですが、安全な場所から

適度に繋がるようにしておいて下さい。

出来る範囲でこっちからそちらに向かうようにします』
はい。

『項の最後になりましたが、
さっきの呪文は「Side：シユウ」だけでも可能です。
大声で叫ぶ必要ありません』
は？

私の叫びはなんだったのだ？
無駄に恥をかいてしまったじゃないか！

『もしかして：おこななの？』

最後まで読んで下さいと書いたのに読みませんでしたね？
かいた恥は勉強料です。違いますか？』

……ぐうの音も出ない。

しかし、安心したらお腹は減った。

お腹はグウグウと平常運転で鳴っている。

私はギルドへ戻り、受付嬢に依頼を出す。

その後、ギルドの飲み屋に入り、飯と酒を注文する。

酒が先に運ばれて来た。

グラスに酒を注いでつと、準備完了。

よし。後は適度に繋がっておくことにしよう。

Side：シユウ。

シユウ Side！

「もうちよつとでボスだよな」

聞き覚えのある少年の声だった。

「うわあっー！」

少年がいきなり悲鳴をあげた。

どうかしたのだろうか？

「どうかしたの？」

少年の近くにいたローブの女の子が尋ねてくる。

魔法使いだろう。

「どうせぼんやりしてたんでしょ。しっかりしなさいよ」

もう一人の赤毛の女もキンキンした声で少年を見て怒る。
その手には大きめの斧が握られていた。

「変な声が聞こえた!」

「声ですか?」

二人の女は互いに見合つて首を横に振る。

おっと、まったく気づかなかつたが、もう一人いるな。

薄い衣装に短刀、口許に布が巻かれている。

斥候役だ。これで女が三人目。

彼女も黙つて首を振る。

無口だな。

それにしても男一人に、女が三人の計四人のパーティーか。

シユウの大好きなハーレムというやつだな。

妬ましが伝わってくるようだ。

「そんなの聞こえないわよ! もうちよつとでボスなんだからしつかりしてよね!」

「どんな声だったんですか?」

ローブの女が尋ねた。

「男の声。『なに酒のもうとしてんだあ……』つて低い声の怒った感じだった」

口にグラスを持って行きかけていた私の手が止まった。

安心してしまったとはいえ、これはないな。

いけないいけない、水にしよう。

「空耳でしょ。行くわよ」

女戦士の声で、少年達は洞窟の道を進んでいく。

モンスターもそこそこ安定して倒しているようだし、ボスに行きそうだな。

「やった。初めてこいつ倒したぜ!」

「すごい! やったわね!」

「やりましたね!」

四人がかりでモンスターを倒し、みんな喜んでいる。

私が求めて、ついぞ得られなかったパーティ攻略がここにあった。

なぜだ……、なぜ、私のダンジョン攻略はこうならなかったのだろうか？

しかし、シユウの視線が私にも伝わってくるんだが……。

こいつ、女の胸をずっと見てるな。戦士の胸、魔法使いの胸、斥候の胸、たまに尻。

胸八割に尻二割弱、残りでダンジョンをちらちら見てる。

特に戦士の胸が揺れるところが好きなようだ。

一度も少年の顔が映らない。

おっと、珍しく視線がダンジョンの壁に行った。

その後は床と天井を見る。さらに、後ろへと視線が動いた。

そこには、暗闇からモンスターがゆっくりと追ってきているのが見える。

これは――、

Side out!

「あの、大丈夫ですか？」

あ？ ああ……大丈夫だ。

視界がギルド横の飯屋に戻ってきた。

どうやら注文していた料理が来たようだ。

頭が重い。なんかぐるぐるして気持ち悪いな。

視界もすごいぶれて辛かったし、休憩がてら食事しよう。

おそらく、次に見る頃にはボスとの戦闘だろう。

ささっと食べて、ふたたびシユウへと視界を移す。

シユウ Side!

「どうして……」

少年の声だった。

声も暗いが、周囲も薄暗い。

少年の皮鎧はところどころ壊れている。

それにべったりと血がついていた。

「どうしてモンスターがいきなり……」

少年の目から涙が流れている。

「あんなところにトラップさえなければ……」

なんとなくわかった。

ボス前にあるトラップが凶悪だと受付嬢が話してた。

後ろから来てたモンスターにトラップへ追い込まれて、それを踏んでドカンか。

「二人とも、大丈夫かな。体勢を整えて助けに……」

少年は壁にもたれかかる無口な斥候役を見た。

あいかかわらず何も言わないが、見覚えのある顔色だな。

毒におかされてる。それも動けないとなるとけっこうきついやつだろう。

「お、おい。どうしたんだ?！」

少年は今ごろ気づいたようだ。

まあ、これくらいなら薬で治るだろう。

「これって毒だよな。待ってる。すぐ、毒消しの……あつ」

毒に気づき、薬を掴もうとした手は腰の辺りをさまよった。

あちゃー、どうやら落としてしまったらしい。

「あ……、あつ……。俺、どうすればいい?！」

私だったら「逃げろ」と言うな。

「逃げろってど……えっ」

えっ?!

聞こえてる?!

「今の声って、さっきの、どこだ? どこにいるんだよ! 助けてくれ

よー!」

ああ、そうか。

どうもシユウが逃げろと伝えたらしい。

どこから声をかけられているか、まったくわかってない。

「……確かにそうだけど、置いて逃げるなんて。それに二人もまだ……なんで生きてるってわかるんだ。……そこまで言うことないだろ」

たぶん、さつさと逃げろって話してるな。

それを、少年がぶつくさと言い返してるのだろう。

男が嫌いなのと、ハーレムが妬ましいのでボロクソに言い始めたのが最後の部分か。

「助けを呼びに行くって……でも、ここに置いていくわけには」

「……行って。助け、呼んで」

無口な斥候が初めて喋った。

なかなか綺麗な声をしているな。

話さないのがもつたいないくらいの声だ。

「そんな声、してたんだな……」

お前も今知ったのかよ。

「ごめん！　すぐ戻ってくるから！　俺、戻るから！　必ず戻るから！　死ぬなよ！　絶対、死ぬなよ！」

早く行けよ。

ほんとに死んじやうぞ。

「クソッ！　クソォー！」

少年は叫んで立ち上がった。

振り返ることなく、出口へと走って行く。

Side out!

私は椅子から立ち上がった。

ギルドの受付に行つて、ダンジョンへの行き方を尋ねる。

迷子になりかけつつ、街のダンジョン方面出口まで来た。

そうすると道の向こうから、先ほどの少年が走ってきていた。

「あの人なのかっ！　頼む！　あいつらを！　あいつらを助けてくださいっ！」

少年は顔をぐしやぐしやにしつつ頭を下げた。

——私の隣の女性に。

「えっ？　えっ？……？」

隣の女性は困惑している。

そりやそうだ。

すまんが、そいつが言ってるのは私のことだ。

二人に向かつて声をかける。

『やあ、メル姐さん！ 酔いは醒めたかな!?!』

おかげさまでな。

昼近くまでぐっすり眠れた。

手に懐かしい重みが戻ってきた。

半日だけだが、ずいぶんとご無沙汰な気がする。

『言いたいことは山ほどある！ が！ それは後にしてやろう!』

そうだな。

そうしてくれ。

まずはダンジョンだ。

いいか？

ダンジョンを攻略するときはな。

愚痴で邪魔されず、自由でなんというか救われてなきやあダメなんだ。

独りで静かではないにしても。

『はいはい。孤独の冒険者、乙。まあ、それじゃあ行こうか』

孤独ではないさ。

よし、全速力で向かうとしよう。

そこから本当に全速でダンジョンに潜った。

モンスターを無視して奥へ行き、斥候に薬を二つ飲ませてやった。

次にどうなったのか知らない戦士と魔法使いだったが、罠に嵌まって抜け出せないだけだった。

多少の擦り傷に、捻挫と打撲で済んだようなので、斥候を背負ってそのままダンジョンの入口まで送り届ける。

ダンジョンの入口にたどり着いていた少年と、感動(?)の再会を果たした。

少年が斥候にまず声を掛けたことで、何やら残りの二人から不穏な空気が流れ始めたので、私は距離を取った。

とりあえず助かって良かったな。

さて、待ちわびたダンジョン攻略だ。

『ちよつと待った。その前に、俺になんか言うことがあるんじゃないですかあ?』

話を逸らしたつもりだったが、逸らせてなかったようだ。

しばらく禁酒しよう。

『当然でしょ。他には?』

お前、女の胸見過ぎだろ。

ひくわ。

『えっ、なあに? あれれえ、もしかして妬やいてんの?』

焼く?

焼いてないだろ、焼いて欲しいのか。

『やだ。このキ○ガイ怖い……。それよりも! 俺にまず言うことがあるでしょ!』

黒カードの伝言さ。

もうちよつとわかりやすく書けない?

『……へえ』

あつ、マジで怒ってきてる。

そのなんだ。ほんと、すまんかった。

だから、その、なんだ——助かった。ありがとう。

『はあ……、もう酔って置き忘れないでよ』

もちろんだとも。

よし、それじゃあ、さっそく——、

チートな剣とダンジョンへ行こう!

『待って! それ最終回の終わり方だから! もうダンジョンに行かない終わり方だよ!』

全部サブタイが悪いなどと、意味のわからんことを聞きながら私はダンジョンに潜った。

蛇足23話 「邪神様@帰れない」

0. 邪神様@帰りた

クラオリオの街、その近傍にムニミイの暗闇と呼ばれるダンジョンがある。

このダンジョンはギルドが管理しているものの難易度が設定されていない、私の知る限り唯一の難易度不定ダンジョンだ。

不明ではなく不定。

人によってその難易度を変える独特な構造と聞く。

普通の村人でもクリアできる人はできるし、超上級冒険者でもクリアできない人はできない。

宿屋のへんてこな親父も「僕も通ったことがある」と話していた。いい歳して僕とか言うど気持ち悪いんだなと初めて知った。

別名は「記憶のほら穴」。

ここ数年に見つかったダンジョンであり、なんとモンスターもボスもない。

見た目はただの洞窟で、ある程度通過すると意識が飛び、自らの過去を振り返る。

辛い過去の記憶が多いらしく、それを克服するとクリアで、洞窟の反対側の出口に出られる。

気づいたら洞窟の反対側に立っており、その間がどうなっているか知っている人間はいないとか。

宿屋の亭主は「道が途中で分かれてて、奥にボスがいて記憶の操作をしてるんだ」と話す。

誰も知らないのです、これを初めとして好き勝手な憶測が出回っている。

ちなみに攻略失敗しても、出口付近で意識が戻るので実害はほぼない。情緒不安定になったりすることはあるらしい。

正直、ダンジョンかどうかとも怪しいが、いちおうギルドに認定されているので攻略する。

宿屋の親父が言うように、途中で隠れたボスがいるなら万々歳とい

うものだ。

ダンジョンの前に来てみたが誰もいない。

ギルドの監視役すら、休憩中の札を立ててどこかに消えている。

『魔力量は特に異常ないね』

ふむふむ。

私は暗闇へと歩を進める。

いつもどおりチートで視界は良好だ。

一步、また一步と注意深く歩いて行くが特に問題はない。

腰には軽い巾着をぶら下げ、おこづかいで買った木の剣を片手にギルドへ向かう。

私の体にはまだ大きいと感じる扉を開くと、外とは違う空気が流れる。

滞留した泥臭い空気が私を包み、街で歩く人たちとはどこか違う雰囲気を感じた。大人達が私を見つめる。

「おうガキンチョ。また、来たのか」

大人達の中でも、一際背の高い大人が私に声をかけてくる。

ああ……、忘れるわけがない。他の人間は忘れても、この人だけは忘れられない。

忘れるわけにはいかないんだ。彼は――、

『俺だよ。シユウだよ』

違う。お前じゃない。

『もしもーし。頭大丈夫？ ダメだよねえ。そおい！』

へんてこな声と共に景色が変わった。

上下左右をこつこつとした岩に囲まれた道が前方にまっすぐ伸びていた。

あれ、私はギルドに来たはずだが……。

『記憶がこんがらがってるかな。ここは「ムニミイの暗闇」の中だよ』

……ああ、そうか。

もしかしてさっきのは、そうなのか。

『うん。「記憶の回想」だね。驚いたよ』

記憶の回想か。

初めて聞く魔法だな。

『魔法じゃない。これは「術技」なんだ』

術技？

『俺のスキルに近い。魔力の消費じゃなくて、変質から得られる力。この世界の人間は特に魔力が弱いし、消費に特化してるからね。今まで誰も防げないわけだ。まあ、おかげで新しい防護スキルも手に入れたから棚ぼただね。それに……』

ああ、私たちが初めての通路発見者ということだな。

『奇しくも宿屋のおっさんの言ったとおりだったね。あのふざけたおっさんやるやん』

ほんと慣れ慣れしい親父だったな。

いきなりあだ名で呼んできやがったし、自分もあだ名で呼んでちよーだいか言つてきやがった。

さて、おっさんの言うように岩道の先は二手に分かれている。

右手は人に踏まれ道が平らになりつつあり、左手はゴツゴツと足下が悪い。

『記憶操作以外は特に何もしてこない。それでも十分に気を付けていこう』

頷き返し、壁に片手をかけバランスをとり先へと進む。

特に障害もなく、曲がりくねった道に行く。

『ストップ』

曲がり角でシユウを出して、奥を確認させると、停止の声がかかる。

『うん。いるね』

おお、ボスがいたか。

どうする？

いけそうか？

『うーん。行けるのは行けるだろうね。ただ……』

歯切れが悪いな。

ただ、なんなんだ？

『戦闘にはならないと思う』

私も気になって、顔を出して奥を覗く。

そこには広い部屋があり、その奥に結晶体があった。道の奥には私の体の倍はあろう結晶が鎮座していた。

問題は結晶の中身だ。何かが入っている。

人？ いやモンスターか？

顔は人だが、目が額の中心に一つ余計にある。

それに、腕が六本で背中からは羽まで生えているときた。

羽は左右に一、二、三、四、五、六——そう、六本ずつの計十四本。

『十二本ね』

……はい。

それぞれの羽が真っ黒で尖っており不気味だ。

腕は間接が三つもあるし、六本がそれぞれ形状を異にしている。

一本目は、腕の途中からドス黒い剣になっていた。

二本目は、同じく途中から蛇を巻いた杖を掲げている。

三本目は、何か腕がなんとも堅そうな鉄(?)だ。先端に穴があく。

四本目は、先端が水晶玉となり、その玉の中には色とりどりの光がたゆたう。

五本目は、一番人間らしく、その手に何も持つことなくこちらへと突き出されている。

ただ、その手は結晶からはみ出し、剥き出しとなっていた。不気味な紋様が指から腕まで刻まれていた。

そして最後の六本目は、五本目と同じく結晶からはみ出ている。

ただし、その先端は人間とは違い、訳のわからない文字で書かれた本と同化する。

『すごいなあ』

ああ、そうだなあ。

大発見だ

『だよねえ。この結晶、ほんとすごいよ』

えっ、そつちなのか？

普通はモンスターを気にするところじゃないか？

『いや、この結晶と比べたらモンスターの方はさほど。俺で結晶をつついてみて』

言われたとおりにつつくと、キンと鋭い音を立てて弾かれた。
なんかすごい堅そうだな。

『うん、この世界の結晶じゃないね』

この世界の？

異世界のものってことか？

『いや、異世界の物でもきちんと表示はされる。解析スキルが化けて表示されてる』

よくわからんけど、お前と同じチートってことか？

『ノンノン。神関連ならそもそも表示の対象外。この結晶は世界にありうる物質ではないけれど、神の領域までは足をつつこんでない物質というよくわからん物質ということになる』

よくわからん結論だな。

『うん、本当によくわからん。ダークマターでも何らかの表示はされるだろうしなあ』

それより、私にとっては結晶よりもこのモンスターが気になる。

こいつは何で結晶に入っているのか。腕を斬ってみたら倒せるのだろうか。

『斬ってみたら？』

うむ。

シユウで腕を斬ってみる。

腕は結晶と違い、簡単に斬り落とすことができた。

地面にポドツと鈍い音で落ち、光に消えた。アイテムは残らない。

『ダメだね。魔力吸収が本体まで届かないから倒せない。この結晶のせいだろうかね、おっ』

！』

おおう、斬ったところから腕が元に戻ったぞ。すごい再生力だな。

……さて、どうしたものだろうか。なんとかして結晶を解除できないだろうか。

『幾千幾万と斬りつけて、わずかでも傷が付けられるなら、解析ができるかもしれない。ただし可能性は低いし、その後に処理の問題が残る』

めんどくさそうだな。

『仮に結晶を解除できたとして、ゲームつぼく残りの腕が別の術技を発動するものと考えると、初見で勝てる見込みも薄い』
うーむ。

八方塞がりってやつか。

『いや、一か八かで冒険者らしいことが試せるね』
冒険者らしいことか。

良い響きだ。どうするんだ？

『決まってるでしょ。パーティー登録だよ』
私は返答せず、モンスターの何も持っていない開いた手。
紋様が刻印された指を見つめた。

嵌めるぞ。

『オツケー』
袋から取り出したパーティーリングをモンスターの指に近づける。
そのまますぽりと穴に指を通した。

『ほー。邪神様ときたかあ』

蛇神なの、これ？

『いや、蛇じゃなくて邪よこしまな神様だつて』

邪神なの？

『邪神「様」。様をつけろよ、このメル助太郎！』

ああ?!

『冗談抜きで「邪神様」専用スキルって出てきてるんだよね』
はあ？
なにそれ。

『スキュード・ラーニング改だつてき』
なにそれ。

『歪んだ学習の改造版ですな』
いや、つまりどういうことよ。

『よくわからんので使ってみましょう』
じゃあ、どうぞ。

『つい』

てきとーなかけ声と同時に景色は一変した。

不思議な光景だった。どこかのダンジョンだろうか。

いつかどこかの荒涼とした原っぱで、一体のモンスターと四人の間が対峙している。

モンスターは先ほどまで見ていた六本腕に十二本の羽を生やした邪神様とかいうのだった。

結晶にいたときと同様にいくつか怪我が見られる。血の色は紫だ。

一方、四人の人間は初めて見る。

「邪神！ ついに追い詰めたぞー！」

光り輝く剣を握った精悍な男が叫んだ。

「邪神よ。あなたに裁きを下します」

白い質素な杖を掲げた、純真そうな女が静かに告げる。

「コングロメレート of 仇！」

金属の大きな腕をモンスターに向けているのは、その体全体を鉄板のようなものに包まれた女だった。

「精霊よ。儂に力を」

禿頭のおっさんが両手に数珠をぶらさげ、周囲に風を起こしている。揺れる髪はない。

私もだいぶん近くにいますけど、どうやら姿は見えないようだ。

これはもしかして――、

『あの邪神様の記憶だよ。冗談抜きで異世界から来たみたいだね。全員が魔法じゃなくて術技を使ってる。装備も明らかにこの世界のものじゃない』

ほおん、やっぱりそうなのか。

道理でなんだか見慣れない武器を持っていると思った。

「わからぬ。なぜ、貴様らは我を狙う。我らの目的は同じであろう」

邪神様が口を開いた。

その声はおどろおどろしい。

聞いているだけで、背中に寒気が生じた。

「私の目指すべくは世界の均衡。そして、その調停。革命の剣士、プラティナよ。貴様が求めるは世界の安寧。我と同じではないか。違いなどなからう」

「違うのだ！ 平和とは、その結果だけで論ずるべきものではない！ 貴様のやり方は間違っている！」

プラティナと呼ばれた剣士が吠えた。

彼の手に握る剣の輝きはいつそう増していくばかりだ。

振るった剣の輝きは、モンスターの腕の一本——黒い剣に止められた。

「げせぬな。私の行動は、魔のモノの勢力拡大抑制であった。そうであらう、無垢なる聖杖、コラリイ」

「邪神よ。あなたは多くの聖職者、罪なき人々、彼らの寄る辺となる教会を焼いてきました。それは魔のモノに与するものです」

雲の切れ目から射した光が邪神を突き刺す。

すぐさま邪神の影から湧き出た暗黒がその光を遮った。

「ハンドラー・ソレア。我には貴様がなぜ怒っているのかわからない。あのコアはどうした？」

「どうした?! どうしただつて！ コンングロメレートはテメエが殺したんだろうがア！」

石、いや、鉄のつぶてだろうか？

ソレアの金属の腕から飛び出た数多くの礫が邪神様を襲う。

邪神様もその一本の金属の腕から出てきた礫が、ソレアからの礫と相打ち合っていく。

「やれやれ、話にならないな。精霊界の門番、ケオンよ。貴様は門番の務めを忘れたか？」

「貴殿が精霊王を殺し、精霊界はもはや存続できぬ。儂は貴様を通してしまった責任を果たすべく、ここに立つ」

ケオンが両手の数珠を鳴らすと、地が蠢き、どこかから火が生じた。

風と共にそれらが邪神へ向かい、同時に邪神からも同様の魔法が発動され相殺された。

「邪神よ！ この場に立てぬ、アハティス先生の教えも我らにある！」

今日！　ここで、全ての禍根を断つ！」

四人の戦士達は再び邪神へとそれぞれの武器を向ける。

「忘れたか？　敬愛を込め、我のことは『邪神様』と呼ぶがよい」

邪神が低く笑い、戦闘は再び開始されようとし、――時が止まった。

「私の記憶へと膏肓に入る人の子よ。名乗りをあげるがよいぞ」

四人の時は止まっている。

邪神だけが私へと体を向け、名を聞いてきた。

『俺が邪神様の記憶閲覧をラーニングして、逆に邪神様の記憶を覗いてるんだ。ここは彼の記憶の中。パーティー登録したから邪神様も好きに動かしたり止めたりできるんだよ』

へー、すごいなチートと邪神って。

「聞こえなかったか。我のことは『邪神様』と呼ぶがよいぞ」

はあ……。邪神、様ね。

私はメルだ。

『俺はシュウ。よろしく邪神様』

満足げに邪神様は頷いた。

「――して、どうであるか？」

どうであるか、とは？

「理解したか？　見たところ、貴様は人間であろう」

人間だけど……。理解って何が？

邪神様は首をゆったりと横に振る。

その様子は「一体お前は何を見ていたんだ」と言わんばかりであった。

『今のは邪神様の最後の記憶ってことでもいいのかな。この後に俺たちの世界に飛ばされて、結晶に封印された』

「そのあたりは記憶にない。状況を推測するにそれでよかろう。――して、彼らはなぜあのようなことを言うのか？」

『それは、今のだけじゃわからないね。見たところ彼らは邪神様に恨みを持っていた。恨みは結果だ。原因となる部分があったはず。もうちよつと前から見せてくれないかな』

「剣が生意気に因果を語るか……。しかし道理ではある」

『最初から、いや、逆順で見せてもらおうかな』
「よかろう。とくとその目に焼き付けるがよい」
景色と話が移りゆく。
私の理解を置き去りにして。

場所が穏やかな村へと変わった。
子供達が野原を駆け、大人達は畑を耕している。そんな風景を俯瞰している。

先ほどまでの戦闘が嘘のような穏やかさだった。
その安らぎの中を邪神様がふわふわと飛び、村はずれの家へ向かう。

景色と姿がまったく似付かないものの、奇跡的に村の穏やかさは保たれていた。

邪神様は村はずれの家の前で立ち止まり、水晶の腕を光らせる。

——はずれの家から巨大な火柱が立ち上がった。

一瞬の間を置き、子供達は啞然とし、大人達は腰を抜かして尻餅をつく。

周囲の木々に止まっていた鳥たちは一斉に飛び立っていく。

小川の水は揺らぎ、土が混ざり淀み始める。

……ええええ、なんじゃこりや、なんじゃこりやあ。

穏やかな景色が一変して地獄絵図になったぞ。

「消え去るが良い、アハティス」

邪神様が、火柱の立ち上がった家へと向かって告げる。

同時に、家から一つの影が飛び出た。

「くっ、邪神かー」

飛び出たのは男性。

体つきはたくましく、年齢は壮年まっさかりという頃合いだ。

片手に書を持ち、邪神の容赦ない攻撃に対して、アハティスと呼ばれた男はすれすれで攻撃を回避していく。

『いいや違う。あれは回避じゃない。攻撃を外させてるんだ』

「ふむ。これが貴様の力か。なかなか強力だな。認識の阻害にも使

えるか。その力は我が有効に使うとしよう」

邪神様の腕の一本に、結晶のときに見た本が現れた。

「くっ、話には聞いていたが……ぐあッ」

邪神様の容赦ない一撃がアハティスの体を貫いた。

「わた、しは、こな、とこおで……」

アハティスは血のあぶくを噴きつつ、這つて邪神から遠ざかろうとする。

「死ねい」

邪神の腕が振るわれたが、アハティスの書物が光り、その攻撃はアハティスの半身をもぎ取るにとどまった。

「無駄な抵抗を」

邪神様の水晶玉が動く直前、静止がかかった。

「そこまでだ！」

聞き覚えのある声がとどろき、邪神とアハティスの間を光が走る。

邪神様が距離を取り、その位置へと剣閃が走り、鉄の礫が飛んでいく。

「先生！ クソッ！ コラリイ、頼む！」

プラティナと呼ばれた青年、それに機械女と禿頭が邪神へ立ち向かい、杖を持った女がアハティスへ駆け寄る。

「賢者アハティス。お気を確かに！」

女が治癒魔法らしきものをアハティスにかける。

「愚かな。なぜ貴様等はその男の命を繋ぐ。そやつこそ諸悪の根源であらう」

「馬鹿を言うな！ 諸悪の根源は貴様だ！ いつだって先生は俺たちを導いてくれた！」

邪神様は私にしたように首を横に振り、溜息を一つ吐きだした。

そして、時が止まった。

「どう思うか？」

邪神様が私を見て、問いを投げる。

——お前が悪い。

邪神様は首を小さく傾げる。

子供がやると可愛いが、こいつがやると首をへシ折るぞと言外に迫られているようだ。

平和な村で穏やかに暮らしてる人の家に、いきなり火柱を立てて、殺しにかかるってどういうことだよ。

『当然の疑問だね』

邪神様はふむと小さく頷いた。

「この記憶は、例の戦い直前のことだ。アハティスこそが世界の歪みと結論づけ処理することに決めたのだ」

いやあ、今のところだけ見ると完全にお前が悪だぞ。

「悪でかまわん。我は必要悪。世界の均衡のため、為すべき事を為す」そんな断固たる態度を取られてもなあ。

『いちおう他の記憶も見せて。逆順だから、次は精霊界の門番、ケオンだったかな。禿頭の』

誰だっけと聞いていたが、禿頭でようやく思い出した。

「よかろう。あの記憶を見れば、たちまち私の正当性を理解できるであらう」

『嫌な予感しかしない』

同感だ。

景色が変わり、周囲の壁が赤く燃えていた。

「ぐあああああああ！ 邪神よ。貴様さえ！ 貴様さえいなければあー！」

邪神様の黒き剣が、ローブを纏う男の胸を貫いている。

「死ねい。精霊王」

剣を引き抜くと、精霊王と呼ばれた男は倒れ、手に持っていた水晶が地面に転がる。

精霊王の刺された胸からは、七色の光が漏れだしていた。

光は次から次へと湧き出て来て、漏れ出すほどに精霊王は弱っている。

ちよつと！ ちよつと待って！

「なんだ？」

時が止まり、邪神様が私をむく。

なんでいきなり精霊王の胸を貫いてるの？

「あやつが世界の均衡を崩しておったからだ」

ええ……。

うん、もういいや、続けて。

「王よー」

禿頭の男がどこかから現れ、今にも朽ちていく精霊王のところへ駆け寄る。

「ケ、オン。貴公、何をしておる……。なぜ、こやつを通し——」
そこで精霊王は事切れた。

ちなみに邪神様は襲ってくる他の兵士達を返り討ちにしている。

「なるほど、精霊術とは斯くのごとくあるものか」

邪神の腕の一本が、転がっている水晶玉を掴み、そのまま力を入れて砕いた。

砕かれた水晶からも幾色もの光が溢れ出てくる。

邪神様の手に、先ほど砕いた水晶が顕れた。

他の兵士達が使っている魔法を、邪神様も同様に使うようになった。

『なるほどねえ。これがスキュード・ラーニングか。世界の理を解し、それを歪めて自分の技と為す。こいつはやっかいだ』

それはどうでもいいけど、これどうやって收拾がつくの。

「邪神。これは全て貴殿を通した私の責任！　ここで貴殿を討ち滅ぼす！」

「我は滅びぬ。ケロスよ。貴様は生きて精霊界の存続に心血を注ぐのだ」

その後は一方的だった。

ケロスの攻撃は全て相殺され、同時に他の攻撃が彼に降り注ぐ。

地面に倒れるまで邪神様は攻撃を続け、動けないことを確認して立ち去っていった。

「ああ、そうか……」

その言葉を最後にケロスは意識を途絶えさせた。

後には血だらけの宮殿が残るだけだ。

そして、時が止まる。

『どう思うか?』

そりゃあ、憎まれるよ。

生きろって言つて、あそこまでボコボコにするってどうなの?

『切り取り方が邪神様クオリティすぎるね』

なんか、もう他のやつは見なくてもわかるような気がする。

『次も見どころ。ハンドラー・ソレアだったっけ。分厚いパワー
スーツを纏った女の人の』

……じゃあ、次で。

「うむ」

景色が変わった。

今回は木が燃えたりはしていなかった。

「ちくしょう! ちくしょう! テメエは絶対にぶち殺す! ぶち殺してやる!」

鉄くずがぼろぼろに地面に散乱し、ソレアと呼ばれていた女が地面に倒れて泣き叫んでいた。

『足が悪かったんだね』

確かにソレアとやらは怪我をしている様子もないのに、立ち上がっていない。

というか人間だったんだな。なんか体が金属で出来てるのかと思つてただけど……。

『足が悪いのを、あの金属のスーツで補っていたんでしよう』

そうなのか。

でも、その金属のスーツは……。

「なかなか頑丈だな」

邪神様はそんなソレアが泣き叫ぶ横で、淡々と鉄の塊から、鉄くずを引きはがしていた。

いくつもいくつも鉄くずをひっぺがして、ついに中心の大きな丸い核を取り出す。

《ソレア。さようなら……》

核から抑揚のない声が響いた。

おいおい、なんか核がしゃべったぞ。

「コングロメレートお、やめろお、やめてくれえ……」

ソレアの叫びがついに悲哀を帯びたものになった。

「眠れい」

邪神様が容赦なく核の中心に黒い剣を突き刺した。

《ビガッ》

短い音を出して、核は活動を停止した。

「ああっ！ ああああああっあああ！」

「ソレアよ。貴様の構造物、見事である。我も利用させてもらうとし

よう」

邪神様の腕の一本が、機械に覆われていった。

「よし」

そして、時が止まった。

邪神様がドヤと私を見て来る。

おい、待てよ。

何が「よし」なんだ？

「あのコアは放っておくと暴走する危険性があった。故に停止させた」

邪悪すぎるだろ。

『はあん、なるほどなるほど。次にいこうか』

シユウもなんだか投げやりだ。

おい、待ってくれ。

いきなり突き刺したりするところから始めるのはやめろ。

もうちよつと前から段階を追って見せてくれ。

「よかろう」

『次はちよつと楽しみにしてたんだよね。無垢なる聖杖、コラリイたん！』

邪神は心得たと小さく頷いた。

景色が変わった。もう飽きつつある。
質素でありつつも、荘厳な雰囲気を纏った施設があった。

「みなさん、おはようございます」

施設の奥へ進むと、見覚えのある女が多くの人々を前に挨拶をおこなう。

彼女の前に長いすが平行に並び、多くの人が腰掛けている。

後ろの方に、やたら背の高い邪神様が一体。

人にまぎれてちよこんと座っている。

どうということなのこれ。

この時点でもうどうあがいてもおかしい。

実際に他の人たちも緊張している。

「本日は、珍しい方がお見えになっています」

コラリイに緊張はさほど見られない。たいしたものだ。

邪神様も「うむ」と鎮座している。

「このような場は初めてだ。我は些かならず緊張している」

ほんとかよ。

堂々としすぎているように見えるぞ。

「彼は『邪神』と名乗っていますが、神ではありません」

そうですねとコラリイが邪神様を見た。

「然り。我はただの調停者。神を名付けたのは、我が創造主の驕りである」

お前の創造主ってどんなだよ……。

「彼は我らの信ずる神に反するものではありません。神は天にありて我ら一同を等しく見守っておられます」

コラリイが両手を組み祈る動作をすると、信者たちもそれに倣う。

その中で邪神様も真似をして、六本の腕をそれぞれ三組にして祈る真似をする。

いつ火を付けるのかと緊張しつつ見ていたが、何も起こさない。

けつきよく祈りの時間は何事もなく過ぎていった。

……あれ？

何も起きないぞ。

祈りの時間を終え、皆で荘厳げな歌を歌う。
一通りのイベントタイムが終わり、信者達への施しの時となった。
教会側から信者達へ食べ物を振る舞い、病気の治癒をおこなう時間
のようだ。

ここで皆殺しにするのかと冷や冷やしながら見ていたが、邪神様は
普通に食事をしている。

それどころか治癒を手伝っている姿さえ見られた。

その後、お開きになって邪神様も帰る。

問題は……、いつ起きるんだ？

「七度の日没を迎えた後だ」

……七日後って事か？

わかりづらい説明をしやがる。それに長い。

たしかにもうちよつと前から見せろとは言ったけどさ。

もういいや一気に飛ばしてよ。

「うむ」

景色が早送りされ、気づけば暗いところに立っていた。

早くてはつきりと見えなかったが、ここは教会の地下だろうか。

邪神様は暗闇に立っていた。

「燃えよ」

邪神様の周囲から炎が生じた。

水晶がまだない頃だったようで、その勢いは緩やかだがじっくり燃
え広がっていく。

いやいやいやいや……飛ばしすぎでしょ。

もうちよつと燃やすに至る過程を見たかつたんだが。

「この場所は世界の均衡を崩すと判断した」

お得意の返答で解説はない。

聞き返す前に記憶は再生されていく。

火の明かりで気づいたのだが、暗闇の中にはまだ人がいた。

彼らは横たわったまま、火と煙に巻かれて苦しみをだえている。

おいおいおい、どう見ても焼き殺してるんだが、なにやってんの？

「火が出ているぞー」

しばらくすると騒ぎがおきた。

それでも邪神様は気にせずどんどん火をあげていく。

火が止められない勢いになると、邪神様は地下から上の階層へと移動していく。

「邪神！ やはり貴様か！」

装具過多な年寄りが邪神の前に立ちはだかる。

「いかにも我だ。地下のモノは均衡を崩すと判断し、全て燃やした」

「なっ……！ あれがどれだけ貴重かわかっているのか！ 邪神よ！

やはり貴様は生かしておけぬ！」

爺が手に握る煌びやかな杖を掲げる。

そうすると建物の中だというのに、辺り一帯を朝陽の如く目映い光が射した。

「その口ぶり——貴様は世界の均衡を崩す。調停をおこなう」

「汚らわしい口を閉じよ！ 我らが神よ！ 邪神に裁きの聖光を！」

光で体を炙られつつも、淡々と邪神様は宣告した。

「聖なる光を語るか……。それであれば我も貴様等のやり方に従うでしょう」

邪神様の腕の一本から杖が生じ、その杖に二匹の蛇が巻き付いた。

爺はそれを見て、さらに杖を高く掲げ、光はまぶしさを増し、もう

……何も見えねえ。

「我こそが世界に調停をもたらす邪神様なり。我が威圧よ。まばゆい聖光を飲みこめい」

眩しくてよく見えないが、杖から生じた暗闇が光を呑み込んでいく。

暗闇があつという間に周囲の光を喰らい尽くした。

「ば、馬鹿な余の聖光を覆い尽くす闇だと！」

「失せよ」

年寄りが暗闇に呑み込まれていく。

「総大司教猥下！」

ここにきて、ようやく主役が登場した。

「コラリイよ。こやつを——」

そこまで言って、爺は暗闇に完全に呑み込まれた。

「貴様は知っていたか？」

立ち尽くすコラリイに、邪神様は問いを投げる。

「な、何をですか？」

『邪神様は目的語がないんだよね。「何を」って部分がいつさいない』

ほんとそれ。

「地下のモノだ」

「地下には病気の治療を受けている人々が……」

「アレはもう救えぬ。故に我が燃やした」

「そんな、まさか罪なき人々を焼いたというのですか……。邪神様、なぜ！」

「——ふむ。我が調停を示す。無垢なる者は此処より立ち去るがよい」

邪神様はそう告げ、コラリイを無視して外に出て行く。

都市の中心にあり、一際高いその教会が燃えている。

月も出ていない夜のため、その灯りは周囲を赤く煌々と照らした。

照らされる街の人々は、彼らの心の柱が燃えていくのを涙を流して見つめている。

その中で、誰かが教会で聞いた歌を口ずさみ始めた。

歌声は、一人また一人と増えていき、やがて街の隅々まで広がる。

街中に歌が満ちたとき、教会は炎に包まれ崩れ落ちた。

コラリイも教会のすぐ側で歌を口にしていく。

炎の上には邪神様が無感動に、焼け落ちた建物と歌う人々を見下ろしている。

そして、時が止まった。

邪神様が同じく宙に浮いて、ぼんやりと眺めていた私を見る。

私は何も言わずに、信じられないと邪神様を見つめ返す。

邪神様も何かを察して口を開いた。

「抜かりはない。ここだけではなく、他の教会も悉く燃やしたぞ」
シユウに手が伸びた。

『待つて。最後まで見よう。ラストは革命の剣士、プラティナだった』

かな』

邪神は頷く。

「私の手はシユウを強く握り、いつでも斬りつけられる体勢になっている。」

景色が変わり、町の外れに浮かんでいる。

その外れに煙が一本立ち上っていた。

邪神様はそこに立っていた。

火が燃えさかる前で、その炎をジツと見つめる。

邪神様の手はまだどれでも人の手と同様で、刻印も何もついていない。

問題は燃えているモノの山だ。

記憶の中だというのに、鼻をつく臭いはきちんと最悪だった。

モノは人だ。人が燃やされていた。穴が掘られ、そこに大量の人が押し込まれている。

そこについた火が人々を黒く焦がし燃やし尽くしていた。

町に人の姿は皆無である。一人の例外を残して。

「なんだ、これは……」

私と同じ疑問を一人の例外が口にした。

急いで来たのか肩で息をしている。

「燃やしている」

淡々と邪神様が答える。

「これは……、これを全てお前がやったのか？」

「全てではない」

何事もないかの様子で邪神様は返答する。

「魔のモノにしては姿がはつきりとしている。お前はなんだ」

「我は魔のモノにあらず。我は邪神。邪神様と呼ぶがよいぞ」

何やら会話の方向がずれている。

「……………どうして、こんなことを？」

沈黙の後、男が尋ねた。

そう。私もそれが聞きたかった。

「病の苗床となる。燃やすのが一番だ」
違う。そうじゃない。

「なぜ彼らを、殺したんだ……?」
それだ。

私もそれが聞きたかった。

「奴らは世界の均衡を崩す。生かす価値がない」

「キサマア!」

淡々とした邪神の返答に男がついにキレた。

どこかから光る剣を手に取りだし、その勢いで邪神に襲いかかる。
『ほおー、そういう世界なのか。ああいったこともできる世界なんだね』

シユウはぼんやり解説をしているが、私はそれどころではない。
どちらかという男と一緒に斬りかかりたい気持ちだった。

『魔のモノに、精霊に、喋る機械の核、それにへんてこな武器か。なかなか賑やかだ』

男の剣戟を邪神は素手で捌いていた。

「我はお前を知っているぞ。革命の剣士、プラティナ。なかなかの剣さばきだ。先の者どもとは違うな。輝きの剣とやらに選ばれただけはある。——我もそれに倣うとしよう」

邪神様の一本の腕がその形状を変える。

見覚えのある黒い剣が輝きの剣を受け止めた。

しかし、勢いはプラティナの方が勝り、邪神様を後退させていく。

「魔のモノ! いや、もっとおぞましい存在よ! 覚悟せよ!」

邪神を追い詰めたプラティナの渾身の一振りは、剣で防が……弾かれた?

なんか上手く弾いたな。

『受け流したね。なるほど剣技も対象になるのか』

対象という?

「誠剣術であったか? 善きかな。我が覚えるにたる術と認めた。故に、使わせてもらおう」

プラティナが斬りかかれば、その輝きは黒き剣を滑り宙を斬る。

プラティナが堂々と斬り伏せる剣術とすれば、邪神様はそれを堂々と受け流し斬り伏せる剣術だった。

「邪神剣術と呼ぶがよいぞ」

「抜かせっ！」

攻めていたプラティナが、みるみるうちに劣勢になりつつあった。

いくら斬りかかっても、受け流され逆に斬られつつある。

傷もどんどん増えていく一方だ。

「プラティナ様！」

遠くから見たこともない生き物に乗った兵達が邪神様の元へ駆け寄ってきた。

「ふむ。これまでだ。今の貴様から学ぶことはもはやない。励め」

攻めあぐねていたプラティナに邪神様はそれだけ残し、羽を広げて飛び去った。

時が止まり、私の前に着地した邪神様は一言。

「そういうわけだ」

どういうわけだよ！

シユウで邪神様に斬りかかるがまったく手応えがない。

「何をするか、この痴れ者めが」

『ここ記憶の中だよ。斬ったって意味ない』

なんとなくわかってはいたさ。

それでも、こうしたかったんだよ！

そりやお前、憎まれるに決まってるだろ！

むしろ逆に聞きたいよ。どうして憎まれてないと思えるんだ?!

「愚かなりメル。なんとという思慮の浅さよ。しよせん、あやつらと同じか」

なんなの！

なんで記憶の中でここまで馬鹿にされないといかんのだ！

おい、シユウ！

お前はどつちが悪いと思う！

『邪神様は説明が足りない。メル姐さんは観察力が足りない。どつち

も悪い』

私と邪神様が、シユウを凝視し先を促す。

『一つずつ言っていていこう。まず最後のプラティナのところ』

こいつは穴ほって、村人を埋めて、炎で焼いたんだぞ。

観察と弁明の余地がどこにあると言うんだ。

『燃えてる人をきちんと見ると二種類いた。片方は体をちぎられてる人。もう片方は剣で斬られてる人。それに人の数が、家の数に対してやや多い印象が見受けられる』

そんなところ見てないよ。

それがどうかしたというのか。

『あそこにいたのは村人と、別の何者かだろう。何者かを仮に盗賊としよう。盗賊が村を襲って村人を斬り殺した。そこに邪神様が出て、秩序を破壊する輩を成敗——盗賊をちぎり殺した。そして村人と盗賊の遺体を、病気の温床になるから一カ所に集めて燃やした』
……………そうなの？

「何を申すか。語るべくもなく一目瞭然であろう」

わかるわけねえだろ。

「化け物が村人を生き埋めにして、焼き殺しているようにしか見えんぞ。」

「メルよ。貴様はなかなか想像力が豊かであるな」

フフフと邪神様は低く笑う。

口から冷気が漏れ出てきていた。

『プラティナも同じことを思ってるだろうね』

「なんと……、あやつも妄想に生きる輩であったか」

……………じゃあ、その前の教会を燃やしたのは？

あれこそ何も言い逃れできないだろ。

地下で生きた人を焼き殺し、偉そうな爺を殺し、教会を壊した。それも複数やった。

違うか？

『はい、観察力不足。あの場面に戻ってみよう』

景色が変わる。

邪神が火をおこした教会の地下だ。

『横たわってるのを近くで見してみなよ』

床に横たわる人に近づくと。

その姿に気づき、足が止まった。

……なんだこれ？

人の服を着た獣が横たわっていた。

他の者を見ても、手が数本生えていたり、足が魚の尾になっているものもある。

人ではない何かよくわからない存在が、地面に寝かされている。

『魔のモノってやつじゃないかな』

「然り」

えっ、なに……？

なんなの、どういうこと？

『教会が、魔のモノを造り出していたんじゃない？』

「いかにも。教会は天然の魔のモノより得られる魔晶を、人の体へ埋め込み、人工的な魔のモノを造りだしていた」

不気味な生物の胸の辺りに、まるで心臓のような腫れ物が浮き出ており、しかも脈打っている。

『うん、きれいに融合してるね。これは救えない』

「世界の均衡を揺るがすと判断し、その工房と携わっていた者を処理した」

じゃあ、偉そうな爺は関わっていたから殺して、コラリイに手をかけなかったのは……。

「あやつは何も知らぬ。ただひたすらに人命の救助と施しを生き様とした。無垢なり」

じゃ、じゃあ、なんで八日近くも教会にいたんだよ！

さつさと地下に乗り込んで焼けばよかっただろ！

『無関係な人を極力巻き込まないように、一番人の少ない時間帯を探ってたんでしょ』

邪神様をみると「当然だろ、今さら何を言ってるの」みたいな顔をしている。

『コラリイから見たら、信者の振りして潜入して、安心させたところで司教をぶつ殺して、寄る辺の教会もゴミのように燃やし、あまつさえこの所業を幾度となく繰り返した悪魔にしか見えないだろうね』
「視野狭窄よ」

なんとなくわかってきた。

じゃあ、その前の機械の女は？

『邪神様が言ってたとおりでしょ』

……何て言ってた？

『ほつといたらあのコアが暴走してたんでしょ』

そうなのか？

「あの魔力コアと同じものが、暴走した事例を何件も目撃した」

ああ、そうなの。

でも、いきなり剣を突き刺しちやまずいでしょ。

『いや、最後のあれは自爆するところだったんじゃないかな。魔力が異常に増大してた。それで信管を剣で貫いた。あのコアは破壊されてない。たぶん非通電状態。だから、邪神様も「眠れ」で締めた』
「うむ。あの魔力コアの爆発で、いくつかの町が消滅するのを間近で見ってきた。そのため、起爆装置のみを貫き活動を止めた。我も一度だけしか見ておらぬから、一か八かであったわ。我ながら素晴らしい腕前と誇るものである。あれならば、コアを修復するのは容易であろう」

………言葉が、致命的に足りてない。

『ソレアからしたら大切な相棒、親友を為す術なく目の前で殺されたと思ってるわけだからね。しかも、簡単に直せるなんてわからないだろうし』

「馬鹿な……。見ればわかるであろう。これほどの技術を有しておるのだぞ」

邪神様は機械の腕を自慢げに見せてくる。

わからないから怒ってんでしょ。

それがわからないのか。

………まったくわかってない様子だった。

とりあえずここまでではわかった。

しかし、次は謎すぎるぞ。

いきなり精霊王とやらが刺されているシーンなんだからな。

『最初は驚いたけど、あれは殺されても仕方ない』

「至理」

尻？

なにそれ？

どういうことなの？

『精霊王は刺されて光を出してたね。きれいな光。覚えてる？』

ああ、覚えてるぞ。

虹みたいな複雑な色だった。

水晶玉が砕かれたときも出ていたよな。

色は違うがモンスターを倒したときの光みたいじゃないか。

『正解。あれは魔力。生命の光だ。あれだけの色が混ざってるのは、いろんな種類の生物からその命を奪ってきたからだ。光量から判断するに数百、数千ではないだろうね』

……え？

『他の奴らはちゃんと血が出てたから人間だ。でも、あいつだけは違う生き物だった。あいつは魔のモノなんじゃないかな』

「さにあらず。あやつには魔力がない。あやつは、森羅万象より生気を抜いて自らに蓄えていた」

邪神は腕の一本が持つ水晶を見せてくる。

その中にある光は、精霊王から出てきた光とよく似ていた。

……おい、これって。そうなのか？

『違うよ。その光は邪神様の魔力から生み出されたもの。刈り取ったものじゃない』

「あの者は、精霊界はおろか、世界の均衡を破壊すること大である。故に処理した」

そうだったのか。

あれ？ ここだけはまともに均衡だかなんだかを守ってないか？

でも、精霊王以外の奴らを倒す必要までなかっただろ。それに禿の

おっさんもぼこぼこにしてたし。

『それが最後のアハティスに繋がるんでしょ』

アハティスって家ごと燃やされてた奴だろ。

どう繋がるって言うんだ。

『おそろく、あの宮殿にいた奴らはアハティスに記憶を操作されてた。それを我に返させるために衝撃を与え続けた。シヨック療法だね』

「シユウよ。そなた、我が意を酌むこと並ぶ者なしよ」

たぶん褒めてるけど、褒め言葉すらわかりづらい。

「アハティスが精霊宮に出入りしていたことを知り、人々の記憶を改竄していたと判断した。故にあやつを抹消すべくむかつたのだ」

しかし、四人の戦士達に止められてしまったと。

「奴らは浅慮だが、非はない」

そうだな。

だいたいお前が悪いだろ。

『違う。だいたいアハティスのせい』

はあ？

どう考えても説明を怠ったこの邪神様が悪いだろ。

『いや、あの四人はアハティスを知っている様子だった。先生だの、賢者だのと呼んで、教えがどうとも言ってた。記憶を操作されてたんでしょうね』

本当にそうなのか？

『四人全員が最初に勘違いしていたのは間違いない。きちんと説明しない邪神様も悪い。でも、ちよつと振り返ってみればおかしいことに気づく。村人の焼かれた死体を見れば何があったのか察するし、教会の地下を掘れば実験の痕跡は見つかる。パワードスーツを造る技術があれば、コアの仕組みだって把握できうる。それに禿頭は記憶を取り戻していただろうに、またあんなふうに対峙したことが異常。彼らの記憶は改竄されてた』

結論——アハティスが悪い。

さて、それでだ。

アハティスが悪いことはわかった。

だが、ここは記憶の中、どうすることもできんだろう。

現実の結晶はなすすべがないし、元の世界にも戻ることはできない。よしんば戻れたとしても時間が過ぎてる。

そうじゃないか？

『おお！ 珍しく正しいことを言ってる！』

まあな。

たまには頭を使わないとな。

「頭の勤労、大儀である」

なんだろう。

なんか腹立つわ。

これ絶対馬鹿にしてるだろ。

まあ、いい。

それでどうするんだ？

「どうするのだ？」

邪神様にも頼られるってのはどうなんだろうか。

『方法というか、可能性ならあるっちゃあるけど……』

煮え切らんな。

いちおう聞こう。

『邪神様の腕は六本あった。最初はどれも普通の腕だった』

そうだったな。

剣。杖。鉄の棒。水晶玉。本。

それぞれが別の力を持っている。

……あれ？

残りの一本は普通っぽい腕だけど、なんか変な紋様が入ってたよな。

最初から入ってたっけ？

「否。いつこの刻印が入ったのか我も思い出せぬ。なんにせよ、どちらかであろう」

また言葉が足りてない。

どちらかとは？

『どちらかってわけでもないんだけどね……』

もったいぶらずに早く言つて。

『最後のシーンでも腕に紋様はなかった。そうすると、邪神を異世界に飛ばした技か、謎の結晶に閉じ込める技。このどちらかって言いたいでしょ。まあ、紋様から見ると転移だね。以前に似たような模様を見たことがある。でも、スキュード・ラーニングのせいで元の力とは変質したものになってるでしょうな』

「うむ、手のひらを合わせれば発動できるとは何となくわかるが、どうなるかがまるでわからぬ」

危険すぎるな。

仮に異世界転移したとして結晶はどうするんだ。

それがどうにかならんことには転移できたとしても、やっぱり意味がないだろ。

『それがそうでもないかもしれない』

どうということ？

『記憶の中でアナライズをかけた中におかしいのがあった。例の四人の武器、魔のモノの魔晶、よくわからん機械のコア、精霊王。……もう一つあるけど、今はいいや』

お前、好きだねアナライズとかいうの。

『うん。解析で出てくるフレーバーテキストがおもしろいんだよ。でもね、先の四つは解析がおかしくなった。生物は通常アナライズが通らないはずなのに通ったし、表記がバグってた』

「どうということか？」

『つまりね。さっき話したものと、邪神様を閉じ込めてる結晶は何らかの関係がありそうってこと』

どういう関係かはわからないと。

『行って調査すればわかる、かもしれない』

わからないかもしれない。

『まったくそのとおり』

おもしろくなりそうか？

『さて、どうかな？ 邪神様に聞いてみたら』

だ、そうだが。

「おもしろさなど不要であろう」

ダメだな。まったくわかってない。

これだから、あいつらに負けて異世界に飛ばされ、こんなところに封印されてるのだ。

「たわごとを。我は奴らに負けてなどおらぬ」

負け惜しみだな。

『いや、邪神様の言うとおりに。戦闘であの四人に負けることはない』
なぜそう言える。

『明らかに邪神様の方が強いもん。あの四人はへんてこな装備で強化してるけど、彼らの術技だけで邪神様に勝つのはまず無理。全員の術技に対抗する、より強化された術技を邪神様は持つてる。しかも同時に使えるからね』

わからんだろ。

協力して勝てたのかもしれないぞ。

『それ、笑える。協力なんてあいつらにはないよ。動きがばらっばら。個々で能力を發揮したとして中級。あのパーティなら初級だ』

通常、パーティを組めば個々で戦うより強くなるはずである。

組んで弱くなるとシユウは言う。

それって――

『パーティを組む意味がない。皆無』

ちなみに邪神様はどれくらいなの？

『超上級ボス以上なのは間違いないね』

その割には勝負になってるぞ。

『邪神様が殺さないようにめっちゃ手を抜いてるからね。殺す気なら一瞬で終わる』

でも体中に怪我をしてないか。

『怪我の種類がどう見ても彼らの攻撃から出来たモノと違う。あの四人の攻撃を同時に受けても重傷がやつとだよ。別の強敵と戦った直後でしょう。怪我の具合から見ても呪いを使うタイプだ。アンデッド特有の腐臭もしてたね』

「然様。魔のモノを統べていた、絶命王なる者と戦った直後であった」
そうだったのか。よほど強かったのだろう。

だが、事実として邪神様はここにいるし、封印もされてるぞ。
あの中の誰かがそれをおこなったんじゃないか。

『あ、言い忘れてたけど、術技は魔法と違う点がいくつかあって、一人が複数の術技を使うことはまず無理なんだ。魔力の変質作用が、その個体に依存してるからね。術技の中で幅を広げていくのが精一杯』
目の前に例外がいるんだけど。

『邪神様はラーニングが大本で、それに幅を利かせてるだけ』
よくわからんがそうなのか。

……ということはどういうことなの？

「うぬの頭蓋は空虚であるか」

……………あれ？

わかりづらいけど、もしかして馬鹿にされてる？

『そこに気づけたならたいしたものだよ』

褒めるように貶すのはやめてくれ。

喜びそうになる。

『邪神様はあの四人には負けない。ということほだ。あの戦いの後には、もう一つの戦いがある。そこには、あと三人……いや四人はいただろう』

ほー。結晶に閉じ込めた奴と、異世界に飛ばす奴……あと二人は？

『まず、記憶を消した奴』

ああ、そうか。

ん？ 記憶を消すってまさかアハテイスか。

「ありえぬ」

『考えづらい』

同時に否定されてしまった。

なぜだ？

『アハテイスは邪神様に半身を消し飛ばされてたよね。あれは明らかに致命傷』

杖持ってた女が回復してただろ。

『あの回復術技は怪我を治す類じゃないんだ。殺菌や病気の治癒、呪いがメイン。追い詰めたときに、邪神様が四人を蹴散らしてでもアハティスのトドメを刺さなかったのは、死ぬことが明白だったから。あの状態から治すのは、術技ではまず無理。魔法でも難しい』

邪神様は無言で、然りと頷いている。

『ただ……、やっぱいいや。可能性が低すぎる』

煮え切らない様子だな。

で、あと一人は？

『邪神様の傷は最初の四人との戦闘と、封印されたときで回復した様子はない。すなわち四人との戦闘後、すぐに封印されたと推測される。そうすると、決戦のすぐ近くに謎の四人はいたはず』

周囲にそんな姿はなかったぞ。

『そうだね。だから残る一人は、自分と他三人の姿を隠せる術技を持った奴だ』

なるほどなー。

危険性は？

『結晶封印だけは単体でもやばい。姿隠しと手を組まれるとどうしようもない。邪神様に何か心当たりはないの？』

「記憶操作はアハティスの弟子にいた。姿隠しは魔のモノにその担い手がいたであろう。転移は精霊人にいた。結晶は我が知に無し」

ふむふむ。

結晶封印はやばいんだな。

『直接喰らえば黒のスキルが無敵で壊せるだろうけど、壁として使われると厄介だね。まあ、でも何とかなるっちゃなる』

そうなのか。

よし、じゃああとは一つだけだな。これが一番大切だ。

——邪神様はどうしたいんだ？

「どうしたいとはなんだ？ 頭どころか言の葉も足りておらぬとはな」

自分のことは棚に上げやがって。

元の世界に戻りたいかどうかだよ！

「愚問よ。我は戻らねばならぬ。かの世に均衡をもたらすため、調停をおこなう義務が我にはあるのだ」

お前が戻ったら余計に均衡が崩れるだろとは言わない。とりあえず、戻りたいのはわかった。

それなら私も行ってみるとしよう。いろいろ興味もあるし。

『準備は万端にしておこう。特にパーティーリングは補充した方が良い』

そうだな。

翌朝、宿屋のおっさんのつまらん話を聞きながら朝飯を食べた。

そして、結晶に閉じ込められた邪神様のもとへたどり着く。

準備は万端だ。

『時空間耐性は切ったよ』

結晶に閉じ込められ動けない邪神様の手のひらに、私の手を伸ばす。

手のひらを合わせると、邪神様の腕に刻まれていた紋様が光り始めた。

『手のひらを離さないでね。座標が狂っちゃうから』

景色が歪んでいく。

体が浮いて、上下もわからなくなってくる。

この不思議な感覚が、新たな冒険の始まりを予感させた。

1. 帰ってくれ邪神様

平衡感覚が戻るとどうやら外だった。

昼間らしく日光がとても眩しい。……眩しすぎないか。

『ああ……、こんなことになるのか』

光が落ち着き、視界がようやく安定すると、距離をおいて多くの人とモンスターが見えた。

右に人で、左がモンスターである。どちらもこちらを見ている。

『構えたほうがいい』

両方の死骸がいくつか転がっているのを見るに絶賛戦闘中だった

と見える。

こちらのことなど気にせず、どうぞ心ゆくまでやりあってくれ。そんな思いとは裏腹に、彼らは私を見て固まっていた。転移で出てきたのがまずかったのだろうか。

『いやあ、違うだろうなあ』

なぜ、奴らがあんなに驚いているのかわかるのか？

「じゃ、邪神だ」

一人の人間が呟いた。

そのざわめきは人々の中で徐々に大きくなっていく。

人だけでなくモンスターの群れも互いに見やり、どうするか迷っている様子だ。

モンスターの中から、両足で立っている猪の頭をした奴が何かを叫んだ。

両拳、というか蹄をガチガチと鳴らし、私に向かってくる。

背の高さは私の倍近くある。すごい勢いだ。

『猛烈だね。「俺はやれる！俺様の強さを見ている！」と言わんばかりだ』

ああ、私にもわかるぞ。

あいつからは並々ならぬ自信が伝わってくる。

自信に満ちあふれているな。

『根拠のない自信にね』

突撃を軽く横に避けて、そのまま隙だらけの胴体にシユウを突き刺す。

猪頭は地面に倒れ臥す前に、光となって……あれ？ 光がなんか黒っぽい。

地面に落ちたアイテム結晶も真っ黒だ。おお、黒いアイテム結晶なんて初めて見たぞ。

『あらあ……』

私はレアかなと期待しつつアイテム結晶を拾い、人とモンスターの一群を見る。

奴らは硬直したままだが、その顔には明白な恐怖が見てとれた。

行動はモンスターが先手だった。

号令が一つ飛び、その後、全モンスターが脇目を振ることなく逃げ出した。

「てっ！ 撤退！ 撤退だ！ ガスク要塞まで退くぞ！」

人間側も偉そうな男が号令をかけるとどこかに移動していく。

いかんなあ、どうも怖がらせてしまったようだ。

いきなりモンスターを斬ったのはまずかっただろうか。

たしかにこの世界ではアイテム結晶はでないだろうからなあ。

『そだねー』

ふむ。

こっさり付いて行って話をしてみるか。

きちんと話し合えばわかってくれるだろう。

シユウは何も答えない。

沈黙による肯定というやつだ。

ステルスで姿を消し、人の後を追う。

彼らは一度も止まることなく、遠くに見え始めた建物群へ向かう。

建物が目でしっかり見える範囲に來ると、誰か一人が信号弾を打ち

上げた。

城塞だろうか。高く堅そうな建物が彼らの進路にはあった。

高く重そうな門がゆっくりと開いてゆき、彼らと私を迎え入れる。

もちろん私は姿を消しているので、彼らからすれば招かれざる客と

いうものだろう。

彼らが城塞に入り込むと、すぐに門は閉じられた。

迎え入れた人々は何事かを兵士達に問う。

「い、いたんだ——」

「ザコワン！」

何かを呟こうとした兵士は、名前を強く呼ばれ口をつぐんだ。

「箝口令をしく。あそこで見たモノは絶対に口外するな。自分は今か

らあそこで見たことを監督官に説明してくる。戻ってくるまで、全員

第三修練室で待機せよ。誰も通すな」

兵達の長と思わしき人物が、砦の奥へと歩いて行く。

私もそいつについていった。

「スゴヨワ。その話は真か」

「はい。私が見たことを全てそのまま伝えました」

いやいや違うでしょ。

号令をかけた兵士と、机を隔て椅子に座った男が難しい顔をしている。

「どこかから突然、『それ』が現れ、襲いかかった魔のモノを斬った、と」

「はい」

そうだな。

そこは認めよう。

「斬られた魔のモノは黒い破片となって消え、さらに黒き物体を残したと。そして、『それ』は黒き何かを回収した」

「はい」

うん、それも認める。

『『それ』は四枚の黒の翼を持ち、額の中心に目、そして顔には不可思議な紋様が刻まれていた」

「はい」

そこ。

そこがおかしい。

何を言ってるんだ？

「考えたことを申し上げてもよろしいでしょうか？」

「かまわん」

兵士は息を深く吸った。

「結論から申しますと、邪神が復活したのだと思います」

偉そうな男は腕を組んだまま沈黙を貫いている。

「アレに襲いかかった魔のモノはかの烈亥。監督官にも無論知っておられると思いますが、何人もの仲間たちを、私の部下も殺しています。今回の戦いで、一番の難敵となるはずでした。しかし、アレは烈亥を消滅させました。たったの一刺しで、です」

あの猪男そんなに強かったか？

『中級くらいかな。おそらく、あの突進は正面からの攻撃をある程度無効化できるんだろうね』

そんなモンスターもいたな。

突進系はだいたいシユウを来る場所に構えておくと、勝手に刺さって死ぬ。

今回は異世界と言うこともあり、念のため避けてから斬ったが、次からはいつもどおりにしよう。

「自分は、かの邪神を直接見たわけではないのですが……、その外見は腕が六本、翼が十二本と聞きます」

偉そうな男は無言で頷いた。

私も頷く。

「しかし、自分が見たものは腕が二本、翼が四本でした」

「その違いをどう説明する?」

「かの地は奇しくも四英雄と邪神の決戦の舞台。五年が経ち、そこに突如現れた邪神とどこか似た存在。自分には偶然とは思えません」

「邪神が復活した、と」

今度は兵士が沈黙し頷いた。

「都合の良い妄想ですが、あの邪神はまだ復活したばかりだと思いません。四英雄に倒されたときの損傷がまだ完全に癒えてはいない。そのため姿が完全なものではないのだと推測します。倒すなら今ではないでしょうか」

偉そうな男は頷いた。

「至急。本部へ通達する。早ければ明日にも聖杖様が来られるだろう」

「明日! それではまさか!」

「ムルズにおられる。僥倖だ」

「おお! 神よ。感謝致します!」

何か勝手に喜んで、勝手に感謝している。

「感謝するのはまだ速い。どんなに速くても明日の朝なのだ。今晚が勝負になるだろう。全員に戦闘態勢を取らせろ。私もすぐに連絡を飛ばす。急ぐのだ!」

こうして話は終わった。

私は人のいなさそうな部屋を見繕ってそこに隠れている。
どういふことなの？

『さあねえ。さっぱりわからないなあ』

……嘘だ。

それはわかっているときの言い方だ。

『まず落ち着いて聞いて欲しい』

どうやらあつさり観念したらしい。

『あの兵士が言ったのは全て真実だ。彼は非常に優秀だと言わざるを得ない。事実を事実として過不足なく伝え、自分の推測はきちんと推測として話した。そして、推測はだいたい合ってる』

はあ？

転移とモンスター、アイテム結晶は正しいとしても外見が全然違う
だろ。

『俺がなぜ隣ではなく、この部屋を潜伏先にしたのかを教えてしんぜ
よう。鏡がないからだ』

どういふこと？

『隣の部屋に行つて、鏡の前に立てばわかる。大声は出さないでね』
それだけ言つて口を噤んだ。

何を言ってるんだと思いつつも何か嫌な予感がしていた。
移動しながら思い出していく。

翼が四本に、額の中心に目があつて、顔に刻印がある。

おお、なんじやこりやあ……。なんじやこりやあ。

鏡を見て思わず声が出た。二回も出た。

兵士の報告そのまんまだった。

一瞬、邪神様に見えた。

しかし、よくよく見ると邪神様とはまったく違う。

まず、身長は変わつてない。それに腕も二本で四本足りない。この
時点で違う。

羽が四本背中に確かに浮かんでいた。

首を捻ってみるとなんか背中付近で浮いている。

形状は邪神様のように鋭角ではなく、鳥の翼に近いだろう。

目も額の中心に確かにある。

邪神様のように眼力を感じるものはない。

これ、ただの落書きだよな。眼の形にただ瞳を塗りつぶしてあるだけ。

顔の刻印もでたらめだ。邪神様のように幾何学的ではなく子供の落書きのようなくちやくちやな線である。くそっ、こすっても消えねえ！

『顔はともかく、背中 of 翼はすごいね。動かせないの？』

そもそも体にくっついてるわけじゃないからな。

なんかプカプカ浮いてるだけだし。鏡を見て初めて気づいたくらいだぞ。

『ちよつと背中付近に力入れてみて』

言われたとおりに力を入れてみる。

むっ。

『ダメだね。もっと入れて！』

むんっ。

『まだ足りない』

むんっ！

音が響いた。

『何で屁をこくの！ 力を入れるのは背中！ 尻じゃないから！』

わかっているからもう喋るな。私も恥ずかしいのだ。

けつきよく背中の翼は動かせなかった。

『スキュード・ラーニングの効果だね。ただ異世界転移させるだけでなく、自分の仲間として転移させた』

仲間っていうより眷族じゃないのか、これ。

私もこんなのがいきなり現れたら、そりゃ剣構えるよ。

『見た目だけじゃないんだ。アイテム結晶だったり、その現れ方に邪神様専用のエフェクトがかかっている。たぶん他にもいろいろあると思う』

なんか楽しそうだな。

私はまったく楽しくないんだが。

で、解除は？

『できないね。元の世界に戻るまではそのままでしよう。見た目を變えて楽しめる！　ってやつだね』

クソじゃねえか。

『俺の世界でもこういうのはあった。「異世界転生したら邪神だったんだが〜」ってね。恐ろしい力と両者の勘違いによって話は進んで行く』

恐ろしい力と言うが邪神っばいだけでしょ。

『隠し効果がないとは言いい切れない』

別にいらぬ。もういいや。

それで、これからどうしようか？

『明日には来るって話してたね』

そう言えば、なんか四英雄の一人とかが来るって言ってたな。

明日までここで待つのか？　退屈だぞ。

『じゃあ、こっちから会いに行く？』

会いに行くって言われてもな。場所も知らんぞ。

……わかるの？

『さっきの監督官の部屋に地図が貼られてたからね』

抜け目がない奴だ。

だが、良い提案ではある。こんなところはおさらばするとしよう。

ところで、誰に会いに行くんだっけ？

『聖杖って言ってたからね、無垢なる聖杖——コラリイたん！』

こいつ、絶対自分が会いたいだけだろうな……。

『そんなことないよお。四英雄とやらが、例の四人なのか確認する必要があるんだよお』

部屋から出て、城壁に移動した。

外側から昇るのは難しそうだが、内側からは簡単に上がることができる。おそらくこの城壁の上から、弓なり術技とやらで寄ってきたモンズ

ターを倒すのだろう。

城壁から飛び降りてシユウの示す方向へ向かった。

草は生えていないが整備されているとも言いつらい道を歩いて行く。

途中で襲いかかって来たモンスターを倒していく。

魔のモノと呼ばれてたが、モンスターときほど変わらないよな。

でも、出てくる数はけっこう多いから、一般人が道を歩くのは危険そうだな。

『モンスターとほぼ同じだね。魔晶つてのがあつたらしいけど、俺で倒すとそれごと消しちゃうからね。逆に言うとな、魔晶が残らないつて事は完全に生物と融合してるね』

ふーん、その魔晶とやらが解析できないんだっけ？

『そうそう。魔晶だけをきれいに取るだすのは難しいだろうなあ。教会の地下にあつたのも、よくあれだけ集めたもんだと感心するよ』

全部、邪神様が焼いちやつたようだがな。

『もつたいたい。解析は無理でも、実験を続ければ上手く使える方法も見つかりそうだけど』

魔のモノにする人体実験をか？

『そうだね。表沙汰にはできないけど、病気で救えない人や体に欠損がある人には希望になるかもしれない』

ううむ……。

そんな話をしていると、日も暮れてきた。

どうやら月が三つもある世界のように、夜でもそこそこ明るい。

ステルスで隠れつつ、木にもたれうつらうつらしていると背中に振動を感じた。

『ふんふん。馬代わりの生物と魔のモノだね』

馬代わりの生物ということは、それに人が乗っているということだ。

この世界にも馬はいたが、他にも幅広のトカゲや同じく縦長のトカゲに乗っているのが多かった。

幅広なら大人数が乗れるし、縦長だと馬よりもすばしっこく小回りが利く。それにジャンプもしていたから、高いところを斬るにも良さそうだ。

『囲まれちゃってる』

暗闇を白い光が切り裂いた。

魔のモノと思われる断末魔が響く。

『おっ、この光！』

交戦を知らせる音はまだ鳴り止まない。

行くとするか。

交戦の方へ近づくと魔のモノがたくさんいた。

どうも囲んでいる得物の方を見ていて私には気づいていない。

そいつらを背後から刺していく。感染でサクサクと消えていきあつという間に片付いた。

「コラリイ様……、魔のモノの気配が消えているように思えます」

男の声だった。

当然、聞いたことのない声である。

『うん、全部倒したね』

そうか、じゃあ話をしてみるか。

『ちよい待った！ 今の自分の姿を忘れたの？ そんな格好で出て行ったら誤解は必須だよ。面白い格好した危ない女だよ』

………違うない。

進みかけた足を止めた。

それどころか後ろに下がるまである。

「誰かいるのですか？」

女性の声だ。

今度は聞き覚えのある声。

ああ。いる。

囲んでいた奴らは全て倒した。

木の影から暗闇に紛れて告げる。

「出てきていただけじゃないでしょうか？」

悪いが、あまり人に見せられる顔をしていない。

『ほんとにね』

ねー。ほんと困る。

で、何を話せばいいんだ？

『確認できたからもういいや。次に行こう』

なんだそりゃ。

とにかく、私からお前らに危害を加えるつもりはない。

私はお前たちを気にしないし、お前たちも私を気にする必要はない。

それに、どうも急いでいる様子だ。さっさと行くといい。

ここから先のモンスター、魔のモノか——はだいたい私が倒した。

「……お名前を聞かせていただいても？」

メルだ。

「それではメル様、お言葉に甘えて先に進ませていただきます。あなたの進む道に神のご加護がありますように」

神の加護はもう間に合ってる。

『ちよつとだけ邪神様の話に触れてみて。「四英雄に会えて光栄だ」くらいでいいから』

四英雄に会えるとは運がよかった。

「英雄……、そうではないかもしれませんが」

そう残して、コラリイ一行は走り去ってしまった。

何がわかるんだ？

『ふむ。復活したと聞いて慌ててるくらいかな』

それは私にもわかる。

『逆に言うと、倒した記憶があるってことでもある』

それはわからん。

それよりどうするんだ。

会う予定の人間とすれ違ってしまったぞ。

『次に行こう。メカ女は後回しとして、まずケオンだね』

剣持ってる奴だっけ？

『禿げてるやつ』

ああ、そつちか。おしかつたな。

『二択で外して、おいしいとは言わない』

場所はわかるの？

『砦の地図に「精霊の森」ってのがあった。ちよつと走れば明日には着くくらいじゃないかな』

じゃあ、そつちに行くとしよう。

精霊の森まであと少しというところまで迫った。

シユウの予想よりも、距離があつたのか、歩みが遅かつたのかはわからない。

小さな村をいくつか超えて、風景も何度か変わった。

異世界の割にはさほど私の世界と変わっている様子はない。

『いやいやいや。なに言つてんの。生物も生活様式もまるで違つてたでしょ』

そうだったか？

『ダンジョンとモンスター以外の景色は全部同じに見えるんじゃない？』

それはある。

鳥とか木とか花は、よほど特徴がないと同じに見えるな。

言われてみればなんか違うけど、どう違うのかが上手く説明ができないというか。

『アイドルグループに興味がない人がメンバーの顔が見分けつかないようなもんだね……。これだから素人は駄目だ』

ひどい言われようだ。

『もつとよく見て。右にある葉っぱが茶色で、しかもギザギザしてる木』

右を見てみると確かにそんな木があつた。

『この木は元の世界にはない。今見てる葉っぱのもうちよい右あたりに、鳥がこつちを見てる。青くて嘴がやや長いやつ』

……。ああ、あれか。

確かに特徴に一致したやつがこちらを見ている。

『あれも元の世界にはいない。木の幹から虫を捕るために嘴が長く

なつたと推測できる』

ほー。

『前に壁が見えてきたね。何が観察できる?』

本当だ。

観察できることねえ。

でかいし長い。

それになんか蔦が張ってるな。

ところどころボロが来ていて、廃れた様子が窺える。

『大きさはメル姐さんの身長で約十人分。長さは不明だけど見える範囲で左右に伸びてる。絡まっている蔦も、元の世界にはない。小さく棘が生えていて毒もありそうだね。門の素材もただの石じゃない。おそらく魔力を通しづらい素材で出来てる』

ふーん。

そんなにいろいろ見て疲れなだらうか。

近づくと、壁の下に小さな門があり、人が大きめの石に腰掛けていた。

あれはどう見る?

『ケオンだね』

でも、禿げてないぞ。

髪が生えてる。

『前は剃ってただけでしょ。やる気は感じられない』

おいおい。それは困る。

髪を伸ばしたら、私はどうやってこいつを他の奴と区別すればいいのだ。

『……数珠とか』

私の影が触れる距離になり、ようやくケオンは下げている顔を上げた。

ステルスで姿を消していないため、ケオンは私の姿を見た。

初めは伏し目がちだった眼が、徐々に開かれ、私を凝視する。

眼が開かれれば、視線を私から逸らすことなく、石から立ち上がり、手に数珠を構えた。

このままでは戦闘になってしまいうだろう。私はそれでも構わないが、なるべく楽に話を進めたい。

そこでシユウウから授かった魔法の言葉を唱えることにした。まあ待て。見ての通りだ。

私は怪しいものではありません。

背中には烏みたいな羽が四枚。額の中心には目の落書き。顔にはへんてこな模様。

そんな姿の自分が言っておいてあれだが、そりやねえだろと思う。攻撃が来るかと覚悟していたが効果はあつた。

ケオンは口を開いて何かを言おうとしたようだが、また口を閉じてしまった。

眼もまぶたを痙攣させるように、開閉を繰り返した。

手はやや上がり、下がりを続ける。

混乱ここに極まれりだ。

彼の様子を無視して、近くの石に移動し、そのまま腰掛ける。

私に対して構えているケオンに対して、彼が座っていた椅子に座るよう手で示した。

彼は座らず、私に構えたままだ。

『今！』

「お——」

おまえは何者だ、と聞きたいのだろう。

まあ座れ。

ケオンの出端をくじいた。

言いあぐねた彼に再度、座るよう示す。

眼を逸らすことなくケオンはゆっくりと石に腰をかけた。

まず、言っておく。

私はお前の知ってる邪神様じゃない。

お前は邪神様を倒したときのことを覚えているか？

どうやって奴を追い詰めたか、誰が最後にトドメを刺したか。あと

……

『その死体をどう処理したか』

そうだった。

死体をどうしたのか。

お前は本当に覚えているか？

眉がぴくりと動いた。

しかし、何も言うことなくこちらを睨んでる。

どうなのこれ？

『覚えてない。大収穫だ。こいつは一度記憶を力尽くで戻されてるから、耐性がちよつとついてたんだろうね。記憶にちよつとでも違和感を覚えててればマシくらいだったけどラッキーだ』

ふむ。

記憶に違和感があるようだな。

「貴様は何だ？ 何を知っている？」

邪神様の知り合いといったところだ。

私の知っている事をお前に話そう。

ケオンは大人しく説明を聞いた。

ちなみに説明をしたのは私ではなくシユウである。

パーティー登録せず、シユウをくつつけての話となった。

探している転移を使える精霊人のことも伝える。

異世界から来たことはぼかしているな。

「貴女の身の上は理解した」

私が邪神様の封印を解く術を探していることをわかってくれた。

「儂の記憶が間違っていることも把握した」

ケオンの記憶も、邪神様と同じく決戦の最後で抜け落ちているらしい。

「転移の精霊人にも心当てがある」

おお。

それじゃあ、案内を――

「しかし、ここは通せんし、案内もできん」

ええ、なんで？

「かつての精霊王がやっていたことは、儂も臆気ながら思い出していたのだから精霊王は理に反しておった。しかし、かの邪神が全て

正しいとは思えん。あれから五年、落ち着いてきていた世界は、またしても動乱に包まれつつある」

そういえば、兵士と魔のモノで戦ってたな。

「やはりそうであるか。……それでも、かの邪神が起こした動乱と比べれば遙かに落ち着いたものなのだ」

今はそうかもしれないな。

「いつかは精霊界にも火種が及ぶかもしれない。だが、それは今ではない。精霊界は、未だかの邪神が付けた傷が癒えておらぬ。立ち直れるまでは、まだ少しばかりの時を必要とする」

『傷ねえ』とシユウは呟いた。それ以上は何も言わない。

「ここまで来て、話もしてくださって、まことすまんことである。——どうか今日は退いてもらえんか？ 儂もまだ咀嚼した話が、臍腑に浸みっておらんだ……」

どうするの？

『退こう。無理に突っ込むと戦火はまぬがれない』

『感謝する』

『ただ、ちょっと聞きたいことがあるんだよね』

「かまわん、聞いてくれ。答えられる範囲で答えよう」

『転移の力は、どれくらい飛ばせるの？ 距離ね』

「儂の知っている限りでは、他人を飛ばすのはここからエドマス村が手一杯と聞く」

どれくらいなのか全然わからんな。

『あそこらへんね。ありがとさん。ついでにこれも教えて。ここからアハティスの弟子とソレアはどつちが近い？ 行き方も教えてくれると助かる』

ケオンは、彼が知っている範囲で彼らの居場所とその行き方を教えてくれた。

次は、聖賢の都アハティーンにいるであろうアハティスの弟子の元を目指すこととなった。

そこには、光り輝く剣を持つ男——プラティナもいるようである。

2. げげっ！ 邪神様！

探し人は聖賢の都アハティーンにいるらしい。

アハティーンはアハティスから取られているようで、元は違う名前らしい。

アハティスは人間社会で神格化されているようだ。

世界に混沌をもたらした邪神を討伐するため、四人の英雄を導き、本人は戦いの最中で命を散らした英雄達の師。

確かにそこだけ聞けば、すごい人物のように聞こえる。

だが、私は真実を知っている。

『いや、それはどうだろうか』

どうだろうかとは？

アハティスは例の四人を操って邪神様を倒そうとしたんだろ。

それに、教会の件や精霊王の件にも間違いなく絡んでるとお前は言っただじやないか。

『言った。でも、それは最終的な目的じゃない。教会の件、精霊王の件にもアハティスは関わっていただろう。加えて、四人の記憶をいじって邪神様も倒させようとしただろう。でも、邪神様を倒すのが目的じゃなくて、彼本来の目的の邪魔になるから邪神様を倒したかったはずなんだ。いったい彼は何がしたかったんだらう』

……そんな難しいことを言われてもわからん。

『教会の件、魔のモノを体に埋め込む話——これは、前にも言ったけど治療の手段とみることができる。教会の地下にいたのは、確かに元から重病人で助かりようがない人だった』

言っただな。

それじゃあ、精霊王の件は？

お前は殺されても仕方ないって話してなかったか。

『世界の均衡とやらを目指す邪神様の視点に立てば、という話だよ。例えば、精霊王は蓄えていた魔力を、自らと水晶に一時的に留めることで世界の魔力の流れをよりバランスが取れるように制御していたのかもしれない』

そうなの？

『作為的ではあるし、秘密的でもあるけど、そういう可能性もわずかにある。そう考えていくと、もしかしたらコアの普及もアハティスだったのかもしれない』

暴走するコアのことか？

あんなの広げちゃ駄目だろ。

『でも実際、機械女はそれを基に上手く使って、自らの不自由な足で立って歩いてた。暴走する危険性はあるけど、適切に利用すれば人々に恩恵をもたらすことは間違いない』

そうかもしれんが……。

『最初に邪神様の視点で見たから受け入れづらいのはわかる。邪神様から見ればアハティスは敵だ。でも、人間の視点、かつ長い目をもつて見れば、アハティスは人間をより不自由のない暮らしに導こうとしていたのかもしれない。それなら彼は賢者に違いない。だいたい善悪なんて立ち位置でころころ変わる。その程度のもんだよ。ただ、善悪関係なくアハティスには疑問が残る』

邪神様を封印した奴らのことか？

『それは彼の死後だから違う。コアの入手法、魔のモノの魔晶とその抜き取り方、精霊王との関係。現状はこのへんだね』

そう言えばそうだったな。

『あるいは全ての疑問が一つに繋がるのか……』

シウウは何か考え始め、黙ってしまった。

聖賢の都アハティーンにたどり着いたが、完全に警戒モードだ。

私の情報がすでに回ってきているらしい。

『そりゃそうだ。外であれだけ走り回ればすぐに噂になる』

ステルスだと、歩幅拡張といった便利スキルが使えなくて遅くなる。

外したときに通行中の人と、この姿ですれ違ったりしたからな。

『厳戒態勢ですなあ』

都の周囲の外壁には等間隔に見張りが立っているし、門での通行も兵士達の目が光っている。

ステルスで入れるのであまり意味はないのだが、中の警備も相当だろうので、探し回るのが今からすでに億劫である。

『これだけ守つてれば、フリソスとかいう弟子がいることは確かだ。正面突破でいこう』

そんなわけで門から堂々と入ることになった。

姿を見せると、門が大急ぎで閉じられるようにした。

そこにダッシュで走り込み、都市の中に入る。

後ろでの騒ぎを無視して、民家の屋根に登った。

上から見てみると、けっこう複雑な作りだ。

『防衛対策でしょう。袋小路が多い。意図的に道もずらしてあるし。建造物も斜めに建てられてる』

おつ、あの高い建物じゃないか。

いかにも偉そうな人がいますって感じた。

『あの塔は罠だよ。攻めやすいけど、うっかり忍び込んだら、後から守りにくい。すぐに取り囲まれる。……うん、でも目立つからあそこでいつか。遠くも見やすいし。毒を食らわば皿までだ』

そんなわけで塔の最上階にやってきた。

穴が空いているだけの窓から外を見れば、距離を置いて周囲は完全に包囲されていた。

『まだ来てないな』

この塔が罠というのは本当らしい。ここで見張りをしていた兵士はほんのわずかだった。

邪魔なので、「今からここを占拠するから偉い人連れてきて」と伝言を頼み、塔からおりてもらった。

残りの一人は人質として残ってもらっている。睡眠を付与したので意識はない。

『あつ、来た』

どれどれと外を見れば、すぐにわかった。きちんと伝えてくれたらしい。

囲んでいる兵士の中から、よく目立つ輝く剣を持った男が出てき

た。プラティナである。

『そりやまあ、本命は出てこないよな』

予定通りどうでも良い方が来て、本命の弟子はどこかで様子見らしい。

プラティナは、降りてきて戦えとか叫んでる。

『人質を見せて、時間をもうちよつと稼いで』

意識のない兵士の腕を掴んで窓からぶら下げる。

『支えてるのは左腕だ。利き腕じゃないんだぜ！』

なんだかノリノリであるが、利き腕である。

万が一にも落としたらいかんので、ちゃんと利き腕で持っている。

下でその様子を見ていたプラティナも足を止めた。地団駄を踏んで悔しがる。

あの様子では突入してくるのではないだろうか。

『もうちよつと様子見して、一気に来ると思う。狙うのはその直前。』

その様子を弟子も見るとどうからね』

はいはい。

じゃあ、今のうちにご飯食べとこう。

『走るから食べ過ぎないようにね』

はい。

ご飯も食べて、少し眠くなってきた。

『来るね』

やれやれ、タイミングが悪いな。

もうちよつとで眠れたのに。

『じゃあ、やっていこう』

窓の下から顔を出すと、ちょうど兵士達が塔に向かって走ってくるところだった。

そこに向かって剣を向ける。

『ゲロゴーンブレース！』

シユウと一緒に叫ぶ。

見慣れた赤い帯が兵士達に向かい、地面に大穴を開けた。

そこにいた兵士は黒の結晶となって消えた。

これを四方向で繰り返した。

プラティナも消滅した。

作戦も中止になったようで兵士達が距離を取った。

これなら犠牲は兵士達だけで済み、ほっとけば復活する。

それに塔の周辺に民家はない。建物への被害も最小限で済むだろう。

『さて、ここからが問題だ。おそらく、あの一番遠い門だと思っただけど……しばらく俺は出しっぱなしにして』

はいはい。

探している弟子は、先ほどの攻撃を見て逃げるとシユウは踏んでいる。

問題はどこから逃げるかだったが、どうもそこが難しいところのようだ。

『三方で門が開いたな』

三方向？

弟子はどの方向に逃げるんだ。

『聞いたところだと、フリソスとかいう弟子はかなりの術技を使えると聞く。そうすると魔力反応は他より大きくなる。ふむふむ、なかなかずる賢い男だ。三方向とも魔力反応が弱い。要人を囚として逃がしたな。……これだ。城外の林の中に魔力反応が出てきた。隠し通路で逃げたようだね』

どこだ？

『左の赤い屋根が二つ続いているところの延長方向。魔力反応を見せるね』

そちらを見ると、見える景色が変わった。

青の濃淡で木々が描かれ、その中に赤い点がぽつりあって動いている。

『直線じゃなくて、左の門を目指して屋根を渡って、城外に出てからは道伝いにある程度走ってから森に突っ込むのがいい。それじゃあ、まずは塔を降りよう。セットしたから外壁で行ける』

斜面とかを降りるときに使ってるスキルだろう。

傾きを感じられなくなつてスムーズに降りることができる。

垂直な壁でも歩けるし、天井も歩くことができるというすごいスキルである。

すごいのは確かなのだが、好きじゃない。視界がぐるぐるして、どこをどう歩いてるのかわからなくなつて気持ち悪い。

特に垂直方面から普通の地面に移り変わるときが、体の感覚と頭の感覚との不一致がひどい。

文句を言いつつも塔の外壁を走り降りる。

地面に降りた後は、左の方にあつた門へと向かう。

屋根を渡り、城外に出て道を走る。先に逃げていた囿の馬車（馬ではないが）を抜き、シユウの合図で林へ入る。

『いたいた』

木の中を走つて行き、ようやく目的の弟子を見つけた。

アハティスとどこか似た雰囲気の子だった。

あちらもこちらに気づき、その手に金槌のようなものを取り出す。

『吸収力抑えるから腕を斬り落として。倒すと復活まで時間がかかる』

あいよ！

男が何かをしようとするよりもなお速く近づき、すれ違いざまに腕を斬り落とした。

勢いを殺して振り返ると、ちょうど腕が地面に落ちたところだった。

腕とそこから吹き出る血を見て、男が悲鳴をあげる。

『ん！ 離れてっ！』

周囲に突如白っぽい光が出てきた。シユウの声に従い、地面を蹴つて男から距離を取る。

光がくつきりと浮き出て、次の瞬間には周囲の木々と男が消え去つた。

『おいおい……、転移とか使っちゃうのか。次は時空間耐性を切つて、一緒に運んでもらおう。——やれやれ、門番の思いは、その中に暮ら

す奴は知ったことじゃないか。やられるのは嫌だけど、やるのは良いと。良い度胸じゃないかあ。次に行くときはそっちのやり方に応えてやろう』

何が起こったのかと尋ねるよりも先に、シユウが呆れと怒りを混ぜて答えてくれた。

あれが転移なのか。すごいな辺り一帯が丸ごと消えてるぞ。

文字通り丸だった。地面から球形に抉られている。

『魔法じゃここまでできないよ』

そうだよな。魔法でここまで使う奴を見たことがない。

術技ってすごいんだな。

『術技でもできない』

えっ、じゃあどうやってるんだ。

『両方を使ってる。飛ばす位置と飛ばされる位置の座標設定を魔法に、実際に飛ばす機構を術技にやらせてる。さらに何かバグアイテムを使って強化してるね。それでも連発はきついだろう。そこそ近くにいるだろうから、ここから無理矢理追いかけてもいいけど——』
いや、やめよう。

おもしろいものも見られたし、そっちの方はなんか萎えた。

『まあね。精霊人が自ら、弟子との関係を認めて、問題分子を一カ所に固めてくれたと考えよう。これなら後からまとめ一発で叩けるね』
それがいい。

ぶちぶち潰すよりも、ばちーンといこう。

『最後の機械女のところに行こうか』

そうしよう。

『絶対に話が通じないだろうなあ』

なんかそんな雰囲気だったな。

四人のうちの最後になる機械女へと向かう。

名前はソレア。今は着ていた機械とやらの改良をしているのとこのと。

良く出来てたな。

なんか礫もぴゅんぴゅん飛ばしてたし。

『あれは技術と術技の複合体だったね』

よくわからんけど、たぶん褒めている。

それにしても、この世界の解析がおかしくなるアイテムはすごいのが多いなあ。

『いや、あの機械は解析できるよ。コアはできないけど』

どれも強そうじゃないか？

『強くはない。メル姐さんのアイテム袋に入れてる武具の方がよほど強い』

そうなのかどいつもこいつもすごそうだったぞ。

『もつと言おうか。まず、プラティナとそいつの使ってる輝く剣』

すごいよな。

光る剣なんてあまり見たことがない。

それにあいつもなんかすごい剣術を使ってるんだろ。

『剣術は三流だよ。勢いに任せて振ってるだけ。あの剣も光ってるけど、属性が付与されてるわけじゃない。本当にただ光ってるだけ。暗い所で使えば明かりにはなる。的にもなるけどね』

……えつ、本当に？

光属性が付与されてるんじゃないの？

『解析はできないけど、間違いなく光属性はついてない。でも、邪神様がスキュード・ラーニングした黒い剣は透過属性が付与されてる』

なにそれ。

『防げない。鎧とか剣の防御をすり抜けて攻撃できる』

強すぎじゃないか。

『そうでもない。不便なこともある。邪神様は身体能力がそこまで高くないから、近くで格上の力量の剣士と戦ったら剣で防げない。相手の剣が透過して邪神様を斬るからね』

でも、近づくのが難しそうだ。

『あの剣をスキュードラーニングで得たってことは、逆に言うとプラティナの光る剣は不透過属性があるんだろうね。透過属性を防ぐ力がある、無駄にピカピカ光る剣。それが彼の持っている剣の正体で

しよう』

それだけなのか。

コラリイは？

なんか空から光が射して、邪神様を攻撃してたよな。

治療術とお前は言ってたが、あれは光魔法じゃないのか。

『治療術だよ。ああいう殺菌系の治療術を強めていくとね。ああやって、過度な治療による攻撃になるんだよ。霊とかアンデッド、あと魔のモノもかな——には効果が絶大。彼らの存在基盤そのものを否定する作用があるからね』

邪神様にもすごい効果がありそうだな。

『効かない』

えっ？

『見てたでしょ。せいぜい体表を軽く炙るくらい。教会で喰らっても平然としたでしょ。邪神様には霊とか魔のモノといった属性はない。もしもあつたら消滅してる』

じゃあ、邪神様のあの暗闇はなんなの。

『眩しいのが嫌だったんじゃないかな。電磁波を吸収する技をスキュード・ラーニングしたね。強くしていくと、電磁波を出す物質まで吸収するっていう頭のおかしい技になってる』

機械の女は？

『あれはサポートとしてはなかなか強い。機械も頑丈だから並みの攻撃じゃスーツはびくともしない。でも、致命的な欠点がある』

欠点ってなんだ？

『操縦者の腕がゴミカス。乗る意味がない。一流の技術者であることエンジニアは認めるけど、なんで操縦者なのかさっぱりわからん。本来はコアがアシストするんだらうけど、それが無いからただの粗大ゴミ。あれなら石を投げるか体当たりしてた方がまだマシ。あの場を一番引つかき回してた戦犯』

ボロクソじゃないか。

ちなみに邪神様がラーニングしたのはなんだ？

同じに見えたぞ。

『見た目はほぼ同じだけど、銃身よりも弾頭の種類に力を入れてる。ほとんど使ってないけどね。銃身の性能も元より大幅にアップしてるよ。ゴミカスが乱射してた弾を全部撃ち落としてたでしょ。あり得ない性能。あいつがフレンドリーファイアしてた弾もきちんと撃ち落としてくれた。あいつはただの仲間殺し未遂者だ』

なんで怒ってるんだ。

……じゃあ、最後の禿は何？

いろんな種類の魔法を使ってたか。

あれも術技なんだろ。どういった術技なんだ？

『いや、あれは魔法であってる。術技が主の世界で、魔法を使うと精霊術なんて呼ばれるんだね。禿の術技は魔力の増大。あの数珠が魔法に変換してる。威力は弱いけど、二元の世界に持って帰ったらヤバイ値がつくぞお。弱いけど無詠唱で使えるから、戦闘の幅が広がる』

すごい嬉しそう……。

じゃあ、邪神様が習得したのは？

『そのまんま魔法。種類は少ないけどね。ただし、アイテムからじゃなくて、自身で発生させる純粋な魔法だよ。腕の水晶で無詠唱・高倍率に変換して発動させてる』

なんだろう。

騙された気分だ。

『見た目は派手だからわからんでもない。でも、本当に弱いよ。彼らとパーティーを組んでもメリットがない。今後のアプローチを変える必要があるそうだなあ』

ひとまず機械女に会ってからにしよう。

戦闘力を当てにしているわけでもないだろ。

『その通り、期待するのは技術力とそのコアだ。コアは修復できれば何か話が聞けるかもしれない』

そうして機械女の住む町にやって来た。

どうもあの女の使っていた機械が発達している町らしい。

あちらこちらでガンガンやらギューイーンと金属的な音がしてい

る。

偏屈な奴らが住む町と聞いていたが、その中でもあの機械女は特に変人らしい。

町外れの工場で、一人何か変なモノを作っていると聞いた。

私からすると全部変なモノなのだが……。

町の中心を離れ、家や工場が徐々に少なくなっていく。

進んで行くと、やや大きめの工場がぼつりと建っているのが見えてきた。

近づくとも中から、町の中で聞いたような音が聞こえる。

大きな扉に隙間が開いていたので、中を覗き見ると例の女がいた。

記憶の中で見たときよりも髪が伸びたのか、後ろで髪を束ねているようだ。

『俺はね。ゲームやら漫画とかで、時間経過を表すのに、とりあえず髪を伸ばしとけばいいやっというのが嫌いなんだ。もつと違う部分で表現すべきだと思う』

すごいどうでもいいから黙つといて。

ここまで来たのはいいが、この後はどうするんだ。

『正面からお邪魔してコアの在処を聞く。足の機械を潰せば身動きは取れないからね』

それ……、絶対憎まれるよね。

邪神様と同じじゃないの。

『こっちの事情をだらだら述べても無駄。絶対にあの手は話を聞かないから。それなら、あのとき邪神様がしなかったことをすればいい』
よくわからんけど、とにかくコアの在処を聞けばいいんだな。

『イクザクトリイ』

扉の隙間に手をかけて横にスライドする。

日光と風が工場に入り、小さい埃が空気中に舞い、きらきらと光っている。

「声を掛けてから開けろー」

こちらを怒鳴り付けて来た女と目が合った。

イラつきの睨みが、一瞬見開かれ、血走ったものに変わっていく。

「テ、テメエは……生きてやがったのかあ！」

機械の足で立ち上がり、近くのよくわからん筒みたいなのに手を伸ばす。

彼女が機械の筒を手にとって振り向く頃には、すでに私は彼女の背後についていた。

シユウで手に取っていた機械を叩き落とし、そのまま足を横に払って転ばせる。

『ちよいちよい！ 強く蹴りすぎ！ 機械どころか足まで折れる！』
おっと。

頑丈そうだから強くしてしまった。

機械女は地面に呻き声を上げて倒れてしまっている。

『俺を目の近くに突きつけてから、コアの在処を聞いて』

コアはどこだ？

そう尋ねてみても私を睨むだけで何も喋らない。

『ちよつと俺を触れさせて』

頬にシユウをくつつける。

彼女の睨みはますます強くなるばかりだった。

『コングロメレートを直したくないの？』

彼女の瞳が揺れた。

気持ち悪い声に驚いたのもあるだろうし、その内容についても動揺があつただろう。

『どこにある？ ……なるほど、そっちね。メル姐さん、入口から見て右手奥を探してみよう。機械のアームは遠くに蹴つといて』

目の動きでその位置を読んだらしい。

機械女から手を離し、地面に転がっていた機械の筒を離れた場所に足で弾く。

「やめろ！ 行くなっ！」

他にも何か叫んでいるが無視する。

『ああ、ここかな』

奥の狭いところに棚があり、いろいろなモノが置かれていた。

『一番上の段の奥にある箱だね』

見てみると、他の汚い箱とは違い、汚れのない綺麗な箱があった。それを両手で下ろして、鍵をシユウで壊して中を開ける。

厚みのある柔らかな生地に包まれたコアが出てきた。

『やっぱり解析できないか。ちよつと穴のところにつけて』

コアの一部とその反対側に穴が空いていた。

これが記憶の中で見た邪神様に貫かれた穴というやつだろう。

私も中を覗いたが、小さな部品が乱雑に配置され意味不明な状態である。

『……なるほど。邪神様のラーニングはすごいね。的確に信管だけを貫いてる』

わかるの？

『それぞれの動く仕組みは不明だけど、役割はなんとなくわかる。パソコンみたいなもんだね。電源、CPU、グラボ、メモリの中で、明らかに不要な物体がついてる。ふざけた構造だ』

よくわからんけど、どうやって直すんだ？

私じゃ無理だぞ。

『メル姐さんにやらせたら壊しちゃうよ。ソレアにやってもらおう。記憶が弄られてるから面倒だな。仕方ないか』

振り返ると這いずりながらこちらへにじり寄ってきている。

『彼女の目の前にコングロメレートを置いて。おっとクツションを下に敷いてからね。その後で俺を彼女にくつつけて』

言われたとおりに彼女の前にクツションを置いて、その上にコングロメレートを置く。

彼女は罵詈雑言を私にぶつけつつ、コアを自分の方へ引き寄せた。

『今から、そいつの直し方を伝える』

「コングロメレートは死んだ！ お前が殺したんだ」

『そう思い込まされてるだけ。殺されたなら蘇らせればいいでしょ』
すげえこと言ってる。

『コアを抱いたままでもいいから、穴の中をよく見て。まず、一番手前に四角い箱がある。それが——』

シユウがソレアに構わず解説を始める。

「その役割はなんだ？」

『全体をまとめる基盤。ここには傷がついてない。配線を迂回させて――』

最初は何も返答しなかったソレアが口を開いた。

私でもわかる。

彼女の目の色が変わった。

食い入るように穴の中を覗き込んでいる。

「おい」

ぼんやりあくびをしていたら、ソレアが私に声をかけてきた。

「あたしとコングロメレートをあっちの椅子まで移せ。……………頼む」

はいはい。

言われたとおりに運んでやると、手によくわからない工具をもって作業を始めた。

シユウは反対側の穴からその様子を見ている。

『それは右の青い線とくつつける。そうそれ。緑の線は、そう、そこと繋げるから——うん、今は離しておく』

最初はシユウの言うとおりにしていたが、徐々にシユウの助言よりも手が動くのが先になった。

『すごいね。あれだけの解説で構造を完全に把握しちゃった。もう口を出すところがないや。むしろこつちが参考にしてしまうくらいだよ』

あつ、そう。

それで直りそうなの？

『直る』

言葉短く断言した。

しばらくすると、なにやらコアから音が聞こえた。

ガピガピ、ピガツピガと断続的に音が続く。

「お、はよ、うございます、ソレア。——髪の伸び具合から、今は最後の起動から五年が経過と推定」

無機質な声が響いた。

「先の言葉を訂正。お久しぶりです、ソレア」

「ああ、久しぶりだ」

コアを抱き、顔をうずめてソレアは告げた。

ソレアが落ち着いたところでようやく話ができた。

しかし、収穫はない。

彼女の記憶は曖昧なものであり、参考にならない

コングロメレートからも話を聞いていたが、こちらも当てに出来るものではなかった。

「あたしは邪神の復活には協力しないぞ。暴走を止めたんだと今ならわかるが、当時は何も説明がなかったからな」

返す言葉がない。

「記憶を弄ったのがアハティスの旦那ってんなら報復も考えるが、もう逝っちゃってるんじゃない」

ごもつともである。

そうすると残る手がかりはなんだろうか。

『姿を隠す魔のモノか、転移の精霊、記憶を消す弟子だね。結晶化は手掛かりがまるでない』

そうだな。

姿を隠す魔のモノはどこにいるのかわからんし、やはり精霊のところにいくべきか。

『精霊の転移はすごいんだけどね。世界を跨ぐほどじゃない。何かがおかしい。どこか歪んでる。全体像が見えてこない』

お前がわからんなら、私はもつとわからん。

どうするんだ、と聞こうとしたところで、扉から物音が聞こえた。

一匹の鳥が、隙間からこちらにほてほてと歩いて来る。

「また来やがったか」

ソレアが鳥の足に着いていた小さいモノを取ると、鳥はまた扉へと歩き、出て行った。

すごい賢い鳥だったな。

『そういう術技を使ってる。術技がなくてもできるけど、今は術技

だ』

どこで判断するの？

『今のメル姐さんを見て逃げ出すかどうか』
嫌な判断方法だ。

聞かなきゃ良かった。

「コラリイからだ。前にも来てたが、状況に変化があったらしい」
小さいモノは手紙だったようで、ソレアが広げて読んでいる。

『邪神復活確定。各地騒動有。注意。』

魔のモノ大挙、ガスク襲撃。苦戦。応援求む』

教会の連中は、いつも行動が遅いんだよな。もうガスクは落ちて
るんじゃないか？」

どうもコラリイは、世間から離れているソレアに手紙をたびたび
送ってきているらしい。

『おそらく、そこに姿を隠す魔のモノがいる。探してみるとしよう』
「教会の奴らはどうでもいいが、コラリイは心配だ。あたしも行く」
『不要だね。コングロメレートを載せるスーツの作成に注力して』
かなり優しく言ったが、この口調は足手まといだから要らないって
感じだ。

実際、移動するのに歩調が合わないだろう。

『おっと、そうだ。手紙を一通したためでもらおうかな』

こうして私はまた最初の要塞へと戻ることとなってしまった。

3. 邪神様どおうる

道程を急ぎつつ、ふと思う。

また、あの要塞かあ。

ぐるりと一周回ることになってしまうな。

『コラリイさんと、また、ちゅっちゅつでぐるね』

あーあ、ついにボケが始まった。

もしくは妄想に取り付かれてしまっているのだろう。

『右から来るよ』

どうもまた右から魔のモノが来るようだ。

急にマジメになるのはやめて欲しい。

『しかし、弱いねえ』

そうだな。

かすただけで消えてしまう。

この世界では強い奴にまだ会っていない。

もちろん見ていないだけで、本当は何人かいたのだろうか。

『いや、回った範囲だと本当にいない。邪神様が全部殺しちゃったんじゃないかな』

ひどい話だなあ。

転移使いは会ってないけど強いだろ。

あの範囲を一瞬で別の場所に移すくらいだし。

『技量はすごいけど、弱いよ。戦いにはならない。相手は転移で逃げただけだろうから厄介と言っちゃ厄介なんだけど』

じゃあ、あの転移させられた弟子は？

『カスだね。魔力は多いけど、あれじゃあどうしようもない。記憶は消せるだろうから、耐性がないと厄介だね』

姿を隠す魔のモノは強そうか？

『姿を隠す術技はね。その特性上どうしても保有魔力量を大きく出来ないんだ。ついでに魔のモノの強さは魔力の量に比例している。つまり、弱い。でも厄介ではある。探知するスキルがないからね』

厄介な奴ばかりじゃないか……。

封印結晶の奴にいたっては正体不明ときた。

そんなへんてこな奴らでも邪神様を封印できるんだな。

『できない』

……できないの？

しかし、実際に封印されてるわけだけど。

『そこがおかしい。あの転移は異世界に届くほどじゃない。記憶の消去も邪神様の記憶改竄耐性を貫くほどじゃない。姿を隠す術技も四人の魔力を隠すほどではおそらくない』

封印結晶は不明か。

あの封印された邪神様は、どう説明するんだ？

『そこだよ。現状では矛盾してる。まだ全容がわかってないんだ。仮説はいくつかあるけど、仮説にすぎないからね』

仮説でいいから聞かせて欲しいんだが。

『ノーコメント。まだ三つ、四つあるんでね。一つに絞られたら話そう』

あつそ。

おろ、何か前から来てないか。

『教会の奴らだね。逃げて来てるっぽい。道の端に隠れて、一番後ろの奴を捕まえて』

戦闘になつたら？

『逃げるのに必死みたいだから、一人減ったくらいじゃ気づかないよ』
シユウは笑って言うが、笑い事じゃないだろう。

『だいたいわかる。あの様子だと城が落とされたんでしようよ』

道の端に寄ってステルスをかけ、目の前を懸命に走る教徒とそれを乗せるトカゲを見送る。

一番後ろを走っていた、トカゲに乗る兵士を掴んで下ろす。

他の兵士は気づかず走って行き、乗っていたトカゲも走って行く。

むぐむぐと叫ぼうとする兵士の口を押さえて、道の端に引きずり込んだ。

どうも。

姿を見せて挨拶すると、兵士は口をパクパクさせた。

足はガクガクと震え、全身が揺れている。

『状況を教えるか、死ぬか選んでもらって』

もちろんただの脅しだ。

私はこの世界で殺すことができない。

『見殺しはできるよ』

それもそうだな。

兵士に尋ねると、断片的な情報を兵士は叫び始めた。

パニックになってしまっているようだ。

『うんうん。やっぱり砦が陥落したね。コラリイたんたちが一殿（しんがり）を務めたんだってさ』

でも、魔のモノは追いかけてきてるよな。

今もこつちに向かっけてきてるし。

『止められなかったんでしよう』

じゃあコラリイは死んだか。

『俺なら捕縛していろんなことに利用する。わっふるわっふる！』

とりあえず急ぐとするか。

こいつはどうする。

『約束は守ろう。無事に生き抜くために「風編みの絨毯」をあげればい

いよ』

あつたつけ。

道具袋を漁ると確かにあつた。

結晶化を解いて、出てきた薄っぺらな絨毯に兵士を乗せる。

達者でな。

ちゃんと掴まっておくんだぞ。

『さよならザコワン。良い旅を』

……無理だろうな。

あの絨毯は近くの町を察知して飛んでくれる。

しかし、その乗り心地は最悪だ。別名「ゲロ吐き紙」だからな。

ダンジョンから戻るときに便利だから使うこともあるのだが、私で

もあまり乗りたくない。

絨毯は私が来た方へ猛烈な勢いで飛んでいく。

兵士の叫び声が長くなるのを聞きながら、私は兵士が来た方へ歩を

進ませる。

迫ってくる魔のモノを一刀のもとに斬り伏せ、リッププを防ぐため

アイテムの回収はおこなわない。

『近くまでは全速力で、そこからは隠れて進もう』

隠れる意味は何なの？

『コラリイたんが生きて捕まったら、助け出すためだね』

なるほど。

……死んでたら？

『死体の前で、聖歌を合唱しよう。魔のモノの結晶を大量に添えてね』

悪くないな。

懐かしの砦にやってきた。

周囲はそこらかしこに魔のモノがうろついている。

門が開いているのはありがたい。閉じられていたらステルスを除しないといけなかった。

『おそろくいるね』

門を潜るとシユウが呟いた。

コラリイだな。

どこにいるんだ？

『いや、そっちはまだわからない。姿を隠す奴だよ』

どうしてわかるんだ？

『門にも外壁にも大きな損傷はなかった』

つまり？

『飛べる奴と他数体で、そいつらの姿を消して内側に忍び込んだ。門が開き魔のモノは一斉に攻める。裏の配置はわざと緩めておいたな。必死に抵抗されると被害も増えるだろうからね。逃げるように誘導し、道の端においた伏兵でちくちく殺していったんだ』

はあ、いろいろ考えるもんだ。

『うん、そこまで考える奴ならコラリイは殺さずに利用する。まだここにいるかどうかはわからんけど』

とりあえず探すとしよう。

探索すると、コラリイは地下にある檻に押し込められていた。

向かい側や他の檻には誰も入れられていない。

鉄の輪を両手両足に嵌められている。

服もぼろぼろだ。

『このまま眺めてるのもいいか』

良くないだろ。

地下への階段前に魔のモノはいたが、檻の周辺に魔のモノはいない。

『檻の錠だけ斬って中に入って。静かにね。入ったら俺をコラリイた

んにくつつけて。事情を説明する。手錠は斬らずにそのままです。それと——これが一番重要なんだけど、くつつけるのは胸でお願い』
一部を除いて了解した。

錠を斬って、音を立てないように格子扉を開けて中に入る。

コラリイはなんだろうとこちらを見ている。あちらからはいきなり扉が開いたように見えているだろう。

シユウを露出している腕の一部につける。

いきなりの感触に驚き、全身をびくりと震わせる。

手錠の鎖の音が牢に鳴り響いた。少し待ってみたが魔のモノが降りてくる気配はない。

『動かないで。驚くのはわかるけど、音を立てずそのまま聞いて欲しい。わかつたら頷いて』

とても落ち着いた声だ。

初対面の人間相手にはとても効果的だろう。

ただ、普段のパツパラパーな声に慣れていると気持ち悪くて仕方ない。

効果はあったようでコラリイが頷いた。

『声を交わすのは初めてだけど俺は君は知ってるんだ。ここに来る途中、メルという変なのに出会っただろ。俺は彼女の相棒をしている。生涯のパートナーさ。ああ、大丈夫。俺は多くの女性を受け入れる深い懐を持っている。コラリイちゃんも俺の相棒になってくれていいんだ』

冗談言っていないで早く本題に入れよ。

障害のパートナーとやら。障害は頭にあるのか？

私の声を聞いてコラリイは辺りを見渡した。

『ここに姿を隠す魔のモノがいるはずなんだよね。コラリイちゃんはそんな魔のモノを知ってる？』

コラリイは正面をジッと見つめる。

……私たち以外で頼む。

彼女は首を横に振った。

『あの杖は取り出せる？』

彼女はまたしても首を横に振る。

『取り出すには何が必要?』

「両手が自由になっていない必要がありません」

彼女は小声で伝える。

『悪いけど、今はまだそのまま我慢して欲しい。姿を隠す魔物をここにおびき出す。機を見て助け出すからそのままの状態です。いい』

コラリイはコクリと小さく頷いた。

捕まえて話を聞くんだな。

『そうだね。いちおう聞けど、言葉がネツクだ』

はいはい。

それでどうするんだ。

『反対側の檻から錠を取って、こつちに鍵をかける。斬ってしまった錠は回収』

ふむふむ。それで。

『入口の魔のモノを斬る。アイテムは回収しない。ただし鍵は持ったら回収』

うん、それで。

『反対側の檻にステルスそのまま待機。後は流れでなんとかしよう』
うんうん、それだけか？

肝心の部分を聞いてないと思うんだが。

『……コラリイさんの身に危険が及んだ場合は作戦を変更する』

それが聞けたのでよしとしよう。

言われたとおりに動いた。

コラリイがよく見える反対側の檻でステルスをかけて待機する。

しばらくすると上が騒がしくなった。

魔のモノが慌てた様子で檻の様子を見てきた。

そいつは奇しくも見覚えのある猪頭のやつだった。

コラリイを確認すると雄叫びを上げて牢から出て行った。

たぶんあの様子だと私を探しに行ったな。

その後は、他の魔のモノが降りてきた。

二体の魔のモノが並んで立ち、その後ろから突如として別の魔のモノが現れた。

おおっ、いきなり現れたぞ！

こいつだな！

『……違う、そいつじゃない。魔力量が多すぎる』

でも、音も足跡すらもなく現れたぞ。

『俺たちだって同じ事してるでしょ。こいつは戦える力を持つてる。姿を隠す術技を持った奴は戦えない。きつと臆病で卑怯者だ。こんなに堂々と姿を現さない』

真ん中の魔のモノが左右の二体に何か指示を出した。

二体は檻の鍵を壊し、そのまま中に入る。

……おい。

『まだまだよ』

二体はコラリイの手枷と足枷を壊し、彼女をそのまま檻の外に引きずり出す。

おい。

『まだ』

牢から出てきたコラリイが、私の方を見てきた。

その目は助けを求めているようで……。

行くぞ。

『待って』

コラリイの姿が牢から消え、足音も遠ざかっていく。

おい、何を待っているんだ。

行くからな。

『待って！・動かないで！』

意味がわからない。

何を怒鳴っているのか。

もう行こうと足を動かそうとしたときだ。

コラリイのいた檻に、突如、爬虫類が二足で立っているモンスターが現れた。

背中を向け、じろじろとコラリイの捕まっていた手錠を見ている。
『そいつだ！ そいつを——』

最後まで聞かなかった。

檻の扉を蹴り開き、そのまま突進するようにトカゲツぽいモンスターを突き刺す。

こちらに驚き、姿がうつすら消えていったが、いつさい構わずそのまま壁まで勢いで押し刺した。

『よっしゃ！ 「看破」スキルゲット！ コラリイたんを！』

出てきたアイテム結晶を無視して、そのまま牢を駆け上がる。

こちらを見返した偉そうなモンスターを切り捨て、二体のモンスターも容赦なく斬り伏せた。

コラリイは膝をついたまま私の姿を見る。

その表情は驚愕に満ちていた。

「あ、あなたは——」

『まず地下牢に戻ってアイテムを回収して。リポップを待たないといけない。話を聞くか消滅させれば、もうここに用はない』

コラリイと地下に戻り、まずソレアからの手紙を渡した。

それを読み、コラリイは戸惑いつつも私の話を聞いてくれる姿勢になった。

事情をシユウが説明していく。邪神様のこと、私のこと、教会の地下であったこと、先ほどのモンスターのこと。

「すみません。まだ状況が正しく飲み込めていないのです」

それはわかる。

こんな変な姿の奴の話マジメに聞けとはさすがに言えん。

「メル様、あなたには感謝をしています。一度ならず、二度までも救って頂きましたから」

『まあ、それを引き起こした元凶なんだけどね』

余計なこと言わない。

「先の魔のモノについても理解はしました。ただ、過去の邪神と教会の行い、賢者アハティスの振る舞い、それに最後の戦いの決着についてはまだ受け入れることができません」

別にそれでかまわん。

とりあえず、あのトカゲのモンスターが先だ。

『カメレオンだね。翻訳スキルがないからなあ』

地下牢で籠城し、カメレオンの復活を待った。

復活してすぐに姿を消したが、看破スキルであっさり捕まえられた。

しかし、やはりネットクは言葉だった。

『やむを得ん。消滅させようか……。生かしておいても面倒だ。事情は言葉が通じる奴から聞くとしよう』

コラリイが杖を構える。

杖を麻痺で倒れているカメレオンの胸に付け、何か呟いた。

カメレオンの体の中から光が満ち溢れ、皮膚を破るように体の外に光が漏れ出てくる。

まぶしさが収まるとカメレオンの姿は消え去っていた。

『おー！ おおっ！』

何？

どうかしたの？

「我だ」

聞き覚えのある低く物騒な声が牢に響く。

邪神様の声が聞こえたぞ。

どこからだ？

『腰を見て』

見下ろすとアイテム袋の横に何かくっついていてる。

腕が六本に翼が十二本、目が三つのぬいぐるみがくっついていた。

なにこれ？

『そうか。そういう仕組みか。あの封印結晶の楔がこいつらなんだ』

どういうこと？

『あの封印結晶は、さっきのカメレオン、それに精霊人、弟子、あともう一人の命で封印を維持してる。つまり、四人全員をこの世界から滅すると邪神様の封印が解ける』

おお！

目的がようやく明確になった気がするな！

……それでこのぬいぐるみは？

『邪神様の封印が緩まったから、体の一部をこっちに転移できたんだ！』

それがこのぬいぐるみか。

なんかできるの？

「フハハ、口がきけるではないか」

……それだけなの？

ぬいぐるみは何だか可愛らしいが、低い声と合っていない。

「懐かしい顔があるな。息災であったか？ 無垢なる聖杖——コラリイよ」

「その声、邪神ですな——」

コラリイがぬいぐるみを睨む。

なんか力の抜ける構図だ。

『微笑んじやうね』

いや、そこまでではないが……。

ひとまずここから出ようじゃないか。

目的も定まったし、話は後でもいいでしょ。

砦を脱して、隣にあるとかいうムルズを目指すことにした。

途中で猪頭と会ったが、私にこかされたところをコラリイの杖で光にされた。

私は一身上の都合で砦に入ることができないので、近くの林で話をするようになった。

とりあえず次の目的地は精霊の森だな。

道も以前に通ったことがあるから大丈夫だろう。

精霊人と、一緒にいるであろう弟子を殺せばいいわけだ。

いやあ、目的が明確だとすつきりするな。

『問題がある。大問題だ』

大問題——それは？

『誰がその二人を殺すの？ メル姐さんは殺せないし、少なくともコ

ラリイたんは殺さないよ』

見ると当然ですと頷いた。

「愚かな女よ……だが、それでよい」

何がそれで良いのかわからんが流しておく。

『おそろくソレアを連れてきても殺してくれないね』

ふむ。さっきのカメレオンと同様に、麻痺させて連れ出して現地の人にトドメを刺させるか。

『それを本当にやったら、メル姐さんが次の邪神に認定されること間違いない』

なにそれ、どうすりやいいのよ？

『邪神様がこの姿だからこそ出来ることもある。それを活用すれば良い』

それは？

『説得だよ』

どこかの優等生みたいな答えが返ってきた。

コラリイは魔のモノとの前線を維持するとかで、ついてこなかった。

私は邪神様人形と一緒に、以前と同じ道を通る。

「ほう、ここは過去に魔のモノの首を並べた場所よ」

ときどき思い出話も聞かせてくれる。

だいたいヤバイ話が多い。

そう言えば、今から向かう精霊界つてのはつまるところ何なの？

隔離された森に宮殿があつて、精霊人つてのがいるみたいだけど、エルフの森みたいなのこつて認識で良いの？

『エルフの森は、耳の長い種族が住んでるだけの変哲のない森。ちよつとダンジョンとか異世界の扉とかあるけど、それは別に、ダンジョンや異世界の扉があるからそこにエルフが住み着いた訳じゃない。他の森でも十分エルフの森になる可能性があった』

その言いようだと精霊界とやらは違うと。

『まず場所として、精霊界は魔力のスポットにあたる。こういうのは

霊脈、経脈、龍脈、エネルギー線……、それぞれの人が、それぞれ好き勝手に呼んでる。難しく考えず、魔力がたくさん集まる場所くらいに思ってくれればいい。外から見てもわかる人ならわかるほどの量があそこには流れてる』

ふーん。どうもこいつらはわかるようだ。

魔力が集まるのはわかったけど、精霊人ってのは何なんだ？

『全員かは知らんけど、魔力をその体内に取り込める力を持つてる人なんじゃないかな』

「然様。あ奴らは、自らに魔力を蓄えられる。また、魔力の解放も思うがまだまだ」

魔力を蓄えるってのは何となくわかるんだけど、解放ってのは何なんだ？

『魔法を使うこと。魔力の消費だね。場所や人、動物でも魔力を溜めすぎると良くないことが起きる。魔法をドピュドピュツと出して、溜まった魔力を消費するの。身近な例で説明すると下剤による便秘の解消みたいなもんだね、ぶつちつぱ』

例えがいちいち汚い。

あそこに魔力が溜まってたって、魔法で消してるのはわかった。

「あ奴らは魔力を糧としておる。精霊術を必要とはせん」

『へえ、魔法を使わなくても消費できるんだ』

邪神様がシユウの説明に、補足を加えていく。

別に精霊人じゃなくても普通の人が術技で消費しても良さそうなんだが。

『難しいだろうね。まず魔力を効率的に吸収できないし、術技は魔力の消費が魔法と比べて著しく少ない。正確には、魔力を変質させて術技を使うんだけど、使用後に逆変質で魔力に戻るんだ。正味の消費が恐ろしく少ない』

そこはよくわからんけど、要するに精霊人は住むべくしてここに住んだってことだな。

『そうなるね。魔力の溜まりすぎを解消する役割を担うことになるね』

「然様」

……精霊王はなんで粛正されたんだ？

魔力を溜めるのが精霊の役割なんだろ。別に悪くないでしょ。

『話、聞いてた？ 溜めるんじゃないかって、消費するのが役目なの』

でも、場所やら人ならまだしも、精霊人とやらの中に魔力を蓄えても別に問題ないんじゃないか？

『魔力はね。たくさんあるところに集まるの。消費せずに溜めていくと、周囲の生物の魔力も引き寄せられる。下手すると死ぬ。これは精霊人だろうと同じ。精霊王も見た感じ、魔力を抑える力はなかったからね。……ただ、前にも少し話したけど、あえて蓄えることで良くなることもあるにはある。長期的な視点と極めて慎重な取り扱いが必要になるけどね』

「いかにも。で、あるが故に我は精霊王を調停した」

精霊王に、長期的な視点と慎重な取り扱いが見られなかったということだろう。

それで調停と言う名の抹殺をおこなったらしい。

ついに見覚えのある門が視界に入った。

門の前には、前回同様に石に腰掛けた男が一人。

「メルカ」

顔を上げることもなく、近づいた私に声をかけた。

「久しいな、ケオンよ。門番の務めを果たしておるようだなによりだ」

呼ばれた男は顔を不気味なほどゆっくりと上げ私を見る。

私を見るな。こっちのぬいぐるみを見てくれ。

はい、邪神様人形。

「ビカリアの首をもらい受けに来た」

ぬいぐるみがぶつそうな事を喋る。

どうもビカリアとかいうのが転移の術者らしい。

ケオンは人形を見て、また私の顔を見る。そしてまた人形を見た。

気持ちはわかる。

これが今の、ありのままの邪神様だ。

「我の本質は見た目にあらず、その在り方によって示される」

よくもまあ、その姿でそこまで尊大であるものだ。感心する。それで、まあ、通してはくれないよな。

「通せん。その人形が邪神とあれば、なおのこと通すわけにはいかんですよねー。」

「ケオンよ。一つ問おう。そも、精霊界の門番とは何か？」

ケオンは何も答えず沈黙している。

「——こたえよ」

沈黙を許さぬ物言いであった。

見た目とは裏腹に、その声の凄まじいこと。

「……精霊人に危害を与える者の侵入を防ぐ。それこそが門番の使命。使命であった」

過去に邪神を通してしまったことを悔いている様子だった。

たぶん防いでも力尽くで通つただろうがな。

「未熟者め」

邪神様は吐き捨てた。

シユウも、はあ、と溜息を吐いている。

「メルにシユウよ——我が片腕らよ。行くぞ。このような不出来者に付き合う必要はない」

勝手に片腕扱いされてしまっていた。

六本も腕があるのに、まだ腕が欲しいのだろうか。

で、行って良いの？

『邪神様の考える精霊界の門番って何？』

「シユウよ、貴様はすでに……。……。ふん、ケオン。貴様は何だ？」

邪神様はしばしの沈黙の後に、問いを投げた。

漠然とした問いにケオンは悩んでいる様子であった。

『悩んでなんかないでしょ。「精霊人に危害を与える者の侵入を防ぐのが門番の使命」とケオンは言った。でも、過去にケオンは邪神様を通している』

そう言われるとそうだな。

あのときなぜ、お前は通したんだ？

邪神様を通したら、どうなるかくらいは判断できたら。

『本当は門番の役割に気づいてるよね。記憶を改竄されつつも邪神様を通したって事はそういうことだよ。きちんと思い出してるはずだし』

どういうことだよ？

『精霊界の門番は、精霊人を守る者じゃない。それなら最初から精霊人が門番をすればいい。近づく者に魔法を連発して人を遠ざけた方が確実——にもかかわらず門番を人間がやってるってことはだ。門番の役割は精霊人に肩入れすることじゃなく、「精霊界と人間界の均衡を守る」ことにある。一つに、精霊人が魔力を蓄えすぎたら消費してくれと頼む。もう一つに、精霊人の役割を人間が邪魔しそうなら、その通行を止める。この二つが門番の役割だ』

割とどうでもいいな。

『あるとき邪神様を通したのは、かつて魔力を溜めすぎた精霊王への警告だったんでしよう』

ぶつ殺しちやっただけだな。

「儂の罪だ。儂自身が精霊王に警告をせねばならなんだ。精霊王が死んだのは、儂の罪なのだ」

お前が警告しても精霊王は聞く耳持たなかったんじやないの？

『うん。死体が一つ増えただけだった。懸命な判断だと思おうよ』

「だが、それでも——儂が言わねばならなんだのだ……」

過去のことをうじうじ言っても仕方ないだろ。

それより今日と明日の事だ。

中にいる精霊人はどうなんだ？

魔力を蓄えすぎてないのか？

『あれほどの転移ができるんだよ。蓄えすぎに決まってる。普通の間がやったら一発で倒れる』

「奴は世の均衡を崩しておる。調停をせねばならん」

そろそろ私は行くが、お前は どうする？

止めても無駄だぞ。私を止めることはできん。

ここで後悔するか、付いてきて後悔するか、どっちだ？

『後悔を前提に、選択を迫るのはやめたげて』

ケオンは石からふらりと立ち上がった。

その顔は未だ迷いを断ち切れてはいない。

「儂も行く。警告は儂のやるべきことだ」

そう言う割に、門を押す腕はどうにも頼りない。

途中で腕を曲げ額を門につけ、考え込んでいる様子も見せた。

『乱数調整でもしてるのかな？』

門を潜ると、木に挟まれた道が続いている。

エルフの森と似た雰囲気なのだが、何かが違う。それが言葉にできずもどかしい。

『外からでもわかってたけど、魔力が満ちてるね。森が狂ってる』

森が狂う。

初めて聞く表現だった。

それはどういう状態のことを言うのだろうか。

『木も生きてるからね。魔力を持つんだ。本来のキャパ以上に魔力を吸うと、人間で言う薬でラリった状態になる。この森はそんな状態だ』

襲いかかって来たりするの。

『もう少し蓄えるとあり得る。むしろ、それができないから狂うんだ』
良くない状態のようだ。

「精霊人らは何をしておるのか。己らの領域すら管理できぬか」

邪神様もご立腹である。

道を進むと、街並みがあった。

人の姿が見え、あちらも私に気づいた。

驚いた様子でそれぞれの家に入り、扉を閉ざしていく。

『みんな解析がバグる。精霊人だね。正面の宮殿に一際大きい反応がある。そこにいるのが目的の人物だろうね』

無人と化した街並みを進み、ぼろぼろになった建物に足を踏み入れる。

宮殿の中に人はおらず、寂れた残骸を踏みつつ奥へと近づく。

見覚えのある場所だ。

邪神様が精霊王を斬りつけた部屋だろう。

奥の、背もたれのやたら長い椅子に女が座っている。

「ようこそ、妾の宮廷へ。邪神と、その眷族よ」

女が私たちを歓迎した。

余裕に満ちた表情に、妖艶な声だった。

予約もしていないが、遠慮なく邪魔させてもらう。

あと私は邪神様の眷族じゃない。

「むっ」

女の表情がぴくりと動いた。

どうかしたのだろうか。

『魅了が無効化されたんで焦りが見えたね』

そうだったらしい。

とりあえず余裕ぶって話してくれてる間に倒そう。

以前のように転移で逃げられたら、あまりにも面倒だ。

「女王ビカリア。どうか精霊女王として、精霊人の役割をお果たしあられたい」

私よりもやや速く、ケオンが前に出て告げた。

決心がつき、ようやく門番としての仕事をしたようだ。

「兄上を見殺しにした貴様が何を言う！ 黙っておれ！」

余裕の表情を一瞬で強ばらせ、女王は叫んだ。

どうもヒステリックそうなやつだな。

『……こいつ、酔ってない？』

酔う？

そう言えば酔ってるようにも見えないな。

「何を言うか。妾は人の子らとは違う。酒には酔えぬ。邪神よ、貴様こそ酔っているであろう。赤き血にな」

上から目線でそう告げた。

酒で酔わないらしいぞ。

『酒じゃなくて、魔力に酔ってるんじゃないかな。魔力酔いつてやつ』
そんなのあるの？

『元の世界にもいたよ。安い魔力補給瓶飲んで、酔っぱらって味方に魔法をぶつけた魔法使い。今回はちゃんぽんにした魔力だからね。酔いやすいとは思う。しかし、大量の魔力保持ができる奴が、魔力に酔うとか……』

「ふむ、そのようなこともあるか。浅学であった」

邪神様も知らなかったようだ。

謙虚に自分の無知を恥じている様子だ。

「かの精霊王もあのようであった。兄妹ともども酔客であったか。これ以上は生き恥であろう。楽にしてやろう」

いやいや。

最後の一言は余計でしょう。

「何をごちゃごちゃと言っておるか。この精霊界は妾の庭。逃げるのは妾ではない。飛んで火に入るなんとやら——兄上の仇じや、死ぬが良いわ」

女王は両手を真上に挙げた。

『わーお、魅了が通じないからすごい力業にでたね』

「うっ、ぐっ……」

なにやってるの。

万歳してるようにしか見えないだが……。

ケオンが苦しそうに膝をついたところを見るに何かやってるんだらう。

『ほい』

景色が変わった。

世界が赤に塗られている。

女王の真上にはどす黒い玉が渦巻いている。

『魔力を固めてるね。そのままぶつけてくる気でしょうな』

念のため聞くけど、当たるとどうなるの？

『即死。近くにいるだけで死ぬ。ケオンが生きてるのは魔力増幅の術技によるものだし、メル姐さんに向かっているのは俺が吸ってる』

ふむ、これ以上はまずいな。

さっさと倒して——、

『絶対やめて！　それが一番まずい！　倒したら、魔力が暴走してどうなるか本当にわからないからね！』

どうも本当にやばいものらしい。

じゃあどうするの？

『もうちよつと待って。完成させてから対処する。ケオンを俺の後ろに移して』

私が平気な顔で立っているためだろうか。

女王もむきになって、魔力渦をどんどん大きくしていく。

『もつたいないね。この魔力操作力は素晴らしいものだ。ただの夜郎自大じゃない。もしも兄妹揃って生きて、きちんと話が聞けたなら、その恩恵は精霊界にとどまらなかつただろうに……』

そんなことを言っても仕方ないだろ。

奴の兄はもう死んでしまっている

「……ぬう」

なんか呻いている。

まさか自責の念でも芽生えたのだろうか。有り得んな。

『力業だけど、純粋な魔力だけに防ぐのが難しい。でも、相手が悪かつたね』

私も何をするつもりなのかわかった。

シユウを精霊女王に向けておく。

「そのような剣で何ができるか。死ねい！」

魔力がまとまったようで、両手を私の方へ差し出して来る。

辺りの景色が歪む。かつてないほどの魔力塊が私へ向かってきた。

『吸引力の変わらないただ一つの片手剣』

刀身が黒く染まり、魔力塊よりもさらに周囲の景色が歪む。

全ての物体が、色が、魔力がシユウの刀身一点に集まる。

「なん、じゃと……」

景色は元に戻り、そこには狼狽を露わにした女王が残った。

「有り得ぬ……。有り得ぬぞ！　何じゃ！　何をしたというんじや！」

魔力を全部吸い込んだ。黒竜のスキルでな。

魔力系の攻撃にはだいたいこれでなんとかなる。事実、なった。「無理じゃ、無理じゃ無理じゃ！　こんな化物を相手にできるか！　あやつめ！　話が違う！」

女王が服から棒状の物を取りだした。

何だろうか？

『あつ、馬鹿！　斬って！』

シユウに言われて踏み込む。

「遅いわっ！」

一足遅く、女王は白い光に包まれ消えた。

くそっ、逃げられたか！

『いや』

「があっ！」

消えたと思ったら、直後に背後から叫び声が聞こえた。

『本当に生き恥を晒してどうするんだ……』

振り返ると、そこには半分になった女王がいた。

壁にめり込んでおり、残りの半分は見るできない。

……なにこれ？

『転移魔法の失敗例。魔力を吸い込まれたのに、転移なんて使うから……。酔いと焦りで判断を誤ったね』

女王は呻き声をあげている。

どうすればいいのこれ？

「助け、よ。妾を、助け……」

自分を殺そうとした相手を、救おうとは思うほど私は優しくない。「ビカリアよ。先ほど『あやつ』と言ったな。『あやつ』とは誰のことだ」

「助け……」

「我は助けぬ。私の片腕も助けぬ。だが、ケオンはどうか」

「ケオンよ。精霊界の、門番よ。妾を助けよ……」

救助を請われたケオンはビカリアの側へ寄る。

「女王ビカリア。貴女は、何を求めていたのですか？」

「知れたことを。世界じゃ。妾こそ、この世界に君臨する者じゃ。そ

うであろう？ あやつは妾こそが相応しいと。そう述べた」

「貴女にそのようなことを言上されたのはどなたですか？」

「あやつじゃ。兄上の友——アハティスじゃ」

私とケオンは互いに顔を見合わせる。

死んだはずの人間の名前が出てきて何がなんだかわからない。

『弟子のフリソスはどこか尋ねて』

言われたとおりに尋ねると、アハティスが連れ去ったらしい。

もうどこにいるのかわからないようだ。

「妾は話したぞ。助けてくれりゃ」

ケオンは女王に手を伸ばした。

その手は直前で止まる。

「女王ビカリア。儂が救い出したら、貴女はその後どうなさいますか？」

「決まっておろう。妾は諦めぬ。必ずや、この手に世界を手に入れてみせよう」

ケオンの伸ばされた手は、力なく垂れ落ちた。

「儂は、精霊界の門番です。そのような行いを認める訳にはいきませぬ」

「なぜじゃ？ 何を言っておる？ 早う、助けよ！」

ケオンは目を瞑り、首を横に振った。その姿を見て、女王はケオンを罵る。

次いで助けを請い、その後はよくわからないことを叫び散らかした。

最期は声も力を失い、ぼろぼろと朽ち果て、床に崩れ去った。

「晩節を汚したな」

邪神様の感想は容赦がない。

「むっ！」

邪神様人形に黒い闇が集まった。

手乗りサイズから、むくむくと大きくなり膝下くらいの大きさになった。

見た目もデフォルメから、ややリアルになった気がする。

「フハハ、我が力の一部が戻ったぞ」

拳サイズの足で立ち、手のひらほどの胸を反らせて笑っている。サイズは未だ小さく、声以外に迫力は感じられない。

さて、問題の二人が倒れ、話は真相に近づいてきたはずである。

しかし、アハティスが生きているという件は、謎に拍車をかけたように思えた。

4. 邪神様にはわからない

邪神様の封印が一段階解けたものの、問題が一つ増えた。

元凶のアハティスが生きており、しかも封印の楔たる弟子を連れ去ってしまったとのこと。

アハティスは死んだんじゃないのか？

「解せぬ」

邪神様は私の頭の上に腰掛けている。

歩幅が違うので並んで歩けず、仕方なく乗ることを許可した。

最初は肩だったが、耳と頭に羽がグサグサ刺さるし、腕も邪魔なのでもう一段上にいってもらった。

下の羽とおまけ程度の足で、私の頭を抑えてバランスを保っているようだ。

『ざっと四つの可能性がある。一つは邪神様の見た記憶が全て改竄された偽物だったという可能性』

そもそもの「アハティスが死んだという記憶」が、アハティスによって書き換えられた記憶だったということか？

『そうそう。でも、それはないと思う』

「然り」

なぜ？

『邪神様がアハティスからスキュード・ラーニングしたスキルが「記憶の回想」。あれは改竄というスキルに対抗したスキルだ。正しい記憶を見せることによって、ねじ曲げられた記憶を否定するというもの。あそこで見た記憶は正しいだろう。ただ、改竄には対抗できても、消去には対抗できてないのが穴だね』

そうすると、残りの二つか。

二つ目の可能性は私にもわかるぞ。

アハティスが本当は生きていたということだな。

『前にも言ったけど、それはゼロに近い。あの致命傷を事実とすれば、死ぬしかない』

そんな話もしたな。

それじゃあ三つ目は何だ？

『アハティスを騙る何者ががいる』

ああ、なるほど。

それじゃないの？ 見た目を騙す術技つかってるとか。

邪神様も頭の上で頷いている。

『十分にあり得る話だと思う。でも、俺はあえて四つ目を推したい』
それは？

『アハティスは確かに死んだ。——そして、蘇った』

いつぞやも聞いたな。「死んだのなら蘇れば良い」と。

でも、今度は機械のコアじゃなくて人間だぞ。

「胡乱なことを」

邪神様は頭ごなしに批判するが、案としては好みだ。

ちなみに、どうやって蘇るんだ？

『魔のモノは、どちらかという生物なんだよね』

……うん？

まあ、そうだな。動物系のモンスターが多い印象だ。

『無機物系や死霊系、それにアンデッド系も俺が見た限りじゃないな
かった。魔晶が生物にしか寄生できないからだと思うんだけど、ここ
の考察はひとまず置こう』

たしかにそうだった気がするな。

猪に、鷲に、豚とか動物が多かった。

ゴーレムやレイス、ゾンビとかは見た記憶がない。

「……ふむ、我が片腕よ。貴様の可能性を認めよう」

邪神様は何かわかったらしい。

これは今のうちに聞いとかないと置いていかれる流れだ。

考察とか後でいいし、最悪なくてもいいから、さっさと結論を教えて。

『邪神様が決戦の前に戦った、魔のモノの王——絶命王とやらが、アハティスを復活させたんじゃないかと』

そんな話があったことすら、もう忘れていた。

なんで絶命王がアハティスを復活させられるんだ？

「絶命王と戦った後の邪神様は、アンデッド特有の腐臭が漂ってた。でも、絶命王が魔のモノなら生物系だろう。だとすると腐臭は絶命王の術技によるもの。おそらく、死者の蘇生かな」

「蓋然性は高い。奴は無数の死者、死獣を操り、数多の生者を殺め、世界の均衡を著しく崩した。故に、調停を執行した」

最初からそこを説明してくれてれば、もっと早い段階でわかってたんじゃないのか。

『精霊女王がアハティスの死体を、魔のモノに引き渡し、魔のモノが絶命王に頼み、絶命王がアハティスを復活をさせた。アハティスは、魔のモノとも繋がりを持っていた。教会に出回っていた魔晶はそういったらから提供された？ いや……』

弟子と精霊女王と魔のモノ、それにアハティスの四人が邪神様を封印したのか。

……アハティスは記憶の改竄だろ。結晶化はどうやってやるんだ。

『絶命王が邪神様に倒されて、復活したアンデッドも朽ち果てた。でもアハティスはまだ生きている』

お前の説だとそうなるな。

『自らの身体に魔晶を埋め込み、新たな生命体としてこの世界に命を再度芽吹かせた。封印結晶の術技もそのときに得た……可能性がある』

馬鹿げているという思考がよぎったが、そうあって欲しいと思う気持ちも否定できない。

仮に事実とすれば、何とたくましい奴だろうか。

『主人公みたいな奴だよ。一度倒されても仲間の力で一時の命を得て、その短い時で自らに結晶を埋め込みパワーアップして完全復活。』

さらに種族間で手を結ばせて邪神様を封印まで追い込むんだから。もちろん本当にそうかはわからんけどね』

面白い話だな。私は好きだぞ。

「可能性としてはアハティスを騙る者の説が高い。片腕の説も『可能性はある』に留める。しかし、その説に我は些かの高ぶりを感じておる」

たぶんそれはおもしろさだろう。

「おもしろさなど不要である、が——」

邪神様は何も語らない。

無理に聞き出すことでもないの、私も黙っておくことにした。

『ただ仮説に対して、経験上の意見を言わせてもらおうと……、アハティスの存在自体は俺好みで好きけど、彼の目的はおもしろいものじゃないだろうなあ』

おお、復活の話に目がいつて、奴の目的には話が及んでなかったな。奴はいったい何を目的としていると考えてるんだ？

何がそこまで奴を駆り立てるのか。

『アハティスが本当に生きていて、精霊女王に「世界を統べろ」と言ったなら、その目的はさらにその上か、別次元のところにあるでしょう』
女王の上？

『王さえも見下ろす立場——神にでもなろうとしてるんじゃないかなあ。あるいは……うーん、どっちにしろ微妙だ』

今までの高ぶりを全否定するような、つまらなさそうな声でシユウはそうぼやいた。

話はいろいろ出たが、これからどうするんだ？

弟子やアハティスを騙る者を探すにしても、どこにいるのかわからんぞ。

『ほっとけば向こうから問題を持ってきてくれるでしょうよ……ほら、来た』

見覚えのある鳥が、ケオンの前に降り立った。

「こやつはコラリイの……」

ケオンが、足から手紙を外してそれを読む。

『ムルズにて魔のモノとの前線を維持。

旧カナエレイ村方面にて異変有り。

挟撃の恐れ高し、応援求む』

行かねばなるまい」

門番の仕事はいいのか？

「魔力も安定しておる。今はコラリイが心配じゃ」

「許す。行くが良い」

ものすごい上から目線で邪神様も許可を出す。

いったい邪神様とは何様なんだろうか。

『コラリイたん、ちよつと襲われすぎ……。あの杖、なんか良くないこととの引き寄せ効果があるかも』

ムルズつてのはコラリイと別れた砦のことだろ。

カナエレイ村つてのはどこなんだ。

「ムルズ北東にある小さな村だ。導師アハティスが邪神に殺された場所でもある」

……ああ、邪神様がいきなり火柱を撃った村か。

「この手紙は他の二人にも出されておる。それならプラティナが向かうだろう」

あの光つてる剣の持ち主が、なぜ？

「あそこはプラティナの生まれ育った村だ。それにフリソスの生まれた場所でもある。今はもう誰も住んでおらぬがな」

フリソスつて誰だつてと尋ねると、どうもアハティスに連れ去られた弟子だったらしい。

次の行き先は決まった。善は急げだ。さっそく向かおう。

邪神様の道案内でカナエレイ村への道を進む。

道は草が生い茂り、すでにこの道が使われていないことを物語っていた。

村に近づくにつれて魔のモノが増えて来ている。

確かに何かが起きていることは間違いない。

『来た、隠れて』

ステルスを使って道の端に寄る。

すぐ脇を大きな狼に乗った剣士が走り過ぎていった。

『観察力が足りてない。草が踏み倒されてるんだから、ここに誰かいたってわかるのに』

「何もかもが足りてない男よ」

やれやれとシユウは嘆息。

邪神様は一言でこき下ろしている。

どうやら一人のようだな。

ちなみに私も途中までケオンと一緒にだった。

ムルズが攻められているとの連絡を受け、ケオンがそちらに行くことになった。

『追うとしよう。何もなくて事はないでしょう』

プラティナを追い、村に着いた。

家はまだ朽ち果てるほどには廃れていない。

道と同様に草が生い茂っており、一人の青年が周囲を見渡している。

村中心部に何もなかったことを確認すると、青年は村はずれへの道を進んでいった。

道の先には廃墟があった。

炎で焼き尽くされ、建物の基礎部分がかろうじて残っている。

それすらも雨と風に晒され、草も伸び、その姿は消えようとしている有様だった。

そこに二人の男が立っていた。

一人は先ほどの男、プラティナだ。

もう一人は問題の弟子フリソスだな。

あれ？ 何かおかしくないか？

『腕が戻ってるね』

あつ、本当だ。

治したのだろうか。

『くつつけたのかもしれないし、生やしたのかもしれないね』

どつちにしろ碌なモノじゃないな。

「兄弟子！ どうしてここに！」

プラティイナは純粹な驚きに満ちた様子でフリソスに声をかけた。

「プラティイナ。お前は、ここでの日々を覚えているか？」

フリソスは、プラティイナの問いに答えず、逆に質問を返した。

「忘れるわけがない。俺と兄弟子、それにムベンやミツカボウたちと一緒に先生の教えを受けた」

「そうだ。今でさえ目を瞑ればあの頃の日々が浮かんでくる」

「しかし、先生は殺された！ おぞましき邪神によって！」

「……プラティイナ。それは違う。先生は生きておられる」

プラティイナは声を失った。

「私がここにいるのも先生が助けてくださったからだ」

「馬鹿な。先生は確かに死んだ。ここで看取ったことを覚えている……まさか」

フリソスは、プラティイナの疑問を肯定した。

目を閉じ、自らの罪を認めているかのようにある。

「プラティイナ。すまない。お前の中にある記憶は、俺と先生が弄ったものだ」

「なぜだ？ 兄弟子、なぜそんなことを？」

飽きてきたな。

どうもシユウの仮説が現実味を帯びてきた。

だいたいわかってたようなことを今さら聞かされても困る。

「先生を生かすためだ。先生は自らに何かがあつたときのこと、俺たちに告げられていた。そして、俺たちは先生のために禁忌を犯した……グッ」

フリソスが胸を押さえてうずくまる。

「あ、兄弟子！ どこか悪いのか」

「来るなっ！ 最後まで聞くんぞ！ お前が一番にここに来ると信じていた。先生に見つかる前にやってもらいたいことがアツたのだ」

「やってもらいたいことってなんだ！ 先生はどこにいるんだ?!」

「先生ハ、ここにいない。いないカラこそお前に伝えたい」

フリソスの様子がおかしいな。

『魔晶が埋め込まれてるからね』

えっ？

「頼む。先生ヲ止めてクレ。それと私ヲ、コロして……もう私ハ私ヲ保てナイ……」

『安い三文ファンタジー小説を読んでる気分だ』

フリソスの胸付近から血管が顔や腕に浮き出てきた。

「兄弟子！」

「アツ、アアアア！ ガアツ！」

顔がべきべきと変形し、腕にも毛がによきによきと伸びている。

おお、なんかボス戦の始まりみたいだな。

「何だ！ 何が起きているんだ！」

右腕の先が大槌に変わり、頭は羊に変わった。

「コロセ……、コロ………コロス」

羊が右手の大槌を振り上げてプラティナに襲いかかる。

プラティナは大槌を取りだした光の剣で防いだ。

勢いを殺しきれず飛ばされてしまった。

「何だ！ 何なんだ！」

理解が追いつかず、プラティナはひたすら叫んでいる。

『行こうか。死なれると困る。本人も望んでいることだし、殺してもらうことにしよう』

ステルスを解除し、プラティナの横を通り羊の右腕を斬り落とすた。

羊は甲高い声で悲鳴をあげ、腕を押さえた。

「なっ！ 貴様は！」

プラティナは驚きを隠せなかった。

その手に持つ剣を私へと向ける。

「たわけめ。敵を見誤るか」

お前の敵は私じゃないだろ。

兄弟子は魔晶を植え付けられて、魔のモノになった。

植え付けたのは私じゃない。あいつが言ったようにお前の先生と

やらだ。

「奴の頼みを忘れたか？」

容赦ない言葉である。

しかし、迷っている暇はない。

お前が殺せないというなら私が殺すでしょう。

「プラ、ティナ……コロシ……」

羊が腕を開いて呟いた。

「あ、あああああつあー！」

プラティナは叫びつつ剣を構え、そのまま羊へ突進した。

「嫌ナ役を押しつケタ……、スマナイ。せんセイを——」

羊は崩れ落ちた。

目の光を失い、地面に伏せる。

「フハハッ、力が戻りおるわっ！」

プラティナが力なく項垂れている後ろで、邪神様が空気を読まずにはしゃいでいる。

実際に邪神様の姿も人間と同じくらいのサイズに戻った。

いよいよ残るはアハティスだけである。

5. 邪神様に花束を

力を取り戻した邪神様と、脱力状態のプラティナ、それに私が並んで歩く。

ひとまずコラリイとケオンのいるムルズ砦に向かっている。

私の知りうる限りの話を伝えたが、プラティナは理解したくないようであった。

実際、憎むべき邪神からこんな話を聞いても信じられない。

「誠剣衝破！」

ときどき出てくる魔のモノをプラティナは倒していく。

なんでこいつは技名をいちいち叫ぶんだらうか。

『雑魚だから』

「未熟ゆえよ」

揃って即答である。

『魔法と術技の最大の違いは、魔力の消費か変質かだ』

なぜ弱いと技名を叫ぶのか、という疑問の顔にシユウが気づいて答えてくれる。

『消費と変質の違いは、詠唱の有無とほぼ同義なんだ。魔法には詠唱が必要で、術技にはいらぬ』

にもかかわらず、プラティナは詠唱……ではないが技名を叫んでいく。

『魔法なら「この詠唱で、こんな現象がおこる」ってのが明確だけど、詠唱がないぶん術技はその因果が不明確なんだ。本人が、「自分の魔力をこう変質させたときにこんな結果が出る」ってのを積み重ねていかないといけない。名前を付けて叫ぶことで、変質から結果までの過程を自分の中で明確にできる』

つまり？

『つまり、技名を叫ばないと効果が出せないのは研鑽不足。叫ぶのは自分の中で魔力変質が明確になってないことの顕れ。いちいち技名を叫んだら、何するかが相手に筒抜けだ。叫ぶ振りして別の術技を使うってフェイントならありだろうけどね』

なるほどな。

剣はぴかぴか光って格好いいのにもつたいないな。

『この世界の武器は変なのが多い。意味もなく光る剣、魔のモノを呼び寄せそうな杖、爆発するコア、大半の人間が使えないだろう魔法のアクセサリー』

言われてみるとおかしいな。

『武器だけじゃない。解析できないのはだいたいおかしい。魔力酔いする精霊。生物を取り込んで暴走させる魔晶。楔の必要性を感じない封印結晶。それに——』

なににせよ、へんてこな世界だな。

『へんてこではあるけど……世界なのかなあ』

煮え切らない回答である。

それより、もう少して砦だがどうするんだ。

コラリイにケオンもいるだろ。それにプラティナか。

『もしかしたらソレアも完成させて来てるかもしれないね』

四英雄様がそろそろわけだ。

「問題はアハティスであろう。奴は何処におるのか」

『メル姐さんが邪神として転移してからの精霊と弟子の動き。それに魔のモノの異常な攻勢。おそらく魔のモノ達と一緒にいるね』

「で、あれば砦になど用は無い。このまま奴らの元へ進行するのみ」
進行じゃなくて侵攻か進攻が正しいだろう。

私としてもそうしたい。砦に寄っても変なことになるのが目に見えている。

砦の前でプラティナに伝言を頼み、そのまま私は西へと進む。

魔のモノたちの領域へと攻め込むことにする。

魔のモノも弱いため苦戦はない。

あつという間に、ガスク砦へと辿り着いた。

砦付近のモンスターを狩っていると、なにやら地響きが聞こえる。
西からではなく東からだ。

土埃が舞い上がり、数多くの人がこちらへ向かってきた。

『メル姐さんが攻めるのを足がかりにして、砦を取り返すんだろうね』
ふーん。

まあ、少しは手伝うとしようか。

ガスク砦の西に立ち、攻めてくる魔のモノらを倒していった。

邪神様は特に何もしない。均衡を歪めない限り干渉しない方針らしい。

「メル様」

倒していると四つの姿が私に近づく。

輝く剣を持つ青年。

真っ白な杖をもつ僧侶。

機械に全身を包まれた女。

それに、髪を剃り禿に戻った男。

奇しくも例の四人と邪神様。あと私が揃った。

互いに現在まで知っている事の情報交換をし、知識を共有した。

雰囲気はとても良い物ではないが、魔のモノに攻め入ることに両者の意志は一致している。

剣が閃き、光が魔のモノを射し、鉄の礫がモンスターを貫き、火風水土が魔のモノを襲う。

私も適度に剣を振るい、邪神様はうむむと頷いている。働けよ。力はある程度振るえるらしいが、働く気はない様子だ。

「久しぶりですね。四人とも」

西へ西へと突き進み、男の呼びかけで侵攻は止まった。

奇しくも場所は以前と同じ場所。邪神様と四人が戦い、私がこの世界に降り立った所だった。

「先生ー」

プラティナに呼ばれた男はニコリと微笑んだ。

大きな岩のような体に、優しげな笑顔を携えた初老の男。

魔のモノだから動物っぽくなると思っていたが、見た目は人間だな。

「先生、どうしてこんなことを！」

「人のためです」

プラティナの勢いづいた質問にさらりと即答。

それ以上の解説は続かなかった。

「賢者アハティス。あなたは魔のモノなのですか？」

「その問いへの回答は、『はい』でもあり『いいえ』でもあります。これをご覧下さい」

アハティスが自らの服をめくると、そこに魔のモノに浸食された人たちと同じような血管が浮き出ていた。

「機構としては魔のモノでしょう。しかし、私はこのように自我を保っている。姿も元とほぼかわっておりません。無垢なる聖杖、コレリイ。私も貴女にお尋ねしたいかがいたい。私は魔のモノですか？」

コレリイは答えを詰まらせた。

「アハティスの旦那。アンタがこのコアについて何か知ってるんじゃないかって話だが、どうなんだ？」

機械に身を包んだソレアが尋ねる。

「はい。私が普及させました」

「暴走するように仕込んだのも旦那か？」

「違います。私はその構造を知らない。人が活用できると信じて世に流しました。一部で残念な結果にはなりましたが、貴女なら他のコアももう暴走させることはないでしょう。違いますか？」

ソレアは沈黙した。

彼女はコアの構造を理解している。

実際に、他のコアから爆弾部分を取り除いたと話していた。

「精霊王と精霊女王に何かを吹き込んだのも貴殿か、導師アハティス」
「いかにも私です。彼らには魔力を制御し、生命の流れを安定してもらう必要があります。その役割を彼らに依頼したのです」

ところがあいつらは魔力を溜めて酔っ払った。

酔っ払いには世界の命をコントロールすることが王だと思えてしまったのだろう。

「先生。兄弟子は どうして魔のモノになったんですか」

「残念なことです。精霊界で異常な魔力を浴び、彼はもう保ちませんでした。助けるためにはああするしかなかったのです。堅い意志を持ってば魔晶も制御できるのですが、及びませんでしたか」

アハティスは目に涙を溜めていた。

私にはそれが演技とは思えない。プラティナにとってもそうであつたようだ。

「賢者アハティス。それに関してですが、教会に魔晶を配っていたのは貴方ですか？」

「私です。魔のモノから手に入れた魔晶を、各地の教会に配りました。不治の病や大怪我を患っているひる人たちに魔晶を埋め込み、教会の聖光で魔晶の活動を弱めつつ、徐々に体に慣らしていく。これにより安定した魔晶との融合が見られると踏んでいたのです。今の私のように」

シユウも似たようなことを言っていた気がする。

「私は全ての行いを、ただ人のためにおこなってきました。自らの行

いにいつぺんの曇りも陰りありません」

清々しい態度だった。

「先生、それは本当に人のためになるんですか？」
「なりません」

「俺たちや兄弟子、それに精霊人たちの記憶を弄つてまでやること
だったんですか」

「やるべきことでした。故におこないました。いくつものすれ違いや
不幸を起こしたことは謝罪しましょう。必要とあれば一人ずつでも
頭を下げていきましよう。しかし、人間の歩みを止めるわけにはいき
ません」

迷いの欠片が一切ない返答だった。

ついに、アハティスが邪神へ問いかけた。

「邪神よ。あなたは世界の均衡を謳う。しかし、実際におこなってい
るのは殺戮と破壊ではないか。あなたが動いた分だけ、世界の歩みは
遅れてきた」

「逆しまよ。貴様のような者がいるから、世界はいつまでたつても均
衡を保てぬのだ」

平行線だな。

それで、どっちが正しいの？

個人的にはアハティスが正しい気もするんだが……。

邪神様の言ってることもまた、そうである気がしてならない。

『どっちも正しい。長い目で見るか、または大きい視野で見るとどう
か。顕微鏡視点で見ると邪神様が正しいし、望遠鏡視点で見るとアハ
ティスが正しい。この議論は意味がないね』

うーん、そうなのか。

ちなみに魔のモノと人間は戦っているがそれはどうなんだ？

「メルさん。申し訳ありません。人と魔のモノの戦いは私の力不足に
よるものです。いずれ止めてみせます。私は人間と魔のモノはわか
り合えると考えています」

「愚かな。同種族ですら個体が二おれば諍いが起きる。ましてや種族
が違えば共存など有り得ん。互いに距離を取るのが一番よ」

確かにそうだ。

アハティスの言にも、邪神様の言にも頷く。首の動きが忙しい。「そのとおりかもしれませんが。しかし、それでは隣人ですら会釈できなくなる。あまりにも窮屈な世界です。いきなりは難しい。戦いの歴史は両者に、深く暗い根を張っています。長い時間がかかるでしょう。しかし、私ならできます。やらねばいけないのです。この体になってから年を取ることがなくなりました。私は人と魔のモノ、両方の生を持っている。どんなに長い年月をかけようと、両者が手を取り合える世界になる。それこそがこの世界に生きる生命の在り方だ——私はそう信じており、私に課せられた使命だと自負しています」
なんかもつと悪っぽいのが出てくると思ったのに、なんか違う。
これは私の求める冒険ではないな。

『そうだね。勝手に自負しとけって話だ』
だよな。

私の求める冒険つてもつとこう——
『ダンジョンぶーん！ モンスターすばすば！ ボスをザクザク！
アイテム結晶やったあー！ 後のことなんか知りませーん！ だよね！』

たしかにそうだけど！
そうだけどね！
そうだよ！

……そうだったのである。
こんな均衡やら、信念やら使命とか人間の進歩は、私の知ったことじゃないな。

しかもここ私の世界じゃないしな。そろそろダンジョンに行きたい。
もうめんどくさいからシンプルに戦ったらどう？

大層なことを口で言いあっても、けつきよくのところ実力がないと何もできないでしょ。

「むべなるかな」
「道理ですね」

問題の二人は頷いた。

よしよし。後はがんばってくれ。

私にしては珍しく良いことを言ったんじゃないだろうか。
どう思う？

『思考と対話からの逃避。妥協点を探すことすらしないとはね。諦観すら覚える。両者がその提案に頷いたってことはだ。どちらが勝つても同じ未来が待ってるよ——力で他者を抑えつける世界だ』

私の真の敵はこいつかもしれない。

すでにアハティスも邪神様も戦闘態勢に入っている。

例の四人はどうするんだらうか？

『選ばせてやったら？ 自分たちの世界だ。未来を選ぶ権利は彼らにある』

そういうわけだ。

四人とも、好きな方に味方しろ。

全員が頷きあい、片方へと動き始めた。

「私はあなたたちにひどいことをしてきた意識がある。あなたたちはそれでも私についてくれるのですか？」

四人は全員アハティスについた。

「不満はある。でも、先生は先生だったから」

「賢者アハティス。神の教えに反しない限りはその行いを認めましょう」

「やれやれ、アハティスの旦那。次からはコアをあたしんところに回せよ」

「精霊界の役割は変わるかもしれない。それも進歩なのだろう。導師アハティス。貴殿がそれを導くか」

ノリが良い奴らだ。うんざりしてくる。

「ふん」

邪神様が手に持っていた本が動いた。

四人が膝をついたがすぐに立ち上がる。何したの？

『記憶の閲覧だね。記憶の改竄を疑ったんでしよう』

でも、全員まだアハティスの側に立っているぞ。

「邪神よ。私はすでに『記憶の改竄』はできません。その術技はこの体になったときから失い始め、もう使用することはできないのです。彼らは、彼らの意志でこちらに立つことを選んだのです。そして、彼らを選んだのは私ではない。——人間の進歩の道なのです」

「愚にもつかん」

なんか盛り上がってきてるな。

『メル姐さんはどうするの?』

………私は、見ておくことにしよう。

どっちかが負けたときにそれを認めさせる審判役が必要だろう。

正直に言くと、どちらに味方をするのも気が乗らない。

『今日一番の懸命な判断だね』

それでいいか、邪神様?」

完全体ではないけど、チートの力があるからなんとかなるでしょ。

「許す。奴らを調停し、完全なる姿となり世界に均衡をもたらそう」

こうして最後の戦いが始まった。

なお私は見てるだけである。

戦いが始まったのだが、意外に拮抗している………気がする。

そこんところどうなの?」

『拮抗してるね。単体の力としては今の状態の邪神様でも頭二つ三つ飛び抜けてる』

しかし、邪神様の攻撃はどれも五人に捌かれている。

『アハティスの存在が大きいね。四人ならばらばらだけど、アハティスがリーダーとして役割を果たして四人が連携できてる』

確かにな。

プラティナが剣で邪神様の剣戟を防いでいる。

コレリイも光の攻撃はせず、回復に徹している様子だ。

前回の戦犯認定を受けたソレアも、今回は適切に礫を発射している。

場を見だしていたケオンも小さな魔法を使い、邪神様の動きを鈍らせること注力する。

なによりも、その四人を指示するアハティスの存在が大きいだろう。

彼が全体を見て、的確な号令をかけることで邪神様に動きがつかない様子だ。

『……負けたな』

シユウも邪神様の負けを預言している。

『アハティスがまだ術技を使っていないからね』

記憶の改竄は使えなくなったって言ってただろ。

『記憶の改竄はね。別の術技が使えるようになったんでしよう。忘れてるの？ 彼が四人目なら使う力は明確だ。まだそれが出てない』

ああ、そうか。

まだ肝心の術技を目にしていなかった。

「邪神よ。見事です。その形態でもそれだけの力を発揮できるとは――。故に、今回も使わせてもらいます。私の術技は、五年前よりもさらに向上しました。お見せしましょう。そして、あなたに完全な敗北があらんことを」

ついに来るか。

『よっしゃ、俺もラーニングして結晶壊せるようにしちやおう』

うむ、それがいい。

「私の力は、私のためのみにあらず」

アハティスの手に旗が握られた。

同時に、辺り一帯に白き光が満ちていく。

『んんっ？』

「私は人間に進歩を促すため、先陣を切り旗を掲げよう」

今まで後ろに立っていたアハティスが、旗を振り上げて先頭へ向かう。

『どういうことだ……？』

予想していた光景ではなかった。

邪神様が結晶に封印されるのかと思ったがそうではない。

全員の術技の力が向上した。

目に見える形ではつきりと能力が上がっている。

プラティナの輝く剣が、邪神様の黒い剣を断ち切った。
コラリイの光は、邪神様の黒き靄を貫いた。

ソレアもケオンも同じく邪神様を上回ったのだ。

邪神様は全員から一撃を受けて、ついに地に臥した。

「……ありえぬ」

邪神様の姿が光のように消え去る。

「これが私に新たに与えられた術技です」

『能力向上か。凄まじい効果だね。術技だけなら極めてるレベルだ。
でも——』

ああ、封印結晶じゃなかったな……おろ？

体の周囲に光が現れてきた。

『元の世界に戻されるみたい。邪神様が負けたからかな』

私は、勝ち残った五人に手を振って別れを示す。

戻されるまでのわずかな時間で、彼らも私にそれぞれの別れを示してくれた。

こうして私は邪神様の封印結晶の前に戻った。

邪神様は封印されて何も言わない。その表情からも何かを読み取れることはなかった。

6. 邪神様、いつかまたこの洞窟で

邪神様の記憶の中で反省会をおこなうことにした。

久々の完全体の姿だが、なぜだか小さく見える。

どこか元気がなく、言葉も少ない。落ち込んでいるのかもしれない。

「我は、敗北したのか」

事実の確認だ。

完敗だったと思う。

「敗北の戦闘における理由は我にもわかる」

そうか。

まあ、私でもわかるくらいだからな。

「わからん。あやつらはなぜアハティスの肩を持つのだ？」

なんかごちやごちや言つてたな。

……たぶん、今までの行いのせいじゃないか。自業自得だと思う。アハティスが出てくる直前まで、あの四人には邪神様と一緒に奴を討伐する勢いがあった。

でも奴は出てきてから、自らの非を認めるところは認め、奴が答えられる範囲で彼らの疑問に真摯に答えた。

そして、奴の目指すところとその必要性を、言葉に込めて彼らに訴えた。

ちよつと私には暑苦しく、息苦しさも感じたがな。

「我にはなかった、と」

あつたか？

邪神様は黙る。

ないと認めたが、口には出したくない様子だ。

「奴の道は夢物語ではないか。現実的ではなからう」

そういった論理的話は私にはわからん。

ただ、思うのは、アハティスが語る夢物語の方が、彼らにとっておもしろそうだったんだろう。

邪神様の語る未来は、全部邪神様が管理してしまつて彼らにやるこ
とがない。

アハティスの語る未来は現実的じゃなく、困難だらけなのかもしれ
ない。

それでもあいつは一人ではなく、あの四人と人間全員、それぞれ
か魔のモノも巻き込んで作り上げようとしていた。

誰かに作られる未来じゃなくて、自分が一員となつて作り上げる未
来を描いてた。

たぶんそつちの方がずつとおもしろいだろうな。

「我が片腕よ。貴様もそちらを選ぶと言うか」

いや、それならあいつに味方してた。

私は誰かと一緒に何かするつてのが苦手だからな。

難しいこととかどうでもいいんで、自分の好き勝手にやりたかつ
た。

拘束も協調も私はパスだ。

シユウが何も言わないところを見るに、奴も同じようなことを思っているのだろう。

そうだろう？

『あつ、ごめん。考え事してて聞いてなかった。もうちよつと後で話しかけて』

すごい良いこと言ったはずなのに、聞いてなかったとか、お前……許されんぞ。

「認めよう。我が敗北と我が至らなさをな」

そうか。

それでこれからどうするんだ？

また挑むか？

「善きかな。だが、まだ勝てぬ。奴らは我の言葉を聞くまい」
だろうな。

「待つとしよう。あやつの夢物語が現実に直面し、我も自らの至らなさを克服したときこそ勝機がある」

そうか。

じゃあ、いったんお別れだな。

私は他のダンジョンに行く。

いつかこの近くを通ることがあるかもしれない。

そのときこそ捲土重来を期そうではないか。

「重畳よ。——行け、我が片腕よ。次の出会いこそ、我らの真の別れにならん」

ああ。じゃあな、邪神様。

邪神様は敗北から学習し、より柔軟な思考を持つだろう。
死んでいないなら何度でも挑戦すればいい。

それもおもしろさというものだ。

邪神様と再戦を誓い、私はこの度の冒険を終えた。

7. 邪神様のいない朝

邪神様と別れた翌朝。

私は宿で目を覚まし、朝食を食べて村を出た。しかし、術技なんてものがあつたとはな。

特訓すれば私にも使えるかな？

『使えるよ』

えっ、ほんとに？

どうせ無理だと諦めてたけど、聞いてみるもんだな。

『メル姐さんのスキルはなんとなくわかる。足が速くなるか、姿を消すもしくは透明化だろうね』

姿を消すのと透明化はどう違うのだろうか。

遠回しにお前は空気つて馬鹿にしてるのかな。

『それは自虐しすぎ。術技はその人の根底を映し出すからね。メル姐さんなら、逃げるに特化した術技になるよ。道中に練習していいこう。使えて損はないし。魔力が寡少だから魔法よりも術技が向いてるしね』

おお！ やるやる！

自分の術技をつかってみたい。

なんで今まで教えてくれなかったのか。

『教えても使えなかったと思うよ。魔法と違うからね。口頭の説明だけ聞いても理解できない。実際に見るか、食らうかしないと難しい。あっちの世界に行つて、無意識にメル姐さんの魔力が術技の在り方を学習してる……………はず』

最後に「はず」がぼそりと、つけくわえられてしまった。

邪神様と、あの世界との再戦を誓ったが、あいつらもさらに術技を磨くのだろうな。

アハティスが導くから、どんな世界になるのか楽しみだ。

お前は上手くいくと思うか？

『いかない。失敗するよ』

……………あつさり失敗宣言をされてしまった。断言である。

ええ、みんなで力を合わせて困難を乗り越えて、理想の世界を築く

んじゃないの？

『無理だね』

何なの？

何でそんな簡単に、しかもはつきりと否定できるんだ？

じゃあ邪神様が再戦したらあいつらに勝てるのか。

『勝つかもしれないし、負けるかもしれない。今はまだ負けるね。でも仮に勝っても無意味』

意味がないとはどういうことだ？

『あの世界で起きてたことは、アハティスとか邪神様がどうこうできる次元の話じゃないんだ。どっちが勝って、勝者が何を説いて、為そうとしたところで意味がない』

うーむ。なんだか思ったよりも難しい話になってきた。

……あつ、昨日何か考え込んでただろ。

さては何かわかったな。

『まあ、そうなるのかな』

もったいぶらずに聞かせろよ。

どうせもう過ぎたことだろ。

『過ぎたことねえ。聞いたらそんなこと言えないと思うけどね』

いやいや、そんなことないぞ。

聞いたら満足して、それで終わりだ。

私はさっさと次のダンジョンに行きたいからな。

『ほお……、じゃあやっぱり言わないでおこう。ダンジョンに行けなくなるよ。別に異世界のことだからどうでもいいでしょ。ぼんやり聞いてたけど、邪神様とも綺麗に格好良く別れたみたいだし。昨日の今日で会いに行ったらみつももない。違う？』

そう言われればそうなんだがな。

確かに私はさっさと次のダンジョンに行きたい。

それに邪神様ともきれいに別れた。

私の中での世界の物語は、ひとまずの完結をみたのだ。

果たして、今さら話を蒸し返す必要があるのだろうか？

いちおう私も邪神様の格好をして、異世界を巡った境遇がある。知っておくべきだろう。わかったこととやらを聞かせてくれ。

シユウは『それじゃあ』と話を始めた。

『今回の話は未解決なことがいくつもある。ありすぎて言うのが面倒なくらいだ』

例えば？

『邪神様の封印結晶は何だったのか？』

ああ、そう言えばそうだな。

なんかもう最後の敗北で忘れてた。

『俺は、新生アハティスがああ封印をやったと思ってた。でも、あいつは能力強化がメインだ。ああの封印結晶は作れない』

他には？

『アハティスはどこからコアやら魔晶を持ってきたか？』

そう言えば、世の中に流したって言ってたな。

誰にももらったとか、どこで拾ったとかは話していなかった。

……いや、魔晶は魔のモノからもらったとか言ってたなかつたか？

『うん。でも、それはちとおかしい。魔のモノがあんなのを持ってるなら、人間にどんどん埋め込めばいい。それだけで人間をあっという間に制圧できる。他にも、コアは流したけど構造は知らないって話してた。そうすると、あいつはコアを作ってはいない』

……ということとは？

『あいつはどこかから、あるいは誰かからコアと魔晶を手に入れた。それだけじゃない。最後に見せたああの旗もだ。へんてこ装備すら次から次に手に入れてる。装備を世界に流してたのもあいつじゃないのかな』

なるほど。

言われて見れば、気になってくるな。

それくらいか？

『まだまだある。邪神様って、そもそも何？』

ええ、今さらそれ聞くの？

『当然のように出てきて、当然のように話してたから、スルーしてたけどおかしいでしょ』

それは、そうだな。

世界の均衡やら、調停をとか、訳のわからん存在だ。

『それだけじゃない。今だから言うけど、邪神様も解析不能なんだよ』
ふーん、そうなの。

別にそれは驚くことじゃないような。

邪神様が何かねえ……、確か神じゃないって話してたよな。

神を名付けたのは作った奴の驕りだとかなんか。

『そこ——まさにそこだよ。創造主って邪神様は話してた。邪神様を作った奴がいるんだ』

そりゃいるんじゃないの？

あの世界であんなのが勝手に生まれてくるとは思えん。

『洞察力どうなってるの？ ストツプ安になってない？』

何がそんなにおかしいかわからん。

もつとわかりやすく、はつきりと、例を交えながら言ってくれ。

『結論から言うと、その創造主が全ての元凶でしょ。アハティスと邪神様のどっちが勝とうとあの世界にはどうということもない。創造主とやらの手のひらの上なんだからね』

そうなのか？

『創造主が作った邪神様は解析不能。こんなのを作れる奴が何人もいることはまずない。そうすると、邪神様、装備、魔晶、コア、精霊人、それに封印結晶——全てをその創造主が作ってる。アハティスはそこから物を提供されてる。そいつの気分次第であの世界の趨勢は簡単にひっくり返る』

ほう。すごい奴がいたもんだな。

どこにいるんだろうか。どこかで見られていたかもしれないな。

『どんな奴かはわかる。作った物を見れば、そいつの趣味思考が透けて見える』

どんな奴なんだ？

『根本がつまらん上に、奇をてらってふざけたことをする奴だ』

ひどい評価だった。

『光る剣にしろ、精霊人にしろ、コアにしろだ。一貫したコンセプトで作ればいいのに最後の最後で変なものを付けて台無しにしてしまってる。そもそも元の設計がずれてる。ふざけた奴に違いない』

ふーん、それがわかるとどうなるんだ？

『これだけだとただの推測に過ぎないね』

これだけではない、と言っているように聞こえるな。

『正解。話を変えるけど、邪神様の封印結晶。あれね、魔力を通さないんだ』

魔力吸収が本体までいかないとか言ってた気がする。

『そうするとね。あれは転移できない物質ってことになる』

はあ、そうなのか。

『魔法も無効化するからね。転移できない物質は、異世界から転移もされない。つまり、邪神様はこっちの世界に来てから封印された』

……それは、もしかして創造主がこの世界に来られるってことを言ってるのか？

『そうだよ。そいつはアイテムを作れるし、自分でもある程度使えるんだろう。この世界において、ふざけた人間』

人間じゃなかったらお前も該当するだろ。

そんなのはいくらでもいる。

『そこに最後のピースを加えよう。邪神様は自らを「邪神様」と呼べと言ったよね。ああいう無駄な設計は、作成者自身の傾向が入り込むものだ。そういう奴はいなかった？』

この世界において、ふざけてて、さらに自分のことを愛称で呼べという。

そんな奴が……いたな。

どうせわからんと思うていたが、すぐに思いついてしまった。

しかし、本当にそうなのか？ そんなことが有り得るのか。

なぜ、そんな重要なことを今さらになんて言うんだ。

『俺もまだ推定の段階。ぱつと見は怪しいところがない。でも、もしもあいつが創造主なら、しばらくはこっちの世界に用済みでしょうから、この世界にはいない。そいつが、あちらに帰るよう自然に出て行くことにしたんだ。下手に逃げられたら困るからね。それが今さらになんて言った理由』

確かに聞いてたら、変な言動をしたかもしれない。

次のダンジョンを惜しみつつ踵を返す。

……行ってみよう。

確認だけならすぐできる。

クラオリオの街にある、小さな宿屋のしがない亭主。

朝に別れたばかりの男を訪ねるべく、私は来た道を取って返した。

8. 邪神様@帰れない

宿屋には誰もいなかった。

近くの人に尋ねると、しばらく留守にすると聞いたとのこと。

さらにこういうことはよくあるようで、気づいたらいなくなり、気づいたら戻ってるとか。

変な人だが、手先が器用で扉の立て付けが悪いのを直してくれたこともあったようだ。

『最終確認だ。邪神様のところに行こう』

またしても封印結晶にやってきた。

結晶の前で、邪神様の記憶へと移動する。

「我と別れ、寂寥の感を懐いたか」

呆れ気味に邪神様が皮肉を述べた。

そんなことよりもだ。

聞きたいことがあつて来た。

「許す。述べよ」

えっと、何から聞けばいいんだろう。

『創造主がどんな奴か覚えてる?』

私の代わりにシユウが尋ねた。

「シユウよ。我をその片腕と一緒にするか。不快極まるわ」

……ん?

………おい、それは私が何でもかんでもすぐ忘れるってことか。

『気づくのがちよつと遅い。まあ、気づいただけ良しとしよう』

こいつらはなぜこんなに上から目線なんだ。

『覚えてるならラツキーだ。それって——こいつ?』

景色が変わった。

見覚えのある景色だ。

というか、今朝までいた宿屋の中だな。

そこには亭主の親父が、やくたいもなく立っている。

「まよしくこやつよ」

こいつは、近くの街にある宿屋の亭主だ。今朝の姿だな。

そして、私たちが旅立った後に姿をくらしました。

「……貴様らの言わんとしていること諒承せり」

しばしの沈黙の後、邪神様は告げた。

いや、もう言うべきことは言ったんだがな。

これ以上言おうとしていることは特になかったりする。

「我が創造主こそ世界の均衡を崩す者なり。故に我は調停を持って主に応えよう。いざ——」

おっ、うわっ！

景色が遠くなり、邪神様の記憶から追い出され、封印結晶が目の前にあった。

封印が弱まったのは事実だったようで、結晶からはみ出た邪神様の指がぬるぬる動いている。

「手に触れてあげて、邪神様一人じゃ異世界に飛べないから」

もしかしてこれ、誘ってる動きだったのか。

もつとわかりやすくしてくれれば……、いや今さら言っても仕方ないな。

私は邪神様の手に、自分の手を重ねる。

すぐに世界が歪んでいく、この感覚にはどうも慣れない。

感覚が戻ると、見飽きた場所だった。

特に何も無い場所なのだが、不思議と印象に残っている。

昨日の決戦の跡がまだ残っているが、その関係者は二人だけだ。

人形からチビ、チビから人サイズと二段階の変身をした邪神様。それに私である。

さて、来たのはいいんだがどうするんだ？

『アハティスはメル姐さんの名前を知ってた』

そうだったっけ？

誰かに聞いたんじゃないの。

『それって誰？』

……それが、創造主だと？

『あの四人とは最後に接触したから違う。弟子はそもそも会話をして

ないし、奴も知る機会はなかった。精霊女王も眷族扱いしてたから名前が出なかった。魔のモノのカメレオンは言わずもがな』

ふむふむ、そうするとどうなる？

『アハティスと創造主は接触するでしょうな。昨日の今日だ。まだみんなガスク要塞にいるんじゃないかな』

目的地は定まった。

「いざ行かん」

『赴くにあたり、邪神様に言っておくことがある』

シユウが邪神様の足を止める。

「何か？」

『話し合いは決裂して戦闘になる。奴は封印結晶を使うだろう。どうするつもり？』

そうだな。

あれに対抗する手段がないと駄目だろう。

「詮無きことよ。そうであろう、我が片腕ら？」

『うん、わかってるね。それならいいんだ』

……え、何がわかってるの？

チートで何とかするって認識でいいのか。

『せやで。ついでに、他にも訳のわからんアイテムが出てくるに違いない。過去に見た術技は、アイテム越しに使ってくと見て良い。どうする？』

邪神様は返答に窮した。

私よりも頭が回るため、対応策を上手く練れていないのだろう。

『もつと言うとだ。邪神様は俺たちとパーティー登録してるから、仮に倒せても奴は復活する。いたちごっこになるけど、そのあたりは？』

口どころか羽や腕までも停止して、思考の混乱具合を表している。そんなに難しいことか？

「ぬ？」

私には案があるのだが。

「驚天動地とはまさにこのことよ。聞くに及ばず」

完全に馬鹿にしてやがるな。

まあ、そこまで考えているわけじゃないからな。

上手くいくかどうかを、具体的に計算をしたわけでもない。単に思いつきだ。

『だろうね。でも俺は、それで上手くいくと思うよ』

私が何を言いたいのかわかっている様子である。

私だけでなくシユウの考えも同じであると知り、邪神様は呻き声をあげた。

この驚くべき信頼の差よ……。

『邪神様は、昨日の敗北から何を学習したの?』

そうだな。

私も言ったはずだ。……言っただけ?

『さて、どうだったかな』

言っていないかもしれない。

念のため、もう一度言っておくことにしよう。

「きちんと話せ」

苦手なのは、私もそうだからわかる。

それでも言葉を尽くしてみろ。

「尽くしておるわ。あれだけ言っただけならなぜわからんか」

『まるで学習していない』

それならまず最低限、私にもわかるよう懇切丁寧に説明してくれ。

それすらできないなら、お前はまだ言葉を尽くしてはいない。

『そうだぞ。これが、どれだけ難しいことか……』

シユウの声は、経験に裏打ちされた重みと辛みがあった。

我ながら自虐がすぎると思ったが、それくらいの意気込みでいかないとたぶん失敗する。

邪神様は沈黙を貫いている。

羽が迷いと困難を表すかのようにパタパタと無秩序に動いていた。

時は満ちた。

作戦は決行された。

ガスク要塞に邪神様とステルスで忍び込み、アハティスの様子をうかがう。

それと並行して、勝つための布石も打っておく。

準備が全て終わり、アハティスが動いた。

砦から外に出て、人の少ないところにその身を移した。

「お待たせしました」

彼が言うと、木陰が蠢き、そこから人が現れたのである。

その姿は間違いなく宿屋の亭主だった。

「やあやあ、アツ君。邪神様を倒したみたいだね」

「いえ、これもオツちゃんのおかげです」

気の抜ける名前で呼びあっているが、当人達は至ってマジメな様子だ。

「ただ、眷族の方はどこかに消えてしまいました。彼女の気が変わり、意趣返しに来るかもしれません」

「考えすぎだよ。メルルンは次のダンジョンに行った。もう戻っては来ないさ」

ところがそうでもないんだな。

私はタイミングを読み、木陰から出た。

アハティスは小さく驚き、宿屋の亭主は「あら？」と抜けた声を漏らしている。

「他のダンジョンに行くって話してなかったっけ、メルルン」

その呼び方はやめろ。

行くつもりだったが、お前に会いに戻ってきた。

「久しいな、我が創造主よ」

「うんうん、五年ぶりだね。邪神様」

にこやかに亭主は頷いた。

その後、急に顔を真面目なものにする。

「おいおい、二人とも忘れちゃったのかな。僕の話はオツちゃんと呼んでちょうだい」

ふへ、と間抜けな笑い顔をこちらに見せてくる。

気持ちが悪いくらい余裕に満ちている。

『経験上……、こういう余裕ぶってる奴はあつけなく死ぬ』

さて、貴様は何者だ。

ここまで来てまさか宿屋の亭主とは言うまいな。

「別に間違いじゃないよー。あっちの世界では、オリクトって名前で宿屋の亭主として生活してるのさ。ときどき近くの家で大工の真似事もしてるから、今度は大工を名乗ろうかな。メルルンはどう思う？」

どうも思わん。勝手にすればいい。

こつちの世界ではどうなんだ？

「ん？ 竜だよ。僕は創竜なんだ。竜って知ってるでしょ？ あつ、そうだ！ 黒びつび復活させたのメルルンでしょー！」

黒びつび？

もしかして黒竜のことか？

「そうだよ！ 大変だったんだからね！ あいつが活動再開して、扉を越えて隣の僕にまで挨拶してきたんだから！ あいつのせいで僕の創ったアイテムがいくつ破壊されたか……。何が『何もしてないのに壊れた』だよ！ 仕方なく、あっちの世界にしばらく退避してたんだ。さすがに、黒びつびでも赤やんの領域には寄ってこないよ。僕もほぼほぼ何もできなかったけどね。でも適度な休養はインスピレーションがわくね！」

ひたすら自分の身の上を話している。

私にとってはどうでもいいことだ。他の奴にとってもそうだろう。

「創造主よ。貴様は、自らの作った数々の物をこやつに渡したな」

「アツ君はすごいよ。僕の創ったアイテムを、とても上手く使ってくれる！ クリエイター冥利につきるってものだよねー！」

興奮気味に創竜は語る。

「貴様はこやつが何をしているかわかっておるのか。世界の均衡を乱しておるのだぞ」

「世界の均衡とかどうでもいいよ。僕はね。人間の進歩のためにアイテムを創ってるんだ」

……嘘っぱい。

「なぜそやつにアイテムを渡すか？」

「アツ君は人間の進歩に貢献してくれる。だから、彼に渡してるんだよお」

嘘だ。

シユウと同じ気配を感じる。

こいつはアハティスをおもちやとしか思っていない。

『馬鹿言うな！ 俺はメル姐さんをおもちや以上に思ってるよ！』

お前は黙ってろ。

「アハティスよ。貴様はそやつにもてあそばれておるだけではないか」

「今はそうかもしれない。しかし、我々の進歩のためです。オツちやんが、そのアイテムで私をもてあそぶなら、私は彼の期待を越え、予想を裏切ってみせましょう。私一人なら無理かもしれない。しかし、私は一人ではない。やがて我々は彼をも越えることができるに違いありません」

堂々と「強くなつて叩きのめす」と宣言するアハティスに、創竜は「怖いなあ」と笑って返す。

ここまで来るとあっぱれだが、邪神様はすでに戦闘モードである。

「まあ聞いてよ。邪神様はね。ヒーローを創ろうと思つて、できたものなんだ」

創竜がもらった。

邪神様の製作秘話である。

「寡黙で、尊大で、威圧感がある孤高の英雄を創ろうとしたら、それはもう完全に悪役な見た目になったんだ」

『ええ』

シユウが呆れ声をもらす。

私も呆れるし、アハティスも何を言ってるんだと創竜を見ている。

「それならともういつそ悪役にしちゃえと方向転換したんだよねー」

『一貫性がない』

「悪役は強ければ強いほど他が団結するからね。それならいろいろな継ぎ足して出来たのが今の邪神様だよ」

その点では大成功だったわけだ。

「そのとおり！ 邪神様のおかげでヒーローが誕生した！ それがあツ君さ。素養はあったけど、邪神様のおかげでさらに磨きがかかった。世界もにぎやかになっただろ」

楽しみに語っている。

『……世界が賑やかか。よほど退屈だったみたいだね。確かにこいつの創作物がなければ、さほど面白い世界でもない』

ダンジョンはないし、魔物も月人もおらず、やっぱりダンジョンがない。

おもしろくはないかもしれないなあ。

「でも、邪神様はやっぱり失敗だったんだ。調子にのって安全装置をつけてなかったのがまずかったよね」

『そのへんが人間と違うね。セーフティーのないものを作るなんてことを人間は普通しない』

どういうことだろうか？

『邪神様が創竜を殺そうとしたんでしょ。だから、結晶に封印した』

邪神様がこいつを殺そうと？

「そうなんだ！ 僕もうっかり忘れててね。慌てて記憶を消してから封印したんだ。ちよつと雑になったけど、ダンジョンとして扱われたから良かったよお。赤やんも気づいてたけど見過ごしてくれたしね」

それがあのダンジョンなのか。

『慌てた、か……。そこまで強くないな。封印の楔について聞いてみてよ』

そのまま創竜に尋ねてみる。

「失敗作ではあったけど、せっかく創ったし再利用はしたかったんだよね。それなら転移に成功させた四人が死んだ後で復活させれば、また世界に一石を投じることができると考えたんだ！ おもしろいでしょー」

いや、さほども。

やはりお前はここで倒しておいた方が良さそうだな。

「待ってー」

シユウを構えかけた私に創竜は叫んだ。

「僕はメルルンとは戦わないよ」

なぜ？

「意味がないからってのが次点の理由。メルルンと邪神様が僕を倒しても復活する。無駄なことはしたくない。でしよでしよ？」

一理ある。

次点と言ったが、じゃあ一番は？

「メルルンに手を出したと幻の助にばれたら、何をされるかわからない」

げんのすけって誰だ？

「とにかく僕はメルルンとは戦わないからね。あつ、邪神様ともね。あいつも足止めくらいは許してくれるでしょ」

創竜の手に突如、網が現れた。

「そりゃ、『ゴキ捕り網』」

その網が一気に広がり、私と邪神様を覆う。

「姑息な」

なんだこれ。

べつとりしてるし、地面に網がくっついて取れんぞ。

「黒くてしつこい生き物を止めてくれる道具だよ。なんか上手く作れると思っただけけど、大きくしすぎて、目標物がすりぬけちゃうんだよね。メルルンたちにはちょうど良いみたいだ。さっさと元の世界に戻ってダンジョンへ行くのをお勧めしちゃう。邪神様もいつかは封印が解除されるだろうから、気長に待つんだよ」

創竜がそう言うと、彼の手に銀色の鍵が現れた。

『黙って逃げればいいものを』

鍵が光り、創竜の体が薄まり始めた。

「あでゅー。『扉知らずの——』」

このままでは逃げられる。

まさにそのとき、乾いた音が響き、どこかから飛んできた礫により銀色の鍵は砕かれた。

鍵が砕かれると、創竜の体が元の濃さに戻っていく。

礫が飛んできた方を見て、創竜は笑った。

「おやおやあ、どうしてここに四英雄様がいつるのかなっ」

四方よりプラティナ、コラリイ、ソレア、ケオンが現れる。

どこからともなく姿を現したのは、彼らが私たちのパーティーとなり、ステルスで隠れていたからだ。

「愚問。私の呼び掛けに応諾したまでよ」

いやあ、だいぶ不承不承だったぞ。

事前に彼らと「邪神様が」話をし、とりあえず来るだけということでもらっていた。

まさか討ち滅ぼした相手が、その翌日に話をしに来るとは誰も思っていないようで声を止めるのが大変だった。

「話は全て聞かせてもらいました」

コラリイが創竜に告げた。

「そうだったんだ！ それなら話が早いや！ 僕が君たちの装備を作ってあげたんだよ。ちよつと逃げるのを手伝って——、おーい、どうしてみんな僕に武器を構えるのかな。構えるのはあつちだよ」

「あなたたち、およしなさい」

創竜が私を指さすが、四人は創竜に武器を向けたままである。

「先生、こいつはそう言ってますが、そもそもこいつが全ての元凶ではないですか！」

プラティナが叫んだ。

指摘に関して否定する余地はないだろう。

「そのとおりです。彼が創ったものは多くの被害を生みました。しかし、それ以上の恩恵を与えてきた。その事実から目を背けることはできません。そうではありませんか、ソレア？」

アハティスは話をソレアに振った。

ソレアは創竜の創ったコアと仲良くし、その不自由な足も創竜の作り物を利用している。

この中で一番恩恵を受けているのは彼女だろう。

「そのとおりだぜ。アハティスの旦那。あたしは別にそいつを倒そうとはおもわねえよ。だがせめて、もっとまともな物を作るようにして

もらわなきゃならねえ」

「そう言っています、オツちゃん」

アハティスは創竜に返答を求めた。

「僕はね。僕の創りたい物を、僕の創りたいだけ創る。口出しは御免だね。でも、改造は認める。僕の創った物を、君たちが君たちの使いやすいように改造すればいい。君がそうしているようにね。君にはその力があるだろ、ソーちゃん」

創るのを止めることはできないらしい。

「魔のモノを生み出す原因が貴方にあるのなら、神の名の下に貴方を裁きます」

創竜はコレリイの言を聞いて笑い始める。

「何がおかしいのですか」

創竜はお腹をおさえ、膝をぱんぱんと叩いていた。

「そりゃ、おかしいよ。神の名の下に、神を殺そうなんてね。レッキゅんの信奉してる、ゲネシス教の神つてのは僕のことだよ。昔、いろいろ創ってたときに崇拜されちゃった名残だね」

たしかに何も知らない人が見たらすごいことだろう。

訳のわからん力を持つ物を、ぽこぽこ創りだしてしまいうのだからな。

「そんな……。賢者アハティス、あなたはそれを知っていたのですか？」

「聞いてはいませんが、オツちゃんこそがそうである確信はありました。おや、なぜ消沈するのですか？ 貴方の信じた神がこうして目の前に現れた。しかも神はあなたに期待を寄せている。信者として喜ぶべき事でしょう」

コレリイの武器が震えていた。

彼女の信ずる神はたぶんこんなふざけた奴ではなかったはずだ。

「神とやら、精霊人も貴殿が創られたか？ なぜ彼らをあのよう創ったのか」

「ん？ ちょうど魔力を吸収して放出する便利な存在が欲しいなあと思ってるね。それだけだと面白くないから人格と、その機能に反する

魔力酔いも与えてみたんだ。案の定、おもしろいことになったでしょ」

ケオンの顔に明確な怒りが生じた。

剃った頭の表面に血管が浮き出ているのが見える。

「ごつめーん、そんな怒らないでよ。……さ、もう満足だよ。僕は逃げるからさ。メルルンを抑えてて」

創竜の指示に従う者は誰もいない。

それぞれ程度は違えど、全員が武器を創竜へと向けたままだ。

「うーん、話がわからない子達だな。君たちはメルルンの渡した指輪で強くなってる。でも、それを付けてちや僕を倒せないんだ。無論メルルンも同じだ。かといって、それを外せば僕とは勝負にならない。時間の無駄だよ。ほら、アツ君からも言っただけよ」

「あなたたち、武器を収めなさい。その怒りを我々の糧にしましょう。人間の進歩のために、今は彼に道を譲るのです」

アハティスが四人を諭す。

「アハティスよ。貴様は人間の進歩を謳いながら、人を信じてはおらぬな」

四人が武器を下ろしかけたところで邪神様がアハティスに告げた。

アハティスはなぜでしょうかという顔で邪神様を見た。

「貴様の言う進歩の先が、我にはまるで見えん。いずれ強くなり創造主を倒すと言うが、人にそこまでの力は必要あるまい。悪漢を倒せるほどの剣の腕、病に伏すことがない程度の治療術、不自由な身体をサポートできる機械の手足、それに暴走が起きぬ程度の魔力制御。人間の進歩に必要なのはまずそこであろう」

邪神様にしては珍しく長い台詞だった。

途中からそのことが気になって、内容が頭に入ってこなかった。

それどころか邪神様はさらに続けるようである。

「我はここにおける四人を見てきた。どれも我との彼我の差は明らかであるのに挑んできた。我には遠く及ばぬ。だが、人の世に必要程度の力を練り上げてきた。こやつらは創造主の武器を抜きにしても十分に進歩してきた。まだまだ弱いかな」

一言余計だと思う。

「貴様の言う進歩とは、『人の進歩』にあらず、創造主の道具ありきの『社会の発展』である。世の中がいくら発展しようが、人そのものが進歩するわけではない。人にとって必要な進歩とは、各人の成長である。こやつらは創造主の道具がなくとも、自ら研鑽できる存在だ」

四人も驚いた様子で邪神様を見ていた。

一言目には馬鹿めだの、カスだのと否定語が付いていたので、そんなことを考えているとは私も思っただけでなかった。

「その進歩に必要なのは、時に試練を与え、時に立ち直る意志を支え、時に成長を促す存在である。それはつまらぬ道具などではない——貴様よ。我が宿敵アハティス」

宿敵にまでランクアップされてしまっている。

なんやかんやでアハティスの力は認めているようだ。

「お褒め頂きありがとうございます。それで、邪神様はどうするとうのです?」

「知れた事よ。我は世界に均衡をもたらすため、調停をおこなう」

……あれだけ長い話をして、けっきょくそれに行き着くの?」

「世界の均衡とはすなわち、生命が生命として通常に暮らせるように保つことである。調停とはそれを脅かすモノの排除。我が創造主は調停をおこなうに値する」

「もちろんそれに手を貸す私もでしょうね」

「然り」

アハティスは笑い始めた。

隣にいる創竜もケラケラと笑っている。

「すごいよ邪神様!　そこまで喋るようには創ってなかった!　やはりアツ君の力は卓越している。僕のおもちやの力をどこまでも引き出してくれる」

満足そうな顔で創竜は頷く。

「うん。きつとまた会おう!　邪神様、それに四英雄君達もだ。もつと君たちの力を伸ばしてくれ!　アツ君。物は送るから、人の進歩を加速させてね!」

手のひらからまたしても鍵が出てきた。

鍵以外にも周囲にアイテムがばらまかれ、攻撃が阻止される。

「それじゃあみんなまたね！」

「あなたに『また』はありません」

アハティスの握ったナイフが、姿の薄まった創竜の胸に突き刺された。

「えっ……、あれ？ アツ君、なんで……？」

転移がキャンセルされたようで、実体を取り戻した創竜は苦しげにふらついた。

「私は力を得て思い上がっていたようです。邪神の言うように、社会の発展と人の進歩は確かに別物です。できることとやるべきことを混同させてしまっていました。恥ずべき事ですね」

「どうして……僕を……」

「オツちゃんの道具の力は驚異的です。私には、その力を善き方に導く使命がある。しかし、使うのはあくまで個々人。我々はまだそれを使いこなす領域には至っていない。規律を厳しくすれば、次の邪神様を私が担うことになってしまう。社会の発展と人間の進歩は、両車輪——この二つは同時にやらないといけない」

「なんで、刺したの……？」

説明が長すぎて、創竜の呼吸がおかしいことになってる。

「オツちゃんの道具はいりません。それはいつの日か、人が、人の手で創り、制御していくべきです。ありがとうございます。あなたは私にそれを気づかせてくれました。もう用はありません。人間の正しい進歩のため、ここで消え去って下さい。私なら殺せるのでしょうか？ 私自身こそ引導を渡すにふさわしい」

長々と語ったが、つまるところ「用済みだから死ね」ということだった。

『最初から戦わずにきちんと話してれば、もっと早くこうなっていただろうに……』

ほそりと言ったが、聞かなかったことにする。

「くそっ、死ぬわけには、いかない。死んだら、あいつに。あいつに会

わなきやいけなくなる」

創竜は地に臥し、焦った様子で何かを取りだした。

「ぐう、最終手段だ。メルルンは後で助けるからちよっと我慢してね」
手には綺麗な結晶が出てくる。

その小さな結晶には見覚えがあった。

『擬神結晶』

ただそれだけ呟いて結晶を握った。

私たちが放っていた攻撃が全て創竜の表面で弾かれた。

薄い結晶膜が彼を守っている。そして、それは爆発するかのように広がった。

アハティスを呑み込み、私も呑み込み、邪神様、他の四人も首から下が結晶に閉じ込められた。

『ついに使ってきたか』

淡々とシユウが呟いた。

どうするんだ。まったく動けんぞ。

私だけでなく邪神やアハティス、他四人も同じだ。

「すごいでしょ。僕の最高傑作だよ」

「ふむ。さすがは我が創造主だ」

「今さら褒めても出してあげないよ」

それでも褒め言葉は嬉しそうに受け取っていた。

「笑止。我はもうこれを学習した。ありがたく利用させてもらおう」

邪神様は当然のように宣言した。

創竜は、ぴたりと動きを止めたが、思い出したかのように笑い始めた。

「ふふふーん、それは無理だ。邪神様の術技ラーニングは腕の数と同じ。もう一杯までラーニングしてるから無理さ。わかってるよね。強がりはよしなよ」

「無知蒙昧なり。我が腕はまだ残っておるわ」

「はいはい。何とでも言っておくといひよ」

創竜は余裕の表情で、手に道具を取りだした。

「ここで怪我を治してから、どこかへ逃げるつもりらしい。」

「行くぞ。我が片腕よ。未だ術技を宿さぬ、空虚な我が腕よ」

『あいよ！ 邪神様専用スキル「スキュード・ラーニング改」の発動を確認！ やっっちゃって！』

シユウが邪神様に合図を送った。

「ふむ。わかるぞ。『邪神様結晶@劈開』」

曇り一つない結晶にピキと音が響き、次の瞬間に結晶がバキツと崩れた。

『アハティスを投げつけて！』

あいよ！

おい、ナイフを構えとけ。

私はアハティスに駆け寄り、掴んで創竜へと投げつける。

投げられた方も、投げつけられた方も何が何だかわからない様子でぶつかつた。

「う、そだ……」

アハティスのナイフがきちんと刺さり、創竜はそのまま事切れた。投げられたアハティスは気を失っている。

『邪神様、今のうちに』

「うむ」

何をするんだろうと思つたら景色が歪んだ。

あつ、これ。戻る奴だ。

そう思つたらすでに景色がぐにゃんぐにゃんに曲がっている。

地に足が着いたと思つたら、目の前には封印結晶が鎮座していた。

あのね。よく聞けよ。

私、この感覚がすごい苦手なの。

やるならやるって、事前に教えてくれ。

「わかつた。やるよ」

えっ？

『邪神様結晶@劈開』

邪神様の封印結晶がバキツと音がして割れ、そこから伸びた邪悪な腕が、私のまだ揺れている頭を掴む。

そして、景色がまたしてもぐらぐらと揺れた。

おい待て！　ほんとやばい！

またしても地面に着いたが、頭が揺れて、体が歪んでいるようだった。

喉の近くまで気持ち悪さが込み上げてきている。

『邪神様結晶@琥珀』

創竜のぱつとしない死体が、薄黒い結晶で覆われた。

『これでよし』

いや、全然良くないんだが……。

あつ、これ駄目だ。もう——戻しちゃう。

創竜勝利の味は、口いっぱい酸っぱさが満ちたものになった。

騒ぎも体調も落ち着いて、ご飯も食べれば、あつという間に別れの時間である。

この先、こちらの世界がどうなるかは知らないが上手くやるだろう、たぶん。

邪神様を始めとして、いつもの四人と、アハティス。それに見覚えのない兵士まで見送りにきてくれた。

なんでこんなに来るの？　正直恥ずかしいんだけど。

「我が片腕よ。我はこの世界でやることがある」

ああ、知ってるよ。

お前の考える世界の均衡を維持するため調停をがんばってくれ。

「うむ。我は貴様らと共に往くことはできません。瑩然たる思いをさせるが——許せ」

いや、けいぜんとかいうのがどんな思いなのかわからんが、たぶんしないから心配するな。

私も私でやることがある。ダンジョンを攻略しないといけない。

「良からう。許す。我が片腕として、あちらの世界の均衡を維持する大役を与えよう」

はいはい。

ダンジョンで私なりに調停をさせてもらおうとするよ。

「善きかな」

他の奴らも私に声をかけてくる。

一通りの挨拶をおぎなりにすると、邪神様と向き合った。

邪神様が私に手を伸ばしてきた。

私も邪神様の手へと自分の手を伸ばす。

「我が片腕よ」

手が触れあう直前に邪神様が私を呼んだ。

「感謝する」

……ああ、私はそれなりに楽しませてもらった。

術技も練習して使えるようになる……はずだ。

これで私の冒険はさらにおもしろくなる。

私も邪神様に感謝するよ。

「その謝意、受け入れてやろう」

笑いが漏れる。

まったく何様なんだよ。

邪神様はこの先どうだ？

新しい時代が始まるに違いない。

こここの奴らと協力する必要もあるだろう。

「是非もない」

間違いない大変だろうな。

それで――、

「おもしろくなりそうか？」

邪神様はククツと嗤った。

「言うに及ばず」

私と邪神様の手のひらが、どちらからともなく合わさった。

やはり慣れない感覚に包まれ、世界を渡る。

『うん……、帰っては来たね』

たどり着いた先に、結晶はもうなく、ただの洞窟が残っていた。

なんだろうな。あるべき物がなくなり寂しい気がする。

邪神様はうまくやっていけるのだろうか。

『為せば成る、為さねば成らぬ何事も』

よくわからんけど、こいつなりに応援しているのだろう。

そうだ。

街によつて、宿屋も見えていこう。

『いいんじゃないかな……。いいのかなあ……。』
なんだよ。

行つても何もないとでも言いたそうだな。

『いや、そんなことない』

洞窟を出て、少し歩き、そのまま街に入る。

最初に出会った女性が、私を見て目を見開いた。

尻餅をつき、叫び声を上げる。

後ろにモンスターが出たのかと振り向く。

視界の端にちらりと黒い影が映った。モンスターか！

そちらを追うと、逃げるように視界の隅へと高速で逃げていく。

すばしっこいな！

『ゆっくり首だけ捻つて後ろを見るといいよ』

言われた通りにやってみると、背中付近から羽が四本生えていた。

見覚えのある黒い羽だ。街の噴水へと走り、水面を見ると額に目と顔中に落書きがついている。

邪神様あああああ！

姿はすぐ戻った。攻略特典のアタッチメント(?) だったらしい。

蛇足24話 「森羅万像」

1. ←

カースス山系は王国の西から南島へ斜めに延びる大山系だ。

この山系は王国を大小に二分し、南側には神々の天蓋のあるレミジニア山系も含まれている。

その山系の中心にあり、山系の名前にもなったカースス山は王国最高峰としても、その名を知られていた。

山麓には高山都市ケオラヴァがあり、通行ままならぬ山系にあつて、王国の北東側と南西側を結ぶ数少ない交通の要所として栄えていくと聞く。

さらになだらかな裾野が美しく、風光明媚として観光客も多数訪れている。

さて、ケオラヴァからさらに山を登ったところには、中級ダンジョン——クラテイラス高原がある。

もちろん私はそれに挑戦するため、まずケオラヴァの都へと向かっている途中であった。

噂には聞いていたが、山道は整備されており歩きやすい。

馬車がすれ違えるほどに、広がっており、傾斜も緩やかである。

その代わり、道は蛇のように斜面をうねうねと何度も右に左にと続く。

もう道なりに進むのも飽きて、直線で斜面を駆けていったほどだ。

蛇行の道も収まり、ついにケオラヴァの門が見えてきた。

『ストップ』

低い地鳴りとともに地面が揺れた。

周囲の人々も身を低くして様子をうかがう。

すぐに揺れが収まり、何事もなかったかのように歩き出す。

私もそれに続いた。

十日ほど前に、遠く南西のポノス地方で大地震があったらしい。

死者が多数出て、多くの町や村々に壊滅的な被害が出たと聞いている。

避難民がケオラヴァにも押し寄せ、一時南西の門を閉ざしたとも噂で聞いた。

ちなみに北東側からは物資を売るための商業馬車が、儲け時と判断して南西へと向かっている。

離れる人と向かう人が、この高く狭い山道で交わり、どこもかしこも人でごった返している。

ケオラヴァはすでに大混雑が見込まれ、あまり楽しい気分になれない。

さて、とにかく余震がこちらのほうにも影響があるようで、ときどき先ほどのようにちよこちよこ揺れる。

大きな揺れでもないし、気にせず歩き続けても良いのだが、場所が場所なので崖崩れや落石もあるので念のため足を止めている、というよりも止めさせられている。

『うんうん』

止めさせた本人は一人で勝手にうなずいている。

『攻略するなら急いだ方がいいよ』

シユウは珍しく私を急かす。

止まれといたり、急げといたりどうしろというのか。

だいたいの場合、ダンジョン攻略前は私が急ぎ、シユウがそれを諫めるのだが今回は逆だ。

気になったので理由を聞いてみた。

『もう——挑めなくなるからだよ』

少ししてからそう呟いた。

なぜだ？ と聞き返そうとした私の声は、小さな揺れに遮られた。

ケオラヴァの冒険者ギルドは予想通りの大混雑だった。

ギルドの外まで伸びる行列を見て、私は入るのをすぐに諦めた。

避難の護衛、行商の警護、被災地の復興支援などだろうとシユウは語る。

面倒になったため、今回は前情報なしで挑むかと言ったところ、シユウに「山をなめるな」から始まる怒濤の罵倒とともに断念させら

れた。

情報を集めようと、最近よく名前を聞く「なんとか商会」を訪ねようとしたが、この都市にはないらしい。撤退したとかなんとか。

あのよくわからない商会は、どの都市にもあるものだと思っていたがそれでもなかったようだ。

『もはや、ここに置く意味がない』
ん？

よくわからんけど、さてどうしよう。

『魔術師ギルドかな』

やっぱそうなるか。

どうもあいつらとは波長が合わないんだよなあ。

あまり気は乗らないが、ダンジョン攻略のためだ。行ってみるとしよう。

案内された場所に行ってみると小さな小屋があった。

魔術師ギルドと書かれた看板が、扉の横に投げ捨てられている。

入り口前には誰もいないし、中に人がいる様子も感じられない。留守じゃないの？

いちおう扉を叩き、声をかけた。しかし、返事はない。

扉の隙間には郵便が何通も刺さっている。

こりや、留守だ。

『でも、鍵はかかってないみたい』

叩いた衝撃で、扉と壁の間に隙間ができた。

挟んであった手紙が地面にぱたと落ちていく。

中をこそそ窺うが、やはり人の様子はない。

扉の先はそのまま広めの部屋になっており、中心の大きな置物が目を引いた。

『おつ、ジオラマだ。近づいてみて』

シユウのお墨付きも出たのでお邪魔する。

近づいてみると、大きな置物はどうも山の形をしていた。

丸い形の置物に、『ケオラヴァ』と書かれたタグがついている。

そのタグよりも上の方を見ると、やや開けたところにクラテイラス高原と旗が刺さっている。

その他にも何か印やら旗やらが刺さっている。もしかして、これはこの周辺の地形やら都市やらを現したものだろうか？

シユウに尋ねたつもりだったが、返答はない。

模型を見て考えこんでいる様子だ。

手を伸ばすと『触らないで』と釘を刺された。

見てもわからんし、触っても駄目ときた。

置物の周囲を見ると、何かいろいろと散乱している。

石やら草やら、ハンマー、ノミ、なんかごついめがね、布きれ……

兜かこれは？

とにかくありとあらゆるものが地面に散らばって落ちている。

『奥の壁に行ってみて』

どうも考え事は終わった様子だ。

言われたとおりに奥へ向かう。

奥の壁には、大きな地図が描かれていた。

おそらくこの周辺を上から見た図だろう。こちらにも印がつけられている。

印だけではなく、書き込みも多い。さらにあちこちの地点から線を延ばし、その先には別の紙がピンで留められている。

その紙には、平行な線がいくつも引かれていた。

線と線の間は様々な色で塗りつぶされ、その脇もメモがびつしりと書き込まれている。

いかにも魔術師ギルドって感じだな。

部屋の中に閉じこもって、いろいろ理屈をこねて研究してる印象そのままだ。なあ？

『馬鹿は黙って』

ひどい。

言い返そうとしたが、真剣な様子なので素直に黙っておく。

『ううむ、このルートかな……。机の上を見てみて』

ようやく謎の地図から解放されて、部屋の隅にあった小さな机に近づく。

おっ。

私にもわかるようなメモが置いてある。

これってダンジョンのメモじゃないのか？

机の上の紙に、モンスターらしき絵が描かれていた。

絵には、嘴が鋭い、死骸をあさる、逃げるときは直角に移動するなどと特徴も一緒に事細かく書かれている。

『うん、ダンジョンに行こう』

しばらくしてシユウはそう呟いた。

情報はもういいのか？

『それは今、もう十分すぎるほど手に入った。エガタはすごいね』

エガタ？

『この部屋の主ね』

そうなの？

『手紙にそう書いてあった』

あ、そう。

それでエガタがすごいって。どうすごいんだ？

『この都市にいる十万人超。通行人や避難民を含めるともつと多い』

はあ、そうだね。で？

『——その十万人超の中で、今ここで起きていること、そしてこの先に起こることを、一番正確に予測しているのは間違いなく、このエガタだ』

この先に起こること？

あつ、ダンジョンが挑めなくなるって話と関係することか？

『そう。この地図を見るに、各地点を確認し、今はクラティラス高原のさらに上方にいるだろう。せめて話ができれば……』

話ができればどうなるのかは知らないが、ダンジョンに行けるならどうでもいいや。

さっそく行くことにしよう。

いざ、クラティラス高原へ！

クラテイルス高原のモンスターは中級の割に弱い。物理攻撃の効きづらいイワヤギ。

戦おうとすると逃げていくムリガアルパカ。

ちなみにムリガアルパカの毛は高く取引される。

やっかいなのが空から魔法を撃ち放ってくるホウライチョウ。

ボスのメリコンドルはムリガアルパカを弱らせておけば、そこを襲ってくるのでそこを斬りつければ良い。

アルパカを弱らせるのが面倒なので、メリコンドルは石を投げて倒してしまっている。

モンスターの強さだけで計れば、難易度は初級だろう。

難易度を押し上げているのは地形的な条件だ。

高原は山の裾野のさらにその上にある。

なんでも空気が薄く、無理に走れば高山病で倒れて死ぬこともあるらしい。

さらに天候も急変することがある。また、足場も悪く踏み外してこれまたお亡くなりになることもあるとか。

あまり攻略しがいのあるダンジョンではないが、景色は素晴らしい。い。

上を見れば雲海。かなり登ったはずなのに、頂上は雲海のさらに上にあり見えていない。

下を見れば一面に広がる緑と周囲にはダンジョンとモンスター。

広大なダンジョンを攻略している気になれる。

『よく見ておくといいよ。もう、二度とこの景色は見られないからね』
なんだかひっかかる言い方だが、こいつらしい言い方でもある。

今ある景色は今だけのもので、同じような景色でもそれは今とは違うもの——そういうことだろう。

『いや、違う』

……あつ、そう。

一通りダンジョンを回った後、シユウに案内されて細い道を進む。

途中で道からも外れて、もはやどこを歩いているのかさっぱりわからない。

『おっ、いたいた』

腰を屈めている人間がそこにいた。

背中を向けているため、顔はわからないが体格は男だ。

茶色っぽい薄汚れた長袖、長ズボン。頭には兜まで着けている。

近づくくと足音に気づき、すつと立ち上がる。

振り向いて私を捉え、目が合った。

「私に何か用事かな？」

はつきりとした声が私を射貫いた。

顔は日に焼け黒っぽく、背は思ったよりも高い。

体つきも良く、魔術師ギルドらしくない。冒険者にも見える。

顔もクツキリとしており、焦げたような無精ひげがよく似合う男だった。

メルだ。冒険者をしている。

害意はない。両手を挙げて示す。

男も手に持ったハンマーをすつと下ろした。

『俺に続けて。——魔術師ギルドを訪れたが留守で、扉が開いていたので失礼ながら中を見せてもらった』

シユウの言うように話す。

「散らばっていただろう。物には触っていないだろうね？」

『もちろん。素晴らしい観察力とその検証の成果だった。お目にかかれて光栄だ。エガタさん』

おおお、シユウが男をここまで賛辞を送るのは、こいつなりの最大限の敬意表明だ。

ここまで褒めるのは本当にいつぶりだろうか。

『貴方はこの先にあるガスの様子を見に来た。それで、どうだった？』
何のことはわからないが、そのまま伝える。

エガタの顔にわずかな動きが見えた。

「そこまで理解しているとは……、ガスの勢いは増していた。さらに一カ所だけでなく、新たに二カ所からガスが出ていた。噴出箇所は

徐々に上昇している。先日の大地震からは特に顕著だ。問題はガスの噴出と予想される現象との関連が不明なことだ。さらに成分が未検証なことだろう」

エガタは朗々と述べていく。

ガスが出ていたことはわかったが、途中からよくわからなくなつた。

『成分よりも噴出量に着目すべきだ。ガスとマグマとの関連はわかる。マグマが上昇すれば、マグマの圧が弱まり、マグマ中の揮発性成分がガスとなつて先に噴出する。すなわち、目に見えてガスの噴出量が増えているなら、すでにマグマは上昇を始めている』

内容はさっぱりわからないが、そのまま告げた。

「——いつだと考えられる?」

深刻な表情だった。

『具体的にはわからない。三日以内だろう』

今度は私にもわかった。

「……早すぎる」

エガタは眩き、そして堅く目を瞑つた。

目を開けたエガタは足下の大きな靴を抱えると、私の横を歩き去っていく。

私にかまわずスタスタと歩き去るところで、ようやく魔術師ギルドの人間らしさを感じた。

私はエガタを追いかけず、距離が開くのを待つ。

さて、そろそろどういうことか教えてもらおうか?

私にもわかるよう説明を頼むぞ。

『明日の夕方にカース山が小規模噴火。そして、明後日の朝、夜も明けないうちに大規模噴火する。これで都市の十万人、ほぼすべてが死ぬ。生存者は三十名にも満たない。その三十名も都市の外にいた奴らだ。さらに溶岩が南西に流れ、避難民もほぼ死ぬ。また、火山灰が北東の卓越風により南西に流れ、被災者に追い打ちをかける』

ごめん、理解が追いつかない。

まず、なんだっけ……、明日の昼に噴火？

『そだね』

エガタに、具体的にわからないとか話してなかったか？

『はつきり言ったら、「なんでわかる？」と聞かれて面倒なんでから言わなかった』

なんで面倒なんだ？

というかなんで噴火するってわかるんだ？

『史上最大の自然災害として本に載ってた。「セクルス歴六五年、フォティア月の陰、第十一の日、カースス山噴火。現地死傷者十萬超』
本に載ってたって未来のことでしょ？

『その通り。でも、載ってるところには載ってるんだよね』

今さらだけど、チートすごいな。

『チートと言うか、ただ未来で見てきただけなんだけどね』

で、どうなの？

チートでなんとかならないのか？

『ならない。少なくとも噴火を止めるのは俺のチートじゃ無理』

そうか、お前で無理なら他の誰でも無理だろうな。

あつ、勘違いするなよ。褒めてないぞ。

『それはわかる。さっさと逃げるべき』

逃げるべきなのは理解した。

だが、噴火したくらいでそんなに死ぬものなのか。

南の世界で火山に行ったけど、気温やガスはやばかったけどそこま
でじゃないだろ。

『火口がここのもうちよい上にできるんだ。火砕流も発生する。それが都市を襲う。その後で、山体崩壊もする』

語句がよくわからないけど、今から逃げたら助かるんじゃないか？

『逃げたら助かるよ。実際に、最初の小規模噴火でさっさと逃げた人は助かって、歴史に残るような手記も残した。見たわけじゃないから、中途半端だけどね。さてさてメル姉さんは信じてくれてるけど、都市の人が信じると思う？ もうじき噴火するから逃げろって言われたとしてだ。仮に信じたとして、住人をはじめとして商人、冒険者、

避難民も馬鹿みたいにいる今の状態で、どこにどうやって逃げろと言
うのか』

どうしようもないのか？

『ない。相手はモンスターや野党じゃない。完全に自然現象だ。勘が
良い奴は助かる』

冷たい言い草だが、こいつなりに私の諦めを促しているんだろう。

……逃げるべきと言うのに、どうしてお前はエガタに噴火のことを
伝えたんだ。

『エガタは優秀な人材だ。ここで死なすのは惜しい。避難してもら
う』

噴火するとしてだ、奴は逃げるだろうか。

都市に残る人を見捨てることができず、残るんじゃないか？

『逃げないかもしれない。でも、それはメル姐さんが言うような感傷
的な物じゃなくて、単に何が起こるのかを知りたいという好奇心的な
ものだろう』

本当にそうだろうか？

『間違いない。あそこまでの研究は人道目的ではできない。彼の心底
に知りたいという欲望があるんだ。彼が望むなら、パーティー登録し
てギリギリまでここにいるのも良い。噴火も見せてあげるし、噴石、火
砕流、火砕サージ、溶岩噴出までは見せよう。俺も見てみたいしね。
でも、山体崩壊は危険だから全力で逃げる』

お前らは見たいかもしれないが、私はそんなの見たくないぞ。

十万人の人が死んでいくのを、安全なところから眺める趣味は私には
ない。

『わかってるよ。だから、最初に言ったんだ。さっさと逃げるべきっ
てね』

そこまで聞いて私はエガタの後を追う。

私の後ろからも何かが私を追いかけている、そんな錯覚を覚えた。
おそらく、これは後ろめたさなんだろう。

エガタに途中で追いつき、私たちはそのまま領主の屋敷へと赴く。

すぐに領主に伝えて住民らの避難をとエガタは語っていた。

これに対し、シユウは『無駄』とのみコメントした。

エガタにこの発言を伝えてはいない。

魔術師ギルド支部長と極限級冒険者の緊急要請ということで、謁見の順番はパスされた。

ほぼ押し通るように、謁見の間へと押し入る。

途中で「無礼者！」やら「武器を持って入るとは何事だ！」などと声が出た。ごもつともである。

椅子に腰掛けている、白髪交じりの落ち着いた男を前に、エガタは単刀直入に語った。

「リム二伯。カースス山は三日を待たず噴火いたします」

言い終えて数秒し、ようやく後ろの扉が閉まった。

左右にひかえるお偉いさんが何かを言いかけたがリム二伯が止めた。

「エガタ魔術師ギルド支部長。それはまことか？」

エガタは「はい」と短くうなずく。

「極限級冒険者の——メル殿も同じ考えか？」

私は、そのようだと曖昧にうなずいた。

「諸君らの言うように仮に噴火をしたとしよう。どのような被害が生ずると考えるか？」

リム二伯は穏やかに尋ねた。

反応が薄い。ただ、呆れている様子ではない。

エガタは堂々としている。

シユウと同じような話を、澄んだ声で躊躇いなく説明した。

最後まで聞いた後で、右に立っていたおっさんが反論じみた疑問をあげる。

「ただの噴火でそこまで死ぬわけがなからう。ここの門は高く厚い、その上に二層もある。支部長の試算は過剰ではないかね？」

私もそれを聞いて納得しそうになる。全滅はしないんじゃないかな。うか。

エガタはさらに、避難民と南西地域への被害についても語った。

仮に都市が無事でもその周囲が無事ではすまない。

道を塞がれば、ここは完全に孤立する。

助けが来るまでに全員が死ぬ。

説明を聞いていて、ふと感じた。

こいつ、なんだか……。

左右のお偉いさんはそれでもなんとかなるんじゃないか、大丈夫じゃないかと言うばかり。

私でも信じてきたエガタの話を、どうも頭から否定しようとしていく。

『仕方ないよ。正当性バイアスもあるし、この国は火山の被害経験が少ないからね。甘く考えすぎてる。それに避難民の対応で手一杯なのに、そんなことまで本当に起きたらどう対応して良いかわからないから認めたくないんでしよう』

シユウは淡々と彼らの心理を説明した。私も彼らに同情すること大である。

いきなり三日以内に火山が噴火するからなんとかしてといわれても困るしかない。

「エガタ支部長。具体的に、どう対応すれば良い？」

落ち着いた様子のみまリム二伯は尋ねた。

「それは伯のお考えになることです。私の領分ではございません」

「もつともだ。それは儂が考えねばなるまい。個人的に支部長の考えを知りたいのだ」

エガタは初めて答えに詰まった。

奴はそれなりに思考が速いし、おそらく立場的なものも理解している。

逃げろと言って、リム二伯とやらが逃げられる立場でもないことを理解しているのだろう。

「メル殿はどう考える？」

町中に噴火するから逃げろと伝える。

命が大切な奴は逃げるだろうよ。

もちろん私も逃げる。

「冒険者らしい回答だ。この場でそう言い切れる者は多くはいまい」
そうだろうか。

けっこういると思うが。

「ケオラヴァの都はカーススの恩恵を受け、今日まであり続けることができた。儂も、儂の父も、祖父母、もちろん子供たちもだ。そして

——明日からもカーススの恩恵を受け続けるであろうな」

左右のお偉いさんもリム二伯を見て、何も言わずに顔を戻した。

エガタは口を開こうとしたが、何も言わずに一礼して場を辞した。

……つまり、どういうこと？

『何もしないってこと。なすがまま』

一番楽な方法だな。

やりたいことや大切なものも何もないんだろう。

私もエガタに倣って伯に背を向ける。

後ろでお偉いさん二人が何か怒鳴るがどうでもいい。

「エガタ」

リム二伯がエガタを呼び止めた。

エガタが足を止めるよりも速く、伯は声をかける。

「噴火がそんなに楽しいか？」

エガタは振り向かなかった。

まるで自分の顔を見せるのを避けているようだ。

伯の発言とエガタの反応で、私のもやつと感じた部分も確証がとれた。

こいつ、この状況を楽しんでいる。

エガタは振り返ることも無く扉を開けた。

だが、踏み出そうとしたエガタの足が止まる。

「お爺さま……。今の話——」

エガタの胸あたりの背しかない少女は、リム二伯を見て呟いた。

雲一つ無い晴天のような青い髪が特徴的だった。

振り返ると、初めてリム二伯に感情らしい感情が見えた。

それも一瞬だ。すぐに表情を元に戻す。

「謁見の順番が詰まっている。次の者を。部外者は外へ」

感情を消した声と私にもわかる。
衛兵たちが、少女を私たちと一緒に外へ連れ出した。

エガタとともに魔術師ギルドに戻る。

彼は山の模型に魔法で手を加え、さらに奥の壁に何か書き込みをしていた。

「ここはお茶も出ないの？」

なぜか私たちに付いてきた少女は、一番マシな椅子に腰掛けている。

エガタは完全に少女を無視。無視と言うよりも本当に聞こえていないのだろう。

この手の人間には多いことだ。自分の世界に入り込み周囲の音と景色を遮断してしまう。

「聞こえていないの？」

私は聞こえているぞ。

ここが酒場かカフェにでも見えるか？

おそらくそういうお洒落なところから一番遠い場所だ。

「ひどいところ。これは何？ 説明なさい」

ふんつと鼻息をたてると、今度は部屋の半分を占める置物を指さす。

この辺の地形の模型だってよ。

「良くできたおもちゃね」

おもちゃ扱いされてるぞ。

『まあ、何も知らなきゃおもちゃみたいなものだからね。「良くできた」って判断できてるから及第点でしょう』

こいつも相当偉そうだ。似たもの同士なのかもしれない。

シユウの採点を知るよしも無い少女はジロジロと模型を眺める。

「話は聞いてたわ。カーススが噴火するなんて、よくもそんなでたらめなことが言えたわね」

「でたらめではない。この赤い旗を見てほしい」

ようやくエガタが遠い世界から帰ってきた。

模型を挟んで少女と反対側に立ち、模型に刺さっている小さな赤い旗を示した。

「これは地表からガスの噴出を観測した地点だ。ここ一ヶ月ほどで観測点は約三倍に増えた。ポノスでの大地震後は特に顕著だ」

「そういえば、山の上で会ったときもガスがどうの言ってた気がする。」

「ガスが出たらなんですか？　そもそもポノスでの大地震と言いますが、距離が離れすぎています。そうではなくて？」

もつともな質問だ。

ポノスで大地震があったときもこのあたりはさほど揺れなかったと聞く。

だからこそ避難民はここを通過して北東地域へ逃げようとしているわけだし。

「大地震と噴火は密接な関係がある。魔術師ギルド本部がある王都、その本部長に大地震と火山噴火の関連を調べてもらった。記録に残る大規模な火山噴火が十八件、そのうち十三件は、噴火の少し前に大地震が起きている」

「約三分の二。件数が少ないでしょう」

そうだろうか。

十分に多いと思うのだがな。

「そして二点目が――」

エガタが説明しかけたところで、小さな地響きが起き、建物がゆーらゆーらとゆっくり揺れた。

「まさにこの揺れだ。先に述べた大規模噴火の十八件。その全てに噴火前の地震が記録されている。それも早い揺れではなく、今のようにゆっくりとした酔っているような感覚の揺れだ」

エガタはそこまで言うのと、部屋の奥にあった扉に姿を消した。

すぐに戻ってくると、彼は手に木製のコップを三つ抱えて戻ってきた。

コップを私たちの前にそれぞれおいて、革袋に貯めていた水をコップに注ぐ。

自分のコップの水を一口で飲み干し、話をさらに続けた。

「過去の情報をもとに、私はこれも調べた」

彼はまだ水の入っている革袋を掲げる。

「袋ではない。水だ。噴火の前は地熱により、水温が上がると聞いた。実際に数十の地点で測ってみたところ、熱くて触れない地点もあった」

さらに自分のコップに水を注ぎ、軽く口に含ませる。

「そして、最初のガスの話に戻る。ガスの噴出量が明らかに増えている。これは彼女から聞いたが、地下にあるマグマが上昇している証拠となる。——噴火はまもなくだ。これを見てほしい」

エガタは模型の端に置いた、自らのコップを指さした。

私と少女がコップを、その中にある水を見る。

小さな水面には波紋が生じていた。

『火山性微動だね。噴火ステンバイOK!』

少女の表情は葛藤に満ちていた。

理性はエガタの話信じるが、感情的には信じたくないといったところだろうか。

「……ひとまず噴火することは認めましょう。ですが、あなた方の言ったような被害が出るとは思えません」

都市が全滅するって話か。

私もそれはかなり懐疑的だ。

「噴火と言いますが、要するに火と煙でしょう。ケオラヴァには王国でも屈指の魔法使いを多数有しております。冒険者も含めるとさらに増えるでしょう。さらに、あなた方二人も使えるのでしょうか？」

「私は、小規模の地、風、それに熱魔法しか使えない」

けっこう使えるな。

魔術師ギルド所属はだてじゃないか。

私は風しか使えない上に、効果も弱く逃げに特化してる。

「呆れました。魔術師ギルドの支部長と極限級冒険者がその程度なんて。まだ、私の水魔法の方が物の役にたつでしょう。——とにかくこのケオラヴァには多数の魔法使いに、二層の門壁があります。これが

突破されることなどあり得ません」

だよなあ。

「勘違いしている。自然に意思はない。この都市を突破しようという意識はない。ただ、貯まった火を噴き上げて、周囲にあるものを燃やし尽くすだけだ」

「そんな話をしていてのではありません」

すぐさま少女は切り返した。

「たとえカーンスが噴火してもケオラヴァに被害は及ばないと言いたいのです。千五百年の歴史はそう簡単に墜ちません」

『千五百年?』

しばらくエガタと少女が見つめ合った。

先に目をそらしたのはエガタである。エガタは手に持ったコップを逆さにして模型に水を注いだ。

模型は本物の土で作られているためか注がれた水を吸い込み、すぐに水は見えなくなった。

何をしてるんだと尋ねる前に、彼は説明を再開する。

「クラティラス高原の上方を見て欲しい」

そう言つて、エガタは小さく詠唱を始めた。

言われた付近を見ていると、山頂よりも下の斜面が盛り上がり始めた。

土が崩れる段階になって、そこから水が吹き上がった。

飛び散った土と水が私たちへと飛んでくる。

『ほう……』

あちち。

頬に付いた水が熱く、水の吹いたところからは湯気も立ち上がっていた。

「噴火だ。まず、石と火山弾が上空から都市を襲う」

小さな土が、模型の中の小さな都市にも飛び散っている。

「さらに蒸気は初め上に伸びるが、しだいに下層へと降りてくる。卓越風は北西」

水を噴き上げた地点から上に伸びていた蒸気が模型へと降りてく

る。

その蒸気はクラティラス高原を下り、小さな都市を覆った。

「遅れて出てきた水が周辺を満たす」

蒸気が消えた都市へ、水が流れ込む。

都市は水没し、模型は堪えられず崩れていった。

「これが数日のうちに、スケールと物質を代え、ここで起きるだろう」

「……しよ、しよせんはおもちゃです。実際はこの通りになるとは限りません」

精一杯の強がりだということも明らかだ。

「今が夏でよかった。冬であれば雪が溶け、泥流で逃げ場もなくなっているところだった」

何の慰めにもならない。

少女は今度こそ言葉を失った。

『ついでに山体崩壊で土砂も襲うから』

沈黙する少女とは裏腹に、表情に出てないもののエガタは楽しそうだった。

なんでこの状況でこんなにウキウキしてるんだ、こいつは？

『えっ?!』

いや、そんなに驚くところじゃないだろ。

だって、この状況でこいつ異様に楽しそうだぞ。

都市は破壊され、何十万人も死ぬんだろ。おかしいだろ。

『それ、メル姐さんが言うんだ』

なんでお前も笑う？

『何百年に一度しか入場できないダンジョンがあるでしょう。メル姐さんは運良くそのタイミングでダンジョンの目の前にいる』

……そりゃ楽しいだろう。

でも――、

『ダンジョンが入場できるせいで、たくさんの方がたしかに死ぬ。でも、攻略しようがしまいが、別に人が死ぬことに変わりはない』

それなら楽しまないと損だな。

『そういうこと』

よくわかってしまった。

たしかに私がおかしいというのは間違っていたようだ。

「……どうすればよいのですか？」

少女からようやく出てきた言葉はこれだった。

三十六計逃げるにしかず。

さっさと逃げれば命は助かるらしいぞ。

「逃げる……。今から全力で逃げるように促せば、ケオラヴァの全員が助かりますか？」

エガタは先ほどから言葉を失わせている。

何も言わず沈黙を貫く。

助かるの？

『少人数で逃げるなら助かる。でも、全員は助からない。それがわかっていたから、リム二伯は静かに諦めた。エガタも逃げろと言いたかったけど、伯が自身の責務——民を見捨てて逃げることなんてできないってことに気づいて黙った。民とともに死ぬことを良しとした。そして今だ。そんなことを少女に言うことも憚れる。黙るしかない』
そうか。

それなら私が言おう。

全員は助からない。

生きたいなら逃げればいい。

「逃げて、生き延びて、私はどこに行けばいいのですか？」

『領地はなくなる。爵位も消える。ただの少女が一人、えっと……名前を聞いてなかったな。とにかく喜べ！ 生き延びれば、新しい人生の始まりだ！』

シユウの言を伝える勇気が私にはなかった。

家族や知り合いを置いて逃げ、生き延びた人生。

死んだ方がマシかもしれないと考えてしまったのだ。

『中途半端に口を開くくらいなら、最初から黙っておいた方がいいよ』
何も言い返す気にならなかった。

「魔術師ギルドの支部長なんでしょう。なんとか噴火を止める方法を考えてください」

エガタは何も語らない。

「ねえ、極限級の冒険者なんでしょう。ケオラヴァの民が助かる方法を授けてください」

少女の潤んだ瞳がこちらに向いた。

しかし、そんな目で見られても私にできることがない。

無論、生きたいと言えば連れ出すが、それを求めるとは考えづらい。

「なんで私は何もできないの、どうして……」

こんなにも無力なの、と少女は涙を流した。

『あーあ、メル姐さんが泣かした〜』

なんなのお前。

それなら、お前がなんとかしろよ。

投げ遣りになって少女の腕にシユウをくつつけた。

『力が欲しいか？』

直球過ぎるだろ。

「……欲しい」

少女は周囲を軽く見渡した後、小さな声で呟いた。

『力はお前を孤独にし、俺のことを他人に話せば貴様は死に至り、力など得なければと嘆く夜も来るであろう。引き返すことも立ち止まることも許さん。それでも欲しいか』

「……欲しい」

『ふむ、数々の惨劇を踏み、服を泥で汚し、手は血でまみれ……』

長い。もういいから話を進めて。

なんか良い方法が見つかったってことでしょ。

『そうかもね。とりあえず、こここの二人とパーティー登録して』

言われたとおりに二人とパーティー登録する。

シユウが話しても、どちらもさほど驚く様子はなかった。

エガタはなんとなく気づいていたからだろうし、少女はさつき聞いたからだろう。

『いやはや、俺のいた国も火山が多くてね。それに歴史を大きく変えるってのもあったから、どうも及び腰になっていたようだ』

それでどうするの？

噴火を止める方法を考えたんだろう。

『前も言ったけど、止めるのは俺じゃ無理』

じゃあ、噴火はさせるのか？

『そうだね。たぶんそう』

噴火はさせるが、ケオラヴァの人が死なないようにするってこと？

「つまり、効果的な避難方法があるということだろうか？」

『それもある。でも、まず二人に三つの点を確認したい』

少女とエガタがシユウを向く。

『二つ目は、まずケオラヴァ千五百年の歴史ってところ』

二人は何のことかと面食らったようだ。

『千五百年間の歴史があるって話したでしょ。その間で噴火したことはあった？ 二百年前とか』

エガタが簡潔に無いと答えた。

少女も首を横に振った。そんな話は聞いたことがない、と。

なんでそんなこと聞くの？

『俺の読んだ本だと二百年ぶりの噴火って書いてあった。俺もその数字は妥当だと感じたから、特に疑わなかった。でも、ここで二百年前に噴火したにしては、人の反応が鈍いし、さつき千五百年って聞いて、もしかして記載が一桁間違えてるんじゃないかと思った。それに調査された地層とも事実が合わない』

『二千年が妥当だろう。年代は特定できないが、地層に残る生物の死骸からその時代で噴火した形跡は見られる』

千五百年前だとなんかおかしいの？

『それは後で調べる。次。二つ目はチラツと出てた生物の死骸って話。海にいるはずの生物の化石も出てこなかった？』

何馬鹿を言ってるんだと思ったが、エガタはひどく驚いた様子だった。

「あった。標高も標高のため、鳥か何かがここに運んだものだと思っていたが、その割には数も多く、うまく説明がつかなかった……」

『プレート・テクトニクスを知らない時代ならそう思うだろうね』

ここに海の生物の化石があるのか？

なんでこんな山の上に？

『それはそのうち話す。それより今の二点からわかることがある。ここは大陸プレートが重なった場所——火山ができない場所なんだ。できないは言い過ぎだな。非常にできづらい場所になる』

でも、火山なんでしょ？

『そうなんだ。それが最後の点に繋がるかもしれない』
最後の点。

それは？

『ジオラマで、ケオラヴァからカースス山を挟んで反対側に大きな湖がある』

たしかにある。

模型でもけっこう大きく表されているな。

でも周囲に、フロガ湖という名前のタグ以外はほとんど特徴が記されてないぞ。

『それだよ。その周辺調査が少ないのはどういう理由があるの？ 絶対に調査すべき地点だと思うんだけど？』

「湖の周辺は立ち入りが禁止されている」

エガタは簡潔にそう答えた。

私とエガタは、伯の関係者らしき少女を見る。

「カーススの守り神が祀られています」

あまり関係なさそうだな。

だいたい守り神やら、よくある何々様云々というのは、ごく一部の例外を除いて石ころかなんかだ。

『その例外かもしれない』

と、言うとは？

『今回の火山活動は、俺の知る火山噴火と比べて差異がある。異物が混ざり込んでる可能性が高い。これは——』

これは、何なの？

『メル姐さんの大好きなアレかもしれない』

アレって……もしかして、ダンジョン？

シユウは沈黙で答える。

他の二人も言葉を失った中、私だけが気分を高揚させていた。

ダンジョンと決まれば行動は速い。

さっそく周囲の情報を少女から聞き出す。

聞き出すのだが、少女は詳しくなかった。

はつきりしているのは湖とその近くに祠があることだけだ。

小さいときに、祖父と両親に連れられて参ったが記憶もおぼろげと
のことだ。

少女を街に置いて、山道に詳しいエガタに案内を頼む。

道を外れ、山肌を登り、木々を分け入り、あれよこれよという間に
近くまでたどり着いた。

『慣れてるね。何度も来てるでしょ』

「……昔、兄によく連れられてきた」

へえ、そうだったのか。

その兄は今、何をしているんだ？

エガタは首を横に振った。

「ダンジョンでな。三年になる。兄、カエルムは冒険者だった」

そうか。

何も言えず、沈黙する。

「そういえば……彼女にも姉がいた」

彼女？

「ザフィリ。先ほどまで一緒にいた少女だ」

そんな名前だったのか。

「伯の孫娘で、双子だった」

だった？

「姉は彼女の青髪とは対照的な赤髪で、名は……そう、ルヴィニだ。彼
女が亡くなったのも三年前になるか」

三年前に何かあったのか？

「いや、特に大きなことはない。ただ、厄年ではあった。あの年ほど人
が多く死んだ年もない」

へえ、そういうこともあるんだな。

『見えた』

少女のおぼろげな記憶を頼りに、湖から登っていくと小さな置物がぽつんと建てられていた。

木製で、四つ足が地面に刺さり、私の身長よりもやや高いかなというくらいだ。

中に何かが入っているそうだが、そこはどうでもいい。

それよりも道が上へと続いていることだ。

祠を後にして、登っていくと、その行き止まりには大きな岩があった。

かなり大きな岩だ。私の身長の十倍近くだろうか。

首を痛めるほど見上げる必要がある。

高さだけで無く幅も同様だ。

『……ふむ、どう見る？』

こういう岩の奥にはだいたい何かがあるよな。

道が先にあったり、お宝が隠されていたりするものだ。

『そういう見方もあるね。エガタは？』

エガタは岩を手で擦った後に、岩から離れて斜面の上を見つめる。

「こちらに来て、あそこを見て欲しい」

エガタに近づくと、彼の背後の景色が見えた。

透き通った水面が広がり澄んだ気持ちになった。

振り返り、エガタの指の先をみる。

「あのくぼんでいるところだ」

思ったよりもかなり上の方だった。

確かにその付近にボコツと沈んでいるところが見える。

「この岩はもともとあそこにあったものだろう」

それがここに落ちてきた、と。

「いや、垂直方向と斜面のズレもある。この位置には落ちない。それに、あの高さから落ちた割には割れが少ない。思うに落ちたのではなく、落とされた。そして移動させた」

ほー、なるほど。

やはり、この岩の先には隠すだけの何かがあるわけだ。

『何かがあるのは間違いない。でも、隠しているというより、どちらかというと蓋をしている気がする』

この先に良くないモノがあるってことか？

『隠すだけなら、入り口を土砂で埋めて草でも植えれば良い。小さな祠を建てて、こんな岩で塞ぐのは、何かがあることは認めている証拠だ。必要だけど見たくないモノ、都合の悪いモノを出てこないようにしている』

そう言われればそうかもしれない。

しかし、どちらにせよ。この先にあるモノを知らねばならないだろう。

「どうやってこの岩をどかすのだ。熱魔法で割るにも時間がかかる」
確かにそうだ。

できそうなこともないが、ゲロゴンブレスでは大きすぎるか。

『手はある』

おっ。

『最近、手に入れたばかりのアレならいける』

……アレって、アレ？

『そう、アレ』

心当たりはあったが、あまり使いたいモノじゃない。

特に人が近くにいる状態ではな。

『他に手がないのでさっそく』

仕方ないか。

「……それは何だ？」

エガタの反応を見るに、どうやら変わったらしい。

創竜を封印したときに得たスキル。スキルではなくアタッチメントらしいがよくわからない。

とにかく、どんな硬い岩だろうが金属でも割ることができるようになったらしい。

今まで戦いづらかった硬いモンスターもたやすく倒すことができる。

『邪神様結晶@劈開』

以前に試したとおりだ。

刃を岩肌につけると、バキバキと音をたて、岩は粉々になって崩れた。

素晴らしいスキルと言わざるを得ない。

ただし、姿が変わる。

「なるほど人と思えぬ力だとは思ってはいた。それが真の姿という訳か」

いや、違うから。

これは……、何と言えはいんだろな。

かりそめの邪神様とでも言うべきか。……余計おかしいか。

『それより道が出てきたよ』

見ると、岩が割れた先には道があった。

先は暗く、奥は見えない。

異臭と空気の流れが私たちを誘っていた。

何でこの姿のままなの？

『岩への対処が多そうだからね。いちいち変身させるのも面倒だし』

まあ、エガタもないからいいんだけど。

でも翼がときどき壁に引っかかって、ガリガリとうるさい。

エガタには危険だから付いてこさせていない。

危険というよりは足手まといという側面が大きいだろう。

周辺の環境を調査してもらうことにした。

それにしてもモンスターがいないな。

ダンジョンだと思ったが、ひよつとして違うのか。

『いや、たぶんダンジョンだね。あまり感じないだろうけど、火山ガスは出てるし、温度も高くなってきた。なにより魔力が濃い』

ダンジョンなのにモンスターがいないって言うのと、もしかして竜と関係があるのか。

竜が関係するなら噴火くらい起こすんじゃないか。

『たぶん関係ない。竜が関係してるなら、もっと異常な火山噴火になると思う。モンスターが出てきてないのは単純にまだ位置が浅いだ』

『けかと思う』

シユウの予想は正しかった。

奥に進むとモンスターが出てきた。

ガス状のモンスターや、ゴーレムもどきのモンスターだ。

それにしても長いな。

たぶん下っているのだろうが、かなり奥へと進んでいるはずだ。

もうそろそろボスが出てくるなり、ボス部屋があつたりしてもいいんじゃないだろうか。

『いや、まだまだじゃないかな』

ここでもやはりシユウの言うとおりだった。

道はまだまだ続き、ガスはより濃く、温度は高くなってきている。

ついには赤い流体が道を遮るようになった。溶岩である。

敵の種類も変わってきている。今までのモンスターに加え、火の玉や溶岩のゴーレムが出てきた。

苦戦はしていない。暑さの対策はしているし、モンスターも強くはない。

無駄に道が長いし、中級くらいか？

『上級。環境が悪すぎる。普通に攻略するなら、明かりとガス、高温の対策をしないとイケない。足場も良くないし、マグマの間欠泉噴火も厳しい。これでモンスターが強かったら超上級だよ』

そんなものか。

幸い環境対策はチートで完璧なので問題にならない。

モンスターは問題にならないから、ランクを見誤っていたようだ。さらに進むと足場がほとんど溶岩になってしまった。

モンスターは相変わらずだが、道が大幅に狭まり戦いづらい。

溶岩に足を突っ込んででもいいんだが、深さがわからないのでシユウからは止められている。

それにねばねばして足を取られるのもあまり好きでは無い。

そこを進み、ボス部屋の扉にたどり着いた。

周囲は文字通り火の海だ。

そんな中でボス対策を行う。

『まず間違いないくマグマを生み出すボスだ。足場が全てマグマという可能性もある。マグマそのものがボスと言うこともある。そうなる」と超上級のボスということも十分考えられる。なにせこの国の最高峰にあるダンジョンだ。それくらいの難易度のダンジョンであつても何の不思議もない』

多くのダンジョンは道中の様子とボスの特徴が連動している。

道中にマグマやガス、岩が出てくれば、ボスもそれに関係したモノであるだろう。

それにボスを倒すことで、ダンジョンに影響を与えることもある。ボスが倒されているときのみ出てくるモンスターや、環境が変わるものも見たことがあつた。

シウウの言うようにマグマを生み出すボスを倒せたなら、噴火をしなくなることもあり得るのかもしれない。

『そう、今回は倒した後が肝要だと思つてる』

『どうということ？』

『だいたいこういう系のお約束は、ボスを倒した後に溶岩が襲いかかつてくる』

やばいじゃん。

『やばい。全力で逃げないといけない。そのまま噴火もあり得る』

ええっ、噴火もしちゃうの？

『仮にマグマが生み出されなくなつても、貯まつたモノはどこかに流れ出る。ただ、今回、あの岩を取り除いたことで、溶岩の出入り口ができたのかもしれない』

あそこから溶岩が出てくると？

『うん。今回のダンジョンの道中こそ、地上に続く一番大きなマグマの通り道だ。あの入り口がそのまま噴火口になり得る。溶岩の流れ出る先は湖。ケオラヴァとは頂上を挟んで反対方向だ。被害も減るだろう』

そこまで考えていたのか。

『それくらいは考えないといけない。さらに、その後も大変だけど、ここはまた別の問題だ。ひとまずボスといこう。耐性スキルは万全。』

ボスがマグマだろうが、ガスだろうがなんとでもなる。足場もアイテムで切り抜けられる』

私はボス部屋の扉に手をかける。

扉は周囲の景色が嘘のように、ひんやりとしていた。

軋む音を立て、扉はゆっくり開いていった。

シユウの予想はここに来て外れた。

ただ、それを責めることは私にはできるはずもない。

こんなボスになるとは、私自身も想像の端にすらかけていなかった。

ボス部屋には、マグマの赤も、岩石の黒も、ガスの白っぽさもない。

岩のごつごつさもない。部屋にはあちこちに私が映っていた。

床も、壁も、天井も、扉すらも鏡面になっている。

合わせ鏡となっており、幾千幾万の私が、縦横無尽の鏡の中に立ち尽くしていた。

唯一、部屋の床、その中心部に足くらいの大きさで四角い真っ黒の部分がある。

『構えといて』

シユウの声も真剣そのものだ。

ボスが姿を見せていないことも、私たちによりいつそうの緊張をもたらししている。

鏡に映ったぼんやりとした私が動いた。

すぐにおかしいと気づいた。なぜなら私はあんなにぼんやりしていないし、動いてもいない。

鏡の中の私は、鏡の奥から近づいて、曖昧な鏡面を越え、こちらへとやってきた。

さらに右の鏡面、左の鏡面、さらには天井、床、後ろからも私が出てくる。

鏡の私たちは間抜けな声を上げて襲いかかってきた。

結論から言おう。

戦闘は楽勝だった。

『まあ……なんだ。説明はいらないよね』

ああ。緊張したのが馬鹿みたいだ。

似たようなことが前にもあった。

私の姿を模倣したモノは、素の私の模倣でありチートの効果が乗らない。

つまり、初心者クラスもまともにクリアできない力量の存在が大量に襲ってくるだけだ。

もちろん勝負になるはずもない。

自己を見つめ直せという新しい精神攻撃なんじゃないかと思ったほどだ。

ボスが弱いタイプのダンジョンだったのか。助かったな。

『超上級じゃないかな。これ、チートなしだとめっちゃやくちや難しいでしょ。どうやって勝つんだろう』

……たしかにそうだ。

自分と同じと思われる力を持ったモノが六体出てくる。

装備やアイテムもおそらく同じだろう。同じ戦闘能力で一对多数になる。

単純に数の暴力で負けてしまうことになるのではないか。

『うーん、なんだろう。何か見落としているような気が……』

何か考えている様子だが、とりあえずアイテムを拾う。

——虚像なき鏡のカーズス

なんだかよくわからんアイテムだな。

出口は……どこだ？ 一面が鏡でどこが扉なのかわからないぞ。

『んー、あれ？ どっちだっけ？ 後ろかな。そう、もうちよつと右。

そのまままっすぐ』

言われた通りに進んで行く。

気持ち悪い部屋だ。合わせ鏡で上下左右どこまでも部屋がずっと続いている。

それに、動けば部屋がずれて、ぐねぐねと繋がるので余計に気持ちが悪くなってくるな。

たどり着いた鏡面に手をかけて、押してみる。

手応えがあり、ゆっくりと鏡面は奥へと動いていく。

『そうか、鏡に俺たちが映ってないんだ』

部屋から出た後にシユウがそう言った。

『まあ、あれが鏡じゃなかったで説明がつくか……』

もうどうでもいいじゃないか。

それより見ろよ。ほら、すごいぞ。

ボス部屋から出ると、一面を覆っていたマグマがなくなっている。

『……ん？ マグマが全部引いてる？』

素晴らしいな。

それじゃあ帰るとしようか。

道はほぼ一本道だから迷うことも無い。

『とりあえず様子見かな』

そうだな。

モンスターもいなくなってる。

もしかしてダンジョンじゃなくなってしまったのか。

『かもしれない』

それは、残念なことだ。本当に。

モンスターも溶岩もない、おもしろみのない一本道をひたすら戻っ

ていった。

ようやく光を確認できた。ついに入出口にたどり着いたようだ。

眩しさのあまり、手で光を遮る。

道を進み、目も慣れてきたので手をゆっくり下ろした。

『——あそこは、何？ 湖は？』

湖？ 何を言ってるんだ。そんなものないぞ。

眼下にはフロガの都が、今も溶岩に飲み込まれることなく残っている。

どうやらダンジョン攻略は大成功だったようだな。

それじゃあ、戻るとしよう。

カエルムやルヴィニも待っているだろう。

『カエルム、ルヴィニ……。やられたね』

何をやられたんだ？

『わからない。時空間耐性はついてた。何かに何かをやられて何かおかしいことになってる』

なんだそりや……。

とにかくだ。都に戻って戦果を報告するでしょう。

こうしてマグマは引き、フロガは平穏な明日を迎えることとなった。

2. →

攻略の夜は、リム二伯の屋敷に泊めてもらった。

宿屋はどこも避難民やら商人、冒険者でいっぱいだったのだ。

フロガの都を救った恩人として、ささやかながらも食事会が催された。

ルヴィニの姿が見えないので、尋ねたがどうも部屋から出てこないとのことだ。

リム二伯も私も疲れていたので、すぐに散会し与えられた部屋に行くことになった。

部屋のベッドに寝っ転がると、扉がノックされた。

「入ってもよろしいかしら」

ルヴィニの声だった。

どうぞと軽く声をかけるとすぐに入ってきた。

赤い髪を垂らし、目元がやや腫れているようにも見える。

「このたびは本当に申し訳ありませんでした」

開口一番に謝られた。

いろいろと言われたのでその謝罪なのだろう。

別に気にしてはいない。

冒険をしているとよく言われるからな。

「でも……」

実際、お前の言うことは正しかった。

私はダンジョンを攻略したかったのが一番だ。

ここを救うことになったのは、そのおまけのようなものだぞ。

「それでも！ そうだとしても貴方は、この都を、多くの人たちを救ってくれました。私は口だけで誰一人助けることもできなかつた！」

まだ小さいんだから気にするなよ。

これから大きくなつて力をつければいいだろ。

「駄目です！ それでは駄目なんです」

なにやら必死の形相だった。

なぜ駄目なんだ？

「妹に会わせる顔がない」

妹がいるのか？

『その話、詳しく聞きたいな』

お前は黙ってる。

いつから少女趣味になつたんだ。

「妹——ザフィリは三年前に死にました」

『ほう。三年前』

三年前つて言えば、カエルムも弟を亡くしたとか言つてたな。

「存じています。近くで見ました。そうなのです。知っているのに、

私は彼にも由ないことを言つてしまいました」

あいつ、気にしてないつて言つてたぞ。

あれは自分が未熟だったから、お前のそのとおりだつてさ。

「そんな……」

ルヴィニの目頭に雫が貯まり始めていた。

三年前の火山噴火で、山の東側に行つていた人が多数死んだと聞く。

カエルムもそのときに弟を亡くし、そこで冒険者を辞めて山岳警備隊に入ったと話していた。

『火山噴火ね……』

「彼は何も悪くありません」

そうだな……、そうかな？

奴は伯の意思に背き、都を追われる覚悟を持つて、禁忌と言われたダンジョンの入り口までの案内を引き受けてくれた。

結果がたまたま良かっただけで、やつてゐることはお前が言つたとお

りじゃないか。

「そんなことは、ありません」

彼女は奴に対し、無責任な行動だ。貴方のせいで妹が死んだ。貴方が悪いと怒鳴り散らした。

正直に言おうと、子供の癩癩だと奴は笑っていたのだが、言える雰囲気じゃない。

「私……私……」

ぐすぐすと泣き出してしまった。

めんどくさい奴だな。

明日の朝に奴と会う約束をした。

今日は忙しくて互いに時間がとれなかったからな。

そのときで良ければ一緒に来れば良い。言いたいことがあるなら直接言え。

その後、落ち着くまでルヴィニは部屋にいて、一礼して部屋を出た。扉越しに小さくありがとうと聞こえた気がした。

『知らない深夜アニメのＣパートだけ見させられた気分だ』

どういうこと？

『過程が一切不明で、知らんキャラクターのギャップを見させられる気分』

ますますわからなくなつた。

ふーんって感じだ。

『そう、まさにそれ。ふーん、だからなんなんだって気分。その前も気にならないし、後も見える気がしないって感じ。毒にも薬にもならない』

一番駄目じゃん。

やれやれ、とにかく長い一日だった。

明日はようやく目当てのダンジョンが攻略できる。

朝にカエルムから情報を手に入れて、がつつり挑むこととしよう。

『ダンジョンの名前はちゃんと覚えてる？』

灰高原クラティラスだろ。

ふふん、ダンジョンだからな。ちゃんと覚えてるよ。

さあ、早く寝て明日に備えよう。

早朝になり、すぐに支度を始める。

予定していた時間になり、カエルムと会い、付いてきたルヴィニも謝罪をして関係は修復された。

禁忌とされた場所へ私を案内したカエルムの罰は、今回の功績と相殺されゼロになった。

とりあえずギルドで聞けなかったダンジョンの情報をカエルムから仕入れる。

ダンジョンまでの道や、ダンジョンの構造とモンスターの種類をきちんと聞くことができた。

さあ、いざゆかん。

灰高原クラティラスへ。

道を進むと徐々に火山灰やら小さな石が目立ち始めた。

山の西側と比べて、東側の景色はまるで違うモノになっている。

草の緑も、地面の茶色もない。石と火山灰の降り積もる灰色の景色だった。

噴火が落ち着いたとはいえ、雨と雪で固まった灰は簡単に流れないものらしい。

三年前まで観光地だった高原は、今や立派なダンジョンになってしまった。

西側で雑多になっていた人の姿は、こちら側ではない。

灰の影響で、人どころか他の生物の姿も消えてしまっている。

唯一と言って良い生命体がモンスターだった。

かつてここにいたという動物が、噴火の影響で変わったと言われている。

他の誰かは、彼らは今でも、かつてここで見た景色が忘れられないと話しているとか。

物理攻撃の効きづらいドロヤギ。

戦おうとすると逃げていくハイガアルパカ。

ちなみにハイガアルパカの毛で灰がないものはレアであり高く取

引される。

やっかいなのが空から魔法を撃ち放ってくるフンセキライチヨウ。ボスの火弾コンドルはハイガアルパカを弱らせておけば、そこを襲ってくるのでそこを斬りつけければ良い。

アルパカを弱らせるのが面倒なので、石を投げて倒してしまっている。

モンスター自体は強くないのだが、環境が悪い。

積もった灰で足が取られる。元の地形が高地のため危ない。

さらに灰が舞うと、目や口、喉に肺まで痛めるということでゴーグルにマスクが必須だ。

雨が降るとさらにひどい。火山灰が雨を吸って重くなる。

さらに高度があり、走り回ると高山病で倒れる。

昼過ぎくらいにはダンジョンも一通り回ることができた。

どうしようか、もう帰ろうかな。

『行ってみたいところが二カ所ある』

どこだ？

『一カ所はここから上にある三年前の噴火口』

危険だから近づくなと聞いているが、今は落ち着いているから大丈夫なのかな？

チートもあるしなんとかなるだろう。

もう一カ所は？

『ケオラヴァ』

どこそこ？

『ここのもうちよつと下にあるとこ。カエルムとルヴィニの兄妹が死んだところだね』

お前、趣味が悪すぎないか？

『ダンジョンがあるかもしれない』

行こう。

先にそっち行く？

『いや、先に行くのは噴火口。すぐ近くだからね』

そっちはどうでもいいなあ。

仕方なく、言われたとおりに道なき道を登っていくが、けっこうきつい。

灰で足を取られるのが地味につらいものだ。

やっと到着した。

見えていた距離は近かったが、それ以上に感じた。

それでここが何なの？

『まだ弱いけど活動してるね』

クレーターの中を見るとまだまだ赤い部分が見えた。

南の世界の火山ほどじゃないが、こちらも相当大きいな。

小さな村ならすっぽり入ってしまうんじゃないかと思うほどだ。

『うん。思ったよりも小さい』

シユウは逆の感想を抱いているようだった。

『ここから噴火して、火山弾をまき散らし、火砕流が高原へと流れ下り、さらに下のケオラヴァを襲った』

さつきも気になってたがケオラヴァって何だ？

高原観光用の避暑地兼休憩所のことか？

『こっちだとそうなるね』

『おいおい、こっちって何だよ。』

あつちはどこにあるんだ？

『それを確認しに行くんだよ』

冗談で笑って聞いたなら真剣に返されてしまった。

登りもつらいが下りもつらい。

足が取られるし、すべるし、道もないに等しい。

『どうして三年前に噴火したんだろう？』

『そんなこと私に聞かれても。』

『不思議なんだよね。三年後に来たのかと思ったけど時間軸は同じだ』

『外の座標も同じだった』

『だ』

はあ、そう。

『外の座標も同じだった』

そうなんだ。

『これは時空間耐性も効いてたことから明白っちゃ明白なんだよね』
……さつきから何の話なんだ？

『あり得そうなのはパラレルワールド』
だ、か、ら、何の話？

『ダンジョンの話』

それならなおさら私にもわかるように話して。

『パラレルワールドならメル姐さんは特異点のはず。その記憶まで変わってるのはおかしい』

どうやら話す気はないようだ。

『三年前の噴火がなぜ起きたのか？』

最初も聞かれたけど、私にそんなことを聞かれても困る。

明日、もう今日か……に小規模の噴火で、明後日に大規模噴火だっけ。

『……それは俺が言った？』

そんなことを言うのはお前か酒屋の酔っ払いだけだ。

チートだけど未来で見ただけだとかなんとか。

『ケオラヴァ、千五百年の歴史は？』

ケオラヴァが何か知らんし、千五百年ってのも知らん。

ルヴィニやカエルムは百年前って話してたし、お前もそうそうって相づちを打ってたろ。

あれ、二百年だったっけ？ 前回の噴火が二百年だったか？

『え、嘘。ちよっと待って』

何なの？

昨日からおかしいぞ。

『……こつちが正史か？ あのとときに修正された？ 千五百年と比べれば三年の差はどうということはない。小規模噴火もダンジョンを挟めばありうる。しかし、都の名前と位置は？』

何なんだろう。

もう一人で勝手にやって欲しいね。

ようやく言われた場所についたが何も無い。

あたり一面が灰色と一部茶色で、それ以外のモノが石ころくらい

だ。

『火砕流の後に溶岩も流れて、ついでに灰で埋もれたからね』

ダンジョンは？

『ないねえ』

えええ。

ここまで来て何もなし？

『それに山岳警備隊でも調査してるだろうから遺留物も期待できない』

遺留物とか重いからいらさないよ。

ダンジョンがないとか嘘つきかよ。嘘吐きシユウめ。

「あああ」

なに嘆いてんだ。

嘆きたいのは私だよ。

『俺じゃない』

はあ？

「あああああ」

あつれ、何か地面から聞こえてきてないか？

『しかもメル姐さんの真下からね』

……マジで？

足を動かすと、元いた地面からぶわあつと何かが生えてきた。

びくつと体が震え、足が勝手に下がる。

『手だね』

た、たしかに手だな。

ひどく汚れてはいるが、人間の手に見える。

『抜いてくれて感じて見える』

不気味に動いているが、そう言われればそう見えてくる。

恐る恐る近づき、彷徨う手をつかむ。

引っ張ると手首からちぎれてとれてしまった。

私に掴まれた手が、単体でぐねぐね動いて不気味すぎる。

「がああああああ」

ごめん！

誰かわからんけど強くやりすぎた。

『周りから掘り起こそう』

まさかのシユウを使つての掘り起こし作業が始まった。

墓荒らしの気分を味わっているようだ。

がんばつて掘り起こして出てきたのがなんとゾンビである。知つてた。

『あつ……』

襲いかかつてきたのでシユウで切り倒した。

ちやんとアイテム結晶も出てきた。

わあい、ダンジョンだあ。

——エガタの模型。

うーん、なんだかよくわからんアイテムだな。

『大当たり！ 大当たりだよ！ すごいよメル姐さん！ 恐るべき運だ！』

ふふん、まあな。

珍しくべた褒めだ。悪い気がしない。

『さすが足と運だけで食つてきた奴は違う！ 早く解除して見せて！』

一言余計だよ。

とりあえず結晶を解除して広げてみた。

なんか灰の上にてっかい模型がどーんと出てきた。

なんだこれ？

出来の悪いおもちゃか？

『……この辺の地形を模型にして表してるの』

ふうん。

『触らないでね』

伸ばしかけていた手を引っ込める。

『ふむ』

何かわかつたのか？

『わからない。模型はともかくこれじゃ何も事態を把握できない』
駄目じゃん。

「ああ、ああああああ」

またしてもゾンビが復活した。

襲いかかってくるかと思っただが模型をジッと眺めている。

「ああああああああ、ああああああ」

ぐすぐすの腕を模型に伸ばして呻いている。

何か言ってる、のか？

『クラティラス高原、その上方を見て欲しい』

そうなの？

どうやったら今のでわかるんだ？

『ちゃんと見て』

はいはい。

模型の地形を目で追い、クラティラス高原を見つけ、その上を見る。

「ああああああ、ああああああああ。ああああああああ、ああ

ああああああ」

『予想通り、噴火はここから生じた。黒煙と稲光が空を突き抜け、こちらへと降りてきた』

ゾンビが何やら魔法を使った。

「ああああああああ、ああああ・ああああああああああああああ」

『多くの人が空を見上げ、逃げる人、立ち尽くす人と様々だった』

火山の説明から、人の説明に移った。

「あああ、あああああああああ、あああああ、あああああああ。

あああああああ。あああああああ。あああああああ」

『困惑、あるいは錯乱する人間が多い中、ただ一人、毅然としていた少女がいた。青い髪の少女だ。知っている。伯の孫娘だった』

それってもしかしてルヴェイニの……。

「あああああああ、あああああああああああああああ。あああああ
あああああああ！」

『彼女を見て、ようやく私は自らを振り返った。そうだ、私は楽しんで
ていた！』

何がそんなに楽しかったのだろうか？

「ああああああああ、ああああああああああ？ ああ、あああああ

あああああ……。ああ、すあああいにいああん、」

何かを言い残し、ゾンビは地面に崩れていった。

まだ、モンスターとしての存在が安定していないのかもしれない。
ちなみに最後の台詞は何だった？

『素晴らしい景色だ、これを楽しまずにいられるだろうか？』

もつと長くなかったか？

『ただ、他にできることはあったのかもしれない……。ああ——』

シユウは続きを言わなかった。

『ゾンビになって出てきた時点でそんな予感はしたんだ。未練があるからよみがえるわけだからね。……追究者には、なりそこねたか』

臆気にしか聞こえなかったんだけど、最後の一言って——、

『「すまない兄さん」だね』

やっぱりそうなのか。

『俺は、奴の贖罪なんて聞きたくなかった。最後まで火山のことを語って逝って欲しかった』

もしかして、さっきのゾンビはカエルムのか？

シユウは何も返さない。それが明確な答えだった。

いつ知り合ったのだろうか。

『昨日手に入れたボスのドロップアイテムを出して。「虚像なき鏡のケース」って奴。残る手がかりはこれだけだ』

ああ、あれか。

袋から出して、結晶を解除する。

おっと思つたよりも大きいな。

出てきたのは角張った棍棒のような物だった。棍棒というにはやや短い。

棍棒の「ような」と付けたのは持ち手があり、その先の殴る四角形の各面に鏡が付いていたからだ。

『ああ、そっか』

鏡の大きさは顔よりもやや広く。背後の景色を映している。

鏡のはずなのだが私は映っていない。周囲の景色だけが反射して映りこんでいる。

ぐるりと回し、他の面の鏡も見てみるが、当然鏡なので同じ景色……になつてないぞ。

『ちよつと角度を変えてみて』

言われたとおりに鏡の角度を変えてみる。

地面が見えるように、角度を変えるとそこに地面は映らなかつた。

正確には私の立っている地面が映らなかつただけで、下の方に地面が見える。

その地面には多くの人が立っていて、私の方を見つめている。

『違う。メル姐さんを見てない。もつと先を見てる。ちよつとそのまま体を半回転させてみて』

言われた通りに、ぐるりと回転させる。

山頂方向を向いていたが、山頂に背を向けることになった。

そして、鏡を山頂が見える角度に調整する。

山から黒煙が噴き上がっていた。

私は思わず振り返ってみたが、灰色の山は特に何も変わっていない。

鏡を見直すと、灰色の山ではない。葉の緑と地面の茶色が混ざつた

山だった。

なんだこれ？

『噴火してる』

いや、それはなんとなくわかる。

この景色は何なの？

『……そうか。ここはパラレルワールドじゃないな。虚像世界でもない。正史でも何でもなし』

はあ、そうするとここは何なの？

『ただのダンジョンだよ』

それはわかる。

ゾンビも出てきたし、ダンジョンになりつつあるな。

『違う。この地点という狭い話じゃない。カースス山全体がダンジョンなんだ。世にも珍しいダンジョン内包型のダンジョン。ダンジョンの中に別のダンジョンが入ってる。それどころか都も道も、地底す

ら、もちろん人もね』

そうなの？

『地震は起きて、避難民が殺到し、風向きも同じ。カースス山より外側は特に変わってない。内部のダンジョンや都、そこに住む人がオブジェクト。メル姐さんや他の入山者は外部からの光。そう、ここでは俺だけが観察者。さながらカースス万華鏡だ』

わけがわからん。

『実は昨日、今見た映像のところにいたんだよ』

何を言っている。

そんな記憶はないぞ。

『内部に入った光は反射して通過するだけ。自身の変化を観測できない』

うーん、納得いかんな。

じゃあ、ここはどこなんだ。

『万華鏡の中に映し出された一つの映像だよ』

……それ説明になってない。

『ボスを倒したことでオブジェクトケースが動いた。景色が変わったんだ』

もう意味不明な説明はいい。

何をどうすればいいんだ？

『それがわっかんねーんだな』

そんなあつけらんと言われても困る。

『たぶんこのままダンジョン——カースス山を出ても何の問題もないだろうね。出るなら早めが良い。明朝に噴火が起きる』

待て。噴火は止まったはずだろ。

現にマグマも消えて地震もなくなった。

鏡の中ではなんだか噴火しているようだが特に現実で影響はない。『映像が変わっただけ。外に火山灰が飛んでくる事実がある以上、明朝の噴火は間違いなく起きる。ただし現状では、内部の人間にその観測ができない。俺ですらね。まあ、その結果、多くの人が死ぬ。以前の歴史よりも悲惨な結果になる。今回は異常が事前に察知できない

んだからね』

そんなことがあるの？

『現にあるからあるとしか言えない。納得はできないだろうけどね』
こんなダンジョンをどうやって攻略しろと言うんだ。

『いや、ボスはすでに倒した。倒した結果がこれ』

うーむ、言われたとおり立ち去るとするか。

さほどやばい感じもしないので、逃げるというのも変な話だが。

『そこが引つかかる。俺としてはどう考えてもやばい状況だ。メル姐さんの第六感が働いてないのが不思議なんだよね』

第六感というのは少し格好良すぎる言われ方だ。

私は、ごくたまに逃げなければという衝動に襲われる。

その衝動に襲われたときは、例外なくやばい事態が生じているのだ。

シユウですら危険を察知し得ない状況のときでも起こるので、割と便利な感覚なのだ。

今回はそれがまったくない。

『ふーむ、まだ瀬戸際ではないということかもしれない』

破局まで時間の猶予がある？

『そう。でも、かといって何かできるかと言われるとね』

何もないのか。

『……あるにはある』

どうにも乗り気ではない様子だった。

またしても、禁忌の洞穴のダンジョンである。

乗り気ではないシユウの言に連れられてやってきた。

モンスターも出てこないのだから果たしてこれをダンジョンと呼んでいいのかはわからない。

まったく問題はない。駆け足で奥へと進んで行く。

ボス部屋の扉を開けると、相変わらずの鏡が私を待ち受けていた。

鏡はあるけれども、私の姿はやはりない。

ボスも出てこない。

『ボスのアイテムをこの部屋の中心に置いてみて』

床の中心にあつた四角い黒の部分を見る。

よくわからないまま、鏡の棍棒を取り出して、ひっくり返しておいてみる。

ぴつたりと填まり動かなくなった。

……おお。

そして、四方の景色が変わった。

後ろの鏡は、先ほどまであつた灰高原が映っていた。

正面の鏡はなんだろうか。緑の高原とその上には黒煙が噴き上がっている。

右の鏡は唯一何も映らない。人の姿も何もない。ただの風景だ。

一番目を見張るのが左の鏡だった。

全てが赤と黒に染まっている。溶岩が流れ、マグマが噴き上がっている。

『なるほど、右の映像にあるのか。そっちの鏡を押ししてみて』

言われたとおりに溶岩の映像へ進み、その鏡を押す。

かなりの抵抗がある。

まるでこの先にマグマが貯まっているかのようにであった。

3. ↓

ボス部屋から出ると、外は火の海だった。

足首だったのが腰のあたりまでマグマがせり上がっている。

シユウの言うとおりであった。

ボス部屋を出た後からが本番のようだ。

『早く逃げよう。ところで上に出たらどうすれば良いかわかっている？』

馬鹿にするのも大概にしてくれ。

さすがにさつき聞いたばかりだからな。まだ忘れてないぞ。

『ほう。じゃあ、復唱してみて』

このままマグマを西側に出させて、東の登山道からの流出を少しでも減らす。

そして、外で待つカエルムとエガタとともに一緒に東へ向かい、溶岩が引いたクラテイルラス火口を攻略する。

そこにいるはずのマグマを生み出しているであろうボスを倒す。

『うん。なるほどなるほど。ルヴィニとザファイリは?』

……何だそれ?

とにかく時間の勝負なんだろ。

私の記憶を試すよりも、ここからの脱出に力をいれさせてくれ。

今もマグマが下からすごい勢いで、こちらに向かってきているんだからな。

外に出るとすでにあたりは暗かった。

「メエル!」

「メル殿」

聞き慣れた声の方を向くと、二人の男がこちらに手を振ってきていた。

「聞かなくてもわかる。成功したんだな! こつちも調査が終わったところだ!」

背の高いカエルムが私の方を叩いてくる。

喜びあっている場合じゃない。

すぐにここにマグマが噴き出してくる。

「兄さん。マグマが湖に入れば水蒸気爆発を起こす。私は下の道から火山警備隊に合流し、注意を促す」

「ああ! 頼んだぞ! 俺はこのままメルと一緒に火口へ向かう!」
行こう。

一刻を争う。

「兄さん」

背をむきかけたところで、エガタが声をかけてきた。

「生きて帰ってきてくれ」

「——ああ! エガタ、お前もな!」

二人は突き出した拳を合わせる。

『やべえな。出会って一分もしないうちに、死亡フラグをたてやがっ

た』

こうして私はエガタと別れ、カエルムとともに火口へ向かうこととなった。

火口へ向かう道は、道ともいえない地形だった。

しかし、カエルムの足取りに迷いはない。

「子供のときからずっと走り回ってたからな。目を閉じてても迷わねえよ！」

心の声が聞こえたかのようにカエルムが返してくる。

「大丈夫だ！ 俺がいるんだ！ 絶対にうまくいく！」

その根拠は？

「昔は冒険者、三年前の噴火からは火山警備隊でやってきた。何度も死にそうなこともあったが、いつもなぜか生き残った。安心しろ」

経験論だが、こういうことを言う奴はだいたい死んでる。

『うん……』

シユウも言葉短く肯定する。

「それに、ケオラヴァにかみさんがいてな！ もうちよつとで産まれるんだ。お腹をもう蹴るくらいに大きくなってる。絶対に噴火なんかさせねえよ！」

なんと！

それならがんばらないとな！

『ちよつと、そいつ黙らせて』

なぜだ。

こいつの話の話を聞いてるとがんばろうって気になるぞ。

「火口を攻略すればケオラヴァは救われる！ みんな助かるんだ！」

『こいつの口を止めて！ 止めるんだ！ 速く！』

マジで怒鳴り始めたので、カエルムには静かに案内してもらおうことにした。

火口に近づくと、熱とガスがすさまじくカエルムとパーティー登録をすることになった。

「これはすげえな。これがあればどこへだって行ける気がするぜ！」
その気持ちはわかるが、一定の能力強化と一部の耐性がつくだけだ。

あまり無理をしすぎるなよ。

「もう少しだ！ 先に行つて、ちよつと火口の様子を見てくる！」

『おい、やめろ』

そうだ。

そういうのが無茶なんだ。

耐性も私の方が多い。私が先導する。

『違う、そうじゃない』

「見えた」

三年前にできたという火口へ行くと、小さなクレーターがあった。どうも小規模の噴火だったようで、南の世界で見たクレーターよりもずっと小さい。

『カルデラの中心にあるね』

目を向けると、穴の中心に、さらに穴が開いていた。

「あそこはマグマが吹き出してたところだ！」

今はマグマが引いているな。

おそらく西の方へとマグマが行ってしまったんだろう。

「行こうぜー」

カエルムは歩き出し、私もそれを追う。

火口の中はマグマがまだ残っており、モンスターもガスや火の玉、マグマのスライムが出てきた。

カエルムとは強さに差はあるはずだが、足手まといにはなっていない。い。

悪い足場でも非常に軽快に動き回り、硬いモンスターに獲物の鋼槌を叩きつけて倒している。

むしろ私の方が足手まといになっている状態だ。シユウが奴の同行を認めたのも納得できるというものだ。

足場も私に注意をくれるし、シユウとの意見も概ね合っている。

『そうだね。チートが乗つてるとはいえ、この劣悪な環境でこれだけ

動けるのは驚異的だ。判断能力も高い。鋼槌スキルがないのが残念だけど、よく研鑽されてるから問題はない。まるで……。いや、とにかく死なすには惜しい』

これは、シユウの男に対する最大限の賛辞と言える。弟の地形に対する調査も褒めていたので、ずいぶんと優秀な兄弟のようだ。

道は徐々に悪くなり、モンスターも凶悪になってきたが、それでも奥へと進む。

私がマグマに落ち、落石を頭に食らい、ガスを正面から浴びるなどもあったがボス部屋にたどり着いた。

そこでようやく足を止め、作戦会議となった。

『まず間違いないくマグマを生み出すボスだ。今度こそ間違いない』
そうだろうな。

西側のダンジョンが例外だろう。

まさかあんなに鏡だらけのダンジョンだとは思わなかった。

『足場が全てマグマという可能性もある。マグマそのものがボスと言うこともある。……まあ、チートでどうにかなる』

なんだかすごいおざなりな説明だ。

『特にカエルム。下手に突っ込んだり、無茶したり、意味もなくかばったり、深追いしたりは絶対にしないこと。あと「やったか」とか「勝った!」、俺は生き残った!」とかも禁句とする』

「お、おう」

やたら具体的だな。

じゃあ最後の確認をして挑むとしよう。

「少し喉が渴いたな」

水分はとっておいた方が良い。

シユウも喉が渴いたと思ったら、もうそれは手遅れだと言っているくらいだ。

「……つと、これしかないか」

カエルムは水筒を取り出す。

蓋を外すと酒の匂いがほんのりと香った。

「験担ぎに、前祝いで乾杯だ！」

『そういうのをやめろって言ってるんだよ！』

突然のぶち切れである。

酒はその場に捨ててもらい、私のアイテム結晶から飲み物を分けてやった。

以前に聞いたが、耐性をつけているとはいえ、アルコールは判断能力を鈍らせる。

ボス戦の前にそういった物を口にするのをシユウは怒ったのだ。

『いや……、もうそれでいいや』

私も軽く喉を潤す。

「んっ……、ああーあ、長く使ってたからなあ」

見ると、カエルムの水筒が割れていた。

『おいおい、なんだこれ。俗に言う予測可能回避不可能じゃないの』

そんなの俗に言われてるの聞いたことないんだが。

『もう世界がこいつを殺そうとしてる。絶対カエルム殺すマンがどこかにいるだろ。一作者（お前か）か』

お前って誰だ。

とにかく不吉なことを言うなよ。

「そうだけ。俺、この攻略が終わったらカーススの山頂を踏破しようと思ってるんだからな。まだまだ死ねねえよ」

カエルムは笑い、私もそうだなと笑う。

シユウも、もうどうにでもなあれと笑い始めた。

そしてボス戦である。

やはりマグマがあった。

地面が続ぎ、右と左、それに奥からは一面がマグマに覆われている。

まともな地面は部屋の十分の一かそれ以下だろう。

その地面もぼこぼことして歩きづらそうだ。

でも、ボスの姿がないな。

『……あ、やったかも』

何がだ？

ああ、そうか。今度こそマグマだな。おめでどう。
『いや、違って。勝ちが決まったんじゃないかなと』
は？

まだボスすら出てきてないだろ。

「そうだ。ここは俺に任せろ。俺が先に進んで——」

『やめて。ほんとやめてそういうの』

シユウの言うとおりで。

お前はおとなしくしている。

それで、どういふことなんだ？

『先に進めば、おそらく雑魚が出てくるか、ボスが動くかと思う。逆に言うと、先に進まないで演出が始まらない』

はあ、まあそういうボスもいるな。

特にボス部屋のあるタイプは出現の演出があるタイプが多い。

先のボス戦もそうだったな。ある程度距離を進むと鏡の中の私が動いた。

他にもボス部屋の何かに触ることで戦闘が開始することもある。

『そう。演出前なら先手がとれる』

そうかもしれないが、ボスの姿がないぞ。

『地面がボスだよ』

私とカエルムはそろって地面を見る。

『亀でしような。ここは甲羅の上。先に進むと動くか、甲羅の一部からマグマが出る』

そう言われれば、緩やかに傾斜してる気もするし、形もそれっぽい。
「じゃあ俺が叩いて……つと、靴の紐がちぎれた。おつかしーな、さつき確認したはずなのに……」

そう言つて、カエルムは靴の鎧を締める紐を直し始める。

『メル姐さん、今のうちにやってみよう。ちよつと進んでから思いつきり貫いてね。亀の甲羅は骨格だ。もしかしたら一瞬で終わるかも。とりあえず遠距離攻撃してきたら黒竜のスキルで消すから』
わかった。

私はシユウを逆手に持ち掲げる。

『それでは——邪神様結晶@』

——劈開！

そのまま地面らしき甲羅にシユウを突き立てた。

地面はびしりと音を立て、接地点から一気に砕け散っていく。

砕け散った地面の下には白と赤みがさした内蔵が見えた。

足場が崩れていくが、気にせずシユウを刺す。

部屋中に雄叫びが上がり、視線の先にあったマグマからは頭らしき物体が出てきた。

それでも気にせず、シユウを刺せるところまで突き刺す。

柄まで刺したので、後は刃の方向に斬っていく。

地面は大きく動き、音がこだまし耳はおかしくなっている。

それでもシユウで斬り続ける。

のたうち回る頭が、上を向いてピタリと停止し、ややあつてマグマに落ちた。

マグマから白い光が立ち上がり、亀の体も徐々に光へと消えていく。

……足場が消えることになるけど大丈夫だろうか。

『大丈夫みたいだよ、ほら』

周囲の赤の溶岩がみるみるうちに黒く岩へと固まっていく。

私の足場も光になった後、すぐにただの岩場へと変わっていった。

亀のいた中心にアイテム結晶が二つ。

「終わったんだな」

そのようだな。

「これで噴火は止まるんだな！」

おそらくそうだな。

カエルムはこぶしを握る。

そして、何かを溜めるように身を低くした。

「よっしゃあああああ！ やったぞおおお！」

宙に思いつきり飛び喜びを表現している。

だいたい、勝った後は静かに余韻を楽しむことが多い。

しかし、こうやって喜びを露わにすることも悪くない物だと感じ

た。

「これで——もう何も恐くない！」

そうだな！

『……そうかなあ』

こうして私たちはボスを倒し、噴火を食い止めた。

まさに間一髪の戦いだった。

ダンジョンの帰り道のマグマや溶岩も全て黒く固まっていた。

それどころかモンスターもそのままの形で固まっている。

ガスの噴出も止まっているし、地震もない。

外に出ても、まだ周囲の景色は暗いままだ。

ここからは見えないが、このずっと下にケオラヴァアがある。

「離れてから一日もたつてないのになあ。ケオラヴァア——ああ、何もかも皆懐かしい」

地面が大きく揺れ始めたのはそのときである。

初めは小さな音だった。

『足を止めて、屈んで！』

シユウの声に従って私とカエルムはしゃがむ。

小さな音は、小さな揺れを呼び、小さな揺れは大きな揺れへと変わった。

さらに大きな揺れは、周囲の景色を歪め、地を引き裂いていく。

私とカエルムの屈んでいた地面にもヒビが入っていく。

立とうと考えるよりもなお速く地面が割れた。

私とカエルムの間にヒビが入り、その隙間は徐々に大きくなっていった。

揺れの中で地面はどんどん崩れていく。

カエルムの周囲が次々と地面の隙間に落ちていき、やがてわずかな地面の孤島にカエルムが取り残された。

周囲を下の見えない奈落に囲まれ、残った足場も今まさに崩れ落ちようとしている。

カエルムも自分の置かれた位置を見回して把握した。

ジャンプすればぎりぎり届くと思われる距離だ。

『いや、武器と足場の悪さで無理かな。傾けば飛べるけど、おそらくそのまま下に崩れるな』

カエルムの顔は穏やかだった。

おそらく私の顔とは対照的になっているだろう。

飛べ！

こっちで捕まえる！

『たぶんそれだと両方落ちる』

じゃあ、どうするんだ！

揺れもまだ続いているんだぞ！

このままだと足場ごと落ちていくだろう！

「メル、聞いてくれ。三年前の噴火で、俺は冒険者を辞めた。冒険者じゃケオラヴァの人たちは守れないと感じたんだ。……あつと、済まない」

わかってる。

別に私は馬鹿にされたと思っただけ。

それよりなんでそんな話を？

さっさと飛べよ。

『死ぬ直前のキャラにありがちな自分語りだね』

なんだよそれ。

「それで、火山警備隊になったけど、俺はやっぱ何もなしえなかった。けつきよく何も守れない。何もできない。とりあえず動くけど結果に結びつくことはない。何もなしえないと考えてた」

私の顔を見つめて語り続ける。

そんな奴の表情は――。

「でも、ようやく俺は何かをなしえたんだ！」

とてもほがらかだった。

「メル。後で追う。だから――」

奴の足場が崩れ始めた。

……私は落ちてもたぶん死なない。

そうだな？

『そうだね』

よし、わかった。

お前が飛ばないなら私が飛ばう。
地面を蹴り、カエルの足場へ飛ぶ。

自分へと飛んでくる私を見る奴の表情は間抜けなものだった。
狭い足場に無理矢理割り込み、立ち尽くす奴の体を捕まえて、力任せに対岸へと投げる。

無事、対岸に落ちて無様に転がり私を見ている。

なにぼんやりこつちを見ている？

私を置いて先に行け。

『やっぱり盗人だな。死亡フラグごと台詞を盗みおったわ』

カエルの姿が上に消えていく。

もちろん私が下へ落ちて言っているだけだ。

奴も何か叫んでいるようだが、反響しているのか遠ざかっているの
わからんが聞き取れない。

私はただただ闇の中を落ちていく。

『さて、落下速度は緩めた』

いつものやつだな。

落とし穴や高所から落ちるときに使うスキルだ。

『振り返ってみよう。噴火は確かに止めた』

そのようだが、先ほどの地震はなんだ？

『それだよ。火砕流は止められた。でも、山体崩壊は止められない気
配だ。別の原因があったらしい。何を見落としていたんだろう』

気づいたとして、どうするんだ。

もう手遅れだろう。

『それでもないかもしれない』

というと？

『いやはや、まったく都合の良い妄想だけだね。この割れ目のゴール
はあのダンジョンだろう』

あのダンジョンって、マグマで埋まったあそこか？

『うん。根拠らしき根拠はない。でも、流れを感じる。ダンジョンが

俺たちを導いている』

良い響きだな。「ダンジョンが私たちを導く」というのは。

その先には何がある？

だいたい、あの鏡の部屋に何があるというのか。

『左の鏡がまだ残ってる。きつとあそこに最後のピースがある。問題は間に合うかだ』

闇の中を落ちていき、たどり着いた場所は通路が横に伸びていた。

邪神様のスキルで固まったマグマをまとめてください、下へと進む。

その先にはシュウの予想通りというべきか、ボス部屋の扉があった。

部屋を開けると、私の記憶とは違っている。

鏡ではなく、別の景色がそこには広がっていた。

正面と左右の景色では地震が生じ、大地が割れている。

なんだこれ？

どういうことだ？

一面鏡だったはずだろ？

『ふーん、出た瞬間に映像が切り替わるんだね。それより、正面の鏡を押しして』

何が何だかわからんが、言われた通りに部屋を進む。

床の真ん中に何かが置かれているが、何なのかはよくわからない。

とりあえず避けて進み、山が揺れている景色に手を付ける。

手応えとともに景色は開いた。

4. ↑

ボス部屋から出ると相変わらず大地は揺れていた。

おい！ ボスを倒したのに地震が止まらないぞ！

どうするんだ!?

『どうも引つかかったみたいだ。ひとまずさっさと外に出よう』

引つかかった？

『気になってたんだ。なんで入口が大岩で塞いであったのか』
今さら何を言ってるんだ。

隠してるか封印してるかって話を双子としてただろ。

『ルヴィニとザファイリね』

そうそう、そんな名前だった。

はて、青い髪はどっちだったけ？

『ザファイリだね。まず、このダンジョンのボスは、ノーヒントで予測できない相手だ。しかも、その強さも容赦がない。故にこのダンジョンは、よそ者では事前情報なしに攻略ができない』

私たちがみたいな例外じゃない限りは無理だろうな。

『そう、そこで入口の大岩に話を戻すと、隠すなら地面をかけて痕跡を消せば良い。岩を置くぶんだけ目立つから隠しているのとは違う。じゃあ、封印か？ 封印するならもっと内側からの攻めに強くする』
確かに……、あれはただの大きな岩だった。魔法とかの罫はついてなかった。

チートを使わなくても時間をかければ壊せるだろう。

『じゃあ、なんであそこに岩をわざわざ運んだのか』

……なんでなんだ？

『岩がわざわざ置かれてたら、ここに何かがあるんだと思う』

そうだな。

『しかも、普通に落ちる位置と違うし、移動された痕跡もある』

ますます、岩の下に何かあるんだと思うな。

『そうなんだよ。さらに岩を壊したら道が出てきて、奥からモンスターも出てくる』

こりやもう間違いなく大当たりだな。

『でも、ボス部屋に入ったら生きて帰れない』

……つまり、あの岩は不審者を釣るための罫だったってことか？

『その側面もある。仮に岩を破壊されても危険なダンジョンがあるから、道を閉ざしていたで話が済むからね』

他の面もあるの？

『ある。結論から言うとその岩はミスディレクションに使われてる』
ミスディ……なんだって？

『この周囲がなぜ禁忌の場所として祭られているのか？ それは人を寄せ付けたくないためだ』

そりやそうだろ。

『禁忌にして大多数は寄せ付けないようにできる。しかし、一部変な奴がこの場所に寄ってくる』

それって私のこと？

『そう。隠せば隠すほど、人は気になるもんだ。スカートがあるから男はその中に夢を見る』

本題を続けて。

『隠したいモノの近くに、まったく関係のないダンジョンの入口があり、さらに大きな岩もあった。ダンジョンの入口をその大きな岩で塞いだらどうだろう？』

場所が気になってる人——すなわち私たちは大きく不自然に動かされた岩と、その大岩に阻まれたこのダンジョンに目が行く。

『そう。あの岩は注目を逸らすために置かれたという側面もあった』
ほー。

真に隠しているモノがあったというわけだな。

『看破スキルで付近にあらさまに隠しているモノはなかった。「何か」は普通にそこにあつたはずだ。岩は粉々、中には何も無い。ダンジョンもミスリード。祠も撒き餌に違いない。岩を抜いた跡？ いや、エガタの見方は正しい。まず岩があつた。それじゃあ順序が逆になる。何だ……いったいあの周囲に何があつた？』

珍しくせっぱつまっているな。

入口のところだろ。他に何かあつたつけ？

今ではほぼ全部言い尽くしたんじゃないか。それにもう着くぞ。

あとエガタって何だ？

『——そうか、そうだよな。やっぱそれなんだ。いや、とつくにわかっ
てはいたんだ。理解したくないだけで……』

何か閃いた様子だが、尻すばみにトーンが落ちていった。

『メル姐さんをここに案内したのはあの双子?』

……え? そりやそうでしょ。

何を言ってるの。

『地震が起きて、真つ暗闇で地面も崩れる中、あの双子にここまで案内された?』

そう、だろ。

『おかしいでしょ?』

確かに今はおかしいと思う。

でも、足も速かったし案内は正確だったぞ。

それにお前だって何も言わなかったじゃないか。

『右の時もそうだ。エガタが調査で外にいたのはわかる。なんでカエルムはここに入ってるこなかったのか? 入れなかったんだ』

はあ、また知らない単語が出てきてしまった。

たぶん名前なんだろうが誰だろう。

『姉妹とパーティー登録もしてる。何のスキルもない。それはわかる。でも、カエルムも、エガタですらスキルがない』

誰だか知らんけどスキルがないと何が問題なの?

『魔物でも、モンスターでも、異世界人でも、邪神様ですら何らかのスキルは持つてる』

たいてい何ちやら専用スキルってのはあるよな。

『逆にいうとね。それが無いってことは——あいつら、この世界から存在を認められてないんだよ。ただの見せかけの像。鏡像だ』

……意味がわからんのだけど?

『メル姐さんは当然わからない。タチが悪いのは本人たち、いや鏡像たちも自覚がないことだ。一部なんかじゃない。この山に生きる人、街、ダンジョンといった全てが、鏡を動かすだけで消えたり、現れたり、見え方が変わってしまう曖昧な存在なんだ』

ごめん。

本当に意味がわからない。

『だろうね。ボス部屋に戻ろう』

は?

この地震はどうするんだ？

『出て行っても止められない。この地震は鏡像たちの必死の抵抗なんだ』

抵抗？

『抵抗と言うよりも派手な自殺だね。自ら滅びを迎えようとしている。曖昧な状態を千五百年も続けてる。もう疲れ切ったんでしよう。今なら多くの人たちが自分たちを歴史に確固たるモノとして刻んでくれるから——災害の被害者としてね。事実、五千年後のアーカイブにも載ってたほどだし』

なんか言ってたな。

山体崩壊で住人、避難者、商人、冒険者で十万人超が死亡だったけ。

『実際の数字はもっと少ない。住人がほぼ鏡像なんだからね』

それはもういい。

けつきよく何で鏡像であることを隠したかったんだ。

別に鏡像だろうが何だろうが、どうでもいいことだろう？

それよりよっぽどこのダンジョンのこのほうが重要だと思うんだが。

『ボスが倒せるならね。どのみち、彼らはそう思っていない。自分たちが鏡像だとバレることを異常なほど恐れてる。それこそ自殺してしまいくらいにね』

死にたいなら死なせてやればいい。

『そのとおり。だから、殺してやるんだ』

どうやって？

『単純だよ。像を消せないなら、鏡ごと粉碎してしまえば良い』

それで地震が収まるのか？

『収まる。これは純粋な自然現象じゃない。鏡像ダンジョンが起こしてるものだ。鏡ごと壊せば収まる』

来た道に戻り、ボス部屋の前に来た。

部屋に入ると鏡がなくなっていた。景色が変わっている。

おいおい、なんだこれは？

『その流れはもうしたから、さっさと鏡を壊しちゃって』

いやそんなさらつと言われても。

どういうこと。なんなのこれ。鏡じゃないじゃん。

四面に景色が映ってるし、床の真ん中によくわからないものが置いてあるぞ。

『はい、邪神様モードになったよ。邪神様@劈開。では、どうぞ』
どうぞと言われても。

なんかやらないといけない流れなのでシユウを鏡に付けた。

一瞬だ。

鏡は一面にヒビを生じさせた。

私は映っていないが、亀裂で分かれた小さな鏡が、それぞれ周囲の鏡を写している。

『……あつ』

鏡の破片が落ちる直前だった。

その小さな鏡一つ一つに像が映ったのだ。

一つの破片には、髪の毛の青い少女と赤い少女が老人に頭をなでられていた。

別の破片には鋼槌を担いだ男が、奥さんだろうか、お腹の大きな女性と一緒に立っている。

ある一枚は、兜をつけた男が山肌を覗き込んでいる。

別の一枚はダンジョンのモンスターもいた。

壁や床の破片、その一枚一枚がこの山にいたのであろう住人を映していた。

ほとんどの顔ぶれは記憶にない。でも、確かにここで生きていることを感じさせた。

鏡は全て床に散らばった。

破片となって、もはや何も映さない。

部屋から鏡はなくなつて、無機質な扉だけが残る。

シユウは何も言わなかった。

私も何も言うことない。

ダンジョンの攻略は終わったのだ。

5. φ

ボス部屋から出て、しばらく立ち尽くし耳を澄ます。
……どうやら地震は止まったようだな。

『そうだね』

いやはや良かった。

これで山体崩壊は防げるな。

山を越える人たちも助かったわけだ。

『そうだね』

私もダンジョンに挑めてラッキーだ。

まさか、ただの山越えがダンジョン攻略になるなんてな。

『そうだね』

なんなの。

もっと感動しろよ。

じゃあ、外に出るか。

『そうだね』

なんかご機嫌斜めな様子だ。

ほっとこう。

翌朝になって、山道を進む。

東と西で道が分かれているが、東は楽で、西はきつい。

西を通ろうとするのは一部の体力があるものだけだ。

人混みを避けて西に来て本当に良かった。

ダンジョンも攻略できたしな。

『そうだね』

昨日からずっとこれだ。

やれやれ、ダンジョンを攻略したというのにこの調子とは。

ダンジョンがあつたんだぞ！

街も、住人すらいない、つまらん山にダンジョンがあつた！

もっと喜べよ！

『違う』

おっ。

やつと喋った。

『ここはつまらない山なんかじゃない』

まあ、景色はいいな。空気も新鮮だ。

そういう人も多いからな。そこに山があるから登るんだって人。

私もダンジョンはダンジョンであるってだけで楽しいから、気持ち
はわからんでもない。

『ここにはね。街も、人も、ダンジョンも確かにあったんだ』

……どこにそんなのあるんだ？

『今はもうない』

どういうこと？

シユウは何も答ええない。勘違いだったのか……？

けつきよくシユウは山を越えるまで何も言わなかった。

こうして私はカースス山を越えた。

シユウには聞かせられないが、やはりそうだと再確認した。

ここはあのダンジョン以外に何も無い、つまらない山だと。

6. ▽

カースス山を越えて振り返ると、やはりその大きさには目を瞠るモ
ノがある。

雲を貫き、座するその姿はまるで極限級ダンジョンのボスだ。

何者も通さないという意味すら感じてくる。

『はははははっ！』

……笑うところ、あった？

『ごめんごめん。いろいろ気づいてね。自分の間違いやらに気づいて
笑ってたところ』

あつ、そう。

ところで、あの鏡のダンジョンはなんだったんだ？

シユウの調子も戻ってきていたので、気になっていたことを聞いて
みた。

山の中にダンジョンがあることは、別におかしくない。そんなダンジョンはそれほどいくらでもある。

しかし、鏡のボスというの不思議だ。

『そこだよ』

そこ？

「お前も入る前は地震を起こさせる形のボスだろうと予測していた。岩の巨人なり鯰なりが出てきて、地面を割ったり、岩を上から落とす可能性がある」と自信満々に話していたくらいだしな。

そこにまさかの鏡に囲まれた部屋だ。

しかもボスは自分がたくさん出てくる。

私たちでこそ楽勝だったが、他の冒険者だったらどう戦うんだ？

それに、なぜ鏡が出てくるんだろうか？

山との関連がさっぱりわからない。ダンジョンなら周囲とも関連するだろ。

川の近くなら水と関連するボスが出るし、変な建物ならその歴史に則ったボスが出てくる。

いったい山とどんな関連があつたのだろうか？

とにかくわからないことがいっぱいだ。

なんかわかってたんだろ。

教えてくれ。

『まず勘違いを正そうか』

勘違い？

『あれはある種の鏡だけど、決して一般的な鏡じゃない』

意味不明。

そういうの好きだよね。

何々だけど何々じゃないって言い方。

『ボスを倒した後には、メル姐さんが映ってなかったでしょ』

そうだった？

でも、ボスは私の姿をしていたぞ。

『俺もさっきまで勘違いしてた。やっとわかった。あれはメル姐さんの姿を映してたんじゃない。写してたんだ』

よくわからないんだけど何が違うの？

『映すだけなら鏡から出てこない。写したから出てきて襲いかかってきた』

そんなものか？

じゃあ、あの鏡もどきは何なんだ？

『それは後にしよう。当然の疑問だけど、いきなり結論を言うとその意味不明になる。次はボスのドロップアイテムを思い出してみようか』

えつと、なんだったつけ？

……あれ、ないぞ。鞆に入れたはずだけど。

『だろうね。名前は「虚像なき鏡のカーズ」だよ』

だろうねって、どっかに落としてたか。

気づいてたなら、教えてくれればいいのに。

それで名前がなんなんだ。というか鏡についてるじゃん。

『うん。そうなんだ。これが勘違いの元でもあり、重要な道筋でもある』

道筋というと？

『あれは間違いなく一般的な鏡じゃない。修飾語が「虚像なき」だ。虚像のない鏡は、鏡じゃないよ。それでいて修飾される語は「鏡」。ここでもう矛盾してる』

そんなに不思議か？

今までにもそういうのあったろ。

燃えるかき氷とか、灯す暗闇とかもろもろさ。

『そう。過去に例がある。ボスもあんなのだった。そもそもこんな世界だからね。それはそれでありと思って流してた。でも、これはそんなこともあるで流していいところじゃなかった。他の現象から追っていくと、ボスの正体を間違える。鏡だとね』

名前が重要なことだった、ということにはわかった。

しかし、どうしてそんな名前がついてしまったんだろうか。

『ダンジョンが自らを鏡だと信じ込んでいた、と考えた』

ダンジョンが信じ込む。

自らを鏡だと？

『成り立ちを考えてみよう。このダンジョンは自然にできたものじゃない。もしも自然にできたなら、鏡なんて出てこない。自然は鏡を必要としないからね。必要とするのは人。すなわち、このダンジョンの形成には人が介在している』

それはなんとなくわかる。

自然にできたなら、もっと予測できるボスになってただろう。

だが、なぜダンジョンの由来になるんだ？ 鏡だと信じ込む話じゃないのか？

『そういう話だよ。人が信じ込ませたんだ。ダンジョン——というより鏡みたいなのモノに「お前は鏡」だってね』

なんで？

『鏡もどきは、人は映さなかったけど周囲の景色は映したね』

あの部屋だと、確かに周囲の鏡を映していた気がするな。

それを周囲の景色と呼んでいいのかはわからんが。

『古代、鏡つてのは姿見としてよりも、祭祀に使う道具だった。こちら側と鏡に映るあちら側。この世とあの世。この鏡もどきはあの世の自分が映らない。あの世として忌避しつつも、生と死は切り離すことができない。そのため、この鏡をあの世に近い場所に祀っていたのではないか。その「死生観」と「祀り」がダンジョンとしてここに現れた』

おお、なんか昔話みたいだな。

それじゃないのか。

『確かにこれならダンジョンが自らを鏡と信じ込むことはある。しかし、現象としてのダンジョンを現してない』

もっとわかりやすく説明して。

『さっきの歴史で言うと、自分の姿が映らない鏡つてことで祀ったんだから、ボス戦で自分の姿が出てくるのはおかしい。それに……いや、もう終わったことだ。とにかく実際に起きたことと成り立ちが合わなくなる。要するに間違ってるんだ』

あれま。

『人が鏡もどきに「お前は鏡だ」と信じさせた。自らの姿が映らない訳のわからん物体にだ。おそらく、「祀り」としては使われてた。そうなる都合がなかったのは「死生観」。じゃあ、人はこの鏡もどきを何だと思っていたのか、どのように使っていたのか』

何に使ってたんだけ？

『おそらく「ミラーテスト」もどきだろう』

また訳のわからん単語が出てきた。

『要は、鏡に映った自分の姿を見て、それが自分だと認識できるかどうかの調査、あるいはそれに至る過程の追跡調査』

私はわかるぞ。

『……そりやそうでしょ。話を戻すと、鏡もどきは人の姿を映さない。そんな鏡もどきを人が見たら、どう思うか？』

鏡じゃないな、と思うんじゃない。

もしくは気持ち悪い鏡だっと思うのか。

おお、これじゃね。気持ち悪い鏡ってことで使われた。

『それならたたき割ってるか。もつと悪意に満ちたダンジョンになっている。思考実験だ。ちよつと想像してみてよ。仮に外に出て、メル姐さんがその「何か」を見る。一人でね、ここ重要』

……うん、外でその何かを見ましたよ。一人でな。

『何か映っています。木々や地面、そしてそこに生える草。木の枝には鳥がとまっています』

うんうん。

カーススで見てきた光景だな。

『おつと、その映像には足跡がついています。「何か」から身を避けて、目を外し「何か」の向こう側に目を向けますが、そこに足跡はありません』

まあ、そりやそうだろ。

反対側にあるよな。

『そうですね。んっ？ と振り返れば自らの足跡があり、「何か」の景色と一致します。さらに木々や地面、草も同じようにそこにありま

す。そこで、これはこっちの景色を映す「何か」だとわかります』
そうだね。

『もしもメル姐さんが鏡を知っていたら、もっと早くそのことに気づくでしょう。しかし、鏡を知っているに聞わらず、メル姐さんは重要なことに気がつき、疑問に思います』

自分が映っていない。

『その通り、次はなぜ自分が映らないのかを考えるでしょう。もしも、そのときに鏡を知っていたら、考えを阻害することになるね。これは鏡ではない、魔法がかかっているなどと鏡と比較することにこだわってしまいます。しかし、鏡を知らなかったなら、こう思うのではないでしょう。これは自分の姿以外を映す何かなんだと』

かもしれないな。

『さらに思考を続けると、あるいは、「何か」に映る世界こそが本物で自分はここにいないんじゃないだろうか？』

いや、それは……、どうだろう。

『ちよつと不安になり、自分の手と足、それに体を見て、あるいは触つて自分がここにいることを確認する』

そうだ。

私は確かに存在する。

『でも「何か」にはやっぱり映らない。足跡だけがついていく。誰かが近くにいれば、その人も映らないから、やっぱり「人」を映さないと判断できるけど、近くには他に誰もいない。その確認はできない。本当に私はいるのか？ 世界に存在すると判断されてるのか？ あるいはその「何か」を見ることで本当に世界から姿が消えてしまったんじゃないか。自分では見えて触ることができても、他の人からは見えなくなってしまうんじゃないか？ もしかすると「何か」が映している景色こそが本物だ。でも、本当にそう？ 「何か」から始まり自分や全てを疑っていくことになる』

なんだろう。

なんか気持ち悪い想像だな。

どんどん想像が沸いてきて、何がなんだかわからなくなる。

『そうだろうね。でも、いずれあることに気づくよ。「何か」には映らないけど、確かに「何かについて考えている自分」は存在しているからね。この概念は俺の世界だと有名な言葉にもなってる』

……はあ。

えつと、それだと要するにどうなるんだ

『この鏡もどきは人の外見を映さない。それどころか自分と世界、その両方に疑いを抱かせる。でも、自分の意識があることだけは確実にあることを示す。一般的な鏡が自意識以外を映すなら、この鏡もどきは自意識のみを映す。鏡の効果の一つに「自分の認識」がある。その効果だけでみるなら、この鏡もどきは確かに鏡と言わざるを得ない』
それが一般的な鏡ではないけど、ある種の鏡って訳か。

「虚像なき鏡」という矛盾した名前がついた由来だど。

『おそらく、ここに暮らしていた人達は、ある程度大きくなったらあの鏡の部屋に閉じ込められて、あのミラーテスト亜種によって自意識を確立させられてたんだろう。そして、時代とともに人は消え、風習のみがダンジョンとして残った』
なるほどな。

ボス部屋の鏡もこれで説明ができたな。

『できてるようで、できてないんだな』

え？

『鏡もどきがあることは説明できるけど、ボスがあれになることが説明できない』

自分がいつぱい出てきたな。

これをどう説明するか。ついでにどうやって倒すんだ？

『普通だと倒せない』

はい？

どういうことだ？

『倒す倒さない以前に、まず鏡からこっちの姿を写して出してくるのがおかしい。さっきの話と合わない。人の姿を映さないんだからね』
そういや、そうだな。

さっきの話、やっぱり間違ってるんじゃないのか。

『俺もそう思ったけど、こう考えていけば説明できる。ダンジョンは生まれたときに意思を持った』

そこは私も今までの経験で感じてるな。

明らかに殺意を向けてくるダンジョンもある。

それがどうしたんだ？

『ダンジョンは意思を持ち、自らにミラーテストを行った。人間同様、自らを認識するためにね。で、おそらく千五百年以上前からずっとミラーテストに失敗し続けている』

ええ？

『あの鏡もどきは一応性質として鏡とほぼ同じだ。自らを映そうと自らを見つめる。鏡もどきを増やし続けて、確かに映るんだけど、映しすぎて、映つてないというか……とにかく鏡合わせになって、ずっと部屋が続いたようになってたでしょ。ミラーテストができないんだわ。無限に近い有限の自分を見つめ続けて、思考がぶっとんじやってる』

シユウは笑い始めた。

『その結果があれだよ。堂々巡りの意識の中で、人やら都市やらダンジョンやらを映して、写して、移して、遷してをずーっと繰り返し続ける。もうダンジョン自体がわけわからなくなってるんでしような。自我崩壊まで起こしてたし。まあ、あと五千年もすれば答えを出すかもしれないね』

ちよつとクスツときた。

じゃあ、やつぱりあの岩は封印だったんだな。

あのボスが絶対に倒せないってわかっていたからか？

『ここでも岩があったのか。誰が案内した？ 俺じゃないよね？』

はあ？

青い髪の変な少女だったろ。

うろ覚えだけど怪しい場所があるのかなんとか言ってた。

それで、岩をぶつ壊して……そうだった。だから、その岩は何でおかれてたんだ？

『そうか、それならなんとかなるか……。質問に答えると、それは順序

がおかしい。ボスが絶対に倒せないってわかってる奴は、どうやってボスが絶対に倒せないってわかったのがわからない。大岩があったなら、それは単純に危険だから閉じた。あるいは隠したかった。もつとひねくれて考えるなら何かから注目を逸らすためだね』

シウウはそこで自嘲するように笑う。

『でも、残念無念。今回の場合は、ミラーテスト中だから、人が入れないようにしただけだった』

なんだそりや。まあ、聞きたいことはだいたい聞けた気がするな。

他にわかってないことは何かあっただろうか……、そうだ、まだあるじゃないか。

一体全体、鏡もどきは何だったんだ？

『知りたい?』

もつたいぶるなよ。

さっさと答え。

『俺も知りたい』

……は?!

お前は知ってるんじゃないのか？

『それが何かはわかる。でも、本当にそうか実証したい』

別に確認するまでもないだろ。

知ることができれば同じじゃないか？

『誰もが素晴らしいと口をそろえて褒め称える絵が、遙か遠い地にある。絵の詳細を口で語られて知ったとして、その見たこともない絵を「素晴らしい」と賞賛できるだろうか?』

出たよ。

お得意の回りくどい言い方。

『絵をダンジョンに替えてもいい。とにかくもう一回、行ってみよう。あのダンジョンに』

は?!

今から戻るの?!

めっちゃくちやめんどくさいんだけど。

『もしかしたら、別のダンジョンに挑戦できるかも』

お前ねえ。

そんなこと言ったら戻らざるを得なくなるでしょ。

こうして私は、丸一日の行程を戻る羽目になった。

7. 三

ボス部屋に入ると、ズタボロになっていた。

なんだこれ？

壁に鏡はなく、床には破片が散乱している。

中心には棍棒らしき物が置かれているし、執拗に全ての鏡が割られていた。

ひどすぎる。あんまりだ。人間がやれることじゃない。一体誰がこんなことを……。

『さて、それじゃあ始めようかな』

おいおい。

なんでお前はそんなに淡白なんだ。

どうしてこんな惨状になっているかとか考えないのか？

『どの破片でも良いから一枚とって』

聞く気がまったくない。

まるでここをやった犯人がわかっているようだ。

いったい犯人は何を目的にこんなことをしたと言うのか。

『犯人達の思考は間違っていた』

達。複数犯か。

『しかし、行動とその結果は間違ってた。現象は止めることができた』

現象とは何だ。

地震を止めた後に、犯人達はいったい何を止めたんだ。

『ダンジョンの自我崩壊。ミラーテスト亜種をストップできた。破片は持ったね』

持ったが、何も映さないぞ。

もうただの瓦礫だ。何なんだ、この鏡もどきは。

『それで良いんだ。じゃあ、それを持ったまま外に出ようか』
外に出るとどうなるというんだ？

『すぐにわかる』

言われたとおりボス部屋から出て、さらにダンジョンの外にも出た。

『破片はどう？』

どうって言われてもな。

瓦礫のままじゃないのか？

『戻ってない？』

そんな訳……やっぱりないじゃん。

相変わらず瓦礫のままだ。

『水かけてみて』

はあ？

『いいから水かけて。ちょっとでいいよ』

またしても言われるがままに水筒から水をかける。

『どう？』

水かけたからって……あつれ？

瓦礫だった物は手で光を反射し、空の青さを映し出している。

角度を変えれば、木や岩肌を映し始める。

ただ、そこに私の姿はない。

『これで良し』

いや、良くない。

いったいどういうことだ。

どうして瓦礫に水をかけると鏡もどきになる？

『別に水じゃなくてもいいんだけど、光でもほっとけば起きてたと思うよ。それは石じゃなくて生物なんだ。微生物の集合体。まあこれは解析が効かないからわかつちやいた』

これが生物だって？

ボスという生物ってことか？

『いや、ボスになる前からずっと生きてたんでしよう。意思はなかっただろうけど。今回は疲れて眠ってただけ。この鏡もどきが微生

物であることはさほど重要じゃない』

はあ。そう。

じゃあ、ボス部屋のあれは？

『ほっとけば元に戻る。でも、時間がかかりすぎる。水をかけまくって無理矢理起こすとするか』

水筒の水で足りるかな。

『水の魔法で起こしてしまおう』

私には使えないぞ。

『後ろの子に頼めば良い』

はあ？ うわっ！

振り返れば後ろに子供が立っていた。

全然、気がつかなかった。いつから立ってたんだ。

……ん？ あれ？ この前ここに案内してくれた子じゃないか？

あのときは助かった。もしかしてこのあたりで暮らしていたりするのか？

人が住んでいるなんて話は聞いたこともないんだが。

「昔、お爺さまとお父様に連れてきてもらいました」

へえ、そうなのか。

周囲を見渡すが、ダンジョン以外に特に何も無い。

なんでこんなところに連れてきてもらったんだろうか。

『水魔法は使えるって言ってたよね』

「はい。得意です」

……え？

何でシュウの声が聞こえるんだ？

「パーティー登録をしていますから」

あ、そうなんだ。いやいや、そうじゃなくて、いつした？

この前の時はしなかったはずだ。

『この前にしたよ。それよりも、彼らを起こそうと思うんだけど手伝ってもらえるかな』

彼ら？

微生物の集合体のこと？

「彼らとは？」

『そこはやっぱり無自覚なんだね。俺は君たちが鏡もどきに映らないから——自分たちの曖昧さを認めたくないから、ここに入らないと思ってたんだ。でも、それは違った』

少女相手に何意味不明なことを言ってるんだ。

すまん。こいつときどき錯乱するから。

『少女を鏡もどきで映してみて』

手の角度を変えると、手のひらの石に少女が映った。

……もう一度、自分に向けてみるが私はやはり映らない。

説明を求む。

『映るからここに入ろうとしなかったんだ。ますます混乱すると判断した』

「何を言っているのかよくわかりません」

私も私も。

『そうだね。言っても意味がない。無自覚なんだから。とにかくボス部屋に一緒に来てもらって。そうすればわかる』

「祖父には何かあっても絶対に覗いてはいけなと言われていますが、だそうだぞ。」

実際、危ないから来ない方がいいだろう。

『はあ、やつかいだな。あんまり荒療治は好きじゃないんだけど——君のお爺さまとお父様、それにお母様とやらはどこにいるの？』

「それは……」

すぐに答えるかと思っただが、なかなか答えない。

『ザフィリには双子の姉もいるよね。どこにいる？』

「ルヴィニは……」

何で名前も家族構成も知ってるんだ？

やばすぎじゃないの。

「気持ち悪い」

ほんとだよ。

『ケオラヴァ、フロガ。二つの都市、君の姉はフロガを守れない自分の力不足を嘆いた』

「やめて。本当に気持ちが悪いです」

少女も何やら本当に体調が悪そうな様子だ。

やめてやれよ。

『駄目。やめない。思い出せ。君は俺に力を望んだ。ケオラヴァを守れない自分の力不足を嘆いていた。今こそ力を示すときだ』

意味がわからん。

『認めたくないよね。自分たちがたかだか鏡もどきの思考で生まれたただの副産物だなんて』

少女は耳を塞いだ。

まことに残念だがそれは意味がない。

それで聞こえなくなるなら、私は耳栓をして外を歩いている。

『悔しくないのか？ こんな鏡もどきの気分しだいで自分たちの生活が脅かされて』

少女はうずくまり、呻いている。

シユウはそんな少女に容赦なく意味不明な言葉をかけていく

『俺たちは君に力を与える。後は君が立つかどうかだ。蹲ってるなら、君は何も得られない。この先もずっと、ここに近づく人に話しかけるだけの地縛霊だ！ 嫌か！ ならば、あがいてみせろ！ 世界を変えてやるとな！』

シユウはフハハハと嗤いながら、少女をなじっていく。

なにが荒療治は好きじゃないだよ。ノリノリじゃないか。

よくわからないが、私は蹲る少女の頭に手を置く。

泣くな。

この馬鹿の言葉を真に受ける必要はない。

それよりも今はお前の力が必要だ。一緒にボス部屋へ来てくれな
いか。

『言い方が違うだけで、内容は同じだからそれ』
うるさいな。

「……………こわい」

私だってボス戦はいつもこわい。

でも大丈夫だ。なんとかなるんだろ？

『なる』

だそうだ。

性格は歪んでるが、頭と力は本物だから心配するな。

「でも……」

お爺さんに怒られたら、私たちが無理矢理連れ回したと言ってやる。

お前が怒られることはない。

「……………ん」

少女はゆつくり立ち上がった。

私は、少女の頭を優しく撫でる。

「汚い手で髪に触らないでください」

少女の腕により、私の手はパシと払いのけられた。

『これがナデポならぬナデパシ伝説の始まりである。どうにも語呂が悪いな』

なんなの？

なんでそこまでされんといかんわけ？

『実際、きれいな手じゃないからね。さっきも破片持ってたし、岩もベタベタ触ってた。お尻はぼりぼりかくし、鼻くそをほじることだってある。……まあ、年相応の強がりでしょう』

「ボス部屋まで案内しなさい」

釈然としないが、ボス部屋まで少女と行くことになった。

ボス部屋に入り、相変わらず破片が散らばり放題だ。

『じゃあ、水かけて』

そんなシュウの指示にしぶしぶといった様子でザファイリは魔法を唱えた。

水がかかると地面の破片が鏡へと次々に戻っていく。

『じゃあ、外に出てちよっと待ちます』

すぐまた外に出る。

『これで復活するでしょ』

へー。

また挑めばいいんだな。

どうせ楽勝だろ。

『二人で挑んでね』

……え、ザフィリもいるの？

『当たり前でしょ。ボスを攻略するために必須だよ』

一人でも勝てるじゃん。

『あれはバグをバグで殴ってるだけ。意味がない』

普通だと倒せないって話してなかった？

『普通だと関係者を連れて行けないからね。もはやこれは普通じゃない。普通じゃないチートなダンジョン破壊が、普通じゃないチートなダンジョン矯正に変わる』

……そんなに変わってなくね？

『大きく変わるよ。ただ、メル姐さんはそれを自覚できないだろうなあ』

よくわからんけど、どうすればいいんだ。

『突っ立ってれば勝てるよ。大切なのは映像の中身じゃない。映像が何なのかだ』

首をかしげつつもボス部屋に入る。

部屋の様子は戻っていた。

四面、床、天井を鏡に囲まれ、無限に部屋が続いて見える。

さらにその鏡には私と、新たにザフィリの姿が映る。

部屋の中心にある、床の黒いところ、謎の棍棒が刺さっていたところに立つ。

それを合図にしてボスが動いた。

鏡の中の私とザフィリが一斉にこちらへと向かってきた。

ザフィリはその様子を見て、私の服をギョツと掴む。

ところがボスの足は止まった。

私の姿のボスは鏡からでかかったところで止まっている。

問題はザフィリの姿のボスだ。

彼女の姿をした存在は、鏡から出られず、鏡面に手を触れている。

『これが映すと写すの違いだ。メル姐さんは写されてる。だけど、ザ

ファイリは映っているだけだから、こちらに出てこられない』
なんとなくわかったが、この後は？

『ボスは思考を開始する。ミラーテストの始まりだ。メル姐さんは映らず、ザファイリは映った。それはなぜか？ ザファイリは厳密には人間じゃない。ボスの思考から生まれた副産物だ。ボスもそこは理解する』

らしいね。

どう見ても人間にしか見えなだけで。

おっと私の姿がどんどん消えていくぞ。

ついでにザファイリが鏡面から離れ、私にしがみついている姿になっている。

まあ、私は映らないんだけどな。

『無限に近い有限のザファイリを前にしてボスは考える。幾万の像としての自分より、目の前のザファイリを理解することが自分を理解することに繋がるよね。それには、複数の鏡なんて不要だ。物事は単純に、数を少なくした方がわかりやすい』

床、天井、右、左、入口側の鏡が正面の鏡へと動いていく。

鏡に鏡が吸い込まれていくようでなんだか不気味な光景だった。

ついにボスは一枚の鏡となった。

幅も高さも私と同じくらいになり、ザファイリの正面に立った。

『ボスは考える。鏡もどきの自分の姿が消え、自分から生まれた存在だけがそこにあるのだ、と。果たして、自分とは何なのか？ このような存在を生み出す自分って何？ 自らの生み出したものはこれだけではなかった。ボスは自らの生み出してきたモノを思い起こす』

鏡の像が変わった。

人、モンスター、街の中、景色など様々な景色が映る。

『ボスにはわからない。こんなものを生み出すことのできる自分がないのか？ 該当するモノをボスは知らない』

鏡の映像どころか、鏡の形もぐねぐねと歪んでいる。

「おじいちゃん、お姉様、ケオラヴァ、フロガ、都市の人たち、高原、湖……。みんな私の大切なモノ」

映像がなんなのかわからん。

でも、この鏡に映っているモノがザフィリにとって大切なものかどうかのはわかる。

そうすると、なんだろうか？

ザフィリがこの鏡の正体を示していないか？

『それは？』

私は知らないが、この鏡が映し出しているのは全部この山の景色なん
だろ。

ザフィリはこの山全体を大切に思っていたんじゃないか。

それをこの鏡が生み出して映すってことは――。

この鏡はカーススそのものなんじゃない？

『そう。俺も同じ結論に至った』

でも人間が映らないのはなぜだ？

『人間を映さないんじゃない。カーススしか映さないんだ。自らをカースス、それに連なる一員だと認識すれば、人間でも映るようになる。もしもこの鏡が外にあつて、住人と外の人が来ればすぐに気づけただろう。ボス部屋に閉じ込もつて、内側を映そうとして一人で考え込んだのがまずかった。映すべきは外側にあつた』

鏡もどきもどうやら同じ結論にたどり着いたらしい。

鏡は、どろおつと液体のように地面に垂れていく。

落ちたところから、鏡面が広がり、またしても部屋を鏡が覆った。

『さて、見たかったのはここからだ』

鏡には景色が映し出された。

もう鏡ですらないな。……元から鏡じゃないか。

『鏡ではない。しかし、今、カーススが自らの副産物を見つめ、自身とは何かを考え、あるべき姿を映し出そうとしてる。カーススは――鏡ではなく、鑑になろうとしているんだ』

周囲の景色は本当に映っているものだろうか。

どんどんと外側へ広がっている気がする。

風が吹き、木々の匂いを運び、足が踏むのは湿った地面だ。

鳥が鳴いて縄張りを主張し、草むらから獣が様子を窺っている。

鏡面はなくなり、世界の内側と外側が一つになりつつあった。

8. A

ん？

どうやらぼんやりしていたようだ。

「おーい、どうしたんだ？」

カエルムが引き返し、私に声をかけてくる。

「早く行こうぜ！ エガタも待ってる」

そうだった。

奴に高原への道案内を頼んだのだ。

弟のエガタも高原の上で地質だかなんだかの調査をすると言っていた。

「おっと！ こんにちは、ザフィリ様！ お散歩ですか」

「ごきげんよう。ええ、姉様と一緒に来ています」

隣に突っ立っていたザフィリが答える。

おっと、びっくりした。いつからいたんだろうか。

『ずっとそばにいたよ』

そうだったか？

「そうでしたか！ どうかお気をつけて。それよりメル、早く行こうぜ！」

ああ。

「貴方」

カエルムを追おうとすると、ザフィリに声をかけられた。

姉のルヴィニには懐かれているのだが、こちらには何か嫌われている気がする。

特に変なことはしていないはずだが、なぜだろうか？

『わからないなあ』

だよなあ。

それより何か用だったか？

「これがカーススです」

……いきなり何を言ってるんだろう。

「これが私の守りたかったモノ。大切なモノです」

はあ、そうか。

いきなり語り出すほどのことなのか。

とりあえず感想でも言っておこう。

この山はいいな。

自然は多いし、都市も東西に二つもある。

住んでいる人も良い人が多く、飯もなかなか上等だ。

それになによりダンジョンが五つもある。

初心者クラスのアペルピスイア灰景。

初級の水鏡洞穴スペクルム。

中級のクラティラス高原。

超上級の剣尖アステリ。

『ふうん、残る一つは火口?』

ん?

そうだろ。何を言ってるんだ?

その攻略でカエルムや双子姉妹と知り合ったじゃないか。

攻略済みの上級スイスモス火口をなくしても、まだあと四つも攻略できる。

本当に楽しい山だ。まるでこの山が一つのダンジョンだと錯覚してしまいそうになる。

「わかればいいのです。堪能なさい」

満足げに歩き去って行く。

なんだったんだらうか。

『わからなければいいのです。堪能なさい』

なんでお前も満足げに言うんだよ。

『かまってちゃんの真似をしてみました』

まるで聞こえているかのように、ザフィリがこちらを振り向いて睨んできた。

しかし、ちょうど姉が迎えに来たようで一緒に歩き去って行く。

さて、私もカエルムを追うでしょう。

ダンジョンを越え、都を越え、人を越え、またその先にダンジョンがある。

カーススは、あらゆるモノを受け入れ、そして育んでいる。

この山には求めるモノの全てがあつた。

本当におもしろい山だ。

水たまりに映る青空を飛び越え、私はまた一歩山を登った。

蛇足25話 「選ばれない未来 前編」

1. 豎コ螳文才悶？廻セ莠コ逾楯シ壹お縞ヤ縞？う縋ウ縋ケ
クラカウの街を東門から出て、しばらく道なりに進む。

二股に分かれるところで南へと行けば、初級ダンジョン——エラス
ムルナウ大僧院がある。

もともとは大昔に流行った宗教の修行場らしい。

今となつては元の宗教さえもよくわからず、攻略対象よりも研究対
象としての位置づけ大きい。

実際に攻略目的の冒険者よりも、探求専門や魔術師ギルドの入場者
が大半を占めるとのこと。

大半を占めるといつても、ドロップアイテムに旨みがないのでそも
そも入場者が少なく、攻略パーティは年に片手の指で数えられるほど
だ。

冒険者ギルドによる格付けは初級なのだが、これは条件付きだ。

武器を外して入場する場合のみが初級となる。

こんなことになっている理由は、通常は死なないからである。

モンスターは過去にいた修道僧の亡霊がメインであり、戒律なのか
知らないが殺しにこない。

それどころか、こちらから攻撃したり、物を壊したりしなければ戦
闘にすらならない。

挑発をしても、せいぜい丁重に追い払われるくらいで済むと聞く。

ボスも同様で、奥のボス部屋に入っても戦闘の意思を見せない限り
は素通りできてしまう。

もちろん私の場合は素通りせず、ボスを撃破しての完全攻略を狙
う。

この場合、格付けは一気に上級へと上がる。

ちなみに攻略には探求専門や魔術師ギルドとの日程調整が必要だ。

彼らの探求が優先され、また彼らを戦闘に巻き込まないため面倒な
調整が行われた。

さらに、研究のお題目でいくつか試して欲しいことやら実験を要求

されそれにも答えなければならぬ。

これは地道な調査ではわからないこと……要するに暴力的な手段によってのみ得られる情報があるということである。

僧やボスの行動パターンと攻撃からわかることを情報提供しなければならぬ。

無論、今までにわかっていることも彼らから提供してもらえぬ。

『教えの正式名すらわかってない、ってどういうことなのか』

呆れを隠そうとする気もない声でシユウがぼやいている。

調査員らとの交渉は全てシユウが行い、情報も私を素通りしてシユウにいつている。

『何が「情報提供が必須だ」だよ。自分たちに調査能力がないだけじゃないか』

調査員らの情報で役にたつものは何一つとしてなかったらしい。

冒険者ギルドからの地図と、ボス含む亡霊の攻撃方法が一番参考になった。

さて、すでに修道院の門は目の前にある。

楽しみの攻略タイムだ。

超上級と聞いていたが、確かに雑魚も強い。

『左から雷魔法が来る。合図で、目を瞑りつつ大きく避けて、一気に突っ込んで』

シユウからふざけた調子がないことから難易度がわかる。

今、という合図とともに瞼を閉じ、床を強く蹴った。

耳は轟音が鳴り響き、瞼は稲光で白く染まった。

痛みがないことから雷光は避けられたらしい。

目を開け、亡霊との距離を詰め斬りつける。

『普通に強いけど——』

倒した亡霊のアイテム結晶を拾うところでそう呟いた。

「けど」の後に何が続くのかと待っていたが、何も続かない。

亡霊の数は多く、個体も強いが、複数で襲ってこない上に罨もない。ボスまでなら中級でもおかしくない難易度だ。

その後も順調に進んでいった。

ボス部屋の前に到着し、シユウとの作成会議である。

このダンジョンはボスが長らく倒せなかったため超上級とされていた。

記録上、初めに倒した超上級パーティも百回以上挑み、ようやく勝てたほどである。

ボスが殺しにこないからこそできた攻略法だ。

『ミイラアタックだね。まあ、苦戦はしないでしよう。倒し方がもう研究し尽くされてるからね』

超上級パーティの攻略方法がギルドに残っているのだ。

ドロップアイテムが良ければ秘密にしていただろうが、価値がほぼないので公開されている。

実は上級に下げるといふ話もあつたらしいが、初攻略したパーティの顔を立てて超上級のままにしているという噂もある。

『事実でしょう。攻略済みでドロップアイテムが微妙なら、さほどランクにこだわる必要がないからね。武器持たなきや戦闘にならないし、なつても死なないとくれば、本来のランクはどうだっていい』

そんなものか。

それで、今のところ宗教関係の情報はどうなの？

『ないね。調査員達が無能だと思つてたけど、正しいかもしれない。どんな宗教なのかがさっぱりわからない。本当は宗教関係じゃなくて、兵士の育成施設なんじゃないかとも思い始めてる。でも、それなら単体で仕掛けてくるのは変なんだよなあ』

どうもこいつでもわからないようだ。

それならボスに挑んでみるしかないだろう。

私は扉に手を付け、力を入れる。

ゆっくりと扉は開き始めた。

大部屋の中心に男が一人で立っている。

背は高く、体格はたくましい。腕を組み、堂々とこちらを待ち受けていた。

近づくと腕組みをやめ、片手を掲げ、もう片方の手を下ろした。掲げられた手には六枚の札が出現した。

男は一枚の札を下ろしていた手を上げて引き抜き、札を裏返しこちらに裏面——彼から見て表面を見せつける。

札には、炎に包まれた虎が描かれていた。

『ふむ、なるほど……』

札は白い光に消え、男の前に炎の虎が実物として現れた。

『聞いてたとおり初手は必ず火炎の虎。距離を取って』

出現する火炎虎から離れるべく部屋の隅へ行く。

『火炎弾を四発サイクルで撃ってくる。四発目で距離を詰めるけど、合図で止まって。後退するからね』

あいよ。

言われたとおりに、私と同じ高さの直径を持った火の玉が、私をめぐって飛んできた。

四発目が放たれた直後に火炎虎に向かって走る。

『ストップ！　ここで後ろにジャンプ！　よし、良い距離。このまま待機』

私が近づくのを見て、火炎虎は炎の波動を放った。

火炎虎を中心に炎の壁が生じ、それが凄まじい速さで同心円状に広がる。

広がるにつれ、壁は徐々に高さを低くしていく。

『低くなった波動を飛び越えて、一気に斬りつける』

私の直前で、火の壁はすでに飛び越えられる高さになった。

熱さを感じつつ飛び越えて、火炎虎に向かい、硬直していた虎を斬りつけた。

虎はあっさりと光に消えていく。

『うん。いいね。通常は反撃の爪攻撃があるけどスキップできた。さしてきて次はなにかな』

男の手にカードが一枚追加で現れた。

ちなみにこの男を直接攻撃できるらしいが、超上級パーティが瞬殺される強さらしい。

その場合は別のドロップがある可能性もある。しかし、とりあえず一旦は正統な戦い方で倒すことにしてみた。

男は先ほどと同様に一枚の札を裏返す。

『フィールドカードの草原だね』

札が青い光に消えると、周囲に変化があった。

大部屋から壁と天井が消え、床までも光に包まれる。

空には太陽、地面は股下まで伸びる見たことのない草、そして前後左右どこまでも草の生い茂る状態になっていた。

いわゆるボス部屋空間というやつである。どう考えてもあり得ない光景が広がっている。

『この草……』

男は、また札を一枚引き抜き、今度は裏返すことなく手を離れた。

札はまるで板のように、ストーンと落ちていき、地面に吸い込まれるようにして消えた。

『カードを伏せてきたか』

追加で札をまた一枚引き抜く。

今度は札を裏返し、その面を見せつける。

『また火炎の虎か。距離を取って』

先ほどと同じ虎がまた出てきた。

私も同様に距離を取る。

『ちよつと待って……。うっわ、追加强化もするとか』

男はさらに札を一枚裏返す。

その札には、化け物が唸りを上げる絵が描かれていた。黄色の光とともに消える。

火炎虎が光に包まれ、その体躯は倍近くに巨大化した。

大きな唸りをあげ、炎弾を吐くため息を吸い込んだ。

『伏せたカードが拘束なのか見たい。避けるのは遅らせて。ちなみに拘束だと一発は剣で防がないといけない』

火炎虎から吐き出された炎は先ほどよりもずっと大きい。

『よし。拘束じゃないから避けていいよ。左に避けてね。風向きからみて右は炎の嵐になる。炎弾は六発。さつきよりも大きく避けてね。』

あと、近づくときは燃え跡を通るようにして』

指示に従い、炎弾の進行方向と直角の向きに走る。

後ろからの熱波を浴びつつ、六発避けると平原に黒い跡が六本残っていた。

その黒い燃え跡を通って火炎虎に近寄る。なお、平原の右側は草が燃え、炎が立ち上がっていた。

『さつきよりも大きく下がって。炎の壁も二回に増えているから気をつけてね』

一度目の炎の壁を飛び越えると、その壁を追いかけるように、高速の壁が迫ってきていた。

それも飛び越えて、火炎虎に迫る。

『トラップ発動確認。無視して』

火炎虎の奥に立っている男の足下から何か札が上がってきていた。

札は裏返り、紫に煌めいたが特に何も起きない。

そのまま火炎虎を斬りつける。

『さすがにしぶとい』

大きくなっている影響か、斬りつけてみたものの消えることはなかった。

『爪が横、縦、横、突きで来る！』

伏せる、ステップ、伏せる、ステップというシユウの声に合わせて燃えさかる爪を躲す。

この後は隙ができ攻撃できるらしいが、安定しなくなるので距離を取って炎弾を撃たせる方がいいらしい。

ちなみにさつき出てきた札はなんなの？

『転移のトラップ。これは無効化できる』

そうなのか。

『炎弾来るよ』

はいはい。

同じサイクルを繰り返し、火炎虎を倒した。

男の手に札が二枚追加された。

その後も札からのモンスターに倒し続け、とうとう男の手から札が

尽きた。

男は両手を軽く挙げ、こちらに何も持っていないを示す。そして光になって消え去った。残るのはアイテム結晶のみである。ふうー、なんとか倒したな。

長い戦いを終えた後の充足感がある。

相手の全てを受けきったという達成感だ。

アイテム結晶を拾って、中身を覗いてみる。

——縷イ縷ヤ縷？う縷ウ縷ケ縷ヨ譽？※諧ユ

ギルドから聞いていたとおりましたく読めない。

しかも、結晶解除しても札が出てくるだけで何の意味もないらしい。

『これで確定した』

何が？

『ボスの正体。あの男は——異世界からの漂流者だ』

……どういうこと？

『まず、ボスが持ってたカード。あれは、この世界の理ことわりじやない。魔法じやないんだ』

たしかにあんな現象は見たことがない。

『次に、平原で見たあの草。あれもこの世界には存在しない。正確には、鑑定した際の生息地域が、この世界のどこにも該当してない。他にもいろいろとあり得ない動物や植物が出てきた』

ほうほう。

それで、このドロップは？

『極めつけがこれ。文字コードがこの世界のものじやない。加えて、正しくエンコードされてない。つまり、あの男は正規の手続きを経ずに、この世界にたどり着いてる。おそらくヘンテコな召喚か、元の世界からの転移だね。普通だと読み取れない。ちなみに、チートで見たところそのアイテムは「エレティコスのごみ札」らしいよ』

ごみ札なの？

『あの倒し方は本来の倒し方ではないってことだよ。考えられるのは元の世界と同様にこちらでもカードを使って戦うべきなんだろう』

その札がないんだけど……。

『そのとおり、この方法は現時点では無理。そうすると、別の方法だ』
というど？

『正しいボス戦はカードとの戦いじゃない。超上級パーティーが瞬殺されたっていう、エレティコスとかいう男本人との戦いだ』

こうして私は真のボス戦に挑むことになった。

扉から出て、しばらく亡霊を倒してボス復活までの時間を稼ぐ。

『おそろくこのモンスターは、ボスに憧れて門下になったんだろう。同じような強さを身につけようとしてね』

できるの？

『無理に決まってるじゃん。異世界人だよ。言葉どころか、法則も違う。でも宗祖としては、イミフな力で神秘性があっていいんじゃないかな。でも、本人は門下もこの建造物もなんとも思っていないだろうね。だから、何も残ってない。調べても宗教のことはわからない。そもそも実がないんだから』

調査員らにとっては、むなしい話だった。

周囲を調べても何もわからない。ボス戦のみでわかるが、異世界を知らないと繋がらない。

時間の無駄だった訳である。

『いや、超上級パーティーは良い仕事をした。最大の功労者だ。正当法じゃないにしても、一種の勝利をしたんだからね。さて、もうそろそろいいでしょう。挑んでみよう。真のボスに』

ああ。

殺されることはないらしいので、とりあえず一戦してみるとしよう。

ボス部屋に入り、腕組みして待ち構えるボスにシユウを向ける。

『ゲロゴン』

ブレス！

最初から倒す気全開だ。

炎の奔流が消え去ると、そこには男がまだ立っていた。

男の周囲にはうつつすらと赤い膜が張られており、それが泡のように弾けて消えた。

同時に、すでに手に出現していた札が二枚光に消える。

『あんなカード、さつきはなかったぞ。直接戦闘用の別デツキだ』

男の手元にカードが二枚現れ、二枚が光に消えた。色は黄色と橙だ。

黄色い光が男の体にまとわりつき、同時に男の姿も消えた。

『屈むー！』

言われたとおりに屈む。

シユウに言われた内容を行動に移す訓練は普段からしている。

勉強関係はまったく続かないが、この訓練だけはダンジョン攻略と直結するため普段から欠かさない。

今回もその結果が出たと言えるだろう。

私の髪を掠めて、何かが通過した。

すさまじい速さだったようで、音と風圧が届く。

前に転がり振り返ると、男も距離を取るように飛んだ。

着地すると、手を開いたり閉じたりして何かを確認しているようだ。

『能力半減の効果と、その距離を測られたな』

男の手に札がまた一枚補充され、一枚が灰色の光となり消えた。

『……いや、二枚消えてるね。トラップもどこかに仕掛けてるぞ』

男の片手に、ハンドボウが出現した。

ボウには自動で火の矢が番えられ、こちらに放ってくる。

速度自体はそれほどでもないが、追尾してくる上に、触れたときの爆風が異常に大きい。

こちらから近寄ろうにも牽制の矢を放ちながら後ろ向きに移動し近寄れない。

ゲロゴンブレスを撃とうにも矢が次から次へと撃たれてしまう。

男の手にまたしても札が出現し、さらに一枚が青色に消えた。

周囲の景色が変わる。平原に変わると思ったが今度は違う。

足場は小石が散らばり、あちこちに岩などの遮蔽物が置かれている。

これはまだいい。一番の問題は――

『霧とか、やっかいすぎるだろ。右！』

周囲は白くかすみ男の姿は消えてしまった。

さらに、見えないところから炎の矢が飛んでくる。

『なによりもやばいのは、手札が見えないってことだね。ふむ、このフィールド作成は間違いないく魔力を利用して――黒竜のスキルを使つて消すから。霧が晴れたら一気にね』

言うが早いか刀身は黒く染まっている。

石も、岩も、霧さえも全てシユウに飲み込まれていく。

景色が戻ったところで立ち尽くす男を見つけ、全力で駆け抜けてシユウで斬る。

『最初のトラップだな』

斬った瞬間に異常な光と音、それに風が私を覆った。

光と音はシユウが遮断したようだが、風は抑えられず大きく飛ばされた。

着地して男を見ると、ハンドボウは消え去り、手札は増えて四枚になつていた。

そのうちの三枚が赤く煌めき消えた。

『光の色で効果の種類がわかる。黄色は強化、青はフィールド、白は召喚だった。灰色が装備系統なのかな』

赤は？

『初めて見る。あつ、空だね』

上を見ると、天井部分から何かが出てきていた。

それは徐々に大きくなり天井のほぼ全てを占め、徐々に落ちてきている。

『赤は直接攻撃か。安全位置は男のところだから』

そちらに走るべく、移動しようとしたが、緑色の光とともに足下からツタのような物が現れ、胴体と足、腕を絡みつける。

おいおい逃げられんぞ。

『なんとか左腕だけ外して』

言われたとおりにツタを力尽くで千切る。

『俺を上に向けて。勢いはさほどない。要はデカイ岩ってだけでしょ。邪神様のスキルでぶっ壊す』

シユウを上に向けてる。

すでに大岩は直上に迫っていた。

岩がシユウに触れると、とてつもない力がのしかかったが、それも一瞬。

バキバキと大きな音が聞こえ、ヒビがあちらこちらに入っていく、次いで小さな音になり、細かく岩は散っていった。

粒子が落ちてくる中を駆け抜けて男へと走る。

男の手に一枚の札が現れ、すぐに銀色に光って消えた。

私はかまわず男を斬りつけた。

『手応えあり』

続けて斬りつけようとしたが、相手の体が崩れてしまい空を切った。

男の体は崩れ、白い光になって消えていく。

『あら、本体自身はもろいのか』

どうもそのようだな。

『……………斬って！速く！』

えっ？

あとはアイテム結晶が出るだけだと思ったら、シユウが叫んだ。

目の前の景色が巻き戻り始める。

白い光が形をなしていき、元の男に戻る。

斬りつけようとしたが、フラリと躲かされてしまった。

躲したというよりも倒れたが正確だろう。

『最後のカードは一度だけ復活の効果だったんだ』

なるほどな。だが、ここまで来ればもう避けることも外すこともない。

突き刺して終わりだ。

ただ、男の手に握られた札が一枚——光を発して消えた。その色は

虹色。

男の口元が笑っているように見えた。

シユウを突き進ませるはずの手が止まる。

体中の毛穴が開き、冷たい汗が噴き出てくる感覚。

考えることもなく足が勝手に男から距離を取っていた。

『何やってんの？』

なんか……やばい……。

『虹色の光は初めてだったね。念のため無敵スキルを使う。笑っていたのは確かに気になる』

シユウも私と相手の様子を察したようだ。

最終手段を発動すると宣言し、すぐさま感覚で無敵の効果を実感した。

何かが起こると待っていたのだが、何も起こらない。

しばらくすると男の手が空を掴むように動き、目を見開いて、信じられないといったものになった。

すぐに手は地に落ち、目は力なく虚空を見つめ、体は白く光の粒子になっていく。

アイテム結晶だけが男の位置に残った。

『竜スキルをほぼ全部使うとか強すぎるぞ。超上級パーティーも瞬殺される訳だ。いったい何者だったんだ……。最後のカードも気になる。無敵じゃなかったら負けてたんだらうね』

そうだな。

何かは結局わからなかったが、とてつもない気配を感じた。

互いに異邦人を恐々としつつもアイテム結晶を拾う。

——縋イ縋ヤ縋？う縋ウ縋ケ縋ヨ蛻？j 潜ユ

覗いてみるものやっぱり読めない。

なんて書いてあるの？

『「エレティコス」の切り札」だって。たぶん最後に使ったカードなんだろうけど、このカードは俺たちじゃ使えないんだよね』

あれま、残念だな。

どんな効果なのか実際に使ってみたかった。

『竜スキル並なのは間違いない。もしかしたら、本当に、彼の世界で竜を倒したときの特典だったかも。でも、使えないからやつぱり意味ない』

言ってもしょうがない。

久々の本気の戦闘でちよつと疲れた。

いったん街に戻って食っちゃ寝するとしよう。

そういやギルドにはなんて言えば良いんだろうか？

『残念だけど、帰るのはもうちよつと後からになりそうだね』

ん？

というと？

『後ろ』

振り返ると、大部屋の真ん中に何やら札が一枚ぶかぶか浮いていた。

札は橙色の光に消え、大部屋全体に魔法陣が描かれていく。

『大丈夫。転移系の魔法陣だけど無効化できてるから』

びつくりした。

いったいどこに転移させるつもりだったんだろうか。

『それは魔法陣を調べればわかる。俺としては転移の目的を知りたいところだ。ふむふむ、ずいぶんと精密な魔法陣だね。いろいろ条件も足されてる。あつちにあるのが座標かな……』

すでに調査に入っているようなので邪魔しないように黙っておく。

軽食を食べ、飲み物で喉を潤す。

魔法陣の光も徐々に落ちていき、消えると思ったが、ほのかな灯りの段階で止まった。

『魔法陣については、だいたいわかった』

おお、さすがだな。

『これは異世界に飛ばす魔法陣で、条件がいくつか付与されてて、さっきのボスを倒した時と、倒した者にのみ反応するようになってる』
なるほど、それで？

『魔法陣からわかるのはそれだけ』

どこに飛ぶとか、男の正体や目的とかは書かれてないの？

『具体的にどこに飛ぶかはわからない。書いた奴はわかる。ボスの男だ。座標系が、飛ばされたところからここまです、逆探知的に探した地点に設定されていた。魔法陣としては発動しそうだから、今も転移場所は存在してるでしょう。それにこの男も魔法陣が書けるだけの技量があるってことはわかる』

転移できて魔法陣も書けるってことは、いつでも帰ることができたってことか？

『今はできない。おそらくダンジョンに縛られてる。一種の封印、あるいは呪いだね。転移魔法陣は書けても、封印解除ができないから帰れなかったんだと思う。どっかの邪神様みたいな奴だ。今回はあのとより強力だね。なにしろ本人はもう死んでるから、ダンジョンからの封印を解除したらほぼ間違いなく死ぬ。……ただ、人間るときならいつでも帰れたはず』

人間の時は帰らずに、ボスになって帰りたくなかった？

『魔法陣の条件は、「男を倒した奴」だ。男は自分を倒した奴が転移されるようにしてた。何か転移させる目的があるんでしよう』

聞くことができればいいのにな。

『難しいね。生きてる頃ならまだしも、今はボスになっちゃってるから』

ふーむ。

『でも、男以外に聞くことはできるかもしれない』
『どういうことだ？』

『転移先の相手に聞けばいい』

……そんなことできるの？

『魔法陣に追加領域を持たせてるからね。おそらく後で何か書き足すはずだったんでしよう。そこを利用させてもらおうとしよう』

そんなわけでシユウの指示に従い、魔法陣の一角に線を何本か書き足した。

こちらから相手用と、相手からこちら用のものらしい。

ほのかな光が私の引いた線をなぞっていく。

『誰かいますかーって聞いてみて』

誰かいるか？

“……………縛ゆ→縛……縛？縛ゆー？”

おおお、本当に聞こえた。

すごいな、この相手は異世界なんだろう。

さすがに何言ってるのかはわからないな。女っぽいことしかわからん。

『……………ああ、いや、聞き取る以前に声がバグってる。エンコードも追記しないと駄目そうだな。ちよつと調べるから待ってて』

すぐかと思っただがだいぶ待たされた。

最初の調査よりも長かったに違いない。

相手からの声も、今はもう聞こえなくなっている。

『最初は読むだけで、今は書き加えるわけだからね。特に世界間の文字コードは複雑なんだよ。史竜に聞いてないとわからなかっただろうね。まったく竜がうらやましい。あいつら異世界間を顔パス状態だからね』

愚痴を言いつつも修正を加えていく指示は精確だ。

ズレを許さず線の引き方を指示される。

『これでどうだ』

おーい、聞こえてるかー。

“縛七縛溯◇縛薙…縛ヲ縛阪◆……縛？▲縛溘∠菴輔→縛ヨ……”

駄目っぼいぞ。

『いや、変換できる。今のは「また聞こえてきた。いったい何なの」らしい。ふむふむ、カーネフェル語だそうだ。てい、エンコーディング。どやあ？』

おーい

“わっ、えっ、……おーい”

驚きつつも控えめに返事が来た。

おーい

“おーい”

おーい。

“おーい”

『楽しそうなのはいいけど、本題に入ってくれる』

私はメル。冒険者をしている。そちらは誰だ？

“ウチは道化師をしてるジェスター。……冒険者って何してる人なの？”

それは私の台詞だ。道化師ってなんだ？

『埒があかないから俺の言ってること伝えて』

その後、シユウの言葉を代弁し、ジェスターの言葉を受け取った。何でもルイアンとかいう大陸にいて、あちこち巡ってお金を稼いでいるらしい。

場所は野宿で使った古代遺跡の中にあり、奥から変な物音がして近づいてみたとのこと。

『疲れる相手だ』

話をするとすぐに方向性がずれて、シユウも話をするのに苦労していた。

『特に問題があるわけでもなさそうだね』

そうだな。

なんか平和そうだ。

『あつ、そうだ。あとはエレティコスって名前に聞き覚えがないか聞いてみて』

エレティコスって知ってる？

“何言ってるんのメル！ 馬鹿にしてるの！”

すごい剣幕だが、知らんものは知らん。

『聖徳太子知ってる並の反応だ』

そんな有名なのか。

“この世界の神様でしょ！ どの国のトップも、自分たちこそが彼の意味を継ぐ者だって主張してるじゃない！”

『おいおい、お前んとこの神様、こっちのダンジョンでボスやってるぞ』

まったくだよ。

“それでメル、どうすんの？ こっち来る？ 楽しいよー”

『カラオケ来るみたいなのりで、異世界に誘ってくるのはやめてもら

いたいね』

いやあ、別に問題ないならやめとく。

ダンジョンもないだろうしな。

「ダンジョン？ 冒険者ってシーカーのことなの？ メル、ダンジョン潜ってたんだ。こつちにもあるからおいでよ」

……ダンジョンあるの？

「そりゃあるでしょ。さつきからほんと馬鹿にしすぎ！ ウチもお、モンスター倒してえ、流行のカード集めることくらいあるわけっ、わかるでしょ？」

いや……、どうだろう。わかる半分、わからない半分くらい。

こりやもう、ちよつくら行ってみて確かめないといけないのではないだろうか。

『帰ってこれないよ。これ一方通行だから、一度使ったらそれで終わり』

そこだよなあ。

サクツと帰れるならちやちやつと行くんだが……。

「メル、心配イしすぎだつてー。ザなんとかなるよ。ギそんなことができる人がいるって噂聞いたことエあるし」

うん？

何か変な音が……。

『黙って』

「ねえエ、おーい、聞いエてる。メウル」

『ジエスターを黙らせて』

ちよつと黙ってくれ。なんかおかしい。

「イ……エ……あ」

何か聞こえてくるな。

近くに何かいるのか？

「いないMよ……i……▽纏……けえ◆」

何だ。

はつきり聞こえてきてるぞ。

「……見つけた」

男、だろうか？

なんか静かな声が聞こえてきた。

『おおー、すげえぞ、こいつ！ 盗聴どころか割込みに逆転移までしてきた！』

何が？ 何のこと？

『来るよ』

だから何が？

視界の中に何かがチラつき、顔を上げると札が三枚浮いていた。

白い光とともに札は消え去り、細い紐に操られているような人形型のモンスターが現れた。

何だこいつら？

「メル！ どうしたの！ 大丈夫？」

人形どもは三体で私を囲み、手に備え付けられたナイフをチラつかせ、ひよこひよこことにじみ寄ってくる。

あまりにもまどろっこしいのでこちらから斬りかかり、一体を光に消す。

さらに残る二体もサクサクツと倒してしまった。

「ねえ！ ちょっと!？」

問題ない。

なんかヘンテコなモンスターが出てきただけだ。

ボスの出してきたモンスターとは、比べるべくもない粗悪品だったかな。

「そう、なら良……え、何これ、何なの？ 何でモンスターが――

”

小さな悲鳴に、遠ざかる足音と、それを追う音が聞こえてくる。

『ふむ』

いや、「ふむ」じゃないんだけど、どう聞いてもモンスターに襲われている様子だぞ。

助けに行ったほうがいいんじゃないのか。ああ、くそっ、でも帰れないのか。

『いや、状況が変わった。転移の魔法陣は書こうと思えば書けるし、魔

力の問題も割り込んだ奴を探し出せばいける。たぶんほつといても向こうから探しにきてくれるでしょう』

じゃあ、行こうか。

ジエスターを早く助けるべきだろう。

『必要ないと思うよ』

……なぜ？

『逃げ方が綺麗すぎた。ジエスターの近くにもモンスターは現れた、これは間違いない。だとすると普通は立ちすくむ。でも、彼女はあっさり逃げた。しかも足音はジエスターとモンスター三体に加えて、かすかにもう一体の音が聞こえてた。彼女が召喚した何かだろう。普通、その一体でなんらかの牽制をしてから逃げるものじゃないかな』

そうかもしれないが、それじゃあ彼女はなぜ戦わず逃げたんだ？

『たぶんメル姐さんを誘ってるね。エレティコスの名前を聞いてから異常にメル姐さんを誘ってたし』

じゃあ、ここにモンスターを召喚してきたのも、彼女か？

『いや、それは違う。明らかに別の座標から介入してきてるからね。裏で繋がってるかはわからないけど、たぶんそれはない。モンスターの出現での驚きは本当だった』

ほーん。まあ、細かいことはいいや。

ダンジョンがあつて、帰れそうならためらうこともあるまい。

いや待て……。そもそも落ち着いて考えると、異世界でダンジョンとかあり得るのか？

『あり得るよ。この世界特有なのはダンジョンじゃなくてアイテム結晶だからね。その役割をカードが担っているなら、ダンジョンができることは十分ある。ただし、それが俺たちの知っているダンジョンと同等のものかはわからない』

そのときはさっさと帰ることしよう。

他に何か問題は？

『最大限の注意はしておくべきだろうね』

そちらは任せた。

『じゃあ行こう。時空間耐性を切るから』

異世界のダンジョンなんて初めてだ。

わくわくしてきたぞ。

『この魔法陣だと時空移動の酔いが最悪だけど問題ないっしょ。さっそく行ってみよう』

あつ、ちよつと待って。

酔い止めとか、酔いそのものをなくすチートってないの？

……返事はない。

景色がぐにやりと歪み始めた。

周囲の景色は意味をなさないほど歪み、まともに正視ができないほどだ。

頭の中がぐるぐるんとゆっくりかき混ぜられているようである。このとてつもなく嫌な感覚が異世界への冒険を感じさせた。

景色が形をなしてきた。

『敵影なし』

頭がぐるぐるして気持ち悪い。

たぶん地面に立っているのだからよくわからない。

『ジェスターはいないし、モンスターもない。扉は二方向。片側の扉が開いてるから、そっちに逃げたんだらうね』

あ、そう。

だいぶ落ち着いてきた。

場所は屋内で暗い。ボス部屋と似ているな。

『うん、思った以上に何もなし場所だね。どうしてここが座標に指定されてたんだらう』

それは後にくれ。

物音が聞こえてくる。今は追いかけた方がいいだらう。

大部屋から出て、通路を走ると、見覚えのある人形モンスターが二体いた。

それらと、熊のぬいぐるみのようなモンスターが腕を振って戦っている。

彼らも目を引くのだがそれ以上に目を引くものがあつた。
熊の後ろで守られている少女だ。

おそらくジエスターだろう。

顔立ちは若く、声とも合致する。

しかし、服装がすごい独特だった。

二股に分かれた帽子に、くるくるさせた髪の毛。

赤白黒を基調として、丸だの菱形がデザインされた派手な服を着ている。

しかもその服はへその上までしかない。へそは丸出しで、その下は服と同じ柄のスカートを履く。

さらにスカートも短く、膝の上までヘンテコな模様の靴下を上げていた。

靴はヒールがついており、つま先はくるくる巻いている。

町中で歩けば間違いなく目立つだろう。

『うーん、コスプレJKって感じだね。おへそと絶対領域が良いですなあ』

見たところ戦闘ができる服装には見えない。

実際に苦戦しているようなので、加勢することにした。

モンスターの後ろへ近づいて斬りつける。

元の世界と同様に一撃で倒せた。もう片方も斬りつける。

「えっ！もしかしてあなたがメル！」

ああ、そうだ。

口元に両手を当てて、笑うような顔で近づいてくる。

手にもびつちりした黒と白の手袋を填めている。

『あの手袋は魔装具に近い。変な効果がある』

ほう、じゃあ他の衣装も何か効果があるのか？

『ない。他はただの服。服と言うより装束というべきなのかな』

ジエスターは私をジロジロと上から下まで見つめる。

あからさまに顔を顰めていく。

「うっわあつ、変なかつこー！ありえないって！ウチがコーデしたげるよ」

こうでって何だろう。

とりあえず服装について、そちらからどうこう言われたくない。ひとまず場所を変えて、情報を交換することになった。

悪い奴ではないとわかるのだが、会話がなんだろう、ふわふわとすすぎに進まない。

ご飯の話とか家族やら、よくわからない感想が次から次へと出てきてたくさん話しているのに何もわからない。

ゴミのような会話が続いて疲れてきた。

わかったのは、ここがジャックの国とかの僻地ということだけだ。

『いや、見かけ以上に世間を渡ってることはわかった。きちんと情報を抜き出してる』

そうか。

あまり長話はしたくない。

『じゃあ、共通項について話そう。まずモンスターを送ってきた奴だ』
私たちが襲ってきた奴に心あたりはあるか？

ちなみにこちらの世界からってのは間違いないようだぞ。

カードも出してきたからな。

「うーん、エースにそんなことできる人がいるって話は聞いたことある。あそこ、行ったことないんだよねえ。カードを全部渡さないと入れないとか、ありえないっしょ！　ウチのカードをあいつらに渡すとか絶対ムリだから」

はいはい。

エースだかにいる可能性ありね。

『次が本命。エレティコスについて。とても興味があるように聞こえた』

エレティコスは知ってるんだよな。

詳しく教えてくれ。

「いや、ウチもそこまで知らないよー。ちょっと調べてるだけだつて」
『あつ、これは詳しい人の口ぶりですねえー』

ジェスターによれば、エレティコスは本当にこの世界で神扱いだった。

彼が大陸を創造し、救いを世にもたらしたと語られているほどだ。彼は現在、神のいる座に収まり、世を見守っているとか。つまりダンジョンは神のいる座ということになる。やっぱりダンジョンって素晴らしいな。

『冗談言っていないで、ちゃんと聞いて』

冗談なんて言っていないんだが？

神話も両手で数えられないほどあるようで、各国で研究されているらしい。

どうも神というのはいるときよりもいなくなった後が面倒で、彼が消えた後、残された者たちは彼の後継者を競い争った。

当初あった幾十の派閥が時間とともに淘汰されていき、四つにまで減った。

それら四派閥が現在の大陸にある四つの国となったようだ。

彼らはエレティコスの後継者を主張しているが、それを証明するものがない。

彼の遺品はほとんど残っていないのだ。仮に見つかったとしても、それらは歴史的な意義しかない。

そこで重要になるのが、彼が使った札だ。

神話に出てくるような札は、一枚も残されていない。

もしも、それらを見つけ手に入れたなら真の後継者問題に決着がつく。

『確かにつくだろうね』

ふーん、そんなものか。

『彼のカードは、歴史の針を進める滅びの鐘音だ。他の国を滅ぼして、最後にその手にカードを収めた国こそが正統なる神の後継者。今度は一カ国にまで減ること間違いない』

ぶっそうなことを楽しそうに言ってるが、要は見つからなきゃいいんだろ。

『もう見つかったてる。推定でエース国が、一步先んじてるね。それに』

そうだな。ジェスターの眼差しが先ほどの物とは違う。

熱を持った視線で私を見つめてくる。

「持つてるの？」

何を、とは言わなかった。

さすがの私もわかる。

『嘘をついてもどうせばれるから、あげちゃっていいよ。でも、欲しい理由は聞いて』

私は、エレティコスを倒してたまたまその札を手に入れた。

ジェスターは、なぜその札が欲しいんだ？

「ウチらの……、夢だからかな」

なぜあのカードが夢になるのかわからない。

ただ、今までの浮ついた雰囲気はなく、本音をありのまま言っているように感じた。

『嘘はないね。喜び、憧れ、悲しみ、それに怒りと呆れも混ざってるね。うん、おもしろい。ゴミの方を渡して』

それはちよつとひどいんじゃないか。

アイテム袋にて手を突っ込み、ごそごそあさる。えつと――。

『どつちか迷ってるでしょ。右がゴミだよ。左は切り札』

ああ、これだな。

出てきたアイテム結晶を解除すると、ジェスターが物珍しそうにその光景を眺めていた。

現れた札を「ほい」とジェスターに差し出す。ちなみに差し出したのはゴミ札である。

ジェスターは、震える両手でそのカードを掴み、自分の方へと引いた。

彼女の手で札は白く瞬いて消える。

ジェスターの隣に、彼女の倍の体格はあるだろう見覚えあるモンスターが現れた。

体が炎で構成された虎だった。ボスが初手で必ず出してくる火炎虎だ。

「……うっそ。これ、炎虎マルス。ほんとに……」

呆然と彼女は火炎虎を見つめている。

そんなに有名なの？

「エレティコスが好んで連れてたつていう火炎の聖獣。大悪の獣レザールの群れを聖炎で焼き尽くした話は超有名。初期の神話で何度も出てくるから、風貌も各神話で共通項があるし、これもその特徴にあつてる。おそらく本物」

『すごいね、ゴミ札。切り札は世界創造になるんじゃないの』
笑えないな。

で、これをどうするの？

「ごめん、メル。やっぱ、ウチじゃ扱いきれないからさ。返すね」

あははと笑って、ジエスターは火炎虎に手を向ける。

しばらく手を向けていたが、彼女の様子が変わってきた。

何やら手を何度も握ったり開いたり、顔つきも真剣味を帯びている。

私の視線に気づいたのか、てへへとこちらに笑いかける。

「ありやりやー、困ったなー。……戻らないや」

ほんとどうしよう、と最後にはうなだれてしまった。

戻らないとは札に戻せないということだったようで、問題の火炎虎はずっとジエスターの側に仕えている。

仕えていると言っても、別に何かをする訳ではなく近くにいるだけで特に何もしていない。

ときどきジエスターが話しかけるものの、ジツと見るだけである。

『カード化できないなら外もおちおち出歩けないだろうね。戦争開始の爆弾を担いで歩くようなもんだ。かわいそうに』

その爆弾を渡すように薦めた張本人が何を言ってるんだ。

『言われたとおりゴミ札を渡した張本人が何を言ってるのさ。まあ、なんとかなるでしょ』

そうだな。

戻らないものはしょうがない。

それよりダンジョンに行こう。私の楽しみはそれだ。
ジエスター。

ダンジョンまでの案内を頼む。

「これ」

ジェスターが火炎虎を指さす。

かっこいい虎だな。

「違くて。どうすればいいの」

どうすりゃいい？

『斬れば？』

おお、妙案だな。

シユウを握り、火炎虎を斬りつけた。

避けようとしたが遅い。あっさりと光に消えてしまう。

「聖獣を斬るとか……」

ないわーって顔でジェスターは見てくる。

どうしろというのか。

それよりもだ。

アイテム結晶は出たが、また使うか？

「……やめとくよ」

そうか。それじゃあ、ダンジョンに行こう。

近くにダンジョンはないのか？

外に出て、誰もいない道を走る。

ジェスターは、彼女が召喚した熊のぬいぐるみに乗せてもらい並走している。

見た目が可愛い割に、四足でけっこう速く走るものと感心する。

「速いー、揺れるー、気持ちわるーい」

ジェスターは文句を垂れている。

実際に乗り心地は悪そうだった。体がすごい揺れているし、首も痛めそうだ。

先ほどから誰ともすれ違わない。

どうもここはジャックが治める国の僻地だったようだ。

たまたまあの遺跡に寄って遭遇することになったらしい。すごい偶然だ。

『そんな偶然を俺は信じない』

偶然ではないと？

『たまたま攻略したダンジョンのボスが異世界人で、たまたま異世界から話しかけたメル姐さんの声が、たまたま遺跡に寄っていたジェスターが聞き取り、たまたま盗み聞きに成功した奴がいて、たまたまそいつのハッキング技術が天才的で刺客もけしかけることができた。偶然の一致と言うには、あまりにもできすぎるとは思わない？』

できすぎるとは私も思うぞ。

でも、偶然じゃなかったら何なんだ。

『運命論ってのがあるんだ。宿命論とも言われるんだけど、この世すべての出来事はあらかじめ全部決まってる、人の努力ではそれを変更できないって考え方』

私も似たようなことを聞いたことがあるな。

つまるところ、お前はこれは運命だと言いたいのか？

『運命論と混同されるものに決定論ってのもある。あらゆる出来事は、なんらかの原因によって決められており変えられないって論。この原因を自然現象に求めるか、宗教的なものに求めるかで違うんだけど、宗教的なもの——いわゆる予定説ってやつだと、あらゆる出来事は全て神が定めているって論なんだ。正確には救われる人と救われない人を決めてるだけなんだけど』

長ったるい説明だけど、要は神がもうどうなるか全部決めちゃってるってことだろ。

それを運命と言うのなら、運命論も決定論とやらもどっちも同じに思えるが、何が違うんだ。

『人の自由な意思が存在するかどうか。宗教的な決定論には存在しない。神が全部決めるんだからね』

それは運命論も同じじゃないの？

いや、もういい。これ以上はたぶん私の理解を超える。

結論だけ教えてくれ。

『この世界は一つのダンジョン。ボスもすでにわかっている——神だ。すなわち今回のダンジョン攻略は神を倒すことになる、と俺は思っ

る。確信と言っても良い』

神って、お前をよこしてくれた神様？

『いや、そっちの超越的な神様じゃない。あくまでこの世界で信仰されているという程度の一般的な神』

その神様ならもう倒しただろ。

切り札ももらえた。何かは知らんがな。

『あの切り札が何か、ね……。俺の想像が正しいなら、あの切り札こそゴミ札だ。あまりにもつまらない。神もそれに気づいた。でも、彼はそれを認めたくないらしい』

それ以上、シユウは何も語らない。

言うべきことは言ったということなのだろう。

なんにせよ、静かになつたのは良いことだ。

小難しく長い話にも飽きていた。

ここからが本当のお楽しみということだろう。

2. 表現主義の狂剣士：ジャック

ここはジャックという国で、同時に人名でもある。

この世界の慣習で、国の名はトップの名を使うのが慣習のようだ。すぐに名前が変わるのではないかと思つたが、五年近く変わっていないと聞く。

ジャック、クイーン、キング、そしてエース。

この四名、四方国がこの大陸で覇を競い合っている。

今いるのはジャック、別称は「表現主義の狂剣士」だ。

表現主義がなんなのかさっぱりわからない。

とりあえず剣士ということはわかる。

なんだ、私と同じだな。

『ほぎげ。盗人風情がよくも剣士を騙れるものよな』
なにその喋り方。

突っ込みが怒りに勝ってしまったぞ。

「楽しそうだねー。でも！早く！助けてもらっていいかな！」
はいはい。

ジェスターとパーティー登録をしたため、すでにシユウとの会話は聞こえている。

場所もすでにダンジョンで、彼女は熊のぬいぐるみでモンスターと絶賛戦闘の最中だ。

ダンジョンの中は元の世界とさほど変わらない。

モンスターが出てきて、倒すとアイテム結晶が残るだけだ。

アイテム結晶をジェスターに渡すと札になることはちよつと驚いた。

『おもしろいね。元の世界から持ってきたアイテム結晶でもできるのかな』

ちなみにこの疑問は駄目という答えになった。こっちで私が倒したものの限定らしい。

他に大きく違うのは、この世界のダンジョン攻略方法そのものだ。

札を使ってモンスターを倒している。

本人はそこまで働かない。

「それがふつーだよ。メルみたいに自分の力で倒す方が異常なの。ジャックですら完全に装備系で戦う人なんてごく少数だよ」

このジャックでは自分自身が戦う人もいるが他の国ではまずないようだ。

特にこの国の筆頭、ジャック本人も自らが戦うスタイルらしい。

「表現主義は代々その系統」

表現主義ってなに？

「人は、カードではなく自らを鍛え戦うべし。カードはあくまで自らの戦闘を彩るものにすぎない。カードは表現のための道具だって人たち」

ほう、難しいことだと思っただが、かなりわかりやすい話だな。

それって私たちの世界とほとんど同じなのでは？

「そうなのかも。印象派の人たちとは犬猿の仲なんだよね」

印象派はどういう人たちなんだ？

「人は、カードによってその人物が表される。カードを集め、そのデッキの構成が人を示す。カードの印象こそが重要だって人たち。ク

イーンが支配してる」

クイーンの名前はなんなんだっけ？

「印象派の夢魔だね」

ふーん。

それよりデツキって言うのは、札の束なんだろう。

私の目には見えないけど、どうやって保管してるんだ？

「うーん、心の中？　頭の中かも。特に気にしたこともないや。意識すればわかるし」

すごい便利そうだな。

強いカードを入れまくれば、ダンジョンがあつという間にクリアできそうだな。

『それができないから攻略できてないんでしょ』

たいそう呆れた声でシユウは突っ込みを入れてきた。

「そだねー。入れられるカードの総数も個人に左右されるし、カードの種類ですら個人によって枚数の制限をされるんだ。ウチは攻撃系、装備系とフィールド系が入れられない。罫系統もほぼ駄目だねー。召喚系と強化系、それに特殊系で組んでるよ」

『ああ、やっぱり。カードを使ったときの色って系統に紐付いてるんだ』

ジェスターはそだよと肯定する。白が召喚、黄色が強化、橙が特殊らしい。

そういやあのボスもカードを使ってたときに色がついてたよな。

赤とか紫もあつた気がする。

「赤は攻撃系で、紫は妨害だね」

種類がたくさんあつて覚えるのが大変そうだな。

『虹色は？』

ジェスターが首をひねった。

「虹色なんて見たことない。でも、神話に出てた。エレティコス様が使ったの？　それってどんなカード？　どんな効果？　何が出てくるの？」

すごい食いつきだった。

鬼気迫る勢いで私に迫ってくる。

ボスが最後に使った謎の札だ。

いろいろあつて効果の発動を見ることなく終わった。

「そっかー。残念だなー。見てみたかったよ」

本当に見たいか？

「え、そりゃ見たいけど何で」

『また余計なことを……』

ジェスターは私とシユウを交互に見る。

「もしかして、まだ何か持ってるの？」

実はそうだ。

見ようと思えば見られる。

「えっ、すごい。見たい見たいよ。うちにも見せて！」

言ったが、私たちも見えていない。

興味は確かにあるんだが、見てはいけない気配を感じる。

実を言うと、さっさと棄ててしまいたいという思いさえあるほどだ。

『火炎虎みたいに、サクツと斬りつけてなんとかできるものじゃない。それはメル姐さんが、やばい気配を感じてることから間違いないね』

欲しいならくれてやろう。

でも、見るなら私のいないところで見てくれ。

それを踏まえ、もう一度だけ聞こう。

本当に見たいか？

「……や、やめとくよ」

それがいいだろうな。

私たちは攻略に戻った。

ボスもかなりあつけなく倒せてしまった。

「すごいよ。そんなに簡単なダンジョンじゃないのに。あつという間にクリアしちゃった！」

ジェスターは大喜びだが、私は消化不良だ。

そこそこ難しいダンジョンだと聞いていたのに、モンスターもボス

もあつけなく、隠しルートもないときた。

『中級くらいかな。モンスターがちよつと強いだけのダンジョンだ』
やっぱりそれくらいか。

とりあえず異世界のダンジョン攻略法が見られたから良しとしよう。

その後も、ジエスターと道をともにしてあちこちのダンジョンを攻略していった。

手に入れた札はそのままジエスターに渡して、彼女も手に入れた札でいろいろとデツキを試している。

自分で攻略するのも楽しいし、彼女が札を駆使して戦っているのを見るのもなかなか楽しい。

一度で二度おいしいとか、すげえよ異世界ダンジョン。

当初はわからなかったが、他の国から来たシーカーとかいう冒険者もどきは札中心の戦いだ。

この国のシーカーや一般の挑戦者連中は、元の世界同様に装備と強化で戦うことが多い。

物理攻撃が効かないダンジョンでは苦戦しているのが見て取れた。
逆に札中心での弱点もわかってきた。

デツキを組んでいても好きな札が出せるわけじゃなく、ランダムで手元に現れるってことだ。

最初に何枚か手元に出てくるらしいが、そこで良い札を引けなかったら、モンスターとの戦いが不利になる。

しかもデツキを使い果たすと、デツキが復活するのにかなり時間を食うようだ。

その間は札なしで己の実力のみで生き延びねばならない。

装備と強化中心だとそれなりに安定して戦える。

デツキを使い果たしても、装備や強化を受けた状態でデツキ復活までの時間を稼げるメリットがある。

札中心はどちらかと言えば魔法使いや斥候、ヒーラー。

装備中心は剣士や弓使い、盾役だったり元の世界でも対応するタ

イプがある。

ここでジェスターの戦闘スタイルは何かだが、このどちらでもなく召喚系と呼ばれるものだった。

これは元の世界に対応するタイプがない。

シユウに言わせると超まれにいるモンスター使いらしいが、私は見た記憶がまるでなく新鮮だ。

こちらの世界では戦闘スタイルとしては珍しくないが、召喚系に高い適性があるのは割と珍しいらしく、たびたび物珍しい視線で見られることがある。

ぬいぐるみの熊に、白黒ツートンカラーの兎、笑い続ける太った猫、髭を整える大きなエビと私から見ても多彩だ。

それらを強化カードで力を強めて殴らせたり、堅くして守らせて立ち回っている。

ちなみにぬいぐるみの熊は、必ず初手で回ってくるインヒラントカードと呼ばれ、デッキからも外せないと話していた。

『だいぶ戦えるようになったね』

最初は中級相当で苦戦していたが、今では問題なく戦えている。

余裕というほどではないが、油断しなければボスまでは安定しているだろう。

ダンジョンで地道にカードを集めれば集めるほど、攻略できるダンジョンも増えていく。

時にはカードを交換したり、お金で買ったたりしてジェスターはカードを集めていっていた。

『チートもほぼなしだから立派なもんだ』

彼女はほとんどチートの効果を享受していない。

せいぜい能力強化で、モンスターの攻撃でも一撃死しないくらいの頑丈さだろう。

『メル姐さんとパーティー組んでる時点で十分すぎるほどチートだよ。モンスターからのカードがもらえるし、自分が勝てないモンスターやボスを倒してもらえるからね。自力で倒せるまで何度でも挑める』

それでもまだ可愛いもんだろ。

本人の札関係のチートは使っていないんだから。

『そうだねえ。デツキから好きなカードを引きほうだいや、召喚獣の凶悪強化といったチートは使ってない。これを使い始めたら、それが縁の切れ目だね。もうまともに生きられなくなるよ』

珍しく気が合う奴だ。

どうか、このまま使わないでいて欲しいものだな。

『このとき抱いたメル願いは、ついに叶わなかったのである。合掌』
ちよつと。

やめてくれる、そういうこと言うの。

ジェスターもかなり頑張ってるから大丈夫だろ。

『頑張ってるけど、あまり楽しんではいないみたいだよ』

……ほんとか？

そんなふうには見えないぞ。

『よく見るべきだ。あれは、楽しくてダンジョンに潜ってるんじゃない』
『い』

楽しくもないのに、なぜ頑張るんだろうか。

『彼女は自分のデツキを召喚系と強化系、それに特殊系で組んでるって最初のダンジョン攻略で話してた』

なんか覚えがあるな。

『でも、俺の見た範囲で特殊系のカードは一度も使ってない』

そーいやそーうだな。

モンスターを出して、強化するだけだ。

『もつと言えば、どんなに死にそうな状況でも、手札にはカードが絶対一枚残ってる』

つまり？

『ジェスターのインヒラントカードは二枚。一枚はぬいぐるみの熊。もう一枚が特殊系だ。そして、彼女はそのカードを使うくらいなら、死を選ぶくらいには見せたくないものらしい。——だからつまりね、彼女が頑張るのは、強くなつてそのカードを使わないで済むようにするためだ』

そのことにシユウは気づいたが、ジエスターに尋ねなかった。そのそぶりすら見せていない。

私に伝えたのは、訊くべきじゃないという奴なりの忠告なのだろう。

誰にだって聞かれたくないことはある。

少なくとも、今は一緒にダンジョン攻略ができるのだからそれでいい。

ダンジョンを無事に攻略し、街に帰って飯を食べながら反省会をしている。

「食事中に失礼」

飯を食べていると、横から体格の良い男が話しかけてきた。後ろには取り巻きもいる。

本当に失礼だと思うなら話しかけてくるなよ。食べ終わるのを待てないのか。

「お前、ラファルさんに対して失礼だぞ！」

取り巻きの一人が声を荒げた。

あれ、もしかしてさっきの声に出てたか。

それなら好都合。言ったとおりだから後にしてくれ。

「最近、ダンジョンを凄まじい強さで攻略している道化師とシーカーの二人組というのは君たちのことか」

どうも後にする気はないようだ。

シーカーではなく冒険者だ。一緒にしないでくれ。

「そのようだ、シーカー連中でも街中で剣を出したりはしない。だが、それはいい。本題に入ろう。私と戦っていただきたい。ぜひ、そのダンジョン攻略の辣腕を私にも見せてくれ」

お国柄と言うべきか、どうも強い相手と戦ってみたいという奴が多い。

実際に、これが初めてではない。攻略を見ていた奴が挑戦してきたことだってある。

「あの……ラファルってもしかして五星傑の一人だったか？」

男は小さく首肯する。

なに有名人なの？

「メル、忘れたの。ウチ、前に話したよ。筆頭に次ぐ実力を持った五人がいるって」

ああ、なんか聞いた気がする。

国のトップであるジャックを筆頭として、下にそこそこののがいるって話だな。

それで、この飯中断野郎がその一人なのか。

「すごい。すごいよ。ウチら五星傑にも注目されてるってことだよ
ね」

なんだか、とてもうれしそうだ。

じゃあジェスターが相手をしてやってくれ。

「え？」

「それでは外でやろう。すでに場所は確保してある」

ラファルは颯爽と外に出て行き、取り巻きもぞろぞろとそれに続く。

私はスープにパンを付けて食べる。

「待って待って！ 五星傑だよ！」

らしいな。

でも、前もそんなのと戦って勝ってたから大丈夫でしょ。

「あんなのはただのゴロつきでしょ。今度は本物だよ」
そうらしいな。

『やってみたら。対人用のデッキも組んだから、それで十分に戦える
と思うよ』

「でも、ウチ。まだ、五星傑となんて……」

『実力を知る良いチャンスだと思うよ。殺しに来たらメル姐さんが止めるから大丈夫』

だな。

別に負けたって良いだろ。

負ければ自分に何が足りてないのかわかる。

勝てたのなら、ここまでの経験が活きたってことだ。

『どうしたの？ そんなまともなこと言うと心配になるんだけど』
まったく失礼な奴だ。

強いて言うなら、私もかつて言われたことがあつて覚えていただけだ。

『ああ……、確かに俺はメル姐さんにその台詞を言ったね。でも、勝ち負けの相手はダンジョンじゃなくて酒だったはずだよ』

……そうだったっけ？

「酒と一緒にされるウチの戦いつて」

細けえことはいいんだよ。

とりあえず戦ってみればいいじゃん。

そんな訳でジェスターと飯中断野郎の決闘となった。

よくあることのように、周囲の人たちもおもしろそうだと足を止めている。

「五星傑が一人、疾風のラファル。参る！」

「道化師ジェスター。行つくよー！」

初手は同時だ。

飯中断野郎の手に片刃の剣が現れる。

対峙するジェスターの正面にはお馴染みの熊ではなく、長い髭を整えるエビが現れた。

ラファルの小手の上で札が黄色く光る。

こちらの世界で戦う人は、皆この手の小手をつけている。

正確にはアンカーとか言うらしい。見た目は人によって違う。

ジェスターは長い白黒の手袋だし、男の小手は攻撃を防ぐ目的もあるのか金属だ。

小手の上にカードがぶかり浮き、手札が見えるようになってる。

小手を動かすと、カードも勝手に動く。しかも表面が常に本人を向くようにカードの角度が変わる。

ボスは使つてなかったもので、転移してからできたものだろう。

目の前の戦闘はまだ様子見といった段階だ。

ラファルは身体強化から剣で攻撃を仕掛けていくが、ジェスターの

エビが攻撃を防いでいく。

攻撃こそほとんどしていないが、野郎の剣はその硬い爪と甲殻で弾かれている。

「あのエビ、ラファルさんの攻撃を防いでるぜ」

周囲の取り巻き達も最初は馬鹿にしている様子だったが、次第にその目は真剣味を帯びてきていた。

「やるではないか、ジェスター殿！ これではどうか」

野郎の籠手から、またしても黄色の光が発せられた。

さらに身体強化を重ねてきたかと思ったが、どうも違っている。

野郎の姿がぶれたと思ったら、男の右に男が現れ、さらに左にも男が現れた。

「おいおい、なんか増えたぞ。そんなのありなの。」

「でた！ ラファルさんの三影陣だ！」

ジェスターも驚いたようだが、すぐにカードを使って対応する。

お馴染みの熊が彼女の側に出現し、さらになんらかの強化カードをエビに使った。

『今のは悪手。硬化なら熊に使うべきだった。初手も熊を出すべきだったんだ。意識が守りに入ってる。これは負けるよ』

野郎どもは三人で、熊を三方向から連携して斬りつける。

熊も反撃を試みるが速さが違いすぎる。簡単に躲され、生じた隙を斬りつけられていく。

ジェスターはようやく熊に強化をかけるが、もう倒される直前だった。

さらに他の召喚獣を出すのが常に後手に回り、追い詰められていることが傍目でもわかる。

最後は剣を首元に突きつけられ、ジェスターは負けを認めた。

「ごめん、メル。ウチ、負けちゃった」

ふざけた調子が潜ませてこちらに戻ってくる。

負けて悔しいのを抑えているようだ。

『後で反省会ね』

シユウの声にうええと呻きながら私の横に来る。

私はなんて声をかければいいのかわからず、とりあえず目を合わせずに男を見た。

男も私を見てきていた。

「彼女の強さは私の予想を上回っていた。さあ、次は君だ。楽しもうじゃないか！」

なに言ってるんだ、こいつは。

お前はボスでもモンスターでもない。

私が楽しめるのは、ダンジョン攻略だけだ。

男へと、のそのそ歩み寄る。

「剣を抜かないのか？ ふっ、なめられているな」

男が手に剣を出し、強化もかけずに私へ斬りかかってきた。

「あ、れっ……」

いつもの距離でいつもの効果が発動し、転倒した男がその勢いのままこちらに転がる。

そして、野郎の腹を蹴る。彼の言う楽しい勝負はこれで終わった。

「ラファルさん！」

「大丈夫ですか！」

取り巻き達が、腹を押さえもだえる野郎へ駆け寄る。

一人がこちらを振り向き疑問を投げかけてきた。

「待て！ 今、何をしたんだ！」

蹴った。

見てなかったのか。

「違う。その前だ。卑怯だぞ。戦闘の前から妨害のカードを使っていたな！」

卑怯なのは認めるが、妨害の札ってのは使っていない。

だいたい戦闘の開始合図なんてないんだから、使ったところで問題ないだろ。

何も構えず歩いている奴を相手にして、碌な警戒もせず突っ込んでくる方が軽率なんじゃないの。

『前はともかく、その後は正論。警戒しない方が悪い』

勝負も終わったし、ご飯を食べつつ反省会の続きでもするか。

「待て、俺たちとも戦え」

は？

なんで？

「俺たちはまだ負けていない」

そりや戦つてないからな。

「ラファルさんが回復するまで、お前の卑怯なやり方を暴いてやる」

なぜそうなるのかはわからない。

男達は私を囲み、それぞれ札を使い、武装、強化、妨害と使つていく。

使えるだけの札を使ったのか、ようやく距離を詰めてくる。

『いいね。ここまでの流れが、とてもなろうっぽい』

なろうっぽいというのが何かわからないが楽しんでるな。

「やめんか」

男たちがまさに襲いかかってくるその瞬間に制止がかかった。

音量こそ小さいが、しっかりと周囲に届く声だった。

声の方を見ると、杖をついた老人が立っていた。

身長は低い、背はまっすぐで堂々とした様子だ。

「なんだ爺さん」

取り巻きの一人が老人の方を向く。

『わからないのかな？ 佇まいがどう見ても違うだろうに。本物の剣士だ』

やっぱり強いのか。

なんとなくだがそんな気配がある。

静かすぎるというか。力みや緊張がまったくくない。

場違いなほどの自然体だ。

「危ないから年寄りはお下がって——」

そう言つて手を伸ばしたが、老人はするりと躲し、杖で男の腹を小突いた。

弱い一撃に見えたのだが男は息を吐いて、呻くことも倒れる。

「やりやがったな、この爺！」

迫り来る男達を上手く捌き、それぞれ一発ずつ反撃し、気づくと誰

も立っていないかった。

「せ、先々代……」

ようやく起き上がることができたラファルが、老人を見てそう呟いた。

その声を聞き、観衆もざわざわとしてきた。

「ラファル。群れることが悪いとは言わん。ただし、あやつらを測られることは、お主自らを測られることと同義ということをお忘れでない。よいな」

ラファルは何も言えない。

気まづげにうなづくのみだ。

「おもしろい剣の担い手よな。相手を弱めるその剣、ジャックとは対の位置にある」

ゆるゆる歩き私の前に立つ。

「どうじゃ。ジャックと戦ってみんか」

はい？

いきなりすぎて話が見えないんだが。

強いのはよくわかるんだが、私にはあんたが誰なのかもわからん。

「メル。その人は先々代の筆頭、オジエ様。その人にその口の利き方は駄目だつて」

ジェスターからゆるい雰囲気が消し飛び、真剣な様子になっていることからその位がわかる。

なんだすごい人のようだ。

「そんな気にせんでくれ、今は隠居の身よ」

じゃあ、気にしない。

それでなんて言ったか？

「ジャックと戦ってみんか？」

ジャックつてこの国の筆頭だろ。

そんな気軽に戦うとかできるものじゃないんじゃないか。

「儂がとりなそう。彼奴の鼻をへし折ってくれ」

なんだつて？

「彼奴を負かしてくれ。彼奴は自分の力に慢心しておる。この前は強

い相手がいないから国を攻めるかなどと抜かした」

なんで私が……、あんたがやればいいじゃん。

よくわからんけど、そうとう強いだろ。ジャックはもつと強いのか。

「まだまだ彼奴には負けぬよ」

じゃあ――、

「儂では駄目だ。小さい頃から負かしすぎて、もう勝てなくても仕方ないと思うにまで達しておる。儂以外にも強い担い手がおり、自身の表現を見つめ直させる必要がある。頼む」

頼まれても断る。

私にはメリツトがない。

さつさと次のダンジョンに行きたいんだ。

「儂や、ジャックが認めた者しか入れんダンジョンが、この国にはあるのじゃがな」

……ジャックに勝ったら挑ませてやると？

「勝たんでも、戦ってくればそれで良い。どうじゃ？」

是非もない。

こうしてジャックの国の筆頭、ジャック本人と戦うことになった。

オジエに連れられて、ジェスターと一緒に三つほど街を移動する。

街の片隅にある。広い修練場に入っていく。

そこに青年が立っていた。

髪はツンツンで、背も高く、体格も良い。

目に陰があり、こちらをきつく睨んでいる。

「おい、爺イ。つええ奴と戦わせてやるって聞いたからここまで来たんだぞ！ どこにつええ奴がいるんだ」

「未熟者。ここにじゃ」

オジエが私を指す。

青年は私を上から下まで値踏みし、隣のジェスターも同様に見る。

「ああ、そうか、ついにほけたか。……こうなる前に斬ってやればなあ」

途中から真剣に落ち込んでいる。

「油断するとラファルの二の舞になるぞ」

「なに？」

「彼奴は、彼女に何もできず負けた」

青年はオジエを見るが、オジエは微笑んでいるだけだ。

目を私に移し、彼は手に札を出した。

「――ぼけてないか、はつきりさせてやる」

札は灰色の光を輝かせて消えた。

手には真つ黒の大剣が一本握られる。

開始の合図も何もない。男は何も言わず私に斬りかかる。

能力半減が効いていないのか、転倒こそしなかったがその速度は遅

い。

これは私をなめていて敵対意識がないときにあることだ。

モンスターなら斬るのだがそうもいかない。

『手を抑えて蹴ったれ』

言うとおりにしてやった。

男は避けない。蹴りをそのままくらい、修練場の壁まで飛んでし

まった。

「うわぁ」

……やばい。

たぶん避けると思ってあまり弱めず蹴ってしまった。

石の壁をぶち抜いて、そのまま埃にまみれて見えなくなってしまう。

う。

「メル、やりすぎだよ……」

ジエスターも若干ひいていた。

待て。強いつて聞いているから大丈夫だろ。

「来ますぞ」

『来るよ』

オジエとシユウの声が被った。

埃の舞い上がってる方を見ると剣を構えた男がこちらへと歩いている。

「あー、油断した。は、やるじゃねえか」

ちよこちよこ傷を負っているが、歩みはしつかりしている。

おや、気づかなかったが足に鎧がついてるな。

『いや、さつきはなかったよ』

札を使ったってことか。

男の歩調は徐々に速まり、いつもの距離に達した。

「……お？」

足を崩したが、転びはしない。

さすがにやる。なんとか数歩で体勢を整えた。

その瞬間を狙って蹴った。

またしても直撃。丈夫だとわかったので先ほどよりもやや強く蹴った。

男は飛んだ。先ほどよりも飛んだ。

壁をぶち壊し、その奥にある木に当たってようやく勢いが止まった。

木が折れて、男へと倒れる。埃が収まったが、男は木の下敷きになつて動かない。

「助けなきやじゃない？　ねえ？」

……かもしれない。

「まだまだ」

『しぶといね』

男がようやく動いた。

木を小枝のようにどかし、ゆっくりと立ち上がりこちらへ向かってくる。

『また増えてる』

漆黒の鎧が男の体と足を纏っていた。

今度こそ間違いなく増えているとわかる。

「なんだそりゃあ。妨害系か。いつカード使ってた？　いや、剣はずっと出してたな。てえことは、お前も俺と同じか。おもしれえ。おもしれえよ！」

何もおもしろくない。

男は特に学習する様子はない。

先ほどと同様に私へと近づいてくる。

「この距離か。すげえ、妨害効果だな。こりや、ラファルじゃ勝てねえだろうよ」

男は半減効果を受けつつも歩いてくる。

『もつと強く蹴っていいよ』

力を入れて男を蹴りに行く。

男はそれを避けようとするが、半減の効果で間に合わない。

またしても蹴りは直撃だ。

壁と木を数本なぎ倒して男は飛んでいく。

『生きてるね』

ジェスターはもはや何も言わなかった。

土埃がまだ舞う中を鎧が音を立てながら近づいてくる。

ついに全身が黒い鎧に包まれた。二発の蹴りの影響をまったく感じさせない足取りだ。

「どうした？ こんなもんか。今度は、こっちの番だなあつ！」

金属を擦らせながら一步一步威圧するように私へ近づく。

迫力があつた。黒い大きな岩が転がってきているようだ。顔も見えなくなつたことも圧を感じる要素だろう。

『時間が経てば経つほど強くなる訳か。本気で蹴ってみて』

いいの？

破裂しちやわない？

『大丈夫。破裂しても復活するから』

あつ、そうか。

こっちに来てから人を斬ってなかったが、そういうえば異世界だもんな。

手加減不要だな。

本気で蹴ってみるとしよう。

距離を取るため、鎧の男から距離を取る。

「おおい！ どしたあ！ 得意の妨害はどうした！」
違う。

得意なのは妨害じゃない。逃げることだ。

「逃げるう！ かかってこー——」

喋っている途中だったが、助走を付けての本気の蹴りを食らわせた。

男はまるで反応できていなかった。

角度がついていたため、男は緩い角度で空へ向かっていく。

先ほどよりも高い位置で壁を壊し、木の幹を何本か折り、枝の高さまで達した。

その後は、勢いを止めるものが何もない。しばらくしてから小さく地面に落ちる音が聞こえた。

「よお飛んだのお」

暢気な感想だった。

ジエスターはオジエの感想に開いた口が塞がらないみたいである。さすがに今回は復帰に時間がかかった。

三人が黙って壁の向こうを眺める。やがて小さく黒の鎧が見えた。木々の合間を、大剣を杖にしてゆつくりと幽鬼のように歩み、壁も越えてこちら側へと戻ってきた。

「こんな、もんか？」

声は出ているが余裕はない。

すごいな。私の本気の蹴りを食らった人間は初めてだ。

まず生きている人間を本気で蹴ろうとすら考えたことがなかったからな。

「来いよ。そんなもんじゃねえだろ！ こつちから行くぞっ！」

男は剣を引きずりながら私へと歩み寄る。

横で見えていたジエスターがその気迫に押されて後ずさりした。

『メル姐さんの負けだね』

認めざるを得ない。

これは私の負けだろう。

「ああ？ 何を言ってるやがる！ まだ互いに剣を切り結んですらいねえ！ 勝負はこれからだろうがよっ！ 違うかあっ！」
違う。

お前の勝ちだ。

私にシユウを使わせるんだからな。

声を上げようとした男へ一気に近づき、その鎧にシユウを突き刺す。

「アア……ア………」

突き刺してもなお男は消えない。

そのままシユウを横に引き、胴体を半分ほど斬り裂いた。

「あ………」

男は最後まで倒れることなく光へと消えていった。

残ったアイテム結晶を拾い上げ、ジエスターとオジエを見る。

二人とも唾然とした様子で私を見てくる。

『まあ、復活するって知らないからね。一国の代表がよくわからん女に殺されたように見えるわけだ』

ああ、そりやそうなるか。

そんなに驚かなくても大丈夫。復活するから。

『その発言でさらに頭がおかしいと判断されるね』

……時間が経ってようやくジャックは復活した。

復活するまでが、異世界に来てから一番気まずい時間だったことは間違いない。

「俺は、確か刺されて……」

男は腹あたりを押さえるが、そこに怪我はもうない。

オジエもほっとした様子で男を見る。

ジエスターも同様だ。

「これはその剣の力か？」

だいたいあつてる。

「そうか……。爺、悪かったな。まだ、ぼけてなかったようだ」

「わかればよいのじゃ、未熟者。研鑽を重ねよ」

ふん、と男は鼻息をたてる。

「名は？」

メル。

「シーカーにもこんな強いのがいるのか」

シーカーじゃない冒険者だ。

「……俺はジャック。表現主義の筆頭だ」

あっそう。よくわからんけど。

「だが、今日からお前がこの国の筆頭だ」

そういうのいいから。

表現主義とかイミフだし、国のトップとかほんと勘弁。

私のことは置いていて、さっさと秘密のダンジョンの話聞かせてくれ。

『国のトップはともかく、表現主義が何かはわかったでしょ。メル姐さんがすごいと感じたのは何?』

ジャックだが。

『ジャックのタフさと何度でも立ち上がる意志に脅威を感じ、賞賛を送った。もちろんカードの効果もあるけど、それは彼を表現するための道具にすぎなかったはず』

そうかもしれないな。

それより早くダンジョンの話しよう。

「おい、爺……。もしかして秘密のダンジョンってのは、あの遺跡か?」

「そうじゃ」

お、遺跡なのか。

どんなモンスターが出てくるんだ?

「出てこねえぞ」

「出てこんぞ」

……は?

モンスターがない。

いや、それってまさかボスだけいるってことか。竜?

「竜? ボスすらいねえよ」

「おらんなあ」

……それ、ダンジョンじゃないよ。

「俺はそう思う」

「俺はそう思わん」

うーむ、いちおう行くだけ行ってみるか。
場所はどこなんだ？

「すぐ側にある」

オジエはあっけらかんと言う。

遺跡は本当にすぐ近くにあった。

近くどころか街の中だ。街の隅にあるオジエの持っている屋敷から地下へ降りたところだ。

遺跡と言うよりも洞窟だ。

洞窟を歩いて行くと、広い場所にたどり着いた。

火を付けていくと、周囲の全体像が明るみになる。最初からチートで見えてはいた。

壁一面に絵が描かれている。

なるほどこれを見ると確かに遺跡だな。

ただし他に部屋はなく、モンスターもボスもない。

「どうじゃ？」

どうじゃと言われてもな。ただの絵としか。

なんでこれがダンジョンなんだ？

「俺も同感だな」

ちやつかり付いてきていたジエスターを見ると口を開けて放心状態だ。

ジャックが消滅したときよりも驚いているぞ。

どうしたんだ？

「すごい。すごいよっ！ これ、エレティコス神話が描かれてる」

「さすがに道化師じゃな。これの価値がわかるじやろう」

神話の第一節。

エレティコス本人が罪禍の使徒だかと戦っている場面だ。

彼が己の手や、手にした弓で使徒を倒している姿があちこちに描かれている。

神話の第一節をここにある絵が証明しているということになるらしい。

正直、「ふーん」より他の言葉が出てこない。
なんでこれがダンジョン？

「ダンジョンは世界の真理に根ざすものじゃ。ここがダンジョンじゃないわけがなからう」

遺跡から出て、ジエスターは満足だが私はだまされた感じが強い。

「他に何か願いがあるか。聞くぞ」

うーむ。

また変な遺跡を紹介されても困るな。

「ジャック、お主も何かできることがあるんじゃないか」

「ほぎけ、爺。俺ができるのは戦うことだけだ」

別がないんじゃない。

なんかある？

『戦ってくれるなら一つ頼みたいかな』

ええ、もういいよ。

『メル姐さんじゃないよ。ジエスターと戦わせてみたい』

「えっ！」

驚いたジエスターをオジェとジャックが見る。

じゃあ、ジエスターと戦ってみてくれない。

「ああ？ この道化師とか？」

「いやいやいや、ウチじゃ勝負にならないよ。それに筆頭だつて嫌でしょ」

「かまわねえ。さつきは剣も振るえなかったからなあ。行くぞっ！」

ズンズンとジャックは道を進んでいく。

ジエスターは信じられないと私を見つめてくる。

前にも言ったけど、良い機会だと思うぞ。強くなりたいんでしょ。

「そうだけどー！ 順序があるでしょ」

『順序？ カードをちよこちよこ集めることが強くなる道だと考えているようだけど、本当にそうかな？ あいつは粗暴だけど、戦う姿勢は非常に参考になる。表現主義の真髄を味わってみると良い』

こうしてジエスターは、ジャックに稽古をつけてもらえることになった。

ヘンテコな姿のジエスターを、目つきの悪いツンツン頭のジャックが睨む。

ジエスターは戦う前から腰がひけていて、この時点でもう勝負にならない気がする。

ジエスターは初手にまたエビを繰り出した。

『駄目だ。守りに走ってる』

ジャックが手に大剣を握った。

それを見てジエスターはエビに強化を使う。

「……なんだあそりゃ！」

ジャックが大剣を振り上げ、エビに向かってその剣を振り下ろす。

私とは打ち合ってなかったが、威力は凄まじい。エビは一刀のもと真つ二つになり消えた。

ジエスターは続いて白黒ツートンカラーの兎を繰り出す。

出てきた瞬間に兎は真つ二つにされた。一刀両断とはまさにこのことだ。

だが、兎はまだ死んでいない。白と黒に分かれた兎の半分はそれぞれ兎の形になりジャックを襲う。

「二匹に増えた。だからなんだ。なめてんのかっ！」

二匹の白と黒の兎は振り回された大剣で一度に消滅した。

何というか、普通に強いな。あのエビは中級ボスの攻撃も耐えられる強さだったはずだ。

それに二匹の兎もかなり素早く、飯中断野郎もそこそこ苦戦していたはず。

ジャックはそれらを全部一撃かつほぼ一瞬で倒している。

鎧もまだ全身を覆っていない。

他のカードも使わない。

『いや、奴は他のカードが使えないんだろうね』

そうなのか？

『この世界の人間って魔力が異常に多いんだけど、ジャックとオジエは魔力がほぼない。メル姐さんよりも少ない奴は久々だ。二人はお

そらく血縁者。そして、二人ともインヒラントカード以外は使えないと思う』

……鎧も使ってなかったか？

『剣と鎧が一セットの装備カードでしょう。時間経過か被ダメージで鎧が全身を覆っていく。鎧を覆えば覆うほど強さが増す。全身を覆えば、メル姐さんの蹴りを耐える強靱さだ。速攻で倒せなきや厳しい』

じゃあ、守りに入ったジエスターの戦法は駄目なんじゃないか。

もうジャックの頭部以外は鎧に包まれてるぞ。召喚獣を軽くあしらってる。

あれ一枚しか使えないとお前は言うけど、あれ一枚で十分だろ。反則なほど強いぞ。

『使いこなせばね』

使いこなせばって。

使つてりや嫌でも使いこなせるようになるんじゃないか。

『あの大剣は子供が持つにはデカすぎる。まともになれるようになってたとしても、鎧が出るまでは剣だけで耐えないといけない。仮に使いこなしたとしても、どうあがいても武器は大剣。ビームやレーザーも出ず、他のカードも使えないから戦い方は限られる。相性の善し悪しが明確だ。それを払いのける意志と根気、それに鍛錬があるだろうね。その領域に至るまで、使い続けることがいったいどれだけの人間にできるだろうか』

あのカードを使いこなすか、戦う道を諦めるかという選択肢しかなかったと。

『筆頭という地位と彼のカードが、ジャックという人間性を表現してる』

表現主義ね。

それで、なんでジエスターと戦わせたんだ。

戦いにすらなっていないぞ。召喚獣を斬らせる練習台になってる。

戦い方が参考になると言ってたが、参考になるとは思えない。

『戦い方じゃない。戦う姿勢。奴と戦えば、さつき言ったことが感じ

られるんじゃないかなと思ってね』

感じるとどうなるの？

『強くなるってことが、どういうことなのか気づく』
意味がわからないんだけど。

『……うん。メル姐さんにはわからないかもしれない』

なんだそりゃ。

あいつは強くなって、自分の特殊カードを使わないよう済ませたいんだろ。

『そこが間違ってるってこと』

話している間にジャックは完全に鎧に包まれている。

ジェスターの手札は残り二枚。

一枚は特殊カードで、もう一枚は——光になって消え、ジェスターの前に熊が現れた。

熊はジャックに襲いかかるが、彼は熊を斬らず、力の払いのけジェスターの側に吹き飛ばした。

「テメエ、何か隠してるだろ。その残りの一枚、最初から使ってたねえよな」

おお、すごいな。

一回戦うだけ、しかもその戦闘中に気づくなんて。

「つええ召喚獣を入れてるだけの糞テツキじゃねえよな。『コステロ』の強化カードが入ってるのに『ガラフィの亡霊』の召喚が入ってたねえのはおかしい。どっちも『アルメリア神殿』で手に入るからな。召喚獣からもそれなりにテメエを表現しようとしているのは感じる」

ただ斬り倒してるだけかと思ったが、すごい見てるな。

『そりゃ、あの鎧セットだけで戦い抜いてきてるんだ。観察と推論は必須装備だよ』

ジェスターは困った顔を貼り付けている。

「だが、足りねえ。何かあと一枚、テメエをさらけ出そうとしてねえ」

「ウチは……」

どうも凶星なようで、こちらを見てくる。

別に使いたくないなら使わなきゃいい。

「メル、気づいてたの？」

シユウから聞いた。

聞かれたくない話題のようだったから黙ってた。

その札を使いたくないから、カードを集めて強くなろうとしてたんだろ。

「……うん。ウチ、これだけは使いたくない。これを使ったら——」

「甘ったれたことぬかしてんじゃねえ！」

ジェスターの声を、ジャツクの声が消し飛ばした。

「カードを使いたくないから強くなる？ そんなことできるわけねえだろうがッ！」

ジャツクが振り下ろした大剣が床を突き刺す。

その衝撃で修練場の端まで、床には亀裂が入っていった。

「俺にはこの剣と鎧しかなかった！ これだけだ！ カードがあるのに使わねえだと！ 使いたくないだあ！」

馬鹿言うんじゃねえぞと大剣を振るう。

その風圧がジェスターの髪を揺らす。

「そのカードはインヒラントだろ？ 違うか?! それならそのカードはテメエ自身だ！ テメエには自分自身を認める強さがねえ！ 使いこなせねえと諦めてる。そんな奴がいくらカードを集めたところで強くなれる訳がねえだろうが！」

……シユウが何を間違いと言ったのか、やっと私にもわかってきた。

そして、なぜ私にはそれがわからないと言ったのかもだ。

「来いよ。俺が見定めてやる」

ジャツクはただ一枚のカードしか与えられず、それを使って強くなるしかなかった。

自分に与えられた手札を受け入れ、それを使いこなせるだけ自らを鍛え抜いた。

私には逃げることしかなかった。強くなるためには逃げるしかない。

自らを認めれば認めるほど強くなることから逃げてしまう。

認めてはいたが受け入れられなかったのだ。

自らの力では敵と戦えないことを。

ダンジョンに挑めないことを。

そんなときに、チートをたまたま得た。

強くなれないことを認めず、弱いままで異常な力を手に入れてしまったのだ。

だから、私には彼のことがわからない。

自分に与えられた手札を認め、受け入れ、それを磨き上げた人間の気持ちなんて理解の外だ。

それではジエスターはどうだろう？

強くなるための手札がすでに手元にあるのに、それを認めず使おうとしない。

やはり私には理解不能だ。

「テメエを見せてみるよ！ 見せたくないって思う、ぬるい気持ちごと、このジャックがたたき斬ってやる！」

ジャックは大剣を上段に構えた。

『オジエも気づいてるからなんとかしてくるだろうけど、念のため言っとく。ジエスターがカードを使わなかったときのために、剣から防ぐ準備はしておいて。——あいつ、熊ごとジエスターを斬るつもりだ』

ジエスターの顔は苦渋に満ちている。彼女も気づいたのだろう。

強くなるための手札がもうすでに手元があり、それを使わず強くなるうとしている自らの滑稽さに。

使ったら世界が崩壊するとかそういうったレベルの札ではないだろう。私の持っているやばいカードほどのものでもあるまい。

『まあ、あの年頃ならありがちだよ。自分の本質が見えるようになってきて、でもがそれが自分なんだと認めたくない精神状態。別に悪いわけじゃない。気づかない振りをして大人になるやつだっている。でも、それを認められたなら——、彼女はきつと一皮むける。あつ、今のエロい意味じゃないよ』

そんな注釈いらなかった。

だいなしだよ。

ジェスターの長手袋から橙色の光が発せられた。

彼女は目を閉じて、それを見ようとしなない。

「目を閉じるな！ 刮目しろッ！ テメエ自身のあり方を！ そして——それが斬られる有様をなあ！」

声に驚き、ジェスターは目を開いた。

ぬいぐるみの熊が身震いを始めた。

まるで中に何かが入っており、その何かが中で暴れているようだ。

ついには熊の背中を切り裂いて、ナイフを持った人型の影が、その中から現れた。

「ジェスター嬢。もしやお主はスタニスタフ殿の血縁か？」

今まで静かに状況を見守っていたオジェエが、その顔に驚きをもつてジェスターに問いかける。

「ウチのおじいちゃん」

オジェエはそうかと感慨深げにうなずき、またしても黙り込む。

熊のぬいぐるみは消え去り、中から出てきた影人は複数のナイフをジャグリングして遊んでいる。

ジェスターと同じようなふぎけた服装で、ケラケラ笑いながら周囲をとことこ歩き回る。

大剣を構え、今にも斬りつけようとしているジャックが見えていない様子だ。

「おお、おお、筆頭ジャック殿。あなた様は実に頑強だ」

ついには、影人がしゃべり出した。

男のちよつと高めの声で、なんだろう聞いているとイラツとする。シユウの友達か。

「卿は自らを戦士とお考えのようだが、気づいておられるか？ 身を硬く守るその鎧が、敵を切り裂くその大剣が自身の弱さの裏返しということに。卿が真に強ければ剣も鎧も不要であろう。卿は戦士ではない。ただ力が強いだけのゴロつきである」

ふぎけた口調でそう言うと、狂ったように笑い、ジャグリングを続ける。

言われたほうのジャックは今まで馬鹿みたいに叫んでいたのに、すっかり黙ってしまった。

しかし、構えや影人に対するその気配から本気で怒っていると感じた。

「おお、父や祖父に憧れている？ 彼らこそ戦士だとは気づいてはおりません。しかし、今のあなたではそれがいつになるのやら。貴方の父や祖父は人を殴ってばかりいましたかな？」

無言のまま彼は影人を斬りつける。

影人は一切の抵抗をせず、そのまま為す術なく斬られてしまった。

二つになって地面に倒れるが口はまだ動いた。

「おお、おお、たいした力自慢」

苛つく笑い声を残しつつ、影人は消えていった。

勝負が終わり、ジャックは鎧を解くと何も言わず修練場を立ち去った。

「あれのことは気にせんでくれ」

オジェはジェスターを気遣うように告げた。

「スタニ Staf 殿は、亡くなられたのか？」

ジェスターはこくりとうなずくだけだ。

「残念じゃ、彼は儂の恩人であった。まだ若く、かの国で武者修行していた折、捕まり殺されるところじゃった。そこから救いだしてくださったのが、スタニ Staf 殿じゃ。そのカードは、その際に見せていただいた」

ジェスターもそんな話は知らなかった様子だ。

「お主がそのカードを嫌うのはわかる。じゃが言わせてくれ。儂にとつてそのカードは命の恩人との繋がりなのじゃ。お主が引き継いでくれて良かった。感謝致す」

「ウチ……、このカードをそんなふうに言われたの初めて」

よくわからんんだけど、なんであれがそんなに嫌だったの。

もっとやばい札だと思ってた。

『十分やばい札だと思うよ。使って良い結果になったことがないんで

しょう』

なんで？

『おそろくですけど、相手が言われたくないことや気づいていない都合の悪いことを、ズバリそのまま言う札だ。しかも声色が相手を苛つかせるし、見た目も相手をおちよつくってる。言われた方は激情必至だね』

要するにシユウみたいな奴か。

『そうとも言える。俺よりもムカつくと思って良い』

そりゃキレるわ。

で、これを使ったらジェスターは強くなれるんだよな。

『……まあ、うん。心の重りが外れるというか、自分を認めることでスツキリするというか、そんな精神論というか』

なんか言いあぐねてるな。

『召喚獣の種類にこだわってたから、召喚獣に作用するってのはわかってた。でも、もっと違う方向性のカードを想定してたんだよね。化け物みたいな見た目になるとか強さが変わるみたいな。あれじゃあ、あまりにも使用状況が限定される』

そうだよな。

でも、強くなるんだろ。

『いやあ、うん……認めよう。俺は間違えた。はつきり言つて、あれじゃ強くない。選択肢の一つにも数えないでいくくらいだ。こりやもう、カードをたくさん集めてデッキ編成とカード回しにを上手くして、戦闘経験を積んでいった方がいいね！』

すつきりした声で結論を述べた。

こうしてジャックとの戦闘は否定され一日を終えることとなった。

3. 印象派の夢魔 クイーン

私たちはクイーンの国に来ていた。

ジャックの国で私たちはあらかたのダンジョンをクリアし、カードを手に入れた。

強化の種類は潤沢に手に入れたが、召喚と特殊がまだまだ弱い。そ

れに回復もかなり少ない。

召喚と回復を集めるならクイーンのダンジョンが良いらしい。フィールドもあるが、ジェスターは使えない。

特殊や妨害を集めるならエースが良いらしいが、あそこはいろいろと入りづらいらしい。

そのため、まずはクイーンのダンジョンを攻略してみることにした。

実際、ダンジョンの趣が違っている。

モンスターの力攻めから、トラップや環境の搦め手に変わった。

まだ難易度はそれほどでもないのですが、ごり押しができていますが、難易度が上がると厳しいだろう。

これはジェスターにとってもそうだ。

彼女の召喚獣はトラップにかなり引つかかっている。

『召喚獣は使い手の力量に依存してる。これはジェスターが戦闘経験を積みれば積むほど召喚獣が強くなることからもはつきりわかることだ。今度は彼女がトラップや環境の見極めを磨いていくフェイズに入ったんだ』

ジェスターにトラップと環境をちよこちよこ解説しながらダンジョンを進めていく。

モンスター自体はそれほどでもないのですが、ジャックの国よりも戦闘自体はサクサクと片付けられている。

人も大きく違う。

まず、いきなり戦闘をふっかけられることはない。

それに国外のカードがかなり高額で取引されているためか、シーカーもかなり多い。

「この人たちは、自分たちの社会的ステータスが、持つてるカードで決まるって思い込んでるからね」

華族というものがあり、デッキをレアなカードで構成しているようだ。

戦闘は強さよりもむしろその見栄えに主眼が置かれ、独自の決闘方式があるらしい。

特にクイーンの夢デツキは現実を超越すると言われており、付いたあだ名が「印象派の夢魔」である。

『本当の本当に、クイーンが夢を自由に操れるとすればだ』

いきなりだな。

操れたならなんなの。

『戦うべきじゃない』

どうして？

『少なくともメル姐さんには、夢や睡眠に関して耐性がある。あつちの攻撃は効かない。ただし、こつちの攻撃も効かないかもしれない。これならまだいい、ドロードだから。——問題は、ジェスターと戦いになったときだ』

パーティー登録で耐性がつくでしょ。

『睡眠には耐性がつく。でも、夢は耐性につけられない。夢のフィールドカードがあるならそれはまずい』

睡眠と夢はどう違うんだろうか。

とにかく耐性が付けられないから、ジェスターがクイーンに勝てないってことだな。

『いやあ違うんだ。勝ち負けの話をしてるんじゃないやなくて、夢に入ってしまうことそれ自体がまずいんだ』

そんなに危険なのか。

『うん。ジェスターはメル姐さんのパーティーだから、同時にあいつともパーティーってことになる。もしも来てしまったら、悲惨なことになる』

あいつ？ 誰のことだ？

そいつが来たらどうしてまずいんだ。

そもそもここは異世界だぞ。どうやって来るんだ。

『夢ならそんなことは関係ない。どこでもいつでも関係なくやってくる。来たら……幻想に蹂躪されるよ。なるべく戦わずに済ませたい。クイーンを助けてあげなきゃ』

……………あれ？

もしかしてクイーンがやられるって話か、ジェスターじゃなくて？

『そうだよ。ジェスターは大丈夫。クイーンがまずい』
なんだ……。心配して損した気分だ。

こいつはクイーンが綺麗な大人の女性と聞いてから、すごいクイーンの話題をしてくる。

私のことをどうこう言えないくらいにはわかりやすい奴だ。

それにしても戦う前から助ける話をするのは、ちよつと甘すぎるのではなからうか。

その後もダンジョンを進んで行く。

「ウチに足りないモノって何だろう?」

ジェスターがぼそりと呟いた。

もしかしたら独り言だったのかもしれない。

……圧倒的な力とか?

「圧倒的な力ってどういうの? 強化してるよ」

いや、強化はしてるんだけどな。

なんだろう……。地味?

『華がないよね。熊はコンスタントに強い、地味だけど。特殊カードは非常に個性的だ、戦闘でまず使えないけど。他の召喚カードも弱くはない』

「弱くないけど、強くないし地味なんでしょ」

そうだな。

『そうだね』

「じゃあさ、じゃあさ。逆に圧倒的な力や華って何? メルだつて言っちゃえば、斬ったり突いたり蹴ったりでしょ、地味なことを馬鹿力で通してるだけ。私もそのくらい強化すればいいんじゃないの」

……あれ?

見せたことないっけ?

「何を? あー、まだヤバイのがあるの?」

ゲロゴンブレスや黒竜、邪神様とか。

「知らないよ。消えるのと、壁や天井を歩くのくらい」

『それと感染に能力半減か。それだけでも十分すぎる華だと思うけ

ど、若い道化師にはご理解いただけないか、やれやれだ』

馬鹿にしてーとジエスターは頬を膨らませている。

『まあ、メル姐さんが言ったのを見せたら、ここで一緒にダンジョン潜ってないかも』

あり得るな。

「なにそれ？ めっちゃ見たい！」

いや、いつか見るときが来るかもしれない。今はやめてとこう。

「そこでやめたら返って気になる。見ーせーてーよー」
腕を引つ張ってせがんでくる。

うっとうしいなあ。

『黒竜のスキルなら良いんじゃない』

それはそうだろうがなあ。

ゲロゴンブレスはこのダンジョンだと狭くて使えない。

邪神様のスキルは私が見せたくない。変な格好が、さらに変になつたと笑われそうだ。

『いや、ジエスターの美的感覚だとあれはプラスに映るかもしれない』
「ひよっとしてウチのセンス疑ってる？ ウチは未来のニーズを先取りする目を持つてるだけだよ。先見の明があるの」

はあ、そう。でも黒竜のスキルならいいか。

そんなわけでボス戦にて、黒竜のスキルを見せてみた。

ボスが溜めからの強力な遠距離攻撃を行い、それを黒竜スキルで飲み込み、生じた隙を一気に攻めて倒す。

「か、かっこいい！ ウチも、そういうの欲しい！」

しばし開け放っていた口をようやく閉じて、こんなことを言い出した。

らしいけど、なんかいい方法ある？

『あるよ』

あるらしい。

『エレティコスのごミ札を使うと良い。今まで手に入れた召喚獣より遙かに華がある。メル姐さん、彼女に札をあげて』

「ちよっ」と

あいよ。

シユウにどちらか教えてもらいゴミ札をそのまま渡す。

「ちよつと待って。わかって渡してるでしょ」

実を言えば私はあまりわかってない。

私は、使えるものは何でも使つていく主義だ。

せっかく強い召喚獣があるなら、使うべきだと考えてる。

『いちおうもらっておくといい。使うか使わないかは、先見の明を負するジエスターに委ねよう』

かつて返してきた札を、彼女はまたその手に取った。

もう返さなくていいからな。

『さて、冗談はこのくらいにするとして』

そうだな。

「冗談で聖獣を渡しちゃうの」

私にとってはその程度の価値しかないってことだ。

『本題に戻ろう。華というのは、原則、一人に一つ。いくつも持つものじゃない。これは戦い方も同様。メル姐さんを参考にしちや駄目。これはむしろ悪い例。でたらめな状態で奇跡的にバランスが取れるだけだからね』

そうだぞ。

訳のわからん技ばかりが手に入る。

未だに剣士のスキルが一つも使えないからな。

『今のジエスターのデッキは、そこそこの強さを召喚して、それらしいカードで強化する。有り体に言えば、いきあたりばったりだ』

「シユウがそうしろって言ったじゃん」

自分でやれって指示して、批判するとかどうなの？

「今まではそれでも良かったんだ。いろんなカードをどんどん使ってみて欲しかったからね。良い点、悪い点、使い時が身についたでしょう。そろそろ、次のステップに移ろう。これを決めるにはまず、主軸を一本設定しないとイケない。それからデッキを構築していく』

「主軸って？」

何をメインに戦うかだろう。

『そのとおり。これはやはり初手で必ず出る熊にすべきだ。その後、熊をどう強化し、相手の行動を妨害して、攻略していくかを考える。エビも、猫も、兎も使つてのは節操がなさすぎるし、なにより複数体を操るほどの実力に欠けてる』

それは私も感じた。

複数体を同時に使つたときつて弱くなつてるよな。

クイーンに来てから、その傾向が特に顕著に表れている気がする。『まだ、罨や周辺を見極める力が足りてない。召喚獣を一体に絞つて、戦闘状況を把握する訓練をした方が良い。これが一番の近道じゃないかな』

「地味ー。ほんとにそれで華ができるの？」

私はできると思う。

少なくとも、弱い召喚獣を何体か見せられるよりは、非常にてごわい一体を使う奴の方が印象に残る。

それが華つてもものじゃないか？

『華はすぐに咲かないものだ。今はまだつぼみの状態。時間をかけて育てないと花卉ごとポトリと落ちかねない』

出たよ、お得意の回りくどい比喩。

「華は出るかもだけど、圧倒的な力は？」

それは……、どうなの？

『戦闘の見極めが十分できるようになったなら、火炎虎を使うデツキも考えて良い』

ほお、あれを使うのか？

『うん。火炎虎と熊の双塔デツキだね。熊は初手で出てくるし、火炎虎も手札に戻らないから最初に出てる。使いこなせば圧倒的な力になりうる。でも、まだ早い。熊一頭を中心にしたデツキで経験を積むべきじゃないかな』

これにはジェスターも「そうするよ」とおとなしく引き下がるのだった。

ちよつとずるい話の展開だったように思う。

気のせいかもしれないが、前よりもなんだろう……楽しそう？

以前は強くなることに必至で前しか見えなかったが、今は周囲が見えているというか、見る余裕があるというか。

『自らのカードを認められたんだ。まだ抵抗はあるけれど、使ってもいいかくらいにはなってる。ジャックとの戦闘は無駄じゃなかった。さすが俺だな、先見の明がある』

失敗と豪語した口が何を言うのか。

『結果オーライということだ』

でも、あの後も使うことはないな。

『使つてもどうにもならないからね。相手を怒らせる、恥をかかせる、時間を稼ぐとか限定されるから。戦闘むきじゃない』

戦闘向きではないが、かなり珍しいカードじゃないか。

この世界もあれこれと見に行ってるが、あんなカードは他に見たことがないぞ。

『とてもレアだと思う。でも、あれがインヒラント——個性だつていうなら、彼女の存在はなかなかおもしろい』

人を怒らせるのが、ジェスターの個性つてことか？

『そうとも言えるけど、そこまで人を怒らせるタイプとは感じない。それなら、あのカードの真価は挑発じゃない』

時間稼ぎ？

『おそらく違う』

否定はしたが、シユウは自らの考えを話さない。

おそらくまだいくつかの候補があり、はつきりしていないのだから。

クイーンの国でも順調にダンジョンをクリアしていった。

未攻略のダンジョンもクリアし、隠されたドロップも見つけることができた。

今回も無事にダンジョンをクリアし、街に帰って食事をしていた。

食べていると横に人影が映り、見ると老人が立っている。

ひよろい体格だが、着ている服はこぎれいだ。

「お食事中に失礼致します。私、アランチュール家にてご当主であら

れるレイメルデ様の側仕えをしているカラマンデと申します。メル様とジエスター様の活躍をご当主の妹様であるレカマルデ様がお耳に入れ、ぜひお話がしたいとのことでありまして、お二人をお迎えするよう仰せつかったのであります」

一気に喋るな。情報量をもっと減らせ。

あと、この世界では飯を中断させて話さないといけない決まりでもあるのか。

「あの……、アランチュール家って、あのアランチュールですか？」

「さようでございます」

前にもあつたなこんな展開。

じゃあ、解説よろしく。

「クイーンを三分割する名門三華族の第一位アランチュール家だよ。今代当主はクイーン様の懐刀って言われてる」

要するに金魚の糞だな。

それでその金魚の糞の、さらに金魚の糞が何のようだ。

私は今、飯を中断されて機嫌が悪い。用があるならまた今度にしてくれ。

「かしこまりました。すぐに済ませます。どうぞ、こちらを」

老人は内ポケットから、白い札を二枚取り出し、机にそっと置く。

「本日の夜、レイメルデ様がささやかな夕食会を開かれます。これはその招待状になっております。都合がお合いになればぜひご参加ください」

老人は恭しく一礼し、軽やかに出て行った。

「三華族第一位からの招待状！ ねえ、ねえどうするの？」

私は絶対に行かないぞ。

ダンジョンがあるなら別だけだな。

「こんなの一生に一度あるかないかだよ！ 行かないきや損だつて！ 着ていく服って今からでも仕立ててもらえるかな？」

私は行かないぞ。

「聞いたんだけど、この街の仕立屋って流行のカード型試着ができるんだつて。すごくない？ 見てみようよ」

私は行かない。

「化粧もしないとね。うわあ、ウチ緊張してきちゃったよお！」
行かないからな。

そして、夜——私は本当に行かなかった。

ジェスターが一人で行った。私は酒屋で留守番だ。

『賭けてもいい。あいつは問題を起こして帰ってくる』

問題とは？

『もつと正確に言えば、問題を起こすんじゃないくて、問題は起こさせられる。「パーティでこれこれこんな失礼なことをして、当家の顔に貴様は泥を塗った」ってイチャモンをつけてきて、「許して欲しければ、今まで手に入れた珍しいカードを全部渡せ」みたいな流れを狙ってる。それしかありえない』

じゃあ、ジェスターは……。

『陰謀渦巻く竜巻の中心で、何も知らずに浮かれてるだろうね』
深夜になつてジェスターが帰ってきた。

自殺しそうな顔色を見るに、シュウの予言は的中したらしい。

『楽しかった？』

わかつて聞いてやがる。

ジェスターの抑えていた気持ちが一気にあふれた。

目から惜しみなく涙を流し、びえーんと泣きながら事情を説明する。

『ふむふむ、おもしろいカードの一つでも見せろと乗せられて、お抱えの人たちと戦ったら、相手の特殊カードで、手札を強制的に出させられて、そのカードが例のアレで相手を激怒させた、と。それで、明日は謝罪も兼ねて二人そろって屋敷へ来い、か。外の見張りが増えたのはそのせいだろうね』

だいたいわかった。

むしろシュウの予想通りすぎて、驚きも何もないくらいだ。

『相手の手札を強制的に出させるカードは興味があるな』

それはどうでもいいかな。

「ごめん、ウチ、ウチ……」

またしてもボロボロと泣いてしまう。

別に問題ない。元の世界でもこういうことはよくあった。

何かとお偉いさんにイチャモンを付けられて、あれをよこせ、これをしろってのはな。

「そうなの？」

ああ。

こういうときの選択は二つに一つ。

一つはさっさと逃げる。でも、今回はこれができない。

まだ、攻略してないダンジョンがあるからな。逃げたらさらに面倒になる。

「じゃあ、やっぱり明日、謝罪に？」

いや、悪いことをしたと思つたら謝るし、できる限りは償う。

しかし、今回はそこまで悪いことはしていない。

あくまで勝負の一環で怒らせただけ。

『そうだね。出させた相手にも責任がある』

とりあえず、今日はもう寝ることにしよう。

まあ、明日のことは明日になってから考えればいいだろう。

「……もう一つの選択は？」

明日のお楽しみということ。

心配しなくていいぞ。

ジェスターを部屋まで見送り、自分の部屋の扉を通り過ぎて、階段を降りる。

真っ暗なロビーで立ち止まる。

少し目を閉じて静けさを肌で感じた。

静寂を惜しみつつ目を開け、裏口に向かう。

『行くうか』

ああ。

夜はまだ長いからな。

翌朝。朝と言うよりもまだ日が出てないくらいの早朝である。

街中が昼間のように賑わっていた。ただし、それは良い賑わいではない。

「火の手が……」

「あの方向は……屋敷じゃないか」

部屋の中にも、その喧噪が伝わってくる。

「メル、起きてる。メル。メルメルメル——」

ジェスターが私の部屋の扉を焦った様子で叩いてくる。

うるさいので扉を開けると、困惑したジェスターが立っていた。

「なんかすごいことが起きてるみたい」

そのようだな。

モンスターがダンジョンから出て暴れてるなら嬉しいんだが。

「冗談言ってる場合じゃないよ。見に行こう」

はいはい。

外に出ると、あちらこちらから人が外に出ているのが見える。

さらに彼らはだいたい同じ方向を向いている。

その方角には何があつただろうか。

「あつちつてアランチュール家の……」

赤い光と白っぽい煙が空に伸びている。

まるで光に誘われるかのようにジェスターはそちらへ走り出した。

彼女を追って、屋敷の近くに着くと、すでに多くの人々が群がっていた。

屋敷は赤く燃えており、関係者は事態を收拾しようとする者と黙って見る者の二種類に分かれている。

いや、もう一種類いた。

「火を消せ、消すのだ！ 急げ！ 燃やしてはならん。誰か行け。行くのだ！ 何を見ておる！ ゆけえ！」

自らは動かず、人に命令するだけの奴だ。

当主様は大変そうだな。もうしばらく眺めておくことにするか。

「ねえ、メル？」

何だ？

「明日の謝罪はどうなるのかな」

屋敷に來いと言われたようだが、見たところ屋敷がもうないな。謝罪どころじゃないんじゃないか。

「ねえ。私を部屋に送った後、下に降りて行つてたよね」
すこし夜風にあたりたくてな。

「ねえねえ」

何？

まだあるの？

「どうしてメルはあの人が当主様だつてわかつたの？ 他にも同じことを言つてる人はいるよ」

………霧囲気かな。

「そういうことにしとくよ」

そうしておいてくれ。

ようやく日が昇り始めたが、事態は何も変わらない。

むしろ現状が明るみになって、余計に凄惨さが増したと言える。

当主様周辺は一時落ち着いていたが、ここに来てまた慌ただしくなっている。

まだ火がくすぶっている焼け跡を、多くの使用人やらがあさつていた。

「何を探してるんだろう」

さあな、大切なものじゃないか。

「燃えるわけがなからうー！ アレを入れていた器は特別製だぞ！ 燃

え落ちるわけがない。探せ！ 探すのだ！」

夜の見物客が帰り、入れ替わりに朝の見物客がやって来始める。

私たちも退屈になってきたので、宿に帰ることにした。

きちんと朝ご飯を食べて、火事でうやむやになっているうちに街を後にした。

印象派の国と呼ばれるように、カードを非常に重要視する国風だ。

当然、彼らの教祖たるエレティコスカードやデッキについても研究が他国より活発だ。

クイーンの宮殿があるという都にて、エレティコス博物館にジェスターと来ていた。

「わあ、やっぱり印象派は進んでるよ。エレティコス様のデッキがここまで詳細に研究されてるなんて」

目を輝かせて、ジェスターは展示物を見て回っている。

前々から思っていたのだが、あいつは異常にエレティコス関連に執着を見せるよな。

『まあ、信者でもありオタクだよね。なんだかんだ言って火炎虎もちやつかり受け取ったし、寝る前にニタニタしながらカードを見てるしき。ときどきうつとりしながら頬ずりまでしてる』

見てるのは知ってたが、頬ずりは知らなかった。

そこまで好きだったのか。

『一日はここで遊べると思う。覚悟しておいた方がいい』

ダンジョンに行ってもいいかな。

……おっ、いちおうダンジョンやモンスターの部屋もあるみたいだな。

ダンジョンやモンスターの部屋はそれなりに楽しめた。

エレティコスがかつて戦ったであろうモンスターが、神話を元に計算した原寸大サイズで置かれている。

中には明らかにおかしいだろと思えるのもいたが、見ていておもしろいのでこれはこれでありだと感じた。

『この博物館はクイーンが最優先で作らせたらしい。特にこのモンスターのフロアは、力のいれようを感じる。間違いなく、クイーンもエレティコスに熱狂してる』

部屋の奥に行くとも縦長のドデカイ絵が掛けてあった。

高さは私の身長の上五倍以上で、横幅は両手を広げて三人分はあるだろう。

絵の下には、赤に染まる生物とその近くに男が立っている。

一番目立つのはそれではなかった。

絵の上半分以上を占めているのは、何か双翼のモンスターだ。

黒い翼をはためかせ、男と生き物を見下ろしている。

竜の周囲は青い炎で焼き尽くされていた。

まるで私自身がそのモンスターに見下ろされていると感じるほどの大迫力である。

あれ？

最近どこかで見た記憶があるな。

でも、こんなモンスターがいたらすぐに思い出せるはずなんだが。

『見たね。なんで隠すように持ってたのかやっとなかった』

ようやく絵から目を離すと、一人の女が目にとまった。

彼女は椅子に座り、とりつかれたかのようにその絵をうつとりと見ている。

白銀の髪や整った顔立ちがやや冷たさを感じさせ、全身から凜とした印象を受けた。

ただ雰囲気よりも歳をとってないかもしれない。私よりは若く、ジエスターよりも上くらいだろう。

「あつ、メル。ここにいたの？」

ジエスターがどこからやって来た。

「やっぱリクイーン様はすごい。神話や遺物どころか、ダンジョンやモンスターまで詳細に調べあげてる。国どころか大陸一の博物館だよ」

興奮冷めることなく、鼻息荒くジエスターは語り続ける。

やっと落ち着いて、私が見ていた絵を彼女も見た。

「……………アドミラシオンの竜。噂には聞いてたけど、実物はやっぱりすごいね。こみ上げてくるものがあるよ」

何がこみあげてくるんだろうか。

『尿意とか？』

いちいち発想が汚い。

で、これはそんなに有名なの？

「エレティコス様が、オーフェルの北方で討ち破った竜だね。正確には獣って表記されてるんだけどね。「双翼の獣は青き炎で人を焼き、街を焼き、国を焼いた。神はこれを赤き炎で征伐した」。このアドミラシオンって名前には説がいろいろあって、単に地名って言う人もい

れば、竜を操っていた人の名前って人もいる」

「貴様はどう考えるか？」

いきなり声をかけてきたのは椅子にかけていた白髪女だ。

椅子にふんぞりかえり、ジェスターを鋭い目つきで見ている。

「オーウエルの北方は当時まだ名前がついてない。操っていた人がいたならその人の記述がないのはおかしい。どちらも違うかなって」

女は黙って先を促す。

「神話の表記が、竜では無く双翼を持つ獣ってあったから、召喚獣だと考えてたけど、この絵を見てるとモンスターだったんじゃないかなって思う。ほら、迫力が召喚獣のレベルじゃなくない？ それなら……ダンジョンの名前かなあ」

それは素晴らしいな。

ぜひ攻略したいものだ。

「あなたはどうか考えるの？」

「……余の考えはよい。ダンジョンの名前とするならば、次の疑問は当然こうなる。そのダンジョンはどこにあるか。また、カードが現存していないのか。どちらかが見つからねば、それもまた空論にすぎぬ」

ふーむ。

『残ってたみたいだね』

そうなの？

『ほら、あの器に入ってたカード』

……ああ、あれか。

そういえば、あの札がそんなだったな。

袋から取り出して、表面に描かれている絵を見る。

手を伸ばして壁の絵と並べるようにして、見てみると確かにそうだ。

翼の絵だけしか札には描かれていないが、たしかにこの絵と似ている気がする。なあ？

確認すべく後ろを見ると、女二人が両側から同じような表情で見つめてきている。

目を見開き、口を半開きにし、壁の絵と比較してジロジロ眺める。
「……………これをどこで手に入れた？ 述べよ。沈黙は許さん。虚偽もだ」

絶対秘密にするというなら教えよう。

「余の名において誓おう」

ずいぶんと大げさな言い回しだな。

で、ジエスターは？

「もちろん言わないよ」

それなら——ほら、この前、不幸にも家が燃えたお偉いさんがいたじゃん。

なんとか家とかいうの。

「アランチュール家？」

そう、それ。

その当主が大切にしまってた器の中に入ったた。

「盗んだの?!」

燃えるといけないと思つて拝借しただけだ。

いつか返すことがあるかもしれない。

「…………返さずともよい」

白髪女の声からは明確な怒りが滲み出していた。

「合点がいった。あやつ、これを隠しておつたのか」

綺麗な顔をしている奴ほど怒ると怖い。

実際に目の前の女は、睨むだけで殺してしまえそうな目をしてい
る。

「…………して、貴様はそのカードをどうするつもりだ？」

特に考えてなかった。

持つていても仕方ないし、ここに寄贈しようか。

この札があつたであろうダンジョンの調査も進展があるかもしれないぞ。

「でも、ここに寄贈したらレイメルデ様にもばれちゃうよね。私たちのこともばれるんじゃない」

こつそり寄贈するとかどう？

それなら特に怪しまれないと思うぞ。

「……渡した後の調査状況とか知りたいよ」

わがままな奴だな。

じゃあ、クイーンとやらを通して寄贈したらいいんじゃない。

クイーンとかいうのは、お前と同じでエレティコスのマニアだろ。

「マニアじゃない。敬虔な信者だよ」

急に真顔になるなよ。

わかってるって、虎のカードに夜な夜な頼ずりするほどの信者だもんな。

「なんで知ってるの!？」

話を戻すと、クイーンならこんな貴重な札を手放したくないんじゃないか。

レなんとかよりも、立場は上だろうから上手くかばってくれるだろう。どうだろうか？

『悪くない。大きな問題が一つ残るけどね』

「そうかもしれないけど……、寄贈としてクイーン様にこっそり渡すとしてもだよ。中身はどんなのか見ておきたいよ。ちよつと見てみようよ。ちよつとだけだからさ。すつごく気になる」

それはたしかにそうだ。

しかし、この場で使うわけにもいかないだろ。

それと大きな問題ってなんだ？

『もう手遅れだから気にしなくていい。なんとかなりそうな雰囲気だし』

あつ、そう。

なんとかなるならいいな。

「おい」

白髪女が不機嫌さと好奇心を半分ずつ混ぜた声で割り込んできた。声は両者が半分だが、顔を見るに好奇心が勝っている様子だ。

おっと、済まん。

横で聞いていたとおりの。

寄贈する前に中身を見るが、お前も見るか？

「無論だ。カードを確認するのなら、それに相応しい場所というものがある。ついてまいれ」

女は私たちの意見を聞くこともなく、歩み始める。

フロアから出て、博物館も正門から出る。出た瞬間に周囲を数人の男女が囲んだ。

『大丈夫、彼女の警備部隊だから。ずっといたけど気づかなかったでしょ』

彼らは私たちを向かず、女性を守るように外側を向いている。

「帰る」

白髪女が一言声をかければ、一人の女が札を出し乗り物を出現させた。

見たことのないロバみたいなのが車を牽いている。

彼女は当然のように、車へ入り腰をかける。

「同席を許す。入れ」

私たちも追って中に入り、車に揺られる。

揺られるというほど揺れていない。速さの割に快適だ。

住宅地や商業地域を離れ、車はひとけの薄い地域に入る。こっちつてたしか。

「あの、もしかしてなんだけど……、『印象派の夢魔』とか呼ばれてたり、しますか?」

「此度は許す。二度とその名を口にするな。余はそのあだ名が好きではない」

ギロリと睨まれ、ジエスターは縮こまる。

じゃあ、なんて呼べばいいんだ?

「クイーン。それだけで良い。余の宮殿へ招待しよう」

こうして私たちは印象派のトップの本拠地へ行くこととなった。

宮殿は本当に宮殿だった。

煌びやかで、厳かな建築物が目の前にある。

意味がないほど広いし、天井も高い。床だってピカピカだ。

人が生活する環境とは思えない。

まっすぐ進むと大広間で、奥の椅子に彼女は座った。

こういうところって普通は身辺警護の人間がたくさん立っているはずだが彼女一人だ。

周囲を見渡すが人の気配はない。どこかに隠れているのだろう。

「大げさな警護は好まん」

途中の通路でも警備どころかほとんど人が見えなかった。

静かすぎるし、広すぎるしで不気味だ。あと数年したらダンジョンになるんじゃないか。

こう思うと、不思議と楽しくなってくる。人が住んでると不気味なのに、ダンジョンになるとそうでなくなる。

『先に言っとく。戦闘になりそうな気配を感じたら合図をするからサクツと斬っちゃって』

あいよ。

シユウの声が聞こえていたジェスターは「何を言ってるんだ」とシユウを見る。

さらに、あつさりと返事をした私にも「どうということ」という視線を投げかけてきた。

シユウが言うには、クイーンとの戦闘は避けなければならぬらしい。

そのため矛盾しているようだが、戦闘をしないために暗殺するのが良いということになった。

ジェスターは知らないから、不安になっても無理はない。

「道化師よ。不安が出ているぞ。そんなに仲間を見るでない」

ジェスターは、不格好に笑い、クイーンの誤解をごまかしている。

「まずは貴様の不安を取り除こう。貴様ら、アランチュール家に盗みに入ったな」

私はシユウに手を添えるが、合図はない。

ジェスターは変な汗をかき始めている。

「もしや火も貴様か?」

私は何も言わない。

ただ合図を待つのみである。

「許す。貴様等の罪は全て不問に付す。あやつら一族は、表では余に笑顔で媚びを売り、裏では重要なカードを秘匿し、余のカード蒐集を間接的に邪魔し無駄骨を折らせた。これは余を愚弄するもので、ひいては国に対する許されざる背信行為。明日にも一族郎党、全カードを剥奪し辺境の地へ流刑とする。奴らのカードは民のために使うと約束しよう」

ジェスターはほっと長い息を吐く。

「ただし——」

ここで条件が入る。

ジェスターがびくりと震えた。

「これは例のカードを余に渡して後に執行とする」

どうするのとジェスターが私の方を見てくる。

『あげちゃっていいよ。効果も見てみたいし』

わかった。

渡そう。どんな効果か見てみたいんだが、ここで見せてもらえると思っているのか？

「許す。とくと見よ」

私は札を取り出して、クイーンにそのまま差し出す。

彼女は白い手袋を取り付け、恐る恐るとカードを手取る。

長い時間、札をすみずみまで眺め、顔を崩してニンマリとした。

『どこかの道化師と重なるなあ』

まだ頼ずりはしてないだろ。

ジェスターがキツとこちらを見てくるが気づかない振りをする。

クイーンが札を掲げたが特に何も起こらない。札は光に消えず、そのままで。

「ふむ。余には使えぬ。装備系には見えぬ。特殊か妨害であろう」

「ウチ、特殊と妨害なら使えるよ！」

はいはいと元気よくジェスターが手を挙げる。

不承不承といった様子で、クイーンはジェスターに札を渡す。

ぱあーと喜んだ顔でジェスターは札を掲げる。

しかし、何も起こらない。

「装備系か」

クイーンがベルを鳴らすと、すぐさま女性がやってきた。

彼女に札を渡し、使えと命ずる。しかし彼女もまた何も起こせなかった。

ほんのり悲しそうに彼女は部屋から退席させられた。

「どう考える？」

私はわからんからパス。

「前にも誰も発動できないカードを何度か見たことがある。そのときは特殊な条件が必要だった。二枚をセットで使うとか、ある時間帯や場所じゃないと発動しないと駄目ってやつ。カードに描かれているのは翼だけ、本体のカードがどこかにあるんじゃないかな」

おお、なんかそれっぽいな。

「どうやって本体のカードを探す。翼ですら見つけることが困難だったのだぞ」

それな。

この問題にはさすがにジエスターも手ががない様子だ。

クイーンもどうしたものかと顎に指を付けて考え込んでいる。

『アナライズで見た答えをそろそろ言ってもいいかな』

もつと早く言うべきだったと思うよ。

『これは特殊装備。召喚獣に対する装備カードだ。詳しい解説にはこうある。「青の光を司る獣の翼が今生によりみがえった。悪夢の翼が天空を覆うときが来たのだ。漆黒の翼が轟き、空を、人を、世界を震わせる！ 君は——青き光をもう見たか？」。昔のおもちやのCMみたいなノリだ』

シユウの話をもまま伝える。

二人は顔を紅潮させ、感動を隠せない様子だ。

ジエスターが試してみることにになり、さつそくぬいぐるみの熊を召喚する。

手札を何度か回し、ようやく例の札がきたらしい。

「どうだっ」

カードは消えた。

光の色は青……青にしては濃いな。

『俺の国だと藍色に近いかな』

じゃあ、それでいいや。

変化はすぐにはわかった。

熊の背中からよきによきと黒い翼が生えてきたのだ。

「かつこいいー！」

「……不細工よな」

ジェスターとクイーンが互いの顔を見た。

ちなみに私は、クイーンの意見に賛成である。

ぬいぐるみの熊に、生身の翼がついていて気持ち悪い。

特に生え際がぬいぐるみからぐしゃあと出てきていてグロテスクだ。

熊に翼があると、ここまで見た目がアンバランスになることを初めて知った。

見た目の話はひとまず置こう。

その翼が生えるといったい何ができるんだ。飛べたりするの？

『飛べないよ。小さい字で、「翼を付けても空は飛べません」って書いてあったから』

なんだ、つまらんな。

「がんばれー！」

シウウの説明がまるで耳に入っていないジェスターは熊にエールを送る。

翼がちよつと動いた。

「動きが素敵！」

「不気味よな」

これも私は、クイーンに賛成票を投じる。

動くだけなのか？

何か別の効果があるんじゃないの？

「使ってればわかるかも。でも、これってもらえたりするの？」

「ならぬ。検証は余が直々に行う。結果は随時知らせよう」

だよねーと残念そうにジェスターは肩を落とした。

仕方ないだろ。

そういえば、その翼つてあの虎に付けられたりもするの？

『この馬鹿』

ジェスターが牽制するように私を見た。

「虎？——まさか炎虎マルスか！何か持つておるのか！」

クイーンの反応は凄まじい。

席を蹴って立ち上がり、私へと歩み寄る。

ジェスターが札を一枚使い、目の前に召喚獣を出す。

人と同じようなサイズの紙細工で出来たような虎が現れた。

こんなときのために、見た目だけは虎っぽい召喚獣を入れておいたのだ。

「……取り乱してしまった。今、見たことは忘れよ」

ジェスターの召喚した張り子の虎を見て、クイーンは嘆息しつつ席に戻った。

「炎虎マルスも疑わしい。文献にこそ出ているが、絵に描かれておるのは軟弱げな虎よ。見たであろう」

あの絵の火炎虎を言っているのだろう。

確かにあの絵の主題は、翼の竜であって火炎虎は弱そうだったな。

下の方に、男と一緒に小さく描かれているだけだった。

「本来の炎虎の姿が、絵ではなく文献でしか多く残っておらぬのはその軟弱な姿を隠すためであろう」

クイーンは軽く鼻で笑った。

ジェスターがその発言にピクリと反応する。

「炎虎マルスがエレティコス神のインヒラントカードという説も疑わしい」

「炎虎マルスは、神様のインヒラントカードで間違いないよ」

クイーンがジェスターをにらみつけるが、彼女は退かなかった。

「いつも炎虎が側について、エレティコス様の戦いを支えていたって文献に書かれてる。これは彼のインヒラントカードであることの証左じゃない？」

「そうかもしれぬな。だが、側にいるだけよ。神話では活躍したよう

に書かれておるが、調べてみれば活躍は他のカードのよるものが大半。炎虎は初期に少し使っただけではないか」

二人は静かに睨みあう。

『止めて。口でいいから』

斬らなくてもいいとは平和的だな。

言い争いはやめろよ。

そんなつまらないことでき。

「つまらないことじゃない！」

「つまらぬことではないわ！」

いや、別にどっちでもいいでしょ。

炎炎虎がいたのは間違いなくて、ある程度は活躍したんだから。

「違う。絶大な活躍だよ！」

「否！ 活躍はわずかよ！」

二人はまたしてもにらみ合った。

『火に油を注げなんて言っただけじゃないけど？』

違う。

私は二人に戦って欲しくない気持ちで言ったんだ。

決して戦いを進めたのではないんだ。

「ふむ。それよ。神話の正否は戦いの歴史。己のカードで決めるべきではないか、道化師よ」

……おい、やるのか？

「やるよ！ ウチの正しさを見せてやる！」

違う。

お前に聞いたんじやない。

だいたいどうやって正しさを見せるんだ。

「ウチの召喚獣でも戦えることを示して、それならエレティコス様の召喚獣ならどれほどかってわからせるの！」

「吠えたな！ できるものならやってみせよ！ 貴様の召喚獣が、エレティコス神の名を地に落とすものでなければ良いがな！」

二人はまたしてもにらみ合った。

先ほどよりもその勢いは増している。実は気が合うんじやないか

と思わないでもない。

二人とも斬つちやうか。それなら落ち着くだろ。

『もういい。ほつとこう、アホらしい。本人達の気が済むまでやらせておけばいい。俺はもう知らん』

シユウは責任を放棄してしまった。

私も同じ気持ちだ。勝手にやっておけばいい。

こうしてクイーンとジェスターの戦いとなった。

戦いの場所はそのまま宮殿の大広間だ。

「余に齒向かう奴は久々よ。余の印象をその身に刻み込むが良い。この悪夢を二度と忘れぬようにな」

ジェスターはいつも通り、ぬいぐるみの熊を召喚した。

一方のクイーンは、初手で青色の光のカードを利用した。

おそらく夢のフィールドカードだろうが、特に変化が起きている様子はない。

『もう夢の中だよ。メル姐さんは現実だから物理的にほぼ干渉しないしされない。見て喋ることだけ。あとはパーティー登録したるジェスターに触ることくらいかな』

そんなものなのか。

「さあ、出でよ。夢の化身たち！」

彼女の手札が全て消費され、クイーンとジェスターの間に大きな、異常に大きなモンスターが召喚された。

体はまるっこく、腕や足もついている。その足だけでこの建物の柱より太い。

んもおーと野太い声をあげている。

ジェスターの熊は、単純にサイズ差で圧倒されている。

変なモンスターの動きは遅いが、力はすさまじい。腕がわずかにかすっただけで熊は空を飛んだ。

「強いけど……いけるー」

ジェスターは熊を強化していく。

今度は巨腕を防いだが、反撃はできそうにない。

「ふむ。それではこれならどうか」

クイーンの手札はいつの間にか補充され、さらにその札が全て消費された。

そして、手札にはまたすぐ札が補充される

「えっ！ なにそれずるい！」

「この夢こそ余の居城。このくらいで驚かれては困る」

周囲に同じ怪物がさらに五体追加される。

『圧倒的な力の差を見せたいようだけど、あれは悪手だね』

怪物たちは連携なしの力押しだ。

自分たちの図体が邪魔をして、上手く動けていない。

ジェスターは熊の素早さを強化し、上手く怪物を誘導して混戦に持ち込んでいる。

『うん。上手上手』

これにはシユウもご満悦の様子。

「それなら、こうだ」

クイーンが手札を光らせると怪物達がぐによぐによと身を寄せ合う。

怪物は一体にまとまり、足が八本ついた蜘蛛のような怪物に姿を変えた。

見た目はなんだか間抜けだが、動きは先ほどよりも素早く、それでいて力も強い。

「これでー」

ジェスターが熊にカードを使う。

熊の爪がニョキツと伸びて、蜘蛛の怪物の足に食い込ませ、その足を登っていった。

怪物は自らの上に乗る熊へ攻撃することができず、振り落とすように暴れている。

熊は怪物に何度か攻撃し、やがて振り落とされ地面に叩きつけられた。

すぐさまジェスターが回復を使い、熊はすぐさま体を起こした。

「おもしろい。やるではないか。余の化身を相手にここまで戦えるも

のはそうはおらん」

さらにクイーンは手札を惜しみなく消費していく。消費してもすぐさま手札は復活する。

強すぎないか？

『夢だからね。彼女にとって都合が良いことの方が多いだろう。ただ、彼女は悪夢も起こりえるってことを忘れてる』

ん？

……あれ？

『気づいたね』

気づいたと言われたからには、気のせいではないのだろう。

今、クイーンの近くに誰か立ってたよな。

瞬きをしたら消えてしまったが、小さい影が見えた気がした。

それになんだろう。うっすらとだが、靄が周囲にかかってきてないか？

『ついに来ちゃったか。下手な真似をしなけりや、何事もなく済むだろうけど……』

シユウが呟く間に戦闘は終局へ向かっていた。

怪物はさらに姿を変え、ジェスターの熊と似た形になっている。

大きさはオリジナルよりも数十倍はでかく、力も速さも桁違いだった。

スペックに明らかな差があるにもかかわらず、そこそこ戦えたのは経験による成長なのだろう。

けっこう追い詰めたよな。

『それでもない。クイーンは手加減してるから』

そうなのか？

『ジェスターに合わせて召喚系と、ささやかな強化系だけを使ってる。強化系と攻撃系を主体で戦う方が間違いなく強くなる。回復にトランプ、さらにこの召喚も合わせれば、このフィールドで彼女と戦える相手はそう多くない。例えば、圧倒的な個人戦力、あらゆる問題に対応できる適応力、フィールド自体に干渉する力、夢を無効化するか。こんなところくらいでしょう。……おっと、一番大切なのを忘れ

てた、彼女よりも夢を操れる奴だ』

そんなのいるのか？

とにかくジェスターの手札は残り一枚だけ。

例の特殊カードであることに間違いはない。

「さあ、最後の一枚を使うがよい」

ジェスターはやはりまだ抵抗を見せた。

「道化師よ。取るに足らぬと思っておったが、なかなかどうしてやるではないか。名はなんといったか？」

「……ジェスター。ウチの名前はジェスター！」

クイーンは口の中で「ジェスター、ジェスターか」と名前を転がした。

「ふむ。それでは道化師ジェスター。余の従者となれ」

いきなりのスカウトだった。

「華族などという余の使いつ走りではない。余の直属だ。そなたの神話への見識と、カードを扱う印象を余は高く評価する。炎虎への意見の相違はあれど、それもおいおい矯正していくとしよう。この宮殿に身を置くことを許すぞ」

「高く買ってくれるのは嬉しいけど、ウチはこんな宮殿にいたくない。もつと自分でいろいろ見て回りたい」

クイーンはジェスターの言葉を鼻で笑った。

「なぜ自分で見て回る必要がある？ 人を使い、取ってこさせればよいであろう。シーカーの真似事などする必要がなからう」

シーカーじゃない。

冒険者だ。

「呼び方などなんでもよい。余と貴様は、集められた物に対し、仮説と実証を重ねるべきよ。直接自ら足を運ぶなど、そんなくだらぬことをしてどうなるというのか。『何かをやった』という実のない虚しい幻想を積み重ねるだけ。幻想の積み重ねなど時間と労力の無駄よ。何も生むべきものなどないわ」

『ああ……、今のはアウトだ。地雷を全力で踏み抜いた』

ジェスターにも謎の人影が見えてきたようで、目を瞬きして周囲を

見ている。

「どうした？ 夢でも見ておるのか？ やはり貴様には余の配下は務まらぬかもしれぬな。その最後の一枚を持って、貴様の印象を再評価することとしよう。とく使え」

わずかな逡巡があったものの、ジエスターは最後の一枚を手札から切った。

熊がもぞもぞ動き、中から久々に影人が出てくる。

もしかして普段から入っていて、実際にこの影人が熊の振りをして戦ってるのではなからうか。

クイーンもこの影人には予想外だったようで、成り行きを見守る。

「おお、おお、夢の女王よ。あなた様は実にお美しい」

ああ、こんな声だったなとすぐに思い出した。

相手の神経を逆なでするような、苛つくしやべり方だ。

「ふむ。話すタイプとは珍しい。いつそう貴様を囲いたくなかった」

ジエスターは、露骨にクイーンから目を逸らす。

おそらく、この後どうなるかがわかっているからだろう。

「そのお美しきは、汚れや疵を知らぬから。女王は人付き合いが苦手なご様子。お認めになっただけはいいかがか？ 囲うなどと口にするのは、自らの優位な立場を利用し、自らが疵付くのを避けるためだと。余裕ぶっているのは、自らが評価されることを何より恐れているからだ。本当は自分が認められないのがこわいのでしょうか？」

女王は絶句、ジエスターと私は成り行きを見守る。

「神話について誰かと仲良くおしゃべりがしたい。自分の仮説を誰かに聞いてもらいたい」

「……黙れ」

ようやく出てきたのは、影人の口を封じる言葉。

しかし、影人は黙らない。

「でも、自らの意見が批判されるのは怖い。意見を否定されたら立ち直れない？ だから、立場を利用して相手に意見を押しつける？」

「黙れと言っている」

怪物を操りけしかけるが、影人は身軽に攻撃を避けた。

「印象派の夢魔——あだ名のとおり、夢の魔物というカードが貴方を印象づけておられる」

影人は笑いながら、女王のすぐ側まで迫った。

「そろそろお気づきになられよ、夢の女王。疵付かないよう心を閉じ、その閉じた世界をどこまで広げたとところで誰の心にもたどり着きませんぞ。いつになったら夢から出られるおつもりか？」

「黙らんかっ！」

女王は自らの腕で直接、影人の頭を払いのけた。

影人の頭はあっさりと落ちて地面に転がる。

「おお、寂しい淋しい。誰も貴方を慰めない」

落ちた頭がそう言い、気が触れたような笑い声をあげつつ影人は消え去った。

笑い声はまだ耳に残っているようだ。

「……あの、もうデツキ使いきったから降参してもいいよね」

しばらくして、ジェスターがおずおずと告げた。

「絶対に許さん」

はつきりとした怒りが見て取れる。

まなじりはひくつき、拳は硬く握られぶるぶる震えていた。

「自らの言の報いを受けよ」

「あれ、ウチの言葉じゃないよー！」

ジェスターの釈明も聞く耳を持たず、女王は手札を全て消した。

夢ならではなのだろう。建物が異常に大きくなり、天井が空かと思うほどの高さにまでなった。

そして、最初にみた怪物が再び生じる。怪物は徐々に大きくなっていき天井すれすれの高さまで膨らむ。

片足だけでも先ほどの状態よりなお大きい。

「ほええー」

ジェスターも思わず間拔けな声で見上げている。

「踏め、跡形も残すな」

あつ、まづい。

『助けは必要ない。もう手遅れ』

動こうとしたところでシユウに止められた。

……手遅れって、駄目じゃん。

『違う、そうじゃないんだ』

パチンと指を弾く音がどこから聞こえてきた。

音ともに目の前の化け物が瞬時に消えた。

「なんじゃと……」

クイーンの焦りを見るに、彼女が消したわけではないようだ。

「ややや！ メル殿！ お久しぶりですな！」

私の前に背の低い、ずんぐりとした亜人が立っていた。

手をぴよんと挙げて、私に挨拶してくる。

誰だ……あれ？

前にどこかで会った気がするな。

『久しぶりだね。元気にしてた？』

「や！ シユウ殿も、まこと久しぶりですな！ ご壮健なようだなに

よりです！」

シユウとも普通に話しているところを見るに知り合いなのは間違

いない。

それにパーティー登録もしているのだろう。

「何やつか？」

「ややや！ ヌルとお呼びください！」

クイーンの誰何に元気よく返した。

ヌルって、あの橋の名前か。そういえば橋の上で誰かに会ったよう

な……。

「何者でもよい。余の居城に土足で踏み込んだ罪、その身で贖っても

らおうか」

クイーンの手札が補充され、さらにまた消費される。

彼女と私たちの間にまたしても巨大な怪物が出現する。

それも今度は一体ではない。二体、三体、まだまだ出てくる。

「や！ その罪、喜んで贖わせていただきましょう！ クイーン殿に

は感謝しかありません！ こうしてまた一緒に戦える場を用意して

くださったのですから！ 残念ですが、おではここで彼らに番を譲る

ことにします！ ジェスター殿！」

いきなり名前を呼ばれたジェスターは体を硬直させた。

「あなた方の世界に合わせて、このカードをお送りしましょう！」
いつの間にかヌルの手に出ていた札の輪郭がぼやける。

「えっ……、なにこのカード」

霧となって消えたと思ったら、ジェスターの手札の中に霧でぼやけた札が現れた。

「メル殿とパーティーを組んでいる貴方なら、必ずや彼らも駆けつけてくれますよう！」

ジェスターは手札に現れたカードに困惑している。

「何をしようが無駄な事よ」

「やや！ 果たしてそうでしょうかな！」

「ここでようやくヌルはクイーンを向いた。

「ここは余の夢。誰も余に抗うことなどできぬわ」

「ややや！ 貴方の言う、実のない虚しい幻想の積み重ねが、本当に時間と労力の無駄でくだらぬものだったか、一つ試してみるとしましょう！」

クイーンの宣言に、ヌルは笑って反証を示すと告げた。

「さぎ。ジェスター殿。どうか、ご利用を——」

ジェスターの手札から霧に覆われたカードが消える。

消える光は、私が一度だけ見た光の色だ。

「虹、色……」

「なんじゃ、そのカードの色は？ よもや神話の——」

そして、それはジェスターもクイーンも知らない光の色だった。

「あときは、言えませんでしたからな。今ここはパンタシア、改めて語らせていただきましょう！」

ふうーとヌルは軽く息を吐き、ふいーと吸い込む。

【——此処よりは幻想】

声と同時に視界がかすみ始めた。

周囲は霧が立ちこめ、白く染まっている。

「なんじゃ？」

「――刹那の夢とて我に見られぬ幻なし」

靄の中から誰かが歩いてきている。

一人や二人ではない。空にも何か大きなものが飛んでいる。

「――しかして我、刹那の夢幻に立つ」

ヌルの声は聞こえるが、その姿はどこに消えたのか見ることができない。

声どころか音楽まで聞こえてきている。他の二人も聞こえているから幻聴ではあるまい。

「なに？　なにが起きてるの？」

「――汝等ここに入る者　一切の、ややつ！　始めるの早いです。もうちよつと待って」

目の前の怪物の一体が何かに撃ち抜かれ崩れた。

さらに、そこへ炎の剣を持った誰かが追撃をかけ燃やし尽くす。

「余の、夢の化身がやられる？」

「や！　語らせていただきましょう――おでたちの幻想奇譚を！」

よくわからない詠唱もどきは終わったようで、靄がようやく引いてきた。

「えっ？」

「……ここやつらはどこから来た？」

何十人、いや百人はいるかもしれない。

中には明らかに人じゃないものまで混じっている。

しかしなぜだろう。初めて見たはずなのにそんな気がしない。

「ややや！　八割といったところですね！　それでは始めましょう。おや？　クイーン殿、速く次のモンスターをお出してください！　これでは戦いになりませんからな！」

クイーンは周囲を見渡しながらも、手札のカードを全て消費した。

大きな怪物が次から次へと出てくる。出てきた瞬間に、謎の軍勢にあつという間に倒されていく。

一体は、燃えさかる剣に切り裂かれ――。

一体は、空を飛ぶ大きな鳥からの礫に貫かれ――。

一体は、ツバ付き帽を被った青年のツルハシで転かされて――。

一体は、小さな謎の浮遊体を踏みつけようと、必死に足踏みをしていて――。

一体は、謎の音楽団が奏でる曲から生じた、理屈のわからない現象で消滅させられ――。

出しても出しても瞬時に怪物を消し飛ばされていき、クイーンの顔に焦りがかいま見えた。

『おっ、さすがに全力を出してきたな』

クイーン of 戦闘スタイルが変わった。

手札が次々と消えていき、すぐまた手札に現れる。

同時に白、緑、黄、赤、銀と様々な色の光が彼女の周囲で煌めいた。

自身の能力を高め、様々なトラップが配置され、数多くの攻撃魔法が周囲に散らばる。

彼女を中心として様々な現象が生じ、まるで彼女が世界の中心にいるようだ。

これにはさすがに謎の勢力も苦戦を免れない様子である。

彼らを相手に、一歩も退かずに戦う姿は夢の世界の女王を感じさせた。

女王は多色の光を帯び、あらゆる攻撃や防御を駆使し、多数の勢力と渡り合っている。

まるで――

『彼女は、自分が物語の主人公で世界の中心にいても思ってるんだろう。だが、俺たちは知っている。彼女は主人公ではないし、世界の中心にもいない。俺たちこそが主人公だ』

そんなこと私は知らんぞ。

私の発言を無視してシユウは続ける。

『彼女は脇役で俺たちを輝かせるだけの存在。だからこそ、彼女にはこんなところでやられてもらっては駄目だ。もつと俺たちの株をあげてくれるよう働いてくれないと。なんだって俺たちは主人公なんだから』

仮に主人公だとしてもだ。

そんな台詞を吐く主人公の話なんて読みたくない。

『ひどい自虐だね。そしてもう一つ』

まだあるのか……。

『俺たちは主人公だけど、世界の中心ではない。世界の中心なんてただの回転軸。回る景色をぼんやり眺めるだけの一番面白くないポジションだ。さて、誰がそのポジションにいるのかな』

なんか意味不明なことを語っているうちに戦闘はまたしても覆り始めている。

クイーンが攻撃がパチンという音とともに消えてしまうのだ。

まるで夢のように靄へと消え失せてしまう。

『あいつ、番を譲るって言ってたのに……』

さすがにカードが無効化されてはクイーンも為す術がない。

これにはクイーンも焦りを隠すことができない様子だ。

「——わかったぞ。そちらも夢、ならばフィールドを解除……できぬだと。あり得ぬ。ここは余の居城だというに。ひっ」

クイーンが顔を上げれば、すでに全方位を囲まれている。

「ややや！ ちよつとやりすぎましたな。少しそちらもお手伝い致しましょう。そのカードをプレゼント致します！」

クイーンの手札に靄のかかった一枚のカードが現れる。

「思い出してください！ 神話の時代に描かれた双翼の竜を！ 人々悉く灰燼に帰す竜を想い起こすのです！」

『……やり方がえげつねえぞ』

ヌルの声に従い、クイーンは札を使った。強要されたと言ってもいいだろう。

彼女の手に持った靄のカードが、虹色の光となって消えていく。

「ぐっ、デツキが全て持っていかれる」

彼女のブレスレットがパキリと壊れ、腕から落ちた。

代わりに彼女の前に、見覚えのある竜が現れた。

「すごいッ！ アドミラシオンの竜だよっ！」

「おおっ、これぞまさしく神話にあるアドミラシオンの竜！ これさえおれば——」

『ああ、終わった』

二人は互いの共通項を見て喜んでいる。
シユウの様子はその逆だ。

「それは竜ですか？」

先ほどまでおそろしくいなかった男がぽつりと立っていた。

上から下まで黒のローブに包まれ、その顔もうっすらとしか見えな
い。

「いかにも、これこそアドミラシオンの竜じゃ。ふはは。芥の人間が
何百、何千と集まったところでこやつには勝てん。ゆくのだ、全て燃
やし尽くせ！」

『来ちゃったかあ……。ジエスター！ こつちに来て！ メル姐さん
！ ジエスターを担いであいつからなるべく遠く離れて！』

シユウのあまりにも緊迫した声に、私どころかジエスターも驚い
た。

一拍おいてジエスターがこちらに駆け寄り、私は彼女を担ぐ。

「逃がすものか、貴様等もこやつらを燃やした後に灰にしてくれる」

『クイーンにも逃げろって伝えて！ 急いで！』

私もジエスターも事情がわからない。

気づけば、クイーンを囲んでいた人間達の姿が消えていた。

「竜は、生かしておいてはいけない」

男はローブを取り払った。

「ひいっ」

「あ……あれっ……なに、やばいよ………」

『駄目だ、クイーンは諦めよう』

男の体からツタが伸びていて、その先にヘンテコなアイテムが巻か
れていた。

クイーンがその姿を見て短い悲鳴を上げた。

ジエスターも声がかすれ、震えが止まらなくなっている。

『逃げて！ ジエスターが巻き込まれる！』

私は男から目を逸らし、地を強く蹴った。

男がなにかをぽつりと言い、クイーンが甲高い悲鳴を上げた。

白い光、凄まじい音と揺れ、空気の振動を背中に浴びつつ、私は走

り続けた。

光が収まると、どうも現実の世界に戻っていたようだ。
低い天井に、壁がすぐ近くにある。

『さすがに今回は同情せざるを得ない。真意を暴かれ、集団リンチされ、攻撃無効化されて、とどめはエセ竜殲滅の巻き添えか』

振り返って見ると、クイーンが仰向けに倒れている。

白目を向いて、口から泡を吹き、背中をピンと反らせ痙攣している。

『これが薄い本ならむくむくおつきなんだけど、全然反応しないや。ただただかわいそうとしか』

どうしようか？

『たぶんこっちの姿を見ると取り乱すから、今のうちに帰るとしよう』
そうだな。ついでにあのカードも頂いておこう。

「待って」

ん？

「ここで帰ったら、たぶんもう話せないと思う」

それならそれで面倒がなくていい。

「ウチは、もうちよつと彼女と話がしたい」

また夢の世界で襲われるかもしれないぞ。

『それはない。自殺願望があるようには見えない』
そうだな。

恐れて話にならない可能性の方が高そうだ。

「それでも、ウチは彼女に——」

わがままな奴め。

じゃあ、せめて椅子に座らせよう。

床に転がり続けさせるのも酷というものだ。

……しばししてクイーンは目覚めた。

ジェスターと私を見ると、様子が一変し椅子から崩れ落ちるように倒れた。

「く！ 来るでない！ 来るなっ！ 来ないでっ！」
なんかすごい怯えてるぞ。

「私が悪かったから！ ……許して！ ごめんなさい！ もういや。

やめてっ。やだよお」

口調もなんかおかしい。一人称まで変わってる。

涙どころか鼻水まで流してる。

『うわあ、精神が壊れてないか。あの後も夢の中でボロクソにされたんだらうね。合掌』

散々だな。

これじゃ話にならないぞ。

『斬ってあげて。今よりは精神がまともになると思う』

己む形無しとクイーンを突き刺す。

彼女はあっさりと光に消え、椅子の足下に結晶がぽつんと残った。

結晶を回収すると、しばらくしてクイーンは復活した。

最初はぼおと顔を上げたが、直後にビクツと体を震わせ周囲を何度も見渡す。

そして、近くに立っていたジエステアの姿を見つけた。

彼女はまだびくついてるが先ほどよりもマシだ。

私は特に話すこともないので、壁に背を委ねて半分寝かけている。

「大丈夫。もう大丈夫だから」

ジエステアがクイーンに近づき、彼女の拒む手を優しく包んだ。

「落ち着いて。ここにあなたの敵はいない」

さつきまで言い争っていたのはお前じやなかったか？

しかも対決までしたのはまさしくお前だったよな。

『やってやんよ！ ウチの正義を見せてやんよお！ かかってこい

やあ！ だったつけ？』

「黙っててよ」

はいはい。

『はい』

クイーンの呼吸が徐々に収まってきた。

「……ジエステアか」

「うん、ウチだよ」

その後も互いに声をかけない。

しかし、手は離すこと無く握られたままだ。

「余は、その、なんというか、あれだ、だからな……あう」

クイーンは何か言いたいようだが、上手く言葉にできてない。

「エレティコス様の炎虎は、確かに弱いのかもしれない」

逆にジエスターが語り始めた。

「聖炎で焼いた大悪の獣レザールの群れは、ただの雑魚モンスターだったって研究もある。それに目を見張る活躍は初期だけで、それ以降、顕著な活躍はしてない。実際、目の前であっさり斬られてるところも見ちゃったし」

クイーンは最後の言葉に疑問を感じたようだが、何も言わない。

「でも、はつきりしてるのは、炎虎マルスがどんなときでもエレティコス様の側について、神様とずつと一緒に戦ってたってこと。ウチもインヒラントがああ熊だからさ。わかるんだよね。必要じゃなくても出しちゃうんだ。えつと……だからね。神様のインヒラントはやっぱ炎虎で、一番頼りにしていたんじゃないかってこと。たとえば、どれだけ弱くても神様の心の支えになっていたんだとウチは思ってるよ」
言いたいことは言ったと朗らかな笑顔を携え、ジエスターは満足げにうなづく。

「……余は間違っておらぬな。ただ——言い方は良くなかったかもしれん。済まぬ」

クイーンはすごい言いづらそうに、控えめな言葉でわびた。

「ウチもね。謝らないといけない。今から貴方の弱みにつけ込むんだから。ウチ、一つ嘘をついたんだ。虎の召喚獣のこと……。最近は、遠くにいた神様が急に近くにきた気がするよ。虹色のカード、アドミラシオンの竜の翼——」

クイーンがビクツと震えたが、ジエスターが大丈夫と声をかける。

「それと神話時代の壁画に、神様を倒したっていう冒険者を名乗る人、それになにより——その異常な人がゴミくず同然でくれたこのカード」

ジエスターは一枚の札を出して、クイーンに差し出す。

表面には何も描かれておらず、クイーンもそれを訝しんだ。

ちなみにあのカードと、切り札はアナライズとかでは解析できない

らしい。

「このカードは、ウチの憧れで、夢でもあるんだけど、一人で持つにはちよつと……かなり重い。くれた人はまったく興味がななし。誰と一緒に、欲を言えば、このカードに詳しくて、同じ思いを持つ人とカードのことを共有したかつたんだ」

札を握るクイーンの指が震えた。

「それが……余でいいのか？」

「ウチは貴方が良い。一緒に見て、背伸びも遠慮もなしでありのまま語りあいたい。意見の相違はあるかもしれない。ときには喧嘩だつてするかも。それでも、ウチは貴方を認められる。それならきつと悪い未来にはならないんじゃないかなつて。だから、どうかなクイーン——」

おそらく初めて名前を呼ばれた彼女は顔を背けた。

それはきつと否定ではない。その顔を見せるのが恥ずかしかつたのだろう。

手で目のあたりを何度か擦つて、きちんとジェスターを向き直つた。

「よかろう。荷が勝ちすぎているというのなら、余が直々に手を貸してやろう。ジェスター」

クイーンの手からカードが消えた。

白い光を発して、目の前に火炎虎が現れる。

クイーンはしばらく惚けて見つめていた。

火炎虎の周囲をぐるぐると周り、いろんな角度から観察する。

「尊い」

ようやく出てきた言葉がこれである。

「わかる」

ジェスターもただ一言で返すだけ。

「よいな」

「いいよね」

お互いが一言なのに会話が成立している。

『オタクのレベルが高すぎて知識もデータも必要なくなつて。ガ〇

パンおじさんみたいだね』

その後もずつと何か話をしていたが、一言にいろいろ込めすぎてついでいけなかった。

二人の側で堂々と立つ火炎虎の視線は、観察者達への呆れか困惑を感じるが気のせいではないだろう。

ときどきこちらを見てきて、こいつらなんとかしろよって訴えかけてきてる。

二人はまるで気づかず、楽しげにおしゃべりに興じる。

『メル姐さん。あれが友だよ』

今ここで言う必要がある、それ。

『それはさておき、ジェスターのインヒラントカードがなんなのかわかった』

そうなの？

『あれは諫言だね』

珍しく比喻も何も無く単刀直入に結論を言ったな。

『実はカードを通してジェスターの本音を言ってるだけじゃないのかと思ってただけけど、違うっではつきりわかった。明らかに知り得ないことを喋ってたからね。あれは対象が上位か目上じゃないと効果がない。状況を整えて使えば切り札になり得る。ただし使った後のフオローも超重要だ。今回が成功例だけど、ここまで整えるってのがあまりにも厳しすぎる』

つまり？

『まず使うべきじゃない。相手を不愉快にさせるだけ。それに、常に相手に効果が出るという訳でもない』

怒らない辛抱強い奴もいるってことだな。

『それもあるし、別の意味もある。あの諫言は、相手じゃなくて自分や周囲に跳ね返る可能性があるってこと。取り扱いは今以上に慎重を期さなきゃ駄目だね』

なんで相手以外に跳ね返るのか意味がわからない。

まあ、今回は成功したんだからいいだろ。

夜もふけてきたが、二人は飽きもせず、ずっと話している。楽しげに語り合う二人を遠くから眺めていて、ふと漠然と思ったのだ。

別に今に思い始めた訳ではないのだが、特に異世界ではたびたびその思いがふりかかる。

ここに——私の居場所はない、と。

『わかるっ』

瞬時に合いの手を入れてくるが、内容は腹立たしい。

たった一言、しかも馬鹿にしたような口調だ。

——だが、わずかに安心したし、おそらくこいつは本当にわかっている。

それが余計に業腹なのだ。

蛇足26話 「選ばれない未来 後編」

4. 儀礼派の白痴 キング

さて、クイーンを去りキングにたどり着いた。私の目的はダンジョンだが、ジエスターの目的はさにあらず。エレティコスの子遺物をキングが持っているのだからそれを見せてもらいに行くらしい。

あまり気乗りしていなかったが、クイーンに要求に負けてしまった。

気持ち悪い翼を貸してやるから調べてきてくれとのことだ。

でも、代わりにこいつは火炎虎を貸している。

調べにいくだけ損じゃないか。

『わかってあげなよ。こいつらは信者同士で聖典を交換し合っていて、お互いの理解を深めようとしているの。クイーンにその気持ちが嬉しくて、ジエスターは思わずオツケーしちゃったんだ』

「ウチの考えを分析しないでよっ」

『別に分析ってほどのものじゃないでしょ……』

久々に喋ったが、なんだか落ち込み気味だ。

どうしたんだ。キングに来てからずっとそんな感じだ。

ここが生まれ故郷なんじゃないのか？

「ここだけとお……。なんで落ち込んでるか、分析してみなよ」

『分析ねえ。——ジエスターの育ちは良い。親族にこの国で身分の高い人がいる。両親……母親じゃないな、早くに亡くしてるね。そうすると父親だ。ふむ、仲は良くなかないようだね。喧嘩中かな……、いや勘当されてる。なるほど、王の側近か。王の近くに行けば必然として会うことになる。それが嫌なんだね』

途中途中でジエスターの反応を見ながら、シユウがジエスターの家庭環境を解説していく。

彼女の驚く顔を見るに言ったことは正しいようだ。

「な、なんでわかるの？ どういうこと？」

こいつの得意技だぞ。

なんだっけ？ プロフィール？

『合ってるようで合っていない。プロフィール。さすがにこれだけ一緒にいると、言動や反応の観察からだいたい事情は読み取れるようになる』

ジェスターは口を震わせる。

なかなか言葉が出てこないようだ。

「シユウ、キモい」

ようやく出てきた言葉がこれだけだった。

ほんとそれ。でも、かなり手心を加えていると思うぞ。

「これで？」

本気で解説し出すと、とことん追い詰めるからな。

本当はもつといういろいとわかってるんだろ。

『父親がどんな人で、なんで父親と喧嘩してるのかや、価値観の相違もだいたいわかる。それに父親をどう思ってるのか、なぜ嫌いなのかもね。確認してみようか？』

「分析禁止！ 言ったら絶交だから」

本気で怒っている様子だ。口調が軽くない。

私もジツと見てきた。聞くなよということだろう。

はいはいと軽くうなずいておく、他人の家庭事情に興味はない。

『自分も聞かれたくないからでしょ。家族を顧みず、ひたすらダンジョン行ってるもんね』

うるせえなあ

で、なんでいきなりあんなことを？

ジェスターは不機嫌な様子で先に行ったからもう言えるだろ。

『牽制だよ。クイーンと仲良くなった後から、特殊カードへの抵抗がますますなくなってきた。使ったことで、仲良くなるきっかけを手に入れたわけだからね』

良いことじゃないか？

使うくらいなら死ぬくらいだったんだぞ。

『今の状態なら、前の状態の方がいくらいだ。あのカードはそのくらいの抵抗があつて然るべきの効果だよ』

大げさな。

『前に、あの効果は相手だけじゃなく、自分や周囲に跳ね返るって話たでしょ。俺がさつきジエスターの心を軽く暴いた。それだけであんなだけ機嫌が悪くなる。しかも、さつきの話でメル姐さんの家庭事情まで飛び火した。あのカードはそれ以上のカードなの。安易に使うのを戒める必要があった』
なるほど。

蹴ってやろうと思ったが、信じられないほど真面目な話だからやめとくことにする。

『だが、あえて言おう。牽制はしたけど、おそらく、あいつはあのカードを父親に使うことになる。その結果、父親以上のダメージが自分に返る』

駄目じゃん。

いや、こんなことを話すって事は手があるんだろ。

『大きく三つ。一つ目は、あのカード以外の選択肢を与えること。二つ目は、使った後のリカバーに注力すること』

最初を選択肢つてやつは、要するにあれ以外の切り札つてことだよな。

『翼が該当するかも』

翼つてあの動くやつ？

着けても意味もないでしょ。

『まだちゃんとした効果を引き出せてない。青き炎だか光とやらが出る……はず。出し方はわからんけど』

うーん。

今後の活躍に期待だな。

ヌルとかいうのからもらった虹色のカードはどうだ。

たまに手札に出てるだろ。靄がかかっているからすぐにわかる。

ジエスターもよく使ってる。虹色に光っているから何か起きてるんだろ。

『あれは現実だと虹色に光るだけで効果がない。強いて言えば、神話にある虹色の光を見て、ジエスターが喜ぶだけ。さつさとデッキから

外すべき』

それじゃあ駄目だなあ。

他に何か良いものはないのか？

『エレティコス の切り札をあげてしまってもいいかもしれない』

……本気か？

あれは使っちゃいけない気配を感じるぞ。

『予想どおりなら、使い手に大きく依存する効果だよ。ジェスターなら……やっぱりまだ早いな。ごめん、今のなしで』

途中で意見が変わってしまった。いつになったら早くなくなるんだろうか。

そもそもどんな効果だと予想してるんだ。

『結果を強制する力かな。下手に使うと世界が消し飛ぶ』

お前……。

そんな札をジェスターに渡そうとしたの？

『よほど下手に使わないとそんなことにはならないよ。戦闘で使ったら勝負に勝つだけ。過程が問題になるんだ。今のジェスターはまだ駄目。カードに使われる、まだ使えない』

——チートに使われたいのか、チートを使いたいのか、どっちなの。

冒険初期にお前が言ってたことだよな。

『へえ、覚えてたんだ』

印象的な台詞だったからな。

どうせお前がいた世界から持ってきた言葉だろ。

『元はチートじゃなくて機械だった。ここだとカード。どっちも本質は同じ。制御ができてるかどうか。今のジェスターにはあの札を制御できない。振り回される』

どうやったら制御できるんだ、世界が崩壊するかもしれないという札を。

……いや、いや。恐ろしいから、聞きたくもない。

とにかくまだ渡すべきじゃないな。

ダンジョンで手に入れた他のカードとかはどうだ。

今までかなりクリアしてきたぞ。

『駄目だね。そこそこ強いのもあるけど、ジェスターのデッキにはそぐわない。あの翼に期待するか、デッキを根本から組み替えるか。組み替えるなら切り札になりそうなものは揃ってきてる。まだ中身が足りないけど現時点でも十分強いはず』

かなり馴染んできてるからデッキの大きな変更はちよつと厳しいだろ。

とりあえず翼の様子見ということにしよう。

それで二つ目の、もしも使った場合のリカバーは？

『さあ？ 少なくとも俺はしない』

ええ。

そこまで言つといて何もしないって。

『自業自得。牽制はしたし、後でそれとなく言う。使う場面になったら声だつてかける。それでも使うなら、俺からかける言葉はもう何もない。身の安全は保証するけど、心のケアまでは——。良い薬になるでしょう』

こいつらしい考え方だった。私にもそうしている。

普段が必要以上にうるさいから、何も言われなとかえつて効くんだよな。

……最初に三つって言わなかったっけ？

『おおっ！ 数が数えられるようになったか！』

馬鹿にするなよ。

五より少ないなら余裕だ。

『ん、んんっ？ まあいいや。三つ目はそもそも父親と戦わないようにすること』

それが一番じゃないか。

それなら問題は何も起こらないだろ。

『つて思うじゃん？』

何なの？

何か起きるの？

『おそろく戦いは避けられないし、戦わないならそれはそれで問題になると思う。戦いを強いられているんだ』

どうしようもないじゃねえか。

とりあえず翼のカードを見直してみよう。

そろそろ何か変化があるかもしれない。

いつものようにダンジョンを攻略していく。

気分は良いが、やや物足りなさは残る。

この世界に来てから、なんだろう、いまいちダンジョンを堪能できてない。

確かにダンジョン攻略はとても良い。面倒な世界から解放された気分だ。だが、この気持ちはなんだろう？

『春に？』

何？ 春？

『いや、なんでもない。目に見えないダンジョンエネルギーが足の裏から伝播してるのは十分わかった』

そうなんだよ。でも、満たされないんだ。

あと一歩こう、ぐあああつて叫びたくなるような気分にならないんだよな。

『真面目な話に戻ろう。これ以上は著作権に触れる』

最初から真面目な話だっただろ。

だいたい猪裂剣ってどんな剣なんだ。

『この世界のダンジョンは、元の世界のダンジョンで言うところの若い。歴史が浅いと言うのかな。簡単なものが多い』

そうだな。

難しいって言われてたダンジョンもかなりあっさりクリアできる。

それに、未攻略ダンジョンもそこまでじゃない。理不尽さが足りないというか。

現に、竜や邪神様のスキルを攻略で使ったことがない気がする。

『良いところに気づいたね。やっと気づいたと言ってやりたいところだけど、それは言わないでおこう』

もろに言ってるじゃん。

『ダンジョンの難易度——とりわけ自然的なダンジョンの格は、歴史

の深さに比例する部分が大きい。この世界のダンジョンの歴史を見ると、古くても千年に届かない。元の世界は万年スケールだってあるのにね』

そんなものなのか？

もつと古いのが多いと思つてた。

『史実と照合もしたから間違いない。この世界は千年ほど前に何かがあった。それが何かを考えた。答えはあつさりすぎるほど簡単にわかつたよ。エレティコス神話だ。奴が神扱いされた時期と一致する』
つまり、どういうことだ？

『あいつが元の世界にいた理由は、この世界にダンジョンを輸入するためだ。あいつ自身が商社で、現地へ赴きダンジョン——より正しく言うならダンジョンの法則性をこの世界に流した』

そんなことができるのか？

『できる。あんな見事な転移魔方陣を描けるんだ。ダンジョンの法則性を異世界に転移させることも不可能じゃない。実際に、この世界のダンジョンは元の世界のダンジョンに似すぎてる。カード基盤の世界らしさがダンジョンに現れてない。正直に言わせてもらえば、歪だ』

そこはよくわからんな。

とりあえず私にとつては嬉しい話だ。

歪だろうとダンジョンはダンジョンに違いない。

『そうだろうね、ほぼ同じだから。それに認めてもいい。確かにあいつは、今のこの世界の実質的な神だ。でも、神が常に世のため人のために行動をしているとは限らない。そう、まさに考えるべき点はこのなんだ。ダンジョンを送り込む方法でも、あいつが現人神だったかどうかなんかじゃない——まず知るべきは、奴がこの世界にダンジョンを送り込んでいる目的だ。それに奴は自分を倒した相手をこの世界に転移させようともしていた。この目的も、前の目的と地続きのはず』

シユウは再び考え込んだ。

どうも難しい問題みたいだね。私はダンジョンを楽しもう。

ジエスターがようやく機嫌を戻し、モンスターを倒したよーと嬉しげに報告してくる。

近くにいた熊は翼を生やしている。

翼は上手に動かせるようになったが、動かしても特に効果はない。「どう、すごいっしょ。めっちゃ動かせるようになったよ。かつこいっしょー」

ああ、すごいな。動きすぎてて気持ち悪い。

もしかして相手の気持ちも萎えさせる効果なんじゃないのか。

「そんなことないよ！ 元気が沸いてくるよ！」
どうだろう。

少なくとも私には沸かない。

『俺もちよつと……』

多数決で二対一。これはちよつと厳しい。

おっと、熊がジエスターの側で手を挙げているから同票か。

火炎虎はクイーンが極秘裏に研究をしている。

ちなみに彼女は自分で火炎虎を倒して、カード化にまで成功した。

今のところ、外部に火炎虎の公開するつもりはないようだ。

戦争になるのはやはり回避したいのだろう。

『隠せば隠すほど情報は漏れる。じきに他の国も知るでしょうな。もう知ってるかもしれない』

じゃあ戦争になるのか。

他の三方国がクイーンを潰しにかかる。

『最初はそうだと思ってたんだけど、見て回った感じだとそうでもない。少なくともジャックは「ふーん」で済ませそう。それにクイーンはエレティコスのおタクだけど、彼への教えへの信仰は薄い。そもそも教えがないよね。キングは狙うかも。エースも狙ってるだろうけど、キングとは狙う理由が違う。彼らは同盟を組めないだろう』

キングは私の世界と似ている気がする。

兵士と庶民の違いが明確だ。役割がしっかりしてるというか。

『儀礼派の白痴』ね。重要なのは形式で、カードを扱うのなら形式に

則って扱うべしか』

戦いの中にもルールありって連中だな。

だいたいそういうことを言う輩に限って、他人にルールを押しつけて自分のルールを守らない。

『いや、最低限のルールは守るけど、ルール外での行動が下劣になるってのが正しい』

欺瞞と策略の国か。

あまり好みじゃないなあ。

そのキングがなんで火炎虎を狙うんだ？

『国としては一番わかりやすい。この儀礼派は役割が明確だ。王がいて、それを認めるその他大勢。王が神のカードを手に入れば、王の正統性がよりはつきりと認められる』

ご大層な話だね。

エースとはどう違うの？

『聞いた感じだと彼らは、人の世は人の手によって整備・管理されるべきって考えてる。神が入りこむ余地はせいぜい過去にそんなのがいたらしいってくらいにシンボル程度。そのトップがエース、「象徴主義の監視者」だね。面白い奴らだ』

そいつらがなんで札を狙うんだ？

神を当てにしない連中だろ。要らないんじゃない？

『神の札が些末に過ぎないことを証明するためだ。皮肉なことに、彼らは自らの主義を認めさせるために神の札を必要とする。ある意味で一番神に執着してる、異世界とのパスを監視するくらいだし。哀れだねえ』

哀れと言いつつも笑いが漏れている。性格の悪い笑いだ。

『疑問は残る。異世界のパスを監視する理由だ。普通はしない。聞いてみたいなあ』

エース達を気に入ってるようだが、それは彼らにとって喜ぶことではあるまい。

キングでのダンジョン攻略も順調で、着々とクリアを重ねている。

今は王都付近にある上級並のダンジョンを攻略中だ。

相変わらず熊の翼は発動しないが、妨害カードも増えてきて、かなり有利な戦闘ができるようになってきていた。

『相手を弱めて自分を強化する。スタンダードだけどシンプルに強い。まだ、じゃっかんメル姐さんを意識した戦いがあるなあ』

具体的にはどんなところがそうなんだ？

『全部の強化と弱体を使った後は力押し。途中は考えてるんだけど、終盤で思考が止まるから長期戦に弱い。耐えきった相手にはまず勝てない。ダンジョンだと途中でギブアップするタイプ』

なるほどな。たしかに私っばい。

それでも上級クラスで、そこそここのところはいけてるじゃないか。

今も上級のモンスターをまた一体撃破したところだ。

『中の上くらいにはなってるからね』

ちなみにジャックやクイーンはどれくらい？

『上の中』

その差はどれくらいのものなんだ？

『まず中の上と上の下では、並の工夫じゃ埋まらない差がある。異常な才能かカードのどっちかが必須。今のジェスターにはどっちもない。上の中ともなると、才能とカードの両方に恵まれた状態。努力じゃどうにも覆らない。つまり、ジェスターは行き詰まってる。今のデツキだと新たに異常なカードを入れるか、翼の真の力を出せない限り上に行けない。ジャックやクイーンには間違いなく手が届かない』

あいつらは異常だろ。
私の全力蹴りでも死なないし、詠唱なしでいろんな魔法を使ってくる。

まともに戦って勝てる気がしない。ジェスターもせめて上の下にいけるといいんだがな。

『デツキの組み替えかなあ』

どんな感じのデツキを考えてるんだ？

『まず道中用と決戦用で分ける。道中は今のデツキを長期戦用に変えるだけ。新たな決戦用デツキは格上に対して使う。ジャックやク

イーン並と戦うことを想定したデツキ。ボス戦とも言えるね』
ふーむ。

決戦用は今のデツキをより短期決戦向けに変えるってことか？

『違う。根本から変える。短期決戦仕様だ』

そんなデツキあり得るのか？

『あるけど、まだ揃ってない』

揃えると上の下に行くのか？

『届くね。もしくはそれ以上にも行くかも。……ただ、今よりは間違
いなく強いけど、こんなデツキが果たして必要なのかと問われれば、
否だね。相手が限られる。翼が真の力を発揮するならそれに越した
ことは無い』

そんなものか。

そうだ。エレティコスはどうくらいだ？

『切り札なしなら、限りなく上の中に近い上の下、カードの使い方と本
人の使い方が上手いからね』

実際に戦った感覚の割に評価は低いな。

上の上くらいには行ってると思ってた。

『それはない。上の上なら瞬殺されてる。あれはおそらく対人デツ
キ。最初に戦ったのはお遊びデツキ。どちらもモンスターを相手に
するときのデツキじゃない』

……じゃあ、対モンスター用ならどうなんだ？

『上の中、いや上の上にさえ届くかもしれない。そんなのと戦っちゃ
いけない。超越してる。格ゲーで格ゲーする気のない狂上位キャラ
というかな。常に無敵状態で戦う必要があるレベル。でも大丈夫、メ
ル姐さんなら戦いにならず、逃げが発動するだろうから』

ちよつと想像がつかないんだけど。

『想像を絶する次元だからね。エレティコスは英雄らしいけど、戦つ
た感じだと修羅だね』

修羅って何？

『戦うこと以外を捨てた奴ら。奴は強さを求めすぎてた。勝利への異
常な執着も感じる。あの札を切り札にして、火炎虎をゴミと認識した

のもそのあたりからきてるのかも』

話しているとジエスターが助けを求めてきた。

襲ってきたモンスターをシュウでなぎ払っていく。

「……、強すぎない!? シュウでも一撃で倒せてないのがあるよ」
上級らしいからな。

ここを普通にクリアできるレベルが、ジャックやクイーンだ。
そうだろう？

『そうなるね』

「……ウチ、もっかい挑んでくる」

どうもクイーンとの戦闘で手を抜かれていたことを知り、必死で追いつこうとしている。

うおおりヤーと声をあげて、モンスターと戦っているのだが、戦っているのは熊でジエスターはほぼ見ているだけだ。

『迷走してる。とりあえず相談が来てから応じよう』

がんばりではどうしようもない壁にぶつかっていることをまだ本人は知らない。

上級ダンジョンをクリア後、いつもの反省会だ。

「ウチ、強くなってるのかなあ」

いきなり弱音が始まった。

強くはなってるが、行き詰まってるな。

「やっぱりそう？ なんだらう。どうやったらここからさらに強くなれるのかなあ」

おい。さつそく相談が来たぞ。

ズバリ応えてやれよ。

『現状ではこれ以上、劇的に強くならない』

ズバリ言いすぎじゃないか。

「……もう、強くなれないの?」

『実戦経験を積んで、負けないようにする段階に入った』

ジエスターは首をひねっている。

私もよくわからない。

『今のジェスターは調子が良いときと悪いときの差が激しい。強さの下振れを減らす。安定した強さを目指すってことだね』

それはつまり――、

「もうこれ以上は上を目指せないってこと？ クイーンの本気と戦えるようには？」

『まず無理』

これは先ほど聞いていたのでわかる。

次の段階へ進むには、異常なカードか才能が必要らしい。

『ジェスターに異常な才能はない。それでも翼のカードの本領が発揮できれば強くはなる。でも、おそらくあのカードを使っても及ばないだろう』

きつい言葉だった。

「ウチ、もつと強くなりたい」

『なんで？ もう強さは満ち足りてると思うよ。ジャックやクイーン級の強さがなぜ必要なの？』

ダンジョン攻略のためじゃないの？

「ウチ、悔しいよ」

そうだな。わかるぞ。

力が足りず、上位のダンジョンに挑めない悔しさは私も知っている。

「ダンジョンじゃなくて――」

え？

ダンジョンじゃないの？

じゃあわからないな。

『仲良くなったクイーンに近づきたい。彼女と一緒に話すだけじゃなくて、隣で一緒に戦えるようになりたい』

「……うん。シュウ、キモい」

『それは俺にとって褒め言葉だ。でも、クイーンはそんなこと求めるのかな？ 彼女は、自分と一緒に話してくれて、意見が違ってても彼女自身を認めてくれるジェスターを求めている。ジェスターの強さは求めてない』

わかってるとジエスターは口に出す。

「それでも、ウチは——」

「シーカーのメル！ 道化師のジエスター！ いるか！」

ジエスターの言葉は男の大声で消されてしまった。

店の入口を見ると、数人の男が立っている。服装はこの国の兵士だ。

札を使って、治安維持だのかんだのやっている奴らだった。

「そこにいたか」

兵士たちはジエスターの姿を見つけ、席の近くにやってきた。

「二人ともそろっているな。王宮へ来るようにとのお達しだ。来い」
今、大切な話の最中だから後にしてくれ。

それに飯の途中だ。

「飯？ そんなものはどうでも良い。早くしろ！」

怒鳴って私たちに席を立つよう促す。

おい、良く聞けよ。一度だけしか言わないからな。

後にしろ。話が終わって、飯を食うまで外で待ってろ。

さもないと——、

「さもないと何だ！ 儀礼に則り警告するぞ！ これ以上は武力を持って対応する！ 札を使い、貴様等を押さえつけて連行だ！ よいな！」

……そう。

よくわかった。そうしてくれ。できるならな。

ちなみにお達しは誰からだ？

「パテンソン様だ」

兵士は得意げな顔で告げた。

ジエスターの肩がびくりと跳ねる。

知ってるのか？

『父親でしょう』

あ、そう。

じゃあ、こいつらがいなくても顔はわかるし、どこにいるかもだいたいわかるな。別にわからなくても根こそぎ探せばいい。

ジェスター。

反省会は後だ。もう私は我慢ならん。

この世界の食事中断野郎には、一発ぶちかまさないともう気が済まないのだ。

『父親までの案内をよろしく。とりま王宮でいい?』

ジェスターは流れに任せ小さく頷いた。

よし。王宮方向だな。

『それと、今からメル姐さんが暴れるから、見ておくと良い。こんな力が本当に必要かってね』

「えっ?」

私は屈み、先ほどから怒鳴り散らしていた兵士の足を掴む。

「おい、何を——」

私は兵士の足をそのまま持ち上げた。兵士は声を上げるが知ったことじゃない。

他の兵士がカードを使うそぶりを見せたので、掴んだ男を武器にして払いのける。

周りの三人はぶつかって壁まで飛んでいった。

『武器としてはなかなかいいね。嫉妬してしまいそうだ』

「今の音は何だ!」

外から兵士が中に入ってくるので、彼らに向けて手に入れたばかりの武器を投げつけた。

武器は声をあげ勢いよく飛んでいき、数人のお仲間を巻き込んだ。残った奴もまた武器にして、全ての兵士を使い捨てた。

席に戻り、残っていたスープを飲み込み、食べかけのパンを掴む。

ジェスター、早く喰え。私は行くぞ。留守番してるか。

「……ウチも行く!」

ジェスターも飯をかき込み、席を立った。

「ねえ、シユウ。ウチもあんな力が欲しい」

『今のは悪い例だから、もうちよつと考え直してみて』

何ぶつぶつ言ってるんだ。

怒り心頭、怒髪天、青筋、鶏冠、腸、堪忍袋、なんでもいいがとに

かく行くぞ。

『メルは激怒した。メルには何にもわからぬ。メルは異世界の冒険者である。だが必ず、これだけはやらねばと決意したのである』

王宮の飯中断野郎をぶっ潰す！

大通りをひたすらまっすぐ堂々と突き進んでいく。

王宮の建物自体は低い、高台の上にあるので位置はわかりやすい。

「止まれ！ それ以上進めば、儀礼に則りカードによる鎮圧を——」
道の真ん中でふぎけたことを抜かす兵士めがけ、兵士を投げつけた。

普段なら石を使うんだがな。素晴らしい。次から次へと投擲武器ができあがる。

この方法は初めてだが、いいぞ、実にしつくりくる。元の世界でも使っていくことにしよう。

『マジかよ……。野蛮人スキルが追加解放されたぞ。解放条件がおかしいだろ』

一人投げれば、回転して周囲の兵士をなぎ払ってくれる。
攻撃札も掴んだ兵士を盾にすればまるで問題ない。

相手もひるんでくれるし、一石二鳥だ。

武器にもなるし三鳥か。

高台前には大きな門があった。

門の横にある城壁上から複数の兵士が札を構えてこっちに向いている。

「止まれ！ 化け物め！」

後ろからも兵士が迫ってきていた。

別に大きな門だろうが関係ない。飛び越えてもいいし、壁を歩いてでも越えられる。

『壊してしまえば？ 化け物らしさを見せてあげなよ』

アレのことか。

まあ、驚かせるには最高だろうな。

「アレって何？」

『邪神様。黒竜は見せたけどごっちはまだだね。見とくと良い』
別に見なくてもいいよ。

「止まらないぞー！ もう良い！ 放てー！」

周囲からの攻撃が始まるが無駄だ。

シユウが黒く染まり始めている。

全ての攻撃は一点に集まり消えた。

「何だ！ 今のは何だ！」

「見ろ！ あの姿を！ モンスターだ！」

失礼な奴らだが、もう知ったことじゃねえ。

徹底的にやってやる。

「なにそれ！ かっこいい！ めっちゃクール！」

『これが？』

どうも周囲の反応を聞くに邪神様の姿になっているらしい。

それならと、門の目の前に立って、シユウを門の外装に突きつける。

キンツと硬い音だけが周囲に響く。兵士やジェスターも何が始ま

るのかと静観に移った。

見せてやる。

邪神様結晶――

『@劈開』

ピキリと鋭い音が響いた。

一瞬で門に小さく亀裂が入り、もう一瞬で門全体に亀裂が広がった。
た。

割れるのではなく塵のように崩れ落ちていき、上から見下ろしていた兵士達が落ちてくる。

「やっぱり、ウチもこういうのが欲しい」

『めっ、こんなの参考にしちゃいけません』

尻餅をついている兵士の横を通る。

彼らは悲鳴を上げて、立ち上がることもできず尻を引きずって逃げようとする。

『王宮と言うより要塞だな』

門を越えればさらにその先にも門がある。

さらに道は上へ上へと続いており、さすがに全て破壊するの面倒だ。

ここは壁伝いに歩いて越えていくことにした。

全ての門を通り過ぎ、高台を恐怖で包んだら、ようやく王宮だ。

兵士が陣を為して待ち構えていたので、こちらも陣に向けて兵士を投げつけていく。

一人投げれば一部が崩れ、二人投げれば穴ができる。その穴に突っ込みさらに穴を広げていけば陣は消える。

「ここはすでに宮闕の内。儀礼の禁忌となる場所だ。痴れ者の立ち入るところではない」

奥へ進むと、ずいぶんと立派な銀鎧に包まれた兵士が待ち構えていた。

手に持っていた武器を、今まで同様に投げつける。

「ふん」

『上手い』

投げた勢いを殺しつつ、武器をキャッチして、そっと地面に下ろす。

鎧男はゆっくりと私に歩み寄り、私も鎧男へ歩み寄る。

鎧男の腹ど真ん中めがけて蹴りを入れる。

何か大きな金属の塊を蹴ったような感触が足に伝わった。

「ぬうー！」

『おおっ。防いだぞ』

男は足を地面に擦らせ後退したが、すぐに持ち直した。

手甲からカードを私に見せつける。数枚消えたのが見えた。

「恐ろしいほどの脚力よ。人ではあるまい」

人ですけど。

面倒になったのでシウウを取り出す。

どうせなら一気に燃やし尽くしてしまおう。

『待った。ゲロゴンブレスはなし。安易に歴史的建造物を破壊しちや

駄目。状態異常を付けなければいい。ほら、足下』

すぐに止められてしまった。

言われたとおり、近くに転がっていた兵士を軽く斬りつけ、状態異常を付与する。

そのまま鎧男へ蹴り上げた。

「無だ、ぐっあ」

先ほどのようにキャッチはできなかつた。

麻痺か？

『そう』

衛士長がやられた、という声があちらこちらから聞こえてくる。

どうも最後の砦だったようだ。

どこにいるんだ。飯中断野郎は？

『ん？ 右から何か来たよ。……何だこれ』

……なんだあれ？

右を見て、さすがの私も戸惑った。

いい歳をしたひげ面のおっさんが、上から下まで真っ赤な衣装を着

てこちらを見ている。

服装がジエスターに似ている。

真っ赤な帽子は角が三つで上と左右にぴよこりと伸びる。

ぴっちりとした服に脚。どちらも赤一色でさらに靴まで真っ赤だ。

服はあまりにもふざけているのに、顔がいたって真面目なのが不気味すぎる。

なんだろう。

服のセンスが誰かに似ている。

ジエスターを見つつ、謎の赤男を指さす。

顔を逸らしたから間違いない。

道化師の親は道化師だった。

『見た目はアレだけど、できるな』

赤い変態は、カードを一枚使用した。

生じた白い光と、男の服とのコントラストがすごい。

男の前に、変な召喚獣が現れた。

人型で、やや太った体型でぼさぼさの赤髪に、顔には白と赤のメイク、赤くて丸い着け鼻。

服は紫、緑、赤、黄色と他にも様々な色が塗られており、首にはひらひらの飾りが付いている。

両手で瓶に、短剣、玉、金槌と様々なものをジャグリングしている。

『クラウンか。全力で斬りに行こう。あれは何か不気味だ』

同感。

私は足を踏み込み、召喚獣との距離を詰め、斬りつけた。

召喚獣は光に消えず、すぐに起き上がった。斬られたところがすぐに修復されていく。

太り気味の召喚獣は馬鹿にするような笑い声を上げた。

『ふむ、影か。面倒だな……。ステルスで姿を消すから、変態を直接攻撃して』

了解。

実行はすぐにされた。

召喚獣と後ろの変態男が私の姿を見失った。

彼らの脇を通って後ろに回り、ステルス解除で変態男の背を蹴りつけた。

変態はエビ反りになって飛んでいき、クラウンを巻き込み、一緒に地面に転がっていき光に消えた。

これで飯中断野郎を蹴りつけるという目的は達成された。

「あれ？ パテンソンやられちゃったの？」

通路の先から若い男が出てくる。

こいつも服装が独特だった。

僧が着るような法衣を一枚羽織っており、下も長いスカートだ。

『あれは着物と袴』

呼び方なんてどうでもいい。

「すごいね。一人で乗り込んで来るなんて」

二人だ。後ろにいる。

ジェスターが顔を見せてきた。

「あれ？ ジェスターちゃん？ おーい」

親しげな様子で声をかける。

歳の頃合いも近いし、知り合いなのだろう。

「おやあ、クイーンやジャックあたりが攻めてきたと思ってたんだけど……。謀反って様子でもないね……。もしかして、ただの親子喧嘩だったりするのかな？」

違う。

ジェスターの父が、兵をよこして私の飯を中断したからちよつと蹴りを入れにきたただけだ。

「……それだけ？」

そうだな。

私はもう帰る。

「僕には何かしないの？」

何でお前にしないといけないんだよ。

そもそもお前は誰だ？

「ジェスターちゃんから聞いてないの？ キングだよ。『儀礼派の白痴』って呼んでくれてもいい」

……お前がそうなの？

全然聞いてなかった。もつと渋いおじさんかと。

「いやあ、まだ髭も満足に伸びなくてね」

確かに若い。

何だ、ジャックやクイーンも若かったが、若くないとトップはできない決まりでもあったのか？

「彼らを知ってるんだ。とにかく若さはまったくの偶然。儀礼派は完全世襲制でね。親父が早々にくたばったから僕がやってるだけさ」

そうなのか。

「あれ、パテンソンは死んでないね。消えてるだけなのかな」

まだ復活してないはずだが、キングはふと気づいたようにそんなことを言う。

そのうち復活する。誰も死んでないはずだ。

目的も果たしたから、私たちは帰る。

「待ちなよ。せつかく来たんだ。お茶でも飲んでいくと良い。特にジェスターちゃんは積もる話もあるだろう」

キングは、近くの侍従にお茶を五つ持ってきてと伝え、私たちを奥

へと案内した。

なんだか足取りが楽しそうに見える。

「そりゃ楽しいさ。ずっとここに詰められてたからね。退屈で死にそうだったんだ。君たちは命の恩人と言ってもいいね」

キングはふざけた調子で楽しげに話す。スキップまで出ているほどだ。

一方、ジェスターは私の後ろを足取り重く付いてきている。

謁見の間どころか、庭にテーブルを出させてそこでお茶を飲んでい

る。
私に、ジェスター、キング、ジェスター父、鎧のおっさんの五人だ。周囲の人々は、あまりにもうるさかったのでキングが追い払ってしまった。

ジェスターとその父は互いに黙っているし、鎧男は鎧がガチャガチャうるさい。

楽しそうなのはキングだけで、私もあまり楽しくない。

「パテンソン。家出娘が二年ぶりにカムバックだろ。何か話すことがあるんじゃないの」

「王よ。これとはもう親子の縁を切っております」

ジェスター父はいたって真剣に返答した。

服装と召喚獣はともかく、それ以外はすごい真面目だ。

「なあんで勘当しちやっただっけ？」

「この衣装と召喚獣の意見相違です」

淡々と答える。

「衣装とか好きにすればいいじゃないか」

「そうはまいません。この衣装はエレティコス神による創世以来の伝統的装束。王宮道化師の歴史なのです。それをこれは——」

父親がジェスターを睨む。

睨まれた方は機嫌悪く目を背けている。

「僕はジェスターちゃんの衣装も良いと思うけどねえ」

そうかあ？

どっちもどっちだろ。

「何を言うか」

「何言ってるの」

変な服装の二人に咎められてしまった。

「外の世界はどうだった?」

漠然とした質問だな。

「楽しかったです。この国だけでは見られないこともたくさん見られましたし、多くの人と知り合うことができました」

「それはジェスターちゃんの宝だ。大切にね」

……なんかすごい良い奴じゃないか。

頭の硬い、偉そうぶってるおっさんを予想していただけにギャップがすごい。

「父はそうだったよ。僕は、どうもそういうのは苦手ですね。馬鹿らしいと思わない? 儀礼とか礼節ってさ」

「王」

「キング様」

二人の家臣が両側から王を諫めた。

キングはため息を吐くだけだ。

「アホくさい今までのやり方をやめていったら、『儀礼派の白痴』なんてあだ名で呼んでくれるようになった。ありがたいものだよ」

キングの嫌味に二人の家臣がまたしても睨みを利かせた。

「それより話はまだ途中だろ、続けてくれよ。ジェスターちゃんが何を見て、何を感じたか、どうしてここにたどり着いたのかをね。おい、お茶請けがなくなつたよ。お茶もおかわり持つてきて」

茶会が始まり、ジェスターは話をしていく。

私も知らないころの旅話から始まり、次第に私の知っている話に移った。

もちろんあまりにも世界の核心を突く部分は、意図的に隠して話を続けていった。

「パテンソン。君の娘は立派に育っているぞ。誇りに思うべきじゃないか」

「娘ではありません。すでに勘当しております」

さらっと流されてしまった。

「それで、ここに戻ってきたのはエレティコス神の聖遺物を見るためだったね」

「……はい。見てみたいです」

ジェスターが少しためらった後に、思いを告げる。

「どうしても見たい？」

「どうしても見たいです」

キングとジェスターが見つめ合う。

今更だけど、ジェスターに敬語は似合わないよな。

「いいよ。持ってきて」

キングはあつさり許可した。

「王！ それはなりません！」

「キング様！ 聖遺物をこのような輩に易々と見せては」

許可したキングを二人が諫めていく。

『こんなコントがあつたな』

それでどうなんだ、見せてくれるのかくれないのか。

「僕は見せてもいいんだけどね」

「王」

「キング様」

キングは両手を挙げて、「斯くのように」と示す。

「儀礼派らしく、儀礼に則り決闘で決めよう。ジェスターちゃんと二人が戦えばいい。ジェスターちゃんが勝ったら見せる。負けたらおとなしく諦めてもらう。何度でも挑戦して良いよ。退屈しないからね」

付いてきて、とキングは席を立つ。

スタスタと歩いていくが、重臣の二人は頭を抱えていた。

一方のジェスターは、決意に満ちた顔をしている。やる気満々だ。

『まあ、そうなるよな』

本人がやる気なら私に止めることはできまい。

私も好きにした。彼女も好きにすれば良い。フォローはしよう。

場所は室内の闘技場に移った。

見物客は少ない。

おそらく私がぶち破ってきた門や、道中の現状把握と修復作業でここにいる余裕がない。

「じゃあ、審判は僕がしよう。最初はオーギュストだ。言わなくてもわかってると思うが、僕の裁定には従うこと」

銀の鎧男が闘技場の中心に出てきた。

『あの鎧男、名前があつたのか』

そりやあるだろ。

別にそこ驚くところじゃないでしょ。

ジェスターも闘技場の中心へと進んで行く。

審判はキングって言ってたが、巻き込まれるんじゃないか。

『問題ない。ここにいる中だと、メル姐さんを除けば彼が一番強い』

……ほんとに？

見た目だけで判断すると、ひ弱そうだぞ。

それに隙だらけだったじゃないか？

『余裕と油断を混同してる。彼には余裕こそあれど、油断は一切無い。ジャックやクイーンと同レベルと思っておいた方が良い』

審判が開始の合図を下した。

ジェスターはすぐさま熊を召喚する。

鎧男は手甲から手札を取り、ジェスターに見せつける。

黄色の光を放ち、自らを強化したとわかった。

『エレティコスとの戦い方に似てるね』

そうだな。

相手に手札を見せるってのは、こつちに来て初めてだ。

何とというか戦闘は殴り合いだった。

熊が鎧男を殴り、鎧男が熊を殴る。互いが互いを力で押していく。

技で言えば鎧男に分がありそうだ。熊の攻撃を上手くいなして反撃している。

単純な力なら熊がリードだ。さらにジェスターは妨害のカードで

鎧男の行動を制限できる。

まるでジャックでの戦闘みたいだな。

『ジャックでもここまで正面からぶつかってくる奴はいなかった。小細工なカードを一切弄さず正々堂々と、武術の型を演武のごとく包み隠さず、相手と見学者に示すよう戦ってる。儀礼派の表面（おもてめん）が彼つて訳だ。そうなるよ——』

互いに削り合い、カードを惜しみなく消費していく。

やがて鎧のおっさんがデッキを使い果たした。

「そこまで。ジエスターちゃんの勝ちとする」

審判（キング）が手を挙げて勝負を止め、ジエスターの勝利を認めた。

……まだ決着はついてないと思うんだが。

『ついてた。ジエスターの手札はまだ残ってるし、相手は全て出し切った。この状態で拮抗するなら、後はもうわかる』

鎧男もキングの裁定を認め、カード効果をすぐに解除した。

「お見事。強くなりましたなジエスター殿」

肩をポンと叩き、キングとジエスターに一礼する。

周囲からはキングやパテンソンを初めとした人々から拍手で賞賛が送られた。

私も手を叩き、それに倣う。

なんかいいな。きれいだ。潔いというのかな。

戦った二人も満足して、周囲も勝者・敗者の両者に惜しみなく賞賛が送れる。

後にしこりが残らない。

『ちよつとジエスターを呼んで』

言われたとおり、ジエスターに声をかけ近くに寄らせる。

「見た？ ウチの雄姿！」

はいはい。

立派に戦ってたね。あの戦い方は私にはできない。

『次が問題だ。お父さんの戦闘スタイルはメル姐さんに近い。わかってるでしょ？ わからん殺し、初見殺しのオンパレードだ』

「……うん」

急にトーンが三段階くらい下がった。

『勝つても負けてもいいから。今から言う、二つのことに気をつけて』
ジェスターは黙ってシユウの言葉を聞く体勢だ。

いきなり勝敗にこだわるなってどうなの。

『二つ目は、よく観察すること。よく見て聞いて、何が起こっているのかを考える。負けてもいいって言ったのは、勝ちにこだわりすぎると視界が狭くなるから。審判はそれなりに優秀だし、やばそうなら俺たちも止める。相手を父親と意識しすぎない。ダンジョンのモンスターくらいに考えた方が良い』

躊躇いつつもジェスターは首を縦に振った。

『もう一つは、例の特殊カードは使わないこと』

そーいやなんか言ってたな。

『もしも最後にあれが一枚残ったら、とつとと降参する。幸いなことに再挑戦オツケーと認めてくれてるんだから、相手の戦略に合わせてデッキを直して挑めば良い。相手はこちらの戦い方をさつき見たんだから、初戦は向こうがずっと有利だ。相手の手札をどんどん出させて効果の観察に注力する。二回目の再挑戦が本番だと考えよう。とにかくだ。——例のカードは使わないこと』

これにはジェスターは頷かなかった。

表情を硬くしたまま、闘技場の中心に戻って行ってしまおう。

『……駄目だなこりゃ』

キングの開始とともに両者が互いの召喚獣を出した。

ジェスターはいつもの熊で、父は小太りしたおっさんだ。

さらにジェスターは熊にいつもの翼を着ける。

「もしかしてあれがアドミラシオンの竜の翼かな」

審判（キング）が私の側に来て問いかける。

そーうだ。

「隠さないの？」

嘘をつくとすぐバレる。

開き直って正直に言うことにしてる。

「そう。じゃあ効果は？」

不明だ。

今のところ動くだけ。

あと見た目が気持ち悪くて萎える。

キングは黙って首肯した。

何も知らない父にとっては翼に効果がないことなどわからない。

警戒を見せていたが、それもすぐにバレてしまった。

ジェスターの攻撃は基本的に物理攻撃だ。

属性の付与もあるのだが、あまり効果が出ていない。

小太り男に攻撃は当たっているのだが、すぐに立ち上がり笑って反撃してくる。

攻撃方法も様々だ。

ジャグリングの瓶が落ちて床を火の海にする。

ナイフが自由自在に空を駆けて相手に襲いかかる。

玉が相手の足下に転がり、踏んづけさせて転ばせるとか地味だがやりづらい。

『うーん、カードの使い方が巧みだ。特に対人戦だと、上の下には入るね』

素人目から見てもはつきりわかる。

完全にジェスターが翻弄され、何もさせてもらえない。

熊がひたすら力尽くで暴れている。ジェスターもムキになり思考が止まっている。

『カードでも、人間でも相性が悪い。ジェスターの思考が完全に読まれて、先手を適切に打たれてる』

あれはどういう手品なんだ。

小太りの男はなぜ斬っても倒れない？

『本体じゃないから』

じゃあ本体はどこにいるんだ？

『父親は戦闘開始から一步も動いてない』

そりゃ、互いに召喚獣の戦いだからそうだろう。

『明らかに危険でも動いてない。本体は父親の影の中にある。派手な

攻撃で視線や意識の誘導もされてるから、今のジェスターにはまず気づけない』

よく見ると、父親の影がさぎ波のように動いていた。
ほんとだ。なんかいるな。

『鎧男が儀礼派の表面（おもてめん）なら、彼は裏面だ。決闘の範囲ぎりぎり攻めてきてる。たぶん、もっと汚い手法もできるはず。影だって父親の中じゃなくて観客や物陰の中に設置もできただろうからね。気づくかどうか試されてるんだ』

そんなことなど露知らず、ジェスターはひたすらに操り人形を攻撃している。

わかっってしまうとまるで人形遊びをしている子供のようである。

意味もなく人形を攻撃する道化を演じさせられている。

『道化とは人を笑わせる存在にあらず、人に笑われる存在だ。今のジェスターは道化だね。観察もしてないし、考えても無い。誘導どころか、完全に感情を操作されてる。なんだ、わからずやの親父かと考えてたけど、善い父親じゃないか』

娘の感情を操作する父が、良い親とは思えないが。

『きちんとわからないと操作なんてできない。ジェスターをちゃんと理解してるよ。それだからこそその対応だ。嫌われるように振る舞ってるね。こりやますますまずいな』

結局、ジェスターのカードはラスト一枚になった。

父親は途中からカードを使ってすらいない、ジェスターはそのことに気づいているだろうか。

『ジェスターに降参を薦めて。カードを使うなって』

言われたとおり、私はジェスターに諦めるよう伝える。

「仲間の言うとおりで。退け。お前には資格がない」

父親がようやく喋った。

ジェスターは唇を噛んでいる。

おい、審判。

もうジェスターは戦えない。止める。あいつの負けだ
私だけでなく、ジェスター父もキングを見つめている。

「どうして？ まだ一枚残ってるよ。それに彼女、まだ諦めてない」
仕方ない。

力尽くで止めるか。

『もう遅い』

ジェスターの手札から橙色の光が生じた。

久々の出番とばかりに、熊の中から影の人が登場した。

影人は周囲の人々に手を振り、礼をしてようやくジェスター父に對峙する。

「おお、おお、王宮道化師よ。ご無沙汰しております」

癩に障る声が耳朶に響く。

父親は真面目な顔で影人を向いている。

「王宮道化師様は相変わらず真面目くさった顔をしておられる。顔だけではない。中身までもが真面目すぎていらつしやる。悪いことに、考えたことをわずかにしか口にしておられない。それが誤解を生じ、誤解はさらなる誤解に繋がる。もっと話をするべきでしょうに」

影人は自らの口を指さして、パクパクと開けたり閉じたりして見せる。

言われている父親は何も言わない。ただ、今までの相手のように苛つきは見せていなかった。

「亡き妻を想っていたのならきちんと態度で示すべきでしょう。娘を心配しておられるのならきちんと言葉で伝えるべきでしょう。貴方はそれを怠った。自らの怠惰を把握しつつも、それを是としておられる」

父は相変わらず、黙って言葉を受け入れている。

黙っていないなかったのはジェスターの方だ。

「そんなの嘘だよ。だって――」

影人はジェスターの言葉など聞く耳を持たない。

続きを口にしていく。

「王宮道化師様は国のため、まだ幼き国の後継のため、家庭に背を向けられた。わたくし、その姿勢に心動かされるものであります」
ヒヤハハハハと皮肉った笑いをあげていく。

隣で聞いていたキングが、少しだけ目を俯かせたのは気のせいじゃないだろう。

「ですが、もう気づいておられましょう？ 国は国、家庭は家庭。そんなものは言い訳に過ぎないと。さて、貴方は——」

影人が言葉を止めた。

父親が手を広げて見せ、影人に続きを言わせなかった。

「諫言に感謝する、我らが父祖の道化師よ。だが、その先は無用だ」

父親は、影人の横を通りジエスターの前に歩いてきた。

「聞いていた通りだ。こんな父を許す必要はない。お前を呼んだのは——これをお前に渡しておかねばならないからだ」

父親は手に札を取り、ジエスターに向ける。

「母さんのインヒラントカードだ。私には使う資格がない。お前が持っている。それと——済まなかった」

後ろでジャグリングを楽しんでいた影人が地面に溶け込むようにして消えた。

笑い声を残すことも無く、新たな問題だけを残して消えてしまう。

「どうして——、どうして今さらそんなこと言うの！ なんでその言葉をもっと早く、お母さんが生きてるときにっ——」

ジエスターは叫び、カードを受け取ることも無く闘技場から走って出て行ってしまふ。

追いかけるべきなのかもしれないが、かける言葉がわからない。

おい、お前は何もしないんだろ。

『しない。警告はした。だいたい他人の家庭事情なんて、外部から見りやどうだつて良いことだ。当人達だって、外部からの干渉は余計なお世話つてやつになる。家族で話すなり、殺し合うなり、無視し合つて自分たちで解消すべき』

ちよつと見放しすぎてる気もするが、それもそうなので特に何も言えない。

じゃあ、ほつとくつてことだな。

『俺は家庭事情に立ち入らない。ただし、家族の外堀は別だ。母親のインヒラントカードは気になる。見せてもらおう。これは独り言だ』

けど、父親から預かって本人にも渡してやった方がいいかもしれないなあ』

なんて言えればいい？

『何も言わなくていい。渡すだけ。まあ、話したいことがあるかもしれないから、黙ってぼんやりしてればいいんじゃない。得意でしょ。何も考えずぼおーとするの』

私にどうこう言えないくらい甘い奴だな。

それに一言も二言も余計だ。

『俺は何もしない。メル姐さんがするんだ』

はいはい。

父親からカードを預かり、王宮の屋根へ登る。

彼女は屋根に座って、ぼんやりと空を眺めていた。

鳥も飛んでいないし、雲もなく快晴だ。それにちと肌寒い。

後ろからこそこそ近づき、言われたとおり、何も言わず肩越しに札を差し出す。

こちらを振り向かず、深呼吸がゆっくり三回はできるくらいしてからジエスターは札を手にとった。

「……お母さん」

ぐすぐす泣き出して、ぽつりぽつりと家族の話始めた。

母親のところまでは聞いていたのだが、そこから先は飽きてきて、空を眺める。

「ねえ、メル。聴いてる？」

ああ、聞こえてる。

ジエスターの話はまた始まった。

聞こえてはいるが、内容はまるで入ってこない。ダンジョンに行きたい。

人を腐らせていくのは、余計な人間関係じゃないだろうかと心にちらついたほどだ。

誰かに執着し、それにこだわりを持つほど自らの意識が混濁する。

本当に大切なものも濁り始めるんじゃないだろうか。

……ダンジョン攻略とか。

「よし。反省会しよ、反省会」

ちよつと元気が出たようで、こんなことを言いだした。

反省会ね。反省してどうするんだ？

「あいつばっかりスツキリしてずるい。私も一発ドカンと決めてやらなきゃ」

ふんふんと鼻息も荒い、意気込みを感じられる。

『どうして攻撃が効かなかったと思う？』

ここに来て初めてシユウが喋った。

何もしないんじゃないのか。

『カードを使った後のフォローについては何もしない。でも、もう次のステージに進んでるみたいだからね』

ジエスターは考えている。

「わからない。でも、何かカラクリがあるはず。あんなに攻撃したのに立ち上がれる訳がない」

『初めから思いだしていこう。奴の攻撃方法はなんだった？』

シユウがジエスターとの戦いを思い出させ、徐々に情報を抜き出す。

なるべく客観的に見ていき、彼の行動に不可解な部分があったかを彼女自身に考えさせている。

「——そっか、あれは四で本体がどこか別のところになっていたんだ」

話を進めていき、とうとう小太り男のトリックに気づいたらしい。

「近くにおいて私たちを見てた？ でも、そんな姿はなかった。クラウンが戦闘の位置をずらしてた。私たちの視線を外すため。じゃあ、本体はあいつの側にいた？」

ジエスターは着実に答えに近づいていつている。

次こそは勝つんだという熱意を感じた。

翌朝、またしても闘技場である。

観客は昨日よりもさらに少なかった。

キングに、銀鎧の男、そして闘技場の中心に立つジエスター父だけ

だ。

もちろん私たちは二人だけである。

『昨日、キングはジェスター父が勝つと確信してた。その謎も暴かれずにね。今日は違う』

つまり、今日はジェスターが勝つと考えている訳か。

『勝つかどうかはさておき、謎は暴かれると考えてるね。重臣のカードの秘密は知られないようにするべきだろう。特にあのカードはわからない点にこそ、なによりの価値があるからね』

今日もまたキングが審判として二人の開始を宣言する。

退屈というのは本当らしい。実に楽しそうだ。

『今日は良い勝負になりそうだね』

またしても私の側にやってきて、こんなことを言い出す。

『もうネタは教えたんだから』

いや、私は教えてない。

状況を振り返って、気づいた点はあるようだがな。

「ふーん」

戦闘は慎重になるかと思っていたが、昨日よりも激しく進んだ。

いつもは単体攻撃重視なのに、範囲を攻撃するものが多い。

熊の爪に風属性を付与させ、闘技場を攻撃し尽くす。

要するに、どこにいるかわからないから問答無用で攻撃をしてしまえという方針らしい。

「あっ！ 見つけた！」

ついにジェスターが小太り男の本体を見つけた。

父親は人形に守られる形で、闘技場の端に移ったが、影が父親についていかなかった。

「おっとー、気づかれちゃったね。でも——」

『真の勝負はここからなんだ』

熊が影を攻撃するもののまるで攻撃は効いていない。

それどころか熊の影に入って、笑い続けている始末だ。

さらに偽物の小太り男が他にも三体现れた。

こちら先ほどと同様に倒してもすぐに復活するし、攻撃も緩みな

くおこなってくる。

これ、勝てなくね？

相手の攻撃は厳しいし、こちらの攻撃は通用しない。

召喚獣同士だと本人への攻撃は極力避けるって暗黙のルールがあるから、二人はそれに従っている。

もしもこれが破られたら、有利なのは自由に召喚獣を出せる父親だ。ジェスターの背後に呼び出して攻撃させるだけで終わる。

『難しいね。もしも戦いの前に、本体が影にいてるって気づけたら対策が打てた。普通の攻撃じゃ影の中にいる相手へ攻撃は届かない』

難しいってことは無理じゃないってことだよな。

『今のグッズだと方法は二つだけ。それに気づけるかどうか。気づけたとしてもこの苛烈な攻撃の中でそれができるのか。いや三つだ、翼がなんとかできるかもしれない』

一つはなんとなくわかる。光属性の付与だろ。

影っぽいモンスターにはこれが一番だ。

あの翼は当てにできないな。

熊の爪が光っていたのは印象的だから記憶に残ってる。

まだ入ってればだが。

『入ってる。それが一つ』

ジェスターもそれに気づいた。

熊の爪がほんのり白く光り始める。

『うん、こりゃ無理だな』

小太り人形の攻撃が極まり、影もあちこちに動く。

本体がどこにいるのかもわからない。

今、どこにいるんだ？

『ジェスターの影に入ってる』

ほんとだ。

ジェスターは気づかず、熊をあっちこっちに動かして影を探していた。

もう一つは？

『影の中にいる敵を倒す方法はいくつかある。一つは影自体を削るこ

と。光攻撃が効く理由はこれ』

それはなんとなくわかる。

『スタンダードは光攻撃なんだけど、もつと言えばあまり良い手じゃないんだ。光は新たな影を生むからね。影を完全に消滅させるほどの光攻撃は周囲の人間まで害を及ぼすし、中途半端にすれば新たな影に逃げられる。あの召喚獣は逃げられる力がある』

じゃあ、あの光付与は意味がないのか？

『ほぼ無意味。上手くやれば効くけど、とても難しい』

じゃあどうするんだ。

『今回の場合だと、こちらも影となって影の中に入って倒せば良い。影に宿るモンスターはその特性故に本体が極めて脆い。影から出た瞬間に消滅するくらいにはね』

影になるってそんな……あつ。

『そう。いるでしょ。影そのものなのに外に出てきて、身軽に動いてる化け物みたいな奴が。デッキどころか、彼女の手札に最初から入ってる』

今のところ彼女はそれに気づく様子がない。

必死に影の本体を探している。

しかし、あの札は話すだけだろ。

影に入って影のモンスターを倒すなんて真似ができるのか。

『ある程度は動かせると思うよ。昨日は相手の父親ですら道化師の喋りを止められたんだ。使い手の意志が反映されないはずがない。問題は、彼女があのカードを信じられるかどうかだ』

時間が経ち、熊の光付与が切れた。

ジェスターは焦りながらも、なんとかカードを消費して時間を稼いでいる。

こちらの様子を確認し、何かを確信したようにまた気合いを入れ直して戦いを始めた。

なんだったんだ？

『メル姐さんの顔色を窺ってた』

なぜ？

『顔に出やすいからだよ。俺と話してて、勝てないとわかってたら、早く降参しろよってうんざりした顔をする』

「その顔はズルいな。まあ、正直者なだけだから何も言えないなあ」
「どういふことだ。」

『今のメル姐さんの顔はね』

「勝てる方法があると教えているからだよ」

「ぺたぺた触ってみるがよくわからない。」

『ちなみに気づかなくても、もう一回戦えば確実に勝てる』
「どうやって?」

『影の中においても魔力は隠せない。俺みたいに魔力を直接攻撃すれば瞬殺できる。多分これが一番早いと思います、まるっ』

「そーいやお前を使つてるときは普通に影のモンスターを倒せるな。」

「苦戦をした記憶がまったくない。」

『魔力による攻撃カードはいくつかある。でも、普通は弱すぎて使えないからデッキに入れない。あの影モンスターは初見殺しすぎる。ただ……、どちらかと言えば護衛よりもむしろ暗殺、諜報向きだ。父親があまり家庭にいなかったのは、実際にそういうことをして家族を巻き込みたくなかったという面が強いのかも知れないね』

「そーか。」

「家庭事情はどういふ言うまい。」

『ただ、出来ればもうここで勝つて欲しい。それが彼女をまた一つ強くするだろうから』

「影を動かすことができるか強くなるのか?」

「他に使い道がない気がするんだが。」

『そういう意味じゃない。影を動かせても、対影以外には使えない』
「呆れた声で返された。」

『彼女を強くするのは、自分のカードに対する信頼だよ。それは、この世界でカードを操るのなら、一番重要な要素じゃないかな』

「……そーかもしれないな。」

「嘘だった。実はよくわからない。」

「さて、状況は昨日と同じになった。」

打つ手が見えない中での、残り手札一枚。
またしてもジェスターがこちらを見てくる。

その顔は、「さすがにもう無理だよね」って感じの顔だ。
しかし、私の顔を見て驚きを生じさせている。

その顔のまま、残りの一枚のカードを見つめ始めた。

『気づいたね。影には影をつて、でもまだ疑ってる』
そりやそうだろう。

今まで碌な結果を導かなかった札だ。

それに喋るだけだしな。

彼女の逡巡は長い、状況は停止している。

太った男も攻撃を止め、父親同様にただ彼女の姿を見守る。

彼の表情を見て、ようやく服装以外で彼が彼女の父親なんだと実感が持てた。

ジェスターは固く閉じた瞼を開いた。

彼女の顔に戸惑いはない。ひとえに父のみを見てカードを切った。

彼はそれを見て、初めて微笑みを浮かべた。あの服装であの笑みは正直不気味だ。

昨日と同様に、熊の中から影人が現れる。

両腕を大きく開き、キングや鎧男、それに私に向き直る。

最後は父親に向いた。まるで刮目せよとでも言いたげな様子だ。

『違う。パフォーマンスをして相手の動きを見ただけ。本体を見つけたようだね』

ジャグリングしていた影のナイフを一本だけ取り、ジェスターの影に向かって投げる。

影は影に吸い込まれ、小さな悲鳴が上がった。

周囲の小太りの男が崩れて消え去っていく。

全て消えた後で、影人は父親とキングに大げさな一礼をして消え去った。

「うん、見事だ。ジェスターの勝ちとする」

審判がジェスターに勝利を告げた。

なんだろう。長い割に最後はあっけなかったな。

『……うーん。儀礼だねえ。実戦なら父親の勝ちだよ。ジェスターに戦う術はもうなくて、父親はまだ攻撃札がいくつも残ってるからね』
ジェスターはまだ勝利の実感が沸かないのかぼんやりとしている。
徐々に顔が火照りはじめ、ぴよんぴよん跳び上がり勝利の喜びを体で示した。

「見た？ ねえ見た？ ウチ勝ったよ！ 勝ったんだよ！」
こちらにも走り寄って、そのままジャンプして私に飛び込んできた。

さつと避けて、おめでとうと軽く声をかけておく。

「なんで避けるの！」

いや、なんでだろう？

なんとなく？

「ひどいよ。この喜びを分かち合おうよ」

そういうのは苦手だ。ダンジョン以外じゃちよつと……。

さつさとエレティコスの聖遺物を見せてもらおう。

「よし、それじゃあ行こうか。部屋に置いてある」

キング一行と彼の部屋に向かい、そこで紹介された。

「これだ」

小さな箱を机に置いて開けた。

「……これ？」

私もジェスターと同じ感想だ。

『本物だね。鑑定でもエレティコスの物って出てくる』

そうなのか。

でも、本物だからといってもな。

「布の切れ端かあ」

カードでは無く聖遺物と聞いていたから、こうなることも予想はできていた。

しかし、実際に目の当たりにすると、がんばった甲斐を感じない。

これで興奮できるのはクイーンだけじゃないだろうか。

『興奮するだろうね。ジェスターもすると思う』

「どういうこと？」

がっかり気味だったジエスターがシユウの声に反応する。

『重要なのは、布の切れ端じゃない。切れ端に付いてる血だ。人間の血じゃない。血からあり得ないほどの魔力反応出てる。千年経ってるから薄れてるけど、当時は近寄ることも出来なかったはず』

「それってまさか——瘴気の原獣デザストル！」

本当に興奮し始めた。

落ち着け、落ち着け、どうどう。

「落ち着けないよ！ 神話の第三章五節に出てくる瘴気の原獣が本当にいたってことだよ！」

すごいな。

すごいすごい。

じゃあ、もう帰ろうか。

「僕も見たいのがあるんだけどいいかなあ」

どうぞ。

聞くだけ聞こう。

「その剣の力が見たいんだ」

……どうもシユウの事はバレている。

『そりゃ、ジエスターの決闘中に近くであれだけ喋ればね』

それもそうだ。

ここに来るまでに見せたはずだが？

「ジャックやクイーンが破れた可能性有りって報告が来てるんだ。肩唾だったんだけど、どちらも冒険者を名乗る怪しい女と、変な服装の道化師がいたって情報が入っている」

ジエスター父は服装のところを領いた。

お前は鏡でも見てろ。

「そこで昨日の侵入と先ほどの様子を見るとね。それにジエスターちゃんの話も報告と一致する。どうも本当のようだ。実際に、戦うところを見てみたかったんだ」

まず誤解を解いておく。

ジャックを私が切り捨てたのは本当だ。

切り捨てたと言っても復活はしたかな、昨日のように。

「昨日見た消失現象だね。あれも立派に不思議だ。クイーンは？」
クイーンは私じゃない。

「じゃあ——」
全員の視線がジエスターに集まる。

「ウチじゃない」

ジエスターが思い出して震えだした。

クイーンは思い出すと泣き叫び始めるから、これはまだ良い方だろう。

あれは何と説明すればいいのかな。

ヤバイ奴らが出てきて叩きのめしたというか。

「君の友達？」

友達ではない。

記憶にもさほどないんだが、パーティーメンバーだとは思う。

「そう。それでどうかな。軽くお手並み拝見というのは？」

どうだろう？

『昨日からやたらこつちを見てると思ってたけど、これが本当の目的みたいだね。まずジエスターと戦ってもらって。それで判断する』

「えっ？」

私の前にジエスターと戦ってもらえるか。

それで決めるってよ。

「かまわない。素晴らしい案だ。オーギュスト、審判を頼む」

鎧男は軽く頭を下げた。

御意のままに、ということだろう。

「なんでウチが？」

さあ？

『戦ったことあるの？』

「昔だよ。まだキングが王の札を受け継ぐ前に何度か」

すごいじゃん。

『じゃあよろしく』

ジエスターが納得いかないと騒いだが、すぐに闘技場に連れて行かれた。

闘技場の中心には二人の若い男女が変な服装で立っている。しかも、そこからわずかに離れて、全身鎧のおっさんまでいるときた。

さらに私と反対側には全身ぴっちり赤のおっさん帽子付き。情報量が多すぎておかしくなりそうだ。

二人が距離を開けた。

「——以上の儀礼に則り決闘を行う！ 始めっ！」

鎧のおっさんが何かすごく長い説明をした後、決闘はようやく始まった。

ジエスターはいつもどおり熊だ。

対するキングはといえば、灰色の光を生じ剣を手に出した。

王の剣だ。やばい効果がついているんだろうな。

『いや、全然』

さらに強化をかけて、熊に襲いかかる。

なんか、思ってたよりもしょぼいな。私どころかジエスターとも勝負にならないんじゃないか。

『——何がしたいのかわかった。ちゃんと彼を見てやって』

戸惑っているのは私だけではない。

鎧のおっさんやジエスター父、それにジエスターも同様だった。

罨のカードや妨害を駆使してキングは熊の猛攻をなんとか阻んでいる。

そのたびに鎧のおっさんが止めようと慌てふためくのが見えた。

「どうしたジエスターちゃん。そんなものか！」

明らかに追い詰められているのに、キングはジエスターを挑発する。

ジエスターが躊躇いいつも強化カードを熊に使い、キングを攻撃した。

壁が出てきて、キングを守るが、それさえも破られてキングが大きく吹き飛ばす。

「キング様！」

鎧男がとうとう叫び、駆け寄ろうとしたがキングが止めた。

「やれやれ。本当に強くなったんだね。ジェスターちゃん」

「キング様」

「昔は今の城壁カードで攻撃を防げてただけだな。それにこの剣で熊も倒せてた」

「覚えています」

二人は思い出すように語り合っている。

そうしてキングは立ち上がり、強化カードを使うだけ使って熊に突撃した。

熊の振るった腕で、渾身の突撃はあっさりと一蹴されてしまう。

『僕というキング』じゃ、もう手も足も出ないなあ」

キングの手札は残り一枚だけ。

こんな状況は、ジェスターの専売特許だと思っていたがそんなことはなかったようだ。

「今のデツキって、あの頃の？」

「うん。僕の——キングのデツキだよ」

ジェスターはどうしてと尋ねる。

「父が死んで、僕は王のカードを受け継いだ。それでも『子供のキング』は消えざるをえなかったんだ。皆が知るのは『王というキング』だけ。オーギュストもパテンソンもきつと僕より早く死ぬ。そうすると誰も『僕というキング』という人物がどんなかを覚えていなくなる。それは嫌だなあってね。だから、道化師ジェスター。僕のことを語り継いで欲しい。君もだ。冒険者メル。どうか——僕を忘れないでくれ」

ジェスターは頷いた。私は頷かない。たぶん忘れる。

キングはジェスターを見て、良かったと安堵を見せた。

「それじゃあ、本題が終わったところで茶番に移るとしようか」

聞き間違えたかと思ったが、訂正は入らなかった。

「ここからは王のキングが相手をする。見るがいい。くだらない儀礼派の真髓を」

彼に残った最後の一枚が切られた。

色は灰色だ。

灰色に光ったがカードは消えない。

一枚のカードが宙に浮き、二枚に分裂した。

二枚はさらに四枚に分裂し、八枚、十六枚と倍々に上へと増えていく。

彼の周囲をぐるぐると回りながら浮いており、その中から数枚のカードが光に消えた。

「まずはこれらだ」

王の前に数体の召喚獣が現れ、さらに強化がかかる。

それどころか妨害が熊に発動し、トラップまで床や宙に設置された。

「次はこれにしようか」

熊が召喚獣を一匹倒したが、キングは特殊に回復まで使ってくる。

フィールドも追加され、滅多に見ない藍色の光も現れた。

ついでに攻撃カードまでが熊を襲う。

熊は為す術なく倒された。

「そこまで！ 勝者——」

鎧おじさんが試合の終了を示す。

まだ説明が終わらず、なんかひたすら説明をしているが誰も聞いていない。

……完敗だったな。

初めて見るカードだぞ。なんだあれ。

『おそらく他の人のカードが全部自由に使える』

その後、キングが軽く説明をした。

国民のインヒラントカードなら全て使えるそうだ。

クイーンとも似ているが、全ての札を手札にするので補充なしで戦えるとか話していた。

さらに、カードの種類も一切関係なく、使用できるとか。

『民を装備してる訳か。まさにキングだねえ』

小馬鹿にした声だった。

それで戦っても大丈夫そうか？

『別にいいけど、勝負にならないよ。カードの発動を待たないからね。発動してから戦ってもいいけどやっぱりすぐに終わる。本人が強くなるわけじゃない。無理矢理突破して小突いて終了だ』

シユウの言うとおり伝えたが、「それでも」と言うので戦ってみた。結局、その通りだった。

一戦目はカードを切る前に、首にシユウをつけて終わらせた。

続く二戦目は、カードを発動させてから始めたが、攻撃を避けて回り込んでからの接近で終了。

三戦目をしようとは言わなかった。

『わかってやってる。これは一対一で使うカードじゃない。そもそも戦闘で使うものではない』

いつ使うカードなんだ？

『儀式だよ。これがインヒラントなら奴は確かに儀礼派だ。形式を否定して作り出すのは、新たな形式に他ならない』

意味がわからん。

『アホらしい。ジェスターの特殊カードから聞けば良い。何が「僕と
いうキングを忘れないで欲しい」だ、真面目に聞いて損した』

ちよつとご機嫌斜めだ。

ゆるくキングに伝えたが、彼はジェスターのカード使用を明確に拒否した。

『そりゃそうだ。全部、茶番だからね。「儀礼派の脚本家」にでもなつてろ』

用事はだいたい済んだな。

今度こそ帰ろう。

平和的な解決も見だし、素晴らしい訪問だったな。

『そうだね。門を一つ粉にして、兵士を人間投石に変えたくらいで済んで良かった』

ジェスターも乾いた笑いしか出てこない。

すぐに帰ろうとしたが昼食を勧められ、一緒に食べた。

おそらくキングなりに、ジェスターと父の間を取り持とうという意

思だったのだろう。

『うん。そこだけは茶番じゃないね』

他に何か用はあるか？

『……あつ、ちようどいいや。キングに聞いてみてよ。カードの効果を引き出すカードはあるかって』

そのまま尋ねると「ある」とのことだった。

シユウは素直に喜び、依頼をし、キングも乗り気だった。

ずばり「アドミラシオンの竜翼」稼働実験だ。

ジェスターも興奮し、すぐさま闘技場に場所を移す。

もしものために、防御カードと回復カードを上手く使える兵士も幾人か闘技場に来た。

キングは念のため距離をとって、例のカードを発動させる。

ジェスターの熊の背中には気持ちの悪い翼がバタバタと動く。

「——瀟洒な翼だな」

ジェスターの近くに立っていた父が、彼女に話しかけた。

「……うん、格好いいっしょ」

彼女も少し戸惑ったが返事をした。

私の中で、瀟洒という言葉の定義が変わってしまいそうだ。

「それじゃ使うよ」

キングの言葉に私たちは頷いた。

彼の周囲で浮いていたカードの一枚が黄色に光った。

熊に黄色の光がまとわりついた。熊が翼をさらに速くばたつかせる。

熊の翼が——青い光を発した。

透き通った湖のようで、周囲をすり抜けていくような涼しげな青だった。

周囲からも「おお」とどよめきの声が上がっている。ジェスター父も真剣な顔で見ている。

『まさか——』

シユウは何かに気づいた様子だ。

絵にあつたような派手な青色ではないが、穏やかでいい。私は好き

だな。

「やったあ！ 見たメル？」

ああ、見ているぞ。

すごいな。本当に驚いた。だが――、

周囲の人々もその光に驚いたが、特に何も起こらない。

翼が薄い青光を明滅させるだけである。

『今すぐ熊とジェスターを、いやあ、それだけじゃ駄目だな。ここにいる全員を……それでも足りないか。風上は……入口と逆側だな。――まず調査だ』

何かシユウがぶつぶつ言いだした。先ほどから変である。

それ以外の変化はない。翼の青い光は強まったり弱まったりしている。

特に青い炎は出ていない。攻撃系じゃないのか？ 動くだけの次は、光るだけなの？

「うるさいなっ！ 一歩前進したの！ すごいっしょ」

ふふんと鼻を鳴らしている。

たしかにそうだ。少しずつだが着実に強くなっているな。

今は人のカードに頼っただけだが、そのうち使いこなせるようになるだろう。

キングも予想外れと気を抜き、周囲の兵士達もほっとした様子だ。ジェスター父も熊の翼をじっと見ている。どうやら気に入ったらしい。

当のジェスターは、熊の周囲を嬉しそうにぴよんぴよんと、はしやぎ回っている。

『メル姐さん、――ギラックマ極限級。繰り返す、ギラックマ極限級』
突如、シユウが私だけに伝わる暗号を言った。

言葉の表面はかわいらしいのだが、中身は冗談が一切無い。
次から発言する内容を、最大限の真剣さで聞いて実行に移せという意味だ。

発言の実行内容は私の思いとは裏腹のことが大半で、抵抗が大だが今までに緊急じゃ無かったことはない。

過去の例だと、いきなり街中、しかも衆人環視の中で人間を斬りつけろとかそういうことだ。

そのとき斬った人間は異常な魔法使いで、街をまるごと吹き飛ばそうとしていた。演繹的思考だからで気づいて、理由も教えず私に斬らせ

た。だが、あのときも間一髪だった。もしも実行がわずかでも遅れていたら街が一つ消えていたのだから。

この符丁はつまるところ、「今すぐ行動しなきゃ絶対に後悔するぞ」ということだ。

『もしも、この青い光が俺の考えているものなら、何もしないことが一番まずい。すぐさま実行を任せる』

かつてここまで真剣だったことがあるだろうか。

ものすごく静かな声で、私を諭すように話している。

初めはジェスターの父だった。

ぐばあつと何かを吐いた。吐瀉物は赤、石畳を赤黒く染めている。血だ。

「……お、お父、さん？」

久々に呼んだであろうその名を、彼は聞くことができただろうか。

青く光る熊の近くにいたジェスター父はそのまま床に倒れて動かない。

周囲の人たちはその光景をぼんやりと見つめる。

彼らの中からも吐く者が現れた。

床に倒れる者もいる。

叫びも混じった。

「なに……？ 何が起きてるの？ どういうこと？」

『調査完了だけど、結果なんて見るまでもない』

彼らは痛いとか叫びながら地面を転がる。

彼らの顔は真っ赤だ。火傷のように赤く腫れていた。

……なんだ？ 服が赤く滲み、瞳もなんか白く濁ってないか？

『青い光は、チェレンコフ光だ。ジェスター父を斬って。その後は熊を確実に斬り殺す』

「えっ、なんで？」

シユウの発言が始まった。

私もジエスターと同じ気持ちだ。

『急いで！一刻を争う！』

一瞬、足が止まったが、シユウの激しい声に従い、倒れた父を斬りつける。

続けて、青く光る翼ごと熊を斬りつけた。

『黒竜スキル発動。くそっ、やっぱり足りない』

父や熊が光に消える前から、シユウは黒竜のスキルを勝手に発動させた。

『次だ。部屋の隅——入口側に移動し、振り返ってゲロゴンブレスを撃つて。奴ら全員を巻き込むようにね。キングとジエスターもだ』

大声では無く、自分自身を落ち着かせるかのように抑制しつつ喋っている。

その声に従い、ジエスター達から離れ、彼らを巻き込むようにゲロゴンブレスを撃ち放つ。

「なんだ、この——」

「どうしてウチまで——」

赤白い光が目の前を覆い、キングやジエスター、さらには建物も消し飛ばした。

その赤い光を見た人はアイテム結晶となりはてた。
なんかいつもより白っぽくないか。

『浄化効果を無理矢理付けた。回数は減るけど仕方ない。まだだ。全周囲を浄化ゲロゴンブレスで消し飛ばす』

そこまでやるのか。

『急いで』

……わかったよ。

体を回転させつつ、ゲロゴンブレスを撃っていく。

付近は焼け野原。王宮の跡形もなくなり、周囲には数多のアイテム結晶が残った。

最後は「自分自身に向けて撃て」と言われ、意味がわからないまま

足場ごと消し去ってしまう。

自分には効かないので熱くは無いが、心地よいものではない。

『これでいい。重要人物の結晶を拾っていいこうか。早めに復活させる必要がある』

ここまで荒唐無稽な言動は初めてだ。

様子から察するに狂った訳ではないから理由があるんだろ。

『神話に出てたアドミラシオンの竜は、エセ竜ではあるけども、本当にとつともない化け物だったんだ。あれは青い炎なんかじゃ無い』

まあ、炎じゃなくなったの光だったな。

『光はただの副次的効果。翼の真の効果は放射能だ。難しい話だから簡潔に言うね。攻撃はあの翼から実際に出てた、目に見えない形でね。それが周囲の人々や建物を貫いた。ジェスター父の症状は吐血に、出血、紅斑、白内障。全身を外側と内側から粉々に破壊されてる』
なんと、あの吐血はそういう理由だったのか。

生きてるうちに斬って、復活するようにしたわけだ。

『ジェスターが倒しても復活したけど、それでも親殺しはさせるものじゃない』

そうだな。でも建物まで破壊したのはやりすぎじゃないか。全壊だぞ。

歴史的建造物だから破壊はやめましょうとは、お前の口から出た言葉だと記憶しているが。

『歴史とか言ってる場合じゃない。詳しい波長はわからないけど、あの見えない攻撃は壁を透過する可能性が高い。もしも中性子線ならこんな王宮の壁ごときじゃ遮れない。どこまでの範囲が被爆したのかもわからない。さらに翼から、微細な放射性物質の放出まで確認できた。あれが飛ぶところに放射性物質——猛毒をまき散らすんだ。何にせよ、汚染された物質は除去か隔離しないと生物にとつて極めて危険だ。だから周囲の被爆した人や汚染されたものを、最初に黒竜スキルで可能な限り吸収した後、浄化作用付きの炎でちり一つ残さず除染し尽くした』

冗談だと笑い飛ばしたいところだが、冗談で黒竜スキルとゲロゴン

ブレスは使うまい。

しかも変な効果まで盛り込むとかはさすがにない。一人を斬って感染させれば殲滅できる。

『初めての使用で扱い切れてなかったのが幸いした。効果範囲は狭そうだ。ほら、あれ』

焼け跡の遙か先、高台の縁から人々が、腰を抜かし戦々恐々ところらを見ている。

『うん。彼らの服を鑑定したけど被爆してない。周囲にも異常な濃度なし。これで一安心だ』

お前は安心だろうが、私は何も安心できない。

復活した彼らに、なんと行って説明すればわかってくれるだろうか。

『そんなことよりジエスターには、デッキから翼カードをすぐ抜かせて。渡す気がないなら奪い取る。とにかく俺たちが預かった方がいい。あれは誰かの手に渡しちやいけない。封印が必須だよ。もしも耐性を付けてなかったらジエスターが真つ先に死んでた。世界にあつてはいけないカードの代表格——最悪で災厄の類だ。何が「君は——青き光をもう見たか」だ。近くで見たら死ぬぞ』

そんな解説もあつたな。

『わかったこともある。俺はね。エレティコスが悪者、それに準ずる存在じゃないかと疑ってたんだ。世界に歪なダンジョンを作るなんてどう考えても怪しい。目的は、世の中を混沌に陥れるかそのへんだろうって』

そりやそうだな。

私もそんなところかなって思ってた。

『俺が間違ってた。逆だったんだ。危険すぎるモンスターをダンジョンに封印してた。こんなイカれたモンスターが空を自由に飛んで跋扈する世界を、比較的安全な世界に作り変えた。奴は本当に英雄だ』
すごい奴じゃないか。

『なぜ俺たちを転移させたのかもわかった。元の世界に戻れない自分に代わり、安全な社会になつてるかを見させに行つたんだ。もしも危

険なままでも自分に勝てるくらいの奴なら問題ないと考えたんだろう』

そうかもしれないが、帰ってこれないんじゃないか？

『そこは彼の誤算だったね。自分に勝てるくらいの奴なら戻って来られるって思ってたんでしよう。元の世界に戻って彼に伝えないといけない。——安全な世界になっていたと。それに、彼を止める必要がある』

伝えるのはわかるが、止めるって何を？

『あいつはまだダンジョンの法則を送り続けている。エンコードしてない方法でね。そろそろ歪さが現象となって現れる可能性が高い』
やばいじゃないか。

『とてもやばい。さらに、まだ問題が残ってる』

それは？

『彼は英雄で間違いない。でも普通、英雄が神にはなることはまずない』

そりやそうだ。

英雄が神になるなら、飲み屋の酔っ払い冒険者はみんな神様になっってしまう。

『彼は修羅の如く強さを求め、行いも災厄の獣を倒すくらいに英雄的で、異世界に飛んで後に世界の救済さえ行なった。彼の目的はこれでクリアした。じゃあ、彼はいったいどうやってダンジョンが普通にある異世界をピンポイントで探して、法則の転移までできたんだろうか。詳しいだけじゃ説明できない。同世界ならまだしも、異世界間の転移はそんな簡単にできるもんじゃないんだ。例の切り札が関与してるのは間違いない。そう、今後の問題は英雄は何を倒して切り札を手に入れ、あまつさえ神にまでなってしまったかだ。——エースに行く必要がある』

なんでいきなりエースの話になるんだ？

『あいつらは異世界間のパスを監視してた。エレティコスが異世界にいるって知らないとなんか監視はしない。何かを知ってる。聞き出そう。ついでに戻る術も彼らが持つてるだろうから』

話はここで終わりらしい。

タイムング良く人々も復活を始めた。

ジェスター父も周囲を何事かで見回している。

『うん、被爆前に戻ってる。いやあ、良かった良かった』

そうだな。私もつられて笑う。

焼け野原の中心で笑う私たちを彼らはどう見ているのだろうか。

その彼らにどうやって事情を説明すればいいんだ？

この後の対応を考えると笑うしかない。

復活後、呆然としている彼らを集めた。

キング、ジェスター父、鎧男、それと重鎮らしきおっさん数人に、ジェスターと私だ。

殺風景の中心で、誰も盗み聞きできない距離に加え、用心でカードを使つての会談である。

今回の事情をシユウの言うとおりに全てきちんと説明した。

重鎮らしきおっさんはぶつぶつ何か言ったが、全てシユウの反論で黙った。

癌の罹患率がどうか、何万年も続く死の王都とか、王宮をホウ砂だからで全部埋めるかとかぶっそんな話が出ていたが、途中で私は考えるのをやめた。

ジェスター父とジェスターは黙って話を聞いている。こんなときだけ仲良くするのはやめて欲しい。

キングがジェスター父を見る。

ジェスター父はただ頷くだけだった。

「——そうだったんだね。助けてもらって感謝するよ」

キングはひくつきながら謝礼を述べた。

ひくつきというか、ジェスターを含めた全員が私に戦慄している。ジェスターの放った、目に見えない恐ろしさもよくわからん現象を、目ではつきりわかる明らかにやばい現象で吹き飛ばしてしまった。

『こんな焼け野原にしちやったらから仕方ないね。はあっ！ ダン

ジョンに来たみたいだぜえ。テンション上がるなあ。ええ、メル姐さんよお!』

何言ってるんだこいつ。

ジェスターどころか、さすがの私も引くぞ。

キング達からは、もうどうでもいいから早く消えてくれという意志が隠しきれていない。

関わり合いたくないのが明白だ。私も消え去りたい。

「シユウ……。ウチ、やっぱりこんな力、必要ないかも」

『でしょ! やつとわかってくれたかあ! 持つべき者が持たなければ力は不幸しか呼ばないからね。もつと言えば、ないにこしたことはない』

何か言ってる。

説得力があるのかなのか、もう私にはわからない。

寒空の下、風を遮る壁どころか床に天井まで削り取られてしまった。

高台にある王宮は、王宮があつた高台になったのだ。

キングがくしやみをし、場はお開きとなる。

冷たい風はキングを越え、エースへ吹こうとしている。

5. 象徴主義の監視者：エース

王都を早々に離れ、エースへ向かう。

「ねえ」

ん?

「あの翼って——」

『駄目。死の大陸に変えたいの?』

翼はジェスターから直ちに没収した。

事情は説明したが、未練たらたらである。

「でも、持っているだけなら。あれ、エレティコス様の——」

『彼が命を削って倒した魔物だ。真に彼を信仰するなら、意を汲んであのカードをこの世界から消し去るべきだ。ジェスターがこの世を

あの絵の光景みたいにしたくないなら別だけど』

ジエスターが言い切る前に、シユウが発言を潰していく。
ううと下を向いて唸っている。

「……ウチの特訓が無駄になっちゃった。せつかくがんばったのに。炎虎、返してもらえないかなあ」

『炎虎と言えば、あれの炎を聖炎と言ったけど、あれは大正解。おそらく有害物質の浄化作用か防護作用がある。そうでもない、あの翼の獣や瘴気の獣とはまともに戦えない』

何のなぐさめにもならない。

その火炎虎もクイーンが持つてるじゃないか。

ジエスターはがんばっていた。それをいきなり没収じゃあんまりだ。

せめて他の解決策も提示してやれよ。

『エレティコスの切り札をあげちゃって良いよ』

「えっ?」

いいのか?

『うん。翼よりもあっちの方が遙かに健全だ』

世界を消し去るとか言ってなかった?

ジエスターが、ええつと私を見てくる。

嘘みたいに聞こえるが本当らしい。

『俺も確認しておきたい。大丈夫、ちゃんと使い方を教えるから』
どうして使ったこともないのに使い方がわかるんだろうか。

そもそも本当の効果すら知らないだろ。

『彼が使ってるところを見たし、効果もある程度は確認してる』

何も起きなかっただろ?」

『そうだね。攻撃なら何らかの反応がある。つまり、あれは攻撃じゃない。思ったことを決定づけるカードだ。あるとき彼はカードに勝利を願った。メル姐さんという敵への勝利だ。でも、メル姐さんは無敵状態で、カードの敵対象から逃れてしまった。対象がないからカードは不発。だから何も起きなかった。もしも無敵じゃなかったら、あそこから彼にとって都合の良いことが起きて勝利してただろう』

よくわからん。

『つまり、相手への勝利のみを願ってカードを切るだけで良い。それで勝利が舞い降りる。面白みの無いゴミカードだ』

なんだか拍子抜けだな。

それならもつと早くから渡せば良かったんだ。

ジェスターもうんうんと私に同意を示している。翼よりだいぶマシだ。

『もしあのとき——ジェスターが父親と戦ったときだ。このカードが手札にあつたとしよう。純粋な勝利だけを願えた？ 死んじやえばいいとか、ひどい目にあつちやええいいとか、わずかでも思わなかつたと言える？』

ジェスターは返答に窮した。

『だから渡さなかつた。もう一度言うね。もしも使うときがきたらだ。相手への純粋な勝利のみを願ってね』

純粋な勝利ってなんだ。

勝利は勝利だろ。

『自分が勝って慎み深く喜び、相手が負けてそれなりに悔しがってる様子を思えつてこと。わずかでもそれより他を考えれば悲惨なことが生じる。このカードは間違いなく過程を選ばない。相手が急に心臓発作で倒れたり、急に地震が起きて地割れに飲み込まれる、空から隕石が落ちてきてそれが当たるとかもあり得る。自分のささやかな勝利と相手が地団駄を踏む程度の敗北を切に願うんだ』

……そんなことできるの？

ジェスターを見るが、彼女も首をひねっている。

あつ、これたぶん無理だな。

『別に戦闘で使わなくてもいい。やばい状況に陥ったとき、みんな無事で助かりたいって思っただけでも効果はある。異世界召喚に「たまたま」巻き込まれることになるかもしれんけど』

駄目じゃん。

『なんにせよ、持つとくといい。大好きなエレティコス様の切り札だ。今度こそ、より強くなるんだね。このカードが——選択されない未来

のために』

やっぱ使わない方針なのか。

『そりやそうよ。使うくらいなら負けを認める。使わなきゃ確実に死ぬってときだけ切る』

だいたいどうやってこれを使わずに強くなるんだ。

もう伸びしろがないって言ってただろ。

『デツキの組み替えを考えよう。来たるべき戦いに備えて』

その後、ジエスターはなんだかんだ言いつつもやっぱり受け取った。

エースとキングの狭間には街がある。

昔から小競り合いの多い地域でたくましく生き抜いた街だ。

近くにダンジョンもあり、街にはシーカーを初め、怪しげな輩が多い。

その中に、私たちも紛れ込んでいる。

ここからエースに密入国し、エース本人と対面する予定だ。

今はダンジョン攻略後の反省会をいつも通り飯を食べつつやっている。

『決戦用デツキはおもしろいでしょ』

……返事はない。

聞かれたジエスターはテーブルに突っ伏している。

シユウに提案された、短期決戦型のデツキを先ほどボスに試してみた。

「……ウチ、ほんとに強くなってるのかなあ」

試してはみたが、何も出来ないまま私と交代という結果になった。

私も横から見れていたが、カードに振り回されていた。

今までのデツキとあまりにも違いすぎる。

でも、使いこなせば――、

「あんなの使える気がしないよお」

ジエスターから弱音が漏れている。

まあ、そうだろうな。私でも難しいのがわかるくらいだし。

『今は振り回されてるけど、使いこなせばさらに上にいける。あと一枚揃えばデツキとしては完成を見るね。さらに難しくなるけど』

デツキとしてはそうかもしれないが、扱えないなら意味がない。

しかもさらに難しくなるって……。

「無理だよお……」

これは重症だ。

強くなってきたという自信が一戦で碎け散ってしまった。

『じゃあ、諦めよう。熊中心のデツキでも大半の敵とは戦えるからね。使うかどうかはさておき、切り札だつてある。経験を積めば、切り札だつて不要になる。彼らには追いつけなくなつていいじゃないか。ジャックやクイーン、キング、まだ会ってないけどおそらくエース達には、熊中心デツキじゃ手も足も出ない。それで何が悪いの？ 彼らに追いついたところで、何になる？ 国のトップになりたい？』

返答はない。

一度むくりと顔を上げたが、またすぐに伏せてしまった。

むうーと顔をテーブルに擦りつける。葛藤の意思表示なのかもしれない。

ぴくりとして、また顔を上げた。

周囲をちらちら見ている。

『どうしたのかな？』

「……なんだろう？ 何か変じゃない？ 上手く説明できないけど」

私も周囲を見る。

テーブルは全て埋まり、人々は酒やら肴、それにタバコを口にして話をしている。

誰もこちらに気を留めない。同じ場所に居ながらもそれぞれのテーブルに各自の世界があり、隔離されている。

『強くなつてるか心配してたけど、心配しなくていい。ちゃんと強くなつてる。これになんとなくでも気づけたんだからね』

これってなんだろう？

「……、いいか？」

静かな声だつた。

声を追いかければ線の細い男がいた。

私たち以外は、屈強な人間達が揃う場で明らかに浮いている。

『この声——』

埃まみれの服に、破れたズボン。頭だつてボサボサだ。

顔も煤にまみれているのか、黒い汚れがべったりついていていた。

顔も影が落ちており、暗い・黒い・汚いの三拍子が揃っている。

まあ、他に席もないみたいだからな。

椅子もちょうど三つある。

ジエスターを見ると、彼女も頷いた。

「どうも」

男は席に座るだけだ。

食べるものも飲むものもない。乞食だろうか。

「そろそろいいか」

席を立とうとしたら男が声を出した。

「メルに、ジエスター。それにシユウ。あなた方と話をしたかった」

どうやら私たちの名前を知っているみたいだ。シユウすら知って

いるとはな。

用があるのならもっと早く言えばよかっただろ。

「食事を邪魔すると怒る。それは避けたい」

そんなことは……、あつたかもしれない。

実際にやらかしたからな。

それでお前は何者だ。

私達のことを知っているようだが。

『声に聞き覚えがない?』

声?

どっかで聞いたっけ?

「……見つけた」

何を?

「あっ——」

ジエスターは気づいた様子だ。

何を見つけたの?

「今の遺跡で聞いた声だよ！ ほら、ウチらが最初に出会った遺跡」
……ああ、そういうえばなんか召喚獣が出てきたな。

じゃあ、お前は敵ってわけだ。

「落ち着け。やり合う気はない」

男は両手を軽く挙げて意思表示をする。

「あなた方がエースへ行く目的は、エースがエレティコスについて知っていることを聞くこと。そして、元の世界に戻ることに」

確認するように私を見てくる。

頷くと男は続ける。

「頼みがある。達成されたなら、そのどちらも叶えよう」

頼みね。

そもそも、なぜお前がそれを知ってるんだ？

「聞いていたからだ」

どうやって？

『そういうのが得意なんでしよう』

「そうだ」

男はシユウの声にも自然に応えた。

警戒の度合いがさらに上がっていく。シユウの声を聞ける奴にまともな奴はいない。

『違うんだ。メル姐さんが聞いてる俺の声を拾ってる。聞くだけじゃない。見るのも得意。違う？』

「ああ。旅の行程は全て見せてもらった」

いやいや。

見せてもらったってどうやって？

『情報の観測と干渉がこいつのカードだ。素晴らしい力だけど、一つだけとてつもなく大きな失敗をしでかした』

男は何も言わず、シユウの言葉を認める。

失敗って？

『俺を深くまで覗きこもうとした。技量があるのも考え物だね。低ければ弾かれるだけですんだのに——。俺の国の人間が大好きな言葉を贈ろう。「深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているの

だ」。行為はともかく、その精神力は褒めてやっても良い。よく、今まで堪えた』

すごい上から目線だな。

……なんだ？ 男の姿が霞み始めてないか。

「来て……良……た。もう限……。パ……。コン中心……。いる……。頼……」

男の姿どころか、声までもがかすれて聞き取れない。

そもそもお前は何者なんだ。

「わた……。エース……。……徴主……。監視……。……」

そこで彼の声は途切れた。

飲み屋には変わらぬ喧噪がまだ続いている。

誰も先ほどの光景など見ていなかったかのように。

今起きたことを整理しよう。

『エースが自爆して助けを求めている。現状は非常にまずいと言わざるを得ない』

自爆って？

『情報干渉を俺に使った。神の領域に足を踏み入れたけど、彼の精神が逆に侵食された。汚染されちゃったんだ。ねこです』

ねこ？

『いや、気にしなくて良い。残る力で助けを求めてきたのがさっきのあれ。パで始まってコンで終わる場所は？』

「……。あつ、パノプティコンだ！」

『ベンサムかよ。——そこに行こう。彼を斬ってやれば助かる。依頼達成だ。でも、依頼内容と報酬が不釣り合いだね』

簡潔な話だ。素晴らしい。

楽勝過ぎる。不釣り合いでも報酬が多いなら良いだろ。

『逆なんだ。付け加えることがある。時間制限があつて、二日はもたないだろう』

そうなのか。

まあ、急げばなんとかなるだろ。

具体的な距離は知らないが、ごちんまりした国と聞いている。たぶん、防衛力もそれほどじゃないだろ。

『だろうね。彼の付近までは容易く行けると思う。むしろ、そこからが本番だ』

なんで？

倒れてるだろから斬ってやるだけだろ。

『もたないって言ったのは彼の肉体じゃない。精神だ』

……どういうこと？

『彼の精神は侵されてる。神の座にいるナニカ恐ろしいモノにね』

「神ってエレティコス様？」

違う。

もつとやばいの。

『そう。エースの精神の大部分がやばい存在に支配されてる。もしも完全に支配されたら——彼を門として、この世界へと神に近いナニカが降臨する。以前のように曲を弾いてサヨナラじゃまず済まない。世界がサヨナラもあり得る』

まさかそんな大事とは。

「……じゃあさ、切り札を使おうよ。こんなときのための切り札でしよ」

『無駄。あれはせいぜい竜レベルのカード。神レベルには及ばない。世界の法則とか決定の埒外にいつちやっただ連中なんだ』

えっと、つまり？

『二日というのはエースの死の刻限じゃない。世界の破滅という刻限だ。——二日とは言ったけど、明日になったらたぶんもう手が着けられない。できれば今日中に奴を斬る必要がある。俺なら、討伐は無理でも、お帰り願うことができる。いつからここは週刊・世界の危機になっちゃったのか』

こんなところに座ってる場合じゃ無い。

私たちはすぐさま席を立つ。

目的地は決まった。やることも決まった。

——で、あれば動くだけだ。

普段はチートでの強化を好まないジエスターだが、今回は強制だった。

もはや原型を失った召喚獣が空を飛び、一直線に首都パノプティコンへ向かう。

異常な風圧を抑えてはいるがそれでも厳しいくらいだ。

首都にはあつという間に着いた。

『首都の中心……あの一番高い塔だな。ちようどいい。このまま突っ込んで』

「えっ?」

『突っ込んで、このまま塔にドカーンって』

ジエスターが私を見てくる。

突っ込んでくれ。

「直前で止まって、入口から——」

『もう一つ入口を作ると考えればいい。GO。GOGO、GO、GO
!』

実は楽しんでるんじゃないだろうか。

「い、行っちゃおうよ!」

『その台詞は、夜のベッドの上で顔を紅潮させてから言っただけで欲しかった。もちろん産まれたばかりの姿でね』

突っ込んだ物音で、途中から聞こえなかったことにしておく。

衝撃は思ったほどじゃない。思ったほどどころか衝撃も音もまったくくない。

だから、聞こえなかったことにできなかつた。

『時空間耐性が効いてない。当然っちゃ当然か』

召喚獣は確かに塔に突っ込んだ。

外壁をすり抜けるように塔へめり込んでいき、そのまま塔の内部に入った。

勢い余って外には出てない。つまり、ここは塔の中ということになる。

「夢? 頭を打ったのかな」

ジエスターは頬をつねっていた。
無理もない。

塔の中には地平線があり、天井には黒雲が渦巻いている。
さらにはポツポツと雨まで降っているときた。

『世界が改変されてる』

地面に乱雑に置かれた数多のコップ。

コップに貯まった水面へ落ちる雨滴が、小気味の良い音を鳴らす。
一つや二つなら音だが、コップはここに無数にあつて、リズムを作り、一つの曲が流れている。

『ああ、こいつか……。超不幸中の幸いか、幸い中の超不幸か。どっちだろう』

どっちみち不幸が勝つてないか、それ。

コップが置き並ぶ中に彼は座っていた。

姿形は知っている。朝に飯屋で見た彼だ。

でも、表情はあるときよりもかなり子供っぽい。

「君か」

『やあ』

挨拶は短い。

『曲を弾きに来たのかな』

「無論だよ。ここは座とは違う。聴くのも良いけど、たまには弾かないとね。頭の中にイメージが出来たんだ。それにこの力だ。今度は上手く弾けるよ。聴いていくと良い」

なんだか穏やかな話になっている。

『止めとく。で、——弾いた後は？』

「——演奏の邪魔がなければ還るよ」

男は柔らかな笑みを浮かべている。

包み込まれる笑顔とはこういうものをいうのか。

『わかった。それじゃあ、心おきなく弾いてくれ』

「ありがとう。また、あの座で会おう。僕は、君の演奏を楽しみにしているよ」

男は私とジエスターを一度も見ても見えない。

雨音がぽつりとコップの水面に落ちる。音が鳴ると景色が変わっていた。

「えっ……」

瞬きすらしていない。

本当に一瞬で場所が変わった。

丘の上に立っていることはわかる。

ずっと先に首都があり、先ほどまでいた塔が見えた。

『神近傍クラスと情報操作の組み合わせは、ちよつと手の打ちようがないね。ここでおとなしく聴いておこう。それで還つてくれる』

「神？ 全然、強そうに見えなかったよ」

そうか？

私たちなんて眼中にすらないって感じだったぞ。

明らかにやばいはずなのに、敵意の欠片も何一つ感じなかった。

たぶん私たちは背景かそこら程度にしか考えてない。

『神に近い連中って、基本的に世俗の人間に興味のない奴らだから。あいつはちよつと違うけど——、おつと始まったか』

都市の上に雨雲がかかっていた。

不思議なことに雨雲は都市の真上だけにあり、動く様子はない。

雲の下が黒く見えてきた。

たぶん雨が降り始めたんだろう。

なんだろう。特に何も起きてないぞ。

以前だと、もつととてつもない気配を感じていたのに。

『あいつは近くに降る雨を自在に操れるんだ。コップが大量に置かれてたでしょ。人だった頃はそれで曲を演奏してた。その演奏が神に見初められて座に呼ばれた』

思ったよりも地味だな。

すごいんだろうけど地味。

『雨粒とコップはどちらが楽器かわかる？』

雨粒じゃないの？

あれ、でも音を出すにはコップが必要か。

やっぱりコップで。

『両方だよ』

どっちと尋ねて両方はずるいと思う。

『座ではコップ以外でも演奏もしてた。皿とか、花とかいろいろね。素晴らしい演奏だよ。でも、あそこでは手に入らないモノがあるんだ。奴がここに来た理由はそれだ。来ようと思えばそのまま来られるのに、わざわざ精神支配なんて面倒なことをしたのもこのためだね』

前に来た奴は確かにそのまま来てたな。

『あいつは人を楽器としか見てない』

……すごい駄目な気がするんだけど、ほつといて大丈夫なのか？

『ほつとくしかない。端的に言えば、雨を降らせて人の反応を楽しんでるだけだから、大きな害も無い。これでおとなしく還つてくれるんなら安すぎるってもんだ』

本当に帰つてくれるの？

やっぱり気が変わって残るとか言い出さないか。

『二曲、三曲弾けば理解して還るよ。わからないようなら直接伝える。異世界最後に絶望級が来たと思っただけど、なんてことはない。戦闘無しのイベントシーンだ。長くなるからダンジョンでも行つとこう。モンスターが見える。ほら、後ろ』

首都から目を逸らして後ろを見れば、草原地帯に点々と蠢くものが見える。

『……こんなイベントが偶然で起こるモノか？』

雨の降る首都を見ているも何もおもしろくないので、ダンジョンへ行くことにした。

ジェスターと一緒にいつもどおりダンジョンに挑む。

前情報なしだが、問題はない。初級程度のモンスターが草むらから出てくるだけ。

夕方になり、まもなく日も沈む。そろそろ引き上げようか。

『向こうも終わった』

雨がポツポツと降り始めたと思ったら、周囲にはコップだらけ。

例の痩せ男がぼんやり座っており、周囲の草やモンスターが消えていた。

またしても謎の空間に移されてしまったようだ。

『予定調和だね。やっぱり失敗した』

痩せ男は何も返答しない。

爪をガジガジ噛んでおり、最初よりもかなり機嫌が悪く見える。

ジロツとシユウを見て、何か言いたげだ。

『人を楽器としか見てない君が、人で演奏できるわけがないだろ。環境操作の力があるうが関係ない。それ以前の問題だ——人への理解が、研究が、熱意がまるで足りてない』

そんなことを言って大丈夫かと思ったが、痩せ男は何も言わない。爪をかじり続け、いじけたように俯いている。

『斬ってやって』

大丈夫だろうかと思いつつ、コップを避けて男の前に行く。

そのまま何の抵抗もなく男は私に斬られた。

アイテム結晶の光が残り、コップや雲も消えていく。

ただの無機質な部屋が現れた。

すぐにエースは復活したが、その場で崩れ落ちた。

『安静にさせる必要がある』

その後も、駆けつけた兵士たちと一悶着があった。

いつものように武力で解決してから、話し合いをおこなった。みんな納得してくれた。

『非常に平和的だね』

うむ。

「そうかなあ？」

誰も死んでないし、エースも無事だった。

『無事じゃない。目が覚めたらラッキーくらいに考えた方が良い』

……そんなにやばいの。

お前で斬ったのにな？

『そりゃ、神に近いモノに宿られちゃあねえ。精神がぶっ飛んで、もうまともな状態には戻ら……んんっ？』

シユウの声がおかしくなった。

部屋の扉が開き、そこから見覚えのある痩せ男が歩いてやってくる。

彼は空いている椅子を引き寄せ、私たちの側に座った。

後ろには女性が一人ついてきている。

「助かった。——エース。象徴派の監視者だ」

目覚めたらラッキーってはずだったんじゃない？

『人格のバックアップを取ってたんじゃないかな』

「そうだ。君への介入はまずいと判断し、事前に人格をカードに保存し部下に渡しておいた。そのカードが効かない状態になったのは想定外だったが、先ほど何とか状態を戻せた。ここまでの情報も補完している」

よくわからんけど、話せるなら良かった。

まともに戻らないかもってぐらいだったからな。

『人格をバックアップしておいて、リストアとリカバリした後をまともな状態っていうのは……。生身でやろうっていう考えが、もうまともじゃないなあ』

それよりさっさと話を聞かせてくれ。

……何を聞くんだっけ。

「我々がエレティコスに関して知っていること」

隣のジェスターが俄然としてやる気を出し始めた。

椅子から半分以上、身を乗り出している。落ちるぞ。

「ジェスター。神話については詳しいね。それでは神話前の世界についてはどうくらい知っている？」

「神話だと、女神プラセンタが世界を見守り、生命の種を蒔き、慈愛によつて育んでいたってあった。あるとき、十二の獣が誕生し女神プラセンタを食い殺し、世界の生命を脅かした。そこでエレティコス様が——」

そこからは何度も聞いた話だ。

エレティコスが獣どもをバツバツと斬り倒し、世界に安寧をもたらしたんでしょ。

私たちの世界にも似たような作り話がいくつもあったぞ。

「作り話じゃない。これは事実だよ」

「事実ではない。作り話だ」

ジェスターがギロツと睨むが、エースは涼しい顔である。

「神話は作り話で、神は人——異端者だった」

「異端者は貴方たちでしょ！」

話には聞いていたが、これが象徴派か。

三方国とはベースが違うな。そもそもエレティコスと神と認めてない。

『その話、俺はもつと早く知りたかった。話の流れがだいたい読めた。証拠があるんでしょ。異世界間のパスに注目してたのはそれでかな』

エースは頷いた。

「どういふこと？」

『現状での、神話と事実とを整合してみよう。まずエレティコス——彼は実在した。異世界だ。ダンジョンでボスをしてる。さらに彼はダンジョンの法則をここへ送っている』

そうだな。

法則を送ってるのはよく知らないが。

『次に、十二の獣。これもいた。数は微妙だ。もつと多かったかもしれないし、少なかったかもしれない。アドミラシオンの竜もその一体だとすれば、一体一体が超上級のボスとみていいだろう』

「我々もそれらの存在に関してカードを二枚提示できる。キャトル」

今まで影のようにエースの後ろに立っていた女性が一枚のカードを見せてきた。

表面には、……砂時計？　なんかそれっぽいものを抱えたあどけないモンスターが映っている。

「も、もしかして因果の刑獣デスタン……？」

ジェスターの指先が震えながら札に向かう。

よく見ると提示しているキャトルなる女性の指も震えている。

「私がこの国の代表になって、そのカードを発見した。そして、ここより遙か東にある、ブライデンの街の外れで使用をした。街の外壁は石

に戻り、草木は種と粉に、人は産まれる前の形にまで戻された。街は壊滅だ。使用者も巻き込んだ。カードだけがそのままの形で残されていた」

にわかには信じがたい話だ。

「……もう一枚は？」

「死別の理獣エテルネル。こちらは悪いが見せられない。表面に描かれた獣を見るだけで人が死ぬ。同士の命が十五も奪われた。利用せず封印している。キャトル。これに再度封印を」

キャトルがカードを使うと、砂時計の札を何重にも帯が巻かれ、さらに文字が浮き出た。

封印が終わり、彼女はようやく一息入れた。

『すごいね、本当の封印だ。超レア能力だよ。欲しいなあ』

封印は、私がついていない数少ない状態異常付与だ。

特に封印はシユウも狙っているが、なかなか取得条件がわからないらしい。

「我々はエレティコスが神だという世論を疑う立場だ」

『それなのに神話時代のカードを見つければ見つけるほど、彼の所業を認めざるを得なくなってきたと。獣はカードの形で見つかった。何者かに倒されていたことになる。こんな獣を倒せるのはの神しかないのではと、考えざるを得なかったわけだ。それで隠してた。使わなかったのは賢明だね』

エースは長く息を吐く。

『エレティコスなんてそもそも存在しなきゃいいとも考えたけど、残念ながらいた——いたどころか、まだいることまで実証された。これはまずいってことでそもそも神じゃないよねって話に持っていきたい訳だ』

「それで異端者なの！　こんなこと神様じゃないとできないよー！」

ジエスターが納得いかないかとエースを睨んでいる。

『それだけなら神じゃなく英雄でも良い。異端者って呼ぶくらいだ。俺たちが来た理由もまさにそれ。エレティコスがやらかしたであろうことの一つがまだ残ってる』

それは？

『最後の整合になる。まだ登場人物が一つ足りてないよね。——女神プラセンタだ』

「我々は調べた。彼女がどこで獣たちに食い破られたのかを。僥倖にも、断片的な史料をつなぎあわせ女神プラセンタの情報をまとめることができた」

後ろの女性が資料を取り出して、スツと私に渡す。

ふむ……読めんな。

任せた。

「まっかせておいてよ！」

ジェスターが私の手から資料を奪い取り、食い入るように資料を読んでいく。

目を蘭々に光らせ、口も開きながら読んでいたが様子が変わってくる。

瞬きを忘れ、口も閉じて、食い入るように目が文字を追う。

大丈夫かと呼びかけたが聞こえていない様子だ。

「……あの遺跡がそうなの？」

ジェスターが言うには、女神プラセンタのいたらしき場所が最初に私たちが出会った神殿。

その神殿からは魔力の反応が極めてわずかしか確認できなかった。

さらに、意味がわからない情報が流れ込んでいた。

その先が異世界と解析できたのは数年前。

とりあえず監視をしていたらしい。

『俺たちがエレティコスを倒して、異世界との太いパスを発現させた。そこから先は知ってのとおり』

別にどうってことはない話じゃないか。

『女神プラセンタが殺されたであろう場所には、異世界への通路があったって、その先にはエレティコスがいたってこと』

「それって、女神プラセンタ様に代わって、エレティコス様が神になったってことだよね！」

信者大興奮。

耳元で騒ぐのはやめてくれ。

『でも、象徴派でその考え方はしない。エース達はもつとひねくれて考えただろう』

エースはまたしても頷いた。

『俺もエースを支持する。魔物に食い殺された女神に代わって、奴は神になったんじゃない』

「じゃあ、なんなの？」

『あの遺跡は何もなかったけど、魔力反応もほぼなかった。あのときは、こつちの世界の特徴かと思っただけど、違うってわかった。むしろ魔力はこつちの世界のが濃い。メル姐さんはわかるでしょ。魔力の異常な減少は竜の扉付近の特徴だ。さらに言えば、あの遺跡の広間には扉が二つあった。片方は開いてたけど、片方は閉じていた』

今まで話にまったくついて行けなかったが、一気に話が見えてきた。

あそこにいたのは竜の可能性が高い。それなら異世界をつなぐ扉があつて通路もあつた。

奥の部屋に、竜がいたんだな。

「奥の部屋……。うち、最初にそっち行つたよ」

『何があつた？』

シユウがすかさず尋ねた。

「何もなかった。行き止まりだった」

「私も確認済みだ。あの部屋には何もない」

あれま。

予想外だな。竜でもいたのかと思つた。

いや、倒した後だから何もなかっただけかもしれない。

エレティコスが竜を倒して、異世界に行つた。

「やはり彼が女神を殺していたか」

そこはどうでもいいな。

神だろうが異端者だろうがどつちでもいい。

気になるのはそこじゃない。

「順序がおかしいよ。女神様はもう獣に食い殺されて、その後で彼

はそこに行つたんでしょ」

神話を信じるならジェスターが正しい。

私もそつちのほうがすつきりして好きだ。

でも、女神が死んでたらエレティコスが異世界に行つてないぞ。

「ぐぬぬ。じゃあさ、どうしてエレティコス様が女神様を殺すの？」

そこだ。

私もエースの話にはそこが足りていないと感じた。

女神は竜だったのかもしれないが、エレティコスが殺す理由がわからない。

ダンジョンを送り込んだのは知っているが、倒す前に、「この竜を倒せばダンジョンが作れる」なんてわからないだろ。

私にしては良い疑問だったようでエースは回答に窮した。

これ以上は水掛け論になりそうだからやめよう。

『エースが答えられないなら俺が答えよう。エレティコスは修羅であり英雄だ。ここはエースも認めてくれるだろう』

エースの代わりにジェスターが首を振る。

『彼はヤバすぎる獣を次々に狩り殺していった。実際には彼一人じゃないだろう。多くの仲間と一緒に戦つただらうね。たくさんの戦友を見送つた。救えない罪のない命もあつただらう』

ジェスターは目にあふれる涙を手で拭っている。

今の泣くところあつた？

『しかし、狩れども狩れども獣はなかなか減らない。そこで彼は獣がどこから現れるのか、その根源を調べた。元を根絶させようとしたんだ。俺でもそうする』

私もその案に賛成だな。

ダンジョンがなくなればモンスターはいなくなる。

私はやらないけど、モンスターをなくすには根源のダンジョンを壊すのが確実だ。

『敬虔なるエレティコスの信者ジェスター。女神プラセンタはどんな神だったかな？ もう一度教えてくれる』

シユウから突如、話を振られたがジェスターを落ち着いて答える。

「女神プラセンタは世界を見守り、生命の種を蒔き、慈愛によって育んでた。でも、十二の獣が誕生し——」

『そこまでいい』

話に熱が乗ってきたところで打ち切られる。

打ち切られた側は非常に不満そうだ。

『つまり、そういうことなんだ』

どういうこと？

『女神が獣を生み出してた。女神なんて言い方はやめよう、どこかに居るかもしれない女神に失礼だ。——竜が獣を生んでた。獣の種を蒔き、悪意によって育み、災いの成長を見守った。その結果が十二の獣とやら』

女神だと抵抗があるが、竜に変えるだけであり得ると思うから不思議だ。

あいつら碌な事をしないからな。

『エレティコスがそれに気づいたから戦った。彼はこの戦いかその後で負傷した。彼は手に入れたカードに祈った。「自分のことはどうなってもいいから、この世界を魔物の闊歩しないようにしてくれ。世界の人々に安寧を」ってね』

それで世界がこうなっていると。

『世界がこうなっている、ねえ——まあ、そうなるかな。俺も、もう一度だけ言っておこう。彼をなんて呼ぶかは各自の勝手だし、主義や派閥とか本当にどうでもいい。神話の真偽もこの際は脇に置こう。ただ、この世界の今を生きる者としてやるべきことは、彼にきちんと伝えることだと俺は思う。「平和な世界になっっている、ありがとう」ってね』

誰も何も言わない。

一日にいろいろありすぎて、もうパニックだ。

今日は休み、明日になってから落ち着いて考えることとなった。

それぞれ分かれて部屋に行く。

部屋につき、ベッドに腰掛け一息ついた。

ちよつといいか。

『どうぞ。エースの盗聴は偽情報を流してるから心配しなくて良い』
よくわからんけど、それなら遠慮なく——お前、何か隠してないか。
『メル姐さんにあつては、なぜ——そのようにお考えですか？』

その口調がもう何か隠してる感がすごい。

いや、一周回って別に何も隠してないけど、単に馬鹿にされてる気もしてくる。

エレティコスに伝えるべきことは、本当だと感じた。

彼が苦難の末に獣やらを倒したところも、そうだったんだろうと思つた。

ただ、エレティコスが竜を倒したから、世界がこうなつたつて言つたところで、お前が煮え切らない返答をしたのが気になつた。

『あら、俺のせいか……。それは単に誤解だね』

誤解？

『俺が質問をひねくれて受け取つた。あのときメル姐さんは世界が「こう」なつてると尋ねたけど、「こう」つてどんなの？』

いや、だから、そのなんて言うんだ。

お前が言つてただろ。

『エレティコスが元の世界にいて、ダンジョン法則をこつちの世界に送つているから、この世界がダンジョンにあふれている。魔物もダンジョンに封じられている。そんな状態のこと』

まさにそれ。

『ああ、やつぱり誤解。その部分は間違いないと思う。気に留めることはない』

あら、そうなのか。

気にしすぎてみたいだな。

今日はもう疲れた。睡眠が襲つてきている。

さつさと寝ることにしよう。

意識が落ちていくことを感じながら、ふと思つた。

その部分は間違いないと思う……。と奴は言つた。

それなら——、どの部分は間違っているかもしれないのか？

『その話はもう終わってる。後は世界の中心としてただ見つめるだけ――』

すでに意識は途切れつつあり、疑問もシユウの言葉の意味も意識の底に沈んでしまった。

きつともう、浮かんでこない。

6. 未来の道化師：ジェスター

エースの件から一ヶ月が経った。

特に世界は変化がないのだが、大きなイベントが行われることになった。

初の四方国首脳会談だ。秘密裏で行われることになり、今は現地へ向かっている。

ジェスターにとっては長い一ヶ月だった。

そもそもこの会談は、彼女のこの一言から始まったのだ。

――エースと話をした翌日。

「ウチ、エレティコス様にお礼言いに行きたい」

どこにいるのか理解しているのだろうか。

異世界だぞ。長旅なんてレベルの話じゃない。

『転移魔法ですぐと考えたら、むしろ隣国よりも近いと言えるけどね』
屁理屈だ。

だいたいダンジョンのボスだから話も聞かないぞ

『過去に人の話を聞くボスもいたよ』

……いたっけ。

『いた』

「それなら！ ウチも話せるよね！」

わざわざ来なくても私が伝えておくぞ。

「それじゃ駄目なのー！」

なぜだ？

異世界転移されたのは私だ。

私が伝えるべきだと思う。きちんと伝えておくぞ。
ダンジョンに溢れた良い世界だったと。

「メルのは、ダンジョンがあればどこだって良い世界ってなるでしょ。
ウチのは違うの！」

違うらしい。

それなら来てみるか。

「ほんと！ いいの?!」

でも、言葉が通じるのか。

なんか変なことになってなかったか。

『そこだね。話は聞いてくれるけど通じない。これはメル姐さんでも
同じ。チートではバグを直せない。余計おかしなことになる』

駄目じゃん。

どうやって伝える予定だったの？

『文字で伝える予定だった。手紙だね。きちんと心を込めて書けば伝
わるでしょ。よし、ジェスターに書く権利をあげよう』

「文字じゃ駄目だよ！ こういうのは直接、顔を見て言うべきでしょ」
お前はただエレティコスに会いたいだけだろ。

もう手紙でいいじゃないか。

「やだよー。期待させてそれはひどいよー」

腕をつかんでぐらぐら揺らすのやめてくれる。

異世界転移みたいで気持ち悪い。

「なんか考えてよー」

ほら、さっさと考えろ。

『どうしても言葉で伝えたいの?』

「うんー!」

元気な返事だ。

たぶん何も考えてない。

『——最後の結末に責任を持てる?』

「持てるー!」

意味のわからない質問にさらっと答える。

今の尋ね方はわりと真面目だったはずだが、ジェスターは気にして

ない。

『ほお。じゃあ、エレティコスにダンジョン法則の送信を止めるよう伝えてもらえる?』

「伝えるよー。」

そんな話もあつたな。

お礼とダンジョンの法則を止めることを伝えなきや駄目とか話してた。

『ふむふむ。エレティコスと戦える?』

「もちろん戦えるよ! ……え?」

戦うの?」

『最後の質問。エレティコスに勝つまで挑み続けられる?』

ジエスターの返答がやつと止まった。

「エレティコス様と戦うの?」

『あいつは向こうでボスをしてるけど挑戦者が死なない。あれはおかしい。絶対、死ぬような攻撃がいくつもあつたのにな』

そういえばそうだな。

ハンドボウでも、岩落としても普通に死ぬ。

でも、挑戦者が死なないから有名なダンジョンでもある。

『あいつがあつちの世界で人を殺したら、人がカード化してその後で復活するんでしょ』

こつちの私みたいなもんか。

『そうそう。それでジエスターにはエレティコスを倒してもらおう。彼をカード化してもらおうんだ』

「ウチが、神様を?」

そうなるな。

『エレティコスのデッキで報酬が変わるはずなんだけど、メル姐さんじゃお遊びと対人しか引き出せない。対獣デッキを引き出して欲しい。例の翼もそのときだけ返そう。着けるだけで力は発揮しなくて良い。万が一、発揮したらメル姐さんに斬らせる』

むごい。

それはともかく負けたら死ぬんじゃない?

『あつちで戦えば、カード化されて元に戻してもらえないはず。それにジエスターが勝てば彼をカード化できる。チートでエンコして使えば、ちゃんと話せる状態で復活させられるはず。その後で話したいだけ話してどうぞ』

ふーん。

「ウチが神様と戦って、しかも勝って、さらにカード化して、とどめに復活させる?..」

そうだな。

そこまでいって、ようやく本題の話をする。

『順序はたぶん違うね』

あつそう。

負けても再挑戦は可能らしいぞ。

『行くなら中途半端は許さない。全部やりきってもらおう。もしかしたらそれでも話はできないかもしれない。どうする。それでも本当に行きたい?』

「——行く」

今度はちゃんと考えて返答した。

シユウは認めた。それなら私も認めざるを得ない。

その後、ジエスターはエースに自分も異世界に送って欲しいと伝えた。

「ウチも異世界に行くから送って」

「断る」

こんな身も蓋もない会話だったが、シユウが口添えしたらあつさりOKされた。

『ジエスターがこの世界にいたら象徴派としては面倒なことになる。向こうの世界に送りつけて帰らぬ人にした方が良く。よしんば帰ってきて、行かないよりは行かせたほうが好都合になる』

あ、そう。

なんか物騒な話の気がしたがどうでもいい。

それじゃあさつそく戻るとするか。

『今、行っても絶対に勝てない。エレティコスの対人デッキですら勝

負にならない』

じゃあ、どうするの？

『修行あるのみ。決戦用デッキを使いこなせるようにして、その後は四カ国のトップを集めて話をするくらいかな。もちろん彼らと戦えるくらいには鍛える』

「……マジで？」

『無理そうなら来なくていいよ』

「シユウ、ひどい！」

それでも彼女はがんばった。

シユウの修行はいつになくスパルタだ。

その結果、ジエスターは決戦用デッキを扱えるようになった。

『まだ足りない。使えてはいるけど、使いこなせてはない』

そりゃそうだろう。

今の状態でも十分すごいと思うぞ。

『上の下じゃ上の中以上にはよほど相性が良くないと勝てない。ぶつちやけ運だ。最低限の勝負ができるようにはしたい』

後は何が必要なんだ。

上の中は異常なカードと才能が必要なんだろ。

才能がないジエスターがどうやったたら上の中に行けるんだ。

『強くなるうと自らを鍛え抜く努力。自分の使うカードに対する厚い信頼。それに、ここまで来た自分を支えてきた人との友情や繋がり』
努力、信頼、友情ねえ。

それだけで奴に勝てるのか。

『難しい。でも、ここにあと一つ隠し味を加えると勝てるようになるんだ』

ほう、それは？

『もちろんチートだよ。タイトル忘れたの？』

それ隠し味じゃないよな。

チートが入ったら最初の三つが要らなくなるぞ。

ジエスターはチートを使わないって言ってただろ。あとタイトルって何。

『デツキのカードがチートありきなんだから、今さらチートは使わな
いとか五十歩百歩なことを言ったところで笑うしかない。まあ、最初
の一戦か二戦くらいは好きに挑ませてやろう』

ジェスターにとつての本当の敵はこいつなのかもしれない。
どうにか初戦か二戦目で倒して欲しいと祈るしかない。

ついに会談の開催地にたどり着いた。

場所は私とジェスターが出会った謎の遺跡である。

中はシユウが調べており、わずかな魔力以外は語ることもないらし
い。

奴が言うには、もう全てが終わっているとのことだ。

後は見守るだけとか。

四方国のトップが広間に揃い、彼らのお供も付き従う。

ジャックには、老人のオジェにもう一人の使い手。

クイーンには、彼女の車を出す奴ともう一人の使い手。

キングには、ジェスター父と鎧のおっさん。

エースには、封印術式の使い手の女性と戦闘専門の奴だ。

あと私にジェスターだ。

一番目立っているのは四方国の首脳ではなく、ジェスターの父だつ
た。

あの服装でここまで来たということに敬意を表する。もはや畏怖
だ。

話す内容はすでに手紙で通知している。ぶっちゃけ話すというよ
りも、見に来てねという類いのものだ。

「——知っているかどうかわからないが、彼女は異世界から来た」

エースが、開催国のジャックに憤ましすぎる謝辞を述べた後、私を
紹介する。

みんな驚かない。なんか納得してる様子だ。

「彼女は、彼女のいた世界であるダンジョンのとあるボスを倒し、ボス
の転移魔法陣によりこちらの世界へとやってきたのだ。そして、この
遺跡は彼女の世界と繋がっている」

わずかにざわついた。

ジャックやキングは話をしている。

クイーンは何か納得している様子だった。

「本題は異世界との繋がりではない。彼女が倒したボスだ。ボスの名は——エレティコス」

「それはまことかつ？」

クイーンが席を蹴って立ち上がる。

キングも驚いているが、ジャックはふーんというくらいだ。

本当だぞ。

証拠品はお前がもう持つてるだろ。

ボスとのドロップアイテムがああ火炎虎だ。

私がジエスターに渡して、ジエスターがお前に渡した。

「……もう、隠し通すことはできんか」

クイーンが手にカードを取り、白く光らせる。

彼女の脇に炎に包まれた虎が現れた。

虎はクイーンの側を離れ、人の居ない方へ歩いて行く。

しばらく見えない間にすごい人間不審になっているような気がする。

一体何をされてしまったのか。

キングは驚く様子がない。知っていたのだろう。

ジャックは驚き、不適に笑っている。戦ってみたいのかもしれない。

い。

エースは淡々と事のあらましを述べていく。

エレティコスが実在したこと。

彼が神話で出てきたようなモンスターを倒したこと。

さらに、彼が獣を生み出す女神——竜を倒して異世界に行ったこと。

と。

彼が異世界からダンジョン法則をこの世界に送り続け、世界が安全となったこと。

いくつか質問も出たが、エースとシユウ、あと私で答えられることは答えた。

「エレティコスに礼を言いに行く。本来はメルだけが行く予定だった

が……」

「ウチが異世界に行つて、直接エレティコス様にお礼を言つてきます」

エースと私以外の全員がざわついた。

「なんであの道化師が？」

「なぜジエスターが？」

「どうしてジエスターちゃんが？」

彼らの疑問がはつきりと聞こえてくる。

「我ら四カ国の誰かが行けば後で角が立つ。彼女が適任だろう」

即答で却下した人間の台詞とは思えない。

「行つて礼を言うだけなのか？」

ジャックが尋ねた。

誰に尋ねたのかわからない。

エースが答えようとしたところでジャックは続ける。

「違ふよな。戦うつもりだろ。俺も行かせろ。戦つてみてえ」

戦闘大好きな脳筋らしい発言だ。

「余、余もエレティコス神の顔を拝みたい。なんなら握手やサインも

……」

神オタクが落ち着かない様子で一人語りを始める。

誰も話を真面目に聞いていない。

「ジエスターちゃんが行つて、エレティコス神と戦うつてことはわ

かった。戦う理由があるんでしょ。それを聞かせて」

キングがまともに話を進められる質問をしてくれた。

エースが淡々と解説をしてくれる。

「つまり、俺でも良いつてことだよな」

「良くはない。誰か一人が行けば角が立つ。話を聞いてなかったの

か」

「じゃあ、全員で行けばいいじゃねえか」

「異世界の転移ができるのは私だけ。魔力を大量に喰うため二人に限

界だ。メルは確定として、残りは一人だけになる。」

その後、クイーンが余も余もと言いだし、キングも僕もとか言い始め收拾がつかなくなった。

最終的にどうなったかと言えば、実力勝負である。

『予想通りだね』

エースは残りの三人にあきれ果てている。

決まったら教えてくれと、さっさと広間から出て行ってしまった。

「ウチが行きたいって言ったんだから、他の三人と戦うよ」

ジェスターが声を出す。

他の三人はかまわないと頷いた。

誰もが彼女を篩としてしか考えていないだろう。

この三人はかつてジェスターに余裕で勝った奴らだ。

まさか彼女に負けるとは露ほどにも思っていない。

彼らが知っているのは昔のジェスターだ。

熊や他の召喚獣をぽこぽこ出して適当に強化するだけの地味な戦法。

地味故に堅固な強さがあったのだが、今の彼女はその先に踏み込んでしまった。

彼らの誰もそのことにまだ気づいていない。

だから、彼らは——今のジェスターに勝てない。

死に物狂いの努力で強さを得た狂剣士は、自らのカードに怒りを持ち、戦士とは一人で戦い抜く者だと信じた。

自らのカードを絶対的に信仰する夢魔は、ただ夢見るのみで敵を蹴散らし、自分の世界をひたすらに広げていった。

他者の繋がりを基盤に生きる白痴は、自らが鍛えるまでもない。ただ繋がりのみでその地位を守っている。

彼らには努力、信頼、友情あるいは繋がりのどれか一つしかない。その三つを手にしたジェスターは才能こそないが、彼らにとって向こうずねを蹴られるような存在だ。

彼らに何が足りていないのかを戦闘において明白に示してしまう。生死を問う勝負なら彼らが勝つだろう。才能にあふれ、カードにも恵まれた彼らだ。

カードに恵まれただけのジェスターが及ぶことはない。

しかし、これは誰がエレテイコスに会いに行くかを決める勝負であ

る。

自らが彼らの神と会う資格がないことを、その恵まれた才能と才覚が気づいてしまう。

彼らは、ジエスターにその権利を譲った。

譲られた側は、謹んで権利をその手に受け取った。

ちなみに、行く気がないようだがエースはどうかなのかとシユウに尋ねた。

『奴は努力、信頼、友情の三拍子が揃ってる。力と資格だけなら彼が最有力だろう。でも、彼にはもつと根本的なモノが欠けてるんだ。——信仰心。自分と周囲を信頼しきって、自らの及ばない領域を信じていない。外側への興味が欠ける。このレースのスタート地点にすら立ってない』

辛辣な意見だが、この勝負から立ち去った様子を見るに正しかったと言える。

それでも神に近いモノに宿られ、そのうち見解も変わってくるだろうとは話していた。

ともかく、こうしてジエスターが私と一緒に元の世界へ行くことになった。

「やっぱウチが、エレティコス様に伝えないといけないってことだよね。ね、ね」

どやあと私に言ってくるが、がんばったのは本当なので言わせておくことにした。

さて、広間にエースも戻ってきて、さっそく元の世界に戻ることもなった。

「用意はいいか？」

「大丈夫」

私もかまわない。

「発動する」

エースのカードが橙色に輝き、世界が歪み始めた。

以前の転移とはだいぶ違う。

かなり緩やかな変化だ。前回が崖から飛び降りる感じなら、今回はロープで吊り下げられてる感じ。

元の世界に戻ったとわかってても違和感がほとんどなく本当に転移をしたのか疑うほどである。

「ここが異世界？」

見覚えのあるボス部屋だった。

どうやら入口の扉近くに送られたらしい。

奥にはこれまた見覚えのあるボスが仁王立ちしている。

「ねえ……、ううん、わかる。あの人がそうなんだよね」

そうだ。

「思ってたとおりの人だ」

初めて戦ったときは背の高い逞しい男くらいだったが今は印象が少し違う。

異世界でいろいろと見てきて、その印象はだいぶ変わった。

その精悍な顔つきは戦いの中にいたからだ。常に戦場だったのだろう。

赤く焼き付いた顔も、日に射されつつも世界中を渡り歩いた証だと考えられる。

体のところどころに見える火傷や怪我の跡も、獣たちとの長い戦いをくぐってきた道を示す。

「神話に出てくるとおりよな！」

何か声が聞こえた。

「えっ、クイーン？ どこから？」

「今、エースにお主の視界情報をこちらに送ってもらっておる。壁に映して皆で見ておるぞ」

そんなことできるのか。

「これすごいねえ、もしかして他の国にもこういうことしてるの？」

「おい、もっと奴を映せねえのか。よく見えねえぞ！」

「……うるさいなあ」

他三人のトップ達の声も聞こえてくる。

それでどうするの？

「話は後。まずはこのカードを返す」

ジェスターがエレティコスへと歩いて行き、彼の前に立って二枚のカードを差し出した。

一枚は奴の切り札で、もう一枚はクイーンから返してもらった虎だ。

彼は組んでいた腕を解き、そのカードを手に取る。

「お返しします」

今はそれだけである。

彼女はこちらへと歩いて戻り、また彼と対峙した。

「それじゃあ、話をするため——神様、あなたに勝つ！」

気合いを入れつつ宣言し、ジェスターがいつもの初手を出した。

ぬいぐるみの熊である。

エレティコスがそれを見て、懐かしそうに目を細めた。

彼の手に札が現れたが、ジェスターはさらに熊に装備を着ける。

藍色の光が発せられ、ジェスターの背に気持ち悪い翼が生えてきた。

エレティコスの表情から懐かしさが失われた。

顔を硬直させ、自らの手札を消した。すぐにまた手札が現れる。

『思ったとおりデツキを変えたね。お遊びデツキから対獣デツキだ。覚悟を決めて戦ってね』

「もちろん！」

エレティコスが自らの手札を示す。

カードには見覚えのある火炎虎が描かれていた。

「ずいぶんと儀礼的だね。出すカードを相手に見せるなんて」

彼の前に、ジェスターが返したばかりの火炎虎が現れた。

火炎虎は主人の側に付き、そつと頭を彼に寄せ、彼もまた虎の頭を撫でる。

手が燃えてものすごく熱そうなのだが、特に問題ないようだ。

「見よ！ エレティコス神が炎虎マルスを出したぞ！」

「撫でておる！ 撫でておるぞ！」と神オタクが叫んでいる。

ジェスターの顔は緊張と喜びが入り交じり、どうしていいのかわか

らないといった様子だ。

「最初はこれだ！」

ジェスターの手札から白い光が輝いた。

熊の脇に黒の剣を持った影の剣士が召喚される。

これが彼女の決戦用デツキである。

私があちらの世界で斬った人たちのドロップアイテムを、ジェスターがカードに変換してデツキに組み込んだ。

チートというか異世界人ありきのデツキだ。

「初っぱなから俺かよ。よっしゃ！ 斬ってやれ！」

ずばり影の剣士はジャックだ。

効果もほぼ同じ。徐々に鎧をまとって強くなっていく。

逆に言うとも最初は驚くほど弱い。もちろんジェスターが扱い切れ
てないだけである

『相手を油断させるのにはちょうど良いよね』

エレティコスも、何が出るかと思えばただの影人だったので手が止
まっている。

やや悩みつつもカードを一枚、こちらに見せつけてくる。

描かれているのは、手や足、首に枷を着けられた多くの魔物達だ。

「おい爺、あれってまさか——」

「そうじゃな、あの絵じゃ」

カードは白に輝いて、周囲からは様々な魔物が湧き出てくる。

どの魔物も体のどこかに枷が填められており、枷を引きずるように
寄ってくる。

「壁画に描かれてた獣だ。十二の獣の一体。罪禍の使獣オールドル」

ジャックの洞窟で見た記憶があるようなないような、記憶にはほぼ
ないな。

それよりも一体という割に少なくとも十体はいるんだが。

強くはないが数がどんどん増えていつてる。

熊と剣士では相性が悪い。

「奴らは群体。その全てがオールドル。一体一体を倒しても意味がな
い。まとめてやれ。わかるな、ジェスター」

「うん！ 力を借りるね！ クイーン！」

クイーンからアドバイスを受け、ジェスターはカードを選んだ。まとめて潰すならやはり彼女を置いて他にいない。

エレティコス你真似をしているつもりなのだろうか。

彼女も自分のカードを彼に見せつけてから、カードを使う。

すぐに影の女王が現れた。

女王は色とりどりの光に包まれ、周囲の獣を殲滅していく。

ときどき黒の鎧の剣士も巻き込んで、獣たちをどんどん一掃していった。

「すごいねえ、あつという間だ」

「おい、お前の影が俺も攻撃してたぞー！」

なんだか向こうも楽しそうだ

エレティコスがカードをこちらに見せている。

そこに映っているのは、無数のトカゲに似たモンスターだ。

「大悪の喰獣レザールか。神話では聖炎に燃やし尽くされていたただけだが……」

すっかり解説役になってしまった。

召喚系かと思っただが、紫に光って消えた。紫ってなんだっけ？

「妨害系。周囲八方に反応あり」

オールドルを攻撃していた女王の攻撃が消えていく。

攻撃は出るが、魔物に接触する前にどこかへ飛んで消えてしまう。

「八方の空間が攻撃を食べてるんじゃないかな」

キングが予想を述べるが、対応策がない。

魔法攻撃を吸い取って食べるなんてどうやって防げばいいのか。

『簡単だよ。数には数を。食べきれない量の攻撃をすればいい。場に女王がいるなら、フィールドは夢だ』

それなら……。

ジェスターの手札には、靄に包まれた札があった。

彼女は札をエレティコスに見せる。表面は靄が覆われ何も読み取れない。

光は虹色。

「虹色……すごいねえ。初めて見たよ」

「あ……、あっ……」

周囲が靄に覆われていく。

どこかから戦士やよくわからないモノが軍靴を鳴らしてやってくる。

「やだ、こないで……」

攻撃が始まった。

周囲のオールドルに加え、攻撃の吸収も発動しているが、それを上回る量の攻撃が飛び交っている。

妨害効果も徐々になくなっていき、ついにオールドルへも攻撃が通るようになった。

「や！ ぐ機嫌麗しゆうですな！」

「ああああああ！ いやああああああ！」

クイーンの叫び声が周囲に響く。

他の人たちに押さえつけられたようで、しばらく向こうから慌ただしい音が聞こえてきた。

『ああ、せっかくの解説役が……』

オールドルも残り数体になり、エレティコスが新たな札を見せる。

絵には私たちとエレティコスが映し出されている。札はそのまま青い光を生じた。

「ややや！ ひどい！ せっかく——」

声が消え、靄の戦士達も全て消えてしまった。

さらに影クイーンの攻撃が一気にしよぼかれてしまう。

『フィールドのリセット。強制的に現実に戻すか。これは天敵だね。完全な幻想じゃなきゃ問答無用でさよならだ』

「現実ってまさか実存の現獣アクチュエルだったの？」

さらにエレティコスは札を見せてくる。

絵には何も描かれていない。真っ黒ではなく、真っ白になっている。

「何も映らない。……空虚の零獣リヤン？」

それがどんなものなのかの解説はない。

解説役が脱落したのが惜しまれる。

札は緑色の光を発した。

トラップだが伏せてない。

時間稼ぎが目的の何かだろう。

視界が消えた。

視界どころか音すらも消えてなくなった。

地面に立っている感覚もなくなっていく、もしかして無敵状態かも思ったが違う。

『おもしろいカードだね。自己の確立を強制させるなんて。物理攻撃が効きづらい奴でも、ある程度の時間稼ぎができる。自己概念が薄い奴ならこれだけで封印ができる』

お前の声だけは聞こえるんだな。

『俺には何の変化もない。ジェスターの声や姿だつて今もちゃんと映ってるよ。早く戻ってきた方が良い。メル姐さんはダンジョンを攻略する自分だけを考えればすぐ戻れる』

ダンジョンを楽しく駆け回ってる自分を想像する。

視界がまた大広間に戻った。召喚獣による戦闘はまだ続いているがジェスターは突っ立っている。

彼女の召喚獣たちは果敢に戦っているが、夢のフィールドがなくなつて厳しい戦況だ。

数匹だったオールドルがまた増え始め、時間が経つほど不利になっていく。

ジェスターはまだあの中にいるのか。

早く戻らないと、数で潰されてしまうぞ。

『そうなんだけどね。なかなか難しいみたい。自己中で単純すぎるのも考え物だけど、信仰深いのも考え物だ。神の存在を世界の中心にしてしまう傾向がある。自分が何なのか見つめ直す良い機会だね。助言はしたからそのうち戻ってくるよ』

悠長なことを言ってる場合か。

このままじゃ為す術なく負けてしまうぞ。

『相手が、信仰する神その人だからね。初回でこれを脱するのは難し

い。………おっと、思ったよりも早かった』

ジェスターは、はっとした様子で周囲を見渡し、戦況が一変していることに気づいた。

こちらが殲滅する側から、殲滅される側に移っていると理解はした。

影ジャックが鎧を着け強くなっているが、基本的に単体攻撃だ。

範囲攻撃の影クイーンが弱くなったのは厳しい。

手札ではどうしようもないようで、諦めそうな表情になりつつも彼女は相手を見る。

奴は相変わらず、戦況を見守っている。このまま圧殺するつもりだろう。

ジェスターは、彼女の神から目を逸らし、自らの熊を見た。

——熊の翼が青く光ったのはこのときである。

おい、あのときの光が出たぞ。

どうする？ 斬るか。

『待った。奴が動いた』

先ほどまで動きなく戦いを見守っていたエレティコスが手札を使った。

手札をこちらに見せてくる余裕はないようで、一気に三枚を連続で光に変えた。

色は黄、銀、それに藍色だ。

火炎虎に黄色の光が纏わり付き一回り体格が大きくなった。

銀色の光が大広間全体に広がったが、その後は全体がぼんやりと光るだけだ。

『場全体の状態異常防護だね。微回復もおまけ程度にある。当時はこれで周囲を守ってたんだろう。範囲は強力だけど相手にも効果が出るのは欠点……いや、それが狙いだな。防護の膜を相手に付着させることで効果を格段に落としてるのか』

なるほど、オールドルどもが急激に倒れていったが、新たに出てくる奴は効果を受けてない。

それでもあの光で、かなりの数を減らすことができた。

『最後の効果が発揮されたね』

藍色の光が、巨大化した火炎虎に纏わり付いた。

火炎虎の実体が融けていき、炎の色も赤から白へと変わっていく。

白き炎は、エレティコスを燃やし、さらに炎は大広間全体へとみるみるうちに延焼する。

影ジャックや影クイーン、それにオルドル達も炎で包まれる。私やジエスターもだ。

特に効果はないのかと思っていたが、一体だけはつきり効果があった。

熊の翼だけが異様に白く燃え、青き翼を焼き落としていつている。

「格好いい翼が……」

気持ち悪い翼が全て融け落ちるまで、白き炎は燃え続けた。

熊は翼を燃やされる痛みでのたうち回っていたが、今はうつ伏せのまま倒れている。

「すつきりしたねえ。翼はない方がいいよ」

キングがさらつと言った。

ジエスターがぴくりと反応したが、私もキングに大賛成である。

『実体消失型の条件付きカードだね。召喚獣の本質だけを抽出している。やっぱり火炎虎の炎は害のあるモノを燃やす効果なんだ。獣たちとの戦いで必須だったんだらうね。ただ、獣たちとの戦いが終わったら使い道がほぼない』

それで神になってからはゴミ札か。

『特に異世界のボスになってからはそうだらうね。両方が万全な状態で復活したり、させたりできるから。ただ、強力だけど、これは自らのカードも制限する。生命に甚大な害を為すカードは使えない。翼や砂時計、死といった異常な獣カードが向こうの世界に残ってたのはそのためでしょう。……使う気もなかっただらうがね』

白い炎が揺らめく大広間で、戦いはまだ続いている。

再びオルドルが復活を始めたので戦況は不利だ。熊もまだ起き上がれない。

ジエスターは手札からカードを取ってエレティコスに示す。

そのカードに映っているのはキング。椅子に座り、冠を頭に乘せ、不適な笑みが浮かんでいる。

影のキングが現れた。

キングは彼に与えられたインヒラントカードを使用する。

一枚のカードが二枚に、二枚が四枚にと増えながら、彼の周囲を回る。

周囲を回ってはいいるが、本人のカードよりもその数は圧倒的に少ない。

カードの使い方も本人より未熟と言わざるを得ないだろう。

それでもなんとかオールドル達と拮抗し始めている。

『とても良く効いてるね』

そうでもないだろ。

ジェスターが不得意なカードの一つだ。

戦闘ができるようになっただけでもマシな方だろう。

『このカードの本質はそこじゃない。戦闘はおまけ。ほら、効いてる効いてるう』

修行中もそんなことを言っていた気がする。

オールドル達に効果があるように見えない。活躍は夢なしの影クイーンにも劣る。

『どこ見てるの。このカードはオールドルじゃない。エレティコスに効くんだ』

視線を変えて、エレティコスに向けると、彼は両手をだらりと下ろしていた。

翼を使ったときの緊張も顔からは消え去り、キングの姿を眺めている。

『エレティコスはジェスターが使ってくる影人の札を正しく理解している。元はあちらの世界に生きる人で、それをカードにして使っている。そして、ジェスターが未熟で札を扱い切れてないのもわかってる。ただ、弱くてもその人のあり方は伝わるんだ——ひいては、今の世界がどうなっているかも彼らが示してる』

ジャックとクイーンは全然なのに、キングで効果があるのはなぜ

だ。

私から見ると、ただの弱っちい影人だぞ。

『ジャックは、個人の弱さとそれを克服する努力を示した。クイーンは、カードによる圧倒的な個人の力と、ひとたび崩れたときの脆弱性を示した。ここまでは個人だ。キングは集団性を示した。本人は弱っちいが、それを束ねられる可能性があること。その力の可能性をね。この三つを示したなら、世界は再び人々が手に手を取り合い再建しているとわかる』

そうかもしれないな。だが――、

『そう、実際はばらばら。でも、彼はまだそこを理解してない。ここまですらエレティコス生き抜いた時代でもあり得たことだ。彼は待っている、次の手をね』

ジェスターはさらにカードを、彼に示す。

そこにはエースが描かれ、やる気のない様子で立っている。

橙色の光が輝き、カードは消え去った。

使いこなしたら一番強いカードなのらしいが、ジェスターが一番苦手なカードだ。

効果はシンプルで、ジェスターができるのは味方の強化と相手の解析くらいしか使えない。

おまけで連携が上手く取れるようになるくらいだろう。

『おまけこそ重要なんだ。人々が協力し獣たちを打ち倒していく様子を示す。もつと言えば、相手は獣ではなくエレティコスだ。当時、彼は一人で女神に挑んだんだろう。だが、今は違う。人々が協力して神に挑んでいる。人々が神の存在を否定する時代になったと示しているんだ』

伝わるのだろうかと思っていたが、伝わっていた様子である。

彼はうなずき、表情も柔らかくなりジェスターとその召喚獣を見つめている。

オールドがどんどんやられていくが、まったく興味はなさそうだ。むしろやられていくことを喜んでいた。

『ジェスターには悪いけど、彼と言葉で話す必要なんてないんだ。彼

女との戦いこそが、今の彼にもっとも良く伝えてくれる。——あなた
はもう必要ないんですよってね』

それって、ダンジョンの送信は不要ってことも伝わるの？

『伝わる。今の世が平和な世界だって嫌ってほどわかる。彼女の訳の
わからない服装でも世界を歩ける世界だってね』

嫌な伝わり方だけど、それはなんかわかる。

初めの頃は、本気でこの服装のまま外を出歩くのかと思ってたし。

オルドルが全て消されてしまい、場には五体の召喚獣と聖炎が残る
のみだ。

エレティコスがジエスター達を見つめ、躊躇いつつ一枚のカードを
示す。

『——だからこそ、神は試すだろう。彼らの世界がまやかしではない
のかと。一陣の風で吹き飛んでしまう、脆く儂い世界じゃないのかっ
てね』

札に描かれているのはよくわからない獣だった。

「……瘴気の原因デザストル」

札は赤く輝き、エレティコスの手札を全て消費して発動した。

彼の前の空間が歪み始めている。

『魔力爆発だね。相手が世界に存在しているものなら、これは物理的
に防げない。これが対女神の最終兵器か。自爆技だな』

ジエスターも同じく、カードを消費する。

白い光が生じ、彼女の目に現れる。

影のジエスター父だ。影になっても一目でわかるシルエットはす
ごいと思う。

彼は影のピエロを周囲に発生させ、他の召喚獣やジエスターに私、
エレティコスまで守ろうとしている。

普通の攻撃なら、これで一撃だけ確実に防いでくれる。

『でも、魔力攻撃は影を貫く、そこで——』

「——お母さん、お願い」

ジエスターは追加で一枚使用した。

銀色の光が灯り、彼女や周囲に散らばった。

彼女の母のインヒラントカード——光はただの魔力防護の膜だ。普通の攻撃なら少し弱める程度の効果しかないが、純粹な魔力に対しては効果が大きい。

それでも、獣のカードの攻撃は堪えきれない。

魔力の爆風で、銀色の膜が弾き飛ばされ、次の影クラウンも堪えようとしたが消え去ってしまう。

残った爆風の残滓に召喚獣達は巻き込まれる。

私だけが平気な顔で立って、周囲はみな倒れてしまった。

倒れてはいるが、誰も消え去ってはいない。

各自が呻きつつも立ち上がろうとする。

カードを使ったエレティコスさえ安堵した表情で立ち上がった。

彼の手に一枚の札が出てきた。

対するジェスターはエレティコスと他の召喚獣に見守られながら、なんとか立った。

彼女の手札は残り二枚だ。

先にカードを切ったのはジェスターだ。

札は橙色の光を発した。

先ほどからずっと倒れていた熊がぐにやぐにやと動き、中から札の影人が出てきた。

「縛フシ罫ハシ。縛フシ罫ハシ？。樟カ莠コココ逾コ械コおコ綱コヤコ綱コ？。うコ纏コウコ纏コケコ纏コ」

影人はふざけた口調で何かを言った。

おそらく、今のを聞き取れたのはこの中で一人だけだ。

『おお、おお、現人神エレティコスよ』

言われたエレティコスは聞き取れるようで、やや驚きつつ彼の声に耳を傾けている。

影人が続けて何かを言い出したが、まるで聞き取れない。

翻訳よろしく。

『あなたは世界を救おうとし、自らを犠牲にした。その結果、彼らはこのように貴方の前に立っている。あなたはもう試された。今さら何を迷っておいでか？』

影人は笑いながらエレティコスに話しかけ、彼は静かに認めるだけ

だ。

『おお、わかっておいででしょう。彼女たちは、貴方にそのカードを返した。貴方が願ひ、その札を切られるならば、彼女たちに幸せな未来は約束されるでしょう。彼女たちもその未来を受け入れましょう。しかし、彼女たちは——貴方本人はそれを望んでおいでか？』
またしても言葉を切る。

エレティコスとジェスターの間地点まで歩み、ふざけた口取りと足取りでくるくる回っている。

『選択は彼女の最後の一枚を見てからでも良いのではないですか。それこそが貴方の選択を決定づけることに間違いありません』

影人はエレティコスに一礼する。

さらに振り返り、影人はジェスターに残りの一枚を使うよう手で示した。

全員がジェスターの最後の一枚を見つめ、彼女はその手札を切る。使った本人が一番、首をかしげてその一枚を光に変えた。光の色は白である。

ジェスターの前に、影のジェスターが現れた。

帽子をびよこびよこ弾ませながら走り始めた。

エレティコスの前まで行って、振り返り他の影を手で来いと呼んでいるようだ。

他の影は誰一人としてその呼びかけに応じない。

影ジャックや影クイーンに近づき引つ張るが突っぱねられている。

他の影を諦め、私の側に来て手伝えと言わんばかりに腕をぐいぐいと引つ張る。

仕草だけは本人とそっくりだ。近くにいるジェスターも恥ずかしそうにしていた。

仕方なく私も影について行って影ジャックから影エースまでを後押ししていく。

影の父親は影のキングに従いついていき、影人は踊りながらエレティコスやその他の影を笑っている。

影の全員がエレティコスの前に立ったところで、影ジェスターがま

た振り返る。

最後の一人——ジエスター本体をエレティコスの前に来るよう呼んだ。

彼女が影と同じように帽子を揺らし、慌てて影達の列に加わる。

影ジエスターは、ジエスターをつつき何かを待っているようだった。

「何？ 何なの？」

ジエスターが狼狽していた。

本当にわかってないのか。お前の影だろ？

早く礼を言えつてよ。

周囲の影も早く言えよとジエスターを見つめている。

「今言っても通じないんじゃない？」

それでも言えという様子で、影達が黙りこくつてジエスターを見つめる。

そこに私とエレティコスの視線も加わり針のむしろだった。

「えっと、なんていうのかな。ウチ、神様にあこがれてて、まさか会うだけじゃなくて、戦うことになるなんて思ってもみなくて……、本当に楽しくて、嬉しくて、平和な世界で、だからその——ありがとうございまして！」

本人も途中で何を言っていたのか忘れてしまった様子で、とにかくお礼を告げて締めた。

ジエスターがぺこりと頭を下げ、謝辞を見せると、周囲の影達もそれぞれ態度で謝辞を示した。

言葉は通じたかわからないが、その姿勢はエレティコスにも伝わっていた。

彼はそこに並ぶ全員を再度見渡し、最後の手札の一枚を消した。

使用することもなく、自らの負けを認めた。

彼が光となって、消えていき一枚のカードになった。

表面は真っ黒で中身がまるで見えない。

ジエスターが拾いあげる。

『使ってみて。処理しておくから』

カードを切ると白い光とともに、目の前にエレティコスが現れた。先ほどと同じはずなのだが、かなり穏やかな顔をしている。

「子供達よ。見事だった」

落ち着いた声がジエスターにかけられる。

「言葉はわからなかったが思いは伝わった。私の願いは果たされたんだな。君たちは私に礼を言ったようだが、私も君たちに礼を述べたい。——ありがとう」

エレティコスはジエスターの肩に手を置いて謝礼を述べた。

ジエスターは何も言えず、涙を流すのみである。

「どうして泣く。喜ぶべきだ。獣たちは迷宮に封ぜられ、女神も世界から消滅した。君たちが平和な世界を作り上げ、私にわざわざそれを伝えに来てくれた。そんな君たちが泣いていてどうする。それは私たちの代で終わらせたものだ。ほら、笑って——」

エレティコスに両頬を軽くつねられて、ジエスターはがんばって笑いを見せる。

「うん、そうだ。その顔を忘れないでほしい。私たちは、君たちのその顔を見るために戦ってきたんだ。それだからこそ、最後の願いは札ではなく、——君たちに託すことにした。どうか、皆で笑いあえる世界を築いていってくれ」

頼んだよとジエスターと軽く抱擁を交わす。

「それじゃあ、最後の務めを果たすでしょう」

大広間の床が光を放った。

複雑な図形が浮かびあがり、ジエスターの姿が薄まっていく。

「ありがとう。未来の道化師」

ジエスターの姿は消え、私とエレティコスだけが残る。

見ると、エレティコスの姿もまた薄くなってきた。

「異世界の冒険者よ。貴方にこそ、一番に礼を言うべきだった。遅れてしまい申し訳ない」

かまわない。

気にしないでくれ。

奴らと話す時間こそ重要だ。

「文字で伝えてもらえるだけで御の字だったが、——まさか未来の子供達まで連れてきてもらえるとは思わなかった。願いが叶いすぎているようだな。それに、これで私もようやく朋友たちの下へ往くことができる」

どういうことだ。

『異世界にジエスターを送るため魔力を全て使った。このダンジョンはまもなく消滅する。大丈夫、エンコードはきちんとしてたから』

いや心配はそこじゃない。

消えちやうの、ここ？

「そうなる。すまないな」

いや、あんたにそう言われちゃ私には返す言葉がない。

ダンジョンのボスになってまで、彼らのことを思っていたんだ。

それくらいは……まあ、しょうがないよな。

「待って」

声が聞こえてきた。

「なんでメルはこっちに来てないの？」

姿は見えないが、ジエスターの声だ。

『俺が時空間耐性をつけたから。二人の転移をするには魔力が怪しい。実際、正しかった。なにより、ダンジョンが消えてパスが完全に消えるところつちに返るのが極めて難しくなる。そうだよな』

「ああ」

エースが言葉短く肯定した。

「ウチ、やりきったんだよ！ 歓喜と感動が最高潮なの！」

声だけで十分伝わってくるよ。

「違くて！ これを分かち合いたいの、メル——貴方と一緒に！ ダンジョンならいいんでしょ！」

そうだな。

お前の夢が叶ったことは、私にとっても嬉しいものだ。

「どうして？ どうしてそんなに落ち着いてるの？」

いつかはこうなるってシユウから聞いていたからな。

それが今になっただけということ。

「ウチ、もつとメルとダンジョンに行きたいよ」
私だつてそうだ。

お前との異世界ダンジョンは楽しかった。
お前が強くなつて、どうモンスターやボスと戦うのを見るのは面白
かった。

「ウチ、もつともつと強くなるよ……」
そうか。

そうかもしれないな。

お前は、未来の道化師だ。

まだまだ可能性に満ちている。

「ウチがもつと強くなつて異世界にも行けるようになったら、一緒に
ダンジョンに行つてくれる？」

当然だ。お前は私のパーティーメンバーだからな。

ダンジョンへ行きたいというのなら、いつだつて歓迎する。

「本当は今こそ一緒に行きたい。でも、叶わない。これって悲しいよ。
メルは悲しくないの？」

ジェスターの声から、泣いていることがはっきりわかった。

嗚咽も混じっている。

……私は悲しくない。

お前とこちらの世界のダンジョンへ行くことが楽しみで仕方がな
い。

「そんなの嘘だよ」

……そんなことはない。

「メル、嘘をつくのが下手だからさ。つくときにちよつと黙ってから
言うんだ。知ってた？」

知らなかった。

気をつけることにしよう。

「もう、ウチは悲しま……。エレティコス様と約束した……。ね」
声が途切れて聞こえるようになった。

「みんなで笑いあえ……。ウチ、がん……」

ああ、がんばれ。

私もダンジョンに潜り続ける。

「うん。……一緒に……ジョン。それまで——」

ジェスターの声が聞こえなくなった。

エレティコス姿もすでに消えている。

『ダンジョン反応が喪失。パスも消えた』

そうか。

『ジェスターは最後の責任を果たしたね』

そうだな。

……私も宿に帰ることにしよう。

異世界の攻略は完了し、彼らの夢や願いは叶った。

もちろん私も攻略を堪能した。最高のダンジョン攻略と言わざるを得ない。

それなのに——、なぜだろう？

どうしてこんなに足が重い。

一歩ごとに空しさが増してくる。

視界も滲んで扉がよく見えなくなってきた。

アイテム結晶も、ボスを倒した達成感も、メンバーとの喜びも消えてなくなった。

私には別の未来も選べたはずだった。

異世界に転移してジェスターとダンジョンを攻略する未来だ。

もうこちらの世界に戻れないかもしれないが、きつと多くのものを手に入れただろう。

どうしてこの未来を選んでしまったのか。

選ばれない未来ばかりが明るく輝いている気がする。

今の私には、ただ——

ダンジョン攻略達成という虚しい響きだけが残っていた。

蛇足27話 「本の中の英雄」

Level 0. また異世界か……

朝起きると、目の前にオレンジ色の光が出ていた。

宿屋のベッドの上で、白いシーツが光に照らされ、淡い色合いを浮かべている。

『やっと思きたか』

もしかして呼んでた？

『七回くらいね』

そりゃご苦労。

で、これは何？

『召喚魔法の発動待機段階だね』

召喚、ね。

ここに何かと呼ばれてるってことだな。寝ぼけてる場合じゃない。

『逆。誰かがメル姐さんを召喚しようとしてる』

……私を？

『そう、メル姐さんを。しかも異世界から』

なぜ私を？

それにわざわざ異世界から？

『条件設定型の召喚なんだ。抽出条件に引っかけたのが呼ぶ側の世界にいなかったから、大きな世界の範囲を飛び越えてメル姐さんが選ばれた』

ほーん。

どんな条件なの？

偉大な冒険者？

『それはないね。条件は複数あつて——まず「魔族、魔獣といった人外を統べる地位に就いている。あるいは就いていた』』

いきなり違うんだけど。

『前に魔王をやってたからそれで該当したんだろうね』

……ああ。そういやそうだったかもしれない。

『次に、「世界破滅の危機を救ったことがある』』

それは、どうなんだ。

人とか村やら町ならまだしも、世界って。

『実はこれも何度かある。月を落とすとか、救い方はめちやくちやだったりしたけどね』

ああ、あれね。

『で、次は——』

まだあるの？

『まだまだある。「死後の世界もしくはそれに準ずる世界を訪れ、無事に帰ることができた』』

あつたね。

彼女たちは元気だろうか。

名前が出てこないが、顔は出てくる。

詳しく思い出すよりも前にシユウが話を進める。

『次に行くと。「神と呼ばれる存在、もしくはそれと近い存在だ』』

お前のことか？

『実際は俺もだけど、ここでの条件的には違うと思う。邪神様、エレティコス、クソ女神のどれかだと思う。たぶん邪神様スキルで引つかかってるね』

あ、そう。

『まだある。「竜を倒したことがある』』

あるな。

『大きなところではこれくらい。他にも細々とした条件がたくさんあるね。全部該当してる。おめでどう』

別にめでたくはない。

……でも、そう考えると私はけっこうすごいんじゃないだろうか。

『振り返ってみると普通にすごいね。——で、これらの条件に該当するものを召喚しようとしている大馬鹿がいる。はつきり言える。こいつはメル姐さんより馬鹿だ』

ある意味ですごいやつだな。

『大規模な魔法陣だろうね。わかって書いてるなら望んでるのは世界の崩壊か救済のどっちか』

どつちにしろ良いものじゃないな。

『さらにこいつは召喚対象に隷従まで付けてる。ここまで来ると笑える、大草原や』

隷従って奴隷に付けるやつでしょ。

『そうそう。さっきの条件に該当するやつに隷従なんて無効化されるに決まってる。跳ね返されるまでである。しかも隷従の付け方が雑。甘すぎる。こんなの付けない方がまだまし』

それでこの光はいつ消えるの？

『直に消えるよ。条件に該当した十二カがいるつてのが呼んだ方にもわかっているから、がんばって待機状態を維持してるだけだからね。この維持しているのだけは褒めてやってもいい。根気と必死さが伝わってくる』

ふーん。

なんにせよダンジョンがあるかどうかもわからんのに行くことはないな。

『ダンジョンっぽいのはあるね』

あるの？

というかなんでわかるんだ？

『読み取った感じだと、これは条件に該当するモンスターをダンジョンから召喚するのが目的のもの。ダンジョンの内外という境界を超えて、モンスターを隷従させるのが目的でしょう。召喚者への好意付与効果もある。それに馬鹿みたいなアレンジを加えた結果がこれだと思われる』

よくわからんけど、ダンジョンはあるんだな。

『まったく同じではないけどね。モンスター部分の記載がおかしいし、向こうの世界特有のコードがいくつつかある』

それは、まあそうだろう。

『さらに馬鹿なことだ。対価の項目が空白なんだよなあ。馬鹿じゃねーのか、こいつ』

どうということ？

『召喚者が、メル姐さんを召喚する代償として、これこれのものを差し

出しますってこと。冒険者っぽくいうと依頼報酬だね』

つまり、こいつは私を呼び出すけど、私には何もやらないというケチ野郎って訳だ。

『そういうこと。ある意味ですごい奴だ。そこらの貴族でも劳いの言葉くらいは出そうとするぞ。おっと、追記だ。……へったクソなコードだなあ、読みづらすぎ、うわっ!』

驚いたと思ったら、何かゲラゲラ笑い出した。
どうかしたのか。

『さすがに無報酬はやばいと思ったのか、対価の項目に追記があった。その内容がね』

なんて？

『私との素晴らしい日々をお約束します!』だってさ』

なんじゃそりゃ。

私もおもしろくなって笑いがこぼれる。

『……ふうむ』

シユウの声が真面目になった。

こういうときは尋ねるとはぐらかされる。黙って語るに落ちるのを待つに限る。

『まず、こいつが大馬鹿なのは間違いない』

それは私にもわかる。

『うん。こいつは召喚を魔法陣でやってる。この規模だとそれしかありえない。召喚の目的は世界の救済か破壊だと思ったけど、何か雰囲気が違う。たぶん召喚条件の意味なんてほとんどわかってない。これでとにかくすごいのが来るって思い込んでる』

まあ、すごいのは来るんじゃないか。

さっきの条件のどれか一つでも該当すればやばいのが来る。

『一つや二つに該当するだけだとやばいのが来るだろうけど、三つ以上だともう何か訳がわからないのが来るだろうね。俺はちよつと興味が湧いた。世界の破滅を目論むやばい宗教団体か、暇を持て余した国の魔法研究施設か、瀕死で一発逆転を狙った反抗団体のどれかかと思っただけど、どれも違う気配を感じる』

と言うと？

『たぶんガキだ。十二から十八の間で、馬鹿真つ盛りの時分だね。ここまでの規模の魔法陣が用意できるなら身分はかなり高い。でも、この魔法陣のやばさがわかってない。分別が圧倒的に足りてない。あと、追加項目と召喚条件でコードの書き方が違いすぎる。たぶん、召喚条件は資料の見よう見まね。もしもここでメル姐さんが行かなかったら、また同じような召喚を他の対象にする。そのときはたぶん、まあ、身をもって償うことになるでしょう』

分析はもういいよ。

私も興味自体はある。ダンジョンがあるなら行っても良い。

それで、行った後に帰ってこれるの。

『今回は間違いなく帰れる。契約の不履行があれば、契約破棄されて帰れる効果が織り込んである。今回の契約もすごい曖昧なもんだからなんとでもなる。それに召喚者が死んでも帰れるね。魔力はポイントで補おう』

そう。

じゃあ、行ってみるか。

『わかった。エンコードも織り込むからちよつと待って』

しばらくすると声がかかった。

『——オッケー。じゃあ、耐性切るね。それと行った直後は無敵を付けるから。体調が悪くてもジツとして、警戒を怠らないようにして。相手にもこれと呼んでも問題ないと思うくらいのかなにかしらの切り札があるかもしれない。まず、ないだろうけど』

光が増し、私を包む。

部屋がぶれ始め、同時に頭痛が襲ってくる。

『しかし、また異世界か……。もうタイトルを「チートな剣と異世界へ行こう」に変えちまった方がいいんじゃないか』

シユウがよくわからないことを呟くと世界が変わり始めた。

level 1. 異世界の召喚獣

頭がめっちゃ痛い。

地面に膝を突いてるはずなんだが、宙に浮いている気もする。無敵のスキルも発動しているためか、ますます気分が悪くなっているんじゃないだろうか。

『……なるほど、そういう状況か。今回はずいぶんと平和的な転移だね』

だいぶ落ち着いてきて、周囲を見渡すと異常なほど開けた場所だ。なんだ？ 明るい日明かりではないな。上を見れば天井は高く、そこに光源がいくつもついている。

地面は硬く、訳のわからない模様が光っており、徐々に光度が落ちていく。

周囲をよく見ると遠くに壁が見えた。どうも室内だったらしい。

壁の手前には椅子がたくさん並んでいる。室内型の闘技場に近いだろう。

周囲の席には人が塊となってあちらこちらに座っている。

ただ一人、私と同じ地面に立っている奴がいた。

『女の子！ 育ち盛りだよ！ 金髪サラアつ！ お嬢様ですよ、これ！』

なんかすごい喜んでる。

逆に、対象の女の子はすごい落胆している様子が見て取れる。

ぼんやりと立って私を見ていたが、いよいよ膝が崩れ、地面に両手をぶらんと落としてしまった。

観客席から、女の子と同じ服を着た一団が降りてくる。まだ若いな。

服を着ているのはどうでもいいのだが、彼らの周囲にいる存在は気になる。

『生徒とそのモンスターだね』

ああ。

人の横に、犬っぽいのや鳥っぽいの、尻尾が生えているもの、ゴレムらしきものまでいる。

『メル姐さんと同じように呼ばれた召喚獣だね』

あれらと同列に扱われるのはあれなんだが……。

数人組の男達が私を指さして笑っている。

何かを喋っているようだが、翻訳がされていないのか聞き取れない。

『エンコードはしたけど、さすがに勝手に翻訳はされないか。しばらくしたら翻訳もできるでしょう』

膝を突いていたお嬢様が、男達をにらみつけた。

よほどその睨みが怖かったようで、男達はひるんでいる。

側にいた背の高い女が、お嬢様に何か声をかけた。

お嬢様が私を見つめて何か……唱えた？

『アナライズをこつちに使ってきたけど……うん？ まあ、そもそもあんなしよぼいのじゃ、障壁を通らない』

そんなにしよぼいのか。

『駄目だね。でも気になることはある。このアナライズ対象は何も存在しないアドレスだ。仮に障壁を通っても何も見えない』

アナライズが下手くそということだけわかった。

お嬢様も気づいたようで、何度か私に向けて同じ言葉を言っている。

今度は背の高い女が、彼女の脇に控えていた目を閉じた女に声をかけた。

『あれ人じゃない。人型のモンスター。彼女の召喚獣でしょ』

人型モンスタアの脛が開き、瞳がわずかに緑の光を反射する。

『無駄だねえ。お嬢様よりは、多少マシなアナライズだけど、それくらいじゃあ及第点はあげられないなあ。ふむ、これも同じアドレスにアクセスしようとしてる』

モンスターが首を横に振ると、背の高い女は驚いてこちらを見てくる。

やや緊迫した様子で、背の高い女がお嬢様に何か声をかけた。

お嬢様は私にむけて何か声をかけてくる。

さっぱり聞き取れない。

『こつちに来い、かな。命令コードも入ってた。でも、隸従は耐性があるから無意味』

あちらの様子も変わってきた。

こちらを馬鹿にした様子だったが、何か不気味なモノを見る目になっっている。

そんな彼らを叱咤するような声が響き、私を含めた全員がそちらを見た。

男だ。歳も私より上だろう。着ている服は子供達と似ているが、やや立派な様子だ。

『教官かな?』

教官?

男の横にいた、全身を赤い鎧を纏ったモンスターがこちらを見てくる。

兜の隙間から赤い瞳がわずかに光った気がした。

『うーん、さつきよりは断然マシだけど、これに及第点を付けるのはなあ』

どうもまたアナライズされていたらしい。

この奴らはお前みたいなやつだな。そんなにアナライズとやらが好きなのか。

シユウが教官と呼んだ男もやや驚いた様子だったが、すぐに顔を戻した。

私にゆっくりと近づいてきて、何か言っている。

さっぱりわからん。

わからないと首をすくめると、彼はお嬢様に指を向けた。

行けということのようだ。

『行つてあげて。力で解決しようとしなかったのは評価高いよ』

勝手によくわからん評価をつけている。

とりあえずお嬢様のところに行つてみることにした。

一步近づくと、お嬢様の側にいた奴らが一步離れる。

最後まで残っていたのはお嬢様と、背の高い女と彼女のモンスターだけだ。

互いに手を伸ばせば届く距離に来ると、お嬢様も立ち上がる。

背をピンと伸ばし、顎を引き、私に負けるものかと上目遣いになら

みつけてくる。

必死で気丈さを示しているのが、私にすらわかるのだがそこは何も言わない。言っても通じないだろう。

「メルだ。冒険者をしている。お前は？」

ひとまず自己紹介というわけで、自分に指を指して伝える。

その後、お嬢様を指さして尋ねる。

「メル||ボーケンシャ||ヲ||シテルウ？」

いや、たぶん違う。

メル。

「メル？——」

その後にも何か続いたがよくわからない。

とりあえず、もう一度、自分に指をさしてメルと伝えた。

ついで指をお嬢様に示す。

「あwふあdkfじゃおうふあjdふあjfl:あskfj:dあj
ふあおぱhふあんdkhふあshfnふいqおあhふあいdsh
ふあs;jfさlhふあいおhふあkjんふあkhふあshf;か
ふあkjふあkふあdあlkdふあjふあおfじゃjfかめw。ら
jhふあjljふあlkだljふあjd:あfjkdjふあじよだf
じやおjめlrjかじえkrなkljあjふあsjfだfじゃl:j
kdふあldjふあぱ」

……なんて？

『俺もよくわからなかった。たぶん名前がめちゃくちゃ長い。称号とか、爵位とか、姓名以外のがたくさん入ってる』

困ったな。

なんて呼べばいいんだ

「メル」

背の高い女に名前を呼ばれた。

なんか表情が読み取りづらい、賢そうな子だ。

「マギア」

彼女は自分を指さしてそう告げる。

マギア

そう、というように頷いて、「マジア」ともう一度告げてくる。
その後、隣のお嬢様を指さした。

「ミラ」

ミラ？

「ミラ」

どうもお嬢様はミラというらしい。

ミラと声をかけたが、お嬢様はあれこれと声を荒げて闘技場から走ってどっかに行ってしまった。

なんなんだ、あいつはいつたい。

『たぶんね。あいつは竜みたいなド迫力で明らかに強そうなのがドーンって出てくると思ってたんだ。それがぼんやりしたやる気のなさそうな長身猫背気味の女が出てきた。ここでもうどうしようもなく落胆。いちおうアナライズを通さない不気味さはあるけど、言葉は通じないし、命令も効かない。シヨックの追加で、羞恥に堪えきれず走って逃げた』

解説どうも。

それでも私にはよくわからんね。

契約解除でさっさと元の世界に帰すこともできるはずだろ。

『無理。あっちからの一方的な契約解除はできない。いきなり暴れたら別だろうけど』

じゃあ、私から切ってやれば良い。また召喚しなおせば良いだろ。

……どうやって契約を解除するんだ。

『まだできない。明らかな契約の不履行が認められないからね。少なくともこの世界のダンジョンに一回は挑戦しないと駄目かな。もしくはダンジョンに数日挑戦できない状況になるか。お嬢様を殺すのが手っ取り早いけど、ここは異世界だから易々とは殺せない』

どっちにしろすぐには帰れないってことか。

『そういうこと』

ミラお嬢様が走り去ったが、周囲に大きな混乱はない。

むしろ秩序と冷静さを取り戻したように見える。

シユウが教官と生徒と言ったように、どうもここは教育機関らし

い。

さきほどの男と赤鎧のモンスターが生徒達に指示をして、生徒たちがそれぞれ何かを唱えている。

モンスター達も一緒になって何かしている。

『戦い方……というより召喚獣との連携の練習かな。どうも生徒達はまだ召喚したてみたいだね。本人と召喚獣の動きがバラバラで合っていない。意思疎通がまるで取れてない』

そうだな。

なんか下手な踊りを見ている気分だ。

召喚獣と言えば、そんな世界が前にあったな。

『あそことはまったくの別物だね。あれは完全に世界の特性で自らとほぼ同体みたいな部分があったけど、こっちはただ召喚魔法を工夫してるだけの完全な別個体。やたらとアナライズにこだわってたのを見るに、世界の特性は——ふむ。やっぱりそうだな』

観客席に座ってぼんやり見ているが、だいぶ飽きてきた。

それは実行している生徒達も同じ気持ちらしい。

教官もそれに気づいたのか、生徒に声をかけた。

生徒も闘技場を挟んで二手に分かれていく。

『模擬戦だね』

ほー。

おもしろそうだな。

『それはどうかかな』

ええ……。

素振りだの、かけ声を掛け合うだのを見続けるよりは良いでしょ。

『奴らで模擬戦させても悪いところしか出てこない。悪い点を修正していこうとする水準にもまだいいないし、そもそも悪い点がなんなのかもわからない段階にある。そんな奴らだ。完全に時間の無駄』

断言した。

そして、模擬戦が始まり、シユウの言葉が正しかったことを認識する。

モンスターと本人の連携がまるで取れてない。力任せばかりだ。

なんだろう……もやつとする。

『初めて出会った頃のジェスターのが数百倍はマシ』

そうか。私の場合はジェスターと比べてしまうのか。

もしも彼女の熊なら、こう動くのにか、ちゃんと強化や妨害で援護しろよとか思ってしまうんだ。

彼女以外でも強い人をたくさん見てきたから、生徒たちの動きの悪さにばかり目がいくのだろう。

『いやね。そりゃ召喚獣使いとして、上の下にまで達したジェスターと比べたら、あいつらの強さはゴミカスになるし、大半の奴は見どころもないってなっちゃうよ。そうじゃないの』

ん？ 違うの？

雑魚だつて言いたいんじゃないやなかつたの？

『違うんだ。ジェスターだつて出会った頃は弱かった。彼らだつて召喚獣を手に入れたばかりだろうから、そりゃ弱いのは当然と言える』
そうだな。

弱いなら弱いで別にいいじゃん。

『弱いのは別に良いよ。何が悪いって、自らが弱いという自覚がまるでないことなんだ。召喚獣を呼べたという謎の選民意識に満ちてる。召喚獣を呼べたから俺はもう強いんだという間違つた自信に満ちたさ
れてる。そこが最悪』

確かにそう言われればそう見える。

なんかどいつもこいつも自信たつぷりに頑張ってるな。

『もつと言えば、召喚獣もそうだ。特段強くもないのに、強がってる奴が目立つ』

……それはわからんな。

どれも似たようなもんだろ。

『さらに悪いことに、召喚獣の中には明らかにやる気のないやつもいる』

そうなのか。

まあ、ここで座つて見るのもいるくらいだからな。

『とにかく弱い自覚がない時点でもう駄目。自らの強さもわかってな

い奴は話にならない。自分は弱いから、少しでも戦えるよう弱いなりに強くなる。明日はもつと戦えるよう、よりいつそう励んでいこうって姿勢がまったくない。召喚獣を呼べた俺SUGEEE。強い召喚獣を呼べた俺TUEEってのが透けて見える。しかもだ。それを容認するような教育でしょ。なんでこんな奴ら同士で模擬戦なんてやらせるのか？ ちよつと力を得た馬鹿どもを調子付かせるだけだ。もう最悪。見てられない』

じゃあどうすりやいいんだ？

『俺なら上級生と戦わせるね。それで自らが弱いことを自覚させる。上級になるにはこれくらいの強さが必要だつてわからせる。でも、この学園の上級生かあ。やつぱり駄目かもしれないなあ』

それなら、あの教官でいいんじゃない。

けつこう強そうだぞ。

『ダメダメ。ケオ教官は数段飛びすぎる』

そんな名前なのか。

『名前は聞き取れるからね。とにかくケオ教官じゃ駄目。初心者クラスが中級ダンジョンの強めのボスに挑むようなもん。「負けて当然」みたいな諦めになる』

やつぱり強いのか。なかなか風格があるもんな。

『それなりにね。ケオ教官本人も自らの強さをきちんと自覚してるなつてわかる。でも、あれは現場でこそ生きるタイプだ。戦士ではあるけれど教育者じゃない。貶(けな)してるわけじゃないよ。あいつは悪くない。あいつをここに配属させた人事が悪い。同情するよ。こんなところで猿まわしをさせられるなんてね。でも、まあかなり平和な世界でしような。彼をこんなところに置いておけるんだから』

ボロクソだな。

『そりゃあねえ。こんなもん見させられたら、それくらいは言いたくはなる。——とにかくだ。最初は、がんばればこのくらいはいけそうだからくらいを相手にさせるのがちよつと良い。洗礼つてやつだ。それで諦めるなら、——もう救えない』

シユウはそう締めくくり、見物に戻った。

つまらない模擬戦もどんどん終わっていき、最後に一人余った。ケオ教官が、最後の生徒の前に立ち、何かを話した。生徒が緊張し始めている。

『二人組作ってー。なんだお前余ったのか、じゃあ先生とやるか』みたいな流れだ……つらいなあ。ほんとつらい……。行ってあげて。いちおうメル姐さんも召喚獣でしょ』

なんか本当に苦しそうな口調で言うから、思わず席を立ってしまった。

思ったよりも目立ち、一部から視線を集めてしまう。

階段を降りて、生徒とその召喚獣の前に立つと、ケオ教官も理解したように離れていく。

『まあ、ちよつとは良いところを見せてあげようよ』
こいつらに？

『いやいや、お嬢様にだよ。ほら、右の客席奥』
そちらを見ると、金髪がチラリと席の影から見えている。ほんとだ。いるな。

『相手が雑魚過ぎて残念だけど、それでも十分でしょう』
私がそこそこ戦えるってことを示すんだな。

『まあ、そんなとこ』
私が相手になったとたん、生徒の緊張は一気に解けた。大きめの狸に、やれと命じたのだろう。狸がふごふご襲いかかってくる。遅いなあ。

『狸をプレゼントしてあげよう。俺は使わないでね。瞬殺しちゃうから』

それでも勝負にならない。
なんだったか「最初がんばればいけそう」くらいの強さと戦わせるべきじゃなかったか。

『それは健全に成長させたい場合だね。俺はこいつらが強くなることなんかこれっぽっちも望んでないんだ。女の子の体格だけ健やかに育ってくればそれでいい』

私はそれすらまったく興味がない。

狸の振り下ろしてきた毛むくじやらの腕を止め、すぐに両手でつかみ、ぐるぐると回って振り回す。

『もうちよい上……、今！』

狸を振り回していた手を離れた。

勢いはもはや止められず、客席へとまっすぐに飛んでいく。

金髪のわずか三つ隣の席を破壊し、なお勢いは止まらず壁に激突した。

狸は、うめき声を上げることもできず、ばたりと倒れた。

お嬢様は唾然と熊を見つめて、次いで私を見つめる。

ぼんやりと見つめてきていた顔が徐々に朗らかになり、とても喜んだ顔になった。

『……こいつは、駄目かもしれんな』

最初の出会いは逆になった。

お嬢様は喜び、シユウは落胆している。

『二つ目のダンジョンまでの付き合いになりそうだね』

シユウの眼鏡には適わなかった様子である。

どうでもいいけど、早くダンジョンに行きたい。

模擬戦が終わり、お嬢様も調子よく降りてきて、周囲に私を自慢している。

その周囲は恐怖を持って私を見てくる。誰もお嬢様を見ていない。そこにお嬢様は気づいてない様子だ。

背の高い女生徒がたしなめるようにお嬢様に何かを言っている。

『マギアね』

マギアの言葉も右から左だ。お嬢様は変わらず笑って歩いて行く。困ったもんだという様子で、マギアがため息を一つ吐いた。

彼女の傍らでは、人型の召喚獣が無感動、無表情で彼女を見つめている。

見つめていると思うが、目を閉じていて実際はどうかかわからない。

『あ、翻訳スキルゲット。パラクミ語っていうらしい』

別に何語だつていいが、話せるのは良いことだ。
困ったように立ち尽くしているマギアに声をかけてみることにした。

『それが良いね。そうだ、あの召喚魔法陣を馬鹿お嬢様に教えたとしてもない馬鹿は誰か聞いてみて。そいつは早めに駆除した方が良い。この世界のためにもね』

わかったと返答し、頭を抑えるマギアに近づく。

馬鹿のおもりは大変だな。

『本当に』

「本当に……え」

微妙に驚いた様子で私を見てくる。

なんか今、混ざってなかった？

「あなた……、言葉が？」

ん、ああ、喋れるようになった。

それより訊きたいことがあるんだが。

私を召喚した、あの魔法陣は誰から聞いたんだ？

「えっ、あれはミラが、どこかから調べてきて——」

お前は知らないと？

「ええ。それより貴方は何者なの？ あの力はいったい何。どうしてステータスもレベルも鑑定できないの。それどころか隷従さえも無効化してる。いったいあの魔法陣はいったい何が書かれてたの」

質問が多い。これだけ伝えておこう。

私はメル。冒険者だ。

それだけ伝えて馬鹿お嬢様の後を追いかける。

お嬢様は取り巻きの娘達にひたすら自慢話をしていた。

「遅いわよ。どこに行つてたの！」

笑顔で私に怒鳴る。

機嫌の良さがひしひしとうかがえる。

マギアと話してた。

「まったくあの子………喋った！」

たつぶり間を開けてから、すごい驚かれた。

「え？ ……ええ？ あなた言葉が通じないんじゃない？」

喋れるようになった。

「はー、さすが私の召喚獣だわあ」

うん。そうね。

お嬢様は、取り巻きを先に行かせて、二人きりになるように人から距離を取った。

遠くからマジアが誰も来ないように見張っている。

「それで、あなたどこから来たの？」

異世界。

「やっぱり人界じゃないのね、霊界でもないでしょうし、もしかして天界？」

『およっ』

あれ、何か普通に異世界で話を通ってしまったぞ。

冗談めかして言ったから変な顔をされるか、驚かれるかだと思ったのに。

『俺もちよつとびっくり。とりあえず天界ではないね』

そうだな、天界とやらじゃないな。

「やっぱりそうよね。煉獄界？ でも、解析すらできないとなると、さらに深層——地獄界！ そうでしょ？」

違うな。

「そう、煉獄なの」

ちよつと残念そうな顔をしている。

「でも、あの力を見る限り、煉獄でもかなりの実力者でしょ」

実力……、実力ねえ。

この力を実力と言うのは憚られるが、いちおう力は力だからな。

冒険者としての位置づけでは一番の上位に入る。

「そうよね。冒険者つてのが何か知らないけど、煉獄でもトップクラスってわけね」

うんうんと頷いてる。

『都合の良いように話を解釈されちゃってるね』

そんなだな。

「他の人には隠していいけど、私にだけはレベルとステータスを見せなさい」

キリツとした顔で私を見つめる。

どうもこれこそが本題だったらしい。

ただ、内容はさっぱりわからない。れべるに、すてえたすと言ったか。

『うーん、どうしようかな。仮でいいから作ってみるか』

何？

お前、言ってることがわかるの？

『わかるっちゃわかるけど、表示するとなるとちよつとめんどくさい。見るだけならすぐできるけど、このお嬢様は例外だからあまり参考にならない。……ああ、ちようど良い例が来てくれた』

廊下の端から男の生徒が二人に、モンスターが二体歩いてくる。

マギアが他の生徒のように追い払わず、道を開けたところをみるにそこそこ偉い奴だろう。

「妹よー」

眩しいほどの金髪と顔をして前を歩いていた男が話しかけてきた。

顔立ちはミラとなんとなく似ている。顔以上に自信に溢れているところがそっくりだ。

「カルディアお兄様！」

やっぱり兄弟か。

同じように顔を輝かせてミラは兄の名を呼んだ。

「カルディア様、私は——」

「ああ」

もう一人の男は兄の付き人らしく、マギアと同じく、兄妹から距離を取り人が近づけないように見張りに立った。

それを確認して兄は再度、ミラに話を始める。

「私のところまで話が聞こえてきたよ！ 召喚に成功したそうだね。さっそく模擬戦で大活躍をしたそうじゃないか！」

「ええ、バベスタ家の強大な狸を観客席の奥まで投げ飛ばしたのです

！あのような力、私見たことはありません！」

お兄様は「なんと！」と声を漏らし、喜んでいる様子だ。

『レベルとステータスってのはこんなの。あつ、待った。名前がなげーな。ステータスも細かすぎる。メル姐さん用にバサツと省こう』

・名前：カルディア

・出身：人界（ウエラネ圏）

・レベル：11

・強さ：初心者

・能力：召喚契約、魔法

何か男の脇に文字が出てきた。

『これがレベルとステータス。本当はもっと詳しく出てくるんだけど、あまりにも多いんで、めちやくちや省力してる。強さも冒険者のクラスならこの辺ってのに置き換えてる』

ほおん。

名前と強さってのは、なんとなくわかる。

『そこが、こいつらがステータスって言ってる部分』

このレベルってのは何だ？

『この世界で、戦闘や知識をどれだけ積んでるかの目安。数字が大きくなるほど、たくさんの戦闘経験や勉強してる。冒険者のランクみたいなもの』

ほー。

この11ってのはどんなものなんだ？

『低いね。ちなみに彼の召喚獣だとこんな感じ』

またしても文字が出てくる。

彼の横に浮いていたモンスターにもアナライズをかけたようだ。

・名前：レビエル

・出身：天界——第五層

・レベル：79

- ・強さ：初級
- ・能力：浮遊、魔法、召喚契約

レベルが79と一気に上がった。お兄様よりだいぶ上だな。強さも初級になっている。

「ミラ、こう言ってはなんだが、彼女は……」

「ええ。私も最初は外れを引いたと思いましたが。しかし、見た目で判断してはいけません。レベルもステータスも不明。エルピダどころか、ベルガー教官の鑑定さえ通らないほどです。加えて、短時間で言葉も喋るようになりました。かなりの知能を持っています」

その後も他愛もない話が続いている。

ちなみにあの賢そうな長身の子と、目を瞑ってるやつはどんなものなの？

『こんなんだね』

シユウが言うと、離れたところに立っていたマギアの方に文字が浮かんだ。

- ・名前：マギア
- ・出身：人界（ウエラネ圏）
- ・レベル：25
- ・強さ：初心者く初級
- ・能力：召喚契約、戦士の心―、格闘技術―

おお、レベルがちよつと高い。

それに能力になんか出てるな。戦士の心に、格闘技術とある。

―つてのが付いてるようだが、これはどういうことなんだ。

『戦士の心は、状況変化に対する心の落ち着きがプラスされる。平常心と言ってもいいね。格闘技術はそのまんま近接戦闘の技術。細かくは武器種ごとに分かれるんだけど統合してる。―』の記号はそれから能力の見習いクラスってこと』

そんなもんなのか。

まだまだ未熟って事だな。

『実戦経験がほぼない中で「戦士の心」は珍しい。かなり特訓してるはず。努力家ってのはわかる。しかし、名前はどう考えても魔法職なのに中身はバリバリの近接職だな。で、マジアの召喚獣はこんなの』
マジアから文字が消えて、隣の人型召喚獣に文字が浮かんできた。

・名前：エルピダ

・出身：霊界——最東園

・レベル：53

・強さ：初心者く初級

・能力：魔眼—、文字変換+、本の虫。魔法、召喚契約

なんか魔眼とか物騒な単語が見えるけど。

『それは気にしなくて良い。魔法がちよつと便利に使えるくらいでそれ以上の効果がない。それよりも「文字変換」がやばい「+」まで付いてる』

すごいのか。

『めちやくちやレアじゃないかな。異世界の文字でも、文字である限りは読めるね。これは俺も欲しいな』

異世界の文字とか見る機会がないんじゃないのか。

でも、異世界が普通に受け入れられるところだからそうでもないか。

それと本の虫ってのは？

『本が好きなんでしょう。速読ができるっばい』
どうでもいいな。

お嬢様とお兄様のお話はようやく世間話が終わりを見えた。

「ミラよ、彼女にレベルとステータスを見せるよう命じたのだろう」

「彼女は私の命令が効きません」

お兄様が口を開けて固まった。

「——待て。今、命令が効かないと言ったか？」

「はっ」

「……対価は何を？」

『私との素晴らしい日々』です。これが決め手になりました！」

「……………すまない。もう一度、言ってもらえるか」

「この私との『素晴らしき日々』です」

『不連続存在にでもなるんじゃないかねえか。明晰夢だったら良かったのね』

シユウの言ってることはわからない。

お兄様は目を瞑り考え込む。

『妹ほど馬鹿じゃないね。これがどれだけまずいことかわかってる。召喚陣を教えたのはこいつじゃない』

お兄様は目を開けた。

先ほどまでの浮かれた様子はない。

私に対して警戒を隠さない。召喚獣の雰囲気も変わった。

「お兄様？ どうされたのですか」

「ミラよ……。彼女がその対価に不満を抱いたとき、お前はどうかやって彼女を管理するのだ？」

「ご心配には及びません」

ミラは兄の真剣な質問に心配なしと即答した。

余裕の面持ちで、笑みすら見られる。

「この私なのですよ。そんなことにはなりません」

どこからその自信が来るのだろうか。

ひよっとしてステータスがすごいとかなの？

『見せてあげるよ』

・名前：ミラ

・出身：人界（ウエラネ圏）

・レベル：6

・強さ：初心者

・能力：召喚契約

・特能：道

なんか、変なのが混ざってないか？

それ以外は特に何もなく、普通以下のようだが……。

『そう。普通のアナライズじゃ見ることすらできない隠しステータスが入ってる。メル姐さんで言うくと現実逃避みたいなもんだね。スキルの解説が「この道はどこへ続くのか」だよ。ふざけてやがる。効果がさっぱりわからない。たぶん、召喚でメル姐さんを引き当てたのもこれが関係すると思う』

碌なもんじゃなさそうだな。

ちなみに私のレベルとステータスは？

『ない』

ない？

『この世界特有だからね。元の世界だとこのレベルとステータスのアドレスは何も入ってない。こつちの世界の人だと直にステータスと繋がってるね』

そうなのか。

ちよつと残念だな。見てみたかった。

『計算式もだいたいわかっているから概算で入れることはできるけど、それでいいなら入れるよ』

やってみてくれ。

「名前はメルだったね。ステータスを開示してくれないか」

ミラの兄が私に言ってくる。

隣の召喚獣も警戒態勢を飛び越え、臨戦態勢に入っている。

二人とも距離を取ったので、どうも能力半減の効果が発揮できてない。

『入れたでー。一時的に障壁も弱くしてあげたから見られる』

どうぞ。

「うむ」

兄が何かを呟いた。

そして、十秒ほど虚空を見つめ、そのまま固まり、顔が蒼白になってきた。

顔色は悪いが、目だけが文字を追うように左右へと動いている。

「……お兄様？」

妹の声にもまるで応えない。

ようやく視線が私へ戻り、そのまま尻餅をついた。

呼吸が異常に速いし、私を見る目がなんか違う。

体面を整える余裕もないようだ。

「お兄様、大丈夫ですか？」

「……何を呼んだ？ ミラよ、お前はいつたい何を呼んでしまったんだ」

声を震わせながら、ミラに問いかける。

「おいおい、何を見せたんだ？」

『これ。実際はもつと詳しいやつだけどね』

・名前：メル

・出身：エルメルの町

・レベル：5963

・強さ：初心者

・能力：ここに記すには余白が狭すぎる

・特能：現実逃避

……まず、レベルがおかしくないか？

それにレベルの割に強さがアンマッチというか。

『このアンマッチはレベル制の弊害。レベル自体はシステムマッチクに計算されるんだ。モンスターを倒した数、ダンジョンを攻略した数、いろいろな任務やらイベントを達成した数。習得したスキルの数。あと蓄えた知識の数とかもあるだろうけど、ここはほぼないな。とにかく、あくまで目安の数字なんだ。もしかしたらレベルアップから手に入るスキルもあるかもしれないけど、メル姐さんに関係ない。で、メル姐さんは、この計算部分を比類無くこなしてるからレベルは異常に高い。復活したとは言え、星を一個破壊した訳だし。……月も入れれば二個か』

うん。

そこはわかる

『「強さ」は本人のパラメータだ。俺による能力強化無しのもの。別にレベルが上がってもメル姐さん本人が強くなるわけじゃない。現実だと俺のレベルみたいなのが上がってるからどんどん強くなるんだけど』

そうだな。

おかげさまで楽しくダンジョンを巡らせてもらってる。

……でも、せめて初級じゃないの？

『ははっ。で、能力。本人にかかる効果が記されてる。こっちは装備によるものも含まれる。見せて問題ないスキルは全部載せた。ちよつと大量にあるのでメル姐さんに見せてるのは省略してる』

特能はよく知ってる。

なるほど。……なるほどなあ。

やっぱりレベルだよなあ。

『いや、能力の項だろうね。一番やばみが伝わる。「灰竜」やら「黒竜」、「幻想」、「激臭」、「邪神様」、「道化師見習い」、「月落とし」、「冥王殺し」、「救世主」、「魔王」、「野蛮人Ⅱ」とかがついた明らかにヤバイ系のスキルが山ほどあるから』

何かやばいのに混じって、微妙そうなのが入ってなかった？

それと笑って流されたけど、強さは初級じゃないの。

ミラが何か呟いて私を見る。

「まあー。レベルが881！でもお兄様、大げさではないですか。煉獄のトップなのですよ。これくらいでもおかしくないでしょう。やはりスキルはかなり多いですね。あら……、剣を持っているのに剣士関連のスキルがない……。しかし、このレベルは素晴らしい！さすが私の召喚獣！」

……ん？

『レベルとステータスをそこそこに書き換えといた』

あ、そう。

そんなこともできるんだな。

それなら剣士スキルを追加しといてよ。

『ならん』

明確な意志を持って拒否されてしまった。

その横で、兄がもう一度、鑑定魔法を唱える。

「馬鹿な。先ほどとまるで違う。まさか、ステータス表示を偽れるのか。先ほどのものは、偽物……」

まあ、そんなところだ。

驚かせてしまったようだな。

「お茶目さもあるのね！ 素晴らしい！ お兄様、もう良いでしょう。そろそろ失礼いたします。さあ！ 行くわよ！」

お嬢様は廊下を突き進んでいった。

兄も立ち上がり、廊下を歩いていく。

少し進んだところで立ち止まり、振り返ってこちらを見た。

「よもや最初に見たステータスこそが——」

その先は何も言わず、足早に去っていった。

Level 2. 地獄の悪意

お嬢様は講義があるとかで、召喚獣は割と自由である。

別室で休んでもいいし、訓練場を使ってもいい、一緒に講義を受けることも可能だ。

私は迷わず講義を却下した。

マジアの召喚獣——エルピダに校舎を案内してもらっている。

残念ながら喋ることはできないようだが、手振り身振りで何を言いたいのかはわかる。

表情は無だが、動作は表情の割に大げさなんである意味わかりやすいっちゃわかりやすい。

それにこちらの言葉はわかるので、相づちも打ってもらえる。もしかしたらこの世界で一番まともかもしれない。

『なんかめっちゃ緊張してるね』

そうなの？

動作は確かに大きいな。

『さつき障壁を取り除いたときに、こいつも素に近いレベルとステータス』

タスを盗み見たからね。それでかもしれない』

ああ……。

見ちゃったのか。

一通り案内してもらった後、エルピダは両手をくつつけて開く仕草を示した。

『読書。図書室でしょう。情報が欲しいからちようどいいや』

なるほど。私には興味がないな。

しかしながら情報は大切だ。ついて行くことになった。

図書室は、部屋というより館だ。

完全に別棟に建てられており、資料室やら自習室、打ち合わせのできる部屋もあるとか。

『どこの世界も図書館とか資料室の二オイはだいたい同じだな。』

本って感じのスンとすました二オイだ。嫌いじゃないが、まるで興味をそそられない。

歴史書とか地理の本の場所まで案内してもらい、言われた本を取っていく。

机において、シユウが見えるようにして、後はペラペラめくるだけ。非常につまらない作業の時間である。

エルピダは離れた席で本を読んでいて、ときどきこちらを窺っており目が合う。

目というか、瞼を閉じてるので顔が合うというのが正解なんだろう。

すぐに顔を本に戻すので、窺っているのがすぐわかる。

顔をそのままで視線だけ向けてくればわからないだろうに。

『この世界は五つに分かれてるっばい』

大陸がってことか？

『いや、物理的にじゃなくて次元的にというかな。この本に理論が書いてあるけど、これは間違ってる。すごいアバウトに言えば、この世界にはダンジョンが四つ——ここも入れれば五つあるだけ。普段は出入口が閉じていて、ときどき開く。世界間の移動はあんまりない』

五つしかないのか？

『そうだね。小さな世界がこの次元で五層に積み重なってる。元の世界でも一部が重なってることはあったんだけど、ここまで奇妙に重なるってのは奇跡的。作画的なものを感じる』

それはどうでもいい。

じゃあダンジョンに行くのはどうなるんだ？

『隣り合う世界に行けばダンジョンとも言えるけど、そこは世界が――その世界での日常があるだけで、メル姐さんが求めているものはおそらくない』

いかん。

一気に帰りたくなった。

『ただ、気になる記述があつて。世界間を繋ぐ出入口がときどきできるらしい。トンネルと呼ばれる空間で、そっちの方がどちらかと言えばダンジョンなのかな。一時的にしか開かず、場所もどこにできるかが不明。その空間には次元の歪みから生じる歪曲生命体ってのがあるんだって。核となる生命体がいて、それがボスっぽいね。ときどき漂流物も落ちてるとか、アイテムかな』

……それってもうダンジョンじゃね？

『中身はダンジョンに近いけど、これを読む限りだとダンジョンとは仕組みがまったく違うよ』

いや、モンスターとボスがいて、お宝もあつて、雰囲気は元の世界と別ならダンジョンだよ。

『オブジェクト指向を説明しようとする、よくわからん比喩みたいなのはやめて』

なんとか指向は知らないけど、ダンジョンこそ至高だ。

そのトンネルとかいうのを、一つ試すことができないだろうか。

『試すにしても、出現する場所と時間もわからないんじゃないやあね』

残念だなあ。

『そうそう、この学校の資料もあつた』

別にそれはどうでもいいなあ。

育ちの良い子供が通ってる学び舎以上の情報があるのか。

『ある。まさに召喚獣だよ。召喚とその教育をしている施設はこの人

界でもかなり少ない。両手の指の数もない。そもそも召喚獣と言うけど、他の四つの世界から住人を招き入れてるだけなんだ』

招き入れる？

『人界の住人は他の四つの世界——霊界、天界、煉獄界、地獄界と比べて力が弱い。他四つの世界から戦力を呼び出して、治安の維持やさっきのトンネルからの歪曲生命体の流出を防いでるんだって』

ふーん、呼ばれる側は迷惑じゃないか。

『そうでもない。そのための対価だ。出稼ぎみたいなもんだよ。元の世界であぶれてる奴らがこっちに来ることが多いんだって。元の世界だと中途半端な戦力だけど、こっちだと大いに役立てるし、高い評価と待遇をしてもらえるところでね。他にも人界は娯楽が多いらしいから、それを目当てに来たりするのもいるらしい』

確かに休憩中の召喚獣らはけっこうのんびりしてたな。

現にエルピダも夢中で本を読んでいる。さきほどの模擬戦とは熱中度がまるで違う。

『逆に言うと、強すぎるのはわざわざ人界まで召喚されてこない。元の世界で満足だろうからね。お嬢様が喜んでたのもこのあたりにある。煉獄界も含めて、他界のトップなんて滅多にこないんだ』

まあ、そもそも私は煉獄界のトップじゃないんだけどな。

『うん。間違いなくそれよりずっとやばいからね。ずっと昔に人界で確認された一番レベルの高い奴でも、レベルが千に届いてないってあった。982だったかな。召喚獣からの情報では、他四界の最強クラスでもレベルが四桁に届くかどうからしい。ちよつと偽レベルを高くしすぎたかと思っただけどちよつと良かったね』

そうだな。

実際の値は五千超えてたよな。

『いやあ、もうほぼ六千だよ……ん？ ひよつとして。いや、……うん、まあ、レベルはあくまで目安ってことを忘れないでね。百にいつてなくても、異常なスキルを持つてる奴にやられることだってあるんだから』

そんなものか。

『そんなものなの。滅多にはないだろうけどね』

その後は特に話を引き延ばさず、またしても読書という私にとって無為な時間となった。

講義の時間が終わったようで、ミラとマギアが図書館にやってきた。

「待たせたわね。やっと終わったわ！ 何かおもしろいものはあった？」

開口一番に尋ねてきた。

近くに座っていたエルピダは本を、マギアに本を渡している。

どうも借りる手続きをしているようだ。

トンネルつてのがあると知った。

モンスターに、ボスもいる。これはもうダンジョンだ。

どこかにないのか？

「トンネルつて他世界と繋がってるアレでしょ。この辺りで出たのはかなり前だったと思うけど。——マギア」

すぐ後ろに控えていたマギアに声をかける。

「このウエラネ圏で最後に出現したのは三年前。ウラバ湖に水を吸い込む穴が生じ、二日後には閉じた。このときは歪曲生命体の出現は一体だけ。負傷者もなくすぐに仕留められた。どこと繋がっていたのは不明」

マギアは淀みなく話していく。

あまりにもすらすら出てきたので、私が見ていると彼女は答えてくれた。

「父がウエラネ圏の防衛長官なので……。その、私も勉強をさせてもらっていますから」

「マギアはファザコンなの。将来はお父様の側で働くって小さい頃からずっと言ってる」

あっけらかんとミラは話すが、マギアはすごい恥ずかしそうにしている。

「マギアならなれる。だって、私の付き人なんだから！」

当然という顔で、マギアに頷いてみせる。

マギアもやや顔を赤らめながらもうなずき返していた。

『今のままじゃ無理だろうがね。あるいは、その程度の役職なのか』
聞こえないのを良いことに好き放題言っている。

聞こえていても言うかもしれない。……女だから言わないだろうな。

「それより読みたい本があれば、なんでも言っただい。すぐに取り寄せるから」

私に言ったのだろうが、私よりもむしろエルピダが反応を示している。

表情こそはないが、顔をミラに向けて動かない。

「あなたは先週、取り寄せてあげたでしょう。そうね……、レベルがあと二つ上がったら、また取り寄せてあげる」

エルピダは体を弾ませて、うれしさを表現している。

がんばるぞという心意気が伝わってきた。

翌日、模擬戦は上級生と行うことになった。

闘技場には、上級生の姿があり、ミラお嬢様の同級生は緊張している。

昨夜、模擬戦がどうこう聞かれたので、シユウの言っていたことを話したら、すぐに行動に移した。

まさか昨日の今日で、実行されるとは思わなかった。

『発言力はあるね。実際、実のある内容だったのも大きいだろうけど。それに——』

それに？

『模擬戦になれば、またメル姐さんが活躍すると考えてる。それが見たいし、自慢したいってだけだと思うよ』

なるほど、納得だな。

他の生徒が緊張している中で、お嬢様だけがうきうきしている。

模擬戦はすぐに始まった。

さすがに上級生の動きは、下級生とは違う。

すぐにやられるのもいるが、そこそこの戦いに持つていくのもいる。

『それは上級生が弱いだけ。工夫も何もない。力で殴り合ってるだけなんだ』

私としてはシンプルだからその方が見てて楽しい。

おつ、次はマジアとエルピダだぞ。なんかやる気を感じる。

声をかけてみたがシユウは反応がない。

先ほどからなんだか静かだ。

どうかしたのか？

『さっきから、ちよこちよこ揺れてない？』

いや、地面が揺れてる気はしないな。

召喚獣が動くから振動してるだけじゃないか。

『いやいや、地面じゃなくて時空の話だよ』

ああ、時空か。時空ね。……時空？

なにそれ、時空が揺れるって感じたことないよ。

『はい、それは嘘。異世界に転移するときにすごい気持ち悪くなるでしょ。あれだよ』

あれがそうなのか。

言われてみればちよつと頭が痛いかも。

『うん、メル姐さんは時空の揺れで酔いやすいからね。魔力の質と量に関係すると俺は見てる。両方ともひどいからね。やっぱ揺れてるよな』

魔力の変化でわからないの？

『揺れが小さすぎて難しい。ここは召喚獣やらで魔力が乱れてるからね。ちよつと解析してみよう』

シユウが黙ったので、私はマジアとエルピダの戦闘に目を移す。

かなり健闘しているように見える。上級生の攻撃や召喚獣の一撃も躲しつつ反撃している。

もう少し……もう少しで攻撃が当たる。他の生徒も集中して見入っている様子だ。

ああ、そこだ！ おしいなあ、もうちよつと。あつ、いいぞ。……

そっつ。

『違う。ここだね』

何が？

『時空震の震源地』

……どういうこと？

『トンネルがここにできる』

いつ？

『今。——くるよ。席に座って頭を抑えてうずくまっていた方が良い』

地面が突如として揺れ始めた。

『揺れてない。時空が揺れてるだけ』

嘘だ。

すごい揺れてるじゃん。頭痛いし、気持ち悪いぞ。

それに他の奴らの叫び声も入ってきて、さらに頭をガンガンと叩いてくる。

崖から飛び降りたときのような浮遊感があり、そして、地に落ちたときの衝撃が走る。

ようやく気持ち悪さが抜けてきた。

周囲も同じような様子で、生徒は互いに声をかけ、顔を見合わせている。

彼らや召喚獣、それに私も視線をあちこちに彷徨わせ、最後にある一カ所でみな視線がとまる。

そこは闘技場の中心から、ややマジア側に寄っているところだった。

闘技場の床が裂けて、そこに穴ができている。穴の大きさは手をついて広げたくらいだ。

その穴の中から、何か大きな瞳が覗いていた。

「んばつ、んばあぁ」

よくわからない声が、穴の中から聞こえてくる。

瞳が隠れ、口と思われる部分が出てきた。口がぬちやりと開く。

『行った方が良いね』

やっばそうだよな。

これダンジョンでしょ。わくわくしてきたぞ！

『急ぐべき。ケオ教官も気づいたけど遅い。エルピダが喰われる』
私が床を蹴るのと、穴から何か細長い物が出てくるのは同時だった。

細長い物が空を叩くように何度かしなり、狙いを定めたのかまっすぐマギアへと伸びる。

『舌だね。ふむ、一番近いエルピダじゃなくてマギアを狙うか』
マギアの顔にたどり着く前に、その舌を斬った。

斬られた舌は勢いのままマギアの顔を掠め、そのまま地面を転がりぴくぴく動く。

『本体をやって』

痛みで叫びを上げている本体へ近づき、穴の入口から、本体を突き刺す。

断末魔をあげつつ、モンスターは穴の中へと落ちていった。

落ちていったのだが、下が見えないな。

地面に落ちた音が聞こえない。

『いや、途中で消滅した』

そうか、異世界だもんな。

アイテム結晶が出てくるわけだ。

『アイテム結晶は出てなかったよ。本当に消滅』

どういうこと？

『あれはモンスターではなさそう。世界に属する住人ですらない。どこか歪んでる。なるほど確かに歪曲生命体だ』

ケオ教官がマギアに無事か声をかけている。

もう一人の教官も生徒達を闘技場から出るよう誘導し始めた。

「今のは何なの？」

お嬢様がやや心配した様子で近寄ってきた。

これがトンネルらしい。

さっきのが歪曲生命体とかいうやつ。

『レベルは463だった。教官二人がかりなら戦えるけど苦戦する。外野を護りながらは無理。人を近寄らせないほうが良い。次が来る』

かもしれないし、さっきのやつが復活する可能性もある』

シユウの話を手ミラに伝えると、ミラもすぐケオ教官に伝えた。

教官がミラに何かを言うと、マギアとミラは何かうなずきを返した。

「メル。教官達は、アレを見張るため動けないと話しています。私とマギア、それにお兄様で今から圀庁に事態を説明しに向かいます。私たちは顔が利きますし、実際に出現を見たわけですから」

どうも出かけてくるらしい。

「あなたは教官達のサポート——いえ、違いますね。あなたが主となって歪曲生命体と戦いなさい。教官達には支援をさせます。必要な物があれば彼らに伝えなさい」

誇らしげに宣言し、返事も聞かずに背を向け颯爽と歩き去った。

『動ける馬鹿だ。無能じゃない』

そうだな。

迷惑をまき散らすだけだ。

『自分のことだけによくわかってるね』

まあな。

『——おっと、来たよ』

ミラが闘技場から消えると、穴の中からまたしてもモンスターが出てくる。

地上に出てきてから倒してみたが、やはりアイテムは出てこない。それに復活もしないようだ。

復活しないおかげで、トドメを他人に渡す手間が省けるのでそこは助かっている。

モンスターはそこそこ強い。シユウで一撃で死なない。

上級あたりといったところだろうか。

『そうだね。上級の雑魚くらいかな。情報としては知ってたけど、本当にレベルしか表示されてない。隠しステータスもない』
変なモンスターが多いな。

個性がそれぞれ違うし、人っぽいのもいる。

アイテムが出ないのは不思議だ。こいつらはいったいなんだろう

か。

『たぶん人かな』

人？

『人というより元は世界の住人。各世界の住人がトンネルに入って、閉じ込められ歪んであななった』

なんか気持ち悪い話だな。

『まだ仮説だよ。時空の歪みから、突如として生物が生まれるとは考えにくい。そうなると時空に閉じ込められた奴が変質した、いや、変質させられたと考えるのが妥当でしょう。核持ちとやらを倒せばわかるよ。できれば生け捕りが理想だね。おそらく、その核に人を変質させる何かがある。調べてみたいなあ。……ちよつと入ってみようか』

いいのか？

さつきは反対しただろ。

『空間が不安定だったからね。今はだいぶ安定してる。こんな不思議な現象は久々だ。核が気になる』

シユウもよほど気になっているようだ。

慎重派のこいつももうずうずしているのがわかる。

じゃあ――、

『今すぐは駄目だよ。もうちよいしたら、お嬢様が人員を集めてやってくるでしょ。挑むのはそれからね』

それは、まあ、仕方ないな。

他の教官達は来ないのか、いったい何をしているのか。

『この闘技場の外に二人いるよ。さつきも外から内側を見てた。ケオ教官が必要ないから外を見張ってくれて指示してた。こういうときに限って外側から野次馬根性で変なのが来たりするからね。それの見張り』

そんなものか。

交代してあげればいいじゃん。

『いらない。ケオ教官が一番強いからね。もう一人は伝言役で使えば良い。ちなみにケオ教官はこんな感じ』

・名前：ケオ
・出身：人界（ウエラネ圏）
・レベル：351
・強さ：中級〜上級
・能力：召喚契約、戦士の心、格闘技術、戦士の息遣い。戦士の眼。
教育者―

おお、本当に今までの奴とは段違いに強そうだな。
レベルもそうだが、能力も戦士っぽいのが増えてる。

『相方も似たようなもの』
そうだよな。

赤鎧の奴も基本的に戦い方が同じだ。
でも、こいつら以外でも教官達はいるだろ。

そいつらは何をしてるんだ。こいつらもずっとここで大変だろ。
『いやいや、むしろ一番楽のがここ。ある程度の緊張感があって、忙殺もされず、メル姐さんが勝手に歪曲生命体を片付けてくれるから安心という。残りの教官達は、生徒達の避難やら、保護者への説明やら、外部機関とのやりとりがある。間違いなくそっちの方が大変だよ。人数が多いわけじゃないからてんやわんやが目に見えるようだ』
なんだそりゃ。

こいつらにも戦わせてみるか。
『それもいいかもしれないね。あと気になってるのはトンネルの先。どこか二つの世界を繋ぐものらしいから、もう片方がどこの世界に繋がってるのか気になる』

私はそっちには興味ないな。
このトンネルとかいうダンジョンとそのボスが一番楽しみだ。

さらにモンスターが三度ほど出てきたころ、外からドタバタと音がして、なにやら仰々しい召喚獣と全身に鎧を纏った連中がやってきた。

「私が来ました！」

ミラが彼らのトリを飾るように悠々と場内へ姿を現す。

別に来なくても良かったのに。邪魔なだけだ。

マギアが危ないから退くようミラに声をかけるがどこ吹く風だ。

「見なさい！　我が圏の最大戦力を集めました！　これでもう問題ありません！」

お嬢様は高笑いが出まらぬ。

『それ、死亡フラグ』

トンネルの入口と対峙するように、最大戦力らは整列した。

ケオ教官が一番偉そうな奴に、出てきたモンスターの情報を話している。

「これより我らは——」

一番偉そうな奴が何か演説をし始めた。

トンネルの内部に隊を分けて突入して、核持ちモンスターを倒すだのなんだのだ。

『あかんあかん、死ぬ死ぬ。壊滅するって』

弱いのか？

『集団としてはそこそこ強い。でも、個としては歪曲生命体の方がずっと強い。トンネルの中がだだっ広げりやいいけど、道はそこまで広くない。故に集団としての強さは発揮できない。功を焦らず、少数での調査から始めるのが上策』

はて、珍しいな。

いつもなら「ほっとけばいい。大半が死ねば、少しは学習するでしょ」とか言うのに。

『全員が乗り気で「突撃あるのみ！」って言ってるなら高みの見物を決め込むよ。でも、乗り気なのは一番偉そうな奴だけ。副官以下の他全員が無謀だったってわかってる。それなら同情の余地はある。ここは一番偉そうな奴に行かせるべきだね。そうすれば全ての功が彼のものになるんだから。まあ、その功績で二階級くらいは特進できるんじゃないの』

私も、隣でニコニコしているお嬢様にシュウの言を伝える。

お嬢様もそのまま偉そうな奴に伝えた。しかも全員に聞こえるように大きな声でだ。

『怖いねえ。悪意がまったく感じられないよ。純真そのもので言うてる。なあんにもわかかってない』

お嬢様からの熱いエールと、さらには隊員からの視線も受ける。

方針が突如として変わり、まずは入口周辺の調査ということになった。

引き下がることができず、なんと最初だけ偉そうなやつが自ら行くと言いだした。

誰かが止めてくれるのを待っているようだが、誰も彼を止めることはしない。

二名を引き連れて、穴の中にゆっくりと入っていく。

『すぐ近くなら大丈夫だ。近くを見てきて戻れば良い。これで俺の面目は立つ。次は他の兵士を突入させられる』——そう考えてるね』
それなら大丈夫じゃないのか。

『二人はすぐに戻ってくるよ』

なんでわかる？

それに二人だけなのか？

『一人かもしれない。最悪は誰も戻らない。奴らはわかかってないようだけど、入口から狭い穴が下にしばらく続いてて、その先はちよつと広めのフロアになってるんだ。これは音の反響を拾えばすぐにわかる。で、そこにでかいのが一匹いる。さつき穴から覗いたらちらつと見えた。レベルは563とかなり高い。通路が狭いからこつちには来てないけど、広くなった先で待ち構えてる。動きはそこまで速くないね。で、こつちは二人が飛べる召喚獣で、偉そうな一人とその一体は飛べない。完全にお荷物だ。後はわかるね』

なんで彼らにそれを教えないの？

『教えたら、無駄に突っ込んで負傷者が何人も出る。今なら死傷者一人で済むでしょ。運が良ければ無事——』

穴の奥から叫び声が響いてきた。

『運は悪かったようだ。いやあつ、残念つすねえ』

翼の音が響き、穴から召喚獣が二体勢いよく飛び出てくる。彼らは自身の召喚者をつかんで出てくるが、一人と一体の姿が見えない。

『冥福をお祈りいたしますーす』

まったく心のこもってない声でシユウがお悔やみを申し上げた。

さて、生きて帰った者は状況を報告する義務がある。

まさにシユウの言ったとおりだった。

下へとゆつくり降りていき、空間が広がったところで、いきなり偉そうな奴が喰われた。

さらに、その召喚獣もやられてしまったようだ。

軽くなったので全速力で上へ戻ってきた。

場は膠着してしまった。

下手に突っ込まなければ、デカイのが蓋になり、弱いのは出てきづらい。

このままトンネルが閉じるまで、見張りを立ててほっとけばいい。ただし、問題は穴がさらに広がったときだ。

『機は熟した。今なら誰も追ってこないし、止める奴もいない。外の見張りはいっぱいいいるから心配ない』

よし。行くか。

ミラに近づいて、穴に入ってくると告げた。

『そうこなくちゃー！ 私も行くわー！』

私が止め、マジアが止め、ケオ教官、それに兵士達の司令官代理も止めた。

もはやミラは意固地になっており、どうしても行こうとする。

なんと振り切って、穴の方へ走っていくではないか。

『ちようどいいや。片手で襟をつかんで引き寄せて。もう片方の手は頭をグツと押さえる』

何をしようとしたのかわかった。

ミラの後ろからその襟をつかみ、動きを止めた。

首に服がひっかかったところで頭を押さえて息を止める。

ミラは、必死に手を首にやり、うがうがともがくが、力を緩めず締め落とす。

『はい、ストップ』

手を緩めれば、お嬢様は力なくふらつく。

倒れるところで抱えてやり、そのまま近くの女兵士に預けた。

マギアは啞然とした様子で私を見てくる。

ケオ教官と司令官代理はやむを得まいといった様子で顔を背けている。

じゃあ、私は行ってくるんで。

目覚めても、動けないようにお嬢様はきつく縛つといてくれ。

こうしてようやく異世界でのダンジョン攻略が始まった。

穴から降りたところで、大きなモンスターが待ち構えていた。

見た目が気持ち悪い。

でかいコオロギの顔面が、人の顔になっている。

「んげだぼお」

よくわからんことを呟いて私に飛びかかってくる。

『んげだぼ、んげだぼ』

シユウが面白がって声真似をしてる。

それくらい余裕のある相手だということなのだろう。

図体が無駄にデカイ奴への対応はだいたい決まっている。

襲ってくるときに、サツと内側へ入り、隙だらけの首の裏なり、体を斬りつければ良い。

たまに異常に硬いときや、毒液、トゲが付いているモノもいるが、今回の場合は特に何もなかった。

『次は足ね』

はいよ。

一度斬りつければ、悲鳴を上げ体が持ち上がる。

そこで順繰りに足を斬って動けなくすれば、あとは動けない本体を仕留めるだけだ。

『余裕だね』

そうだな。

でかいだけの奴はやりやすい。

『レベルは一番高かったけど核はなし、と。んげだぼお』

デカ物はそのまま消滅してしまい、何も残っていない。

どうやら外れだったようだ。これで良い。入口でいきなりお目当てのモノが出たら何の楽しみもない。

道を進み、モンスターを幾度も倒す。

モンスターの種類にこそ幅はあるが、どれも単調でやりやすい。

それよりも道がかなり複雑で面倒である。ただでさえ道を覚えるのは得意ではない。

地図もなく、前後左右だけでなく上下に移動するとなると、もはや今がどの辺りにいるのかさっぱりわからない。

普段なら地図でこの辺と教えてもらえるが、当然地図もないのでひたすら進んでいるだけだ。

しかも道は一方通行ではない。ここで、またしても分かれ道にたどり着いた。

『……ん、ちよつと壁を数回叩いてみて』

言われたとおりに、シューで壁をカンカンと叩く。

不思議な壁だ。見た目はもろそうな土なのに、金属のような硬さがある。

何度か叩くと、反響のように音がこちらへと返ってきた。

でも、反響にしては回数がおかしいな。

『俺たち以外の挑戦者がいるね。右方向だ。奴らも核狙いなら、当たりは左かな。次のモンスターは無視しよう。核は最初に頂きたい』

左に進み、出てきたモンスターを何度か無視して進む。別にドロップアイテムもないなら倒す必要性は薄い。

後ろから戦闘音が響いてきた。どうやら本当に私たち以外の挑戦者がいるらしい。

その後もモンスターを無視して進んで行くと開けた空間にたどり着いた。

血管が浮き出るように、地面が線上に盛り上がっている。

部屋の外側から中心へとすべての血管が向かっている。あるいは部屋の中心から外側へ伸びているのかもしれない。

その広間の中心には真つ黒の結晶が浮いていた。

『んんっ？ 生きてるぞ。俺のアナライズは通らないけど、生物用のステータスは出てくる。ステータスとかあんまり好きじゃないけど、戦闘の時は便利だね。相手の戦法が判断できるし、組み立てられる。つまらないと言っても良いくらいだ』

・名前：テタルトス

・出身：地獄界（第八圏）

・レベル：1451

・強さ：超上級

・能力：歪曲（第四位）。浮遊。魔法。魔法の知識。黒き祈り。悪意の波動。破滅の輩。ともがら

おお、なんか強そうだな。

『精神系と召喚型。相性は良いね。相手に申し訳ないくらいだ。破滅の輩は憑依系。なるほどね。出てきたモンスターは、死体を利用した使い魔扱いだったからドロップがなかったんだ。魔法と召喚獣にだけ注意すれば良さそう』

さつきからなんか黒いのがブオンブオン出てるのは何？

『悪意の波動だね。元の世界でも超上級ダンジョンで使ってきてる奴がいた。精神への干渉で、耐性がないと詰む。これだけで超上級扱いされる。でも、耐性があるからまったく意味がない。黒き祈りもそう。即死魔法の一種。耐性があるから無意味』

相手も能力が効かないと理解したのか、道中にいたようなモンスターを生み始めた。

それに魔法の詠唱も始めたようで、黒結晶の側に変な光が発し始めている。

『うーん、結晶自体が生きてるとなると、生け捕りは無理そうだな。よし、仕留めよう。悲しいことに相性が悪すぎるんだよなあ。正面から

戦う振りして、ステルスで姿を消す。その後はぐるっと横に周り、全力で突き刺せばたぶん終わる』

言われたとおりに、使い魔のモンスターと戦う。

『魔法も来るのでステルス使いまーす』

何体か出てきたモンスターが集まってきたところで姿が消える。

横にぐるっと回り始めると、立っていたところに黒い稲妻がバチバチと走っていた。

『おっ、魔法は強いね。じゃあ、ちょうど良い位置に来たので思いつきり走って突き刺して。——GO!』

地面を全力で蹴る。

モンスターの背後を走り抜け、ぶかぶか浮いている黒結晶の手前でステルスが解除される。

表情はさっぱりわからないものの、硬直している様子で黒結晶の驚きが見て取れた。

その硬直している結晶を容赦なくシユウで突き刺した。

手応えのとおり、シユウが根元まで結晶に刺さっている。

さらに、刃の方向にシユウで思いつき裂いた。

黒の結晶は完全に引き裂かれ、崩れるように光を出して消滅した。

白のアイテム結晶だけがポツリとその場に残る。

——邪気孕むテタストスの冀望きぼう

なんかよくわからんアイテムだな。

とりあえずダンジョンはクリアしたわけだ。

『まずいなあ。わかっちゃいたけど時空のバランスが悪くなってる。このままだと崩れるぞ』

マジか。

急いで帰ることにしよう。

「あつ、もう倒されてるじゃん!」

振り返ると三人組がいて、一人がこちらを指さしていた。

「ここは私たちがクリアする予定だったのに! 破片を手に入れたならよこしなさい!」

一番先頭に立っていた雌の虎の亜人が叫んだ。

残る二人は梟らしき亜人と、カバっぽい亜人だった。

『なるほど、煉獄界と繋がってたみたいだね。ちなみであれば虎じゃなくて豹だよ』

似たようなもんでしょ。

ここまで来るってことは強いのか。

『かなり強い。個人で上級。パーティだと超上級はある。でもボスと戦ってたら死んでた。耐性がない。こんな感じだね』

・名前：パルドウ

・出身：煉獄界（第五冠）

・レベル：655

・強さ：上級

・能力：俊敏＋。格闘術。魔法（強化のみ）。〔ズック〕＜保護。

保護に何か出てるのは何だ。

『ミミズクの亜人がいるでしょ。そいつがズックって名前。そいつから効果を受けてるって意味』

梟じゃなくてミミズクだったのか。

そう言われれば確かに、額の横に角のような羽が生えてるな。

「何ブツブツ言ってる！ もう使ったって言うの！ それなら奪い取るまで！」

女が叫んだところでミミズクの亜人が女を止めた。

「駄目です、パルドウ。彼女——見えますん」

『うん、冷静だね。アナライズも今までで一番良かった。及第点の一步手前だ。返り討ちにする必要はない。とつとと逃げるとしよう。彼らにも逃げるように伝えて。崩れるよってね』

「諦められるわけないでしょ！ こんなチャンス、もう——」

彼らの横まで走り、「ここは崩れるから逃げろ」と伝える。

梟とカバは、どうも私の姿が捉えられなかったようでかなり驚いていた様子だった。

豹の亜人に至っては「見えなかった、この私が……」と漏らし、私

を見ようともしてこない。

「あなた、何者？ 名前は？ どうして人界にあなたみたいなのがいるの」

名前を尋ねられたようだが遅かった。

すでに私は走り始めており、わざわざ足を止める気もなくそのまま走り去る。

はつきり言って脱出はギリギリだった。

途中で時空が歪みだし、酔いを抑えるため無敵状態で走った。

『うーん、真面目に時空揺れの酔い対策を考えないといけないね。時空震を使える奴がいたらやられちゃう』

本当にそうしてくれ。

無敵状態になっても頭が痛いままだった。

ケオ教官やマジア、兵達が歓声で私を迎える。

異世界ダンジョンの攻略を完了した。……問題を一つ残したまま。

さて、問題のお嬢様である。

「目が覚めたら全て終わってた」

機嫌が最悪である。

唇をかみ締めたまま、まなじりがぴくぴく動いている。

「それどころか私の首を絞めて、失神までさせた」

おかげで良いダンジョン攻略ができた。

「私も結晶持ちと戦うところが見たかった！」

いたら、死んでたよ。

『間違いない』

机をバンバン叩き、お茶がこぼれる。

「あろうことかそのアイテムを私に見せることすらしない」

危ないからな。

『結晶を解除したら、復活するかもしれない。それに呪いのアイテムくさい気配がする』

そんな訳で、お嬢様の活躍は兵士達を呼びにいくだけで終わった。

トンネルに潜り、モンスターを倒して、結晶を持ち帰るという主役が張りたかったようだが、できなかった。それが不満のようだ。

心のない返事を繰り返していくと、ついにお嬢様に部屋を追い出されてしまった。

追い出されると言うよりも、癩癩を起こしうるさいので私の方から出た。

部屋から出たところで、マギアが隣の部屋から出てきた。

「入らない？」

どうも偶然ではなく、声が聞こえていたようだ。

マギアの部屋は、お嬢様の部屋の半分ほどしかない。

それでも十分に広い。寮の部屋とは言え、十分にここで暮らせるほどだ。

さすがにお嬢様のように部屋の中に世話役のメイドがいるということはないらしい。

彼女の召喚獣のエルピダがソファに腰掛け、本をパラパラと読んでいる。

すごい速さでページがめくられていく。本当に読んでいるのだろうか。

私はテーブル付きの椅子に案内され、お茶とおかしを出された。

「お願いがあります」
どうぞ。

まあ、そんな顔をしていたからすぐに返答する。

このお茶とおかしもその代価なのだろう。おいしいのでパクパクつまんでいく。

「トンネルで見てきたことを教えてください」

覚えてる範囲ならかまわない。

……いいよな？

『いいよ。マギアからも情報が手に入るかもしれないね』

私が見たことをシユウの補足付きで話していく。

モンスターの特徴や、ダンジョンの構造、それにボスのレベルやステータス。

ドロップアイテムについてはぼやかして答えた。

ボスを倒した後に煉獄界から来ていたパーティーと会ったこと。彼らの名前やステータスも付け加えていく。

マギアは一言一句書き漏らさないようにペンを動かしている。

なんでも防衛局に勤める父親へ資料として送るようだ。

別にどう利用しようが勝手なので好きに書かせる。

手書きで大変そうだなとしか思わない。

『俺が今回のことで一番気になってるのはね。トンネルの構造やボスといった中身のことじゃないんだ。なぜ——あの闘技場に出てきたのかだ』

たしかに偶然にしては、場所がすごいよな。

タイミングもちょうど行ってみたかつたときだし。

それに……なんだっけ？ おかしなことがまだあったような気がする。

『使い魔が一番近いエルピダじゃなくて、マギアを真つ先に狙ったことでしょう。それはもうわかった。ボスが人を殺して使い魔を増やすためだ。「破滅の輩」は使い魔を増やせるようだからね。ただし同じ種族しか増やせないんだ。人属の使い魔は人属しか増やせない。マギアが狙われたのはそれで』

なるほど。

『そうなるに残る疑問はやっぱり、あの場に、あのタイミングでトンネルが出てきたこと。タイミングが良すぎる』

マギアもトンネルの出現タイミングは疑問を持っているらしい。

過去の出現タイミングも調べてみると話している。

話が終わりかけてきたところでエルピダが近づいてきた。

マギアの書いたメモを読んでいるようだ。

「彼女、活字中毒なの。朝も新聞をずっと読んでるし、時間があれば図書館に行くし、対価も『可能な限り本を読ませて』だったから」

ふーん、本の虫か。どうも相性が悪いな。

私はちよつと読むと眠たくなる。シユウの音読ですら眠い。

たぶん活字という前提でもう駄目なんだな。

エルピダは、本棚の前に移動して次の本を物色し始めている。本棚には大量の本が並んでいるが、段によって本の数がまばらだ。『これから読む用、既読、お気に入りかな。既読を見る限り、本当に雑読というか雑食だね。お気に入りには魔法の初学者向け、英雄譚、生活の知恵本、不思議な模様占い、人界の料理、掃除秘伝、園芸のコツとこつちも雑だなあ。……いや、実践ができるのを好んでるのか。——面白い本をプレゼントしよう。「ゴルゲラーゼンの写本」をあげて」なにそれ。

そんなのあったか？

『あるある。「ケセラ蔵書館」のボスドロップアイテム』

ああ。ダンジョン名は覚えてるし、ボスも覚えてる。

本を何冊も浮かせて、魔法をどんどん撃ってくるやつだったな。

しかし、ドロップアイテムは記憶にないな。

『ボスアイテム番地の初級。そうそう、もうちよい右』

ほんとだ。あった。

アイテム結晶を解除して出てきた古くさい本をそのままエルピダに差し出す。

マギアは私がアイテムを出す光景を興味深そうに見ていた。

エルピダは本に注目している。

エルピダは本を受け取り、パラパラめくっていく。

……文字が読めるのか？ 私の世界ですら文字は何種類もある。

それどころか、ここは異世界だぞ。文字がまったく違うはずだろ。

「大丈夫だと思います」

『能力に「文字変換」があるから、たぶん読めるよ。ほら、読んでる』
本当だ。

一ページ目に戻り、文字を追い始めた。

「これ、いただいてもいいんですか。かなり希少なものは？」

この世界だと珍しいだろうが、初級ボスのドロップアイテムだからな。

別に返さなくても良いし、返してくれてもいい。どっちでもいい。使わないアイテムほど無価値なものもないだろうから。

「ありがとうございます。……これ、すごい難しい本ですね。エルピダが一ページをこんなにじっくり読むのは初めてです」

私は知らないが、なんか、そのような気配がするな。

さつきまで読んでるのかってくらいに速さでページを捲っていたが、今はページがなかなか捲られない。

それどころか前のページに戻ることもすらある。

『全部読めたらレベルが上がるよ。きちんと理解できたなら新しい能力も手に入る』

えっ、そうなの？

『間違いない。初級ボスのドロップアイテムで値段的な価値は低いんだけど、中身は魔法の本質に迫ってるからね。元の世界でも一生をかけて読みとくレベルの内容だよ。価値が低いのは読めとける奴がほとんどいないから。もしも全部読めて理解したなら、次の本をプレゼントしよう』

どうやって理解したかなんてわかるんだ？

『チートでステータス一覧が見られるようになったからね。過去の冒険者との照合もできる。要するに、ステータスを見ればすぐわかる。『魔法の知識』って能力が追加されるんだ。アイラたんも持ってたからね』

なんか嫌な名前を聞いた。

デブで筋肉質で引きこもりの訳のわからないエルフが頭に浮かんでくるが、会うたびに顔が変わるのでなかなかイメージが安定しない。

金色の髪で、尖った耳だけが出てくる。アイラの本質は耳と髪なのかもしれないなあ。

Level 3. 煉獄の浄罪

そうして特に何もなまま五日が過ぎた。

特に、というのはトンネルが出ないという意味だ。

今は防衛局の召喚獣訓練に付き合わされ、戦ったが暇つぶしにもならない。

ちやつかりマギアも入れてもらっており、一緒に訓練を積んでいく。

『いいね。まだ本の理解はしてないようだけど、互いに自らを理解し始めた』

どういうこと。

『まずマギアは、先のトンネル出現で自分の弱さを知った。他の同級生もこれは同じだ。強くなることを諦めた奴もいたけど、そんな奴らは切り捨てれば良い。知ったことじゃねえ』

まあ、なかなかショッキングな出来事だっただろうな。

時空震からのダンジョン出現だ。さらにマギアはモンスターに襲われた。

奴らにとってレベルが段違いのモンスターだっただろう。

『それとエルピダだ。こいつは召喚獣の中で一番やる気がなかったんだけど、やる気が出てきてる』

そうなのか？

『うん。こいつは活字を読みたいって欲望だけしかなかった。前の訓練中なんて頭を横からぶん殴ってやりたいくらいなのやる気のなさだった。お嬢様に本をプレゼントしてやるって言われてからはちよつと力を出してるし、今は魔法を識ろうとしてる』

魔法を知る？

私も知ってるぞ。

『「知る」じゃなくて「識る」。知識で一単語にされるけど、この二つは微妙な差がある。あの渡した本ね。実は「知ってる」だけじゃ読めないんだ。魔法を「識らない」といけない。トンネルのボスが「魔法の知識」を持ってたから、参考にさせてもらった。今のところは成功してる』

何が違うの？

『魔法は詠唱さえすれば、道理を弁えない子供でも使える。魔法陣を見て書いて、魔力を込めればまったく別の人間以外ですら行使できる。その程度が「知る」ってこと。魔法の表面をなぞってるだけ』

はあ、よくわからんけど……。

『魔法を「識る」ってのは、自分の中の魔力が実際の現象へどう変換されていくのかがわかるってこと。これは実際に使っていていかないと駄目』

やっぱりよくわからん。

その能力が手に入るとどうなるのかだけ教えてくれ。

『魔法の威力と、魔力消費効率跳ね上がる。上級以上の魔法使いは、これがあるかないかで判別がつく』

ふーん、まだ上がってる気はしないな。

『まだ理解してないからね。でも、筋は良い。本を読むために魔法を識るねえ……。逆だなあ。まあ、そんな奴が一人はいてもいいでしょう。それに、あの詠唱方法はなかなかおもしろいでしょ』

あれね。

よくわからないけど眼でやってるんでしょ。

『魔眼だね。魔法を行使できるだけだからね。声が出ないのをそこで補えるのはいいね。速さもなかなかだし、使える種類も多い』

マギアが先頭に立ち、エルピダが後ろで補佐するわけだ。

『うん。問題は……』

ミラお嬢様だな。

今も離れたところで日傘を立たせ、テーブルに椅子まで出させて、お茶を優雅に飲みながら訓練を眺めている。

『あれはちょっと救いようがないよ』

そうだな。

何か良い方法はないだろうか。

ほら、ダンジョンについてくる代わりに、何か特訓しろとかさ。

『ダメダメ。本人に戦う気がまったくないもん。武器はロクに振るえません。魔法も撃てません。盾は重いから持ちたくありません。鎧はかつこ悪いから着ません。私は後ろで命令だけやります。みんな私の命令で動いてください。ただし、命令はまるで戦況を読み取ったものではありません。……俺だったら背後から刺し殺して、モンスターを呼び寄せる撒き餌に使うね』

そのときは私が代わってやってやる。

なんか本気で怒り始めたので、流れでそう言っておいた。

さて、約十日ぶりの上級生との模擬戦である。

前回こそイレギュラーがあつたが、今回は順調に進んでいる。

マギアとエルピダの番になった。

相手は前回と同じだ。たかだか十日なので、さほどの成果は出ないだろう。

『甘い。「男子三日会わざれば刮目して見よ」って言葉がある。男子つてのは今の時代なら人間に置き換えて読めば、「三日どころか十日も経った、あの日の奴とはもう違う」だよ。見ておくと良い』

はあ。そんなもんかねえ。

さほど真面目に受け取らないまま模擬戦は始まった。

違う。

明らかに動きが違う。

私から見ても動きが違うとわかる。

相手の上級生も驚いているのが、はつきりと伝わってくる。

なんだろうか。

役割が明確になったのだろうか。

前回はとりあえずマギアが前方で戦います。エルピダが魔法をほこぼこ撃ちますだった。

今回は明確にマギアが相手を抑え、エルピダが補佐に徹している。さらに魔法の威力が明らかにおかしい。

火の玉の大きさが石ころから、頭一つほどの大きさになっている。

雷も線から綱に、氷も涼しいから寒いに成長を遂げた。

身体強化の効果もアツプしているので、マギアが相手を抑えることができるのも大きい。

相手の動きを牽制し、魔法でちよこちよこダメージを与えていく。

このパターンが確立されてきている。

相手はもう弱り、あと魔法で一撃だ。

行け、もう一手だ。ほら、そこっ！

『またここだ！ 来るよ！ ほらっ、座って頭抑えて蹲る！』

えっ？

なんかずっと静かだったのにいきなり叫びだした。
またしても、頭が痛くなってくる。

さらに宙に浮いたような感覚、視界が捻れて耳は遠くなっていく。
落ち着くと、マジアとエルピダの間にアーチ状の……なんだろう？
アーチの中は暗く奥行きを感じる。どうも黒塗りのアーチ状の壁
ではなさそうだ。

『トンネルだよ。この前よりも入口が大きい。ほら、降りる。モンスタアの反応があるよ』

またしてもこのパターンだ。

最初は驚いたが、二度目なのでちよつと慣れてきた。

モンスタアがアーチの中から出てきたが、大きさがこの前とはだいぶ違う。

この前のモンスタアの軽く倍はある大きさだ。

人型の二足で、両手には大きな剣を携えている。

私がマジアの前に立ち、モンスタアと対峙する。

モンスタアの眼は三つあり、その眼が私へと向いた。

一瞬首をひねり、興味がないというように他へと視線を移す。

視線はある一点で止まった。

うがああああ！ と叫び声をあげる。

まるで、「さあ、俺と戦え」と言わんばかりの声色である。

声の先にいたのはケオ教官である。

彼もそれに気づき、召喚獣とともに剣を抜いた。

モンスタアが一步を踏み出そうとしたところで、私はまだ地面に着いているほうの足首を斬る。

バランスを崩し、うつ伏せに倒れたところで、足、太もも、背中、首へと飛び移り、脊椎を斬りつけた。

さらに頭へ飛び移り、モンスタアが頭を横に向けたところで耳のあたりから、両目を潰すようにシユウで顔面を一文字に斬りつけていく。

最後は胸のところに潜り込み、心臓を貫いた。

モンスターは消滅した。

おつ、今度はドロップアイテムが出るな。

——双剣ミグバの目玉
いつらねえ。

とても喜んだ様子でお嬢様が近くにやってきた。

私の働きのよほど輝かしいモノに見えたのだろう。ご機嫌が最高潮だ。

『ドロップアイテムを欲しがってる。プレゼントしよう。前はあげられなかったからね』

そうだな。

ほんのり白く光る結晶をお嬢様に差し出す。

お嬢様は結晶と私とを往復で三回は見た。

この喜びよう。私も嬉しい。こんなに喜んでもらえるなんて。

お嬢様は結晶を両手で持ち、頭上に掲げた。

『これが私の召喚獣の働きよ！』

そう言わんばかりだ。

結晶は解除され、しかして出てきたのは人並みに大きく、ぬめつとした目玉である。

周囲の視線と表情が歴然と変化し、お嬢様も恐る恐る自身が掲げた目玉を見上げる。

目が合った。お嬢様はそのまま叫び声をあげて、ついに目玉の下敷きとなった。

ケオ教官とマギアが、お嬢様を救うべく動いている。

そのままマギアとお嬢様は闘技場から出て行った。

またしてもここに残ったのは、教官二人と私の計三人である。

『明らかにおかしい。今までの周期だと約三年だからね。十日で二回、しかも同じ場所。一回だけなら偶然の可能性もなきにしもあらずだけど、二回目があるなら違う。絶対狙われているよ』

そうだな。

しかし、何が狙われているんだ？

『候補その一が、メル姐さん。あるいは俺』

まあ、私たちが出てきてからだもんな。

『せやな。候補その二が、ミラお嬢様』

私を呼んだからだもんな。

『あと、隠しスキルが影響してるかも。候補その三が、マギア』

マギアの試合中に出てきてるもんな。

『そう。候補その四がこの中の組み合わせ。これも十分にあり得る』

そうだな。

それくらいか。

『候補その五が、実はこつちが目的じゃなくて、もう片方の世界が目的って場合』

そんなことがあるのか？

『ないとは言えない。例えば、トンネルをこの位置に作ると、もう片側も同じ位置にできるって法則があるのなら、狙われているのは向こう側でこつちは巻き添えになる。まあ、その場合は、また亜人の連中に出会うことになるかもね』

ほおん、なるほどなあ。

前回と同様に、応援が来るまで三人でモンスターを倒していく。

今回は出入り口が広いため二体同時に出てきたりした。

しかし、モンスターの雰囲気明らかに違う。

前回は見境無く人間をとにかく襲う感じだったが、今回は相手を見定めている様子だ。

しかも必ず私を無視して、他の二人を狙っていく。強者を狙うようだ。おかげで私は戦いやすくてありがたい。

さらにだ。四体以上で来ることもあるが、必ずこちらの人数以上で戦おうとはしない。

こちらが一人なら一体で、二人なら二体でと、なんらかの矜持をモンスターから感じる。

これも私にはありがたい。そういう無駄なこだわりは付けいる隙になる。

見物をしているモンスターの後ろから、容赦無く不意打ちできる。

なんだろう。前回よりもモンスターがしぶといな。

前は二回だが、今回は個体によるが三回は斬らないと倒れてくれない。

『レベルが前回よりも高い。最初の奴が一番高くて800以上だった。超上級に足を踏み入れかけてる。ボスは厄介かもしれないな』

今回は、暇そうにしている教官二人にも見せ場があった。

シユウが相手を見繕って、二人に振り分けていたようである。

『おお、さすがにレベル差があるからか、倒すとレベルが十くらい上がるなあ』

どうも教官達のレベルアップもしているらしい。

強敵と戦うことでシステマ的な経験値がたくさんもらえるのとのこと。

私の場合だとレベルが増えてもステータスは増えないが、この世界の住人はレベルアップからもステータスアップの報酬があるのとのことだ。

『そこまでじゃないけどね。まあ、強くなるつちやなるよ。養殖的な強さだけどね』

どういうこと？

『メル姐さんを見たとおりでよ。ほとんど実がない強さ。これなら強いアイテムを探し続けた方が効率が……ひよつとして、そういうアイテムがない世界なのか。そういや、見てないな。資料でもなかった。ふむふむ』

何かがわかったようだ。

これ、私のおかげじゃないだろうか。

そんなことをしているうちに、前回同様に兵士達がやってきた。

司令官代理は正式に司令官になったようである。

あれ？ お嬢様が来てないぞ。

「お嬢様はその……、体調を崩されましたのでお休みられています」
マギアが遠慮がちに告げた。

そういう大切なことは声を大にして言うべきだ。

よし。

今回は私が入るのを止める奴はいないってことだな。

司令官やケオ教官も反対しない。

むしろそうして欲しいとのことであった。

こうして今回は堂々とダンジョンに挑むことができるのである。

中は前回とだいぶ違う。

ほぼ一本道だ。一本道ではあるが、通路と広間が交互に来ている。通路では雑魚っぽいのが出てきて、広間ではやや強いのが出てくる。

雑魚も強っぽいのも一対一で挑んでくるのでやりやすいつちややりやすいが居心地は悪い。

特に雑魚の場合は、大量に来てくれた方が私の場合はやりやすい。敵対意識がないと感染が上手く機能してくれない場合がある。

こうして順調に通路と広間を進んでいけば、前回のボス部屋とよく似た広間にたどり着いた。

中心に結晶こそあるのだが、柱の中に結晶が埋め込まれ、保護膜のようなものに包まれている。

『ほお、物理的なガードと魔法的なバリアか。これは堅固だ』
そこも違っているのだが、なによりも違うのは先客がいた。

この前、出会った亜人の三人がすでに広間で戦っている。

『やっぱリトンネルは、相互の入口が同じ場所にできるんだね』
そのようだな。

……それより、ボスが強くないか。

三人を相手にして余裕の立ち回りを見せているぞ。

豹の攻撃を片手でいなし、カバのフレイルを足で押さえ、ミミズクの魔法を軽く飛んで避けている。

見た目がデカイヒヨコなのに、強さが見た目と釣り合っていないぞ。『とても強い。非常にね。レベルとステータスはこんな感じ』

・名前：トウリトス

・出身：煉獄界（第七冠）

・レベル：1751

・強さ：超上級

・能力：歪曲（第三位）。複製体。俊敏＋。格闘技術＋＋。戦士の息遣い＋。戦士の誓い＋。戦士の眼＋。戦士の体躯＋＋

——
おお、なんか戦士って名前のスキルが多いな。

明らかな前衛職だ。

『あのヒヨコはメル姐さんの天敵。絶対に勝てない』
そうなの？

『無理だよ。超上級で、接近職のプロフェッショナルは勝ち目がない。これで中距離ができる相手ならだったら逃げが発動してる』

ちなみに能力はそれぞれどういう効果なんだ？

『まず複製体は、本体が結晶なので戦える体を作ってますよってだけのこと』

それはなんとなくわかる。

つまり、あの戦ってるのは偽物ってことだな。

『そうそう。で、俊敏と格闘技術は素早さと格闘技に補正が入る。＋がついてるから、さらに効果は上。特に格闘技術の＋＋は手に負えない』

なんかその時点でもう強そうだな。

『さらにだ。戦士の息遣い＋で戦闘の疲れもほぼない。戦士の誓い＋で、一対多数の時、自身のステータスに補正をかけてる。相手が複数だと異常に強くなる。おまけで戦士の眼＋でしょ。相手の動きが止まって見えるでしょうなあ。さらには魔法の流れや未来の一部まで見えてるはず。もうこの時点でメル姐さんの勝ち目がかなり低い』

戦士の体躯＋＋ってのは？

『トドメがそれだ。状態異常や能力低下への完全耐性。頼みの能力半減も無効。しかも免疫もつくから感染で状態異常を無理矢理付けてもあつという間に回復される。残念ながらメル姐さんじゃ、あのヒヨコには勝てない』
どうするんだ？

逃げる？

『ヒヨコと戦うなら、あの三人をパーティーに加えて作戦を練り上げて戦わないと駄目』

そうするしかないか。

『でも、あのヒヨコはあいつらを生かして帰さないだろうね』

じゃあ、このまま後ろか不意打ちか？

『無理。この部屋はあいつ自身も同様だ。ヒヨコに不意打ちはきかない』

打つ手がないじゃん。

『そうでもない。あいつは戦士のスキルをたくさん持つてるけど、心までは戦士じゃない。現にスキル「戦士の心」がない。根本が卑怯者なんだ。そこを突く』

ほう。

……というど？

『簡単だよ。メル姐さんも言ったとおりだ。あのヒヨコは複製。倒しても復活するだけ。本体は結晶なんだ。そこを見誤っちゃいけない。ヒヨコが負けを認めても、本体の結晶は無事だから別に痛手じゃないんだ。相手にだけ命を賭けさせてる。相手が戦士ではなくて、そういう卑怯者ならやりようはある』

ほう。

『まずは観察だ。部屋の中心に行こう。別に戦闘をするわけじゃないから普通にぼんやりと歩いて行けば良い』

言われたとおりに部屋の中心へ歩いてむかう。

ヒヨコもこちらを盗み見ているようだが、私に戦闘する意志がないことを理解したようで、そのまま三人の相手が続けている。

『あいつらが全員倒れる直前で動く。戦士の誓い+を消してからだね。それまでは間抜け面で見といて。それと柱に俺を付けといてね』
その後もぼんやりと戦闘を見続ける。

それに間抜け面をしているつもりはない。

少し顔に意識をむけて真剣な表情を作って見守る。

私の様子をうかがってきたヒヨコが、私の顔を見て笑った。シユウ

も笑った。

なんだア？ てめエ……。

『メル、キレた!!』

落ち着きを取り戻し、引き続き中央の結晶が入った柱を背もたれにしての見物だ。

カバがやられ、ミミズクもやられる。

豹も最後まで粘ったが、強化魔法が切れたところで勝負がついた。

『はい。じゃあ動きます。最初に柱をぶっ壊します。はい、邪神様結晶@』

劈開。

流れで眩いたら、シユウがスキルを発動させたようで、背もたれにしていた柱が砕け散った。

おい、いきなりすぎだろ！

『防壁その一は壊しましたよ、と。ハードに頼りすぎて。相手がわざわざそちらのやり方に合わせると思ってたのかね。戦士脳かよ。確かに頑丈だけどそれが壊せるなら意味ない。ほれ、黒竜のスキルだ』

視界が一点に集まっていき魔法の効果が消される。

魔法で出来ていたであろう保護膜が消え去ってしまう。

結晶が支えを失い、床へと落ちてきた。位置もちょうど私の足下だ。

ボスが必死の表情で迫ってくるが、そいつから目を逸らしてシユウを結晶へ突き刺した。

前回と同様にシユウを根元まで突き刺してから、引き裂けば結晶はあっさりと壊れていく。

『卑怯者対決ではこちらが上手だったってことだ。結晶をヒヨコの中に入れて戦うなら勝ってたのにね。哀れな奴だ』

黄色の結晶は消え去り、白のアイテム結晶だけが残った。

——自戒なきトウリトスの浄罪

またしても意味のわからんアイテムだ。

いったい何に使えるのか、そもそも結晶を解くとどうなるかがさっ

ぱりわからない。

『使わない方が良いね。嫌な気配を感じる。触っちゃ駄目な類だと思う。封印しとこう』

そうだな。

そのまま袋の封印枠にしまっておく。

『さて、さっさと逃げるよ。ここもやっぱり崩壊するからね』

あいよ。

逃げようとしたところで、例の三人組が目にとまった。

一番最初に倒れたカバが起き上がり、二人を抱えようとしている。カバも負傷しているためか、なかなか二人が上手く抱えられないようだ。

『どうする？ 助けたら脱出が間に合わないかもしれないよ』

私を試しているのか？

『いやいや、今は本当にただの質問。それと可能性を言ってるだけ。俺はどっちでも良いんだ。——試すならね。真に本人の基盤となるものが揺れている状況で訊くよ』

余計タチが悪いじゃねえか。

仲間を見捨てて逃げるならほっとくが、崩れるのがわかっている助けようとするならあいつらは冒険者で、きちんとパーティーをしている。

きっと他の奴が残っていても同じ事をしていただろう。

それなら見捨てるにはちと惜しい。異世界にいる希少なダンジョン攻略の冒険者達だ。

ほら、それならだ。手を貸すべきだろう。違うか？

『言葉が多いのは未熟の顕れ。助けたいなら黙って助けりや良いんだよ』

クツソ腹立つわ、こいつ。

もしもここがダンジョンじゃなくて、こういう状況じゃなかったら全力で投げてる。

街の端から端まで届くぐらいの力で容赦なくやっってるぞ。

『そういうところが未熟って言ってるの。早く助けに行きましようね』

』

苛つきつつもシユウの助言に従い、亜人達の元に走る。

豹とミミズクを両脇に抱え、カバに全力で付いてくるように指示した。

今回は一直線だが、カバがいたためか、やはり脱出はギリギリになった。

思わぬ収穫物に、出口にいた教官や兵士達も素直に歓声をあげられない状態である。

亜人の三人は、トンネルが閉じた闘技場でそのまま治癒された。

目が覚めると周囲の様子をうかがい、自身等が助けられたことを理解し、大人しくなった。

亜人という単語は通じず、異界人とか煉獄界人とか呼ばれている。なんだかちよつと強そうな呼ばれ方だ。

落ち着いたところでお嬢様が現れて、さすが私の召喚獣ねと自慢してきた。

いいんだよ、いいんだよ。それくらいでいいんだよ。でしやばりすぎると邪魔だからね。

私もダンジョンで拾ったアイテム結晶を二つ、三つほど摘まみ、お土産代わりにお嬢様に差し出す。

なんだか顔を引きつらせて、いくつかの礼と賛美を述べた後で受け取りを拒否した。

よほど行く直前の目玉下敷きがきいたようだ。今度からあの手を使おう。

お嬢様の問題も片付き、残る問題は亜人三人組である。

ケオ教官や兵士達も彼らの処遇に困惑していた。

そこで前に出てきたのがお嬢様だ。

嫌な予感しかない。

「我ら人界は彼ら異界の方々の力により支えられています。言わずもがな、我ら召喚師は、とりわけ彼らの力によるところが大きいと言えましょう。そんな彼らが今、この人界で、頼るあてもなく往生してい

ます。で、あるならば人界を代表する当家は彼らを客として迎え入れましょう。今こそ、煉獄界の彼らに我らの享受する恩恵を、返すべきときではないでしょうか」

すらすらとそのように述べ、お嬢様自らが豹の亜人に手を差し伸べた。

……あれ、すごいまともなこと言ってなかったか。

『本気で言ってる。自然体だ。本当に馬鹿で問題児で高慢で戦力外だけど、人としての道はしっかり踏んでる。そういう隠しスキルなのかなあ』

亜人達もただただ礼を述べ、お嬢様と兵士達とともに闘技場の外へ案内されていった。

私はちよつとお嬢様を見直した。

でも、願わくはダンジョンには無関係でいて欲しいものである。

亜人達の部屋は寮内におかれ、しばらく圀庁の所属となった。

圀庁の所属となると、何がどうなるのかはさっぱり私にはわからない。

彼らはすっかりお嬢様に心酔し、もはや私と彼らのどちらが召喚獣なのかわからない。

私はまたもやお嬢様を怒らせて、マジアの部屋に来ている。

テーブルに置かれたおかしを摘まみ、お茶をすすり、すっかり落ちて着いた状態だ。

「また、話を聞かせてもらいたいのだけけれど」

ここまで遇されて拒否することはできまい。トンネルで見てきたことを話していく。

モンスター達のヘンテコな特徴。相手のレベルが上がったこと。

さらにボスの特徴も余すことなく話していった。

それとアイテム結晶も、ボス以外から手に入れたものは差し出すことになった。

ここで解除すると問題なので、実際に渡すの防衛局についてからだ。

トンネルが何かにも言及があった。

『あれはね。レベルアップ手段の一つだと思う』

確かにレベルは高かったな。

『一つの世界にいる限りだと、レベルの限界って千くらいなんだ』

それは前に資料を読んだときにも出ていたよな。

マジアも肯定している。どの界でもレベルの最高は千にぎりぎり届かないと。

「うん。でも、前回と今回のトンネルで現れた核持ちはどちらも千を超えていた」

そーいやそーうだな。

『あれはレベルに限界を迎えた奴らが、より高みを目指すための一手段じゃないのかと思ってる。どうやってるのかは知らないけどね』

ダンジョンのような仕組みを内部で作り上げ、中で戦いを繰り返す、あるいはトンネル同士で戦いあってレベルを上げていく。

それでレベルをあげていったって……どうなるの？

『いるんだよ。ただただレベルの限界値を目指そうとする奴ってね。おそらく、この世界でレベルが初めて千になった奴は絶望しただろうね。まだ先があるのかって。それ以外の理由だと……うーん、どれもアホらしいな』

シユウはその話題についてはそこで切った。

マジアもそれについてはシユウの言ったことで納得できたらしい。

「トンネルが発生するタイミングについてですが……」

どうも今日の本題はこれのようだ。

本人も気にしているらしい。二連続で彼女の戦闘中にトンネルが発生したのだから。

『あれは偶然じゃない。レベルアップが目的なら、レベルが高い奴をどうにかして探して、入口を開いてるんだと思う。でも、それならメル姐さんを狙うんだ。なぜあのタイミングなのかわからない。別に防衛局で訓練中に現れてもおかしくない。寮で寝ているときとか絶好のタイミングでしょう』

タイミングについては偶然ではないと言えるが、現時点で不明とい

うことで終わった。

話が終わったところで、エルピダがやってきた。

前回と同様に、マギアのとったメモを読み、私の方へ歩み寄ってくる。

そのまま私へと手を伸ばす。本をよこせということだろう。

「こら、エルピダ。やめなさい」

マギアは叱るが、エルピダの手は下がらない。

『どうもあの本はお気に召したようだね。ちゃんと本棚のお気に入りに入ってる。——いいよ。「魔法の知識」もちゃんと手に入れてるからね。次の本に進むとしよう。「ヒューの魔創具（初版）」をあげて』
……まったく記憶にないぞ。

『パートの魔具シヨップ：カローエン本店』の特殊ドロップ』

ああ、思い出した。

取るのがめっちゃ面倒なやつだな。

訳のわからんトラップが次から次へと出てくるところだった。

その中で、全てのトラップを避けて、モンスターを一体も倒さず、ボスも正攻法意外で倒したときに手に入るやつ。

絶対にもうやりたくないやつだ。手に入れるまでは楽しいんだがなあ。

読めないから、手に入れた後の価値がまるでない。

袋から取り出して、結晶を解除してそのまま渡す。

すぐに私の手から本を取り、中をパラパラめくり一ページに戻る。

ソファに戻り、文字を追い始める。

あれはどういう本なんだ？

『魔創具の作成ができるようになる本』

魔創具か、装備品が手に入るってことだな。

『「魔創具」じゃなくて「魔創具」。「魔創具」は造る物で、「魔創具」は創る物』

同じじゃん。

『音はほぼ同じだけど、中身が違う。魔法使いがつくるのは魔創具。すぐに消えるけど、戦闘では便利なんだ。ここで一番重要なのはね。

前回と同様に読むだけじゃ、まず創れないこと。実践が必須なんだよ、ふふ』

意地の悪い笑い声を出している。キモ。

つまりどういうこと？

『読むために創る必要が出てくる。……順序が違うのは嘆かわしいことだがね』

きちんと読むとどうなるんだ？

『「魔創具作製」って能力が手に入るね。これは「魔法の知識」がないとまず習得できない』

……それもアイラが持ってたのか？

『持ってた。魔法関係のスキルはほぼ全て持ってる。だいたい使い方を間違えてるけどね。これもミキサーを創り出すために使ってたし。……思い出して気持ち悪くなってきた』

記憶がないことをありがたいと思えたのは久々だった。

Level 4. 天界の傲慢

防衛局にやってきて、アイテム結晶をマギアに渡した。

武器や防具といった使えそうなものもあるが、まるで何に使うかわからないものもある。

『この世界は対人のアナライズはそこそこだけど、物へのアナライズが低いね。表面だけで使えるのと使えないのを分別してる』

マギアが「どうでしょう」と槍を振り回している。

くるくると上手に回すので、すごいなと褒めておいた。

『見た目だけで選んでる。本質を見ようとしてない』

シユウの声は呆れを隠そうともしていない。

マギアや他の兵士達が楽しげに選んでいる中で、エルピダがジツとアイテムを見ている。

珍しいなあいつが本以外のものに興味を示すなんて。

マギアは気づいてないようだが、エルピダは神妙な面持ちでアイテムを物色していく。

何を探してるんだらうか？

『やるなあ。渡した本を途中まで読んでるよ。三章で詰まったんだ』
わかるように言ってる。

『本の一章と二章は理論だけ。「魔法の知識」があるなら問題なく読める。でも、三章は実際に創ることになる。いきなりオリジナルの創造はできないから、まず模倣から始める。実物を見て解析していき、才能があればなんとか創れるんだけど、この世界には参考にするものがない。模倣はできない。故に創れないんだ』

お前、そんな本を渡したの？

『いやいや、本当はさらに一段上の本を渡す予定だった。でも、ドロップアイテムがこっちでも手に入ったからこれにした。あいつはね。今、アイテムをアナライズしてるんだ。こういう風に効果が付与されてて、どう創られてるかを読み取ってる』

お前の得意技だな。

『いやあ、俺はどっちかという人の方が得意だよ。物はチートによるところが大きい。文章もおもしろいしね。——そもそも論だけど、アナライズするのは観察力があれば必要ないんだ。アナライズで読み取れることは、別に使わなくても読み取れることだからね。チートを使ってるってのは、自らの観察力不足を認めてるようなもん。アナライズで読み取ったなんてことを、口に出して言うのは本来恥ずべきことだ。真に見る目がある奴はアナライズなしで、物や人の本質を読み取るからね』

そんなものなのだろうか。

それで、エルピダはまず解析して、創っていくんだな。

『そうなる。筋は良い。ほら』

エルピダが、マギアにネックレスを手渡している。

マギアが持った槍は要らないから戻せと指で指し示した。

『合格だね。あの中の武器でまともなものはない。俊敏と防御に補正がかけられるあのネックレスが次点だ』

シユウはエルピダの選択にご満悦だ。

次点と言ったが、一番はどれだっただろうか。

「それなら私もこのカメラオにしましょう」

お嬢様もとことこやってきて、カメオのブローチを手を取った。
『あのカメオこそが最良だった。能力の全プラス補正と麻痺の保護。偶然なのかどうか判断つきかねる。他は武器と防具に生ものだからね。お嬢様が手に取るなら確かにあれしかない。でも偶然か……いやあ、とりあえず猫に小判つてことだけしかわからんな』
けっこうひどいことを言ってるんじゃないだろうか。
しかし、私も意味がないよなと思ったので特に反論はできないのであった。

ついに防衛局での特訓である。

今回も局員との模擬戦だが、ケオ教官や他の教官も来ている。

彼らはもともと防衛局の所属で、最近はいろいろ物騒なので休みの日まで訓練にかり出されている。

『社畜乙』

今回はマギアも模擬戦に参加させてもらっている。

なんでも前回の戦闘がケオ教官の目に留まったようだ。

お嬢様も、うんうんと誇らしげに頷いていた。

マギアとエルピダの戦いを見ているが、さすがに本場の局員にはまだ及ばない。

何が違うんだろう。力や魔法の規模はすでにマギアとエルピダも局員に負けず劣らずに見える。

『そうだね』

だよな。

そうだというのに局員との戦いでは、じりじりと追い詰められている印象だ。

誰か一人に負けるならまだしも、局員全員に対してその傾向がある。

まだ決定的な何かが、彼女らに足りていないのだろうか。

『そうなるね』

どうせわかかってるだろ。

相づち打ってないで解説しろよ。

『あの三人衆の戦いを見てればわかる』

今回は防衛局員だけでなく、トンネルで拾った亜人三人衆も訓練に参加している。

三人で、局員二組の二人と二体を相手にしているわけだが、問題なく局員たちに勝っている。

やっぱりレベル差があるからだろうか。

個人の動きが全然違うよな。パルドウの動きはケオ教官くらいしかついて行けてない。

『それは確かにある。でも、レベルには反映されない部分だよ。各人で見るとじゃなくてパルドウら三人を一つとして見りやすくにわかる』

……………うん。そうだな。

『ごめん、メル姐さんには酷な話だったね。——連携ができてる。これに尽きる。マギアとエルピダは前衛と後衛って役割が決まっただけで、連携がまったく取れてない。局員達は互いにどう動くかが体に染みついてる。パルドウ達はさらに上だ。彼らの連携は体へと完全に染みわたり、心で繋がってるほどなんだ。あいつらはもう三人で一人と言っても過言じゃない。理想のパーティーなんだよ。メル姐さんにはわからんだろうけども』

イラツときたが、なんとなく言ってることがわかるので何も言い返せない。

事実として私には、心レベルでの連携というのがわからない。

今度はパルドウ達とマギアらの模擬戦が始まった。

マギアでは相手にならないが、一緒に組んでいるケオ教官が強いのでなんとか戦いの形にはなっている。

「パルドウ達は煉獄界でもトップクラスのランカーなのだそうです」

私もそれは聞いた。

煉獄界は強さでランク付けされてて、上になるほど暮らしもよくなるらしいな。

さらにトンネルへの優先挑戦権が手に入るとか。

とにかく好戦的な世界らしい。

「そこであなたの名前を知っているか聞いてみました、誰も知らない様子でした。聞いたこともないと。——メル、あなたは本当に煉獄界の出身なのですか？」

いや、違うけど。

あつさりと否定されて、お嬢様は口をぽかんと開けている。指を私に向けてきて、話が違うというような顔で言葉を継いでいった。

「……あなた、煉獄界のトップだと言いませんでしたか」

一言もそんなこと言ってないぞ。

お前が勝手に煉獄界だと決めつけたただけだ。

「……………そうでしたっけ」

そうだよ。

「もしかしたらそうだったかもしれないね。そうであれば出身は天界ではない」

そうだね。

「地獄界でもないと言っていました。そうですね」
そうだな。

「それでは霊界からなのですか。ああ——、そうですね。エルピダといい、変わり種が多いところですから。なるほど、納得もできるとい
うものです」

いや、そうは言ってない。

駄目だこりゃ。また勝手に決めつけてる。

『そんな話は後にして。来るよ。——時空震だ』
えっ？

ここは闘技場じゃないぞ。

またしても頭痛がやってきた。

何度体験してもこの感覚は慣れない。

行動は無理だが耐えるだけなら、なんとかかできる。

『階段だね』

やっと状態も落ち着いて、視線を向ければ階段があった。何もなかった空から、地面へと光の階段が降りている。

まるで天へと誘っているかのようだ。

『うーむ、狙われているのはわかかってたけど、むしろ対象が増えた。ケオ教官に、亜人三人衆まで加わったし』

シユウは困惑している。

そんなことを言っている間に、モンスターが出てきた。

どこかで見たような姿だ。白い翼に、頭の上に円環まで着いている。

「天界の住人か」

一体や二体ではない。

数体が空を飛んで地面へ降り立つ。

『飛んで降りてくるなら階段いらないよね？』

……確かにそうだね。

でもそんなことを言っている場合じゃないよな。

『戦意がないことが救いだね。全員がレベル1000を超えているから、やる気ならみんな死んでたかもしれない』

数体が私へとまっすぐやってきて、階段を上るように手で示す。

周囲の人間は駄目なようで、お嬢様が私も行くと駄々をこねている。

羽根つき達はお嬢様にまったく取り合わず、進路を塞ぐだけだ。

ここまで戦う気が見えないと、さほど興が乗らない。

なんだかお偉いさんの屋敷に招かれた気分だ。

中に入れば数多くの羽根つきが私を整列して迎えてくれている。

ますます戦闘をする意欲が失せてきた。これはもうダンジョンじゃない。

そのまま輝かしい通路を進むと、いつもの広間があった。

逃げも隠れもせず、部屋の中には結晶がぶかぶか浮かんでいる。

結晶の両脇を、二体の大きめな羽根つきが護っていた。

『わああ……、これすごいよ』

結晶の側に文字が浮かんでくる。

・名前：ゼフトロス

- ・ 出身：天界（第九天）
- ・ レベル：2525
- ・ 強さ：初級
- ・ 能力：歪曲（第二位）。諸天の根源。

レベルがついに二千を超えてきた。

しかし、能力は地味だな。いつもの歪曲以外では、ただ一つだけだ。あれはどうなの？

『いやあ、やばいですねえ。初めて見たよ』

特に焦りは感じられない。

珍しい物を見つけて喜んでいる。

どんな能力なんだ？

『自分を生命の原点にし、周囲を動かす原動力と為す』

わからん。

『自らのレベル以下の生物を生み出せる。この前のボスのヒヨコだって生み出せる。現に、結晶の両脇にいる二体の天使は、どちらも前のヒヨコより強い。一定の制限はあるだろうけどね』

……やばくね？

『やばい。これが普通のダンジョンなら挑む前にメル姐さんは逃げる』

逆に言うと、逃げてないからなんとかできるってことか？

『そうなる。このスキルには大きな弱点が二つある。一つは自分のレベル以下の生命体しか生み出せないってこと』

それでもレベルが二千五百だと相当だぞ。

『よく見て。こいつの強さは初級なんだ。ステータスがおそろしく低い』

……あれ、ほんとだな。

なんだこいつ。私みたいってことか。

『そう。こいつのレベルってのは、自分で生命体を生み出しまくって、互いにつぶし合わせてレベルアップさせて、それを自分で倒して——生んだ生命体は自由に消滅できるんでしょう。それでレベル上げて

る。レベルほどの実力はこいつにない。スキル以外の才能がない。この世界の住人ならレベルアップでもステータスの恩恵を受けるはずなのに、初級止まりだ。本当に恵まれたスキルだけでここまで来てる』

なんか自分のことを言われているようだ。

それでも周囲が強いんだから、実力はあるってことにならないか。

『それはそう』

あっさりと認められてしまった。

周囲の羽根つき達は私に結晶まで進めと示す。

同時に結晶横に控える二体は、武器を構え始めている。

無理矢理、私を結晶に近づかせて、殺すのが彼らのやり方らしい。

『スキルに恵まれているのが自分だけだと思ってる。倒せるときに倒せば良いのに、わざわざ本体の前まで弱らせることもなく誘い込むなんてね。増長も甚だしい』

どうするんだ？

あの二体の羽根つきはどちらもヒヨコより強いんだろ。

『うん。そこで二つ目の弱点だ。あのスキルは有機生命体しか生み出せない。無機物系に命を宿せない』

……弱点なの、それ？

『今回の場合はそうだね。さあ、俺を天に指し示して。赤き結晶と驕った天使共に、一つ問いを投げるとしよう。天使共、——青き光をもう見たか？』

私がシユウを真上へと突き刺す。シユウの刀身が青みを帯び、涼やかな青い光が生じた。

天使達は一瞬警戒したが何も起こらないので、すぐに余裕を取り戻した。

この場で一番驚いているのは、もしかしたら私だったかもしれない。

ああ、そういうえばそうだ。今まで一度も使っていない新スキルがあったことを思い出した。

札の世界で、私はあの世界でのパーティーメンバーからお土産をも

らった。

彼女との――、彼女がいた世界との大切な繋がりだ。それは絶対に忘れるわけにはいかない。

シユウもそこを理解してくれ、私のスキルにどうにか組み込むことで、私には扱えないカードという形ではなく、スキルという形にしてくれたのだ。

ただ、問題もあった。大問題が――。

『いやあ、思い出補正でひたすら強化しまくったら、生命体のいるところだと使えなくなっちゃったんだよね。しかも戻すこともできねえ。ハハッ』

笑い話じゃねえよ。

あの世界どころか元の世界でも一度も使えなかったスキルだ。

忘れないためにスキルにしたのに、危なすぎて使えないから今の今まで忘れてしまっていた。

これじゃあ本末転倒じゃないか。

『でも、こういうときに役立つでしょ。ほら、懐かしいね。王宮でやらかしたよね』

ほんとだよ……。

先ほどまで余裕を見せていた羽根つき共が、全員のたうち回り、血反吐を吐いて倒れていく。

あのときは、さらにゲロゴンブレスで建物ごと消し去ったが今回はしない。

あれは本当にどんな顔で説明すればいいのかわからなかった。

『やつぱ、こいつは苦戦をしたことがないね。スライムをぷちぷち何万、何億も潰したところでレベルほどの強さは得られないんだよなあ。未知の相手を前に、どう対応していいのかまるでわかってない。ひたすら体力の高い奴を作ったり、的外れな耐性を持つやつを作ったりしてる』

赤い結晶が羽根つきを何度も生み出すが、青い光の明滅とともに倒れていく。

しぶといのもいたが、弱ったところで斬れば終わる。

『スキルだけで生き残ってきたツケが、とうとう回ってきたわけだ。あーあ、もう打ち止めだね』

すでに結晶との間合いは一足にも満たない。

シユウを振るえば、赤い結晶があっけなく碎け散った。

戦いというのもおこがましい。ただ歩いていつて叩いただけである。

どうもここ二回は、戦わずして勝っているような気がするな。

『戦わずして勝つ——孫子の兵法を語るとは小癩な。まあ、相手が屈するどころか消え去ってるんだけどね。次もたぶんそうだよ。メル姐さんに戦闘技術がない以上、相手がそこそこの強さまでじゃないと戦いにならない。最初のトンネルのボスが閥値だ。あれよりも強くなると、瞬殺か逃げしかない。相手が強ければ強いほど、もう対策が有るか無いかで勝負が決まるからね』

なんだか長々と喋っているが、難しげな話は頭に入っていない。とりあえず落ちているアイテム結晶を拾う。

——根源たるゼフトロスの傲慢

まただ。意味わからん。

もう何も考えず、そのまま袋へと入れていく。

今回は他の挑戦者に出会うこともなく、かなり余裕を持ってダンジョンから脱出できた。

Level 5. 霊界の歪曲殺し

さすがに防衛局でトンネルができたということでは混乱はあった。

それも学び舎までは届かない。

三日が経った頃、私はまたしてもマジアの部屋に来ている。

お嬢様は、亜人三人衆と圈庁に行った。彼らのことで手続きがあるとかないとか。

私は興味がないので、大人しく留守番をしている。

前回以前と同様に、トンネルで私が見てきたことをマジアに話す。

ボスとの特徴だ。今回はまともなドロップアイテムがないので渡す物もない。

『今回は、かえって疑問が増えたくらいだ。なんで模擬戦の途中なんだろう。そこがわからない。別に変なスキルが発動してるわけでもない』

シユウもどうしたものかとぼんやりしている。

「最深部にいた結晶の出身は、どれも各界の最深度の一歩手前ですね」
『続けさせて』

ふむ。

最深度の一歩手前とは？

「地獄圏は第九圏が一番深いはずです。第九圏——裏切り者の地獄『コキュートス』。煉獄界は第七冠の上に山頂——地上楽園。天界では第十天——至高天『エンピレオ』がそれぞれあります。……あるとは言われますが、そこに到達した者は誰も戻ってきていないとも言われています」

なんだそりゃ。

『人界と霊界の深度はないの？』

そーいやそーうだな。

あんまりここでそんな話は聞かない気がする。

「人界は一層だけです。これのおかげで人界は他の層よりも争いが少ないと言われています。霊界は同階層でいくつかの地区に分かれていると聞きます。中心に近いほど異常性が増すと。エルピダが最東園——デクスィアから来たようです。これについては私が語るまでもなく、メルさんの方がお詳しいでしょう」

えっ、なんで？

霊界のこととか知らんぞ。

「霊界から来られたのでは？」

違うぞ。

「えっ？」

違う。

霊界なんて行ったことすらないよ。

「でも、ミラが霊界だと」

あいつが勝手に決めつけたただけだ。

ああ、と納得する様子でマジアは頷いた。
そこで、はてと疑問が浮かんだようである。

「天界は違う。煉獄界も違う。霊界でもない。地獄界にしては人に近すぎる」

どれも違うな。

人に近すぎるって何だろう。

「それでは——」

人界でもない。

「それならどこから？」

とつても遠いところからかな。

『無限遠からやってきた』——まるでアピロのようですね」

アピロ？

「伝説の人物です。かつて全ての世界を最深度まで到達して、レベルが無限大だったという」

まあ、よくありそうな伝説だよな。

それが何か関係あるの？

『ああ……』

何かわかったようだ。

『とりあえず、うん、宿屋のベッドの上から来たとしても言っとけば良い』

そうだな、宿屋のベッドの上から私は来たんだ。

何も嘘は言っていない。

『宿屋の名前は「無限大」。正確には下の酒場の名前だけ』

無限大とは大仰な名前な酒屋だとか言って入ったんだよな。

けっこう雰囲気は良かったぞ。併設の宿も綺麗だったし。

『この世界で無限大を示す言葉がアピロ。まあ、こっちは今は関係ない。本題に戻ろう。トンネルは明らかにレベルの高い俺たちを狙っている。今回のトンネル出現でそれは確定した』

羽根つきが私だけを誘ってたからな。

他の奴らには一顧だにしなかった。いや、お嬢様だけうるさそうに迷惑がってたか。

『そうなると黒幕は人界の誰か』

ふむ。……ふむ？

それはどうやってわかるんだ？

『メル姐さんの真のレベルを知ってるのは二人だけ。その本の虫と、お嬢様の兄。本の虫のステータスはもう知ってる。そんなことはできないし、話すこともまずない』

じゃあ、あの兄が。

『あの兄もステータスを見たとおりの雑魚。召喚獣も同じ。それならあの兄が誰かにメル姐さんのヘンテコなレベルを伝えた。それを試すように黒幕がトンネルを出現させた。それがやられたからその後も続けて出した。人界の中枢部に黒幕がいるのは間違いない』
なるほど。

じゃあ、そいつを探し出してやっちまえば解決だな。

『すぐ片付けてもいいけど、トンネルが消滅して挑めなくなるかもしれない。それでもいいなら行こうか』

……もうちよつと後でもいいか。

『うん、トンネルをクリアしていけば黒幕の方からやって来るよ。とりま、次のトンネルは霊界の強いのがやってくるね。そろそろこっちも本腰を入れないとまずいかな』

こうしてマギアとのお茶会は終わりとなった。

席を立とうとして帰ろうとしたところで、エルピダが近くまでやってきた。

『ほお』

シユウが変な声を出すと、エルピダがキツと眼を見開いた。

机の上に何かが像を結び、形を為していく。短冊がカタリと音を鳴らして現れる。

『手に取ってみて』

短冊は見た目以上の重さがあった。

重みはあるが、金属製にしてはやや柔らかい印象である。

『いいね。効果もしっかり織り込んで。扱えない武器や防具じゃない。作ろうと思えばマギ

アの武具も作れるね。うん、——合格って伝えてあげて』

私が、エルピダに合格と告げるとなんだか喜ばしげである。

そうして、またしても手をこちらに伸ばしてきた。

『うーん、元々予定してた「ヤバⅡ異本」でもいいけど、ちよつと方向性が変わってきたなあ。「みんなの魔法陣」の写本は、いろいろバレちやうから駄目だな。もうちよつと別のアプローチにしてみようか。』

——よし』

何かが決定したらしい。

『魔／法』だ』

思ったよりもまともなタイトルだった。

シユウに場所を教えられて、結晶をエルピダに渡す。

分厚そうな本が出てくると思ったが、めちやくちや薄い冊子だった。

手にしたエルピダも、この薄さにはちよつと面食らったようで、開くの躊躇っている。

『これを今までに読めたと記録されてるのは三人だけ。そのうち二人は超上級パーティーの魔法使い。残りの一人がアイラ。でも、あいつはこの本を嫌ってる。手に入れたノウハウをまったく活用してない』

駄目じゃん。

『駄目じゃない。あいつは、この本に書いてあることをきちんと理解した上で嫌ってる。あいつが嫌うのもよくわかるし、ちゃんと理解してるなら、それはそれで良い。まあ、そんな本だよ』

どんな本なのかさっぱりわからん。

『本自体は割と簡単に手に入るんだ。けつこう出回ってる。前書きと後書きを抜かして、見開き九ページだけ。でも、読むのに知識とテクニツクがいるんだ。前書きが読めれば一流。見開き一ページを読めれば十年に一人の傑物と言われる本』

なんで本を読むのにテクニツクがいるんだ？

ページを捲るのに技術がいるってのか。

『ずばりそのとおり』

エルピダが表紙に手をかけ、ページを開こうとするが開かない。

なんかページがくつついてるんじゃないか。

『違うんだなあ』

エルピダも何かを察して本をジツと見つめる。

そのまま立ったまままで固まってしまおう。マジアが声をかけるも微動だにしない。

『読み始めたね』

何を？

『この本ね。魔法が隅々にまで織り込まれてて、いわゆる魔道書物とか魔本って呼ばれるやつなんだ。正式には魔法本。織り込んだ魔法を読み解かないとページが開かない。この本自体が、魔法というのかな。作った奴は人なら間違いなく歴代で唯一の魔法使いソロ極限級。竜かチート持ちが作つてると言われてもまったく不思議じゃない。むしろ納得する。でもおそらくあの世界の住人なんだよなあ』

読めるとどうなるんだ？

『タイトルと同じ「魔／法」って能力が手に入る』

魔と法？

魔法の文字をバラしただけじゃん。

『そうだね。この本を作った奴はとてつもなくすごいんだけど、同時にすごい皮肉屋なんだ。最終的には魔法を馬鹿げたものだと否定してる。最後まで読んだ奴すら、歪な存在だって言外に伝えてくる。それに、これを作った自分や世界の異常性も突いてる。作者の名前やダンジョンすら残ってないのはたぶん世界が嫌になって自らの存在を徹底的に殺したから。それでもこの本だけがダンジョンから馬鹿みたいに簡単に手に入るってのが、世界の恐ろしさと歪さを表してるというか、作者の思想が正しかったというか』

さっぱりわからないけど、そのスキルを手に入れるとどうなるの？

『無詠唱ができるようになる』

おお。シンプル。

すごいじゃん。めっちゃ強くなるな。

『正確を期すなら、無詠唱ができるっていうより「魔力」と「法則」がわかる。タイトルの「魔／法」は、「魔法」が「魔力」と「法則」で別

物だぞって意味でもある』

まあ、よくわからんけどな。

そもそも魔法の知識だからで、もう魔法は知ってるんじゃないのか。『知ってるだろうね。これはね。「魔／法」なんて名前もついてるし、魔法で作られてるけど、魔法について書かれてる本じゃないんだ。先に言ったとおりで、世界を流れる「魔力」と世界を支配する「法則」を書いた本なんだ。その入口が魔法ってだけ』

そうか。何にせよ読めるといいな。

『見開き一ページ目までしか読めない』

はい？

『目次より先には、現状じゃ見開き一ページしか読み進められない』

……ああ、またあれか。

読むために何かしないと駄目ってことか。

『そうだよ。この本はダンジョンに相当するものがある世界だからこそ書いたものだし、読めるものなんだ。自分でダンジョンに潜らないいけない。魔力と法則の違いを、身をもって感じ取る必要がある。この世界だとトンネルだね。厳密にはトンネルとダンジョンは違うから、少し違う部分もあるけどこれを読む上では問題ない。でも、次は霊界のトンネルで今までより強いだろう。連れて行くことはできない。しばらくは読めないね』

こうしてシユウの本解説は終わった。

ところがシユウの予測はここに来て外れた。

また模擬戦の途中でトンネルが開いたのだが、出てくる敵が今までよりもずつと弱かった。

『弱いねえ。これなら連れて行ってみてもいいかな』

巫人三人衆とケオ教官、それにマギア・エルピダが付いてくることになった。

巫人三人衆は問題ない。

ケオ教官もなんとか倒して行っている。

マギアとエルピダは苦戦しているのが見て取れる。

特にエルピダの動きが悪い。得意の魔法もあまり使っていない。やる気がないな。お前の代わりに私が叩いてやろうか。

『いやいや、やる気に満ち満ちてるよ。あれはあれで良い。マギアを補佐してあげて、横やら後ろから襲うのを蹴りつけるだけで良い』
何が良いのかはさっぱりだが、言われたとおりに補佐をしていく。
エルピダはいったい何をやってるんだ？

『魔力と法則を感じ取ろうとしてる』

はあん、どうでもいいな。

『だろーうね。それよりもトンネルの出現条件がわかった……気がする』

お、ようやくわかったのか。

それで条件は何だったんだ？

『時空震に耐性があること。それがマギアとお嬢様。ステータスにまったく現れてなかったけど、たぶんあの二人は時空震の揺れを感じてない。マギアの魔力の質は、他とちよつと違ってたからわかる。でもお嬢様はしょぼい。かなり酔うはずだけどケロツとしてる。そこで謎の機能が関係してる。マギアの模擬戦を見て、お嬢様が特能を発動させて、黒幕君がトンネルを繋げてる——かな』

よく考えたら、条件がわかったところでどうしようもないよな。

『そうだね。トンネルを作りたいならマギアの試合をお嬢様に観戦させればいいってくらい。それよりも今回のトンネルが気になる。弱すぎるぞ。絶対に霊界の強いのが来るって思ってたのに、これでボスだけ強いのもかもしれないけど、きつとこれは違う。そんな雰囲気じゃない。もう周囲の魔力からして弱々しい』

そうだな。

中級ダンジョンくらいだろ、これ。

そのままボスマで行ったが、特筆することもなかった。

ケオ教官とマギア、それにエルピダが倒していき、巫人三人衆と私を見るだけ。

倒した後に結晶が光となって消えていくが、最後に大きめの破片が残った。

「倒したのはあんただから私らは辞退するよ」

亜人三人衆が、辞退してケオ教官がよくわからないまま破片を拾った。

破片はチカリと煌めいて消えてしまう。

『ほっほう。そういう——』

どうということ。

何か破片が消えちまったぞ。

『教官の能力が増えてる。破片から能力を手に入れたんだね』

すごいな。

じゃあ、攻略すれば攻略するほど強くなるってことか。

『そうとも言える。でも、亜人達は聞いてたクリア数の割に能力が多
いって訳でもないから。常に能力だけじゃなくて、レベルやステータ
スが補正されるんでしょうね。ここは後で亜人三人衆に聞いてみよ
う』

じゃあ、私が手に入れた結晶を彼らに渡したら、彼らが強化される
のか。

『強化されるだろうけど、やめたほうが良い。絶対にろくな能力じゃ
ない。邪気に、自戒なしに、傲慢だよ。こんなのつけても大丈夫なの
はね、ん、待てよ、それが目的か。……おっと、崩れる前に逃げた方
が良い』

そうだったな。

無事に全員で脱出して、出口で歓声を受けた。

なぜか一緒に入ってないお嬢様も、こちら側に立って得意げにして
いる。

夜になり、マギアの部屋で気づいた点を報告し合っている。

ちなみにお嬢様は大喜びで亜人三人衆とご飯を食べに行つてし
まった。

なぜかお兄様も一緒になって、出かけていき、今夜は遅くまで帰っ
てこないだろう。

マギアにトンネルの出現条件を話し、時空震の酔いはどうか尋ねる

がまったく酔わないらしい。

うらやましいことに頭痛どころか、吐き気や宙に浮く感覚もないという。

『全く自覚がないのはまずいね。危険に気づけない。酔いすぎるのも危険だけど』

何事もほどほどが良いということだろう。

続けてシユウはダンジョンで気づいたことを言う。

『ポストドロップの結晶ね。メル姐さんが手に入れたやつは、かなりの能力が手に入るはず。おそらく破片を手に入れすぎると、あの「歪曲」なるスキルが手に入るんだと思う』

今までぼやかしていたところをマギアに話す。

彼女も興味を持っているようだが、欲しがってはいない様子だった。

『今回、霊界の強い奴がこなかった理由はこれじゃないかと思うね。たぶん霊界のやばい奴は、この三体の能力のどれかを持つてる奴に狙いを定める。全部かもしれないけどね。抑止力的な存在なのかもしれない。明日、もう一回模擬戦を試みよう』

そんなわけで翌日も模擬戦を行なった。

闘技場には必要最低限の人員しか集められていない。

マギアとケオ教官の模擬戦でやはり時空震が生じた。

『違う。魔力が弱い』

見立て通り、出てきたモンスターは強くない。

私にとっては変わらないが、亜人達の戦いを見るに昨日よりも強そうだ。

『強いというよりも、やっかいな能力があるってのが正解かな』

今回は地獄界に近いモンスターらしく、見た目が不気味なのが多い。

この方がモンスターらしくて私は好きなのだが、他の意見はそうではないようだ。

『地獄界ねえ。霊界のボスを引くまではひたすらトンネルガチャするか……』

特に問題もなくトンネルをクリアした。

その後も天界、煉獄界、地獄とトンネルを引いたが霊界は出ない。

『……出ないね』

翌日も挫けず、トンネルを四つ出してみたがやはり霊界は出ない。

『霊界のボスっていないんじゃないの。地獄、煉獄、天と来たから霊界って考えてたけど、別になくてもいいわけだし』

亜人三人衆にトンネルのことを聞いてみたが、霊界のボスは見たことがないと話す。

『あるいはやっぱり例のドロップアイテムを使わないと駄目なのか……』

使うとして誰に付けるんだ。

『メル姐さんは無理。俺がスキル化してもいいんだけど、外部から無理に読み込むスキルは良い結果になつた試しがない。やはりスキルは使い手から湧き出たものに限る』

そうだね。ほんとそう。

私の大切な思い出が生命抹殺スキルになつて使えない。

『マギアはあまりにも常人だからこんなやばいスキルを押しつけられない。どっかの天使みたいに強いスキルに振り回される。このままスタンダードに力を伸ばして欲しいね』

そうね。

これを押しつけるのは、ちょっと可哀相だな。

『ケオ教官は武術を貫かせるべきで、戦闘以外のスキルは付けさせたくない。複製なんて付けるとどっかのヒョコみたいにねじ曲がる』

じゃあ、亜人三人衆か。

『駄目。彼らは一つの完成品。余計なものは付け足せない。あとは極めていくだけ。うん、そのへんかもしれないね』

何か急に納得し始めた。

『どのボスもどこか道を踏み外してる。昨日と今日のトンネルのボスも、おかしなスキルが付いてた。地獄のボスは悪意の波動。煉獄のボスは複製。天のボスは諸天の根源。歪曲つてスキルが本体を結晶にする代わりに、そういう身の丈に合わないスキルを付与するのも

ね』

考察はいいから。

どいつにスキルを付けるんだ。エルピダは？

『エルピダはそろそろ「魔／法」が読み終わりそうだから邪魔しちや駄目。次の本も決まってる』

もう、そのへんのやつにでもつけるか。

『お嬢様にしよう』

はい？

『ミラお嬢様』

やばくないか？

『やばいけど、他よりはマシ。誰も「こいつなら」って、薦められるのがないからね。で、残ったのがお嬢様』

なんか消極的な消去法だな。

『残っただけマシでしょうよ。案外なんかなるんじゃないかとも思いついてる。実際、もっと早く別れる予定だったけど、今日もまだこの世界にいるわけだし』

それならやってみるか。あまり気分も乗らないが。

お嬢様に事情を話して、結晶を渡そうとした。

以前のこともあったので抵抗を示したが、一つ目で問題がなかったので残りの二つも抵抗なく受け入れてくれた。

『レベルとステータスも上がったね。一気に千まで上がった。エルピダの倍。マジアの五倍か……。彼女たちの努力をあざ笑うかのようだ。ああ、やつぱ能力に歪曲もつくのか、それであいつら、うえっ？』
何？

『——いや、後にしよう。来た。時空震だ』

突如として、頭痛が始まった。

もう一日に何度もやってるが本当にこれは慣れない。

頭痛が治まると、周囲の景色が変わっていた。

闘技場の真ん中にいたのだが、観客席が消え、周囲全てが暗闇に覆われている。

『はて、模擬戦をしてないけど出るのか。それよりも当たりを引いたね。魔力が桁違いだ。おいでなすった』

暗闇の中から、葬儀に参列するのではないかと思うほど黒い衣装に身を包んだ奴が現れる。

頭の上からは黒いベールを下ろしており、顔もわからないし、体格から男か女かもわからない。

しかも、足下はぼやけて消えている。

黒い手袋の上に、小さな青い結晶がふわふわと浮いている。

もしかしてこいつが？

『そうだよ』

- ・名前：プロトス
- ・出身：霊界（最央園）
- ・レベル：4649
- ・強さ：極限級
- ・能力：歪曲（第一位）。歪曲殺しの呪い。メサイア。歪みの修整+

+

——
おいおい、レベルが三千を飛ばして、一気に四千まで行ったぞ。

『ステータスは高い。歪曲殺しの呪いは歪曲持ちへの呪殺。メサイアは全能力の特大大アップ。歪みの修整の効果は思った通りだね』

何？

やばいの？

『歪みの修整は歪曲持ちの探查と対歪曲持ちの攻撃力がアップ。それ以外の相手はダウン。++だから、歪曲持ちには無類の強さを誇るけど、それ以外だとステータスほど強くない。トンネル以外で歪曲持ちが発生すると現れてぶつ殺す。つまり、こいつは歪曲持ち絶対殺すマン。レベル上げに興味がないやつもいるんだね』

つまり今回の狙いはお嬢様ってわけだ。

勝てるの？

『勝てるわけじゃないでしょ。でも、負けもしないね』

喪服ボスが、片方の手から黒い玉を生み出した。

玉を軽く払うと、お嬢様へと玉がふわふわと飛んでいく。

『馬ッ鹿だなあ。普通に攻撃してくりゃ、まだ気づいて帰る道もあったのに。そういうやばいのは、ちゃんとアナライズしてから撃たないと……』

どういうこと？

助けなくていいのか。

『見とけばいいよ。むしろ動くことやばい。あの黒い玉は呪いの技なんだ。呪い系は元々が強力でね。さらに対象を限定した呪いは、耐性だけじゃ防げないほどの威力になる。つまり、歪曲殺しの呪いは歪曲持ちをほぼ確実に呪い殺す。最低でも再起不能の深手を与える』

すごいじゃん。

『すごいよ。俺も欲しいけど、最近はもう諦め気味。それに——こういうことにもなるしね』

こういうことって何？

『超強力な対象限定の呪いなんだけど、欠点がいくつかあるんだよ。最大の欠点は、呪う対象者がいない場合は、自分に呪いが返る』

でも、お嬢様は歪曲を手に入れたんだろ。

まだボスみたいな結晶になってないみたいだけど。

『消えた。ドロップアイテムで手に入れた能力も全部消え去った。レベルとステータスも元の雑魚に戻った。間違いなく特能の効果だろうね。「道」は自分で築くものってことでしょう。おそらく他人やアイテムから与えられたものは受け付けないんだ。召喚契約だけが自分で築いたものだから残ってる』

黒い玉はやや怯えていたお嬢様に当たると、そのままぼよん跳ね返る。

進路を逆転し、ボスへと返っていく。

ボスはその様子を固まってみつめ、我に振り返り逃げ始めた。

黒い玉は急激に速度を上げ、暗闇へと逃げたボスを追いかけていく。

『自分自身が「歪曲」持ちだから「歪みの修整++」が適用される。し

かも対象限定の呪い。無理だ。あれは逃げ切れない。……はい、死んだ』

もう見えないが、どうもボスに当たったらしい。

『アイテムの回収はやめよう。このままトンネルの崩壊に任せて消した方がいい。世界にない方がいいアイテムだ』

シユウの言葉に従い、闘技場の中心で様子を見る。

次第に暗闇は薄れ、元の闘技場が戻った。

その夜、マジアの部屋でいつもの報告会だ。

報告会といっても、今回はマジアも見えていたので特に話すことがない。

『お嬢様の能力について尋ねてみて』

尋ねてみたら昔からそうだったとのこと。

いろいろと能力やらステータスアップのものを与えられたが、全て効果がなかったとか。

その影響か召喚契約も長らく上手くいってなかったとマジアは話す。

『いや、召喚はどう考えても別の要因でしょ。あんなので普通は来ない』

そうだよな。

話が終わったところでエルピダがやってきた。

『おお、やるじゃあないか。無詠唱を確かに習得してるね。読み解いたんだね。レベルも跳ね上がってる』

すごいな。

すごいというか、すごすぎるだろ。

『黒紙番地の「魔法メモ：その九」をあげて』

……黒紙番地はダンジョンで手に入れたアイテムではない。

私がシユウから言われたことをメモして、結晶化して保存している領域である。

困ったとき用のメモもここにある。

結晶を解除して渡すと、エルピダも首をかしげた。

メモがバラバラになつており、冊子という体裁すら整っていない。一番上が黒い表紙であること以外は、ただのメモ書きだ。

今回は、魔法で織り込まれているとかもないようですらすと読んでいる。

『読めてない。文字を追つてるだけ。ちよつと見ておこう』

メモをどんどん捲つていき、私がおかしを三つほどつまむころには読み終わった。

その後の様子がおかしい。私をみて、天井をみて、ソファへと戻っていく。

メモを手にした状態で、虚空を眺めて何かを考えているようだ。

「初めて見ました。あんなに悩むところは。悩むときすら文字を読んでいるのに」

マジアも驚きをもってエルピダを見ている。

いったいあのメモには何が書かれているんだ。

『特異点消失後の、多重世界の平衡持続の所見』が書かれてる』

今までで一番よくわからない。「の」しかわかる単語がなかったぞ。

読むとどんなスキルが手に入るの？

『わからない。なにせ人に読ませるのは初めてだからね。それと「所見」くらいはわかつて』

えっ？

なんでそれをエルピダにあげたんだ。

『俺もね。使い道なんてないと思つてた。とある奴らの計画を、俺がちよつとアレンジを加えただけの個人的なメモだからね』

とある奴らって？

『アイラと他五人。当時は六人委員会と呼ばれてた。天才というか異端者の集まり』

まあた、あいつか……。

馬鹿にしてるけどあいつすごいやつなんじゃないの。

『すごいよ。本気を出させれば、魔法原理の分野だと間違いなく全歴史でも五指に入る逸材。魔と法の根源に触れてるからね。でも、あいつは仕事をさせちゃいけない類の人種だ。間違いなくおかしな方向

に進む。静かに本を読ませて、ときどき運動させるくらいの生き方をさせてあげるのが本人のためにも、世界のためにもなる』

褒めてるのかよくわからない言い方だな。

だが、あいつも知ってるなら、能力がわかるんじゃないのか。

『いや、今のあいつは知らないんだ。もう知ることもない。あのときのアイラたんにもう一度会いたいなあ。会って、この俺のアレンジについて語り合ってみたい。そうすればきつと——、いや、これも幻想か……』

はあ？ もういいわ。一つ聞くとわからんことが二つ以上に増えるから。

で、なんでそんなたいそうなメモをエルピダに？

『最悪の事態に備えて』

あ、そう。シンプルな答えは好きだぞ。説明不足にもほどがあるがな。

だがな。なんかすごい考えこんでるみたいだぞ。

泣き始めちゃったし……本当に大丈夫か。

『あれを正しく読むためには実践が必要なんだ。でも、何をどう実践しているかがさっぱりわからないと思う。心が潰される思いだらうね。果たして、わかってくれるかな』

説明してあげればいいじゃん。

そんな「わかるかなあ」とぼけーっと見てなくても。

『いやいや。説明はできない。書いてあるとおりなんだからね。あれを正しく読むためには、実践できるかどうかにかかっている。でも、実践がないならそれに越したことはない』

実践できるかどうかにかかっているのに、実践はない方がいいのか？

『あれを実践するのはね。世界が崩壊するかどうかの瀬戸際に立っている状況だよ』

本当に実践はないほうが良さそうだ。

『ただ、使われるところを見てみたい気持ちはある』

そんなことがないのを祈るだけだな。

……こういう話をすると、得てして使われることになるのだ。

どうせ使われるんだろうな、と思いつつもそれならより成功率を上げるべきだろう。

もうパーティーリングを渡して、チートで成功させればいいんじゃないか。

『非常に堅実な意見だけど、それに関しては明確に拒否させてもらう。これの元アイデアはね。異端者達がチートなしで考え抜いたものなんだ。恐るべきことにこれをアイデアで終わらせず、実行までやってのけた。無論、チートなしでね。俺がやったのはただ彼ら・彼女らのアイデアにアレンジを加えただけのものだ。ただ、彼らのやり方に従って、世界の理から外れた理論や要素はここに含めてない。これは意地なんだよ。わかるかな?』

わからない。成功させられる可能性を高められるなら使うべきだと思うがな。

しかし、意地と言われれば、特にそれ以上あれこれと私が言うべきではないだろう。

『それで良い。これに関しては俺も譲る気はない。メル姐さんは使った方が良くと考えてる』

そして、お前は使わないべきだと考える。

別にダンジョン攻略とは関係しないんだから、それでこの話は終わりだな。

『そうだね。でも、実践はチートなしでやるけど、その前提を達成するためにチートは厭わないし、使うことになるだろうね。パーティーを組まないといけない。やれやれだ』

はて?

言われて思えば、この世界に来てから誰ともパーティーを組んでない。

『組まないのには、二つ理由があつて。一つは組むべき相手がいないから。お嬢様は特能があるから組みたくない。マギアは努力家だから、干渉したくない。エルピダはおもしろそうだけど、今となっては先の理由から組めない。他は似たり寄ったりだ。それなら別に無理して組まなくても良い』

それはそうだ。

だが、けつこうやばい場面もあつただろ。

結晶のボスは、対抗するスキルがなかったら危なかったはずだ。

もしもスキルがない状況だったなら、私だって死んでいたかもしれないぞ。

『断言できる。——それはない。もしも勝てなきような相手がトンネルにいたら、メル姐さんの特能が発動してる。その気配が少しでもあれば、大人しく誰かとパーティーを組ませた。そのときはそうだなあ……、お嬢様以外なら別に誰でも良いんだけど、ケオ教官が順当かな』

私がチートを使って勝てない相手に、ケオ教官とパーティーを組んでどうにかなると思えない。

それに一人で良いような物言いも気になる。複数人で組んだ方が強いだろ。

『二人で十分。二人は多すぎる。パーティーを組みたくない理由の二つ目はね。俺とこの世界、ひいてはこの世界の住人との相性が良すぎるることなんだ』

よくわからないんだが、元の世界でもチートは十分すごいだろ。

初心者クラスの私ですら極限級ダンジョンをクリアできるようななつたんだからな。

『元の世界では、定規で測れる強さの範疇から脱してない。チートを使ったにもかかわらず「恐ろしく強い」で止まってる』

……十分じゃん。

逆に素の私がめちゃくちゃ弱いと馬鹿にされてる気さえしてくる。

『違うんだ。強いとか弱いとか言ってる時点で間違ってる。あの世界は俺とあまり相性が良くない。だからこそ、楽しめてるって要素はあるんだけどね』

まあ、そうだな。

これ以上、強くなったら本当に楽しめないかもしれない。

とにかくチートはすごいってことで良くないか。

『だからね。そこがもうおかしい。チートは「すごい」んじゃない

「ずるい」んだ。もしも使うことがあればわかる。正しいチートってもんが、どれだけずるくて、やばくて……、そしてつまらないかがね』
そんなことはないで欲しいみたいない方だ。

私は予感する。おそろくシユウもしているのだろう。

——正しいチートとやらを使うことになる、と。

Level 6. 統一世界の歪曲者

翌日以降も、トンネルを攻略していく日々だ。

正直に言つて飽きてきていた。

強さの幅はあるのだが、どれも最終的には結晶のボスに行き着く。
変なスキルこそ持っているが、さほど興味がない。

イレギュラーと言えば、世界のトンネルの向こう側から来る住人に
会うくらいだ。

世界が二つ繋がってるのだから、会うこともあるだろうが、互いに
抱くあの緊張感が好きじゃない。

私は静かに一人で攻略したいんだ。もうそろそろ帰ろうか。元の
世界に帰ろうと思えば帰れるんだろ。

……そういえば、こつちに来るときはトンネルがなかったな。

他の召喚獣が来るときはトンネルが出たのだろうか。

『出ないよ。あれは正規のやり方で転移してるからね』

トンネルは正規じゃないってことだな。

『正規じゃないというか。トンネルでの移動は世界の転移とは別物』

まあ、ダンジョンみたいなもんだよな。

『まったく違うよ。ダンジョンは一種の異世界だけどトンネルは同世
界。出てくるボスやモンスターも次元の剰余が現れただけ』

わかりやすく言ってもらっていいですかねえ。

『この世界の住人は、世界が五つ——人界、霊界、地獄界、煉獄界、天
界に分かれてると思ひ込んでる。まず、ここが間違い。この一つの世
界には、世界が五つあって、それでも世界は一つだけなんだ。……こ
こだと切り取ると、どっかの環境大臣みたいな構文だな。意味がわか
らん』

今回は私の突っ込みを待つことなく、自分で自分に突っ込みを入れている。

一瞬なんか深いことを言ってるみたいに聞こえたが、私にはよくわからなかった。まさにそれが私はわからないと感じた。

『おお、そんな感じ。才能の片鱗を見た』

褒められてしまった。

『端的に言おう。この五つの世界は元は一つだった。それが二つになり、三つになり、四つ、そして今の五つになった』

分裂しちゃったの？

『分裂じゃない。歪められた——ねじ曲げられたんだ。まるで一枚の紙を何度か折って、上手く五枚重なるようにね。今回の黒幕がそういうのかな』

世界をねじ曲げるとか簡単に言ってるけど難しそうだぞ。

『難しいというか……理論上はできるけど、まず理論ではそんなことを考えない。仮にやるとしても、こんな曲げ方はしない。ぴったりきれいに折るから二の乗数で増える。五にはならない。故にこれは魔法じゃない』

ああ、わかった。

こんなとんでもないことをしでかしそうな奴らが私にも思い当たる。

竜だな。

『俺も最初はそう考えたけど、あいつらは世界の領域にはシビアなんだ。不可侵の領域とか縄張りって意識が内部に組み込まれてるんだと思う。じゃないと世界が簡単に崩壊するから。そんなわけで竜ではない可能性が高い』

……神様？

もしくはそれに近い奴ら？

『あいつらは次元が違う。薄い紙の上に文鎮を置いてこするようになる。紙は千切れるか、破れる。歪んでこそいれど、こんなまともな世界の形にはならない。なので、そいつらも違う』

じゃあ、誰なの？

『そりや、こんな馬鹿な真似ができるのは世界の一住人だよ。魔法じゃない以上、間違いなく特能持ち。目的もわかる。レベルアップのためだ。世界が一つだとレベル千が限界だからねじ曲げて二つにした。新しい二つ世界でも限界に達したから、世界を三つにねじ曲げた。新たな三つの世界でもカンストした。世界をさらにねじ曲げて……、これを繰り返してる』

なんか思ってたよりも難しい話だな。

『そう？ シンプルでしょ。レベルアップのために世界を増やしてるだけだからね。でも、これ以上はねじ曲げられない。行き止まりだ。——さて、ここでもようやく本題のトンネルとダンジョンの話に戻る』
——さて、ここから始まったんだな。

なんか衝撃的な話をされたせいで忘れかけてた。

『トンネルってのは一枚の紙を折ったときに、紙同士が触れあってる地点なんだ。元をたどれば同じ紙——同じ世界だから、重なったところに出てくる時空の歪みがトンネル。時空が重複してるというかね。一カ所に二つの魔力が存在してしまうから、その余剰の魔力が生み出してる時空の歪み』

ダンジョンはどうなの？

『あれは、インクが浮いて出たようなもの。紙とは違う成分が混ざってる。竜の扉はまた別で、違う種類の紙がくっついてる点だね』
なるほど。なんとなくわかった。

わかったからどうするということもできないんだがな。

それで時空を折り曲げた黒幕とやらがほっとけば出てくるのか？
『来ないと思う。最初は興味がてら干渉してきてたけど、今はもう興味を失ったように見える。いちおうトンネルの発生条件が満たされれば作ってあげるよみたいな、惰性的な行動に移ってる気がするね』
それは感じるな。

最初の三体は比較のおもしろかったが、その後は雑魚だしギミックもない。

霊界のボスに至っては自爆して消え去ってしまったからな。

『こちらから会いに行ってもいいんだけどね。勝負にならない。それ

にきつと——』

そこまで言っただけ息を一つ吐く。

あちらが私たちに興味を失っているように、シユウもあちらにさほど興味がないようだ。

休日になり、お嬢様がいきなり切り出した。

「圏庁へ行きます」

行っただけじゃない。

「あなたも行くのです」

は？

なんで？

「召喚獣の申請期日が過ぎていっているのです。本来は五日前までに圏庁へ赴き、正規の登録をしなければなりませんでした」

五日って……もう手遅れじゃん。それに今日は圏庁も休みでしょ。

圏庁の休日とこの学校の休日は同じとか言っただけは？

「問題ありません。すでにあなたの事情は知られていますから、特例で申請期日を延ばさせました。圏庁も休日ですが担当者を出勤させる手はずにしています」

『可哀相に。これだけのために休日出勤させられるとか……』

特例で申請自体をなくしてくれればいいのに。

融通がきかないな。

そんなわけで圏庁とやらに行くことになった。

お嬢様と二人きりかと思ったが、そんなことはなかった。

巫人三人衆にマジアとエルピダも付いてきている。

どうも圏庁での申請をとっとと済ませたら、みんなでショッピングに行くらしい。

変な乗り物に揺られて、益体もない話を聞かされていると大きな建物の前で下ろされた。

学校からでも見えていたから、これが圏庁だとは知っていた。

遠くから見るのと近くで見るとはやはり違う。

他の建物と比べても、高さが倍は違う。

横幅もずっと大きい。休日のはずだが入口前には守衛が立っている。

ちよつとわくわくしてきた。なんか最上階でボスが待っている雰囲気だな。

「ウエラネ圏の象徴ですから」

お嬢様も誇らしげに語った。

『外から見ただけでわかる。この人界の建築技術の粋を結集させてるよ。これはそのまま要塞にもなる。おそらく中もかなり堅固に作られてる。素晴らしい』

シユウも手放しで褒めている。

これは滅多にないことなので実際にすごいものなんだろう。

お嬢様が近づくと守衛らは、さつと道を避ける。

階段を上るのが面倒そうだと感じたが、変な箱に乗ると勝手に上へ連れて行ってくれるらしい。

実際に乗ってみたが、揺れはほとんどない。最初に足に力がかかったがすぐになくなった。

そこまで広くない空間に七人が入るので居心地はあまりよくない。何階かはわからないが、到着したフロアから景色を見ることができた。

マジアが、学校を指で示してくれる。学校からここはきちんと見えるが、ここから学校はあんなにも小さくなるんだな。

お嬢様に呼ばれ、薄暗いフロアを進んでいけば、目的地だった。

カウンターを挟んで、たくさんの机と椅子が並んでいる。

その中の一席に男が座っていた。

見るからにやる気がなく、書類に判子をぺたぺた押している。

私たちに気づいて、めんどくせえなあつて顔を作り、こちらにやってきた。

「カナラ部長から聞いてます。召喚獣処理の申請でしたね。こちらに必要事項を書いてください」

紙をこちらに数枚差し出してきた。それ以上の説明はない。

「書類の事項はそちらで記入してもらい、こちらは確認するだけと聞いていますか？」

「そんなことは聞いてませんね。それはカナラ部長へおっしゃってください。自身は出てこず、ろくな説明もなく、休みに出てこいと私に命じた部長のカナラへね。そもそも本人記入が原則です。申請も、もうすでに四日……五日が過ぎていますよ」

マギアが尋ねると、嫌み混じりに男は答えていく。

それ以上は双方ともに何も言わなかった。

マギアがお嬢様の書類を記入し、男は自らの席に戻り、また判子を押ししていく。

書けたら呼べということだろう。

『亜人三人衆のところに行つて』

暇なので大人しく亜人三人衆のところに行く。

『今から言うことをこいつらに伝えて』

あれこれと、シユウが言ったことをそのまま亜人三人衆に伝えた。あまり考えてなかったが、お嬢様を外に連れ出して、建物の付近から人を離れさせろみたいな話だった。

亜人三人衆も何か気配を察したのか、質問もなく行動に移した。

お嬢様を連れて、来た道に戻っていく。

エルピダが何だろうと顔を動かし、マギアは必死に、お嬢様の書類と格闘している。

出身世界はなんて書けば良いんだろう、と独り言が漏れていた。

一枚書いて、さらに二枚目、三枚目と書いていく。

「——書けました」

マギアの声に、職員がやれやれと席を立ち、書類を受け取り確認し席に戻った。

「あれ、お嬢様達は？」と振り返ったマギアが聞いてきた。

『——うん。建物から人は消えたね』

ここに三人いるぞ。エルピダも入れれば四人か。

『まさか、こんなふうに出会ふとは思わなかったよ。その男が黒幕だ。ほれ』

- ・名前：アピロ
- ・出身：原初世界プロエレスフィ
- ・レベル：9999
- ・強さ：極限級
- ・能力：メサイア＋＋＋。滅亡の権化＋＋＋。層竜を歪めし者。齢竜を曲げし者。統一世界の歪曲者。双世界の調律者。多重世界の再歪曲。地獄界第九圏到達者。煉獄界山頂到達者。天界第十天到達者。霊界中心点存在者。到達者。……。
- ・特能：歪

判子を押す職員の横に文字が出てきた。

「ずらずらと出てきたので、これがステータスの表示だと一瞬理解ができなかった。

何だこれ……。

レベルもすごいけど、能力がすごすぎないか。

『やばいのだけ書いた。もう能力と言うより称号だね。当然のように竜も殺してる。救世主であり、世界をずたぼろにした破壊者でもある。特能はよくわからない。説明も「曲げて歪めて重ねて捻る」と相変わらず説明する気がない。まあ、その力は世界の状態からお察し』

職員——アピロはまだ椅子に座ったままである。

あくびをしながら書類に判を押している。

油断しているな。

『油断というか興味がないんだろうね。実際、勝負にならないから』

書類にあくびをしながら印を押し続けている。

「ステータスが見えてるだろ。レベルがこうなってるから、本当に退屈なんだ。これ以上は世界を曲げられないし、レベルももう上がらない。老いることもできず、能力のせいであっさり死ぬこともない。でも、今回は少しおもしろかったよ。外の世界から六千レベルの人間がやってくるなんてね」

本当におもしろいのだろうかと疑ってしまう。

閉じそうになる目をどうにかして開けているくらい眠そうだ。

「聞いていたステータスと大きく違うようだが、それは偽物のステータスか。それで歪曲の四位以上は倒せまい」

マギアは何の話ですかと、私とアピロを交互に見ている。

エルピダは何か気づいているようだ。私たちからスツと距離を取った。

召喚主であるマギアをまるで気にかげず、自らだけ離れるところが彼女らしい。

『もう死んでるよ、こいつ』

生きてるように見えるけど。

『そういう生物学的な話じゃない。精神的なもの。生きる目的を見失ってる。こんなのはほっとけばいい。書類に判子を押ししてるのがお似合いだ』

なるほどな。

ほんとつまらなさそうにしている。

目もどこか力がなく、判子を右に左にとだるそうに手を動かすだけだ。

『帰ろう。こいつといっても何も得られるものはない』

そうだな。

元の世界に帰って、ダンジョンへ行こう。

「ああ、そうか。君の世界についていけば、少しはおもしろくなるのかな。このレベルも上がるのかもしれないな」

男はぽつりと漏らした。

もしもこいつが着いてきたらどうなるの。

『世界がぼろぼろになるね。対抗できる奴がほぼいない』

それはまずいなあ。

『……雉も鳴かずに打たれまいに。やっぱりここで消しておくか』
勝てるの？

『エルピダにパーティーリングを創らせて。それをマギアに付けさせる』

遠くにいたエルピダに伝えると、私のパーティーリングを見て、マ

ギアの指にそれを創った。

『パーティー登録して』

何なのかわかってないマジアの手を取って、そのままパーティー登録する。

目の前の男もその光景を珍しそうにぼんやりと見ていた。

『はい。これでもう勝てる』

「えっ、誰？」

勝てるってどうやって。

『まず、マジアには不用意に動かないよう伝えて。できれば呼吸もしばらく止めてってね。まあ、聞こえてはいるだろうけど』

シユウの声に驚くマジアに、とりあえずあまり動かないよう伝えた。

『うん。あとはそうだね。マジアのステータスを見ておくと良い。その歪んだ男にも同じ事を伝えて。エルピダはもっと離れろと言っ
といて』

私がアピロに伝えると、アピロも「はあ」とぼんやり返答した。

エルピダはすでにフロアの一番端まで移動している。

『ほい』

- ・名前：マジア
- ・出身：人界（ウエラネ圏）
- ・レベル：351
- ・強さ：中級〜上級
- ・能力：召喚契約、戦士の心、格闘技術

——
おお、レベルがかなり上がってる。

やっぱりダンジョンを攻略したせいだろう。

前のレベルは覚えていないが十倍くらいまで上がってるんじゃないだろうか。

でも、これでどうやってこの男に勝つんだ？

シユウの返答はない。

黙って見ておけということであろう。

-
- ・名前：マギア
 - ・出身：人界（ウエラネ圏）
 - ・レベル：999
 - ・強さ：超上級
 - ・能力：召喚契約、戦士の心、格闘技術、平凡の到達点

理解ができなかったが、レベルがなんか上がったな。それに能力も増えている気がする。

『この世界のレベルには一定の段階で壁がある。最初は99。これはちよつと実戦を経れば超えられる。次がこの999だ。ここが一つの世界での頂点になるだろう。次のステップに進もう』

-
- ・名前：マギア
 - ・出身：人界（ウエラネ圏）
 - ・レベル：9999
 - ・強さ：極限級
 - ・能力：召喚契約、戦士の心、格闘技術、到達者

「なんだ、それ……」

目の前の男が目を見開いた。

『これが第二の壁。六千くらいから必要な経験値量が増えて、ここで極大を迎える。おそらくこれを超えるにはいくつもの世界を渡り歩いて、発狂するほどの経験と知識を得る必要がある。生命体の一つのゴールとも言える。でも、まだ先はあるんだ』

-
- ・名前：マギア
 - ・出身：人界（ウエラネ圏）
 - ・レベル：99999
 - ・強さ：――

・能力：召喚契約、戦士の心、格闘技術、極

私は何も言えなかったし、目の前の男も何も言わない。

『ここまで来るともう強さで例えるものがない。どうやったらこの領域に達することができるのかもわからない。はつきり言つて、生物が到達できないであろう領域だ。次へ行こうか』

・名前：縷槭ぐ縷

・出身：莠コ透鯉シ医え縷ア縷ウ縷榊恂？

・レベル：99999999

・強さ：――

・能力：蜿ヤ蝟壺・醜工??…始螢才縷ヨ蠢??…？シ髣倣樞陟薙？謙
オ

『ほれ、二桁も増やしてやったぞ。あ、でも駄目だ。世界に当てはめられてたレベルの上限すら超えたね。表示がバグっちゃまった。ここでやめよう。マジアよ、これより先まばたきを禁ずる。するなよ、絶対にするなよ。振りじゃないから、これ』

やばい気配を感じる。

アピロからではない。息を止めているマジアからだ。

いつまで息を止めてればいいんだろうといった様子で私を見てくる。

得たいのしれないシュウの声にも律儀に従い、瞬きもしないよう努めている気配を感じる。

『ずるいぞ……』

アピロがおもむろに席を立った。

「僕がここに来るまで、どれだけ大変だったと思ってる。何を犠牲にしたと……」

男は涙を流していた。

拳は硬く握られ、顔は怒りに震えている。

「レベルのために、友も、仲間も、家族も、世界だって犠牲にした。世

界をねじ曲げ、歪めて、何度も折って重ねて築き上げ、何億……何十億の夜を越えてきた。9999^れはその成果なんだ。それを——」
どうやってかは知らないが、アピロは手から剣を出した。ねじ曲がった歪な剣だ。

歪んだ剣を構える彼から感じる気配は尋常ではない。やばさがひしひしと伝わってくる。

しかし、それよりもマギアの方から感じる気配のがよほどやばい。少なくとも近くにいたくない。

「そんなの卑怯者じゃあないか——ねじ曲げてやる」
そう言って彼は斬りかかった。

速かった。見えなかった。気づけばマギアの前において斬りかかっていた。

マギアの首を狙った剣の刃が、首に触れた瞬間に折れて天井へ突き刺さった。

突き刺さった天井が、ぐにやりとねじ曲がっていく。
ようやくマギアも何をされたのか把握したらしい。

「っ?!」

彼女も息を止め続けるわけにはいかず、動きを見せた。
おそらく何らかの声を発したのだろう。

……何が起きたのかは正直に言ってもわからない。
気づけば私は吹き飛んでいた。壁をいくつかぶち破り、空を飛んでいた。飛んでいるというか落ちている。

シユウが落下防止用のチートで落ちる速さをゆるやかにしてくれたのだ。

先ほどまでいた建物を見ながらゆっくり降りていく。
ビルの高さは半分以下になっていた。今もぼろぼろと崩れていつている。

ウエラネ圏の象徴は崩壊してしまったのだ。

『やっばいね。声だけでこれか。ちよつとレベルを上げすぎたね。良かった。エルピダも離れてたから生きてる。ちよつと中に戻つてみて』

地面に降りた後で、大爆発が起きた建物にジャンプして入る。外もひどかったが中はより一層ひどい。壁と床がぶち抜かれ、かろうじて数本の柱が見えるだけだ。

マギアは元のフロアにいなかった。というよりも、元のフロアがなかった。

爆心地の真下に何が起きたのかまるでわかってない様子で彼女はぺたりと座り込んでいた。

『突き飛ばしませんでしたでもタッチで十分だったのに』

アピロがいたであろう方角を見れば、遙か遠くまで穴が開いていた。

雲に穴が開き、そこだけ青空じゃなくて、真っ黒な穴が見えてしまってる。

『大気を突き破ったね。宇宙空間がそのまま見えちゃってる。すぐに塞がるから大丈夫』

大丈夫の基準が私とはだいぶ違うようだな。

それでアピロはどうなったんだ。

『アピロなら消し飛んだよ。法則すら消し飛ばす一撃だ。復活すらない。指が触れた瞬間に消し飛んじまった。ああ、マギアのレベルはもう元に戻したから安全だよ』

笑いながらシウウは話す。

『さて、ここからだね』

まだ何かあるのか？

いや、確かにこれをどう説明するかは大変そうだな。

『いやいや。さっきのは茶番で、むしろここからが本番。世界はねじ曲がってたけど、それを文字通り曲がりなりに維持してたのがアピロなんだ。あいつが文字通り消滅したから、世界は現在の状態を維持できなくなる。世界の崩壊だ』

やばくない？

『とてもやばい。さて、エルピダの活躍が見られるかな』

肝心のエルピダは、いつのまにかマギアの横に立っている。

マギアは完全に上の空だが、エルピダもまた空を見上げ、ぼんやり

している様子だ。

『世界のブレを感じてるはず。そろそろ時空震が来るから無敵を使うね。先に言つとくけど、エルピダが失敗したら元の世界に直帰するから』

……その場合、この世界はどうなるの？

『折りたたんだ紙を開いていけば、ただの一枚には戻るけど折った跡が残る。そんな感じ』

具体的には？

『複数の世界が一つに戻るときに、大規模な時空震が起きる。時空震に耐えられない奴は死ぬ。時空震で生き残っても、世界の結合修正がおこなわれて、今度は物理的な大地震が全世界で起きる。境界線付近と沿岸地は壊滅。内陸部も地割れと建物の倒壊でただじゃ済まない』
要するに壊滅的な被害が出て、たくさん死ぬってことだな。

『そうだね』

成功率を高めるためにチートは？

『使わない……。おっと、勘違いしないでよ。そもそもこの理論が間違ってたらチートがあろうがなかろうが関係ない。どっちみち破滅は防げないからね。もしも正しいならなんとかなる。こちらもちートがあるうとなかろうとさほど関係ないんだ。必要なスキルはもうあるし、レベルがどれだけあつてもさほど変わらない。重要なのは、エルピダが世界を感じ取ることができるかどうかだから』

さっぱりわからんが、成功率は高いのか？

『意味のない質問だ。高かろうが低かろうが、もう俺たちにできることは何もない。ただエルピダに懸けるのみ』

エルピダが目を見開いた。

緑色の瞳が右に左にとぐるぐる動く。首も動かして、体も動かしてと忙しい。

『いいね。きちんと見てる。特異点が消滅して世界がどう動こうとしてるのかをね』

私はただ挙動不審になっているようにしか見えないんだがな。

今さらだが、なるべく簡便に、あのメモに何が書いてあつたのか教

えてくれ。

『……ほんと今さらだ。簡便ねえ。まず、なんであんなメモを書くに至ったのかを話そうかな。あれの元ネタはね。ある一瞬に超短時間で発動する魔法の効果を、精確に補足して、かつ時間をその一瞬で止めて、魔法にかかっている人の世界と現実の世界をひっくり返すつてもんなんだ』

すごそうだな。よくわからんけど……。

『このすごさはさておき、一つ大問題があった。その魔法は特殊だね。ある存在があるから効果が発揮できてたんだ。その魔法世界の特異点ともいう。元ネタを考えた奴らは、この特異点が消えたときのことを何一つとして考えてなかったし、対策も打ってなかった。実際には考えてただろうけど、そのアイデアは残ってなかった』

なんで？

ある存在がいてこそ効果があったんだろ。

もしもそのある存在が、どうかなつたらどうするんだ？

『そのある存在は、その魔法の世界では神に等しいものなんだ。無論、どうにかなる確率はゼロじゃないけど、そんな低い可能性は無視して良かった。それよりも他のところに労力を割くべきだろうからね』

そうだろうな。

『時は過ぎて、世界の逆転は無事に成功した。しかし、ある存在がメル姐さんの危惧通りその後で消滅。ほんとどうなるかわからなかったけど、その世界は消えて、またしても世界は逆転し、なんとか元の状態に戻った。ちよつと異常も起きてたけどね』

良いことじゃないか。

『ほんとにね。一度作った世界を無理に消したら、その後始末の方が大変なんだ。あのときは奇跡的にうまくいったけど、下手したらどちらの世界も消えてたかもしれない。だからね。俺は——もしもある存在が消えた後でも、魔法の世界を維持する方法があったんじゃないかと考えた。どうやったら元の世界がきちんと存在して、魔法の世界も変わらず存在できてたのかな、と』

それを書いたのがあのメモってわけだな。

しかしだ。聞いている感じだと、とてつもなく難しそうな話じゃないか。

世界やら特異点やら存在がどうのこうのって。本当にエルピダにできることなのか。

『言葉だけ捉えると難しく聞こえる。実際、あのメモは難しい言葉で書いてある。でも書かれてること自体はそんな難しいことじゃない。ある意味、当然のこととかね』

当然のこと？

『世界も一つの人……生き物なんだ。メル姐さんが見てきたようにそれぞれの世界にはそれぞれの個性あったよね。アイテム結晶が出る世界、魔物が素材になる世界、自らの分身体が作れる世界、カードが出てくる世界ってね。で、世界にはそれぞれの個性を示す重要な物がある。アイテム結晶、素材、分身体、カードとかね。それを超極端にしたのがさつきから出てる特異点なんだ。例外という意味の特異点じゃなくて、世界を特徴づける一点という意味での特異点。さて、ここで質問だけど、もしもこの特異点がなくなったら世界はどうなるか？』

なくなるんではよ。

生物で例えるなら死ぬようなもんだ。

『ほんとにそう？　メル姐さんは馬鹿だけど、馬鹿じゃなくなったらメル姐さんは死ぬ？』

それは例えが悪いと思う。

『メル姐さんの個性は死ぬけど、メル姐さんが死ぬわけじゃない。賢いメル姐さんとして生き続ける』

ちよつと考えづらいな。

『そこなんだよ。まさに「考えづらい」ことが重要なんだ。際立つ特異点のせいで、世界自体が、特異点のない自分^{世界}をちよつと考えづらくなってる。まさに今も、この世界がアピロに歪められて、歪みを維持されてたから、アピロがおらず歪みの維持されてない自分^{世界}を考えられなくなってるんだ』

まさにそのとおりじゃないのか。

お前もさつきそう言っただろ。

『言ったよ。でもね。一度できあがった世界ってのはそんなやわじやない。元の状態を維持しようとする力がある。ダンジョンがそれだ。出来たてならまだしも、時間が十分に経てばきちんと維持される。この世界もそう。確かにアピロが維持してた部分はあつたけど、そこがなくなったマイナス分を打ち消すだけの維持力がすでにこの世界にはあるはず。それならやることはとても簡単で単純だ』

それは？

『世界君が自分自身を認めるように伝える。アピロがいなくても、奴が世界を維持してなくても、世界君は立派に世界をやってるよって励ます。それはもうひたすらに元気づけるというのかな。「新しい世界君に向けてスタートしようぜ。アピロちゃんだけが全てじゃないよ。もつと広い視点を持とうぜ。次があるさ」って』

なんか失恋した奴の慰めになってないか？

『ほぼそれだよ。恋をしているときはそいつだけしか見えてない。他にもいくらでも可能性があるのでね。自ら世界を狭めてる。視野狭窄なんだ。そんなもって失恋して今度は何も見えてない自暴自棄状態。そんな世界君に寄り添って励まして立ち直らせる。それがあのメモのおおざっぱな概要だね』

なんかできそうな話になってきたな。

『具体的には、魔力で伝えることになるんで技術は必要。これは「魔法の知識」と「魔／法」、「魔眼」があればいける。あとはどう伝えるかだね。それは俺があれこれと助言するよりも、この世界に生きてる住人として、きちんと世界君に我々にはあなたが必要ですって伝えれば良い』

伝わらなかつたら？

『住人の声を聞くこともできない狭量の世界は、消えてしまった方が良いんじゃないかな？ でも、もしも俺のアイデアが間違ってたっていうなら、まあそのときは——元の世界で笑ってごまかすかな』
ちやつかり安全なところに逃げるとところが罪深いな。

この世界の住人はお前を許さないと思うぞ。絶対に恨まれる。

『そんな恨みは知ったことじゃねえ。お前らの世界だろ。お前らでなんとかしろってのが本音だね』

……それもそうだな。

私も同じことを言うかもしれない。

『メル姐さんの場合は責任放棄でしょ。でも、その心配は要らなかつたね』

声や視界が元の状態に戻っていく。

どうも無敵を消したようだ。ということは。

『成功した。世界は安定を保ってる』

エルピダは疲れ切った様子でマギアへ倒れた。

世界は崩壊の危機を迎え、そして脱した——誰も気づかないうちに。

Level 7. 別れの挨拶

数日が経って、私は完全に飽きていた。

トンネルがまったく出てこない。

『そのうち出てくるようになるだろうけど、以前のサイクルでは出ないだろうね』

ただでさえ物足りないのに、出なくなってしまったならもう帰るだけだな。

『帰るなら、挨拶だけはしていこう』

そうだな。

ベッドで寝ているお嬢様を揺らす。

「なあにいく？」

瞼を開けて、ぼんやりしたお嬢様に声をかける。

私はもう元の世界に帰る。

短い間だったが世話になったな。

「ううくん。早く帰ってきなさいねえ」

またしても瞼を閉じて眠ってしまう。声をかけるなど掛け布団を頭にまでかけてしまう。

よし、静かに別れることができてよかった。

次に私はマギアの部屋へ向かった。

マギアはすでに目を覚ましており、自身の剣を磨いていた。

おはようございますという挨拶から、嫌な顔を一つもせず「どうぞ」と迎え入れてくれる。

私は召喚される人間を間違えてしまったようだな。

元の世界に帰ると話をしたら、少し淋しそうな顔をして、クツキーを土産にくれた。

それというろとありがとうと、重ねて礼を言われた。

『正直、彼女には悪いことをした。俺は彼女にだけは頭を下げて謝りたい』

アピロを殺させて、圈庁を大爆発させたんだもんな。

後からの説明が非常に大変で、彼女は深夜どころか朝まで拘束されたらしい。

『いや、それはどうでも良い。むしろそれは礼を言われても良いくらい。世界を歪めた奴を、一人の犠牲も出さず消し去ったんだから』
じゃあ、何を謝るんだ。

『……………これ』

- ・ 名前：マギ纏
- ・ 出身：莠コ界（ウエラネ圏）
- ・ レベル：841
- ・ 強さ：上級
- ・ 能力：召喚契約、オ纏ヨ蠢??…闘技術、歪みを正した者

何これ、文字がおかしいぞ。

前もこうなってたよな。直したんじゃないのか。

『レベルを元に戻したんだけど、アピロを倒して、ステータスが変わっててね。きちんと元に戻せなくなったというか。元の配列がわからなくなったというか。とにかく一部が元に戻せなくなった。生活には支障ない』

あらら。まあ、これくらいならいいんじゃないかね。

能力の「歪みを正した者」ってアピロを倒したってことだろ。これはそのままなのか。

『消そうとしたんだけどね。消したらステータスがすごいバグって、首の裏から触手が生えてきちゃったんだ。「こりやまずい」って気づかれる前に付け直した。レベルはすごい上がるし、能力もやばすぎるってこともないからプレゼントしようかな、と』

上手く消せないだけだろ。

ちなみに効果はどんななんだ？

『歪曲持ちへの強制消滅と、歪曲剣の利用』

前半はともかく、後半がやばそうなんだが、歪曲剣ってあれだろ。

あいつが持ってた変な剣でしょ。

『そう。剣自体はかなりやばいんだけど、生成のやり方を知らないと利用できない。マジアじゃ生成できない』

まあ、彼女にはそんなものは必要ないだろう。

表示はおかしいが、どうかまつすぐに生きて欲しいものだ。

最後の相手は、こちらが出向くまでもなくやってきた。

座っている私の横までやってきて、いつものごとく本をくれと手を伸ばしてくる。

『いいよ。いいとも。いくらでもくれてやろう！』

シユウは笑いながら、楽しげに本をやろうと声をあげる。

『マジアに謝罪なら、エルピダには礼だ。それだけのことをこいつはしてくれた。俺だけじゃなく、世界中から礼を尽くされるべきだ。それにも関わらず、誰に誇ることもなく、ただ本だけを求める——大馬鹿者で酔狂な奴だ』

言い方は悪いものの、機嫌はとてつもなく良い。

鼻歌交じりで、次から次へと本を取り出してエルピダに渡している。

『「ヤバⅡ異本」に、「ダンジョン百景：永久保存版」、「根暗の巫女」……「みんなの魔法陣：写本」もいちおう渡しておくか』

エルピダもたいそう喜んで、本棚の未読スペースに本を次々と並べていく。

お気に入りのところには、過去に私の渡した本がちゃんと置かれていた。

『あ、そうだ……。黒紙番地の「活躍」を全部あげて』

いいのか？

『いいよ。きつと気に入ってくれる』

取り出した黒い表紙に、エルピダはぴくりと震えた。

以前、渡した黒い表紙で、ややトラウマを埋め込まれてしまったらしい。

そんなに警戒する物じゃない。

見ればすぐにわかる。ただし、私のいないところで読んでくれ。

エルピダは黒い表紙をめくった。

おいおい、私の前で読むなど言ったにもかかわらず、いきなり開きやがったぞ。

開いてすらすらと読み始め、すたすた歩いてソファに座る。

そこで続きを読んでいっているが、ところどころで読むのをやめて考えている。

あれ、そんな難しいところがあるっけ。

『あると思うよ』

黒紙番地の「活躍」は、冒険者ギルドが発行している旬報や号外をまとめている。

それ以外の号外やらチラシも入っているのだが、あまり語りたくはない。

『最初から最後までちゃんと入ってるからね——メル姐さんの活躍が』

私が、こいつと会ってから、私が記事に出てきた分はほぼ全部入っている。

良い活躍もあるが、悪い方も多分にある。悪い方が多い。

これを渡すのは少し淋しい思いもあるが、どうせ読まないなら別にかまわない。

それに書かれていることは、珍しく私も覚えていることが多い。
しかし、なぜこれをこいつに渡したんだ？

『いくつかあるけど、一番大きな理由だけ言うと、これは普通には読めないんだ。世界が違うし、書かれた本人がここにいる。きちんと読むためには、想像しないといけない。どうしてこんなことをしたのか、どうしてこんなことが書かれてしまったのか、書かれてるのがどういう世界なのかってね。それはきつと——とても楽しいんじゃないかって思うんだ』

そうかもしれないな。

挑んだことのないダンジョンを想像するのはとても楽しい。

彼女が少しでもダンジョンを好きになってくれれば私も嬉しいというものだ。

こうして私はマジアの部屋を出た。

特に感慨の湧かない寮を出て、校舎の廊下を歩き、闘技場へと進む。広々とした空間に私だけがたたずんでいる。

別にここじゃないといけないわけじゃないが、ここが一番落ち着くからここにしたい。

『じゃあ、帰るよ』

ああ、私は頭の痛みに備えて膝を地面につけた。

世界が歪んできて……、あれ、今回は頭があんまり痛くないな。

『うん。アピロを倒したときにパーティー組んでたでしょ。それでこっちもスキルがいくつか手に入ったんだ。「時空震——」だね』

マイナスなの？

どういう効果なんだ。

『——は時空の揺れへのそこそこの耐性と考えるてもらえば良い。酔い止めだね。ちなみに無印もあるし。+だつてある。でも、——がちように良いと思う。無印だと揺れを感じなくなるからね。危険に気づけない。プラスに至っては自ら時空震を起こせる。でも、使うべき相手と状況はとてつもなく少ないから、そのときだけ付けければいいかなつて』

私もそれで良いと思う。十の判断はいつもどおり任せる。

ここ最近で手に入れたスキルでは一番ありがたいスキルだな。

頭がずきりと痛み、景色が急変した。

目の前に飲み屋の看板があつて、酔っ払ったおっさんが出入り口から出てきたところだった。

あれ、今回は宙に浮いたりとか景色が歪んで変わったりとかしないの？

すごい、なんだろう……いきなり景色が変わったんだけど。

『いつもどおりだよ。えっ？ 普段はそんな感じだったの？』

はあー、なるほど。それは新しい研究テーマになるね。次に転移するときにあれば耐性外すから、どういうふうに感じたか具体的に説明して』

いや、耐性は絶対に外すな。

そもそも、しばらくは異世界に行きたくない。ダンジョンに行きたい。

異世界に行ったことも忘れるぐらいになったところ、私は不思議な夢を見た。

よく覚えていないが、金髪のすごく大人びたエルフとシユウが何かを真剣に話しあっている夢だ。

私は近くの机で、夢の中なのにうつらうつらしているというよくわからない状況だった気がする。

そこで寝落ちしたとおもったら、ベッドで目が覚めた。

目が覚めると、何か変な箱が枕元に置かれていた。

かなりでかい。犬や猫なら二匹は入れられる。

なんだこれ？

私が置いたんだっけ？

『いや、さっき出現した』

なにそれ怖い。

『危険な反応はない。とりま、開けてみて』

恐る恐る箱を開けると、中には一枚の紙と文字が書かれていた。

私にはまったく読めない文字だ。

『なるほどね。やるじゃん』

納得しないで説明してくれ。

『エルピダからだよ。覚えてる？ 召喚獣の世界にいた本好きのやつ』

それは珍しく覚えてる。

『そいつが「もらった本は全て読み終わった。また何かくれ」って書いてる。箱に入れて蓋を閉じたら、向こうの世界に転移される仕組みだね。非常に良くできてる。使い方を誤ってる気がするけど、まあ、いや、彼女らしい。いくつかプレゼントしよう』

それだけか？

その割には文字がたくさん書かれてるぞ。

『詳しく言うともうちよつといろいろ書いてある。でも、もはや意味のない文章。過去のことだ。気にしなくても良い』

それだけ言って、入れる本を私に伝えてくる。

最近の冒険者旬報やシユウが気になって買った本。

ダンジョンから手に入れたよくわからないアイテムも入れた。

その後も、忘れたところにこの箱が届くようになった。

マジアも私に手紙を書いてくれ、あちらの近況を教えてくださいる。

たとえば一時の冒険でも、こうやって手紙が届き、繋がりが残るのは良いことだなと感じる。

——だが、やめて欲しいこともある。

気持ちはわかるし、喧嘩をしたのも重々承知ではある。

「メル！ あなた今までどこへ！ どうして私はこんなところに——」

そのまま箱の蓋をサツと閉じ、受け取りを拒否して元の世界に送り返した。

お嬢様^{爆弾}を箱に詰めて送ってくるのはどうか御免被りたい。

蛇足27・5話「MAJIYARUKI・ZERO」

0. ダンジョンへ

遠くにかぶ雲をぼんやり見ながら歩いているとシユウがいきなり喋った。

『紆余曲折ありましたが、メル姐さんは今から——ダンジョンに行きます！』

……うん？

元からダンジョンに行く予定だっただろ。

紆余曲折なんてないぞ。なぜ、そんな声高々と宣言するんだ。

『ダンジョンへ行く世界線なんて、存在しませんでした。別のところへ行く予定でした』

別のところってどこだよ。

『異世界です。まず最初がスチームパンクの世界』

スチームパツク？

『スチームパンク。蒸気と機械が進化していった世界かな』

よくわからんな。

ダンジョンはあるの？

『ない』

クソみたいな世界だな。

『メル姐さんは今、全世界SFマニアの五パーセント強を敵に回した。まあ、いいや。で、次に大ロボットがある世界に行く予定だった』

大きなロボット？

ロボットってお前がたまに話すアレでしょ。

光の剣を持って戦う、鉄だかなんだかの戦士がどうかこうとか。

『ガン〇ムをロボットと呼ぶかどうかを、ここで議論する気はないけど、だいたいそう』

で、ダンジョンは？

『ない』

ゴミのような世界だな。

『メル姐さんは、俺の国にいるロボ好きのおおよそ十七パーセントを

敵に回した』

多いのか少ないのかよくわからん。

なんかどつちの世界も機械が出てくるな。

『うん。奴も気づいた。いったん機械から離れて、人がいない世界に行く予定になった』

ダンジョンは？

『ない。代わりに変なモンスターが世界にはびこっているから実質ダンジョン』

それならまだいいな。

『で、過去に人がいた形跡があつて、人が残した喋る機械と出会うはずだった』

けつきよく機械じゃん。

『そうなんだ。奴はまたもや気づいてしまった。んでもって、もう人間も、変な生物も、ロボットも何もかもが一切ない世界に行くことになった』

そうなの。

でも、どうなんだ？

さっさと帰って終わりそうだが。

『うん。何もないとところで話を作る実力なんて奴にはなかったんだ。ここまで話した世界をそれぞれ一万字以上は書いて、めでたく全部没になった。ロボットの世界は六万字まで行ったのになあ。ロボのチートサーベル攻撃で大陸を真っ二つにしたところで、ようやく「これはいかんだろ」と我に返った。そのまま突き進めば良かったのに……』

機械だかロボットだかから離れると言ってるわりに、すごい未練を感じる。

『とどめが外伝だ。ついに、やっちゃった。当時の流行りタイトルに便乗して、書き始めたは良いものの、序盤しか書いてなかったから、半ばでひいひい言うことになった。ざまあ。しかも、おまけを書きたい欲求ともう書きたくない意志が争い、一步も進まない四ヶ月を過ごした。非生産的な日々だ』

何が何だかわからんけど、けつきよくのところどうなったの？
そもそも何の話をしてるんだ、これ。

奴って誰なの？

『その結果がこれだよ。原点回帰して、俺達はダンジョンに行くことになった。どんな登場人物を出して、ストーリーのオチをどうするかいろいろ考え始めたけど、もう全部面倒だ。とにかく外伝でも出てきたダンジョンに行つて攻略する。最悪、オチがなくてもダンジョンの日常系というジャンルってことでいいやつてね。どつちつかずな中途半端な話だ。俺は日常系が嫌いなんだよ。……とりあえず始めれば、なるようになるだろ。やる気はないけど』

そのとおりだ。

心配することはない。

ダンジョンに行けばなるようになる。

やはりダンジョンなんだ。ダンジョンなんだよなあ。

さあ、行くぞ。

まだ見ぬダンジョンへ。

1. ペルパン洞窟と訓練生

都市圏ドクサにはダンジョンが二つある。

一つは初級ダンジョン——ペルパン洞窟だ。

こちらはスタンダードな初級ダンジョンで、中級への第一歩として知名度が高い。

ペルパン洞窟の近くには、冒険者養成校なるものがあり、冒険者の卵たちが日々鍛えているらしい。

『おい待て、いきなりおかしいぞ。こんなダンジョンは外伝で出てきてない。あ、そういや、俺は最初、このダンジョンの名前がペニパン洞窟って聞こえてね。思わずにつこりしちゃったよ』

ふーん。

それより実際のところ冒険者養成校ってどうなの？

あんまり良い噂を聞かないぞ。

『俺はね。このダンジョンをペニ——』

冒険者養成学校の話を聞かせて。

『そこそこの力と知能があるなら、悪くない選択肢。食いつぶれがなくなるからね』

冒険者で食いつぶれがないとかありえないだろ。

ダンジョンに行けばすぐに怪我をする。体の一部が欠損など珍しいことじゃない。

仮にそこそこの力があっても、中級程度ならまだ安定して食っていけるとは言えない。

中級の上位から上級の下位あたりが一番競争率が高いはずだ。

『ティミ冒険者養成校のパトロンがどこか知ってる？』

そりゃ、冒険者ギルドでしょ。

『半分は冒険者ギルド。もう半分は国だよ。初期段階はね』

国も出してるの？

『そうだよ。国の兵士にもなれるんだ。わかる？ 腕っ節はあるけど学費が払えない奴は、卒業後に国の兵士という役務を負わされて払われるの』

それってどうなの？

『この養成校では対人だけじゃなくて、対モンスター知識も得られる。それに世の中全般の教養もたつき込まれる。切磋琢磨することで人格も陶冶される。悪く言えば、ゴミみたいな性格は矯正される。兵士としては十分堪えられる』

いや。そういうことじゃなくてだな。

冒険者になるために、冒険者養成校に入るんじゃないの？

『当初はそうだった。でも、今はもうそんな奴あんまりいないんじゃないかな。この養成校は最初の段階で大失敗したんだ』

大失敗？

『自分で言ったでしょ。あんまり良い噂を聞かないって。その当時の話だね。国の出資が大きすぎてね。結果を求めすぎたんだ。悪いことに訓練の基礎を考えたのがキチ○イコンビで、しかも第一期生に超大当たりが一人いたもんだから訓練の基準があまりにも高くなりすぎた。一期生二十人のうち、今も生きてるのは一人だけ。二期生は二

人』

えっ……。

それだけ？

『うん。この生き残った三人は誰もが有名人。メル姐さんも知ってるはず。ちなみに三期生に至ってはゼロなんだぞっ』

可愛く言ってるけど、内容がどぎつかった。

ゼロって、ほんとに？

『国の幹部は今も尾を引いてる。まあ、最初の三人を排出した時点で、ある種の成功とも言えるね』

そんな施設、今もやっていいの？

『良いわけではないですよ。当時はそれでも馬鹿どもがブレーキをかけないから、最後はギルド本部長令どころか王令まで出た。結果、方針を大きく変えたんだ。完璧な戦士の作製をやめて、幅広い環境で生き抜ける兵士を育てることになった。魔術師ギルドとその他の組織から出資も募って国の出資率を大幅に下げた。ついでに、当初は訓練校だけ隔離されて中の様子がわからなかったけど、今は訓練校を中心に街ができてる。街の人間に訓練校を監視させてるんだ。現状はすごくまともだよ。この国でも上位の育成機関だと思う。教官たちも生え抜きだしね。一部区画を除いて』

おい、最後に変な言葉を付け足すなよ。

怖い話になっただろ。

『怖い話で間違いないんだよなあ。俺もどうしようか迷ってる。潰してしまいたいけど、あの成果は捨てるに惜しい。独占できないかなあ』

意味深な呟きを残して、この話はここで終わった。

都市圏ドクサは一つの都市ではなく、小さな街があちこちに点在し、それをまとめて都市圏と呼ばれる。

冒険者養成校があるティミ区域の冒険者ギルドにやってくると、そこそこにぎわっていた。

年齢層がかなり若い。

どうも養成校の訓練生たちも来ている。

依頼がどうのとか、ダンジョンの攻略方針をそれぞれ楽しげに、あるいは真剣に話している。

賑わっている塊を回り込みつつカウンターへ行く。

ペルパン洞窟の情報を購入し、シユウが記憶し、スペースを離れる直前で声がかげられた。

「訓練生とパーティーを組んで攻略すれば、ギルドから謝礼が出ますよ。どうされますか？」

断る。

私は一人でゆっくりじっくり攻略したいんだ。

「そうですか。もしも苦戦している訓練生を見つけたら助けてあげてください。報告していただければ、事実の確認後、謝礼が出ます」

ほーん。

なんか、すごいな……。サポートが異常に厚いぞ。

『ね。冒険者を育てるところじゃないって感じるでしょ』

そうだな。ちよつと過保護すぎる。

私の知ってる冒険者ギルドはもつと突き放した態度だ。

『時代の移り変わりかもね』

言いたいことはなんとなくわかる。

しかし、私のダンジョン攻略には無縁だ。

ダンジョンへ行くことにしよう。

洞窟の暗い道を進んでいるのだが、攻略パーティーが異常に多い。

どこへ進んでも松明の明かりが見えるほどだ。

『訓練生は五人一組で挑むようにしてるね』

そのようだな。

すれ違う奴らがみんな五人組だ。

『上級生が一人。下級生が一人。あと間にそこそこのが三人。役割は全員違う』

ふーむ。

そこまでは気づかなかった。

『パーティーの中身をランダムに変えて挑ませるんだろうね。社会に出たらいろんな人と組まざるを得ないから』

それもそうだな。

その場限りのパーティーなんて珍しくない。

相手の装備や実力に合わせて、うまく戦えることは大切だ。私はできなないが。

ときどき訓練生ではない冒険パーティーもいる。腕に腕章を着けている。

彼らは見回り冒険者というようで、苦戦している訓練生の補助をしているようだ。

訓練生らの補助をすることで、ギルドから謝礼金が出ており、それで生計を立てていると聞く。

今も戦っている訓練生パーティーへ、見回り冒険者の男が近づき、後ろでもたついている魔法使いに助言をしていた。

『彼らの実力は高くない。せいぜい中級つてところだ。華がない。普通のダンジョンを攻略して食つていくのは厳しいだろうね』

たしかにけつこう歳をくつてるおっさん達だな。装備も際だつて良くは見えない。

それでもきちんとして教えているように見えるぞ。

『ダンジョン攻略パーティーとしては微妙だけど、各自が手慣れてはいる。教え方が適切だよ。見るべき点や、やるべき点をきちんと伝えている。距離感もいい。適度に近くにいるけど、べつたりくつつきはしてない。何かあれば助けられる位置にいて、かといって訓練生たちが頼るには遠いと思わせる距離だ。あれなら依存はしないだろう』

つまり？

『この指南パーティーとして文句なし。他で腐らせて死なすくらいなら、ここで活かすだけの価値はある』

おお、けつこうレアな評価だ。

いつもならけちよんけちよんにけなすのに。

『こういう冒険者の形もあるつてことだね。このティミ区域が新しい冒険者の形を模索している場所でもある』

考えさせられるな。

『嘘つけえ。考える頭なんてないだろ〜』

はは。

埋めちやうぞ。

シユウを地面に突き刺していると、横を通った訓練生パーティーが信じられないモノを見る目でこちらを見てくる。

そりやそうだよな。よく驚かれるんだ。

こんな暗いところで松明も持たずにいたら、そりや驚く。

『違う。そこじゃない。それより、そいつらに前をきちんと見て歩けて伝えという。絶対にこの先は油断するなっつてね』

こつちを見るな。

前を見て進め。

『言葉が足りてない。ま、いっか』

コクコクと頷きながら、彼らは道を進んでいった。

見えなくなると、すぐに戦闘音が響いてくる。叫び声も聞こえる。

『……あーあ、だから言ったのに。こんな馬鹿女に気を取られるから』
どうしたの？

『道の先の曲がり角でモンスターが待ち伏せしてたんだ。気を抜いた愚かな前衛役がモンスターに殴られて倒れた。その後で、斥候役も負傷したね。バツカ、駄目だつて闇雲に魔法を唱えたら』

ここからは見えないが。

『見えなくてもだいたいわかる。地面の音がよく響いてくるんでね』

それもそうだ。

ほぼ完全に埋まってるもんな。

『上級生は支援役だったな。……ちよつと行ってあげて。ほんのわずかだけど責任を感じる』

そうね。

道を進んでみれば、三人の訓練生が土人形のモンスターに囲まれていた。

倒れている一人と蹲る一人を守るように円陣を組んでいるが、モン

スターの攻撃を凌ぐのがやっとに見える。

囲んでいたモンスターを後ろから斬りつけて倒す。

初級なので軽く斬るだけで終わる。モンスターは結晶だけ残して消え去った。

「ありがとうございます」

杖を持った女が、私に礼を言い、すぐに詠唱を始めた。

聞き覚えがある詠唱だ。たしか治癒だったはず。倒れた男を回復するのだろう。

杖持ちの女が詠唱する横で、一人が負傷している男に声をかけ、もう一人はアイテム結晶を拾っている。

なかなか手慣れた様子だな。

すぐに回復魔法を唱え始めたぞ。立派なもんだ。

『駄目。手慣れてない。詠唱を止めさせて』

よくわからないまま、女の肩を揺さぶって詠唱を止めた。

「なんですか？」

ほんとなんなの？

『焦りすぎ。まずは深呼吸しよう。はい、吸ってー、吐いてー、また吸ってー、吐いてー』

深呼吸だつてよ。

シユウの声に合わせて息を深く吸い、吐き出す。

女も深呼吸まではしなくても、私に合わせて浅く呼吸をした。

『じゃあ、始めようか。なにより状況の確認が最優先。一つ目、ここはどこか？ 君たちはどこにいる？』

そのまま女に伝える。

女は何か気づいたようで周囲を見る。

立っていた二人に周囲を見張るように指示を出した。

『目の前にいたモンスターが全てとは限らない。第二波に備えることが先決。アイテム結晶なんて今は二の次。で、次は負傷者の確認。すぐに回復魔法をかけるべきはどちらか。そもそも回復魔法をかけるべきか』

シユウの言葉を復唱すると、女は負傷した二人を診る。

女は詠唱をした。先ほどのような長い詠唱ではない。短縮詠唱つてやつだな。

あれ？ 回復じゃないのか。二人に変化がないぞ。

『戦える奴に補助をかけた。二人をすぐに回復させる必要なんてない。ここのモンスター程度なら見張り二人の能力を上げた方が効果的だ』

続いて、女はまたしても魔法を詠唱し始める。

先ほどよりもやや長めの詠唱だな。治癒魔法っぽい。

『斥候を回復するね。倒れてる男は特に出血もない。気絶してるだけだから後でいいんだ。意識のある奴を戦える水準まで回復させることが優先』

その後は、復活した斥候も入れた三人が周囲を見張り、倒れた男が治癒され、無事に五人パーティーの形に戻った。

「ありがとうございます」

五人から、あらためてお礼を言われる。
気にするな。

『いやいや、気にした方がよいよ。パーティーのバランスがとても悪い』

五人は剣士、斧使い、斥候、魔法使い、補助兼回復魔法使いである。倒れていたのは剣士で下級生。補助魔法を使うのが上級生。そのほかは中間だ。

言うほどバランスが悪いか？

むしろ良いと思うが。

『いや、間違いなく悪い。この組み合わせは誰が考えたの？』

このパーティーは誰が組むと言いだしたんだ？

「タレンド教官です」

『タレンドって、あのタレンド？ タレンドがこの組み合わせを？』

私は聞いたことがないのだが、知ってるのか？

『まあ、戦士の界限では有名だね』

戦士の界限……。

暑苦しい光景しか思い浮かばない。

『ううん？ ああ、そっか』

何かに気づいた様子である。

『尋ねてみて、「右ルートから中央を通って、左の道から行け」と指示された？』

尋ねてみると、五人はそのとおりでと頷く。

女はその後をさらに続けた。

「ボスは倒さず迂回しろ」

『ボスは倒さない道を行け』

二人の声がほぼ一致する。

『なるほどなるほど。油断せず適度にがんばって』

え、もういいの。

『うん。もう用なし』

こうして訓練生を見送った。

シユウは理解したようだが私はさっぱりわかってない。

これが街の話ならどうでもいいのだが、ダンジョンのことなので気になる。

『このダンジョンの全体像は覚えてる？』

どうも私の疑問に答える気になつたようだ。

とりあえず質問には答えておく。

入口と出口が別で、途中で分岐が四カ所あつた。

どの分岐もすぐに合流して、また次の分岐か、出口に繋がる。

『そうそう。串団子みたいなもんだね。それぞれの分岐で攻略パターンが違う』

そうだったな。

私は最初の分岐で、人通りが少ない右ルートに入った。まさにここだ。

『このルートはモンスターが少ないけど、小さな脇道や曲がり角が多いルート。さっきのジャリどもが食らつたような不意打ちが多い』

ジャリってお前。

たしかに曲がり角は多いな。道も迷いそうだ。

『じゃあ、次、あのパーティーのロールはまだ覚えてる？』

馬鹿にしすぎだろ。

上級生の補助魔法使い兼回復魔法使い。

下級生の剣士。これは倒れてた。

後は魔法使いもいたな。魔法を使ってる印象はない。

それに怪我をしていた斥候。斥候なのに後ろでぼんやりしてた印象だ。

あと一人は……、なんだっけ？ たしか斧を持ってたような。

『うん。持ってたね。珍しく正解』

だよな。ほら、覚えてるぞ。

お前はこのパーティーのバランスが悪いと言ったが、どこが悪いんだ。

剣士と斧使いで前衛。

斥候と補助魔法で中距離支援。

魔法使いが遠距離から攻撃。

バランスが取れている。

挟まれても前衛が二手に分かれるだけで済む。

『ロールだけで見ちゃだめ。あのパーティーは、全体で見るとひどくバランスが悪い』

お前が言うのは、性格とか戦い方の相性ってことだろ。

あの組み合わせは、仲が悪いモノ同士だったってことか？

それでもパーティーはいろいろな人と組み合わせるって言ったはずだ。

仲が悪くても、組まないといけないときはあるはずじゃないか。

『いもつとも』

あつさりと認められ、かえって気が抜ける。

あれ？ 正しいの？

何か反論されると思ってたんだが。

『いや、間違ってる。言ってることは正しかった。ん？ この女はほんとにメル姐さんか？』

もっかい埋めるぞ。

それで、お前はいつたい何がバランスが悪いっていうんだ。

『ここまでできたら気づいて欲しい。さらにヒントを出そう。あのパーティーさ。モンスターから不意打ちを受けてたよね』
そうだな。

怪我をしていたから助けた。

でも、助けなくてもどうにかなってたかもな。

『なってたよ』

だよな。

けっこう接近戦もできてた。

『斥候がいたよね』

うん。

怪我をしてたけどな。

『こりや駄目だ。斥候がいてなんで不意打ちを食らうの』

……うん？

あれ？ ああ、暗闇から出た私に気を取られたからだろ。覚えてるぞ。

『ああ、もう。答えを言うよ』

最初からそうして。

めんどくさい奴だな。

『あのパーティーは人だけじゃなくて、ロールも変えてたの。全員が自分の得意なロールじゃないよ』

え？

『彼ら本来のロールは、上級生の補助魔法使いが弓使い。下級生の剣士はもともと斥候。魔法使いはモンク。斥候は魔法使い。斧使いは補助魔法使いだね』

そうだったの？

『必ずしも望む役割をこなせるわけじゃないからね。その実践でしよう』

確かにそれならバランスが悪い。

だが、そこまでするんだな。

『他の役割を体験することで、見えることやわかることもあるからね』
それは、そうかもしれないがやりすぎじゃないか。

『それでもない。その組み合わせでさっきのルートを行くと、自分の担うロールがどういう役目を果たすのか実感できる。ボスは厳しいから駄目だね』

だから、ボスとは戦うなってことか。

『ついでに言うと、やっぱりメル姐さんがイレギュラーだった。驚いて油断したところで、実力の足りない剣士役の下級生が、本来のロールである斥候を果たそうとして曲がり角直後を一番に曲がり、ままと不意打ちを食らった。近くにいた斥候役をするはずの魔法使いが接近戦に巻き込まれて負傷。モンクが前衛気分で魔法をぶっぱしてさらに混乱』

だいたい私のせいだな。

だが、元はと言えばお前が悪いんじゃないか。

『さもありなん。でも、ダンジョンでは、油断させたところを襲うモンスターも多い。それに人間世界ならなおさらそう。あれくらいで油断する方が悪いとも言える。良い勉強になっただろう』

すごい上から目線だが、さもありなん。

私たちは別に悪くないな。

とりあえずダンジョンを攻略しよう。

『せやな』

こうして私はソロの攻略に戻った。

ダンジョンをクリアして、ギルドに報告へ向かう。

素晴らしいダンジョン攻略だったな。今日はおいしいご飯と酒が飲みたい気分だ。

すでに店は目星をつけている。

シユウに言われた近道を歩いていると、曲がり角で人と鉢合わせをした。

互いに互いを避けようとしてぶつかってしまふ。

おっと、すまん。

「ん、大丈夫」

それだけ交わしてさっさと別れる。

『あれ？今のって』

振り返り、ぶつかつた人物の後ろ姿を目で追う。すぐに姿が見えなくなった。白い髪がちょうど曲がり角で消えてしまう。

女性だつたな。背はそこそこ高い。私と同じくらいだつたはず。私とぶつかつてもよろけた様子はなかつた。

もしかして冒険者だつたか？

あつ！

それで思い出した！

話は変わるが、冒険者と言え、ここつて「チューリップ・ナイト」の誰かの出身地じゃないか？

ほら、超上級パーティーのチューリップ・ナイトは知ってるだろ。

『知ってるよ。正解だね。白騎士が冒険者養成校を出てる。それと話は変わってない』

ん？

まあいいや、白騎士つてインゼルだよな。

やっぱり冒険者養成校つてすごいじゃないか。

あの超上級パーティーの一人を出してるんだから。

『彼女はね。冒険者養成校の栄えある第一期生だよ』

えっ、彼女つて第一期生だつたの。

じゃあ、もしかして――。

『うん。第一期生、唯一の生き残り。他の花の命を養分にして咲く花は、強く美しいね』

嫌な言い方だな。

それより、会うことができたりしないかな。

たしかチューリップ・ナイトは普段は別々に行動してるだろ。

インゼルはドクサ周辺で動いてるつて聞くぞ。

『……ちなみに会つたらどうするの？』

ふふふ、チューリップ・ナイトの特集冊子を持ってるんだ。

『そう、サインをもらうのね。運が良いのか悪いのかわからんね』
うん？

『それより、その角を右に曲がるとすぐ冒険者ギルドだから』
ああ、白騎士がギルドにいるかもしれないな。
興奮してきたぞ。

ギルドに着いたが白騎士はいなかった。

報告をさつきと済ませ、特に他の用事もなく、外に出たところで例の五人組に会った。

「ダンジョンではありがとうございました」

いや、気にするな。

そちらもロールを変えてで大変だったな。

「はい。ですが、新しく見えたこともあります」

それは良いことだ。

ダンジョンは常に私たちの視界を広げてくれる。まったく素晴らしいな。

「ですね。どうですか？ 一緒に食事でも」

悪いんだが、私はこれから夕食に行くんだ。すまん。

「いえ、それでしたら……え？」

『ええ？』

じゃあな、と振り返って、目的の方向へと歩み出す。

外を通ったときにおいしそうな臭いが漂っていたんだよな。

今日の晩飯はここにしようと、昼の時点で決めていた。

ダンジョンが無事に攻略できて、今日も飯と酒がうまい。

2. ハイデン・ファ・クランク集合邸宅に空き巣が一人

都市圏ドクサにはダンジョンが二つある。

一つは初級ダンジョン——ペルパン洞窟。

そして、もう一つが上級ダンジョン——ハイデン・ファ・クランク集合邸宅である。

すでに目の前まで来ている。

外から見たただけだとちよつと異常な豪邸。

外にモンスターがいないので、邸宅の周囲をぐるつと一周する観光コースもあるほどだ。

たしかに変な作りではある。

前庭の中心に螺旋階段がぽつんとあつたり、通路部分が屋根から突き出ていたりする。

しかし、私もいろいろと変なダンジョンを見てきているので、前にもこんなあつたなくらいにしか思わない。

すでにダンジョンの情報は手に入れている。

さつそく挑んでみるとしよう。

『あ、ちよつと待つて』

扉に手をかける直前で待つたがかかった。

『はい。はいよ』

それも一瞬で、すぐにゴーサインが出た。

扉を押して開いていく。

思ったよりも重いが、建て付けが悪いわけじゃない。

軋んだ音はせず、ただただ扉に重みがある。

扉の先は廊下だった。

わあ。

思わず声が出る。

聞いてはいたが、本当に聞いていたままの廊下だ。

通常は入口の扉を開けば、広めのエントランスがあるものだがいきなり廊下。

しかも――。

『めっちゃ捻れてる』

廊下が捻れている。

先に進めば進むほど、廊下が右回りにぐにやりと捻れる。

廊下の先に扉も見えるのだが、ほぼ上下が反対になっているくらい捻れている。

どこかの街で食べたパンもこんなふうに捻れていた。味はおぼえ

てない。

『とりあえず進んでみたら』

言われたとおり進んでみるが、捻れて見えるだけだな。

歩いてみるとまっすぐだ。進めば視界も捻れてきて気持ち悪さはある。

進むほど上下が逆転して、壁や天井を歩くことになると思っていたのだがそんなことはない。

振り返ると入ってきた扉が、反対側に捻れて見えている。

捻れている以外では、きれいな廊下ということくらいだな。

もともとどこかの貴族様が作った生粋のお屋敷らしいのでかなり綺麗だ。

高そうな調度品もあちこちに飾られている。ちなみにこれはダンジョンから持って帰れないらしい。

ダンジョンどころか一定のエリアを越えると調度品が消えてなくなるとか。

壊しても、次に来るときには復元されているらしい。

すごいダンジョンだな。

『この廊下に置いてあるやつだけでも、然るべきところに売れば、しばらく遊んで暮らせるよ。もちろん持って帰ればだけどね』

本当に高いものようだ。

そして、この高価な調度品がこのダンジョンのとある特徴を作り出している。

廊下の扉を抜けると、寝室にたどり着く。

そこにはメイド型のモンスターがベッドメイクをしている最中だった。

私を見ると、手にシーツを持って襲いかかってくる。

もちろん切り捨てる。一撃で終わった。この時点ではまだ弱いな。

誰もいなくなった寝室に立ち尽くす。

窓で良いんだよな。

『うん』

大きめの窓に足をかけると、またしても廊下に繋がった。

今度の廊下もやはり捻れているし、扉も最初より多く、執事やメイドのモンスターがいる。
どうしようか。

『最初は普通に攻略してみたら。ちよつと倒してみてもよ。どうなるかを知っておきたい』

そうだな。特殊は後にしよう。

近くにいた、花瓶を持ったメイドをシュウで斬る。

簡単に倒すことができたのだが、問題はメイドが持っていた花瓶だ。

メイドが光に消えても、花瓶は消えない。床に落ちて、良い音を響かせて周囲に破片が散った。

全てのモンスターがこちらを向いた。

目は赤く血走り。

体の周囲をやや薄黒い煙が纏っている。

さらに、全員が猛烈な勢いでこちらに向かって走ってくる。

『速いねえ〜』

何かおもしろかったようでシュウは笑っている。

私もちよつとおもしろかった。こちらに向かっては来るのだが、全員が手に調度品を持ったままなのだ。

しかも、それを手に持ったまま戦闘をしてくる。

この状態は暴走状態と言われている。

力も上がり、速くもなる。それでも元が弱いのでそれほど強くない。一度か二度斬れば倒せてしまう。

まだ苦戦するほどじゃないな。

『暴走状態で力とスピードがだいたい倍。重ねがけはなし。情報のとおりだね。状態異常の保護がかかるのが厄介かな。普通のパーティーだと力押しはきついね』

そうかもしれないな。

私が見てもわかるくらいに身体能力が上がった。

『けっこう前に、ここを力尽くのごり押しで攻略してた上級パーティーがいたらしい』

ほお。

けっこうすごいんじゃないか。

『まあ、すごいとは思う。主に、使用武器と魔法がね。名前は「深淵と大鎌」だったかな。問題はその後だね』

その後というと？

『超上級を目指してたらしくて、北東にある廃頹の都パラクミに向かった』

おお。

私も次に行くところだな。

何が問題なんだ。順当な流れだと思うぞ。

『彼らは順序を大きく間違えたね。先に北西のゲムマ溪間から挑むべきだった。いや、彼らの気持ちはわかる。パラクミをクリアして、続いてゲムマ溪間をクリアして超上級に達し、そのままゲムマ溪間の東にある超上級の星雲原野ガラクスイアスに挑んでやろうってあふれ出る想いはね』

ゲムマ溪間って上級の中ではかなり難しいと聞くぞ。

超上級を目指す奴らが、ゲムマ溪間は挑まず、わざわざ遠くにある上級を攻略しに行くとも聞いたことがある。

やはりパラクミから挑むべきじゃないのか。

『カタログスペックで判断すればそうだね。なるほど、ここをクリアしたパーティーとなら實力はそれなりにはある。ただね。パーティーメンバーが大鎌に、闇魔法に、完全な補助魔法に、アイテム使いの四人。どうやってここをクリアしたのが目に見えるようだ。ここをゴリ押しでもクリアできるパーティーじゃなくて、ゴリ押しでしかクリアできないパーティーだった。間違いなくこの特殊ドロップはゲットできない』

それが何か問題なのか？

ゴリ押しでもクリアできれば良いと思うが。

特殊ドロップだって、装備品じゃないからなくてもいいだろ。

『ここは上級でもモンスターやボスがかなり弱い。ダンジョンのギミックと構造、それに知名度で上級になってる節がある。パラクミは

違う。生粋の上級だ。超上級になってる部分すらある』

トウレラだろ。

さすがに私でも知ってるぞ。

別称『闘神』。最強の町医者らしいな。

『いや、トウレラは戦わなきゃいいだけだから対象外。アレを入れると極限級に限りなく近づく。それに気になるのがもう一体いる。俺が言ってるのは塔の方のボスだね。聞いた限りだとあそこは超上級に近い。ここをゴリ押しでしかクリアできない奴らじゃパラクミは難しい。塔をクリアできるイメージがまったくできない。間違いない。まだクリアできてないだろうね。まず、生きてるかどうかが疑問かな。パラクミと相性が悪いよ』

相性はあるよな。

私も魔法系のギミックが多いダンジョンは苦手だ。

それに二人以上で攻略しないとダンジョンは、攻略前からお手上げ状態に近い。

『それは、ちよつと違う。ゲムマ溪間が難しいのはモンスターとボスの強さが高いこと、それに地形の悪さによるものが大きい。それに伴い死亡率が上級でも高い部類だ。安定した難しさとも言える。でも、アイテムサポートが優秀なら、工夫すればいける。それになによりアウイス石が手に入るのが大きい』

聞いたことがあるな。

装備品だっけ？

『そうそう。加工が必要だけど、各種能力を上げられる。これを少しずつ手に入れて戦力を底上げしていけばゲムマ溪間はいける。パラクミはその後だ』

まあ、余所のダンジョンの話はそのときの楽しみにしておこう。

今は目の前の攻略に戻ろう。

『まあ、こんな話をしながらでも攻略できるくらいだからね。ここはやっぱり上級の中でも簡単な部類だよ。暴走ありきの強さだからね』
しかも暴走してもさほど強くないな。

ここは、どっちだっけ。

『右の通路を進む。その後は、左側の二番目の扉』
言われたとおり進んでいく。

苦戦はない。

苦戦がないまま、私たちはあっさりとボスも倒した。

ボスを倒すと強制的に外へ出される。

正確にはボスを倒した後に、入った扉をくぐると出口に繋がるというものだ。

『……はて?』

どうしたんだ?

何か気づいたことがあったのか。

『ボスが、ちよつとね』

何なの?

隠し条件に気づいたとか?

『そうかもしれないけど、そうではないと思う。前に読んだ本の登場人物に似てるような気がした』

なんだそりゃ。

ダンジョンをモチーフにした本なんていくつもある。

もしかしたらその本は、さっきのボスをモチーフにして書いたんじゃないか。

ダンジョンをモチーフにするくらいだ。きつと素晴らしい本なのだろう。

『素晴らしいというのは間違いないけど、どうだろうなあ。それよりどうする。思ったよりも速く攻略できちゃったけど、特殊ドロップもやっちゃおう?』

たしかに早かったな。どうしようか。

あまりにもあっさりと倒すことができてしまった。

昼飯にはまだ早すぎる時間だ。お腹もそこまで減ってない。

本当にクリアだけなら上級でも簡単な部類だな。苦戦という苦戦がない。

よし。

特殊ドロップもやってみるか。

『うん。特殊ドロップを手に入れば、ちょうど昼飯時になるでしょ』

……え？

そんな簡単にできるか。

『楽勝だよ』

ヘイデン・ファ・克蘭ク集合邸宅には特殊ドロップがある。

これは有名な話だ。

ドロップアイテムはティーカップ一式。

王家でも使われているものだ。飲み物の温度が変わらないらしい。

温かい飲みものは温かいまま、冷たい飲みものは冷たいまままで飲むことができる。

見た目も派手派手しすぎることはなく、落ち着いたデザインらしく身分の高い人たちからは人気がある。

『メル姐さんは何度か見たことがある。たぶん意識してないだけ』
かもしれない。

はつきり言つて、茶器とかどうでもいい。

温かいものも、冷たいものもさつきと飲んでしまうからな。

飲みものの温度が変わらないからなんなのって話だ。そもそも温度が変わるほどの長話をするな、という思いである。

『じゃあ、まあ、行こうか。基本的にはさつきと同じで』
ルートは先ほどと同じだ。

ただしモンスターを倒すときに気をつけないといけない。

特殊ドロップの条件は三つ。

ある単位空間エリアごとにモンスターを一体以上倒すこと。

普通にボス部屋までのルートでモンスターを倒していたら達成される。

次にボスも倒すこと。

特殊ドロップはボスから出てくるのでこれもわかる。

問題は、この二つを暴走状態なしで実行しないとイケない。

地味に難しいと聞く。私もさつきは普通に暴走させまくって戦った。

調度品を自ら壊してくるモンスターもいるので、なかなか厄介だと思っている。

しかも、ボスも暴走させて倒してすらいた。ボスの周囲にいる雑魚が勝手に暴走を始めるんだよな。

『暴走すると状態異常が効かなくなるんだけど、暴走前は普通に入る。余裕だね』

そんな話を聞きながら、攻略を再度始める。

最初のメイドは普通に倒せる。

問題は次の廊下だ。

『軽く斬って』

メイドに素早く近づき、軽く斬ると動きが止まった。

『手から花瓶を抜き取って』

言われた通り花瓶を奪う。

『もう倒して良いよ』

メイドを斬って倒す。

『花瓶は地面に置く。他のモンスターは無視』

なるほど。

これは楽だな。

戦闘もほぼしないでいい。

『普通のパーティーが適切に攻略するなら、暴走させない方向で進む。

むしろ、こっちの方が通常ドロップで、暴走させて倒した方が特殊じゃないかと思う。一部は難易度が上がるけどね』

倒すべき敵だけを倒す方式でサクサクと進んで行く。

自分から調度品を壊すタイプのモンスターがちよつと手間だったが上手く倒した。

本当はかなり楽勝でボス部屋まで来てしまったな。

ボスはどうするんだ？

『さつきは取り巻きの雑魚を片付けてから倒したけど、今度は雑魚無視の完全ボス狙いで行く。感染で雑魚を動けなくしてボスだけ倒す』

……最初からそれじゃ駄目だったの？

『いや、ちよつと気になったことがあったから、一周目は暴走させて倒

してもらった』

あ、そう。

倒した後に何か気づいた様子があったのはそれか？

何かの本と似てるんだっけ？

『そつちとはまた別だね。単純にモンスターの動きや耐性が見たかっただけ』

ふむ。

大切な探りだな。

そんなわけで二度目のボス戦に入ったのだが、先ほどよりも楽に倒せた。

ボスの暴走がないから、ボス自体も弱くなっている。

無事に特殊ドロップも手に入れて、ダンジョンから出る。

『その都市は球体の内壁に築かれ、見上げれば、また別の住人が反対側の内壁で生活をしている。この都市に空はなく、星は地面を通り過ぎていく』』

いきなり何を言い出すんだ。

『ボスが、本の主人公に似てるって言ってたでしょ。その冒頭付近にこんな文章があった。やっぱり本と雰囲気に近い。なにより構造がそれっぽい』

ああ、何か言ってたな。

かなり変わったダンジョンだから、あり得るでしょ。

このダンジョンをモチーフにして書いたんじゃないのか。

『このダンジョンをモチーフにしてアレを書くことはできない。逆ならわかる』

逆ってなんだ？

その本をモチーフにして、ダンジョンができたってことか。アホらしい。

『そう思いたいところだけど、そう思えない本だから困る』

日差しが眩しい。

ちようど日が雲から出てきた。

昼飯にはちようど良い時間帯だな。

なんだろう。

昼飯をぼんやり食べているが、消化不良だ。

楽しみにしていた上級なのに、あっさりとクリアできてしまった。それどころか、苦戦すると考えていた特殊ドロップを含めても半日かからないという。

『昼からもつかい行こう』

ああ。そうだな。

……珍しいな。お前から言い出すとは。

『気になることがいくつかある。未発見事項だね』

えっ！　ほんとか！

『声がでかい』

何が気になってるんだ？

『詳しくは調査後に言う』

概要だけ先に頼む。

『うーん。ヘイデン・ファ・クランク集合邸宅は、来歴がかなり知られてるダンジョンなんだ』

ヘイデン、ファ、クランクの三人が住んでた家でしょ。

何年前に建てられたかは知らないけどな。たしか細かくわかってたはず。

それが変な建物だったから、死後にダンジョンになった。

そりゃダンジョンになるよなって印象だ。

『だいたいはそれで良い。で、来歴が知られてる割に不思議なことが多い。隠し要素が確実にあるってのも昔から言われてる』

そうなの？

『まず、外から見た構造と、中の構造が一致してない。要するに、ダンジョンの外から見えてる部屋が、ダンジョンの中に入るとない。たどり着くルートが今も研究されてる』

それはおかしいな。

ぜひがんばってもらいたい。あるいは私たちで見つけるか。

『もつとあるよ。さつきメル姐さんが言ったように、ヘイデン・ファ・

克蘭クの三名が、あそこに住んでたからヘイデン・ファ・克蘭ク集合邸宅という名前なんだ。そこは間違いない。さて、それではここでクエスチョンです。メル姐さんが午前中に二回戦ったボス。あれはいつたい誰でしょう?』

三人の誰かでしょ。

ヘイデン?

『ボツシユートになります。誰でもないんだ。ヘイデン・ファ・克蘭クの三名は建設当初から顔も割れてた。ボスの特徴は誰とも一致してない。いまだにあのボスが、どこのなにかしかわかってない』
ええ。

何これ、怖い話なの?

『それだけじゃない。ダンジョンって基本的に元の性質が保持される。洞窟の中が平野になったりはしないし、元からいないものがモンスターになることもほぼない。後から追加や変更はあるとしてもね』
それはそうだな。

だが、あそこは問題ないだろ。

執事やメイド、その他の使用人は元からいたはずだ。

『使用人たちは記録に残ってるから問題ない。空間が明らかにおかしい。ダンジョンになっても空間はあそこまで歪まない。もちろん初めてのケースかもしれないけど、それはちよつと考えづらい』
それは、どうなんだろう。

今までもけっこう不思議なダンジョンはあったからな。

空間が歪んでるダンジョンがあっても、それはそれでありかなと思ってしまう。

『あとは、前庭の螺旋階段』

あの意味のわからない螺旋階段ね。

階段を上った先には、踊り場も何も無い。

飛び降りるか、引き返すかの二択だけという。

あれが何か関係あるの?』

『最後の可能性としてあり得る』

なんかよくわからん物言いだな。

はつきり言えよ。

『空間の多重螺旋構造』

はつきりと言いつつ切ってくれたのだが、中身はわけがわからん。とにかくここでごちやごちや言ってもしょうがない。

さっさと行って、確認するに限る。

そんなわけでダンジョンに戻って、全エリアを回ることにした。

『めんどくさいね』

そうだな。

一つの隠しルートはすぐに見つかったな。

『もう誰かに見つかってるね。痕跡もあったから』

そうか。さっきから行ったり来たりで私はどこにいるのかさっぱりわからん。

なんでクローゼットの奥から厨房に進むんだ。

『それで、二つ目の隠しルートがここだね』

思ったよりもすんなりこれたな。

ここはモンスターがいない地味な部屋だな。ここからどこに進むんだ。

『さっぱりわからん。一つはつきりしたことはあるけど、ここから先はさっぱりわからないね』

お前でも難しいのか。

『天井や床下も境界になってるし、隠し部屋もありそう。非常に良く出来てる。出来すぎてる。外れルートも当然あるから、当たりを探すのはかなり時間がかかりそうだね』

うーん。

そういうのは魔術師ギルドや探求専門の奴らに任せたいな。

もっと簡単に見つける方法がないのか。チートでできないものか？

『ぶぎんよ』

できるのかよ。

最初からそうしてよ。

『チートなしでもできるんじゃないかと思ったんだけど根気と時間があることがわかった。隠しルートを自力で見つけてる奴はすごいね。報奨金を与えて良いと思う』

私は根気と時間も使いたくない。報奨金もいらん。

チートでサクッとやるとしよう。

『ダンジョンを出てからやろうか』

このままじゃ駄目なのか。

『駄目じゃないけど、あまりよくない。入口からの方がわかりやすい』
それじゃあ仕方ない。

出口まで道案内をよろしく。

外に出た。

螺旋階段が私たちをあざ笑っているかのように立っている。

『入ってええで』

え？

もういいの。何もしてないけど。

『うん』

何も変わってないぞ。

『そりゃ、ここは外だからね』

微妙に重い扉を開けて、ダンジョンに入る。

見慣れてきた、ねじ曲がる廊下がなかった。

広いエントランスだ。モンスターの姿も見えない。

『ほう、エントランスも違うな』

どういうこと？

なんで廊下じゃないの？

『時空間耐性を付けたからだね。飛ばされることなくなった』
いつも付けてるやつだよな。

切ってたのか。

『一番最初に挑む前だね。耐性なしの方が楽しめるかなって』
それもそうだ。

そして、耐性を付けてきちんとした空間に着いたんだな。

『そうなるんだけど……、ここ、モンスターの気配がないよ』

たしかにモンスターはいないな。

ちよつと回ってみよう。

屋敷の中をあちこちに移動してみたがモンスターはいない。

廊下や部屋は見た記憶があるな。

『部屋や廊下の構造はダンジョンと同じ。でも、モンスターがいないどころか、調度品すらない』

部屋を見渡して、言われたことに気づく。

ほんとだな。高価そうな壺やら花瓶が一つもない。

なんか殺風景だと思つたが、物が何一つとして置かれていない。

ベッドや服、椅子に机も何もなくてだっぴろいだけの空き部屋になつている。

『この部屋は、俺がさつき見つけたダンジョンの隠し部屋と同じところ』

ああ、そういうやそうだな。

扉とクローゼット、それに窓の位置も同じだ。

『埃はほとんど溜まつてない。誰かが定期的に掃除をしてる』

誰かつて誰？

『現時点では不明。それにだ。外を見て』

窓に近づき外を見た。

人がいる。女が私に背中を向けている。

女が顔を向ける方には大勢の人間がいて、こちらを見ていた。

『一般の人向けのガイドツアー』

ほおん。

そういや、外に団体客がいた気がするな

女が話している台詞に私も耳を傾ける。

「今、皆さんが見ているこちらの窓ですが、中に見える部屋はダンジョン内部では未だ確認されていません。もちろん、こちら側の窓から入ることもできません。この部屋に誰かがいるのを見る日が、いつの日かくるかもしれません」

女の話聞いていた人が、こちらに指を向けたり、手を振ったりし

てくる。

私も手を軽く手を挙げて返す。

人がざわついていることに気づいた女がこちらを見た。

二度見して、顔がこちらに固定される。

「……ええっ!」

どうも。

「あの、この部屋、誰も入れない、……はずですよね」

普通には難しいだろうな。

「えっと、あなたは?」

メルだ。

冒険者をしている。

「メル……、冒険者、あ、」

女は閃いた様子で、案内をしていた人たちへ顔を戻す。

「みなさん。本日は歴史に残る日となりました。この部屋に人がいるのは、五年前から案内を始めた私も経験がありません。おそらくダンジョンとしても初めてではないでしょうか。それでは、今、こちらにいる彼女は誰か? 彼女は名乗りました。冒険者のメル、と。知っている方もおられるのではないのでしょうか。世界に三組しかいない極限級の冒険者です。私も、極限級の冒険者に会うのは初めてで緊張しています。おそらく彼女もここに立つのは初めてでしょう。ここにおられるみなさん、私や彼女も含め歴史の変換点に居合わせました。おめでとうございます」

女が拍手をすると、周囲の人もなんだか嬉しそうに拍手をしている。

私も気のない拍手をしておく。

「それでは次に移りましょう」

女が私に手を振って、道を進む。

周囲の人たちも私に手を振るので、私も振り返って部屋を出た。

『今のこの屋敷は外との交信ができるね』

そのようだな。

前の状態では外とはまったく会話はできなかつた。

屋敷を一通り回ってみたが誰もいない。

何も置かれておらず、当初の不気味さは寂しさに移ってきている。外から見た不思議な構造は中にも現れているが、やはり何も置かれていないのも悲しい印象だ。

『ここが本当のヘイデン・ファ・クランク集合邸宅だ。三人の部屋だったであろう空き部屋もあった』

そりやそうだろ。

『それならダンジョン側の屋敷は？』

……なんだろうね？

お前は何だと思うんだ？

『空間の二重螺旋』

うん、わからんね。

『わからなくて当然だね。そうなるよこのダンジョンは、間違いなく、あの本と関係があることになる。たしかに時代的には一致するけど、本当に……？ とにかくいったん出よう。螺旋階段を調べる。それではつきりする』

もぬけの屋敷を出て、螺旋階段の前に立つ。

階段を上ると踊り場にたどり着いた。

やや広めの踊り場から屋敷を見るが特に変わった様子はない。

何も起きないぞ。

『起きてるでしょ。どこに立ってるの』

……何言ってるんだこいつ？

見たままだろ。踊り場でしょ。わかんないの？

『まあたボケちやつてる。この螺旋階段に踊り場なんてなかったでしょ、メルおばあちゃん』

あれ……、そういえば、そうだった気もする。

じゃあ、この踊り場は何なの？

『下から見たときはなかった。上り始めてから出現した。歪んだ螺旋階段に触れて、空間の歪みが部分的に解除された』

しかし、踊り場が付いたからなんだという話である。

踊り場以外の光景は何もかわっていない。

『灯台下暗し。下を見てみると良い。何かいる』

踊り場の淵に立って下を見る。

こちらを見上げてきた男と目が合った。

目は真っ赤で、髪は真っ白でぼさぼさ。茶色のくたくたになったローブを着ている。

男は目を逸らし、踊り場の真下に入り、見えなくなった。

『構えておいて。少なくとも人間ではない』

カツリカツリと階段を上る音が聞こえ、男が頭から徐々に姿を現す。

上から見たときと変わらない。目は充血し、髪は真っ白でぼさぼさ、体の輪郭はローブで隠れて見えない。

気づかなかつたが、耳が尖っていてエルフに近い。すごい眠たげだ。

男が私と同じ踊り場に立った。

一人では広い踊り場だが、二人で立つには狭い。

「さつき邸宅に入ったのはあんた？」

まあ、そうなるな。

お前は？

「ほかあはヘイデン・ファ・克蘭クの三氏に頼まれ、邸宅の管理をしているものだね」

管理？

どういうことだ？

あそこが邸宅なら元のダンジョンはなんなんだ？

「あのダンジョンは僕たちが作り出したものだよ」
作り出す？

ダンジョンを？

「そうそう」

管理人ってレベルじゃないだろ。

何者だ？

『エトラーフエルクーニハブラフト？』

えとら、ふえるくー、はぶなんだって？

「……僕だね」

『うつわあ！　すごいすごい！　本物だよ！』

シユウは興奮気味だが、私はまったくわからない。

有名人なのか？

『魔法関係の本で、これは一般に広めちや駄目だろってことで、禁書指定されているのがいくつもある。数ある禁書の中でも特に頭がおかしい三冊——いわゆる三大魔法禁書の一つに「無空都市」ってのがあるんだ。その筆者だね』

なんか、いかにもお前が興奮しそうな話だな。

ちなみに、どんな本なの？

『何もない空間に、全世界の生命体を抱擁する都市をたたみ込む術が、物語形式で書かれてるといというのが一番正しい気がする』

「読んだの？」

……あれ？

シユウの声が聞こえてるのか。

『驚かないよ。さつき言ったでしょ。「全世界」って、この先生は「この世界だけでなく他の異世界の存在も含めた全世界」を抱擁する空間論を物語の中で語ったんだ。この本だけじゃなくて、他二冊の禁書でもそのあたりが書かれている。ちなみに先生って呼ぶのは、俺の空間魔法関係の知識が、この人の本から得てる部分がとても大きいからね』

先生って……。

もしかしなくてもかなりやばい奴じゃないのか。

まあ、お前の声がデフォルトで聞こえる奴がやばくないわけがない。

いつぼう、先生と呼ばれた側は、なんだかすごい照れ始めている。

さつきまでの興味なさげな表情が嘘のようだ。

「君たちも他の世界を知るものかあ。それで、その、本の感想とか、ある？」

『無空都市は、空間論としては唯一無二にして至高。文章ということなら平凡。物語でいえば駄作』

辛辣な評価だった。

言われている方は、照れつつも微笑むだけだ。

『でも、主人公が無空都市での生きづらさから抜け出せたことは、一読者として素直に良かったと思う』

先生とやらも、その言葉に賛同するように頷いた。

『物語に出てくる三人の隣人が、ヘイデン・ファ・クランクの三名でしよ』

「わかる？」

『そりゃあね。主人公が先生——あなただ。主人公は、彼らの突飛な発言や行動に頭を悩ませながらも、その奇行をどこか楽しんでいた。三人との生活は先生にとっても有意義なものだったらしい』

一緒に暮らしてたのか？

「苦しい時期だったよ。どこへ行っても、何を書いても行き詰まり、世界の誰も僕のことなんて理解してくれないと思い込んでいた。そんな時期に彼らと出会った。彼らと過ごしたあの時間は何物にも代えがたい」

ほんのわずかだが、言っていることに同感を覚えた。

「彼らのおかげで、僕は一步踏み出すことができた」

『ファンとしても嬉しい限りだよ。それで「無空都市」が世に出たんだから』

「でも、発禁になって指名手配されちゃったけどね」

変人二人が笑い合う。

なんだか緊張もとけてしまった。

その後も二人は楽しげに話し、私は空気と化した。

「久々に交流ができて良かった」

『うん。俺も先生と話すことができて光栄だ』

ようやく話が終わった流れだ。

すまなかったな。

話を横でひっそり聞く限り、お前の思い出が詰まった屋敷のようだ。

「いや、いいよ。その言葉だけで十分だ」

『じゃあ、三人にもよろしく。あとダンジョンのギミック変更も頼むね』

「ああ。やっておこう。君も都市を訪れる気になったら、またここへ来ると良い。歓迎しよう」

「うん。楽しみにしておくよ」

変人は螺旋階段を降りてそのまま姿を消した。

……三人って誰だ？

『ヘイデン・ファ・克蘭クの三人だよ』

死んだんじゃないの？

『いや、三人とも無空都市にいるよ』

けつきよく無空都市ってなんなの？

空のない都くらいにしか思っただけだ。

『端的に言えば、新しい世界を作るって話』

世界を、作る？

『うん。俺達の今いる世界を一枚の紙としよう。異世界は別の紙だ。命ある者は必ず紙の上にはいないといけない。地に足を付けてと云うか、紙に足を付けていないと生きていけない』

うん。

なんとなくわかる。

前にもそんな話をしたからな。

『ただ、紙の上では紙の素材にあったルールに縛られることになる。例えば、今の紙だとアイテム結晶だね。ある紙ではカードになったり、別の紙だと分身体が出たりする』

異世界の話だな。

『そうそう。で、ある日、紙のルールに縛られるのが嫌になった。別の紙に移るのも嫌だ。紙を離れて、何も無い空に新しい居住地を作ろうとする。でも、紙は簡単には作れない。どうする？』

諦める。

『諦めたらそこで話が終了だよ。紙の上からシャボン玉を作るんだ。丈夫なシャボン玉をね。それを空にぶかぶかと浮かばせる。紙からぶつからないところまで浮かばせたら、泡の中に入り、泡の壁面を地

面として生きていく。新世界の誕生だよ。空のない世界のね』

そんなことができるの？

『あの先生はやっちゃったんだ。なんで「無空都市」が禁書かわかるでしょ。世界の法則を創出することができてしまう。既存の世界の変更にできないけどね』

もしかしてお前もできるのか？

その本を読んだんだろ。

『できなくはない。——が、とてつもなく難しい。まず、丈夫なシャボン玉が容易に作れない。次にシャボン玉を空に浮かばせ続けることができない。さらに、シャボン玉を割らずに内側に入ることもできない。とどめに、シャボン玉の内部法則を自在に書き換えることもできない。無理無理尽くしだ。アイラたんやエルピダ級の魔法使いがあと二人いれば、チートを使っていけなくもない』

それは、無理だね。

……あの変人はまさか一人でそれをやってるの？

『いや、いくら先生でも一人じゃ無理。先生が得意なのは、内部法則を書き換えるところ。あと、シャボン玉の内側に入り込むのもかなりできるね。最初の二つは決定的に分野が違う』

私には、だいたい同じに聞こえる。

『ただ、先生の一番大きな功績は、この妄想とも言うべき空想を文字にして世に出したことだ。大いなる妄想に共感した大馬鹿どもが集まり、妄想は現実になった。もしも俺が先生と同じ時代にいたら、着の身着のまま駆けつけてたよ』

ところが時代は移り、私とダンジョンを駆け巡ることになっているわけだ。

無空都市とやらに行ってみなくてよかったのか。

私はかなり興味があるんだが。

ダンジョンっばいぞ。

『行きたいとは露ほども思わない』

速攻で否定したな。

理由は？

『最初に言ったとおりだよ。空間論としては唯一無二だけど、物語としては駄作。発想と制作までが至高なのであって、住むとなれば話はまったくの別。作った奴らの自己満足が詰め込まれた、変化のないくだらん世界だよ。死ぬほどアホくさい価値観で満たされた退屈な空間に疑いようがない。奴らの楽園、俺らの地獄ってね。見たくもない。話してて、すぐにわかった。先生は過去の成功と現在の楽園に浸かりすぎてる。未来を生きようとしてない。もう死んでるのと変わらないよ。これを口にはしなかったのは、俺から先生への最大限の敬意ってやつだ』

思ったよりも数倍以上に辛辣だった。

興味も失せてしまった。ダンジョンの謎もわかったしもう帰るか。私としてはやや消化不良だけど、これ以上は頭がパンクするからもういいや。

『なんだかんだで良いダンジョン攻略だったね』

うーん、そうかなあ。

珍しく私よりもシユウの方が満足したダンジョン攻略となった。

余談だが、ハイデン・ファ・クランク住宅に新たな隠し領域が発見されたと話題になった。

ずばり、私が外の観光客と話したあの部屋である。

通常のダンジョンではあの部屋に辿り着けないが、シユウが先生に頼み、ダンジョンから外とアクセスができるようになったらしい。

アクセスと言っても、人が行き来できるものではなく、言葉が交わせるくらいのものだ。

翌日には冒険者と観光客が窓を隔てて話をしている状態を見るこ

とができた。
なんとなくダンジョンらしからぬ雰囲気を感じつつ、ハイデン・ファ・クランク集合住宅を後にしたのであった。

3. 廃頹の都パラクミのボスは誰か？

都市圏ドクサを離れ、遙か北東に進み、目的地である廃頹の都パラクミにやってきた。

この付近には、パラクミ以外にもダンジョンがある。

霊元林野アファロスという中級ダンジョンだ。

こちらはもうすでにクリアした。

パラクミへ挑むためには、アファロスで常世魔草とかいうのを手に入れないといけない。

なんでもパラクミのモンスターやボスには通常攻撃や魔法が効きづらいようだ。

常世魔草を煎じて飲むと攻撃がまともに入るようになるとか。

『俗に言う霊体共鳴ってやつだね』

俗にそんな言葉が言われているのは聞いたことがない。

攻撃が効きづらいとは聞くが、そこまで効かないものなのか？

『メル姐さんが全力で蹴っても雑魚すら倒せないくらいにはね』

めちやくちや硬いじゃん。

『硬いとは違うかな』

じゃあ、しぶとって言い直そう。

『しぶとくもない。むしろ脆い。あそこのモンスターは魔力体なんだ。それが人の形を取ってる。物理攻撃も魔法攻撃も柳に風。表面を揺らすだけなんだ。常世魔草を煎じて飲むと、自身も魔力体に近づくから攻撃がそこそこ通るようになる』

仕組みはよくわからないけど、私は飲まなくても大丈夫なのか。

霊元林野アファロスで常世魔草は手に入れたが、いっこうに使う心配もなくパラクミに来てしまった。

『裸足で蹴って倒したいならいるけど、俺で斬れば瞬殺だよ。俺はあいつらの天敵だからね。もっと言えば、黒竜のスキルを使えば五体のボスは斬ることすらなく一瞬で倒せる』

むごい話だな。

五体のボスってことは、やはりアレは無理なのか。

『トゥレラはわからん。氣とかいいうので魔力体の弱点を克服してるらしい』

廃顔の都。パラクミにはボスがなんと六体もいる。

守備部隊のメイリペンズ隊長。

警邏部隊のロハゴス隊長。

安全部隊のハンゼ隊長

この三隊を束ねる行政長官ナヴァルホス。

どこかをうろつく住人ハムラ。

そして、最後の一体がかの有名な町医者トウレラ。

『別称、闘神トウレラね。倒してみたいのはやまやまだけど、聞いた話が正しいならメル姐さんの天敵。不意打ちで突き刺した状態から、黒竜スキルを発動できればワンチャンあるかも。まあ、見てからだね』
そうだな。

とりあえず様子を見てから決めよう。

この類廃の都は、ハイデン・ファ・クランク集合邸宅と似ている部分がある。

ずばり、一般人でも観光ができる。しかも、集合邸宅と違い、外だけじゃなく中を見て回れる。

過去は都だったようで、ここのモンスターどもはもともとここの都民だ。

モンスターになった今でも、かつてと同じように生活している。

私たち人間も観光客とみなされ攻撃されない。

ただし、明らかな敵対行動や侵入不可領域に入れば、容赦ない攻撃が浴びせられる。

そんなわけで私も、中の様子を知るためにツアーへ参加してみた。

少人数で回る日帰りコースである。昼食付きだ。

案内をしてくれるのは現役冒険者パーティーだ。

現役と言ってもダンジョン攻略専門だけでなく幅広い仕事を受けている奴らである。

「今日はよろしく頼むなっ」

ちよっとおっさんにかかった男が愛嬌のある顔で挨拶した。

他の三人も手慣れている様子だ。

こちらも五人と少ない。

私を含めた三人が見るからに冒険者で、残りの二名はただの観光客だろう。

先に警告されたのは私を含む冒険者の三人だ。

ちなみにパーティーでのツアー参加は禁止されているので、残りの二人も赤の他人同士だろう。

「いいか。わかっているとと思うが、絶対に武器を抜かないでくれよ。もしも、万が一、頭がおかしくなって武器を抜いた場合だ。俺達は他の参加者を守るために、モンスターと一緒に頑張って君たちの誰かと戦うことになるからな」

よくわからんが、モンスターと共闘して、武器を抜いた奴を殺しにかかるということだろう。

それならモンスターから見逃されるんだな。

「それでも生き延びて逃げ切った場合、冒険者ギルドから除籍されてボードに手配書が乗ることになる」

仮に戦うことになって逃げ切っても、冒険者ギルドを敵に回すことになる。

参加するときに冒険者証を確認されたのはそれでだろう。

一般人に対してはかなり緩い注意だけだった。

喧嘩を売るな、無闇に住居に入るなとかそれくらい。

『話が出ると思うけど、パラクミはね。今も調査がさかんにされてるんだ。特にボスだね』

私でも知ってる有名な話だな。

まず、原則というか法則としてダンジョンにボスは基本的に一体。

ここはなんと六体もいる。同じ種類や種族のボスが複数体いることはあるのだが、ここは明らかに違う種類である。

それではパラクミのボスはどれか？

三体のボスを束ねる行政長官ナヴァルホスを推す声が第一にある。

一方で、明らかに強さが異次元のトウレラだと叫ぶ奴も同じくらいいる。

さらに住人ハムラだという奴らと、実はまだ見つかってないだけと

いう奴らが少し。

冒険者ギルドは、「こいつがボスだ」と決定づけてない。全員を倒した証を示せば、パラクミのクリア認定を受けられる鬼畜設定だ。

ただ、さすがにトウレラは救済がある。特殊な条件でトウレラからアイテムがもらえるので、それが証になるようだ。

ちなみに私はトウレラがボスだと思ってるんだが、お前はどれだと思う？

『どの主張も理解できる。俺としてはハムラか、まだ見つかってないだけだと思ってる。僅差で「まだ見つかってない」かな』
少数派だな。

行政長官とトウレラはわかるが、ハムラはなぜだ？

『ハムラは封印術式を自分にかけてるってところまではわかってるんだよね。自分のほぼ全ての能力を封印してるんだ。自身の封印魔法すら封印してる』

ハムラはそんな理由があったのか。

まだ見つかってないってのは？ 幻の第四部隊の隊長だっけ？

『その説もある』

もうちよつと詳しく教えてくれ。

『ガイドさんの話を聞いておくと良い。歴史の話や、地理といった詳しい話が出てきてる。今も重要なことを話してるよ。俺と暢気に予想してる場合じゃない』

それもそうだ。

せっかくのツアーだからな。

『パラクミの特徴だが、この通りが特にわかりやすい。右の並びと、左の並びを見てくれ』

先頭の男が立ち止まり、左右に並ぶ屋台を示す。

「どうだ？ 何か気づかないか？」

「売ってるものが違う？」

一般人が答えるが、男は「あー」と悔しがる様子だ。

「モノに注目したのはよかった。よく見てくれ。三件目だ」

手前から三件目を見る。

左側の屋台ではモンスターが武具を売っていた。

一方で、右側の屋台を見ると、こちらにもモンスターが武具を売っている。

「道を挟んで両方とも武具を売ってるな。こいつらは仲が悪いのか」
売上で競争をしてるとか？

「違う。もっとよく見て。冒険者ならわかるんじゃないか」

『メル姐さんは見てもわからないと思うね。はっきりと売ってる武具の種類が違う』

武具の種類が違う？

「そうだ！ さすが冒険者！ 扱ってる武具の種類が違うよな。どう違う？」

どう違うんだろう。

どっちも剣や盾、それに槍、鎧やらだ。

「左は飾りがないけど、右は飾りがついておしやれ」

一般人のが答えた。

「大正解！」

無骨とお洒落が正解？

店主の趣味の違いじゃないのか。

『歴史の違いだよ』

「実は、学者先生たちが調べたところ、この通りの左側と右側だと時間差があるとわかってる。その差はなんと三十年！」

三十年の時間差が？

この通りの左右である？

「そう。右の露天通りが、左の三十年後だ」

どういうこと？

「パラクミの都が栄えたのは、今から約千五百年前。まだ、冒険者ギルドすらなかった時代だ。そして、栄えた期間はおおよそ百年間。このダンジョンはその百年の間の一つの時間帯ではなく、百年のいろんな時間帯が混ざってるんだ」

ほー。

そんなこともあるのか。

都市系のダンジョンは何度か見たが、そのケースは初めてだ。

「そうだろう。さて、武器屋の話に戻ろう。左の通りは中期頃だ。周辺地域との戦争がほぼ終結し、戦で不要になった武器が売りに出されてる。実際に戦で使用されたこともあつてか、実用性が重視され、やや古くさい」

たしかにちよつと欠けてる部分もあるな。

「一方、右の通りは終期の直前だ。戦争と無縁になり、武器は必要なくなつてただの飾りとなつた時代だ」

それでおしゃれなのね。

剣によくわからん文様や、武器に羽がいつぱいついてるのはそれではないのか。

私や周囲もなるほどーと頷いている。

面白い話だな。

「そうだろう。ただ、歴史が混ざること、冒険者のお三方ならよく知る、真のボス問題を引き起こしている」

冒険者はわかつているが、一般人らはよくわかつてないようで、解説が加わる。

先ほどシユウと話していたことが、おもしろおかしく説明され、同じ話でも楽しく聞けた。

「どれが真のボスかはわからないが、わかっていることもあるぞ。生きていた時代が全員それぞれ違う」

そうなんだーと相づちの声から、少し遅れて疑問の声が上がった。

「三つの部隊の隊長と、三隊を束ねる行政長官も全員が別なんですか？」

そーいやそーうだな。

全員違うつてことはそうなのか。

「そのとおり！ 三人の隊長と行政長官を歴史順で並べると、まず外敵から都を守る役目の守備部隊のメイリペンズ隊長が一番最初だ。都の歴史でも初期だな」

外壁周辺に出てくるボスだな。

三隊長の中ではあまり強くないが、一番倒しづらいと聞く。倒しかけると素早く撤退して回復する。さらに、周囲の雑魚を復活させる。

戦闘は上手ではないが、戦争は上手という評価は歴史的な部分からきているのかもしれない。

「次が警邏部隊のロハゴス隊長。戦争終了の直後だな。浮かれた都民と、職を失った兵士の犯罪が増え、それを取り締まっていたようだ」
ロハゴス隊長は戦闘力が高いのが特徴的なボスだ。

都の中で馬鹿な真似をすると、馬に跨がり一番最初に駆けつけてくるのがこのボスである。

雑魚を次から次へと呼び寄せて、気がつくまで囲まれて壊滅しかけたという話が多い。

ただし、全滅はあまりない。武器を納めて逃げると追ってこないようだ。

あくまで馬鹿どもを黙らせるところまでが仕事らしい。

「次は安全部隊——ではなく、行政長官のナヴァルホスだ。こいつが都の安定を保つシステムを作ったと言われている」

ガイドはひときわ高い塔を指さした。

塔の頂上付近に行政長官はいるが、ツアーでは残念ながら入れない。

塔に足を踏み入れると、敵対行動として扱われ、モンスターが襲いかかってくる。

このボス自体はさほど強くない。

問題なのは、他のボスとの連携が確実にあることだ。

「このナヴァルホスが行政長官の頃にちょうど他の三隊長も生きていたようだ。ボスとの戦闘では、他の三隊長がやってくる。メイリペンス隊長はもうよぼよぼで引退間近だが、そこはダンジョン。歳の割に異常な強さのようだぞ」

客は笑っているが、本当に強いらしい。

ロハゴス隊長は馬から下りるので弱くなるとか。

「さて、最後になったが安全部隊のハンゼ隊長だ。これはパラクミの

終期間近だ。かなり穏やかな時代になったパラクミの治安を守っていた」

パラクミで冒険者の死亡率を一番上げるボスである。

治安を守ると言えば聞こえは良いのだが、治安を乱す冒険者に対して容赦がない。

本体はそこまで強くもない。ロハゴスが倒せるなら余裕で倒せる。ただし、こいつを倒すと他のモンスターを異常に強化する。

しかも、ダンジョンを出るまでは効果が切れない。

絶対に一番最初に倒してはいけないボスだ。

最悪なのが、他のボスも強化する点だろう。

こいつを倒したところで強化されたロハゴス隊長にやられて死ぬコースもある。

行政長官ナヴァルホス戦でも出てくる。倒す順番を間違えると、超上級顔負けのボス戦難易度になるとか。

「トウレラはいつなんですか？」

「みんな大好きトウレラさんは最終期だ」

そうだったのか。

戦争で活躍してるイメージがあった。

「そもそもこの都はなぜ滅びたんですか？」

たしかに。

そう簡単には滅びそうにないぞ。

「滅亡理由はまだ研究がされているな。伝染病や戦争での敗北、自然災害という説もある。トウレラが滅ぼしたという説もあるぞ」

ここでまた笑いが生じる。

『実は俺もその説はありだと思ってる』

真面目な声でシユウが告げた。

『伝染病や自然災害なら歴史に記録が間違いなく残る。戦争ならトウレラがいたらまず負けない。あいつ一人で良いんじゃないか状態でしょ。見てはないけど、超上級ボス以上の強さでしょ。都市の制圧とか余裕』

じゃあ、トウレラがこの都を？

『トウレラならできる、というだけでやらないと思う。聞いた限りだとむやみやたらに力を振るわない人らしいし、もしも実力行使ならやはり歴史には何らかの形で残る』

逆に言えば、パラクミの滅亡を歴史に残ってないってことだろ。歴史に残らない滅亡ってどんなのだ？

『良い点に気づいたね。この都の規模で滅亡理由がわからないってのはありえない。戦争をしていたってことは周囲に他の国はある。実際、他地域での歴史にはパラクミの話もある。その中には「ある日、パラクミが滅亡していた。理由は不明」だよ。千五百年前といえどもそれは異常。事実なら、パラクミは一昼夜にして滅亡したと同義だ』
そんなことあり得るの？

『事実起きたんだと思う。都がダンジョンになってるし、歪さも出てきてるよね。歴史が混ざるってのがおかしい。魔力体になってるのも謎。こんな不思議なことが生じるパターンはいくつか思いつくけど現実的なのは二パターンだけ。一つは竜によって滅ぼされた』
あり得るな。

国ならともかく、都くらいならあつという間に滅亡させられるだろう。

しかも、やりそうな奴が多い。

もう一つは？

『特殊魔法によるもの。鍵を握るのは、ボスのラスト一体』

「ハムラはどんなボスなんですか？」

ちようど一人が最後のボスについて尋ねた。

「住人ハムラはパラクミのあちこちを歩き回っているボスだ」

「強いですか？」

「弱い。倒そうと思えばすぐに倒せる。もちろんあなたでも」

言われた一般人はわかっていない表情だ。

「……そんなに弱いのに、どうしてボスなんですか？」

「ハムラは特殊な魔法が使えるんだ」

「特殊な魔法？」

「封印」

私を含めて誰もわからない。

封印が極めて特殊な魔法だとは私はわかるが、なぜ封印が使えるとボス扱いなのか不明だ。

他の奴らに関しては、封印魔法すら聞いたことがないという状況だ。

私もシユウから聞いてなかったらわからなかっただろう。

ガイドもまず封印魔法がとても珍しい魔法というところから説明を始めた。

その点に関しては全員の理解を得られた。

「ハムラは封印魔法を使えない」

「えっ?」、「は?」、「なんだって?」

それぞれが声を上げた。

封印魔法を自分にかけてるからだっけ?

「おっ、詳しいな」

「なぜ封印魔法を自分に? それに封印魔法が使えないなら、どうして封印が使えるとわかったんですか」

どうしてでしょうね。

「アイテムの名前からだ。ハムラを倒すと『自己封印せしハムラの一念』が手に入るからな。自己封印をしていることがわかり、封印を解けば真のボスではないかと言われている」

「封印は解けるんですか」

解けるの?」

「学者先生がアイテムを解析しているから、近いうちに解けるかもしれない」

「楽しみですね!」

本当に楽しみだな!

『その男は大切なところをはぐらかしてる。封印されたアイテムは七百年近く解析されてるんだ。なお、解析にはいつさいの進展がない』

えええ。

七百年って、ええ……。

『学者先生が七百年かけて解析できない封印魔法を使えるんだよ。紙

面で残ってるのが七百年だから、実際はもつと前だ。千年はかかってる。進展はゼロ。ボス認定されてもおかしくないでしょ』

そりやそうだけどさ。

絶望的じゃないか。

『まあね。まともによればとてつもなく難しいでしょうな』

まともによらなかつたら？

『なんとかなるかもしれない』

あ、そうか黒竜のスキルで消すつもりか？

『無理。封印より前にハムラ自体が魔力均衡崩壊で消滅する。そもそも封印魔法は、完成後に外部影響を非常に受けづらいから魔力吸収が効くかどうかすらわからない。たぶん効かないね』

そうなのね。

じゃあどうするの？

『まずはアイテムの徹底解析。可能なら解除する。封印スキルが欲しい』

最近は言わなくなったが、封印を欲しがってたな。

封印を初めとして呪いとかの特殊魔法関連スキルを私は持ってない。

『呪いとか断罪はなくても良い。癖が強すぎる。でも、封印は違う。とても欲しい。自己封印だけでもなんとかして手に入れたい。いちおう最後の手段も用意してる』

自己封印だけでいいのか。

何に使うの？

『能力プラスを振りたくないんだよね。今の身体能力でも十分高いんだけど、ごくごく稀にいる異常に強い奴との戦いが現状ではきつい。振るのは簡単なんだけど、間違いなく次の段階で日常生活ができなくなる。それを封印で抑える。強い相手するときだけ封印を解除すればいいからね』

あれ？

すごい有用じゃないか。

『封印の使用難度は高いけど、手に入りさえすれば何とかなる。手に

入りさえすればね……。ハムラがもう最後の希望だとすら思ってる』
ハムラにはがんばってもらいたいな。

「ハムラはいつごろいたんですか？」

そういえば、そもそもその話だった。

守備部隊のメイリペンズ隊長が初期の戦争まったただ中のころ。

次に警邏部隊のロハゴス隊長が戦争終了後の中初期ごろ。

この三隊を束ねる行政長官ナヴァルホスが中期の終わりごろなのかな。

それで、安全部隊のハンゼ隊長が後期。

最後にトゥレラが最終期。おそらく滅びに居合わせた。

住人ハムラはどこだ？

「最初期だな。戦争直前の時代だ」

「隊長や行政長官は時代背景や役職でわかるのですが、トゥレラとハムラはどうやって時代がわかったんですか？」

「良い質問だ。過去の冒険者や学者先生らが、彼らと関係している人や、彼ら自身がどこに行くかを地道に調査したんだ。例えば、トゥレラは彼女の診療所を訪れる患者の行動先や衣服を見ればわかる。それに戦争時代や中期の不安定期に彼女のような存在を軍が見逃すわけがない」

そりゃあな。

超上級ボス超の人間がいたら戦いになんてならない。

彼女が診療所にいること自体が、平和な時期であることの証左なのだろう。

なるほどーと頷いて、次へと進む。

『あれ、そこで終わり？ トウレラはずばりそのとおり。付け加えるなら生活区域も時代ごとに微妙な差異があるからそこでわかる。でも、ハムラはちよつと違うんだ』

行き先や、関係者でわかったんじゃないと？

『ハムラはまず見つけることが難しい。なぜか？ ダンジョン全体が活動区域だから。特定の活動区域がない。さらに、奴はぼっちだ。関係者を張って待ち伏せするという手段が取れない』

行き先はまばらで、関係者もない。

じゃあ、どうやって時代を特定したんだ。

『ずばり行き先と関係者。ちよつ、待った。怒らないでよ。これに歴史が加わるの。奴は行き先がランダムで、関係者がいないってことからある推定ができる。つまりね、奴はここが都になる前からいたんじゃないかってこと。これの裏付けが他地域の歴史書からされてる。パラクミが都になる前、ここには変わった力を持つ部族がいたらしい。その生き残りがハムラだって言われてるの。奴はこのパラクミに知り合いがない。奴が行く何もないところは、過去にいた部族の家か何かがあったところだろう、とね』

その部族はどこに行ったんだ？

『パラクミに関係者がいないところを見るに殺しつくされたんじゃない？ まあ、封印魔法とかを使える特殊魔法を使う部族が仮にあったとすれば、そうなる可能性は十分にある。もったいない話だね』

もったいないというよりは、どぎつい話に聞こえたのだが。

ガイドがハムラについて話さなかったのはそのあたりによるものかもしれない。

ガイドツアーはつつがなく終了し、翌日からさっそく攻略に移る。すでに隊長三体と司令長官は倒した。

言われていたとおり、シユウで斬ると申し訳ないくらいにあっさり倒せた。

今は塔の最上階から周囲の景色を見ている。

『見つけた』

私が景色を見ている間にシユウが、目的のボスを探してくれた。

シユウが言う方向と目標物を見つけて、どこに走ればいいかを確認する。

そのまま塔から飛び降りて、壁を走りおり、そのまま目標地点に到達した。

探すのは難しいとガイドが言っていた。その割にあつという間に見つけることができたな。

『普通に探すと難しい。見た目が他のモンスターとほぼ同じだからね。魔力量探査もほぼ役に立たない。でも、コツがある』

ほう。コツか。

広く視野を持つことか？

『馬じゃないんだから。封印魔法の痕跡を探せば良い。特殊魔法はどれも波長が独特だから、スペクトル解析すればすぐわかる』

よくわかった。

私にはわからないということだな。

『正解。次の角を右ね。——そいつだ』

角を曲がったところで、モンスターが一体だけ歩いていた。

出会い頭に斬りつける。

抵抗はない。斬られるまでまったく抵抗しなかった。

『アイテム見せて』

結晶を解除すると、木の小さな箱が出てくる。

蓋がついているので、開けてみようとするがまったく手応えがない。

『力づくではまず無理だね』

そうだな。

手が痛くなっただけだ。

『じゃあ、俺をくつつけてみて』

箱を地面に落として、シユウの先端で突く。

そのまま突き刺すつもりでやったのだが、表面でキンと弾かれた。

『いちおう黒竜と邪神様もやってみるか』

言われてやってみたのだが、箱の蓋は閉じたままだ。

これは難しそうだな。

『解析してみる』

シユウを箱につけてしばらく待ってみる。

昼飯を食べ、ときどき出てくる雑魚を蹴って倒し、復活したハムラがそのまま立ち去る。

そろそろ諦めてもらおうかと思ったところで、箱の蓋が動いた。箱を見つめると、蓋が風に煽られて落ちた。

やりやがった！

さすがだな！

『失敗した。「ド田舎のマイナー部族の封印魔法とか、チートでちよつと解析すれば余裕だろ。月並みの魔法学者どもとは違うんだよ」とか思っていた時期が俺にもありました』

ちよつと落ち込んでいる様子だった。

でも、開いてるぞ。中身は……、空だな。

『破壊トラップを作動させてしまった。解析に反応させるとかやりおるわ』

どうもチートの解析すら通用しなかったようだ。

『わかったこともある。これはね。開けようと思えば開けられる』

開いてるもんな。

『ただし、中身の破壊魔法も仕込んであつてこんな具合に中身が消えちゃう』

その破壊魔法とやらは解除できないのか。

『できる。破壊目的の魔法はそこまでこだわりがないから簡単に解ける。問題は、その下に別コードの封印魔法がかかっていることと、並列で破壊目的の魔法と解析に対するトラップがかかっていることだね。ひっかかると中身がポーン。数層とかそんな深さじゃない。数百層もある。最終的に、これの全解除を同時にやらないと中身が無事に取り出せない。これは封印の解除というより、爆弾の解体に近い』

思った以上に難しそうということはわかる。

開けられるにしても中身が壊れちゃったら開ける意味がない。

そもそも封印の解除はできるものなんだな。

封印魔法がないと解除できないと思ってたんだが。

『そんなことないね。封印の仕組み自体は他の魔法でも実現可能なんだよね。現実世界でもやられてる。箱にモノを入れて蓋を閉めて鍵をかける。これだけ。封印魔法も同じ。モノが取りたいなら、鍵をピッキングすればいいし、箱を壊してもいい』

なんか簡単な話だな。

『そうそう。対策として、箱や鍵が壊れないように頑丈にする。鍵が

開けられないように複雑にする。開けようとした奴にカウンタートラップを仕掛ける。箱自体を見つからない場所に隠す。箱の偽物を複数用意しておく。このあたりは他の魔法でもできるでしょ』
できそうな気はするな。

ダンジョンにもトラップ付きの宝箱がある。

普通の魔法でもできるなら、封印魔法はいったい何が特殊なんだ。『まず、対象を選ばない。モノが実物じゃなくてもできる。能力や存在に対しても可能』

そーいや私の力を抑えるとか言ってたもんな。

『力を抑えるなら各種デバフでもできるんだ。封印魔法を封印魔法たらしめる最大の特徴は、やはりその封印形式だね。この木箱、なんであんなに硬くて頑丈だったのかわかる？ おかしいでしょ。黒竜の魔力吸収は効かないし、邪神様のスキルすら弾くんだよ。それが今やただのぼろい木の箱。メル姐さんが指で弾くだけで消し飛ぶもろさだ。封印魔法とはいったい何か？』

答えをどうぞ。

『算数なんだ。一足す一は二みたいだね。演算魔法なんて言われるくらいだから』

ふざける？

『大真面目なんだよなあ。あまりにも真面目すぎて、逆にふざけた話に聞こえるのはもつともではある。今回の場合だと、「蓋が閉じた状態の木箱」に幾何魔法を施し数値化する。正確には行列だね。行列なんて言っても、ピンとこないだろうから数値と言わせてもらおう。その数値に、鍵となる魔法を数値化して順繰りに掛けていく。最終状態の数値を魔法に戻してから箱にたたみ込む。これが封印魔法のシンプルな仕組み』

シンプルではないな。

魔法の数値化とかできるの？

『頭の中に魔法陣を描いて、その魔法陣を全て数に置き換えるというのかな。わからないと思う。俺は想像できるけど、チート無しでの実用化はまずできない。端的に言おう。封印魔法は天才中の天才、異常

中の異常にしか使えない』

天才云々はどうでもいい。

なんで数値化した魔法を掛けると封印なんてことになるんだ？

『状態として矛盾してるから。最終状態の数値って魔法としては、何の価値もないんだ。でたらめな数値を魔法にしてみただけだからね。原則として何も起きない。でも、その最終的な数値を出す上で、掛け合わされた魔法は詠唱されたこととして扱われる。演算詠唱って奴だね。で、発動されないはずの魔法を発動するために、他の魔法が発動しようとする。問題は発動したときにどうなるか。もしも発動すると、最終的な魔法に意味が生じるんだ。たまたみ込んだ魔法群を発動すると、最終的な魔法がそれまでの魔法を全て含んだ謎の魔法としてできあがってしまう。意味のない魔法が、意味のある魔法とイコールになる。これはあり得ないぞって事で全体が待機状態になる。この状態を作り出すのが封印魔法の封印形式』

意味がわからん。

聞かなきゃ良かった。

『計算と過程は正しいのに、その結果と現象は正しくない。世界法則の歪さを利用する封印形式だね。この状態になっちゃうと外部からの干渉をほぼ受けつけなくなつて、容易には解除できないんだ。逆過程をそっくりそのままなぞるか、法則そのものを上手く壊していくか。で、さつきは破壊に失敗した。こいつは逆過程をそっくりそのままなぞるしかできなさそう』

得意のチートで逆過程をなぞっていくことはできないのか。

『できるっちゃできるけど、何の魔法が掛け合わされてるか調べた上で、逆行列計算をしないとイケないからね。時間がかかりすぎる。逆行列計算ってオーダーが三乗だからね。数層ならまだしも、数百層にいつちやうと、半端ない数値になる。そんな計算やつてられないから上手に破壊しようとしたんだけど、トラップに引っかかった』

らしいな。

これは難しそうだ。

『他にもわかったことがある。箱の中身だ。これは中身を壊す魔法か

ら推測できる』

すごいじゃん！

解除こそできてないが、進展は凄まじいな。

で、中身は何なの？

『髪の毛だらうね』

髪の毛！

……髪の毛？

髪って、頭の髪のこと？

『そう、メル姐さんにも生えてるやつ』

お前にはないな。

なんだシユウはハゲだったのか。

『ハ、ハゲちゃうわ！ 冗談はさておき、中身は髪の毛で間違いない』

髪の毛かあ。

なんか思ったのと違うな。

『誰の髪の毛かはわからない』

誰のかわかったところでどうしようもないがな。

他にわかったことはないのか？

『ある。ここまでの発見から、この封印は正しく封印の意味をもってると言える』

正しい封印の意味？

『二つ目は、中身を他者から隠すということ。二つ目は、箱に封印魔法が使われていることを他者に知らせるということ。三つ目は、封印本来の意味——中のモノが外に出ないよう、かたく閉じてふさぐこと』

中身は髪の毛だろ？

外に出たところでどうってことないんじゃないのか？

『ふつうの髪の毛ならどうってことはない。ただの思い出やら形見で片付けられる。問題なのは、ハムラが不思議な力を持つ部族の出身って推測されてるところ。もしも部族が、特殊魔法を使える奴らで構成されていて、中身の髪の毛がそいつらのだっていうのなら、間違いなく髪の毛に力が込められてる。呪いの系統だ。一度きりの短時間とは言え、髪は自らの力を分けるのにうってつけの素材だからね』

つまり、その箱の中身は呪いがかかった髪だと。

『やや違う。部族の奴らの力が呪いで込められた髪。さつきも言ったけど、この箱は一種の爆弾だね。封印を解除して開けたらとんでもないことになる。たとえば、一夜で都を滅ぼして、ダンジョンにしてみまうとかね』

……やばいな。

『今、素晴らしい力だなあ、とか思わなかった？』
思った。

ダンジョンにするとかハッピーすぎるぞ。

どンドンやってくれと思ったな。反省はしてない。正直な気持ちだ。

『まあ、そこは今さら言っても仕方ない。都の終焉がわかったのは良いことだね』

そうだな。

ハムラが箱の封印を解除して街を滅ぼしたわけだ。

これで長年の真のボス議論に決着が付いたな。

『いや、まだ付いてない。箱の封印は解除されただろうけど、ハムラは解除してない。時代が合わない。彼の種族は人間で、都の最初期ですでに青年。最終期には百歳を間違いないく越えてる。死んでるでしょ』
生きてたかもしれないだろ。

最後の力を振り絞って封印を解除したのかも。

『それも有り得ない。奴は自らの封印魔法すら封印してた。その封印は解除できない。アイテム名が「自己封印せしハムラの一念」だ。都を滅ぼしたい思いはあつただろうけど、それを抑えていたのが名前からもわかる。自己封印もその結果でしょう』

じゃあ、誰が封印を解除したの？

『それが新しい問題だ。俺のチート解析ですら解除できない封印を解いたやつがいる』

何か新しいことがわかれば、新しい謎が増える。

こういうのって嫌いだ。全部が一気に解決すればいいのに。

『世界は複雑なんだ。快刀乱麻を断つようにはいかない。一つずつ問

題を解決することが、ゴールに繋がるの』

はあ、めんどくさ。

それで、この後はどうするんだ？

『トウレラを訪ねるかなあ』

戦いはなしで頼む。

昨日、ツアーで見たとき逃げたくなかった。

あれは挑んじゃいけない奴だ。

おとなしく診療のお手伝いイベントで勲章をもらうことにしよう。

『戦っちゃいけない点に関しては同意だね。俺をジツと見てたからね。噂以上に強いよ。それと勲章をもらいに行くわけじゃない。話をしに行くんだ』

何の話だ？

『特殊魔法は遺伝しやすい。ハムラから特殊魔法を引き継いだ子か孫がどこかにいるはず。それ以外でこれを解ける奴は考えられない。この都で多くの人を診てて、見つける能力が異常に高い彼女なら知ってる可能性がある』

ハムラの子か孫が封印を解除したってことか？

『そうだね。あの箱がどれだけやばいものだったかの自覚はおそらくないはず。才能を引き継いでしまった子孫は、難問パズルを解く感覚で封印を解いてしまった』

その結果がこのダンジョンか。

感謝するしかないな。

『肝心なのは、その子孫がこの事態を受け入れているかだね。メル姐さんには慶事でも、他大多数にとっては大惨事だ。その子にまともな精神があるなら、きつと責任を感じているんじゃないかな。モンスタ―になった今も、都の人たちからの追及におびえて、誰の目も届かないところに隠れているかもしれない。おそろくまだ、誰もその子孫を見つけていない。何が言いたいかわかる？』

まだ見つかっていない存在——すなわち、パラクミの真のボスだと？

『あり得ない話じゃない。うん。そうするとトウレラに合う前に、ハ

ムラの確保を先にするか。トゥレラのお手伝いイベントフラグが立ってるから潰さないとな』

ハムラを確保するのはなぜだ？

『ハムラが街を彷徨ってるのは、部族の奴らが居た場所を巡ってるからと考えてた。でも、さっきの話が正しいならちよつと違いそうだよね。ハムラは、封印解除した子孫を探してるんじゃない？ 探しだしてどうするかは、ここではおことう。ただ、それなら俺達と目的は同じはず。メル姐さんは真のボスを見つけられる。ハムラは子孫を見つげられる。俺もあわよくば封印スキルが手に入る。悪いことは何も無い』

素晴らしいな。

さっそく行くことにしよう。

『あらかじめ言つとくけど、真のボスは極限級の強さがあると考えといて』

は？

隠れたガキを探し出すだけじゃないの？

探すのは難しそうだが、強いとかわかるのか？

『バツカ。箱の封印を解けるだけの封印魔法と、解いた箱の中身——各種特殊魔法を背負ったボスだよ。もつと具体的に言えば、トゥレラのいたこの街を、トゥレラも含めて一夜で頽廃させる力があるボスだ。弱いわけがない』

普通にやばくないか？

勝てるの？ トウレラにすら勝てないと思うんだが。

『相性の問題があるからね。トゥレラは特殊魔法には弱いと思う。まあ、特殊魔法に強い奴なんてまずいない。俺でも呪いと他少しに耐性をつけるのがせいぜいだ。そんなわけで、今回はパーティーを組んで挑むことにしよう。一本の矢ではたやすく折れるが、三本束ねれば云々かんぬん』

パーティー？

誰と組むんだ？ 昨日のガイド？

『そんなわけないでしょ……。特殊魔法に詳しい奴と、チートを付与

したら特殊魔法に耐えられそうな奴だよ』

思い浮かんだ奴が二人、もとい二体いた。

一体は不安しかなく、もう一体は恐怖しかない。

トウレラの診療所にやってきた。

ハムラも一緒である。わずかな抵抗を見せたので、腕に抱えて強制連行した。

言葉こそわからないが、さすがのトウレラも困惑していた。

とりあえず診療の待合で待たされる。診療の客が帰るまで待てということだろう。

他のモンスターどもが、帰ったところでようやく部屋に呼ばれる。

ちなみに腕は良いらしい。特に整形の腕は超一流で、人間が訪れることもあるとか。

狭い部屋に、私とハムラ、それにトウレラがいる。

先ほどシユウと話したことを、シユウの伝達込みでトウレラに話す。

他のモンスターはともかく、トウレラは話すことすらできないが、言葉は伝わるらしい。

トウレラは何も言わず私の話を最後まで聴き、確認するかのようハムラと音のない口パク会話を始める。

ハムラは最初に驚いた様子で、私を見つめ、その後からぼつりぼつりと話している……ように見える。

話してくれてはいるようだが、私には何を言ってるのかさっぱりわからない。

話すごとに彼の周囲の空気がトーンダウンしていくのはわかった。ある程度、話を聞くとトウレラが立ち上がり、ハムラの正面に立つた。

塞ぎ込んでいるハムラに何か声をかけたようである。

ハムラが顔を上げたところで、トウレラが彼の頬を張った。

破裂するようなすごい音がした。

しかも、一発じゃない。右を張った後で、左からまた張った。

『手加減はしてる。音はすごいけど痛みはあまりないはず』

そりゃ手加減はしてるだろうが、なんで張ったんだ。

『見た感じだとハムラが「僕が封印の箱なんて残してたからこんなことになった。僕のせいだ。子孫にも酷なことをさせてしまった。僕のせいなんだ」って自分を責めて陰鬱になってたところで、トウレラが頬を叩いて活を入れたんでしよう』

解説どうも。

効果はあったようだな。

下を向いていた顔が、正面を向いたぞ。

でも、なぜ二発。

『一発だけだと駄目だった。一発目で思考が混乱したところへの二発目で混乱と陰鬱さを消した。彼女なりの治療法じゃないかな』

荒療治すぎない？

……効果があるならいいか。

ハムラが席を立ち、トウレラも席を立った。

私もあわせて立ち上がり、外に出る。

こうしてチート、自己封印、闘神という奇妙なパーティーができあがった。

『ここまで意思の疎通が難しいパーティーは、世界で初めてじゃないかな』

目的が同じなら意志の疎通など、もはや必要ない。

それぞれがやるべきことをやるだけだ。

またしても行政長官のいる塔の最上階にやってきた。

パーティーリングで登録をしたが、やはり会話はできないようだ。

チートの力で強化されたトウレラが、塔から都市の様子を四方八方と観察している。

ちなみにこのボスである行政長官殿は、明らかにトウレラを見て見ぬ振りをしていた。

通常だと塔の中に入れば、モンスターが襲ってくるはずなのだが、トウレラを見るや否やどいつもこいつも目と体を逸らしてしまった。

目を逸らすどころか逃げ出した奴すらいる。

『こいつ、少なくとも一回はここに殴り込みをしたんだと思う』
わかる気がする。

私も似たようなことを過去にしたときは、周囲の反応がこんなのだった。

『パーティー登録してわかったんだけど、トウレラは雲竜の関係者だね。』『流派雲竜不到』『免許皆伝』なんてスキルがある』

雲竜なんて会ったことないぞ。

……ないよな？

『直接はないけど、何度か名前を聞いたり見たりはしたね。あちこちで武術を伝えてるんでしよう。関係者らしきのが他の世界にもいた。氣とかいう、よくわからん力を使う奴だ』

まあ、竜だからな。

何でもありだろ。

『一方のハムラはやっぱり特殊魔法部族っぽい。「サマノス集落の生き残り」とかいうスキルがある』

なんか暗い名前だな。

効果は？

『解説文が「彼はただ一人生き残ってしまった」のみ。他には何も書いてない』

解説が不吉だ。

連れてきたのはいいけど、戦えるのか？

『自己封印が解除できないから戦えないよ』

いなくても良いんじゃないの。

極限級ボスの相手が務まるとは思えないぞ。

『やられても別に良い。復活するからね。ハムラは戦闘じゃなくて、イベント用のキーパーソンという役割だから。そもそも、ハムラはボスの標的にならないんじゃないかと思ってるけど、お、見つけたらしい』

トウレラがこっちを向いて、手招きしてくる。

行こうと思ったら、体が勝手に動いた。トウレラの方へ体が引き寄

せられる。

……なんだこれ、魔法か？

『いや、魔法じゃない。術技に近いけど、魔力の消費も変換もないぞ。なんだこれ？』

シユウでもわからないならお手上げだな。

とりあえず、トゥレラが指さすところを見る。

見たのだがさっぱりわからない。どこを見れば良いんだ？

『……やべえ。わからん。どのフィルターをかけても、何もおかしいところが出てこない』

お手上げだな。

もう案内してもらおう。

聞こえていたようで、トゥレラがハムラの首根っこを掴んで塔から飛び降りた。

私もそれに続いて、塔から飛び降りる。

地上に降りて、トゥレラの後を追う。彼女が足を止めたのは人通りの多い区画だった。

周囲にも建物が建ち並び、前後左右で元住人の動きが見られる。

私にはそう感じるが、シユウにはどうだろうか。

『なるほど、フィルターには出てこないけど、これはおかしいね』
どこが？

『人通りは多いけど、この道のこの地点をまたぐ元住人が異常に少ない。それとここを中心にして、両隣の区画の建物が、他の区画の建物と比較してやや長い』

建物がどうこうはよくわからないが、ここを分け目にして人の移動が少ない気がする。

まるで、ここに見えない壁があるようだ。

『俺も見たことないんだけど、特殊魔法に「縫合」ってのがあらしい。空間を縫い合わせるのかな。つまり、ここには本来別の区画があって、両隣の区画をむりやり引っ張ってつなぎ合わせてる。それによって、この下って言うのが正しいかわからんけど、その区画を隠してるんじゃないかな』

そんなことできるの？

シユウは答えない。知らないことは口をつぐむやつだ。

トウレラがハムラに何か話しかけると、彼は首を縦に振った。

『空間フィルターを通り抜けるほどの空間操作魔法か。恐ろしいな』

恐ろしいのはわかるが、これはどうやって元に戻すんだ。

私が尋ねると、トウレラが私を引き寄せ、ここを斬れというジェスチャーをした。

言われたとおりに私がシユウを振るうとトウレラが空間に片手を突っ込んだ。

彼女の指が、空中で消えている。

『うわ、すっげ……。空間にわずかな隙間を作らせて、手でこじ開ける。力業の極致だ。指の下に俺を刺してみて』

言われたとおりにトウレラの指の下にシユウを刺す。

何かブツリと切れた感触があった。

トウレラがシユウの横にもう片方の手を差し込む。

建て付けの悪い扉を開くように、両腕を開いた。

先ほどまで、私のすぐ隣を歩いていた元住人が、急激に遠のいていく。

遠のいていく街並みと私たちの間に、新たな道と建物が現れた。

『左側の三件目にいるね』

私たちはその建物にむかって歩く。

家の中を窺うが、人のいる気配はない。

『奥』

誰もいないガランとした家の中を三人で進む。

奥の小さな部屋のその隅に、小さな背中が見えていた。

ハムラが一步前に出て、何かを呟いた様子だった。

声をかけられた小さな背中がビクリと震える。

ハムラがゆっくりと近づき、その足を急に止めた。

なぜ足を止めたのかはわからないが、すべきことはすぐにわかった。

逃げないといけない。

ここにいては駄目だという感覚が襲いかかってきた。ハムラに背を向けてそのまま家の外へ走る。

私が外に出ると、すぐにトウレラも後を追うように出てきた。彼女の片手にはハムラが掴まれている。

『さすがの逃げ足。あと少し遅かったら巻き込まれてたね』

どこかから獣の鳴き声が聞こえた。

この都にも犬やら猫はいるが、どれもモンスターの一部分だ。

何が言いたいかといえば、元住人が喋らないように、彼らが鳴くことはない。

この都は多くの元住人がいれど、基本的に静穏に包まれている。その静穏を引き千切るような獣の鳴き声だ。

聞こえてくる鳴き声は一種類じゃない。

犬や鳥に始まり、他にも数種類の鳴き声が混じっている。

『出てくるよ。もっと離れていた方が良い』

言われたように離れると、建物の壁を突き破られた。

壁が崩れ、土煙の中から出てきたのは継ぎ接ぎだらけの犬だった。

体はこの都のモンスターと同じ魔力体だとわかる。

しかし、どう見ても違うのは顔だ。

犬の顔部分に生身の人間の顔が貼り付いている。

その顔は怒りに歪み、目から血の涙を流していた。

『あの顔は滅ぼされたサマノス集落の人だろうね。箱から解放された呪いが、周囲の獣に取り憑いた。その獣たちがパラクミの住人を一夜で殲滅し、ダンジョンという歪な都を現世に残した』

おもしろくなってきたな。

なぜだろう。さっきは逃げないといけなさと感じたが、この犬からは先ほどの気配を感じない。

『出てきた獣が四方に散らばったからでしょう。まとめて相手は出来ないけどばらけてくれるならこっちとしては助かる』

そうだな。楽になった。

三人でかたまつて、ゆっくり各個撃破で行くでしょう。

『それはやめた方が良い』

『どういうことだ？』

『時間制限がある。観測したところ出てきた獣は三十三体。彼らの目的はかつてと同じ——パラクミ住人の殲滅だよ。今もモンスターになった住人達を襲ってる。全てを殲滅したら消えるだろう』

あれま。

でも、こつちにはトウレラがいるから大丈夫じゃないの。

『トウレラが最後に残るとしても、こいつらが集まると倒せない可能性が高い。二手に分かれて倒していくのが良いと思う。幸いなことに、メル姐さんとハムラはモンスターの攻撃対象外だ。こいつらはパラクミの住人を優先して狙ってる』

さつきから犬がトウレラばかりを攻撃してるのはそれでか。

『魔力体なのもありがたい。襲つてるところを横から攻撃すりやなんとかなる。やられる前にやれば良い。犬を横から切つて』

トウレラと戦っていた犬を横から貫いて倒す。

あのトウレラが苦戦するとはすごい犬だな。

『縫合魔法つてやつだね。空間を自在に操つて、位置を惑わせた。トウレラはハムラから特殊魔法の効果を聞いて戦つて。こいつらは初見殺しのオンパレードだからね』

犬を倒したところで、私は二人と別れて獣たちを狩っていくことにした。

そこそこ倒したのだが、今のところ苦戦はない。

やはり私を標的にしてこないようだ。

『いやあ、すごいね！ 特殊魔法の見本市だよ！ 呪怨、縫合、断罪、虚無、崩壊、啓示、泰然、羅刹！ この短時間で名前だけしか知らなかった魔法を、三つもデータ採取できた！ 名前すら知らないのもあつたよ！ トウレラ側も行つてみたいなあ』

恍惚としているところ悪いんだが、次の標的を教えてください。

見えたモンスターを連鎖的に倒していったが、周囲にはいなくなつてしまった。

『そうだね。速く倒さないと経験値泥棒に倒されてしまう。虚飾や憑依に、まだ見たことがない奴だっているかもしれない。急ごう！』

獣をまたしても倒していき、トウレラたちと再会したのは塔の入口だった。

「どうやら残りは一体で、ここの上にいるようだ。」

『あっ！』

「どうしたの？」

シユウが答えるよりも先にトウレラが動いた。

塔が上から消え始め、トウレラが手を挙げたところで止まる。

『速く塔に入って。縫合で閉じられるよ』

慌ててハムラを連れ塔へ入る。

後ろを見ると、空がねじ曲がり地上にくっついていて、空と地上の間にトウレラの指が見える。

走り寄るが、指はそのまま消え去ってしまった。

『二重に縫合しやがった。先に行こう。これ以上縫い合わされたら対処できない』

ハムラと一緒に塔を上がる。

中にいたモンスターはもう残っていない。

最上階にいたのは行政長官ではなく、小さな背中と大きめの犬だった。

広い部屋の隅で丸まっている少女の脇に人面犬が寄り添っている。

『犬を斬って。急いで』

景色が歪みかけたところで、人面犬に近づき切り捨てる。

残ったのは小さな背中だけだ。

『む』

なに？

切り捨てた方が良いのか。

『やってみてもいいけど、おそろく意味がない』

「どういうことかはシユウを振るってからわかった。」

小さな背中中の表面をシユウが擦っただけで、倒すどころか傷すら付けない。

「これってもしかして——。」

『うん。自分を封印しちゃた』

どうするんだこれ。

『とりあえず、解析してみるか。——げっ、あの箱と同じ封印だ、いや違う。さらに複雑にしてやがる』

お前じゃ解けない、と。

『二年、いや、一年ほどここにいてください。真の封印解除つてやつを見せせてやりませすよ』

長い。却下。

なんか良い方法ないのか。

『ある。これなら半日で済む』

いいじゃん。だいたい短い。

どうするんだ？

『俺がハムラの自己封印を解除する。そんでもって、ハムラがこの子の封印を解く』

ハムラの封印は解けるのか？

『見た感じ自己封印は箱ほど複雑じゃないね。俺の華麗なる封印解除を見せてやんよ！』

真のボスの封印を解除できない時点でもう華麗じゃないな。

まだか？

『……あとちよつと』

半日どころか一日が経ってしまった。

塔の周りの空間縫合はすでにトゥレラが引き千切った。

そのトゥレラは、この封印状態を把握し、進展がないことを悟り診療所に帰った。

行政長官も蘇ったが、トゥレラが怖いのか私たちのことも見て見ぬ振りを決め込んでいる。

寝っ転がっているとシュウが叫んだ。

『解けた！』

やっとか。

『どうよ？ 見違えたでしょ』

……何が？

お前もハムラも何の変化もないんだけど。変化のないハムラが、スタスタと封印された子供のところへ歩み寄る。

『よっしゃ。いったん帰ろうか』

え、ハムラとガキは？

『あのガキの封印って、俺が解除した自己封印とは比べものにならない凶悪な封印だよ。今日、明日で、解除なんて——』

シユウの声が止まった。

少し待ったが続く言葉はない。

ハムラの方を見ると、子供が動いている。

え、もう封印が解けたのか。

『天才はいる』

封印が解けた驚きよりも、シユウの声に滅多に含まれない感情が滲んでいたことが印象に残った。

これ以上は何も言いたくないようだ。

ハムラが子供を抱きしめて、落ち着かせている。

子供が泣いているようだが特に何かが起きるわけではない。

どちらかといえば、いつの間にか隣に現れていたトウレラが気がかりなくらいだ。

翌日である。

ダンジョンから戻って報告やらなんやらを済ませ、一晩ゆつくり休んだ。

今日もまたダンジョンへ行き、例の子供を見に行く。

昨日は見送るだけで終わったからな。

例の子供はトウレラの診療所にいた。

受付の手伝いをしている。

『まあ、過去のことを考えるとそれがいいでしょうな。トウレラの庇護を受けられるから』

それはそうか。

しかし、真のボスと闘神が一緒だと戦いづらいな。

『真のボスう？ あのガキがあ？』

あの子が真のボスだったろ。

また特殊魔法の獣とかを呼び出してもらえないかな。

『あの子はただ隠れてただけ。それと封印魔法もそこそこ使えるね。でも、真のボスじゃないよ』

え、じゃあ誰なの？

『昨日の封印を解いたやりとりを見て、満場一致異論無しスタンディングオベーション満漢全席衆議一決でハムラが真のボス』

昨日のやりとりって、ハムラがお前の解けなかった封印を一瞬で解いて、それから抱擁し合ってただろ。

あと、なんか変なの混ざってなかった？

『間が抜けてる。ハムラが子供の封印を解いた直後、その子供が周囲に封印魔法を発動させまくった。その無差別封印をハムラが一瞬で全解除した。抱擁はその後。トウレラも横で足を止めてたでしょ。ハムラの力がやばくて近づけなかったんだ。あの子供も大概だけど、封印を解いたハムラは次元が違う。歩く量子演算器だよ。あいつの目には世界がどう見えてるんだ』

トウレラが近づけなかった？

『もつと言えば、チートで強化されたトウレラが近づけなかった。速さと力が桁違いだから、やろうと思えばやれるだろうけど、近づくの躊躇わせる力をハムラは持っている』

トウレラは逃げようと感じたが、昨日のハムラはまったく怖さを感じなかったぞ。

『チートでパーティ組んでるからね。攻撃を無効化できるってのが一つ。それに本人に敵意が皆無だからでしょう』

そういえば、戦おうとする気配がまったくなかったな。

自己封印を解除した後もずっと大人しかった。

『特殊魔法って、その属性と持ち主の性質がセットで決まってるんだ。呪怨は根に持つタイプで、断罪は二分的思考とかってね。封印は感情や行動の抑制だね。特にあれだけ封印の才能があると、その抑制は凄

まじいはず。現に集落を壊滅されても自己封印して感情を抑えてるくらいだから』

すごいというより不自由さを感じるな。

もつと感情的になったほうが、楽しいだろうに。

そのハムラはどこに行ったんだ？

『消えた。真のボスらしく姿をくらませた』

は？

消えた？

『見えるところにはいないよ。探してた子孫も見つかって、トウレラに庇護をしてもらえることになったからね。この都にいる必要がない』

じゃあ、奴はどこに行ったの？

『隠れてた子供と同じだね。縫合をうまく使って、使わない区画に籠もった。彼の同郷人らと一緒にね』

それって、あの獣たち？

『そうなる。隔離された空間で、彼らの怒りも封印して、永い時間を穏やかに過ごすんでしょう』

じゃあ、真のボスとは戦えないのか。

『そもそも空間に入れない。トウレラも手伝ってくれないだろうから』

なんと……、私はいったい何のために真のボスを探したのか。

『真のボスがはつきりしたからいいじゃない。それにだ。置き土産と言わんばかりに、封印スキルと各種特殊魔法のデータも手に入った。真のボスと戦えないマイナスよりも、プラスの方が遙かに大きいよ』

お前にとつてはな。

私にはあんまり価値がない。

『そもそも現状じゃ絶対に勝てない。こつちの封印スキルよりもあつちの封印の方が確実に上だから完封負けだよ。加えて、他の特殊魔法使いの仲間も、メル姐さん単体を狙ってくるからもう本当にどうしようもない。時空震で強制的に空間を繋げてもいいんだけど、繋げた瞬間に逃げが発動するだろうね』

うーん。

それはそうかもしれない。

『ようやく得られた彼らの平穩を脅かすべきじゃない、と俺は思うがね』

それもそうかも。

とりあえず真のボス問題が明らかになったからよしとするか。

『せやせや。まあ、真のボス問題が明らかになって、また新しい問題が出ただけどね』

聞きたくないけど言ってみろ。

『現ダンジョンから歴史がちゃんと裏打ちされた。原住民である特殊部族の奴らの執念がパラクミの都を壊滅させた。元を辿れば、その原住民らはパラクミに対して凄まじい怒りを抱いていた。なぜか？ パラクミの住人たちが、かつてあの集落を壊滅させたから』
そうなるな。

ガイドのときにも言ってたじゃん。

『この普通水準に毛が生えた程度の力しかないパラクミ住人達が、どうやってあの村を壊滅させたのか？ 物量で正面から攻めても返り討ち。不意打ちするにも啓示魔法の使い手がいたから後手には回らない。周囲の補給線を切つてからの内部崩壊はあり得るけど、自活できてそうだから決定打にはなるか怪しい』

前提が違うんじゃないか。

実はパラクミの奴ら以外が壊滅させたとか。

『あり得る。でも、昨日見た彼らの怒りは本物だった。間違いはなさそう』

顔が怒りで歪んでたもんな。

前提は正しそうだ。

『そうなると部族の中に裏切り者がいたつてのが一番あり得るところでしょうな。特殊魔法で裏切る性質を持つ奴だ』

特殊魔法の人たちは性格の一覧かなにかなの。

『ずばり叛逆魔法だね。相手との力量差があるほど、力が発揮できる特殊魔法……らしい』

即答だけど伝聞なのか。

じゃあ、そいつが犯人なんじゃないの。

『可能性は極めて高い。ハムラからもらったデータの一覧に名前はあるけど、詳しいデータが欠けてる。人面獣の中にもおそろくない』
もう決定じゃん。

その使い手はどこに行ったんだ？

『さあ？。もしかしたら子孫がパラクミにいたのかもしれない。もしもいたのなら、パラクミを裏切る可能性も高い。どうして封印魔法の子孫が、あの箱を開けるに至ったのか。そのあたりにも関与しているかもね』

考えすぎじゃないか。

それより次のダンジョンのことを考えよう。

4. スコタデイ霊園を統べる者

次はやはり北だよな。

ウリ山系に沿って北上し、タリエ深林地帯に行く。

その後はウリ山系とディアドン川に沿って南西へ。超上級の星雲原野ガラクスィアスに挑む流れだな。

『いや、まっすぐ西に進むのはどう？ サブマの街の近くにスコタデイ霊園がある』

スコタデイ霊園はスキップするって決めたら。

お前も行きたくないって言ったじゃないか。行った後がめんどくさい、と。

スコタデイ霊園の北は山に、西は川に、南は沼地に囲まれており行き止まりだ。

ダンジョンを攻略した後はまた元の道に戻らないといけない。

しかも初級でアンデッド系の霊園ダンジョンだろ。

中級以上ならまだしも、初級ならだいたいどこも似たようなものだ。

『あのときは、行くのが面倒だし、どうせ何も無いと思ってたんだ。ところがどっこい。とある情報筋から手に入れた話だと、今、スコタ

『デイ霊園がホットなんだ』

ほう、詳しく聞こうか。

簡潔に頼む。

『リッチが現れた』

何か思ったよりもつまらん話だな。

リッチってあれだろ。魔法を使うアンデッドだろ。

別に珍しくもない。リッチなんてあちこちにいるでしょ。

『いないよ……。間違いなく別のモンスターと混同してる。メル姐さんが考えてるのは、メイジスケルトンかマミーあたりでしょう』

ふーん。

で、リッチが出るとどうなるの。

あまり魅力を感じないぞ。せいぜい初級でしょ。

『いや、中級に上げるそうだよ。これは確定情報。というより、この情報から遡ってリッチのことを知った』

リッチが出ただけで中級に上がるのか。

『そりゃあねえ。スケルトンやマミーなんかとは格が違うから。リッチになるのってめっちゃ難しいんだよ』

そんなもんなのか。

どれも似たようなものだと思ってた。

『全然違う。さらに気になる点がある。なんとそのリッチ。あまり見ない魔法を使うんだって』

あまり見ない魔法？

お前が前に言ってたコンパクト草とか、流てなんだかかんだかとかいうやつか。

『魂魄操術と流転輪回ね。そんなもん使ってきたら一気に超上級いつちやうよ。闇魔法を使うらしい』

地味だな。

闇魔法ってあれでしょ。

斥候とか暗殺業の人が使う、暗闇を操作したりするやつでしょ。

『それ、光魔法や……。光を屈折させてるだけ』
違うのか。ああ、それならあれか。

高難易度のボスとかが使う暗闇に引き寄せて押しつぶすやつだ。

『それは重量の操作。もしくは純粹にベクトル操作。闇魔法はそんな高難度の魔法じゃない』

だが、闇魔法なんて使ってる奴を見たことがないぞ。

『俺も滅多に見ない。たまにいるけど、比較的まともな形になってるのは二回だけかな』

そのうちの一回はどうせあいつだろ。

金髪のエルフくらいしか使えない魔法なんじゃない。

『アイラたんも闇魔法は使えなかった』

あいつに使えない魔法があるのか！

闇魔法のすごさをようやく実感できた気がする。

『誤解してる。アイラたんは発動できる。でも、使うことはできない。闇魔法を理解できない』

よくわからんけど、めちゃくちゃ難しい魔法ってことじゃないの。

それか、素質がいるってことでしょ。今回の特殊魔法の封印とか呪いみたいなの。

『いや、まったく。誰でも発動できる。詠唱すればメル姐さんでも発動できるよ』

え、ほんとに？

『うん。ちよつとやってみようか』

わあい。

とても嬉しいから、しばらく「くん」付けで名を呼んでやろう。

『おおお、そんなに喜んでくれるとは。よし、それなら高位をやってみよう。俺に続けて詠唱してね』

いきなり高位魔法か！

なんだか緊張してきた。魔力が足りるかな。

『他なら無理だけど、闇なら高位が一番やりやすい。じゃあ始めようか』

シユウが一拍おいてから詠唱を始める。

<我が暗きは地の淵にあり、世の昏きは天の淵にあり――>
シユウの詠唱に遅れて、私も言の葉を紡ぐ。

体から徐々に力が抜けていき、魔法が発動されるのだなと感じた。
………感じたのだが、詠唱からしばらく経つても何もおきない。

『おきてる。発動されてる』

発動されたというのは、なんか疲れたからわかる。

でも、何も効果が出てないでしょ。

もしかしてバフやらデバフ、耐性とかがつくのか。

『違うよ』

あ、わかった。

邪神様みたいに姿が変わってるんだろ。

『いや、相変わらずとぼけた顔のままだよ』

シウウくんは、私を苛つかせる天才だなあ。

もういい。

ネタばらしをしてくれ。

闇魔法とはけつきよくななんだ。

『闇魔法は闇を操る魔法だよ』

なんだ、喧嘩を売っていたのか。

くん付けはこれまで。ここからは戦争だ。

『いやいや、これが一番正しく、簡潔で、明確な説明。火の魔法が火を操り、水の魔法が水を操るように、闇の魔法は闇を操るの』

でも、何も起きてないでしょ。

『火とは何か、水が何か、風が、光が、土がってのはわざわざ口で説明するまでもないよね。みんなそれが何かを五感と経験で理解してる。正しい理解かは置いておくとしてね。——それでは、ここでクエスチョンです。メル姐さんも大好きな闇雲の行動、無闇な発言。このどちらが闇がついています。さて、魔法で言うところの「闇」とはいつたいなんでしょう?』

闇って、光の対義語というか。

ほら私が日の光を遮って、こうやって暗いところができる。

『それは影。さつきも言った。魔法的な意味でも光の対義は闇より影が強い』

光がないところを闇っていうだろ。

『言うね。暗闇とか暗黒とか。でもね。それはただの暗いところ。もしくは今言った影。光を屈折させれば割と簡単に作れる。魔法で言う闇は暗闇とは違う』

闇ってほら……邪悪な感じがする。

『ボツシュート。それは「正義の反対は悪。正義が光っぽいから悪は闇だよ」っていう印象論。それか道徳的な話か』

うーん、それなら何もないって状態かな。

『「何もない」には既に虚無魔法っていう定義がついてる。特殊魔法だし、そもそも定義が間違ってるんだけど、ここでは説明はしない』
よくわからないな。

『うん、それが闇の第一段階としては良いね。「よくわからん」ってのが闇。本当はもつと適切な言葉があるけど、言っても余計よくわからなくなる。まあ、その「よくわからん」を正しく理解していくと闇魔法が使えるようになるんだよ』

うーむ、わかるようなわからんような。

なんだかもやもやするな……おっ？ お、おおっ！。

目の前に灰色がかかった雲が急に現れた。

『ああ、これこれ。「よくわからん」って思いを霧か雲みたいなものとして連想したでしょ。あるとは思ってたけど、やっぱり闇への素養が高いね』

私が闇魔法に抱いた、よくわからないぼんやりとした印象は霧のようなものだと感じた。

その感じた心象が、まさに目に見えて現れている。

素養があるとは嬉しいな。

……あれ、これ私がよくわからんって言われてるのか。

『まあ、……ここまでならできる人はそこそこいる。じゃあ次のステップにいこうか』

よし、こう。

『とりあえずだ。「おめでとう、メル姐さん。それが闇魔法なんだ』
ん？

そりやどうも。

これが闇魔……。

あれ、雲が消えたぞ。

『はい、残念。闇魔法に誤った理解を示したから消えた。わかったよ
うでやっぱりよくわからないから闇魔法の体裁が保てるの。よくわ
からんのにわかった気になると闇魔法は使えない。闇魔法はね、だい
たいこの二種類。よくわからんものをよくわからんまま使い続ける
か。発動できるだけで、よくわからないから使わないか』

……闇魔法って、その、強いのか？

『よくわからんものを、よくわからんほどに膨らませて、なお使い続け
られるなら強い。見た目と効果がバラバラでよくわからんことにな
る。どう見ても火の玉なのに当たると凍るとか。見た目からは想像
できない、よくわからん威力になつてることもある。よくわからん
だけに対処もよくわからんことが多い。さらに、闇魔法最大の特徴と
してメル姐さんが闇高位魔法が使えることからわかるように上位
の魔力効率がとても良い。超低燃費。まあ、低位になるほど消費が増
えるんだけどね。ただ、最大の問題があつて、この状態はまともな精
神じゃ続けられないんだ。敵も味方もよくわからん混乱状態でのみ
使用に堪える。敵と味方の認識ができないからパーティーには向か
ないし、ソロだと殲滅か自滅の二択しかない』

よくわからん説明だな。

でも、よくわからん状態でかなり強いなら、完璧に理解して使うと
恐ろしく強いつてことだな。

『完璧な理解つてのが本質を指すなら、強くないでしょうな。俺も完
璧に理解してる奴を観測したことがないけど、はつきり言える——真
に闇を理解した者。すなわち本質に達した者が、強くなることはあり
得ない』

ええ……、よくわからん状態で使うと強いのに、完璧に理解すると
弱くなるの。

『弱いわけじゃない。強くなりえないの。戦いで勝つとか負けるつて
いう次元にはいないからね。ただ、人にしろモンスターにしろ、よく

わからんものを戦闘で使い続けること自体がもうすでに、闇の本質的理解を手放してると言える』

はあ、じゃあ、闇魔法の完璧な使い手がいても恐れることはないんだな。

『違う。闇魔法の完璧な使い手は恐れ、畏れ、恐れ……どれだ。全部か。とにかくおそれることだ』

よくわからん答えだ。

『ただね。今回のリッチは闇の本質じゃなくて、真価を發揮していくタイプ。こっちは普通に強いだろうね。で、俺はそんな闇魔法を使う奴に心あたりがある。最近になって、そいつは死んだとされてる。しかも、死に場所がスコタディ霊園』

じゃあ、そいつがリッチじゃないの？

『流れと時系列は整合してる。でも、大きな疑問が残る。どうやってリッチになったのかだ。やはりギルドもリッチが誰かって認否してない。まだ倒してないからってのが一つなんだけど、さっきも言ったように、リッチは簡単になれるものじゃないんだよ。他のアンデッドは成り下がるものだけど、リッチは成り上がるものだ。そいつがリッチになるとは、常識的にも論理的にも考えづらい。俺ですら首をかしげるレベル』

ふむ、ちよつとおもしろくなってきたな。

行ってみるか。

『俺も非常に興味がある。クリアした後は、そのまま西に突き進めれば良い。今はディアトン川が比較的穏やかな時期だから、無理矢理渡れば星雲原野ガラクスィアスにたどり着く。その後で北東に向かえばいいね』

……完璧じゃないか。

最初からその流れで良かったでしょ。

『ダンジョンに行くのが面倒だから言わなかった』

ほお、まあ良い。

目標はスコタディ霊園。

リッチの討伐だ。

誰かに倒される前に私たちで倒すとしよう。

5. 星雲原野ガラクスイアスで黒い穴を見た
スコタデイ霊園でリッチを倒し、ディアトン川を越え、ついに目的の場所へたどり着いた。

超上級ダンジョン——星雲原野ガラクスイアス。
一歩踏み込めば、昼でも空が暗闇に変わる。

『この周辺は異常だね』
そうだな。

こんなふうに空が夜に変わるダンジョンなんて珍しい。
さすが超上級といったところだ。

『いや、このダンジョンじゃなくて、この周辺を含めたもつと広い地域だよ。南のヘイデン・ファ・クランク集合住宅、東の廃頹の都パラクミ、リッチが出たスコタデイ霊園。それにここ——星雲原野ガラクスイアスか。ちよつと異常なダンジョンがそろいすぎてる』

私にとつては嬉しい限りだ。

今さらなんだが、スコタデイ霊園でリッチと話をしたが、お前は聞きたいと話していたことを聞いてなかったよな。

『どうやってリッチになったのか、絶対聞かなくちゃ！』つて挑む前まで息巻いてたのに変なアドバイスだけで終わってしまったら。

やっぱりあいつは未練を残して死んでしまったからリッチになったのか。超上級を目指してたっぽいもんな。

『もしそうなら、上級ダンジョンはリッチで溢れてるよね』
すごい乾いた声で返された。これは遠回しに「んなわけねえだろ、バーカ」と言ってる。

じゃあ、どうして尋ねなかったんだ？

『あいつは、リッチだった』
うん。

アイテムにも書いてあった。

『いやね、リッチ以上にリッチだったんだ。そして、リッチになった事

情がなんとなくわかったから、深入りしたくなくなった、というのが理由だね』

よくわからんのだが。

『よくわからなくていいよ。それよりもだ。あいつは下手に触るより、距離を取って、活用していった方がずっとお得。メル姐さんがヘンテコなアドバイスしたのが結果的には良かったのかな。まずは低位の修得だけど、危機感が圧倒的に足りてないんだよなあ。ちよつとギルドをけしかけるか。霊園にチューリップでも植えてみよう——これから忙しくなりそうだなあ』

楽しそうな声になってる。

可哀相に。ロックオンされてしまったか。

まあ、アンデッドでボスだから死ぬことはないだろう。

『リッチは死ぬよ。寿命で死ぬことがなくなるってだけ』

そりゃ光魔法とかで死ぬだろうが、ボスだから復活するだろ。

死にはしても復活する。消えはしないでしょ。

『光魔法くらいなら蘇れる。でも、最大の弱点が克服されてないなら消える』

最大の弱点？

『普通のアンデッドは人以外でもなれる。犬や熊、コウモリとかのアンデッドを見たことあるよね』

あるな。特にコウモリのアンデッドは地味に厄介だ。

これが出てくるところは中級以上になることが多いよな。

『飛んでて倒しづらいし、死んだら菌をまき散らすからね。初級じゃ対応できない。話を戻すと、普通のアンデッドは多くの種族が成り下がるけど、リッチは人しかねない——とされてる。俺としてはもつと幅広く試すべきだと思ってる。他の種族でもなり得るはず。まあ、この話は今はやめよう』

お前もたいがい話が逸れるよな。私も人のことは言えんが。

『とにかく。リッチには、普通のアンデッドに備わらない知能と、魔法技能・魔力がついてくる。これに伴い、厄介なものがおまけでくっついてくる』

それは？

『過去だよ。人の頃の記憶と言い換えても良い。これがリッチの最大の弱点』

過去？

『リッチって非常に面倒な儀式を経て、ようやくなれるものなんだよね。普通にはまずなれない』

さつきも言ってたな。

『逆に言うと、リッチに成り上がるなら、なるに値する動機がいるんだ』

リッチになるに値する動機？

知能と魔法の力が欲しかったとかじゃないの。

『それだけならアイテムを買った方が間違いなく速いし安いし効果も高い。ヒントはこの話の発端だね』

なんだったつけ？

『リッチは生物的な寿命では死なない』

そういやそうだったな。

『リッチになるべき動機って、これだけなんだ。「寿命で死にたくない場合」オンリー。これ以外でなっちゃうと消滅しうる』

なぜ？

『そもそもリッチって言葉はね。「死体」って意味なの。リッチになるための儀式って、実は降霊術の一種で、自分の体を上手に殺した後で、自分の思念をくつつける方法なんだ。死んでアンデッドになるのは原理がちと違う。肉体が死んでるだけじゃなくて、死体と心が完全に別物。もつと言えば、思念の固着が上手くできるなら自分の死体じゃなくても良い』

はあん、よくわからんけど、なんとなくわかるような。

『それはわかってないね。理解を無視して続けるとだね。この思念と死体が一致してないのが大問題なんだよ。リッチの思念を揺さぶってみろ。とぶぞ』

どこにだよ。

もうちよつと真面目に話して。

『いや、とても真剣な話で、リッチは人間と違って体と心が綺麗に一体化してないの。ちよつと思念が揺さぶられると死体から分離しちゃうんだ。分離しちゃうたら、くつつけるのはとても難しいから、そのまま消滅する。リッチ・エンド』

思念が揺さぶられるつてのがよくわからんのだけど。

難しそうじゃないか。

『そこでようやくさっきの話と繋がる。過去と動機をまぜつかえすんだ。過去、そいつに何があつて、どうしてリッチになるに至ったのか。ここを蒸し返す。「寿命で死にたくない」が動機なら消滅は回避できる。違つと消える。現状のリッチという状態と過去の動機が繋がらないからね。なまじ高くなつた知能が回転して、自己の矛盾を指摘し始める。「魔力を増やして強くなりたいたいだけなら、リッチじゃなくても良いよね？」 どうしてリッチになつたの？ 弱点も多いよ。ねえ、どうして？』つて自問自答が止まらなくなる。自分の過去に取り憑かれるんだ。その状態でちよつと突けば、体と思念が離れてサヨナラ。南無南無』

……あれ？

それだとスコタデイ霊園のリッチはどうなんだ？

『どう振り返つても「寿命で死にたくない」が動機じゃないだろうから消滅するね』

ええ、超上級ダンジョンになつてくれるのを楽しみにしてるんだけど。

『大丈夫、大丈夫。あいつ、記憶が混乱してたでしょ。容易には過去を思い出せない。自分で過去を漁り始めるか、特殊ドロップを使わない限りは消えないよ』

ん？

お前、例のリッチに特殊ドロップを渡してなかつたか？

『うん。渡した。解析したところによると、あのアイテムは記憶の回想ができるね』

要は自分の過去を見ることができるとのことだろ。

今話を聞く限りだと、消滅するんじゃない？

『普通の状態で見ると消えちゃうだろうね。でも、すでに自己問答状態であれを見るなら劇薬になりうる。どうせ消えるなら博打を打つたほうが良い。もしも、それで消えないならだ』

消えないなら？

『やはりリッチ以上の存在なんだろうね。なおさら、もう直接は関わり合いたくないなあ』

ここでリッチの話がようやく終わり、目の前のダンジョンに集中することになった。

星雲原野ガラクスイアスは、フィールド型の超上級ダンジョンだ。周囲には夜空が広がるのみである。

『じゃあ、予定通り封印を解除するから』

腕に巻いていた布きれがひらりと落ちた。

『どう？ 力を感じる？』

……いや、全然。

廃顔の都パラクミで手に入れた念願の封印を自らに施していた。腕に巻いた布きれ一枚で封印ができていたというが、特に自覚はない。

危険だからということ、封印したつきりで解除をするのはここが初めてである。

能力プラスを二つか三つ取得したと聞いたので、かなり強くなったのだろう。

『来たよ』

空から赤く燃える岩石が落ちてくる。

私に向かって落ちてくるので、軽く歩いて避ける。

岩石は落ちた後で浮かび上がった。

これが星雲原野序盤のモンスターだ。

通称が浮遊隕石。浮かび上がって魔法を唱えてくる。

浮かび上がったモンスターを斬りつければ、岩ごとぎっくり斬れて消滅する。

表面は硬いと聞いていたが、案外楽に斬ることができたな。

はて、こいつって倒したら爆発するんじゃないか？

『最初に目が開いてから少し経ったらね。今のは目が開く前だから爆発しなかった』

なるほど。

超上級だが序盤だからまだ楽だな。

『いや、違うね。普通に超上級の強さがあるモンスターだった。前なら最低でも二回は斬る必要があったはず。間違いなく能力プラスの効果大きい』

そんなものか。

このときはさほど実感できなかった。

実感できたのは中盤にさしかかったときだ。

雑魚モンスターが一撃で倒せてしまう。

それどころか中ボスの攻撃も軽くないですることができた。

地面を力強く踏むと、地面がめり込んでかえって走りづらくなる。

『ね、強くなってるでしょ』

そのようだな。

超上級の中ボスがまるで中級のボス並みに感じる。

もうボスには行けるんだよな。

たしか中ボスを一体でも倒すといけると聞いたぞ。

『うん。行ってみようか。作戦会議は、いるのかなあ』

普段は欠かさない作戦会議だが、どうもシユウは乗り気じゃない。

それでもと軽く作戦を話した上で、ボスに挑む。

白玉と呼ばれる、そのまんま白い球体がこのボスだ。

中ボスを一体でも倒せば原野の中心に現れる。

ぴかぴか光って高温なのだが、耐性があるので近くに行って突き刺すだけだ。

突き刺すと、ボスの色がどんどん白から赤に変わっていく。

『第二段階に入った』

えっ、もう？ 速すぎないか？

まだ攻撃すらされてないぞ。

『ちよつと下がったほうがいいね』

シユウを突き刺したままの白玉、もとい赤玉がどんどん膨らんできている。

赤玉もあつという間に私の身長の数倍に膨張した。

『第二段階だよ』

……もう何も言わない。

一番苛烈と言われる第二段階が何もなく終わってしまった。

玉の表面から色とりどりのガスが出てきた。

毒ガスらしいが、私は耐性があるのでまったく効かない。

徐々に玉の大きさがしぼんできて、色も赤から白に戻っていく。

最後は突き刺したシユウが見えるほどに小さくなり、とうとう消滅してしまう。

アイテム結晶がぼろりと地面に落ちた。

『強くなったでしょ』

強すぎるぞ。

封印をかけ直してくれ。

こんな強さはよほどのことがない限りはいらない。

ダンジョン攻略がおもしろくなる。

『相性が良かったのもある。ボスのガスと熱に耐性があるから、封印をかけ直してもこのボスに関しては倒す速さが変わるだけでしょう。ま、強くなるとはこういうことだよ』

限度があるだろ。

ここは超上級ダンジョンだぞ。

そのボスがお前を突き刺して突っ立ってるだけで消えちゃった。

『とりあえず封印は街に着いてからにしよう。この状態でダンジョンを回ってみて。おそらく封印をかけ直したらしばらくは解除しないだろうからね。この状態のスペックをもうちょつと計っておきたい』
仕方なく、雑魚やら中ボスを倒して回る。

ダンジョンのギミックで、モンスターを倒すと空に星が光る仕様のようだ。

初めは真っ暗だった空が、今ではほぼ星光で埋め尽くされている。

『俺はこのダンジョンのギミック、好きだよ』

私も嫌いじゃないが、ボスを即殺してどうも感情が追いついてこない。

なんだかひどく虚しい光に感じる。

『ボスも恒星の一生をなぞってるし。ダンジョンの領域も恒星の構造になぞられてるね』

あ、そう

解説をだらだら始めたが、どうにも頭に入ってこない。

『お、ついに来たね。本日のメインディッシュだ』

前をみれば、地面に巨体が横たわっている。

おいおい、ついに倒す前から倒れてるぞ。

『さて、どんなもんかな。ちよつと斬ってみ』
はあ。

言われたとおり、巨体にシユウを振るう。

想像していた感触とは違った。

斬った感触ではなく、表面を削った感触だ。

実際、モンスターの表面には浅い傷しかない。しかもすぐに回復した。

……は？

なんだこいつ？

めちやくちや硬くないか。

『メシエ・ヤナだよ』

おや、うっすら聞いたことがあるぞ。

でも、それ、冒険者の名前じゃなかったか。

『冒険者とダンジョンについては人並み以上の記憶があるね。超上級パーティ「呪裁」だよ。メシエとヤナが初めてこのモンスターを倒した。だから、このモンスターの名前は、記念すべき二人の名を取って「メシエ・ヤナ」。それ以降は誰も倒してない』

はあ、すごいな。

そんなモンスターがいたのか。

その割にはさほど有名じゃないんだな。

『まずダンジョンが超上級だから挑む人間も少ない。さらに倒しても

特にこれといったすごいアイテムがなかったんだ。それなりに硬いくらいなら挑戦者もいるだろうけど、度を超して硬いからね。今の俺達でさっきのかすり傷しか付けられないんだよ。正攻法では倒せない』

呪裁の二人はどうやって倒したんだ？

『パーティー名の通り呪怨と断罪だよ。呪いを裁いて、裁きを呪う、その呪いをさらに裁く。この相乗効果の重ね合わせで圧殺した。これなら竜だろうと抹殺できる』

強すぎないか。

最終的には二人で極限級パーティーになったのか。

いや、極限級パーティーになったなら、私はもつと覚えているはずだ。

『半分正解かな。超上級パーティーで止まったところは正しい。間違ってるのは、呪裁は二人組のパーティーじゃない。メシエとヤナに、シャルルも含めた三人パーティーだ。呪怨と断罪は魔法としての相性は良いけど、人間の性格の組み合わせは最悪なんだ。互いに反目して殺し合う。シャルルが二人を抑えてたけど、シャルルが死んじゃって、メシエとヤナが互いに殺し合いパーティーは消滅。ちょうどこのダンジョンをクリアした直後の話だね』

もつたいない話だなあ。

もしもシャルルが生きていれば――。

『生きてれば極限級に違いない。シャルルの死も曰く付きだった。数百年経った今でも話が残ってる。恋のもつれだとか、暗殺だとか、なんやらかんやら』

実際のところどうなの？

『実際のところは調査の打ち切りで「事故死」だよ、曰く付きって言うたでしょ』

お前の見立ては？

『謀殺』

即答じゃないか。

曰く付きじゃなかったのか。

『情報をいろいろ集めてると計画的に殺されてるようにしか見えなくなっただ』

犯人は誰なの？

『冒険者だったオデイエルナって奴』

聞いたことがないな。

『一部の資料にしか出てこないからね。奇妙な魔法を使う上級冒険者だったんだ』

奇妙？

どんな魔法だ？

『強敵を相手にすると自分が強くなるって魔法』

変わった魔法だな。

……どこかで聞いたような気がするぞ。それも最近だ。

『そうだね。「叛逆魔法」と呼ばれる特殊魔法の使い手。このオデイエルナが一時期「呪裁」と絡んできた。奴が呪裁を嵌めてシャルルを殺した。残りの二人は知っての通り』

なんか叛逆魔法ってのはいろいろと絡んでくる奴だな。

そんな奴はダンジョンでモンスターに無残に殺されて欲しいものだ。

『おめでどう。殺されたよ。生きたままモンスターに食い散らかされた。目撃情報が複数あるから間違いない』

なんだかなあ。

誰も救われない話じゃないか。

それで、このメシエ・ヤナをどうやって倒すんだ。

『動かないなら割と簡単にいける。実は話をしてたのも時間稼ぎだったりする。よし、斬ってみて』

斬ってみたが、先ほどと同じだ。

表面を削って終わり。

……ん？

傷が治らないな。

『自己回復と毒の耐性を封印した。あとは死ぬまで待ってりゃ良い』

おお、なるほど封印はそういう使い方もあるんだな。

『実戦ではまず使い物にならないね。相手の情報を事前に得る必要があるし、計算に時間を取られすぎる。封印も一部が限界だ。それに内側から壊せる強度しかできない』

それでもないよりは断然マシだろ。

選択肢が多いことは良いな。

時間が経ち、メシエ・ヤナはゆっくりと消滅した。

毒のせいかな最後まで立ち上がることも暴れることもなかった。

アイテムを拾い、袋に入れる。

『待った』

足を踏み出そうとしたところで声がかかる。

声はかかったが、続きがなかなか出てこない。

『メシエ・ヤナ——M87かぁ。できすぎだな』

何なの？

87？

『このダンジョンのモンスターは星と星座だ』

いきなりだな。

しかし、星と星座ってことは私も知ってる。

雑魚モンスターが星で、中ボスが星座、ボスが恒星？ だったか。

『そう。太陽の三十倍以上の重量を持つ恒星が死ぬときブラックホールになるとされる。そして、俺達の世界で撮影に成功した初めてのブラックホールがM87』

よくわからん。

私は星にさほど興味はない。

黒い穴がどうこうと言われてもさっぱりだ。

『星雲原野で倒した雑魚モンスターは空に上がり星になる』

それはわかる。

特定の星を空に上げていくと、中ボスの星座モンスターが出てくる。

倒すと、空の星座が光の線で結ばれる。すでに空にはあっちこっち光線で結ばれてるな。

『素晴らしい理解だね』

ほんのり馬鹿にされてる気がしてきたぞ。

『それじゃあ問題、先ほど倒したメシエ・ヤナはこの空のどこに輝いてる？』

知らんがな。星とかさつぱりだ。

あれじゃないの？ キラキラと白く光って綺麗だぞ。

『答えは「輝いてない」だよ。メシエ・ヤナは光を放つ存在から引き込む存在となった』

だから何？

それ、重要なことなのか？

『……さて、どうだろう。俺が言いたいのは、つまりこうなんだ。このダンジョンには高確率で隠し要素がある。これって重要？』

超重要。

そういう話を待ってたんだよ。

私の暗い心の中に、ダンジョンという星の輝きが再び灯り始めたぞ

！

『概ね共通の認識を得たところで次に進もう』

うむ。

どんな隠し要素なんだ。

『ブラックホール関係だと思っね』

さつき言ってた、黒い穴ね。

洞窟みたいなのがあるの？

『うーん』

急に悩み始めた。

最初はふざけた声で悩んだふりくさかったが、どうもすごい真面目に悩んでいる。

『どこからどこまで説明しようか考えたんだけど、説明するより見た方がわかりやすいかもしれないという結論に至った』

ついに説明を放棄してしまった。

私としてはありがたい。悩んだ甲斐があったな。

それで何をすれば良いんだ？

『最初は全部のモンスターを倒してみるかな』

思ったよりも簡単だな。

そんなのでいいの？

『普通はそう簡単にはいかないよ。超上級ダンジョンだからね。なによりメシエ・ヤナがいるから。ギルドの説明の中には全部の星を空に上げたときの説明がなかった。やった奴はおそらくいない。もし、いたとしても——』

隠し要素に殺されてしまったか。

『そうなるかな。全部の星を倒すが隠し要素の条件なら、星雲原野のリポップの遅さにも納得がいく』

そういや、このリポップは遅いと聞くな。

浮遊隕石は馬鹿みたいに湧いてくるが、それ以外の星モンスターは最低でも五日経たないとリポップしないとか。

普通のダンジョンならアイテムを取らなくても一日あれば復活するのにな。

『五日あれば全部倒せるだろ』というダンジョンからの挑発とも取れる。「全部倒せたら挑ませてやるよ」というメッセージにもね。どちらにせよ挑発か、余裕とも受け取れる。あるいは——』

いいね。

俄然やる気が出てきた。

満天の星空のもと、最後の中ボスにシユウを突き刺した。

中ボスはアイテムとして消え、空に最後の光線が結ばれる。

さらに星々の輝きがよりいっそう強くなった。もはや眩しすぎるくらいだ。

『ああ、出た。あつけないな。もう一捻りあるかと思ったのに。隠し要素が出たよ』

そうなの？

どうしてわかるの？ というか何が出たんだ？

『空間の異常が検知できたから。行く前にブラックホールが何か見えてもらおう。空を見上げて』

言われたとおりに空を見る。眩しすぎるな。

『中心よりやや右に、いつとう赤く輝く星があるよね』

ああ。

『そこからどンドン右下に目を動かして行って。何かおかしなところがない？』

言われたように目を右下へと動かしていく。

どう動かしても星が煌めい……あれ？　なんか輝きがないところがあるな。

周囲が輝きに満ちているのに、一部だけ真っ黒だぞ。まるで——、『それがブラックホール。実際はこんなふうには見えないけどね。強調されすぎてる。わかりやすいっちゃわかりやすいでしょ』

ほんとに黒い穴だな。

『ブラックホールが視覚的にわかったところで行くとしようか。メシエ・ヤナのいた地点だ』

ぼてぼて歩いていくが、私には自分がどこを歩いているのかわからない。

モンスターがいなくなり、目印がなくなってしまった。

『ストップ。ここから先は別空間だ。さながら事象の地平面だね。さて、どうしたものかな』

特に何も無いぞ。

見渡す限り平野で面白みがない。

『まあ、いいか。踏み込んでみて』

はあ。

一步踏み出すと景色が変わった。

平野が消えてなり、視界の奥には黒い点が見える。

空の星は黒点を中心に渦を巻き、足の地面は黒点に吸い込まれるように消えてなくなる。

まるで空の上に立っているようだ。以前に似たような景色を見たな。

『月をぶつけたときだね。事象の地平面だと思ったけど違うね。後ろがおかしい』

振り返ると、周囲は真っ暗で何も無い。

暗闇の壁で塞がれている。

『事象の地平面の内側から外側を見ると、光が一点に集中するはず。虹色になってね。ちなみにこの空間の外側からメル姐さんを見るとメル姐さんが止まって見えるはず』

ほーん。

よくわからんけど、これが隠し要素なのか？

すごい光景なのは認めるが、私にはちよつと面白みが足りないな。

『俺は面白いね。偽物にしてはよく出来てる。上面が回転するところを見るにカーのブラックホールに近い。あの黒い点はリング状になっててどこかにワープするはず』

その黒い点だか輪が、さっきよりも大きくなってる気がするぞ。

『中心に近づいてるんでしよう』

すごい余裕ぶってるが、大丈夫なのか？

吸い込まれるとやばそうぞ。

『本物だったら、メル姐さんはもうバラバラの散り散りになってるね。まさに、その関係で俺達の世界では論争があった。ブラックホールに吸い込まれると俺達の情報がどうなるかだ。吸い込まれて、最終的にブラックホールが縮んでいつて蒸発すると俺達の情報がなくなる。でも、これは決定論に反してる』

その話って長い？

もうだいたい飽きてきたんだけど。

『まあ、話そうと思えば一日でも二日でも話せる。最終的にホログラフィック原理と最近の知見まで紹介するつもりだった』

あ、そう。

よくわからないんだけど、これはどうするんだ。

黒い点が増えますます大きくなってるので。私はちよつと焦りを感じてきた。

『このダンジョンは本当に俺と相性が悪いね。ホログラフィック原理まで中途半端にやっちゃうから……。シユワルツシルトのブラックホールならワンチャンあったのに。——えい』

力のこもらないかけ声で、黒点がバキリとひび割れた。周囲の景色にすら真つ二つにするかのような割れ目がついてしまっている。

空の回転も、地面の星も全てが止まってしまった。

『黒いのを斬っちゃって。俺も飽きてきた』

言われるまま近づいて黒玉を斬る。

あっけなく黒玉は光に消えていった。

アイテム結晶の光とともに景色が原野に戻る。

あれ、原野か？ 星の光がないぞ。

『ほうほう。なるほどね』

何が？

『ドロップアイテムを解析したんだけど、それを使うと星がまた輝き出すっぽい。これだけ見ると、星の情報はブラックホールに吸い込まれても消えませんでしたってオチだね』

どこがオチなのかすらわからん。

そもそもあの不思議な空間で何をしたんだ。

あの黒玉が一瞬でおかしくなったぞ。

『ホログラ……端的に言うと、情報の殴り合いになった。あの黒玉が隠しボスで、フィールドと俺達に干渉してたんだ。普通は対策が打てない。力押しでは絶対に勝てない。でも、残念ながら情報への干渉はチートの得意分野だ。逆に、あの黒玉自体の情報を書き換えて活動を止めた』

何か解説しようとしたが、すぐに止めて、かなりかみ砕いたような説明をした。

そういうのでいいんだよ、そういうので。

たいしたことなかったんだな。

『いやいや。ここは間違いなく超上級だよ。強さの面でも、規模の面でもね』

そうか？

強さはもはやわからなかったし、規模は理解できない。

『このダンジョンの規模がどれほどか、メル姐さんでもわかるように

説明してみるとしよう』

お、やってみろ。

私をわからせるのは難しいぞ。

『自分でそれを言っちゃ駄目でしょ。とにかくだ。一つやってみるか』

よし、こい。

『あの事象の地平面もどきの空間で、黒玉に吸い込まれるとどうなるか?』

そりや死ぬでしょ。

『違う。星座になる』

……はい?'

『この世界から見える星座のいくつかは、あの空間で飲み込まれた奴らだね』

え、え、じゃあ、私も吸い込まれてたら星座になってたの?'

『メル座になってた。間違いないよ。そういう空間だった。ブラックホールもどきに吸い込まれても情報は失われない。あの空間が消えた後、夜空に輝く星座として生き続ける。試してみてもいいけど、おすすめはしない。どう? 規模の面でも超上級じゃない?』

——みごとだ。

この私をわからせるとはな。

認めよう。このダンジョンはまさしく超上級だ。

『せやろ。隠し領域を見つければ星になって生き続けることができる』

……それは死んでるとしか思えないな。

最初はどうかなるかと思っただが、それでも驚きがあった。

素晴らしいダンジョン攻略だったな。

『うん。俺もそこそこ楽しめたよ。星導教のルーツもわかったしね』

星導教のルーツ?'

『今は、星の光が我々を導くとか謳ってるけど、大本は逆だったんだね。星になるよう導く武装集団兼思想集団だったんだ』

どうでもいいな。

こうして私たちはそれぞれの満足を胸にし、星雲原野ガラクスイアスに背を向けた。

星都アステリに戻る途中でシユウが喋り始める。

『今回の攻略だけど、ギルドには軽めに伝えよう。「隠し要素を見つけたいよ」くらいで良い。アイテムもくれてやれば納得する。他に使い道がないアイテムだからね』

私としては話す量が減るからありがたいことだ。

しかし、なぜ軽めなんだ？

『隠し要素を発見させたい奴らがいる』

自分たちで見つけさせたいってことか。誰なの？

『うーん、ま、いいか。この前に会ったリツチと、ミゼンって奴』

あのリツチ？

それにミゼン？

全然知らないな。冒険者か？

『いや。星都アステリの真ん中にでかい塔があるでしょ』

さすがに馬鹿にしすぎだ。

私でも知ってる。星導教の本部だろ。

ここからでも見えるぞ。

『ミゼンは星導教のトップ。導師って呼ばれることもあるね。あ！

いたいた！ 塔のてっぺん付近を見て』

遠くに小さく見える塔を見つめる。

この距離だと見えんぞ。

『ちよつと視界を拝借』

お、おお。

塔がどんどん大きくなって見えてくる。

塔のてっぺん付近がどんどんこちらに迫ってくるようだ。

『これでどう？』

見えた。

屋上の端近くに数人の人物がいる。

そいつらの真ん中にひときわ線の細い男がいた。

『ぼんやりした覇気のない細い男がいるでしょ、そいつが星導教のトップでミゼンって奴。俺の代わりに手でも振つといて』

言われて手を振ってはみたが、この距離でわかるわけがないと気づき手を下ろす。

ん？

ミゼンの側にいた金髪の女が私に手を振り返しているように見えるんだが気のせいかな。

あちらもすぐに手を下ろしてしまった。

『こちらの視線に気づくとはさすがと言うべきかな。光魔法でこちらを見てきたね。うまいもんだ』

視界も徐々に戻っていき、塔は小さくなった。

いやいや、この距離で視線に気づくとかあるの。

一流の冒険者じゃあるまいし。

『おろ？ ああ、そっか。あんまりメジャーな情報誌には載せないか。彼女は星導教の星射師階位第一位。それでいて冒険者もしてる。メル姐さんも知ってるよ。超上級パーティー——チューリップ・ナイツの黄騎士ことモナムール』

ちよつと！ もっかい！

もっかい見せて！ はやくっ！

『はい、どうぞ』

塔がまたしても大きくなり、どんどん迫ってくる。

そして、その塔の上にはすでに誰もいなくなっていた。

『残念』

ああああ！

先にそつちを紹介しろよ！

線の細いもやし男とかどうだっかっていいんだよ！

気の利かない奴だな。私が大ファンだっかって知ってるくせに！

『ごりや、失敬。てへぺろ』

絶対わざとだろ、こいつ。

塔のてっぺんから落としてしまおうか。

『そうそう！ 彼女は星が好きなんだって、俺と気が合うかもしれな

い！ 星を見ながら将来を語り合えそうだね』

星が好きねえ。

彼女も変人ってことか？

『どうしてそんなこと言うの？ ねえ、どうして？ 星が好きな人に

悪い人はいないよ』

悪い人とは言っていない。変人と言ったんだ。

『そんなこと言って良いの？ メル姐さんの憧れの冒険者が変態ってことになるよ』

う、嫌な言い方だな。それに変人から変態に言い換えてるところが腹立つ。

それより彼女、もっかい見える位置に出てきてくれないかな。

『天体観測ならぬ、変態観測ってか？』

ほんとうるさい奴だ。

広大な星空の下、卑小な話を繰り広げつつ私たちは都へ帰った。

6. モノマキア闘技場からエツダ競技場へ

星雲原野ガラクスイアスとゲムマ溪間をクリアし北東へ。

たどり着いたのは決闘の都モノマキアである。

すでに近くの中級のタリエ深林地帯をクリアした。

しかし、森とか林系のダンジョンはどれも同じに感じるな。

木と草がうじゃうじゃで体がかゆくなる。

『体がかゆいのは、単にメル姐さんが汚いからでしょ』

シユウを睨む。

静かにただこいつをどうするべきかを考える。

『最後に水浴びをしたのは何日前か覚えてる？ 俺を睨む前に、周囲

が今のメル姐さんをどう見てるか感じるべきだね』

……ん？

周囲を見ると私から目を逸らす人が多い。

あれ？ もしかして今の私ってけっこう汚いのか？

『俺の世界なら、公共交通機関から乗り込み拒否されるくらいには臭いし汚い。可能なら大型の洗濯機に体ごと投げ込んで、洗剤と漂白

剤、柔軟剤をまるごと一本投入してやりたいくらい。あるいは、五分以上の煮沸消毒かな』

どうも本当に汚いようで、周囲の視線も気になってきた。最初からそう言ってくれば良かったのに。

清潔にしてから闘技場へ向かう。

モノマキアの代名詞とも言うべき場所だ。

以前も闘技場に訪れたことはあったが、あそこは人対人だった。

しかし、モノマキアの闘技場は人対モンスターがメインとなっている。

『面白いと思うよ。——メル姐さんにはね』

なんか引つかかる言い方だな。

お前は違うのか？

『行けばわかるかな』

そうだな。

あれこれ言うよりも行つて体験したほうが速い。

闘技場の観客席は八割近く埋まっている。

《白銀同盟ッ！ やはり白銀同盟だッ！》

実況の声が会場に響き渡る。

観客は全員がまさに歓声をあげていた。もちろん私もだ。

中心の舞台上で戦い抜いた剣闘士達に惜しめない歓声を送っている

最中だった。

《最後に立つのはやはり彼らしかない！ 違うか！ 違うか、観客の強者諸君！》

違うな。

なんとという剣闘士達だ。

私も未熟だった。こんな冒険者パーティーがいるなんて。

今まで名前すら聞いたことがないパーティーだ。覚えておこう。

「白銀同盟」だったな。もう絶対に忘れることはない。

『楽しんでるね』

ああ！

素晴らしいなっ！

彼らの戦い振りを見ただろ。

心の底から燃え上がるものを感じなかったか。

異世界でモンスター同士の戦いを見たが、ここまで熱くならなかった。

まさに死闘だ！

またダンジョンに行きたくなっただぞ！

『ふうん』

あのさ。

そんなに乾いた声を出されると私としてもむかついてくるぞ。

なんでそんなにつまらなそうなんだ？

あるいは彼らが気に入らないのか？

『このモンスターってダンジョンだとどれくらいの難易度かわかる？』

……中級くらい？

苦戦してたし、モンスターも強そうだった。

『初級だよ。見た目だけの雑魚モンスター。一方の戦士こと冒険者どもだ。白銀同盟の名前を聞いたことがない？ 当たり前でしょ。せいぜい中級なんだから。苦戦する演技が上手い冒険者なんて冒険者としては三流以下だよ』

クソミソじゃないか。

え、あのモンスターって初級なの？

しかも白銀同盟が中級パーティーって嘘だろ。

私が見ても大熱戦だったぞ。

本に出てくる勇者と魔物の人魔命運を分ける一戦にも劣らないものだ。

『うん、つまりフィクションなんだ。演劇、お芝居。あまりにも子供だましすぎる。観客をみなよ。どこに強者がいるのさ。素人ばかりでしょ』

ところどころに強そうな奴がいるように見えるんだが。

ほら、右の後ろの方でどっしり構えてる大男とか強そうだろ。

『あれは大工だよ。職人さん。この中に剣闘士なんかいな——あつと、一人いたか』

訂正が入った。

ほう、教えてくれ。

どいつがその剣闘士なんだ。

『ふむ、……うん、うんうん。よし』

私の質問には答えない。

何か考えを巡らしているようだ。

最終的になにかを決定したようで肯定の声を出した。

『俺がいくら言っても、今のメル姐さんには信じてもらえなさそうだ』

ああ。

私はさっきの戦いが子供だましとは思えん。

白銀同盟は素晴らしい冒険者パーティーで、モンスターも手強いに違いない。

『それなら俺が反証することにしよう。さっきの戦いがどれほど子供だましかったかをね。白銀同盟なんて明日になれば、名前も忘れさるくらいの演者だということを』

やってみろよ。

『じゃあ、ちよつと手伝つて。黒紙番地の六の十三を取り出して、言つたとおりに書いて』

アイテム袋を漁り、黒い表紙がたくさんあるところを見る。

六の十三つてこれか、変わった臭いのするインクでシユウの告げる言葉を書いていく。

『オツケー。くしゃくしゃに丸めて舞台に投げ込んで』

書き終わり、紙を丸めて舞台へ投げた。

折り目が付きづらい紙だからすぐに舞台で広がってしまうはずだ。これでどうなるというんだ？

答えは何も返ってこない。

黙って見ている、ということのようだ。

その後も、特に何か起きることはなく他の冒険者やモンスターが

戦っている。

どの戦闘も熱気に溢れ、熱狂するものであった。

気づけば本日最後の戦闘が全て終わった。

会場はまだ熱が冷めることを知らず、歓声が響き渡る。

《強者の諸君！ 諸君らのためにエキシビションが決定された！》

会場はいったん静かになり、その後、爆発するかのような声に包まれた。

どうも一番最初に見た「白銀同盟」が出てくるらしい。

これには私も感激を止められない。

あれ？

そういや何かシユウと勝負をしていたような。

そうだ。彼らの戦いが子供だましかどうか見せるとか言ってたはずだ。

しかし、ここにきてもなおシユウは沈黙を守っている。

私も舞台に現れた白銀同盟で、シユウのことがどうでもよくなった。

白銀同盟が戦うモンスターも反対側のゲートから現れた。

先ほど戦ったモンスターよりも体格が大きい。

これはさらなる熱戦が期待できる。

斯くして戦闘は始まった。

白銀同盟とモンスターの一进一退の戦いだ。

戦闘で闘技場がたぎる中、何か歓声に変な声が混じってきた。

観客や舞台にいる白銀同盟の奴らもモンスターから目を逸らしてあらぬ方角を見ている。

モンスターとの戦いでよそ見をするのはまずいのではと思ったが、モンスターすらそちらを見ていた。それならいいのかな。

さて、彼らはいったい何を見ているのかと目を移せば、モンスターが出てきたゲートから別のモンスターが現れている。

太った猿のような図体だ。しかし、胴体と比べて手足が異常に短く、何かコメディイチックだ。

ちよつと可愛さもある。

その太った猿がゲートの太い柵をボリボリと食べていた。柵を食べ終わると小さな足を動かして飛んだ。信じられない光景だ。

転がって動くものだと思っただが、まさかの跳躍を見せてきた。しかも、けっこう速い。白銀同盟と戦っていた虎型のモンスターを半分踏み潰す。

潰れたモンスターさえもぼりぼりとむさぼり始めた。

その光景を前に、観客席は沈黙に包まれている。

先ほどまで場を賑やかしていた解説も止まってしまおう。

これがあらかじめ決められたイベントでないのは、白銀同盟の様子からも明らかだった。

彼らの顔は凍り付き、戦意はすでにない。顔をモンスターに向けたまま、目だけで主催者の席を見ている。

彼らの目は私もダンジョンで見覚えがある。

「助けてくれ」、「まだ死にたくない」という目だ。

おい。いちおう確認だが、これって予想外の出来事だよな。

まさかこれもイベントの流れってことはないだろ。

『——いやはや、不運にも地下のモンスターが脱走してしまったみたいだね。マルマルエイブだったかな。見た目はとぼけてるけど上級ダンジョンのモンスターだよ。さっきのが初級モンスターってわかるでしょ』

場違いな解説が始まった。

解説してる場合か。行ったほうが良いだろ。

『行くべきじゃないね。ここは剣闘士の舞台だよ。そして、メル姐さんは剣闘士ではない。盗人だ』

じゃあ、あの猿を誰が止める。

白銀同盟が殺され、あのモンスターが観客を襲うぞ。

あと、私は剣闘士ではないだろうが、盗人でもない……と思う。

猿のモンスターが、潰れた虎のモンスターをすぐに食べ終わる。

次の餌を探し始め、すぐ側で動けずいた白銀同盟が選ばれた。

『幸いにも、ここには剣闘士がいる。——動き出したよ。向かい側の

観客席やや左。見ておくと良い。死闘つてのがどんなものなのかをね。きつとメル姐さんもわかると思うね』

舞台上に降り立つ影一つ。

後ろで一本にまとめた赤い髪が揺れている。

その女性は自らを見向きもしない猿を睨んでいた。

しかし、猿や白銀同盟、他の観客も気づいた様子はない。

『……ん、耳をふさいで』

はい？

『耳をふさぐ、急ぐ。ハリアップ！』

言われたとおりに両手で耳をふさぐ。

赤髪の女が、私と同じように両手で耳をふさいだ。

急に会場が揺れた。

大きな音が会場全体を包んだのだ。

あまりの音響に周囲の観客や舞台にいる猿モンスターもひるむ。

猿が怯んだ隙をついて、赤髪の女が白銀同盟へと近づき、剣士の手から得物を奪った。

先に白銀同盟が女に気づき、顔が和らいだのが見て取れた。

一方の赤髪女は手で下がれと指示する。

遅れて猿も意識を取り戻し、目の前の相手が変わっていることに気づいた。

気づきはしたが、さほど気にした様子もなく、短い手をばたつかせるだけだ。

猿が飛んだ。

先ほどのように、大きな見た目とは裏腹に軽快な跳躍を見せる。

対する赤髪女は逃げる様子がない。

剣を体の前に掲げ、何か呟いた。

体から炎が現れ、その直後に猿の尻で潰される。

おいおい。

炎が出たけど潰されちゃったぞ。

『尻に隠れて見えなかったけど、ちゃんと避けてるよ』

猿も自らの尻に、潰れた女がないことに気づいた。

視線を上げ、わずかに距離を取ったところで女が剣を再び構えている。

彼女の体はうつすらと炎に包まれ、まとめていた髪も広がり、彼女自身が炎のようであった。

あのさ。

もしかしてなんだけど、彼女って――

『うん。メル姐さんの大好きな冒険者パーティー――チューリップ・ナイト。最後の一人だね』

わわわわわ！

うわっ、本物だよね！

……最後の一人？

白騎士インゼルにあつてないぞ。

《強者の諸君！ 驚かせてすまない！ 彼女の登場を盛り上げるため、どうしても黙っておく必要があった！ 策を弄した俺を許してくれ！ みんな、彼女の紹介はあるか！ 要らないよな！ 赤の剣闘士が今宵の舞台のトリを飾るぞ！》

周囲の観客はひとたび黙り、徐々に熱を帯び、誰も彼もがその名を叫んだ！

――カリブラッ！ カリブラッ！

私も一緒になつて叫ぶ。

観客全員が一丸となった瞬間だった。

《さあ、エキシビジョンマッチ！ 怒れる炎が燃え上がる！ 今！ 決戦の火蓋が落とされたッ！》

紹介されたカリブラは実況席を睨んでいるが、すぐに猿へ目を戻した。

戦闘が始まり、盛り上がっていた会場が徐々に静まっていく。

先ほどまで見ていた死闘などはない。

ただただ一方的だ。

カリブラが猿を焼き、斬り、貫く。

彼女はどこまでも執拗で、それでいて一切の油断はない。

最後は、猿が逃げ出し、カリブラが逃げ道に先回りして道をふさぐ。

なんか速さが全然違うな。

超上級のボス並に速くないか。

能力アップの補助魔法を使ってるの？

『炎のエンチャントだね』

あれがそうなのか。

雑誌では読んでいたが、人にかけるものなのか。

武器から炎の渦がぐわあつと出る光景を思い描いてたんだがだいぶ違った。

『武器だけに付与をかけるのはせいぜい上級まで。それより上を目指すなら自らのエンチャントが必須だろうね。超上級以上なら低位くらいは完璧に使えないと無理だね』

なあ、あれって私にも――

『ちなみに、あれは未熟な奴が真似すると焼死体ができあがる。無闇に一般大衆へ見せつける技じゃない』

うっかり真似もできないなあ。

だが、あのレベルになると魔法使いも目じゃないな。

『低位を完璧に仕上げることで、中位以上を上手く使うことは別の話だよ。彼女は、おそらく中位以上はまともに使えない。振り回すのが精一杯だろう。魔法話のついでに、この闘技場の話でもしようか。割とすごい魔法がたくさん使われてる』

私は観戦で忙しいから、たくさんはいらない。

上位三つくらいをシンプルに頼む。

『じゃあ、第三位。実況の音魔法。さっきの大音響もこれ』

ああ、そういえばあまり見ない魔法だな。

これすごいのか？ ちよつとすごさがわからないんだが。

『下手くそが使うと迷惑千万。ダンジョンで使う奴がたまにいるけど、だいたいモンスターに囲まれて勝手に死ぬ。才能がある奴はこういうところで囲われてる。ここの実況はとても上手い。振幅、周波数、位相、範囲、指向性、共鳴と他にもいろいろと計算ができないとまともに使える状態にならない』

とても難しいということがわかった。

二位は？

『第二位。魔力の流れを見る感知魔法』

地味だな。

その何がすごいんだ。

お前も似たようなことをしてないか。

『そうだね。同じことを出来る奴がこの闘技場にいる。魔力の量や流れが目で見えるんだ』

見えるだけなら別にすごいと思えないんだが。

三位の方がすごいと思える。

『三位までは努力でいける。がんばれば到達できる領域。でも、感知魔法は絶対的な才能がいる。魔眼が必須。魔法を目にかけるだけじゃ魔力の流れが見えない。感じ取ることまでなら凡人でもできる』

……すごいのは、それ？

闘技場のどこに使われてるかわからんぞ。

『最初からずっと使われてるよ。今も使われてる。剣闘士やモンスターとの状態を目で見てる。音響魔法と組み合わせることで、進行の予定を組み立ててる。指示も彼女がこっさり出してる。第三位がその聞き取りと伝達役だね』

ふーん。あまり興味がないな。

第一位は？

『わかんないかな？ 闘技場は世界にそこそこの数があれど、モンスターとの戦いを売りにしてる闘技場ではここが間違いなく最高峰だ。段違いだね。なぜか？ モンスターを自在に操れるから。これが、ずばり第一位。降魔の魔法。特殊魔法だよ。モンスターを操ることができる』

また、特殊魔法か。

しかし、モンスターが操れるなら間違いなくすごいな。

『モンスターを操り、戦闘時の状態を観察し、その状態をすぐに伝達し、観客の熱狂具合も判断し、より効果的なアクションで煽る。このやり方で熱狂させられる』

そんな仕組みがあるのか。

……でも、あれ？ モンスターが操れるのにどうしてこの猿は脱走できたんだ？

やはり、最初から全部演出だったのか？

『時にはミスもあるや』

そうだな。

お前でも割とミスをするからな。

問題の猿はついに逃げることを諦め、頭を地面につけ、命乞いをした。

カリブラが猿の助命を受け立ち止まる。

猿が顔を上げるが、その顔は助かった喜びではない。

油断した相手を喰い殺すという意志が溢れていた。

猿が飛び上がる直前で、カリブラが猿の額に剣を深々と突き刺す。

猿の体から炎が湧き上がり、観客席にまで、焼かれる肉の臭いが漂ってきた。

カリブラは猿の死を確認し、勝ち名乗りも湧き上がる喜びも何もなく舞台から立ち去る。

もはや最後は観客席に声もなく、ただ呆然とカリブラの後ろ姿を見送った。

実況が場違いとも思えるほど浮いた声で今日の観戦の謝辞を述べ、場はお開きとなる。

凄惨な戦いだった。

あまりにも一方的で無残とも言える。

それなのに目がそらせなかった。他の観客もまだ余韻が残っているのか立ち上がらない。

『どう？ 死闘が感じられた？』

正直なところ……、よくわからない。

だが、確かに他の戦いとは何かが決定的に違うと感じた。

一方的すぎたからだろうか。いや、一方的だけなら前の試合にもあったはずだ。

シユウは何も説明をする気配がない。

その後も、何が違うのかわからないまま会場を出て宿へ向かった。

翌日になり、この周辺で最後のダンジョンに向かう。

『ところで昨日の闘技場で虎のモンスターと戦った冒険者パーティーの名前を覚えてる?』

あれ? なんだったっけ?

戦ってる姿はおぼろげに覚えているが、名前が出てこない。たしか……:なんとか連盟じゃなかったか?

その後のカリブラがあまりにも印象的で、前の奴らの印象が薄まってしまったな。

『うんうん』

満足したように声をあげている。

朝から気持ち悪い奴だな。

東西南北のダンジョン巡りもいよいよ最後になった。

次をクリアすれば、しばらくはダンジョンがない。悲しい。

『エツダ競技場だね』

変わったダンジョンだよな。

『ギルド預かりだけど、ダンジョンとは言明してないね』

エツダ競技場は南北に長く延びる平原だ

モンスターは出るが、立体像というもので触れないとか。

それではどうやって倒すのかと言えば、そこは「競技場」の名の通り。

出てくる立体像のモンスターとレースをして、勝てばドロップアイテムが手に入る。

ちなみにアイテムは負けてももらえる。メダルやトロフィー、それに盾か。何かの役に立つものじゃない。

そのため冒険者はほぼ挑まない。

一部の好き者が速さの栄光だかを求めて挑んでいるようだ。それでも完全にクリアした奴はいないとか、誰も第四走を突破できてないらしい。

そもそも真面目に走る奴が少なすぎるとも言われている。

『嫌な予感がするぞ』

嫌な予感？

『この周囲は異常なダンジョンが多い。南は、ハイデン・ファ・克蘭ク集合住宅』

時空が歪んでるダンジョンだったな。

しかもダンジョンを作ったのが、シユウに先生と呼ばれる存在だ。

『東は、頽廢の都パラクミ』

闘神トウレラに、真のボスと判明した封印魔法のハムラ。

封印魔法のせいで私も異常な力を得た。

『中央には、スコタディ霊園』

突如現れた期待の新星、元冒険者のリツチがいた。

シユウは気に入ってるようで、ここのところ何かいろいろと悪さをしている。

『西は、星雲原野ガラクスイアス』

黒玉が隠しボスで変な隠し要素があった。

その規模は夜空の星にまで及ぶ。超上級に相応しいダンジョンだ。

『そして、最後の北。モンスターがホログラフなのはまだ良い。問題は対戦方法がレースってとこだ』

初めての体験だな。

レースで倒すだなんて初めてだ。

『奴がウ○に嵌まったからに違いない』
馬？

『違う。○マ』

同じじゃん。

『はあああ。奴は、すぐ流行りものに飛びつくからなあ。レースものが書きたくなったらなら、ウマの二次創作でも書けばいいだろうに。今なら流れに棹さしてポイントたくさんもらえるぞ。ちっほけな承認欲求が満たされる。……いや、違うな。流行りものを書いても、ポイントがつかないのが怖いんだ。なんという臆病者か。卑怯者！』
何言ってるかよくわからんのだけだ。

急に叫び出したりして、大丈夫か？

『メル姐さんこそ大丈夫か？ 今度こそ異世界だよ』

出たよ。また、始まった。

どうせ機械がどうこうする妄想の世界でしょ。

ダンジョンがあるなら行っても良いが、ないなら行かんぞ。

そもそも異世界に繋がってるダンジョンが、そんなあちこちにあつてたまるか。

『ごもつとも。見事な前振り』

挑むはエツダ競技場。

強さではなく、速さを第一とするモンスターとの勝負になる。

『やれやれだね』

シユウはあほくさと言わんばかりに、大きなため息をつく。

『勝負にならないよ。超短距離や長距離ならまだしも、まともに走ればける距離で今のメル姐さんを負かすのはまず無理』

わからないぞ。

まだ、第四走を越えた奴がいらないらしいからな。

『好きにすればいい。どうせすぐわかる』

それでは好きにさせてもらおう。

こうしてダンジョン巡り、最後のダンジョン攻略のスタートテープが切られた。

蛇足28話 「魔法少女に花束を」

1. ギルドマスターが現れた

長い旅路の末、ついに魔法都市カタグラフィに到着した。

『待って。一話飛ばしてる』

一羽、飛ばす？

空を見るが、鳥は見当たらない。

雲もまばらで、ほほ晴天。絶好のダンジョン攻略日和だ。

『いや。鳥じゃなくて、話が一個飛んでる。エツダ競技場はどこに行った？』

エツダ競技場？ そこつてだ、いぶ前にクリアしただろ。

なぜ、そんな昔の話を持ち出す。

『えええ……ま、いいか。おおかた、ウ○娘の影響で、リアルに競馬を始めたはいいものの、あっけなく大負けして、もうレースとか考えたなくなつたんだろう。ざまあ』

よくわからんことを言ってるが、いつものことだ。

私はダンジョンに集中する。

魔法都市カタグラフィは、魔法使いの都市であり、魔法では他の都市の追隨を許さない。

魔法使い達にとっては楽園だろう。しかし、私は魔法使いにあらず。

ギルドにいる奴らも、魔法使い独特の埃っぽさというか、線の細かい奴が多い。

雰囲気は冒険者ギルドらしくないんだよなあ。図書館か……？。

人も少ないな。冒険者が少ないのかもしれない。

『いろいろ補足したいけど一つだけ。この魔法都市は魔法使いにとつても楽園とは言えない』

どういうことだ？

『いつかわかる』

いつかわかるのなら長い話は聞かないに限る。

ダンジョンの情報を得るためカウンターへ向かう。ところが、受付

には誰もいない。

あれ？

さつきまでここに受付嬢がいたはずだが。

今は黒い猫がカウンターの上で私をみつめてきているだけだ。

しかし、この都市は猫が異様に多いな。

あちらこちらで見かける気がするぞ。獣臭くてたまらん。

『ヒントになります。ここは魔法都市カタグラフィ。一定水準の魔法を操る人の割合は全都市中で間違いなくダントツのトップ。そして、変化の魔法を操る奴もかなりいる。たとえば猫の姿をしていても』

え、まさか、この猫が？

『すごいでしょ』

ああ。すごいな！

何度か変化の魔法は見たが、ここまで完璧な変化は初めて見たぞ。

黒猫はニヤーと返事をしてくる。

変化がすごいのはわかった。

もう十分に驚いたから元に戻ってくれないか。

「ご用ですか？」

声をした方を見ると受付嬢だった。人間だ。

目の前の黒猫は、私を不審がってにらみつけてきている。

……あれ？

変化の魔法じゃないのか。

「彼女はキャサリンと言います」

受付嬢が猫を手で指して告げる。

シユウが笑っている。

私は全て理解した。

猫は猫だった。

怒りが急激にこみ上げてくる。

だましやがったな。

「ご用件は魔法神殿アラギの攻略でしょうか？」

目的の言葉が出てきたので、怒りが少し紛れた。

ああ。

よくわかったな。

「ソロですか？」

そっちもわかってくれ。

「魔法水準を計りますので、こちらをおつけください」

出てきたのは指輪である。

パーティーリングならもう持つてるし、付けてるぞ。

「いえ、こちらはグラミリングと言いまして、パーティーリングとは別物になります」

はあ、よくわからんな。

とりあえず言われたとおり、指輪を付けてみる。

特に何も起きる様子はない。

「はい、もうけっこうです。外してください」

またもやよくわからないまま、指輪を外し、受付嬢に返す。

「魔法水準は二。魔法神殿アラギには挑めません」

……え？

「アラギに挑むための魔法水準に達していませんので、挑戦はできません」

え、え、何それ。

「アラギにソロで挑むためには、魔法水準が八を超えている必要があります」

いや、それもだけど、魔法水準とかいうやつ。

「都市では魔法使いの力量を表す指標として、魔法水準が使われています。さきほどのグラミリングで魔法水準を計らせていただきました」

私は、二だったわけ？

間違いなく低いんだろうな。

この水準については初耳だったが、なんとなくそんな気はしていた。

魔法特化のダンジョンだ。専門の魔法使いがいないと挑めないという話も聞いたことがある。

仕方ないか。

パーティーを組んで挑むとしよう。

「アラギにパーティーで挑むためには、魔法水準がパーティー全体の合計で九を超えていることに加え、各々が四を超えている必要があります。魔法水準が一では、パーティーを組んでも挑むことはできません」

淡々と告げられる。

『残念でしたねえ』

どうということだ。

入ることすらできないというのか。

……仕方ない。権力のごり押しで無理矢理入れさせてもらうとするか。

『他ならともかく、ここはめんどくさいよ。アラギの管理は複雑だからね。国に、魔術師ギルドに、カタグラフィ魔法市民連盟、それにアラギ管理組合や魔法理事協会もか。手続きだけで数ヶ月はかかるね。却下される可能性も高い。それに、どうせメル姐さん一人じゃ、まともな攻略は極めて難しい。黒竜スキルを使つてのごり押しなら一瞬で終わるけど』

うーん。

ごり押しなら意味がないな。

よし。何か良い案を出せ。

そうすれば、さっきの猫だましは許してやろう。

『猫だましってそういう意味じゃないよ。それに——、ま、いつか。「お手紙」番地、アの項にアイラたんからの手紙があるから、それを受付嬢に渡して』

ごそごそとアイテム袋を漁り、目的の手紙を見つけ、そのまま受付嬢に渡す。

受付嬢は断りを入れてから、カウンターのの上に手紙をおいて読む。

黒猫も手紙を読んで、ニャーニャーと鳴いている。

「どうぞ、こちらへ」

表情や声色は変わらないが、対応は変わった。

奥の部屋に案内される。黒猫も私の後ろを歩いてついてくる。

『この受付嬢は元冒険者の魔法使いだね。魔法使いとしては二流でも、冒険者としては上級以上と思われる』

はつきりとはわからないが、そんな気配はするな。

受付にしては愛嬌がなさすぎるが、そもそも感情の起伏が乏しそうだ。

私の苦手な魔法使いどもと似た気配を感じる。あいつら、上に行くほど静かになっていくんだよな。

部屋に案内され、椅子に掛けるが、テーブルを挟んで向かい側の椅子には猫が座った。

なんかすごい堂々とした猫だな。

『そりゃ、ギルド長だからね』

はい？

『よく見とくといいよ。なかなかの変化だから』

椅子に座った猫が、ぬるぬると大きくなりあつという間に人の形となった。

『クソツ、やるなあ。裸で出てくると思ったのに、ちゃんと服まで変化に入れてやがる。ギルド長は伊達じゃないか』

感心以上に、すごい悔しがつている。

私はまだ目の前の変化が、頭の中で正しく認識できていない。

「手紙を見せてもらったよ。しかし、来ないとは思ったけど、あのエルフの代理があんたとはねえ。極限級となれば、冒険者ギルドとしては認めざるを得ないねえ」

年齢がいまいちわからない女性が意地の悪い笑みを見せる。

その後もペラペラ喋っていたがよくわからないので、とりあえず頷いておく。

こうして私は魔法神殿アラギに挑戦ができることとなった！

……なったの？

『まあ、いちおう』

要領を得ない返答だが、とりあえず一段落だ。

シユウの「いちおう」の意味がようやくわかった。

まともな攻略ではなく「高級魔法使い免許試験」とやらの試験監督として入場できるらしい。

どんな試験なのかはさっぱりわからないし、試験監督って何をするのか、そもそも攻略ができるのか——など、とさまざまな問題はあるが、一番は時間だ。

約二ヶ月後である。

近くにダンジョンはあるが、ここへ来た道にあつたのですでに攻略済み。

おとなしく待つのも三日が限度というもの。かといって、遠くまで行っても戻るのがとてもめんどくさい。

『メル姐さん！ 探索しようぜ！ 魔法都市の探索！』
はあ……。

テンション下がるな。

都市の探索とかして何が楽しいの？

観光にきてる一般人のおばはん軍団じゃあるまいし。

一人でやれよ。

『できないから言ってるんでしょ。そういう発言はね。パワハラになるんだよ』

セクハラばかりしてる奴が何を言うのか。

『それより探索に行こう。酒を飲むにやあまだ時間が早いってもんよ』

まだ日も昇りきつてない。

でも、なんだかなあ。

『大丈夫。もう目星はつけてるから』

言われるがままにたどり着いたのは、なんとか商会の事務所だった。

この商会はほんとどこにでもあるな。シユウは仲良くしているよ
うだが、私は仲良くしたくない。

とりあえず、中にお邪魔し、軽い紹介とシユウが渡せと言った手紙
を渡す。

返ってきたのは手の平よりやや大きい封筒だ。

中に何か入っているようだが、開ける前に「用が済んだなら出て行け」ということで外に出た。

封筒を開けると、中には小さなアクセサリーとメモが入っている。アクセサリーは何なのかさっぱりわからないが、メモはなんとなくわかる。

大雑把な地図と何かの名前が書いてあるな。

……“ドロの魔装具店”？

で、このアクセサリーはなんなの？

『ふうん、ふんふん、これは、なるほどなあ。確かにおかしいね』
何が？

『どこから言おうかな。まず、これは何か？』
アクセサリーでしょ。

『まあ、広義で言えばそうなんだけど、もうちょっと範囲を狭めてよ』
なんか挟むところがあるし、髪留めじゃないか。

『はい、残念。違います。答えはネクタイピン』
何それ？

『そう。この世界にはネクタイって文化がまずない。いや、あるにはあるか。でも、このあたりの地域にはまったくない。それなのに、ネクタイピンがここにあるってのがまずおかしい。で、おかしい点その二——効果が異常すぎる』

魔装具なのか？

お前が異常すぎるって言うのは期待できる。どんな効果だ？

『いや。効果自体は微妙。姿勢がわずかによくなる、汚れが気持ち付きづらくなるとかだね』

ほんと微妙だな。

『異常なのは八つも効果が織り込まれてること』
すごいのか？

『あり得ない。俺が知ってる最高峰の魔装具職人でも五が限界。一方で、このネクタイピンにはまだ織り込む余地があるように見える』
つまり八にとどまらず、さらに増やせるということか。

『そう。あり得ん。素材自体は大したことがない。ボロくて小さな馬車の荷台に大男が百人乗ってる感じ』

そんなにやばいの？

大げさじゃない。

『大げさじゃない。二百でも例えとしては正確だと思う。イ〇バの物置よりやばい。重量でも容量でもオーバーしてて、何がどうなってるのか訳がわからん状態。そして、最後のおかしい点その三』

まだあるの。

『うん。残りの二つと比べれば些細なことだけど、デザインがおかしいよね。ほら、頭蓋骨でしょ。……ちやうちやう、向きが逆。そう、そっち』

あつ、ほんとだ。

ひっくり返して見ると頭蓋骨のデザインだ。

僻地のダンジョンでよく見るやつだな。でも、なんでこれに……、気持ち悪。

『ネクタイってフォーマルな場で着けるものなんだ。フォーマルってのは儀礼というか、格式があるというか、ふぎけたことはできない状況なの。ネクタイピンも同様。幾分か遊びをもたせるにしても限度がある』

骸骨は限度を超えてるといわけだ。

『好まれはしないだろうね。で、まとめると、おそらく竜がいる。まずはこの『ドロの魔装具店』からあたってみよう』

竜？

なぜ竜だと？

『最初はネクタイピンで俺と同じ身の上なのかな、と思った。でも、転生特典の能力にしては、数はともかく効果が弱い。同郷人ならもつと遠慮のない頭のおかしい効果を盛るから違う。それにこんな付与能力があれば、ネクタイピンよりも名前の方がずっと残ってるはず。でも、これができそうな奴の名前なんてまったく残ってない。じゃあ、転生やらトリップを抜かして現地人ってなるけど、この効果数はまず無理。常識的な技術限界を遙かに超えてる。それに文化の違いも説

『明できない』

『そうだな。』

『現地人ではなさそうだな。』

『そうになると、この世界と異なる文化圏と繋がりがある存在で、そいつは通常では考えられない技術、能力を保有しており、どこか趣味が悪い。竜じゃない？』

『竜だな。』

『特に最後の部分がそれだ。』

『なんであいつらはどこかが妙におかしいんだ。』

『そんなわけでメモにあるドロの魔装具店とやらに行ってみることにした。』

『店のドアを後ろ手で閉める。』

『そして一息。』

『外の新鮮な空気がすがすがしい。』

『外れだったね』

『そうね。』

『頭のおぼつかない老婆が経営してる魔装具店だった。』

『異常な魔装具も特になく、老婆もただの老婆で、ピンを見せても寝ぼけたことばかり言う。』

『時間を無駄にしたな。』

『同じ意匠の物はなかったし、効果が異常な物もなかった』

『駄目じゃん。』

『でも、ヒントはあった。置かれている物から判断して仕入先は大きく三口だ。杖やらローブは種類ごとにまとめたけど、小物や分類不能商品は仕入先ごとに分けて置いてあったように見えた。このネクタイピンが置かれてた場所は覚えてたから、仕入先がどこかは判断できる。次はそこを訪ねれば良い』

『ほー。』

『それで次はどこ？』

『まさにその情報がないんだよね。あいつ、レアなのを見つけるの』

は上手なのに、あと二、三步踏み込みが足りないんだよなあ。まあ、こういうのに向いてないのはわかってたんだけど、別の奴も就けとくべきだったか。しかし、ここに合う奴ってなるとなあ……』

なんかぶつぶつ言い始めて、自分の世界に入り込んでしまった。こうなるともうしばらくは帰ってこない。探索はいったん休止して、飯でも食べよう。

昼からも他の店や、なんとか商会を回る。

大した収穫もなく日を跨ぎ、また別の店へ行き情報を集める。

あちらこちらに魔法のギミックがあり、隠し扉や秘密の通路があるものもなかなかおもしろい。

そして、ついにネクタイピンの主にたどり着いた。

なんか思ったよりも普通のおっさんだ。

「ああ、これね。拾ったんだ。なかなかすごいよね。効果が三つも付いてるなんて」

ん？

三つ？

「わからないの？ 効果が三つも付与されてるんだよ。だから、買ったんじゃないの？ え、それともデザインで買ったの？」

首をかしげていると、シユウが呟く。

『数は後で説明するから、どこで拾ったかだけ聞いてみて』

拾った場所を教えてもらい、すぐに店を離れる。

シユウに拾った場所の案内を受けつつ、先ほどの疑問を尋ねる。

お前は付与された効果が八つと言ったが、あのおっさんは三つと言ってたぞ。

『その疑問の答えは、物に付与されている効果をどうやって知るかって話なんだよね。俗に言う鑑定魔法ってやつ』

おつ、俗に言うなんちゃらシリーズで、本当に俗に言われているのが出てきたのは初めてだ。

嬉しい。ついに私でも知ってる言葉が出た。感慨深いものだな。

知ってる。私も鑑定魔法なら知ってるぞ！

『メルちゃんは物知りでちゅねー』

叩き壊すぞ、お前。

『それでは物知りさんに尋ねよう。普通の魔法使いが使う鑑定魔法ってどんなのか知ってる?』

お前がよく言ってるじゃん。

効果が文字で見えてるんでしょ。

『俺のはチートだから参考にしちや駄目。俺と似たようなことがしたけりゃ、特殊な技術がいくつ必要。逆に言えば、普通の鑑定魔法はメル姐さんの考えてる鑑定魔法とは別物。鑑定魔法って効果の総当たりなんだ』

総当たり?'

『自分が知ってる効果の要素と、物に織り込まれた効果の要素とをひたすら照合していくの。鑑定魔法は、どれだけ効果の要素を知ってるかに左右されるし、下手くそだと照合に時間がかかりすぎるから、検索する効果の数を絞る。だいたい二か三まで、普通はそれくらいしか織り込まれてないからね。それで、あのおっさんは三で照合作業を切り上げたんだらうね。もうちよつと見れば、四まであることはわかっただらうに』

なんか思ってたのと違うな。

めんどくさそう。

『地味だし面倒ではあるけれど、才能があればこれだけで十分に食っていける魔法ではある。ダンジョンがあるなら需要はある。知識、効果要素の把握、照合速度、慣れ、あと多大な根気……とそれなりに多くの能力が必要だけどね』

そんな魔法だったのか。

魔法をかけて、すぐにパーンとわかるのかと思ってた。

そうなると鑑定料ってどうなの? 聞いたところだとぼったくりらしいが。

『何も知らん奴はみんなそう言う。鑑定料と言うと、高く聞こえるけど、ほぼ技術料だよ。知識やら、照合作業やら、効果要素の把握とかのね。高いつて言うなら、自分で一からやってみろって話。バカみたいな時間と金が必要になる——お、着いた着いた』

ちょうど話の区切りが良いところで目的地に到着したようだ。

『んん〜？ ん？ ああ〜、なるほど。こりや普通じゃわからん。前の俺なら見逃してたレベルだ』

なんか納得し始めた。

何がわかったの？

『空間が折れたたまたまってる。特殊魔法の縫合に近い。普通の空間探査じゃ反応しないやつ。ふむふむ、面白いことしてるな。これ、なかなかすごいよ。まずね——』

あ、理屈とかどうでもいいんで、どうすればいいかだけシンプルに教えて。

『じゃあ、まずは空間の縫い目にほつれを作ろうかな』

言われた場所にシユウを突き刺していくと、裂け目がでてきた。

裂け目が徐々に広がっていき、そこに扉が現れた。——が。

『魔力反応は竜のやつだね。でも、なんか……、小さいね。向きもおかしい』

そうだな。

空中に扉が浮いている。

しかし、そのサイズはかなり小さい。

身長的一半もないんじゃないだろうか。

ん？ 扉だと思ったが、よくよく見ると取っ手もないな。

シユウが言うように扉も地面に垂直ではなく、どちらかといえば平行的に近い。

『これ、もしかしてダストシユートなのかな』

なにそれ？

『建物に設置するゴミ捨て用の小さい扉と、そこから捨てたゴミが通る道のこと。この扉がその出口じゃないかと』

ええ。

扉つばい板の隅に指をかけるとパタンと開いた。

中を見上げてみると、暗闇が続ぎ、かなり上のほうから光が見える。

『よし登っていけそうだね。うーん、すごい魔力反応。上に竜がいるのは間違いない。やばい気配は感じる？』

いや、まったく。

『メル姐さんの特殊能力は発動してない。そこまでやばい奴じゃないかもね。まあ、合成系の竜ならそこまで戦闘能力は高くないのか』
ふむ。

行ってみるか。

『うん。いざとなればここからそのまま出ればいいしね』

そんなわけで私は狭く、暗い縦穴をよじ登ることになった。

2. 竜女が現れた

登った先にあつたのは汚い部屋だった。

周囲によくわからない物が雑多に置かれている。

『ひへ……。これ全部、魔装具だよ。付与効果が十を超えてるのもある。持って帰れば国宝になるレベル』

シウウの口調も驚きの興奮を通り過ぎて唾然に近い。

変な笑いが漏れ出ている。

置いてある物を避けつつ足を運び、部屋を出る。

明かりと音がする方へ進んで行く。

隣の部屋を覗くと、いろいろな工具に塗れ、椅子に腰掛け何やら作業をしている奴がいた。

一瞬、人間に見えたがだいぶ違う。まず腕が多いし、それに長い。

『作業中だから声をかけない方が良いと思う』

そうなの？

『少なくともこつちに気づいてないし、作ってるものを見るに今が一番の集中どころ』

顔は女性だな。

髪はやや赤みがかっており、後ろでまとめている。

まとめてはいるものものそこまで長くはない。まとめきれずぼさぼさとおふれ出ている。

服はぼろぼろのつなぎみたいなのを着ている。

ポケットがたくさんついており、隙間からなにか小さな道具が見える。

足は八本で蜘蛛のように長く、体をがっしりと支えている。前にダンジョンで見たアラクネに近いな。

人の上半身が蜘蛛についている奴だ。

しかし、明らかに違うのが腕の本数。

背中からも大小様々な太さや長さで生えており、空中からぶら下がっていた工具を忙しげに取っている。

「ふう」

しばらく待っていると、どうやら一作業終わったようで、一息ついている。

一息つくど、作った物をいろいろと角度を変えて見ていた。

「うん。いいね。さすがあたしだ」

どうやら納得の出来らしい。

休憩に入るのか、八本の足が動き、体がこちらに向いたところでようやく私に気づいた。

「うおあつー」

すごい声を上げて、体を壁際まで後退させた。

いくつかの工具が机の上から落ちて音を立てる。

あ、すまん。

勝手に入らせてもらった。

「そんな馬鹿な。入店のシグナルはなかったはずだ」

蜘蛛っぽい女は壁の一点を見つめた。

私もつられて見るが、そこにはオレンジ色の何かが壁に付いている。

「故障？ いや、そんなわけはない。その服装、こつちの世界じゃないな。……あ、まさかあんた、カタグラフィから来たのか？」

そうなる。

「あ、ああ、ああ！ あんた、アレだろ。婆が言ってた奴だ！」

アレ？ 婆？

「婆がいた歪んだ世界の元凶をぶっ殺した奴——違うかい？」

なんとなく記憶にある話だ。

「やっぱりね！ 来るって聞いてたけど、そつちから来るとは思わな

かったよ。まあ、立ち話もなんだ、座りなよ。茶でも入れよう。ちよつと待つてな！」

デカイ図体をずるずると動かして部屋から出て行き、しばらくして戻ってきた。

近くの机の上に湯気の出る湯飲みを二つ置く。

「はいよ。ぐいっといきな」

湯飲みを見ると、両手を組んでいる模様が彫られている。

手に皮はなく、骨がむき出しになっているようだ。

『センスがちよつと』

そうだな。

女も片方の湯飲みを手を取って、軽く口をつけた。

「いやあー。あれはいつだったかね。驚いたよ。久々の客かと思つたら婆が来てね！ 私にこう言うんだ。『これをあの女に渡してくれ』つてね。あの女つて誰だよつてところから話が始まつて、いやはや驚いたよ！」

いちいち声が大きい。

婆が誰かもわからないんだが。

「あー、婆は婆だね。あたしが何かはわかつてるだろ。同族の婆さ。あんたに世界を救つてもらつた感謝の証だよ」

ほい、と私に一枚の札を差し出してくる。

「いや、驚いたよ。あの婆に『感謝』なんて言葉があるとはね。しかも、金を取らないなんて嘘みたいな話だ。間違いない。もう二度とないね！」

ハハハツと豪快に笑っている。

身内話のことはよくわからないが、とりあえずもらえる物はもらつておこう。

札は手の平よりやや大きく、縦がやや長い。

『めっちゃすごいよ、マジモンの竜製カード。解析が化ける』

なんだか、とつてもすごいらしい。

表面に×印で四区画に分けられ、それぞれの区画に四人の顔が描かれている。

右側は、緑髪の目を瞑った女。

左側は、真面目そうな女。

上側は、金髪で調子が良さそうな女。

下側は、とぼけた顔の女。

『そっち側はそんな絵なんだ』

そっち側？

裏返すと別の絵柄が描かれていた。

こちらはなんだろうか。

歪んだ剣を持つ男に対して、三人が対峙している姿だった。

まるで神話の一場面を切り取ったような仰々しさを感じさせるものだ。

『ちよつと絵面が格好良すぎる。もつと雑然とした場面だったぞ。男の顔の方もだいぶ見映えがよく描かれてるし』

なんとなく思い出してきた。

レベルとかスキルが出てきた世界の奴だなこれ。

『ええ、今さら気づくの』

札はどちらも絵柄が入っている。

どっちが表とか裏とかあるんだろうか。

『両方とも表でしよう』

珍しいな。

こういうのって片方に絵柄が入って、表と裏があることが多いだろ。

『そうだね。裏がない。うらない。占いね。婆つてのはもしかして、魔法陣に詳しくて本とか書くやつなのかな、尋ねてみてよ』

質問の意図がわからないので、そのまま尋ねると、「本は知らないが、魔法陣にはとてつもなく詳しい」と自慢するように返ってきた。

『話が繋がったね。その札は報酬としてもらつところ。効果はさつぱりわからんけど、悪い気配は感じない』

効果がわからないのはちよつと使いづらいな。

「わかんないのかい？ 教えたげるよ。金運アップに決まってるさ！あの婆がよこすならそれしかあり得ない！ 持つてるだけで金が

集まってくるんじゃないかい。億万長者さ！」

ガハハと豪快に笑い倒している。

冗談なのか本気なのかわからない。

『本気だと思う。絵は格好いいのに。効果が俗物的だなあ』

そうね。

私、お金に困ることほぼないし。

他の竜の話もちよこちよこしつつ、お茶を飲み終える。

そろそろ飽きたし帰ろうかと席を立ったところで竜女から声がかかった。

「待ちな！ 帰るつもりかい！」

竜女は体を起こし、腕を四方八方へと伸ばし、なかなかの迫力だ。

反射的にシユウへと手を伸ばした。

「まさかあのゴミ捨て穴から帰るってんじゃないだろうね！ 客をゴミ捨て穴から帰したとあっちゃ、あたしの恥つてもんだよ！」

……はあ。

そんなもんだらうか。

別に通ることさえできれば気にしないんだが。

「いいや！ 駄目だ！ あたしが気にする！」

じゃあ、どうしろっていうんだ。

完成するまでここで待たせてもらってもいいのか。

「いや、出口の意匠を考えるとここから始める！ 気が散るからあんたは外で待ってな！」

外で待つてるのが失礼じゃないの。

だいたい外って別の世界でしょ。

「別の世界は慣れてるだろ。キナメリアは今までの世界とは別物だ。新鮮なはずさ！ なに、外で問題を起こしても、あたしがなんとかするから気にせず遊んできな！」

「ほら。出た出た」と背中を押されて部屋を出され、そのまま廊下へ。

さらに奥へと進めば、やや開けた空間にたどり着いた。

他の部屋と違い、かなり綺麗な様子だ。

棚やテーブルに物がぽつりぽつりと置かれている。

『へあっ』

なんかシュウが変な声をだしている。

どうもすごい魔装具のようだ。

ここに置いてあるのは商品なのか。

けっこうすごいやつだろ。

「わかるかい?! 自信作さ! こっちでは店を開いてるからね! 稀

に見に来る奴がいるよ! 売らないけどね!」

売らないの。

展示してるだけなの。

「合う奴がいれば、どうするかわからないね。やっぱりモノってのは使われてこそだと思うからさ!」

……うん?

何かよくわからないけど、もういいや。

店のドアが勝手に開き、日のある外に出された。

周囲の景色が明らかに違う。

やたら背の高い建物があちらこちらに建っている。

道に面していたらしいが、道の真ん中に何かよくわからない箱が止まっている。

『あの竜。趣味が悪いくらいに思ってたけど、あの趣味の悪さは可愛いもんだったんだ』

ああ、あのドクロのピンか。

それとも指を組んだ湯飲みのことか?

『両方。すごい効果が織り込まれてる魔装具だなくらいにしか考えてなかった。甘かった』

悪いやつじゃなさそうだったぞ。

今まで会った竜の中で一番まともに思えた。

ちよつと変なこだわりがあったが、あれくらいなら人でもあるし。

『いや。あいつ、一見まともそうだけど今まで会った竜の中で、ぶつちぎりのやばい奴だったよ。最後の最後で気づいた』

さっきの並べてあった作品群のことか?

何か骨とか臓器とかを模したやつが多かった印象だが。

『そう。あれはやばい。あれらを悪意なしで「自信作」と言い切って並べてるのが余計にタチが悪い。あの竜は世界から消した方が良好存在だ』

お前がそこまで言うのは珍しいな。

何がそんなにやばいんだ。

『それは、……いや、あまり口に出したくないね。やる気持ちはわからんでもないけど、普通は店頭に並べるとかしない。しかも、合う奴ってどういうことだよ。帰るときはなるべく話さずにとつと帰ろう』
倒してしまつちや駄目なのか。

駄目か、復活するもんか。

『いや、そもそも戦いにならない』

そんなに強いのか。

『強い弱い物差しの上にはいない。勝負にならない。関わり合わない方が良く。おぞましい存在だ』

振り返つて扉を見る。

この扉のすぐ先に、シウウからおぞましいと評される竜がいると、この世界の住人は知っているのだろうか。

3. 巨城のボスが現れた

さて、見知らぬ世界に一人、投げ出されたわけだが、どうすればいいのかさっぱりわからん。

『見た感じ、今までの世界の中で一番文明が進んでるね。俺のいた世界に近い。魔力とは別の動力源がある。車っぽいのも走ってるし、建造物も鉄筋入りかな』

文明の進みは感じるな。

レベルの世界とかもかなり進んでる感じだった。

ちなみに私なりの文明の進み度合いは生物らしさが介在しているかどうかだ。

見たところ移動手段は輪のついた箱のようだ。

それに建物も丸みや不均一さが無い。同じような高さ、同じような

形で並んでいる。

歩いてる奴らもかなり良い服を着てる。

貴族か、こいつらは？

『いや。経済的にも豊かで、この街並みを武装無しで出歩けるほどに治安は良い。少なくとも腰に剣をぶら下げて出歩いて良い世界じゃない』

うむ。

むしろ私の服装が浮いてるな。

周囲から変な目で見られてるし、近寄られない。

『このままじゃ、ポリスメン相当の奴らに職質は必至だね』

巫人っぽいのもいるけど、どれもちゃんとした服装だな。

『うん。さらにやばいね。メル姐さんがおもしろい格好のアブナイ女になってる』

まあ、異世界だし問題になってもいいや。

それよりもこの世界にダンジョンがあるのかな。

『ダンジョンの有無はまだわからないけど、なるべく問題は起こさない方がいいね』

なんで？

いや、そりゃまあ問題は起こさないにこしたことはないだろうけど……。

『さっきの童女が言ってたでしょ。「問題を起こしたら私がなんとかする」って、出させたら駄目だ。絶対にやばいことになる。まあ、あの童女基準の問題だから、世界崩壊規模の問題じゃないと出てこないかも』

そんなことはさすがにしないだろ。

ごちやごちや話をしてると、どこかから高い音が鳴り始めた。

徐々に近づいているような気がする。

『これサイレン。絶対。パトカー来るやつ。これ系の音はどこの世界でも似かよってくるな』

どういうこと？

『衛兵がメル姐さんを捕まえに来るってこと。とりあえず姿を消しと

くか。変な視線も気になるし』
そうね。

どンドン離れたところからこつちを見る目が増える。

『いや、その視線じゃないんだけど。とりま、ちよつと道の端で様子見しといて。衛兵さんが武器を少しは持つてくるだろうから、武器レベルを把握しておきたい』

姿を消していると、甲高い音は徐々に大きくなってきて、道の先から赤と青の光を出す箱がやってきた。

人だかりの近くで箱から人が二人ほど下りる。

男女の二人組。人じゃないな。角があるから亜人なのかな。

二人組は人だかりの一部に話を聞き、男の方ががこちらへと向かってくる。

女の方は、他の野次馬から話を聞いていた。

『ふんふん、やっぱり俺の世界に近いね。個人が強くなるというより、兵器が発達して、組織で強くなってる方向性だ』

すぐ近くを通る亜人を見て、シユウはそう説明した。

私から見ても、亜人に強い印象はない。

服装も厚めの一般的な小ぎれいなもので、鎧や籠手はつけていないし、武器も腰に下げた棒きれ一つだ。

『いや、棒と反対側のホルダーに入ってるけど鎮圧用だろうね』

ふーん。

モンスターとか出てきたらどうするんだろうか。鎮圧できるの。

『そういうのがいない世界なんじゃない。いるかもしれないけど表にはほとんど出てこないとか』

つまらない世界だなあ。

早く帰りたい。

目の前の亜人が肩あたりにとりつけた小さな黒箱に、翻訳されない言葉をずらずらと告げている。

逆に小さな黒箱からも何度か聞き慣れない声が出てきていた。

『あのガキども。何か変なの持つてるな』

あのガキどもつてどの子供のことよ？

『向かいの通りの亜人警官が聞き取りしてるグループ。その右端にいる少女三人』

ああ、なんか子供たちがいるな。

三人で何か話をしてるように見えるぞ。微笑ましいじゃないか。『内容は把握できないけど、三人だけの会話量じゃない。何かと話してる。各人が着けてる髪飾りに、ブレスレット、イヤリング、どれもアナライズが通らない。生命体だな。ふむ、そんな世界かな』
どんな世界なのかな？

『説明するよりも見てもらった方が早い』

何を見ろと言うのか。

『監視側に動きがあった。空間反応あり。来るよ。道の真ん中だね』
見ると、道の真ん中の上に大きな輪っかができている。

輪っかの内側から何か大きな足が出てきて、その後で、胴体、腕、頭と出てきた。

大きさは高さも横幅も私の倍はあるだろう。

見るからにモンスターだ。手に武器を持っていないが、その大きさだけで十分な武器になり得る。

人型のモンスターだが、目は四つに、頭は禿げており、やや凶暴に見える。

変な声も出しているが、それが言葉かどうかはわからない。

いいじゃん、いいじゃん！

モンスターいないって言ってたけど、ちゃんといるじゃん！

ダンジョンもあるかもしれんぞ。それで、これは私が戦ってしまっても良いのか。

『駄目。ちよつと様子見して。それに戦いにならないよ。せいぜい初級だ』

周囲の人だかりが叫びを上げ、亜人の衛兵も小さな黒箱に矢継ぎ早に声を吹き込んでいる。

一人の亜人が一般人に大声を告げて指を指し示す。逃げろということだろう。

もう一人の亜人は短い棒と、シュウの言うもう片方の武器を手にし

た。

短い棒は伸び、もう片方は何か平べったい板だ。

平べったい板から、紫色の光が生じてモンスターへと向かう。

光はモンスターを貫き、モンスターの動きが止まった。

『魔力を変換して攻撃できるのね。動力源はなんだろう』

モンスターが止まったのもつかの間であり、すぐに動き出す。あまり効いてないな。

亜人は後退しつつ、何度も光を繰り返した。

『意味ないね。出力が弱すぎる。しよせんは鎮圧用だ』

もう見飽きたんだけど、これからどうなるの？

『そろそろ言うと思った。次の役者が出てくるよ。ほら、モンスターの後ろの道を見ておくと良い』

言われてモンスターの後ろのあたりを見ると、三つの影が、建物の影から出てきた。

人だがその身長はかなり小さい。モンスターどころか私よりも小さい。

……あれ？　　というかさっきの少女三人組じゃないか。

『そうだね』

服装がさつきと明らかに違う。

なんかひらひらした服装に着替えている。

手にはそれぞれ手甲、光るブレスレット、ハンドボウを持つ。

なんか弱そうだな。

ハンドボウを持った少女が、矢をモンスターに撃ち放った。

黄色に光る矢がモンスターの腕を貫く。

『なんで腕を狙うんだ。胴体を狙えよ、それか足を』

思ったよりも強いことに驚いた。

ダメージがようやくモンスターに通ったな。

モンスターの注意も亜人から後ろの少女たちに向いた。

魔法少女達は、亜人に向けて声をかけ、亜人はモンスターから離れるように動く。

『「ここは私たちが引き受けます。住民の避難をお願いします」ってと

ころかな』

ふむふむ。

それでこの少女達はいったいなんなの？

『ここはね。魔法少女の世界だよ』

魔法少女？

魔法を使う少女の世界ってこと？

『ちよつと違うけどそんな感じ』

なんで着替える必要があるの？

最初から普通の服で戦えばいいんじゃないの。戦いづらそうだぞ。

『それ、聞いちゃいけないやつ。仕様ですね。彼女たちの存在意義ってやつかな。ほら、倒したよ』

あつという間にひらひらの少女たちがモンスターを倒していた。

倒したモンスターから何かキラキラした……硬貨かな。

少女たちは硬貨を拾って喜んでいる。

『なぶり殺した生きものからお金を奪って喜ぶとか、魔法少女界の闇だろ』

表現の仕方の問題ではないだろうか。

明確な悪意が感じられる言い方だ。

『油断しすぎだね。まだまだこれからなのに』

シユウが呟くと、空中にいくつも輪っかが浮かび上がった。

輪っかから先ほどのモンスターが何体も下りてくる。

ちようど少女たちを囲む形となり、少女たちは互いに背を向けて包

囲に備える。

『包囲された時点でもう手遅れだよ。包囲されないように備えるべきだろうに』

なかなか手厳しいな。

それでも戦力差は大きいから、包囲されてもさほど苦戦もしないんじゃないか。

『それはどうかな。優秀な指揮官がいれば羊の群れも狼を駆逐するよ』

突如、よくわからない声が聞こえた。

道から生えているよくわからない細い棒の先端に、ヘンテコな姿の男が立っている。

服は正装のようだが、笑った顔の仮面に、背の高い帽子をかぶり、手にはステッキを握る。

少女たちも変な男に気づき、何やら会話を交わしている。

話し合いは決裂したようで、変な男がステッキを少女たちに向けるとモンスターが少女たちへ動き始める。

『苦戦してる。バランスも悪いよね。格闘接近攻撃、中距離遠隔攻撃、遠距離魔法攻撃と全員攻撃に振ってる。それぞれが際立てば強いだろうけど、今の連携と練度じゃあね。せめて補助が一人は欲しい』不思議だな。

武器の威力だけだと少女たちの方がずっと強いのに。

『変人の指揮が二、三枚は上手だからね。飛ばれるのを見ててもいいんだけど……さて、どうしようかな』

私はそんな趣味ないぞ。

加勢するべきか。

『あまり姿を晒すのもなあ。ヘンテコ男が立ってる棒のところに行つて。地面に落としてやろう』

言われて、行ってみると、次は棒を斬るように指示された。

そのまま棒を斬ると、ヘンテコ男は驚いた様子だが、地面にはなんとか着地した。

変な男のモンスターへの指示が乱れ、少女たちはそのチャンスを見事にものにした。

少女たちがモンスターを全て倒し、ヘンテコ男と少女たちが対峙する。

ヘンテコ男はけっこう強いな。

少女たちの攻撃を一人で軽々と捌いているぞ。

『そこそこ強いよ。中級の上位はあるかな。少女たちは初級と中級の間だね』

ヘンテコ男が懐から何かを取り出すと、男のすぐ近くに大きな輪っかができあがった。

その輪っかを男はくぐり、姿を消してしまった。

『魔法少女の相手はおまけだったからね。本命はメル姐さんの監視だった。さて、追おうか』

私を監視してたの？

『うん。竜女の店から出て、すぐに現れてこつちを見てたね。ステルスで姿を消してからは魔法少女に狙いを変えた。姿の消えたメル姐さんを追いかけるよりも、騒ぎを起こしておびき出す方向に変えたんでしよう。ほら、輪っかが消えてない。誘いに乗ってあげよう』
なるほどな。

じゃあ、行くとしようか。

足を踏み込もうとしたところで、少女たちが何か奇声を上げて輪っかへと走り出した。

そのまま三人の姿が輪っかへと消えてしまう。

『ちよつと考えが足りないね。勢いだけで生きてる。とりあえず追ってみて』

はいはい。

輪っかに入ると、場所が一気に変わった。

どうやら転移の魔法だな。

荒野だ。

魔法少女三人だけが突っ立っていて、さっきの男の姿がない。

さらに少女たちの奥に見える景色が気になる。

なんかドデカイ城があるぞ。わくわくしてきた。

『いかにもって感じの悪の拠点だね。ちなみにこの空間は半端ないよ』

この空間って？

『さっき転移魔法って言ってたけど、正確には転移魔法じゃない。地上のある点Aから地上の別の点Bに物体を移すのが転移』

じゃあ、これは転移でしょ？

『違う。ここは地上にある点じゃない。空間自体を地上とは別に作り上げてる。素晴らしいね。超上級の空間魔法使いがいるよ』

おお。なんかよくわからんがすごそう。

異世界に來た途端にすごいのに巻き込まれてしまったな。

『その魔法少女たちは輪っかから帰ってもらって。超上級ダンジョンに中級成り立てパーティーが入ってるもんだ』

それはまずいな。

姿が消えてるのを良いことに後ろから少女の一人を掴んでそのまま輪っかに向かつて放り投げる。

小さな叫び声を残して一人が消えた。

残った二人は、消えた一人を目で追い、すぐに私の方へ武器を構えた。

『あ、ステルスが切れた。今のは攻撃とみなされるらしい。このあたりの判定がよくわからないね。さっきの電灯を切ったのは攻撃じゃないと判断されるし』

そうだな。

見られてしまったが仕方ない。残る二人も帰ってもらおう。

先に動いたのは手甲の少女だ。

右に左にと動いて私へと向かってくる。

お、すごい。姿が増えたぞ。

『残像が作れるのね。ちなみに本体は上から跳び蹴りしてくるよ』

あ、ほんとだ。

上を見れば、足を伸ばしてこちらへと向かってきている。

避けるのもあれだし、手で止めるか。

『いや、ブレスレットの奴が魔法で攻撃してくるから避けるべき。あ、もう遅いな』

ブレスレットの少女が氷の弾をこちらへ撃ってきたので、飛び蹴りを止める手と逆の手で氷弾をたたき落とす。

撃ってきたブレスレットの少女は驚いた様子である。

『あ』

あ？ あ。

シユウの抜けた声に私も気づく。

跳び蹴りを止めようとした手がズレてしまった。

蹴りを手で止めることはできなかったが、その足は軽く避けること

ができた。

問題は止めようとしていた手だ。

少女の股間にその手があたった。

何か鈍い音と嫌な手応えを感じる。

『ビビが入ったと思われる。折れてるかも』

マジで？

少女はうめき声を上げて、うずくまっている。

どうやら本当のようだ。大丈夫かと声をかけると、果敢にも反撃してきた。

『果敢というか健気というか。早く病院に行って治療してもらった方が良い。めちやくちや痛いはず』

そうだな。

立ち上がった手甲の少女が私の周囲を高速で移動する。

残像がいくつもできていく。

『残像はブレスレットの少女を隠すためだね。魔法攻撃を飛ばしてくるよ。ほら、左』

飛んできた雷の弾を手で払いのける。

『あ』

またしても、シユウの抜けた声だ。

連続なのは珍しい。

あ。

私もわかった。

弾いた雷弾が手甲の少女に直撃した。

あばばば、と叫び声が広い荒野に虚しく響き渡る。

『なんかお互いに相性が悪いね。波長が合わないというか。互いのやることなすことが悪影響を及ぼし合うというか。確かに魔法少女と冒険者が一緒に出てくる作品ってあんまり見たことないからなあ。そのせいかも』

そのせいがどのせいかはわからないが、とりあえず倒れているうちに外へ出してしまおうか。

『いや、その必要はないよ。今度こそ避けてね』

何を、と聞き返す前に黄色く光る矢が飛んできた。

軽く屈んで避けると、最初に外へ引つ張り出した少女が戻ってきていた。

状況を見て、今度はさすがに撤退を選んだらしい。

ブレスレットの少女が、倒れた手甲の少女を引きずって輪っかへ移動している。

手伝うのも違うと感じたので、矢をひたすら避けながら彼女たちが無事に消えるのを見届けた。

輪っかも少女たちの帰還とともに消えた。

よし！

これで心おきなくあの城の攻略ができるな！

城に到着すると、無駄に大きな門が勝手に開いた。

いいね、いいね。

「自信があるなら挑んで来いよ」って挑発されてる感じだ。

『ちよつと雰囲気が違うような。戦うなら外の荒野で戦う方が楽だろうし』

それは……、そうだな。

戦いの痕跡が私たち以外のもいくつもあった。

『気になってることが他にもある。魔法少女とモンスター側で魔法の形態が違う』

魔法少女はなんか武器を使ってきたな。

モンスター側のステッキを持った男も何か変なアイテムを使ってたぞ。

『あれはこの主の魔法を入れたモノ。あいつ自体はモンスターの操作がメインのはず。モンスターたちは魔力の消費で動いてた。メル姐さんの世界に近い。一方で、魔法少女はデバイスを通して、よくわからない魔力源から発動されてる。あの指揮官はどっちだろうかな』
それが違うとどうだと言うんだ？

『魔法形態の在り方は世界の在り方と言って良い。つまり、モンスター側が異世界から来てる可能性がある。あるいはその逆か』

ふーむ。

そつちはよくわからないが、私にとって残念なことがある。

『そうだね。歓迎されてるとまではいかないけど、少なくとも敵対ではないね』

周囲にはモンスターが数多く並んでいる。

門が異常に大きいのも得心がいった。大きいモンスターがいるからだ。

先ほどのステツキを持った男もいる。人の姿だが、実はモンスターなのかもしれない。

案内に従って道を進めば、奥にはボスっぽいモンスターが堂々と待ち受けている。

あーあ、なんで襲いかかってこないんだろう。

せつかくのダンジョンなのに、ボスまで一直線ってどういうことよ。

ボスが何かを喋るが聞き取れないので適当に頷いた返す。

うんうんと言っていると、横にいたモンスターの列から一体が私の近くに来た。

『戦うみたいだよ。力を試されてるのかな』

訳がわからんな。

奥まで案内されて、モンスターと戦わされるとか。

こんなにわんさかいるのになあんでわざわざ一体一体と戦わなきゃならんのじゃ。

『まあまあ、そこそこ強そうだよ。あ、でも駄目だ。瞬殺だ』

大きなムカデのようなモンスターが何かを呟くが、何も起きない。

こちらへと一気に近寄ってきたので、そのままシユウで頭を突き刺す。

何だったんだ？

新手の自殺志願者か。

『能力低下の魔法をメル姐さんにかけてけど無効化。それに気づかない哀れなムカデが毒の牙で攻撃してきた。その結果がアイテム結晶』なるほどな。

領きつつアイテム結晶を回収する。

王座に腰掛けるボスは、その光景を見て、私に何か声をかける。何を言ってるのかよくわからないので、またしても適当に頷いておく。

ボスの雰囲気が変わり、席を立ち、威風を持って周囲に声をかけた。周囲もそれぞれの形でその声に賛同している。

『メル姐さんの仲間入りを歓迎してくれてるみたいだよ』
なんかそんな感じだな。

仲間になんてなりたくない。むしろ敵対してくれたほうが楽しそうだ。

まあ、でも、受け入れられている感覚は悪くないな。

ボスが何か叫び、周囲も同じ名前を叫んでいる。

『あ、翻訳スキルゲット』

ちようどいいじゃないか。

こいつらは何を言ってるんだ。

「新たな幹部——悪臭候、バンザーイ！ 悪臭候、バンザーイ！」

「悪臭候！ 悪臭候！ 悪臭候！ 悪臭候！」

……………どういうこと？

『おそらくですね。幹部の一員として迎え入れられたのかと思います』

名前の方を聞いてるんだ。

『メル姐さんの名前がわからないから、その特徴をですね、ええ、当てはめたのではないかと思います』

ふーん、そう、そうなのね。

『あの、メル姐さん』

なんだ、言ってみろ。

言葉はよく選ぶべきだぞ。機嫌が悪いからな。

『普段、ダンジョンとかでは使えない危ないチートスキルがいくつかあって、その実戦データが取りたいなあって思うんですが。ほら、ここ、作られた空間だから、周囲に影響が出ない素晴らしいテスト空間なんだよね』

……ほう。

使った場合、こいつらはどうなる？

『彼らはちよつと、その、口にするのも憚られるような悲惨な体験をすることになる。あ、もちろんメル姐さんは大丈夫だから』

いいじゃないか。

やるなら徹底的にやれよ。

『やったー！』

「おや、悪臭候。卿の言葉がわかるぞ。話せたのか。では、幹部となつた抱負を述べるが良い」

じゃあ、お言葉に甘えて一言だけ。

——お前ら全員皆殺しだ。

『「時空震+」オン』

景色が、歪み始めた。

4. 普通の少女が現れた

ときどき我を忘れて怒り、とんでもない行動をすることがある。

後から思い返すと、どうしてあんなことをしてしまったのかと恥ずかしい思いになる。

でも、そのときはそれが正しいと思っていたから、恥ずかしいと思いつつも反省はしない。

まさに今がそんな状況である。

荒野の真ん中に突っ立って、先ほどまで建っていた立派な城を見返す。

今は城のサイズが半分にされ、上から下に落ちて、また上から現れて下に落ちる、その繰り返しだ。

どうしてあんなことになったのかはわからないし、やりすぎだと思ふが止める気はない。

『良いデータが取れた。ほっこり』

とても満足している様子だ。

ちなみに城の半分はどこに行ったんだ？

『俺もわからないんだよね。やっぱり時空震はそう簡単にはできないね。テスト空間を飛び越えてどこかに行っちゃったんだ』

どこかに行ったなら仕方ないな。

これからどうする？

『ここから出るとしようかな』

あれは？

落ち続ける城を示す。

『ほっとけばいいよ。ボスもそのうち気づくよ。この空間はもう消すしかないって。作り直すのは大変な時間と労力が必要でしょうねえ』
あつそう。

じゃあ、ほっとこう。

『出るとしよう。ほい』

うおっ。

地面が突如消え、落ちていったが、すぐに地面たどり着いた。

ただっぴろい荒野も消えてしまっている。

建物が並んでいる場所に戻ってきたようだ。

昼とまったく同じ場所ではなさそうだが、街並みはよく似ていて区別がつかない。

時間は夜のようだが、道には点々と黄色みがかった明かりが灯されている。

通りに人はいないが、あちらこちらから喧噪が聞こえてきており静かではない。

あまり良い賑わいではなさそうだ。心なしか戦闘音に聞こえるが……。

『嫌な予感がする』

通りを進み、曲がり角で光のある方向を見る。

どこかで見た見たシルエットが、いくつもの光で照らされていた。

『……やっちゃった』

モンスターたちの住んでいた城が、反対向きになって街に刺さっている。

荒野の中にあるとドデカい城だと思ったが、街の中にあると他の建築物に塗れてあまり大きくないことに気づく。

高さは同じくらいだったんだな。横幅はさすがにあの城の方がずっと大きい。

『現実逃避してるところ悪いけど、モンスターが城から飛び出てる』
今もライトがあたってシルエットが城に浮かんでいた。

それどころか私の目の前を通り越して走り抜けるモンスターもいるくらいだ。

あちらこちらで光が瞬き、戦闘が行われているとわかる。

夜はあまり賑やかでない方が好きだ。

『じゃあ、夜の静謐を取り戻しに行こう』

まあ、私たちが起こした騒乱なんだけどな。

『マッチポンプしようぜ』

こうして私たちは騒乱の中心に足を踏み入れた。

騒乱に足を踏み入れたのは良いのだが上手くないかない。

まずモンスターに出会うと、モンスターが私を見て逃げる。

それに私がモンスターを倒したところで、また復活するから意味があまりない。

モンスターどころか魔法少女にもモンスター扱いされて襲われる。

もしくは、一般人扱いされて避難誘導されてしまう。

というか魔法少女と聞いていたから、全員少女かと思ってたら普通におっさんとかいたぞ。

全然、魔法「少女」じゃないじゃん。

『誤解してる。「魔法」を使う「少女」じゃない。「魔法少女」で一単語なの』

えええ。

『最初はメル姐さんの思っているとおり魔法を使う少女だったよ。でも、長い時代を経て「魔法少女」になった』

それなら魔法を使ってたら何でも魔法少女じゃん。

『違う。概ねこれを満たせばって定義はある。一つ。通常の世界とは

異なる力を扱う』

そうだな。

なんか強い武器を使ってたな。

『二つ目。使い魔がいる。今回で言えば武器になってたやつだと思
う。声は聞こえなかったけど、会話をしてる雰囲気があったし、生命
体だったから』

はあ、そうなの。

『三つ目は魔法を使う際は変身すること』

なんで？ って聞いちや駄目なんだっけ。

『その通り、そういうものなの。で、最後の一つ。戦うこと』
戦ってたね。

最後の「戦う」はいらないんじゃないの。

『戦わなかったらただの日常系じゃん。コスプレ魔法使いで終わる
話』

訳がわからない。

『フィーリングなんだ。上の四つを満たすなら別に少女である必要は
ない。まあ、実はもう一個重要なものがあるんだけど、それはいいや』
ますます訳がわからなくなった。

なんで、この世界の奴らはそんな定義を作ったんだ。おかしいだ
ろ。

『いやいや、彼らの組織は「マジック・スレイヤーズ」ってのが正式名
称らしいよ。俺が翻訳スキルで魔法少女に変えてるだけ』

やっぱりそうだ。お前の世界がおかしいんだな。

それよりそろそろ、この混乱をどう収めるかに話をもどしたいんだ
が。

『もう諦めよう。無理だ。全部消すならできるけど、さすがにまずい。
だいたい、どうせいつかは戦いあう宿命の奴らだよ。時期が早まった
ということかどうか一つ』

何がどうか一つなのか。

『周囲を散歩でもしとこう。城で硬貨も手に入っだし、喧噪から離れ
た店で何かおいしいもんでも食べたり飲んだりしよう』

本当に事態を收拾する気がない。
かくいう私もなくなっている。疲れたし、おいしいものを食べよう
という意見に賛成だ。

『行こう行こう。道すがら暴れてるモンスターを倒していけば良い』
そうだな。

店を探し求め、騒ぎの中心から離れていくとモンスターを見つけ
た。

周囲の人々は叫び声を上げてあちこちに逃げている。
こりや、店はやってないな。

「ここまでですー！」

モンスターの前に、一人の少女が立ちはだかっていた。

体躯は脅威よりもずっと小さく、手に持つ杖は木の枝のように頼り
ない。

「ここは通しませんー！」

叫んではいるものの、声はうわずっているし、足は震えている。

大丈夫なのか、あれ？ 弱そうだぞ。

『弱い。そもそも魔法少女じゃない。おもちゃの杖を持ったただのガ
キ』

……あ、そうなの。

どうしてあの少女は逃げないんだ？

「尋ねてみたら」

それもそうだ。

どっちにしろまずい状況だしな。助けよう。

少女へと近づき、モンスターの振るわれた腕をシユウで止める。

モンスターは予想外の方向から腕が止められたことに驚き、私を確
認して驚きをさらに数倍にしていた。

どうやら城で巻き込まれた奴だったらしい。

逃げないのか？

少女に尋ねたつもりだった。

しかし、少女は目を瞑って立ち尽くしている。

一方のモンスターは自分に尋ねられたと勘違いしたのか慌てて逃

げ出した。

『麻痺つけるから軽く斬って』

斬られたモンスターはすぐにその場で崩れ落ちて動かなくなった。さて、少女である。いまだに目を瞑っている。

もう大丈夫だぞ。

少女の肩を軽く叩くとようやく目を開いた。

腰が抜けたようでその場で崩れ落ちてしまう。

大丈夫か、と問いかけるとわずかに首を頷かせるので大丈夫なんだろう。

『いや、大丈夫じゃないよ。心拍数が上がりすぎてる。右にあるファミレスっぽい店に入って落ち着かせよう』

ふあみ……？

とりあえず、すぐ側の店のことだろう。

混乱している状況の中、店に入ってみるが、店員以外は誰もいない。そりやそうだろうな。

『目の前であんなモンスターが出ればね。店員が逃げてないのがすごい。社畜の生き見本だ』

よくわからんので、机の上にあったメニューとやらからシユウが言ったものを、いくつか店員に伝える。

反対側に座った少女は今も放心状態でぼんやりしている。

本当に大丈夫なのか。

『ちよつと時間がかかるね。ドリンクがくるだろうから、話はその後にしてあげて』

あいあい。

店員が元気な声で飲みものを置いていく。

すごいな、きれいな透き通った容器だ。飲み物の色がよく見える。めちやくちや高いだろこれ。

あの店員もただものじゃない。

元の世界でもモンスターが出たすぐ側であんな対応はできんぞ。

この世界の住人——なかなかバカにできない。

『元の世界は危険がすぐ間近にあったからね。この世界や俺達の世界

なら不思議じゃない。日常と危険が切り離されてるから。あの店員は、今の状況がどれだけ危険かって実感がうまくできてないだけ。それよりドリンクを渡してあげて』

ほれ。

飲んでけ。

少女に飲みものを渡してやる。

ぼんやりしたままで、ドリンクを少しずつ飲み始めた。

少し意識が戻り始めたところで尋ねてみる。

どうして逃げなかったんだ？

「……ごめんなさい」

……ん？

『なじられたと勘違いしてる。「どうしてあんな危険な状況で、碌な力も持たねえクソガキが出しゃばってんだ。家に引っ込んでろよ」って』

ああ。

いや、別に詰問してるわけじゃない。

単純に質問なんだ。他の奴らは逃げてただろ。大人だってそうだ。

「魔法少女は逃げちゃ駄目だって。街の人を守るのが魔法少女の役目だからって」

でも、お前は魔法少女じゃないんだろ。

どうしてあの場でモンスターの立ち向かったのかなって思ってたな。

「お母さん、教えてくれた。力が使えるから魔法少女なんじゃないって」

『魔法少女役割説。そういうのもあるね』

わからん。

少女も上手く説明できないようである。

『冒険者ギルドに属してないけど冒険者を名乗る奴がいる』
いるね。

たまに勝手にダンジョンに潜って問題になってる。

『彼らは冒険者か、否か？』

ああ、なんとなく言いたいことがわかった。

『もつと言え、元の世界以外に冒険者ギルドはほほない。似たようなのはあるけど。でも、メル姐さんは異世界でも自己紹介で「冒険者」を名乗る。そんな話。生き方と言っても良いね』
なるほどな。

つまり、この少女は魔法を使えないが魔法少女だと。

……定義から逸れてないか？

『まあ、そうね。でも、明確な定義がないなら、けつきよく本人の自己満足だと思うよ。魔法少女は街の人を守るのが役割だと、このガキンチヨは考えてる。そして、自分が魔法少女だとも信じてる。だから、街の人が逃げる時間を作るためモンスターに立ちはだかった』

なんと、立派じゃあないか。

お前は魔法少女なんだな。

「うん。お姉さんでしょ」

いや、私は魔法少女じゃないな。

冒険者をしている。

「冒険者？」

ああ。

あつちこつちのダンジョンに潜ってる。

「ダンジョン？」

まあ、この世界で言えば変わったところかな。

モンスターとかを倒してるんだ。

「すごいー」

そうだろう。

『敵のアジトで大暴れ、そのアジトの半分を街に落として、混乱を引き起こしてるんだ』

言い方が……。

まあ、そうなんだけどね。そうなんだよなあ。

ちなみに少女の名前はアサナというらしい。

今は初等学校とかいうのに通っているとか、こんな小さいころから勉強とは。熱心だな。

ふと考えればもう夜遅いはず。

両親は心配してないかと尋ねたが、母親は二年前に病気で死に、父親は仕事で夜遅くまで帰ってこないらしい。

しかも、父親が魔法少女関係の仕事で、何か問題が起けると数日は帰らないこともあるとか。

けっこう大変な家庭だな。

その話のついでで、泊まるところを探さないといけないという話をしたら、アサナの家で泊めてもらえることになった。

ご飯も食べたし、すぐ近くなので一緒に家まで行く。

空の一角が明るく、音もまだ響きわたる。

魔法少女とモンスターの戦いはまだ続いているようだ。

翌朝になり、外を見てみればだいぶ落ち着いている様子である。

どうやら魔法少女たちは無事にモンスターから街を守ることに成功したらしい。

調理場の方に行けば、アサナがすでに食事を用意してくれていた。もぐもぐとパンを食べつつ、映像とやら出てくる板を二人で眺める。

何度かアサナが映像を切り替えたが、どう変わっても城とモンスターの話で持ちきりだ。

いろんな人間やら亜人が、様々な憶測を並び立てている。

ぼんやり聞いていたが、どれも全て間違っていたのでなかなか面白い。

アサナは父親に連絡をしたらしいが、忙しいのか繋がらないらしい。

そりゃ、こんだけのことになればなあ。

シユウが情報を集めたいというので、図書館に行くことが決定した。

アサナは「外出禁止令が出てる」と主張していたが、なんだかんだで着いてくることになった。

そして――、

『まあ、そうだよな。外出禁止なんだから来る奴もいない。開ける意

味が無い』

図書館は閉館だった。

わかってたならそう言えよ。それでどうする。

もう帰るか。だがなあ、帰ってもやることがないんだよなあ……。

よし、モンスターでも狩るか。

「えっ」

アサナは驚いている。持っていた杖を両手で握りしめている。

そういえば、その杖は持ってくる必要あったの？

「魔法少女だから」

うーん。

ただの棒を持って言われてもな。

だいたいその杖の先端に付いてる赤いのはなんなの？ 桃？

「ハートだよ」

何を言ってるの、ときよんとしている。

ハート？ 心臓のこと？

何それ、何で心臓が杖の先端に？

この世界だとそういうのは当たり前のことなの？

『まあ、心や愛の形っていうのかな。元は心臓つてのが一般的だけどね』

なんで心臓が愛やら心の形になるんだ。

『うーん。純粹に湧き出る疑問はなかなか答えづらいものがある』

ハートはひとまず置こう。

お前が魔法少女なのはわかったが、力が必要だと思うぞ。

「これじゃ、だめ？ お母さんがくれた杖」

うーん、魔法使いが似たような杖を持ってるけどなあ。

なんか似たようなのはなかったっけ？

『あるけど、似たような杖じゃ意味がない。その杖に思い入れがあるようだからね。その杖に効果を付与するとかしないといけない』

それもそうだな。

で、どうすりゃいいの？

『やり方はいくらかあるっちゃあるけど、本当に力が欲しいの？ お

すすめはしないよ』

それは私だって理解しているが、身を守る力くらいはあってもいいだろ。

『身を守る力の程度が知りたいところだね。いちおう本人に聞いてみて。力を手に入れるとどうなるか。痛い目に遭うこともあるだろう、街の人を守れず責められることもあるだろう、魔法少女の実体と理想にズレで苦しくなることもあるだろう。——それでも力が欲しいかって』

なんでそんなにプレッシャーかけるの。

もつと気楽に考えればいいじゃん。

その杖に力が付けられるかもしれないが、どうする？

「この杖が、カタリストになるの？」

カタリストが何か知らないけど、そうらしい。

「欲しい！」

だ、そうだぞ。

『カタリストねえ。そうするとただの付与じゃダメだな』

ダメだって。

「だめ、なの……？」

いや、そんな露骨に悲しまれても……、カタリストとか私は知らないし。

なんとかできないの？

『……できるかもしれないけど、後悔するからやめといた方がいいよ』

後悔するそうだぞ。

「私、魔法少女になりたい」

だってさ。

『もう魔法少女でしょ。まあ、名実ともになりたいってのはわかるんだけど……、やれやれこの俺が淫獣の立場になるとはね。杖を渡して僕と契約するんだ』

何を言ってるんだ。

『しかし、カタリスト——触媒ねえ。あんまり良さそうなものじゃないなあ』

ぶつぶつ言いながら案内されたのは、昨日の出発地点である。
すなわち、竜女の店だ。

ここはなるべく関わり合わずにいこうと言ってなかったか。

『そうなんだけど、いくつか気になることがあってね。こいつの仕業か知っておきたい』

はあ。

店に入ると、何か変な音が鳴った。

奥からすごい面倒くさそうな顔をして女が出てくる。

「あれ？　なんだあんたか。出口はまだできてないよ。今は構想の段階だ」

『まだ構想してるの。卒業制作じゃないんだからとつとと出口作ってよ』

ほんとにな。

別にゴミ入れでも全然かまわない。

というか、今日は普通の人間みたいな格好だな。

「接客はこの姿さ。そつちの子供は？」

ああ、こいつは……、おい、大丈夫か。

アサナが私の足にもたれかかっていた。

表情も良いとは言えない。

『まあ、普通の人間ならこうなるよな』

「奥で休ませた方がいいね」
どうということ。

『ここは人間がいて良い場所じゃないってこと。特にこのフロアはね』

えっ、なに。

やばいと聞いてたけど、ここの商品ってそんな体調が悪くなるほどやばいの。

『俺がドン引きするほどにはね』

お前がドン引きって。

相当だな。

そんな訳で奥の工房にやってきた。

壁一面に、昨日はなかった大きな図が貼られている。

「どうだい。あんたが通る帰りの出口だ！ 最初は――」

あつ、説明はいらない。

見ればわかる。

ちよつと残念そうである。

こういう奴はだいたい解説がしたいんだよな。

でも、見ればわかる。

大きなドクロが口を開いてその先に扉があった。趣味が悪い。

「それで何か用事だったのかい」

まあ、そうかな。

このおもちやの杖を魔法少女が持つやつにできるかな、と。

「カタリストね。できるよ。ただ、材料があるね。まずコインだ。コ

インはわかるかな。キナメリアにしかないものだから」

これか？

昨日、たくさん拾ったぞ。

「ああ、これこれ。大量だね。婆の力か……。どうでもいいね。一掴みほどあれば何とでもなる。あとは材料だね。その材料によって、この杖に付与される効果が決まる。あ、チンケな材料ならよしてくれよ。こつちも馬鹿馬鹿しくなるからね」

エンチャントみたいなものだな。

どれにしようか。そこそこの材料が必要らしいぞ。

『身を守る力つてどれくらいを想定してる？』

昨日の城のボスとまともに戦えるくらいかな。

『それ、世界の四分の一なら支配できうるレベルなんだけど……。試しにしてみるか。特殊ボス番地の「グ」から「謎の正八面体」を取って』

「ごそごそとアイテム袋を漁る。

最近整理を怠っていたため、探すのに手間取るな。

ようやく見つけ、結晶を解除して、机によくわからない謎の正八面体を置いた。

「いいじゃないか！ すごく良い！ どこで手に入れたんだい、こん

な良物！ やる気が湧いてくるね！ ちょっと待ってな！」

竜女はめちやくちやご機嫌である。

杖を右手に持ち、左手に謎の正八面体を、背中から生えてきた手で硬貨を惜しげなく驚掴みにする。

一瞬で、硬貨と正八面体が消えた。

『そんな簡単に合成できちゃうの。ずるくない？』

え、もう終わり？

『杖が解析できなくなってる。おそらくカタリストって奴になったんだと思う』

見た感じは特に変わってないな。

「やっぱりそうだよね！ 見た目が頼りないね！ 任せときな！」

待った。もう触らないで。

見た目はいじつちや駄目。たぶん泣く。

『珍しく正しい』

竜女はごねていたが、すぐに杖に興味をなくした。

シユウと難しいような話をしているが、さほど興味もないのでアサナの容態を見ておく。

どうも寝てしまったようだ。顔色は悪くない。今のところは大丈夫そうな気配だな。

シユウと竜女の話が終わり、竜女は出口の構想に戻ってしまった。

ここにいってもどうしようもないので、眠っているアサナを背負って外に出る。

道を目的もなく歩いているとアサナが目を覚ました。

「……ん？」

おう、目が覚めたか。

カタリストとかいうのが完成したっぽいぞ。

「え、ほんとー！」

片手に持っていた杖を渡す。

自分の足で地に立って、杖を見つめる。

「あなた、グリフォスっていうのね。私はアサナ」

何かと話しているようだが、相手の声はまったく聞こえない。

シユウと同じようなものなのだろうか。

『たぶん触っても聞き取れないよ。世界独自のものだね。昨日の魔法少女たちはそれぞれで話してたからね。たぶん魔法少女の才能がないと聞き取るのは無理なんじゃないかな。それより忠告しといて。絶対に攻撃の意志を持つなって。攻撃しかけたら相手どころか周囲が惨いことになる。間違いない』

なんでそんなものを付与しちゃったの？

『昨日のボスと戦えるやつってリクエストを出したのはメル姐さんじゃん。ちよつと奮発しすぎたのは認める。でも、危険すぎて使いたころがないアイテムだったからね。元の世界でも危険人物のお守りをしてたから大丈夫でしょう』

そういやそうだった。あれってあの月にいた奴だよな。

実際のところ、この杖は強いのか。

『解析できないけど、凄まじいと思うよ。たぶんこの世界で一番ぶつ飛んだ杖じゃないかな。少女と杖の年齢を合わせると約四十五億歳になるから。それより早く忠告を——、ああ、もう遅いな』

後ろから、けたたましい音が鳴り、見ると衛兵の乗る箱があった。

赤と青の光を見せつけながら、こちらに向かってくる。

「その二人組。動かないで！」

大きな声が発せられる。

周囲に人はいないので二人組というのは私たちのことだろう。

『昨日と同じ二人組だな。タイミング悪すぎだろ。同情せざるを得ない』

箱を私たちの横に駐めて、二人仲良く下りてくる。

「魔法少女？」

「うん！」

アサナが自信満々に答えた。

「あなたは？」

まあ、魔法少女みたいなものかな。

変な力も使えるし、使い魔っぽいのもいるし、戦うし、でも変身はしないか。

「変身は……、してるでしょ？　魔法少女の身分証を見せてもらえる？」

魔法少女に身分証なんてあるのか。

冒険者にもあるからな。魔法少女にあってもおかしくないか。

私は持つてない。冒険者証じゃ駄目か？

「あなたは両手を壁につけて動かないで。あなたは持つてる？」

片方の衛兵が私に近寄ってくる。大人しく両手を壁につけておく。

一方、アサナの方には優しく尋ねている。

「持つてないです」

そいつは、さつき魔法少女になったばかりだからな。

これから取るんだ。で、どこでその身分証とやらは取れるんだ？

「さつき？　二人はどういう関係？　その杖はカタリストみたいだけ

ど、どこで手に入れたの？」

質問が多いな。

そろそろ言った方が良いのか。

『もつと早くても良かったよ』

「ここは危ないから早く話して」

そうだな。

お前らの後ろにもその危ないのが来てるぞ。

「はいはい。そうやって私たちが後ろを見たところで逃げるつもりで

しょ。その手には乗らないから」

本当なだけだな。

まだ道の向かい側だけど、昨日の奴よりは強そうだ。

私たち以外の足音が聞こえ、衛兵二人組はようやく後ろを向いてそ

の脅威に気づいた。

「下がって！　本部！　こちら南三等地第八道路！　ワルグチーを確

認。魔法少女に出勤要請を！」

ワルグチーって何？

『あのモンスターたちの名称。正式にはクリミナル・デンジャラス・モンスターみたいなヘンテコな名前が付けられてるんだけど長いしわかりづらいでしょ。短い方が良いかと思ってそう翻訳するようにし

てる』

確かにわかりやすいけど、緊張感が薄まるな。

『魔法少女の敵役って、だいたいそんなもんだよ』

なんだかなあ。

衛兵二人組は光線の出る板で、モンスターに攻撃しているがまったくあたらない。

昨日のよりはずっと強いな。獣人のような姿だが、手や足が武器に変化し攻撃してくる。

攻撃があたりそうだったので、衛兵の一人を引っ張って後ろに下げる。

モンスターの空振りした攻撃が箱を直撃し、重い音がして大きくへこんでしまった。

「ありがとう。助かった」

モンスターとまだ戦ってるときに、よそ見して感謝とかするもんじゃないぞ。

そういうのは生き残った後でするもんだ。

『ほんまそれ』

「いけるの？ グリフォス、私たちを守って」

アサナが声を出すと、モンスターの攻撃が見えない壁で阻まれる。

「何だ。どうなってる?」

「俺の斬撃を防ぐとは生意気なツ！」

衛兵が驚き、モンスターも声を出して、攻撃をより苛烈なものとする。

しかし、暇なく繰り出される攻撃は全て不可視の障壁が弾いている。

『良かったね、「守って」で。「倒して」だったら、この獣人もどきは潰されてるよ』

シユウは安堵している様子だ。

これは何なの？

『圧縮した空気の壁だね。何が起きてるか分からないってのはある意味幸せだよ。これが防御から攻撃に転じたらどうなるかを想像しな

くて済むんだから』

念のため聞いとくと、どうなるの？

『空気と一緒に、獣人もどきが圧縮される。この圧力なら頭蓋骨サイズの玉が残るんじゃないかな』

あー。

ちよつと見たいような。

でも、見せるべきじゃないだろう。

『じゃあ、早く倒すべきだね。「攻撃して」とアサナに言わせたら、おつ、まあたこいつらか』

攻撃を繰り返すモンスターに光る矢が当たった。

貫通はせず、体表を傷つけるにとどまる。

「ワルグチー！　そこまでよー！」

おつ、昨日見た魔法少女だな。

……あれ？　二人だけか。

ブレスレットと矢の少女しかない。

手甲の少女はどこに？

『ほら、恥骨をやっちゃったし、電撃も食らったから。治癒しても今日のところは休みじゃないかな』

ああ、悪いことをしたな。

こちらに関しては私もほんのり罪悪感を覚える。

どうも二人組は私には気づかず、モンスターとの戦いに必死のようだ。

分が悪そうだな。やはり前衛が抜けたのは痛い。

ブレスレットも矢も距離を詰められると攻撃の手段が少ない。

一方の獣人はバリバリの接近系だ。

矢の少女が獣人の攻撃を捌ききれず、攻撃を食らった。

一応、武器で防いだようだが、軽い体躯は地面と平行に飛び、壁にぶつかり止まる。

頭を打ったようで、矢の少女はぐったりと力なく倒れている。

額からは血が出て、目と鼻の間を垂れる。

まずくないか？

「魔法少女の歴史は、リヨナの歴史でもあるんだ。年端もいかない可憐な少女が、敵の強大な力に破れ、あられもない様になるのが視聴者の興奮をかき立てる。これを楽しみにする大きな子供たちも少なくない」

そんな解説いららないから。

「グリフォス！ やられちゃうよ。私もあの子の力になれないの」

アサナの声に反応し、杖の先端についていたハートが赤く光った。

同時にアサナの服も白く光り、体が光に包まれる。

『おつ、ようやく変身シーンだね』

すごい無防備だけど、ここを攻撃すればいいんじゃないのか。

『ちよ、おま。それやったら各方面から袋だたきだよ。このシーンは神聖にして不可侵って決まってるの』

なぜ、と言いたいところだが、獣人すらも大人しく見ているので私も大人しくしておく。

光が収まると、アサナの服が替わっていた。

なんか……、思ってたのと違うな。

他の少女たちみたいにヒラヒラしてない。

どちらかという私の世界の魔法使いが着るようなゆったりした服装だ。

白を基調としており、可愛い系ではなく大人しめ系のデザイン。回復系が着てることが多い。

『これ、魔法少女の衣装じゃない。フェガリ教団の上位司祭衣装だ』
なんとなく見覚えがあるな。

アサナが喜んでるから良しとしよう。

「グリフォス。あの子に力を！」

声とともにハートが赤く輝く。

同時に、一人立つ少女のブレスレットが白く瞬いた。

『巫人の二人を掴んで路地に避難して！』

えっ？

『急いで！ 巻き込まれるよ！』

アサナは？

『ほつといていい。グリフオスが守ってる』

私は呆気にとられている亜人二人の首根っこを掴む。

「すごい力。これならいけそう！ 食らいなさいワルグチー！ 私の全力全壊！ ライトニングウツ！ キャアノオオオン！」

「お前らの攻撃など、俺の腕で切り裂いてくれる！」

ブレスレットの少女が叫びを上げる。

迎え撃つ獣人も同様だ。

ただ、二人の声はその後の轟音で塗りつぶされた。

路地に衛兵二人を連れ込んだ直後、背後で大きな揺れと、私たちの影が路地裏に長く伸びた。

影と音が消えて振り返ると、道の上を雷がバチバチと爆せている。

道路は半円に挟られ、獣人の姿はどこにもない。謎の硬貨が二枚ほどクルクルと道の上で回っていた。

挟られた道路は道の先まで続き、建物を二つほどくりぬいてようやく収まったようだ。

『加減つてものを教えるべきだね』

凄まじいな。

上級魔法ほどの威力はあるだろ。

撃った本人も凄まじい威力に啞然として震えている。

『街の人を守るために、街を破壊するか』

また皮肉ってるよ。

「街が……、どうしよう？ えっ、あのコインに」

アサナがポテポテと歩いて、地面に落ちていたコインを拾う。

二枚のコインが光に消えると、挟られた道路がすっかり元どおりに戻っていく。

建物どころか、衛兵の乗っていた走る箱まで直っている。

『万能過ぎるな。燃費は恐ろしく悪そうだけど、ボスどころか竜でもいけそうだ。もう二段階くらいしよぼい材料にすべきだったか。それと、なんとなくわかってはいたけど、あのコインがこの世界のエネルギー源だね』

なんかそれっぽい感じはしたな。

昨日もお店であの硬貨を数枚ほど支払いに出したら、店員に目玉を剥いて驚かれたし。

一枚でもおつりが返せないって焦ってた。なんか通貨の硬貨とはまた別物だとか。

ボスの城に大量にあつたのをもらっておいたのは良かったかもしれない。

『城を再建するにも、自分の魔力以外の資源が枯渇してるわけだ。他の奴らも養っていけない。崩壊寸前だな。可哀相に』

淡々と語るのので、本当に可哀相と思っっているかはわからない。たぶん思っただろうな。

その後は嵐のようだった。

他の魔法少女がわんさかやってきて、ひとまず大人しく魔法少女連盟の本部とやらに連れて行かれた。

『連行しようとした魔法少女のおっさん二人を蹴り倒した段階で、「大人しく」とは言わないよ』

あのおっさんどもがやたら上から目線過ぎたのが気に入らなかつたんだ。

ちよつと小突いただけだろ。

そのおかげでアサナは晴れて魔法少女として登録された訳だし、結果オーライ。

私も臨時魔法少女証とかいうのをもらえたしな。

『まあ、あの城の混乱のせいで人手が絶対的に足りないんでしょう。こんな住所不定の職業不詳まで頭数に入れないといけないほどには、ね』

大変だなあ。

『それより測定に行こう』

なんだっけそれ。

『魔法少女証の登録に際して、カタリストのデータを入れないといけないらしい。本来は測定が先だけど、緊急事態だからね。順序が逆になつたんだ』

ふーん。

人手がないのか案内はない。

シユウが壁に備え付けられていた案内図を見て誘導してくれる。

たどり着いたのはヘンテコな機器と椅子が置いてあるだけの殺風景な部屋だ。

たった一つの椅子に、やる気のない職員が腰掛けている。

「カタリストを測定器に置いて」

挨拶はない。

説明もこれだけである。

アサナが、ハートの杖を測定器に置いた。

測定器が変な音を立てて、やがて静かになり、パネルに文字が現れる。

「……計測ミスかな」

測定器を見つめた職員が首をかしげる。

「もう一回」

測定器が音を一頻り立てて、パネルに文字が表示された。

「……………ううん？」

職員はパネルを見つめたままかたまっている。

どうしたんだ？

「カタリストの平均ε値は二。標準偏差はゼロ点五」

私に答えると言うより、自分に言い聞かせるように呟いている。

つまり、どういうこと？

『おおまかに言うと、百個カタリストがあつたらそのうち約九十五個は、パネルの文字が一から三の間に入るってこと。この数値は恐ろしいほど基準値から逸脱してる。おそらく、あのコイン一個分が、ε値の一に相当すると考えて良い』
ほうほう。

つまり、この杖はあのコイン二十個分と言うことか。

『いいや、もっと大きいはず。コインは手づかみだったし、合成素材も最上位だからね』

「そんな馬鹿な。計測限界値なんて出るはずがない」

『ほら、やっぱり。この計測機じゃ二十までしか計れないんだ』
そんなものなのか。

『そりゃ、大半が三までに収まるんじゃない。そんな大きな値を計れる必要なんてないよ。五か六が限界でもおかしくない。二十まで計れるってことは、他にも計測する物があるってことだろう。地下に複数の反応があるし、この魔法少女組織の本部ってのは硬貨の貯蔵庫としての役割もあるのかもね』

どうでもいいな。

職員はアサナの魔法少女証を受け取り、モニターと同じ文字を入力した。

さて、次は私というかお前の番だな。

『まあ、ゼロだろうね。あるいは計測不可能か』

「……ゼロエラー？」

職員はまたしても首をかしげている。

再度、計ったようだがやっぱり同じ文字が出てくる。

「なんなんだ。そのカタリストはなんでできているんだ。計測限界にしろ、完全なゼロにしろ、あり得ない。あり得ないんだ！」

なんだか取り乱している様子だ。

「なんなんだあんたたちは？」

まあ、新人魔法少女と冒険者ってとこだな。

それだけ告げて、私の臨時魔法少女証にゼロの文字を書かせた。

最低限の手続きが終わり、研修など一切なく、いきなり現場対応になった。

『労基待ったなしだな。しかも与えられた初業務が城の調査ってお前……』

アサナもやや緊張している様子だが、それ以上にウキウキしているのが見て取れる。

楽しそうだな？

「先輩魔法少女が一緒に来てくれるんだって！」

小うるさいおっさんやおばさんじゃないといいがな。

入口で待っていると、やや大人びた女性がやってきた。

髪は肩口で切りそろえられており、服装もキツチリしたものを纏っている。

「あなたたちが新人の二人かしら？」

『やった！ 胸がおつきいよ！ 大当たり、大勝利！ 興奮してまいり……んく？』

女性はアサナを見て微笑みかけ、ついで私を見て表情がかたまつた。

息が止まっているようにも見える。

『こいつ、ボスの城で列席してたぞ。それにこの反応。ワルグチー側のスパイだ』

そうなのか。

あの惨状で無事だったんだな。

「え、ええ。あの、その——」

大丈夫だ。

私たちに与えられた依頼は城の調査だ。

それ以外のことをする気はない。少なくとも今はな。

「二人は知り合いなんですか？」

ああ、少しな。

まあなんだ。フォローを頼む。先輩魔法少女どの。

「先輩、よろしくお願いします！」

何も知らないアサナは朗らかだ。

一方のスパイは見るからに青ざめていた。

救いはない。

5. スパイの先輩が現れた

スパイことスィーアの先導で城に到着した。

アサナも緊張している様子だが、間違いなく一番緊張しているのはスィーアだろう。

魔法少女が何人も運ばれていた。

近くの魔法少女が言うには、奥で立てこもっているモンスターがい

るらしい。

モンスターは前回にあらかた倒したからな。

今回は探索メインでいこう。何か面白い物があるかもしれないぞ。

「はい。楽しみです。でも、どこから探すんですか？」

先輩。

何か知らないの？

宝物庫とか、だいたいどの城にもあるだろ。

「私の直感によると、こつちが怪しいかな」

スィーアが指で行く道を示した。

「魔法少女の勘ってやつですね！」

ふふふ、と引きつった笑いをスィーアは見せている。

上下反対になってしまった廊下の天井を歩きつつ、道を進んで行く。

時折、モンスターが出てきたのだが、スィーアも慣れた様子でモンスターを片付けている。

『速攻だね。よほどワルグチーに口を出されたくないに見える』

なるほどな。

でも、なかなか上手い魔法じゃないか。

はつきり言っつて、何をしているのかよくわからない。

爪から何か出ているような気がする。

『カタリストはネイルだね。デザインで効果を変えてる。一つ一つの効果は低いけど、汎用性は高い。効果セットも悪くないし、使い方も上々。良い使い手だと思う』

……それだけ？

魔法使いに対しての評価は辛口じゃん。

ここからボロクソに言うんだろ。私はけっこうその講評が楽しみなんだが。

『ご期待に添えず残念だけど、貶すところは少ない。十本のネイルのうち一本が、ワルグチー側への変わり身用で潰れてるのはもったいなかな。ワルグチー側に付くときはネイルセットを変えてるんだらうね。そつちも見てみたいな。前回は逃げに徹してたみたいだから、

見てないんだよね』

お前にしては、かなり高評価だな。

『気になる点もある。魔力が異常に多い。街の人間は軒並み魔力が低かった。もしかしたら二つの世界のハーフかもしれない』

ほー。

そこはどうでもいいな。

『俺としてはそこそそが一番気になるところだね。どういうふうな法則が作用するのか観測したい』

宝物庫らしき部屋にたどり着きはしたが、すでに荒らされており物は少ない。

……あれ、上下逆だけど昨日もここに来なかったか？

なんか見覚えのあるものがあるぞ。

『大正解。めぼしい物はすでに俺達が盗ってる。資料、魔装具、もちろんあのコインもね。さらに他の奴らに荒らされてるね』

おおう。

残った物を漁ってみるとしようか。

それだけでも調査の依頼に十分適うだろう。

そんなわけでスイーアやアサナと一緒に、残り物を可能な限り回収していく。

スイーアは何か探し物があつたようで、ここだけは私たちの存在を気にせず物色に傾注していたように見えた。

探し物は見つからなかったようで、少し残念な表情がうかがえる。

回収も終わり、まだ時間はありそうだ。

他に何か面白いところはないのか。

「……こつちにあるかもしれないかな」

アサナは楽しんでいるが、こつちには何があつたつけ？

『行つてない。こつちに面白い反応はなかつたはず』

逆さ城を上へと進んで行く。

つまり、本来なら一階の方へ向かっているはずだ。

なんでこんなに無駄に広く長いのだろうか。……大きいモンスターがいるからか。

見覚えのある一階にたどり着いた。

「ひろーい！」

本当に広いな。

ここはエントランスだったはず。

ただし、進んだ先のボス部屋はもうここにはない。

ボスが止めてなければ、どこかの空間で今も落ち続けているはず。

床になった天井を登ったり、魔法で跳躍したりしながら城の端へと進んで行く。

時折、床部分から空が見えるので、ここが頂上に間違いないだろう。たどり着いたのは、これまた大きな扉の前だった。

大きな扉とは言うものの入口の門ほど大きくはない。

こちらはせいぜい私の身長の五倍ほどだ。横幅もそのくらいに過ぎない。

『結界だね』

扉の大きさよりもむしろ目につくのはそっちだな。

扉表面のあちらこちらに魔法らしき青や紫といった光が目につく。

触るとビリビリとけっこう痛いやつだ。

『メル姐さんでビリビリ痛いやつって、普通の人間なら即死だからね。これもなかなか強力だ。触ると痛いやつだよ』

それで、この中に何があるの？

『本当に大事な物ならこんなわかりやすい結界を張って置かない。こっそり隠すか、自分で持つ。危険なモノを抑え込んで考えると考えるべきだね。物かモンスターかだけど、結界の種類から判断するにモンスターでしょうな。それもボスが危ういと思うほどのモンスターだ』
要するに第二のボス戦ってことだな。

それで、スイーア先輩は何かこの情報は持ってないのか？

「城の一面に同族食いが隔離されてるって話は聞いたことがあるかなあ。あくまで噂だよ。魔法少女の間ではやった根も葉もない噂！」
すごい必死に噂と付けているが、かえって怪しく聞こえるな。

どんだん尻すぼみにテンションが下がっていく。

『超レアの可能性があるね』

逆にシュウのテンションは上がっている。

何か心あたりがあるのか？

『空間魔法を使える超上級のボスが警戒するレベルで、同族食いつて特徴があるなら特殊魔法の可能性が極めて高い。ずばり「羅刹」だ』
出たよ、特殊魔法。

それで羅刹つてのはどんな魔法なの？

『シンプル。肉を食ったやつ魔法が使える。しかも、食って消化を続けるほど強くなる。まあ、重大な欠点があるんだけど……』

ほー、けっこう強そうじゃないか。

どうする？ 挑んでみるか。何か対策はあるのか？

『何を得てるかわからないから対策は万全を心がけましょうとしか。まあ、今のメル姐さんとアサナの杖があれば、極限級のモンスター以外は苦戦にならないね。——ああ、それと同族食いだからスィーアパイセンが危険じゃないかな。たぶん、パイセンの狙いとして、俺達をこの部屋の主に食わせようとして案内してるんだらうけど、ちゃんと伝えておいてね。「真っ先に狙われるとしたらお前じゃないの」ってできれば開ける前後がいい』

ふうん、わかった。

スィーアとアサナに部屋の主の情報を一部だけ共有する。

アサナは危ないからそのままにしておこうと話しているが、スィーアは調査だから開けようとしている。

私も開ける方に賛同し、二対一で開けることになった。

じゃあ、開けるぞ。

シュウで結界をグサリと刺して壊す。

そういえばスィーア先輩。

この部屋の主は、先輩も言ったように同族食いらしいぞ。

こいつにまっさきに狙われるとしたら、ワルグチーとやらの同族になるようだ。

スィーアの口が「あ」と薄く開いた。

でも、大丈夫だよな。

ここには私も含めてワルグチーの仲間なんていない。

私は冒険者だし、アサナとスイーア先輩は人間で魔法少女だもんな。

「待って！」

もう遅い。

最後の結界を刺し貫いて、扉を蹴り開ける。

すぐ振り向いて、逃げようとしたスイーアの首根っこを掴んで動きを止めた。

アサナは何が何だかわからず、ぽけーっとしている。

扉を開けると、広い部屋だった。

床は水浸しになっている。

天地が逆さまなので元は上にあっただのだろう。

その水の中心には、大きめの鎧が転がっていた。

兜から足の甲胄まで全てがそろっている。さらに剣の柄部分だけが転がる。

『なるほど、そういう系か』

「助けて！ 放しなさい！」

ほれ。

「え——」

『ちよい。そっちはまずいでしょ』

お望み通りスイーアを放してやった。

ただし、部屋の真ん中に向かって。

部屋の水が動き始め、転がっていた鎧に集まる。

鎧が集まった水に満たされ、ゆっくりと立ち上がった。

兜の前後を元に戻し、何もなかった柄の先からは液体の剣ができている。

鎧はまず私とアサナを眺め、興味がないという体で視線を変えた。

次に見たのはスイーアである。少し認識に時間がかかったものの、鎧はスイーアに対して剣を構えた。

スイーアも察してすぐさま戦闘態勢に入る。

「グリフオス、スイーア先輩を守って」

初撃は鎧のモンスターだった。

距離がかなりあるにもかかわらず、剣をいきなり振り抜く。

『わあお、飛ぶ斬撃とか久々に見た』

スィーア側の壁がスパリと斬られてしまっている。

どうやら剣の水を薄くして飛ばしているらしい。すごい切れ味だな。

このことに気づけたのは、スィーアの直前で斬撃の水が止まっていたからだ。

おそらくアサナの杖が気を利かして盾を作ってやったのだろう。

今の、アサナが守ってなかったら死んでなかった？

『真つ二つでしたね。アサナができた子で良かった』

スィーアも魔法を発動させる。

爪の一本から杭がいくつも現れ、鎧に向かって飛んでいく。

『甘い。水の斬撃は戻ってくるぞ』

言ったとおりだった。

スィーアの飛ばした杭よりもなお速く、壁を切り裂いた水が戻ってきた。

その戻り水に斬られて杭は鎧から狙いはずれた。

杖の防御があるとは言え、スィーアはその防御を過信していない。

鎧から距離をとって遠距離から攻撃をしている。

杭やらトゲのついた蔦で攻撃するが、全て避けられるか切り落とされている。

どれも決定打にならないな。接近戦じゃ駄目なのだろうか。

近距離でそこそこ強い魔法を持ってたはずだ。

『策のない接近戦は一閃で終わり。今は仕込みをしてる最中。ほら、よく見て。切り落とされた杭や蔦から小さい種が出てるでしょ』

なるほど、私にもわかったぞ。

あの種をどうにかさせて、鎧の隙を作ったところで近づき、強い魔法を当てるんだな。

『——という作戦が見え透いてる。敵からもね。水に満たされた鎧と戦っても意味ないでしょ。本体を見つけないと』

うん？

「え、上？」

『グリフォスが教えちゃったか』

上を見ると、天井に水が付いており、そこに小さな角付きのモンスターがいた。

「先輩！ 上！」

スイーアが、アサナの声に気づいたのはまさに仕掛けを発動した直後だった。

仕掛けを発動させ、スイーアが接近戦に持ち込み、まさにそのタイミングを狙い、上の角付きが水の杭を撃った。

スイーアは攻撃動作に入っており、隙を見事に突かれた形となった。

どうせ杖の防御で生き残るんだろうな、と思っていたが、防御するどころかスイーアは躲してみせた。

またしても距離をとったが、その姿は先ほどまでの彼女とは違っている。

フリフリな恥ずかしげな衣装から、夜の舞踏会に着ていくような黒のドレスになった。

髪型もサイドテールから、編み込みをし、後ろでまとめられている。何よりも背中から出ている黒い翼が目にとまる。

これは鳥なのかな？

『蝙蝠でしょ……。本性だしちゃったね』

これがワルグチー側の形態か。

果たして魔法少女好きのアサナはどう見るか。

「すごい。先輩が変身した。魔法少女の第二形態だ！」

魔法少女に第二形態とかあるの？

もはやこれはボスじゃないか。

『メジャーじゃない。魔法少女のレベルアップってのはね。形態の變化ではなく、心のたくましさの度合いによって決められるものなんだ。力の変化はせいぜい武器のパワーアップに留めないといけない。ありや、もはや魔法少女とは言えない。ただの魔法を使う女——単に

魔女で良い』

それでも魔法少女の時よりはだいぶ強いぞ。

身体強化も使ってるだろ。動きが違う。爪を長くしてからの攻撃も増えてるし、戦闘スタイルが異なってる。

魔法もなんだかパワーアップしてる気がするぞ。

『そりゃ、カタリストに加えて、自前の魔力も使って魔法を行使してるからね。翼で空も飛べる。強さが別モンだよ。ハーフで間違いないね。ワルグチーの反応も微妙に迷いがあったから』

そうかもしれない。

見た目だけで言えば、魔法少女側よりこっちの姿のが私は好きだな。

『俺も、俺も』

お前が好きなのは胸元が大きく開いたドレス着てるからだろ。

『はい。その通りでございます。わたくし、常々、下半身に忠実に生きていこうと心がけていますので』

その口ぶりは威風凜凜。あまりにも清々しい物言いではないか。

発言は下の下だが、言ってることは確かに日々実行されているのでその部分だけは評価するべきか迷ってしまうほどであった。

『飽きてきた。石でも投げて小鬼を倒しちゃって』

言われたとおりに石を投げてやれば、水の防御も間に合わず角付きは光となって消えた。

……本体、弱すぎない？

『操作系ってのはそんなもんだよ。本来なら本体が鎧の中に入るんだろうけど、上から意表を突こうとしたのが失敗だったね』

魔法もそんなに種類を使っただけな。

羅刹ってのは、他の魔法が使えるんじゃないのか。

見た限りでは水を操る魔法しか使えなさそうだったぞ。

『羅刹の使い手の性格とか性質に問題があつて、意志が弱くて摂食障害がデフォでついてくるんだ。食べて消化すれば強くなるけど、食べても吐いちやうから強くなれない。食べたいけど同類を食べるのは駄目だろって揺らぎが抑えられない。今回は長期間の断食で、食

べようという意志が強かったみたいだけどね』

今までみた特殊魔法の中で一番問題抱えてないか。

『でも、その揺らぎさえ抑えることさえできれば、めちやくちや強いよ。限界がほぼないからね。その場合は、だいたい共食いの烙印を押されて、コミユニティから弾かれるんだけど』

やっぱり駄目じゃん。

それと、スィーアがめつちやこつちを睨んできてるんだが。

『そりや、逃げるところ掴まれて、しかも敵のすぐ近くに放り出されたらね。アサナの援護がなかったら最初の一撃で死んでたし』

ズカズカとこちらに向かってきている。

何か言いたげな様子だが先にこちらから言っておく。

正式ではないにしろパーティーを組んでるのに、仲間を殺そうとするのは好きじゃない。

「殺そうとしたのはあなたでしょ」

……それもそうだな。

だが、先に私たちを陥れようとしたのはそちらだ。

「ケンカしてるの？」

やや目を潤ませ、不安そうな顔でアサナが私とスィーアを見てくる。

いや、ケンカってほどのものじゃない。

話し合いだ。

「あなたのせいで計画が台無し。せつかく、向こうでの立場もできあがってきてたのに。あれも、もう少しで手に入るはずだったのに。――ああ！」

怒って、近くのガレキを蹴っている。

悪いことしちゃったね。

『そうとは思わない。ここらで引いて正解だったと思うよ。なまじ優秀だからね。最後はどっちにもつけなくて、がんじがらめになつて倒れてたと思うから』

よくわからないな。

『アイテム袋の拾いもの番地。「過去十日」欄に「吸血候のブローチ」つ

てのがあるからそれを渡してあげて』

よくわからないまま取り出し、そのままスィーアに放り投げる。

スィーアはキヤツチし、驚いた様子でブローチを見つめる。

『ちよつとパイセンに俺をくつつけて』

渋々ながらもシユウをスィーアにくつつける。

『どうもどうも、この馬鹿女のカタリストのシユウだよ』

カタリストではないだろ。

『昨日、宝物庫の中からそのブローチを見つけた。探してたのはそれでしょ、君のお父さんのだ。中を見せてもらったよ。家族写真だったね。彼はワルグチーだけど、魔法少女の奥さんと君を大切に思ってたようだ。君も二つの力を持って生まれ、どちらの陣営に付くべきか悩んでいるように見える。ここらできっちり決めておいた方が良くどちらの陣営に付くかを考えるよりも、君の味方になってくれる奴と一緒にいるべきだ。この女は味方しないかもしれないけど、俺は君の味方だ。覚えておいて欲しい。——もういいよ』

どうしたの、お前。

そんなまともなことを言っていると気持ち悪いんだけど。ぶつぶつがでてきたぞ。

『いやあ、面白い人材だったからね。カタグラフィに置きそうだし——』

最後はぼそりと言って何かよくわからんが、とりあえず帰るか。

「ぴぎゃー」

変な声が聞こえたので振り返ると、小さな角付きが地面に倒れていた。

あ、そうか。私が倒したから復活するのか。

スィーアに倒させれば良かったのに。

『それじゃ死んじやうでしょ！ 貴重な特殊魔法使いだよ！ 生かして実験体にしないと！』

すごい勢いで反論された。

やっぱり殺してやったほうが幸せなんじやなからうか。

スィーアがまたしても戦闘態勢に入る。

角付きも鎧を呼び寄せたが、呼び寄せる途中で倒れてしまった。

「おなか、へった……」

『らしいよ。なんか食べさせてあげて』

はあ、ほんとにこれを餌付けするのか。

私は嫌だぞ。角を取ったらほぼゴブリンだ。私はゴブリンが嫌いなんだ。

「お腹減ったんだって。可愛いそうだよ」

仕方ない、嫌だが連れて帰るか。

『俺の時と対応違ってない』

当たり前だろ。

お前とアサナじや言葉の重みが違う。

そんなこんなで変な角付きをゲットして調査依頼は完了した。

6. 腹ペこの子鬼が現れた

アサナの家で角付きを飼い始めたわけだが、なかなか好みがうるさくて困る。

まずいだの、ぬるいだのとうるさいので、最後は蹴って光にしてやった。

復活するとケンカを売ってくるのでまた光に変えてやる。

『無限ループって怖くね。よくもまあ、同じことを何度も繰り返せるもんだね』

城から出たワルグチーの残党もおおかた片付いたようで、今は城の処理がメインである。

そちらは細部調査もあるとかで私たちの出る幕があまりない。

変な角付きまで飼ってしまったって家の人に何か言われるんじゃないか思ったが、父親とはまだ連絡がつかないらしい。

もしかして「父親はもう死んでないか？」とは怖くて聞けない。

いちおう写真は飾ってある。優しそうな細男だ。

『よし。そろそろ図書館行こうぜー』

なんで埃くさい香りの集積地に行くのに、そんな元気な声が出せるのか。

『情報の集積地だよ。この世界でいくつか見てきた疑問を片付けたいの』

別に図書館じゃないくても、こつちの世界には便利なもんがあるんだろ。

アサナも板みたいなのにとらめっこしてるし、仕事の依頼もそれで見てる。

『こつちにもネットはあるけどね。浅い情報ならまだしも、専門知識まで得ようと思えば本が一番だよ。図書館はいいぞ。さあ、行こう』
そんなわけで面倒ではあるが図書館に行くことになった。

「私も行く！」

「じゃあねえ、おいらも付いて行ってやるか」

二人と一匹で図書館に行くことになった。

行く道でいつもの衛兵二人に呼び止められた。

「あのねえ。昨日のことは感謝しますよ。でも、このご時世に街中でワルグチーなんか連れてちやまずいでしょ」

「いくら魔法少女連盟から許可をもらってるからって言ってもねえ」

動く箱の横でもっともなことを聞かされている。

あまりにもそのとおりで、私も同じことを思ってるの何も言えない。
い。

ちなみにその状況を作り出した元凶が誰でもないこの私である。
ますます無言だ。

「せめて剣は鞘にしまってもらえないものですかねえ」

「それと変身状態で街をうろつくのもちよつと問題ですよ」

鞘の話は考えとく。

あと、変身はしてない。

けつきよく箱に入れられて、家まで送られた。

振り出しに戻る。

『どこかの勢力が俺達を図書館に行けないようにしているに違いない』

とうとう陰謀論を唱え始めた。

調べるつたつて、何を調べるんだか。

『この世界の歴史。カタリストの一般的な製造法。それとワルグチーを倒した時の硬貨が何か。あるのならワルグチーの目的かな。最初に俺達を監視してたのも気になる』

前の三つは知らないけど、ワルグチーの目的は角付きに聞けばいいだろ。

おい、ちっちゃいの。お前らは何がしたいんだ。

「おいしいごはんがたべたい」

ふざけたこと言っつてんじゃねえぞ。

蹴つたら光に消えてしまった。

『沸点下がりすぎ。俺と同じように蹴つたら大抵の生物は死ぬよ』

やれやれ、また復活まで待たないといけないな。

次にふざけたことを抜かしたら軽く蹴ろう。

『そこなんだけど、ポチはふざけてなかったのかもしれない。名前はふざけてるけど……』

ちっちゃいのはポチという名前らしい。

シユウの世界だとペットに付ける定番の名前だとか。

で、なんだっけ。ポチがふざけていないだったか。

おいしいご飯を食べるのが奴らの目的だと、お前は本気で言っつてるのか？

『おいしいご飯を食べる』よりも、もっと広く捉えて、「安定した生活」というのかな』

安定した生活？

『衣食住のうち衣は置くとして、食と住がワルグチーたちはまともに成り立ってないよね。住で言えば、あの空間以外でまともな生活はできなさそうだ。あの空間から出てきたら魔法少女に駆逐される。城と荒野は広いけど、城の外は戦闘スペース兼運動スペースみたいなもんでしょ。スィーアパイセンみたいな例外を除けば、あの城に大量のワルグチーが箱詰めされてる。すし詰め状態ってやつだね』

すしづめが何かは知らないけど、けっこうきつきつなのはニユアン

スでわかる。

食は？

『まず、ポチを見ればわかるけど、ワルグチーも普通にご飯を食べることができてる。本音を言えば、ポチには同族の肉を食べて強くなってもらいたいけど、これは追々の課題にしよう』

話が逸れてる。

ポチはいいからワルグチーの方を続けて。

『あのお城空間じゃ作物や家畜は育てられない。土が悪いし、水もほぼない。日光も期待できない』

暗雲が立ちこめてたもんな。

ダンジョンっぽい雰囲気はあつて好きだったぞ。

『もつと言えば、あの広い城には一つとして食堂や厨房はなかった』

……じゃあ、あいつらは食べなくても生きていけるとか？

『かもしれない。しかし、エネルギーは必要だ。じゃあ、ワルグチーたちは何からエネルギーを得ていたか？ あの硬貨からそのままエネルギーを得てた。これはポチで試したのをメル姐さんも見てたからわかるでしょ』

昨日の夜にやってたな。

でも、まずいからってパイしてたぞ。

生意気だと蹴ってやったから覚えてる。

『まとめるとだね。ワルグチーは魔法少女たちに追い詰められて、あの劣悪な空間での生活を余儀なくされてた』

おつ、簡潔じゃん。

あいつらも大変だったんだな。

『付け加えるなら、その追い詰められてるワルグチーのセーフハウスをズタボロにして、なけなしの食料すら奪っていったのが俺たちになる』

ひどい奴らだ。

『すごい他人事みたいな言い方。さらに付け加えるとすれば、ボスがあの空間を消して出てこないなあと思ってたけど、やすやすとは消せないはずだよ。もしも消したら、ワルグチーの壊滅どころか絶滅に繋

がる。まあ、ボス一人でなら余裕で生きていけるだろうけど、奴も奴なりにボスとしての役割を全うしようとしてる』

あの空間を維持することで手下を守ろうとしているわけだ。

立派なボスじゃないか。感動した。

『そのあたりの歴史も調べたかったから図書館に行きたかったの』
割と重要な話じゃないの。

ちよつとした興味くらいにしか思ってたなかった。

最初からそう言ってくれば、もう少し前向きに行動したのに。

『じゃあ、今から行こう!』

昼ご飯を食べてからにして。

『こういうことは早めの行動が大切だよ』

本は逃げないだろ。

仮に逃げるにしても飯を食う時間くらいは待つてくれるだろうよ。

『変なフラグ立てるのやめてよ』

そんなわけでアサナが昼飯を作っている。

ほぼほぼ一人の生活に慣れているのか、料理も上手だ。

それにこの世界は調味料が豊富のため、素材がしょぼくてもかなりうまい。

この料理にはちつこいのもご満悦で、床に置かれた皿に頭から食うに行っていた。汚えやつだよ。

私もさすがに全てをアサナに任せっぱなしはまずいと思い、少し手伝ったのだが「一人で大丈夫だから」と座らされた。

『あたり前でしょ。野菜切るのに俺を使い始める奴なんて、厨房に置けないよ』

なんで？

包丁よりお前の方がよく切れるぞ。

『まな板でもを調理するつもりなの?』

わからん。

洗濯だつてそうだ。

洗つてやろうとしたら、これまた座らされた。

『洗濯機を使わず手でやり始めるからだね』

手の方があの箱よりもずっと早いぞ。

水も簡単に絞れる。

『しかも干すときは、軽く伸ばしたり叩いたりもしないでしょ』

なんでわざわざ伸ばしたり叩いたりするの？

戦う練習か？ ひよつとしてスキルが手に入る？

『手に入るよ。最低限の生活スキルがね』

そうだったのか。

今度から軽く伸ばしてみよう。

話しているうちに料理ができて仲良くテーブルを挟んで食べる。

『——大規模な空間反応あり』

「えっ、何！ どういうこと！」

アサナはシウウの声が聞こえないので、杖から同じことを聞かされたようだ。

テーブルから離れて置いてあった機器の映像が、料理から真面目そうな男に切り替わった。

「番組の途中ですが、緊急のニュースが入りましたので、番組を切り替えて放送させていただきます」

それだけ言うと、映像がまた切り替わる。

「こちら、キナメリアの上空になります！」

これまた別の男が、街をバックにして立っている。

かなり高いところのようで、建物を見下ろす形の映像だ。

「ご覧のように、キナメリアの上空に、城のような物体が現れました！」

高い建物のさらにその上方から、空を切り裂くように見覚えのある城がゆっくりと落ちていつている。

『ほお、やるもんだね。高度な減速の魔法がかかっているぞ。——はあ、城が落ちるのを止められないから、あえて空間魔法の前兆を大きくしてからこっちに繋げたな。魔法少女が減速魔法をかけることを期待したわけだ。これなら中の奴らへの被害が少ない』

そんなこと言ってる場合なのか。

ちょうど、アサナのいつも持つてる薄い板がピコピコと大きな音を鳴らした。

「緊急招集だつて！ 全魔法少女が呼び出されてる！」
そりやそうでしょうよ。

この光景を見れば、明らかにまずいことがわかる。

『あ、嘘だろ。まずいぞ……』

珍しくシユウが真面目に焦っている声だった。

何だろうと映像を見れば、城がまさに落ちようとしている。

解説をする男の声は、もはや支離滅裂で耳にまともに入つてこない。

城が街の一面に影を落とし、ゆっくりと街を潰していつている。

潰されている建物は私も見た記憶がある。

「今！ 図書館が！ なんとということでしょうか！ 歴史ある図書館が、為す術もなくゆっくりと潰されていつています！」

「グリフォス！ 街の人を守つて！」

『うわあ……』

シユウは呆然とした声をあげる。

アサナの杖のハートが赤く光つたのでたぶん何か起きた。

現地にいる人は不思議な力で守られたと推測できる。しかし本は対象外だろう。

同時に、轟音と振動が私たちを襲い、映像はぷつりと消えた。

私とアサナ、あとちっこいのは家を飛び出て現地へ直行する。

街中は混乱しており、いつもの衛兵たちが家の中に入るよう誘導している。大変だなあ。

現場近くでは、まだ砂埃が舞っており、その中で魔法少女とワルグチーたちがしのぎを削っていた。

周囲は図書館以外には博物館と公園だけと、だだっ広い開放エリアだったのが幸いしてそこまで大きな被害はなさそうだ。

『図書館が跡形もない』

図書館と博物館は城に潰されて痕跡すら残つてない。せいぜい案

内板だけか。

しかし、このままお城エリアとして使えそうだな。

『いやあ、これ最初の崩落とは訳が違うよ。冗談じゃ済まないでしょ』
最初の半城の落下も冗談じゃ済まないと思うが……。

それよりどうするべきだ。

派手に混戦になっているが、どこから手を付けるべきだろうか。

「あ、先輩が戦ってるー!」

見れば、スイーアがワルグチーと戦っていた。

どうやら魔法少女側として戦う決意がついたようだな。

『そう見えるの?』

違うの?」

『蝙蝠のサガかな——いや、いや。もう好きにしなよ。俺はちよつと心を落ち着ける』

駄目だ。本格的に落ち込んでいる。

たかが本くらいでそんな大げさに落胆しないでいいだろうに。

『たかが本だつて? いや、いい。話にならない』

「残っている一般人の保護を最優先! 余力があればワルグチーの残党を掃討。深追いはしなくて良いからね!」

「はー!」

さすがに一日の長がある。

スイーアの指示にしたがって、他の魔法少女たちも動く。

年長者の人も同じ方針のようで、魔法少女が一丸となってその場で動いた。

あまり守る戦いというのは好きじゃない。

どちらかと言えば、どんどん奥まで攻め込むのが好きだ。

依頼でも、護衛のものは趣味に合わなかった。

護衛対象のペースで動かないといけないし、基本護衛は複数で行うから他パーティと息が合わない。

今も息が合わず、他の奴らを置いて、こつそり城の中にステルスで入り込んでいた。

残党がうじゃうじゃしているのかと思ったが、数が少ないな。こつ

ちの姿を見てもすぐ逃げていくし。

『あのねえ。何の策もなしに城を落とすわけがないでしょ……。彼らが今、もつとも手に入れるべき物はなに?』

安定した生活?

『間違いではない。もうちよつと狭く言えば食料だよ。生きるためのエネルギー源。俺達がごっそり奪ったから、彼らの手元にはもうほとんど残ってないんだ。現状で、組織として動けるのはこれが最後だろう』

悲しい。切実だな。

『引きこもって安穩な生活をして先細り、魔法少女に最後の反撃を見舞っても大半は死んでしまう。そんな切実かつ切迫した状況で賭けに出た。見た感じだと成功だね。彼らに必要なのはだだっぴろい城と荒野じゃなかったんだ。それらを全て捨ててようやく道が切り拓かれた』

まどろっこしい説明はいらぬから。

簡潔に教えてくれ。

『この城の落下は陽動。陽動部隊はここで魔法少女たちの足止め。本隊は魔法協会本部や支部に貯蔵されているであろう硬貨を狙って行動してる、と思われる』

ああ、なるほど。すつきりした。

この城にモンスターが少ないのはそういうことか。

『そゆこと。最初の崩落で空間魔法の反応を大きめにしておいたのも良かった。おそらく本部へ直行の空間魔法はすぐには悟られない。そつちも彼女が手引きもしたのかな。ふふ、好都合だ』

彼女?

『いや、いいんだ。それと、城を落とす位置もなかなか悪くない。適度に魔法少女連盟の本部からは離れてるからね。助けられそうな人がいくら残っているし、大部分の魔法少女が本部から引きずり出されてすぐには戻れない。一回目の崩落で本部に攻撃がなかったのも、魔法少女たちを油断させる要因となっただろう』

ふむ、それじゃあ魔法少女連盟の方に行けば良いということだな。

私たちだけでさつきと行ってしまおうか。

『もう遅い。前回の件もあるし、今回は黙って見といてあげてもいいんじゃないかな』

それもそうだな。

前回は散々な目に遭わせてしまったからな。

かといって、外で待っても他人に合わせるのがかったるい。

中で動いても、時間稼ぎのモンスターと鉢合わせになってしまう。

ここは、事の発端でもある始まりの謁見の間。

ガレキが散らばり、かつていたであろうモンスターの影は一つとしてこのこっていない。

ボスが座っていた無駄に大きな玉座も埃だらけだ。

座るところか、上で横にもなれそうだな。

ちようどいいや。

一段落するまでここで寝ていよう。

『まあ、そんな汚いところで寝そべって。アサナに怒られるよ』

あいつ、きれい好きだよな。

洗濯できる箱を毎日回してるし。掃除もしよっちゅうしてる。

『あ、来た』

何が？

目の前の空間に大きな輪っかができて、見覚えのある姿が出てきた。

起き上がって、シユウを手にしておく。あちらも少し驚いている様子が見て取れる。

『戦う気はないね。まあ、時空間耐性があるから相性が著しく悪いってのは向こうもわかってるか』

どうもシユウの言うとおりで戦う気はなさそうだ。

こちらを見つめて言葉を選んでいる様子である。

「災厄の遣いよ。卿に関わったのを後悔せずにはいられない」

仲間がたくさん死んだもんな。

元はと言えば、私に変な名前をつけたお前らが悪い。

でも、今回の作戦は上手くいったんじゃないのか。

「そうだ。我々にもう失敗は許されない。もう誰も死なせはしない。次にまみえることがあれば、我は全霊をかけて卿を討つ」

お前が私を倒すのは難しいっばいよ。

それに私よりも魔法少女にやられるんじゃないの。

「やらせはせん。誰も、これ以上は——」

それだけ告げて、ボスはまた輪っかへ消えてしまった。

何しに来たんだろうか？

『本部と支部を奪えたから、ここに残した連中を回収しに来たんでしよう。最後に、この思い出の間を見に来たらメル姐さんがいたってところかな』

なるへそ。

『「災厄の遣い」ね。間違いなさそうだな』

ほんとね。

まさか、ここまで大事になるとは思ってたなかった。

『いや、そういう意味じゃないんだけど』

意味とかはどうでもいいんだけど、あいつらは魔法少女にやられてしまうんじゃないか。

『今のあいつを倒すのは難しいと思うよ。今まで空間の維持に割いてたりソースを解放してるからね。空間魔法が使える超上級のボスとその取り巻きだ。エネルギー源もたつぷりある。逆に魔法少女の方の強さは組織としての強さが大きいからね。個々人はそこまで異常に強いのがいないし。本部と支部を潰されて組織としての強さが果たして発揮できるかどうか』

じゃあ、ボスたちが有利って事だな。

『短期的にはそうだけど、長期的にはどうか。どっちにしてもボス側は数の不利があるし、時間が経てば、外から魔法少女の応援がどんなどこやってきてジワジワと圧殺されるかもしれない。それでもあいつらが最後の力を振り絞れば被害は大きい。ここ数日間が勝負になるね。講和か、それとも全面对決か』

どっちだと思うんだ？

『全面对決でしょう。講和の折り合いがつかない。ボス側はエネルギー

ギー源を全部奪って使って新しい空間を作り出せば良い。それまで耐え切れれば勝ち。あるいは、野にいるワルグチーが集まってくるかもしれない。一方の魔法少女側はエネルギー源で空間を作られる前に叩き潰してしまいたい。エネルギー源も奪われたくない。どっちみち短期決戦だね』

おもしろくなってきたな。

どっちが勝つか楽しみだ。

『アサナ次第。彼女が攻撃に回れば魔法少女たちの勝ち。防御に回ればワルグチーたちの勝ち』

新人魔法使いに重要な役割が握られているというわけだ。

『ただ、どちらになっても俺は面白くない。子供の発想に期待しよう』

子供の発想？

よくわからんな。

モンスターが退いたこともあり、戦闘音はほとんど聞こえなくなっている。

人命救助が主となり、アサナも手伝ってと声をかけてきたので横になるのをやめて働くことにした。

長い昼が終わり、夜を迎えた。

7. ここまでの冒険を記録しますか？ 本当に記録しますか？

アサナは疲れたようで、夜はすぐに眠り、朝は珍しく私の方が早かった。

どうやらエネルギー源がモンスターに奪われたのが問題なのか、明かりもつかないし、他のものも使えない。

昼前まで寝ていたアサナも目覚ましが、タブレットがーと叫んでいた。

依存しすぎじゃないだろうか。

とりあえずの朗報としてアサナの父親がやっと連絡をよこしてきたらしい。

夜の寝る直前に、「家からは絶対に出ないこと」という短い音声のアサナが小さい方の板で聞かせてくれた。

家から出ないこと、ねえ。

うーん、悪い子になっちゃったなあ。

遅めの朝食兼昼食を食べつつ、アサナに昨日の話をしてみる。

魔法少女とワルグチーの決戦の話だ。

「ワルグチーと、お話はできないのかな」

あんまり戦うの好きじゃないもんな。

「ポチとも仲良くできたし、他のワルグチーとも仲良くできるんじゃないかなって」

ポチとは仲良くというのか？ 飼ってるだけじゃないのか。

「あんな奴ら、みんなおっちゃんじまえばいいんだ。おいらをあんな狭い部屋に閉じ込めやがってよ。おいらがみんなぶった斬ってやんよ」

仲良くできたというポチは全面対決を望んでいる様子である。

アサナがなんとも言えない表情でポチを見つめている。

「グリフオス。ワルグチーと仲良くできないの。えっ、できるの。

……にんしきかいへんってやつをすればいけるの。せんのう？」

『それ、あかんやつや』

はしやいでいるところ悪いが、お前の言う仲良くとは少しばかり違うと思うぞ。

「できるけど、硬貨がたくさんないと難しいって」

あ、そう。

硬貨を出そうかと思ったが、教育によくなさそうなのでやめておいた。

「ねえ、メルお姉さん。みんな仲良くするにはどうすればいいかな」

それを私に聞くのは間違ってる。

私はみんなで仲良くしたいとそもそも思わない。

『仲良くしたいかどうかを聞いてるんじゃないやなくて、どうすれば仲良くになれるかを聞いてるんだよ』

そういえばそうだった。

仲良くねえ。やっぱり聞く相手を間違えてるよな。

まあ、一緒にパーティー組んでダンジョンに行けば仲良くなるぞ。

友人とは言わないが、酒を飲みあうくらいにはなる。実体験だから

間違いない。

「ダンジョンは、どこにあるの？」

ここにはないな。少し前までそれらしきあったんだがなあ。

ダンジョンの残骸なら、この都市の二カ所にボロボロの形で落ちてる。

で、お前ならどうするんだ？

『俺？ 俺ならねえ。いつそダンジョンを作っちゃうかな』

ん？ ダンジョンを作る？

どういうことだ？

『俺の世界でも似たような状況があるんだ。——U国とS国の大国同士が戦争をしてる。この二大国が手を取り合うのはどういう状況か。答えは宇宙からとてつもなく強い第三勢力が侵略してきたときであるってね』

ふざけてるの？

最近はお前を蹴ってなかったからな。

『いやいや。真面目な話だよ。今回の話でキーを握っているのはエネルギー源になってる硬貨だ。どちらの勢力もそれを要として、確保するため行動してる。じゃあ、その硬貨が第三者の手に渡り、それが要塞——ダンジョンと言おうか。その最奥に置かれ、硬貨を守る強大なボスが現れたら二者はどうする。片方だけではとてもお宝は手に入らないとしてだよ』

……パーティーを組む？

『そうなるかもね。じゃあ、二者がパーティーを組んでボスと戦い、無事に勝ってお宝が手に入ったらどうなる？』

そうか！ 仲良くなるんだな！

『ぶつぶー。手に入れたお宝の所有権を巡って殺し合いが再開される、だよ』

駄目じゃん。

『でもね。そもそも——』

いや、もういい。

そのダンジョンってのがこの世界にはもうないし、ボスもない。

意味のない仮定の話だな。

『果たしてそうかな。やろうと思えばやれるけど、——どうする?』
どうするって言われてもな。

よくはわからんが、この世界のことだ。

私の一存で決めるのもあれだし、アサナに聞いてみることにしよう。

なんか魔法少女とワルグチーが仲良くなるかもしれない方法があるらしいがどうする?

「みんなで仲良くなりたくないな」

優しい奴だな。

「甘いこと言ってるな」

角付きが鼻で笑った。

私もそう思うので今回は蹴らないでやった。

まあ、理想ってやつだ。

で、アサナは仲良くしたいみたいだけど、どうすればいいんだ。

『そうか。決まったか。穏やかな時間は終わった。せつせと動くがよい!』

なあにバカ言ってるんだか。

1—E・巨城のボスが現れた

数日後である。

私は異世界の住処を引越した。

さすがにアサナの家に泊まりっぱなしはまずい。ヒモだ。

各所から必要な物資を手に入れ、住処も新しい物件を手配し、独立したのだ。

『じゃあ、テレビをつけて』

はいはい。

壁にはアサナの部屋にあったものと同じのを手に入れてきた。

「見えるでしょうか。一夜にして最初に崩落してきた城が消えました。その城はどこに行ったのかというと、今ではこのように旧図書館エリアに完全な城が建っています。どうということなのでしょうか」

私の新たな家が映し出されている。

どうやら大きな話題になってきているようだな。

『そりゃあ、こんなのが一夜でできちゃったらねえ』

ちなみに合成してくれたのは竜女である。

私の帰る予定の出口の構成はやっとなら決まったようで、ようやく製作にかかるところだった。

さすがに待たせて悪いと感じたのか、話をしたら動いてくれた。

しかも、合成にあたりいろいろなアイテムを渡しておいたので、半ばノリノリだった。

『虎の子もいくつか渡したからね。あれすらも合成ができるとは、恐るべきと言わざるをえない』

そうだな。

あの竜女は私から見てもどこかおかしいな。

なにより――、

「城は禍々しい見た目へと変貌を遂げています。この骨はいつたい何の骨なのでしょう。むき出しの臓器もいつたい何の働きがあるのか想像もつきません。キナメリアは朝から恐怖に包まれています」

趣味が悪い。

見た目が最悪すぎる。

『やばいところってのは伝わるでしょう』

十分すぎるほどにな。

『そろそろだな』

「なんと、この城の主を名乗る人物から映像が届きました。まだ我々も確認していません。これからノーカットで流したいと思います」

ドンピシャだな。

「ッキナメリアの諸君。私は――災厄の使徒。

なに、目線がおかしい。もうちよつと右？ えつ、逆」

ヘンテコな仮面を被った人物が映像に映し出される。

もちろん私である。声はアイテムで変えた。

『うーん、やっぱり撮り直しすべきだったなあ』

別にいいじゃん。

「このたび、私はここにダンジョンを建立した。

元の世界のダンジョンにも劣らない、素晴らしいダンジョンができたと自負するものである。

諸君らにもこの素晴らしさをぜひわかって欲しい、何？ 話が逸れてる。

ダンジョンの素晴らしさを語って何が悪い！ ああ、わかったわかった。

とにかく自信があるなら挑んで来るが良い。」「
もつとダンジョンの素晴らしさを語りたかったのに。

物足りないな。

「挑めば良いと言っても、やはり攻略の報酬があった方がモチベーションもあがるだろう。

そんな諸君らのために、こちらを用意した。

クリアすればこれらは諸君らの手に納まるだろう。」「

私をもっているありったけの硬貨が映っている。

実は城を作る前に撮ったもので、もうこの硬貨は城の作製に消費されここには残ってない。

「もちろん無視してもかまわない。

しかし、それでは私もおもしろくないからな。

この城にはとある不思議な機能をつけている。

世界の硬貨をこの城に集めるといふ機能だ。

約一ヶ月で世界の硬貨はこの城に集まる、らしい。

嘘だと思うのは自由だが、手遅れにならないよう気をつけ給え。

全ての硬貨がこのダンジョンに集まるとき、世界は停止するだろう

「

一ヶ月は私が元の世界に戻るまでの期間だ。

まだあと一ヶ月もあるのかあ……。

早くダンジョンに行きたい。

ちなみに硬貨を集める機能は本当らしい。

シユウが竜女と難しいことを話していたから、おそらく全ての硬貨がここに集まる。

今も、奥の部屋からジャラジャラと音がしているし、けっこう集まっているはず。

最初はまだ使われてない硬貨や人がいないところに行ってしまった硬貨から集めるとかだったはず。

この世界の住人は硬貨のエネルギーに頼り切っているからな。

なくなったら困るだろう。アサナも変な板や洗濯箱が動かないと困ってたし。

「ッそれでは諸君らの果敢なる挑戦に期待する。

どうだ？ これで挑戦者もわんさか来るだろ。

え、まだ映ってるの？ やっぱ、どこで切るんだっけこれ？

これ、違う？ ここか？」

映像はここで終わった。

『やっぱり俺は撮り直しをすべきだったと思うなあ』

私もちよつとそう思えてきてる。

だが、もう遅い。

挑戦者を待つとしよう。

2—E・脇役たちが現れた

宣言したものの挑戦者はなかなかやってこない。

入口の様子も映像に映されなくなってしまった。外の方がいまいちわからない。

『報道規制が敷かれたね』

しばらくしてついに扉が動いた。

やつと来たか。

最初の挑戦者は衛兵二人組だった。

なぜかいつも私に絡んでくる男女の亜人二人組だ。

なお城の中の景色は、私の部屋でも見られるようになってる。

『オイオイオイ。死ぬぞ、あいつら』

シユウは最初の挑戦者は魔法少女と予想していた。

私は逆にワルグチーと予想した。

どちらも外れた。

『ちよつと難易度を下げてやって、それと四階以上には絶対いかせないようにする。まあ、二階でギブアップだと思うけど』

シユウも焦りが見える。

手元のボタンをポチポチ押していく。

ダンジョンの内部はいろいろと設定できようになっている。

そうはいっても簡単な操作だけだ。

『ブラック過ぎるだろ。なんでこいつらに偵察させるんだ。同情を禁じ得ない』

ほんとにな。

「こちらピーワン。階段がある。どうぞ」

ちなみにこのダンジョンの入口は一階部分だが、始まりは二階からだ。

一階部分は、崩落で埋まってしまった本や博物館の品々を、アイテムから作り出した擬似モンスターが回収作業している真つ最中である。

「階段に仕掛けはなさそうだ。どうぞ」

一段一段すごい慎重に登っていく。

いや、そこに仕掛けはないから。最初の階段にわざわざモンスターとかトラップ仕掛けないから。

『次は仕掛けよう。嵌まると面白い。階段が坂になるとか』

ああ、そつち系ね。

坂になった先に糞溜めがあつて、つっこまされた記憶が呼び起こされる。

『あれ、臭かったね。俺が思い返す限りでも最悪の罠だった。スキルが手に入つてなかったらぶつ壊してやるところだよ』

私は壊してやりたかった。

街で笑われ、ギルドで笑われ、臭いも数日は落ちなかった。

しかも、手に入ったスキルは危険だから使えないと言われるし、怒りの持っていていき場がない。

『この前、暴れたときに使つてみたけど強かったよ。街では使えないね。悪臭で封鎖される』

やっぱりそれ系のスキルなのか。

衛兵二人はまだ階段を上っている。長えよ。

そもそも一層が無駄にでかいから二層に移るまでに何段あると思ってるんだ。

もう「トラップはないから早く上がれ」って立て札でもしといた方がいいんじゃないの。

『そういうのを置くと、逆読みする奴が出てくる。かえって時間がかかってくると思うよ。何もトラップはなかったと事実確認させるのが一番じゃないかな』

確かに、ダンジョン側から「ここにトラップはありません」なんて提示されたら怪しむか。

ようやく衛兵二人が二層にたどり着いた。

二層と三層は初級向けである。階層を上がるにつれ難易度が上がる。

甘いと言われたが、二・三層で死ぬことはほぼない。まあ、死んでも復活するんだが。

復活はしても、やはり殺されるのはショッキングな体験だろう。

やはり、まずはダンジョンがどんなものか広く浅く知ってもらわな
いとな。

二層のモンスターは弱い。

定番のスケルトンとスライムである。

ゴブリンは管理が面倒だし、私も嫌いなので却下された。

「こちらケイツー。前方よりワルグチーと思われる存在が多数接近。
どうぞ」

残念ながらワルグチーではない。モンスターである。

二人は手にした板で光線を出す。

スケルトンが数発で光に消えてしまった。

『ん？ 威力が上がってるな。制圧用のリミッターを外してるのか』
五体を倒したところで、スケルトンから硬貨が出てきた。

「こちらピーワン。コインの出現を確認」

ちよつと意外そうな顔をしている。

アイテム結晶の代わりにコインが出るように設定しておいた。上になるほどコインの出現頻度は上がる。それ以外にも中ボスだとアイテムが出る。

『使わないアイテムを整理する良い機会だったね』
ほんとはよ。

要らないアイテムが多すぎて、最近を探すのも一苦労だ。

二人はゆつくりと攻略を続けている。

スケルトンには棒で挑み、打撃の効きづらいスライムは光線で倒していく。

二層と三層の間の踊り場の直前で足を止めた。

「こちらケイツー。雰囲気の違いワルグチーを視認した」

やつとここか。

二層と三層の間に配置した中ボスを発見したらしい。

「体は先ほどまでの骨のやつだが、手に武器を持っている。右手に骨の槍、左手には盾だ。盾には粘液のワルグチーが付いている。どうぞ。——了解した」

戦うみたいだぞ。

勝てないだろ。

『工夫すればなんとか。まあ、殺さない設定にしてるから大丈夫でしよう』

片方の亜人が遠方から光線を撃つが、スケルトンナイトが盾で防ぐ。

盾についていたスライムは溶けてしまいがすぐに復活する。

「遠距離からの攻撃は防がれる。しかし、こちらに襲いかかる気配なし」

片方がもう一人に合図を送る。

左右で広がり、距離を詰めていくようだ。

片方が光線で注意を引きつけたところで、もう一人が棒で襲う。

しかし、その棒は槍で防がれ、光線の合間を縫い、盾が亜人を強く押した。

倒れた亜人へとスケルトンナイトは槍を突くが、距離があつたため

当たらない。

「くっ……、速いな」

派手に飛んだ割にダメージは少ないな。

『後方に飛んで衝撃を減らしたからね。はて？ ボタンを見せて』

私は手元のボタンを見せる。

『ちよい、これ逆。こっちは殺すモード。逆のボタンを押して』

こっちか。

『そっちじゃない』

もう押しちゃったよ。

ドスンと映像から音がした。

踊り場の下にスケルトンナイトが現れ、階段を上がっていく。

亜人二人がスケルトンナイト二体に挟まれる形となる。

『上のボタンを早く押して』

ボタンを押したら、強く押したためかボタンが潰れてしまった。

『あかん。認識されてない』

亜人二人は背中合わせて、上下のスケルトンナイトにそれぞれ向かい合う。

『殉職か。この事件を糧にして職場環境の改善が図られることを切に願う。まあ、どうせ復活するんだけどね』

そうだな。

このダンジョンは作製者の私に準拠されているためか、人がこのダンジョンで死んでも復活する。

復活する場所は最初の階段前らしい。

あいつらには悪いが、倒されてからスケルトンナイトを止めに下りればいいだろ。

『いや、まだわからん。邪魔者が入ってきた』

階段の下から輪っかが現れ、そこからヘンテコな仮面の男が現れた。

「お前はフラウダー！ やはりワルグチーが関与していたのか！」

前に見たことがあるやつだ。

ステッキに、長い帽子と印象に残っている。そんな名前だったの

か。

フラウダーこと変人は、背中を見せていたスケルトンナイトの足をステツキで打ちつけ、上手く転ばせる。

『うーん、バグが多いぞ。クリア階層までを転移可にしたのに、ここまですて移ができるようになってる。しかし、やるもんだ。スケルトンナイトを使役しやがった。しかし、あいつ——』

起き上がったスケルトンナイトは、変人を守るように立っている。さらにフラウダーはスケルトンナイトとともに階段を上がっていく。

「勘違いも甚だしい。——邪魔ですよ。あなたたちでも、下でならできるところがあるでしょう」

変人がステツキで階段の下を指す。

そこには復活したスケルトンやスライムが近寄っていた。

「……任せていいんだな」

「あなたたちこそ、下の掃除くらいはできるのでしょね」

おお、共闘するようだぞ。

ワルグチーと魔法少女が手を結ぶ第一歩じゃないか。

変な奴だが、話はわかる奴だな。

『その変な奴なんだけど、アサナの父親だね』

………は？

『いや、スイーアが魔法少女側をスパイしてたように、逆があってもおかしくないでしょ。実際、あの男は魔力がほとんどない。あの仮面がカタリストだ。最初の崩落のときにさ。いくら忙しいにしても娘に連絡一つないのはおかしいと思ってたんだよね。二回目の崩落が起きてから連絡がすぐ取れてたでしょ。あのタイミングでこつちに戻ってきたんだろ。飾ってあった写真と体型が似てるし、何より留守電の声と奴の声はほぼ同じだよ』

マジかよ。

将来、アサナもあなるのか。

『兆候はある。戦闘中、緊張してるはずなのに、なぜか楽しげに笑うところか』

そういや、なんか見覚えがある。

『母親に似ることを祈ろう』

ほんとそうだな。

三人がついにスケルトンナイトを倒した。

硬貨はアサナ父が手に入れたが、落としたドロップアイテムは衛兵が手に入れた。

ちなみにドロップアイテムは骨の剣と盾のセットある。

衛兵二人が仲良く剣と盾を分けて持っている。光線と盾、光線と骨剣の組み合わせだ。

『おかしいな。セットで装備しないと特殊効果発動しないはずだけど、なんで使えてるんだ』

シユウがそんな声を漏らしたのは、衛兵の一人が盾でスライムを防いだときだった。

盾がスライムを吸収し、スケルトンナイトと同じスライム盾になっている。

『あれがそう。剣のスケルトン特攻は常時発動なんだけど、スライム吸収はセット装備限定のはず。パーティー間で装備してれば発動するのか、これは知らなかった』

私はそんな効果があることさえ知らなかったんだが……。

『そりゃ、俺達はあんなの装備する必要がないからね。ただ、厄介なスライムがいるところで装備する熟練者はいるよ。スライム全種に効果があるからね。スライムを吸収すると物理攻撃が無効化できるよ。うになるし、相手をスライム盾で絡め取ることもできる』
知らないことだらけだ。

普段はギルド製のアイテムくらいしか使わないからな。

『それか便利な魔装具くらいだね。強いアイテムもすごい多いんだけどね。上手く使って戦うのはかなり難しい』

超上級ソロのアイテムがあるよな。

『ボムおじさん』ね。ちよっと攻略の様子を近くで見たいね』

三人の即興パーティーはそのまま三層も進んで行く。

二層から獣型のモンスターが追加されているので進行は遅い。

『あの仮面の力がダンジョンでは強すぎるな。強いモンスターが奪われる。しかも、倒すとコインが落ちるから、それを消費して長期戦も戦える』

じっくりではあるが、慎重に進んでいつている。

動きの鈍重なスケルトンナイトを、途中で文字通り切り捨てて、角の生えた馬のモンスターを使役している。

三層は長細い通路がメインなので馬を特攻させて蹴散らせているようだな。

『悪くない。相手が乱れたところを攻撃すれば良い。——だけど、ここまでだ。こいつは絶対倒せない』

そりやそうだ。

二層と三層の階段前にある通路に、その中ボスは鎮座していた。

「こちらピーワン。行き止まりだ。どうぞ——了解。引き返す」

三人が引き返そうと後ろを向き、壁が動き始めた。

すぐに三人は気がついて振り返る。

壁はピタリと止まった。

「……動かなかったか」

「動きましたね」

三人は顔を見合わせ、亜人の一人が板を構えた。

すでに臨戦態勢である。

「三、二、一、——ファイア」

合図と同時に光線が壁に当たった。

壁は震え始め、四隅に四つの目が現れる。

「コンタクト。壁の化物だ。銃が効いていない。後退する」

後ろに引きながら光線を撃つが、残念ながらそれではダメージが通らない。

壁は平然と男三人に向かって押し寄せていく。

『やっぱりこれは初見じゃ難しいよね』

シユウは笑っているが私は笑わない。

私もかつてこの壁に驚いて逃げた一人である。

『倒せない』のが特徴だからね』

なんとこの中ボス、絶対に倒せない。

当時、すでに極限級だったシユウの斬撃ですら傷無しで弾いた。

全ての通常属性の魔法に対して、完全な耐性を持つという恐ろしい壁モンスターである。

『今なら真正面からいけると思うけど、耐性封印はしないときついかな』

しかも背中を見せたり、攻撃したりすると押し寄せてくる。

通称は「押し壁くん」である。

ただ防御に全振りで攻撃はからつきしだ。

不気味な目の模様が現れて、すごい迫力で寄ってきて怖い。

知らない奴は私も含めて、そこで驚いて逃げてしまう。

しかし、攻撃手段は押しだけである。

攻略法も力で押し返すという力業が有効なやつだ。

ちなみに本来のダンジョンだと、力押しをしても先に進めない。

一方通行から回廊にいったん引き寄せて、動きを止めてから別の道で奥に進むのが正攻法であった。

当時の私たちはどうにかして倒そうと躍起になったものである。

これの元のアイテムって普通だと何に使うの？

『防火扉とか防犯扉に使われるね。本物よりは強度が落ちるけど、とても信頼性がある。ダンジョン攻略で使う奴もいる。盾にできるから』

さすが特殊ドロップ。

あれ？ 特殊ドロップなのは覚えてるけど、どういう特殊ドロップなんだっけ。

『押し壁くんを押しして、モンスターを壁に押しつぶして倒す。十体目の撃破で特殊ドロップ』

思い出した。

冒険者の一人を挟んじやって問題になったな。

思い出話をしているうちに三人はリタイアした。

アサナ父は空間魔法で消え、衛兵二人は大人しく入口から帰った。

三人の攻略から半日を待たずして、新たな挑戦者が現れた。これまた見覚えがある三人組だ。

『この世界、ほんとブラックだな』
シユウも引いている。

「よし！ 行こう、みんな！」

映っている少女たちはこれまた最初に出会った魔法少女たちだった。

手甲、ブレスレット、ハンドボウと装備している。

良かった手甲の少女が復活してる。

『ハンドボウもね』

三人は、最初の衛兵ほど警戒心がない。

階段を勢いよく走って行く。

『さつき追加した罫を作動させて』

いいの？

『うん。警戒心が薄すぎる。油断するとどうなるか教えておいた方が
良い』

罫のボタンを軽く押す。

階段が折れたたまれ、滑り台のようになった。

隙間から潤滑液も出ているので、踏みとどまることはできないだろう。

案の定、三人は叫び声をあげながら入口まで滑り落ちていく。

扉にぶつかりそうだったので、開けておいてやると外に飛んで行ってしまった。

「ちよつと！ 階段に罫はないって話じゃなかった！」

手甲の少女がカンカンになってまた入ってくる。

潤滑液まみれでちよつと笑える。シユウも笑いをかみ殺していた。「落ち着いてよ。調査の人たちが見逃したトラップを踏んだかもしれないでしょ」

「中途半端な調査しかしてないんじゃないの。言いつけてやるんだから」

『とぼつちりを受ける警官たちが可哀相でならない』

ハンドボウの少女になだめられながら、元に戻った階段をまた登り始めた。

先ほどよりもかなり慎重になっているところに学習の成果が見える。

同じところの直前で立ち止まって、階段をじっくり見ながら軽く踏みつつ上る。

また押して良い？

『いいけど、ちよつと待って。上から四つ目のボタンにしよう。……今！』

ポチツと押した。

先に乗ったブレスレットとハンドボウの階段はそのままである。

わずかに下にいた手甲の少女の階段から下だけがパタリと閉じた。

一人分の叫び声が下へと消えていく。

二人が呼びかける名前だけが落ちる少女を追いかけていた。

これ、あれだな。

おもしろいけど、性格が悪くなりそう。

お前、こういうの得意だろ。

『人並みには』

嘘つけ。ノリノリだっただろ。

もしもお前が主導でダンジョンを作ったら、私はそこだけは攻略したくない。

『どうして私だけ落とされるの！』

すごい勢いで階段を上がってきて、無事だった二人に怒鳴り散らかしている。

二人に責任はないので、怒る相手を間違えているとしか言えない。

怒られるべきは私たちである。

でも、全身が潤滑液塗れなので怒られても笑ってしまうかもしれないな。

さすがにもうやらんで。

『うん。もう仕込みは終わってるから。後は見とけばいいよ』

仕込み？

さすがは潤滑液塗れでも魔法少女である。

二層のスライムとスケルトンは物ともしない。サクサク倒している。

スケルトンナイトですら削りきっていった。

三層も苦戦はしまいと見ていたが、意外なことに苦戦している。

なんかモンスターたちが強くないか。遠くからも襲いに行ってる気がするぞ。

『階段で使った潤滑液に獣たちの興奮剤が混ざってるんだ。今の潤滑液まみれの彼女たちじゃ突破は難しい。大人しくもうちよつと強い人を呼んできてもらおう。子供の遊び場じゃないんだわ』

それもそうだな。

その後、少女たちは泣きべそをかきながらダンジョンを後にした。

強くなれ。

強くなってまだ挑んでくるんぞ。

ダンジョンは一皮剥けたお前たちを待っている。

3—E・揺れ動く魔女と拒食の羅刹が現れた

数日ほど攻略パーティーを見ていたが、はつきり言ってもう飽きた。

面白いのは最初だけだな。

途中からは作業みたいになってしまう。

やはりダンジョンは自分で攻略する方が面白い。

『お。メル姐さんの声に応じて面白そうなのが来たよ』

面白そう？

映像を見ると、久々に見覚えのある姿があった。

スィーア先輩である。さらにその脇には小さな角付きが付いてきている。

なんか変な組み合わせだな。

これはどうなんだ。魔法少女とワルグチーの連携ってことになるのか？

『ならないと思う。スパイとはぐれものの組み合わせだね。いちおう魔法少女連盟からは魔法少女と、認定生物みたいな扱いだけど』
変な組み合わせだね。

角付きは来てるのに、アサナは来なかったのか。

『まあ、強さが未知数だからね。もしかしたら何かあったのかも』

……心配だね。

『これが終わったら行ってみようか』

そうしよう。

スィーアと角付きは口げんかこそしているが、今までで一番順調だ。

普通に両方とも強い。

攻撃力と防御力が必要な場面では、鎧付きの角付きがこなせる。

足止めや状態異常といった搦め手では、スィーア先輩がうまくこなしている。

『おおー。四層を初クリアしたね！』

さすがだねあ。

四層からは三層よりもさらに戦闘メインの中級クラスを配置した。

四層後半でスィーア先輩が魔女化こそしたが、それによりボスを上回った。

『二人とも上級は余裕である』

五層は超上級だっけ？

『いや、まだ上級だよ』

クリアできそうだな。

『無理だね』

でも、かなり強いぞ。

『四層は中級の戦闘力だけを測ってる。五層は前半で上級の状態異常耐性、後半とボスで心理耐性を測る。前半はぎりいける』

後半は無理なの？

『無理。相性が悪い』

もう戦闘不能になることが前提で話をしている。

『できれば、ボスの前に倒れて欲しい』

前半で麻痺や毒といった状態異常を巻き起こすモンスターが設置されている。

最初こそ苦戦をみせたが、倒し方を覚えて割と余裕な様子だ。

『両方とも状態異常に対する耐性が素で高い。それに快復や保護のネイルもすぐに編み出してくるのが素晴らしい』

べた褒めである。

お前、なんかスイーア先輩に対して甘くないか。

『甘いね。認める。だからこそボスにあれを設置した』

は？

スイーア先輩のためにわざわざボスを決めたのか。甘過ぎだろ。

で、このボスにしたアイテムってなんだっけ？

『「汝を測る巻尺」だよ』

……………私が間違ってたようだ。

お前、スイーア先輩に対して絶対甘くないぞ。

二度と攻略したくないダンジョン、トップスリーのアイテムだな。

思い出したくもないやつだ。

『個人差が大きいからね。最初に試しに挑戦したけど無理で、耐性付けてごり押ししたところだね。メル姐さんともあのダンジョンは相性が最悪だった。過去に傷がある奴ほどきつい。ああ、やっぱりボスマでたどり着いてしまったか』

二人はすでにモンスターの心理攻撃を受けて、精神的疲労が溜まっているようだ。

お互いにもう軽口をたたき合うこともない。最悪の状態だな。

先に足を踏み込んだのは角付きだった。

巻尺が発動し、様子を見たスイーア先輩が一步下がった。

角付きの胸から、細いヒモが現れる。

角付きはそのヒモをつつき、恐る恐る引つ張った。

ヒモは胸からさらに出てきて伸びただけだ。

角付きの隣に見たことのないモンスターが現れる。

虎のような体軀をしたモンスターだ。

角付きが震え始めて、その場で嘔吐し始めた。
吐けども吐けども出てくるのはわずかな液だけである。

『羅刹の能力を発動するために食った奴だろうね』

角付きはそれ以上ヒモを引っ張ることができなかった。

その場で倒れ、ボスの能力発動は終了した。

角付きを助けに入ったスイーア先輩に対しても巻尺が発動する。

スイーア先輩の胸からもヒモが出現した。

引っ張らなきやいだけなんだが、無性に引きたくなるんだよな。

彼女も私と同様だったようで、そのヒモを引っ張ってしまう。

ヒモが引っ張った分だけ伸びて、彼女の横に人が現れる。

薄幸そうな女性だな。影が薄いというか。

「……ミーア」

スイーア先輩が名前を呼んだ。

女性の名前だろう。

「ねえ、スイーア。どうしてあのとき助けてくれなかったの」

ミーアと呼ばれた女の腕がパキリと変な方向に曲がった。

「スイーア。私、ずっと痛くて、助けを呼んでたんだよ。聞こえなかったの？」

腕の次は足だ。

手と足の爪が剥がれ、血が流れていく。

「どうして黙っているの。スイーア、背中の中の羽は何なの？ ねえ、答え

てよ？ あなた——ワルグチーなの」

女の首は折れ、それでもスイーアを見つめている。

「ねえ、答えてよ。——スイーア」

「わ、私は……」

答えることはできなかった。

ミーアと呼ばれた女は消えてしまう。

あの、これってほぼ過去の再現でしょ。

ちよつと重すぎない？

『ちよつと俺の予想を超えてた。同じくらい年齢の子に石を投げられ

てたくらいかと思ってた。今のは魔法少女だったから、スパイとし

て魔法少女側に侵入したときできた仲間をワルグチーに売ったか、見捨てた光景だろうね。友達だったのかもしれない』

前も聞いた気がするんだけど、これってどうやって攻略するの。無理じゃないか。

『人によつては無理。悪夢を連続して見るようなものだからね。攻略するなら概ね三パターン。一つ目は忘れ去る。恐ろしいほどの自己防衛パターン。二つ目は自らトラウマを克服すること。自分自身を逞しく成長させるパターン。慣れとも言う。三つ目は支えてくれる人や仲間を意識すること。自分自身を支えてくれる人もまた自分の中に入れこむパターン』

けっこうあるが、どれも難しそうだな。

『併用もできるけど、まだ難しそうだね。ここまでだ』

なんか泣きながら謝り続けてるからな。

『ボタンの一番下から二番目を押して』

はいはい。

押すと、部屋にガスが発生した。

そのまま意識を失い、地面に倒れた。

回収班がスィーア先輩と角付きを運んでいく。

『ちなみに、一番確実な攻略法は精神攻撃耐性を付けること。メル姐さんがそれ。でも、これはクリアしたとは言えない』

そうかもな。

それよりもこのボスを変えた方がいいんじゃないか。

『ダメ。弱点や脛に傷はあつてもいいけど、それを乗り越えてくる奴か防ぐ奴じゃないとラスボスへの挑戦権は与えない』

残り二十日と数日のはずだが、ここまで来られる奴がいるのか不安になってきた。

夜になり、ダンジョンからこっそり出てアサナの家に向かう。

真っ暗だな。

まだ起きていても良い時間のはずだが、アサナの家に明かりはついていない。

輪番停電だかがされているため、区域ごとにエネルギーが使えない時間があるとは聞いていたが、周囲の家はまだ明かりが灯っている。

植木鉢の下に隠してある鍵を使ってお邪魔する。靴はあるな。

リビングには角付きが仰向けになって寝ていた。

いびきをかいて、鼻から泡が出ている。

こいつ、昼はゲーゲー吐いていたのに、今は元気そうに寝てるな。

「ごはん……」

なぜか、むかついたので蹴って光にしてやった。

『ひどい。あんまりだ。で、アサナはやっぱり体調が悪いみたいだね。』

ご飯を作ってる跡もないし、洗濯機を回した様子もない』

良くないな。

アサナの部屋を静かに開けると、彼女は眠っていた。

『——うん、ただの風邪だね。薬は飲んでるみたいだから、寝てれば治るよ』

寝てれば治るだろうが、少しは症状を軽くしてやれないか。

『薬ね。過保護すぎるけど、都合はいいか。「薬」番地の「ジ」の欄から赤い瓶を取って』

これだな。

「ん……、お母さん」

どうやら夢を見ているようだ。

しばらく側にいてやろう。

「……メルお姉さん」

どうやらベッドの近くに座った音で起こしてしまったらしい。

そうだ。私だ。

起こしてしまったな。

「メルお姉さんが、ダンジョンを作ったの?」

言葉がゆつくりとしすぎていて、質問だと理解するのに少し時間がかかった。

顔と声は隠していたつもりだったが、やっぱりバレていたか。

ああ、そのとおりだ。

私がダンジョンを作った。

「世界の敵だって、言われてるよ。違うよね」
世界の敵？

ああ、映像のやつだとそう言われてるな。

しかし、やってることから判断すれば、間違っではないんじゃないかな
いか。

「魔法少女とも戦うの？」

そうなるな。

実際にダンジョンで戦ってるな。間接的にだが。

「ワルグチーとも？」

そうだ。

最近はかなり強いのも挑んでくるようになったぞ。

最近はな、あの変な帽子の――

『その話はいらない。彼も彼の平和のために戦ってる。まあ、もつと
足下に目を向けるべきだけど。とにかく、彼については黙ってて』
たくさんの奴らが私のダンジョンに挑んで来る。

「私、みんなで仲良くしたい」

そうだな。

お前のその言葉を受けて作ったダンジョンだ。

魔法少女とワルグチーもそろそろ手を取り合う頃とシユウも言っ
ている。

「メルお姉さんも一緒だよ。みんなで仲良くしたい」

……お前は、優しいな。

私のことまで考えてくれてるなんて。

しかし、お前は誤解しているぞ。

なるほど私は世界の敵だろう。

魔法少女ともワルグチー、一般人も私の敵なのだろう。

私は敵と戦う。

魔法少女とも、ワルグチーとも、一般の奴らとも。

外で戦えば仲が良いとは言えない。だが、敵として戦うのはダン
ジョンでだ。

お前はまだ挑んでないからわからんだろうな。

とにかく、体調をきちんと治してから挑んでこい。

ダンジョンではお前も私の敵だ。全力で相手をしてやる。楽しいぞ。みんな仲良くできる。

ダンジョンだからこそ——。

お前は魔法少女で、私は冒険者——。

私たちは敵同士で、戦いあつて、それでもみんな仲良くできるんだ。

「私、頭がよくないからよくわからないよ」

『大丈夫。俺もよくわからない』

今はゆっくり休めということだ。

薬を置いとくから飲んどけ。すごく効くやつだからな。

だよな？

『効き目は保証する。起きたらすぐに動けるようになる。副作用はあるけどね』

待て。

最後にボソツと付け加えるな。

副作用があるとか聞いてないぞ。ちゃんとどうなるか言つて。

『個人差はあるけど、五日から十日ほど、魔力切れが起きやすくなる。

まあ、その期間は魔法少女になるのは控えるべきだね』

なんだ思ったよりも軽いな。

シユウの言葉をアサナに伝えると、小さく笑い始めた。

「メルお姉さんは、やっぱり優しいね。私たち、敵同士じゃないの？」

敵……、敵ね。言葉が良くないんだな。

挑戦者と言ひ換えよう。挑戦者を大切にするのがダンジョンというものだ。たぶん。

私もダンジョン側になることはあまりないからなあ。てきとう言つてる。

「もうちよつとだけ、このままで」

ベッドの端から手を伸ばしてくるので、握り返してやる。

「……お母さん」

私はお前のお母さんじゃない。

——と言ひ返しはしてみたが、すでに眠りに落ちていた。

手を放してもらったところで部屋から出て、そのまま出口に向かう。

「あ、テメエいたのか！ おいらが——」
黙ってる。

アサナが寝たところだろうが。

珍獣を蹴って消滅させ静かにさせる。

こうして静かな夜の中、私はダンジョンへ戻った。

4—E・ワルグチーと魔法少女が現れた

半月が経ち、挑戦者がかなり増えてきた。

ときどき出かけて留守にしているが、その間に五層までたどり着いている奴もいる。

ダンジョンの罠やモンスターの配置も増やした。

攻略も最初は一グループずつとかだったのに、複数グループでの攻略も見られる。

それに伴い、部屋の映像の数も増やしたのでもはや訳がわからない。

魔法少女側も、ワルグチー側も大多数での攻略が一度だけあったのだが、やはり振り返り討ちにあう。

第五層が大きな壁となり、第六層にたどり着いたのはほんの一握りだ。

そのほんの一握りも第六層で、撤退を余儀なくされる。

六層からは超上級ではあるが、全てボス戦だけで構成されている。

六層は超上級、七層はほぼ極限級。最後の八層にいるのがこの私である。

『おっ、やっと来たか』

五層の映像に変化が見られた。

輪っかが現れ、見覚えのある大きな巨体が出てきた。

それにお供も引き連れている。

五層ボスの巻尺もあっさり引き抜く。

お供が精神攻撃の耐性を付与しているようだな。

魔法少女側はこの巻尺への対策ができないのかここを突破ができない。
ていない。

『まさか隠し空間からも硬貨が奪われるとは思ってなかっただろうね。さらには自分たちすらも硬貨として判定されるなんて夢にも思わなかっただろう』

魔法少女側はエネルギー源が奪われ、時間が経つごとに危機が迫る。

一方の、ワルグチー側は自前の魔力があるので、最悪エネルギー源がなくても問題ない。

エネルギー源を失った魔法少女を駆逐してからここに挑んでも良いし、隠し空間にさっさと引っ込んででも良い。

——と考えていたのだろう。

甘かった。

この城は硬貨を世界から奪う。

奪うのは硬貨のみでなく、硬貨を直にエネルギー源とした存在も対象にするとか。

理屈は知らんが、すなわちワルグチーは硬貨にされる。おそらくいくつかの仲間が、硬貨に変えられ、この城に貯蔵されてしまったはずだ。

さらに隠し空間すら世界の一部として判定されるため、空間魔法の先からさえも硬貨を奪っていく。

この城は、一ヶ月後に全てのワルグチーをコインに替えて吸収し、人間たちからは全てのエネルギー源を奪い尽くす。

本当にこの世界を滅ぼしかねない迷惑極まりない城になったのだ。

『さて、六層だな。拝見させていたどころ』

ボスと、そのお供数体が階段を上り、第六層に足を踏み入れた。

六層に立っているのは男が一人。

体の右半分にひどい火傷を負った、肌黒の男である。

『うーん。このメンツで勝てるビジョンが見えない』

そうね。

黒竜のドロップアイテムから作り出してもらった六層のボスだ。

極限級ではないかと思ったが、人間形態時の特殊ドロップなので、それほどではないそうだ。

まあ、私が不意打ちの一突きで倒せるくらいだったからな。

しかし、私はこの黒竜のアイテムを使った気がするんだよな。

『どっぴ？』

いや、思い出せないし使ってたら残ってないから記憶違いだとはわかる。

でもなぜかしつくりこない。ここと同様にセットで使ったような……。うーむ。

『幻想だよ。それよりあの黒竜だ。前回みたいに待ち状態なしの全力に加えて、トラップ利用もありだから。普通の状態のメル姐さんだと相性がとてつもなく悪い。彼らも容易には勝てない。技がどうこう以前に、能力が単純に足りてない』

要するにそれくらい強い。

実際に、ボスらの直接攻撃もあっさり反撃している。

遠距離から攻撃をしようにもフロア中に仕掛けてあるトラップを自発的に発動させることでワルグチーを動かし、まともに攻撃をさせない。

やっぱり身体能力が違いすぎるのだろう。

ボスたちが距離を詰められて焦っているように見える。

『まだまだ力を出し切っていないよ。今のは単なる技術だ。止まった状態から、いつきにトップスピードに持って行って、緩急で相手の感覚を狂わせてる。正面からだ瞬間移動みたいに見えるはず。それにあの接近戦だから』

遠くで見ている私は何が起きてるのかさっぱりわからない。

おそらく近くでやられている方はもっとわからないのではないだろうか。

体格差や体の構造を無視して、ワルグチーどもが投げ飛ばされている。

攻撃を仕掛けたはずが飛ばされたり、盾として使われる始末だ。

『しかも極めつけがあれだからね』

ああ……、あれね。

私もよくお世話になつてるやつな。

ワルグチーの一体が、大きな腕を黒竜に向けた。

何もしていない奴だと思つたが、どうもエネルギーを溜めていたようだ。

ボスのやれという声で、腕から極太の熱線が走る。

黒竜はそれを軽く回避したが、そこはボスの腕の見せどころ。

熱線の先に輪っかを作り、もう片方の輪っかを黒竜の背後に作る。

輪っかから輪っかへと熱線を潜らせて当てる仕組みだ。

しかし——、黒竜の手が一部だけ人間のものから獣らしきものに変わる。

その黒い腕に熱線どころ、他の全てが吸い込まれる。

景色が戻り、一同が唾然としている中で黒竜だけが動き、ボスたちに攻撃を加える。

彼らは光になって消え去ってしまった。

無理じゃないの、これ。

どうやって倒すんだ。

『こいつについて言えば、倒されることをほぼ想定してない。撃破の難易度だけなら七層よりずっと難しい。まだ切り札も残ってるしね。こいつの役割は足止めと警告。別に倒さなくても上にいける。階段も普通に見えてるし、そこにトラップは仕掛けてない。ただ、上にはもっと強いのがいるぞって思わせるのと、少人数で挑むとこいつに数を奪われて上で戦いにならなくなることを知らせる役目』
ということは、そろそろってことだな。

『そうだろうね。魔法少女もワルグチーも互いに切羽詰まってきた。そろそろ手を取り合うんじゃない。そうしないと滅亡だから。さあ、読書の続きをしよう』

上層の挑戦者も消えたところで読書に戻る。

一層から順次回収されていく本をシユウが読んでいる。

気になることがわかるまでもうちよつとだそうだ。

こいつに気になることがあるように、私にも気になることある。第六層のボスが超上級に相応しいことはわかるのだが、第七層のボスがわからない。

シユウが言うにはほぼ極限級らしいのだが、どうしてあのアイテムが私の直前なのかが不明だ。

早く挑戦者に来てもらい、その答えを示してもらいたい。

数日後、ついに魔法少女とワルグチーがやってきた。

やってきたというか、五層のボス前で鉢合っただけとも言おう。

『偶然ではないね。スパイがお互いにいるんだ。会うように調整できるでしょ』

何はともあれ、角付き、スイーア先輩、おっさん魔法少女、仮面の男、ボスたちが一同に揃った。

『情報交換はしてるね』

良い傾向だ。

『そうね。まあ、半分を足止めにして六層を通過してくるでしょう』

おお。

どんどん近寄ってくるな。

大人数のパーティーがいよいよ六層に踏み込んだ。

おっさん魔法少女の一部や仮面男、ボスの取り巻き数体らが六層で黒竜の足止めをし、残った奴らが七層に走った。

黒竜も通過していく奴をわざわざ追撃しようとしなない。

戦う意志のある奴だけを相手にする。

そして、私を除けば最後の砦——第七層だ。

七層へと踏み込んだ奴らの前に置かれているのは一枚の姿見である。

カースス山にある初級ダンジョン——水鏡洞穴スペクルムで手に入ったものだ。

いちおう特殊ドロップではある。

未だに入手方法が確立されていないアンノウンアイテムだ。

しかし、これがどうしてほぼ極限級としてこの階層に置かれているのかわからない。

『見ておけばわかるよ。彼らにはちゃんとダンジョンを攻略してもらおう』

いや、もうしてるじゃん。

『仮にだけど、ここをメル姐さんが攻略してて楽しい？』

そりゃ楽しいだろうけど、ちよつと物足りなさを感じるかもしれないな。

なんだろう……。前にもこういうダンジョンに挑んだな。

あれと同じなんだが上手く言葉にできない。

『そう。最高の合成こそすれど、しよせんこのダンジョンは作り物なんだ。人工物特有の臭いがどこか鼻につく。歴史もなく、統一感もなく、ただ強そうな駒をそれらしく並べただけの箱庭。——だからこそ彼らには限りなく天然に近いダンジョンを体験してもらおう。難易度がほぼ極限級なんじゃない。現象がほぼ極限級なんだ』

あのアイテムでそんなことができるのか。

たかだか初級ダンジョンの特殊ドロップアイテムだぞ。

『大切なのは難易度やら、特殊かやらじゃない。それが何かであり、自分が何なのかだ。アイテム名は覚えてる？』

なんだったか。

たしか、

——『カーススの鑑』？

フロアの真ん中に置かれた鏡がどろりと床へ溶けていき、溶けた鏡が床へ、壁へ、天井へと広がる。

そこに映るのは、かつて見た山の景色とそっくりだ。まあ、山なんてどれも似たような景色なんだがな。

景色はどこまでも広がり、まるで部屋がそのまま外になってしまったようだった。

5—E. 異世界のダンジョンが現れた

何これ？

どうなってるんだ？

おかしくないか、これ部屋の中なの？

『違うよ。第八層はカースス山になった』

は？

『八層はカースス山になった。彼らが挑むのはカーススそのものだ』

何それ？

どういうこと？

「珍しい姿の方々ですね」

『……ん？ あれ？』

私と同様に慌てふためいているスイーアやボスの前に、青い髪の少女が現れる。

「ここはどこだ？ お前は何者だ？」

魔法少女のおっさんが少女に武器を突きつけて問う。

この少女、覚えてるぞ。

赤い髪の子と双子だった奴だろ。

赤い子には懐かれてたが、こつちには毛嫌いされてた。

毛嫌いされてる割には、やたら何度も声をかけられたから余計印象に残ってる。

「貴方は人にもものを尋ねるに際し、己が何ものか示すこともなく、武力を以て行使なされるのですか？ 礼節をわきまえなさい」

少女は怯みや脅えも一切無しで、ぴしやりと言つてのけた。

これにはおっさんもたじろいだ。武器を持たない、自らの娘ほど歳の離れた少女に真つ向から批判されたのだから。

「失礼した。不躰であった」

おっさんは赤面しつつ武器を引き、自己紹介をする。

他の奴らも渋々といった体で自らを簡潔に伝えた。

「わたくしはリムニ伯が孫娘、双子の妹——ザファイリです。ザムルン
グ商会、ケオラヴァ支部の支部長も務めております。よしなに」

えっ、あいつ、そうだったの？

伯爵の孫娘つてのは知ってたが、何とか商会の支部長つてのは初耳だ。

『んー、そうみたいねー』

私が行ったときに何とか商会はなかったはずだ。ギルドに入れずダンジョンの地図がなかなか見つからなくて困った記憶がある。

それで魔術ギルドへ行つて、学者っぽくない学者に会ったんだよな。一緒にダンジョンも行ったからよく覚えてる。名前以外はだが……。

支部長になったのは、攻略後の話なんだろうな。

珍しいな。あの商会の支部長つてだいたい変な能力とか持つてるじゃん。

あいつはただのガキだろ。

『そうだね。あの子はただのツンデレちゃんだからね』

「聞こえていますからね」

なあ、今、気のせいかな？

こちらを見てきた気がするぞ。

『はは、気のせいに決まってるじゃん。とりま、成り行きをみておこう。……嘘だろ。これ、妄想じゃなくて本当に繋がってるの？ 限定

空間の接続？ 効果がぶっ飛んでるな』

シユウも何かぶつぶつと呟いている。

こういうのは想定外のこと起きている状態だ。

発動する前は、何もかもをわかった様子で語ってたけど大丈夫なのか、これ？

『わからん』

わからんって、お前。

「それが何かで、自分が何かが大切」だかと、自信満々に抜かしてただろ。

『そんなことを言ったかもしれない。俺としてはカーススで一緒にハイキングでもして、どっかのダンジョンに彼らが一緒に挑んで、仲良くなつて、時間を潰してくれればいいなくらいに思ってたけど、どうなるかわからなくなってきた』

シユウも胡乱な様子である。

発動してしまったものは仕方ない。

ひとまず成り行きを見守るとしよう。

『せやな。前向きに行こうぜ』

あちらも魔法少女のおっさんや、ボスたちが彼らの世界の現状を語っている。

さらに、自分たちがどういう経緯でやってきたのかも話す。

ザフィリはそれを真剣に聞き取っていた。

「あなたたちの身の上は理解いたしました。わたくしが為すべきことは何もありませんね。それでは失礼」

ザフィリは優雅に一礼して去っていく。

……………すげえな。

諦めの早さと退き際の潔さに誰も反応できなかつたぞ。

一拍以上開けてから、魔法少女のおっさんたちが追いかけていった。

「待ってくれ！ 何か、その、ないのか?!」

「わかることはあります。しかし、それらはあなたがたの問題で、あなたがたが解決すべきことです」

すげない対応と感じつつも、それもそうだなと頷く自分もいる。

ザフィリは無関係だ。ここにいる人物じゃない。

「頼む。わかることだけでも教えてくれ」

「あなた方が『災厄の使徒』で『世界の敵』と呼ぶ存在は、まさしく名の通りです。ここにも災厄をもたらし、我々の敵として君臨しました」

おっさんとボスの顔色が悪くなっている中、スィーア先輩が思いついたように声をかけた。

「あなたたちは無事だったの?」

「無事……、無事とは言えませんでしたね」

私、何かしたか?

当時から疑問だったんだよ。

何かこいつにはひどいことされたように恨まれてる気がする。

「でも、今は普通に出歩いてるように見えるけど」

「はい。問題が解決しましたから」

あつけらかんとザファイリは告げた。

「災厄をやり過ぎしたってこと？」

「違います」

「……災厄と対峙して勝ったということ？」

「違います」

「訳わかんねえよ」と角付きがツバを吐いた。

「そういやこいつもいたなと思ひ出す。」

「最初こそわたくしたちは災厄と戦いました。あなた方と同じです。迎撃し、惨敗いたしました。斬られ、その後はバラバラのボロボロにまでされました。跡形がないほどに」

あれ？　なんだ、これもしかして別人の話か。

私たちのことじゃないな。さすがにそこまでやったら覚えてる。

「それで、そんな状況になって、あなたたちはどうしたというんだ？」

「どうもできませんよ。あなたたちはできたんですか？」

「……いや。何もできなかった。災厄のなすがままだ」

ザファイリも簡素に愛想なく頷く。

「なるほど。状況とそれに至る流れがようやく把握できました。それであなだがたはダンジョンに挑んでいるのですね？」

他の全員が頷いた。

「挑んでどうなさるんですか？」

「災厄を倒す」

ザファイリは、ここで初めてクスリと笑った。

「我々では無理だと言いたいのだろう」

「いえ、そうではありません。倒せば問題が解決するのか、と言いたいのです。その後はどうなります？」

全員が言葉を詰まらせる。

シユウは殺し合いが再開するとか言ってた気がするな。

「失礼しました。わたくしたちが『どうやって問題を解決したのか』でしたね。簡単です。わたくしたちの問題は、災厄その人ではなく、まったく別のところにありました。災厄はわたくしたちをボロボロ

にしましたが、問題を浮き彫りにもしました。あまつさえ、災厄は力のないわたくしに寄り添い、問題解決の助力もしてくれました」

彼女はそう言って、指を押さえた。

その指には銀色のパーティーリングが嵌まっている。

「あなたがたの問題も、災厄その人ではなく、別のところにあるように見えます。あの災厄がダンジョンを攻略するのではなく、わざわざ作ったというのも、あなたがたの問題を浮き彫りにするためでしょう。まったく甘いのか、厳しいのか」

首をわざとらしく横に小さく振ってみせる。

「やはり、わたくしが為すべきことはありません。それらは『あなたがたの問題で、あなたがたが解決すべきこと』なのですから。まずは問題の見直しからされてはいかがでしょうか。僭越ながら、力とは、敵を倒すときだけでなく、自らの足を踏み出させる際にも必要となるものです。——失礼」

ザフィリは背を見せて去って行く。

その背を追う者はいない。

『さつすがザフィリちゃん！ 俺の言いたいことを、ほぼ全部言ってくれたね！』

ぜってえ嘘だろ。ほんと調子が良い奴。

ザフィリも顔を半分だけ振り向いてこつちを睨んでいるように見える。

あいつ、やっぱりお前の声が聞こえてない？

ただ、奴らにも、私のやろうとしていることが伝わった気がする。

これで奴らが問題を見つめ直してくれれば御の字だな。

『問題を見つめ直して御の字？ どうなるっていうの？』

そりゃ、手を組んで仲良く私に挑んでくるでしょ。

『ああああ、そうだね。それでみんな手に手を取り合って仲良しこよしってわけだ』

だろ！

魔法少女とワルグチーが仲良くやっつけていけるわけだ。

『めでたい頭だ。お正月かよ。——問題をもっかい見直した方が良い

よ』

えっ？

『彼らも帰りそうだし、読書に戻るね』

彼らの仲が悪いことが問題なんだろう。

仲良くさせるためにダンジョンを作って挑ませてる。

シユウはゲラゲラと耳障りな声で笑って、読書に戻った。

ページめくりのために作ったモンスターがページをばらばらとめくっていく。

どうも答えるつもりはないらしい。

ちなみに部屋に戻った奴らは、上がってきた六層のボスにやられて、強制的にダンジョンから退場させられることとあいなった。

6—E. 三人の勇士が現れた

世界が停止するまで、残り数日となった。

未だにダンジョンの六層と七層は突破されていない。

七層には達するが、ひたすら山の中を駆けずり回されて時間を無駄にする。

ダンジョンの扉が開き、見覚えのある姿が見えた。

アサナである。他のちびっ子魔法少女や先輩に角付き、おっさんも一緒だな。

風邪は治り、体調は万全のようだ。

『ついに来たか。時間はぎりぎりセーフだな。——先に言っとく。今までの有象無象とあいつは一緒にしちやいけない。極限級のボスだと思つて。間違いなくここにやってくるよ』

えっ、そんなに。

『当たり前でしょ。あの杖とエネルギーさえあれば、世界が三つは楽に入ると』

なんでそんな杖を子供に与えちゃうの？

……ああ、私が原因なんだっけ。

『記憶、ヨシ！』

なんか腹立つ言い方だな。

良しのはずなのに、駄目と言われてる気がするぞ。
まあ、アサナたちがここにどうやってたどり着くのか高みの見物といこうか。

そのアサナが、攻略早々にブレスレットの少女に力を与えたようである。

まだ最初の階段すら上っていないんだが、そうとうやる気に満ちているな。

『……下がった方が良い』

うん？

あそこにはトラップなんかないだろ。

『違う。あいつらに言ったんじゃない。メル姐さんに言ってるの。あいつら、ぶち抜く気だ』

ブレスレットの少女が上に向かって手を伸ばす。

映像がプツンと途切れ、衝撃がやってきた。

振動が収まり、映像を見ると、また少女が腕を上には伸ばすところだった。

さらに大きな振動が襲い、部屋の一面から光が立ち上った。

光が収まると、床には大きな穴が開き、天井からも日の光が射している。

映像に目を戻すと、魔法少女たちの姿は見えない。

「できたー！」

床にできた穴から、アサナとその仲間たちが私の前に飛んで現れる。

『「できたー！」じゃねえよ。もうちょっと様式美ってもんを考えようや』

私も思わず頭を抱える。

ほぼ何でもありのダンジョン攻略で、これだけはやっちゃ駄目という攻略法が実はある。

ずばりダンジョンの大規模な破壊である。

ワンフロアを吹き飛ばしたくらいなら、ギルドからのお叱りで済

む。

時間が経てば、ダンジョンの回復作用で元の状態に大抵は戻ってくれるからだ。

問題は数フロアにまで影響を与え、致命的な損傷をダンジョンに負わせてしまった場合だ。

ダンジョンの構造を変えてしまうことになり、モンスターが出なくなったり、最悪の場合はダンジョン自体が消滅する。

ダンジョンでもっともやってはいけないこととして公然のルールとなっている。

もしもやってしまうと冒険者証の剥奪では済まない。

損害賠償は当然として、公開処刑までである。実行者の家族にまでその罪は及ぶ。

大半の冒険者は当然の如く把握している。

そもそも、数フロアに影響を及ぼす魔法やらアイテムは使う人間に限られている。

そういう奴らはギルドから呼び出されて釘を刺される。私も何度か呼ばれたことがある。

ちなみに私は警告を受けているにもかかわらず、何度か大規模な破壊をやった。

まだダンジョンになりかけだったことと、破壊により新たなダンジョン構成が形成されたというところで嚴重注意とそこその損害賠償で済んだ。

他にも諸々と事情があつたのだが、それは当事者と私だけの話で公にはされていない。

私もそれくらい事情がないと大規模な破壊はさすがにしない。

何でもありと豪語する私ですらない行為なのだ。

『いくつかの守られるべきルールに縛られた環境は創造的であり、その制限された中にこそ各人の自由が存在しうる、だったかな……。まあ、この世界の奴らはそんなダンジョンルールとか知ったことじゃない。ギルドもないし、火急の際でもあるから手段とか選ばない。外側からは頑丈にしたけど、内側も頑丈にすべきだったな』

次があるならそうしよう。

それより、こいつらはアサナの杖から援護を受けるとしたら強いんじゃないか。

『あの杖が本気で戦ってくるなら勝ち目なんてほぼないよ。こっちのやろうとしてることは全部わかってるだろうから、そこそこの力で援護するくらいでしょう。こちらもほどほどに戦えば良い。殺し合うことが目的じゃないからね』

そうだな、戦いを通じて奴らが仲良くならないと意味がない。

……はて、仲良くしてもらいたいのだが、ボスやそのお供がないな。

ほぼ魔法少女だけだ。角付きだけがおまけ程度についてきてる。

『ポチ以外は硬貨になって、ここに貯蔵されてるでしょ。あいつは硬貨をあんまり摂取してないから硬貨になかなかならないね』

ああ、そうか。

そうだったんだな。

………大問題じゃないか！

あいつらを仲良くさせるためにダンジョンを作ったのに、そのダンジョンのせいで仲良くする相手が消えてしまった。

本末転倒だ。

『なんで今さらそんなこと言ってるの？』

今さら気づいたからだよ。

『ええ……。ここ数日はワルグチーの攻略がなかったでしょうに。ま

あ、後にしよう。来るよ』

やってきたのは四人だけだ。

アサナと、仲良し三人組の魔法少女である。

おっさんと先輩、角付きがないぞ。

『六層のボスに捕まったかな。杖の援護ありなら勝つかもしれないな』

私はそっちの戦いの方が気になるんだが。

一緒に映像を見ようと誘ったら、見てくれないものか。

駄目そうだな、こっちに武器を構えてやる気満々だ。

「あなたが災厄だったのね！」

そうなるのかな。

ブレスレットの少女の問いに、おびなりに答える。

「あなたを倒して世界に平和を取り戻す！」

ハンドボウの少女が声たかだかに宣言した。

「今日までの仕打ちの報いを受けろ！」

手甲の少女だけ明らかに他の二人と違う。

ごめんね。ダンジョンに挑む度にトラップの実験台にしちやっ

……。

でも、こいつらは本当に強くなったな。

何度も挑み、四層を自力で突破したときは私も思わず席を立って叫んだくらいだ。

『あつい戦いだっただよねえ。ちやあんと映像は撮ってある。全て終わったらドキュメンタリーにして局へ送りつけよう』

うむ。

そうしてやってくれ、あの感動は多くの人と共有されるべきものだ。

「メルお姉さん」

久々だな。

体調は万全に見えるが、間違いないか？

「うん」

よし、じゃあやるか。

「先手必勝！ 食らえっ！ 私のこの必殺の一撃を！」

手甲少女がいきなり特攻してくる。

いったい今までのダンジョン攻略で何を学んでいたのか。

五層最初のモンスターにあっさりとやられた経験がまったくいかさされていない。

「駄目！」

仲間たちの警告も遅いというもの。

案の定、能力半減の領域に入り、スピードを落とす。

倒れこそしなかったが、足がひつかかったようで前のめりになって

突撃してくる。

あまりにも間抜けだったので支えてやろうと手を出したら、攻撃と勘違いしたようで回避した。

『あ』

あ。

「んあー！」

問題は回避先である。よろけたことと、能力が下がっていることで、鼻から私の膝にぶつかってしまった。

『うーん、本当に何の策もなしに襲いかかってくるとは……』

手甲の少女は鼻を押さえ、涙目になりつつ後退していく。

鼻血がポタポタ落ちてと床に歪な赤の円を作る。

アサナが、私と少女たちを心配な顔つきで交互に見てきた。

治療してやっつと指で軽く示すと、わかつてくれたようでハンカチを出した。

いや、杖で治療した方が早いんじゃないの。

『魔法ですぐ治療したら身につかないでしょ。アサナの強化魔法が強すぎるんだろうね。天井をぶち抜いて、空を飛ぶかのような跳躍までできちゃうから。万能感に支配されたのかも。まあ、頭に上った血も鼻から出て、少しは冷静になるんじゃないかな』

戦闘開始から一瞬で治療タイムに入り、なんだか気が抜けてしまった。

椅子も貸してやり、私は距離を開け、六層ボスとスイーア先輩たちの戦いを見ている。

激戦であった。

強化の魔法が効いているのか、あの黒竜に対し、三人で戦いになっている。

手甲少女の治療の方は落ち着いたようで、反省会が始まっていた。ハンドボウとブレスレットの少女が手甲の少女を注意している。

「私たちチームだよ。どうして一人で突っ込んだの」などと詰められ、アサナが間に入るくらいだ。

手甲の少女はぐすぐすと泣きながら三人に謝っていた。

「謎の罪悪感が私を襲う。」

これ、そういう攻撃なのか。地味に効くぞ。

戦う前から相手の方が意気消沈している。

これなら他の奴と戦った方がいいんじゃないか。

……というか、なんでこいつらが来たの。人選ミスじゃない？

『もう硬貨がほとんど残ってないんだと思う。アサナは仕方ないとして、他の高出力のカタリストを使ってる奴は出られない。費用対効果で考えて、こいつらが選ばれたのかな。人選ミスはそれとおりに思う』

こいつらはそうだろうが、下におっさんがいるぞ。

『おっさんのカタリストが自己強化型だった。アサナの強化をメインにして、自分の強化を補助にすればほとんど消費がない。スイーア先輩も自前の魔力で戦えるし、角付きは言わずもがな』
力を抑えてあの戦いなのか。

『まだまだ序盤だね。互いに相手の出方を見る。六層ボスと戦ってるパーティーがメインで、ボスを倒すまでの時間稼ぎをこいつらするって作戦なら成功してる』

ほお、なるほどな。

これは時間稼ぎの作戦か、……違うんじゃない？

シユウも「そうね」と、言葉短く時間稼ぎの可能性を否定した。

『パイセンたちが時間稼ぎで、彼女たちが俺達を速攻で倒す作戦のほず。世界の命運をかけるには荷が勝ちすぎてるね。プレッシャーに負けてる』

そんな彼女たちはついに戦闘そっちのけで口論をし始めた。

なじられていた手甲の少女の我慢が限界を迎え、泣いて反論し始めたようだ。

お互いの悪い点をぶつけあい、もはや聞いてられないし、文字通り目も当てられない。

「メルお姉さん……」

アサナも困り果ててこちらに助けを求めてきた。

仲裁を期待しているなら私には無理だ。

過去に何度かよかれと思って、仲裁をしたが失敗しかない。

ああいうのは言いたいだけ言わせあえば良い。部外者が首をつつこむのは愚かだ。

大人しく座って待ってとけ。

何か飲みものでも持つてこさせよう。

給仕型のモンスターが私とアサナに飲みものを持つてくる。

私とアサナはテーブルを挟んで座り、六層の戦いの成り行きを見守っている。

そんな私たちなど知ったことかと魔法少女たちは、とうとう手を出し始めた。

仲間割れをし始めたのだ。うるさくて仕方がない。

さて、スイーア先輩たちも、ボスも、互いに消耗し終盤戦である。

大きな一撃を先に決めた方がおそらく勝つ。

『いやいや、せいぜい序盤の終わりかけでしょ』

え、これ序盤の終わりなの。

だいたいボロボロに見えるぞ。

『うん。間違える理由はわかるし、このままじゃ序盤で終わってしまふ。黒竜に苦戦らしき苦戦すらさせてない。黒竜も悪い癖が出てる。

戦いを楽しんでるっぽいね。罠をほとんど使ってないし』

はあ、さつさと倒せばいいのに。

すぐにでも倒せる相手に手加減する理由がわからんな。

『じゃあ、あそこで喧嘩してる魔法少女たちを倒してきてどうぞ』

……いや、それは、なんか違ってない。

『同じような感覚なんだと思うよ。出会った竜の中だと、かなり人間に親しい部類だからね。奴自身が強すぎて、矮小で卑小、あまりにも脆い人間たちが少ない武器を全力で使い、健気に戦ってる姿が愛おしくてたまらんのでしょう』

やっぱり違うぞ。

私はそんなことを思っていない。

それでも戦力差がやはり大きいというものだ。

「やっぱり駄目なの。グリフォス、これ以上の援護はできないの？」
なんか硬貨がどうこう言ってる。

『アサナに硬貨を分けてあげて。ほっとこうかと思っただけど、罨すら使っていないのはナメプが過ぎる』

あいあい。

ほれ、これでちょっとあいつらを強化してやってくれ。

無造作に置かれていたコインを掴み上げてアサナに渡す。

いいの、と言いつつもちゃんと受け取り、杖のハートがピカピカ光った。

見た目はしよぼいが強化は発動した様子である。

「これは——」

「力が湧いてくるぜ！」

スィーア先輩と角付きの傷が消えていく。

さらに全員の体から傷が消えるだけでなく、うっすらと光が発せられている。

「上で彼女たちが状況を変えたようだな。我々も負けるわけにはいかんぞ」

おっさんが二人を鼓舞し、戦闘態勢に戻る。

一方の黒竜はと言えば、三人の姿を見て楽しげに口元を歪ませている。

ただ、残念なことに少女たちは状況を何も変えていない。

私ではなく、互いに戦いあって……、おや、彼女たちの戦いは終わり、じっくり話し合う段階に入った様子だ。

知らないことは幸せだ。

おっさんたちは黒竜と戦いを再開させた。

「速すぎて何が起きてるのかわからないよ」

アサナの目ではそうだろう。

私は目で追えるのだが、具体的にどうなっているのかわからない。

黒竜も罨を使い始め、それなりに良い形となっている気がする。

『なってる。あのおっさんがすごすぎるね。強化ありとは言え、黒竜の技に食らいついていってる。角付き鎧も攻撃力が増して、黒竜も目

を離せなくなってる。スイーア先輩も援護とは言え、トラップを相殺していつてるの大きい。もう一人攻撃役がいれば勝ってただろう』

つまり、勝てない？

『そりゃあね。黒竜も全力になったとは言え、まだ切り札を二枚も残してる状態だ。先輩たちのカードでは足りないね』

戦闘も佳境に入ってきたところで、魔法少女たちがついはこちらへやってきた。

「何してるの？」

「先輩たちが戦ってる。すごいよ。一緒に見よう」

仲が良さそうだ。

ハンドボウの少女が「私たちも戦わないと」と正論を述べたのも最初だけだった。

スイーア先輩たちの戦いに目を取られ、気づけばテーブルを五人で囲み、すっかり先輩たちの応援に回っている。

「長官、やっぱりすごいね。今の体勢で避けれるんだ……」

「違うよ。今のは相手のほうがおかしいんだって。どうして見てもいないのに背後の長官を攻撃できるの」

「アサナのペットも活躍してるね。すごい！ 当たったよ！」

楽しそうに私も心が安らぐ。

もちろん先輩たちに安らぎなどない。ようやく角付き鎧の斬撃が当たった。

さらに、その隙を逃さず、スイーア先輩が黒竜の足を鎖らしきもので絡め取る。

「いまだ！」

「やった！」

動きを封じられた黒竜へ、おっさんが拳を大きく振りかぶった。

『お見事。ようやく切り札の一枚目だ』

黒竜の腕が黒く染まる。

おっさんたちの光だけじゃなく他の景色もまるごと吸い込んでしまふ。

それでもおっさんは攻撃をしかけたが、その攻撃を黒竜はあっさり

と受け止めた。

そして、黒竜がおっさんに攻撃を仕掛ける。

そのまま倒されると思ったが、まさかのおっさんが黒竜の攻撃に上手く反撃を食らわせた。

『スキルの発動を狙ってたね。あのおっさんは攻撃を前にも見てたし、さっきも黒竜の技を見た。スキル発動後が一番の好機と読んだんだ。そうなるよ——』

おっさんが反撃できたとはいえ、強化は吸われて消えている。

その威力は大したものではないだろう。

しかし、時間は稼いだ。

スィーア先輩が角付きを強化し、角付き鎧が剣を突いた。

剣を覆う水が伸び、黒竜の体へと突き刺さったのだ。

さらにスィーア先輩がおっさんへと強化を付け、おっさんも攻撃に加わる。

おっさんと角付き鎧が同時に溜めを作り、互いにその腕を振り抜く。

『惜しかったね。あと一撃だった。でも、切り札を二枚とも使わせたのは見事という他ない』

おっさんと角付き鎧が攻撃を加える直前で止まっている。

「なんで止まってるの。映像の故障？」

残念ながらそうではない。

私が六層に使ったのは黒竜のドロップアイテムだけではない。

奴が使うように多数の罫用アイテムを使い、その中には白竜のドロップアイテムも含まれている。

「時間の停止？」

アサナが何を言ってるの、と疑問を口にした。

黒竜はゆっくりではあるが、時の止まった二人の間を歩いて行く。後ろで援護を担当していたスィーア先輩の横まで来ると、ようやく三人の時が動き始めた。

「な!?!」

「は!?!」

「え？」

目の前の相手が急に消え、攻撃がからぶつた二人の驚き。そして、今まさにやられるはずの相手が急に自身の隣に現れた恐怖。

三人の声が短く響き、それが消える前に黒竜は動いた。スィーア先輩の腹を殴り、先輩が倒れかけたところで腕を掴んでおっさんたちにすぐさま距離を詰める。

先に背後の気配に気づいたおっさんに、掴んでいたスィーア先輩を押しつけ、まだ気づいていない角付き鎧に打撃を加えた。

スィーアをどかしたおっさんとの直接対決だが、援護がなくてはさすがに相手にならない。

三人はそれぞれ床に倒れ伏した。

しかし、目はまだ閉じられず諦めているようには見えない。

そんな彼らを見下ろす黒竜は、物こそ言わないが、トドメを刺そうとはしない。

彼らができ上がり立ち上がるのを待っているようだった。

「がんばれ、先輩」

「立ってよ、長官」

魔法少女たちも応援している。

「ポチ、すごいがんばってる」

アサナも立ち上がるとうとする角付きに感動している様子だ。

『がんばってと言ってるけど、自分たちはがんばろうと思わないんだらうか？』

……冷徹な一言に、飲み込むツバが途中で止まってしまった。

そういやそうだな。本当にがんばらないといけないのは、応援してるこいつらのはず。

むしろ下で必死に戦う三人こそが、上で戦っているはずの少女たちへ応援という形で戦っているのだ。

「やった。立ち上がったよー！」

「これが諦めないってことなんだよー！」

「でも、こんなのとどう戦えばいいの。決め手に欠けるよね」

ブレスレットの少女が冷静に戦況を見極めた。

見極めるべきは自分たちの状況だと思うのだが、決して口には出さない。

『立ち上がったのは立派だ。傷こそ治ってないけど、アサナも強化を戻した。でも、もう、打つ手がない』

シユウが淡々と戦況を読み、結論を告げようとする。

この勝負——

『黒竜の勝ちだ』

『先輩たちの勝ち?』

アサナは杖から予想を聞いたらしい。

二者の予想が分かれた。

『うん? ……ああ。やつと——』

全員が最後の戦いに刮目する。

刮目こそするが、戦いの主導権は明確に黒竜が握っていた。

三人が黒竜の戦い方を学習し、対策を立てたように、黒竜はこの戦いを通じて三人の戦い方を学習しようだ。

全ての攻撃が出先で潰される、避けられる、罠で封じられる。

時間停止こそ使いはしないものの、警戒して三人の動きが硬くなっている。

『時間停止はクールダウンが長すぎて、一戦闘に一回くらいしか使えないんだけどね。そんなことわからないから牽制になっちゃってる。何をされたかまったくわからないだろうから余計怖いだろうね』

とにかく三人の劣勢に拍車をかけている。

おっさんが前衛、先輩と角付き鎧の二人が中衛という陣形も崩れ始めた。

おっさんが投げられ、角付き鎧が殴られて碎け、本体の角付きが壁まで叩きつけられる。

残ったスイーア先輩も魔法で攻撃するが、黒竜は避けることもなくスキルで魔力を吸った。

強化のなくなった先輩へ打撃。そこからの流れるような投げ。

黒竜の勝利が決まったと思つた——

『今だ』

先輩が地面に叩きつけられる直前、床に輪っかが生じ、先輩がその輪を通る。

同時に、黒竜のすぐ後ろに生じた輪っかから先輩が現れた。

『ワルグチーのボスを食べた空間魔法を使えるようにしてたんだね。最後の最後まで隠し通した我慢強さは敬服せざるを得ないな』

先輩は投げられた勢いそのまま、自慢の爪をとがらせ、黒竜の背に後ろからぶつかっていく。

すぐさま反撃に転じようとした黒竜に対し、先輩はもう片方の手も黒竜に突き刺した。

さらに黒竜の両横からおっさんと角付きが一撃を見舞う。

団子状に全員がかたまり、ようやく黒竜だけが光となって消えていった。

スイーア先輩たちは勝ち残ったのだ。

満身創痍にもかかわらず、三人は黒竜の消滅まで膝をつくことはない。

私が勝者に拍手を送ると、魔法少女たちも私に倣い手を打つ。

今、私たちは彼らに対する賛辞を惜しまないという点で一つになった。

「上はどうなっているだろうか？」

おっさんがここでついに膝をつく。

それでも上で戦っているであろう四人を案ずる。

「勝ってるに決まってるんだろ。じゃないと、おいらが出番を譲ってやった意味がねえ、ぞ……」

ここで角付きが倒れた。

地面に倒れると、小さい体がさらに小さくなっていき、硬貨となって床に転がる。

「私も歳だな。昔ならこれくらい戦ってもまだ飲みに行く余裕もあったものだが……」

「冗談が言えるだけでも、立派だと思えます」

「冗談ではないさ」

おっさんは膝を起こし、一步踏み出したが、そのままかたまってしまふ。

『すごい。立ったまま気絶してる』

目はうつすらと開いている。

まだ戦おうという意志と、心身の限界が拮抗しあつた姿であつた。

「ごめんね、応援に行きたいけど、もう、駄目みたい……。信じてるからね。私だけじゃない。世界中の誰もが、あなたたちの勝利を――」

スィーア先輩は上に言葉を投げ、そのまま目を閉じた。

手を突くこともなく、そのまま崩れ落ちてしまふ。

一方、信じられた側の反応は暗く重い。

「私たち、何やってるんだろ……」

しばしの沈黙の後、ようやく出てきた言葉がこれである。

ハンドボウの少女の目から涙がぼろぼろと落ちていく。

残る二人もつられたのか同様に涙がにじんできた。

戦いという戦いなどなく、口論して、仲間同士で取っ組み合つて、勝手に仲直りして、飲みものを啜つて戦いを見物しただけ。

自分たちにかけられた期待をようやく思い出したようだが、すでに戦いを再開する雰囲気でもない。

実は私も情けない。

今の私はダンジョンボスの役割を演じている。

必死に足止めしている中ボスを見ているだけで、自分は戦うこともしていない。

これでボスとは笑いぐさである。

『人間、もつとも間抜けというものは、転んだものでも、一人踊るものでも、暗闇に語るものでもありません。ただただ彼らをぼうつと見ているものことなんです。誰の言葉だったかな。おっと、俺の言葉だ。まあ、彼らの人選ミスだから気にしないで良いよ。少女四人の小さな肩に人類の未来を乗せる世界なんて歪んでる』

そうだとは思ふ。

しかし、なんとかしなければなるまい。

「メル、お姉さん……」

泣くなよ。任せとけ。

シユウがなんとかする。なっ。

『なっ、と言われましても。とかく、子供が力づくで相手から物を奪い取ることを覚えるべきじゃないし、そも、大人がそういった光景を見せつけるべきでもない。交渉して互いの妥協点を探すことを考えよう』

つまり？

『魔法少女はメル姐さんと戦った。両者ともに負傷した』

一人の鼻と、みんなの心をな。

『これ以上はお互い戦っても埒があかない』

さっきの激戦を見た後でもあるしな。

もう戦おうという意志がなくなってる。

『そこでメル姐さんは提案するわけだ。「今日のところはこれで互いに手打ちにしよう」と』

これ、とは？

『回収した硬貨の段階的な解放』

え、解放していいの？

解放するのにどうしてわざわざ集めたの？

『理由はいくつかあるけど、一度全ての硬貨をここに集めたかったてのが一番かな』

……ここに集める？

『後で説明するから。草稿を誰かに書かせるんで、紙とペンを持ってこさせて』

はいはい。

こうして魔法少女たちは文字の書かれた紙切れと、それぞれが持つだけの硬貨を袋に詰めて帰っていった。

映像で見えていたが、概ね「魔法少女の粘り勝ち」と大々的に映されていた。

『魔法少女大勝利！ 希望の明日へレディーゴー！』

なお、勝利した少女たちの顔は曇りきっている。

7—E・世界の理が現れた

さて、邪魔者は全員帰った。

そろそろ私にもわかるように説明してもらおうか。

『何を？』

何をもって決まってるでしょ。

パツと思いき出せないけど、今日感じたあれこれ疑問な点をだよ。

『それ決まってるじゃないよね。——結論だけ言えば、元凶は竜女ってことになる。場所を移動しよう。硬貨の貯蔵庫に行つて』

なんで竜女が元凶なの？

移動しながら尋ねてみる。

『何から何まで何にもわかってないだろうけど、ここつてそもそもどんな世界なのかわかってる？』

出たよ、得意の質問返し。

しかも前置きで私が何もわかってないとわかっているのに聞いてくるとい性格の悪さ。

とりあえず答えよう。

お前が前に言つてたじゃん。

魔法少女の世界でしょ。

『言つたっけ？ 言つたな。それは違う。俺が間違つてた』

あつさり認めやがる。間違いを認めれば良いってもんじゃないぞ。

魔法少女じゃないならワルグチーの世界だったのか。

『んー、質問を変えよう。この世界にいる異世界人つてだーれだ？』

私たちでしょ。

『うん。それだけ？』

……魔法少女の世界じゃないなら、魔法少女たちこそが異世界からの来訪者なのか。

『おお、珍しく論理的。魔法少女たちは魔法使用の構造が明らかにワルグチーと違うからね』

そういや、それっぽいことを前にも言つてた気がするな。

『で、それだけ？』

……………えっ？

『ワルグチーたちも異世界人だよ。順番で言えば、ワルグチーの方が先で魔法少女が後だね』

そうだったのか。

何でそんなことがわかるんだ？

『ワルグチーたちの方が、より硬貨に馴染んでるから』

硬貨に馴染む？

『あいつら倒すと硬貨が出てくるでしょ』

そうだね。

……ん？ 硬貨が馴染んでるとなんで異世界に来た順番がわかるんだ？

『最初の質問の答えでもあるけど、この世界は本来——硬貨の世界だったんだ』

硬貨ってあの硬貨？

『そう。エネルギー源として動力から食事まで便利に使えすぎてるあの硬貨。もつと言えば「コンテニューコイン」だ。あいつらはこのコインをただのエネルギー源としか見てない。本来の使い方を知らないんだ。ま、そりゃそうだよなと思う。この世界はあまりにもふぎけすぎてるから』

コンテニューコイン？ ふぎけてる？

本来の使い方ってどんなのだ。

『説明するよりも見てもらった方が早いね。どれでもいいよ。二、三枚コインを拾って』

貯蔵庫にある無尽蔵とも言える膨大な硬貨の中から三枚ほど拾い上げる。

『どいつにするかな。強い奴は面倒だ。あいつがいいか。世界に来てから、最初の方に出会ったワルグチーで、手を武器に変える獣人がいたじゃん。覚えてる？ アサナの杖の試し打ちになった奴』

ああ、なんかいたな。

雷の魔法で姿形ごと消されてた奴だ。

『そいつを思い出しながら秘密の呪文を唱えてみよう』

私、詠唱は苦手なんだけど。

『詠唱ってほどのものでもない。いろんな呪文があるらしいけど、竜女に聞いたやつだとこれが一番短いしそのまんまだ。——「コンテニューしますか？」』

それだけ？

『あと一言だけ続くね。それより早く。「コンテニューしますか？」』
コンテニューしますか？

『YES』』

イエス。

手に握っていたコインがフツと消えた。

代わりに、目の前にモンスターが現れる。

「お、なんだここは？ あ魔法少女どもはどこに行きやがった？」
獣人が私に声をかける。

「な、なんだこの硬貨の山は……」

見た記憶がある奴だ。

魔法少女の攻撃で塵も残らず消滅したはず。

どうしてここに？

『復活したから。これがコンテニューコイン。使うと復活できる。あつ、邪魔だからそいつは斬っちゃって』

とりあえず硬貨の前で啞然としている獣人を斬る。

光に消えるかと思っただが、体が石になっていく。珍しい状態異常を付けたな。

『復活されると困るから』

そう。それより復活だ。

復活って、そんなのありなの？

『ありだね。だいたいメル姐さんが斬っても復活するでしょ。ただし、今はまだワルグチーだけだろうし、時間が経ちすぎると復活できないでしょうな。ゲームオーバーだ』

すごい世界だな。

死んでも復活できるってわけか。

『そうね。さて、ここでもう一步だけ踏み込もう。ワルグチーは異世

界人。魔法少女たちも異世界人。現地人はどこに行った?』

現地人ってこの硬貨の世界の住人だろ。

確かに不思議だな。こんな簡単に復活できるならくたばらないはずだ。

『くたばってない。今も生き続けてる』

そうだったのか。

まだ会っていないが、どこかでひっそりと生き続けてるんだな。

『いや、もう会った。ここでようやく元凶の竜女に繋がる』

……え?

会った? 竜女と繋がる? どういうことだ?

『現地人はコンテニユーコインに合成された。コインとして今も生き続けてる。コンテニユーコインを素地として、人の性質を受け継いだのが、今、ここに残ってるコンテニユーコインだよ。これでもちやんと生きてるんだ。俺の解析も通らないからね。ただ、意識はないだろう』

コインに人を合成した?

『うん。合成してる。それがあの竜女のやばいところ。あいつは生物を素材としてみなせる。店頭に飾ってある「自信作」ってのは全部生物との合成物だった。「合うやつ」ってのは、たぶんいない。売られることもなく、店頭に飾られ続ける。あつちには意識もありそうな気配だった』

何か気持ち悪くなってきたんだが。

『それ、まともな神経だから気にしなくて良い。で、話を戻すと、間違いないあのコインは元は消耗品だ。手に入れる方法があるんだろうけど、間違いなく消費のスピードの方がずっと速い。特に文明が栄えれば、エネルギーとしても使われ、戦で死ぬ数も加速度的に増えるからね。便利なコインがなくなることや、戦で死んだ旧住人が愚かにも竜女に相談した。「このままではコインはなくなり、復活もできなくなる。そうすれば私たちは絶滅だ。何か良い方法はないだろうか?」——おそらく大きく外れてはいないはず』

そして?

『任せときな!』と胸を叩き、竜女はコインに原住民を合成した。人間にコインを合成せずに、コインに人間を合成したところがあの竜女らしいところかもしれないね。しかも、あの竜女、どうやってか世界規模でやりやがった。ただ、大きな問題点を一つ除けば、願いをパーフェクトに叶えた解決だとは思う。人間はいろんな意味で狡猾だからね。いくらボロボロに使い潰されても絶滅せず、他の存在を巻き込んででも生き延びていく——この性質がこのコインにはきちんとあるんだ。現に今も残ってるし』

それがコインが増えるっていった理由か。

大きな問題点ってなんだ？

『コインに人間を合成していくとしよう。使う人間が最終的にはいなくなるよね。全員がコインにされていくんだから』

今回のワルグチーみたいなもんか。

『もつとひどい。あの竜女もさすがにやり過ぎたと思ったんだろう。なんせ「モノつてのは使われてこそ」が信条らしいからね。コインも人間も残ったけど、誰も使う存在がいません。これじゃあ意味がない。で、他の竜に頼んで、別の世界の知的生命体をこっちに送り込んだ。それがワルグチー』

そういう流れなのか。

『あの竜女がまともな説明をするとは思えない。他の世界から来た奴が、あのコインを復活コインなんて考えるわけもない。ただただ無難にエネルギー源として使っていった』

今と同じような状態だな。

『そうなんだけど、やはり問題がある。あのコインは合成された人間性により、他の存在を巻き込んで生き延びるんだ。ワルグチーが倒されるとコインになるよね。あれ、ワルグチーがコインを魔力として取り込む際に、逆に原住民に侵食された証』

なんか気持ち悪い話だな。

『他の竜も同じ気持ちを抱いたんでしよう。それで別の異世界人を連れてきた。それが魔法少女たち。こっちは力を使う際に魔力を直じやなく、モノを間に介在させる——カタリストだね。原住民コイン

を、別の形やエネルギーに変える性質がある。これなら人間自体は侵食はされない、と考えた』

上手くいつてるな。

魔法少女は倒されたらそのまま死ぬんだろ。

『いや、甘かったね。侵食されてる。カタリストの人格がどこから来るかが、どこの本にも書かれてない。コインに合成された人間から生じている可能性が高い』

じゃあ、アサナたちが喋ってる相手って。

『いや、アサナは例外だね。あれは素材の意識が強すぎて侵食できてない。他大多数のカタリストはコインの元になった人間だ。それにそれだけじゃない』

まだあるのか。

もう誰か他の人にも伝えた方がいいんじゃないの。

私は聞きたくなくなってきた。ほら、先輩とかいいんじゃないの。『そのパイセンがまさにそれだ。魔法少女とワルグチーの番から子供が生まれてしまった。どうやったら吸血蝙蝠と人間みたいな奴の間に子供ができるのか？ 間にコインという存在を挟んだからだよ。魔法少女側も原住民コインに侵食され始めてるんだ』

なんか、怖くなってきたぞ。

『理屈を知ってればおぞましい話だけど、知らなければめでたい話でもある。新しい生命の形が誕生したわけだからね』

別にめでたくはないんだけど……。

『最終的には、魔力を保持して、カタリストも使えるというパイセンみたいなハイブリッドが生きる世界になるでしょうな。今はまさに変革の時代だ。疑問への回答は、そんなところでこんなところじゃないかな。こんな話はこの世界の誰にも話せない』

うむ。いろいろとわからないことがわかった。

私もそろそろダンジョンへ挑むため元の世界に戻る支度をしなければな。

問題の後片付けだ。

ここのダンジョンってどうなるんだ？

私がいなくなると、ボスも不在になるだろ。

ボスのいないダンジョンなんて、何の価値もないぞ。

『そんなことないでしょ……。力だけなら黒竜でも良いんだけど、あいつにやらせると手心つてもんが失われそうなんだよな。ダンジョンというかガチの要塞になりそう』

一層の階段にすら強いのをゴロゴロ置きそうな雰囲気はある。

ときどき下の層に下りて、モンスターたちを教練に付き合わせるくらいだからな。

『そうなるか一人しかいないね。こういうのは攻略できそうな奴をそのままボスにした方が良く。それに、このダンジョンの真価をわかっているやつじゃないといろいろまずい。——アサナだ。アサナという杖の方だけど』

なんとなくそんな気はしてたからこれには驚かない。

このダンジョンの素晴らしさが、果たしてアサナにわかるだろうか。

『わからないだろうね。ま、あの杖さえあれば、世界のエネルギー管理なんてちよちよいのちよいよ』

ああ、そうだな。

……今、何て言った？ 世界の何？

『エネルギー管理』

ピンとこないんだけど、このダンジョンってそんなことしてたの？

『そりゃ、それくらいのことをしないと、こんな箱庭をわざわざバカみたいな出費してまで作らないよ』

そもそもエネルギー管理って何？

『平たく言うと、世界に出回るコンテニューコイン量の調整だね。異世界版の日銀みたいなもんかな。……あれ、待った。この世界の問題は何？』

魔法少女とワルグチーの仲が悪いことですよ。

『ああ、そこからか。なぜ二勢力は仲が悪い？』
種族が違うからですよ。

私たちの世界でもよくある民族問題だ。

『違う。今回のメインはエネルギー問題だ。端的に言えば、ワルグチーが魔法少女たちの燃料になるからだよ。魔法少女はワルグチーを倒すことで得られるコンテニューコインを基礎として発展してきた。逆に言えば、ワルグチー以外からの入手方法がほぼない。しかも、ワルグチーも倒されすぎて絶滅寸前だってわかってない。ワルグチーがいなくなれば、コンテニューコインなんてあつという間に地上からは枯渇するよ。どこかに隠れてこそこそ生き延びるんだろうけどね』

……エネルギー問題ねえ。

やっぱりピンとこないな。私たちがみたいに暮らせばよくないか。

『一度、生活水準を上げちやうと戻すのが難しいんだ。洗濯機をボタ一つで回して、終わるのを待つてる間にタブレット見ながら、コンロで料理する奴らは今さら中世の暮らしに戻れない』

そんなものだろうか。

で、エネルギー問題とこのダンジョンがどういう関係があるんだ。『このダンジョンを特徴づける最大のアイテムは「占竜印のカードだ』

竜女からもらったやつでしょ、覚えてるよ。

あのカードをこのダンジョンに合成して、コインが集められるようになったんだろ。

『集めるだけじゃない。増やせるし、浄化もできる。ちよつと一手間加えれば遠隔地への供給だって可能になる』

増やせるの？

それに、浄化？

『うん。コンテニューコイン自体に人間性が合成されてるからね。集めれば集めるほど勝手にどんどん増えるんだ。しかも金運アップの効果働いてるから、爆速で生めや増やせやって状態だね。増えすぎてと困るから、今はダンジョンの改修や運営にも使ってるくらいだし』

たしかにコインが多い気がする。

けっこうダンジョンの工事にも使ったはずだが、まったく減ってる気配がない。

むしろ増えてる。現在進行形でじゃらじゃら足下に転がってきている。なんか気持ち悪いな。

『もう一つが浄化だね。コインの人間性部分の改変というのかな。ワルグチーを倒すとコインになるじゃん。あれをいったんリセットしようかと』

リセット？

『うん。ワルグチーからコインの侵食を取り除くというのかな。ワルグチーが倒されてコインになられると困るんだ。エネルギー管理の中にワルグチーが含まれてしまう。エネルギーを目標てにワルグチーを倒す奴らが残る。いったんここに全てのコインを集めて、異世界ダンジョンという濾過剤を通し、その後で復活させていく』

そんなことできるの？

『浄化については失敗する可能性もある。ダンジョンがコインに侵食される可能性も否定できない。でもね。別に失敗してもいいんだ』

失敗してもいいのか。

『成功、失敗、どちらにせよ悪い未来ではなさそうだからね。俺としてはむしろ失敗して欲しいかな。今のところは順調そう。ほら、コインを見てみてよ』

……コインは、コインだろ。

見ても何もわからんぞ。

『本当に？』

何なの。

どうかしたって言うの。

適当に一枚拾い上げて見てみる。

金色のままだ。表面には特に何も描かれて……あれ？

コインの表側に、見覚えのあるモンスター横顔が描かれていた。

じゃあ、裏側はと見れば、そこにはこれまた見覚えのある少女の横顔が描かれている。

『どちらも表だよ。たしかに「うらない」の効果は発揮されてる。これ

が世界にどんな影響を及ぼすかは、今後の彼らの行動によるころだがね』

拾い上げたコインを床に落とす。

魔法少女が出るか、ワルグチーが出るか、それとも……。

コインはクルクルといつまでも回り続ける。

私はその結末を見届けなかった。

どちらでもかまわない。

8—E・住所不定の冒険者が現れた

ワルグチーもボスから復活させて、そこからはひたすら呪文の作業だ。

可能な限り全員を蘇らせ、後は好きにさせた。コインも安定的に供給させるので何とかやつていくだろう。

私は異世界を去る前に、アサナの家を訪れた。

一緒にテーブルを挟んで、手作りの料理を食べる。

テーブルの横では、角付きも食べている。今日は蹴らずにおいた。

『そりやそうでしょ』

映像もちょうど切り替わり、魔法少女のドキュメンタリーだかが流れた。

見覚えのある三人組が映し出される。

三人がトラップに嵌まり、モンスターにやられ、たまに勝利し、またトラップに嵌まるという光景が流れている。

……これ、お前がモンスターに指示して作らせたやつじゃないか。

「とつてもおもしろいね」

アサナは面白がっているが、かなり間抜けな映像が多い。

はつきり言つて、ドキュメンタリーというよりはハプニング集ではないだろうか。

私の想像していた映像とは全然違うな。もっと彼女たちの成長を描いているものだと思つた。

これは本人たちが絶対怒るやつだ。

編集に悪意がありありと感ぜられるが、それでも面白いのが腹立

っ。

今も手甲の少女が、落とし穴に嵌まった瞬間が映された。

しかもいろんな角度から映し出されている。

それどころか落ちていく顔すらどうやってかはわからないが出て
いる。

「うわ……」

悪臭スライムの中にどぼんと落ちた。

スライムが緩衝材になり無事ではある。

ただ、臭いがあまりにもひどく、仲間の二人からは距離を取られ、攻
略は中止になった。

街から出た後の映像もなぜか出て、周囲の反応が映り始めた。

ときどき外に出て、何かやらせてると思っただが、これを撮るため
だったのか。

私もやった甲斐があったというものだ。

その後も、残りの二人や三人まとめてのむごい映像が流される。

三人は毎回やられるが、それでもダンジョンに挑み続ける。

『魔法少女の定義は前にもいくつか言ったね。最後の絶対的な一つが
これなんだよ』

私にもなんとなくわかった。

『——諦めずくじけない心。彼女たちは良い魔法少女になる』

言葉と映像がまったくマッチしてないがな。

「みんな遅しくなってるね」

そうだね。

……そうなのか？

私に挑んだのはこれの後だ。

あの情けないのが遅しい姿と言えるのだろうか。

「違ってるかも」

うん。

私も違うと思う。

さて、そろそろ良い時間だ。

私は帰ることにする。

ダンジョンは任せたぞ。

あまり気にしなくても良い。

そっちの杖が勝手にするんだろうからな。

「用事が終わったら、一緒にご飯を食べに行こうね」
気が向いたらな。

じゃあ。

『待った』

何？

『裏口から出た方が良い』

なんで？

泥棒じゃないんだぞ。

玄関から出ても問題ないはずだ。

「アサナ！ 力を貸して！ あの災厄女をとつちめないと気が済まないッ！」

玄関のチャイムが鳴らされ、扉が力強く叩かれる。

どうやら一人だけじゃなくて三人がそろってやってきている様子だ。

「アサナアア！」

『ハワイアンの a a かよ……』

ちよつと裏口を借りてもいいか。

私は静かに帰りたいんだ。

「うん。気をつけてね」

こうして私は裏口から静かに出て行く。

玄関では三人とアサナが元気に喋っている。

『仲良きことは美しきことかな』

うむうむ。

どうも今からダンジョンに挑むようだ。

素晴らしい。どんどん挑んで欲しいな。そこに私はいない。

竜女の店まで歩いていく。

なかなか楽しい二ヶ月だった。

魔法少女に、ワルグチー、ダンジョンの作成。

『異世界人の一方的な虐殺、都市の大規模な混乱、世界のエネルギー搾取。盛りだくさんだったね』

なんで悪いところばかり切り取ってくるの？

良いところもたくさんあったでしょ。

さあ、竜女の店までもう少しだ。

私も私の帰るべき世界に帰り、ダンジョンに挑むとしよう。

「最近見ないと思ってたのに、またそんな格好で歩いて。最低限、剣は鞘に入れてくださいって言いましたよね」

「臨時魔法少女証の期限が切れてますよ。今日は目を瞑るけど、早く更新してね」

最後の最後で、いつもの衛兵二人に捕まってしまった。

骨の盾と槍もそれぞれが手にしており、以前より強そうに見える。

『こいつらは何なんだ……。もう特殊部隊に入れるべきだろ』

魔法少女はかなり前にやめたんだ。

どうもむいてなくてな。

「じゃあ今は仕事をしてないんだね」

いや、冒険者をしている。

「はは、冒険者ね。どんなことをするの？」

お前らも知ってるだろ。

ダンジョンに潜り、モンスターを倒すんだ。

ダンジョンマスターもしてみたが、やはり管理する方は駄目だ。

骨の槍と盾は気にいってくれたようで良かった。

挑戦ならいつでも歓迎する。

しかし、お互いに戦場を弁えるべきだろうな。

『逃げるよ』

衛兵二人がぼかんとしているのです、そのまま背をむけて道を進む。すぐに背後からけたたましい音が鳴り響いた。

仕事熱心な奴らだ。

「本部！ こちら南三等地第六道路！ 『災厄の使徒』と思わしき人物

を発見！ 応援を求む！ 魔法少女に要請を！」
「待て！ 止まりなさい、その銃刀法違反女！ 署まで来てもらおうぞ！」

こうして最後の最後で私は異世界から逃げ帰る羽目となった。